大阪市内埋蔵文化財包蔵地
発掘調査報告書

(2011)

2013.3

大阪市教育委員会
(公財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所

例　　言

1. 本報告書は平成23年度の大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたものである。
2. これらの調査は大阪市教育委員会の指導のもと（公財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所が各原因者より委託をうけて実施したものである。
3. 本報告書の執筆は（公財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所　南秀雄の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告書に記してある。
4. 本報告書の編集は大阪市教育委員会文化財保護担当において行った。

目　次

北　区
東天満遺跡発掘調査（HX11－1）報告書……1
中之島蔵屋敷跡発掘調査（NX11－1）報告書……11
中之島蔵屋敷跡発掘調査（NX11－3）報告書……29
大深町遺跡Ｂ地点発掘調査（OC11－1）報告書……35
天神橋遺跡発掘調査（TJ11－1）報告書……43
天神橋遺跡発掘調査（TJ11－2）報告書……51
天神橋遺跡発掘調査（TJ11－3）報告書……61
天神橋遺跡発掘調査（TJ11－4）報告書……79
天神橋遺跡発掘調査（TJ11－5）報告書……91
天満本願寺跡発掘調査（TN11－1）報告書……101
天満橋１丁目遺跡Ｂ地点発掘調査（TW11－1）報告書……123

福 島 区
野田城跡伝承地発掘調査（NO11－1）報告書……137

中 央 区
馬喰町遺跡発掘調査（BR10－2）報告書……145
難波宮跡・大坂城跡発掘調査（NW11－1）報告書……157
難波宮跡発掘調査（NW11－2）報告書……163
難波宮跡・大坂城跡発掘調査（NW11－3）報告書……177
大坂城下町跡発掘調査（OJ11－1）報告書……185
大坂城下町跡発掘調査（OJ11－2）報告書……193
大坂城下町跡発掘調査（OJ11－3）報告書……209
大坂城下町跡発掘調査（OJ11－4）報告書……219
大坂城下町跡発掘調査（OJ11－5）報告書……229
大坂城跡発掘調査（OS11－1）報告書……249
大坂城跡発掘調査（OS11－2）報告書……259
大坂城跡発掘調査（OS11－3）報告書……273
大坂城跡発掘調査（OS11－4）報告書……281
大坂城跡発掘調査（OS11－7）報告書……289
大坂城跡発掘調査（OS11－10）報告書……301
大坂城跡発掘調査（OS11－14）報告書……327
大坂城跡発掘調査（OS11－15）報告書……339
大坂城跡発掘調査（OS11－17）報告書……349
大坂城跡発掘調査（OS11－21）報告書……361
島之内２丁目所在遺跡発掘調査（SI11－1）報告書……375
上本町遺跡発掘調査（UH11－7）報告書……385

西区
千代崎蔵屋敷跡発掘調査（CY11－1）報告書……391
江戸堀蔵屋敷跡発掘調査（ED10－1）報告書……405
江戸堀蔵屋敷跡発掘調査（ED11－1）報告書……411

天王寺区
堂ヶ芝廃寺発掘調査(DS11－1)報告書……425
上本町遺跡発掘調査(UH11－4)報告書……433
上本町遺跡発掘調査(UH11－15)報告書……439

浪速区
敷津東遺跡Ｂ地点発掘調査(SX11－1)報告書……445

西淀川区
姫里遺跡発掘調査(HI11－1)報告書……451

淀川区
富光寺境内遺跡発掘調査(HK11－1)報告書……457

生野区
巽北遺跡発掘調査(TA11－1)報告書……471

城東区
関目遺跡発掘調査(SE11－1)報告書……481

阿倍野区
阿倍野筋北遺跡発掘調査(AS11－1)報告書……487
文の里遺跡Ｂ地点発掘調査(FM11－1)報告書……493
播磨町遺跡発掘調査(HC11－1)報告書……499
松崎町遺跡発掘調査(MZ11－1)報告書……505
天王寺町北遺跡Ｂ地点発掘調査(TG11－1)報告書……519

住吉区
苅田４丁目所在遺跡発掘調査(KL11－1)報告書……525
帝塚山東遺跡発掘調査(TZ11－1)報告書……531
山之内遺跡発掘調査(YM11－1)報告書……539

東住吉区
南田辺遺跡発掘調査(MQ11－1)報告書……547
中臣須牟地神社境内遺跡発掘調査(NT11－1)報告書……557
照ヶ丘矢田遺跡発掘調査(TR11－1)報告書……563
矢田部遺跡発掘調査(YB11－1)報告書……577
矢田２丁目所在遺跡発掘調査(YT11－2)報告書……583

平野区
平野環濠都市遺跡発掘調査(HN11－1)報告書……593

北区東天満一丁目における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(HX11－１)報告書

調 査 個 所　大阪市北区東天満１丁目８－１
調 査 面 積　約123.5㎡
調 査 期 間　平成23年10月17日～10月28日
調 査 主 体　財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄

1)調査に至る経緯と経過

調査地は、国道1号線と谷町筋が交わる東天満交差点の南西に位置する。周辺では、淀川三角州または天満砂堆の上に弥生時代中期の遺跡が出現し、引続いて遺構や遺物が発見されるが、大きな画期は天正13(1585)年の豊臣秀吉による本願寺の天満移転と、それに伴う城下町の開発である。本願寺推定地は2説あり、有力なのは調査地東手の大阪造幣局の敷地である。同地では1993年より発掘調査を行い、石垣を付設する豊臣期の大きな屋敷群や、天満の城下町化に欠かせない秀吉普請の堤跡の発見などの成果が上がっている。

調査地点は、江戸時代の絵図によれば、谷町筋西歩道辺りを通る南北道に面する町屋となっている。天満の町割で言えば、この南北道に間口を開く、東西に長い屋敷地に区分されていたと考えられる。谷町筋は、ほぼ南北に細長い街区ひとつ分を潰してつくられている。もっとも近い調査地は谷町筋を挟んで東50mのTN11－1次で、町屋と推定されるところで17世紀中葉以降の遺構の変遷などが追いかけられた[大阪文化財研究所2011]。しかし、天満開発の画期となった豊臣期のようすは、近辺ではほとんどわかっていない。

本調査は、大阪市教育委員会の試掘結果を受け、施工者により18世紀後半頃の地層まで掘削された後、着手した。徳川初期・豊臣期を経て、当地の地山である第8層まで6面で調査を行った。基準点はmagellan社製ProMark 3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

2)調査の結果

図1　調査地位置図

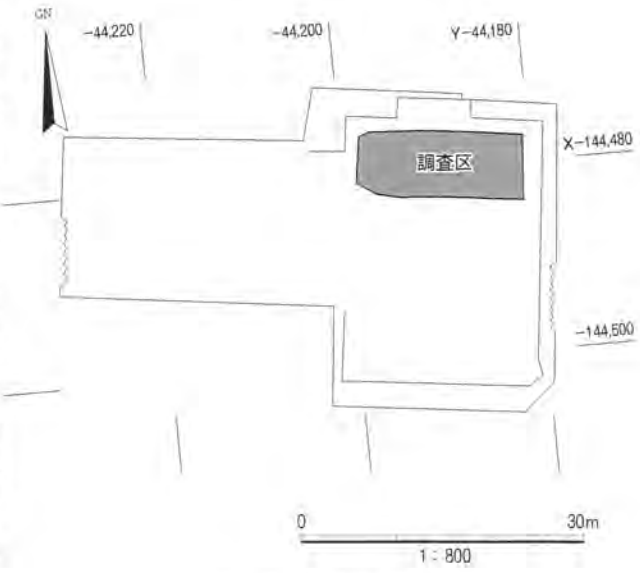


図2　調査区位置図

ⅰ)層序(図３・４)

調査開始面以下を第１層とする。第１層上端は現地表から約1.9m低い。第８層を除いてすべて人工の盛土である。大坂冬ノ陣と推定される焼土層は見つかっていない。

第１層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂層で、最大層厚40cmである。調査区の北側に分布し、これを掘上げると東西に続く段差が生じた。段差は敷地境で、第１層は北側の敷地のみにある整地土と考えられる。時期は18世紀中葉以降であろう。

第２層：灰黄褐色(10YR4/2)シルト質中粒砂層で、層厚は15～30cmである。焼土を含む。本層は北側にはない。第２層は図８の20～24の陶磁器が出土し、18世紀前～中葉と推測される。

第３層：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂層で、層厚は30cmである。本層上面では遺構は少ない。第３層は12～17の陶磁器が出土し、17世紀末～18世紀初と推定される。

第４層：黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂層で、層厚は15～25cmである。上面に17世紀中～後葉の多数の土壙や井戸があり、これらには時期差がある。本層は出土遺物が少なく、時期は明確でないが、冬ノ陣以降で17世紀中葉の何れかである。

第５層：にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂層などで、最上部に暗黄褐色(2.5Y5/2)シルト質粗粒砂の薄層がある。上面は固く、しっかりした遺構面である。層厚は20～60cmで、東で厚く、西で薄い。上面の標高は東でTP+1.3m、西でTP+1.4mである。遺物はほとんど含まないが、粗製の中国産青花皿(図８の３)が出土した。本層以下は豊臣期と推定される。上面にはSD501があり、第５層中の遺構にSK502・503がある。

第６層：黄褐色(2.5Y5/3)シルトや極細粒砂からなり、小偽礫を含む。西端はシルト層になり、上面が固い。層厚は10～40cmで、東で厚く、西で薄い。上面の標高は東でTP+1.0m、西でTP+1.2mである。豊臣期の最初の盛土で、遺物ではよくわからないが、豊臣前期に遡る可能性がある。

第７層：暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルト層で、最大層厚は30cmである。第８層上面が低くなる東半のみに分布する。作土層で下面に鋤溝群がある。下面遺構から瓦器椀１が出土した。本層の時期は判然としないが、城下町開発前の中世である。

第８層：にぶい黄褐色(10YR4/2)中粒砂層でラミナがある。遺物は出土していない。本層上面の標高は南東端でTP+0.35m、中央部以西でTP+1.0mと、高低差がある。上面にはこの地形に沿う方向のSD801などがあった。

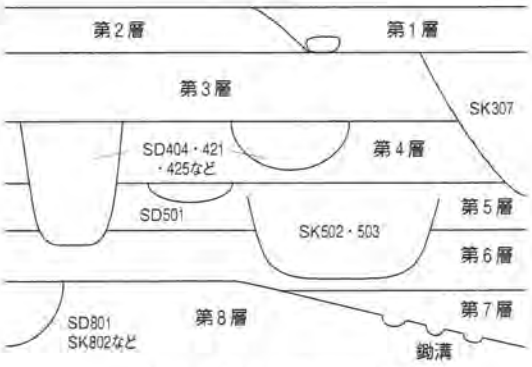


図３　地層と遺構の関係図

ⅱ)遺構と遺物(図５～８)

ａ．第８層上面・第７層下面の遺構(図５)

調査区西端にあるSD801は、北で東へ約20°振っている。西肩は調査区外にあり、幅２m以上ある。深さは0.75mである。ほぼ一度に埋められており、水成層はない。第８層上面の遺構には、ほかにSK802・803がある。深さはSK802が0.50m、SK803が0.4m以上である。これらの遺構は豊臣期より古いが、詳

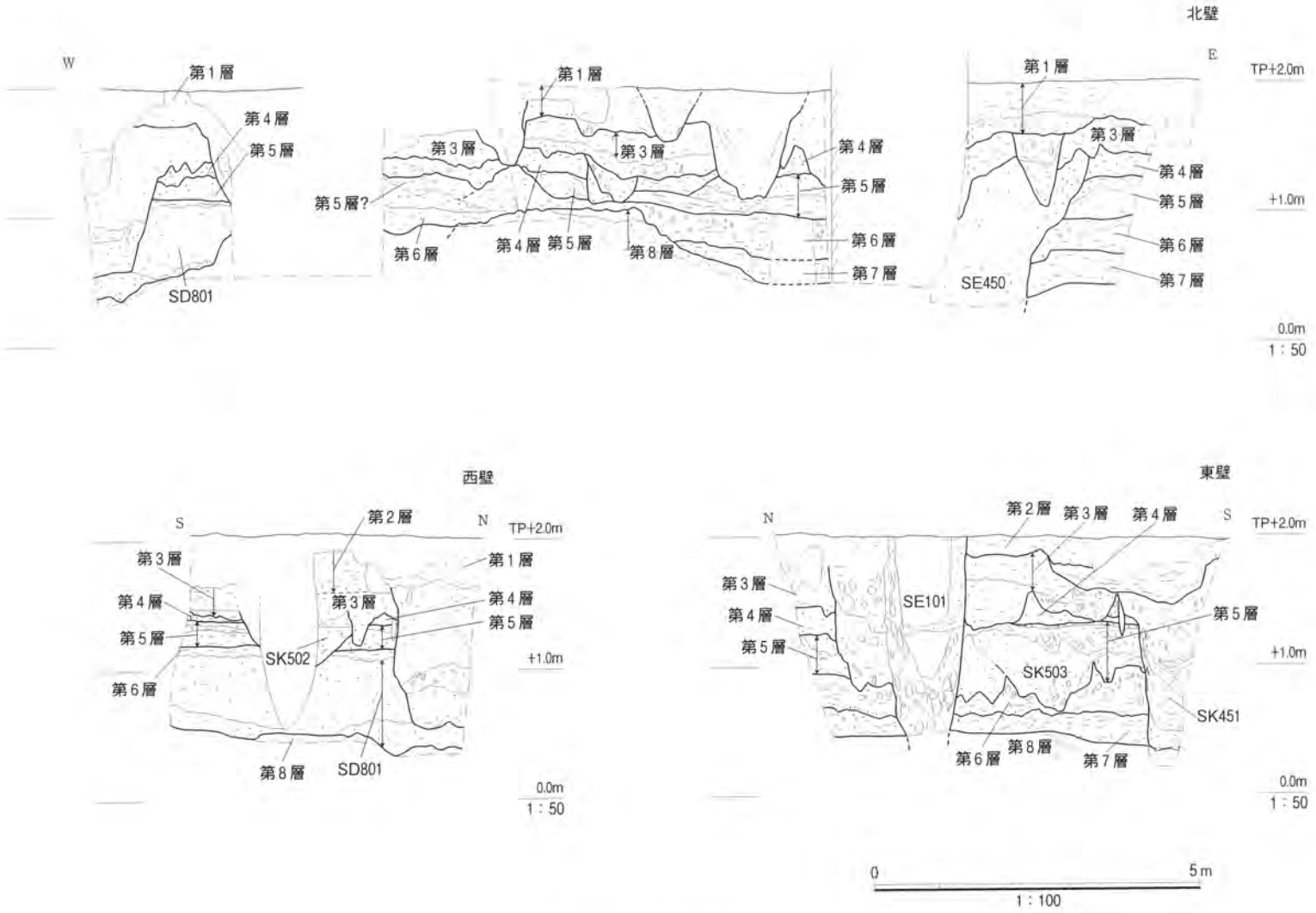

北壁
W
E
第1層
第4層
第5層
SD801
第1層
第3層
第3層
第4層
第5層
第5層?
第6層
第4層
第5層
第8層
第6層
第7層
第1層
第3層
第4層
第5層
第6層
第7層
SE450
TP+2.0m
+1.0m
0.0m
1：50
西壁
S
N
第2層
第3層
第1層
第4層
第3層
第4層
第5層
第5層
SK502
第6層
第8層
SD801
TP+2.0m
+1.0m
0.0m
1：50
東壁
N
S
第2層
第3層
第4層
第3層
SE101
第4層
第5層
第5層
SK503
SK451
第6層
第8層
第7層
TP+2.0m
+1.0m
0.0m
1：50
0
5m
1：100

図4　地層断面図

細な時期はよくわからない。

第８層上面が低くなり、第７層が分布する東側約３分の１には第７層下面の鋤溝群がある。溝は北で東へ約30°振っている一群と、それと直行する一群からなる。幅は0.10～0.15m程度、深さは数cmである。第７層や鋤溝群から、調査区の東側は城下町造成前には耕作地であったことがわかる。

ｂ．第６層上面・第５層中の遺構（図５・７）

第６層上面では遺構はほとんど検出されないが、調査区北辺の西寄りに緩やかな高まりがある。高さは約0.2mで、上端に焼けた部分がある。性格はよくわからない。東端にあるのはいずれも浅い窪みである。

第５層中の遺構に、東西に細長い土壙SK502･503がある。SK502は長さ5.5m以上、最大幅1.3m以上、深さ0.60mである。褐色中粒砂とにぶい黄褐色シルトの偽礫で一度に埋められている（図７）。SK502の東に、北肩を合わせるようにSK503がある。SK503は長さ９m以上、最大幅1.6m以上、深さ0.60mである。深さと埋土のようすはSK502と類似する。SK503からは焼塩壺片（図８の２）が出土したが、遺物はほとんど含まない。これらは第５層がかなり盛土された段階で掘られ、短期間のうちに埋められたようであるが、用途はよくわからない。

SK502・503はSD801や第７層下面の鋤溝群と方向が異なり、徳川期の遺構や現在の町割の方向と合う。これは第５層上面のSD501の方向に引き継がれる。

ｃ．第５層上面の遺構（図５）

調査区西にSD501がある。SD501は長さ4.7m以上、最大幅1,0mで、深さ0.1mである。方向は東で南へ約８°振っている。SD501には、長さ0.1～0.2m程度の石が集中するところがある。第５層上面ではSD501以外の遺構は検出していない。徳川期の町割と同じ場合、表は調査区より東になり、奥側はあまり利用されていなかったのであろう。

ｄ．第４層上面の遺構と遺物（図６～８）

第４層上面には多くの土壙があり、平面図中の番号は大きめのもののみを記した。同図の三百番台の遺構は第３層に伴うものである。北半の土壙は大きく、南半は小振りで、僅かな空間を残して両者は分布を異にする傾向がある。この場所は第２層上面の東西の段差にほぼ一致し、敷地の境と推定される。この境を跨ぐ遺構はほとんどない。

以下、これらの土壙からいくつかを報告する。東端のSK404は円形で、直径0.95～1.05m、深さ0.50mである。埋土に炭層を挟む（図７）。隣接して円形に近いSK405・410がある。中央部のSK411・414・421・425は長円形で、敷地の方向に合わせて掘られているように見える。SK421は東西に長く、長さ1.7m程度、幅1.25m、深さ1.00mである。底部に薄い炭層が堆積する。SK425は南北に長く、長さ1.75m、幅1.10m、深さ0.80mである。これらの土壙はおもにゴミ捨て用の穴と推定される。時期を示すものとして、以下にSK425の出土遺物を上げる（図８の４～11）。

４は土師器焙烙で、口縁部外面に左上がりの掻き上げ痕がある。５は肥前系の擂鉢、６は粗製の中国産青花大皿である。７～11は肥前磁器碗で、７・８・10は染付、11は白磁である。９は特異な製品で、釉の上に桐・花・青海波を描くが、発色していない。白磁と同様に見え、意図的かもしれない。第４

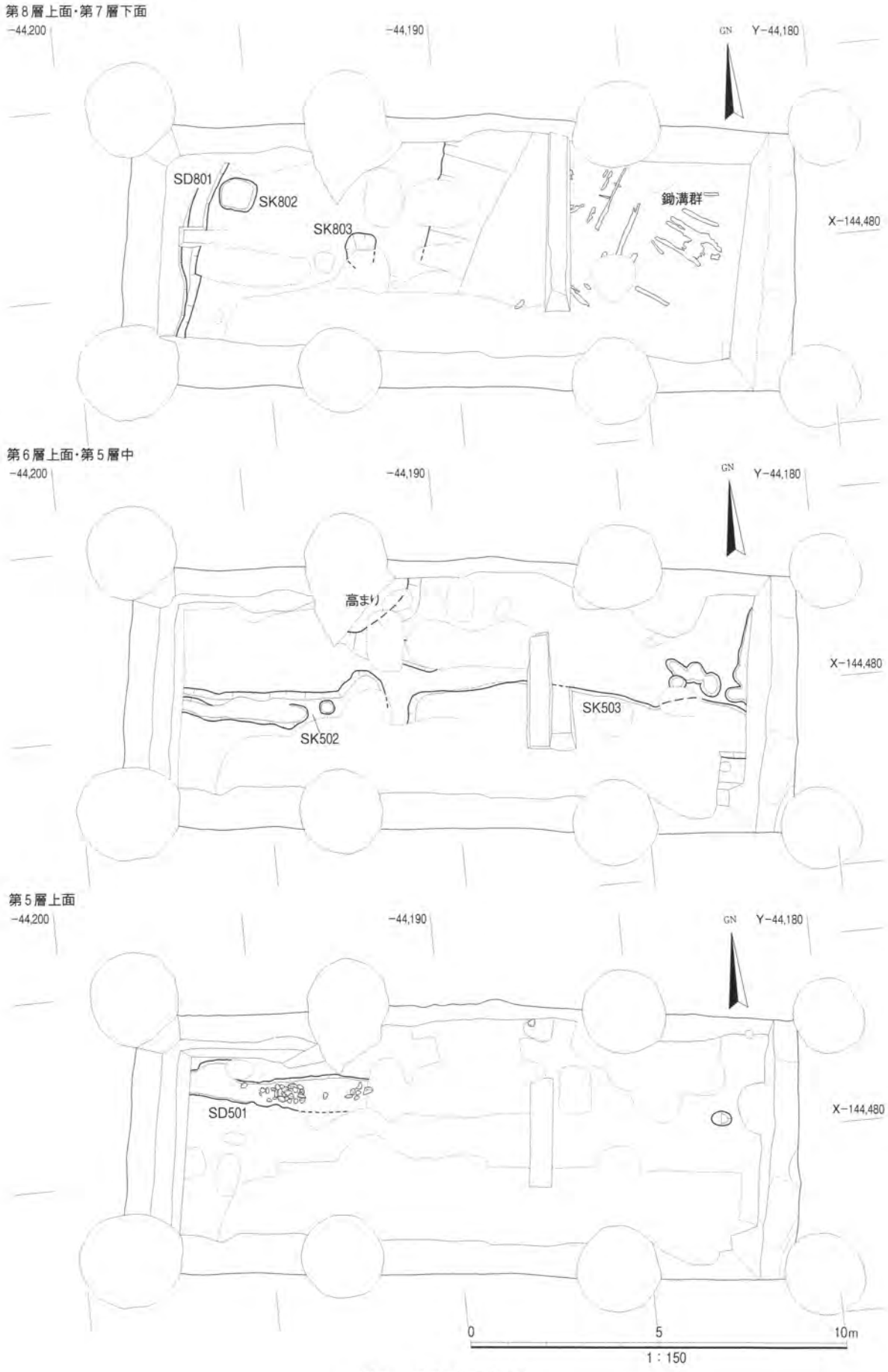

第8層上面・第7層下面
−44,200
−44,190
GN
Y−44,180
SD801
SK802
SK803
鋤溝群
X−144,480
第6層上面・第5層中
−44,200
−44,190
GN
Y−44,180
高まり
X−144,480
SK502
SK503
第5層上面
−44,200
−44,190
GN
Y−44,180
SD501
X−144,480
0
5
10m
1：150

図5　遺構平面図(1)

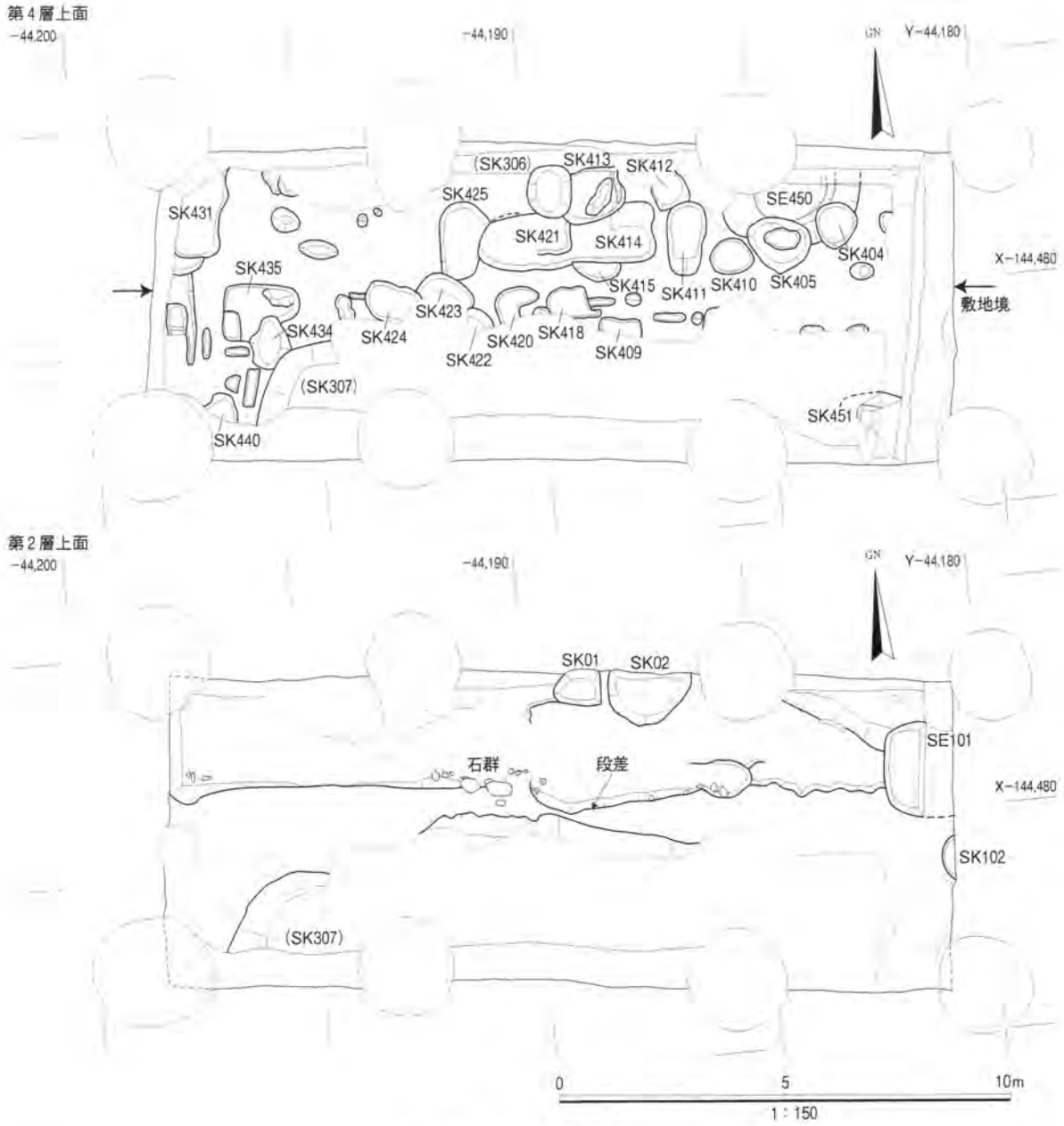


図６　遺構平面図（２）

層上面の遺構は、おおむね17世紀中～後葉と推定される。

東端のSE450は、掘形の直径約３mで、深さは1.2m以上ある。周囲のどの遺構より切合いで古い。この他に、調査区西端の小溝群は畠などに伴う可能性がある。

ｅ．第２層上面の遺構（図６・８）

第２層上面では北が低い東西に続く段があり、ここが敷地境であったと推定される。段差近くには礎石様の石が散在するところがある。東端のSE101・SK102は第１層上面の遺構の可能性があり、SK01・02はそれより上から掘られた遺構である。また、南東の大きな窪みは下位層のSK307の影響による。

ｆ．第３・２層出土の遺物（図８）

遺構面や遺構群の時期を明らかにするために、第３層と第２層出土の遺物について記述する。

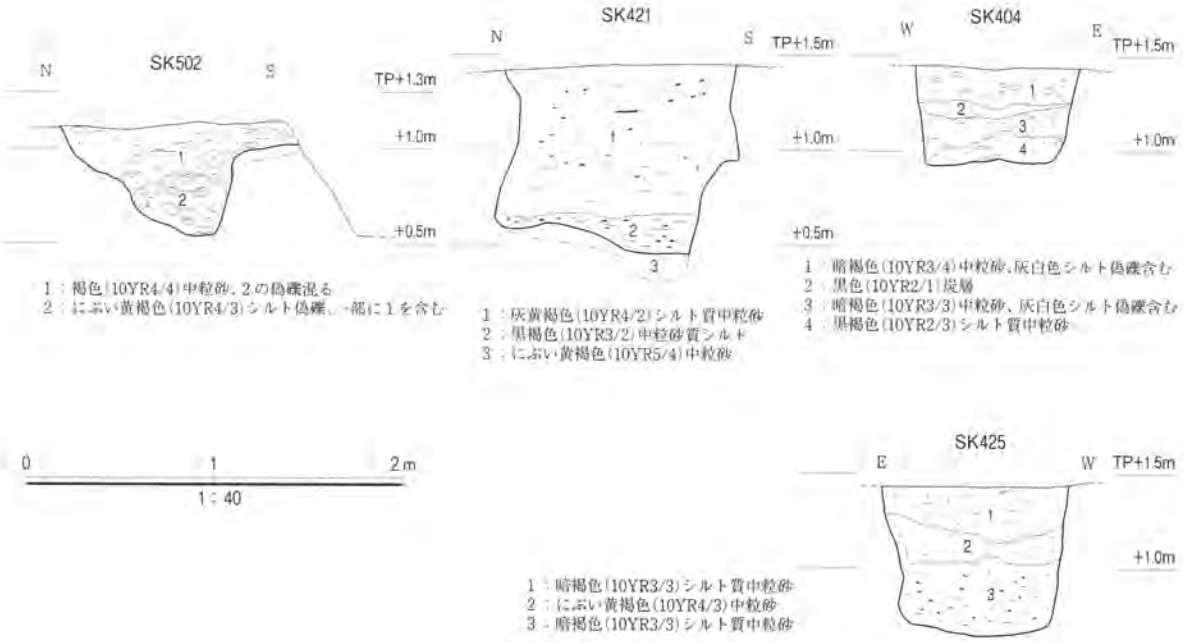


図7　遺構断面図

12～19は第3層出土である。12～17は肥前磁器で、12は蕎麦猪口、13～16は碗、17は皿である。16のみが青磁染付、ほかは染付である。16のみが新しく、ほかより第3層は17世紀末～18世紀初と推定される。18は中心飾りに丁字が表現された軒平瓦で、大坂では稀な例である。19は硯であるが、裏面に釘状のもので文字が線刻されている。寛文九年(1669)とあり、断片的に「月」「島」「浦」「あさぎり」などが読める。歌のように見えるが、読み下せない。

20～24は第2層出土である。20～23は肥前磁器染付の碗と皿、24は関西系陶器の半筒形碗である。これらより第2層は18世紀前～中葉と推定される。

3)まとめ

今回の調査では、中世から豊臣期の城下町開発を経て、18世紀中葉までの遺構の変遷を層位的に追うことができた。この場所は、当初西に高く東に低い地形であり、中世には東側は耕作地となっていた。城下町が造られるに伴って盛土され、東西の高低差はかなり解消された。豊臣期は2段階ある。遺構は多くないが、その方向から徳川期と同様の町割であったと推定される。大坂冬ノ陣の焼土層は見られず、17世紀～18世紀中葉にかけて2～3面の遺構面がある。この間、北と南の二つの敷地に分かれていたと推定される。

本調査は、船場や上町と比べてよくわかっていない天満の城下町について、その形成過程を知ることができる良好な資料である。

引用・参考文献

大阪文化財研究所2011、『北区天満一丁目39－4ほかにおける建設工事に伴う天満本願寺跡発掘調査(TN11－1)報告書』

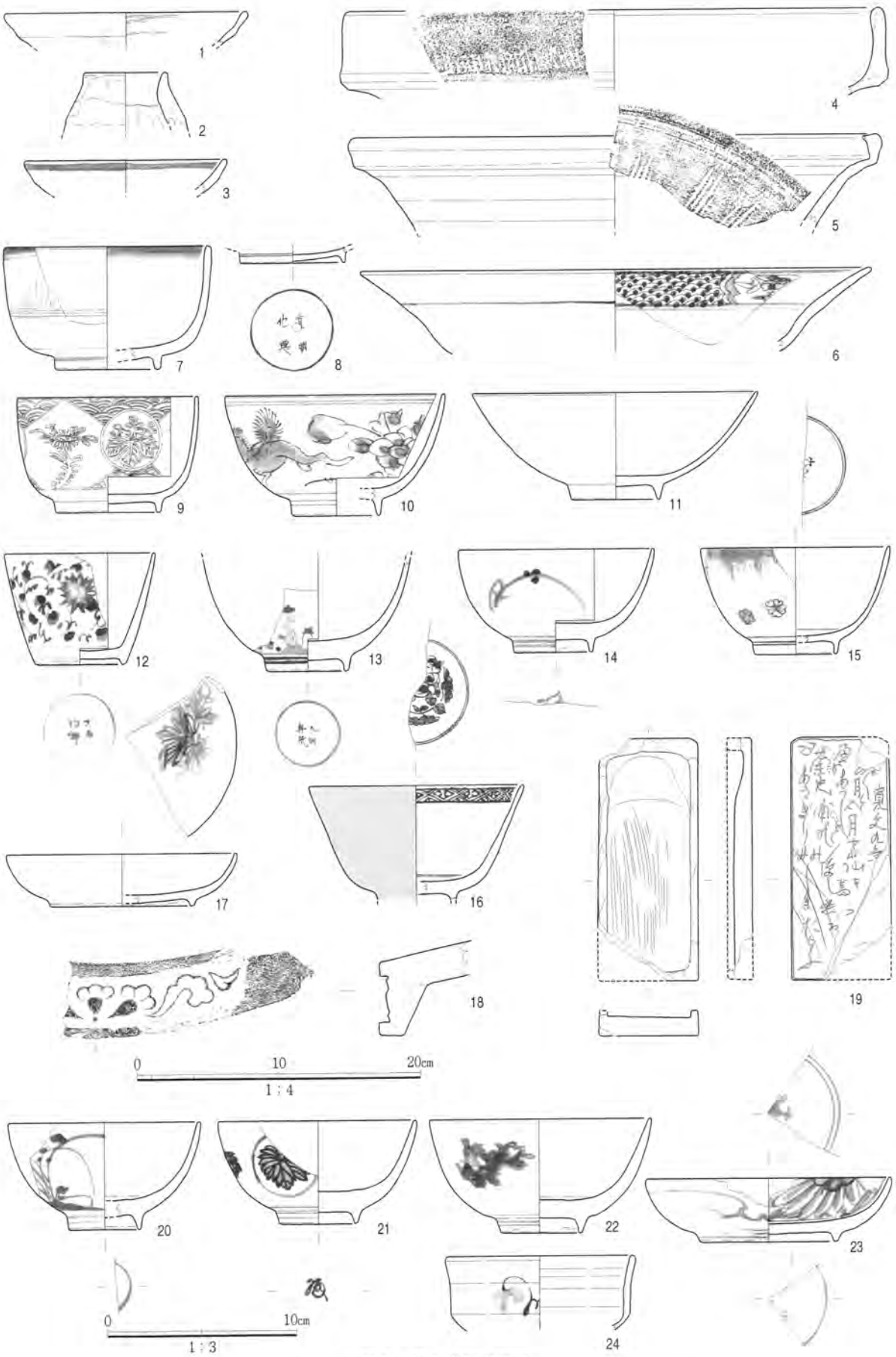


図８　出土遺物実測図

SK503(２)、SK425(４～11)、第７層(１)、第５層(３)、第３層(12～19)、第２層(20～24)

第８層上面・第７層下面
全景（東から）

鋤溝群（東から）

SD801
（南から）

第６層上面・第５層中
全景（東から）

第５層上面全景
（東から）

SD501（西から）

第４層上面全景
（東から）

SK421断面
（西から）

第２層上面全景
（東から）

北区中之島三丁目における建設工事に伴う
中之島蔵屋敷跡発掘調査(NX11－１)報告書

調査個所	大阪市北区中之島3丁目1－8・2－1・2－2・3－2・4－1・7－4・32－1・32－3・32－4・33
調査面積	340㎡
調査期間	平成23年4月7日～6月13日
調査主体	財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南秀雄、宮本康治、谷崎仁美

1)調査に至る経緯と経過

調査地は江戸時代に各藩の蔵屋敷が設けられた中之島に位置する(図1)。北には鳥取藩蔵屋敷などが所在し、発掘調査の結果、建物跡などの屋敷に係る遺構が検出されている。当地点も蔵屋敷が想定される地点であり、そうした遺構が遺存している可能性が考えられた。当地において建設工事が計画され、2009年10月29日に大阪市教育委員会が試掘調査を行い、近世の石垣や盛土等が確認されたため、本発掘調査を行うこととなった。2011年4月7日より調査を開始し、まず重機によって近現代の盛土まで掘削した(図2)。以下、現地表下約4mまでは人力によって掘り下げ、遺構の検出や遺物の採集に努めた。その間、適宜実測や写真撮影などの記録作業を行った。調査は17世紀中葉の地層までを確認し、コンテナバットにして46箱の遺物が出土した。6月13日には現地におけるすべての作業を終了した。

本報告書で使用する方位は座標北(世界測地系)を基準とし、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)である。

2)調査の結果

図1　調査地位置図

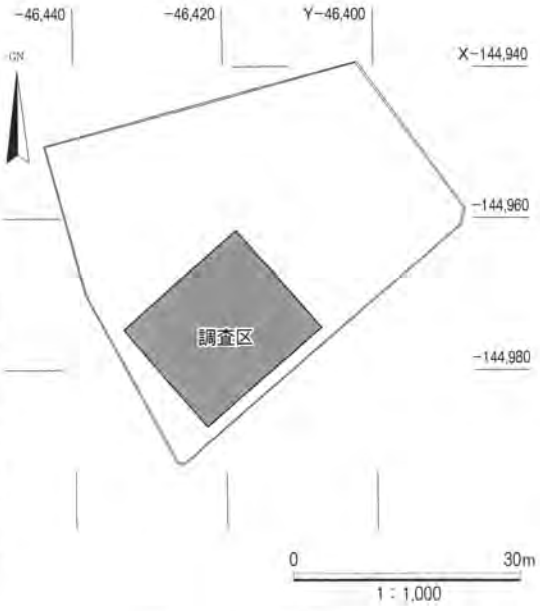


図2　調査区位置図

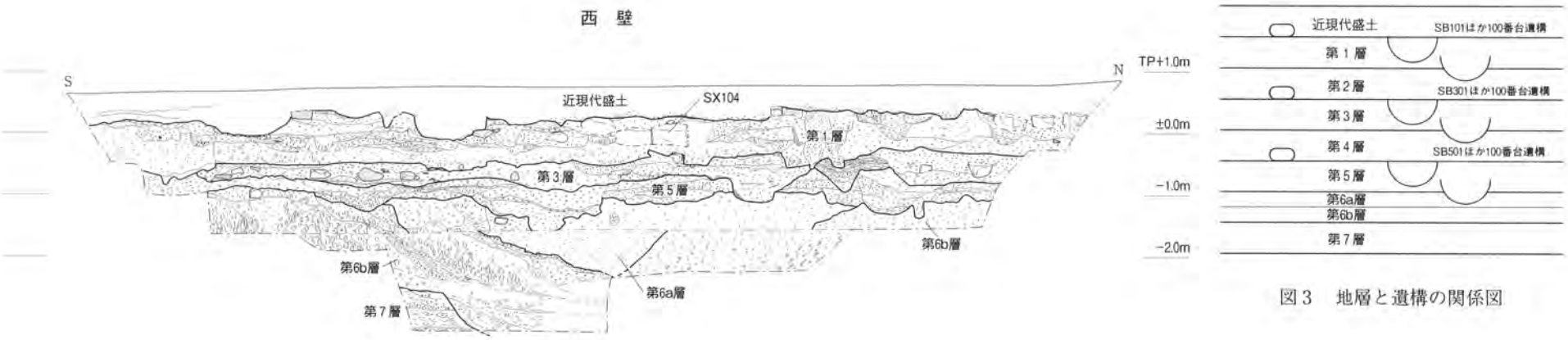


図3　地層と遺構の関係図

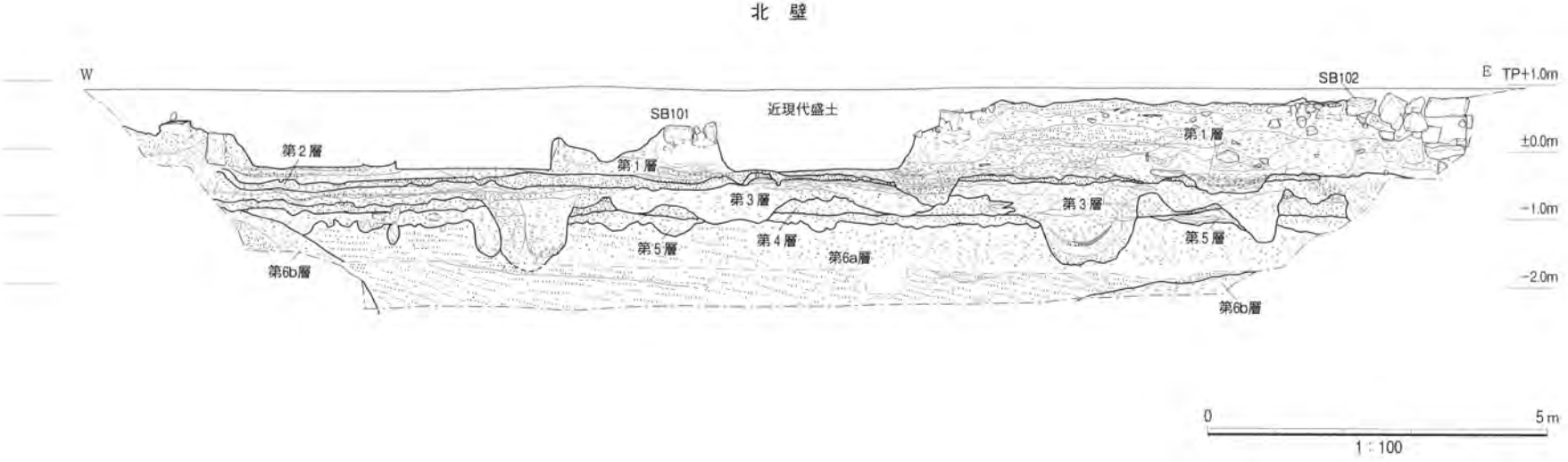


図4　西壁・北壁地層断面図

ⅰ)層序(図３・４)

近現代の盛土層が現地表下40～100cmほどあり、その下位で第１層とした近世末あるいは近代まで利用された地表面が遺存していた。現地表の標高はTP＋0.6m前後である

第１層：にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質細粒砂などからなる整地層で、層厚は最大50cmである。上面および層内で多数の遺構を検出した。18世紀から19世紀にかけての陶磁器類が含まれる。

第２層：黄褐色(2.5Y5/3)細粒～中粒砂の盛土層で、層厚は15cmほどである。18世紀代の陶磁器を含む。

第３層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)礫質細粒砂の整地層で、細分される可能性がある。層厚は最大40cmである。17世紀から18世紀中葉までの陶磁器を含む。

第４層：にぶい黄褐色(10YR6/3)中粒～粗粒砂の盛土層で、層厚は最大30cmほどである。

第５層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂～小礫質細粒砂の整地層で、層厚は20～30cmである。17世紀から18世紀初め頃までの陶磁器を含む。

第6a層：シルト偽礫を含む黄褐色(2.5Y4/4)細粒～中粒砂層で、層厚は120cm以上と厚いところもある。おもに西から東の方向で盛土されていた。17世紀中葉までの陶磁器類を含む。

第6b層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質細粒砂から粘土質シルト偽礫・礫を含む黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂などからなる盛土層で、140cm以上の層厚がある。上部は、炭化物や木片、陶磁器などの遺物を多く含み、下部は粘土質シルト偽礫を多く含むなど、細分することができる。

第７層：暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)粘土質シルト～細粒砂からなる河成層で、西壁の一部で確認した。層厚は70cm以上である。

ⅱ)遺構と遺物

検出した遺構はいずれも徳川期のものである。

ａ．第６層の盛土(17世紀中葉の遺構と遺物)

第７層の自然堆積層の上に第6a・b層の盛土による造成が行われていた。第７層を掘り込んで、第6b層の盛土が行われており、西壁で確認できたところでは少なくとも深さ0.7m以上は掘削していた。その第6b層の盛土により土手状に高まりを設け、その高まりは調査区内では北側に開くコの字状を呈して延びていた。また部分的な確認ではあるが、第6b層中に木片や木枝などが敷かれたところがあり、盛土を行っていくに際して堅固となるよう行ったものとみられた。その土手状の高まりの内側に第6a層を盛っていた。第6a層は断面の観察では東下がりの傾斜をもつ単位が確認され、西から東へと搬入されたようであり、平面での観察時に４～５m四方の方形に盛土の単位が認められるところがあった。

また、調査区の東南部では第6b層の盛土内に直径10cm程度の円礫を入れ込んでいる箇所が認められた。また、数箇所で長辺50cmを超える礫が置かれていた。

第６層には17世紀前半から中葉にかけての遺物が含まれており、造成は17世紀中葉に行われたとみられる。

ｂ．第５層上面の遺構(17世紀中葉～18世紀初めの遺構と遺物：図５)

第５層の整地層では17世紀前半から18世紀初め頃までの陶磁器が出土しており、17世紀中葉の造成

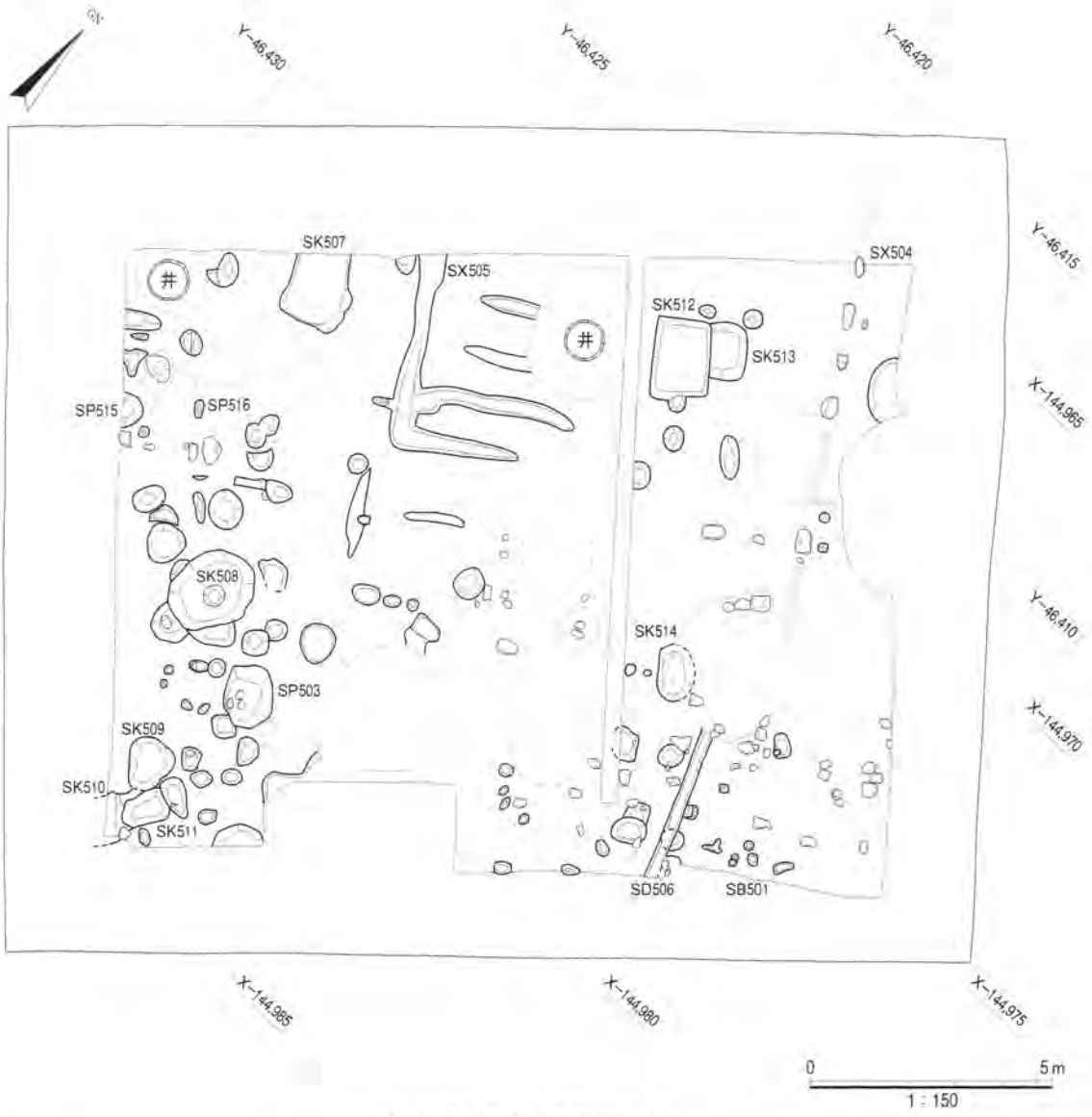


図5　第5層上面遺構平面図

後、その時期に機能した可能性が考えられた。調査区の東北で石列SX504が検出され、それを境に少なくとも屋敷地が区分できると考えられた。中央寄りの敷地では礎石列・土壙・溝など、東側の敷地では礎石群・土壙などが検出された。

SB501　調査区の東南部に位置する礎石建物跡である。長辺20～25cmの礎石によるもので、主要な部分は調査区の南・東に延びる可能性が考えられ、全体の規模は不明である。近接して複数の礎石が位置するところもあり、建て替えがあった可能性も考えられる。

SP515・516　長辺40～60cmほどの石材による礎石列である。調査区の西端で2mほどにわたって確認された。南北に組み合うものが確認できず、建物というよりは区画施設などであった可能性もあろう。

SP503　長径1.2m、深さ0.35mのもので、内部に長辺15cmほどの礫が数個確認され、礎石を伴うものであった可能性がある。周囲に組み合うものは確認できなかった。

SX504　調査区の東部で約6mにわたって確認された礎石列で、敷地の境となっていたとみられる。

南側にさらに延びるかについては、延長線上に小型の礎石が分布するところがあり可能性はあるものの、攪乱もあり十分明らかにできなかった。調査区中央で直行して西に礎石が分布し、折れ曲がることも考えられるが、さらに西側には礎石などの痕跡は確認できなかった。芯々間は0.95mほどである。また、それに沿って小型の石や杭に伴うとみられる痕跡が見られるところもあった。

SD506　幅0.25m、長さ3.0mの溝である。南側は調査区外へ延び、北側は攪乱で破壊されている。ほかの遺構との切り合い関係から後出するものである可能性がある。SX504などとは方位が異なるところが注意される。

SX505　調査区中央北部で検出された浅い溝状の遺構である。幅0.3～0.4m、深さ0.1m以下、東西の長いところで長さ3.7mほどの規模である。第４層の砂層で埋められていた。畝間状になっており、畠の痕跡のようなものと考えられた。礎石や土壙などが分布しないところに位置しており、建物などの施設のないところで耕作を行っていたのではないかとみられる。

SK508～512　調査区西部を中心に多数確認されている。西部でも中央から南にかけて密に分布していた。西部で検出されたものにはあまり遺物を含まず、埋め戻されたものが多く含まれており、建物に伴う何らかの施設のために形成されたものもあると考えられた。

SK508　西部中央にあるもので、長さ1.7m、深さ0.4mのものである。埋土はオリーブ褐色中粒砂である。SK509･510･511は調査区南西端にあるもので、長さ0.8～1.0m、深さ0.3mほどの規模である。SK512は東北部で確認されたもので、長さ1.7m、深さ0.3mの長方形のものである。底から壁面には橙色の粘土層があり、埋土には炭化物が多く含まれていた。

c．第４層上面の遺構(18世紀前～後葉の遺構と遺物：図６・９)

整地層である第３層は上面が第１・２層段階の遺構で削られているところもあり、下面で検出作業を行った。そのため礎石などで複数段階のものが重複して検出されている。第４層、３層では18世紀前半以降の陶磁器が出土しており、機能の開始はその頃とみられる。下限は不明確だが、第２・１層段階の造成が18世紀末頃とみられ、その頃までは機能していた可能性がある。調査区東側に敷地境の石列SX303があり、それを境に２つの屋敷地に分かれると考えられた。また西側の屋敷地でも中央よりの遺構はSX303などに近い方向であり、より西側の遺構はそれとは異なり北で西に振る方位を示していることが注意される。

東側の敷地では南東端では礎石とみられる石と土壙などが分布していた。中央から西側の敷地では中央から北部にかけて礎石が分布し、建物が位置していたとみられた。南西よりには溝や土壙群が分布していた。

SB301　調査区西北部にある礎石建物跡で、礎石群は上面のレベルに大きく分けて高低２グループあり、建替えがあった可能性が考えられた。礎石は長辺0.3mほどの規模のものが多い。ただし建物の一部を調査している可能性があり、どういった部分にあたるかは十分明らかにはできなかった。

SB302　中央部で確認された建物跡で、礎石は長辺0.3mほどの規模のものが多い。方位は石列SX303・排水施設SX304などに近い。ただしどのような建物になるかは明らかにできていない。

敷地境石列SX303　第５層のSX504と近い位置に敷地の境にかかわるとみられる石列が確認され

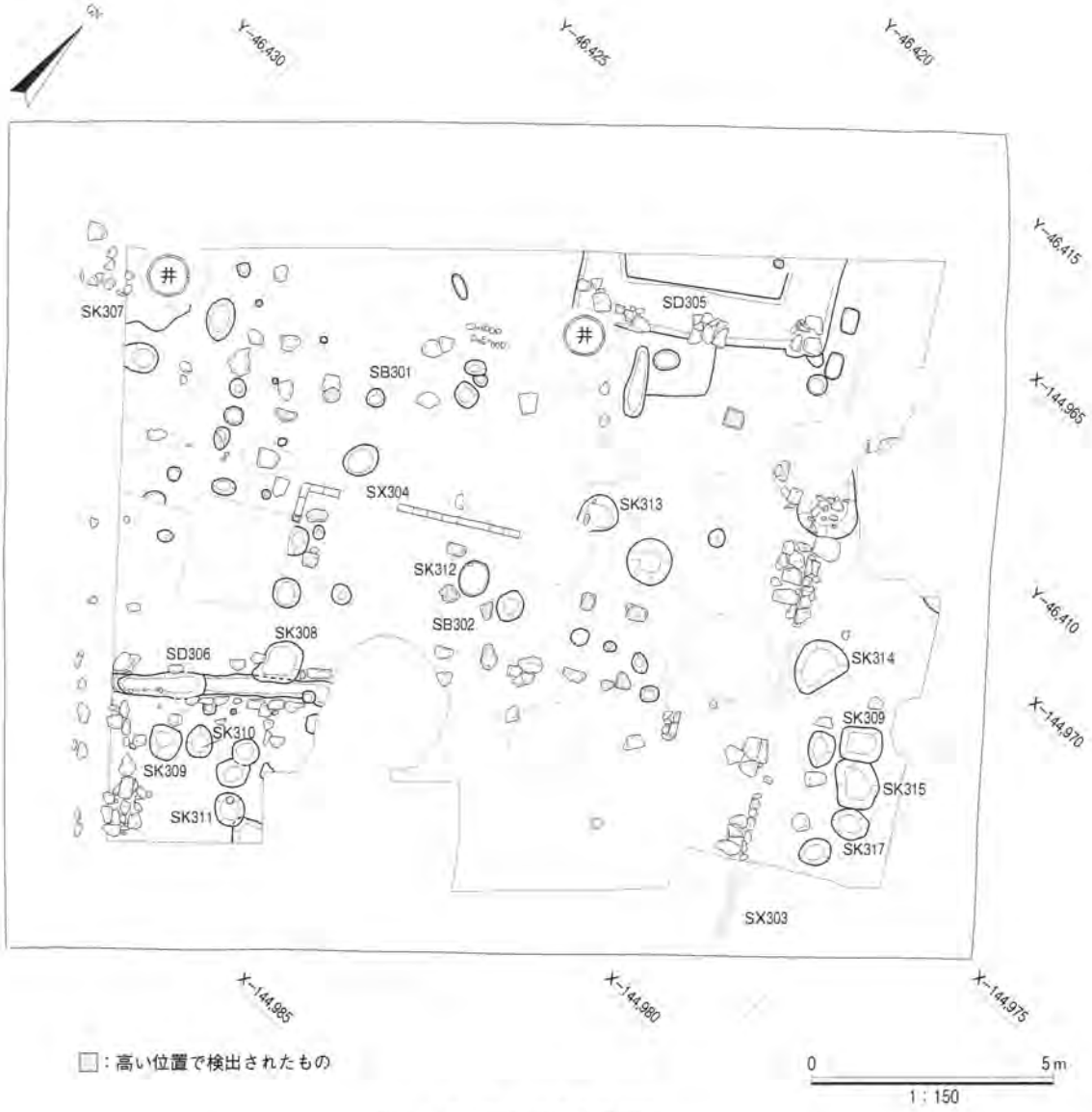


図6　第4層上面遺構平面図

た。攪乱により分断され、南北2箇所に分かれて検出された。南側は長さ1.4m、北側は1.9mにわたり残存していた。石の平坦な面が向かい合っている。石は東側が長辺0.1～0.2mほどのものが主体で、西側は0.4～0.5mほどの石材を含みやや大きい。最も高いところで3段ほどが残存しており、東側がやや高かった。

SX304　土管を用いた排水施設である。攪乱で失われ、東西二分されて検出された。西側では屈曲部を含め延べ1.5m、東側では約2.5mが残存していた。管のレベルからみて東側から西側へと排水を行っていたようである。排水の先については攪乱のため不明である。内部は下端に機能時のものとみられる粘土質シルト、その上に細粒砂が堆積していた。

14～16はこの施設に用いられた土管で、直線部分のもの14・15と屈曲部に用いられた16がある。14・15は長さ約33cm、直径13cmである。

SD305　幅1.0～1.1m、深さ0.1mほどである。埋土はオリーブ褐色のシルト質細粒砂である。西南・東南のコーナーと中央に石材が据えられていた。本来はこれらの上に礎石が据えられていた可能性も

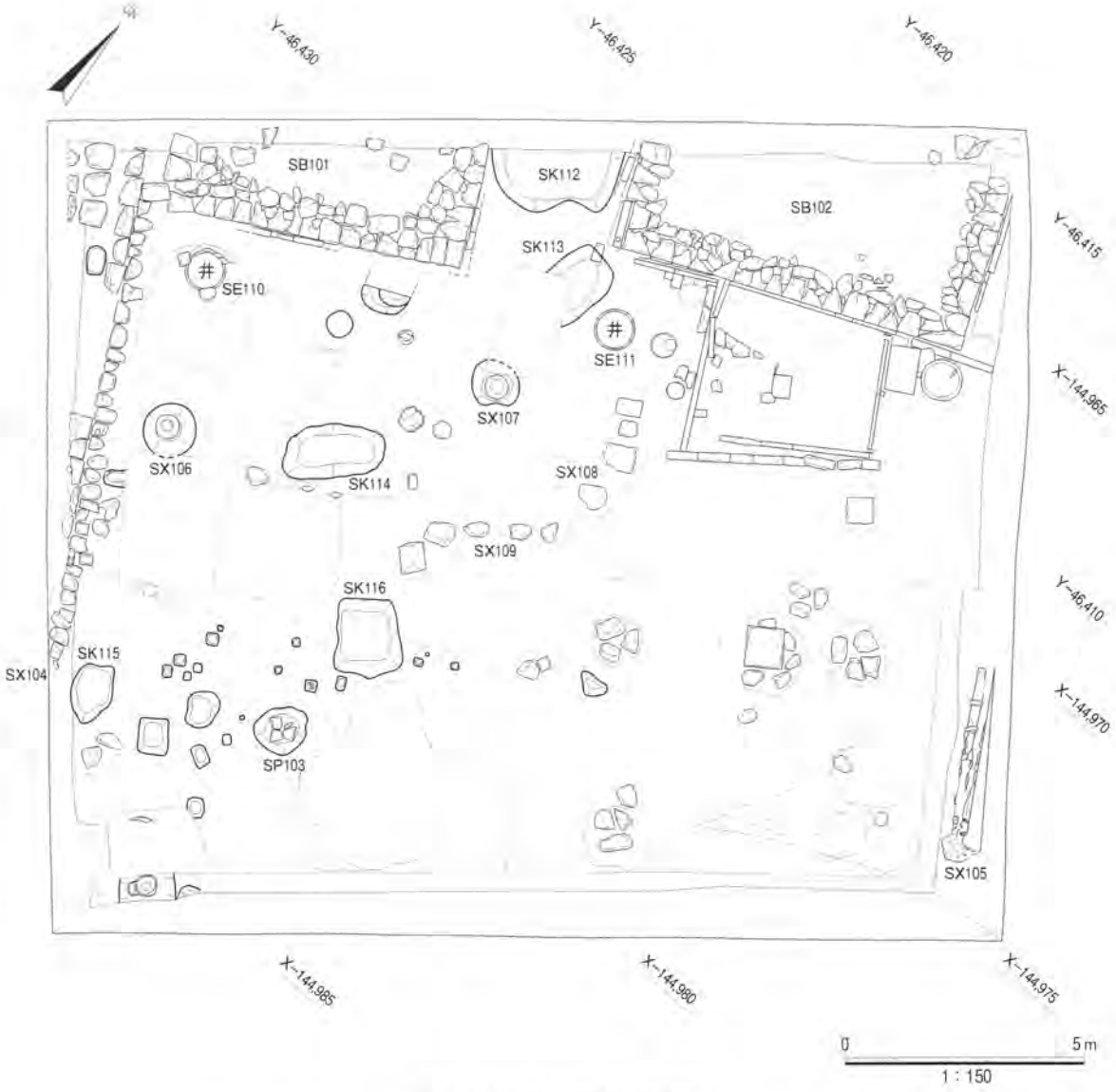


図7　第1層上面遺構平面図

考えられた。建物の基礎地業とするとほかよりも入念であり、蔵などのある程度重量のかかる建造物があった可能性があろう。少量の遺物が出土しており、13は肥前陶器の香炉とみられるものである。

SD306　調査区西南部で確認した。幅約0.4mで、長さ4.5mが確認された。埋土は粘土偽礫を含む灰オリーブ色中粒砂で、人為的に埋め戻されていた。南北には長さ0.3mほどの石材が並んでいる。出土遺物には、1の肥前磁器青磁の香炉、2の備前焼の甕、3・4の土師器皿がある。

SK307～317は調査区の西南・東南部で密に分布していた。

SK307は長さ1.7m、深さ0.2mである。一帯には石材が分布していた。5の肥前磁器の染付小杯、6の肥前陶器京焼風の平碗が出土した。SK309～311は調査区の西南部で検出された。いずれも長さ0.4～0.5m、深さ0.3～0.4mで人為的に埋められていた。SK312は調査区の中央で確認された。直径0.6m、深さ0.5mで、埋土の外周には木質が部分的に残存しているところがあり、曲物などが据えられていた可能性がある。土師器皿がまとまって出土し、多くは灯明に用いられたものである。7～9は出土した土師器皿で、直径12～13cmおよび7cm前後の2つの法量が主体である。SK313はSK312近くで検

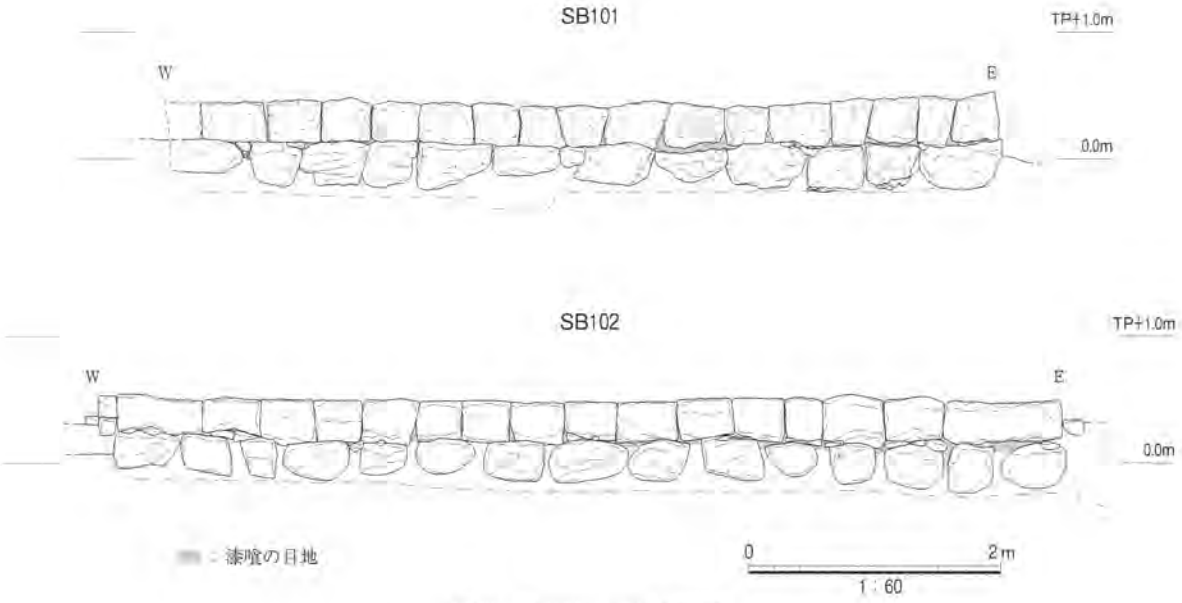


図８　SB101・102立面図

出された。直径0.7m、深さ0.3mほどの平面形が不整円形の土壙である。こちらからも土師器皿がまとまって出土している。10・11は土師器皿である。12は銅製の匙である。SK315～317は調査区の東南部で検出された。長さ0.7～0.8m、深さ0.1～0.2mほどである。いずれも炭化物を多く含むシルト質細粒砂で埋め戻されていた。

ｄ、第１層上面の遺構(18世紀末～19世紀の遺構と遺物：図７・８・10)

第１層上面では調査区西端で敷地の境とみられる石列SX104があり、調査区の西端と中央とで２つの敷地に区画されているとみられた。さらに調査区の東壁で土管SX105が確認され、調査区東側には別の敷地があると推測された。調査区中央の敷地では蔵の基礎とみられる石列などの遺構が確認された。西の敷地では礎石とみられる石が確認でき、西側に延びる道路までの間に建物が立ち並んだ可能性が考えられた。SB101・102に伴う盛土などからは18世紀後葉から19世紀初めの陶磁器が出土しており、第１層の形成はその頃であったとみられ、上面で確認された遺構には近代以降のものもあり、改変されながら利用されたようである。

SB101　南面する石垣は東西幅6.7mである。石垣の石を積む前に地業を行っていた。溝を掘り、その中に砂と花崗岩の割り石を交互に数回積んでいる。その上に花崗岩を主とする石材を積んで石垣を形成していた。石は２段に積まれており、石は下段が丸味が強い。その内側にやや小型の石材が裏込めとして積まれていた。上段は打ち欠かれた間知石で、内側には不定形な石が積まれていた。一部漆喰が残っていた。17～19は盛土から出土したものである。17は肥前磁器の染付広東碗で、18は肥前磁器の紅皿である。19は肥前陶器の碗である。ほかにも18世紀後半から19世紀初めにかけてのものが出土している。

SB102　石列の南面の幅は7.8mである。石垣の整地とともに溝を掘り、その中に花崗岩の割り石を含む土砂で整地をし、その上に石材を設置していた。ただし西側のSB101ほどその整地は入念ではない。石は２段に積まれており、下段は丸味が強く、上段は間知石である。それらの間に割り石が部

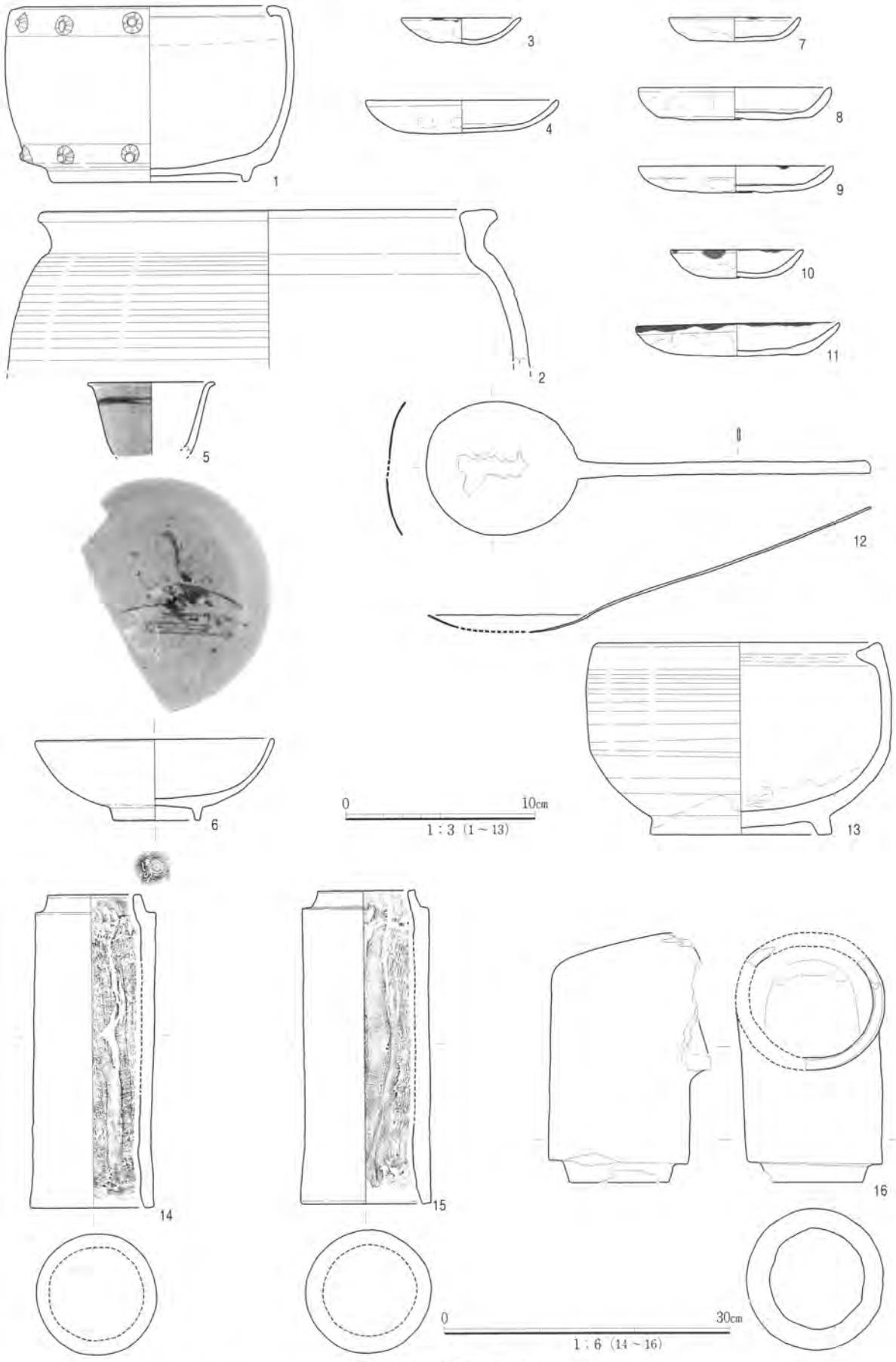


図９　出土遺物実測図（１）

SD306（１～４）、SK307（５・６）、SK312（７～９）、SK313(10～12)、SD305(13)、SX304(14～16)

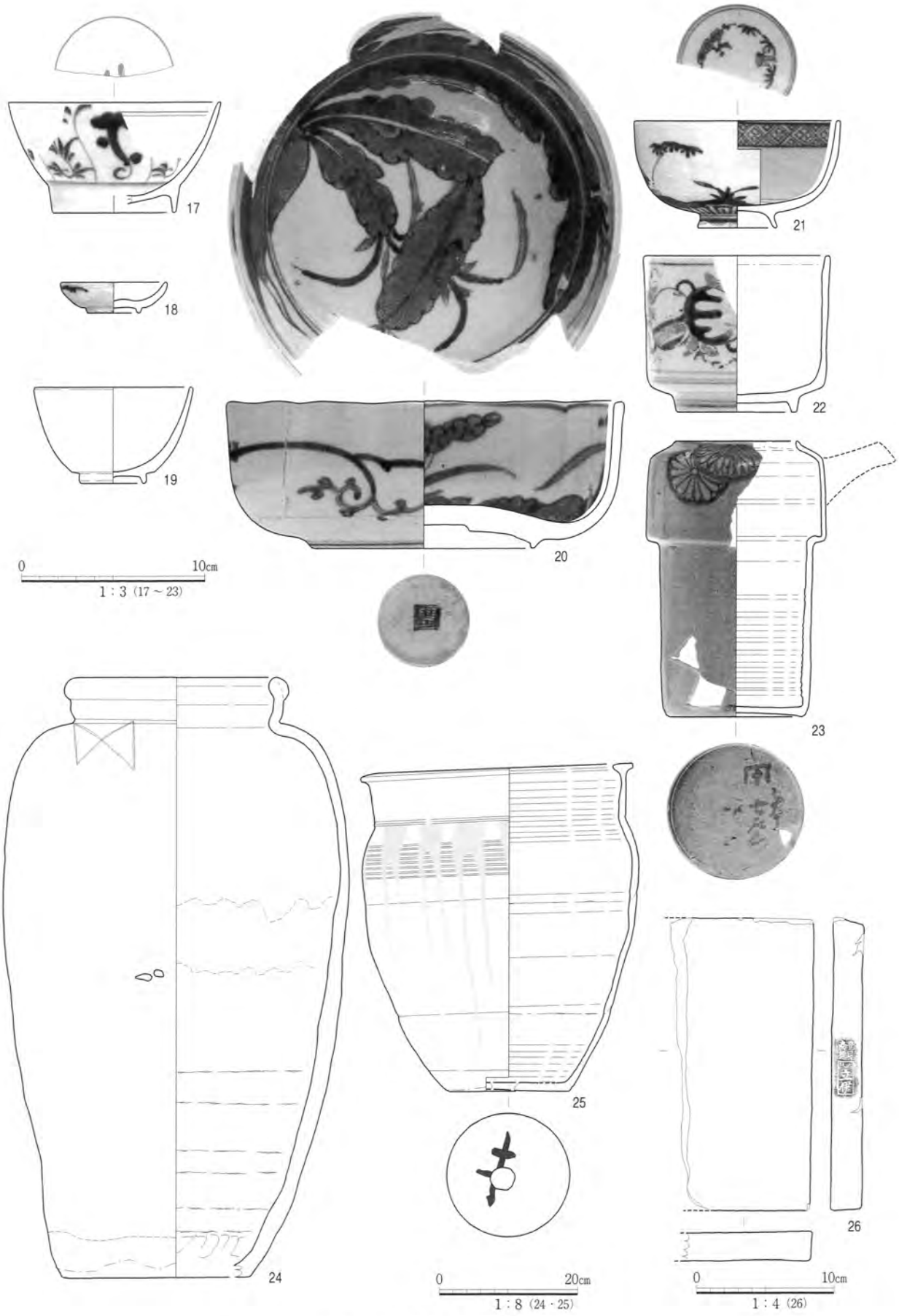


図10　出土遺物実測図(２)

SB101(17~19)、SB102(20~23)、SX106(24・26)、SX107(25)

分的に入れられていた。20～23は盛土から出土したものである。21は肥前磁器の染付碗で、22は肥前磁器の色絵鉢で本来は蓋が伴っていたものである。20は肥前磁器染付の鉢である。23は関西系陶器のちろりで底面に墨書がある。

敷地境石列SX104　調査区の西端で検出された石列である。石の平坦な面が向かい合うように延びている。長さ約11.0mにわたって検出された。東側の列が残存状況がよく、西側の石列は失われていた部分が多い。東側の列では石材が長さ0.3～0.4mほどのものが多いのに対し、西側の列は長辺0.6mほどとやや大型で、残存する面では0.1mほど高い。調査区の北西隅ではさらに西に石材が確認でき、本調査地の西側の通り沿いには別の建物が並ぶことが推測される。

SP103　調査区西南部で確認された。直径約1.1m、深さ0.2mの落込み内に長さ0.2m程度の石材が検出された。本来はこの上に礎石が設けられていた可能性が考えられた。ただしこれに組み合うものは確認できなかった。周辺では小型の土壙があり、これらは建造物に伴っていたものかもしれない。

SX106・107　水琴窟とみられる遺構である。SX106では備前焼の甕、SX107では丹波焼とみられる陶器が底部に穿孔され逆さにして設置されていた。いずれも陶器よりひとまわり大きな土壙を掘削し陶器を倒置して設置している。内部にはいずれもシルトから細粒砂などの比較的細粒な堆積物が堆積していた。24はSX106で用いられた備前焼の甕である。高さ86cmの大型のもので肩部に窯印をもつ。周囲からは刻印をもつ熨斗瓦とみられる26が出土しており、側面に「登録商標　立伊」の刻印がある。25はSX107で設置されていた丹波焼の甕で底面に墨書がある。底側から打ち欠かかれていた。

石列SX108・109　調査区のほぼ中央で確認された石列である。建物に伴う可能性があるが、詳細は不明である。

井戸SE110・111　調査区の西北部と中央北寄りで検出された。ともに瓦による井戸側を築いている。西側のSE110では瓦を用いて井戸側を設け、地上に出る部分では石を組み合わせて枠にしていたようである。東側のSE111では瓦を用いた井戸側が確認された。

なお、第1層上面で確認された遺構には近代に入っても利用された状況が見受けられた。SB102の南側では1層段階の遺構の上にコンクリート薄板による床面が設けられていた。また、この面では炭化物や焼土が分布している。その南側に連続して大型の建物が建てられていたようであり、直径1.0～1.5mほどの円形の穴が掘られ、円礫を敷いて基礎とし、その上に大型の礎石が据え付けられていたところが数箇所あった。

当調査地の位置する地域では、屋敷の蔵が吉原治良らの具体美術協会によってギャラリー「グタイピナコテカ」として1962～1970年に活用されたことが知られている。地図などで確認したところ、本調査区のある地点はグタイピナコテカの南側に位置する敷地のようである。

e．各層出土の遺物

第6層出土の遺物（図11）

27は青花の小杯、28は中国南方系の青花碗である。29は肥前磁器の白磁小杯で外面底部が露胎である。30～37は肥前陶器である。30～32は碗、33は皿である。34は皿で、内面底部に白泥による花文の装飾がある。35・36は白泥による刷毛目文がある。37は鉄絵による装飾がある向付である。以上の

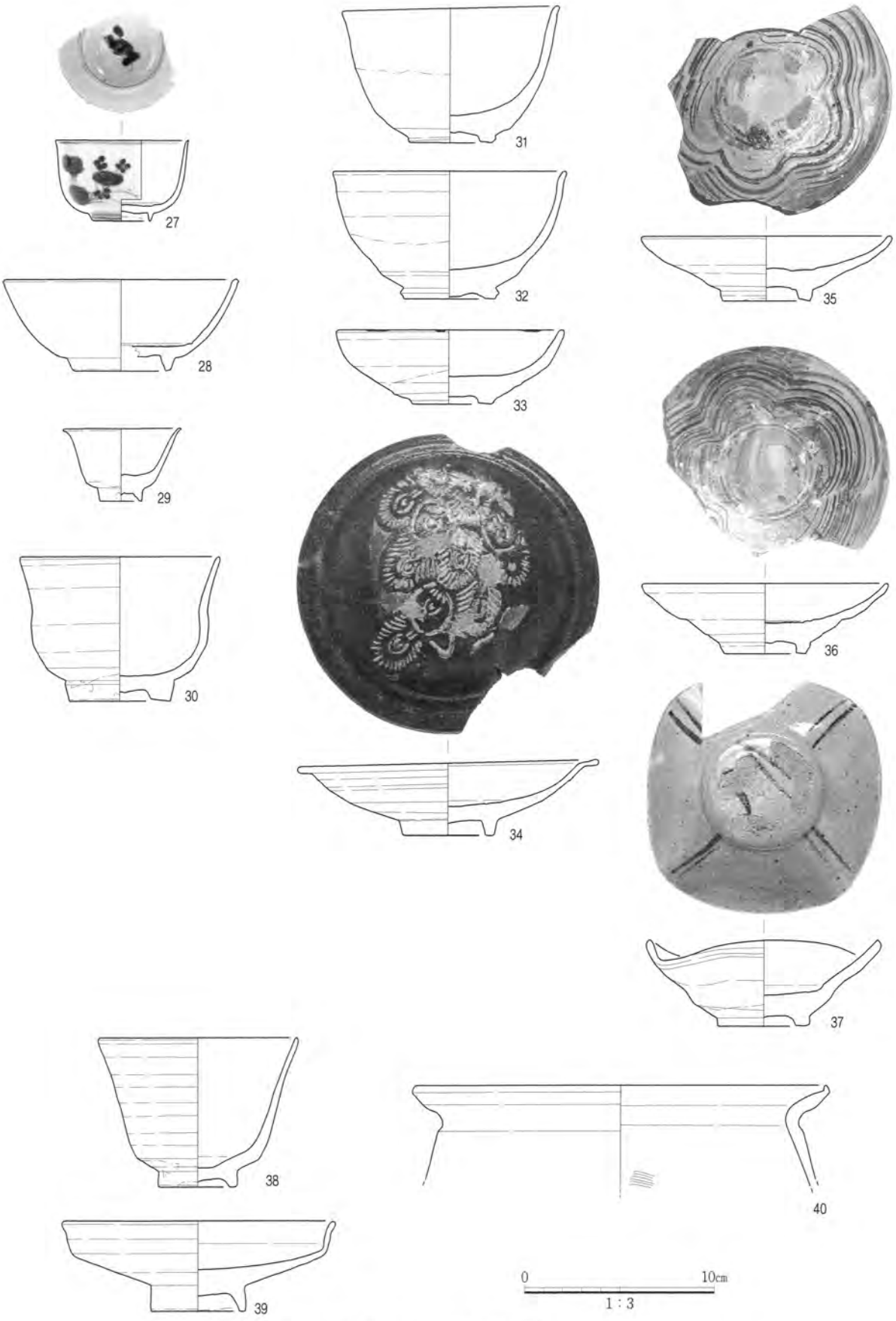


図11　出土遺物実測図(３)
第６層(27～37)、第５層(38～40)

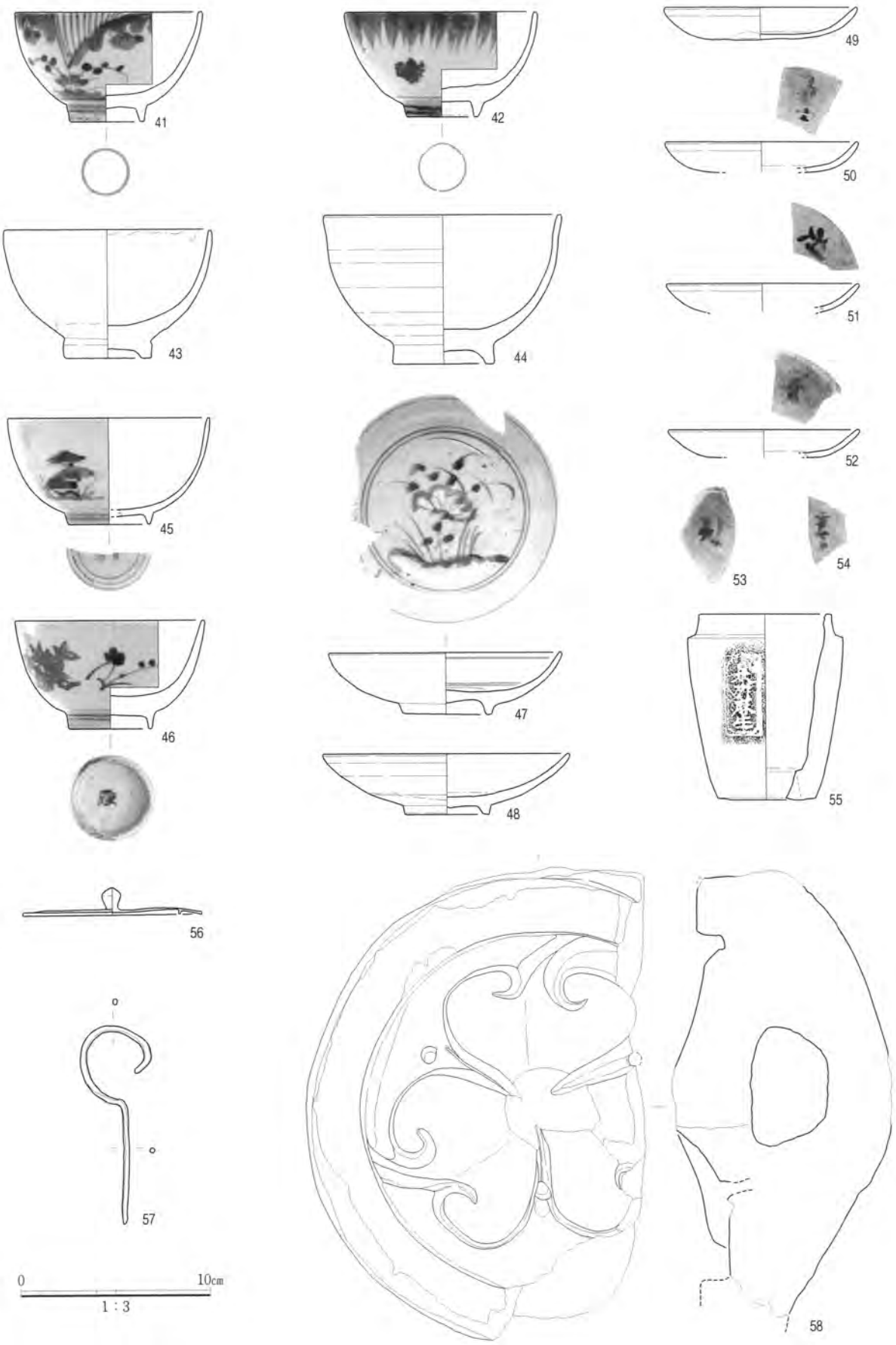


図12　出土遺物実測図(４)

第４層(41～44・58)、第３層(45～57)

ように17世紀前半ないし中葉頃までの遺物が出土している。

第５層出土の遺物(図11)

38・39は肥前陶器の碗・皿、40は大和型の土釜である。

第４層出土の遺物(図12)

41・42は肥前磁器の染付碗、43・44は肥前陶器で、43は銅緑釉がかかる碗で、44は呉器手碗である。49～54は土師器皿で、南壁でまとまって出土したものである。50～54には墨書があり、中には梵字が記されたものがある。いずれも字が破片の内面側のほぼ中央にあり、破片となってから記した可能性がある。58は外面に三葉葵紋のある飾瓦である。粗粒な胎土で、釘穴が３個あるが、図示した向きで中央下のものは貫通していない。陶磁器類は18世紀前半代のものが主体である。

第３層出土の遺物(図12)

45・46は肥前磁器の染付碗である。47は肥前磁器の皿である。48は肥前陶器の皿で、銅緑釉がかかり内面は蛇の目状に釉はぎされるものである。55は外面に「泉州麻生」の刻印のある焼塩壺である。56・57はともに銅製品で、56はつまみの付いた蓋で、57は針金を折り曲げたものである。陶磁器類は18世紀前半から後半にかけてのものが主体である。

iii)調査地の変遷と蔵屋敷

a．屋敷地・土地利用の変遷について

第６層による造成

本調査地における第６層による造成は出土遺物からみて17世紀中葉に行われたと考えられた。この造成は、部分的に第７層を掘り込んで第6b層による盛土を行って土手状の高まりを設け、その内側を河川に由来するとみられる第6a層の砂で埋めるものであった。それとこれらの造成は敷地の周囲にあたる部分、そして後に建物が分布するところにまず第6b層で土手状の高まりを設けており、後の建物配置なども考慮しながら行ったと考えられる。

本調査地ではこの造成に先行する時期の土地利用の状況は明らかにできなかったが、周辺でのこれまでの調査とは異なる点も見られる。北側の鳥取藩蔵屋敷跡では17世紀前葉には土地利用が開始されると考えられており、それよりも遅れることが指摘できる。また標高を見ていくと、北側の各調査地では標高TP－1.6～2.0m程度で水成層が確認されている。本調査地では標高TP－2.5～2.7mにおいて河川成の堆積が確認されている。北側の調査地では確認された地表面で屋敷地あるいは耕作等が確認されている。それに比較すると当地点は低く、異なっているといえるだろう。今後周辺の成果もあわせてこのような違いの背景や開発の過程を明らかにしていく必要があろう。

第５層から第１層にかけての変化

第６層の造成の後、第５層の整地により屋敷地としての利用が行われた。まず17世紀中葉～18世紀初めとみられる第５層では調査区東部で敷地境により区画しながら屋敷地として利用されていた。東南部では建物とみられる礎石群があり、南から東にかけて遺構が多数形成されていた。西部では礎石や小土壙が多数確認され活発に利用されたことが推測された。明確な建物跡は確認できなかったものの、遺構の状況からより西側に延びることが明らかである。その一方で中央北部では耕作に伴うとみ

られる溝が確認され、一部は建物がたたない状況であったとみられた。

この状況は18世紀前葉～後葉にかけてとみられる第３層の段階には変化を遂げている。敷地境の石列は第５層のものに近い位置に築かれ、南まで明確に延びていた。その東側では建物が設けられるようであり、敷地の中央でも礎石が多数分布し、建物が拡がっていた。また西側においては明確な建物跡は確認できなかったものの、小型の土壙や石材などが多数確認され、活発に利用されたことが窺われた。この西部の状況は第５層の状況と近く、より西側に拡がる施設があったものとみられる。前段階より建て込む状況になっていたことが推測される。

図13　鳥取藩大坂蔵屋敷絵図と今回の調査地

この状況は18世紀後葉あるいは19世紀代から幕末にかけての第１層の段階にさらに変化している。まず敷地境の位置が変化しており、調査区西部に石列が延び、明確に区画されている。また第５・３層の段階に東部にあった敷地境はなくなっており、壁面で土管などが確認されたため、さらに東側に移った可能性も考えられた。中央の敷地では南側の利用は不明確なものの、北部に蔵が築かれていた。このように屋敷地として利用されながら、区画やその利用の状況が変化していったことが確認された。

b．蔵屋敷の変遷と遺構変遷の関係(図13)

当地点を含む地点は徳川期には西信町と呼ばれ、蔵屋敷が所在していたことが知られる。その変遷についてはすでに豆谷浩之によってまとめられたものがあり[豆谷2001]、それをもとに当地に所在していたとみられる藩を確認しておく。まず明暦元年(1655)には肥前福江藩、豊後森藩が所在したとされ、延宝７年(1679)には備中足守藩・播磨林田藩などが加わり、元禄16年(1703)には播磨明石藩も所在していたようである。その一方、肥前福江藩は延享元年(1744)、播磨林田藩は元文５年(1740)にはほかの地点に移転していたことが明らかになっている。明和元年(1764)には伊予今治藩、天明３年(1783)に豊後日出藩が西信町に加わっている。幕末期には豊後日出藩・豊後森藩・伊予今治藩などが所在していたとみられる。このようにかなり入れ替わりもあり、本調査地の屋敷地にどの藩が該当するかは明らかにできていないが、一つ検討する手がかりとして第４層の盛土から出土した家紋瓦があげられる。三つ葉葵をもつものであり、所在した藩では播磨明石藩の越前松平家、あるいは伊予今

治藩の久松松平家などがあり、関係する可能性があろう。

また調査地近辺に関連する資料としては鳥取藩蔵屋敷を描いた「鳥取藩大坂蔵屋敷絵図」が知られ、18世紀代を描いたものとされている。それに調査地をはめこんだものが図13である。図がどこまで正確かなど不明な点も多いため、およその位置ではあるが目安として示しておく。東西の通りをはさんで拡がる宗是町の南に西信町があり、その一角に本調査地が相当する可能性があろう。本調査地の遺構では先述の年代の検討からみると、第５層あるいは第３層の段階が絵図に対応する可能性があろう。本調査地の想定される西信町側では特に敷地や建物などは図示されておらず、今回の調査成果は図には表現されていない状況を確認したといえよう。

３）まとめ

今回の調査では鳥取藩蔵屋敷の南側、土佐堀川の側に位置する屋敷地の状況をはじめて調査することができた。その結果17世紀中葉の大規模な造成を経て屋敷地が設けられたことが知られた。北側の鳥取藩蔵屋敷跡で確認された過程とは異なっており、屋敷地ごとの開発の進展を明らかにする資料といえよう。そしてその後、徳川期を通じて造成を繰り返して屋敷地として利用されている状況が明らかになり、建物跡をはじめとする遺構が確認され、陶磁器などの生活をものがたる資料が得られている。こうして検出された屋敷地が具体的にどの藩に該当するかは、手がかりが少なく明確ではないところも多いが、三つ葉葵の家紋瓦の出土が注目される。今後こうした資料にさらに検討を加え、藩の交代と屋敷の変遷を明らかなものとしたい。

主要引用参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、「中之島蔵屋敷跡発掘調査(NX07－１)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)』

大阪市文化財協会1999、「中之島３丁目共同開発(仮称)に伴う埋蔵文化財発掘調査(NX99－１)完了報告書」

大阪文化財研究所2010、「北区中之島三丁目における建設工事に伴う中之島蔵屋敷跡発掘調査(NX10－2)」

豆谷浩之2001、「蔵屋敷の設置と移転にかかわる基礎的考察」:『大阪市文化財協会研究紀要』、第４号

新修大阪市史編纂委員会編1989、『大阪市史』第３巻

大阪市都市住宅史編集委員会編1989、『まちに住まう』、平凡社

地層断面　北壁
（南から）

第５層上面全景
（北西から）

石列SX504と周辺
（北から）

第４層上面全景
（北西から）

石列SX303と周辺
（東から）

排水施設SX304
（南から）

第１層上面全景
（北東から）

石列SX104
（北から）

蔵遺構SB101・102
（東から）

北区中之島三丁目における建設工事に伴う
中之島蔵屋敷跡発掘調査(NX11－３)報告書

調 査 個 所　大阪市北区中之島３丁目１
調 査 面 積　100㎡
調 査 期 間　平成23年11月24日～11月30日
調 査 主 体　公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、趙 哲済

1)調査に至る経緯と経過

徳川期の中之島一帯は、西国諸藩の蔵屋敷が建ち並んでいた場所である。その中で、調査地は鳥取藩の蔵屋敷に該当する。調査地の南では、2000年2月に発掘調査(NX99－1)が実施されている。この調査では東区のTP－2.4mで中州上に形成された中世の古土壌(層厚30cm)が検出され、その下位はTP－4.0mまで、河口付近の氾濫堆積層が分布していた(図1)。

調査地のすぐ西の下流側では、2010年6月に発掘調査(NX10－2次)が実施され、TP－2.3mまでの地層が確認された。その結果、TP－1.7mより上位の造成土層から軟質施釉陶器の合子が出土したことにより、豊臣期の遺構・遺物が残っている可能性が指摘された。また、TP－1.7mより下位は河道堆積層であったが、徳川期の遺構面から掘り込まれた土壙のひとつは、TP－2.3mより深くまで達していた。

調査地では、2011年6月10日に敷地東部で試掘調査が行われ、砂層に挟まれた灰～灰黒色粘土層中(現地表下5.9m；TP－4.7m)から古代に遡る可能性のある布目瓦が見つかった。このことにより、本調査を実施することになった(図2)。

調査地の東部に、旧建物と建築中の建物基礎を避けてL字形の調査区を設け、本体工事側で地表下

図1　調査地位置図

図2　調査区位置図

5.8m（TP－4.6m）まで重機掘削した後、調査に着手した。調査では、遺構検出、写真撮影、平面図・断面図の作成などを順次行い、11月30日にすべての作業を終了した。

本報告書で用いた方位は、事業者から提供を受けた工事図と現場で記録した調査区配置図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。また、標高はT.P.値（東京湾平均海面値）でTP－○mと記した。

2）調査の結果

本体工事側による重機掘削後の地盤はTP－4.6mであり、10cm前後の重機掘削時の攪乱層を除去した面で遺構検出したところ、調査区の大半が、新旧の建物基礎の余掘り及び崩落部、近現代の土壙により攪乱されていることが明らかとなった（図３）。そこで、攪乱を免れた調査区南部で部分的に掘り下げ、地層の堆積状況を観察・記録した（図４）。

ⅰ）層序

第０層：近現代の攪乱埋土であり、新旧の杭周囲の著しく変形した砂泥、泥土モルタル、黒灰色泥薄層、偽礫などの岩相をもつ。

第１層：灰色を主たる色調とする比較的分級の良い粗粒～中粒砂主体の砂層であり、一部に細礫が混じる。トラフ型斜交ラミナが発達する。層厚は70cm以上で、TP－5.4m以深まで続く。古流向は西～南西向きであり、河口付近の三角州の堆積層と考えられる。

ⅱ）遺構と遺物

第１層から出土した遺物はない。第０層の攪乱埋土からは近現代の陶磁器や瓦が出土した。

試掘調査時に出土した瓦は古代～中世の布目のある瓦（写真下）の破片である。出土層は、第１層の砂が掘り上げられた後、底付近に砂や地表付近にあった泥が再堆積した地層である。第１層には泥が含まれないのに対して、泥偽礫を含んでいるという違いがあり、現代の大きな攪乱か近代の土壙の底付近の堆積層とみられる。

3）まとめ

試掘調査で出土した布目瓦が出土した標高の地層は三角州～海底の地層である。また、出土層の堆積状況からみて、現代の攪乱か近代の土壙の底の地層と考えられる。したがって、本調査では、当該地のTP－4.7m前後の標高で、古代～中世の生活面が存在したという証拠は得られなかった。なお、鳥取藩蔵屋敷の船入は調査区より西側にあり、本調査の近代の大きな土壙が船入に当る可能性はない。

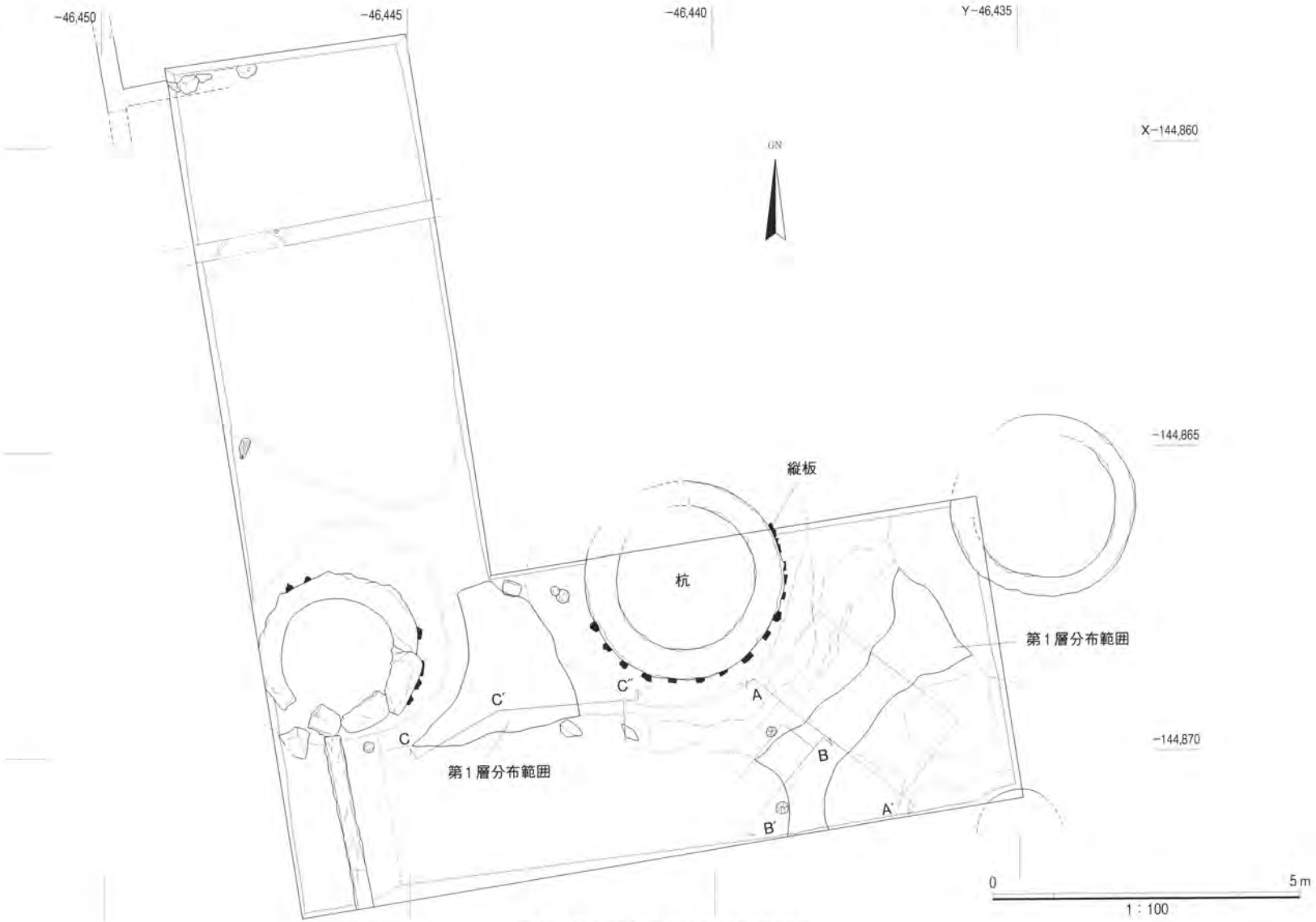
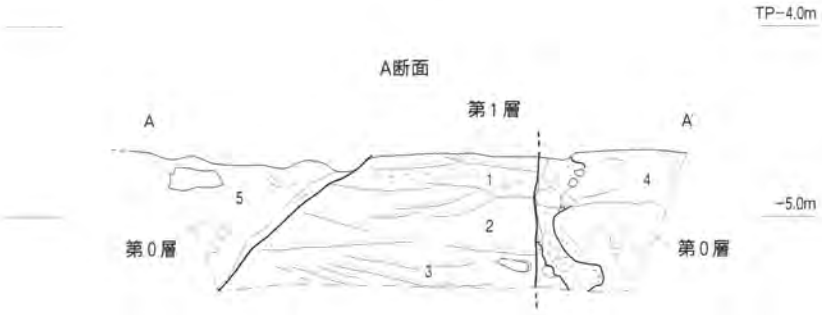
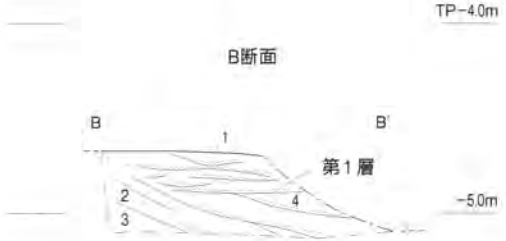


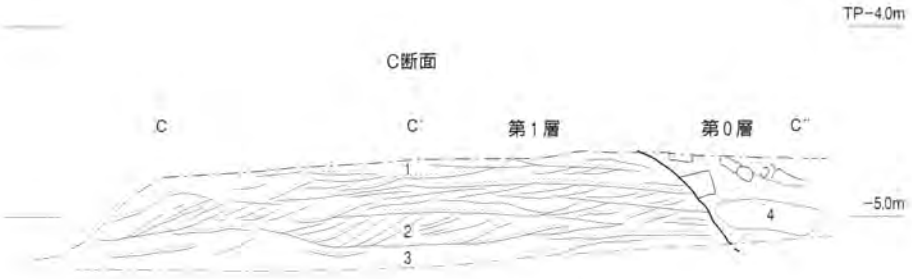
図3　第1層上面の検出状況平面図



1：灰オリーブ色(7.5Y6/2)細礫質粗粒～中粒砂
2：灰色(10Y4/1)粗粒～中粒砂
3：灰色(N4)粗粒～中粒砂
4：暗緑灰色(7.5GY4/1)極細粒砂質シルト
5：暗緑灰色(7.5GY4/1)泥土モルタル



1：灰色(5Y5/1)粗粒～中粒砂
2：灰色(N4)粗粒～中粒砂
3：灰色(10Y4/1)粗粒～中粒砂
4：灰色(7.5Y5/1)粗粒～中粒砂



1：灰オリーブ色(7.5Y5/2)粗粒～中粒砂
2：灰色(10Y5/1)粗粒～中粒砂
3：灰色(10Y4/1)粗粒～中粒砂
4：オリーブ黒色(10Y3/1)極細粒砂質粘土

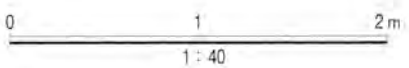


図4　地層断面図

第１層上面検出状況
（北から）

地層断面
（A断面:東から）

試掘調査時に出土した
布目のある瓦片

北区大深町における建設工事に伴う
大深町遺跡B地点発掘調査(OC11－１)報告書

調 査 個 所　大阪市北区大深町　大阪駅北地区先行開発区域
プロジェクトCブロック
調 査 面 積　280㎡
調 査 期 間　平成23年９月20日～10月25日
調 査 主 体　公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南秀雄、岡村勝行

1)調査に至る経緯と経過

調査地は北区大深町、大阪駅北地区先行開発区域の北端に位置する(図1・2)。この地は上町台地北側に広がる微高地、天満砂堆の西縁に当り、調査地の現在の標高はTP+0.4m前後である。東方には茶屋町遺跡・中崎町遺跡・扇町遺跡・安曇寺跡推定地・曽根崎遺跡などがあり、これまでに弥生時代から江戸時代までの遺構・遺物が検出されている。今回の調査地から最も近い、東方500mで行われたCH08－1次調査では紀元1世紀に陸化し、近隣に古墳時代、中世の集落が存在すること、CH10－2次調査では、徳川期から都市化する地域の状況が明らかになっている[大阪文化財研究所2012]。

大阪市教育委員会が平成22年9・10月に行った試掘調査の結果、現地表下約1.7m以下で、中世から近世にかけての建物跡・溝・畑などが存在すると考えられる遺構面が検出され、本調査を実施することになった。

調査開始前に事業者によって、現地表下1.7mまでの地層が掘削・除去され、敷地の北側で東西40m、南北7mの調査区を設定し、現地表下3.4m（TP－3.0m)までの調査を行った。

基準点はmagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP±0mと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

敷地の現地表面の標高はTP+0.4m前後とほぼ平坦である。調査は全体的には現地表下2.2m（TP－1.8m)まで、一部は中央南壁沿いで3.4m（TP－3.0m)まで深掘りし、地層を観察した。地層は大きく

図1　周辺の遺跡と調査地

図2　調査区配置図

7層に分けられ、各層の岩相の特徴は次の通りである。

第1層：バラス、コンクリート片を含む現代盛土・攪乱で、層厚は60～170cmである。

第2層：大阪市立工業学校や大阪鉄道局の時代と考えられるレンガ、壁材やコークスを含む近代盛土で、層厚は60～80cmである。

第3層：オリーブ黒色(5Y3/4)細粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は25～40cmである。遺物は確認できなかったが、第4層上面の遺構の年代から幕末以降と考えられる。

第4層：灰オリーブ色(5Y4/2)シルトからなる水成層で、層厚は10cm前後である。遺物は確認できなかった。上面で近世の溝、幕末の土壙を検出した。

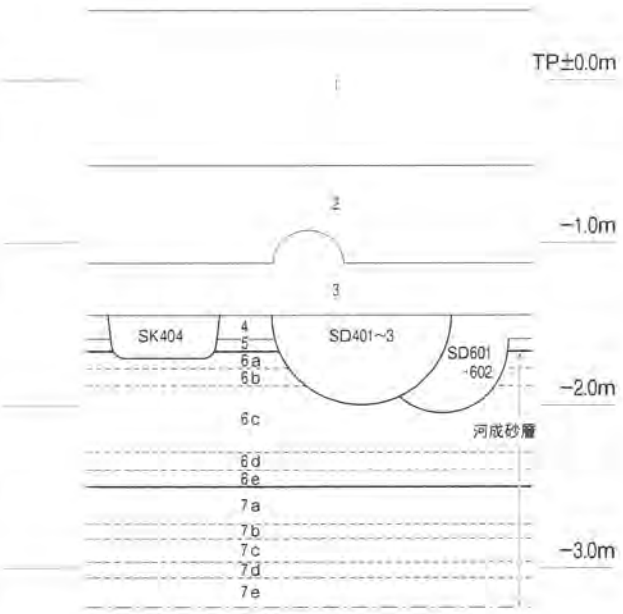


図3　地層と遺構の模式図

第5層：灰オリーブ色(5Y4/2)シルトからなる暗色帯で、層厚は10cm前後である。遺物は確認できなかった。

第6層：粗粒砂を主体とし、トラフ型ラミナが観察される河成層で、全体に灰白色にみえる。基本となる古流向は北から南で、一部では東から西の古流向が観察できた。人工遺物は確認できなかった。5層に細分した。第6a層は灰オリーブ色(5Y5/3)粗粒砂を主体とし、層厚は5cm前後である。上面でSD601・602を検出した。第6b層は灰オリーブ色(5Y4/2)粗粒砂からなり、層厚は5cm前後である。第6c層は灰オリーブ色(5Y5/3)極粗粒～中粒砂からなる正級化成層で、層厚は約30cmである。第6d層は灰オリーブ色(5Y4/2)極粗粒砂からなり、層厚は約10cmである。第6e層は灰色(7.5Y4/1)粗粒砂からなり、層厚は約10cmである。

第7層：粗粒砂と泥の互層からなる河成層で、河口付近の様相を示す。全体に黒っぽくみえ、第6層と対照的である。植物遺体を多く含むが、人工遺物は確認できなかった。5層に細分した。第7a層は灰オリーブ色(5Y4/2)泥～極粗粒砂からなり、層厚約20cmである。第7b層はオリーブ黒色(5Y3/1)泥を主体とし、層厚約8cmである。第7a･b層は地下茎による植物擾乱が著しい。第7c層は灰色(5Y4/1)極粗粒砂からなり、層厚約8cmである。第7d層は灰色(7.5Y4/1)極粗粒砂からなり、層厚約10cmである。第7e層は黒褐色(2.5Y3/1)泥を主体とし、層厚は約15cm以上である。

ii)遺構と遺物(図4～6)

a.近世以前の遺構と遺物

SD601･SD602　第6a層上面で検出した南北方向の溝である。SD601は幅0.9m、深さ0.2m、長さは2.0m以上で、調査区北端までは続かない。SD602は幅1.2m、深さ0.3m、長さ5.7m以上である。いずれも埋土は灰オリーブ色シルト(第4層)の自然堆積で、遺物は確認できなかった。

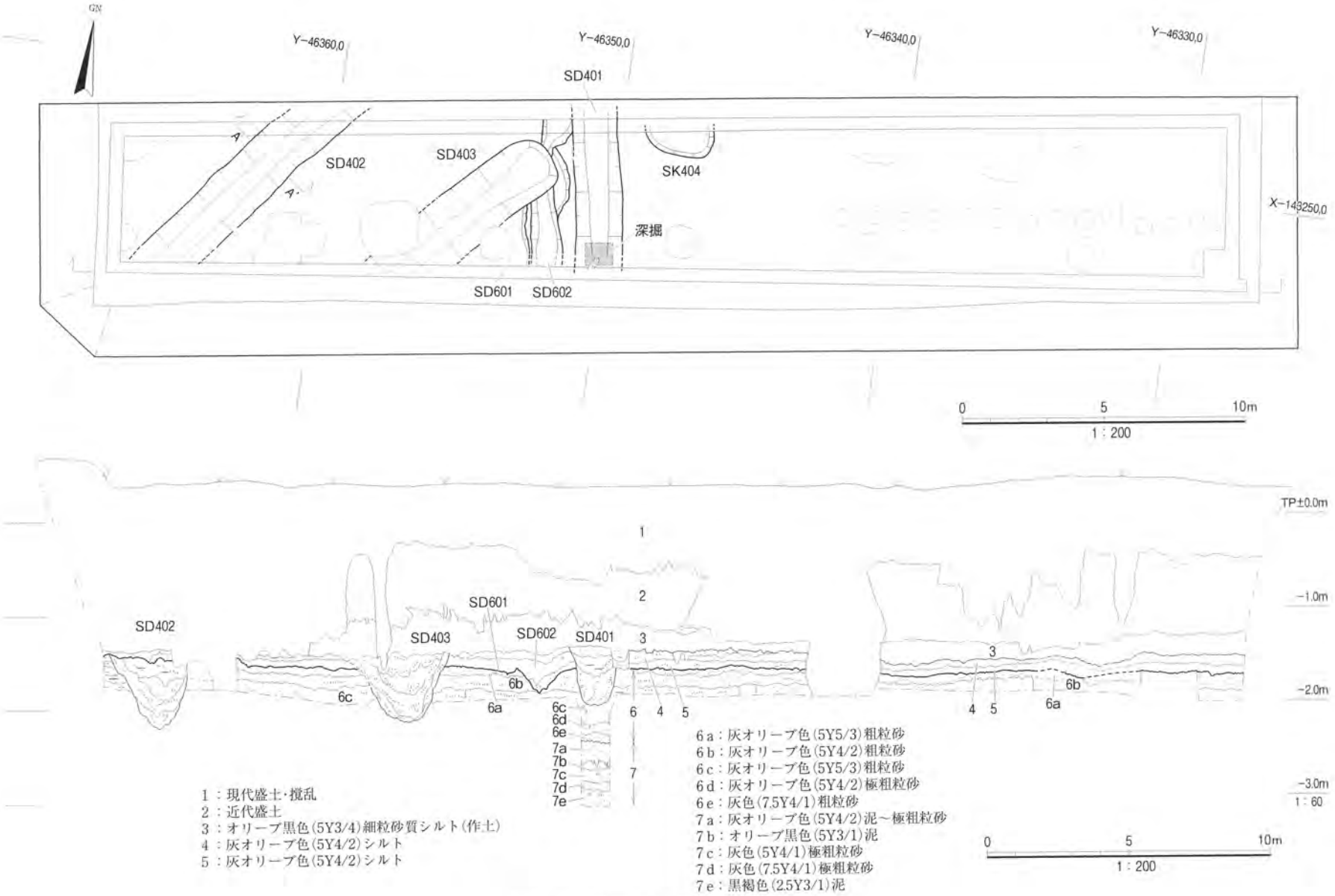


図4　調査区平面図・南壁地層断面図

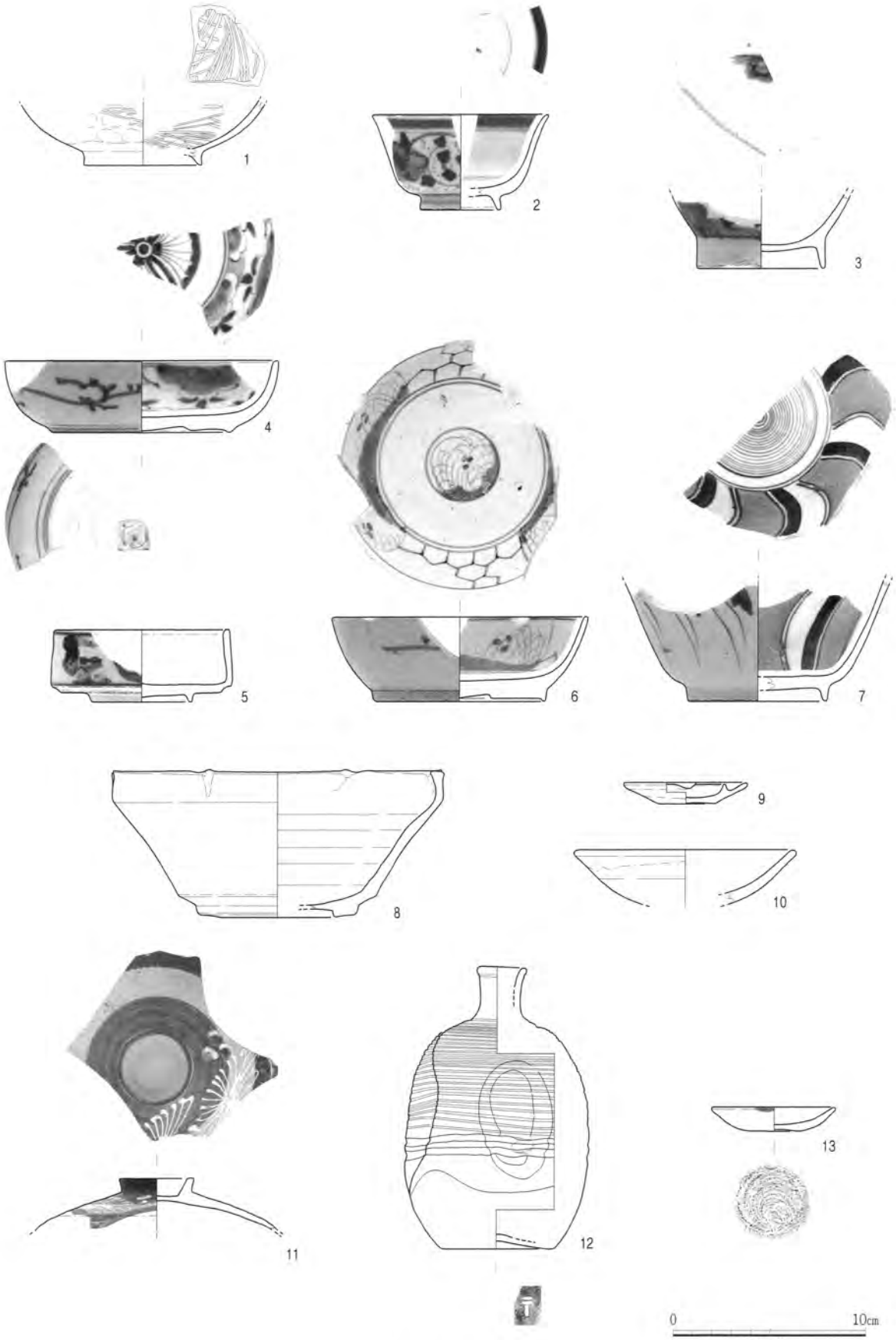


図５　出土遺物実測図
SD402(１)、SK404(２～13)

b. 近世の遺構と遺物

SD401　第4層上面で検出した南北方向に直線的に延びる溝で、幅1.2m、深さ0.6m、長さ5.7m以上である。埋土は大きく3層に分かれ、下層は第4・5層に由来するシルト偽礫を多く含む粗粒砂質シルトを主体とする埋土で、層厚約30cmである。下層下部に流水構造が認められた。中層は細粒砂質シルトからなり、層厚約20cmである。中・下層とも遺物は確認できなかった。上層は粗粒砂質シルトからなり、層厚約10cmである。19世紀代に属する京焼の小片が出土し、19世紀代以降に埋没したことを示している。

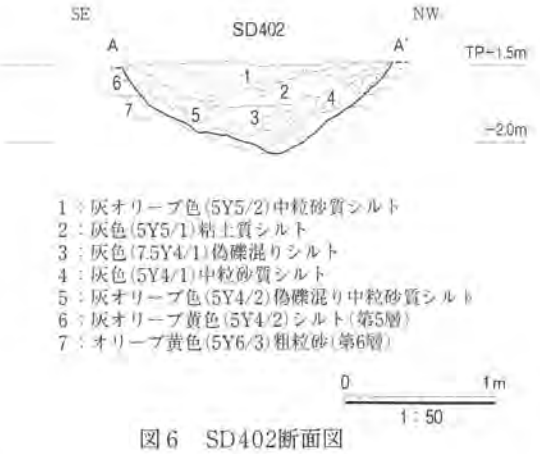


図6　SD402断面図

SD402・403　第4層上面で検出した北東－南西方向の溝である。SD402は幅2.0m、深さ0.8m、長さ10.0m以上である。埋土は第4・5層に由来する、シルト偽礫を多く含むシルトを主体とし、瓦器椀と土師器皿の破片が出土した。このうち、瓦器椀1は三角形の高台を持ち、高台径はやや広い。外面にもミガキが施されており、12世紀前半頃に位置づけられる。SD403は幅2.2m、深さ0.8m、長さ8.0m以上である。SD402・403は平行し、同時期と考えられる。近世の遺物を含まないが、SD403はSD401の手前で止まることから、SD401に後出し、近世に属する可能性がある。埋土の特徴からは湿地での耕作に必要な砂の採取を目的とした可能性が考えられる。

SK404　調査区中央の北壁沿い、第4層上面で検出した土壙で、東西2.5m、南北1.3m以上、深さ0.4mである。内部からは、完形品である備前焼徳利12のほか、瀬戸美濃焼磁器染付端反碗2、肥前磁器染付広東碗3・染付皿4・6・御神酒徳利・色絵段重5・鉢7、関西系陶器灰釉鉢8・灯明受皿9・灯明皿10・行平鍋蓋11、軟質施釉陶器灯明皿13などが出土した。これらは19世紀前～中葉に属し、幕末頃に一括廃棄されたものと考えられる。

3)まとめ

今回の調査地では、中世に遡る明確な遺構は検出されなかったが、12世紀代の瓦器椀が見つかっており、近隣に集落の存在が想定される。また、茶屋町遺跡と同様、幕末期の遺物がまとまって発見され、当地域の都市化がこの時期に始まることを示唆している。大深町は「大フケ」で、「深田」に由来し、大阪市立工業学校(1908(明治41年)開校)など学校地区となる以前は、梅田(埋田)同様、水田地域が広がっていたものと考えられていた。それ以前の歴史は記録にはほとんど登場せず、今回の調査では、同地域の履歴を知る重要な成果が得られた。

引用文献

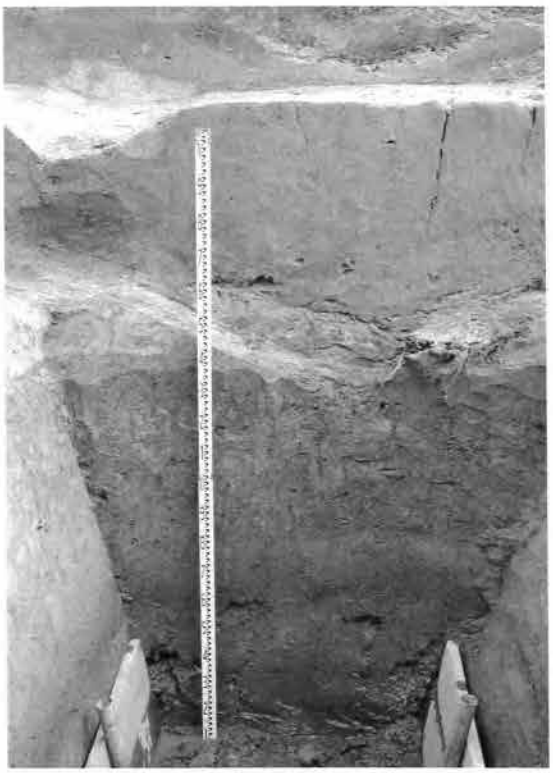
大阪文化財研究所2012、『茶屋町遺跡発掘調査報告書』

調査地の状況(南から)

南壁断面(西から)

SD402断面(南西から)

中央部深掘り断面
（北から）



中央部第６層上面
遺構検出状況
（南から）

SK404検出状況
（南から）

北区菅原町における建設工事に伴う
天神橋遺跡発掘調査(TJ11－１)報告書

調 査 個 所　大阪市北区菅原町102－4
調 査 面 積　7㎡
調 査 期 間　平成23年4月6日～4月7日
調 査 主 体　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、黒田慶一

1)調査に至る経緯と経過

調査地は天神橋遺跡の南部に位置し、天神橋北詰から北北西80m、天満天神社南門から南南西280mにある。当遺跡は古代には東大寺領新羅江荘あるいは安曇江荘、中世には渡辺津と推定され、文献史学から古代中世の水運交通の拠点と位置付けられている。また豊臣政権による1583(天正11)年以降の大坂建設に伴い、市街化した天満の一部と考えられ、1615(慶長20)年の大坂夏ノ陣後は、大坂藩松平忠明、のちには幕府が直轄地大坂の整理・再建に乗り出した際、天満郷の一部として重きをなした。当調査地の北西のTJ00－2次調査[大阪市文化財協会2002]では、古墳時代から江戸時代に至る遺構や遺物が見つかり、中でも鎌倉～室町時代の遺構が多数検出された。また、TJ94－4次調査では豊臣後期と17世紀中頃の遺構が、TJ07－1では13～14世紀の土錘・石錘などの漁撈具と17～18世紀の遺構群が、TJ08－2次調査では奈良時代後半を中心とする土器や瓦・塼などの遺物と17～18世紀の鍛冶に伴う多数の遺物が見つかっている(図1)。

本調査地で大阪市教育委員会によって試掘調査を行ったところ、現地表面下2.5mにおいて豊臣期の可能性のある生活面が確認されたことから本調査を行うこととなった。事業者側が土留工事後、現地表下2.5mまで重機掘削を行ってから調査に入ることとなり、2011年4月6日に調査を開始した。ただし、重機の通路と排土の仮置き場確保のため、市教委からの指示により当初予定したより面積を縮小した(図2)。掘削はすべて人力によって行い、遺構検出・掘下げ・記録などの作業を適宜行いながら調査し、翌日記録作業終了後、撤収を行って現場作業を完了した。

なお、図中の方位は、図1・2が座標北である以外は磁北を基準にし、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、図中ではTP±○mと省略した。

図1　調査地位置図

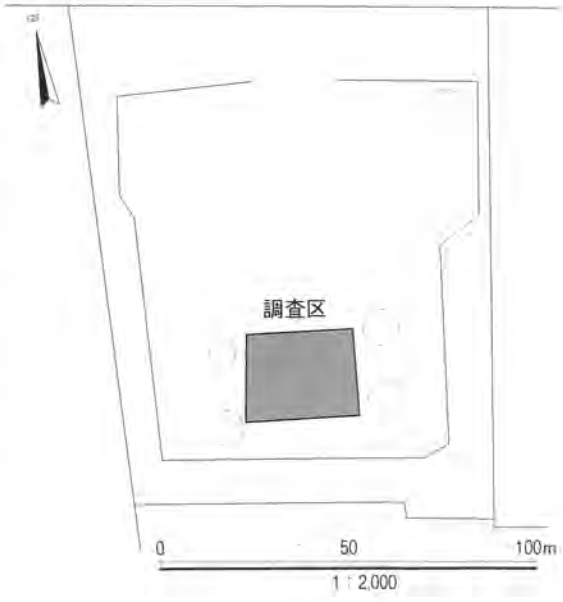


図2　調査区位置図

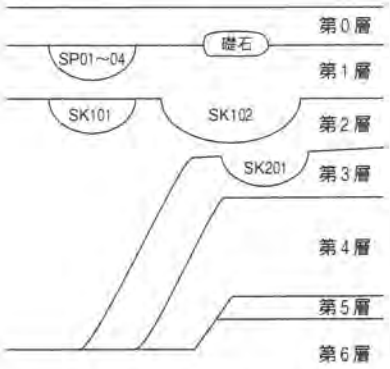


図3　地層と遺構の関係図

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

第0層：機械掘削後に第1層上面に遺存していた層厚5～15cmの炭を含む黄褐色(2.5Y5/3)シルトの整地層で、土師器土釜7が出土した。

第1層：シルト偽礫を含む、層厚10～40cmの黄褐色(2.5Y5/4)細礫質粗粒砂層で、北から南に傾斜する第2層上面を平坦にするための整地層である。上面で礎石と小穴SP01～04を検出した。室町時代後期の遺構と考えられる。

第2層：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト偽礫を含む、層厚25～80cmの明黄褐色(2.5Y7/6)～黄褐色(5Y5/6)細粒砂の盛土層である。

第3層：層厚20～40cmの褐色(10YR4/4)細粒砂質シルトの水成層で、上面に第2層で埋まる土壙SK201がある。

第4層:炭を含む、層厚20～50cmの暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルト層で、北部のみに分布する。中国製白磁皿3、瓦器椀4、土師器皿5・鉢6が出土した。

第5層：北壁のみに分布する層厚5～20cmのオリーブ褐色(2.5Y4/3)の貝殻層である。管状土錘1と緑釉陶器皿2が見つかった。

第6層：層厚50cm以上の黄褐色(2.5Y5/4)細礫質粗粒砂層で、東が高く、西に20cmの段をなして落ちる。

ii)遺構と遺物

a．室町時代前期(第3層上面)の遺構(図4)

SK201　北壁で確認した直径0.5m、深さ0.3mの土壙で、第2層で埋まる。

b．室町時代中期(第2層上面)の遺構(図4・5)

SK101　長さ0.5m以上、幅0.3m、深さ0.1mの土壙で、灰オリーブ色(5Y5/3)シルト質細粒砂を埋土とする。

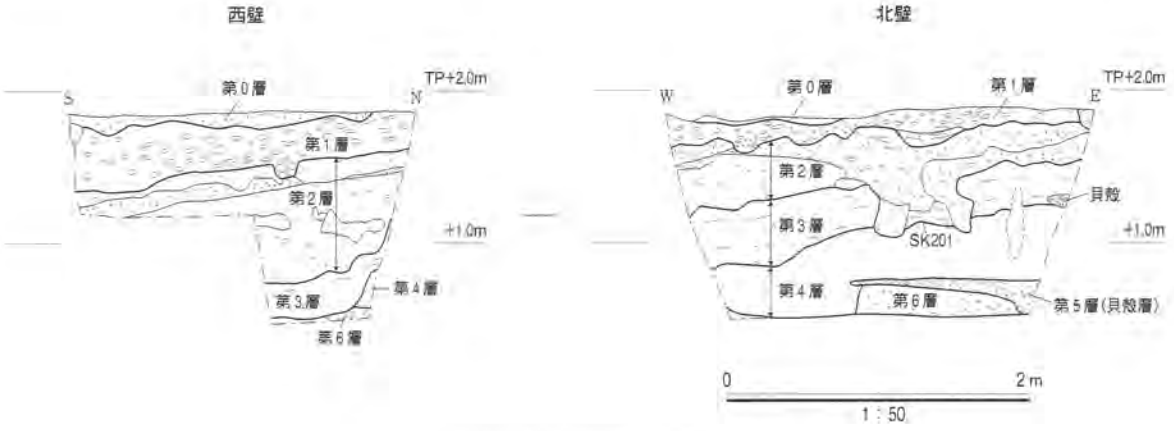


図4　西・北壁地層断面図

SK102　西南隅で検出した、直径0.5m以上、深さ0.2mの土壙で、第1層で埋まる。

c. 室町時代後期(第1層上面)の遺構(図5)

礎石建物　西南隅で検出した礎石2個からなる建物で、礎石芯々間は0.6mである。

SP01　直径0.3m、深さ0.2mの小穴で、シルト偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/4)粗粒砂などで埋まる。

SP02　直径0.2m、深さ0.1mの小穴で、にぶい黄色(2.5Y6/4)細礫質粗粒砂を埋土とする。

SP03　直径0.3m、深さ0.2mの小穴で、オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂質シルトなどで埋まる。

SP04　直径0.3m、深さ0.1mの小穴で、シルト偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/4)粗粒砂で埋まる。

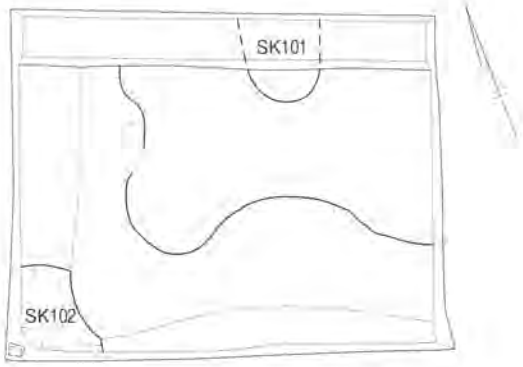
いずれも礎石の抜取り穴などの可能性がある。SP01とSP04は規模や埋土が似ており、礎石建物の方向と平行なことから、組む可能性がある。芯々間は2.0mである。

e. 各層出土遺物(図6)

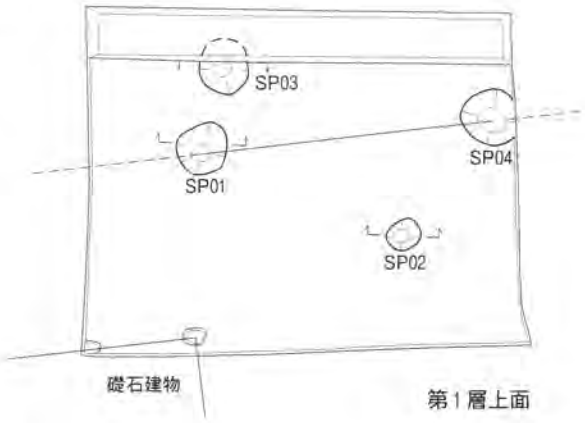
第5層出土遺物　管状土錘1は直径0.9cm、長さ2.5cm以上、重量1.7gで、にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。緑釉陶器皿2は東海系の有段輪高台で9世紀前半のものである。

第4層出土遺物　中国製白磁皿3の釉は灰白色(7.5Y7/1)を呈し、瓦器椀4は和泉型のⅢ－3期で13世紀前半の時期を与えられる。土師器皿5は体部に緩いユビオサエを加え、鉢6は内面にヨコ方向のハケを施す。

第0層出土遺物　土師器土釜7は口縁部破片で、16世紀前半と考えられる。



第2層上面



第1層上面

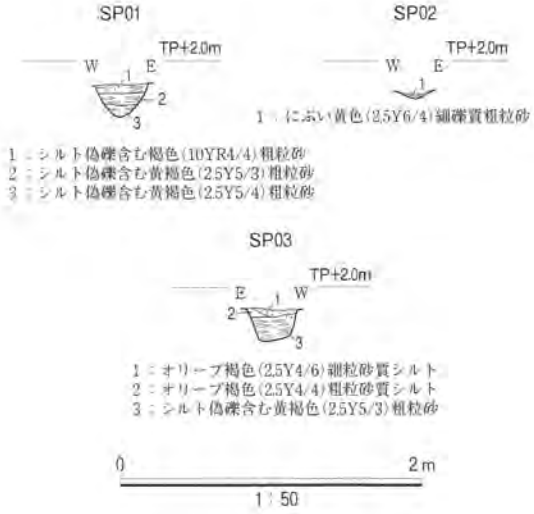


図5　遺構平面・断面図

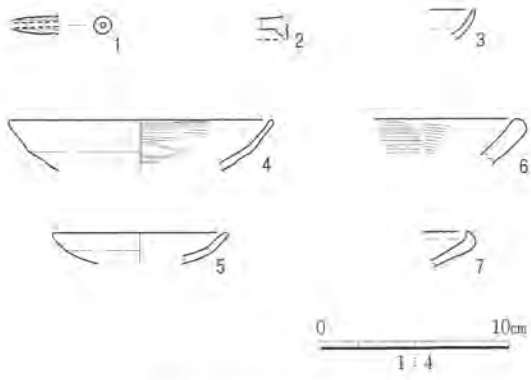


図6　各層遺物実測図
第5層(1・2)、第4層(3～6)、第0層(7)

表1　出土貝類一覧

遺構・層名	時　期	フネガイ科	ハマグリ	ヤマトシジミ	バイ
第2層	14～15世紀 ?		6		1
第4層	13世紀前半	●	63	9	
第5層	?		3	95	

●は殻頂・殻口部が出土しておらず個体数は不明であるが、破片から存在が確認されたもの

表1の出土貝類種名一覧

腹足綱　Gastropoda
バイ　*Babyronia japonica* (Reeve)

二枚貝綱　Bivalvia
フネガイ科　*Arcidae* gen. et sp. indet
ハマグリ　*Meretrix lusoria* (Roeding)
ヤマトシジミ　*Corbicula japonica* Prime

f. 貝類(註1)

調査では計177個体の貝類が出土した(表1)。同定作業には現生標本と図鑑[吉良哲明1954]を利用しており、個体数に関して腹足綱は殻口数を、二枚貝綱は左右殻数の多数の方を原則として採用している。

第2～5層から出土した本調査の資料はいずれも室町時代に属するものと考えられる。そのうち出土量の多い第4層と第5層について見ると、前者が72個体、後者が98個体を占めており、少量のフネガイ科を除いて両者ともハマグリとヤマトシジミから構成されている。ただ、前者はハマグリが87.5%を占め、ヤマトシジミが12.5%にとどまるのに対し、後者は逆にヤマトシジミが96.9%と主体を占め、ハマグリは3.1%にとどまる。ハマグリは大半が破損しているが、中・小型の個体が主体を占めているとみられる。

当遺跡ではTJ00－2次調査で14世紀後半に属する井戸SE202から大量の貝類が出土している[池田2002]。当該資料はセタシジミとヤマトシジミの中間的な形態を示すシジミガイ科の資料が大半を占め、ハマグリがごく少量含まれており、構成貝種数が少なく、貝種は河口部から内湾にかけて採取可能なものに限られるなど、貝種構成は基本的に共通している。

調査地周辺は近世には豊臣期における城下町天満として、また大阪天満宮の門前町として発展したが、天正年間以前には鳴尾町周辺に海魚商が集住していたと考えられる。当遺跡における貝類の出土は、河口や海浜部における沿岸漁業の従事者や漁商の集住に関連する資料として注目される。

3)まとめ

小面積にもかかわらず、室町時代後期の礎石建物などを検出することができた。また主に地層に含まれた貝殻から、天正年間以前の鳴尾町周辺の海魚商の集住を想起させる遺物も採取できた。周辺の調査が進めば、さらに中世の天神橋遺跡の実態が解明できるであろう。

註）

1）f．は大阪歴史博物館学芸員の池田研氏による。

引用・参考文献

池田研2002、「TJ00－２次調査出土貝類について」：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1999・2000年度－』、pp.181－190

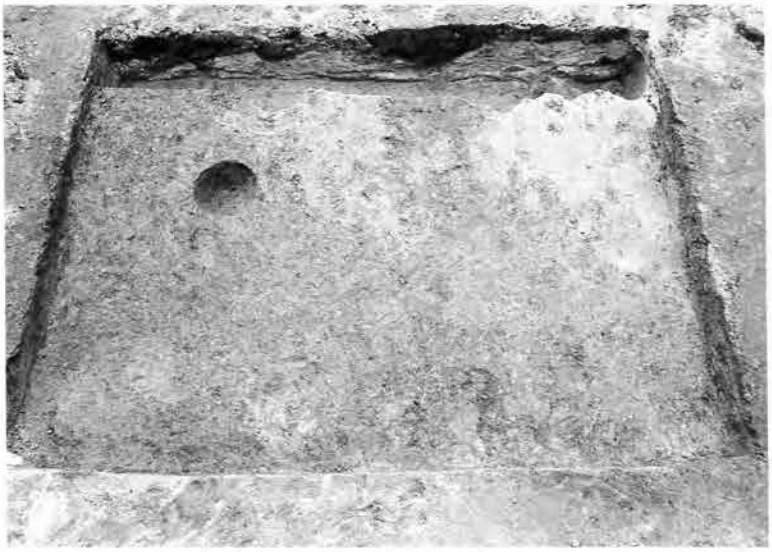
大阪市文化財協会2002、「TJ00－２次調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1999・2000年度－』、pp.181－190

吉良哲明1954、『原色日本貝類図鑑』 保育社

調査区西壁
（東から）

調査区北・東壁
（南西から）

第１層上面
（南から）



北区西天満三丁目における建設工事に伴う
天神橋遺跡発掘調査(TJ11－２)報告書

調 査 個 所　大阪市北区西天満３丁目24
調 査 面 積　40㎡
調 査 期 間　平成23年７月２日～平成23年７月６日
調 査 主 体　財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、西村公助

1)調査に至る経緯と経過

調査地は北区西天満三丁目24に位置する(図1)。今回の調査地の近隣では、平成16年度に行ったWT04－1調査で5世紀の須恵器や7世紀の土師器・須恵器、9世紀の緑釉陶器が出土している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]。またWT04－2調査では奈良～平安時代前期の土師器、平安時代～中世前期の土師器、16世紀代の瀬戸美濃焼が出土している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]。さらに、平成17年度に行ったWT05－1調査では17世紀中葉前後に形成、構築された遺構を検出している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006]。今回の調査地は上記WT05－1調査地の南約100m地点に存在する。

調査地の周辺には、西約200mに近世陶磁器が出土した佐賀藩蔵屋敷跡が、北西約1.0kmに弥生時代から中世にかけての集落遺跡である同心町遺跡が、東約1kmに11～12世紀頃の土器や、17～18世紀頃の遺構や遺物が多数見つかっている天満本願寺跡が所在している。

工事に先立つ試掘調査を5月31日に実施し、現地表下約1.8～2.3mで江戸時代の遺物を含む地層を、2.8～3.5mで豊臣期以前の地層を確認したことから、事業主体者と大阪市教育委員会との協議の結果、本調査を行うことになった。

調査は建設工事敷地内の東南部に東西方向に長い調査区(東西8m南北5m)を設け開始した。調査面積は40㎡を測る(図2)。

調査前の準備工事と掘削は7月2日から開始した。現地表(TP+3.3m)下約3.1mまでに存在する近世～現代の盛土層は既に取り除かれた状態で、これ以下の地層について人力で掘削を進め、遺構や遺物の検出を行い、記録および写真撮影作業を実施した。

図1　今回の調査地

図2　調査区の配置図

なお、本報告で使用した標高はTP値(東京湾平均海面値)で、図1の方位は座標北、それ以外の図は磁北である。また、出土遺物の記述は当研究所の渡邉晴香が行った。

2)調査の結果

i)層序(図3)

調査開始面はTP+0.2mである。現代および近代の盛土は機械で除去されていた。そこから下の地層は人力で掘削し、現地表下3.7m(TP−0.6m)までの地層を確認した。以下には各層の特徴について述べる。

第1層:明褐色粗粒〜細粒砂でラミナが発達する河川堆積層である。層厚は30cm以上を測る。層内からは瓦器椀の破片が出土した。上面で明治時代以降の井戸・土壙、中世の土壙を検出した。

第2層:褐色細粒砂でラミナが発達する河川堆積層である。層厚は30cm以上を測る。遺構の検出および遺物の出土はなかった。

ii)遺構と遺物(図4〜6)

第1層上面では明治時代以降の井戸SE102·103、土壙SK101·105、中世の土壙SK104を検出した。なお、検出した遺構の上部は既に掘削されており、本来の切込み面は不明で、今回は遺構の底だけを調査した。

SE102の平面形状は楕円形で、長径3.0m、短径2.2mである。南西部に径約70cmの円筒形の掘形があり、井戸側として瓦を用いていた。掘形の埋土は褐灰色細粒砂で、遺物は出土しなかった。井戸側内の埋土は褐色粘土で、褐色細粒砂の偽礫を含む。井戸側内からは肥前磁器碗8・10、肥前磁器皿21、肥前陶器二彩手鉢24、京焼系陶器灰釉片口鉢27、土師器焙烙30・31、井戸瓦32などが出土した。

出土遺物の多くは17世紀中頃〜後半の年代を示すが、32と27の2点は19世紀代のものである。遺構の年代は井戸瓦の存在からも19世紀代のものと考えられ、17世紀代の遺物に関しては井戸の廃棄土に含まれていた可能性が高い。

SE103の平面形状は円形で径1.5m、深さは0.5mを測る。埋土は黄褐色粘土で、遺物は出土しなかった。

SK101の平面形状は楕円形で、長径2.3m、短径2.1mである。断面形状は逆台形である。埋土は暗褐色粘土に褐色細粒砂の偽礫を含む。陶磁器や瓦が出土した。

この遺構からは、土師器皿5・6、中国産磁器染付皿7、肥前磁器碗9・11・14、肥前磁器小鉢13、肥前磁器染付皿15·17·18·20、肥前磁器瓶22、備前焼小壺25、土師器焙烙29、丸瓦33·35が出土した。

出土遺物は17世紀後半〜末を中心とし、赤く焼けた瓦など二次焼成を受けた痕跡のあるものが多数含まれている。

SK104は南側が調査区外に拡がるため、平面と断面の規模は不明である。検出した東西幅4.9m、南北幅1.9m、深さ0.7mである。埋土は上から褐色細礫質細粒砂、灰色粘土、灰褐色細礫質細粒砂である。

この遺構からの出土遺物は少なく、緑釉陶器皿1、土師器皿3のほか、須恵器片などが出土した。

出土遺物の中では土師器皿が最も新しく、16世紀前半頃のものか。

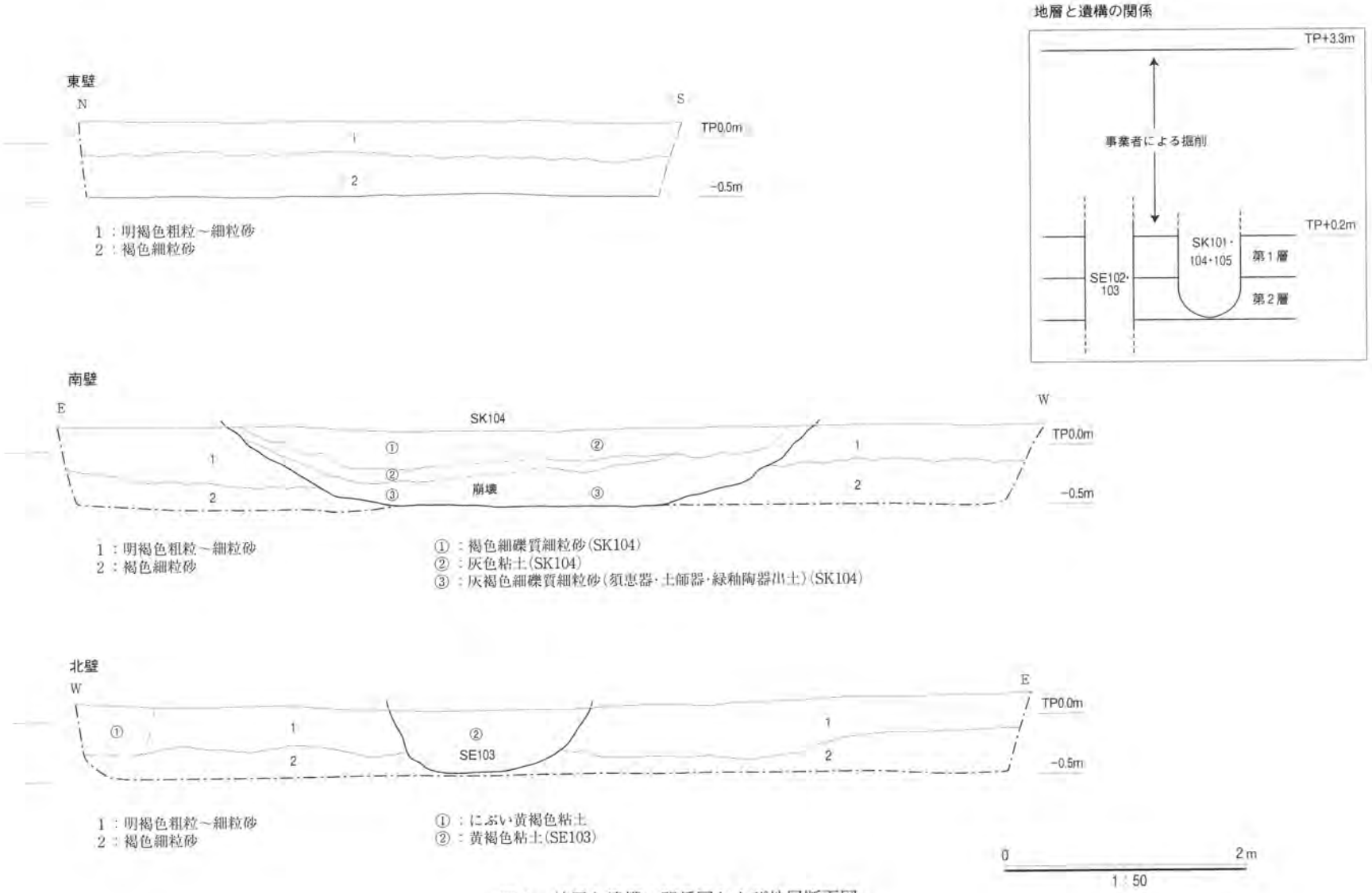


図3　地層と遺構の関係図および地層断面図

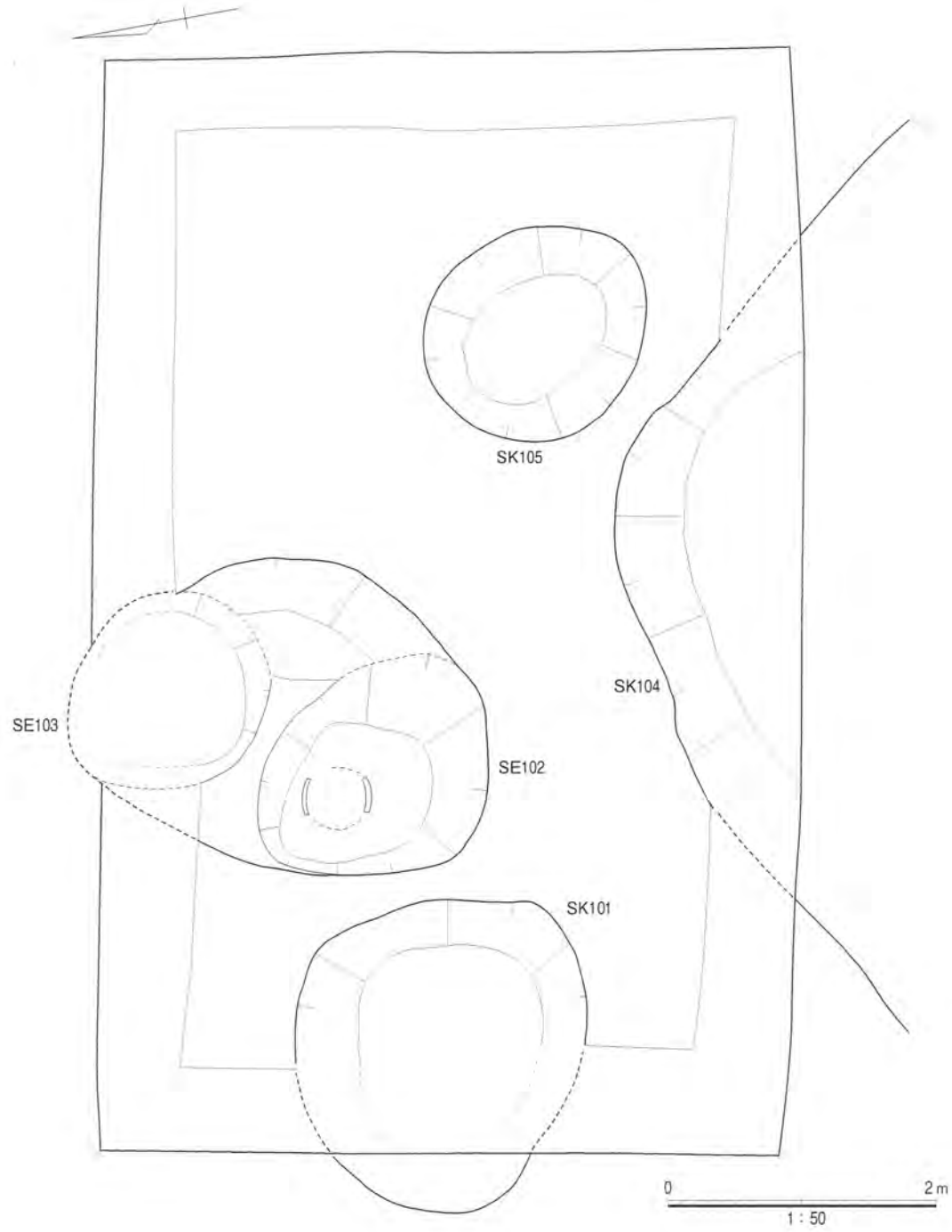


図4　第1層上面遺構平面図

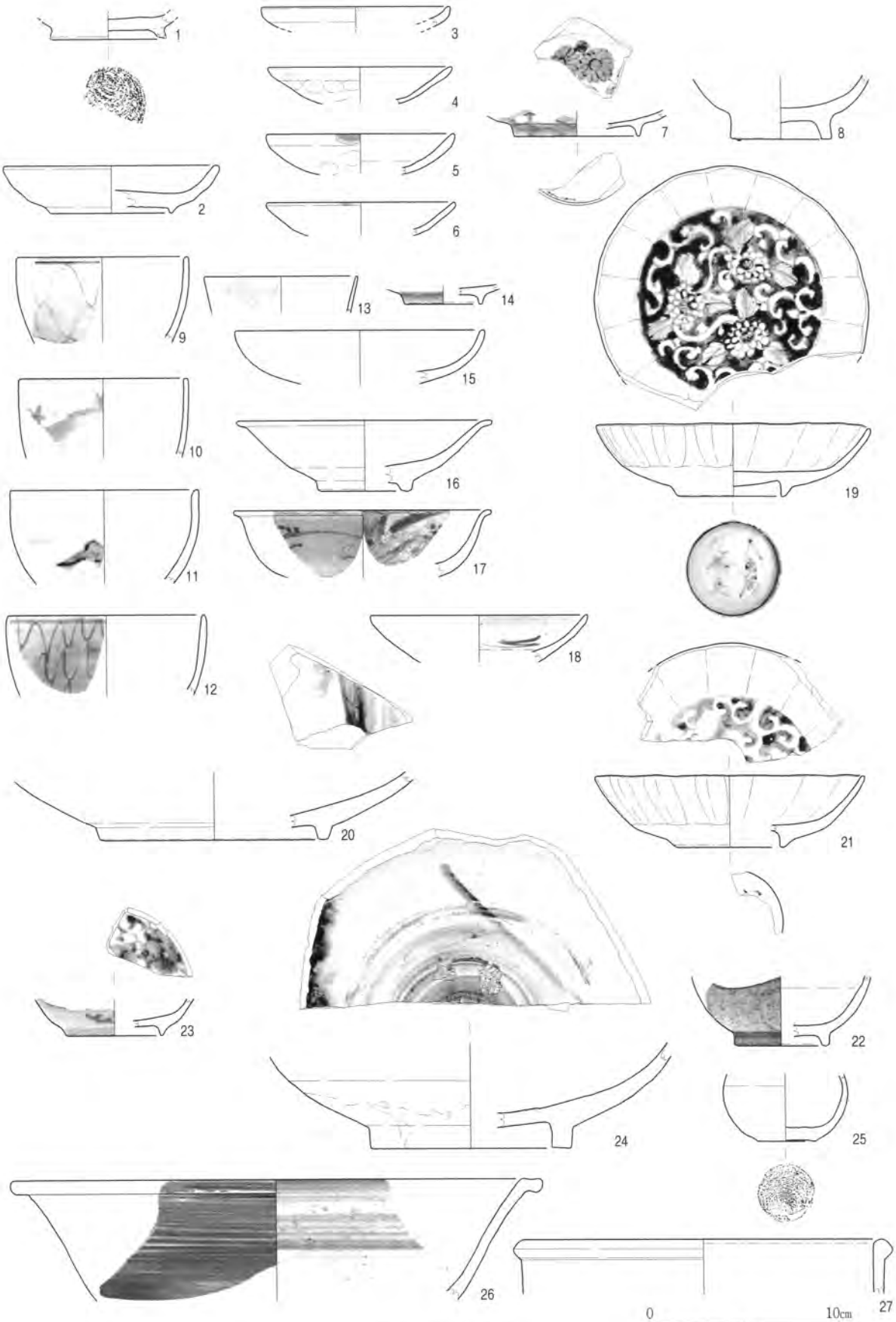


図5　出土遺物(1)

SK101(5～7・9・11・13～15・17・18・20・22・25)、SE102(8・10・21・24・27)、SK104(1・3)、SK105(19・23)、側溝(2・4・12・16・26)

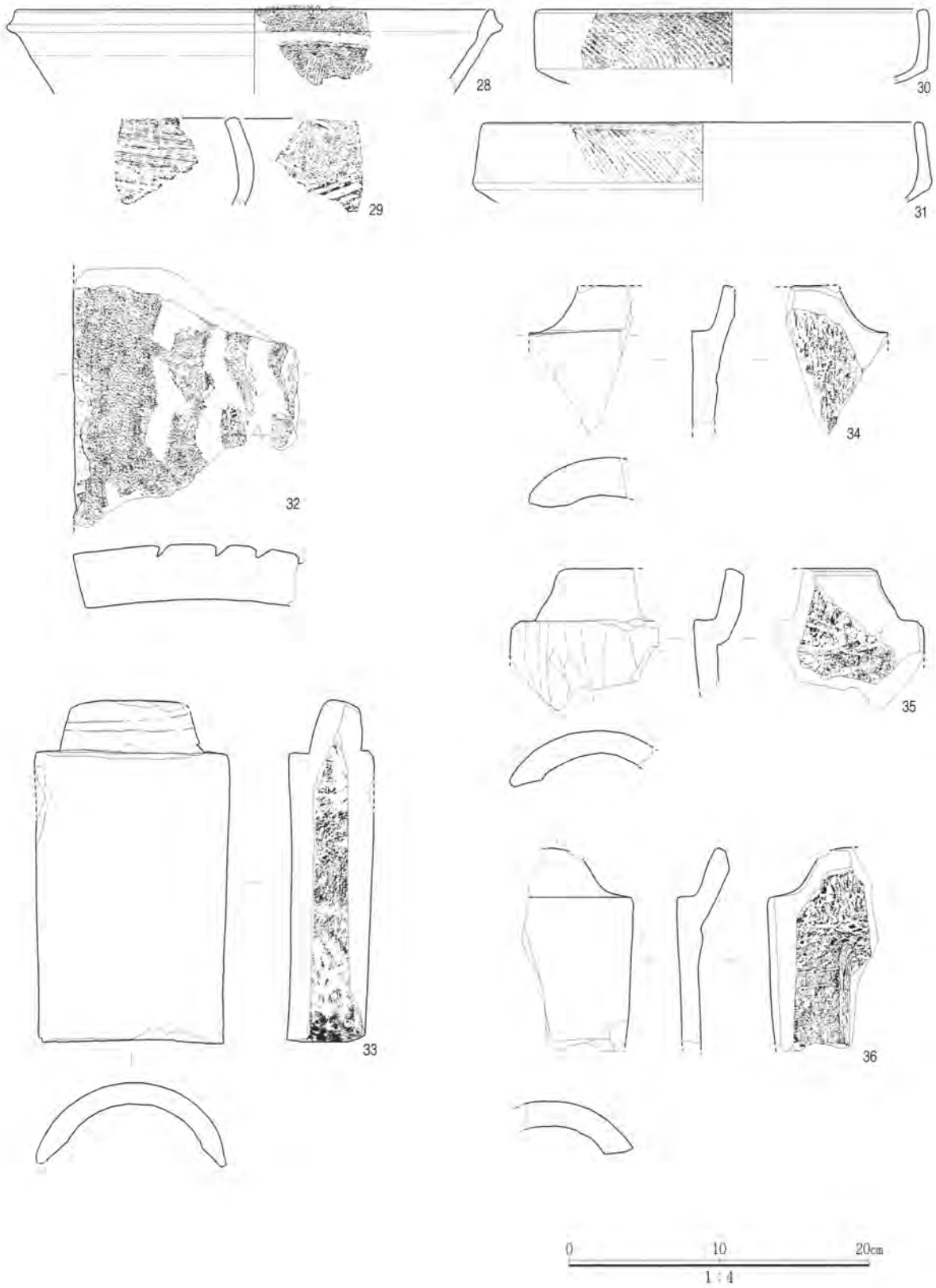


図6　出土遺物(2)

SK101(29・33・35)、SE102(30~32)、SK105(34)、側溝(28・36)

SK105の平面形状は楕円形で、長径1.7m、短径1.5mである。断面の形状は逆台形で埋土は褐色粘土(白色細粒砂質粘土の偽礫を含む)、褐色細粒砂である。

この遺構からは、肥前磁器染付皿19、瀬戸美濃焼磁器染付皿23、丸瓦34などが出土した。

23やガラス製品などが出土していることから、19世紀以降の遺構と考えられる。一部、19などの17世紀代の遺物も含んでいる。

これらの他、第1・2層中からは土師器皿4、肥前磁器碗12、肥前磁器白磁皿16、肥前陶器刷毛目鉢26、瀬戸美濃焼陶器飴釉皿2、丹波焼擂鉢28、丸瓦36などが出土した。

3)まとめ

今回の調査地では明治時代以降と中世の遺構を検出した。また、中世以前に堆積した粗粒～細粒砂からなる河川堆積層を確認した。

参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会

2005、「西天満3丁目所在遺跡発掘調査(WT04－2)報告書」:『平成16年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.3－6

2005、「西天満3丁目所在遺跡発掘調査(WT04－1)報告書」:『平成16年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.7－10

2006、「西天満3丁目所在遺跡発掘調査(WT05－1)報告書」:『平成17年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.3－8

第１層上面遺構検出状況
（東から）

東壁（西から）

南壁（北西から）

北区天神橋一丁目４－12－２ほか２筆における建設工事に伴う
天神橋遺跡発掘調査(TJ11－３)報告書

調 査 個 所　大阪市北区天神橋一丁目４－12－２・４－12－５・４－84
調 査 面 積　272㎡
調 査 期 間　平成23年12月５日～平成24年１月30日
調 査 主 体　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、京嶋 覚、平田洋司

1）調査の経過

調査地は、古墳～江戸時代の集落遺跡である天神橋遺跡の東南部に位置している。天神橋北詰めのこの付近は中世には渡辺津が存在し、これを拠点とする水上交通・交易権を掌握した武士団である渡辺党の拠点と目される地域にあり、その後、豊臣期には1598(慶長３)年の天満堀川の開削とともに城下町としての開発が進められた。徳川期に入って1652(承応元)年に北組から天満組が分離し、翌1653年に天満青物市場が置かれて、その一角として賑わったと思われる。

調査地の西北100mのTJ00－２次調査では、古墳時代および古代の遺物を出土した他、中世の遺構・遺物が多数検出されており、この地域が中世に発展していたことが明らかになった[大阪市文化財協会2002]。調査地の北100mの地点のTJ08－3次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]や北に隣接するTJ07－１次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009]でも中世～豊臣期の遺構・遺物が出土している。

事前の試掘調査では現地表から1.7m下で、17世紀代の遺物を含む地層が確認されたため、それ以下の地層の調査を行うことになった。調査区は南北8.5mの幅で東西に32mの長さであるが、残土を仮置きするため、調査区を東西に分割して東側(東区)から調査を開始した。

12月５日に重機による表土掘削を開始し、現地表から約1.5m下の後述する第４層まで掘削を進め、それ以下を人力で掘り下げた。12月27日に遺構掘下げおよび記録作業を完了し、年内には埋戻しが完了した。翌１月６日から西側(西区)調査区の設定および重機による表土掘削を開始した。第４層があまり遺存していなかったため、第５層上面付近まで掘削し、それ以下を人力で掘り下げた。１月30日

図１　調査地位置図

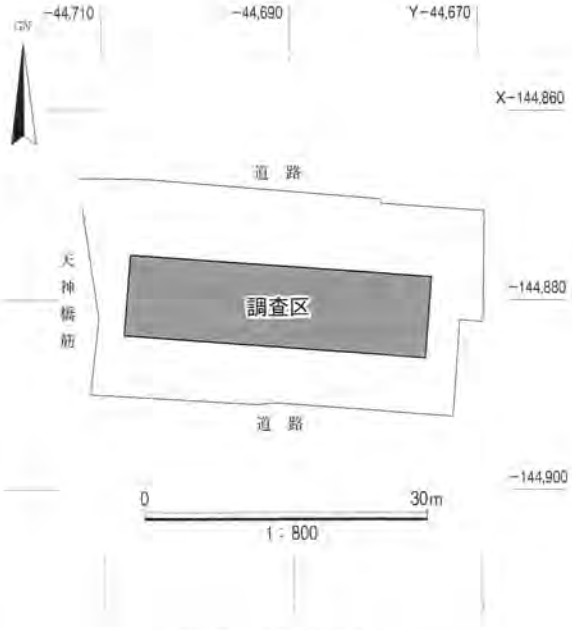


図２　調査区位置図

に記録作業を含めた調査作業を完了し、引き続き埋戻しを行った。

以下にその結果を報告する。なお、基準点測量はmagellan社製ProMark3を使用したスタティック測量により、図中の方位は座標北を基準にする。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、図中ではTPと省略した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

調査地の現地表面の標高はTP+4.3mで、敷地内ではほぼ平坦である。

第1層：レンガやコンクリート殻が含まれる近現代の整地層ないし攪乱壙の埋土である。厚さは50～150cmである。

第2層：にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト～細粒砂層ないし黄褐色(2.5Y7/3)細粒～中粒砂の整地層で、西部では粗粒砂を主体とする部分がある。層厚は最大で50cmである。

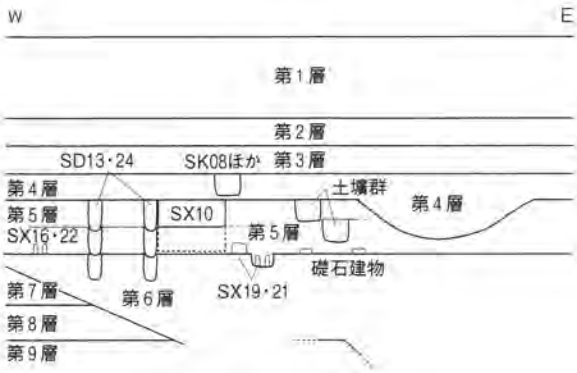


図3　地層と遺構の関係図

第3層：炭粒や焼土を含む褐色(10YR4/4)～オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト～細粒砂層である。17世紀後半以降の近世整地層である。層厚は西部で最大が50cmである。

第4層：炭粒や焼土を含む黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂質シルト層の整地層である。層厚は最大70cmで、調査区東部のみで確認される。17世紀中葉まで下る遺物が含まれるが、最下部ではやや古相を呈する遺物が目立ち下位層上面の時期を示唆する。上面で土壙・井戸などが検出された。

第5層：灰オリーブ色(5Y5/3)シルト偽礫質細粒砂または褐色(10YR4/4)細粒～中粒砂層などの汚れの少ない砂やシルトを主体とする整地層である。ほぼ全域に厚く堆積し、層中にいくつか遺構面があるが連続しない。層厚は最大で80cmであり、西端は下位層上面が高くなっており、薄くなっている。

豊臣期の遺物が出土していることから、本層は調査地西300mに位置する天満堀川の開削に伴う大量の排土に由来する整地土と推定される。

第6層：黄褐色(2.5Y 5/3)細粒砂質シルト層～オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質細粒砂～細礫層あるいは暗褐色(10YR3/3)シルト質細粒砂層などからなる。上部は整地層で、下半部はシルト質細粒～粗粒砂とシルト層が互層となる水成層であるが、一括して第6層とした。調査区西端の深掘りで確認したところ、下位層が西から東に削られて低くなっているため、東に向かって厚くなり、最大で150cm以上となる。

上面では豊臣前期の遺物が出土したが、本層下部からは瓦器椀・東播系須恵器鉢などが出土し、中世の堆積層と見られる。本層中に生活面は認められない。

第7層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト層で焼土を含む整地層である。西端部のみで確認された地層で、第6層堆積前の整地にかかるものである。層厚は最大で70cmである。

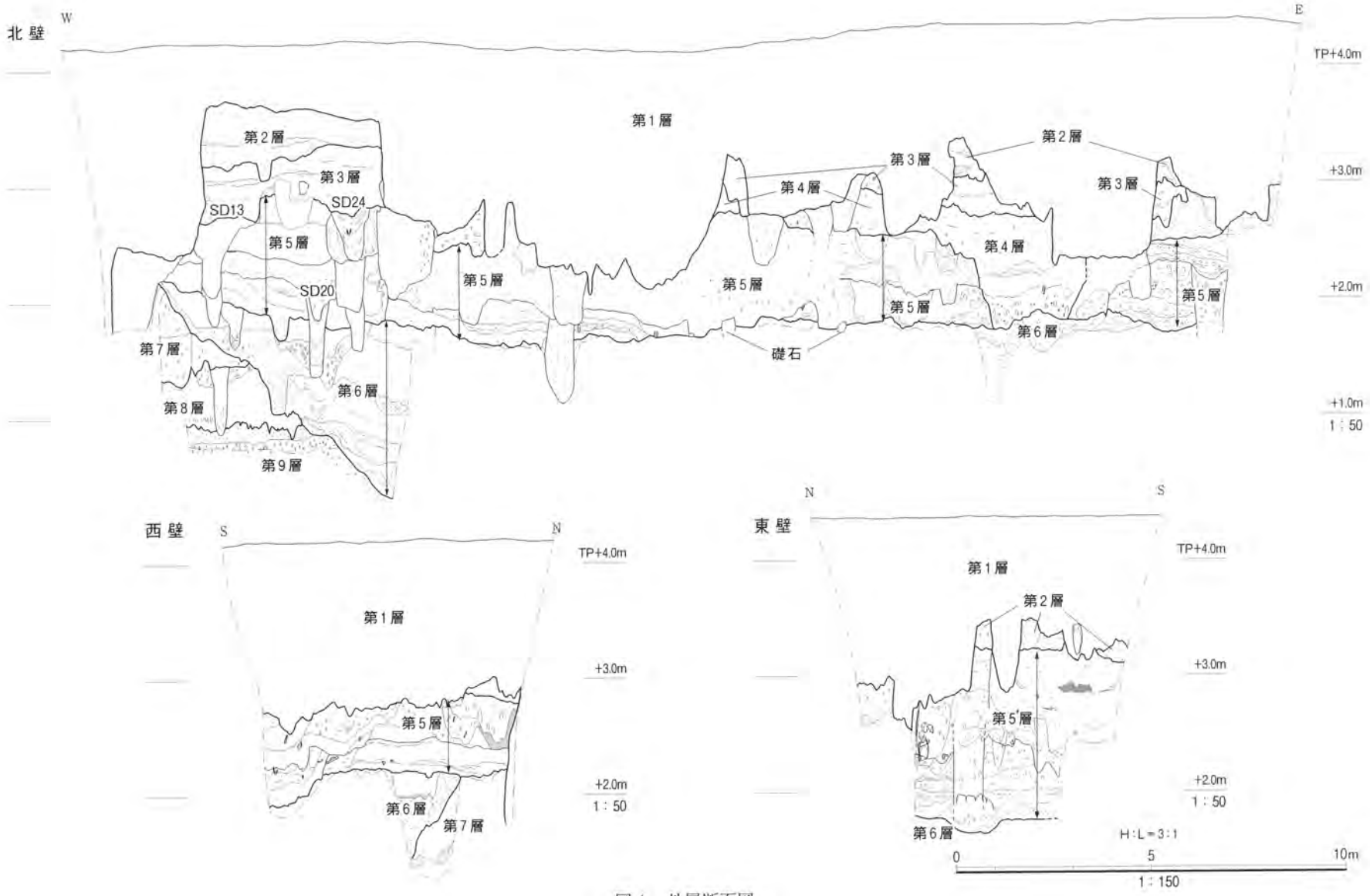

北壁
W
E
TP+4.0m
+3.0m
+2.0m
+1.0m
1：50
第1層
第2層
第3層
第4層
第5層
第6層
第7層
第8層
第9層
SD13
SD24
SD20
礎石
西壁
S
N
第5'層
東壁
H：L＝3：1
0
5
10m
1：150

図4　地層断面図

第８層：暗褐色(10YR3/3)シルト質細粒砂層の整地層で、上部に焼土や貝殻を含む。上面から貝殻を含む小土壙が確認された。本層も西端部のみで確認された。

第９層：上部10cmほどはにぶい黄褐色(10YR5/4)細粒～中粒砂層、それ以下は灰黄色(10YR4/2)粗粒砂～中礫層で上方粗粒化する自然堆積である。

ⅱ)遺構と遺物(図５・６)

遺構・遺物には中世から徳川期まであるが、主として調査対象とした徳川期初期頃までの資料について以下に報告する。

ａ．中世

東半部で深掘りを行い、TP+1.0mの第９層相当と思われる自然堆積層上面で第６層を埋土とする東への落込みを確認した。第４層が厚く堆積し、第５層以下の上面が窪む範囲と重なる。落込みからは瓦器・瓦質土器や小型管状土錘が出土した。この南北方向に延びると推定される落込みは、北側のTJ07－１次調査で確認されている東西方向の「谷」遺構に類似し、直角に屈曲して同じ遺構になる可能性がある。

調査区内で中世の生活面は確認できず、生活面を形成すると思われる第７層上面は西北端部のみに存在している。西北方向100mの位置には中世の遺構が密集して検出されたTJ00－２次調査地があり、中世の遺構面は本調査の第７層上面より0.5m前後高い。TJ00－２次調査地が中世の渡辺集落の中心であったと考えられ、本調査地はその外縁部に位置しているといえる。

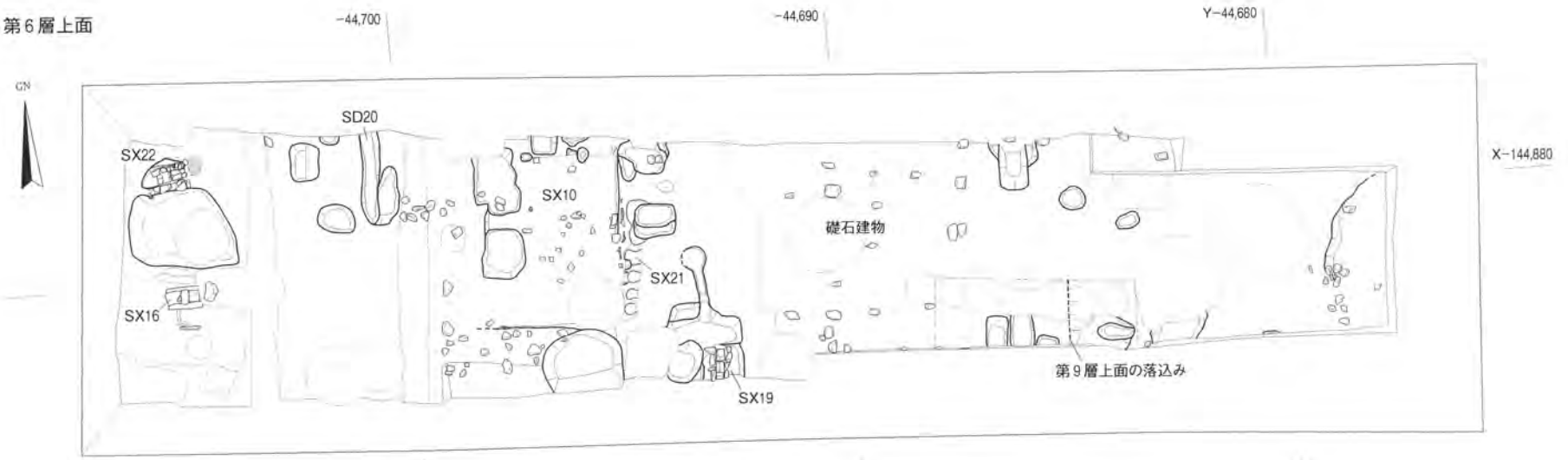
ｂ．豊臣前期

中央部の第６層上面で礎石建物を検出した。礎石は20cm程度と小振りで、柱筋は正方位と推定されるが、建物の平面形は不明である。上面では豊臣後期に下る遺物は出土しておらず、豊臣前期と考える。

西半部の第５層下部掘削中に４基の竈SX16・19・21・22を検出した。中央部ではSX19・21が近接して検出された。構築面は第６層上面である。SX19は南壁際で検出され、底に平瓦を敷き、その両側に石を並べて側壁としている。焚口は北側であり、燃焼部の奥は未検出である。竈は土壙状に掘り窪めた中に構築されていた。焚口から北に細い溝が延び円形の小土壙に繋がっており、炭層で埋まっていた。いずれも出土遺物はない。SX21は６連以上になる竈である。焚口が東側に開口し、各竈平面の直径は南から24cm、24cm、27cm、36cmでこの北側に２基以上の竈が連なっていたと思われるが、破壊されて痕跡のみ残る。出土遺物は土師器小皿30、中国産白磁皿、中国産青花皿、瓦質土器がある。南側４基の竈の下位は掘り窪めた中に石を敷き詰めた基礎地業がなされていた。このSX19・21は構築面と位置関係から同時に存在していた可能性が強い。

SX16・22は西端部で検出した。構築面はいずれも第６層上面である。SX16は底に平瓦を２枚並べて敷き、両側に切石を置いて側壁にしている。西側が焚口で東奥壁に石が置かれていた。竈内には上部を構築していた黄色粘土が覆い被さっていた。南側にも焼けた面があり、その南側に側壁石が検出された。２連の竈の可能性もあるが、北側の竈に比べて遺存状況が悪いことから、北側に造り替えたと考える。確実に伴う遺物はなかった。SX22は底に平瓦２枚を並べて敷き、両側には平瓦を積んで側壁にしていた。西側が焚口で奥壁にも平瓦を立てていた。中世と思われる土師器羽釜片と鉄釘が出

第6層上面



第5層上面

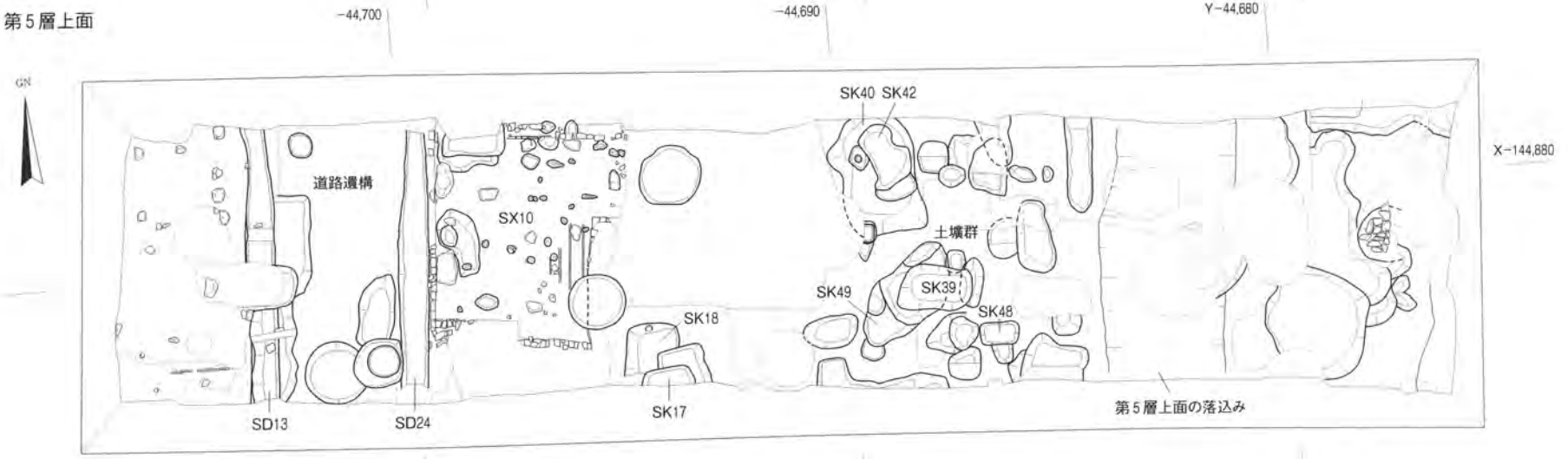


図5　遺構平面図(1)

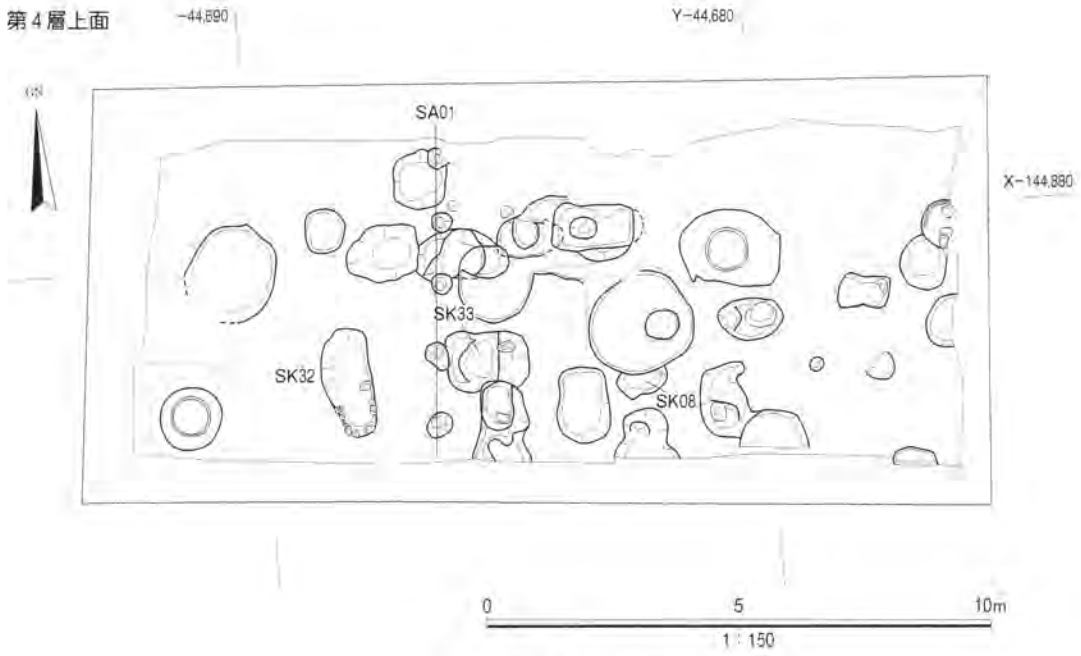


図6　遺構平面図(2)

土した。

これらの竈が併存していたかは明らかでないが、同じ方向に焚口があり、規模や構造が共通していることから、共存した可能性が高い。SX22の北側に接して第5層中でも竈が南壁で確認された。

以上の竈遺構はいずれも豊臣期のものであるが、SX16・19・22はいずれも焚口から続く燃焼部が長方形をなす構造で、通常の竈に比べて特徴的である。用途を示す特有の遺物の出土がないため断定はできないが、一般住居の竈ではない可能性もある。類似した竈は大川を隔てた南岸のOS89－148次の調査で床面を平瓦、側壁に石を用いた豊臣前期の竈SX801が、OS88－56次調査では豊臣後期の瓦を用いた2連竈が見つかっている[大阪市文化財協会2003]。

c．豊臣後期～徳川期

SX10は西半部の第5層上面で検出した壁面を瓦積みで構築した遺構である。平面は南北4.0m、東西3.5mの長方形で、南壁東半部と東壁北半部は約0.5m突出している。深さ0.4～0.5mで、壁面は軒平瓦を含む平瓦を、間に粘土を挟んで積み上げて構築しており、南壁の下には石を並べた基礎地業がなされていた。西壁際に南北約80cm、高さ30cmの踏み石が置かれており、南踏み石の北側に円形の土壙が検出された。底部は丸くなっており、埋め甕が据えられていた可能性がある。床面の東部に7個の礎石が据えられていたが、建物として組み合わなかった。また、東端の床面に南北方向の転がし根太の痕跡が一部検出された。壁面の瓦積みを防火・防水のためとみれば、床を掘り込んだ土蔵跡と推定される。

内部は粗粒砂を主体とする土で埋められていたが、出土遺物は土師器細片、青花碗、肥前陶器碗などの細片が少量出土したのみで時期の判定は難しい。構築した瓦積の壁面掘削時に土師器小皿・大皿28、瀬戸美濃焼灰釉折縁ソギ皿26・天目碗27、備前焼擂鉢29、鬼瓦、軒丸瓦など豊臣期の遺物が出土している。瓦積に使用された軒平瓦24・25を図示しておく。この遺構の床面を掘り下げると、壁面に

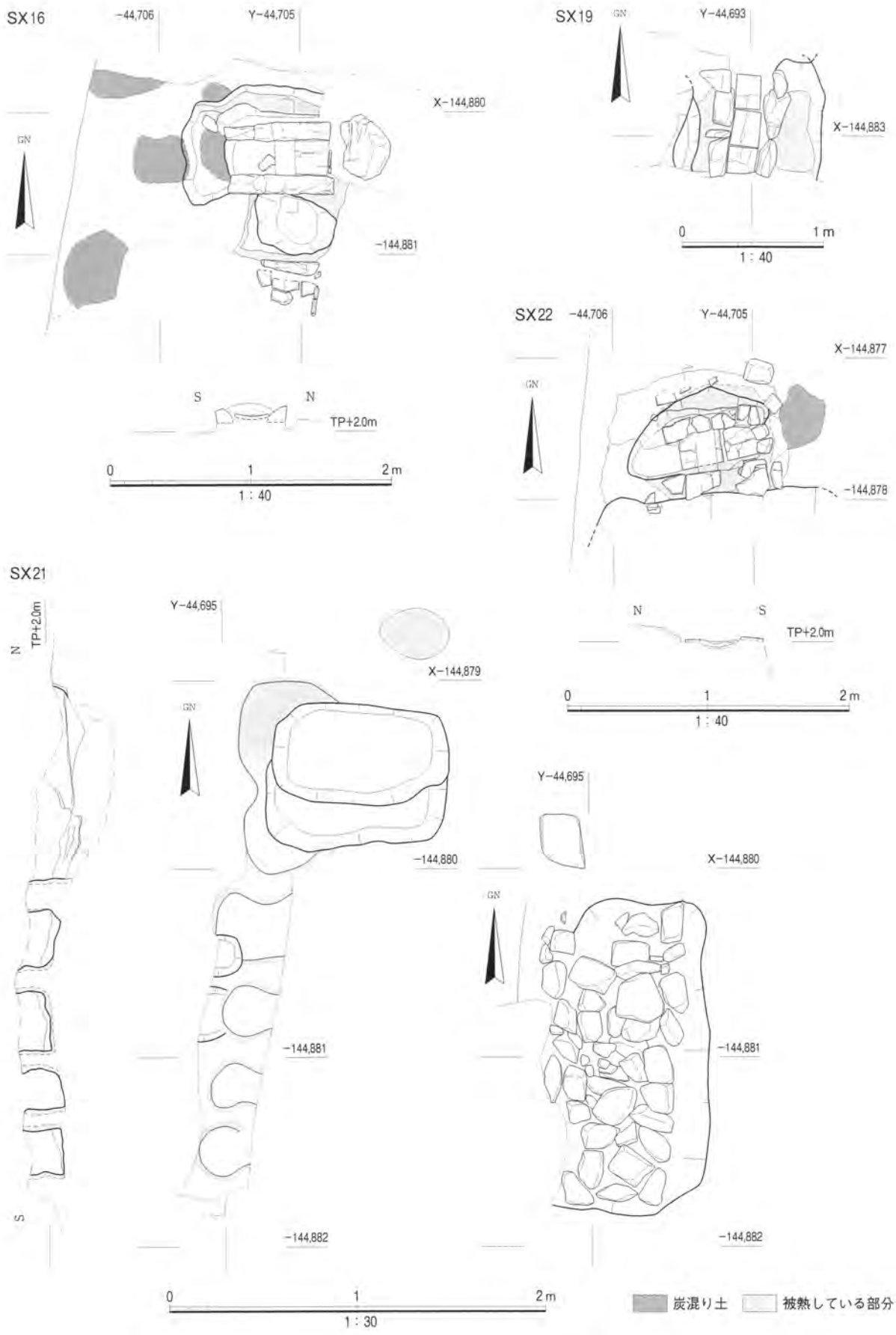

SX16
-44,706
Y-44,705
X-144,880
GN
-144,881
S
N
TP+2.0m
0
1
2m
1 : 40
SX19
GN
Y-44,693
X-144,883
0
1 m
1 : 40
SX22
-44,706
Y-44,705
X-144,877
GN
-144,878
N
S
TP+2.0m
0
1
2m
1 : 40
SX21
N
TP+2.0m
Y-44,695
X-144,879
GN
-144,880
-144,881
S
-144,882
Y-44,695
X-144,880
GN
-144,881
-144,882
0
1
2m
1 : 30
炭混り土
被熱している部分

図7　竈実測図

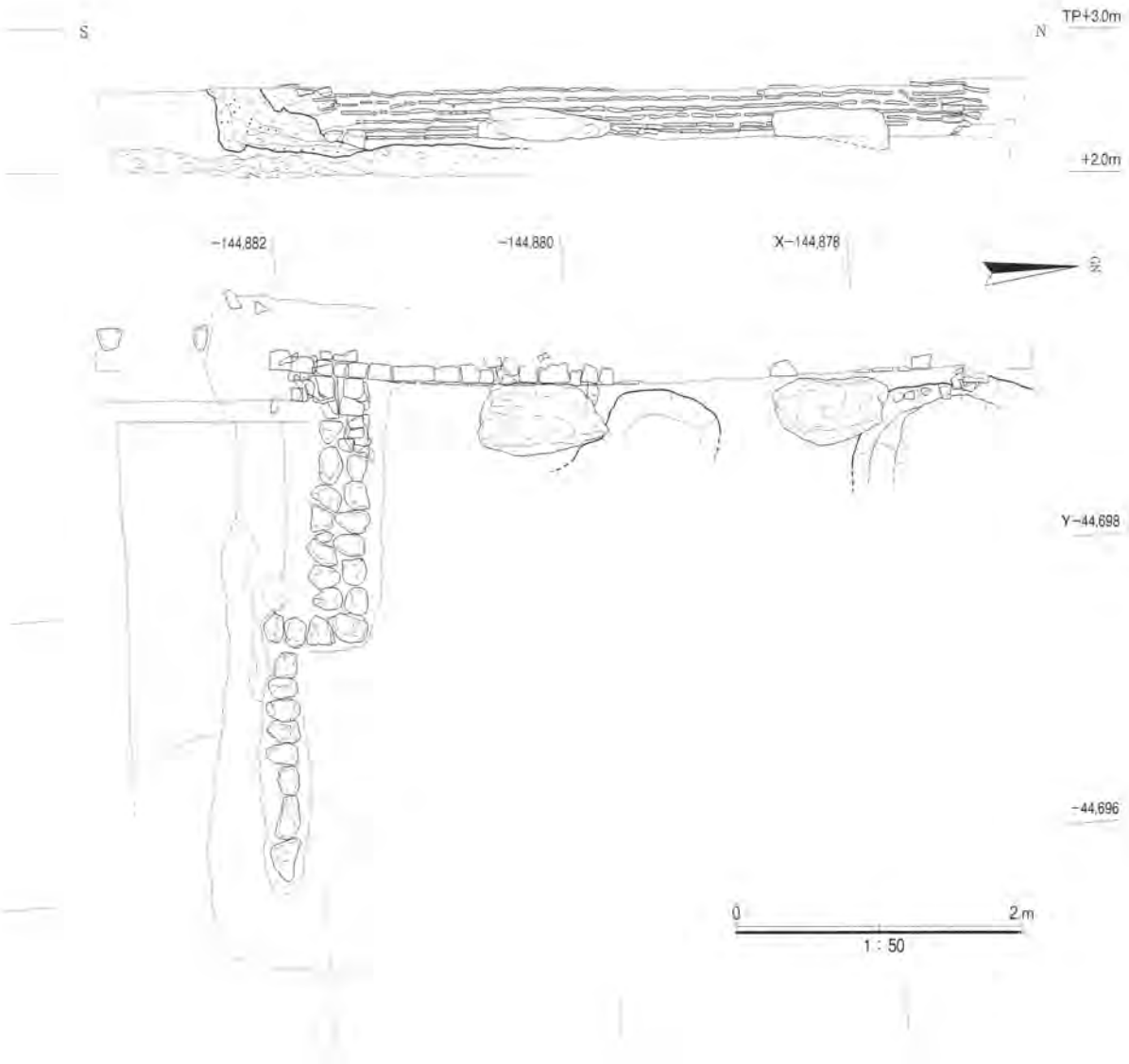


図８　SX10 実測図

粘土で平瓦を貼り付けて構築された方形の掘込みが検出された。上位の遺構とほぼ同じ位置にあり、当初の土蔵跡と思われる。埋土からの遺物は中国産青花碗、瀬戸美濃焼小碗、胎土目のある肥前陶器皿、備前擂鉢片など豊臣期以前に限定される。東側の竈SX21を若干壊しており、これより新しい。

この土蔵と思われる遺構の時期は壁面からの遺物から、当初造営されたのが豊臣前期で、その後豊臣後期に改築されたと考えられるが、東に位置する第５層上面のSK17や後述する東半部の土壙群からの出土遺物に17世紀中葉まで下る資料が含まれることから、下限はそこまで考えておく必要があろう。

道路状遺構はSX10の西側で確認された。南北溝SD13・24を側溝とし、路面幅は約３ｍである。調査区の断面観察によれば、路面は２～３時期に分けられ、当初の路面からは最終的に0.8mほど高くなっており、それ以降廃されたようだ。両側溝は２回以上掘り直されており、最下部の両側溝は側面に杭で板が当てられていた痕跡が確認できた。SD13からは土師器小皿・焙烙、中国産白磁皿、中国産青花皿、瀬戸美濃焼天目碗･灰釉丸皿、肥前陶器碗･皿、備前焼擂鉢のいずれも細片が出土したほか、溝の最下位で底部がきれいに剥離した焼塩壺４が出土した。豊臣前期以前の資料である。また、埋土

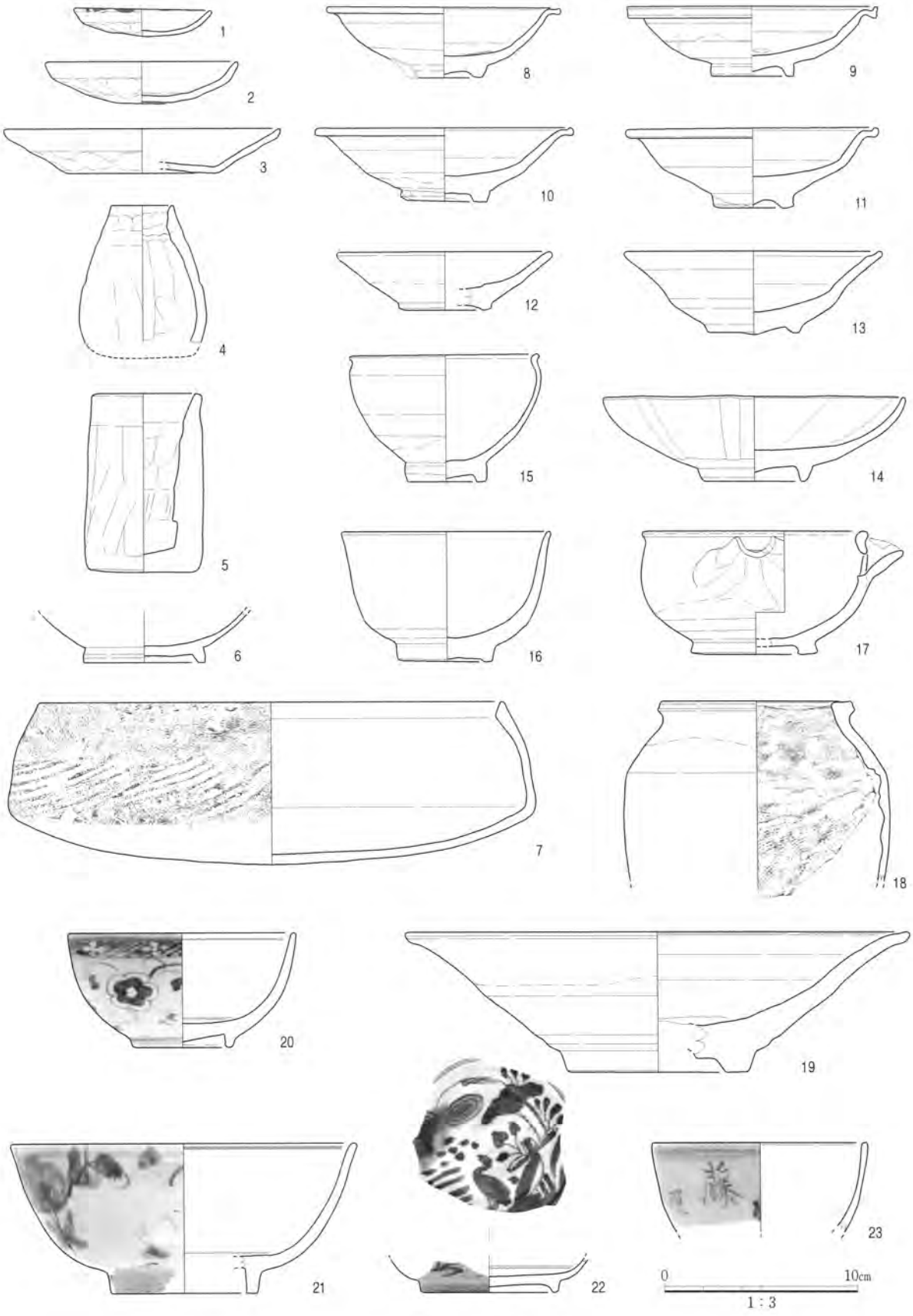


図９　遺構出土遺物実測図（１）

SD13（４）、SK08(10)、SK17(11・13・14・16～18)、SK18（１・３・９）、SK32（５・15）、SK33（６）、SK39(19)、SK42（２・８・７）、SK48(20)、SK49(12・21～23)

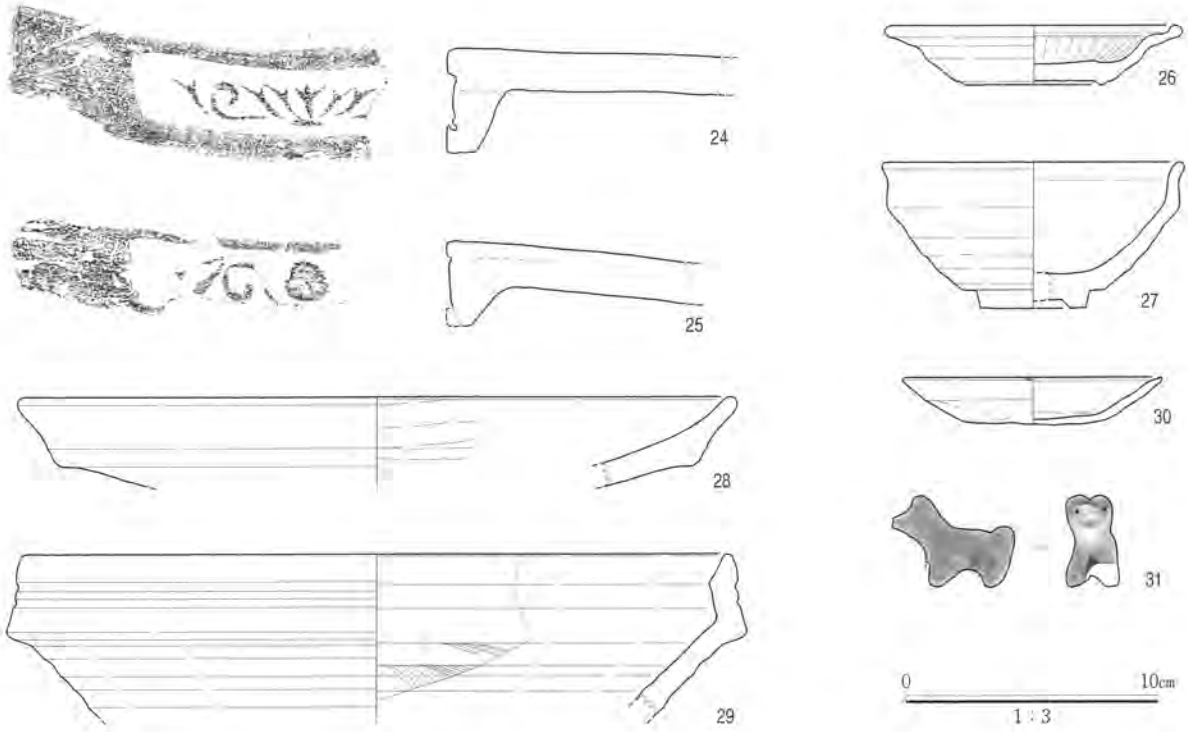


図10　遺構出土遺物実測図(2)
SX10(24~29)、SX21(30)、SD20(31)

の最上部からスッポンの甲羅がほぼ完形で出土した。付近では種類不明の亀の甲羅や鹿角片も出土した。SD24からは土師器小皿、瀬戸美濃焼天目碗、備前焼擂鉢などが出土した。最下部の路面で検出されたSD20からは犬形土製品31が出土した。

路面が上昇していく過程は、この地域の整地による地上げに伴うものであると考えられることから、前述のSX10の造替も、敷地の地上げや路面上昇に伴うものと推定される。

西半部の第5層上面で検出したSK17は、東西1.2m、深さ0.6mで、土師器焙烙・土釜、肥前陶器溝縁皿11・13・輪花皿14・丸碗16・片口鉢17、丹波焼擂鉢・壺18、備前焼大甕片などが出土した。11・13は砂目積である。SK18はSK17に壊されている土壙で、土師器皿1・3・土釜、李朝白磁皿、瀬戸美濃焼灰釉折縁皿、肥前陶器溝縁皿9、備前焼擂鉢などが出土した。

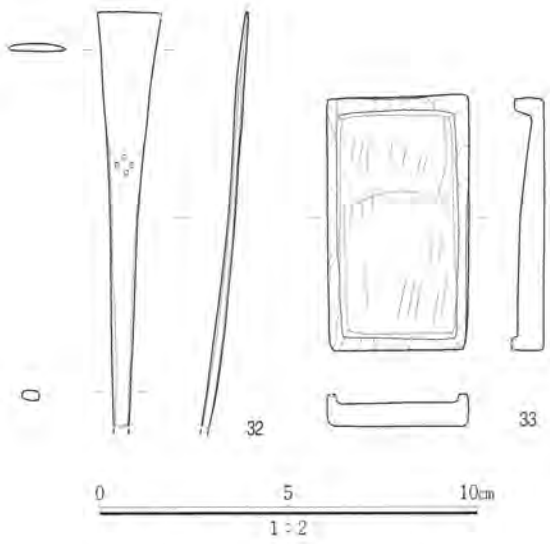


図11　遺構出土遺物実測図(3)
SK40(33)、SK42(32)

東半部で炭層を多く介在する埋土の土壙が集中して検出された。形状は溝状のものや方形や楕円形のものがある。第5層上面ないし第5層中で検出されたが、第5層中の各検出面はあまり連続しない。

出土遺物としてSK39・40・42・48・49の遺物を図示しておく。土師器皿2、A類の土師器焙烙7、中国産青花碗21・皿22、肥前磁器染付碗20・23、肥前陶器大皿19・溝縁皿8・丸皿12があり、17世紀中葉までのものである。肥前陶器のうち8・10・19は砂目積である。SK49出土の23は外面に簡素な草葉文の間に右から左に「藤原」の文字が書かれ、さらに左に漢字の略字と思われる「亜」が見られる。人名または地名であろう。32はSK42から出土した骨製笄である。別に欠損したもう1点とともに出土した。いずれも片面に「∴」の記号が彫られている。33はSK40から出土したミニチュアの石製硯である。

東半部の第4層上面でも塀・土壙・井戸を検出した。18世紀以降の遺構も含まれるが、土壙SK08は肥前陶器溝縁皿10が、SK32は内野山系の肥前陶器碗15、焼塩壺5が出土した。6はSK33から出土した古代の緑釉陶器である。これらの遺構は17世紀中～後葉であろう。また、直径0.3m、深さ0.4mの円形の柱穴が1.2mの等間隔で南北に5基並んで検出された。時期は不明だが、この南北塀の東側に土壙が集中しており、土壙群に近い時期と思われる。

d．各層出土遺物

第6層からは13世紀代の瓦器椀34、東播系須恵器鉢35が出土しており、第6層上面では土師器皿38・39、瀬戸美濃焼丸皿40・天目碗41、李朝白磁皿42・鉢43、中国産青花皿36、中国産白磁輪花皿

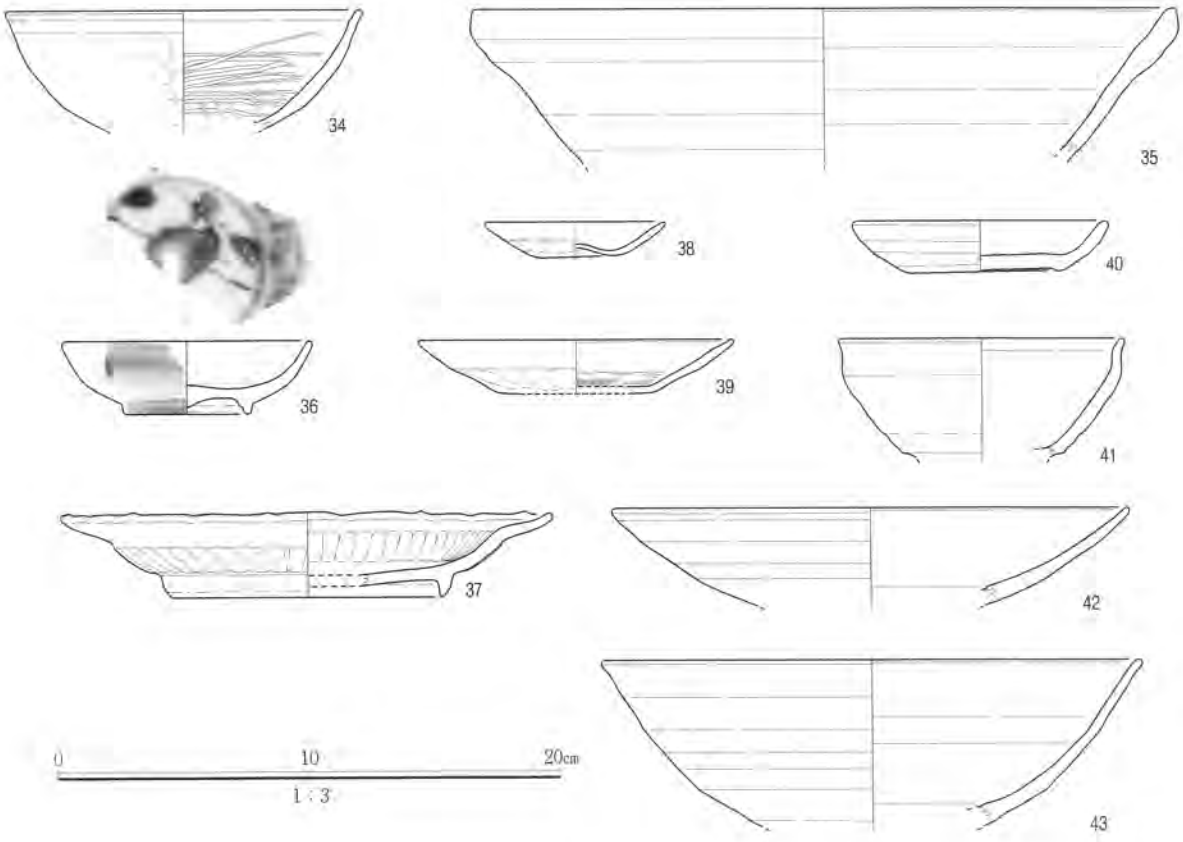


図12　第6層出土遺物実測図
第6層(34・35)、第6層上面(36～43)

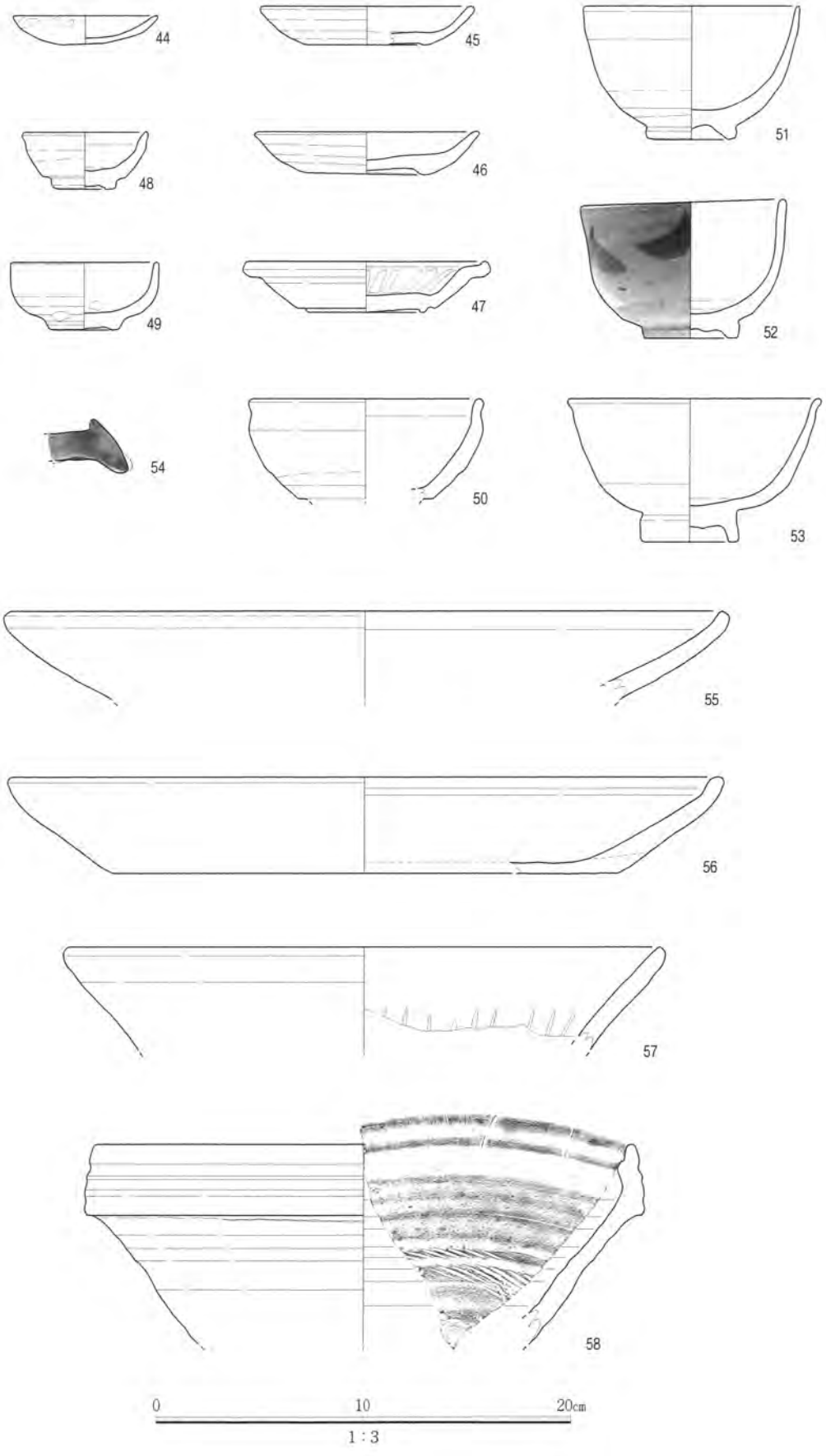


図13　第５層出土遺物実測図

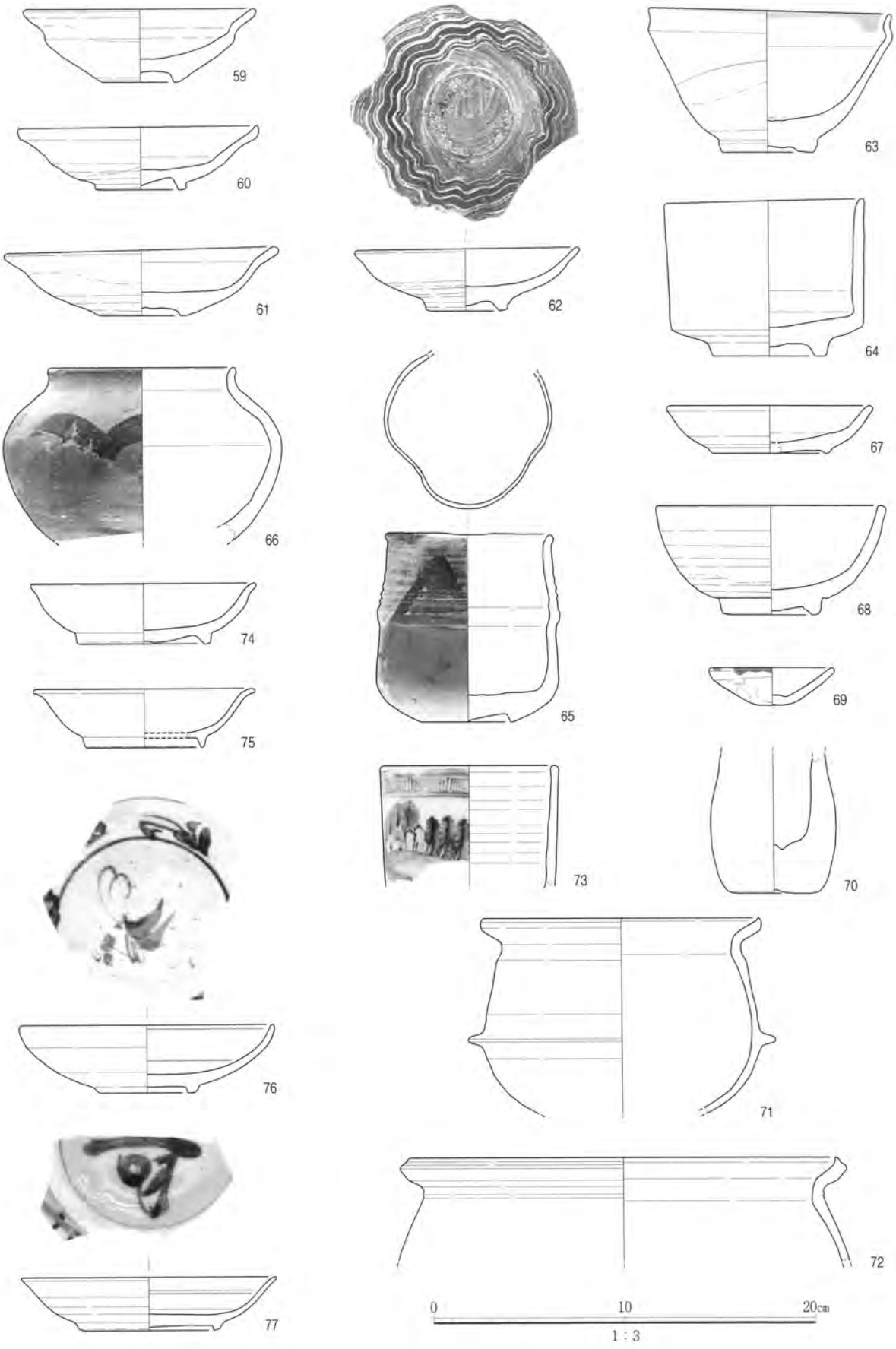


図14　第4層出土遺物実測図（1）

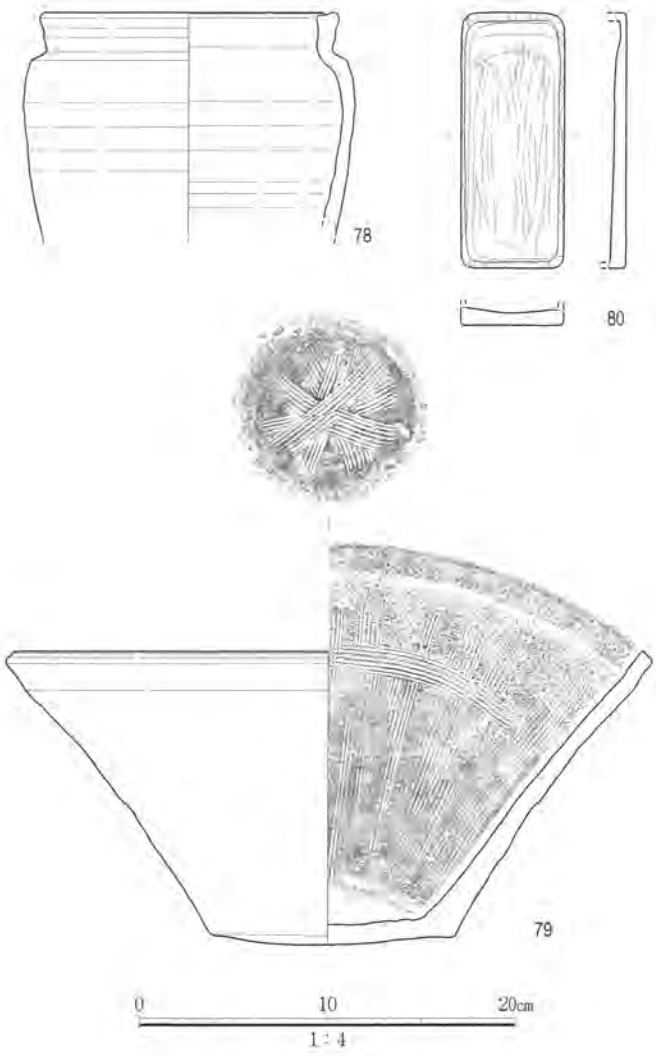


図15　第４層出土遺物実測図（２）

37などが出土した。これらの遺物からみて第６層上面の遺構は豊臣前期の可能性が高い。

第５層からは土師器皿44、瀬戸美濃焼灰釉丸皿45・46・折縁ソギ皿47・小碗48・49・天目碗50、肥前陶器碗51～53、丹波焼大平鉢55・56・擂鉢57、備前焼擂鉢58、犬形土製品54などが出土した。ソギ皿47は長石釉、小碗の48は鉄釉で49は灰釉である。丹波焼擂鉢57の摺り目は１条で、口縁端部は丸く収める。また、調査区中央部を中心に銅銭が多数出土している。これらの資料から豊臣後期の整地層と考えられる。

第４層の出土遺物には中国産白磁皿74・75・青花皿77、土師器小皿69・焼塩壺70・大和型土釜71・72、肥前磁器染付筒形碗73・皿76、肥前陶器折縁皿59・61・溝縁皿60・刷毛目丸皿62・天目碗63・筒形碗64・壺66・向付65、瀬戸美濃焼灰釉丸皿67・丸碗68、備前焼壺78、丹波焼擂鉢79・石製硯80などがある。64の筒形碗は藁灰釉で、壺66・向付65はいずれも外面に鉄絵がある。白磁皿74は漳州窯産、青花皿77の底部内面には「寿」文字がある。丹波焼擂鉢79は摺り目が７条１単位で、口縁端部は肥厚せず角ばって終わる。これらの資料は17世紀中葉までのものである。

以上の各層出土遺物と遺構の時期を総合的にみると、第６層上面が豊臣前期、その後、豊臣後期の遺物を含む第５層の大規模な整地が行われたと推定される。その時期は三ノ丸造成に伴う1598（慶長３）年の「大坂町中屋敷替」および天満堀川の開削以後と考えられる。第５層で嵩上げされた面では17世紀中頃までの遺構が検出される。また、1653（承応２）年に天満青物市場がこの付近に置かれた頃の地層は第４層層準であり、第４層の整地は市場開設に伴う再開発による可能性がある。したがって、今回検出した各遺構の多くは天満組が分離した「大坂三郷」時代の青物市場が開設される以前の資料となろう。

３）まとめ

今回の調査では、天神橋北詰めにおける天満組の青物市場開設以前の開発の一端を明らかにすることができた。すなわち、調査地付近が中世の段階では、西に存在した渡辺の中核集落外縁に位置していたこと、この付近の開発が豊臣前期から始まり、天満堀川の開削に伴う天満低地部の嵩上げ工事に伴う大規模な整地が行われたこと、それ以後、17世紀中葉の青物市場開設に伴う再開発で、町割りの変更があった可能性があることである。今後の天満・天神橋地域の歴史を解明する大きな手がかりが得られたといえよう。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2002、「TJ00－２次調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1999・2000年度－』、pp.181－190

大阪市文化財協会2003、『大坂城跡』Ⅶ

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、「天神橋遺跡発掘調査(TJ07－１)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)』、pp.13－22

2010、「北区天神橋一丁目における建設工事に伴う天神橋遺跡発掘調査(TJ08－３)報告書」:『平成20年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』:pp.３－15

東半部第6層上面
礎石建物(西から)

西半部第6層上面
(東から)

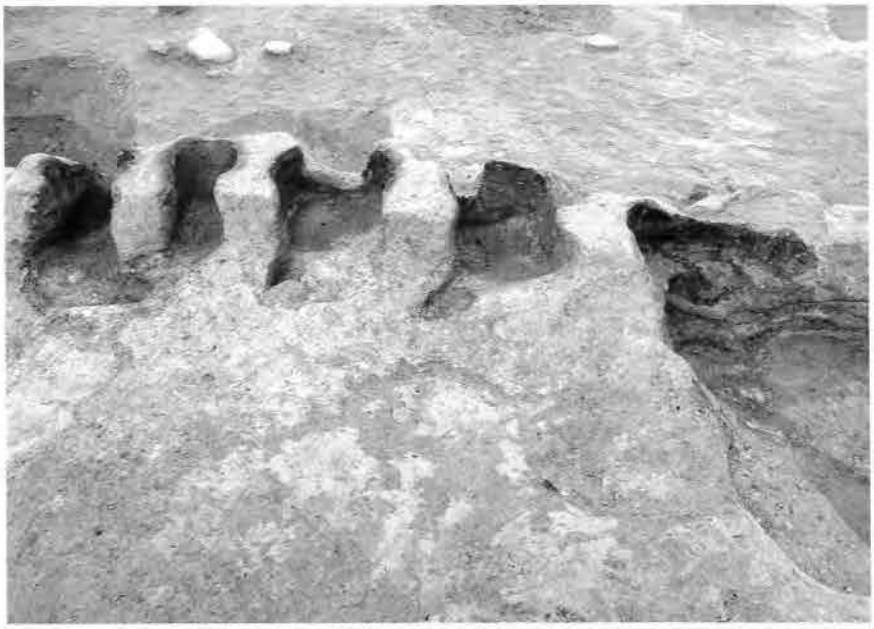
SX16(西から)

SX19(北から)

SX22(西から)

SX16・22と礎石群

SX21(東から)



SX19とSX21基礎の
位置関係

東半部第５層上面
(東から)

西半部第５層上面
（西から）

SX10（北から）

道路遺構
（左：SD24 右：SD13、
北から）

北区天神橋一丁目１－８における建設工事に伴う
天神橋遺跡発掘調査(TJ11－４)報告書

調 査 個 所　大阪市北区天神橋１丁目１－８
調 査 面 積　63㎡
調 査 期 間　平成24年２月７日～平成24年２月17日
調 査 主 体　公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、松本啓子

1)調査に至る経緯と経過

本調査地は天神橋遺跡の南部にあり、天神橋筋の東に位置する(図1)。天神橋遺跡は遺跡の範囲内またはその周辺に、文献・絵図などに記された古代の東大寺新羅江荘あるいは安曇江荘、中世の渡辺津などの推定地がある。また、この地域は豊臣期には城下町として整備され、近世以降は本調査地の北東約200mに位置する大阪天満宮の門前町として発展し、その賑わいは大阪を代表する夏祭のひとつ、天神祭からも窺い知ることができる。本遺跡は古墳～江戸時代の遺構・遺物を重層的に包蔵する複合遺跡であり、1994年以来発掘調査により、その歴史的景観の変遷が次第に明らかになりつつある[大阪市文化財協会2002・2009a・2009b・2009c・2010など]。

平成23年11月1日の大阪市教育委員会よる試掘調査で、現地表下約2.4m以下に江戸時代以前の遺物包含層や遺構面が確認されたため、関係諸機関と協議を行い、こうした地層・遺構面の年代や遺構・遺物の分布状況を明らかにし、この地域の歴史的変遷を復元するための基礎資料を得ることを目的に、本調査を行うことになった。

現地表下2.4mまでの近現代の地層は既に事業者によって除去されており、調査は平成24年2月7日から開始した。調査地内にコンクリート杭が設置されているため、関係諸機関と協議の上、これを避けて東西7m、南北6mの調査区を設定した(図2)。人力によって地表下約4mまでを、順次、精査・掘り下げし、遺構と遺物の検出に努め、適宜、写真・図面などの必要な記録を取った。2月17日に掘り下げ・記録作業を終え、同日、機材などの撤収を行い、現場での作業を終了した。

以下、本報告で使用する標高はT.P.値(東京湾平均海面値)であり、本文・挿図中ではTP+○mと記す。また、本報告書で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。

図1　調査地位置図

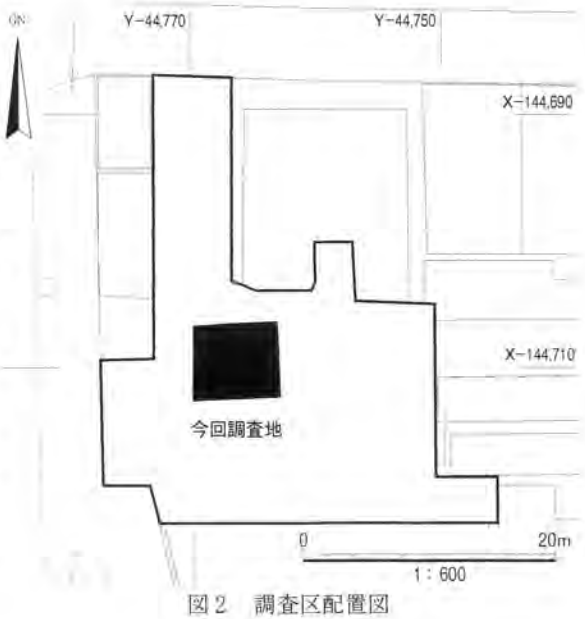


図2　調査区配置図

2）調査の結果

ⅰ）層序（図３～４）

調査地の現地表はTP+4.7mであり、ほぼ平坦である。

第１層：第１層は17世紀前半の徳川氏大坂城初期の整地層で、２層に細分した。第1a層は褐灰色（10YR4/1）細粒砂層で、シルトや礫を含み、上半部で酸化マンガンの斑文が見られた。第1b層は黒褐色（10YR3/2）細粒砂層で、礫や炭を含む。最大層厚は第1a層が40cm、第1b層が44cmあり、第１層全体で層厚は約50cmである。第1a層上面で、井戸や土壙、小穴を検出した。本層から17世紀前半までの遺物が出土した。

第２層：第２層は整地層で、礫を含む暗褐色（10YR3/3）細粒砂層（第2a層）と褐色（10YR4/4）細粒～中粒砂層（第2b層）に細分した。最大層厚は第2a層が25cm、第2b層が48cmあり、第２層全体で層厚は30～60cmである。本層から土師器・瓦質土器・瓦など16世紀末までの遺物が出土し、豊臣後期の整地層の可能性が高い。本層上面で、溝と土壙を検出した。

第３層：第３層は河成層で、２層に細分した。第3a層はにぶい黄褐色（10YR4/3）砂質礫層で、第3b層は礫を含むにぶい黄褐色（10YR4/3）細粒～粗粒砂層で、斜交ラミナが顕著である。最大層厚は第3a層が50cm、第3b層が40cmで、第３層全体で層厚は40～60cmである。本層上面に窪みは見られるものの、これらは遺構ではなく、層中・下面にも遺構は見られなかった（図５）。16世紀末までの遺物が出土した。

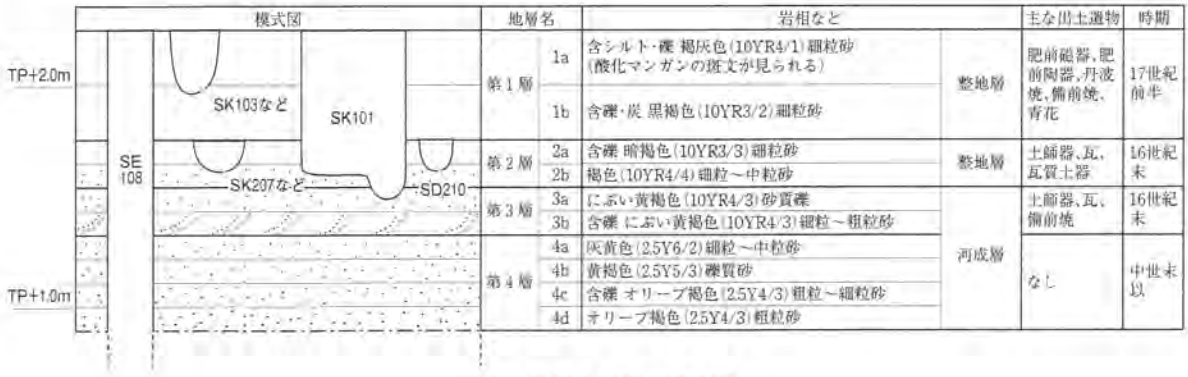
第４層：第４層も河成層で、４層に細分した。傾斜して堆積しており、南側に低くなる。第4a層が灰黄色（2.5Y6/2）細粒～中粒砂層、第4b層が黄褐色（2.5Y5/3）礫質砂層、第4c層が礫を含むオリーブ褐色（2.5Y4/3）粗粒～細粒砂層、第4d層がオリーブ褐色（2.5Y4/3）粗粒砂層である。層厚は第4a層が20cm以上、第4b層が30cm以上、第4c層が20cm以上、第4d層が20cm以上である。本層の上面・層中に遺構は見られず、遺物も出土しなかった。

ⅱ）遺構と遺物（図４～９）

遺構は第１層と第２層の上面で遺構が見つかった。以下に主な遺構・遺物について記す。

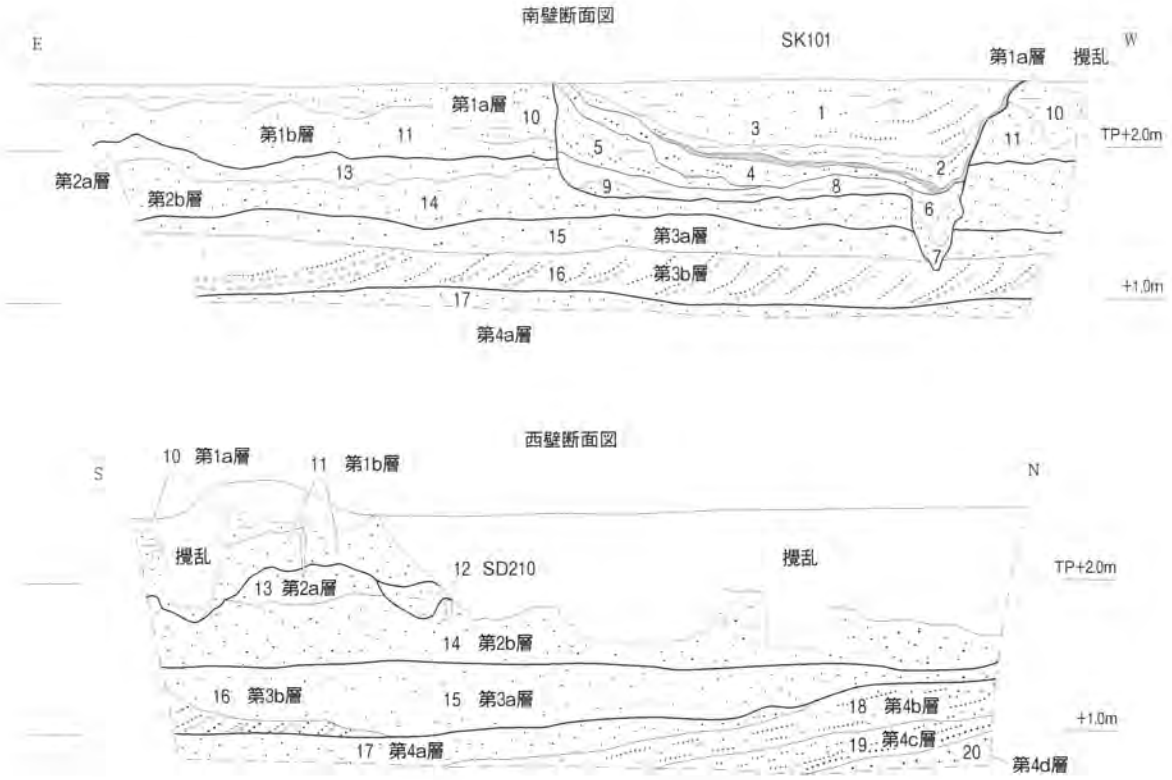
a．16世紀末の遺構と遺物（図５・６）

第２層上面で溝と土壙が見つかった（図版１下）。



地層名		岩相など		主な出土遺物	時期
第１層	1a	含シルト・礫 褐灰色（10YR4/1）細粒砂（酸化マンガンの斑文が見られる）	整地層	肥前磁器、肥前陶器、丹波焼、備前焼、青花	17世紀前半
	1b	含礫・炭 黒褐色（10YR3/2）細粒砂			
第２層	2a	含礫 暗褐色（10YR3/3）細粒砂	整地層	土師器、瓦、瓦質土器	16世紀末
	2b	褐色（10YR4/4）細粒～中粒砂			
第３層	3a	にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質礫	河成層	土師器、瓦、備前焼	16世紀末
	3b	含礫 にぶい黄褐色（10YR4/3）細粒～粗粒砂			
第４層	4a	灰黄色（2.5Y6/2）細粒～中粒砂		なし	中世末以
	4b	黄褐色（2.5Y5/3）礫質砂			
	4c	含礫 オリーブ褐色（2.5Y4/3）粗粒～細粒砂			
	4d	オリーブ褐色（2.5Y4/3）粗粒砂			

図３　地層と遺構の関係図



〈SK101〉
1：含礫・炭・焼土暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂
2：含炭オリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルト
3：黒褐色(7.5YR3/2)含炭砂質粘土(板の痕跡)
4：含粘土褐色(10YR4/4)中粒～粗粒砂
5：含細粒砂・粘土・炭暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト
6：含砂・炭・鉄灰オリーブ色(5Y4/2)粘土質シルト
7：黒色(10YR2/1)シルト質砂(固く締まる)
8：含砂・炭黄灰色(2.5Y4/1)粘土質シルト
9：にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂(水成層)
〈第1層〉
10：含シルト・礫褐灰色(10YR4/1)細粒砂
(マンガンの斑文が見られる)(第1a層)
11：含礫・炭黒褐色(10YR3/2)細粒砂(第1b層)

〈SD210〉
12：含礫にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂(西壁)
〈第2層〉
13：含礫暗褐色(10YR3/3)細粒砂(第2a層)
14：褐色(10YR4/4)細粒～中粒砂(第2b層)
〈第3層〉
15：含小石にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質礫(第3a層)
16：含小石・礫にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒～粗粒砂(第3b層)
〈第4層〉
17：灰黄色(2.5Y6/2)細粒～中粒砂(西壁)(第4a層)
18：含小石黄褐色(2.5Y5/3)礫質砂(西壁)(第4b層)
19：含礫 オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒～細粒砂(西壁)(第4c層)
20：オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂(西壁)(第4d層)

0 2m
1：50

1：暗褐色(10YR3/4)砂質シルト　SK207 埋土
2：オリーブ褐色(2.5Y4/3)含礫シルト質細粒砂
3：オリーブ褐色(2.5Y4/3)含礫シルト質細粒砂　第2a層
4：にぶい黄褐色(10YR4/3)含礫シルト質細粒砂
5：褐色(10YR4/6)中粒砂　第2b層

0 2m
1：50

図4　地層断面図・SK207断面図

SD210は幅0.3～0.4m、深さ約0.2mの東西溝で、水の流れた痕跡はない(図版２上)。埋土は礫を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂である。

SK207はSD210を切る土壙で、東西約0.5m、南北約0.5m、深さは約0.2mある。埋土は礫を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂で、瓦や陶器、土師器、叩き目のある平瓦９などがぎっしりと詰まった状態で出土した(図版２中)。

SK212もSD210を切る平面が楕円形の土壙で、東西約0.3m、南北約0.7m、深さは約0.1mである。埋土は褐色(10YR4/6)細粒砂である。中国産の青磁蓮弁文碗11が出土した。遺構の時期よりも古い15世紀代の遺物である。

b．17～18世紀前半の遺構と遺物(図５・８～10)

第１層上面で17～18世紀前半の遺構が見つかった(図版１上)。

SE108は直径約1.2mの円形の井戸である(図版２下)。内側に井戸側の痕跡とみられる幅５cmほどの灰色粘土の帯が見られた。井戸側痕跡の直径は約1.0mである。検出面から2.3mほどの深さまで掘り下げしたが、完掘はしていない。19世紀前半までの遺物が出土した。これらのうち、肥前磁器八角鉢28、13世紀の瓦器椀33、18～19世紀の軒平瓦41を図示した。このSE108は本来、第１層よりも上位から掘り込まれた遺構であるが、第１層で検出したためここで報告した。

SK101は調査区南端で検出された平面が方形か長方形とみられる土壙で、調査区外へ延びる。東西約3.0m、南北1.2m以上、深さ約0.8mの規模である。底部に機能時の堆積と考えられる水成の細粒砂や均質な粘土質シルトがある。その上には板の痕跡とみられる帯状の黒褐色砂質粘土が多くの遺物や土砂とともに堆積し、SK101は水溜のような施設と考えられる。機能時の堆積層の出土遺物には、17世紀前半の土師器焼塩壺34・36、丹波焼擂鉢39・40、17世紀後半の肥前磁器皿25、奈良時代の須恵器

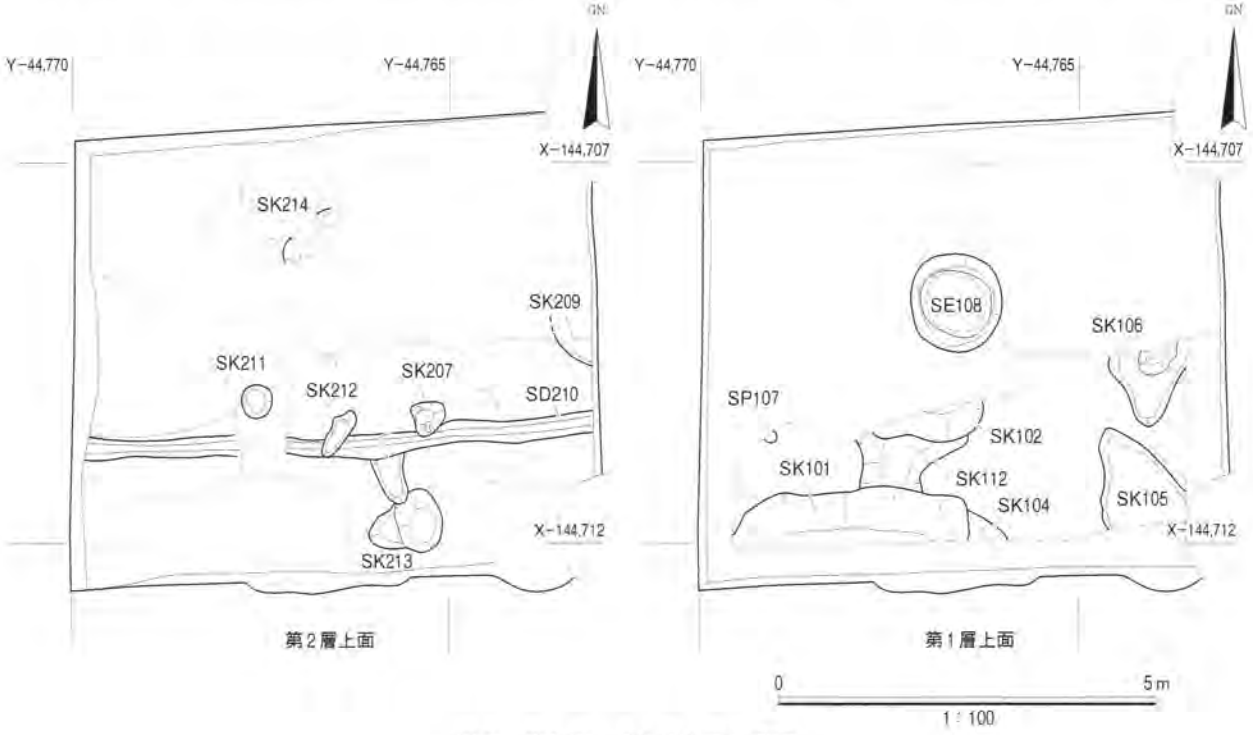


図５　第２層・第１層上面の遺構

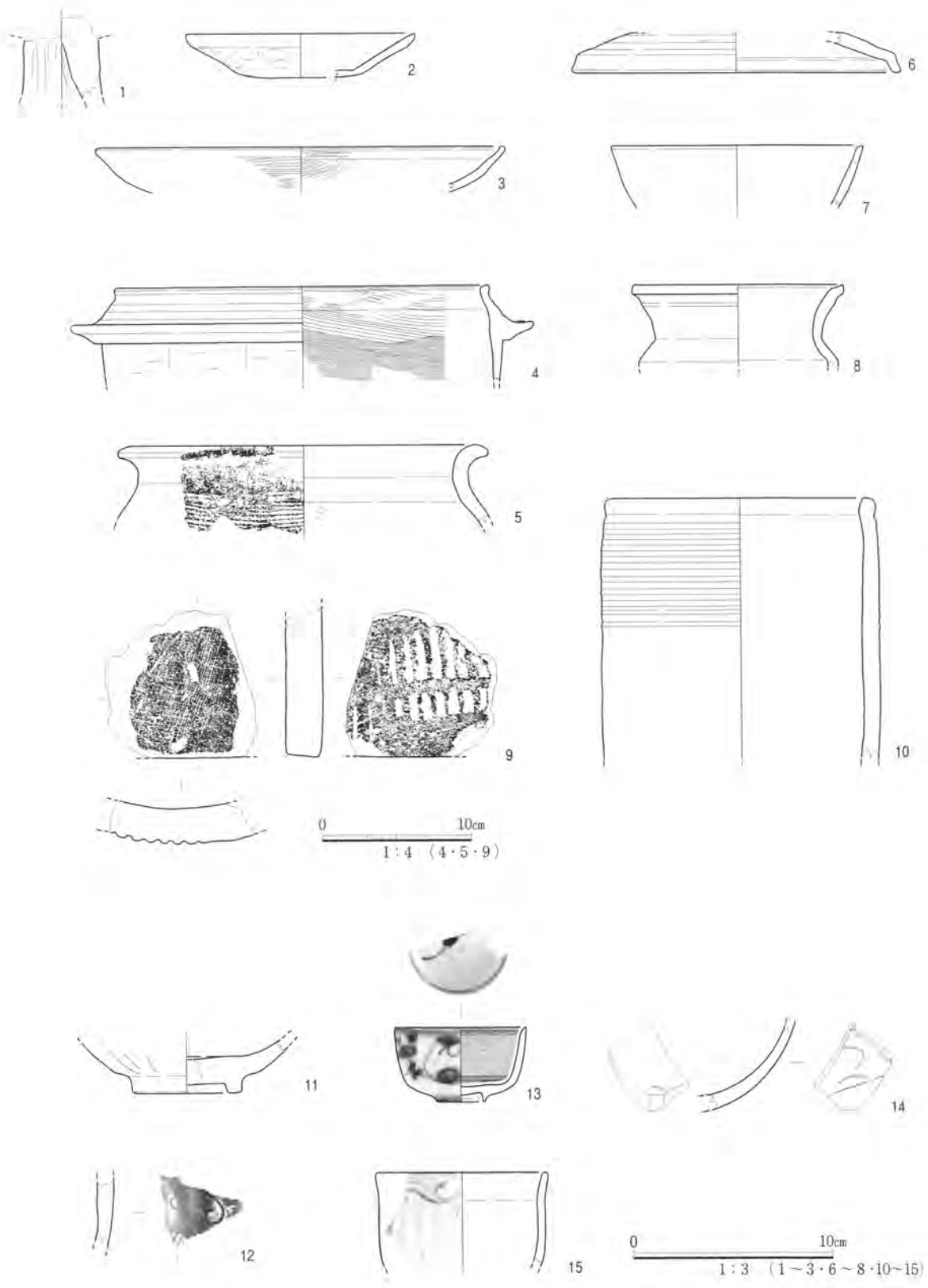


図6　SK207・212と地層出土遺物

第3層(2・10)、第2層(3)、SK207(9)、SK212(11)、第1層(1・4~8・12~15)

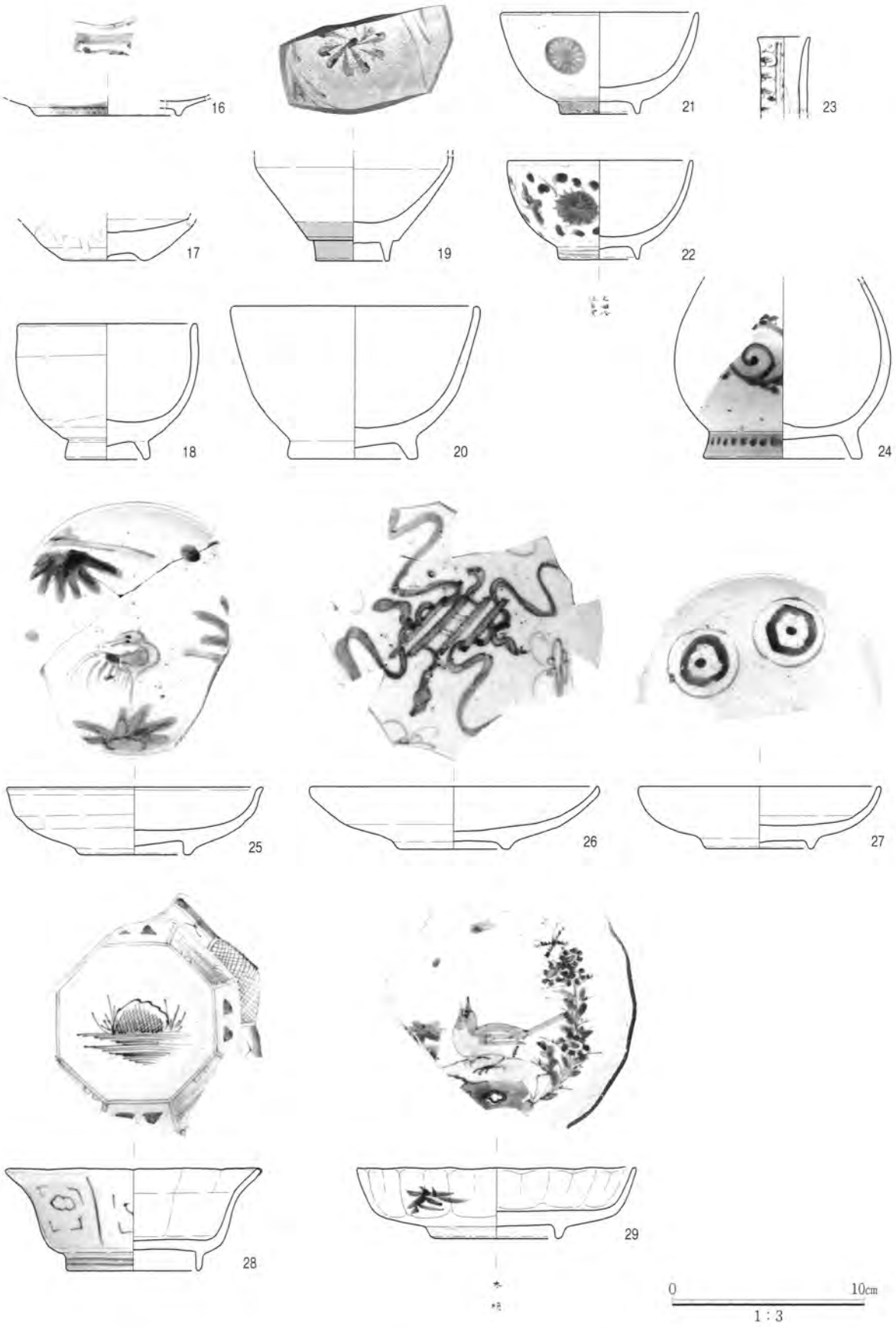


図７　第１層上面遺構出土遺物(肥前陶器・肥前磁器・青花)
SK101(17・22・23・25・29)、SK102(18～20・24・26・27)、SK104(16)、SK106(21)、SE108(28)

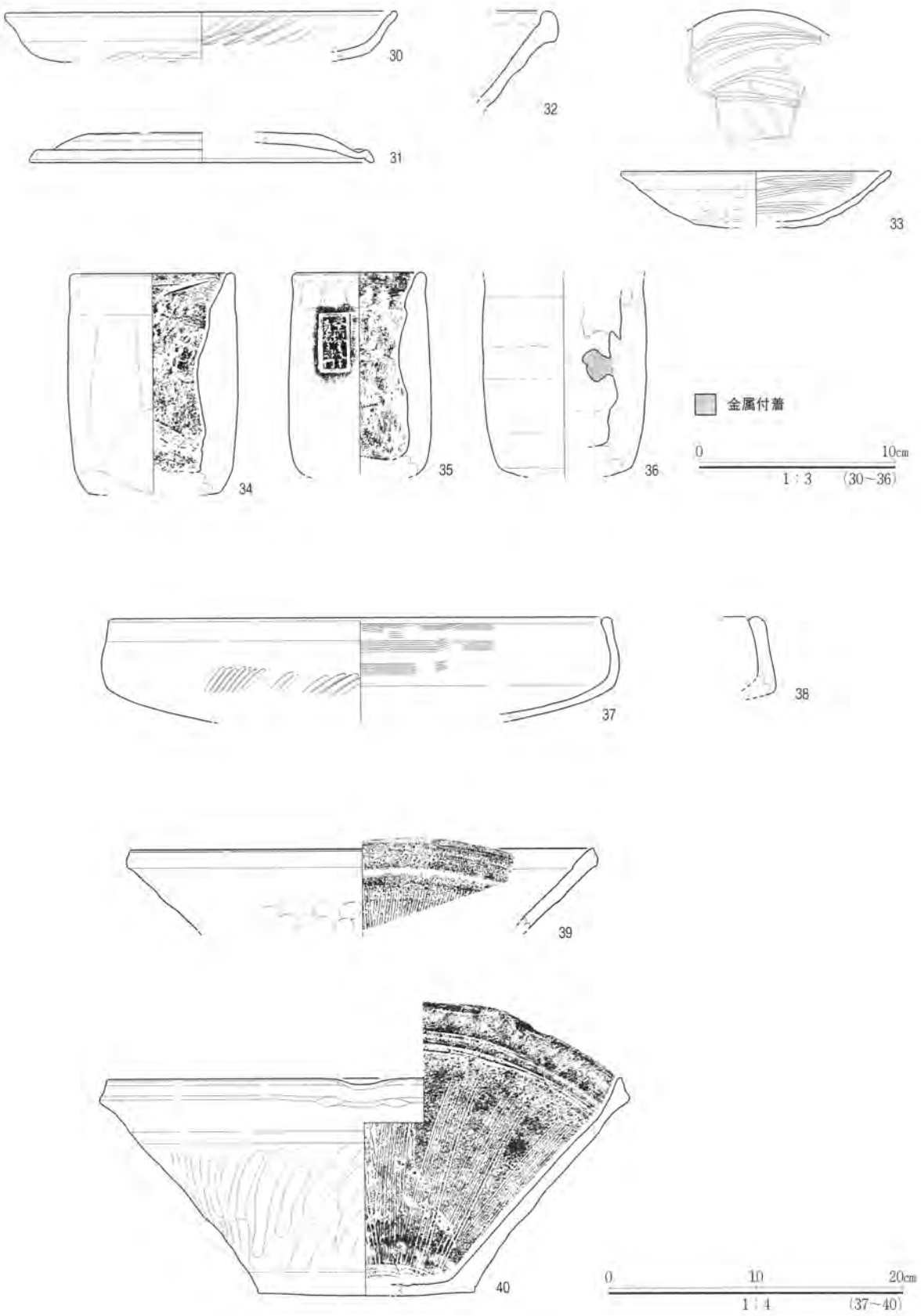


図８　第１層上面遺構出土遺物(土師器・須恵器・瓦器・丹波焼)
SK101(31・32・34～36・38～40)、SK104(30・37)、SE108(33)

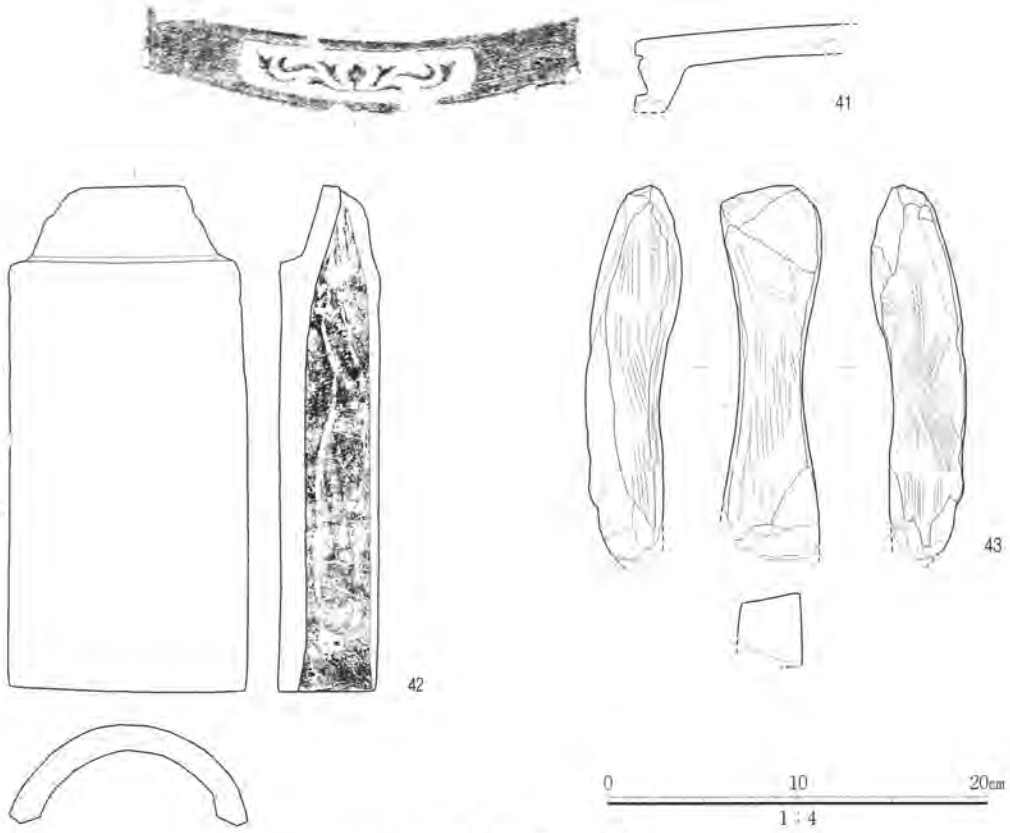


図9　第1層上面遺構出土遺物
SE108(41)、SK101(42・43)

蓋31、鎌倉時代の須恵器捏ね鉢32、廃絶時の堆積層出土遺物には、17世紀後半の土師器焼塩壺35、17世紀末～18世紀前半の肥前磁器碗22・瓶23・ひだ皿29、土師器焙烙38、17世紀初頭の肥前陶器皿17のほか、丸瓦42、砥石43がある。

SK102は東西1.5m以上、南北0.5m以上、深さ約0.4mの土壙である。埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂で、炭や焼土を含む。17世紀後半の肥前陶器褐色釉碗18・染付天目形碗19・呉器手碗20と、肥前磁器の瓶24と皿26・27が出土し、遺構への廃棄時期を示す。

SK104は東西0.5m以上、南北0.4m以上、深さ約0.1mの浅い土壙である。西側をSK101に切られている。埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂で、SK102の埋土に似る。17世紀前半の中国産青花皿16、土師器焙烙37、奈良時代の土師器杯30などが出土した。

SK106は東西1.0m以上、南北1.0m以上、深さ約0.4mの土壙である。埋土は黄褐色(2.5Y5/6)細粒砂質シルトである。18世紀前半の遺物が出土し、このうち肥前磁器碗21を示した。

c.地層出土の遺物(図7)

第3層から土師器や瓦、備前焼が出土し、このうち、16世紀末の土師器皿2と備前焼の水指10を示した。

第2層から出土した土師器皿3は口縁端部を内側に丸く肥厚させていて、奈良時代のものである。周辺に当該期の遺跡が存在する可能性を示す資料である。

第1層の遺物は16世紀末～17世紀前半頃のものが主体で、肥前磁器筒碗15や中国産の青花小杯13・

青磁陰刻碗14、瓦質土器羽釜4・甕5を示した。これらに弥生土器高杯1、奈良～平安時代の須恵器の蓋6・杯7・壺8と、室町時代の瀬戸美濃焼陶器瓶子12や瓦器などの古い遺物が混じる。弥生時代や奈良～平安時代、室町時代の遺跡が周辺に存在したことを窺わせる資料である。

3)まとめ

今回の成果を周辺調査と照らし合わせると、第2層が豊臣後期の整地、第1層が徳川氏大坂城初期の整地に該当するとみられる。各整地層の上面の遺構で性格のわかる遺構は少ないが、溝や水溜状の土壙など、近辺に人の居住地があったと推定させる遺構もあり、今後の調査の進展とともに、これらの性格も明らかになっていくものと思われる。

また、弥生土器や奈良～平安時代の土師器・須恵器や瓦、室町時代の中国産の青磁や瀬戸美濃焼陶器瓶子など、検出した遺構よりも古い遺物が出土したことから、本調査地周辺にはこういった遺物が示す時代の遺跡の存在が想定される。

引用参考文献

大阪市文化財協会2002、「TJ00－2次調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告』－1999・2000年度－、pp.181－190

2009a、「天神橋遺跡発掘調査(TJ07－1)報告書」:『大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』(2007)、pp.7－22

2009b、『株式会社近江兄弟社による建設工事に伴う天神橋遺跡発掘調査(TJ08－1)報告書』

2009c、『北区天神橋一丁目における建設工事に伴う天神橋遺跡発掘調査(TJ08－2)報告書』

2010、『株式会社プレサンスコーポレーションによる建設工事に伴う天神橋遺跡発掘調査(TJ09－1)報告書』

調査区全景(第１層上面、南西から)

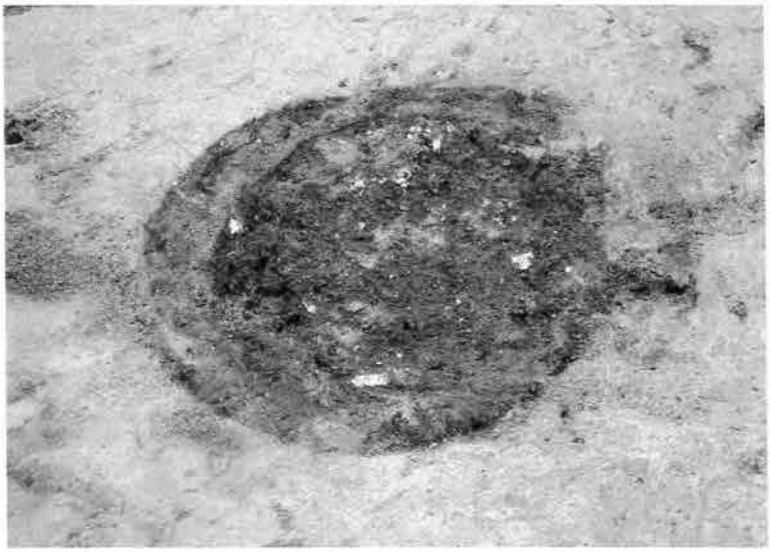
第４層上面(北から)

第２層上面(西から)

SD210(西から)

SK207(北西から)

SE108(南から)



北区南森町一丁目における建設工事に伴う
天神橋遺跡発掘調査(TJ11－5)報告書

調 査 個 所　大阪市北区南森町一丁目２－９
調 査 面 積　25㎡
調 査 期 間　平成24年３月28日～４月５日
調 査 主 体　公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、小倉徹也

1)調査に至る経緯と経過

本調査地は天神橋遺跡の中央部に位置し、大阪天満宮の西側に所在する(図1)。天神橋遺跡は、古代には東大寺新羅江荘あるいは安曇江荘、中世では渡辺津、といった文献史学からその存在が想定される拠点的施設の推定地、あるいはこれに近接する地域である。また、文献資料や絵図などとの比較から、本調査地は近世の大坂城下町を構成する大坂三郷のうちの「天満組」に属し、大阪天満宮を中心に栄えた商家や町屋、武家屋敷などが建ち並んでいたとみられる地域でもある。近年、付近で行った発掘調査で古墳時代～近世の遺構・遺物が発見されている。特に、本調査地の北西100mで行ったTJ09－2次調査地では、江戸時代初期から後期にかけての整地の境界とみられる区画を検出し、土地利用の変遷が把握された[大阪市文化財協会2009]。

2012年2月9日に大阪市教育委員会によって、敷地内で試掘調査が行われた。その結果、現地表下約2.7mにおいて中世の遺物包含層および遺構面の存在が確認されたため、建設工事に先立って発掘調査を実施することになった。

調査は、敷地内の北寄りに5m×5mの調査区を設定して、2012年3月28日から開始した(図2)。遺構や遺物の検出に努めながら人力で慎重に掘り下げ、平面図や断面図の作成、写真撮影などの記録作業を行ったのち、4月5日に現地における作業を完了した。

以下、本文および挿図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)である。また、本報告書で用いた方位は、図1・2は現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づいた座標北を基準にし、これ以外は磁北を基準にした。

なお、遺物の記載は当研究所学芸員 渡邉晴香が、蛍光X線分析は当研究所保存科学室長 伊藤幸司が行った。

図1　調査地位置図

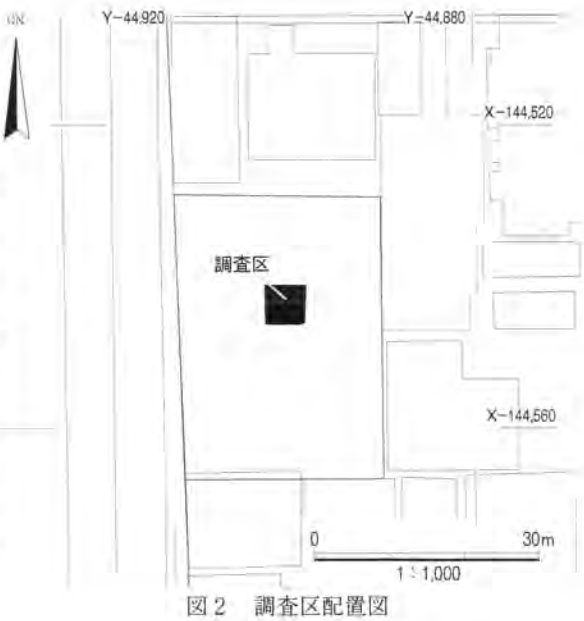


図2　調査区配置図

2）調査の結果

i）層序

調査地の現地表面はTP+3.5m前後とほぼ平坦である。現地表下3.6m（TP+0.0m）までの地層を観察し、その結果に基づいて本調査地の層序を組み立てた。以下に各層の層相や特徴を記し、地層と遺構の関係図を図３、東壁地層断面図を図４、西壁地層断面図を図５に示す。

第１層　現代の盛土層および攪乱で、層厚は20～70cmである。

第２層　主として黒色(5Y2/1)の炭からなる盛土層で、層厚は10～55cmである。東側に分布した。

第３層　にぶい黄褐色(10YR4/3)の粗粒～中粒砂からなる盛土層で、層厚は10～20cmである。最上部付近は火を受けて赤褐色に変色していた。中位および下底付近には炭の薄層が見られた。

第４層　盛土層で、上部と下部に区分した。上部は暗褐色(10YR3/4)ないしオリーブ褐色(2.5Y4/3)の粗粒～中粒砂からなり、炭や漆喰を含む。下部は黄褐色(2.5Y5/4)の粗粒～中粒砂からなる。上部と下部を合わせた層厚は70～90cmである。

第５層　暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)ないし暗灰黄色(2.5Y4/2)の粗粒～中粒砂からなる盛土層で、炭を含む。層厚は10～70cmで、上面でSE02を検出した。

第６層　黄褐色(2.5Y5/4)の中粒～細粒砂からなる盛土層で、炭を含む。層厚は10～25cmである。

第７層　第7a層と第7b層に区分し、第7a層はさらに第7ai層と第7aii層に細分した。

第7ai層　主として黄褐色(2.5Y5/4)の粗粒～中粒砂からなる盛土層で、シルトや炭を含む。

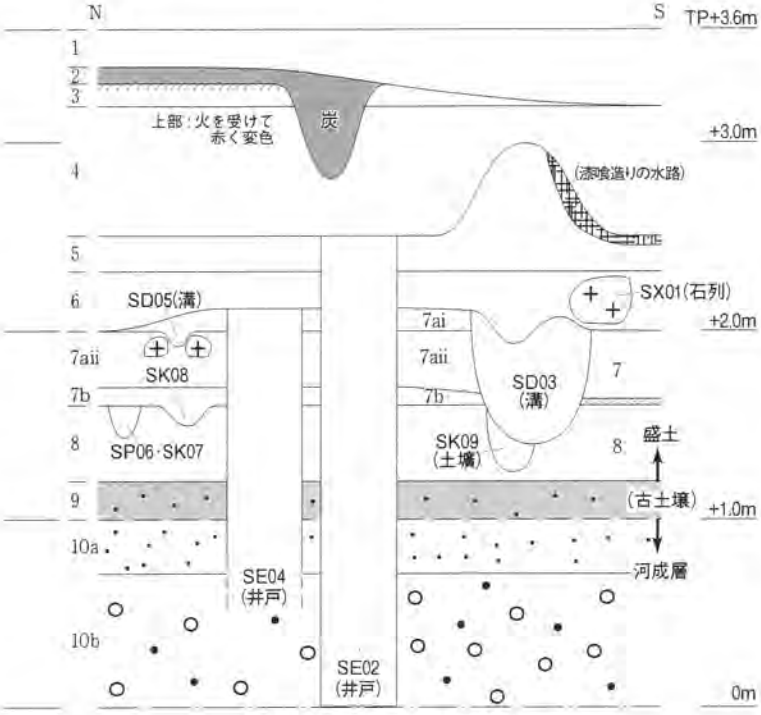


図３　地層と遺構の関係図

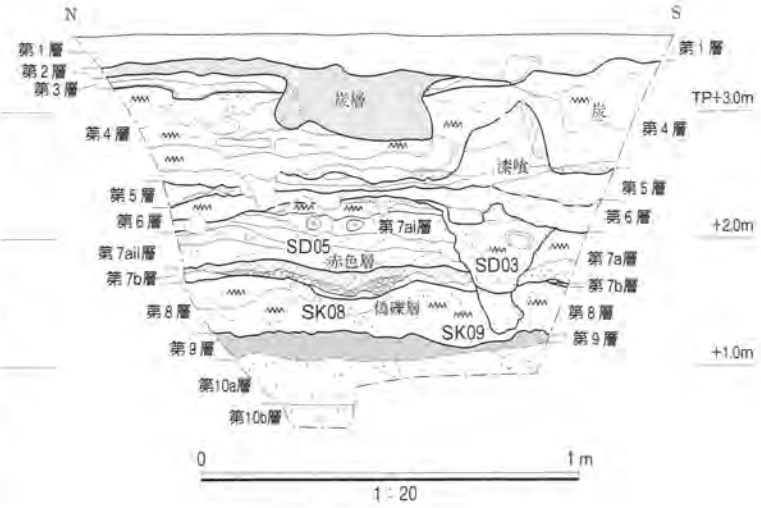


図４　東壁地層断面図

層厚は20cm以下である。本層上面でSX01、SD03、SE04を検出した。

第7aii層　黄褐色(2.5Y5/4)ないしオリーブ褐色(2.5Y4/4)の粗粒～中粒砂、黄褐色(2.5Y5/4)ないし灰オリーブ色(5Y5/3)の細粒～極細粒砂からなる盛土層で、シルト偽礫や炭を含む。層厚は25～40cmである。本層上面でSD05を検出した。

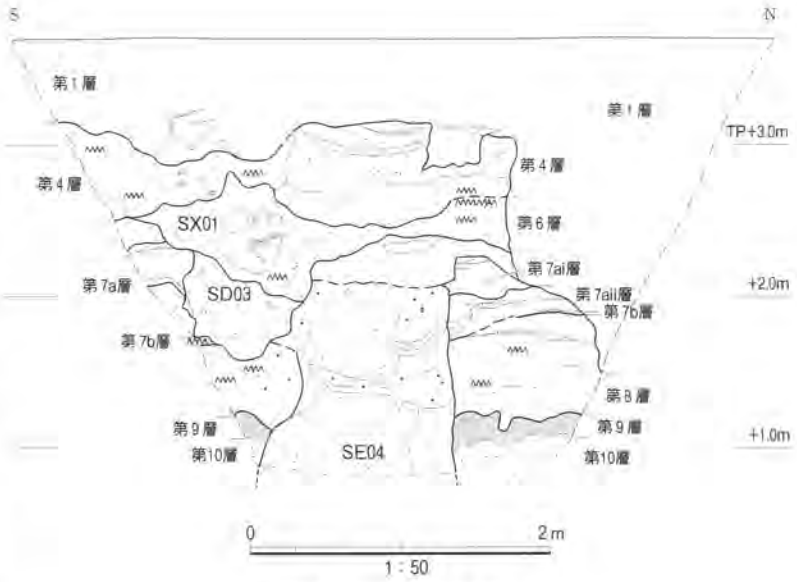


図5　西壁地層断面図

第7a層からは肥前磁器碗などの17世紀代の遺物を中心として18世紀前半までの遺物が出土した。

第7b層　後述するSD03を境にして、南北で層相が異なっていた。北部では下部がわずかにシルト質中粒～粗粒砂からなる盛土層、上部が赤褐色のわずかにシルト質中粒～粗粒砂からなる盛土層(後述する赤色層)であり、南部では炭を多く含む、わずかにシルト質中粒～粗粒砂からなる盛土層である。層厚は10～20cmである。本層内でSK08を検出した。本層からは丹波焼擂鉢やいわゆる初期伊万里と呼ばれる肥前磁器など、17世紀代の遺物が出土した。

第８層　暗褐色(10YR3/3)のわずかにシルト質粗粒～細粒砂からなり、炭や中～細礫を含む。層厚は20～60cmである。上半部に黄灰色の極細粒砂偽礫を含む。上面でSP06、SK07を検出した。丹波焼擂鉢、肥前陶器、中国産磁器染付碗など17世紀前半に属する遺物が出土した。

第９層　暗褐色(10YR3/3)ないし褐色(10YR4/4)のわずかにシルト質粗粒～中粒砂からなる古土壌である。下位の第10a層上部を母材とするが、土壌の発達程度は良くない。層厚は５～20cmである。本層からは瓦器椀や須恵器片が出土した。

第10層は第10a層と第10b層に区分した。

第10a層　褐色(10YR4/6)の中粒～粗粒砂からなる河成層である。層厚は30～40cmである。

第10b層　褐色(10YR4/4)の中礫～粗粒砂からなる河成層で、分級が良い。層厚は90cm以上である。

ⅱ)遺構と遺物

確認した遺構はいずれも江戸時代、17世紀前半～18世紀前半のもので、第7ai層および第7aii層、第８層のそれぞれの上面と第7b層内で検出した。検出した遺構平面図を図６・８・10に、遺構断面図を図７・11、出土遺物実測図を図９に示す。

第８層上面遺構

調査区東側で小穴SP06と土壙SK07を検出した。

SP06　南北長0.25m、東西長0.20m、深さ0.15mの楕円形の小穴で、埋土は灰オリーブ色(5Y4/2)

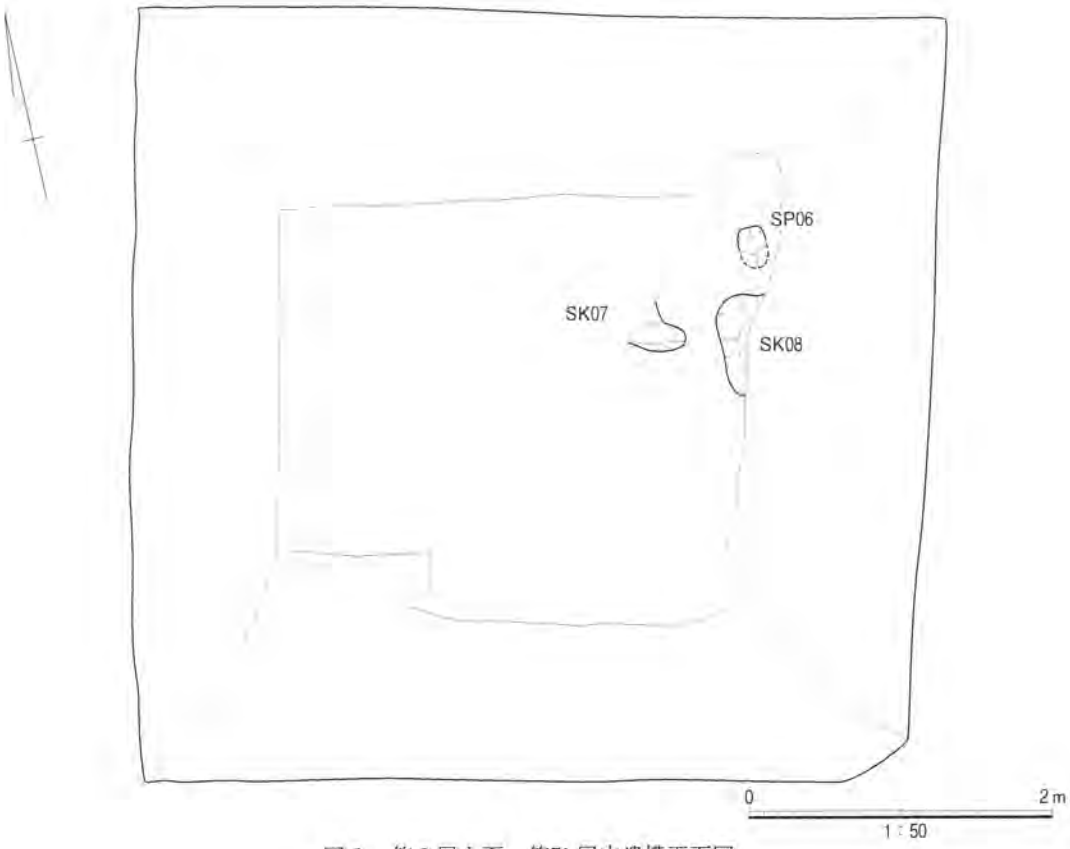


図6　第8層上面・第7b層内遺構平面図

の中粒～細粒砂からなる。遺物は出土しなかった。

SK07　幅0.32m、深さ0.10m、西側は攪乱によって失われており、残存した長さ0.35mであった。埋土は暗褐色(10YR3/4)ないし褐色(10YR4/4)の粗粒～中粒砂からなる。遺物は出土しなかった。

第7b層内の遺構

東壁断面付近で土壙SK08を検出した。

SK08　南北長0.95m、深さ0.15m、東側は調査区外であり、確認した東西長は0.65mであった。第7b層下部のわずかにシルト質中粒～粗粒砂からなる盛土層を掘り込んで、黄灰色極細粒砂(偽礫)を埋めて構築していた。埋土は第7b層上部に当たる、赤褐色のわずかにシルト質中粒

図7　SP06・SK07断面図

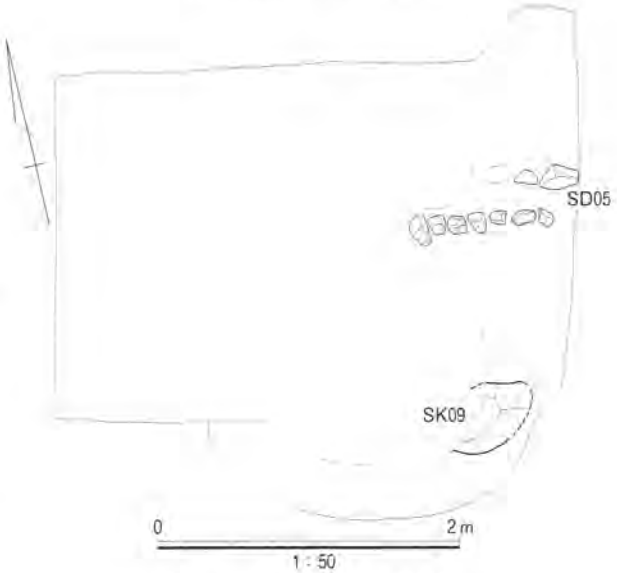


図8　第7aii層上面遺構平面図

～粗粒砂(赤色層)である(図４)。この赤褐色土の蛍光X線分析を実施したところ、鉄系の人工製造物であり、ベンガラの可能性の高いことが明らかになった。このことからSK08はベンガラの製造に係わった遺構である可能性がある。

第7aii層上面遺構と遺物

調査区東側で溝SD05を、土壙SK09を検出した。

SD05　幅0.15m、深さ0.10m以下、西側は攪乱によって失われており、残存した長さ1.2mであった(図８)。石を列べて造られた石組溝であり、埋土は第7ai層で、１の中国産磁器染付皿、２・３の肥前磁器染付碗が出土した(図９)。

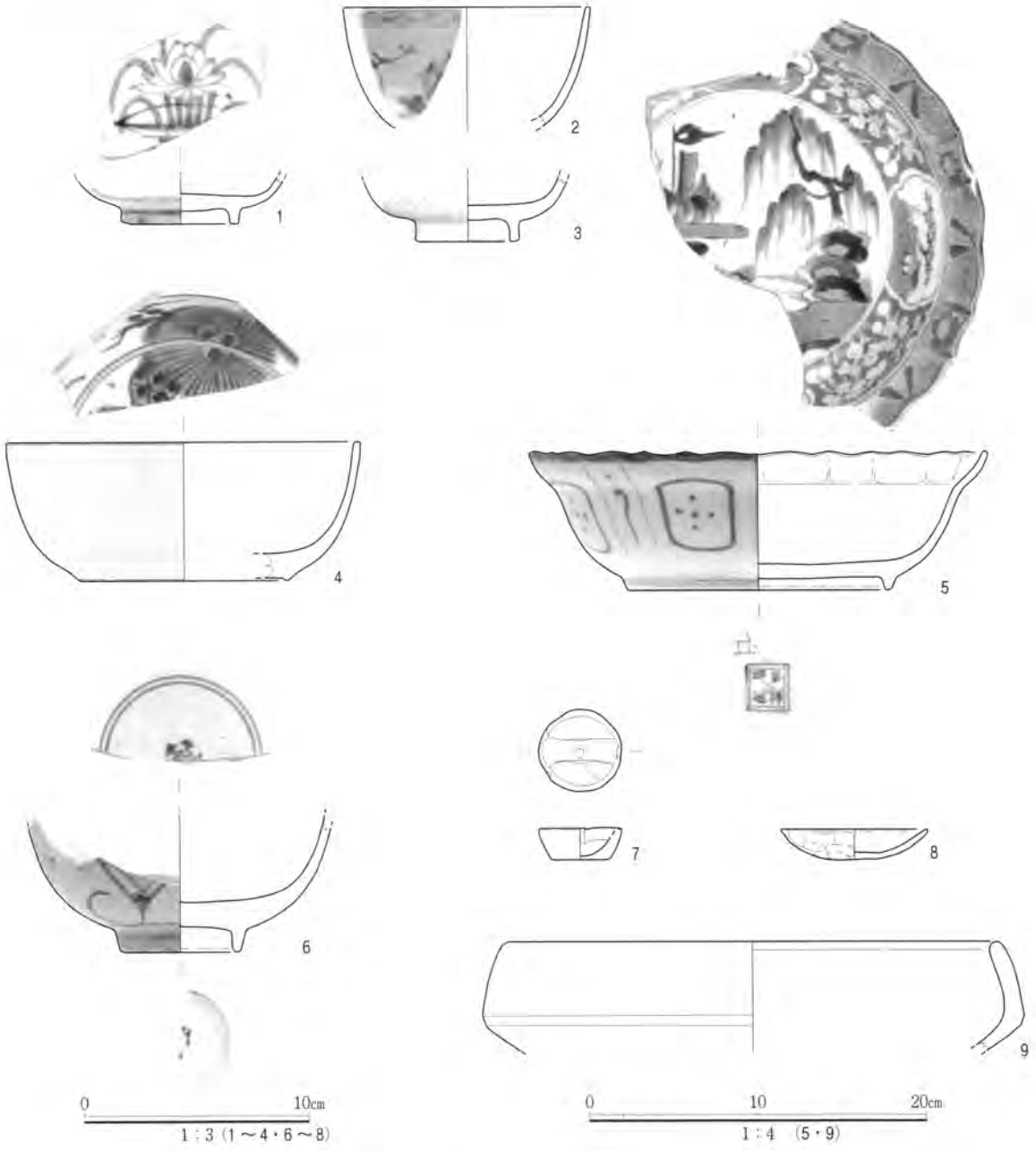


図９　出土遺物実測図
SD05(１～３)、SE02(４・５)、SD03(７)、第7a層(６・９)、第7b層(８)

SK09　幅0.3m、深さ0.3～0.4m、西側は攪乱によって失われており、残存した長さ0.5mであった。埋土は第7ai層で、埋土から遺物は出土しなかった。

第7ai層上面遺構と遺物

調査区中央～南側で井戸SE04、溝SD03、石列SX01を検出した。

SE04　調査区西側および西壁で確認した井戸で、井戸側の直径は0.75～0.80m、掘形は直径約1.3mであった(図5)。埋土は掘形がわずかにシルトを含む中粒～粗粒砂、井戸側が細粒～中粒砂で、SD03に切られていた。確認できた深さは1.45mで、これ以深は側壁の崩壊の危険があり、掘削を断念した。

SD03　調査区中央部南寄りで検出した溝で、検出した長さは3.7m、幅0.6～0.9m、深さ0.6～0.7mであった。埋土はわずかにシルト含む、にぶい黄色(2.5Y6/4)ないし黄褐色(2.5Y5/4)の粗粒～中粒砂からなり、黄褐色(10YR5/6)のシルト偽礫を含む。7の軟質施釉陶器灯明具が出土した(図9)。SK09を切り、SE02に切られていた。

SX01　SD03上でこれに沿って位置する石列で、検出した長さは1.4mであった。石は人頭大ほどの花こう岩であった。

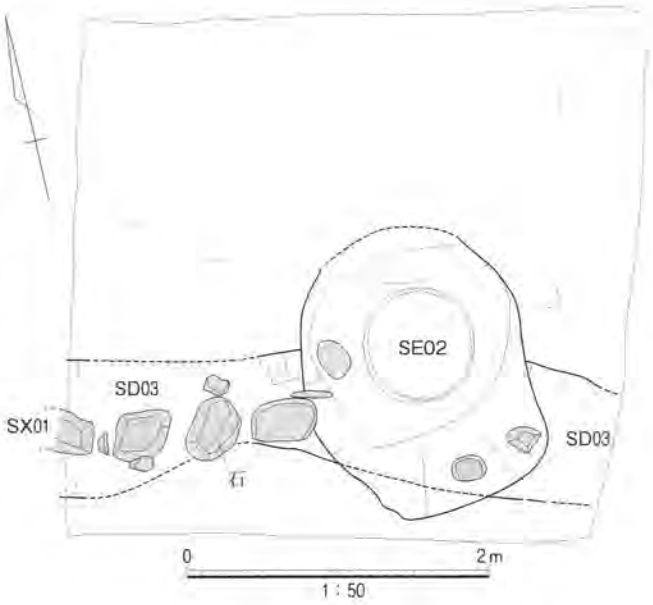
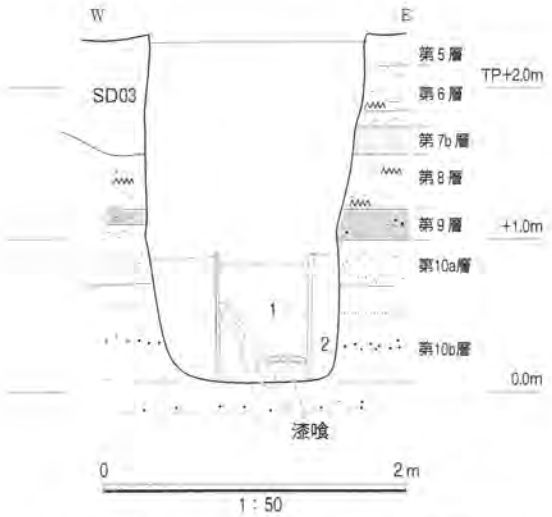


図10　第5層および第7ai層上面遺構平面図

第5層上面遺構と遺物

調査区中央部南寄りで井戸SE02を検出した(図10・11)。

SE02　深さ2.3m、直径は井戸側が0.7～0.8m、掘形が直径約1.3mであった。埋土は掘形がわずかにシルト含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒～中粒砂、井戸側が炭を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒～中粒砂で、SD03を切っていた。4の肥前磁器青磁染付皿、5の肥前磁器染付輪花鉢が出土した(図9)。



1：にぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒～中粒砂(炭を含む)
2：オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒～中粒砂(シルトを含む)

図11　SE02断面図

第7a層および第7b層出土遺物

第7a層からは6の肥前磁器染付大碗、9の土師器焙烙、第7b層からは8の土師器灯明皿が出土した(図9)。

3）まとめ

今回の調査では江戸時代以降の遺構を確認することができた。第7a層上面ではSD03やSX01の石列は区画を示すものと考えられ、第7b層内ではベンガラの製造に係わる可能性のある遺構を確認した。また、TP+1m付近では古土壌が認められ、瓦器椀や瓦質土器羽釜などが出土しており、調査地近辺の開発は中世以降になってからであろうと考えられた。

今後の周辺調査によって、さらに本地域の城下町での位置づけが明らかになることを期待したい。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2009、『株式会社橋本による建設工事に伴う天神橋遺跡発掘調査(TJ09-2)報告書』

調査地遠景
（北から）

南壁地層断面

SE02(南から)

SD03(東から)

SD05(東から)

SK08断面(東から)

北区天満一丁目39－４ほかにおける建設工事に伴う
天満本願寺跡発掘調査(TN11－１)報告書

調 査 個 所　大阪市北区天満１丁目39－４・40－３・41
調 査 面 積　180㎡
調 査 期 間　平成23年７月８日～７月30日
調 査 主 体　財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南秀雄、松本百合子

1）調査に至る経緯と経過

調査地は天満本願寺跡に推定される位置に当たる（図１）。天満本願寺とは、石山合戦後に羽柴秀吉が泉州の貝塚本願寺に対し、天正13年（1585）に天満に寺地を与えたことにより創建された寺院である。その後、天満本願寺は天正19年（1591）に京都に移転するが、当地は大坂城下町の発展とともに継続的な土地開発が行われてゆく。天満本願寺に係る調査はこれまでに独立行政法人造幣局の構内を中心に実施され、その結果は『天満本願寺跡発掘調査報告』Ⅰ～Ⅶなどにおいて報告されている［大阪市文化財協会1995・1997・1998・2003・2008・2010］。

今回の調査地では、大阪市教育委員会が平成23年３月に試掘調査を行い、現地表下1.9～2.4mで豊臣～徳川期と考えられる焼土層と遺物包含層を検出した。こうした成果をもとに、当該地域の歴史的変遷を復元する基礎資料を得ることを目的として本調査を実施した。

調査に先立ち、事業者により敷地を囲うシートパイルの打設と南半部の基礎撤去が行われた。さらに平成23年７月５日から８日にかけて、現地表下1.6mまでの現代攪乱および江戸時代後期以降の盛土層を除去するために機械掘削が行われた。発掘調査は機械掘削と並行して７月８日より着手し、敷地北半部のシートパイル内に東西15m、南北12m、180㎡の調査区を設定して行った（図２）。敷地南半分は既存建物の基礎撤去により、全体が現地表下約６mまで掘削されていたため、そこに調査で生じた掘削残土を仮置きした。

調査は現地表下1.6mから人力で掘り下げ、同2.5mまでの遺構について図面作成・写真撮影を行い、遺物を採集した。現地における調査は７月30日に終了した。

なお、調査および本報告で使用した水準地は東京湾平均海面値であり、本文・挿図中ではTP＋○mと表記する。方位は座標北を基準とする。

図１　調査地位置図

図２　調査区配置図

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

調査地の現地表面の標高はTP+3.8m付近にある。調査ではTP+1.2mまでの地層を確認し、第1～7層に細分した。ただし第6層以下は地層断面のみの確認である。以下、その概略を示す(図3)。また、シートパイル打設により、調査区とシートパイル間の地層が撹乱されていたため、断面観察は調査区の四周を囲む側溝の内側で行った。

第0層：現代のアスファルト・撹乱および盛土層である。層厚は90～120cmある。機械掘削で除去したため詳細な観察はできなかったが、TP+3.2m付近とTP+2.8m付近に層厚約10cmの焼土層が確認できた。それぞれ第二次世界大戦と幕末頃と考えられる焼土層である。

第1層：黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂からなる盛土層である。調査区の全面に分布し、層厚は最大で40cmである。19世紀以降の整地層である

第2層：黒褐色(10YR3/2)砂質シルト層で、1cm大の炭・焼土を含む。層厚は約15cmである。井戸・土壙を検出した。第3層に含まれる遺物のほとんどが18世紀前半を下限とすることから、18世紀中頃以降と考えられる整地層である。

第3層：1724年の妙知焼後の整地層である。炭を多く含む褐色(7.5YR4/3)砂質シルトの焼土からなり、調査区の全面に分布する。層厚は3～10cmである。本層上面で礎石・竈・火災整理の土壙を検出した。18世紀前半を下限とする肥前磁器・肥前陶器・瀬戸美濃焼陶器・土師器を含む。

第4層：17世紀末の盛土層および整地層で、第4a～4e層に分けられる。第4a層は厚さ1～2cmの黒褐色(10YR3/2)シルト・にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトを互層に敷いた整地層で、全体の層厚は約10cmである。上面で礎石・土壙を検出した。第4b層は2cm大の粘土偽礫を含む灰オリーブ(5Y6/2)粘土質シルトで、層厚は10～20cmである。第4c層は1cm大の粘土偽礫を少し含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質シルトで、層厚は10～30cmである。第4a～4c層からは17世紀末を下限とする

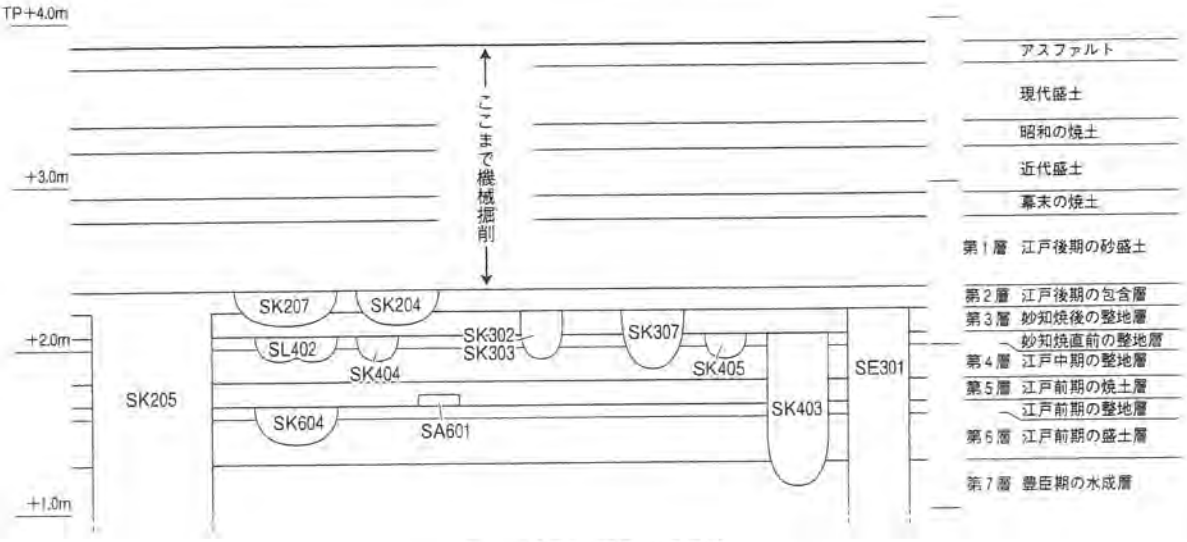
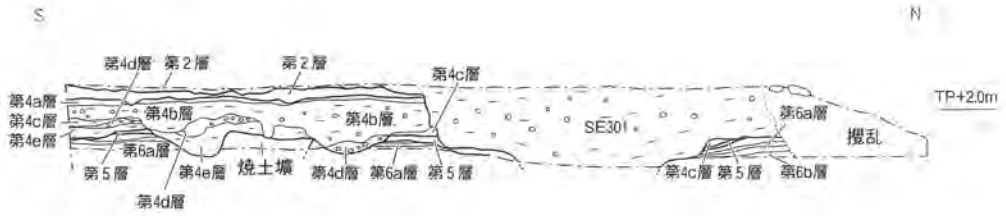
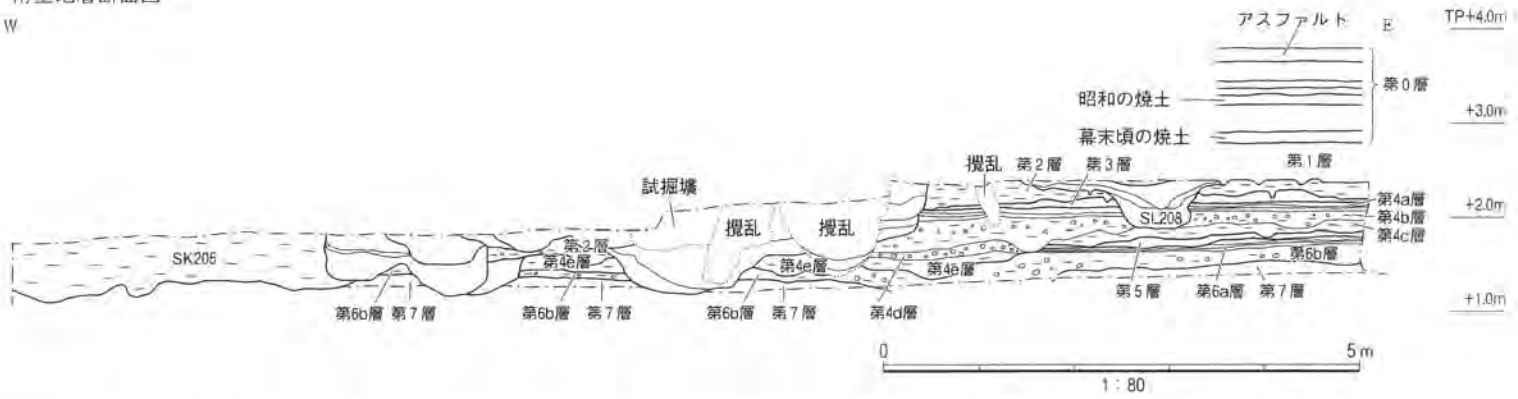


図3　地層と遺構の関係図

東壁地層断面図



南壁地層断面図



第0層：アスファルト・現代盛土・近代盛土層
第1層：黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂(盛土層)
第2層：炭・焼土の偽礫を少し含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルト
第3層：炭を含む褐色(7.5YR4/3)砂質シルト(焼土層)
第4a層：黒褐色(10YR3/2)シルト、にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトを互層に敷く整地層
第4b層：粘土の偽礫を含む灰オリーブ(5Y6/2)粘土質シルト(盛土層)
第4c層：粘土の偽礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質シルト(盛土層)
第4d層：第5層の偽礫からなる暗褐色(7.5YR3/3)砂質シルト
第4e層：にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト～中粒砂
第5層：炭を含む暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト(焼土層)
第6a層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂・シルトの互層(整地層)
第6b層：粗粒砂を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質シルト
第7層：暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂(自然堆積層)

図4　南壁・東壁地層断面図

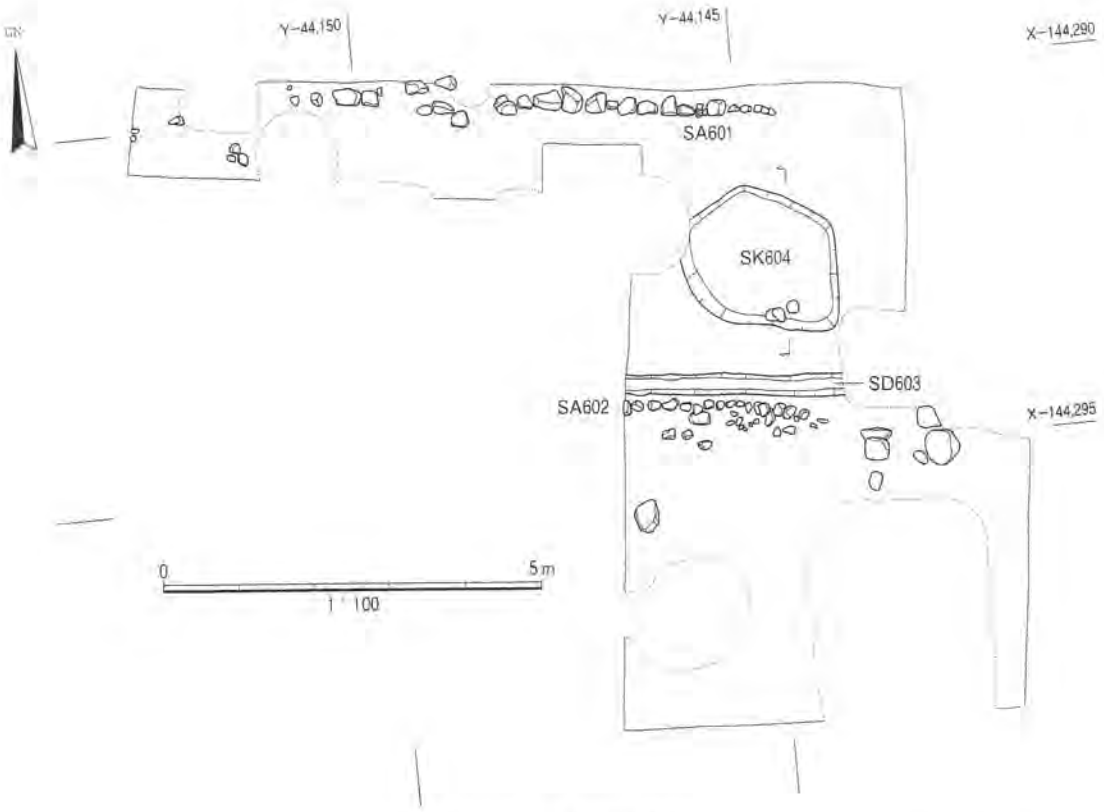


図５　第６層上面の遺構

中国産磁器・肥前磁器・肥前陶器・瀬戸美濃焼陶器・土師器が出土した。第4d層は第５層の暗褐色(7.5YR3/3)砂質シルトの偽礫からなり、第4e層はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト～中粒砂である。

第５層：炭を含む暗褐色(10YR3/3)粘土質シルトの焼土からなり、調査区の東部に分布する。層厚は約５～10cmである。17世紀前葉ごろの肥前陶器・土師器を含む。

第６層：17世紀初頭の盛土層および整地層で、第6a・6b層に分けられる。第6a層は厚さ１cmほどのオリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルトとシルトの互層で、上面が焦げて黒灰色を呈する。本層上面で敷地境の列石や土壙を検出した。第6b層はオリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂を含む砂質シルトからなる。

第７層：暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂からなる自然堆積層である。上面に薄く炭化物の堆積が認められる。

ii)遺構と遺物(図５～24)

a.第６層上面の遺構と遺物(図５・６)

石列SA601・602、土壙SK603、溝SD604を検出した。

SA601は、調査区北端で見つかった東西方向の石列である。全長5.7mで、10～30cmの自然石を並べている。東端は連続して0.8mの長さに割れた丸瓦・平瓦を並べる。南側に直線的な面を持つことから、調査地を南と北に分割する敷地境の石列と考えられる。石列の間には17世紀前葉の肥前陶器砂目灰釉皿と土師器十能が挟まっていた。

SA602は調査区の中央で検出した東西方向の石列である。全長2.5mにわたり約10cmの割石を並べ

る。石は被熱により変色している。石列の南側には20～40cm大の石が散見されるが、礎石として組み合うものはない。

SD603はSA602の北に沿う幅0.3m、深さ0.1mの溝である。埋土は暗灰褐色砂質シルトで、肥前陶器の砂目を持つ灰釉溝縁皿、初期伊万里碗、瀬戸美濃焼志野細片を含む。

SK604はSA01とSA602の間で見つかった東西2.2m、南北1.9m、深さ0.2mの土壙である。埋土は暗灰褐色砂質シルトで、17世紀前半までの陶磁器・瓦質土器・土師器が出土した(図7)。

1～3は土師器皿で底部は指オサエである。1は灯心痕があり、2・3はヨコナデによる段差が内面底部に残る。4～8は瀬戸美濃焼陶器で、4は志野菊皿、5・6は志野鉄絵皿、7・8は褐釉天目碗である。9～21は肥前陶器で、9は灰釉天目型小鉢、10は灰釉皿、11は鉄釉皿、12・13は砂目が残る灰釉溝縁皿、14は鉄釉溝縁皿である。このほか、灰釉溝縁皿には、砂目によって皿2枚が熔着したままのものがある。15～19は削り出し高台の灰釉碗、20は灰釉端反碗である。21は灰釉壷である。このほか中国産青花鋸歯文小皿、漳州窯青花大皿、備前焼徳利が見つかっている。

b.第4層の遺物(図8)

17世紀中葉～後葉の陶磁器・土師器が出土した。22～24は土師器皿で、23・24には灯心痕があり、24に糸切痕がある。25～27は京焼系陶器で、25は色絵碗、26は籠を模した鎬文を施した壷である。27は鉄絵皿である。28・29は肥前陶器で、28は京焼風鉄絵丸碗、29は砂目を持つ灰釉溝縁皿である。30～34は肥前磁器で、30は染付小杯、31は高台径の小さい染付皿、32・33は染付碗でそれぞれ「宣明」「大明年製」の銘がある。34は内面に片切彫を施す三股青磁三足皿である。35は丹波焼鉄漿壷、36は貝製杓子である。このほか漳州窯青花大皿、粗製青花碗、土師器十能が見つかっている。

c.第4層上面の遺構と遺物(図9～14)

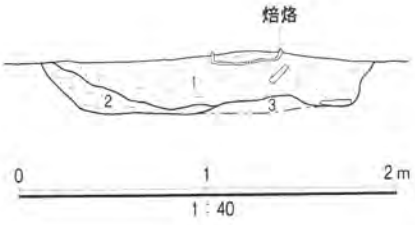
建物SB401、竈SL402、土壙403～407を検出した。

SB401は調査区の北部で見つかった礎石建物である。直径20～30cmほどの礎石を並べるが、第3層以上の攪乱により建物の規模は不明である。

SL402は調査区の南西で見つかった竈である(図10)。検出面での規模は東西2.0m、南北2.3mの方形で、深さ約0.4mである。南辺には赤く焼けた石が9個並び、西辺には壁石が3個残る。床面中央には東西方向に穴が4個並び、竈を支える石材の抜取り穴の可能性がある。抜取り穴より南には炭・灰が厚く堆積し、床面の標高は南がTP+1.6m、北はTP+1.8m以上と段差があることから、焚口は南側であったと考えられる。焚口から竈の奥を見たとき、奥壁中央が南北方向に突出していることから、竈は東西に2基並んでいたものと考えられる。竈の東には東西2.8m、南北2.0mの範囲で灰黄色の粗粒砂混じり粘土を貼った床面が残っていた。竈が放棄された直後の埋土からは18世紀前葉の陶磁器・土師器が出土した(図11)。

37は肥前陶器の鉄釉段皿で、内面を蛇ノ目釉剥ぎする。38～42は肥前磁器で、38～40は染付皿、41・42は染付碗である。38は二重角福文の銘があり、39・40・42は内面を蛇ノ目釉剥ぎする。43は京焼系色絵丸碗である。44は堺擂鉢である。

SK403は調査区の東南で検出した東西3.0m、南北3.0m以上、深さ1.4mの土壙である(図12)。下部



1：灰を含む暗灰褐色(2.5Y4/2)砂質シルト
2：中粒砂を含む灰オリーブ色(5Y4/2)砂質シルト
3：暗オリーブ色(5Y4/3)砂質シルト(第6層以下)

図6　SK604断面図

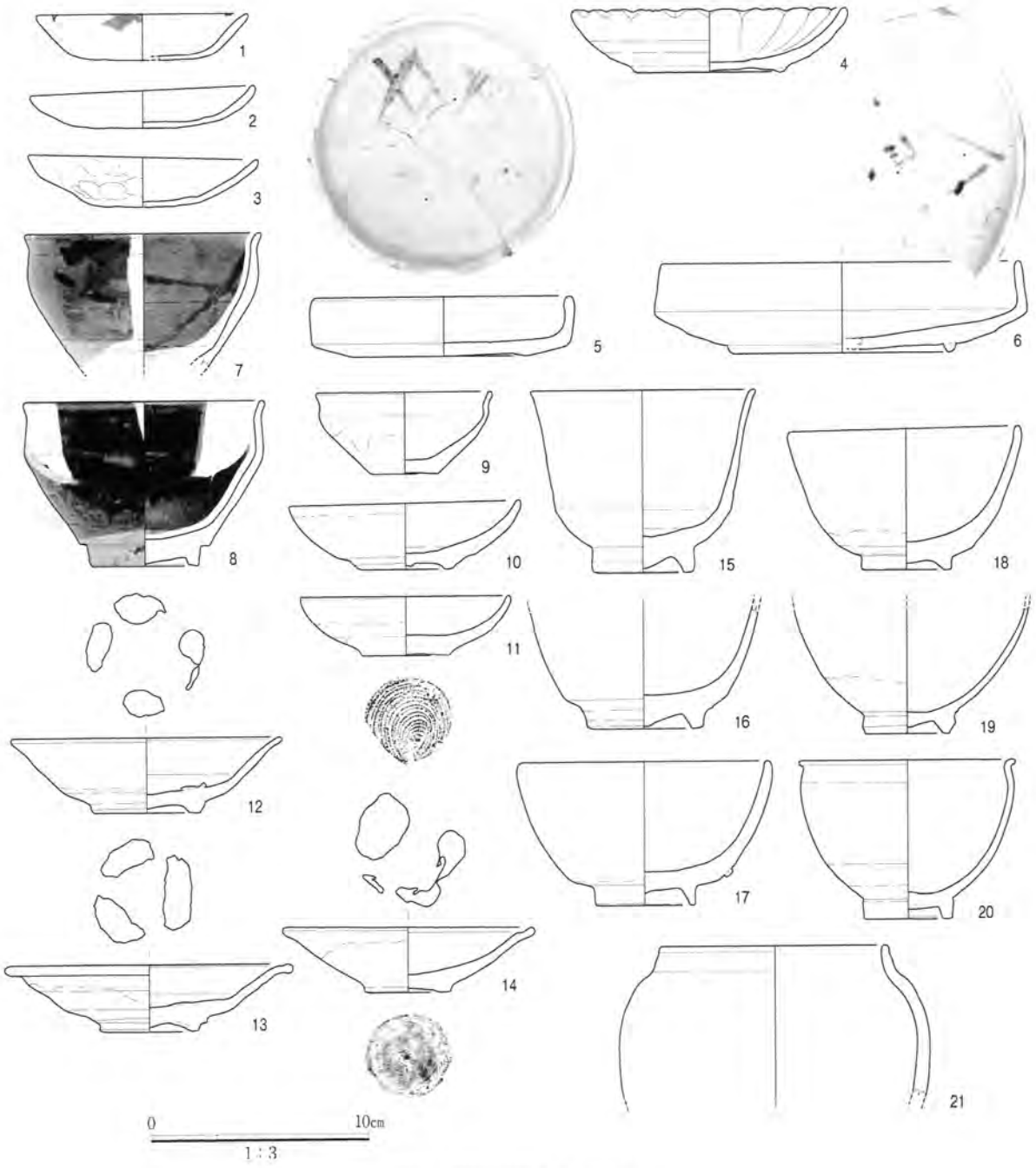


図7　SK604出土遺物実測図

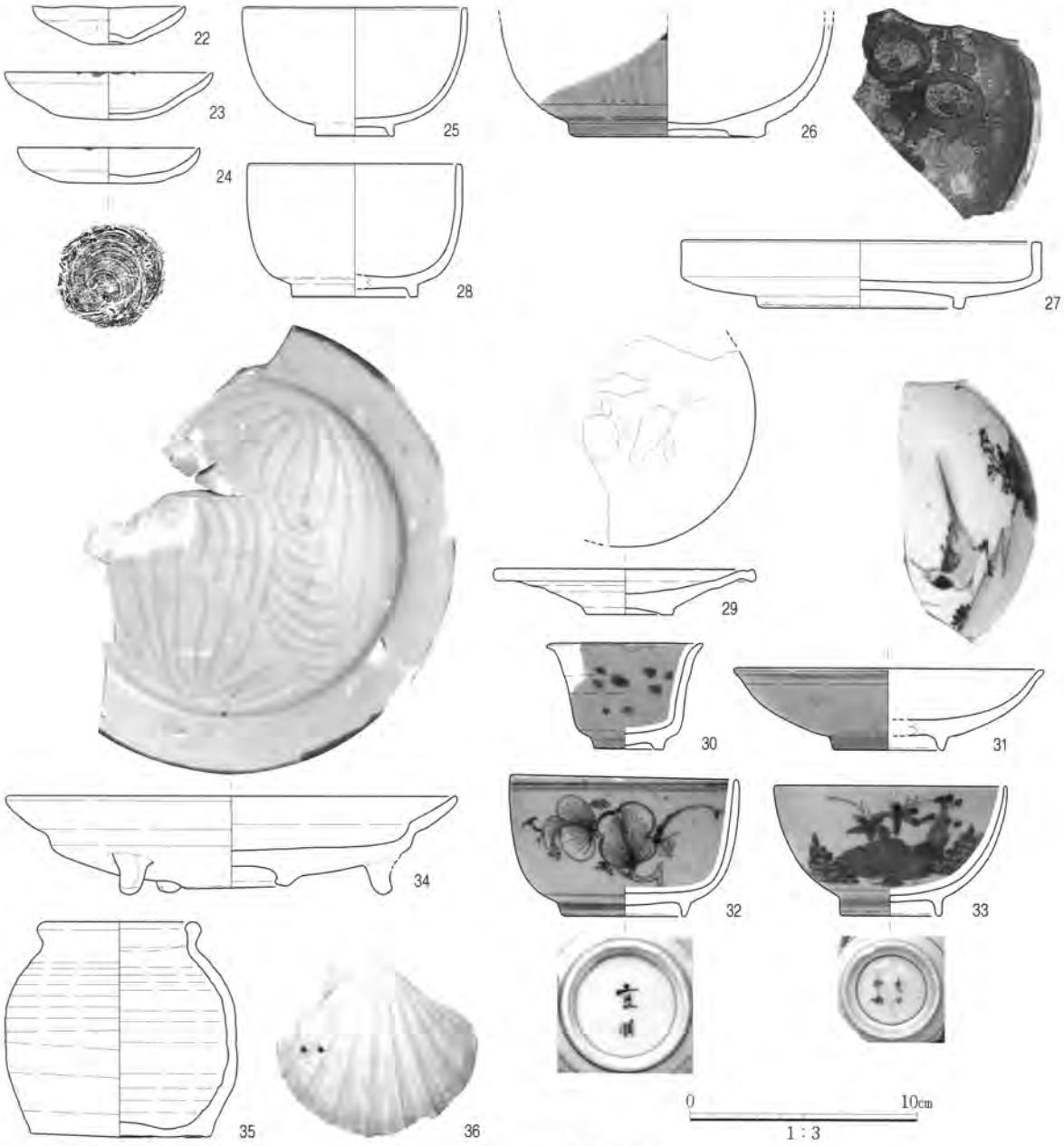


図8　第4層出土遺物実測図

はオリーブ褐色砂質シルトで埋められ、最終的に第3層で埋まる。17世紀後葉～18世紀前葉の陶磁器・土師器を含む。

45は土師器皿で、灯心痕がある。46は備前焼の鉢蓋で、内外面ともに重ね焼き痕がある。47は肥前陶胎染付の灰落しである。48は肥前陶器の京焼風鉄絵皿である。49～52は肥前磁器である。49は染付碗、50は青磁陰刻紋大鉢、51は青磁広口花生、52は染付長頸壺である。(図13)。

SK404は東西1.2m、南北0.7m、深さ0.3mの土壙である。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで、17世紀後半の陶磁器を含む。

55は軟質施釉陶器の灯明受皿である。56は瀬戸美濃焼の灰釉四方菊型押皿である。61は肥前陶胎染付の筒形碗である。蝶とコンニャク印判による唐子文を施す。63・65は肥前磁器の染付皿・鉢である。

SK405はSE202で西辺を壊された土壙である。東西0.5m、南北1.1m、深さ0.4mである。埋土は暗

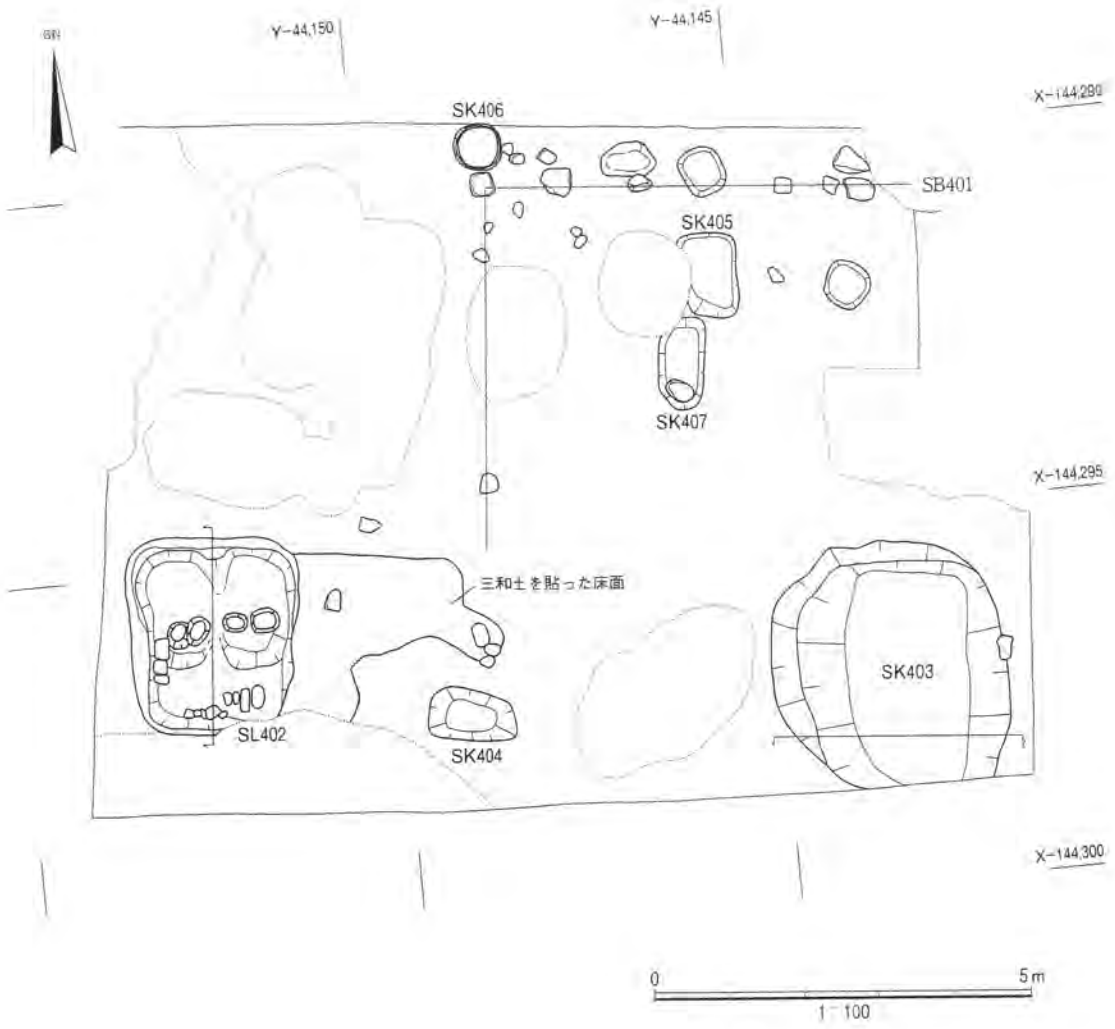


図9　第4層上面の遺構

灰褐色砂質シルトで、17世紀後半～18世紀前葉の陶磁器・土師器を含む。

53・54は土師器皿で、54には灯心痕がある。57は瀬戸美濃焼の灰釉灰落しである。58は肥前陶器の打刷毛目碗である。60は京焼系陶器の錆絵碗である。62は肥前陶胎染付の山水文灰落しである。59・64・66は肥前磁器染付碗で、59はコンニャク印判による松樹文を施す。

SK406は直径60cmの桶を埋設した土壙である。埋土は暗褐色(10YR3/6)砂質シルトで、18世紀前葉の肥前磁器草花文染付碗、肥前陶器灰釉丸碗が出土した。

SK407は東西0.5m、南北2.2m、深さ0.3mの土壙である。埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土質シルトで、南端に40cmほどの石が落込んでいた。17世紀前葉の肥前磁器染付碗、肥前陶器の砂目をもつ灰釉溝縁皿、唐津焼向付細片を含む。

d. 第3層の遺物(図15)

第3層は妙知焼によるものと思われる焼土の整地層である。18世紀前葉までの陶磁器・土師器・銅製品を含む。

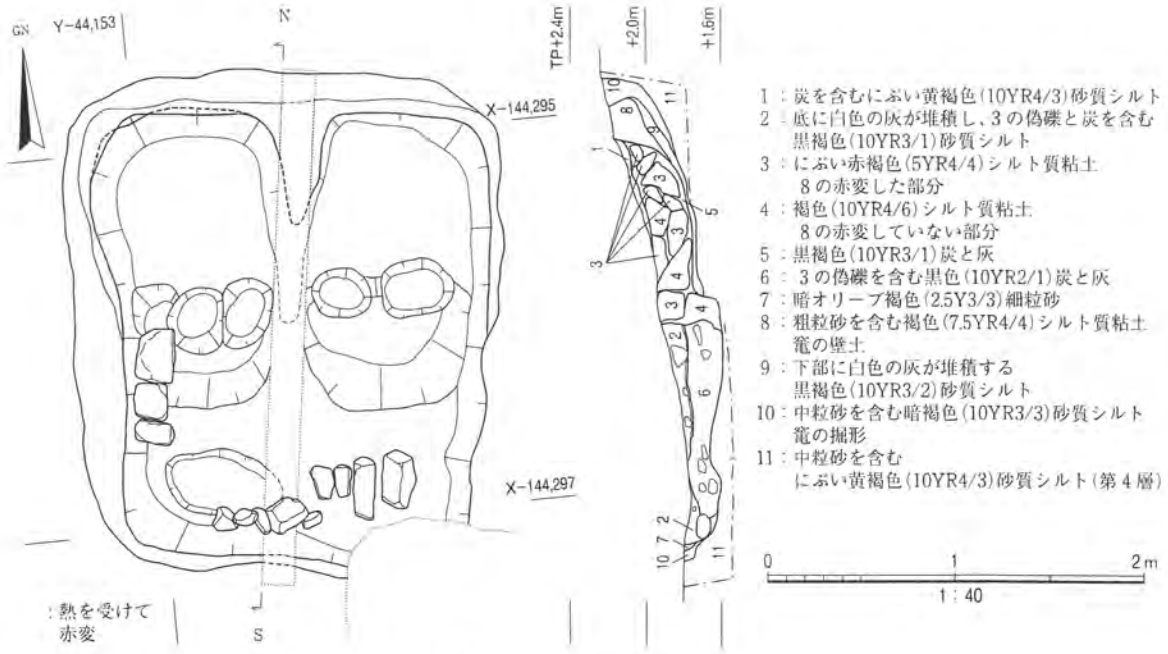


図10　SL402平面・断面図

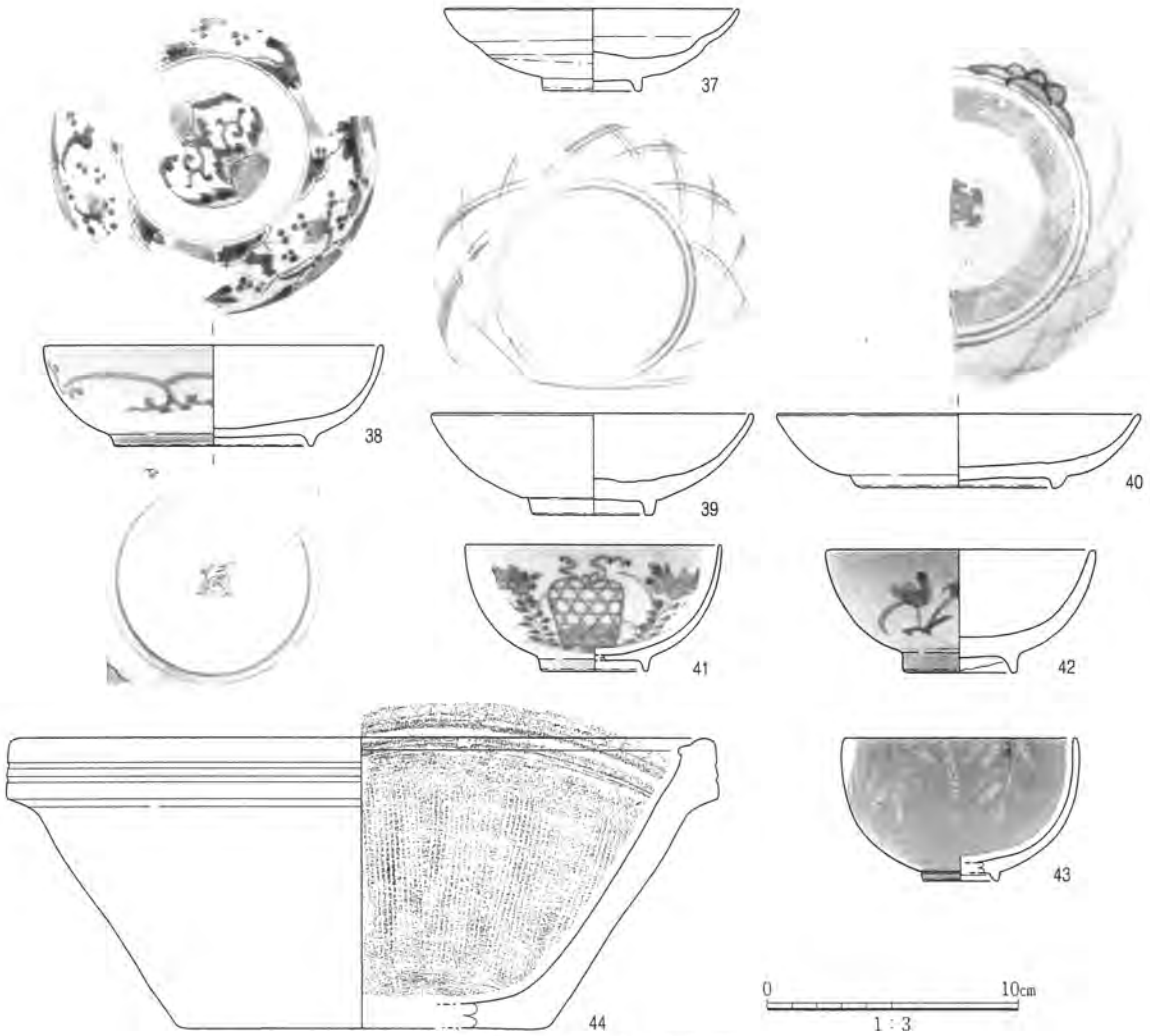
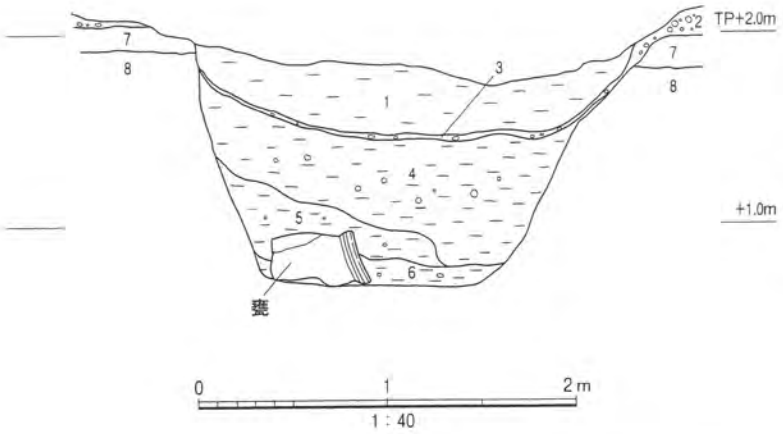


図11　SL402出土遺物実測図



1：中・粗粒砂を含む
灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト
2：焼土の偽礫からなる
にぶい赤褐色(5YR4/3)砂質シルト
第3層
3：焼土の偽礫を含む
黒褐色(10YR3/2)シルト
4：粗粒砂とシルトの偽礫を含む
にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト
5：粗粒砂を含む
にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト
6：粗粒砂を含む
オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト
7：第4a層
8：第4b層以下

図12　SK403断面図

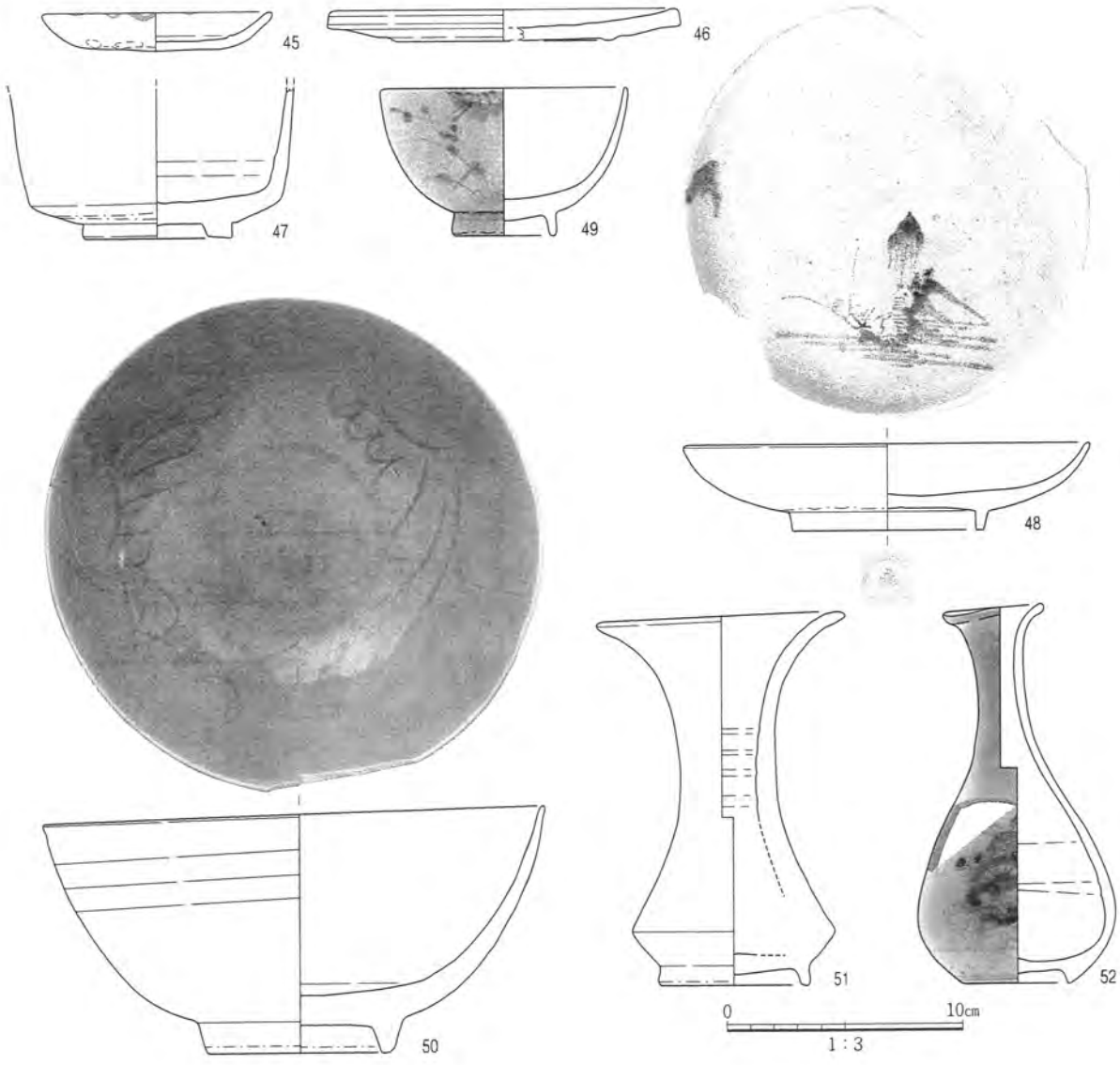


図13　SK403出土遺物実測図

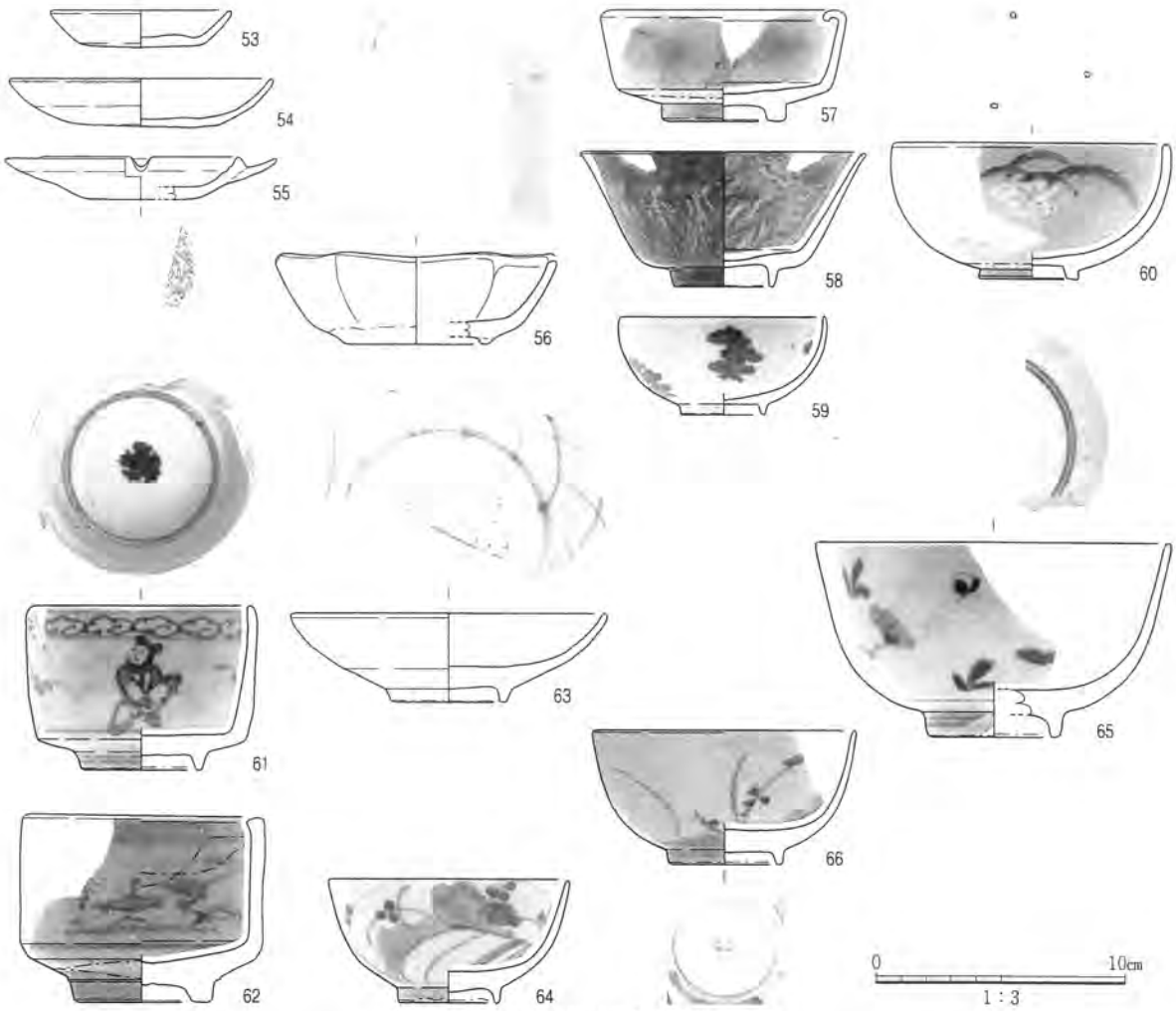


図14　SK404、SK405出土遺物実測図

SK404(55・56・63・65)、SK405(53・54・57～62・64・66)

67は肥前陶器段皿で、内面に赤色顔料が付着する。68は肥前陶胎染付の刷毛目文筒蓋物である。69は刷毛目大鉢である。いずれも内面に蛇ノ目釉剥ぎを行う。70～78は肥前磁器である。70は染付油壺、72・73はコンニャク印判を施す染付碗、71・74～77は染付碗、78は染付輪花鉢である。79は堺擂鉢である。このほか、瀬戸美濃焼黄釉二耳壷・灰釉小碗・擂鉢や、京信楽系腰折碗、銅製碗が出土している。

e.第3層上面の遺構と遺物(図16～20)

井戸SE301、土壙SK302～308を検出した。

SE301は調査区の北東で検出した、東西4.0m以上、南北4.0m以上、深さ1.0m以上の井戸である(図17)。調査用昇降階段の設置場所にあたるため、南東側1/4のみを掘り下げた。検出面から約0.6m下で直径1.0mに狭まるが、TP+0.8mより深くは掘れなかった。上部の埋土は砂質シルトの偽礫を含む暗褐色砂質シルトで18世紀前～中葉ごろの陶磁器が出土した。

80は京焼磁器の瓢箪文皿である。高台内面に放射状に削った痕跡がある。このほか高台にアルミナが付着した肥前磁器皿、砂目をもつ肥前陶器灰釉皿、瀬戸美濃焼天目碗、焼け歪んだ平瓦が出土した。

SK302は東西1.4m、南北3.5m、深さ0.8mの長方形の土壙である(図18)。内部には被熱により赤く

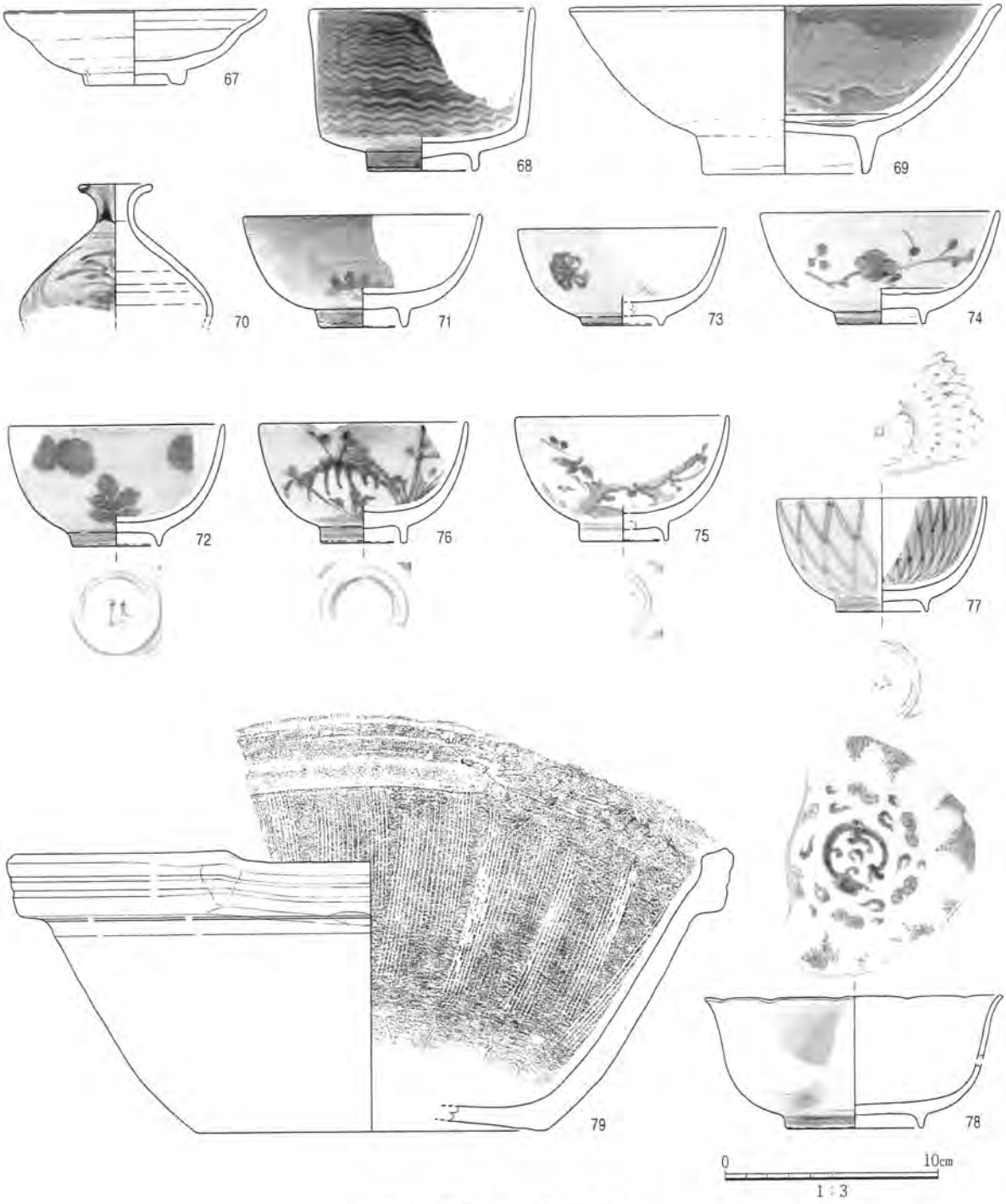


図15　第３層出土遺物実測図

変色・変形した瓦が大量に投棄されていた。そのほか、18世紀前葉ごろの陶磁器を含む。

96･97は瓦当面に「山」字と唐草文をあしらう軒桟瓦、98は瓦当面に「山」字をあしらう軒丸瓦である。このほか肥前磁器染付碗・白磁仏飯器、肥前陶器刷毛目碗・藁灰釉壷、京信楽系陶器の腰折碗、瓦灯の台部が出土している

SK303は東西1.1m、南北1.8、深さ0.6mの長方形の土壙である（図18）。内部には被熱により赤く変色・変形した瓦が大量に投棄されていた。そのほか、18世紀前葉ごろの肥前磁器染付碗・皿を含む。

SK304は東西2.2m、南北1.4m、深さ0.4mの土壙である。内部には被熱により赤く変色・変形した

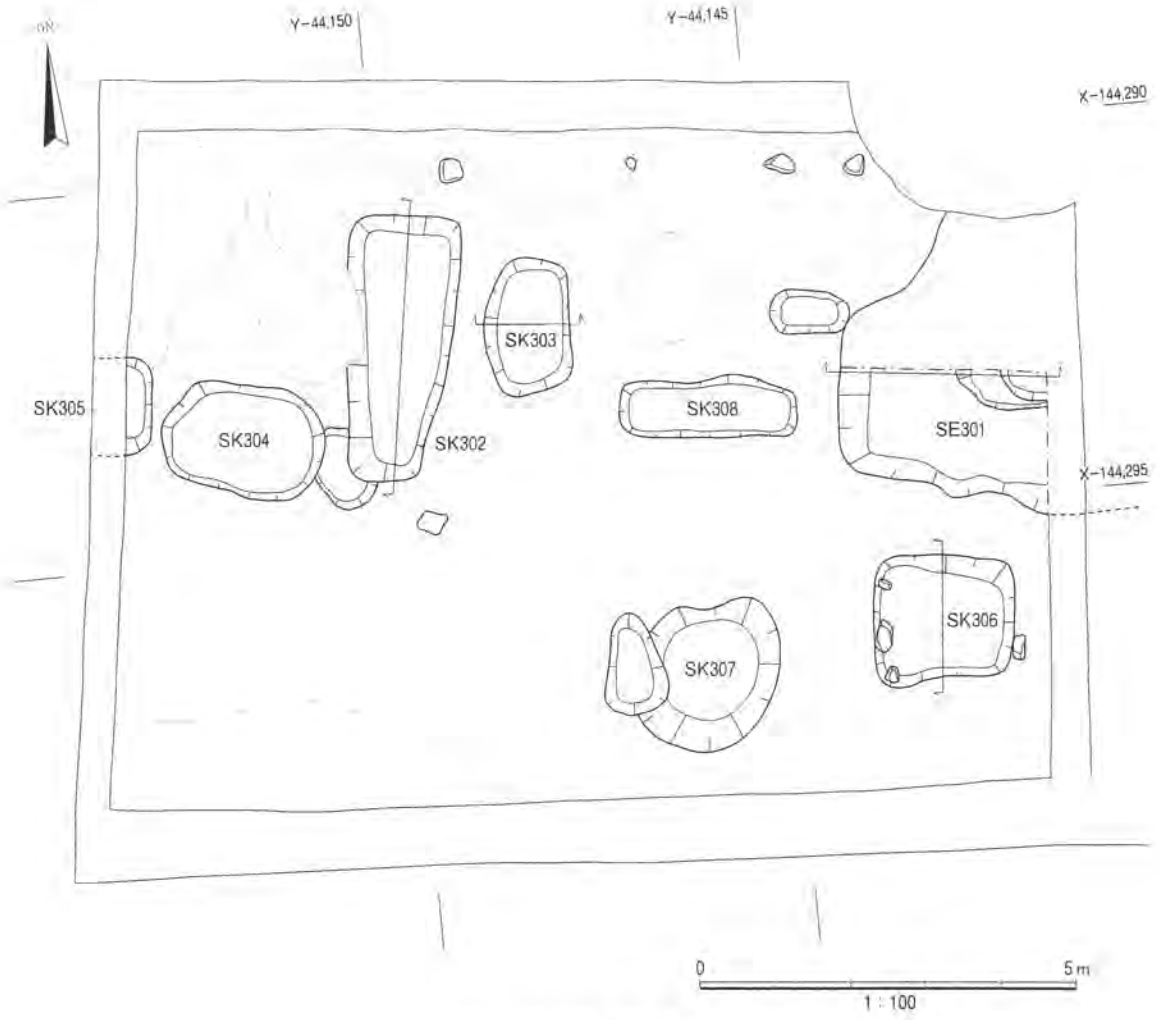


図16　第3層上面の遺構

瓦が大量に投棄されていた。18世紀前葉ごろの被熱した肥前陶器竹文香炉、関西系陶器の褐釉耳付き鍋が出土している。

SK305は東西1.5m以上、南北1.2m、深さ0.7mの土壙である。内部には被熱により赤く変色・変形した瓦が大量に投棄されていた。このほか中国産青花端反碗、肥前磁器鏑文碗、「大神宮」と染付した小徳利、土師器の灯明皿が出土している。

SK306は東西1.9m、南北1.6m、深さ0.2mの方形の土壙である。内部には焼土が詰まり、底面が被熱している。18世紀前葉の肥前磁器「大明成化年製」銘小皿、内面を蛇ノ目釉剥ぎした白磁碗、内面に布目のある土師器焼塩壺蓋、糸切り底の灯明皿が出土している。

SK307は直径2.0m、深さ1.0mの土壙である。瓦を含む中粒砂や砂質シルトで埋められていた。18世紀前～中葉ごろの陶磁器・土師器・土人形を含む。

81～82は土師器皿で、82に灯心痕が残る。83は土師器火消壺蓋である。84は備前焼鉢である。85・86は京信楽系の錆絵腰折れ碗、87は錆絵蓋物、88は錆絵染付半球碗である。89は肥前陶器の京焼風鉄絵碗である。90～95は肥前磁器で、90～94は染付碗、95は染付鉢である。このほか軟質施釉陶器皿、

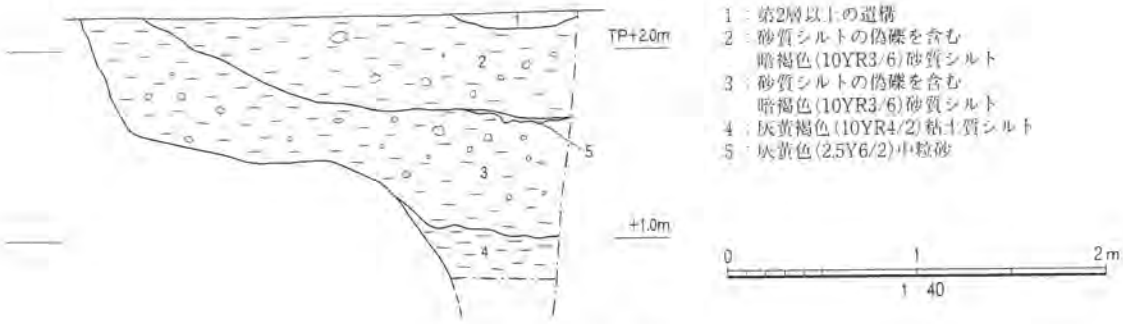


図17　SE301断面図

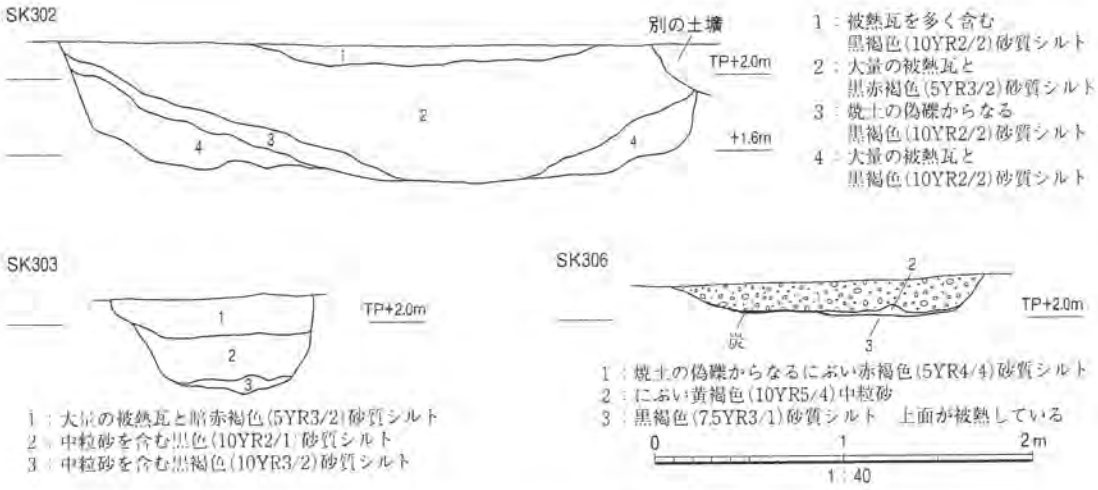


図18　SK302、SK302、SK306断面図

被熱した巴瓦、鳩・芸者・力士・天神・猿・臼・社などの土人形が出土している。

SK308は東西2.0m、南北1.3m、深さ0.2mの楕円形の土壙である。18世紀前葉の瀬戸美濃焼灰釉鉢や17世紀中葉の肥前磁器・肥前陶器が出土している。

f.第２層の遺物(図21)

99・100は土師器の皿と焙烙で、99には灯心痕がある。103は備前焼布袋徳利である。104は肥前陶器緑釉皿で、内面を蛇ノ目釉剥ぎする。105～111は肥前磁器である。105・106は染付端反碗蓋、107は色絵広東碗である。108は染付皿、109は内面を釉剥ぎする染付碗である。110は高台内面に「五良太甫呉祥□□」銘のある染付鉢である。文様構成や高台形から明末に造られた祥瑞手ではなく、18世紀末に肥前で焼かれた写しである。111は色絵小碗である。112は堺擂鉢、101は銅製雁首、102は軟質施釉陶器の羅宇である。このほ漳州窯青花大皿、中国青花磁器皿、信楽焼甕、関西系陶器把手付鍋が出土した。

g.第２層上面および第１層内の遺構と遺物

井戸SE201～203、土壙SK204・竈SL208を検出した。なお第１層内から掘り込まれている可能性のある遺構についても、第２層上面遺構と同一面で検出した。

SE201･202は井戸瓦を組む井戸である。井戸側の直径は75cm、井戸瓦は25cm×24cm、厚さ約３cmで、

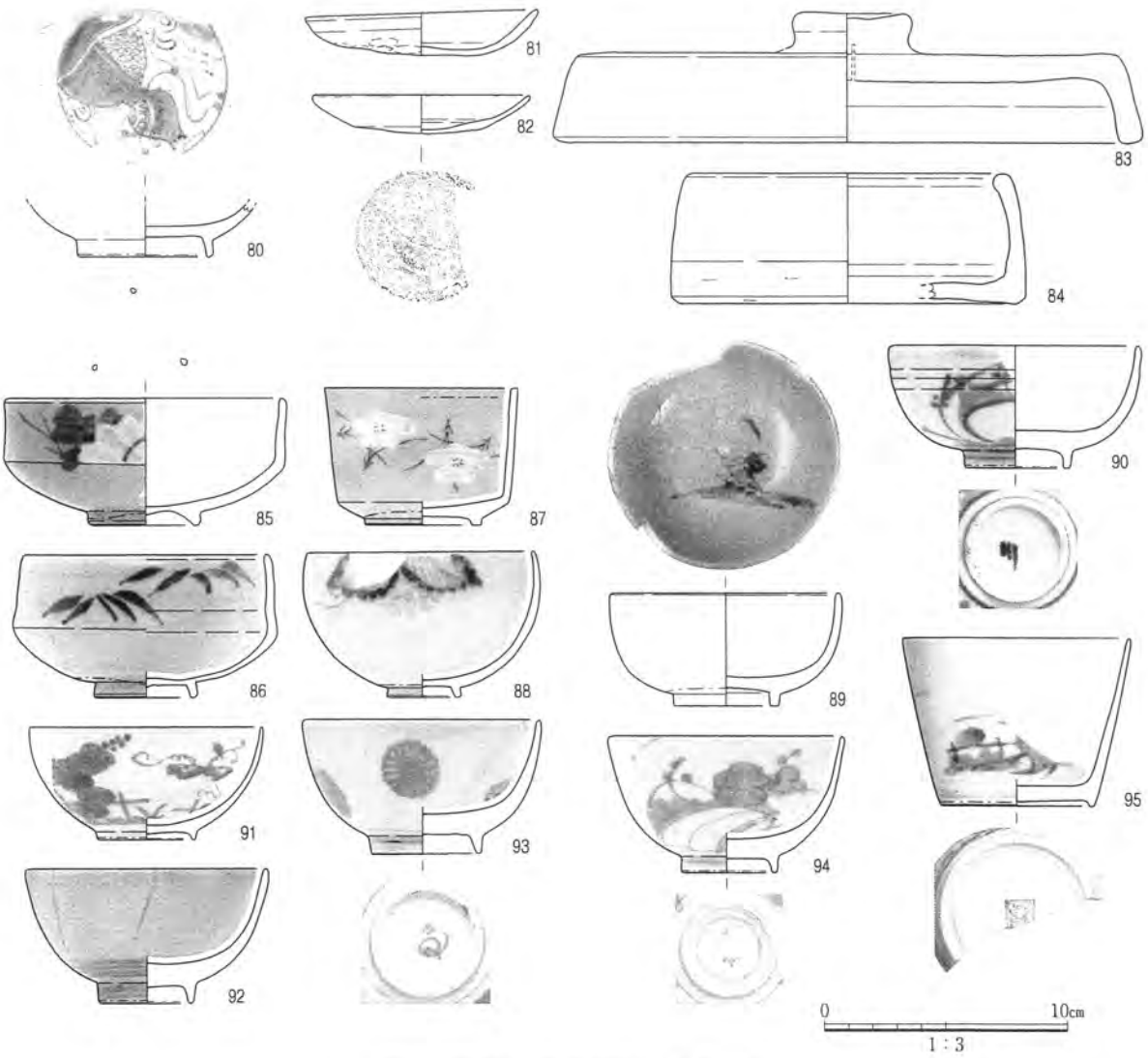


図19　SE301、SK307出土遺物実測図
SE301(80)、SK307(81～95)

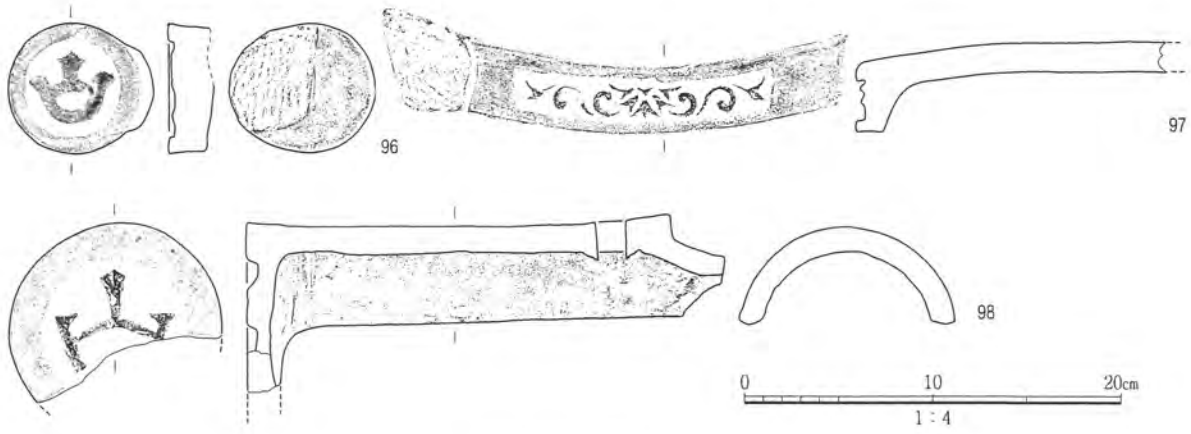


図20　SK302出土遺物実測図

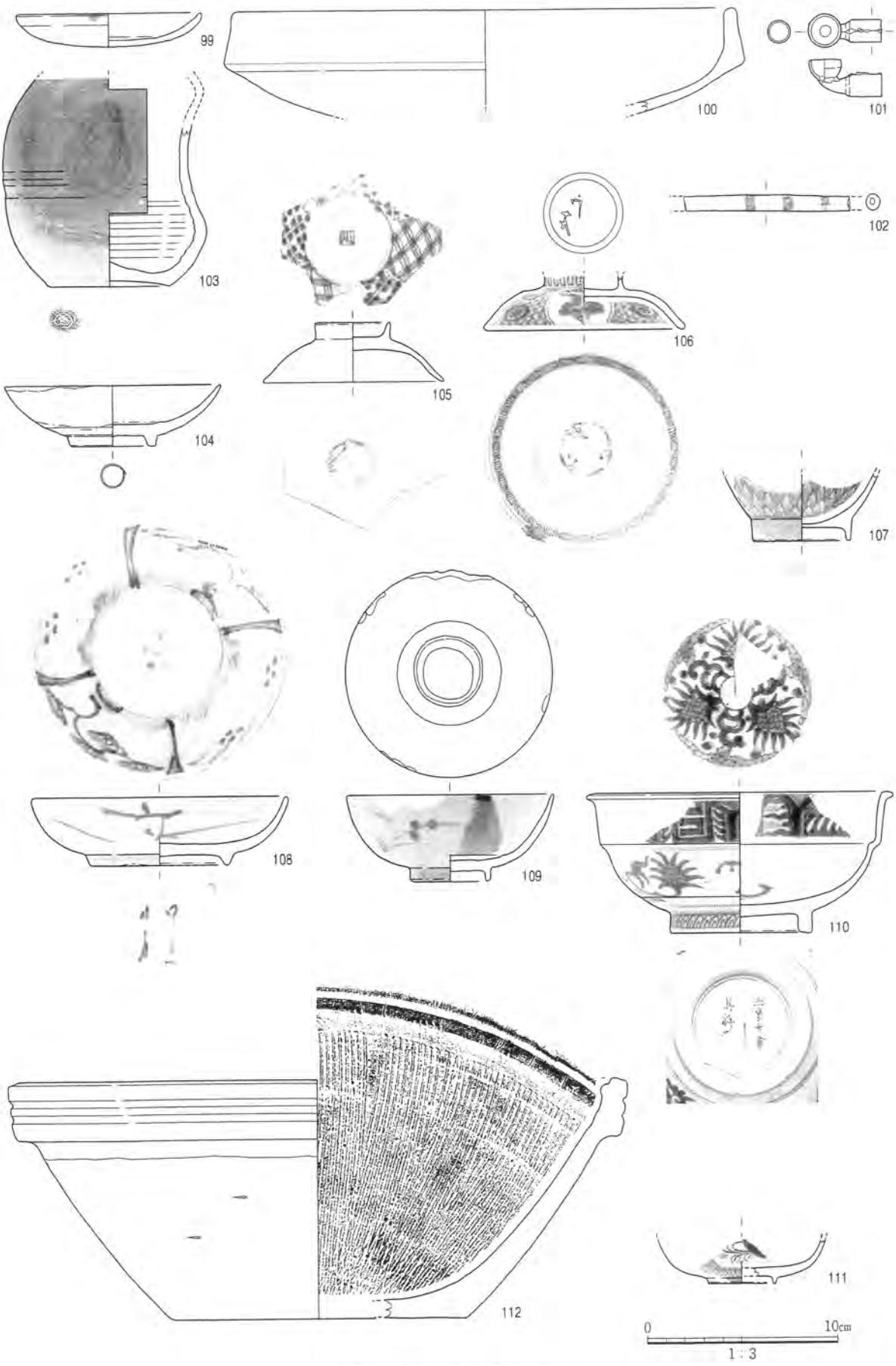


図21　第２層出土遺物実測図

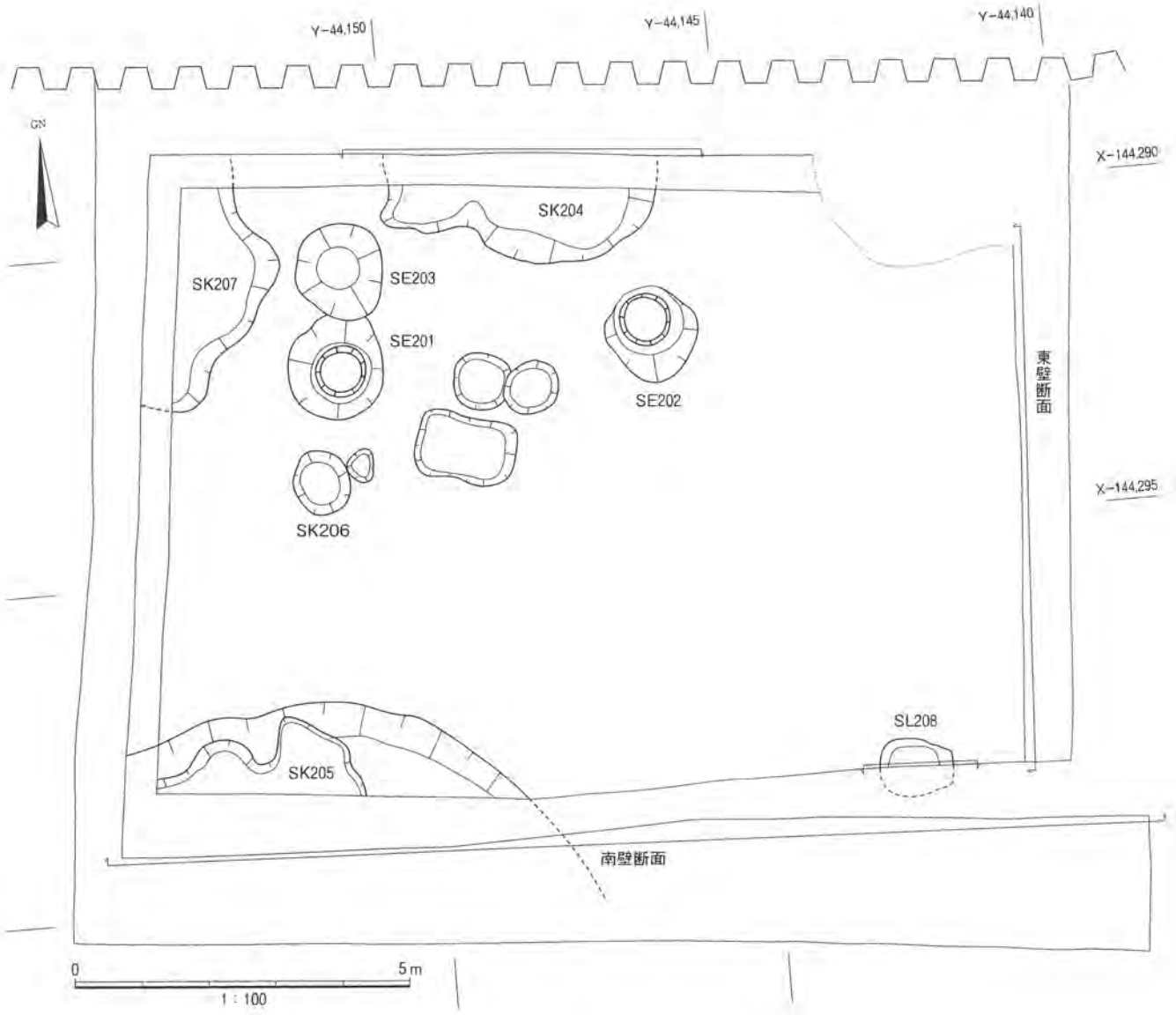


図22　第２層上面および第１層内の遺構

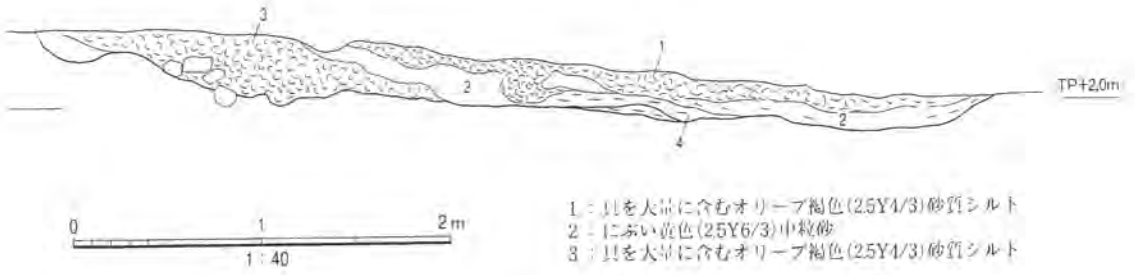


図23　SK204断面図

図24　SL208断面図

外面に刻目を入れる。廃棄時の埋土にはレンガ・ガラス・碍子を含み、SE201は炭とともに大量の羽口や炉の破片で埋め戻されていた。羽口は直径12cm前後で近世のものより太く、小礫混り粘土を用いていることから、明治以降の小鍛冶にかかわるものと考えられる。これらの井戸は19世紀ごろから明治にかけて機能していたものと考えられる。

SE203はSE201を切る最も新しい井戸である。検出面の直径は1.4m、内部は漆喰を多く含む砂質シルトで埋められていた。瀬戸美濃焼磁器の端反碗、型紙染付による鉢・蓋などが出土している。

SK204は調査区の北辺で検出した東西0.4m、南北2.0m以上、深さ0.4mの土壙である(図23)。内部は中粒砂とともに大量のアサリ・ハマグリ・バイガイ・アワビの貝殻で埋められており、貝類の残滓土壙と考えられる。18世紀末～19世紀初頭の肥前磁器染付碗・皿、青磁皿や、瀬戸美濃焼陶器の灰釉挙骨茶碗・灰釉皿を含む。

SK205は調査区の西南部から南に広がる土壙である。東西5.0m、南北3.5m以上、深さ0.7mである。「大明成化年製」銘を持つ肥前磁器碗、内面の蛇ノ目釉剥ぎ面に赤絵を施す小碗、菊文筒碗などを含む。

SK206は直径0.8m、深さ0.4mの土壙である。内部は漆喰を多く含む砂質シルトで埋まる。

SK207は調査区の西北に拡がる土壙である。東西3.3m以上、南北2.7m以上、深さ0.7mで、内部は中粒砂と砂質シルトで埋まる。18世紀中葉を中心とする陶磁器が出土した。

肥前磁器広東碗、蓋、信楽焼鉄漿壷などが出土した。肥前磁器には焼接したものがあり、18世紀末

～19世紀初めごろの土壙と考えられる。このほか、両耳の前に穴をあけた面状の天部顔面が出土している。

SL208は調査区の東南で検出した東西長1.2m、復元南北幅0.8m以上、深さ0.5m以上の炉である(図24)。側壁は厚さ0.1mの粘土質シルトを貼り、内側が被熱により赤褐色に変色する。

3)まとめ

本調査地では、おおむね17世紀中葉から19世紀にわたる遺構を検出した。

徳川期では、2枚の焼土層を確認した。第5層とした焼土層は、肥前陶器溝縁皿を中心とする17世紀中葉の遺物が含まれることから、第6層上面の遺構はそれ以前のものの可能性があり、SA601は徳川初期の屋敷境の石列の可能性が高い。第3層とした焼土層は肥前磁器コンニャク印判染付碗を中心とする、18世紀前葉の遺物が含まれることから1724年の妙知焼の焼土と考えられる。第3層上面と第4層上面にはほぼ同じ位置に礎石が並んでいることから、火事の前後で同じ場所に建物を立てなおしたことがわかる。調査範囲内では建物の全体を検出することはできなかったが、当地に17世紀中葉から18世紀中葉にかけて屋敷地および建物が存在したことがわかった。

また、近代以降に廃棄された井戸から金属加工に係わる大型羽口や炉壁の破片が大量に見つかっており、当該地における近代以降の産業についても新たな知見が得られた。

参考文献

大阪市文化財協会1995、『天満本願寺跡発掘調査報告』Ⅰ
大阪市文化財協会1997、『天満本願寺跡発掘調査報告』Ⅱ
大阪市文化財協会1998、『天満本願寺跡発掘調査報告』Ⅲ
大阪市文化財協会1998、『天満本願寺跡発掘調査報告』Ⅳ
大阪市文化財協会2003、『天満本願寺跡発掘調査報告』Ⅴ
大阪市文化財協会2008、『天満本願寺跡発掘調査報告』Ⅵ
大阪市文化財協会2010、『天満本願寺跡発掘調査報告』Ⅶ

南壁地層断面
（南東から）

第６層上面の遺構
（東から）

SL208とSK403の断面
（北から）

SL402完掘状況
（南から）

第３層上面の遺構
（東から）

SK302の断面
（北東から）

北区天満橋一丁目における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(TW11－１)報告書

調 査 個 所　大阪市北区天満橋１丁目628－１ほか
調 査 面 積　150㎡
調 査 期 間　平成23年６月20日～７月14日
調 査 主 体　財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、松本啓子

1)調査に至る経緯と経過

調査地は大阪市北区天満橋一丁目に所在し、南流する旧淀川である大川の右岸に当たる地点(図1)にあって、国道1号線を挟んで南に拡がる天満本願寺跡推定範囲の北限付近に位置する。東へ約100mの地点で行ったTW08－1次調査では、豊臣前期まで遡ると推定される堤防跡が検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]。このほか近隣には、北西約500mに弥生時代から中世にかけての集落遺跡である同心町遺跡、西約500mに弥生時代～近世の天神橋遺跡が所在する。

大阪市教育委員会による試掘調査において、現地表下約0.6mより下に中世から近世にいたる複数の遺構面が認められたため、本調査を行うことになった。

本調査は平成23年6月20日から開始した。敷地の東部に150㎡の調査区を設定し(図2)、試掘結果に基づいて現地表下0.6mまでの地層を重機によって掘削した。その後、6月23日から人力による調査を開始した。現地表下約2.5m付近で確認されている自然堆積層までを地層ごとに慎重に掘り下げながら遺構や遺物の検出を行い、図面や写真などの記録を取った。発掘調査に係わる現地での作業は、平成23年7月14日に終了し、同日、機材などの撤収と埋戻しを行い、調査を完了した。

なお、本報告で使用した方位は座標北を基準とする。標高はTP値(東京湾平均海面値)で、本文・図中ではTP+○mと表記する。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

調査地の現地表の標高はTP+3.2mである。層厚0.6～0.8mの近現代の地層以下、TP+0.5mまでの地層を第1～6層に分けた。

図1　調査地位置図

写真1　調査区北端の石組暗渠(東から)

図２　調査区配置図

第１層：灰褐～淡褐色シルトを主体とする整地層で、最大層厚は30cmである。調査区全域に分布するが、遺構の残りはよくなく、北壁際で検地石を組んだ暗渠(写真１)と、南壁に礎石が見られたにすぎない。本層から18世紀末～19世紀の遺物が出土した。なお、暗渠の真上に現代のマンホールが設置されていたため、暗渠は掘削できなかった。

第２層：第2a層と第2b層に細分した。第2b層は調査区のほぼ全域に分布する整地層であり、第2a層は一部を掘り込んだ後に埋め立てたものである。図６に第2b層の分布の東端を示した。第2a層が灰褐色砂質シルト～灰白色砂質礫、第2b層は暗灰黄～灰褐色砂質シルトを主体とする。層厚は第2a層が最大45cm、第2b層が最大90cmである。本層は、第2a層から肥前京焼風陶器や桟瓦などが出土し、第2b層から瀬戸美濃焼褐釉陶器３、肥前陶器平碗８、肥前磁器染付瓶12が出土したほか、第2b層中の土壙SK213から桟瓦が出土したことから、18世紀末～19世紀と考えられる。

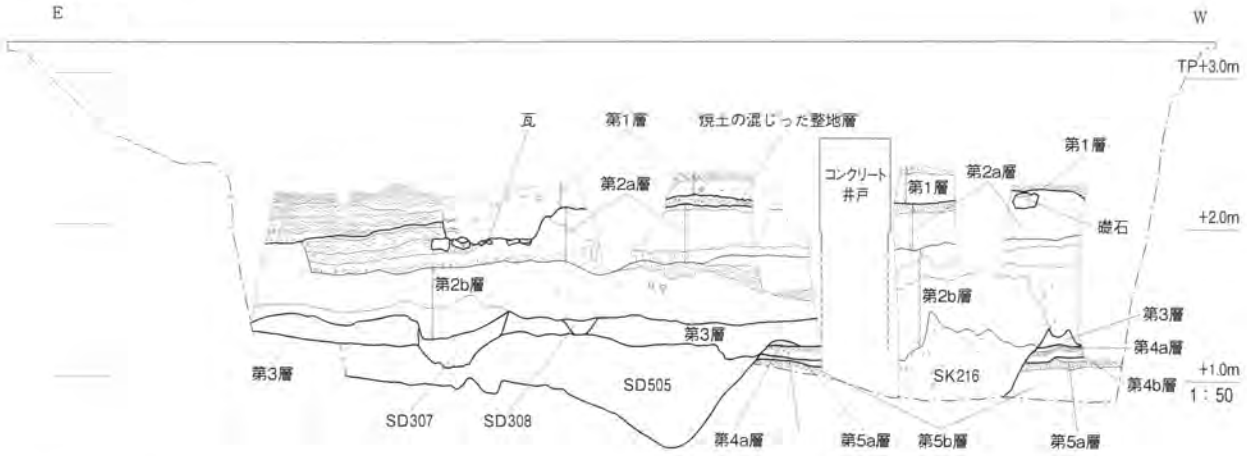
南壁の中央部で、第2a層と第１層の間に最大層厚７cmの焼土の混じった整理層が見られ、火災があったことがわかった。

第３層：灰黄色粘土質シルトが主体の整地層で、最大層厚は22cmである。本層の上面で溝・土壙が見つかった。瀬戸美濃焼陶器鉄絵褐釉菊皿１、肥前陶器灰釉皿５、土師器皿25など豊臣後期(16世紀末～17世紀初頭)の遺物が出土し、これらが本層の時期を示すものと考えられる。

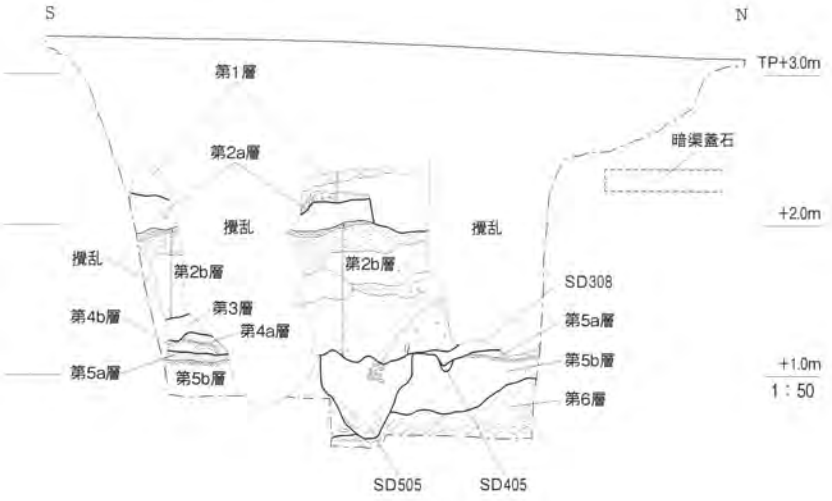
主な遺構		岩 相	主な出土遺物	時 期
	第１層	含砂礫灰褐色～淡褐色シルト	平瓦、土師、白磁碗	19世紀以後
SP210など　礎石	第2a層	灰褐色砂質シルト～灰白色砂質礫	軒桟瓦、肥前、備前、京焼	18世紀後半～19世紀
SP406・SK410など	第2b層	暗灰黄色～灰褐色砂質シルト	肥前磁器、肥前陶器	18世紀後半～19世紀
SK213など　SD308など	第３層	灰黄色粘土質シルト	瀬戸美濃、中国製白磁、肥前陶器	16世紀末～17世紀初頭
礎石	第4a層	含砂 暗黄褐色シルト	漳州窯系磁器	16世紀末～17世紀初頭
SD405	第4b層	含礫・酸化マンガン暗褐色砂質シルト	備前陶器、瀬戸美濃、土錘、瓦器	16世紀末～17世紀初頭
SD504など　SD505	第5a層	含砂礫 暗黄褐色シルト	土師器	16世紀末
	第5b層	含礫 暗褐色シルト質砂	近世土師皿、土師器、須恵器	16世紀末
	第６層	灰褐色細粒～粗粒砂(河成層)	遺物なし	

図３　地層と遺構の関係

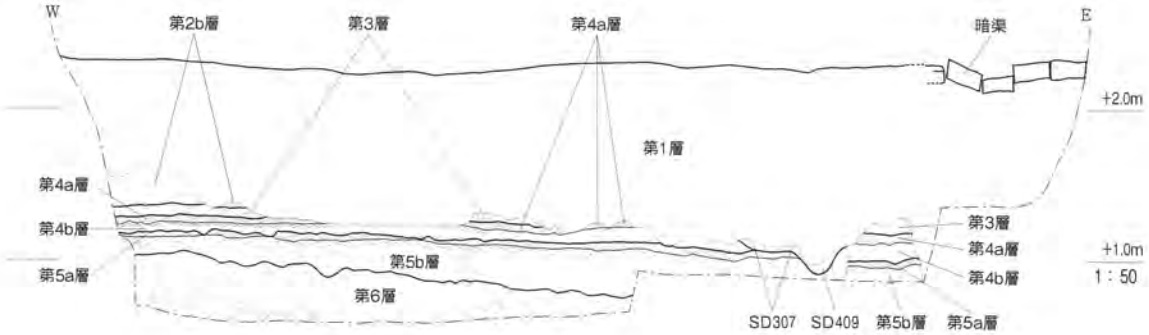
南壁断面



西壁断面



北壁断面



SD505：砂・礫を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粘土～砂質シルト
SD405：灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルト
SD409：酸化鉄を含む灰黄色(2.5Y6/2)砂質粘土
SD307：砂・酸化マンガンを含む暗褐色(10YR4/4)シルト質粘土
SD308：砂を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト
SD216：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂～シルト質粘土

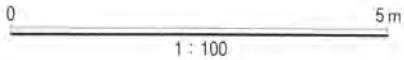


図4　地層断面図

第４層：整地層で、第4a層と第4b層に細分した。第4a層は砂を含む暗黄褐色シルト層で、酸化鉄の斑文が見られた。第4a層は整地の最終段階に積んだ地層で、上面は生活面となっていた。第4b層は礫やマンガンを含む暗褐色砂質シルト層である。層厚は、第4a層が最大７㎝、第4b層が最大13㎝である。第4a層上面で溝・土壙・柱穴・礎石が見つかった。これらの遺構や第4a・4b層から豊臣後期(16世紀末～17世紀初頭)の遺物が見つかった。このうち、第4a層からは漳州窯系磁器碗10が、第4b層からは土錘24が出土した。

第５層：整地層で、第5a層と第5b層に分かれる。第４層と同じく、第5a層が整地の最終段階の地層で、上面が生活面となっていた。第5a層は砂や礫を含む暗黄褐色シルト層で、第5b層は礫を含む暗褐色シルト質砂層である。第5a層の層厚は５～８㎝、上面の標高はTP+1.2～1.0mで、東に向かって緩やかに下がる。第5b層は西北部がもっとも薄く12㎝であるが、南部や東部に行くにつれて厚くなり、西壁の中央部では55㎝以上、北壁の中央部では30㎝以上になる。第5a層上面で溝や小穴が見つかった。本層は遺物が少なく、古代の土師器や須恵器の破片とともに第5b層から16世紀末ごろの近世の土師器皿が数点出土した。豊臣期の整地層と考えられる。

第６層：灰褐色細粒～粗粒砂の水成層で層厚は40㎝以上ある。大川(旧淀川)の営力によって堆積した河成層である。本層から遺物は出土していない。

ii)遺構と遺物(図５～10)

各面のおもな遺構を記す。

第5a層上面では溝SD504・505、小穴SP507・508が見つかった。

SD505は、幅1.1m、深さ0.6～0.7mの、西で北に少し振るほぼ東西方向の溝である。埋土は砂・礫を含むにぶい黄褐色のシルト質粘土～砂質シルトである。水の流れた形跡は見られなかった。溝の中には多くの瓦や石、陶磁器などの遺物が投入されており、人為的に埋めたものと考えられる。出土した遺物のうち、備前焼の鉢13・擂鉢14、肥前陶器碗６、中国産白磁皿９、漳州窯系磁器大皿18、土師器火入17、唐草文軒平瓦19、内面に布目が残る巴文軒丸瓦20と丸瓦22を図示した。巴文軒丸瓦20は丸瓦部外面に縄目文叩きの痕跡と焼成前に描かれた花弁の線刻がある。これらは中世後半の瓦とみられるものであるが、肥前陶器が出土しているので、SD505は豊臣後期の遺構と考えられる。

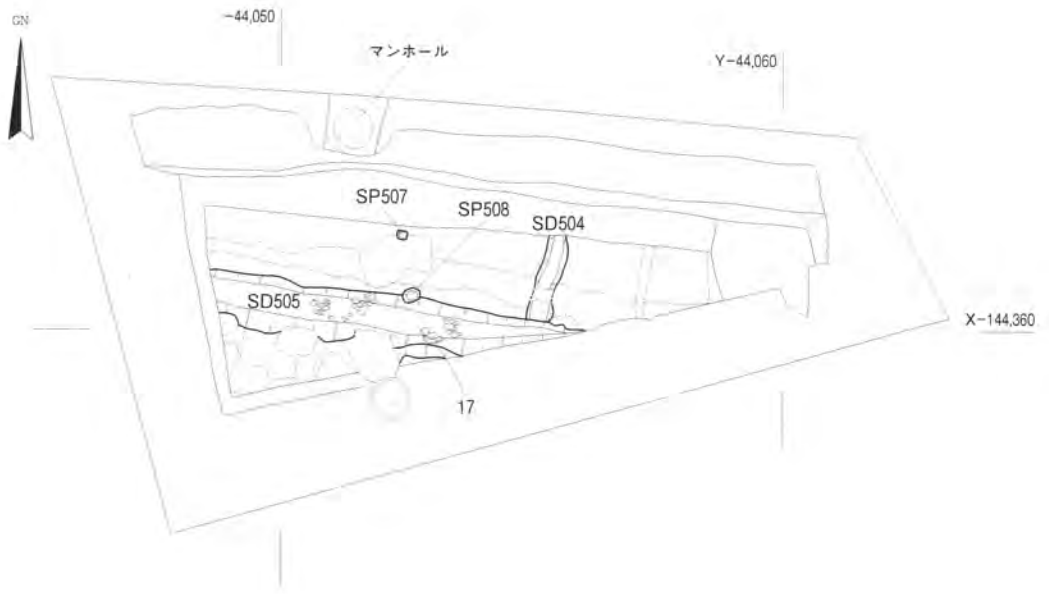
SD504は、幅約0.5m、深さ0.1m未満の浅い溝で、SD505とほぼ直交する。埋土は暗灰褐色砂質シルトで、酸化マンガンの斑文が顕著に見られた。水の流れた形跡は見られなかった。古代の土師器や須恵器の破片が出土した。

SP507は、東西0.20m、南北0.15m、深さ0.2mでの小穴で、埋土は灰褐色～褐色粘土質シルトである。また、SP508は、直径約0.3mの小穴で、深さは約0.1m、埋土は灰褐色砂混り粘土質シルトである。小穴からの出土遺物はない。

第4a層上面で溝SD405・409、礎石SP403・408、柱穴SP406、土壙SK410・411が見つかった。

SD405は、幅0.3～0.6m、深さ0.1m未満の、西で北に少し振るほぼ東西方向の溝で、その方向はSD505に似る。埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトである。SD405から豊臣後期の瀬戸美濃焼志野焼菊皿２が出土した。

第5a層上面



第4a層上面

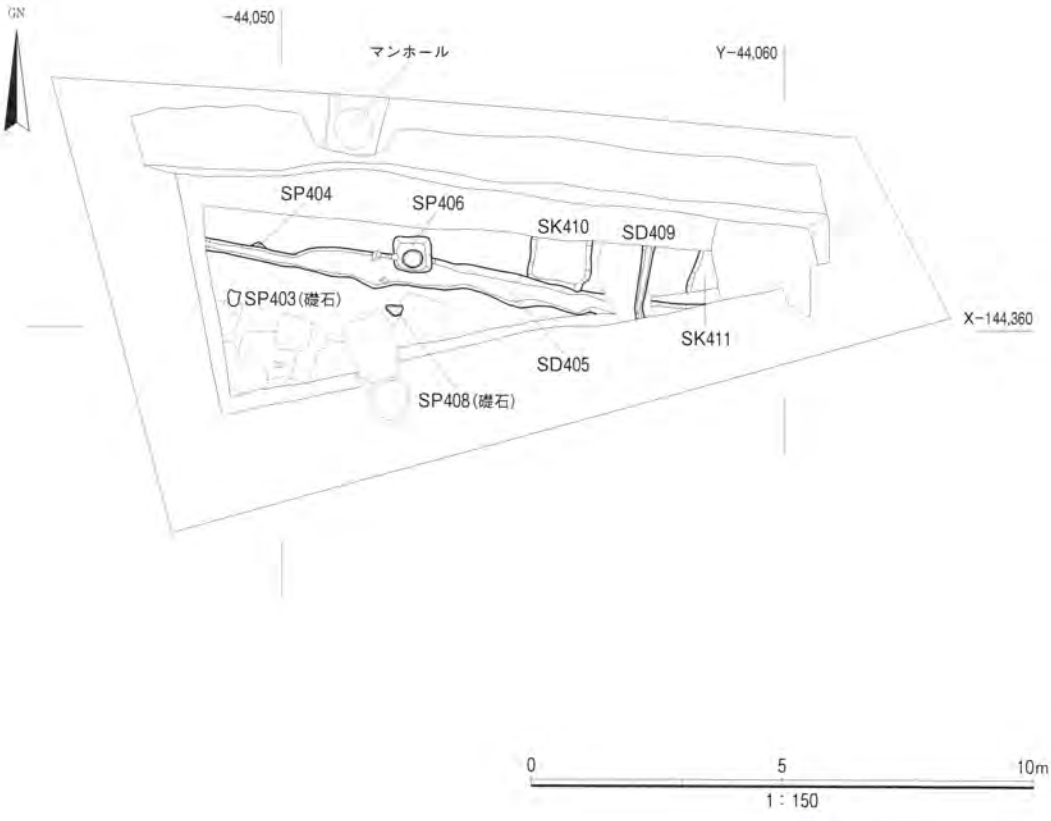


図5　各層の遺構平面図(1)

SD409は、幅0.2m深さ約0.1mの溝で、SD405とほぼ直交する。埋土は灰黄色砂質粘土で、酸化鉄の斑文が見られた。出土遺物はない。

SP403・408は、一辺が30～40cmの花崗岩を上面が平坦になるように配置した礎石で、両者は約3.2mの間隔である。この２つの礎石を結ぶ線はSD405から南へ約0.9m離れてほぼ平行する。

柱穴SP406は、深さが約0.3m、一辺が約0.7mの方形の柱穴掘形の中心に、直径約0.4m、深さ約0.3mの柱抜取穴がある。埋土は、抜取穴が暗褐～茶褐色シルト質砂で、掘形は灰黄色砂混り粘土質シルトである。出土遺物はない。

SK410は、深さが約0.2m、東西1.2m、南北1.0m以上の方形土壙である。埋土は砂を含む灰黄色粘土質シルトで、須恵器片が出土した。

SK411は、東西0.7m以上、南北0.9m以上、深さが約0.1m未満の土壙で、埋土は砂を含む灰黄色シルト質粘土である。遺物は出土しなかった。

第３層上面では土壙SK306と溝SD307・308などが見つかった。

SK306は、SD307の真上にある、東西0.7m、南北0.6m以上、深さ約0.3mの土壙で、長辺45cm、短辺40cmの花崗岩が置かれていた。埋土は粘土を含む暗灰褐色～灰褐色砂質シルトである。瀬戸美濃焼陶器・肥前陶器、平瓦、瓦器、土師器などが出土した。これらは豊臣後期のものである。

SD307は、幅0.9m、深さ約0.2mの、やや蛇行するがほぼ南北方向の溝である。埋土は砂や酸化マンガンを含む暗褐色シルト質粘土である。備前焼や瓦、瓦器、土師器、須恵器などが出土した。出土遺物のうち、肥前陶器灰釉碗４を図示した。豊臣後期のもので、この溝の埋まった時期を示す。

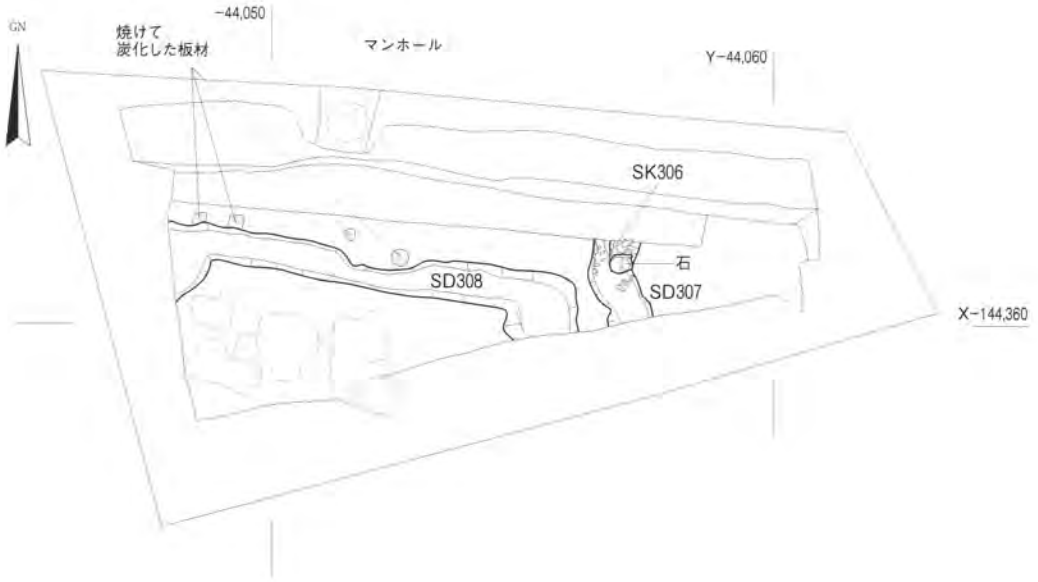
SD308は、SD405の真上にあって、 SD405同様にほぼ東西方向に掘られた溝である。幅が約0.8m、深さが約0.2mで、東端はほぼ直角に南へと曲がる。東端の肩から約８m分を検出したが、西端も南側が膨らむので、ここで曲がっているのかもしれない。埋土は砂を含むにぶい黄褐色粘土質シルトで、多くの石や瓦片が投入されていた。これらに混じって土器や陶磁器が出土した。これらのうち、備前焼擂鉢15、瓦質土器擂鉢16、肥前陶器碗７、漳州窯系磁器皿11、内面に布目が残る丸瓦23を図示した。これらからSD308は豊臣後期の遺構と考えられる。

また、SD308の北肩付近の第３層上面で、焼けて炭化した板材が見つかった。

第２層は、第2a層上面で小穴SP201～210・215が見つかった。径が0.1～0.5m、深さが0.2～0.3mのもので、埋土は含砂灰黄色粘土質シルトである。近世末期(18世紀後半～19世紀)の肥前磁器や肥前陶器、瓦など破片が出土した。

第2b層上面に遺構はなく、調査区の南端で第2b層中の土壙(SK212～214・216～219)が重なって見つかった。いずれも一辺が0.6m以上の長方形の土壙で、深さは浅いもので約0.2m、深いものは約0.6mあり、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂～シルト質粘土である。有機物は含まれないので、いわゆる廃棄土壙ではない。鉄釘、瓦器、瓦、土師器、須恵器などの破片が出土し、瓦片に桟瓦が含まれることから、近世末期(18世紀後半～19世紀)の遺構であることがわかる。第２層の出土遺物のうち、第2b層中のSK217から出土した丸瓦21は、外面に縄目文叩き、内面に布目の痕跡といった中世後期以前の要素をもつ。再利用されたものか下位層由来のものと考えられる。

第３層上面



第２層の遺構と第１層の暗渠

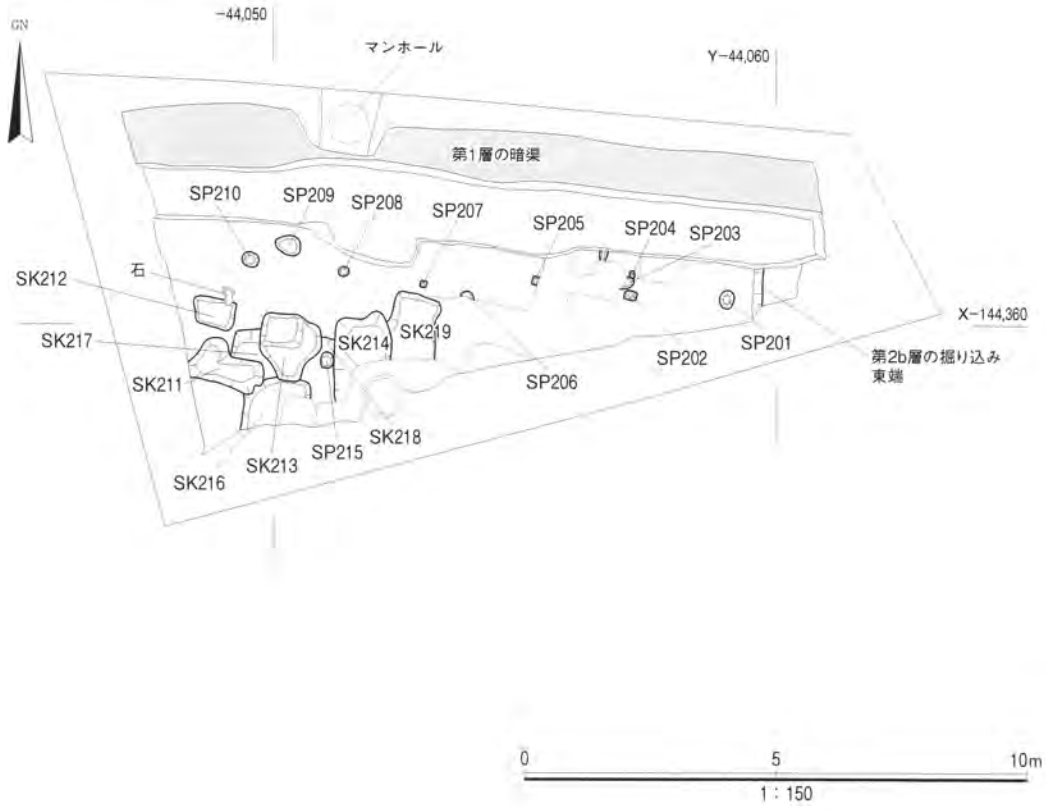


図６　各層の遺構平面図(２)

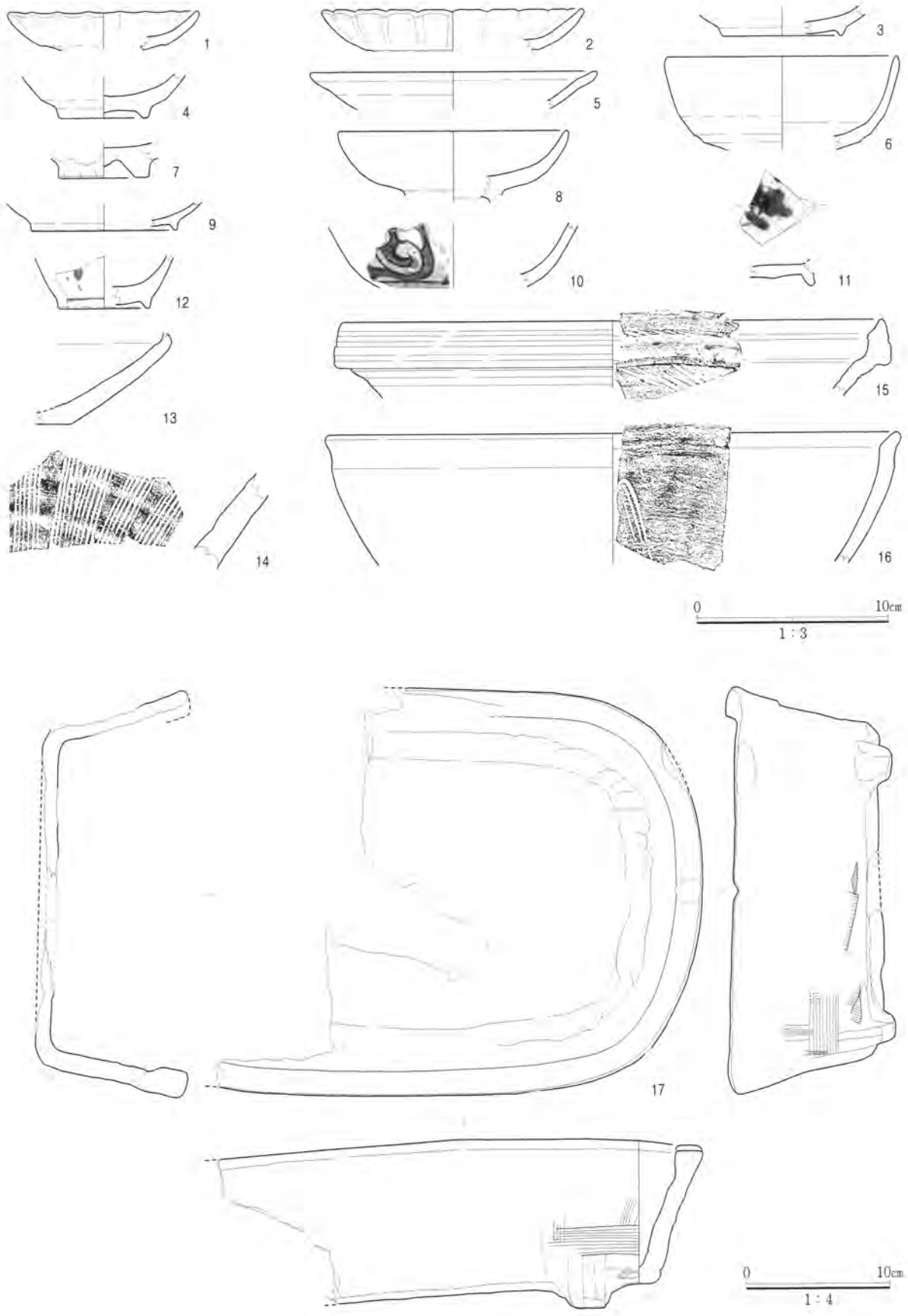


図7　出土遺物実測図(1)（陶磁器・土器）

SD505(6・9・13・14・17)、第4a層(10)、SD405(2)、第3層(1・5)、
SD308(7・11・15・16)、SK307(4)、第2b層(3・8・12)

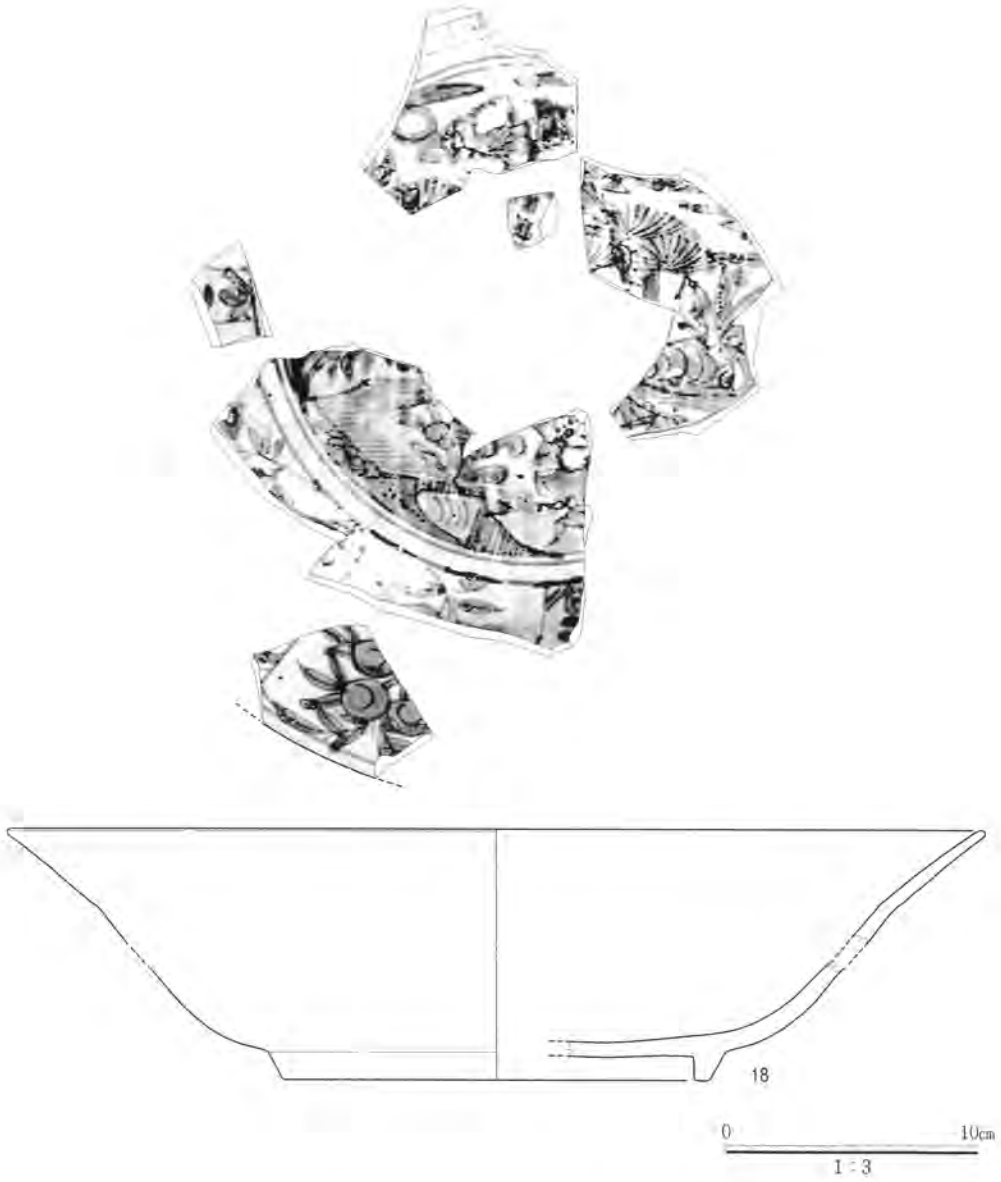


図８　出土遺物実測図（２）（磁器）
SD505(18)

第１層の遺構の可能性があるものとしては、調査区の北端においてほぼ東西に配置された暗渠(写真１)がある。掘削しておらず、遺物は確認できていないが、蓋石の高さが第１層上面とほぼ同じであることが断面観察からわかる。

３)まとめ

今回の調査では、豊臣期の遺構面と18世紀末～19世紀代の遺構面を検出した。各面で見つかった溝の方向や礎石の配置、暗渠の方向はほぼ同じ方向、あるいは直交する向きに配置されていた。なかでも各面の東西方向の溝は幅が広く、現在の北側の敷地境界とも平行している。また、第１層の遺構と考えた検地石を組んだ暗渠は、大坂城下町跡では近世に敷地境界の背割下水として設置されたものとよく似ている。これらのことから、今回調査した場所は、南北に分かれる街区の境界部分で、その境界線は３ｍほどの間で多少の変動はあるが、豊臣期から現代にまで引き継がれてきたのではないかと

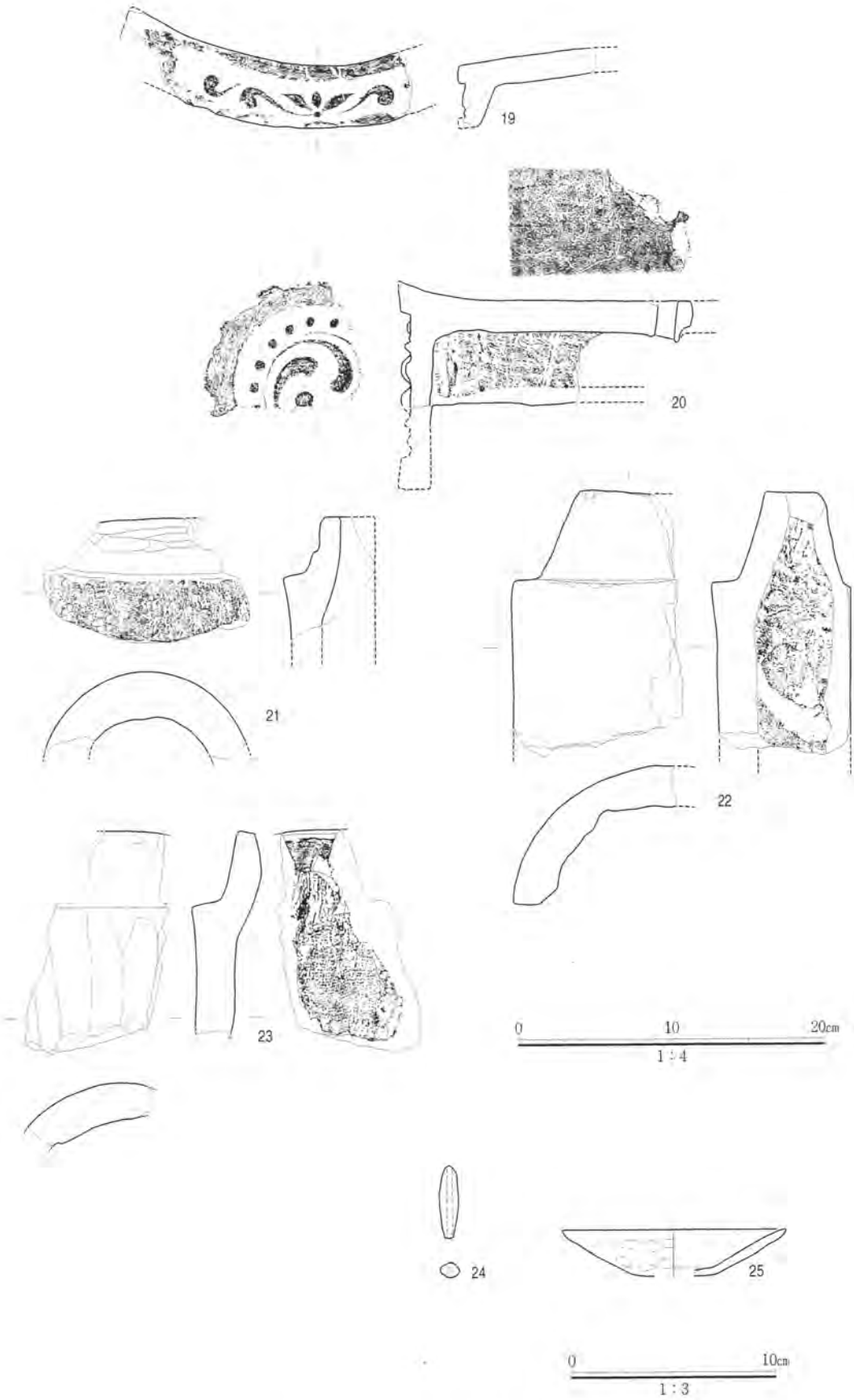


図9　出土遺物実測図(3)（瓦・土師器・土製品）
SD505(19・20・22)、第4b層(24)、第3層以下(25)、SD308(23)、SK217(21)

考えられる。

このように、今回の調査では、近世の天満地域の町割についての貴重な手がかりを得ることができた。今後の発掘調査の進展によって、近世天満の歴史的景観を、より具体的に明らかにすることができるものと思われる。今後の調査成果と合せて更なる検討を行いたい。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「桜宮地区埋蔵文化財調査(天満1丁目所在遺跡発掘調査　TW08－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.21－30

調査地全景
（第5a層上面、西から）

第4a層上面の遺構
（西から）

西壁断面
（下半部、東から）

福島区野田三丁目における建設工事に伴う
野田城跡伝承地発掘調査(NO11－１)報告書

調 査 個 所　大阪市福島区野田３丁目204・205－8
調 査 面 積　64㎡
調 査 期 間　平成23年８月19日～８月26日
調 査 主 体　財団法人大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南秀雄、松本啓子

1)調査に至る経緯と経過

調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地である野田城跡伝承地の推定範囲内の南部に位置する。野田城跡の最初の本格的な調査は、本調査地の北東約250mのNO07－１・２次調査で、17世紀初頭の堀状遺構が見つかっている(図１)[大阪市教育委員会･大阪市文化財協会2008]。これ以降の発掘調査はなく、具体的な遺跡の様相はまだ明らかではない。

野田城は淀川デルタの中州を利用した砦で、『信長公記』[奥野高広ほか校注1969]などによれば、1570(元亀元)年に三好三人衆によって築かれたとされ、大坂ノ陣の際には大坂方の砦としてもその名が記されているという[井上正雄1922]。

大阪市教育委員会による試掘調査の結果、地表下約1.8mから下位で、中世後半から近世にかけての遺構面が認められたことから、本調査を行うこととなった。

調査は平成23年８月19日より開始した。当初、敷地内に８m×８mの調査区を設定したが、工事に先立って打ち込まれた杭を避けるため、協議の上、７m×７mの範囲の調査に変更することになった(図２)。試掘結果に基づき、重機で地表下約1.8mまでの近･現代の地層を除去し、以下、地表下約2.6mまでを人力によって調査し、さらに地表下約3.5mまでを重機で掘り下げ、地層の観察を行った。慎重に掘り下げながら、遺構や遺物の検出に努め、随時、写真・図面などで遺構や地層の記録を取った。機材の撤収などの作業を含め、８月26日に現地におけるすべての作業を終え、発掘調査を完了した。

調査および本報告で使用した水準値は東京湾平均海面値であり、本文・挿図中ではTP±○mと表記する。方位は図１は座標北で、それ以外は磁北を基準とする。

なお、貝類の同定と分析は大阪歴史博物館学芸員池田研氏が担当した。

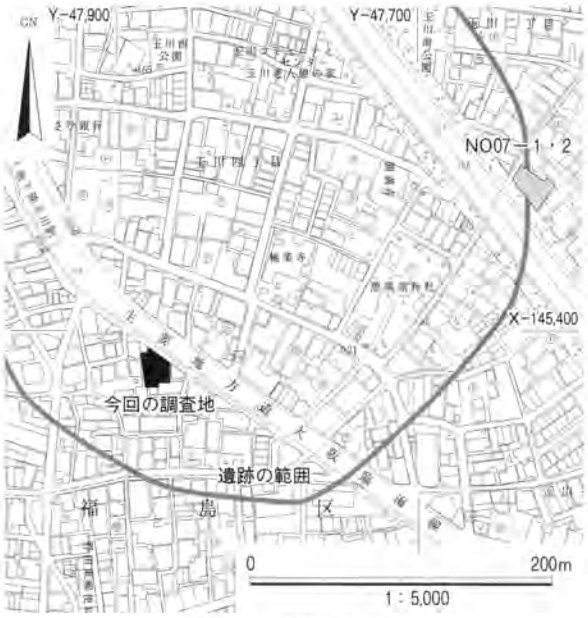


図１　調査地位置図

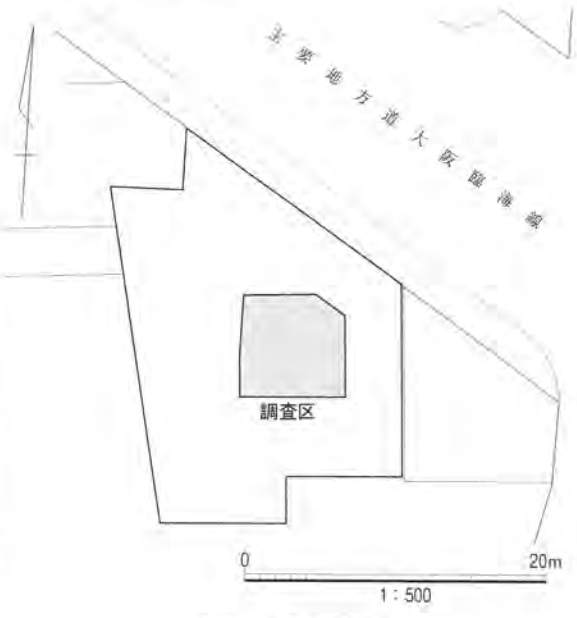


図２　調査区配置図

2)調査の結果

i)層序と遺構・遺物

現地表面はTP－0.3m付近にある。TP－1.7mからTP－3.8mまでの地層を確認し、6層に分けた。以下に本調査地の基本的な層序と、各層のおもな遺構と遺物を記す(図3～6)。

第1層：細粒砂を含むオリーブ褐色シルト質粘土～粘土質シルトの作土層で、最大層厚は36cmである。本層上面に土壙や溝が見つかった。これらの埋土はオリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質粘土である。溝には木の板が打ち込まれていた(図5、図版下段)。

本層から土師器皿8・9と甕が出土した。第2～4層の遺物とあまり時期差はなく、15世紀代のものとみられる。

第2層：本層は上下2層に分かれる作土層である。上部にある第2a層は、砂と貝殻を含む灰オリーブ色の粘土質シルト層で、第3層の再堆積とみられる。第2b層は極細粒砂を含むオリーブ褐色の粘土質シルト～シルト質粘土層である。調査区の東南部では第2a層は層厚5cmであるが、西北部に上面からの掘込みがあり、第2a層が再堆積する。掘込みの深さは最大42cmである。第2b層は東南部で層厚10cm、北西に向かって厚くなり、最大層厚は30cmである。

第2層から土師器皿6・7、瓦質土器羽釜17・18・擂鉢19、瓦質土器甕24、中国産青磁碗20、中国産白磁皿21が出土した。白磁皿21は口縁端部外側に沈線が巡り、器壁の薄い皿である。19は火を受けて硬く赤変している。出土遺物から本層は15世紀代の地層と考えられる。

第3層：大量に貝殻を含む暗オリーブ～オリーブ黒色の砂質粘土層で、最大層厚は58cmである。第4層の上面には本層から掘り込まれた小穴や土壙が見られ、第3層の分布するところは何度も貝殻を捨てた場所であったことがわかる。現状で東北部には第3層は分布しないが、これは上の第2層の掘込みによって削り取られたためと考えられる(図4、図版中段)。

本層も15世紀代の地層で、土師器皿5、土師質土錘13～15、瓦質土器甕23などが出土した。

第4層：本層は第4a・4b層の2層に分かれる作土層である。第4a層は暗オリーブ色砂質シルト～細粒砂層で、酸化鉄・酸化マンガンの斑文が顕著である。第4b層は砂を含む灰オリーブ色シルト質粘土層である。第4a・4b層の層理面はあまり明瞭ではない。層厚は第4a層が最大28cm、第4b層が最大12

層名	細分	岩相	性格	時期
第1層		含細粒砂オリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト質粘土～粘土質シルト	作土層	15世紀
第2層	第2a層	含砂・貝殻灰オリーブ色（5Y4/2）粘土質シルト	作土層	15世紀
	第2b層	含極細粒砂オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘土質シルト～シルト質粘土	作土層	15世紀
第3層		含貝殻暗オリーブ色（5Y4/4）～オリーブ黒色（5Y3/2）砂質粘土	貝廃棄層	15世紀
第4層	第4a層	暗オリーブ色（5Y4/3）砂質シルト～細粒砂	作土層	15世紀
	第4b層	含砂灰オリーブ色（5Y4/2）シルト質粘土	作土層	15世紀
第5層	第5a層	灰白色（5Y7/2）シルト～粘土質シルト	整地層	15世紀
	第5b層	黄褐色（10YR6/4）砂質シルト	整地層	15世紀以前
	第5c層	灰白色（2.5Y7/1）砂質シルト～シルト質砂	整地層	15世紀以前

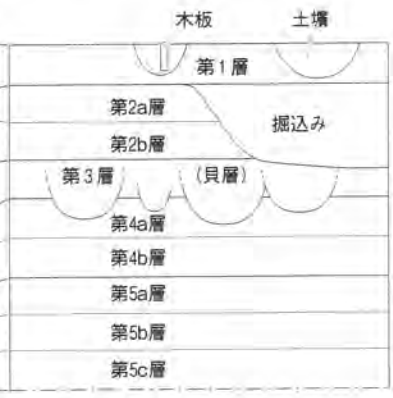


図3　地層と遺構の関係

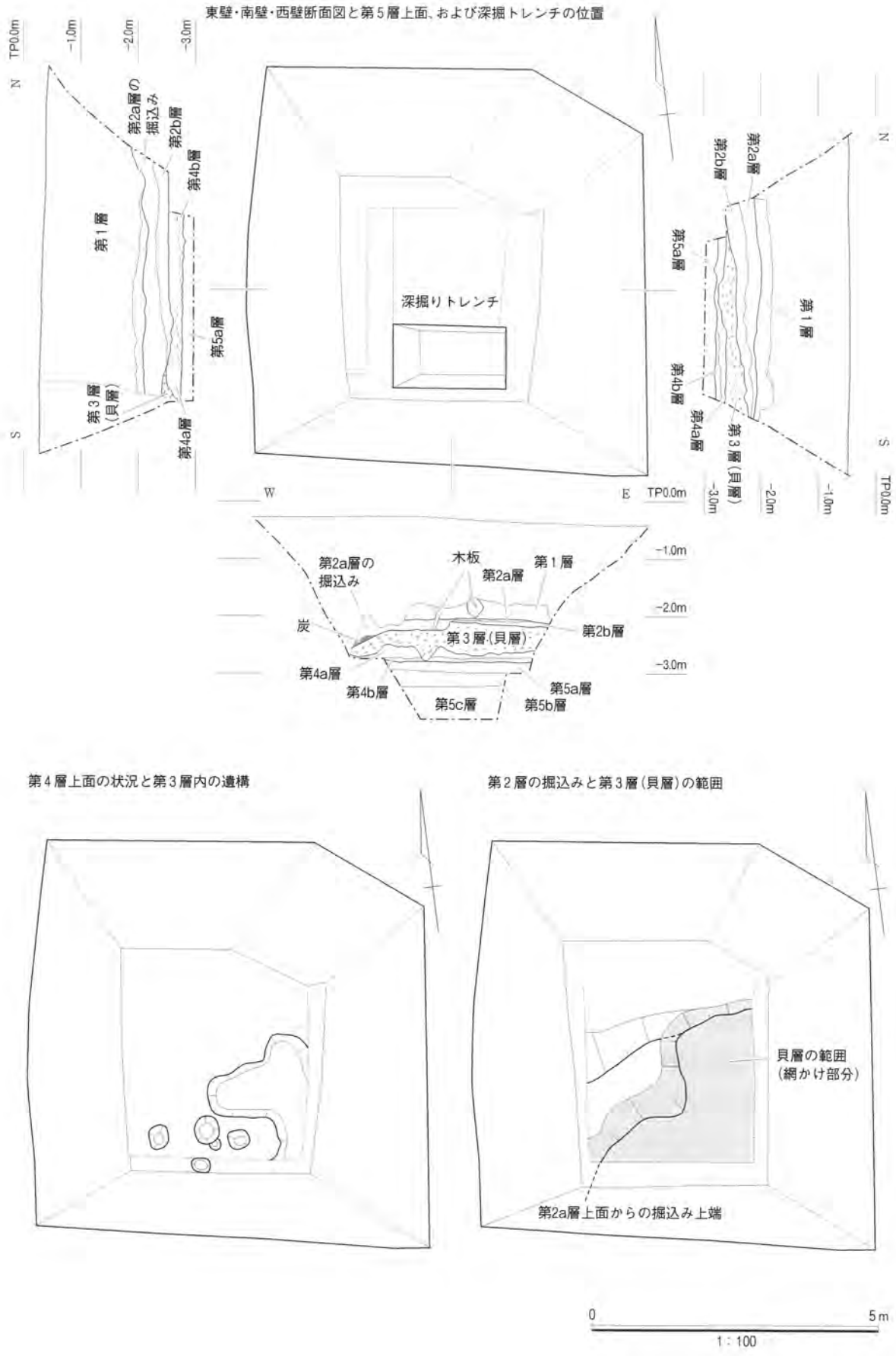


図4　第2～5層の遺構平面図と地層断面図

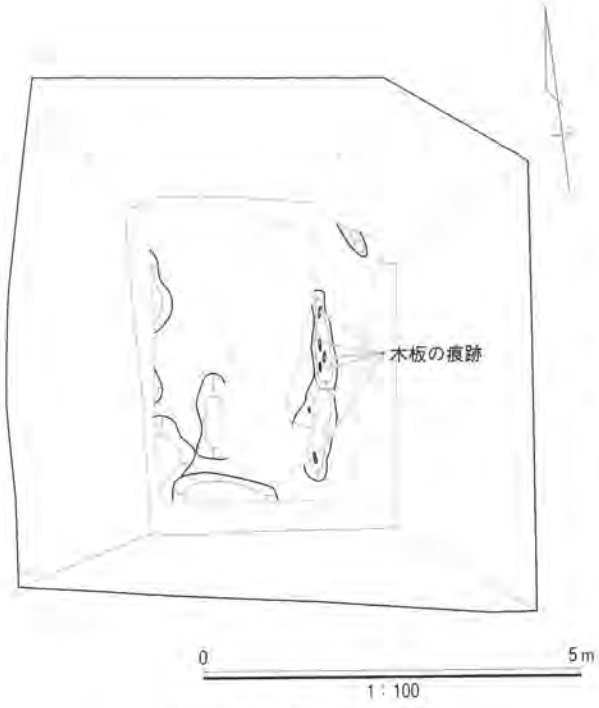


図5　第1層上面の遺構

cmである。本層上面や層中、下面に遺構は見られなかった。

本層から土師器皿1～4、土師質土錘10～12、瓦質土器羽釜16・火鉢22が出土した。これらは15世紀代のものである。

第5層：上から第5a・5b・5c層の3層に分かれる整地層である。平面の調査は第5a層下面までで、以下は断面観察を行った。

第5a層は層厚20cmの灰白色シルト～粘土質シルト層で、第5b層は層厚20～25cmの酸化鉄・酸化マンガンの斑文が目立つ黄褐色砂質シルト層、第5c層は層厚60cm以上の酸化マンガンの斑文が顕著な灰白色砂質シルト～シルト質砂層である。本層では遺構は見られなかった。

本層からの出土遺物は少なく、土師器皿の破片が出土したにすぎない。15世紀かそれ以前の整地である。

ii)出土した貝類について

当遺跡の位置する野田村や隣接する大野村では、遅くとも近世には貝漁を営む漁業関係者が多数居住していたことが知られており、既往の調査(NO07－1・2次)でも、水揚げ地において剥き身加工されたとみられるトリガイがまとまって出土している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]。

今回の調査の第3層など、貝集中部で採取した土サンプルを水洗選別した結果、15世紀代の土器とともに1,163個体の貝類を回収した。貝種構成はヤマトシジミが78.7%、ハマグリが20.5%を占め、そのほかにリュウキュウマスオガイ科・シオフキ・オオタニシなどがごく少量含まれる。ヤマトシジミが汽水性種、オオタニシは淡水性種、その他は鹹水性種と生息域は異なるが、いずれも食用となりうる。そのうち、ハマグリは殻高平均値が44.6㎜（計測数27）であり、既往の調査で出土した大坂城跡・城下町跡周辺の遺跡における中世資料[池田研2005]と同様に、大型の個体が主体をなしている。

今後の調査で当該時期の遺構の種類・分布や集落の立地など当遺跡の全容が明らかとなれば、水揚げ地で加工されたものの残滓であるのか、それとも最終消費地の食料残滓であるのかなど、本資料の性格についてもより踏み込んだ検討が可能になるものと期待される。

3)まとめ

今回の調査は、先のNO07－1・2次調査の17世紀初頭の堀状遺構とほぼ同じ標高で調査を行ったが、野田城が機能した時期の遺構や遺物については検出されず、野田城設置以前の遺構・遺物を検出した。当調査地では15世紀代は、おもに耕作域、あるいは残滓の廃棄場所として利用されており、この時期の集落は近くにあるものと推定される。また、本調査地の近辺では、16～17世紀に機能した野

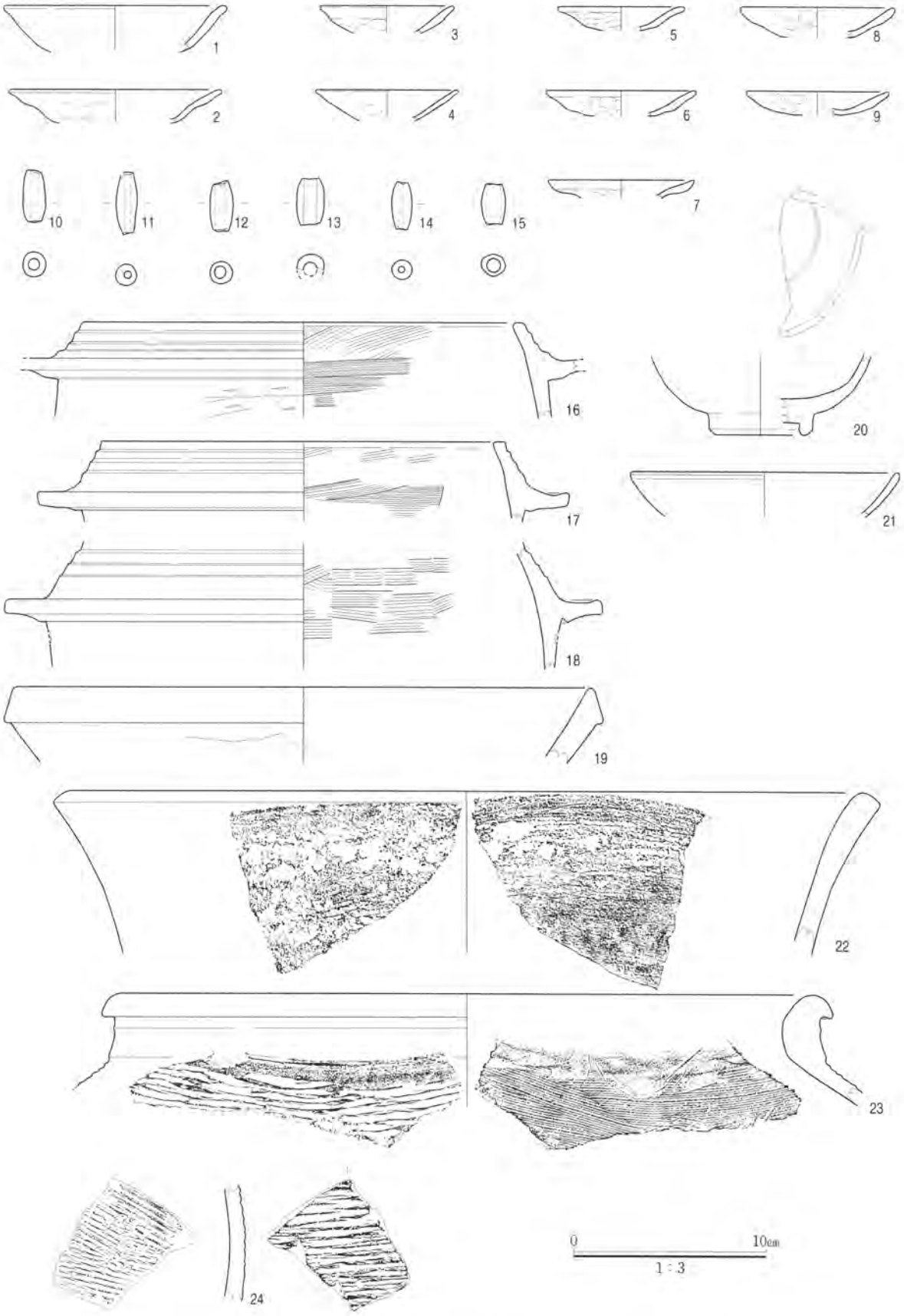


図6　出土遺物実測図

第4層(1～4・10~12・16・22)、第3層(5・13~15・23)、第2層(6・7・17~21・24)、第1層(8・9)

田城は、より標高の高いところにあると考えられる。

当時の景観を復元するためにも周辺の土地利用の実態の把握は重要な課題である。今後のさらなる調査の進展によるデータの蓄積が必要である。

引用・参考文献

池田研2005、「中・近世における大坂城下町出土の貝類について」：大阪大学考古学研究室編『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退任記念－』、pp.859－886

井上正雄1922、『大阪府全誌』巻之二、清文堂出版

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「野田城跡伝承地発掘調査（NO07－２）報告書」：『平成19年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.15－23

奥野高広・岩沢愿彦校注1969、『信長公記』、角川書店

櫻井久之2008、「福島区野田城伝承地　初の本格調査」：大阪市文化財協会編『葦火』135号、pp.４－５

南壁地層断面(北から)

第３層上面遺構(北から)

第１層上面遺構(東から)

中央区南久宝寺二丁目における建設工事に伴う
馬喰町遺跡発掘調査(BR10－２)報告書

調 査 個 所　大阪市中央区南久宝寺町二丁目21－乙
調 査 面 積　49㎡
調 査 期 間　平成23年４月４日～４月８日
調 査 主 体　財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、小倉徹也

1)調査に至る経緯と経過

馬喰町遺跡は堺筋と南久宝寺通・博労町通が交差する付近に位置し、かつて弥生時代の土器片とともに銅製の釣針が出土していることから、弥生時代の遺物散布地として知られている[堀田啓一1979]。付近は難波砂堆の堆積層が広く、一方、大坂城下町跡の西南端に接していることから、近世城下町の開発に係わる資料が包含されていることが推定されるが、付近で行ったこれまでの発掘調査は、西100mのOJ08－5次調査[大阪市教育員会・大阪市文化財協会2010]、南東100mのBR10－1次調査[大阪文化財研究所2010]、北東300mのOJ91－24次調査[大阪市文化財協会2004]、OJ08－1次調査[大阪市文化財協会2010]などで件数は少ない(図1)。OJ08－5次調査ではTP+1.8m付近の調査で、自然堆積による黄褐色細粒砂～中礫層を基盤に豊臣後期に遡る土壙、敷地境の溝など多数の遺構を確認し、豊臣期船場の南限を考える上で重要な発見となった。BR10－1次調査[大阪文化財研究所2010]、北東300mのOJ91－24次調査[大阪市文化財協会2004]、OJ08－1次調査では概ね17世紀中葉～後葉、18世紀前葉～中葉、18世紀末以降の3時期の遺構を確認し、18世紀末以降の遺構から焼土・炭とともにスラグが出土していることから、火を用いた産業が当該期に行われていたことを指摘している。一方、OJ91－24次調査地のある久太郎町は、1598(慶長3)年の「大坂町中屋敷替」時における「光徳寺」の移転先に当り、付近の開発が豊臣期に遡る可能性を示している。しかし、調査では18世紀前半～19世紀の建物や土壙のほか、17世紀中頃に遡る遺物も見つかっているものの、豊臣期の地層に調査が及ばず、遺構・遺物については不明である。

建設工事に伴って試掘調査を実施したところ、現地表下2.3m以深で豊臣期から徳川期にかけての遺物包含層および遺構面が検出された。この試掘結果を受け、発掘調査を実施することになった。

図1　調査地位置図

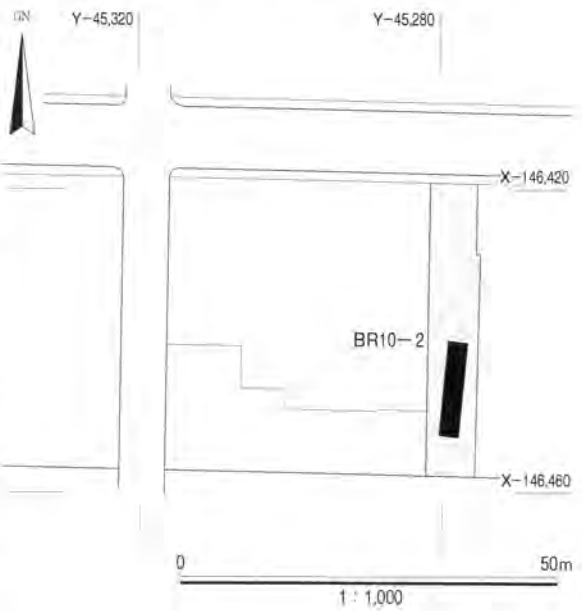


図2　調査区配置図

調査は当初、設計49㎡の調査区を設定して行う予定であったが、残土置き場確保が困難であることから大阪市教育委員会の指示を受け、敷地南寄りに31㎡(12.5m×2.5m)の調査区を設定して2011年4月4日から開始した(図2)。調査を行うなかで、残土の荷重により東壁断面崩壊の危険が認められたため、調査区東側を1m控えて調査を継続して行った。遺構・遺物の検出に努めるとともに、平面図や断面図の作成、写真撮影などの記録保存作業を行い、4月8日に現地における作業を完了した。

本報告書で用いた水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、図中ではTPと略記した。また、方位は座標北を基準にしている。

2)調査の結果

i)層序(図3)

調査地における現地表の標高はTP+4.5m前後で、ほぼ平坦であった。現地表下3.2m(TP+1.3m)までの地層を観察した。その結果を以下に記し、地層と遺構の関係を図3に、西壁地層断面図を図4、北壁地層断面図を図5に示す。

第0層および第1層は建設工事によって掘削・除去された層準であり、本調査時には四方がコンクリート壁であったため確認することができなかっ

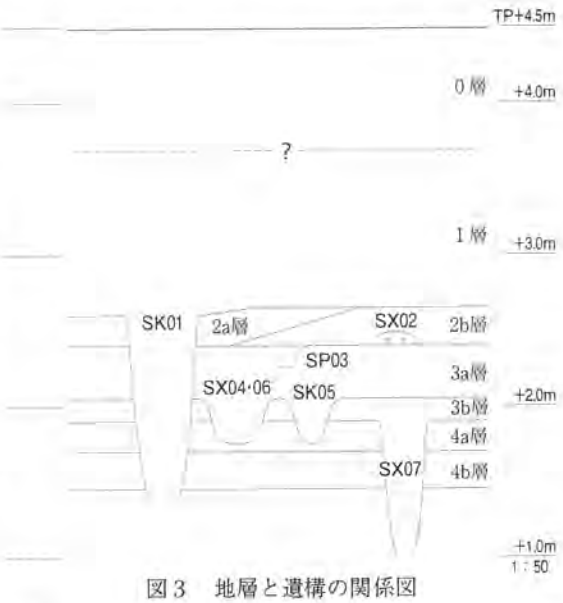


図3　地層と遺構の関係図

表1　調査地の層序

層序		試掘調査	岩相	土色	層厚(cm)	遺構	おもな遺物	時代·年代
第0層		⓪	盛土·撹乱 (旧建物解体に伴う埋立土)	–	ca.30			近現代
		①	焼土 (第2次大戦)		ca.10			
		②	褐色 砂質土		ca.10			
		③	黄色 砂 (一括した整地土)		ca.30			
第1層		④	黒灰色 粘質土	–	ca.10			近世?
		⑤	黒色 砂質土		ca.20			
		⑥	黄灰色 砂		ca.15	△SK01		
		⑦	黒色 砂質土 (試掘データ)		ca.45		肥前磁器	(18C)
第2層	a	⑧	わずかにシルト含む 明黄褐·黒褐色 粗粒～中粒砂 <盛土>	10YR7/2	ca.30	–		
	b	⑨	灰オリーブ色ないし暗灰黄色 中粒～細粒砂 (炭や極細粒砂偽礫含む) <盛土>	2.5Y5/2 5Y5/3	≦30	←SX02, SP03	肥前磁器	18C前半
第3層	a	⑩	黒褐色ないし黄灰色 粗粒～細粒砂 (炭·焼土·明赤褐色砂質シルト偽礫含む) <盛土>	2.5Y5/1 2.5Y4/1	40～90		肥前磁器	18C前半 17C後半～
	b	⑪	黄灰色 中粒～粗粒砂 (炭含む) <盛土>	2.5Y4/1	≦10	←SK04·06, SX05 ←SX07	肥前陶器	徳川初期 豊臣後期～
第4層	a		わずかにシルト含む 灰黄褐色 中礫～中粒砂 <古土壌>	10YR4/2	ca.20		土師器·備前焼	豊臣後期
	b		にぶい黄褐色 極粗粒砂～細礫 <海浜成層>	10YR5/4	≧100		須恵器·瓦質土器	中世以前

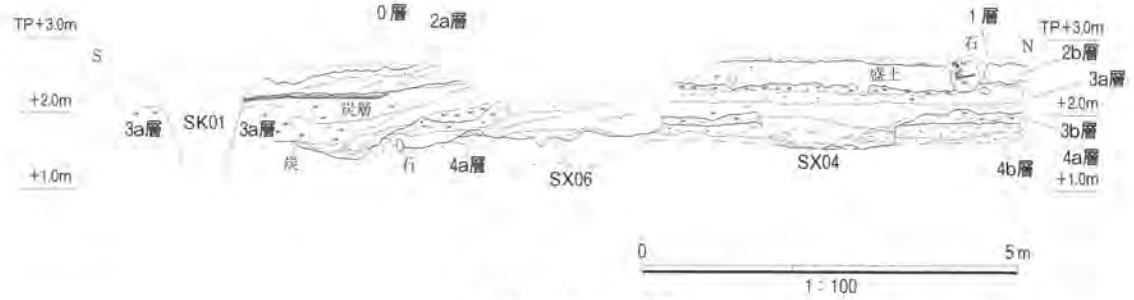


図４　西壁地層断面図

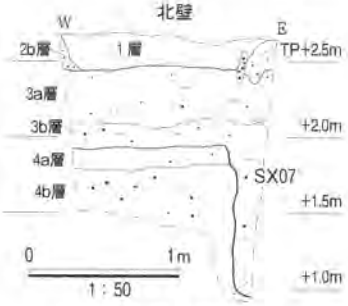


図５　北壁地層断面図

た層準である。試掘調査では近現代および近世の区分は明確にできなかったが、近現代から18世紀前半までの遺物を包含していたことから、ここでは便宜的に第０層を近現代の盛土層および攪乱層、第１層を近世の盛土層とすることにする。第０・１層を合わせた層厚は最大で310cmで、第１層内でSK01を検出した。

第２層は第2a層と第2b層に区分した。第2a層はわずかにシルトを含む明黄褐色(10YR7/2)ないし黒褐色の粗粒～中粒砂からなる盛土層で、層厚は約30cmである。第2b層は炭や極細粒砂の偽礫を含む灰オリーブ色(5Y5/3)ないし暗灰黄色(2.5Y5/2)の中粒～細粒砂からなる盛土層で、層厚は30cm以下である。第2b層からは18世紀前半に属する遺物が出土した。

第３層は第3a層と第3b層に区分した。第3a層は炭や焼土、明赤褐色(5YR5/6)砂質シルトの偽礫を含む黒褐色(2.5Y5/1)ないし黄灰色(2.5Y4/1)の粗粒～細粒砂からなる盛土層で、層厚は40～90cmである。第3b層は炭を含む黄灰色(2.5Y4/1)の中粒～粗粒砂からなる盛土層で、層厚は10cm以下である。第3a層上面でSX02、後述する油煙受皿が出土したSP03を、第3b層上面でSX04・06とSK05を検出した。第3a層からは17世紀後半～18世紀頃、第3b層からは豊臣後期～徳川初期(17世紀第１四半期)に属する遺物が出土した。

第４層は第4a層と第4b層に区分した。第4a層はわずかにシルトを含む灰黄褐色(10YR4/2)の中礫～中粒砂からなる古土壌で、層厚は約20cmである。第4b層はにぶい黄褐色(10YR5/4)の極粗粒砂～細礫からなるベースの砂堆の堆積層で、層厚は100cm以上である。第4a層上面でSX07を検出した。第4a層からは豊臣後期、第4b層からは古代の須恵器や15～16世紀初頭の瓦質土器擂鉢の破片が出土した。

ii)遺構と遺物(図６～10)

平面的な調査は第4a層および第3b層上面と第3a層上面で行った。第4a層上面・第3b層上面遺構平面図を図７に、第3a層上面・第１層内遺構平面図を図８、出土遺物実測図を図９・10に示す。

a．豊臣期～徳川初期の遺構

第4a層上面でSX07を検出した。

SX07　調査区東北隅で検出した遺構で、その東北部分は調査範囲外であった。確認した幅は南北0.4m、東西0.2mで、深さは1.0m、埋土は第3b層で、短期間で埋め戻されていた。掘形がほぼ垂直であ

ることから井戸の可能性もあるが、明らかにすることはできなかった。埋土からは遺物は出土しなかった。

b．徳川初期～前期の遺構と遺物

第3b層上面でSX04・06とSK05を検出した。

SX04　調査区北部で検出した溝で、幅は2.2m、深さは0.4mであった。埋土は第3a層で、下部付近には明赤褐色(5YR5/6)砂質シルトの偽礫が特徴的であった。埋土からは肥前陶器碗1・皿2が出土した。1は灰色を呈する灰釉が掛かり、底部外面は露体である。畳付には砂が熔着している。底部内面には降灰の跡がある。2は口縁部が屈曲して内面に溝をもつ、いわゆる溝縁皿である。体部下部から底部を欠き、残存した部分にはすべて灰色を呈する灰釉が掛かる。17世紀中頃を中心とした年代のものである。

SK05　調査区中央部で検出した土壙で、その東北部分は調査範囲外であった。確認した東西長は1.0m、南北長0.7mで、深さは0.1～0.2m、埋土は第3a層である。埋土からは肥前陶器皿3が出土した。高台は外面の削り出しがやや緩く、碁笥底のように見える。体部下半から底部にかけて外面は露体で、あとは灰褐色を呈する灰釉を掛け、口縁端部のみ鉄釉を上掛けする。いわゆる皮鯨手である。底部内面には胎土目が残る。徳川初期のもので、17世紀第1四半期から中頃にかけての年代が考えられる。

SX06　調査区中央部で検出した遺構で、その東・西部分は調査範囲外であった。検出した南北長は2.2m、深さは0.5mで、埋土は第3a層であった。埋土からは肥前磁器染付碗4・5、肥前陶器碗6・7・輪花皿8、土師器皿9が出土した。4は体部外面に山水文が描かれている。釉はムラがあり、底部外面は露胎である。5は体部外面に草花文が描かれている。底部外面は露胎である。底部内面には降灰の跡がある。6・7は灰白～明オリーブ灰色を呈する灰釉が掛かり、体部下部から底部にかけては露胎である。7の畳付には3箇所の砂目が残る。8は輪花状の口縁部をもつ。口縁部から体部にかけての器壁はきわめて薄く作られている。底部が中心に向かって厚くなることから、高台が付くと考えられる。灰白色の胎土に灰釉が掛かる。9は口縁部をヨコナデ調整する。煤が付着し灯明皿として使用されたことを示している。これらの年代は17世紀中頃～後半と考えられる。

c．徳川中期の遺構と遺物

第3a層上面でSX02、SP03を、第1層内でSK01を検出した。

SP03　調査区南部で検出した小穴で、直径は0.36m、深さは0.13mで、埋土のマトリックスは炭のみであった。埋土からは土師器油煙受皿10～13・皿14が出土した。10～13は皿を伏せてその上に把手を付けたもので、灯明皿の14と組合せて使用する墨作りの道具であり、これまでに大坂でも1例が報告されている[松尾信裕1992・大阪市文化財協会2003]。10～13はすべて口縁部径が18.1～18.5cmにおさまり、図化していない別の個体も同様である。皿部の内面は平滑にミガキが施されており、全面に煤が付着している。外面は口縁端部のみヨコナデ調整で、あとは掌によると考えられるオサエ痕が残り、部分的に細かなひび割れが見える。さらに断面の観察によれば、複数枚の粘土板を重ねた痕跡が認められ、粘土紐を巻き上げて作ら

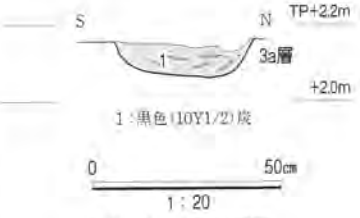


図6　SP03断面図

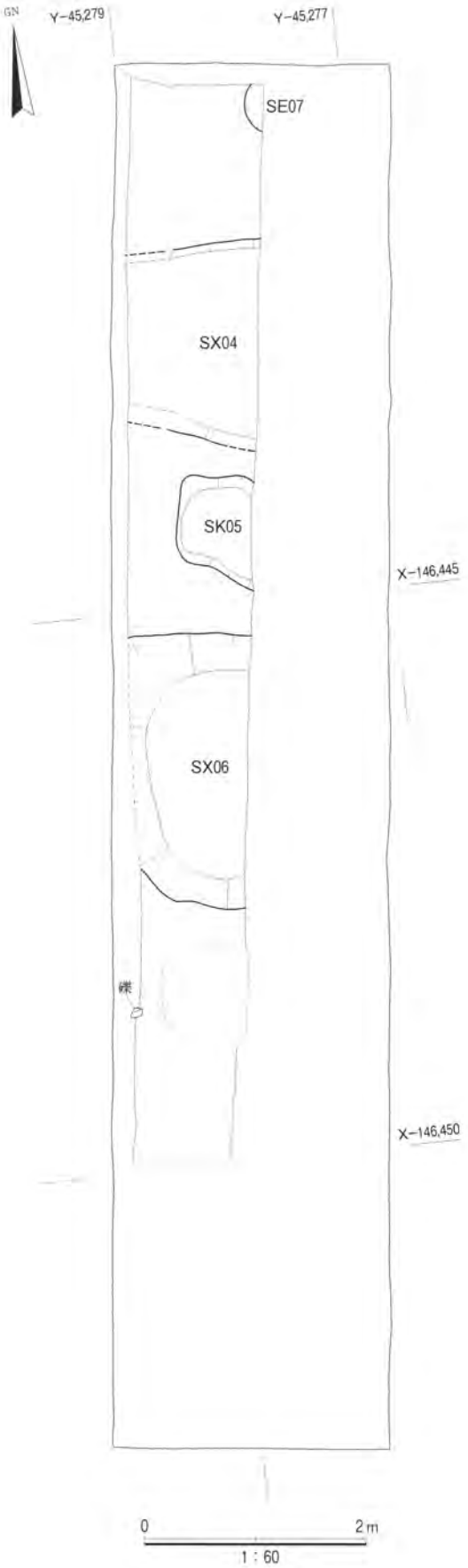


図７　第4a層上面・第3b層上面遺構平面図

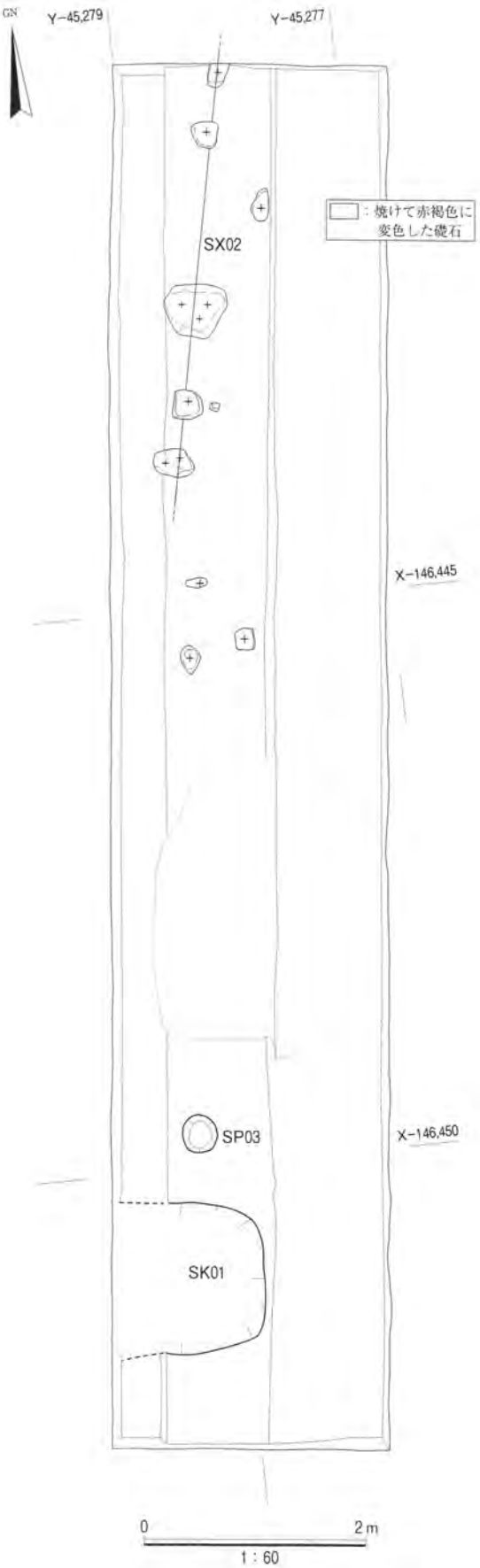


図８　第3a層上面・第１層内遺構平面図

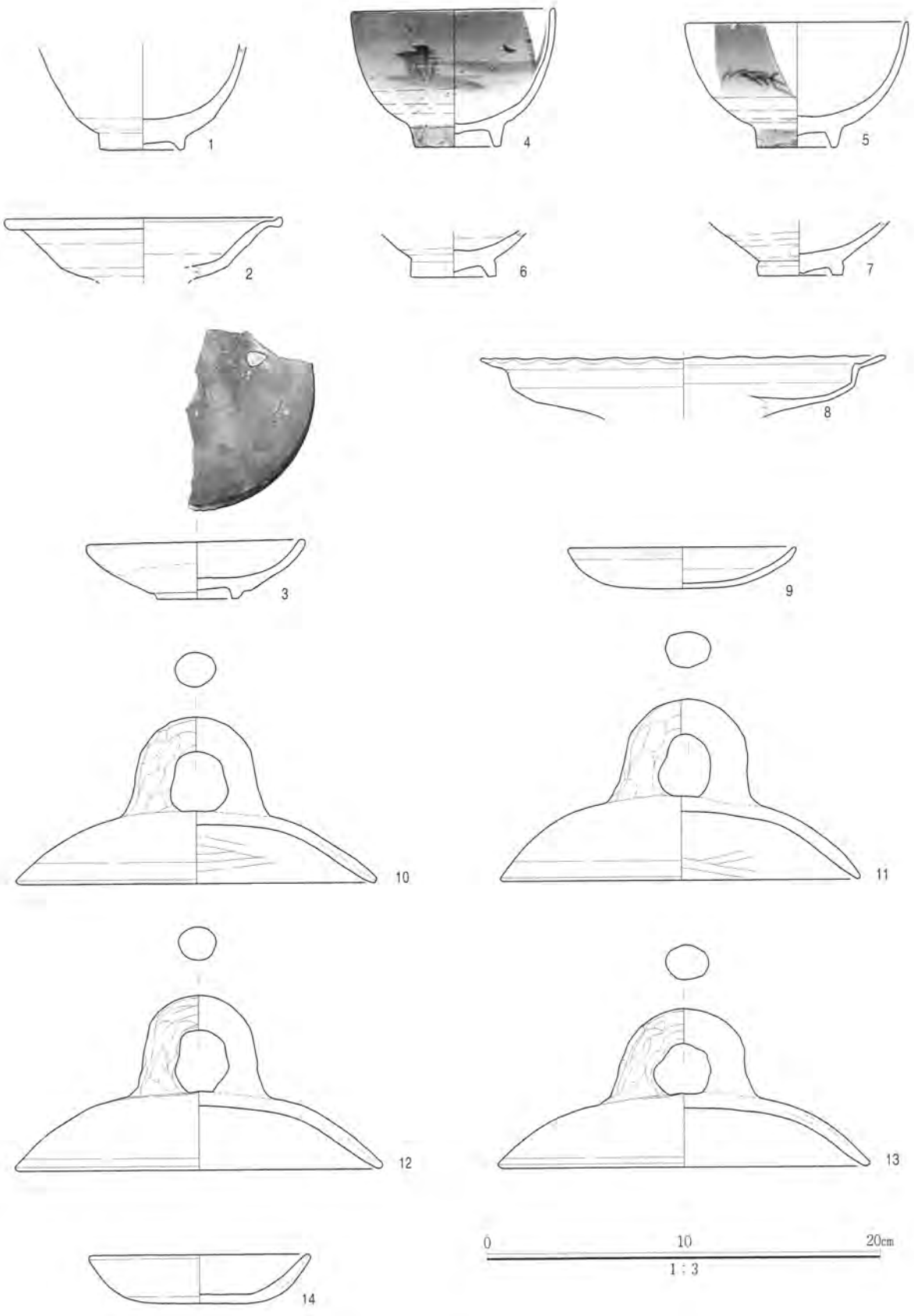


図9　出土遺物実測図1

SX04(1・2)、SK05(3)、SX06(4～9)、SP03(10~14)

れたものではないことがわかる。こうした特徴は、皿部が型作りによって成形されていることを示している。14は煤を発生させるための灯明皿である。外面は細かなひびが見られるが全体として平滑であり、かつ断面に10～13と同様の粘土板を重ねた痕跡が認められることからやはり型作りであると考えられる。これらの年代は、共伴する陶磁器がほとんどなく、上下の地層の年代からとりあえず18世紀頃と推定しておくしかない。

SX02　調査区北部で検出した礎石列である。その北側および南側への延長は調査範囲外である。確認した南北長は3.8mである。礎石には火を受けて赤褐色に変色したものが認められ、石材は花崗岩と花崗閃緑岩であった。

SK01　調査区南部で検出した土壙で、その西部分は調査範囲外であった。東西長は2.0m、南北長は1.8mで、埋土は第0層であった。埋土からは肥前磁器染付碗16・17・染付小碗15・染付皿20・青磁皿21、肥前陶器陶胎染付碗18・京焼風平碗19・堺擂鉢22が出土した。16は高台畳付のみ露体で、体部外面に草花文を描く。高台内には「大明年製」の崩れたものとみられる字款がある。17は口縁部から体部の内外面に二重網目文、底部内面には菊花文を描く。高台内の銘は渦福である。15は高台畳付のみ露体で、口縁部外面に雨降り文を手描きする。20は体部外面に唐草文を配し、内面に矢羽根文を描く。高台畳付のみ露体である。高台内には文字があるが残りがわずかで判読できない。21は全面に青磁釉が掛かり、高台畳付のみ露体である。18は体部外面に山水文を描き、高台畳付のみ露体である。19は灰白色の胎土に浅黄色の釉が掛かる。体部から底部の内面に楼閣山水文を描く。底部外面は露体で、高台内には印銘があるが、その部分に釉が掛かっていて判読は難しい。22は口縁部内面に1条の凸帯が巡る。これらは18世紀前半に年代付けられるものである。

d．地層出土の遺物

第4a層からは土師器皿23・備前焼擂鉢24が出土した。23は口縁端部が丸くおさめられ、口縁部内面の強いヨコナデによって底部との境に明瞭な稜線が生じている。こうした特徴は大坂では豊臣後期に多く見られるものである。24の内面の擂目には上方へ上がってゆくものに加えて、それと交差して斜め上方へ向かうものがあり、土師器皿の年代観と矛盾しない。

第3b層からは肥前陶器碗25・皿26が出土した。25の口縁部はわずかに外反する。灰白色を呈する灰釉が掛かり、底部外面は露胎である。26の内面には段があり、口縁部が斜め上方に伸びる。灰色を呈する灰釉が掛かり、体部下半から底部にかけて外面は露胎である。底部内面には胎土目が残る。これらは豊臣後期から徳川初期、17世紀第1四半期のものと考えられる。

3）まとめ

今回の調査で得られた成果を以下にまとめる。

本調査地は豊臣期の大坂城下町で南西端付近に想定されていることから、豊臣期の遺構・遺物の検出が調査の目的の一つであった。調査の結果、豊臣後期～徳川初期の遺構（SX07）を確認し、また、徳川初期～前期、徳川中期の遺構面を合わせて3時期の遺構を確認することができた。

徳川中期の遺構では、SP03から大阪では2例目になる土師器油煙受皿がと灯明皿とともに出土し、

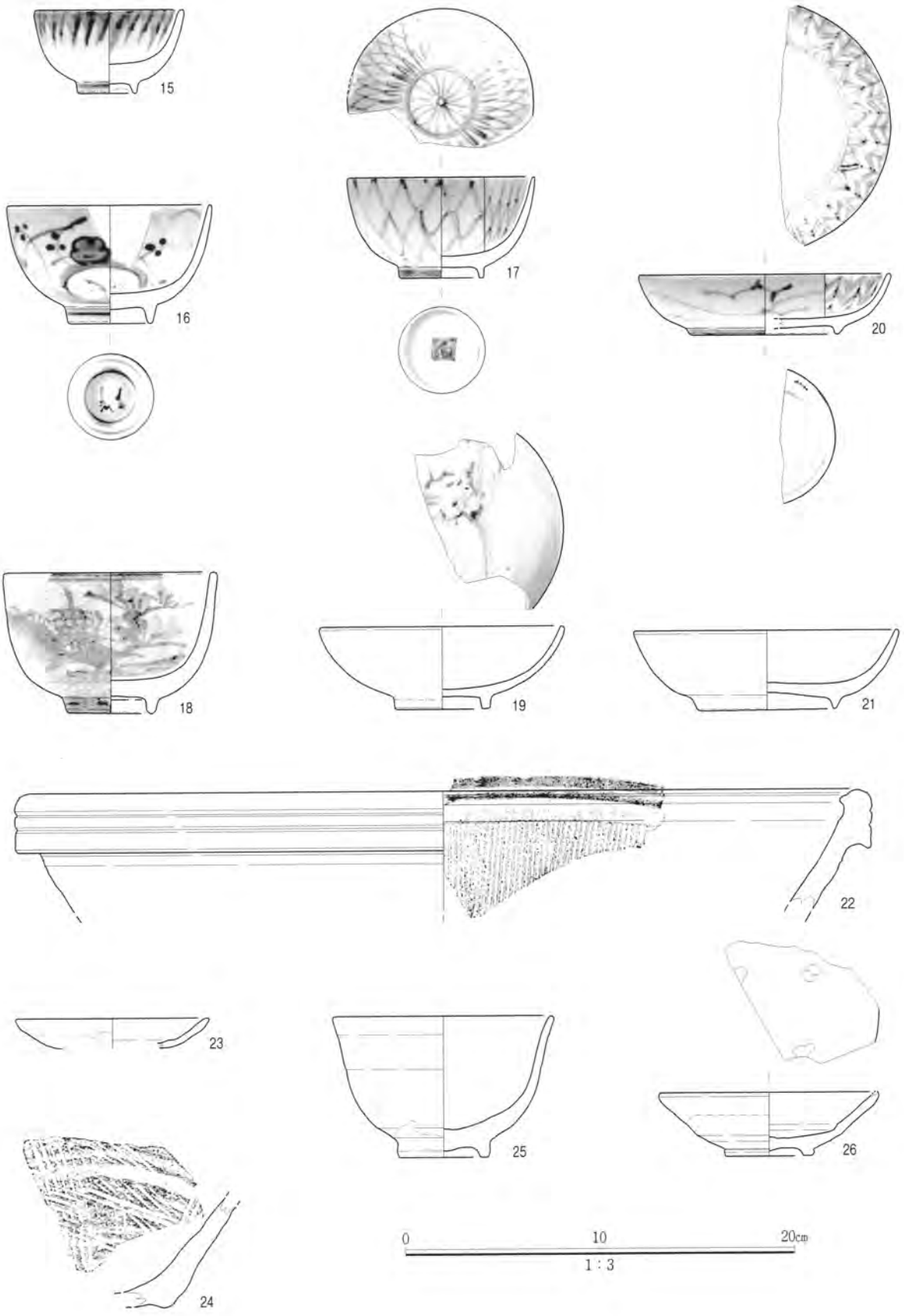


図10　出土遺物実測図２

SK01(15～22)、第4a層(23・24)、第3b層(25・26)

本調査地で墨作りが行われていたことが明らかとなった。当該期における産業について新たな知見を得ることができた。

<引用・参考文献>

大阪市教育員会・大阪市文化財協会2010、「大坂城下町跡発掘調査(OJ08－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.85－95

大阪市教育員会・大阪市文化財協会2010、「大坂城下町跡発掘調査(OJ08－5)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.133－140

大阪市文化財協会2003、『大坂城跡』Ⅶ、pp.275－290

2004、『大坂城下町跡』Ⅱ、pp.327－336

大阪文化財研究所2010、「中央区南久宝寺町一丁目における建設工事に伴う馬喰町遺跡発掘調査(BR10－1)報告書」、pp.1－10

堀田啓一1979、「失われた歴史を掘る」:井上薫編『大阪の歴史』　創元社　pp.37－104

松尾信裕1992、「大手通にあった墨屋」:大阪市文化財情報『葦火』37号、pp.4－5

調査地全景（南から）

北壁断面（南から）

SP03検出状況
（東から）

中央区内久宝寺町二丁目における建設工事に伴う
難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW11－1)報告書

調査個所	大阪市中央区内久宝寺町２丁目27－17ほか
調査面積	350㎡
調査期間	平成23年８月22日～８月29日
調査主体	財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、黒田慶一

1)調査に至る経緯と経過

調査地は谷町筋と上町台地のゆるやかな稜線の西側斜面とに挟まれた平地部分である。難波宮大極殿からは南西約600mの地点であるが、調査地東端は段差数mの崖になっている。南隣地であるNW85·117·136·99－15次調査では、難波宮の時期の井戸や板囲い施設、鍛冶遺構が検出されたほか、古代の遺物包含層からは円筒埴輪や素弁・重弁の蓮華文軒丸瓦や格子目タタキを施した平瓦などが出土している[大阪市文化財協会1981a·b·c、2002]（図1）。

大阪市教育委員会が試掘調査を実施したところ、GL－0.2～0.5mで地山が検出され、地山上面に遺構が確認されたことから調査を実施することになった。調査は平成23年8月22日に開始し、調査区を南北35m、東西10mに設定し(図2)、現代盛土を重機で取り除き、それ以下は人力で掘り進めた。調査区内には電柱が2本残っていたので、その部分を掘り残して調査した。遺構・遺物の検出に伴って、随時、図面・写真で記録作業を行った。8月29日に器材を搬出して全ての調査を終えた。

なお、基準点はmagellan社製ProMark 3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋○mと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

第0層：層厚20～30cmの砕石からなる現代整地層である。

第1層：層厚10～20cmの黄橙色(10YR8/8)

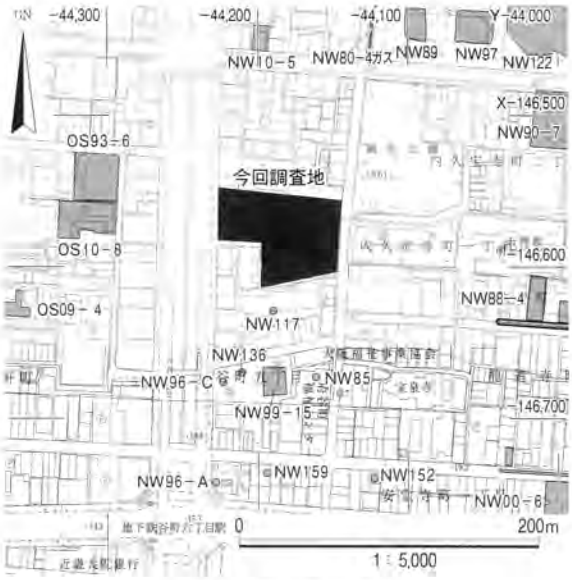


図1　調査地位置図

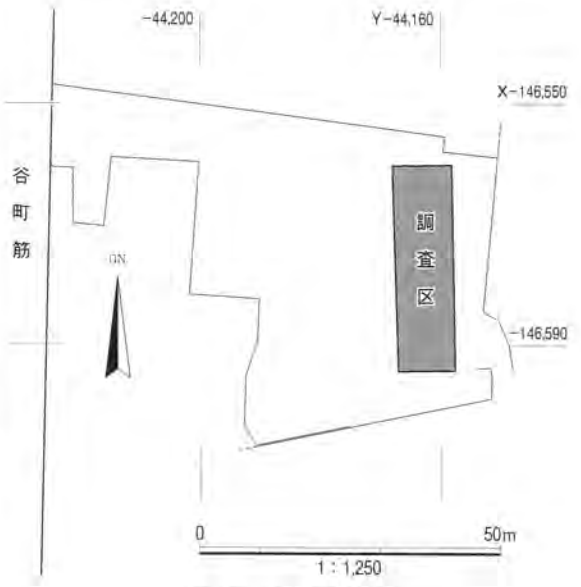


図2　調査区位置図

図3　地層と遺構の関係図

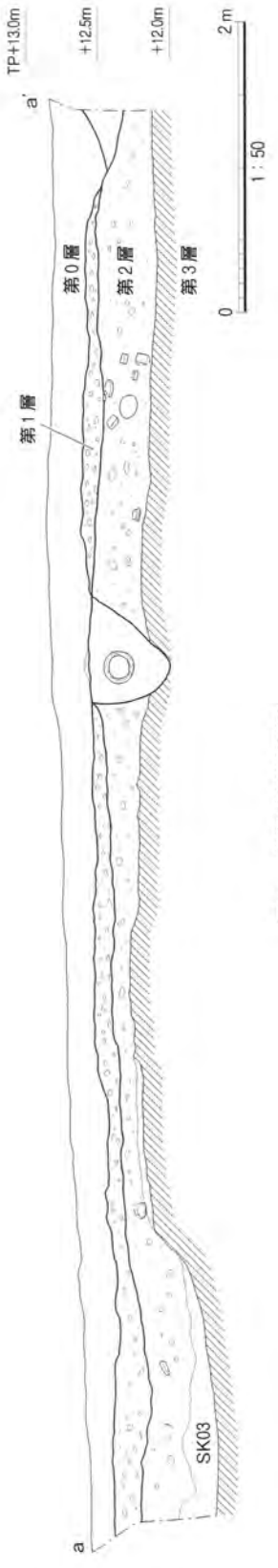


図4　北壁地層断面図

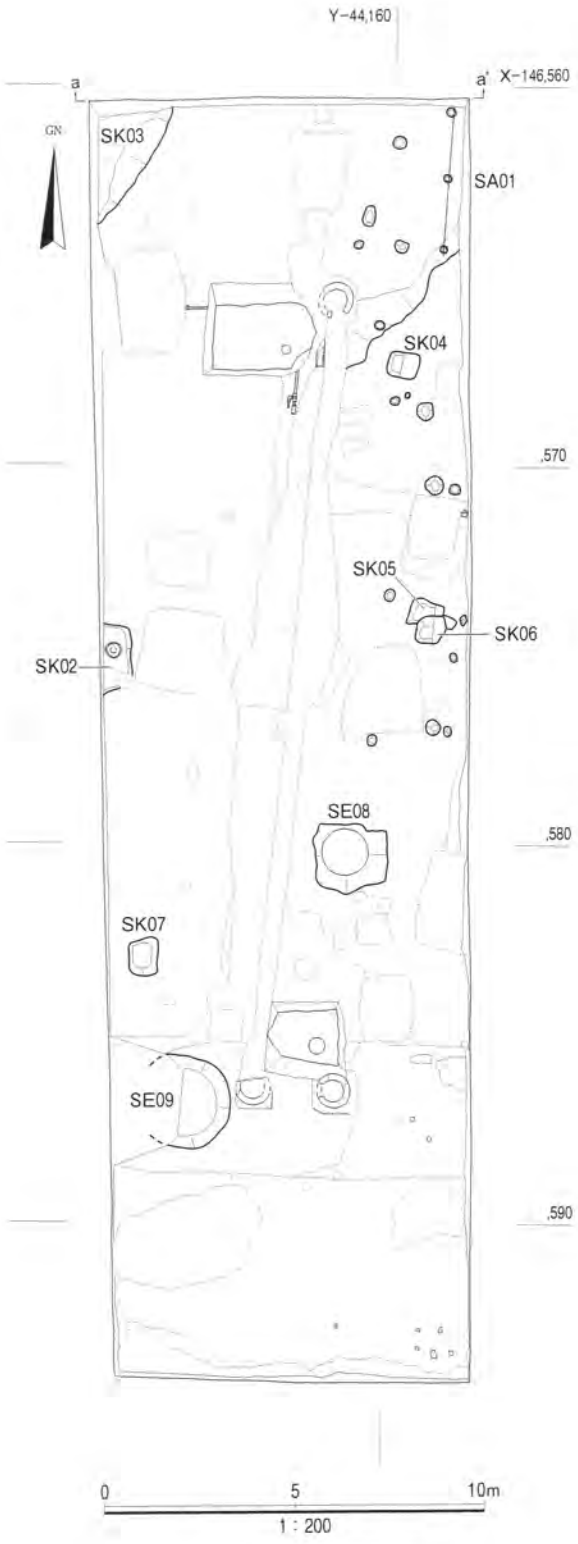


図5　第3層上面平面図

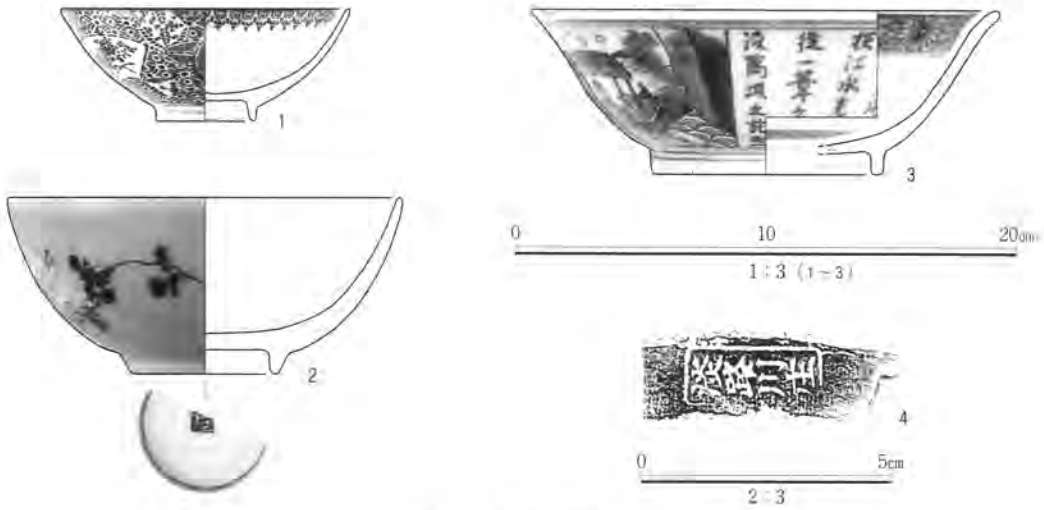


図６　遺物実測図など
SE09(１～３)、SK07(４)

粗粒砂質細礫の盛土層である。

第２層：層厚10～30cmの暗褐色(10YR3/4)細礫質粗粒砂層で、瓦・陶磁器・鉄滓・羽口・貝殻を多く含む。一部最下部に層厚５cmのにぶい黄色(2.5Y6/4)シルト質中粒砂が堆積する。19世紀第４四半期の遺物を含む。

第３層：黄色(2.5Y8/6)中粒砂の地山層である。

ⅱ)遺構と遺物(図５・６)

19世紀の遺構と遺物(第３層上面)

SE09　現代の埋設管掘形下層で検出した、直径2.5mの掘形をもつ井戸で、焼土をふくむ黒褐色(2.5Y3/2)シルトを埋土とする。瀬戸美濃焼磁器碗１～３が出土した。１は型紙刷り、２は青磁碗に草花文を上絵付けし、高台内に字款を入れる。３は外面に「前赤壁賦」の漢詩文と波間に舟を浮かべる図柄を描き、内面の口縁と見込みに菊花をあしらった帯を２条施している。19世紀第４四半世紀のものである。

SK03　調査区西北隅の一辺3.8m以上、深さ0.4mの土壙で、底部ににぶい黄色(2.5Y6/4)シルト質中粒砂が堆積した後、第２層土で埋没する。

SK05　一辺0.7～0.8m、深さ0.2mのやや台形を呈する土壙で黒褐色(2.5Y3/2)粗粒砂を埋土とする。

小穴群　調査区東北部に分布する、直径0.2～0.5m、深さ0.1～0.2mの杭穴や柱穴である。

その他の遺構と遺物(第２層上面)

SA01　1.8m等間で打ち込まれた杭からなる柵列で、杭穴は直径0.2m、深さ0.1～0.4mである。

SE08　南北1.3～1.9m、東西1.8mの不整方形の掘形をもつ井戸で、井戸側は直径1.2mの円形で、暗褐色(10YR3/4)細礫質粗粒砂で埋まる。鉄滓が出土した。

SK02　南北1.8m、東西0.7m以上、深さ0.3mの方形の掘形をもつ土壙に、直径0.4mの陶器甕を据えたものである。甕は便槽と考えられ、ガラス・レンガを含む黒色(10YR3/1)粗粒砂で埋まっている。

SK04　一辺0.7～0.8m、深さ0.1mの方形土壙で、貝殻を多く含む褐色(7.5YR4/6)粗粒砂で埋まる。

SK06　一辺0.7m、深さ0.2mの不整方形の土壙で、暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粗粒砂を埋土とする。

SK07　南北0.8～1.0m、東西0.7m、深さ0.2mの不整方形の土壙で、にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト偽礫で埋まる。端面に「淡路川庄」の刻印4をもつ雁振瓦が出土した。

3)まとめ

南隣地の調査で難波宮時代の重要な遺構を検出していることからそれに関わる成果が期待されたが、19世紀第4四半期以降の遺構が発見された。これは明治時代に入って土地区画などで、上町台地斜面を削り整えた後の時期の遺構のみが残っていたものと考えられる。今後の周辺の調査に期待したい。

参考・引用文献

大阪市文化財協会1981a、「第85次発掘調査概報」:『難波宮跡研究調査年報－1975～1979.6－』、pp.81－84

1981b、「第117次発掘調査概報」:『難波宮跡研究調査年報－1975～1979.6－』、pp.107－108

1981c、「宮域西辺部の調査概報」:『難波宮跡研究調査年報－1975～1979.6－』、pp.114－117

2002、「NW99－15次調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1999・2000年度－』、pp.43－61

調査地全景
（南東から）

調査地全景
（北東から）

SE09（南東から）

平成23年度難波宮跡環境整備事業にかかる

発掘調査(NW11－２)報告書

・調 査 個 所　大阪市中央区法円坂１丁目　史跡難波宮跡

・調 査 面 積　167㎡

・調 査 期 間　平成23年10月27日～12月28日

・調 査 主 体　財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所

・調査担当者　次長　南 秀雄、高橋 工

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は史跡難波宮跡東側、旧市営法円坂住宅敷地内の西北部に位置する(図１)。前期・後期難波宮朝堂院の東側に当り、最初期のNW１～４次調査をはじめとして、これまでに比較的多くの調査が行われている地域である。調査区の北東はNW30次調査やNW80－９・82－10・82－44次調査などによって、前期難波宮東方官衙地域と推定されている。また、近年ではNW04－５・05－９次調査で前期難波宮の「楼閣風」建物が検出され、注目を集めている。調査区南東のNW04－１・08－３次調査では上町台地東縁を切り込む谷や崖と、後期難波宮の区画溝と思われる南北溝が確認されている。加えて、調査地南側のNW02－13次調査Ⅰ区１トレンチでは東西方向の豊臣期の堀も見つかっており、豊臣期の大坂城に関する重要な手がかりを得られる可能性も高い。

今回の調査地北側で行われた一昨年の調査(NW09－２次)では、土壇状盛土の周囲に瓦が堆積し、周辺に凝灰岩が散乱していたため、凝灰岩製の化粧石を持つ基壇建物の存在が推測された(図２)。し

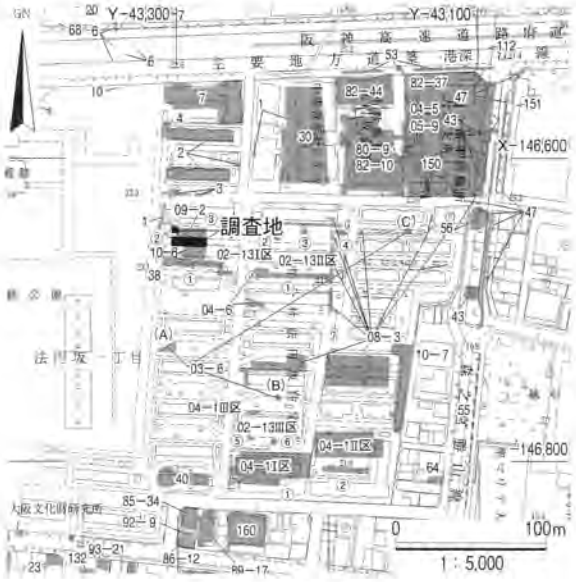


図１　調査地位置図

図２　調査区位置図

かし、同じく南側で行われた昨年の調査(NW10－６次)では、盛土および瓦の散乱は確認されたものの、基壇の明確な輪郭を検出することができず、建物の存在自体についても再検討する必要性が出てきた。

そこで今回の調査では、盛土の東端・西端を確認し、その築成過程などを確認するために、前２年度の調査区で挟まれた部分に調査区を設定した。

調査は平成23年10月27日から開始した。27日は調査区設定などの準備を行い、翌28日より重機掘削を行って現代の地層を除去した。10月30日からは人力による掘削を開始し、以後、地層ごとに遺構検出と掘削およびその記録を行った。なお、12月６日には検出された盛土の拡がりを把握するために北西に拡張区を設定し、調査を行った。調査で得られた成果は平成23年12月24日に現地公開を行い、一般に公開している。調査は12月26日まで行い、平成23年12月28日に埋戻しを含むすべての作業を終了した。なお、調査には大阪歴史博物館より積山洋・李陽浩・豆谷浩之の参加があった。本報告書については、高橋を含む４者が現地で行った協議をもとに高橋・李が執筆した。

調査に用いた基準点は、史跡難波宮跡内設置の１級基準点を与点とした閉合トラバース測量に拠り、本報告で用いた方位は日本測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP＋○mと記した。

〈調査の結果〉

１．層序(図３・４)

調査地の層序は以下のとおりである。

第０層：近現代の整地層である。第２次世界大戦後の法円坂住宅造営時の整地層と、その下層の旧陸軍被服支廠造営時の基礎からなる。調査地は被服支廠西側の南北棟の基礎に当っており、調査区西半で確認された段丘構成層を起源とする偽礫からなる整地層はこの建物に伴うものである。この整地層を覆って焼土を含む整地層があることから、この建物は戦災により焼失したものと考えられる。

第１層：偽礫を含む暗褐色細粒～粗粒砂からなる畠作土層で、層厚は15cmである。徳川期までの遺物が出土した。本層下面では東西方向に延びる畝間群が検出された。

第２層：偽礫・中粒砂を含むオリーブ褐色極細粒～細粒砂からなる作土層で、層厚は20cmである。本層からは18世紀後半までの遺物が出土した。

第３層：A・Bの２層に分けた。第3A層は近世、第3B層は中世に属し、いずれも作土層である。

第3A層は褐色砂からなり、層厚

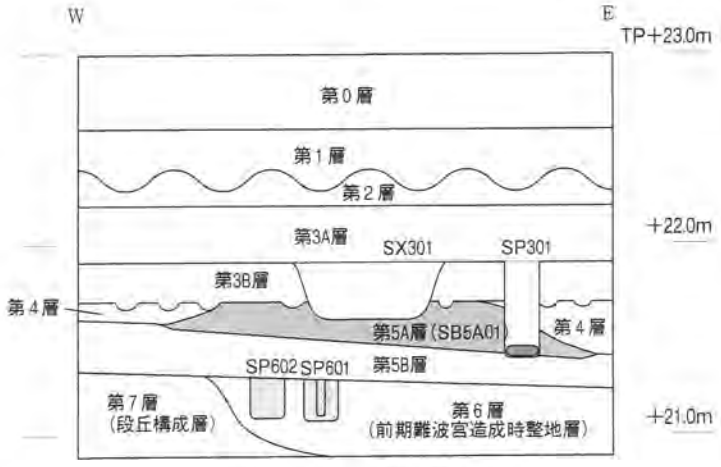


図３　地層と遺構の関係図

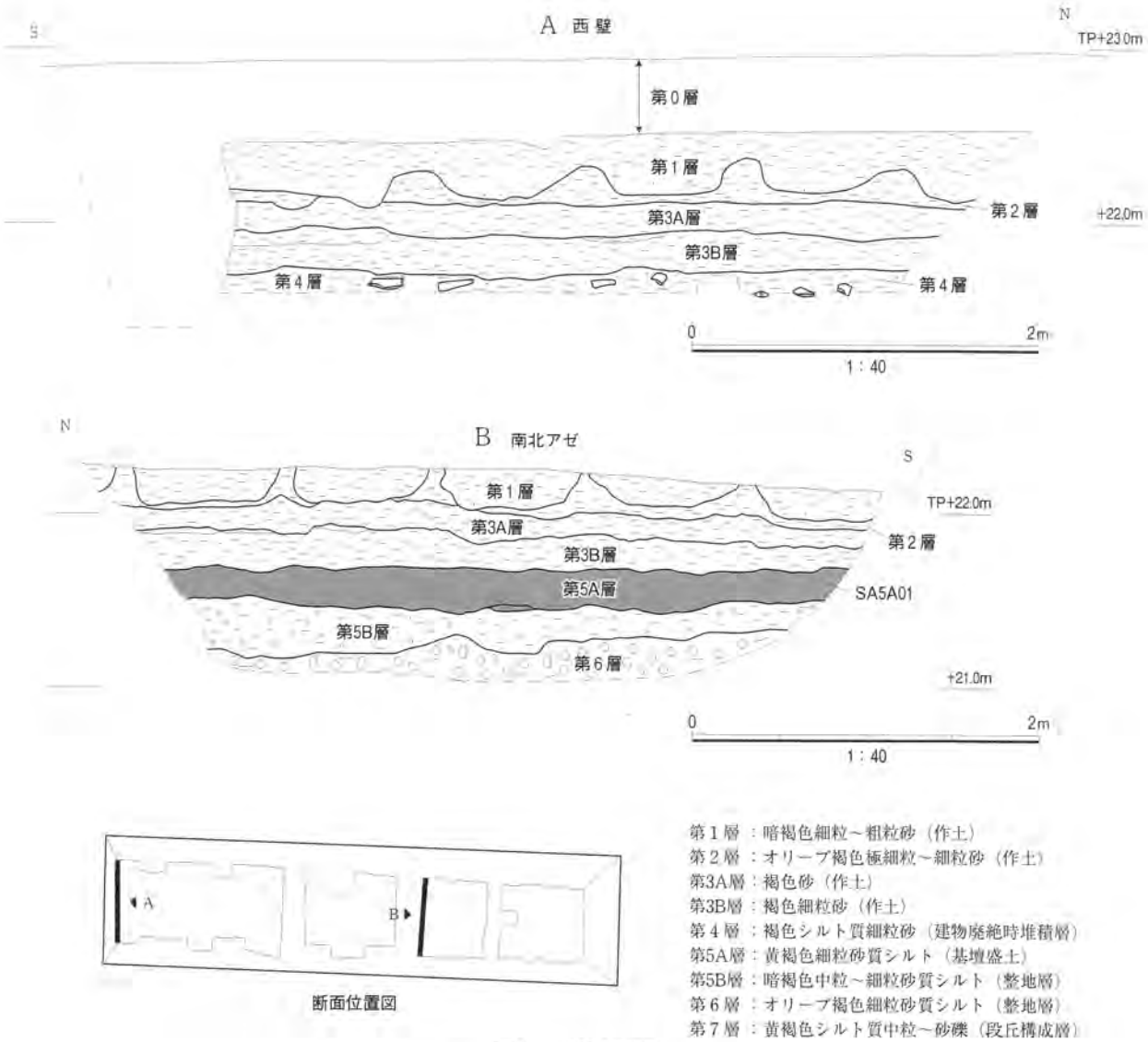


図4　地層断面図

は15cmである。本層からは17世紀の遺物が出土した。

第3B層は粗粒砂を含む褐色細粒砂からなり、層厚20cmである。第3B層上面では土壙SX301・302、礎盤石をもつ柱穴SP301～303、304～307などを検出した。下面では東西方向に溝状に延びる耕作痕を検出した。本層からは、詳細な時期は不明であるが、瓦器の細片が出土した。

第4層：褐色シルト質細粒砂からなる自然堆積層で、後述する建物基壇SB5A01に伴うSX34・35・38の埋土である。第5A層が良好に残るところでは、第3B層に削剥されて残存しない。層厚は最大で15cmである。瓦や凝灰岩の破片を多量に含むことから、後期難波宮廃絶後の地層である。

第5A層：調査区中央部を中心として分布する。黄褐色細粒砂質シルトからなる客土層で、層厚は25cmである。段丘構成層に由来すると思われる粘土の偽礫を含む単位や、炭と焼土の混じる単位、さらに凝灰岩の破片を含む単位などが含まれ、瓦片も出土した。後述するように、後期難波宮に伴う建物基壇SB5A01を構成する盛土層と考えた。

第5B層：暗褐色中粒～細粒砂質シルトからなる整地層で、最大厚は35cmである。部分的に石敷舗

装に由来すると思われる３～５㎝大の礫を含んでいる。炭や偽礫、凝灰岩などを多量に含む第5A層に比べて狭雑物が少なく、両者の層界は明瞭であった。下位で前期難波宮の遺構が検出されたので、後期難波宮に伴う整地層である可能性が考えられる。

第６層：炭・偽礫を含むオリーブ褐色細粒砂質シルトからなる整地層である。調査区中央部以東に存在する谷を埋め立てている。６～７世紀前半代の遺物を含むが、前２年度の調査では本層から難波Ⅲ中段階に属する須恵器杯G蓋が出土したことから、前期難波宮造営段階の整地層である。

第７層：黄褐色シルト質細粒砂～砂礫からなる段丘構成層である。本層の上面、調査区の東半部では谷が検出された。SP601の西で谷頭が検出され(図５)、2009・2010年度の調査では東方は1.2m以上の深さをもつことが知られている。谷は東方向へ延びるが、東方の調査では未検出である。

２．遺構と遺物

ａ．飛鳥時代の遺構(図５)

第６層上面において南北に並ぶ柱穴SP601・602を検出した。SP601は平面形が1.2m×1.6mの不整形な隅丸方形で、柱の抜取り痕跡は直径0.65mである。SP602は調査区外に続くため、全体の平面形は不明であるが、平面が1.3m×0.5m以上の隅丸方形とみられる。なお、SP601とSP602の柱間距離は、掘形間の距離からみておよそ2.9mと考えられる。遺構の年代の根拠と遺構の性格については後で考察する。

ｂ．奈良時代の遺構と遺物(図５・６)

調査区の中央、および拡張区で建物基壇SB5A01を検出した(図５)。SB5A01は第5A層による盛土からなり、北・南隣の前２年度の調査区にも及んで、東西19.5m、南北14.1mを測り、高さは最も高い部分で0.25mである。方位はほぼ正方位をとる。盛土上面は第3B層によって削剥されており、柱穴や礎石の痕跡は見られなかった。NW09－２次調査では基壇西北部の盛土が第４層の岩相と酷似していたため認識できなかったが、今回の調査で盛土(第5A層)が存在することを確認した。今回の調査では、東・西辺の一部と西北隅部を検出した。盛土の限界はなだらかに下降し、その部分に第４層が堆積したSX435(東辺)、SX434(西辺)、SX438(西北隅)があることによって認識した。SX434・435・438は深さ0.10～0.15mで、一見、溝状ではあるが、SX438に隣接するNW02－13次調査Ⅰ－②調査区では北側の立ち上がりが検出されておらず、片側だけが緩やかな段をなすものと考えられる。遺構内からは、瓦・凝灰岩の破片が出土し、SX434・435では基壇側の盛土に密着した状態で凝灰岩の破片が列状に密集していた。このことからみて、これらの遺構は建物基壇の外周をなした地覆石ないし延石の抜取り跡で、建物廃絶後に基壇の残存部分が徐々に崩壊・流出し、そこに瓦片などが混入したものと判断される。また、SX434では、盛土の外縁が幅(南北) 1.5m以上にわたって0.4m外方(西)へ突出しており、ここに階段があった可能性もある。これらの遺構は、NW09－２次調査の盛土東・北側の落込み、NW10－６次調査の盛土南側の落込みと一連の遺構とみられ、これらに囲まれた前記の規模が建物の基壇跡として認識されるのである。SX434・435・438には後期難波宮の重圏文軒丸瓦が含まれることから、後期難波宮に伴う遺構と考えられる。

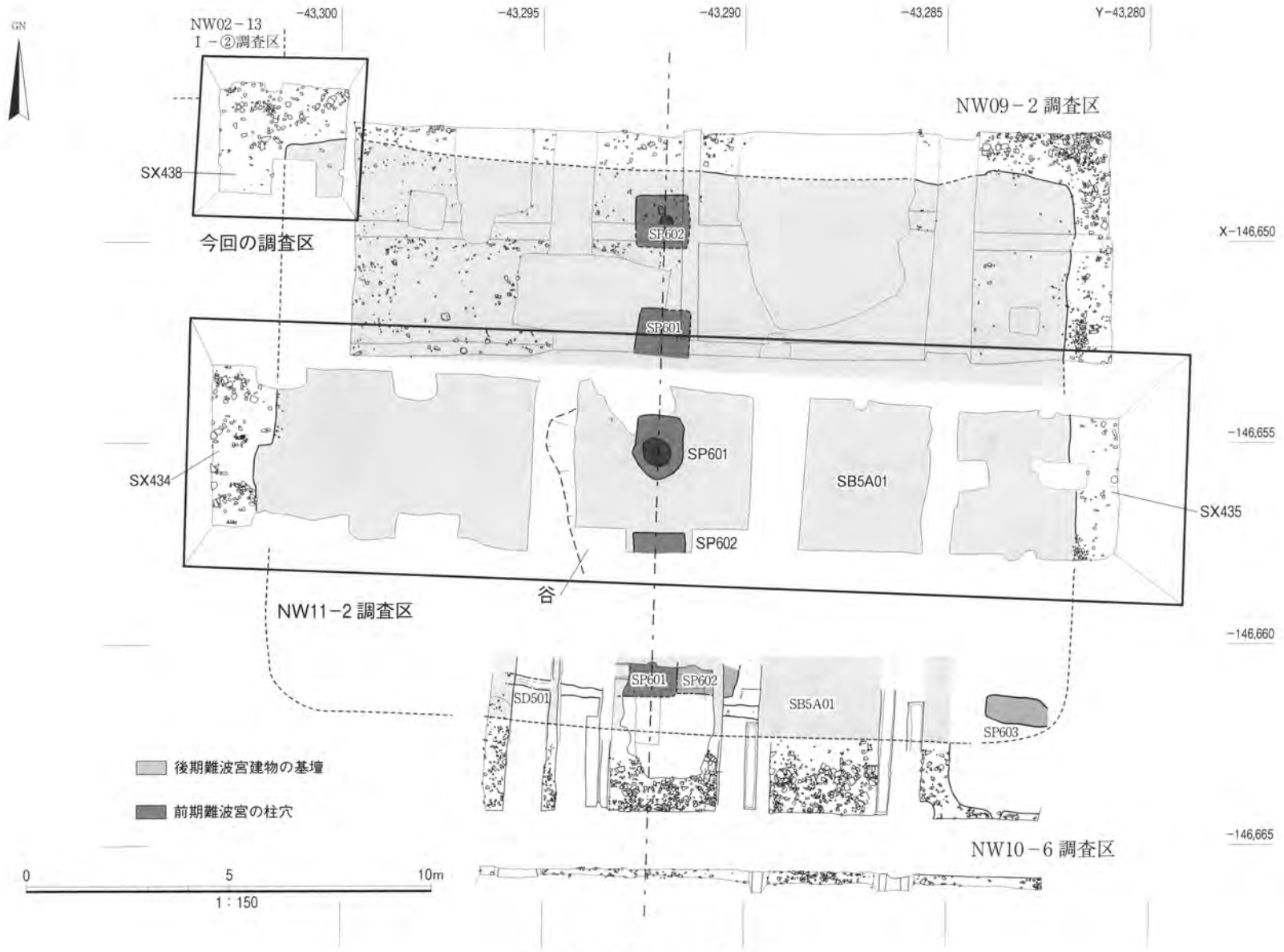


図５　難波宮期の遺構平面図

軒丸瓦1はSX435、同2・3はSX434、軒平瓦4はSX438から出土した。1～3は三重圏文軒丸瓦で、直径18cm前後を測り、圏線の断面は丸く、突出度は高くない。3の拓影で圏線の幅が広く見えるのは剥離が原因である。これらは6016型式に属する。4は重圏文軒平瓦の右側の破片で、無顎式で、外縁をもたない。平行する2本の弧線を上下方向につなぎ、その内側にもう1本の弧線を配する。弧線はそれぞれ幅広で、断面形は丸く、突出度は高い。6574型式に属する。

c．中世の遺構(図7)

第3B層下面で東西方向に延びる耕作溝を確認した。ほぼ正方位であり、後期難波宮の地割りに影響されている可能性がある。

d．近世の遺構と遺物(図7)

多くの遺構を検出したが、ここでは代表的な遺構について報告する。SK301は第3A層上面で検出し、SP301～307は第3B層上面で検出した。

SK301は円形の土壙で、直径1.1mである。検出面からの深さは0.25mである。埋土から肥前磁器片が出土した。17世紀に属する。

SP301～303　長辺1.2m、短辺0.6m、深さ0.5m以上の隅丸長方形の柱穴で、底部に花崗岩製の礎盤石を置く。柱痕跡は不明である。

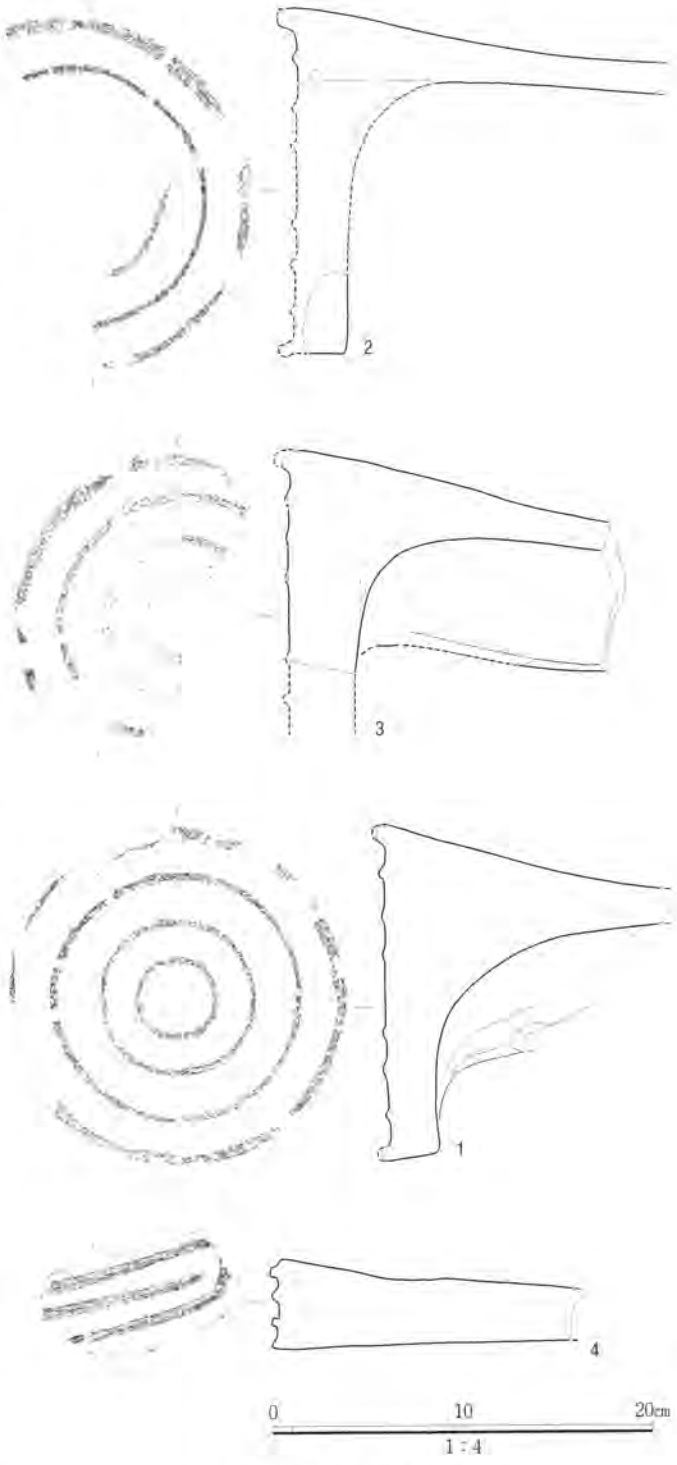


図6　出土遺物実測図
SX35(1)、SX34(2・3)、SX38(4)

SP304～307　直径0.3m前後の円形の柱穴である。柱痕跡は0.15m前後である。SP304～306は1.2～1.3mで等間隔に並び、柱筋もよく通ることから塀であると考えられる。その方向は北で東に約5°振り、これまでに周囲で検出された豊臣期の遺構と近似する。SP301～307からは詳しい時期が判明する遺物は出土しなかったが、前2年度の調査結果からみて豊臣期に属する。

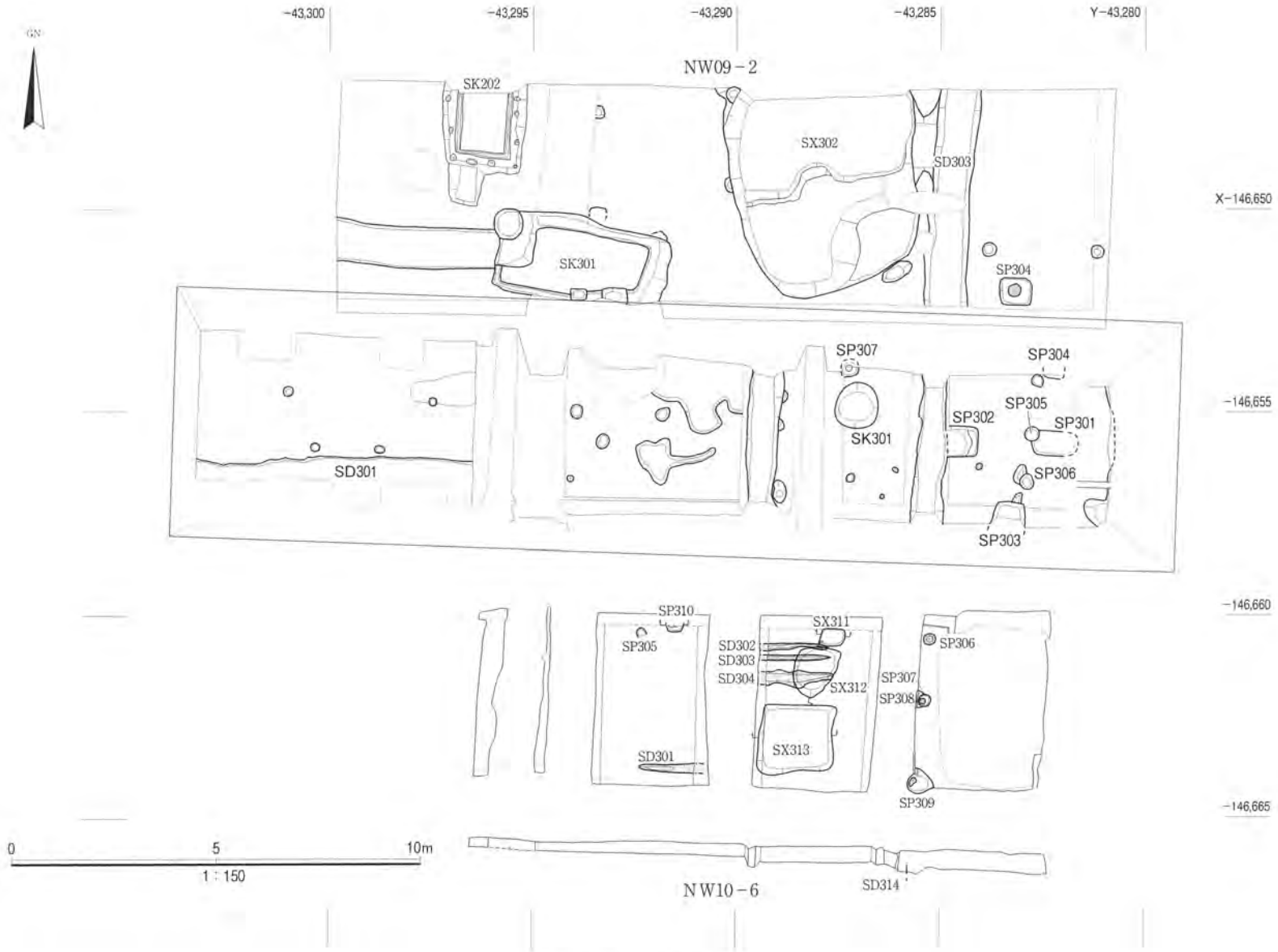


図7　中世・近世の遺構平面図

3．考察

a．難波宮東方地域の層位学的理解

上町台地の高所に立地する難波宮跡では、本来、地層が堆積する環境になく、また、後代の開発による削剥によって地層が失われ、地山直上で前・後期の遺構を検出する場合が多い。しかし、今回の調査では難波宮期の地層を３層確認することができた。すなわち、前期難波宮造成時の整地層である第６層、後期の建物基壇の盛土層である第5A層とその下位の第5B層である。第5B層については上・下位の地層の年代から前・後期難波宮のいずれにも属する可能性もあるが、後述する周辺の遺構の時期から後期段階の地層と判断する。

地山層と開析谷を埋め立てた第６層の上面が前期難波宮の造営面である。調査地のすぐ西側は朝堂院東面回廊があり、東方には東方官衙群が展開する。

第5A層上面は、建物基壇とその残滓である瓦堆積が検出されるので後期難波宮の造営面である。ただし、第5A層中には明確に瓦片が含まれる。宮殿での瓦の使用は前期段階ではないとみられるので、第5A層は前にあった後期の建物などを削平して客土したことになる。つまり後期のなかでも新しく位置付けることが可能で、第5A層の上面を後期難波宮新段階と呼ぶ。今回の調査で検出された瓦堆積（第４層内）はNW02－13次調査Ⅰ－②区を介してNW１次調査の瓦堆積と直接に連続する。

第5B層は前期の柱穴を埋めるのでこれより新しいことは確実である。調査地の東約30mを南北に延びる、NW121次調査のSD12121（NW04－１次調査のSD902と同一の溝）の上部は埋め立てられて石敷が施されている（NW02－13次調査Ⅰ－③区）。後述するように石敷は第5A層上面の造作である。一方、SD12121の機能時堆積層からは重圏文軒丸瓦が出土しており、溝が後期のものであることがわかる。機能時堆積層は第5A層の下位に当るので溝は第5B層上面遺構に相当する可能性が高い。これによって第5B層上面は後期に属すると考えられるのである。これを後期難波宮古段階と呼ぶ。

以上の層位学的検討から、地山層・第６層上面を前期難波宮段階、第5B層上面を後期難波宮古段階、第5A層上面を後期難波宮新段階の各造成面に比定することが可能である。以下、各段階に、調査地の遺構を中心にして周辺の概況を述べる。

b．前期難波宮段階（地山層・第６層上面）

飛鳥時代の柱穴として報告したSP601・602は、前２年度の柱穴に連続し、南北に延びる塀である可能性が高い。調査区の南約180mのNW85－34・86－12次調査でもほぼ同規模の柱穴が南北に３基検出され、塀SA701を構成すると想定されている［大阪市文化財協会2004］。SP601・602はSA701の延長上にあり、同一の塀を構成するものとみられる。SA701は後期難波宮期の溝SD701に切られるので前期難波宮期の遺構と考えられ、塀は前期のものと考えてよい。塀は前期難波宮朝堂院回廊東端から東に12.2mの位置に当り、東方官衙群の西を区画し、朝堂院回廊との間に空閑地を構成したものと考えられる［大阪市文化財協会2008：p.5］。

一方、宮殿の西へ目を転じると、NW08－１次調査では、この塀とほぼ対称の位置で同じように南北方向の塀が見つかっている［大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010］。これも後期難波宮期とみられる溝に切られ、前期難波宮の遺構と判断される。この遺構も南北に連続することが確認されるの

図８　前期難波宮(案)

であれば、西方官衙の東を画する塀ということになるであろう。

上記の遺構は前期難波宮、つまり孝徳朝の難波長柄豊碕宮に伴う遺構である。

c．後期難波宮古段階

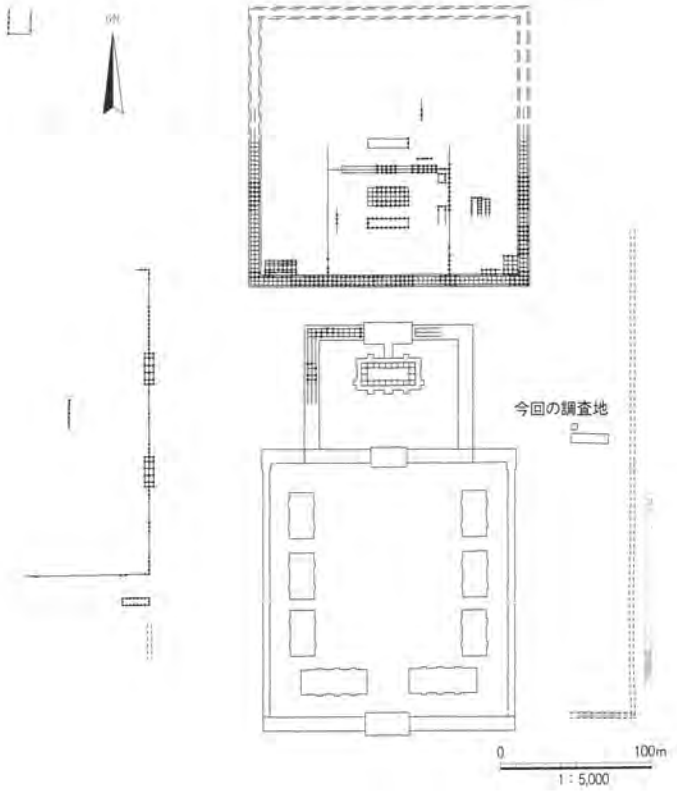
今回の調査では遺構は検出されなかったが、調査地東方には先述のSD12121がある。この溝はNW121・02－13・04－１次調査で検出され、後期難波宮中軸線の160m東を南北200m以上に亘って延びることがわかっている。この段階の宮殿東方を画する溝と考えられ、以東では後期の建物は発見されていない。後期朝堂院東面回廊と溝の間は約80mあることになるが、この範囲でも発見された遺構はなく、その分布状況は現在のところ不明である。

上記の遺構は後期難波宮でも聖武朝に再建された難波宮に伴う遺構である。

d．後期難波宮新段階

今回の調査で、前２年度の懸案であった建物基壇SB5A01の範囲が確認された。おそらく桁行５間程度の東西棟の建物が建っていたものと推定される。それでは、この建物がこの段階でどのように位置づけられるのであろうか。SB5A01の特徴は、盛土による基壇があり、周辺に瓦堆積を伴うといったことが挙げられるが、過去の調査で類似した特徴をもつ遺構が見つかっている。NW１・２・３・４・19・121・02－13次などで報告されている瓦堆積、土壇である。

【後期難波宮古段階】



【後期難波宮新段階】

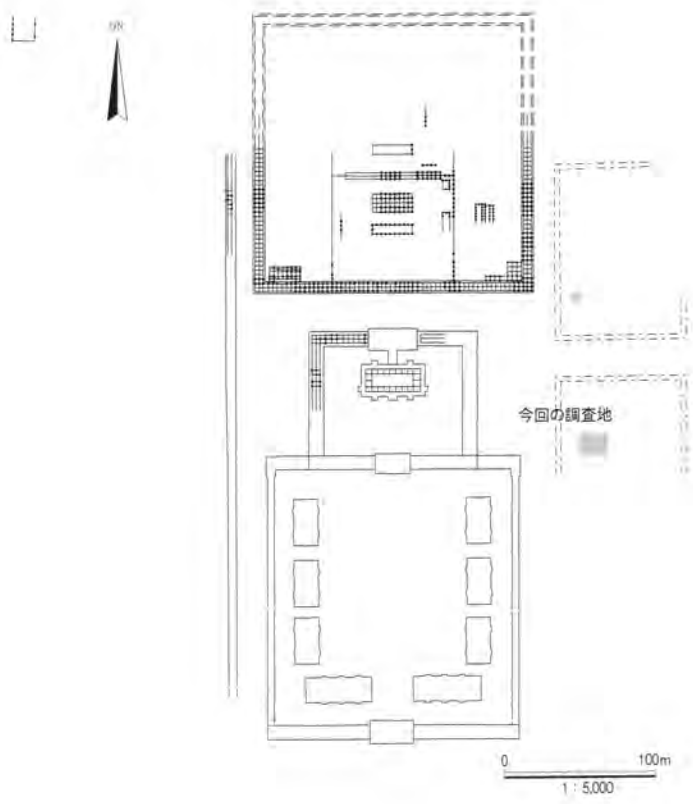


図9　後期難波宮（案）

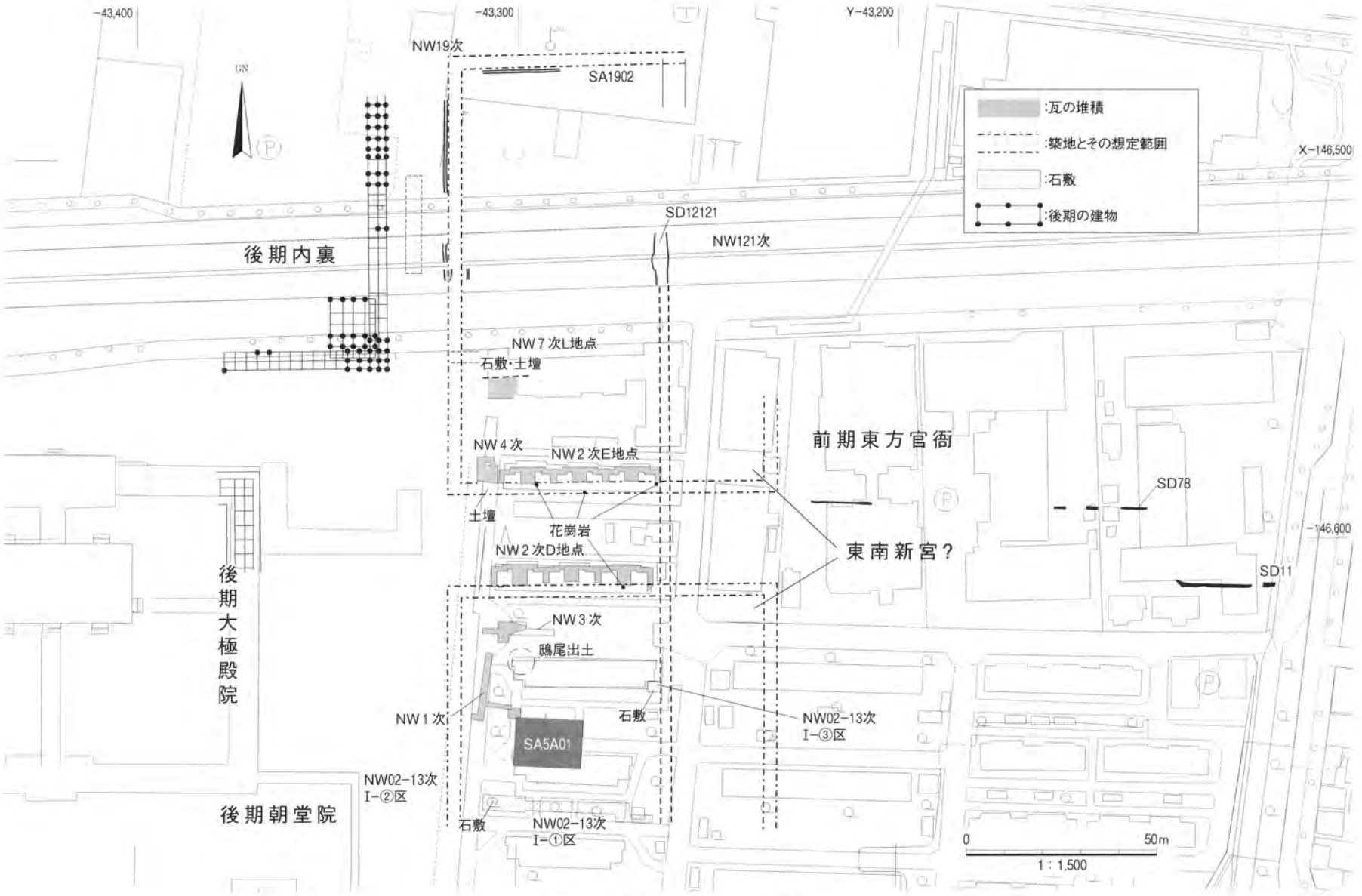


図10　後期難波宮新段階の宮殿東方

まず、調査地北側のNW２次調査E地点では東西40mに亘って分布する瓦集積とその南に土壇が報告されており、築地塀など(註１)の区画施設であった可能性を指摘しうる[高橋工2008]。この連続はNW02－8･121･19次調査地でも土壇状の高まりや瓦堆積、雨落ち溝として追跡することが可能で、西･北面の区画施設を想定することができる。東面についても、NW30次調査の南西部に南北にのびる瓦堆積が報告されており、やはり区画施設が想定できる。このようにして、調査地の北側に東西85m、南北115mの区画が復元できるのである。NW７次調査L地点で検出された瓦堆積と石敷を伴う土段は、この区画内に設けられた建物の基壇とみてよかろう。

次に、今回の調査地の北40mがNW２次調査D区として調査されており、前述のものと同様な東西に長い瓦堆積と土壇の存在が知られている。NW１・３次調査地で瓦堆積が報告されてはいるが、北側の区画のように東・西・南面の区画施設に相当するような遺構は発見されていない。しかし、以下のような状況から調査地周辺にも北側と同様な区画施設を想定することが可能である。つまり、本調査地の南のNW02－12次調査Ｉ－①区では中世作土層の下位で石敷が発見されており、層序からみて第5A層上面の造作とみてよい。石敷は限られた空間を荘厳するものであろうから、NW02－12次調査Ｉ－①区と今回調査地の一帯を区画施設が囲繞するものと考えられるのである。図10では北側と同規模の区画施設を仮に復元している。こうした状況の中で、建物基壇SB5A01は南側区画内の建物と理解することができ、その位置が西に偏ることから、付属的な建物と考えられるのである。その場合、今回調査地の北側で難波宮発見の契機となった鴟尾片が出土していることは興味深く、出土地点が区画内の最も奥に当ることから、東西棟の中心建物の存在を示唆しているかのようである。

NW２次調査のD・E区の間は、上記二つの区画の間の空閑地ということになる。空閑地の東方、前期東方官衙地区では、約20mの間隔をもって平行し、東西に延びる後期の溝SD11・78がある。２条の溝の間隔と位置は空閑地の幅と方向にほぼ一致している。溝を道路側溝と捉えれば、両区画の間に幅約20mで東西に延びる道路が存在したと考えることができるのである。

以上、二つの区画が存在した可能性を指摘したが、内裏・朝堂院との位置関係は調和的であり、後期の新しい段階で宮殿の東方を広範囲に改変し、内裏・朝堂院に付加するかたちで造営された施設と考えられる。

上記の遺構群は、層位的に最も新しく、内裏東南にあるという位置からみて、後期難波宮の中でも、天平勝宝８(756)年に孝謙天皇が御した難波宮の東南新宮に当る可能性が強い。

〈まとめ〉

・今回の調査地では、過去２年間の調査で課題となっていた建物基壇の範囲を明確にすることができた。

・層位学的検討から、前期難波宮段階・後期難波宮古段階・後期難波宮新段階の３段階を設定し、それぞれに属する遺構群の変遷を把握することができた。

・その結果、後期難波宮新段階に区画施設を伴う二つの区画を復元し、建物基壇SB5A01はその区画内に建てられた建物の基壇であると考えた。

・後期難波宮新段階に属する遺構群は、『続日本紀』に見える孝謙天皇の東南新宮に比定できる可能性を指摘した。

註

（1）NW2次調査E・D地点では土壇と共に花崗岩が複数検出されており、築地片庇廊や、単廊・複廊の可能性もあろう。

引用文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「難波宮跡・大坂城跡発掘調査（NW08－1）報告書」：『平成20年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.19－26

大阪市文化財協会2004、『難波宮址の研究』第十二

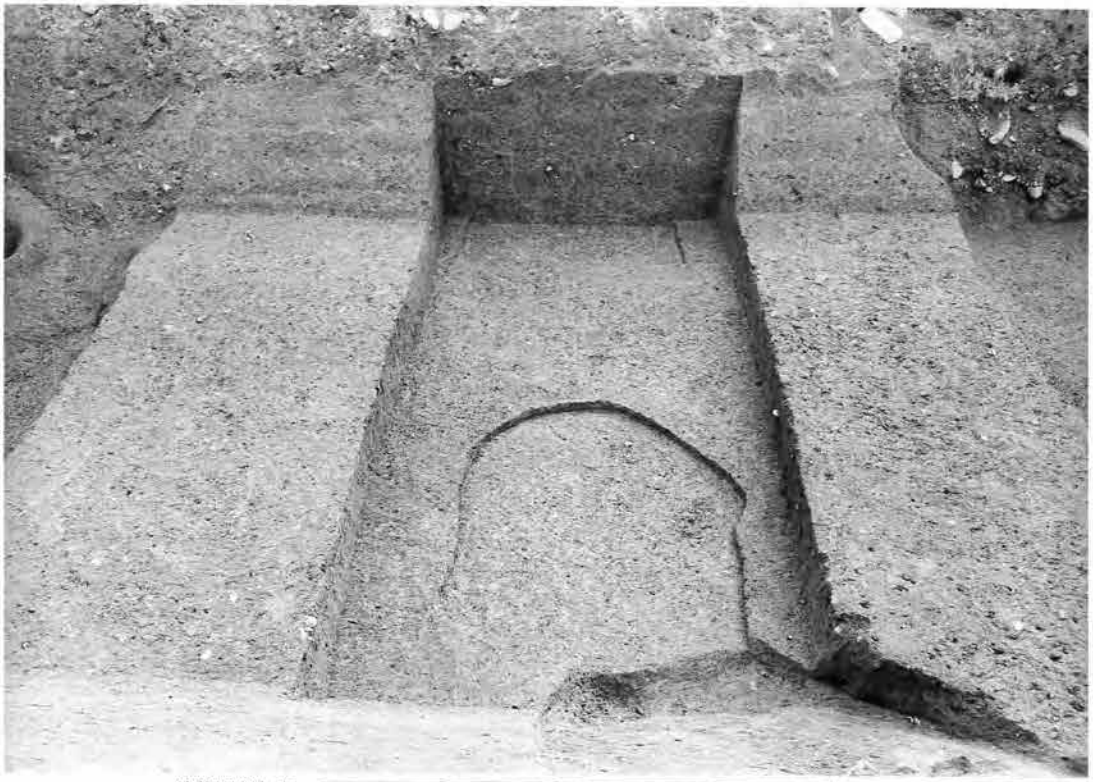
2008、『難波宮址の研究』第十五

2009、『難波宮跡・大坂城跡発掘調査（NW08－1）報告書』

佐藤隆2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十一、pp.253－265

高橋 工2008、「第Ⅳ章第2節　後期難波宮宮殿東方地域の概観」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十五、pp.76－86

前期難波宮
SP601・602
検出状況
（北から）

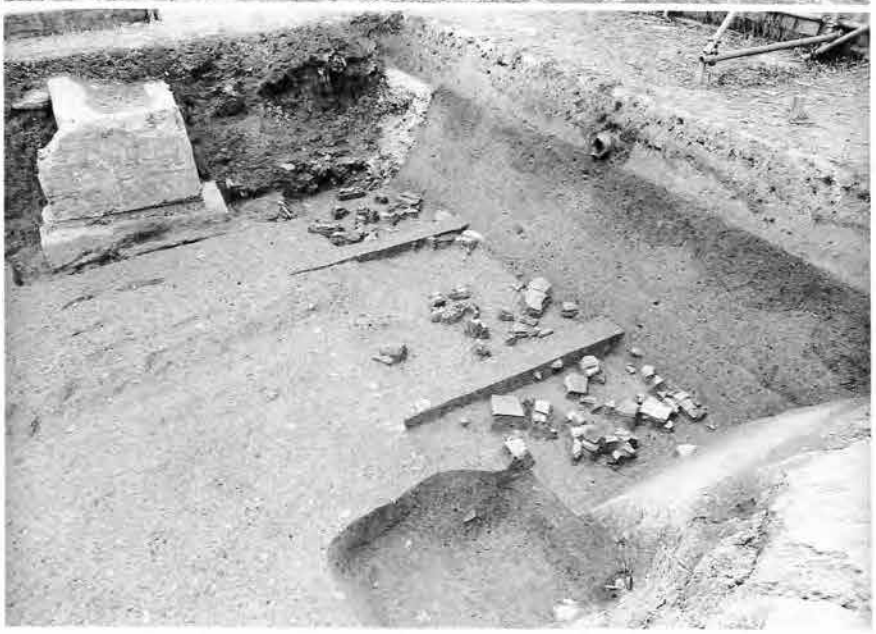


後期難波宮
建物基壇SB5A01
西辺の状況
（北から）

後期難波宮
建物基壇SB5A01
全景(東から)

後期難波宮
建物基壇SB5A01
東辺　瓦・凝灰岩
出土状況(東から)

後期難波宮
建物基壇SB5A01
西辺　瓦・凝灰岩
出土状況(北東から)



中央区法円坂一丁目における建設工事に伴う
難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW11－3)報告書

調査個所	大阪市中央区法円坂1丁目4－1・4－23
調査面積	27㎡
調査期間	平成23年11月7日～11月17日
調査主体	財団法人大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南秀雄、岡村勝行、白川靖裕

1)調査に至る経緯と経過

調査地は難波宮跡の東南部に位置する。これまで周辺では多数の調査が行われ、難波宮の時代を中心に古墳時代から近世初期までの遺構・遺物が検出されている。

大阪市教育委員会が平成23年7月19日に行った試掘調査の結果、現地表下1.5m以下で、豊臣期の可能性がある遺構面が検出され、本調査を実施することになった。

調査開始前に事業主側によって、現地表下1.5mまでの地層が掘削・除去された。当初、敷地中央に東西5m・南北8mの調査区を設定する予定であったが、十分な残土置き場を確保するため、南北は5mとなった。その後、東壁に沿って、南北の溝SD04が発見されたため、調査区を東に拡張した。最終的な調査面は現地表下3.0m（TP+14.8m)の地山上面までである。

基準点はmagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+Omと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

敷地の現地表面の標高はTP+17.7m～18.0mで、緩く南側に下がっている。調査地の北30mで行われたNW02-13次調査[大阪市文化財協会2005]ではすぐ南が崖面となり、旧地形が南東側に落ちていることが確認され、本調査地は谷に位置することが予想された。調査では現地表下1.4m(TP+16.4m)以下の地層について観察した。地層は大きく8層に分けられ、各層の特徴は次の通りである(図4)。

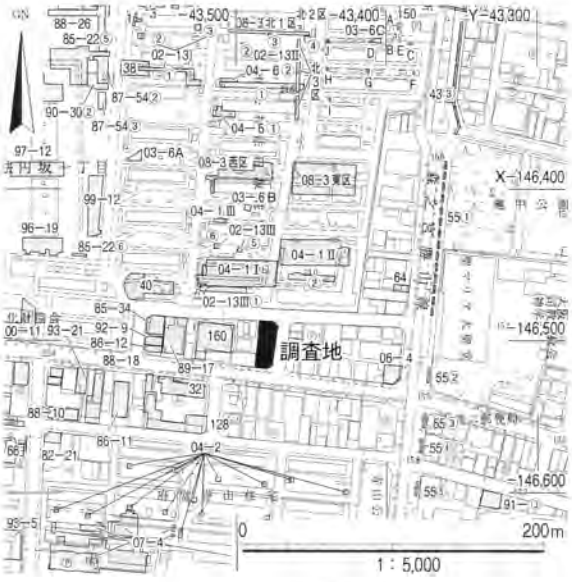


図1　調査地位置図

図2　調査区位置図

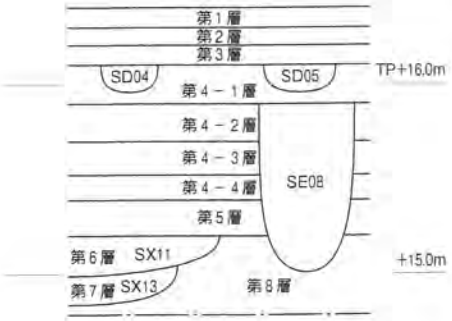


図3　地層と遺構の関係図

第１層：オリーブ黒色(5Y3/2)中粒砂質シルトからなる整地層で、層厚は約10cmである。豊臣後期の遺物を含む。

第２層：灰色(5Y4/1)中粒砂質シルトからなる整地層で、層厚は約10cmである。本層内で調査区東端で豊臣後期に属する遺物が集中して廃棄された跡SX02を検出した。

第３層：地山層に由来する偽礫を主体とする緑灰色(10GY5/1)粗粒砂質シルトからなる整地層で、層厚は10～40cmである。青花6、漆椀12など豊臣後期に属する遺物を含む。

第４層：４層に細分した。いずれも盛土層で、豊臣後期の遺物を含む。第４－１層はオリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂質シルトを主体とし、層厚は20～30cmである。上面でSD04・05を検出した。第４－２層は、偽礫や炭を含むオリーブ黒色(7.5Y3/1)中粒砂質シルトを主体とし、しまりが悪い。層厚は30～70cmである。第４－３層は、オリーブ黒色(2.5Y3/1)粗粒～細粒砂質シルト、地山に由来する偽礫を含んだ粗粒砂質シルトを主体とし、層厚は約30cmである。第４－４層は、偽礫を含むオリーブ黒色(2.5Y3/1)中粒砂質を主体とし、層厚は約20cmである。ともにしまりが悪く、SE08の掘削土あるいは再掘削土に由来するものと考えられる。

第５層：灰色(5Y4/1)細粒砂質シルトからなる締まりの良い盛土層で、層厚は10cmである。上面でSX07・SD09・SK10を検出した。また、本層はSE08の掘削面である。瀬戸美濃焼天目碗2、瓦質土

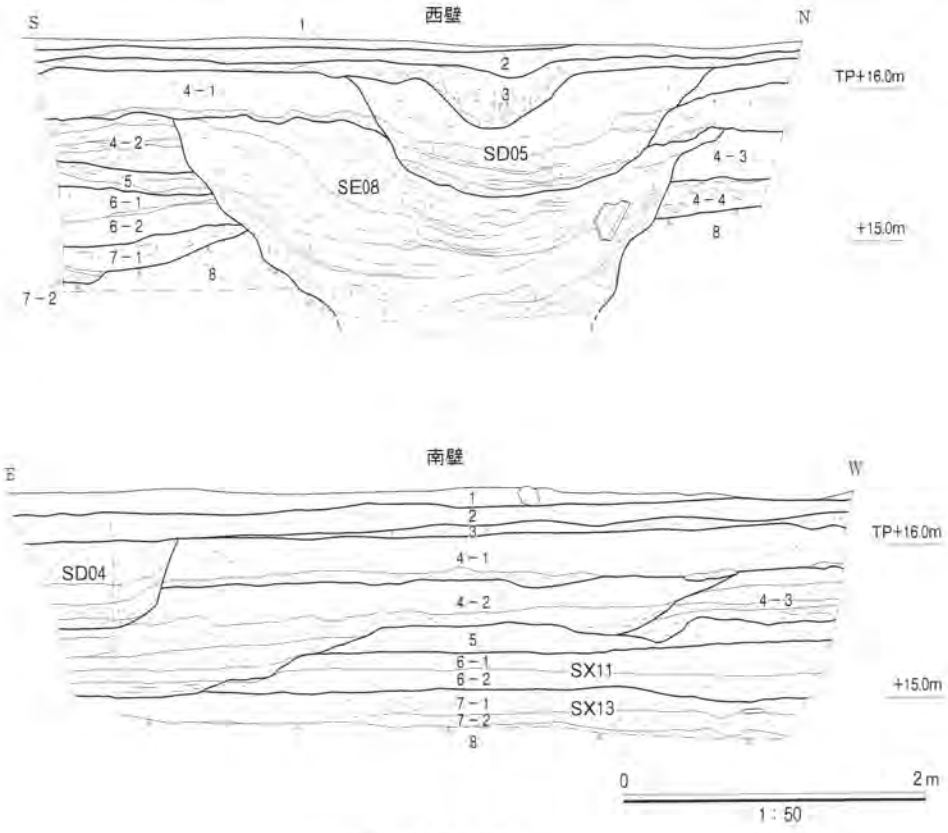


図4　地層断面図

器羽釜10、羽子板状木製品15、箸16・17など、豊臣後期の遺物を含む。

第６層：調査区南部に分布する。SX11の埋土で、大きく２層に分かれる。第６－１層は灰オリーブ色(7.5Y4/2)粗粒砂質シルトからなり、層厚は５～20cmである。第６－２層は灰色(7.5Y4/1)粗粒砂質シルトからなり、層厚は約15cmである。これらの２層は第５層同様、堅く締まる。瓦器椀の細片を含む。

第７層：第６層同様、調査区南部に分布する。SX13の埋土で、大きく２層に分かれる。第７－１層は灰色(7.5Y4/1)偽礫混り粗粒砂質シルトで、層厚は10～15cmである。第７－２層は灰色(5Y4/1)偽礫混り粗粒砂質シルトで、層厚は10～15cmである。これらは締まりの悪い地層である。奈良時代以前の遺物を含む。

第８層：緑灰色(10GY6/1)粗粒砂質シルトからなる地山層である。層厚は50cm以上である。

ⅱ)遺構と遺物(図５～７)

ａ．古代の遺構と遺物

SX13　第８層上面で検出した。南への落込みであり、幅５m以上、長さ0.7m以上、深さ0.3m以上である。第７層を埋土とし、土師器・須恵器・平瓦の小片を含む。奈良時代以前の遺物しか含まず、古代の遺構である可能性が高い。

ｂ．中世の遺構と遺物

第８層上面でSX11、SK12を検出した。

SX11　調査区南への落込みであり、幅５m以上、長さ1.5m以上、深さ0.3m以上である。

SK12　径1.6m、深さ0.1mの円形の浅い土壙である。

SX11、SK12の埋土からは須恵器・平瓦など古代以前の遺物のほか、瓦器椀の小片が出土した。疎らな暗文の状態から、概ね13世紀代に位置づけられる。

ｃ．豊臣後期の遺構と遺物

第５層上面でSX07、SE08、SD09、SK10、また、調査区北西隅で礎石１個を検出した。

SX07　調査区東寄りで検出された不整形な落込みで、西・南・東の三方に落ち込む。深さは最大0.3mで、埋土は地山の偽礫を多く含む粗粒砂を主体とする。備前焼擂鉢の小片のほか、土師器・須恵器が出土した。

SE08　調査区西側に拡がる円形の掘形をもつ井戸で、直径は約3.6m、深さ1.4m以上である。埋土のうち中央部約1.2mは締まりが悪い。掘形埋土は地山の偽礫を含む細礫を含む細粒砂質シルトを主体とし、漆椀蓋13のほか、瀬戸美濃焼天目碗・備前焼鉢・丸瓦など豊臣後期の遺物が出土した。13は口径12.9cmで、内外面とも地は赤漆で、外面に黒漆で草花を描く。

SD09　幅0.7m、深さ0.2mで、南西方向に延びる。

SK10　長さ1.0m、幅0.5m、深さ0.1mの土壙である。

第４層上面でSD04・05、SK06を検出した。

SD04　調査区東壁に沿って検出された南北溝で、幅1.2m以上、深さ0.6mで、北壁近くでは側板と杭による土留が確認できた。埋土は中粒砂を主体とする自然堆積で、瀬戸美濃焼皿５が出土した。口

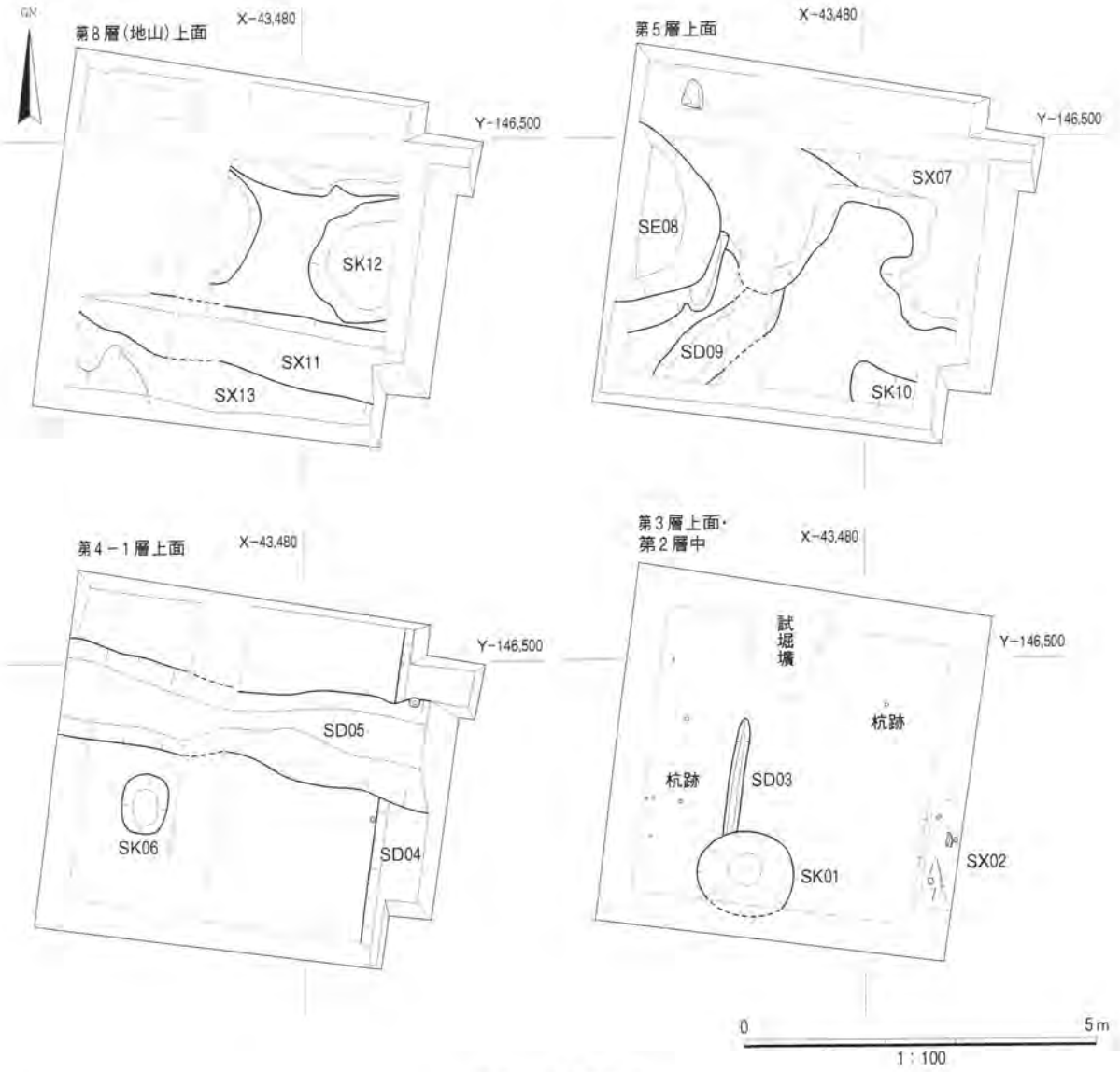


図5　遺構平面図

径10.7cmで、被熱しており、灯明皿として使用された可能性がある。

SD05　調査区を東西に横断する溝で、幅は0.4～1.1m、深さは0.5mで、溝底のレベルは東西端とも大差はない。東端の埋土下部には地山に由来する偽礫を多く含むが、そのほかはシルト～粗粒砂からなる自然堆積である。この水漬きの堆積層からは、土師器皿9、備前焼擂鉢、瀬戸美濃焼天目碗1、木製品では漆椀14、箸、曲物底板、板材など、豊臣後期に属する多様な遺物が出土した。9は灯明皿として使われ、内面の2箇所に芯痕がある。14は椀の高台で、高台径7.5cmである。内外面とも赤漆を施す。

SK06　長さ0.8m、幅0.6m、深さ0.4mの土壙で、遺物は確認できなかった。

調査区東端の第2層中で、陶磁器、木製品などまとまって投棄されたSX02を検出した。内訳は、土師器皿、瀬戸美濃焼天目碗3、肥前陶器小碗4、焼塩壺11、瓦質土器火入、木製品では、漆椀、曲物底板、箱、板、棒などである。3は外面に厚く鉄釉を施し、底部内面は油滴である。4は高台端部に目跡がある。11は焼塩壺の完形品で、口径6.1cm、高さ8.4cmである。

図6　出土遺物実測図

SX02(3・4・11)、SD04(5)、SD05(1・9・14)、SE08(13)、
第2層(7)、第3層(6・8・12)、第5層(2・10・15~17)

d．江戸時代の遺構

第2層上面で、SK01、SD03を検出した。ともに18世紀後半の遺物を含む。

e．地層出土の遺物

第5層　2は瀬戸美濃焼天目碗である。10は瓦質土器羽釜で、口径15.8cm、口縁部はやや内傾する。15は羽子板であろうか。長さ31.7cm、打面の両端を欠くが、現状で最大幅7cm、厚さは1.3cmである。握りと打面の側面に刳り込みを入れる。木目からずれて木取し、全体に粗雑な作りである。16・17は

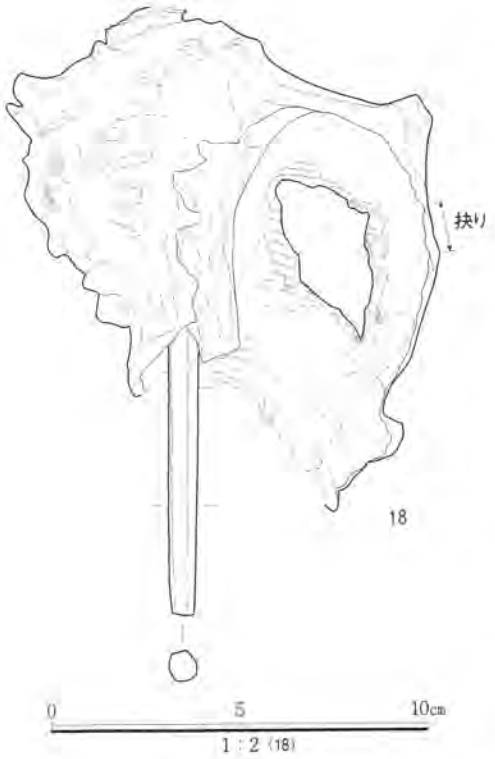


図7　柄付アカニシ実測図

箸で、それぞれ長さは25.7cm、24.4cmで、最大幅は0.7cm、0.6cmである。ともに7面前後を面取りし、両端を細く仕上げる。

第4層　18はアカニシの臍孔に棒状の木製柄が差し込まれたものである。殻頂と臍孔の端部を欠損しており、柄を含めた残存長は16.0㎜である。殻は殻口部の外唇の一部に鋭利な刃物痕がある。体層部の背面には孔があるが、不定形で、断面が鋭利ではないため、人為的に開けられたものとは断定できない。また、鉄分が沈着しており、火を受けた痕跡の有無についても明瞭ではない。一方、柄については、抜くことができなかったため全体の形状は不明であるが、細かく面取りをしている。直径が8㎜程度で、基部はやや細くなっている。こうした柄付きアカニシは、東京都葛西城跡・汐留遺跡・丸の内三丁目遺跡、大阪府大坂城跡・堺環濠都市遺跡など、全国でも十数例の出土例が確認されているのみである[池田2006・2007]。これらの多くは殻高100㎜以上の大型のアカニシに、拳で握ることができる程度の短い棒が差し込まれたもので、16世紀後半から17世紀代を中心に、城や武家屋敷、寺社の堀などから出土している。その用途については、調理のために柄が差し込まれたとするものや、貝杓子、イイダコツボ、酒を温める容器、灯火具など諸説がある。

第3層　6は青花皿である。文様は獅子文であろうか。高台端部に砂が付着する。8はへそ皿で、口径6.6cmである。12は漆器椀で、現状では歪み、口径12.5～13.8cm、高さ7.8cmである。地に黒漆、体部と底部に赤漆で文様を施す。

第2層　7は芙蓉手の青花皿で高台端部に砂が付着する。

3）まとめ

調査地は谷地形に位置し、生活痕跡は希薄と思われたが、豊臣後期の井戸や溝などとともに、珍しい柄付きアカニシや、漆椀など木製品を含む豊富な遺物が出土し、屋敷地の一角にあたることが判明した。また、南部の落ちは古代・中世の造成を想定させる。小面積ながら、多くの成果を得ることができた。

引用文献

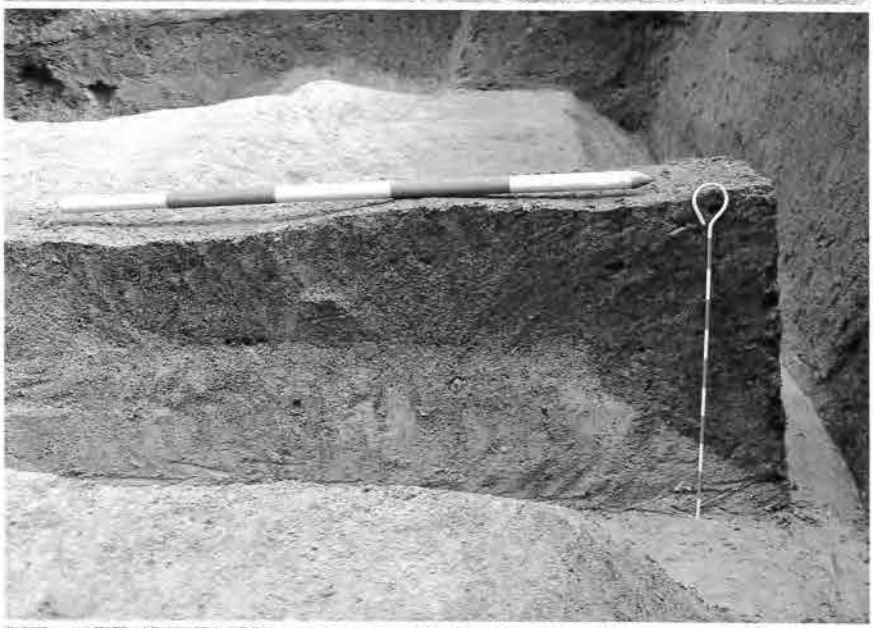
池田研2006、「大坂城跡(03－1・OKS99)出土の貝類」：大阪府文化財センター編『大坂城址』Ⅲ、pp.543－552

2007、「葛西城から出土した「柄つきアカニシ」：葛飾区郷土と天文の博物館編『関東戦乱　－戦国を駆け抜けた葛西城－』、p.107

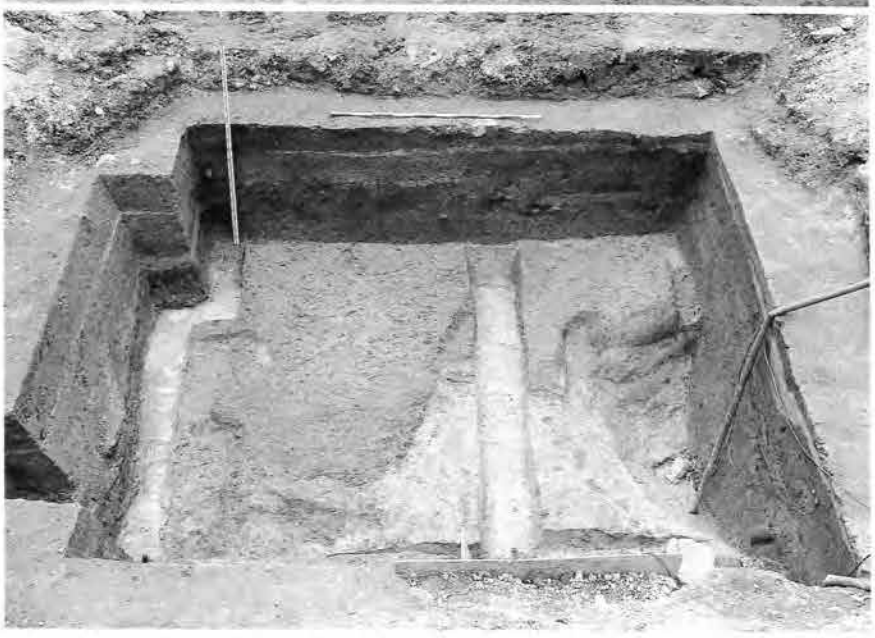
大阪市文化財協会2005、『難波宮址の研究』第14号

第８層上面遺構検出状況
（北から）

SX11・13の断面
（西から）



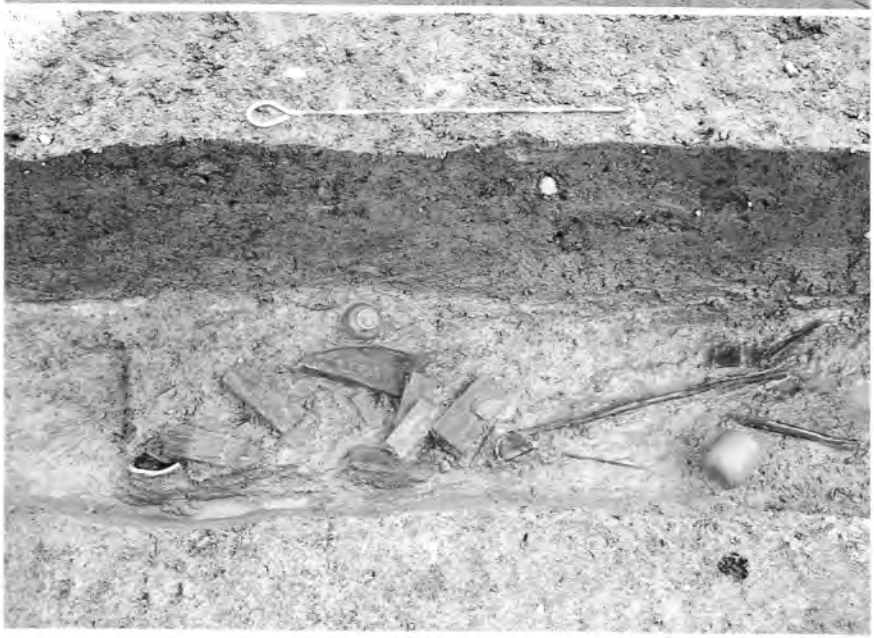
第５層上面遺構検出状況
（北から）



SE08断面(東から)

第４－１層上面
遺構検出状況
(西から)

第２層中SX02
(西から)



中央区備後町一丁目における建設工事に伴う
大坂城下町跡発掘調査(OJ11－１)報告書

調査個所	大阪市中央区備後町1丁目33・35－1・36・37
調査面積	60㎡
調査期間	平成23年10月12日～10月20日
調査主体	財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、京嶋 覚、清水和明

1)調査の経過

調査地は豊臣～徳川期における大坂城の城下町として開発された地域にあたり、惣構堀とされる東横堀川に近接する地点である。今回の調査地の北西120mのOJ02－３次調査ではTP＋約２mで大坂ノ陣の焼土層が検出され、それ以下には古代～中世の遺物が検出されている[大阪市文化財協会2003]。南側200mのOJ97－７次やOJ96－11次調査ではTP＋1.5m前後で中世の地層が検出されており、豊臣期の遺構面はTP＋約２m前後であると推測された[大阪市文化財協会1999a・b]。

事前の試掘調査では現地表から1.7m下で、豊臣期以降の遺構面や地層が確認されたため、敷地内の既設建物を避けた敷地北部に東西６m、南北10mの調査区を設定し、現地表下2.4mまで発掘調査を行うことになった。

10月12日に重機による表土掘削を行い、現地表から約1.5m下で、試掘時に確認された遺構面と思われる第４層(後述)上面を確認して遺構の調査を行った。それ以下、各地層を人力掘削して調査を進めていった。19日に遺構掘削および記録作業をすべて完了し、20日には埋戻し作業および機材の撤収作業を行って現場作業を完了した。

以下にその結果を報告する。なお、図１・２の方位は座標北を、図５は磁北を基準にし、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、図中ではTPと省略した。

2)調査の結果

ⅰ)層序(図３・４)

第１層：近現代の整地層ないし攪乱壙の埋土である。厚さは60～80cmである。

第２層：黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルト～粘土質シルト層で、近代の整地層である。層厚は最大

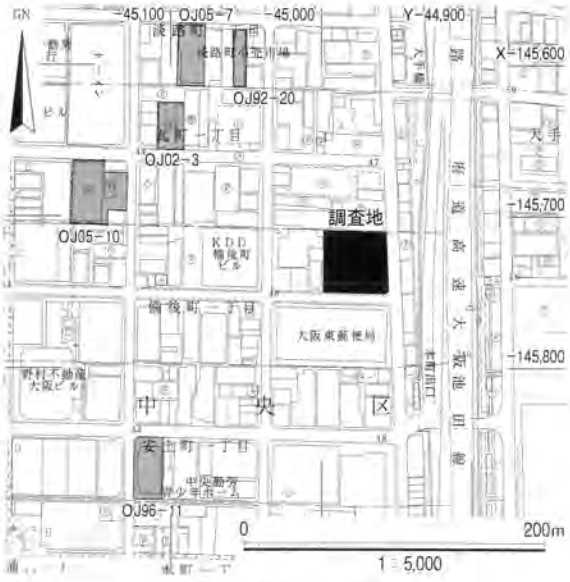


図１　調査地位置図

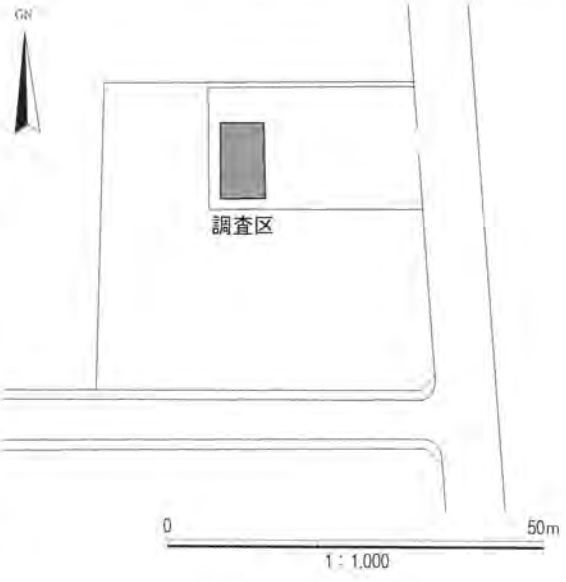


図２　調査区位置図

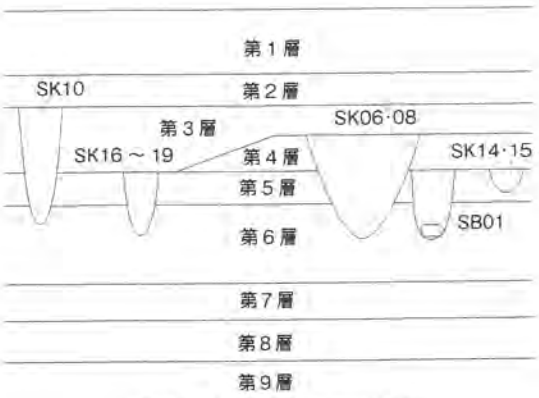


図3　地層と遺構の関係図

で40cmである。

第3層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト層～にぶい黄色(2.5Y6/4)細粒～中粒砂層の整地層である。層厚は最大で40cmである。

第4層：明黄褐色(10YR6/7)細粒～中粒砂層の整地層で、層厚は30～40cmである。上面に薄く炭が堆積する。上面の標高はTP+3.0～3.2mである。

第5層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)または黄灰色(2.5Y5/1)細粒～中粒砂質シルト層の整地層である。北端部では層厚5～10cmの暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘土が貼られている。層厚は10～30cmである。

第6層：オリーブ黄色(5Y6/3)細粒砂～細礫層の整地層である。敷地中央部の深掘りにより、層厚は約100cmであることが確認された。本層以下の地層は深掘り部で確認された地層である。上面の標高はTP+2.8mである。

第7層：浅黄色(7.5Y7/3)中粒砂層で、黒色粘土の偽礫を多く含む整地層である。層厚は30cmである。

第8層：褐灰色(5YR4/1)シルト質細粒砂の作土層である。下部には水成の細粒砂が部分的に残り、そこから中世頃の平瓦片が出土した。層厚は40cmである。

第9層：褐灰色(7.5YR4/1)細粒砂質シルトの作土層である。上面の標高はTP+1.0mである。

ii)豊臣後期～徳川期の遺構と遺物(図5～7)

調査区南部の第5層上面で根石を伴う布掘りの掘形をもつ建物SB01とSK13～15を検出した。

SB01は幅0.6m、深さ0.5mの溝底に直径50～60cmの根石2個が検出された。掘形の埋土は灰オリーブ色(5Y6/2)細粒～中粒砂で、両根石上面に直径18cmの柱根が残っていた。柱間隔は2.65mである。

SK13～15はいずれも直径0.7mの円形土壙で、SK13は深さ0.3m、黄灰色(2.5Y4/1)中粒砂質シルトを埋土とし、土師器・瀬戸美濃焼・備前焼の細片が出土した。SK14は深さ0.3mで埋土は暗褐色(10YR3/3)中粒砂質シルト、土師器の大和型土釜4、備前焼片などが出土した。SK15は深さ0.1m、埋土は黒褐色シルト質細粒砂で、平・丸瓦片が出土したのみである。

第5層上面遺構の出土遺物は少ないが、第5層上面で漳州窯系かと思われる磁器色絵鉢の口縁部片1が出土し、上位の第4層に土師器焙烙5が含まれていること、下位の第6層から瀬戸美濃焼天目碗3・灰釉碗、備前焼片などが出土していることから、豊臣後期まで遡る可能性がある。

第4層上面ではそれ以上の層準から掘られた遺構も併せて検出された。

SK16～19は調査区北部で検出した埋土に炭を含む小土壙である。SK16・18は直径0.9m、深さ0.2～0.4mの円形土壙で底に10～15cmの炭層が認められる。SK16からは肥前陶器や擂目が1条の丹波焼擂鉢の砕片が出土している。SK17は南北1.1m、東西0.5mで、深さ10cmほどの浅い土壙である。炭で埋まっていた。SK19は直径0.2m、深さ0.3mの円形土壙で、底に炭が堆積していた。これらはいずれも第4層上面の遺構であり、埋土も類似している。また、SK16～18は東西に並び、間に礎石と思われる石が配されていた。

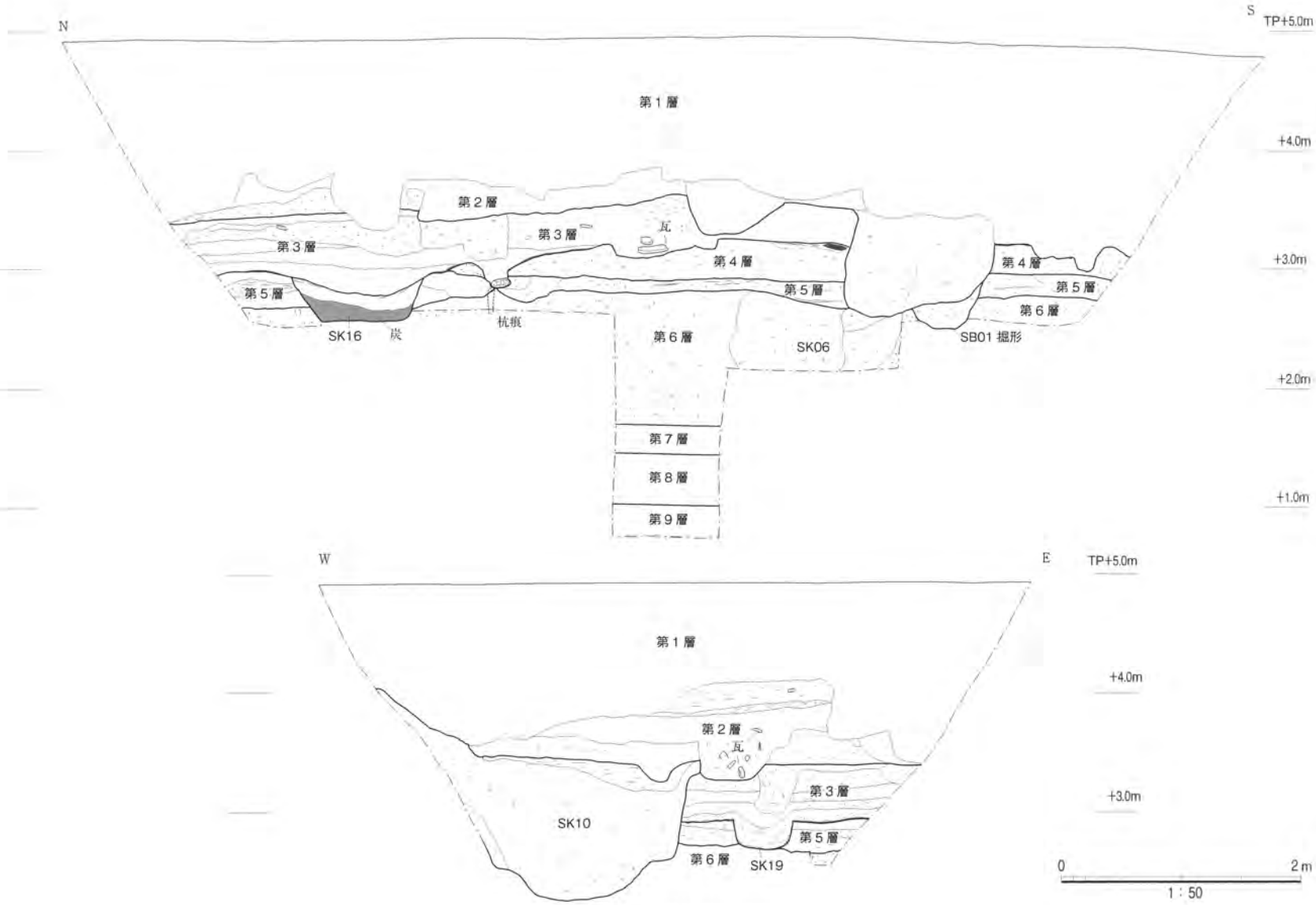


図４　東壁・北壁地層断面図

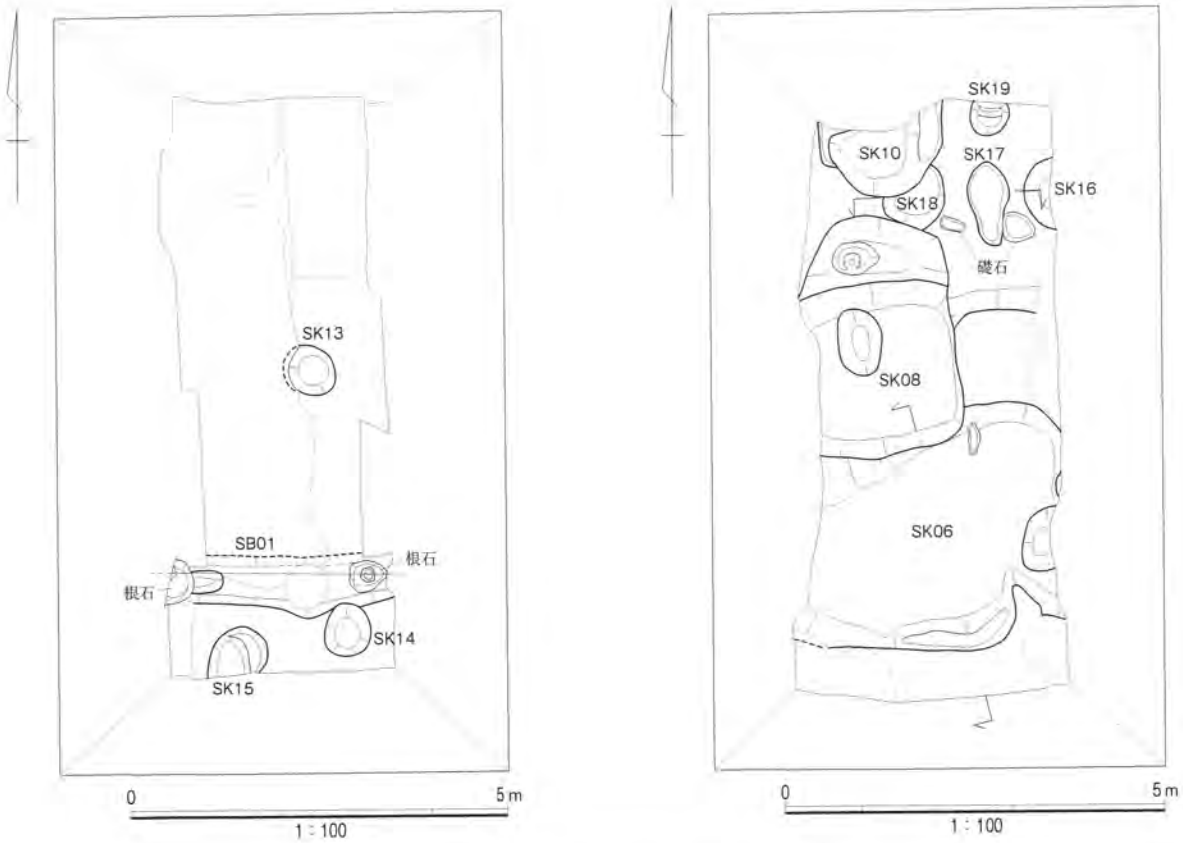


図5　第4・5層上面遺構平面図(左：第5層、右：第4層)

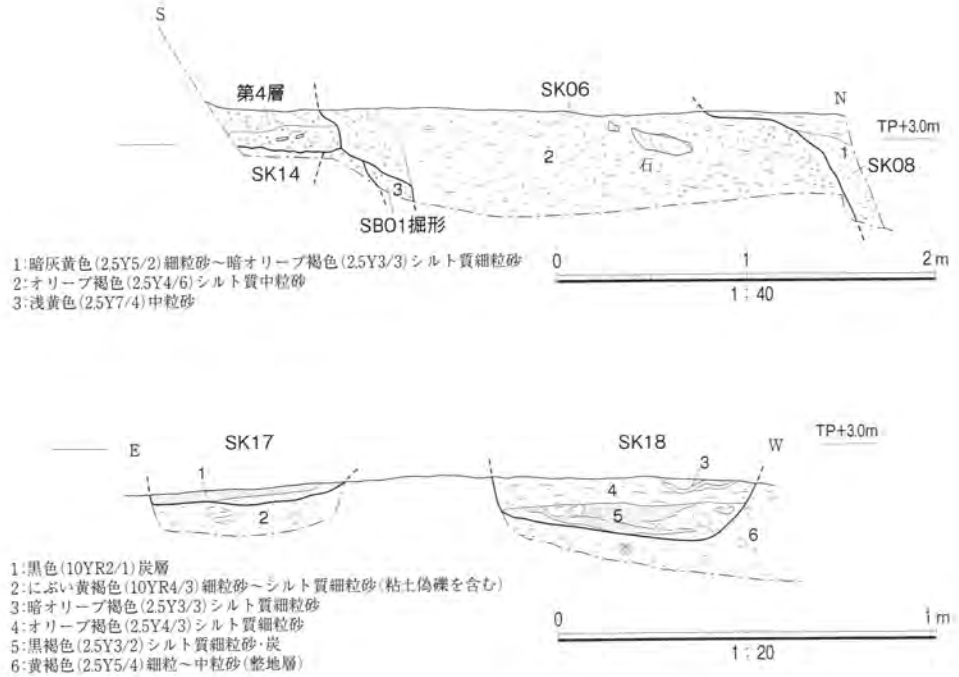


図6　遺構断面図

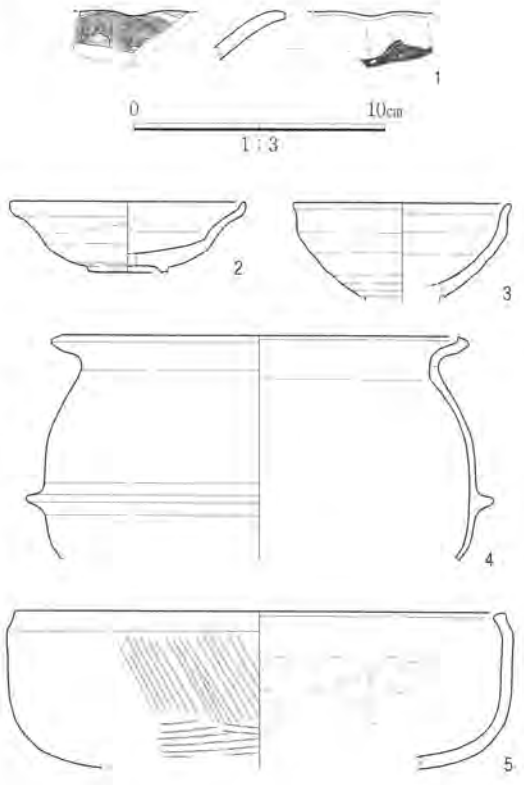
SK06は南北３m、東西３m以上、深さ1.0m以上の土壙である。第４層上面から掘られており、埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)シルトである。土師器皿･土釜、備前焼片、青花碗･皿、肥前磁器碗･皿などが出土した。

第４層上面で出土した肥前陶器皿２をも考慮すれば、これらの遺構は17世紀前半と推定される。

SK10は北壁で検出された直径1.5mの円形土壙で、深さは1.7mあり、埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/5)細粒砂質シルトである。一重網目文の肥前磁器染付碗片が出土した。第３層上面からの遺構と思われる。

SK08は南北2.2m、東西2.0m以上、深さ0.5mの土壙である。埋土は黄灰色(2.5Y4/1)中粒砂質シルトで細粒砂の偽礫を含む。肥前陶磁器や擂目が複数条線となる丹波焼擂鉢片や巴文軒丸瓦６がある。

これらは17世紀後半以降の遺構であろう。



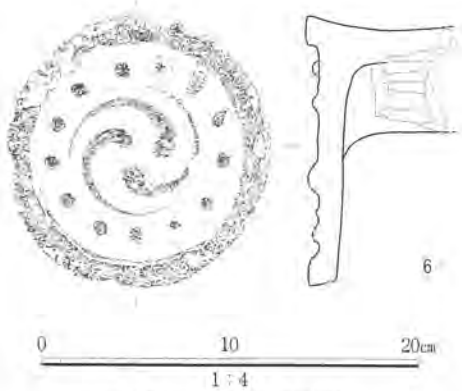


図７　出土遺物実測図
SK08(６)、SK14(４)、第４層上面(２)、第４層(５)、第５層上面(１)、第６層(３)

３)まとめ

今回の調査では、第４層上面で礎石を伴い規則的に並ぶ小土壙が、第５層上面で布掘りの大型根石を伴う建物が注目される遺構であった。遺構や地層からの出土遺物が少なく、各遺構・地層の年代は決め難いが、第５層上面はTP+2.9～3.0mであり、周辺での調査所見からみて、豊臣期と考えるには標高が高すぎるように思われる。しかし、少量の出土遺物や、それ以下に焼土層や明瞭な遺構面が認められなかったことから、豊臣期に第６層の厚い整地が行われ、周辺より高い地形になっていたと考えることもできる。

TP+１mまでの深掘りでは、第８層から中世の瓦片が出土しているものの、遺構面をなす地層は確認されておらず、これ以下に存在していた可能性が高い。周辺の調査で検出されている古代・中世については調査できなかったが、地層が良好に遺存している地域であり、今後、より徹底した調査が必要となろう。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1999a、「OJ96－11次調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1997年度－』、pp.79－98

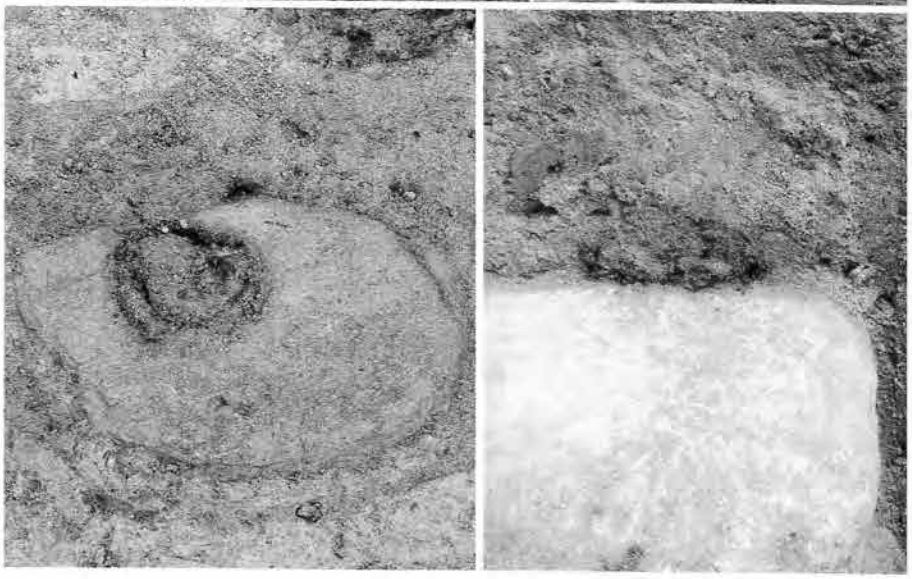
1999b、「OJ97－７次調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1997年度－』、pp.99－105

2003、「OJ02－３次調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－2001・2002年度－』、pp.90－98

第４層上面全景
（北から）

SB01検出状況
（東から）

SB01根石上の柱根
（左：東側根石、
右：西側根石）



中央区今橋三丁目における建設工事に伴う
大坂城下町跡発掘調査(OJ11－２)報告書

調査個所	大阪市中央区今橋3丁目20－1
調査面積	66㎡
調査期間	平成23年10月17日～10月29日
調査主体	財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南秀雄・松本啓子・松本百合子・市川創

1）調査に至る経緯と経過

調査地は船場地域の北部、栴檀の木橋から南に延びる三休橋筋と今橋通の交差点の南西角に位置する（図1）。栴檀の木橋も今橋も、豊臣期から船場とその外側の地域を結ぶ交通の要所で、今回の調査地はこれらふたつの大通りに面した大坂城下町の中でも重要な場所にあたる。今橋通を挟んで本調査地の北側には、緒方洪庵設立の史跡適塾や重要文化財大阪市立愛珠幼稚園がある。調査地にも1917（大正6）年に竣工の中之島公会堂や東京駅の赤レンガなどを手がけた辰野金吾氏設計の外壁をレリーフレンガで美しく飾った近代建築物（八木通商大阪本社、旧大阪農工銀行）が建っていた。

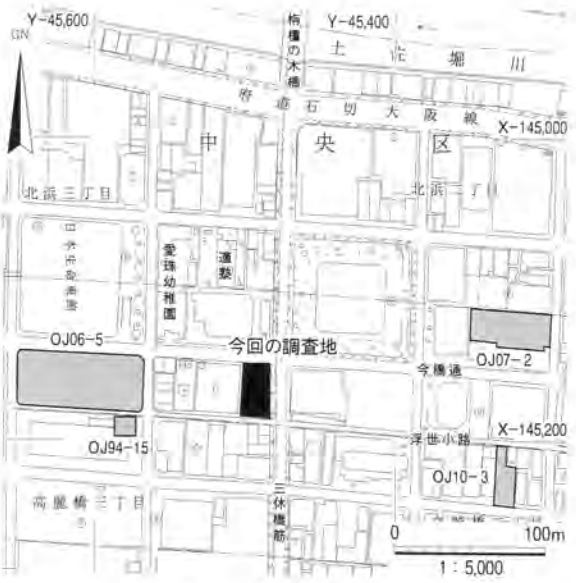


図1　今回の調査地

周辺の発掘調査としては、東約200mのOJ07−2・10−3次調査や、西約100mのOJ94−15・06−5次調査があり、船場城下町開発の前段階から、大坂冬ノ陣を経て、徳川期に至る間の遺構・遺物が検出され、徐々にこの地域の土地利用のようすが明らかになりつつある。

工事に先立つ大阪市教育委員会の試掘調査で、現地表下約2.2m以下で豊臣期～徳川期の遺物包含層と遺構面が見られたため、関係諸機関との協議を経て、地表下約3.2mまでの間で、こうした遺構の年代や遺構・遺物の分布状況から、当時の土地利用のようすを把握し、この地域の歴史的変遷を復元するための資料を得ることを目的に調査を行うこととなった。

調査は、先述のレリーフレンガ装飾がそのまま次の建物に継承されることになっているため、この外壁部分を避けて調査地北部に東西12m、南北7mの調査区を設定したが、さらなる安全を配慮して、南北6m×東西11mに縮小して外壁との間に余裕を持たせることになった（図2）。

図2　調査区の配置図

重機による地表下2.2mまでの掘削が完了した直

後の平成23年10月17日から発掘調査を開始した。人力により遺構面を精査し、遺構・遺物の検出を行い、適宜、図面・写真等の記録を取った。地表下3.2m以下は湧水がひどいため、これより深くなる遺構は完掘していない。

平成23年10月29日に現地におけるすべての作業を終え、同日、機材を撤収して調査を完了した。

本報告では、方位は図1が座標北、それ以外は磁北を基準とし、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、図・本文中ではTP±○mと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

第1層：徳川期の整地層(第1b・1c層)と、その上を覆う徳川期後半の焼土層(第1a層)に細分した。第1a層は黒褐色粘土質シルト層で調査区全域に分布する。層厚は最大15cmあり、大量の炭・焼土と砂・礫を含む。火災の焼土層とその整理層である。第1b層はオリーブ褐色粘土質シルト層で、砂・炭・焼土を含む。調査区北東部に比較的よく残っていた地層である。最大層厚18cmである。整地の最上部層で、この上面に生活面があり、建物SB140や穴蔵SK101など多くの遺構を検出した。第1c層は暗灰黄色粘土質砂を主体とする整地層で、炭・焼土を含む。調査区全域に分布し、最大層厚は55cmである。本層上面にも土壙SK143・131などの遺構がある。

第2層：大坂ノ陣の焼土層(第2c層)とその再堆積層(第2b層)、およびこれらを覆う整地層(第2a層)に細分した。

第2a層は黄褐色砂質粘土層で、最大層厚が10cmあり、疎らながら調査区のほぼ全域に分布する。第2a層の上面は生活面で、SK201などを検出した。遺物からみて、第2a層は17世紀後半頃の整地層と考えられる。

第2b層は大量の炭・礫を含む黒褐色砂質粘土が主体となる。調査区の南西部に分布し、最大層厚は30cmである。

第2c層は大坂ノ陣の焼土・瓦礫層で、暗灰黄色粘土質シルトに大量の炭・焼土・瓦・壁などの火災瓦礫が混じる。最大層厚は25cmである。第2b・2c層の分布範囲は図8に示した。

第3層：豊臣後期の整地層で、第3a・3b層に細分した。

第3a層は黄褐色極細粒砂質シルト層で、調査地のほぼ全面を覆う整地最終段階の盛土である。最大層厚は10cmで、固くしまっていて、上面に生活面がある。SK303・316～318が見つかった。この生活面が大坂ノ陣で被災したものと考えられる。

第3b層はオリーブ色砂質礫やにぶい黄色シルト質砂など、複数回の盛土をした整地層で、層厚は第3b層全体で26～34cmであるが、盛土の単位を見ると、盛土は目印の壙を掘って東から西へと積んでいる。その目印の壙の部分では層厚は50cmになる。

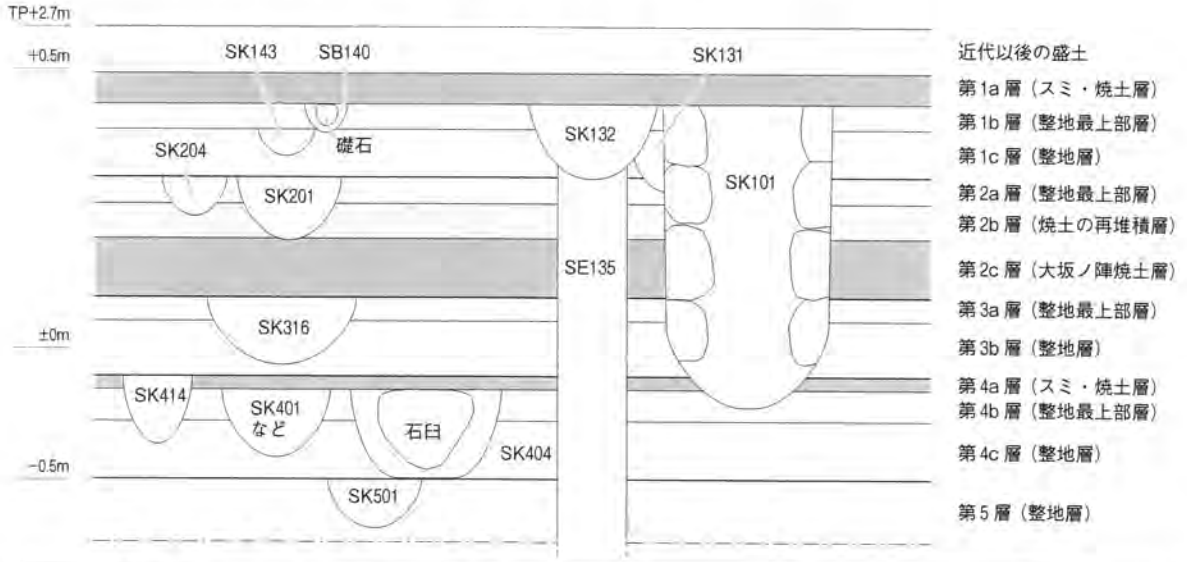
第4層：豊臣後期の地層で、第4a・4b・4c層に細分した。

第4a層は調査区の北西部に分布する焼土層で、最大層厚が7cmの、炭・焼土を多く含むオリーブ色粘土質砂層である。本層上面でSK414が見つかった。

第4b層は炭・焼土を含む暗灰黄色粘土質シルト層で、層厚は最大10cmである。調査区の北半部に分布する。整地の最終段階の盛土層とみられ、本層上面でSK401・404などが見つかった。

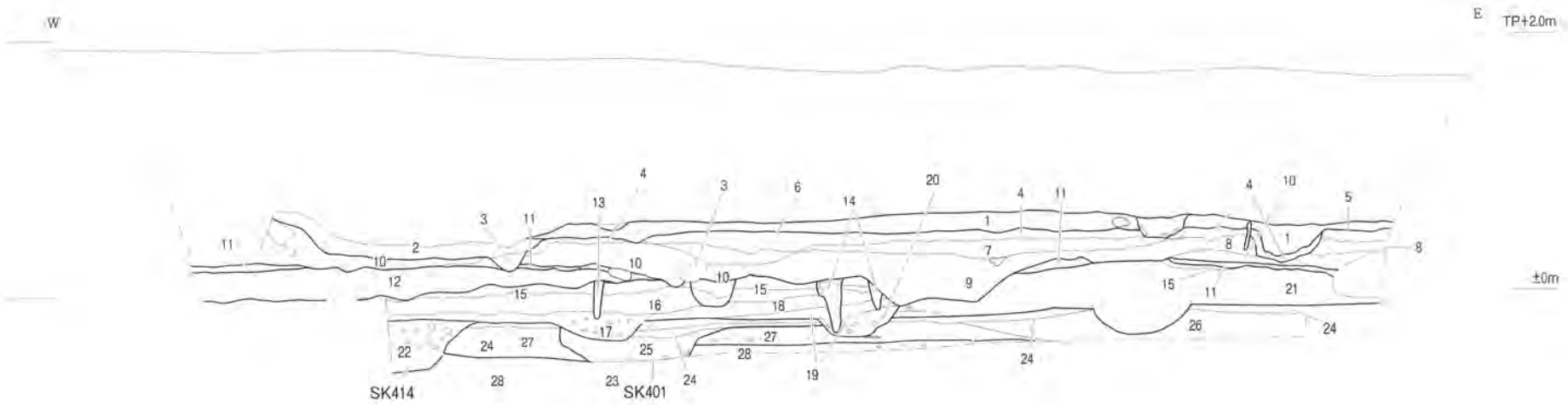
第4c層は東西で2層に分かれる。東側はシルト・酸化鉄を含む褐色砂を主体とする整地層で、西側は炭・焼土を含むにぶい黄色砂質シルトの整地層である。層厚は西側の整地層が15cm、東側の整地層が25cm以上である。

第5層：粘土を含む暗灰黄色砂質シルト層である。遺物から豊臣期の整地層と考えられる。本層の上面がおおよそ地表下3.2mの契約掘削深度付近となり、湧水がひどかったため、掘削していない。北側の断面観察用の側溝でSK501を確認した。図5にSK501の位置を示した。



層名	細分	岩相	時期	備考
第1層	第1a層	黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト（大量の炭・焼土と砂・礫を含む）	18世紀末～19世紀	焼土層
	第1b層	オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘土質シルト（砂・炭・焼土を含む）	17世紀後半	整地の最上部層
	第1c層	暗灰黄色（2.5Y5/2）粘土質砂（炭・焼土を含む）		整地層
第2層	第2a層	黄褐色（10YR5/8）砂質粘土	17世紀中頃	整地の最上部層
	第2b層	黒褐色（10YR3/1）砂質粘土（大量の炭・礫を含む）		焼土の再堆積層
	第2c層	暗灰黄色（2.5Y4/2）粘土質シルト（大量の炭・焼土・瓦・壁などの火災瓦礫を含む）	大坂ノ陣の火災	焼土層
第3層	第3a層	黄褐色（2.5Y5/3）極細粒砂質シルト	豊臣後期	整地の最上部層
	第3b層	オリーブ色（5Y5/4）砂質礫～にぶい黄色（2.5Y6/4）シルト質砂		数工程の整地層
第4層	第4a層	オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘土質砂（炭・焼土を多く含む）	豊臣後期	焼土層
	第4b層	暗灰黄色（2.5Y5/2）粘土質シルト（炭・焼土を含む）		整地の最上部層
	第4c層	褐色（10YR4/4）砂（シルト・酸化鉄を含む） にぶい黄色（2.5Y6/3）砂質シルト（炭・焼土を含む）		東半の整地層 西半の整地層
第5層	第5層	暗灰黄色（2.5Y4/2）砂質シルト（粘土を含む）	豊臣期	整地層

図3　地層と遺構の関係図



1：黒褐色(10YR2/3)粘土質シルト(炭・焼土・砂・礫を含む)(第1a層)
2：にぶい黄褐色粘土質シルト(10YR4/3)(炭・焼土を含む)(SK132)
3：にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土質シルト(炭・焼土を含む)(SK132)
4：オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土質シルト(砂を含む)(第1b層)
5：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質砂(粘土を含む)(第1b層)
6：にぶい黄褐色(10Y5/4)シルト質粘土(第1c層)
7：にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質砂(炭を含む)(第1c層)
8：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質砂(炭・焼土を含む)(第1c層)
9：オリーブ黄色(5Y6/4)シルト質粘土(第1c層)
10：灰黄褐色(2.5Y4/2)砂質シルト～礫質砂(炭・焼土を含む)(第1c層)
11：灰オリーブ色(5Y5/3)シルト質粘土(砂を含む)(第2a層)
12：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルト(大量の炭・焼土・瓦・壁を含む)(第2c層)
13：暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質粘土(炭・焼土を含む)(杭)
14：にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質粘土(炭・焼土を含む)(杭)
15：黄褐色(2.5Y5/3)極細粒砂質シルト(第3a層)
16：にぶい黄色(2.5Y6/4)砂質シルト(第3b層)
17：オリーブ色(5Y5/4)シルト～粘質シルト(砂を含む)(第3b層)
18：にぶい黄色または明黄褐色(2.5Y6/5)砂質シルト(粘土を含む)(第3b層)
19：褐色(10YR4/4)砂礫(酸化鉄を含む)(第3b層)
20：にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト質砂(粘土を含む)(第3b層)
21：オリーブ色(5Y5/4)砂質礫～にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト質砂(第3b層)
22：にぶい黄色(2.5Y6/4)砂質シルト(粘土を含む)(SK414)
23：オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土質砂(炭・焼土を多く含む)(第4a層)
24：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト(炭・焼土を多く含む)(第4b層)
25：にぶい黄色(2.5Y6/4)砂質シルト～シルト質砂(SK401)
26：にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質シルト(焼土・炭を含む)(西側第4c層)
27：褐色(10YR4/4)シルト質砂(酸化鉄を含む)(東側第4c層)
28：暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト(粘土を含む)(第5層)

0　2m
1：50

図4　北壁地層断面図

ii)遺構と遺物

a)豊臣後期(第４層)の遺構と遺物(図５～７)

第４層の遺構は第4b層上面で多くの土壙が見つかったほか、第4a層上面のSK414が見つかった。以下におもな遺構について記す。なお、図５をはじめ、以後の図中で薄い網掛けをしたものは、石・石製品・礎石を示している。

第4b層上面では、比較的規模の大きなSK401・402・404などの土壙と、石の抜穴とみられる規模も形も不揃いなSK405～410などがある。

SK401は、東西約1.0m、南北1.5m以上で、深さ約30cmの土壙で、埋土はにぶい黄色砂質シルト～シルト質砂である。豊臣後期の肥前陶器向付４が出土した。

SK404は、幅約0.6m、長さ1.5m以上、深さ40cmほどの南北に長い土壙で、この中に図７に示した底部の尖った花崗岩製の石臼５を上面が平らになるように据え付けていた。手に持って使う杵の代わりに固定したウマを足で踏んで搗く碓(からうす)とみられる。

SK405～410は、調査区のほぼ中央を幅0.5mほどで南北に並ぶ石の抜穴群で、径が0.2～0.5m、深さも10～40cmとまちまちだが、本来はSK407のように石が据えられていたものと考えられる。第4b層の下にある第4c層の整地層が東西２つに分かれ、その境界線がこの抜穴群に平行して東側を通ることから、この抜穴群も敷地を東西に分ける境界などの区画施設の可能性がある。SK406から土師器皿、

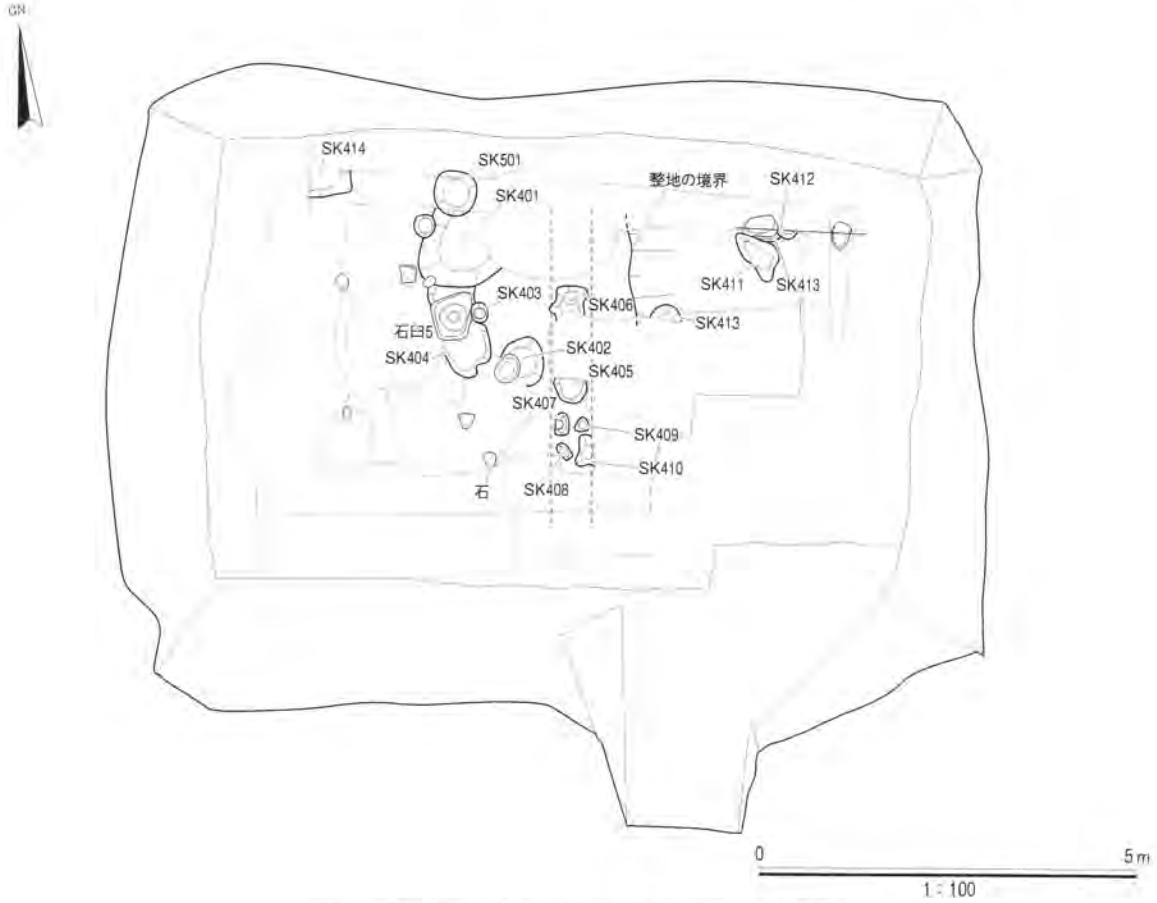


図５　第4b層上面と第4a層上面・第５層上面の遺構

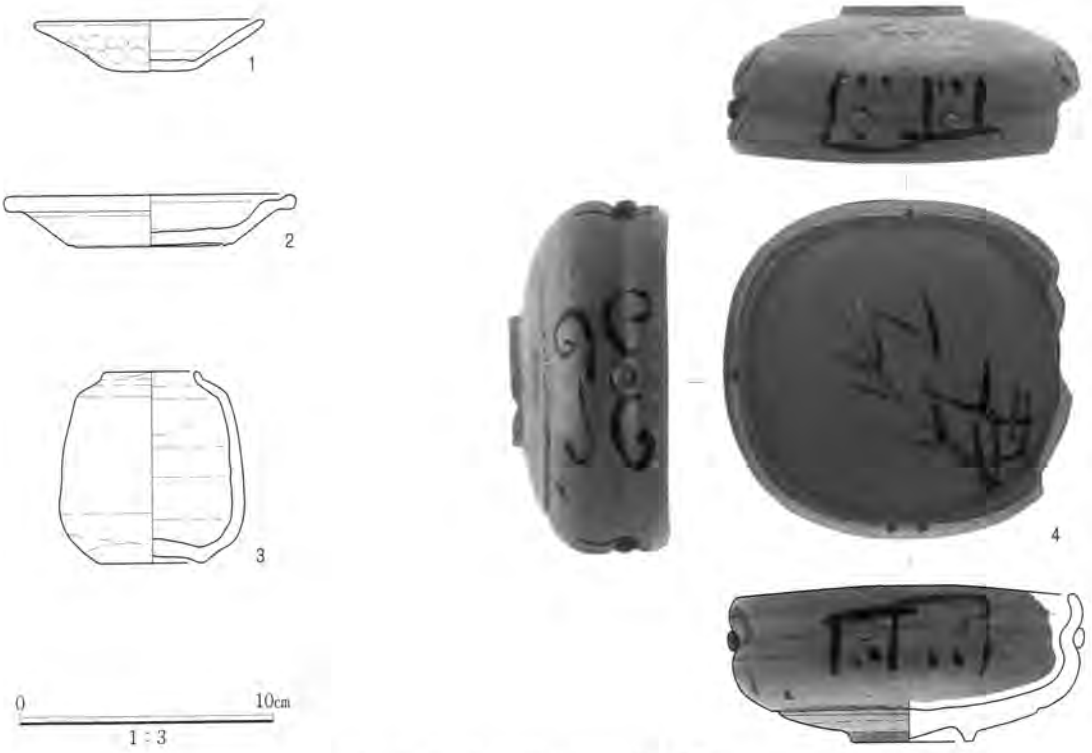


図6　第４・３層とSK401の出土遺物
第4a層（１・３）、SK401（４）、第3b層（２）

SK410から中世後半の土師器甕・砥石・鉄釘などが出土したが、細片のため、図化し得なかった。

調査北東隅のSK413は、花崗岩を上面が平らになるよう据えていて、東へ約１m離れた位置にある花崗岩も上面が平らになるように、またSK413の石の上面と同じ高さに置かれていた。調査範囲内では２個しか見つかっていないが、建物を構成する礎石の可能性がある。なお、石の方向は石の抜穴群とほぼ直交方向である。

第4a層上面のSK414は、東西0.6m以上、南北0.4以上、深さ40cmの土壙で、埋土は粘土を含むにぶい黄色砂質シルトである。古代の土師器や中世瓦の破片が出土した。

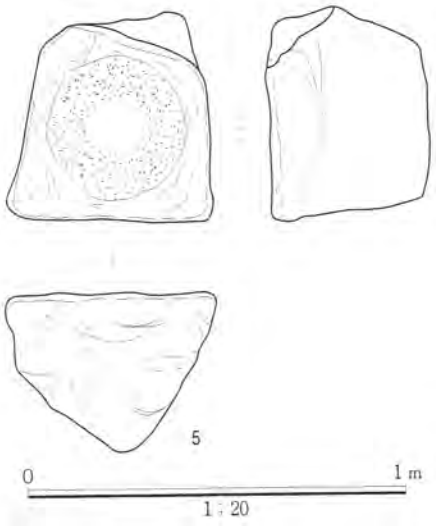


図7　SK404出土の石臼

b)豊臣後期(第３層)の遺構と遺物(図７・８)

第3a層上面は層序の項でも触れたように、第2c層の焼土としてその痕跡が残る大坂ノ陣によって被災した面で、SK303・316～318などの土壙が検出された。

SK303は、東西約0.3m、南北約0.4m、深さ10cmの平面円形の土壙で、埋土は暗灰黄色砂質シルトで、炭が混じる。SK316～318は、やや規模が大きく、東西0.6～0.7m以上、南北03.m以上、深さ10～25cmの土壙で、埋土は炭の混じる暗灰黄色砂質シルトである。SK316から瓦・肥前陶器皿が、またSK317から瓦・肥前陶器・土師器・備前焼、SK318から壁材と瓦が出土したが、細片のため、図化できなかった。

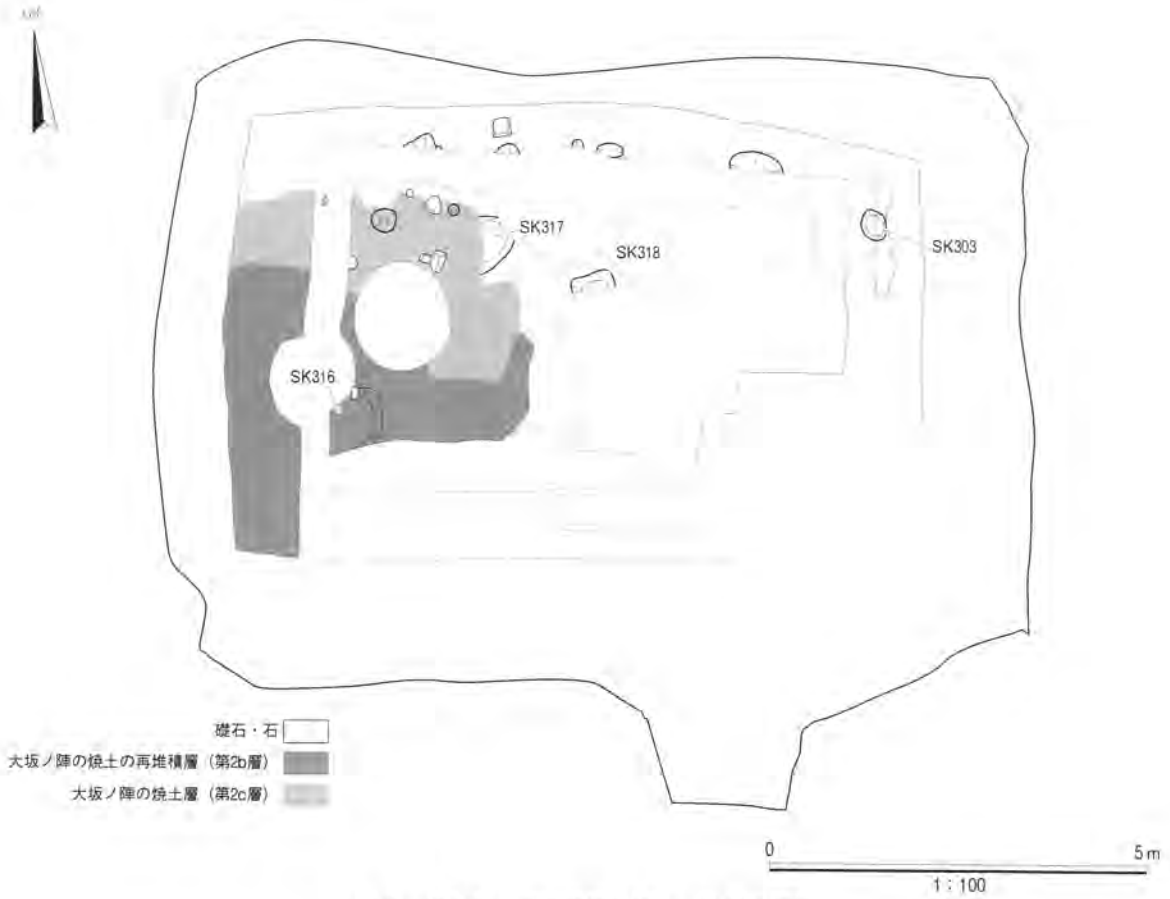


図８　第3a層上面の遺構と第2c・2b層の範囲

c)豊臣後期～徳川前期(第２層)の遺構と遺物(図９～11)

第2a層上面の遺構は、小ぶりで平面円形のSK204・205・208・209・213と、比較的規模の大きいSK201・210・212・215がある。

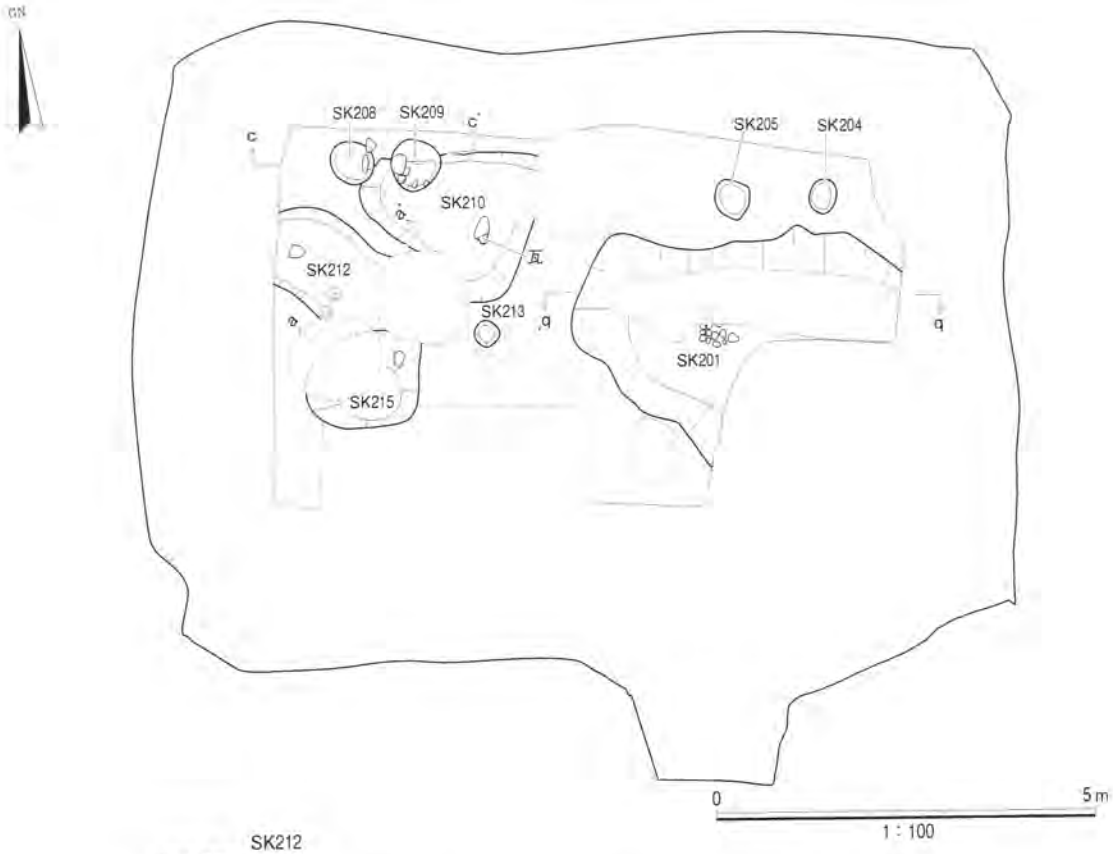
SK204・205は、直径が約0.4m、深さが約10cm、埋土がオリーブ褐色シルト質砂の土壙で、約1.2mの距離をあけて東西に並ぶ。SK208・209も同様に約0.9mの間隔で東西に並ぶ土壙で、直径が0.6m～0.7m、深さ約10cm、埋土は炭や焼土を含む暗灰黄色砂質シルトである。SK208・209に置かれていた拳大ほどの石は、礎石の栗石の可能性がある。

遺物はSK208から景徳鎮青花小杯17が出土し、SK209から肥前陶器碗の破片が出土した。SK209の肥前陶器は17世紀代のもので、SK209の時期を示す。

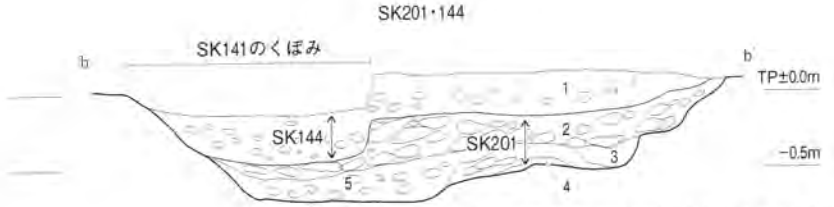
SK213は、直径0.3m、深さ20cm、埋土が暗黄灰色砂質粘土の土壙である。

SK201は、東西4.5m以上、南北3.2m以上、深さ約80cmの土壙で、第1b層上面のSK141・144によって上面が失われている。志野や織部などの瀬戸美濃焼や肥前陶器といった豊臣後期～徳川期初期の遺物とともに、銅製煙管や鞴羽口・鉱滓、珊瑚などの遺物が出土した。破片が多く、図化し得ないものが多いが、中国産白磁25を図11に示した。

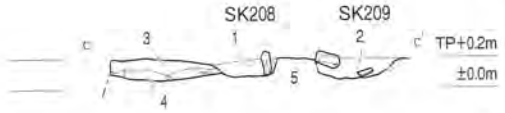
SK210は、東西約2.4m、南北2.0m、深さ約10cmの浅い土壙で、瀬戸美濃焼や肥前陶器、漳州窯系磁器などの豊臣後期～徳川期初期の遺物が出土した。



1：オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト(粘土、焼壁を含む)
2：オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂～砂質シルト
3：黄灰色(2.5Y4/1)粘土質砂(炭・焼土を含む)



1：暗灰黄色(2.5Y4/2)(粗粒砂シルト(粘土偽礫を含む)
2：黒褐色(10YR2/2)砂質シルト(焼土を含む)
3：黒色(5Y2/1)粗粒砂
4：オリーブ黄色(5Y6/3)粘土(焼土)
5：褐色(10YR4/4)砂質シルト(炭・粘土偽礫を含む)



1：暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト(焼土を含む。SK208)
2：暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト(炭を含む。SK209)
3：にぶい黄色(2.5Y6/4)中粒砂(第2a層)
4：灰黄褐色(10YR4/2)砂質粘土～粘土質シルト
(炭・焼土・礫を含む。第2b層)
5：黄灰色(2.5Y4/1)粘土質砂(炭・焼土を含む。第3b層)

0　2m
1：50

図9　第2a層上面の遺構

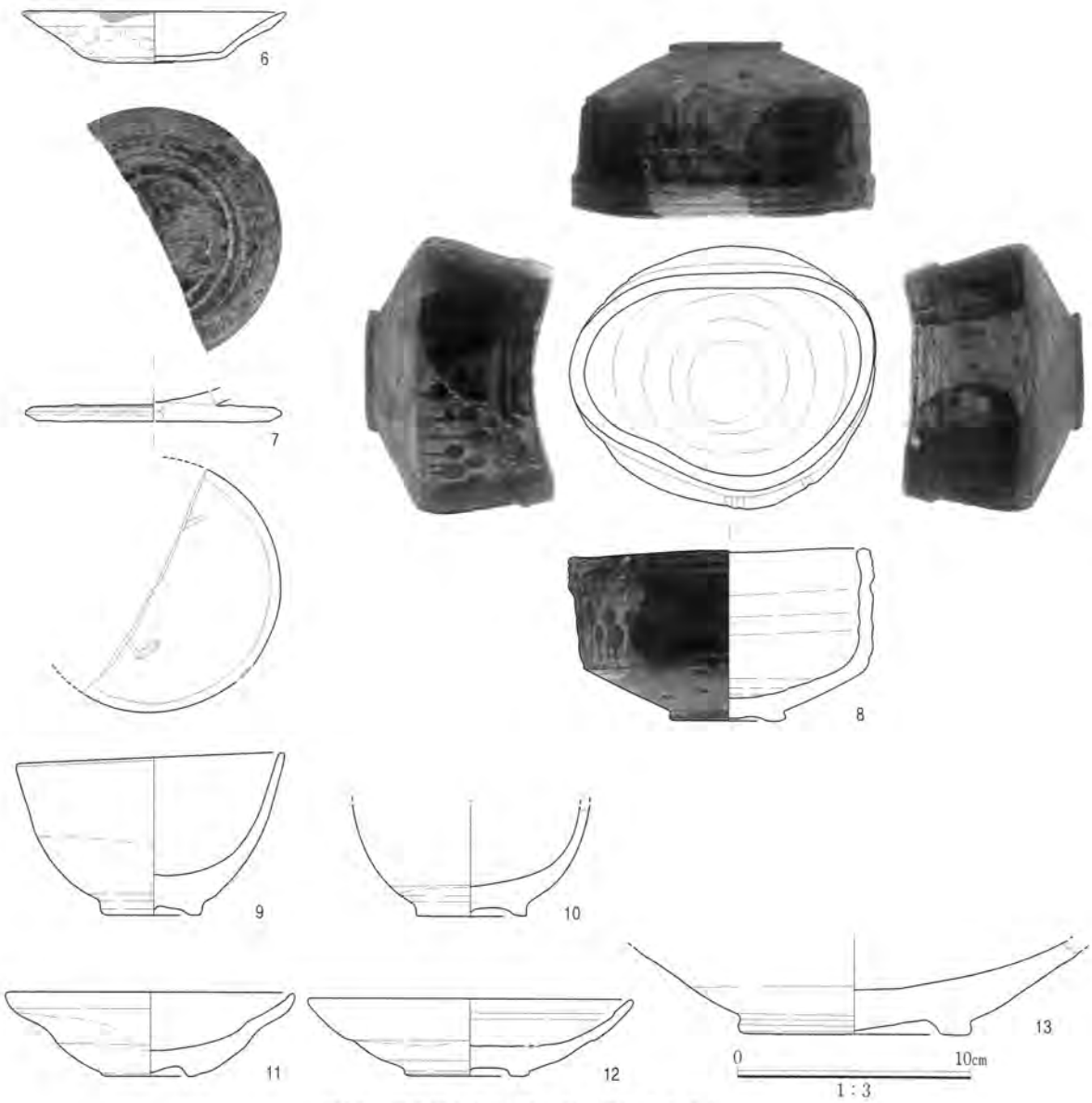


図10　第２層と第2a層上面の遺構出土遺物(１)
第2c層(６～８)、第2b層(９)、SK212(10～13)

SK212は、幅約1.1m、長さ2.0m以上で、深さが20cmの、埋土がオリーブ褐色砂質シルトの、浅い土壙だが、土師器・須恵器・瓦・備前焼・丹波焼・景徳鎮青花・肥前陶器など、豊臣後期～徳川期前期の遺物が多く出土した。これらのうち、肥前陶器碗10と皿11～13を図10に、景徳鎮青花碗19と備前焼擂鉢23、丹波焼擂鉢24を図11に示した。11～13はいずれも内面に胎土目跡が４個残る。

SK215は、東西約1.5m、南北約1.3m、深さ約20cmの土壙で、埋土は炭や焼土の混じる暗オリーブ褐色砂質シルトである。豊臣後期～徳川期前期の遺物が出土し、このうち、景徳鎮青花碗高台16と鞴の羽口25を図11に掲載した。

d)徳川器(第１層)の遺構と遺物(図12・13)

第1c・1b層のそれぞれ上面で遺構を検出した。

第1c層上面のSK141・144・123は、調査区中央部にあって、東西の長さはSK141が約1.6m、

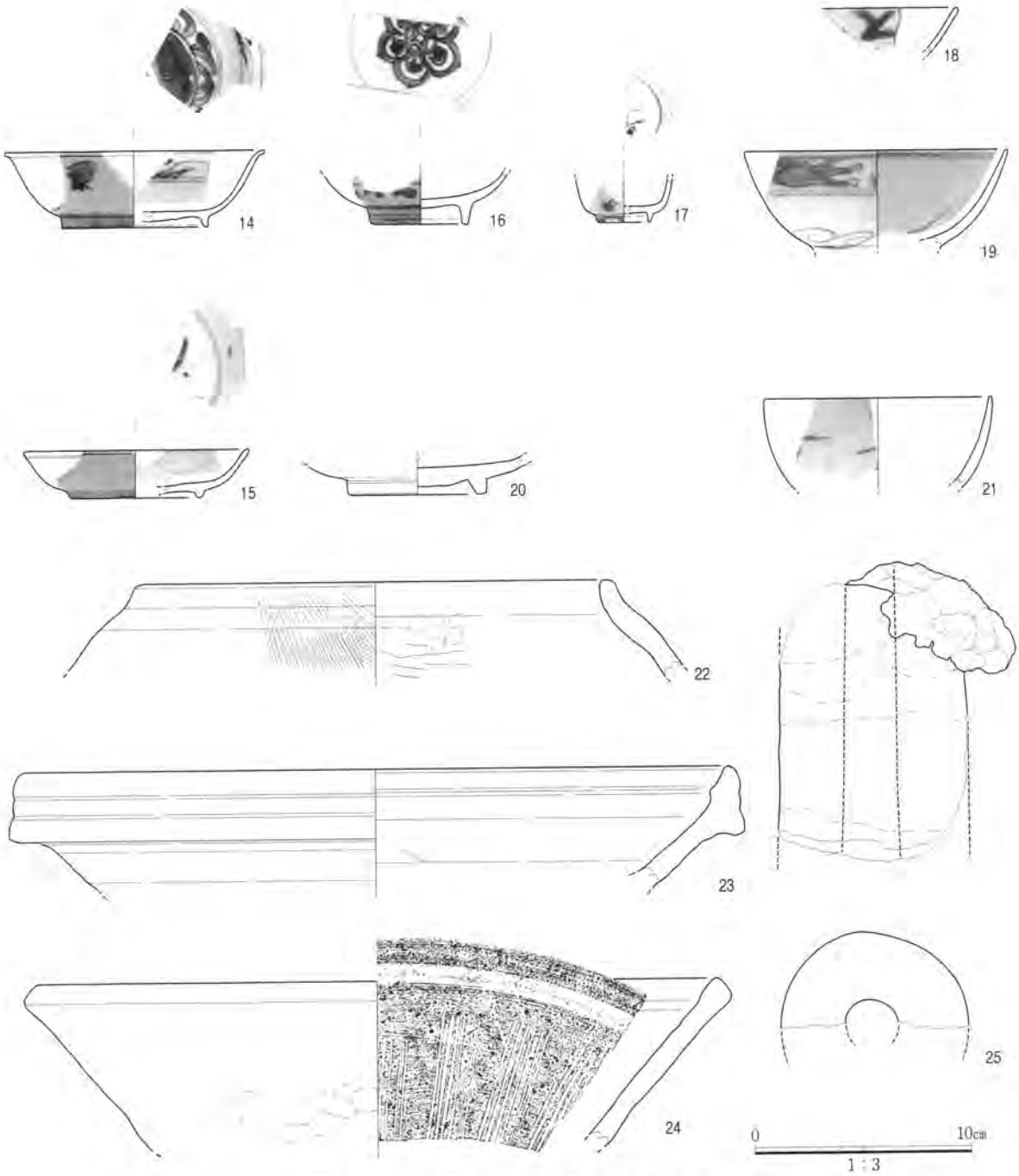


図11　第２層と第2a層上面の遺構出土遺物（２）

第2c層（14～18）、第2a層（15・21・22）、SK201（20）、SK208（17）、SK212（19・23・24）、SK215（16・25）

SK144が3.7m以上、SK132が約1.0m、南北幅は0.7～0.9mと比較的揃っており、東端から一直線に並ぶ。深さはSK123が約20㎝、SK141はSK144の真上にあって、SK141が深さ約50㎝、SK144が約90㎝である（図９）。これらの遺構から18世紀前半までの遺物が出土し、図13にSK141出土の焼塩壺27と肥前陶器碗29、漳州窯系磁器大皿34を図13に示した。29は全面に灰釉を施したもので、これらの遺物は17世紀後半頃のものである。

SK145は調査区北東隅の瓦溜で、第1c層上面の遺構である。東西0.4m以上、南北1.0m以上、深さ約50㎝で、大量の瓦とともに17世紀代の肥前陶器が出土した。

SK131は、東西0.9m以上、南北1.3m以上で、深さが1.0m以上もある土壙で、湧水のため、完掘していない。炭や焼土と砂の混じる黄褐色粘土質シルトが互層になって堆積していた。鞴羽口や多くの鉱滓が出土し、金属加工関連の遺構と考えられる。また、SK131の北側に取付き、深さ10cmの最深部から北西向きに浅くなるSK142も、炭や焼土が多く混じり、多くの鉱滓が出土しており、SK131と一体のものであるのかもしれない。SK131・142から18世紀前半までの遺物が出土した。

SK101は、東西約4.0m、南北2.0m以上、深さ約1.0mの平面長方形の土壙を掘り、底に粗粒砂を敷詰めて壁際に人頭大の花崗岩を数石積上げた穴蔵である。図13に焼塩壺26と瀬戸美濃焼志野織部茶入31、肥前磁器染付碗32を掲載した。32は雨降り文を描いた18世紀前半のもので、SK101の底に充填した砂からの出土で、SK101の設置時期の上限を示す。SK101はSK131を壊して設置されている。第1b層上面で石を検出したが、第1b層の整地がSK101よりも後の可能性も考えられる。

調査区東半の第1b層上面で、炭の混った暗灰色粘土で埋まる、0.2～0.5mで南北方向の、平行する溝4条を検出した。一番西側のSD134はやや規模が大きく、北端で直角に曲がり、東へと伸びる。これら溝の深さは10cmほどだが、粘土を除去すると石や石の抜穴が見つかった。東端の溝の東には中に石が置かれたSK104・128が南北に並んで掘られており、SD134の南にはSD134とよく似た幅のSK124や石がある。溝の埋土が類似することや位置関係からみて、これらは一連のものと考えられる。布掘り溝に石を配置してそこに板を渡して床を構築した土蔵のような建物SB140であろう。SK104・

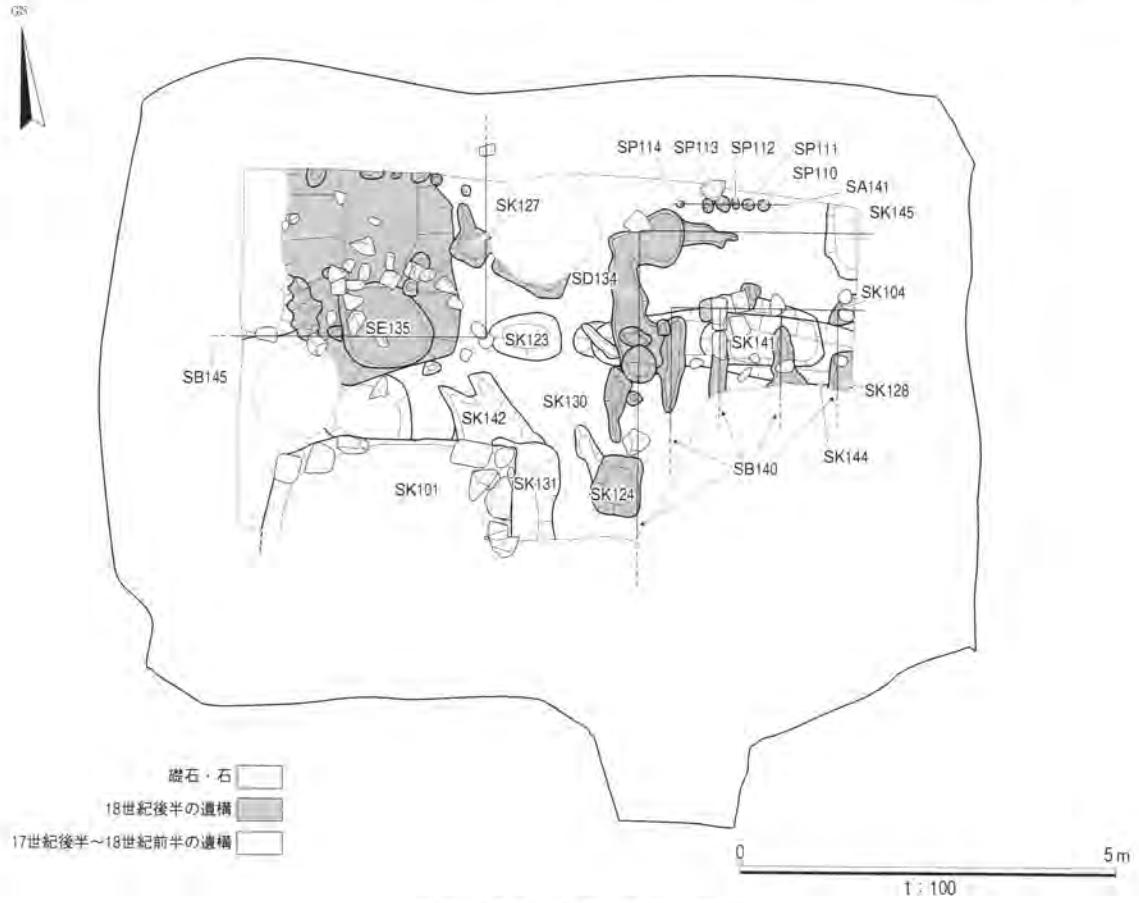


図12　第1b・1c層上面の遺構

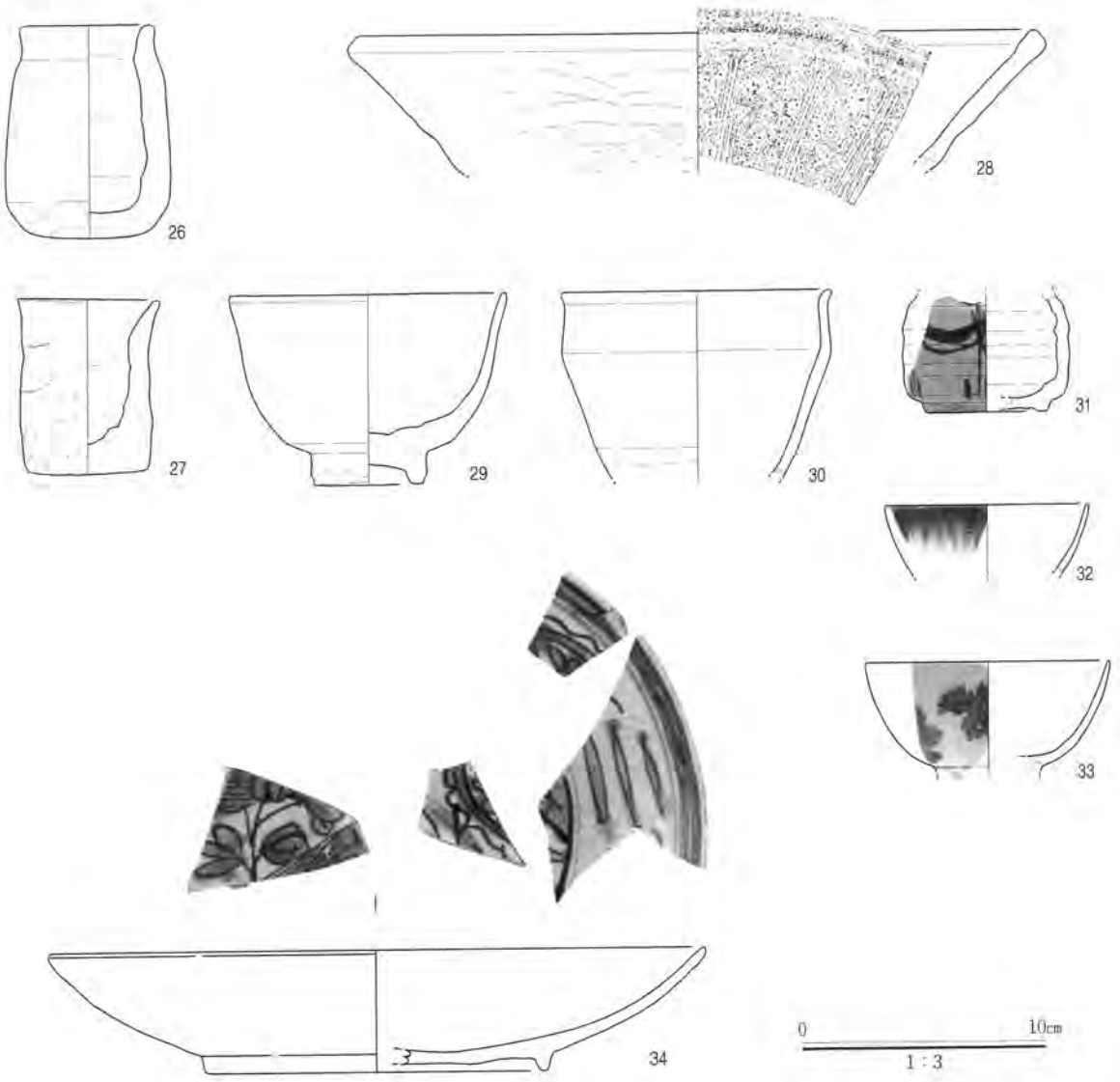


図13　第１層と第1b・1c層上面の遺構出土遺物
第1c層(28)、SK101(26・31・32)、SK132(30・33)、SK141(27・29・34)

124・128が外壁の礎石であるなら、SB141の規模は東西約３m、南北約４mになる。これらの遺構から18世紀後半頃の遺物が出土した。

また、SB140の東には、東西一列に並ぶ、直径20cm未満の小穴SP110～114で構成される柵SA141がある。SB140に付随する施設であろう。

第1b層上面のSK132は、東西約2.3m、南北3.0m以上、深さ35cmの土壙で、南端に井戸SE135を取り込み、約10cmの厚さのにぶい黄褐色粘土質シルトを底に貼り、石を配置していた。井戸とその傍らの作業場であろう。

SK132の粘土質シルトから出土した遺物のうち、瀬戸美濃焼天目碗30と肥前磁器染付碗33を掲載した。30は17世紀中頃、33はコンニャク印判手と呼ばれる18世紀後半代のもので、SK132の設置あるいは機能した時期を示す。SE135の遺物も肥前磁器蛇の目凹形高台皿など18世紀後半頃のものである。また、図12でSB145としたものは、このSK132の周囲の上面を平らに置かれた花崗岩３個で、東西

約2.7m、南北約2.5mの間隔で配置されていて、このSK132・SE135を覆う屋根の可能性がある。このことはSK132の石の抜穴から近世の瓦片が多く出土したことと符合するものと思われる。

e)各層出土の遺物

第5層から、豊臣期の土師器や瓦、青花などの破片が出土したが、図化し得たものはない。

第4層のうち、第4c・4b層から遺物は出土しなかった。第4a層からは、図6に図示した土師器皿1や、中国からの輸入品の可能性のある陶器の茶入3のほか、瀬戸美濃焼といった豊臣後期の遺物が出土し、これらとともに焼けた壁材が出土した。

第3層からは漳州窯系磁器や瀬戸美濃焼など、豊臣後期までの遺物が出土した。これらのうち、第3b層から出土した瀬戸美濃焼灰釉折縁皿2を図6に示した。

第2層のうち、第2c・2b層からは豊臣後期までの遺物が出土した。第2b層から出土した肥前陶器碗9を図10に示した。第2c層の出土遺物のうち、土師器皿6、九州産陶器の水指の蓋7、瀬戸美濃焼織部沓茶碗8を図10に、また景徳鎮青花の皿14と碗18を図11に示した。これら第2c・2b層の遺物は、いずれも17世紀初頭の豊臣後期のものである。第2a層は、図11の景徳鎮青花皿15、肥前磁器碗21、土師器の甕22など、17世紀後半頃までの遺物が出土した。

第1層の遺物のうち、第1c層から出土した丹波焼擂鉢28を図13に示した。17世紀後半頃のものとみられ、第1c層の時期を示すものである。

3)まとめ

今回の調査では、付近の調査のように開発当初のようすは確認できなかったが、大坂ノ陣以前の豊臣後期の生活面から18世紀末～19世紀の火事で被災した生活面までを検出し、この間の土地利用の状況を窺い知ることができた。

なかでも、本調査地では、大坂ノ陣後の完全な復興が17世紀中頃であったことは徳川期初期の土地整備の大きな手掛かりとなろう。

また、第2c層の大坂ノ陣とした焼土層の下にあるもう一層豊臣後期の焼土層(第4a層)は、火災によるものか、金属加工などの火を使う施設の操業によるものかは、今回の調査範囲の中では明らかにすることはできなかった。

今後の調査成果とあわせてさらなる検討を行いたい。

引用参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「大坂城下町跡発掘調査(OJ06－5)報告書」:『大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)』pp.229－238

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、「大坂城下町跡発掘調査(OJ07－2)報告書」:『大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)』pp.183－190

大阪市文化財協会2004、『大坂城下町跡』Ⅱ

大阪文化財研究所2011、「中央区高麗橋二丁目における建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査(OJ10－3)報告書」

調査地全景(南から)
写真奥と右手に
レリーフレンガの
外壁がある。

西壁断面(東から)

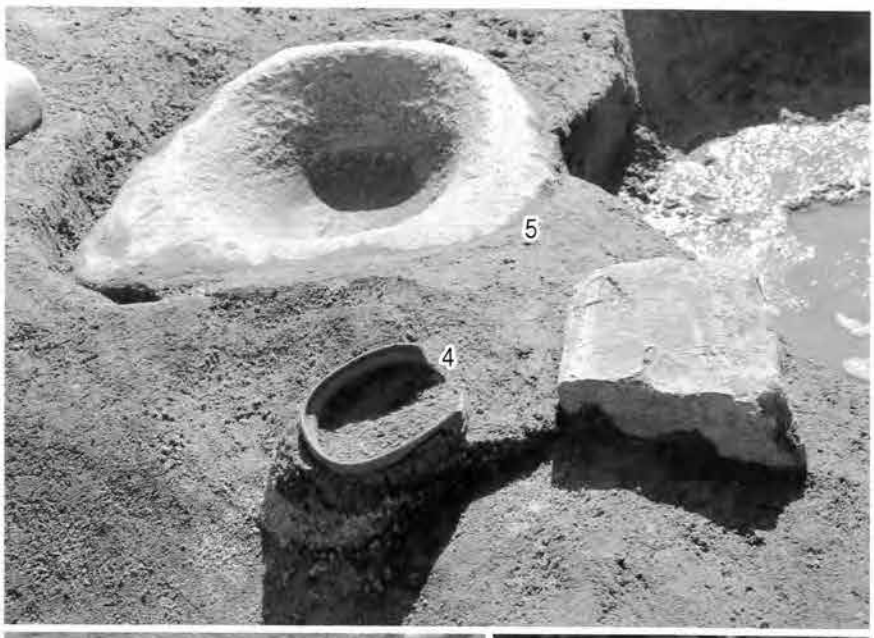
第4b層上面(南から)

第3a層上面(南から)

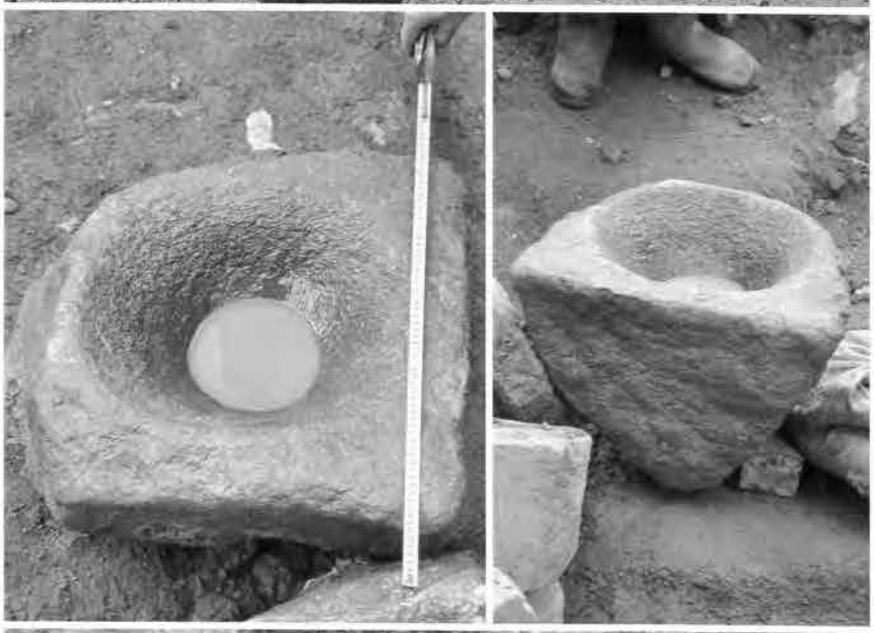
第2a層上面(西から)

第1b層上面(東から)

SK404出土の石臼5と
SK401出土の肥前陶器4
（北から）



左：石臼5上面
右：石臼5側面



第2c層出土の
織部沓茶碗8
（東から）

中央区瓦町二丁目41番における建設工事に伴う
大坂城下町跡発掘調査（OJ11－３）報告書

調 査 個 所　大阪市中央区瓦町２丁目41番
調 査 面 積　約64㎡
調 査 期 間　平成24年３月２日～３月14日
調 査 主 体　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄

1)調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣秀吉が造った城下町船場のほぼ中央にあり、瓦町通を堺筋から約150m西に入る。周辺は早くに陸化した地域と推定され、北西約200mのOJ88－82次調査では弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器がまとまって出土した。また、奈良～平安時代の遺構が分布する地域であり、東約100mのOJ92－33・OJ06－１次調査では井戸４基などが検出された[大阪市文化財協会2004、大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008a]。OJ06－１次調査地には平安時代末～鎌倉時代初頭の掘立柱建物２棟もある。

周辺では豊臣後期の建物などの遺構が各所で調査されている。徳川期で注目されるのは、南西約50mのOJ92－24次調査における17世紀後半の骨細工業である。加工途中の動物骨の骨端などが多数出土し、製品には櫛、双六の駒、簪などがあった。同様の資料は南約100mのOJ06－６次調査地でも出土している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008b]。

本調査は敷地奥に約８m×８mの調査区を設定し、担当者立会いのもとに17世紀代の地層まで工事側で掘削した後、着手した。基準点測量は、Magellan社製ProMark3を使用したスタティック測量によったが、観測データが不良のために信頼できる１点の座標を図２に記し、図面方位は地図より作図した。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP±○mと記した。

2)調査の結果

図１　調査地位置図

図２　調査区位置図

ｉ)層序(図３・４、６～８)

現地標高はTP+2.3m前後である。

第１層：浅黄色(2.5Y7/4)中粒～粗粒砂層で、最大層厚30cmである。上面にSK101～105と礎石２個がある。土師器皿30・同培烙29、肥前磁器染付碗28が出土した。SE01・02は第１層より上の遺構である。

第２層：灰黄褐色(10YR5/2)シルト質中粒砂層で、最大層厚25cmである。上面にSK201やSD203がある。肥前磁器染付碗25・26が出土した。墨で顔を描いた木製人形41は第２層以下の出土である。

第３層：褐色(10YR4/4)シルト～粘土のていねいな整地層である、層厚15～23cmの第3a層と、黒褐色(10YR2/3)シルト層で最大層厚50cmの第3b層からなる。第3a層は調査区の南側のみに、第3b層はSK501が広がる中ほどから北側に分布する。第3b層は木質や炭を多く含む。第3a層上面にはSD301やSK302がある。本層以上で肥前磁器が出土する。

第４層：南側は灰オリーブ色(5Y5/2)シルトのていねいな整地層、北側は黒褐色(2.5Y3/1)シルト～粘土層で、層厚は10～35cmである。SK501を埋める北側では、木質・木製品・骨などを多数含む。上面にはSK401がある。本層以下では肥前磁器は出土しない。中国産青花碗20・21、肥前陶器皿17～19(17・18は胎土目、19は砂目)、丹波焼擂鉢22が出土した。

第５層：黄灰色(2.5Y5/1)シルト質粗粒砂層で、層厚は15～25cmである。調査区の４分の３を占めるSK501は本層上面の遺構である。中国産青花皿５、胎土目の肥前陶器皿６、羽口38が出土した。第５層は大坂冬ノ陣(1614年)以降の徳川初期と推定される。

第６層：シルト質中粒砂の偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂層で、層厚30～45cmの第6a層と、にぶい黄橙色(10YR6/4)中粒砂層で層厚５～30cmの第6b層からなる。第6a層は豊臣後期の盛土と推定される。第6a・b層からは、瀬戸美濃焼志野皿３、肥前陶器碗２、備前焼壺４(外底面にヘラ記号)が出土した。

第７層：黄褐色(2.5Y5/3)シルト質中粒砂層で層厚25～45cmの第7a層と、灰色(7.5Y5/1)シルト質中粒～粗粒砂層の第7b層からなる。第7a層は作土で、第7b層は自然堆積に近い。出土遺物では判然としないが、第7a層は豊臣期の城下町造成の直前と推定される。

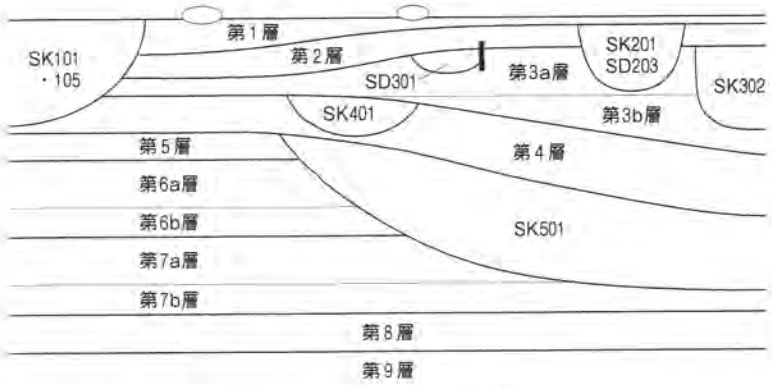


図３　地層と遺構の関係図

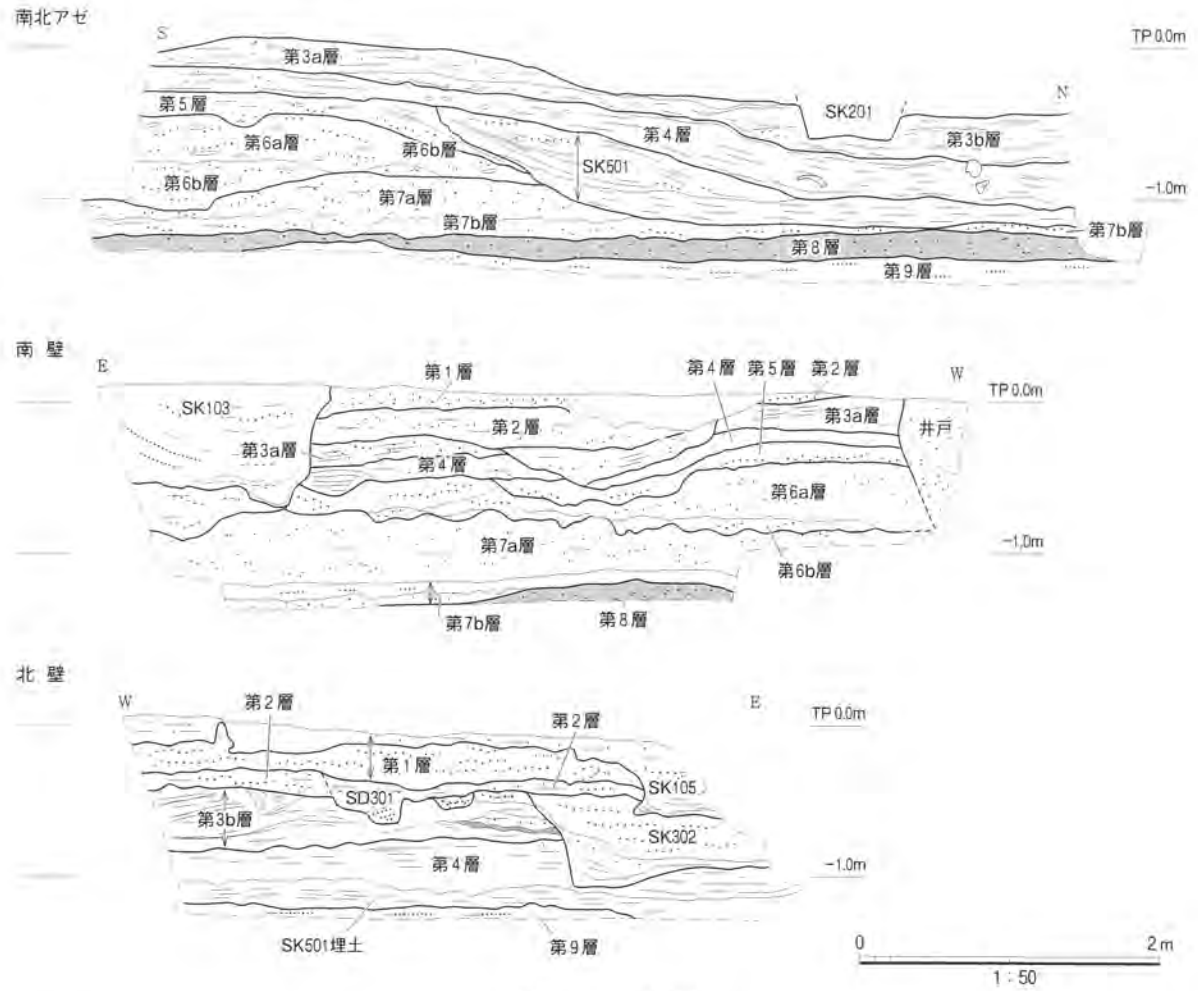


図４　地層断面図

第８層：黄灰色(2.5Y4/1)シルト質中粒砂層で、層厚は５～18cmである。奈良～平安時代の土器が出土し、緑釉陶器底部１を掲載した。黒っぽい土壌層位である。

第９層：黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂層で、層厚は20cm以上である。ラミナが明瞭な自然堆積層である。

ii)遺構と遺物(図５～８)

a．第５層上面の遺構と遺物(肥前磁器出現以前の徳川期)

SK501は東西７m以上、南北６m以上あり、深さ0.8mである。屋敷地奥にある大型のゴミ穴で、多量の陶磁器・木片・骨などが捨てられていた。埋土下半は、下より黒色(7.5Y2/1)粘土層、黒褐色(2.5Y3/1)粗粒砂質シルト層である。上半は第４層と第3b層が埋める。

SK501下半からは７～16が出土した。７は中国産青花碗、８～11は瀬戸美濃焼である。８は志野皿、９は鼠志野向付、10は織部向付である。11は中央に花を、周囲に数枚の葉を型打ちした向付で、三足と推測される。いわゆる御深井釉陶器である。12は上野高取焼、13・14は絵唐津の皿である。15はタタキメのある土師器焙烙、16は山口の須佐唐津と推測される擂鉢で、鉄釉を掛けている。これらは1614年以降の短期間を示している。また、全形がわからない金箔押し瓦39が出土した。

SK503はSK501へ繋がる溝状の深さ0.2mの窪み、SK502・504は深さ0.2～0.25mである。

b．第４層の遺構と遺物(肥前磁器出現以前の徳川期)

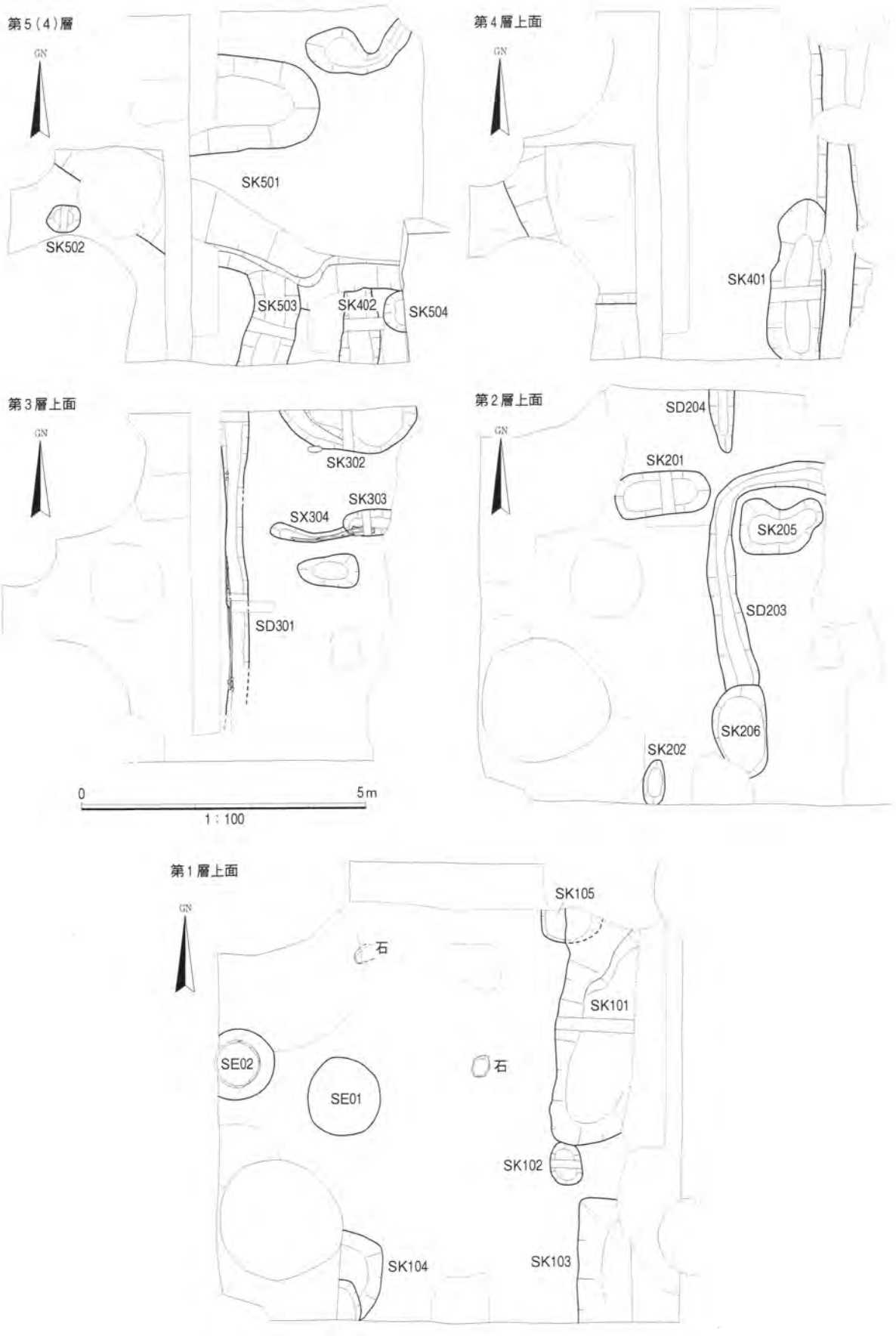

第5(4)層
GN
SK501
SK502
SK503
SK402
SK504
第4層上面
GN
SK401
第3層上面
GN
SK302
SK303
SX304
SD301
第2層上面
GN
SD204
SK201
SK205
SD203
SK206
SK202
0
5m
1:100
第1層上面
GN
SK105
石
SK101
SE02
石
SE01
SK102
SK104
SK103

図5　遺構平面図

第４層上面は依然、南に高く、北に低い。調査区の東端には、幅1.4mで灰白色シルトをていねいに敷き固めた部分が直線的に南北に続いており、表から奥へ抜ける土間と推定される(図版１中段)。これに沿うSK401は長さ約2.8m、幅0.90m、深さ0.35mである。埋土は、炭層と木質層が互層になっている。23はSK401出土の瀬戸美濃焼織部皿である。またSK402は第４層中の土壙で、埋土に木片を多く含む。

c．第３層上面の遺構と遺物(肥前磁器出現以降)

南北溝SD301は、調査区内で長さ６mが残存している。幅0.30～0.50m、深さ0.05～0.15mである。細長い板を杭で止めた木枠の溝で、枠は西側のみが残っていた。屋敷の裏へ排水する溝で、敷地の境になっていた可能性がある。SK302は東西2.40m、南北1.3m以上、深さ0.60mである。埋土は下層が灰黄褐色(10YR6/2)中粒砂質シルト層、上層は灰白色(2.5GY8/1)粗粒砂層で、下層には木質のゴミを多く含む。

SX304には杭で止めた板が埋まっており、盛土の際の土留の可能性がある。SK303内にも数枚の板があり、SX304と関連するかもしれない。SX304からは肥前磁器染付碗24が出土した。

d．第２層上面の遺構と遺物

第３層上面のSD301とほぼ同じ位置にSD203がある。SD203は東へ屈曲しているが、北のSD204に繋がっていた可能性がある。SD203は幅0.30～0.65m、深さ0.1m以内である。SK201は長円形の典型的なゴミ穴で、長さ1.70m、幅0.75m、深さ0.30mである。肥前磁器染付皿27が出土した。SK202・205などは浅い窪みである。

e．第１層上面の遺構と遺物

第１層上面には礎石２個があるが、建物は復元できない。東端に並ぶようにSK101・103がある。SK105はSK101より古い。SK101・105からは加工された石材が多量に出土した。石材は２種あり、灰白色の粘板岩(図版２下段左)と黒灰色の粘板岩(同右)である。鋸で深く切れ目を入れて割り、厚さ１～２cmの長方形にし、ここからさらに加工され製品とされた。大きさにはバリエーションがある。同様の資料に硯作りがあるが(北約200mのOJ94－16次調査)、内側を彫ろうとした資料がほとんどない点などが異なる。SK101は南北４m以上、東西２m以上、深さ0.60mである。SK105は南北1.5m以上、東西約1.1m、深さ0.60mである。

SK101からは32～37が出土した。32・33は中国産青花皿で、32は灯明皿と推定される。欠けているが、灯心を支えるためと考えられる造作があり、縁に煤が付着している。外面と口縁内側は無釉である。33は八角形の皿で、高台も八角である。34は輪花の肥前磁器染付皿である。35は肥前陶器碗で、外底面にスタンプがある。36は三足の瓦質火入である。37は瀬戸美濃焼の人形で、底に「西行法師」と墨書されていた。SK105からは肥前陶器碗31と、木簡40が出土した。木簡の文字はよく判読できない。出土遺物から、SK101・105は17世紀後半の遺構である。

3)まとめ

上記の成果をまとめると以下のとおりである。

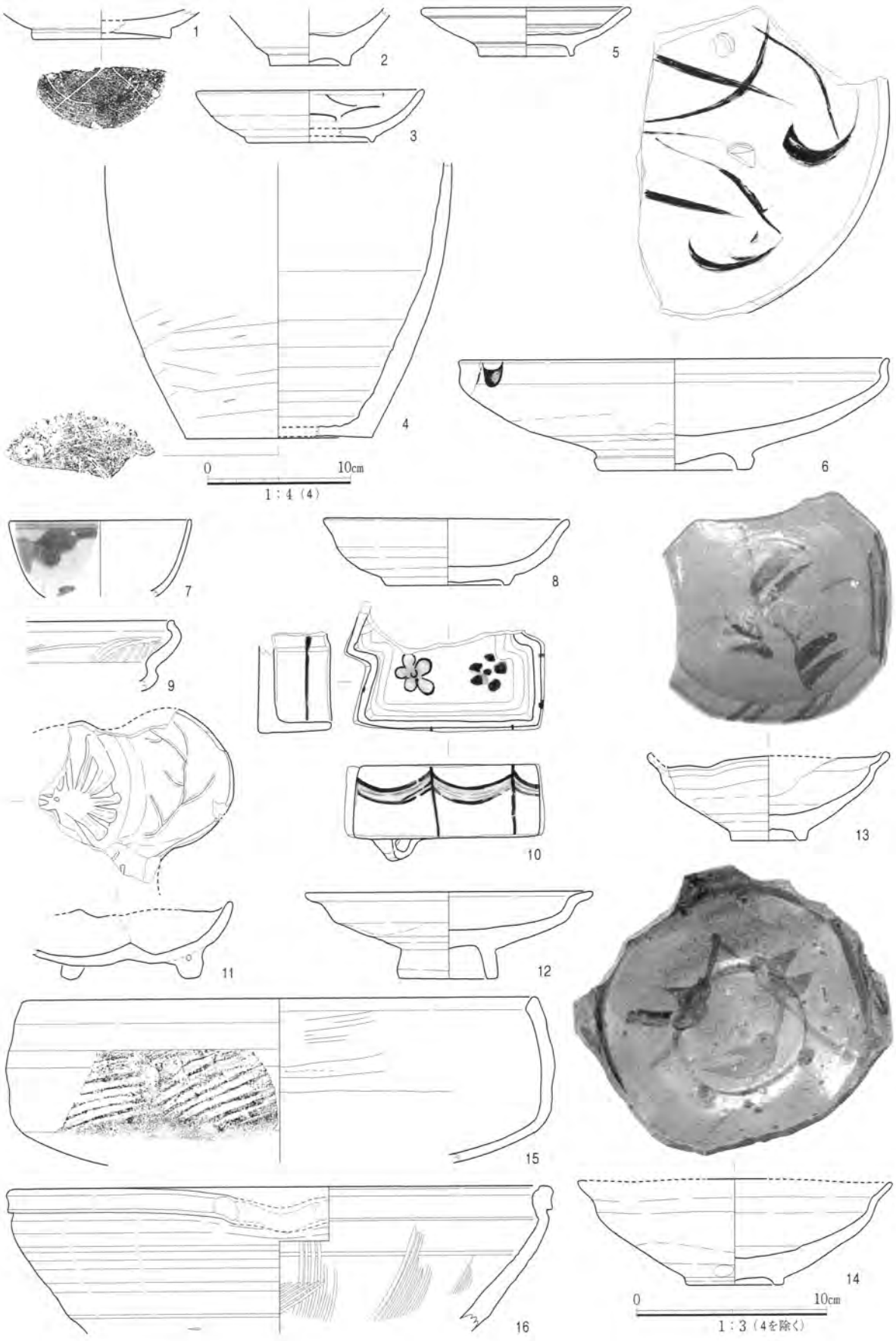


図6　出土遺物実測図（1）

第8層（1）、第6層（2～4）、第5層（5・6）、SK501（7～16）

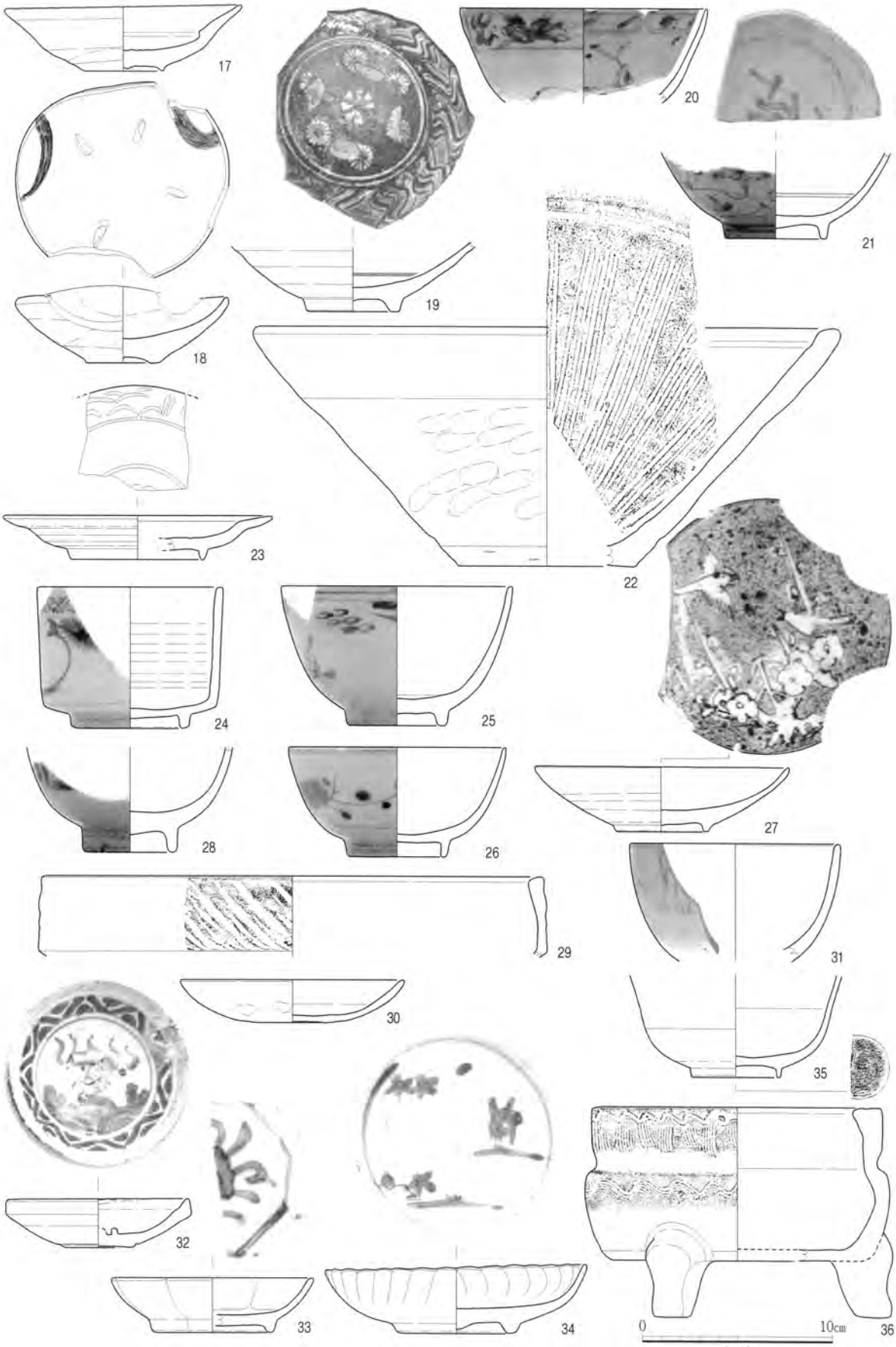


図7　出土遺物実測図(2)

第4層(17~22)、SK401(23)、SX304(24)、第2層(25・26)、SK201(27)、第1層(28~30)、SK105(31)、SK101(32~36)

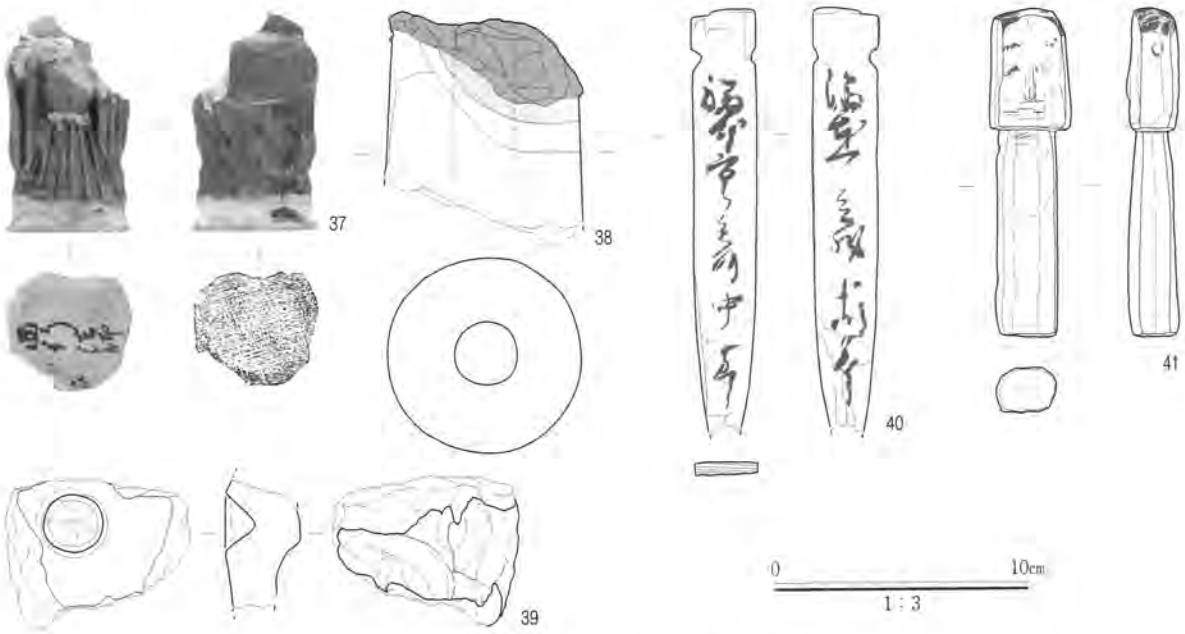


図８　出土遺物実測図（３）
SK101(37)、第５層(38)、SK501(39)、SK105(40)、第２層以下(41)

・調査地点は周辺と同様に、豊臣後期には盛土して城下町として開発されている。また、出土遺物と地層から平安時代などの古代の遺構が分布する可能性がある。
・大坂冬ノ陣以降の徳川初期には屋敷奥に大きなゴミ穴SK501があり、この景観は豊臣期まで遡るであろう。SK501を埋めた後には南北に続く土間や排水溝などがあり、溝を境に二つの屋敷地に分かれる可能性がある。
・東側の敷地では、17世紀後半に硯作りと推定される石材加工が営まれていた。

参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008a、「大坂城下町跡発掘調査（OJ06－１）報告書」：『大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)』、pp.171－180
2008b、「大坂城下町跡発掘調査（OJ06－６）報告書」：『大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)』、pp.239－248
大阪市文化財協会2004、『大坂城下町』Ⅱ

第５層上面全景
（東から）

第４層上面全景
（東から）

第３層上面全景
（東から）

SD301
（南東から）

第２層上面全景
（北東から）

石材集合

中央区南久宝寺町一丁目における建設工事に伴う
大坂城下町跡発掘調査(OJ11－４)報告書

調 査 個 所　大阪市中央区南久宝寺町１丁目65－１
調 査 面 積　約45㎡
調 査 期 間　平成24年１月20日～１月26日
調 査 主 体　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄

1)調査に至る経緯と経過

調査地は堺筋よりわずかに東に入り、中央大通より3ブロック南で南久宝寺町通に南面する。慶長3年(1598)に開発されたと推定される城下町船場は、西限は心斎橋筋で、南限は南久宝寺町通という復元案がある。本調査は、豊臣期の城下町の範囲や開発の程度、徳川初期へ至る開発の過程などの研究に寄与することに留意した。近隣では、西200mのOJ08－5次調査で豊臣後期の遺構があり、南に離れた長堀通に面した地点でも豊臣期の遺構が見つかっている。一方、堺筋の東では、北北東250mのOJ08－1次調査では豊臣後期の遺構があったが、北東約200mのOJ92－24次調査では17世紀中頃より古い遺構は確認できていない。堺筋と東横堀川の間では、今回の調査地周辺より南においては、調査が希薄なこともあり、城下町成立過程に関する発掘成果はほとんど上がっていないのが現状である。

本調査は、大阪市教育委員会の試掘結果を参考にした担当者の指示により、事業者側で適切な調査面まで掘削された後に着手した。両隣の建物に影響を与えないよう、調査区の東西幅は計画より狭くした。第5層の自然堆積層以下は、東西1.2m×南北0.7mのトレンチにより地層を確認し、土壌サンプルを採集した。近接して高い建物に囲まれていたためGPS基準点測量は断念し、本報告の図面の方位と座標は地図より作図した。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋○mと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

図1　調査地位置図

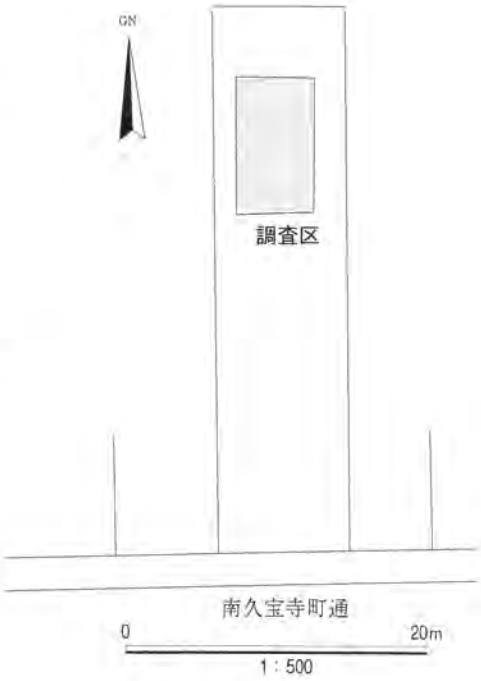


図2　調査区位置図

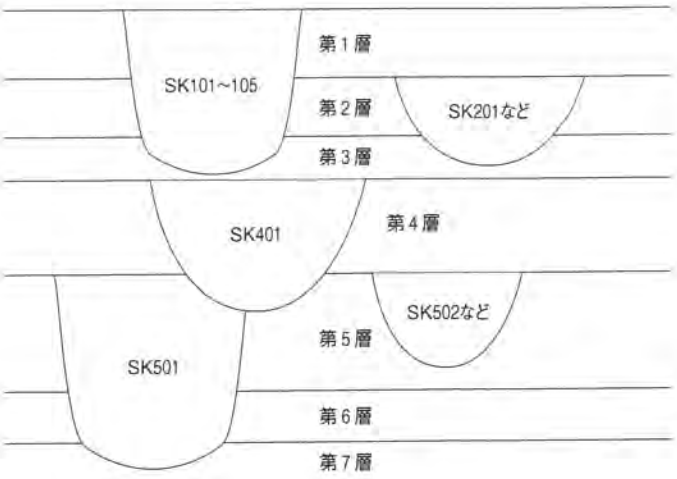


図3　地層と遺構の関係図

第1層：にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂質シルト層で、炭が混じる。層厚は20～30cmである。上面にSK101～105がある。

第2層：灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂質シルト層で、層厚は10～42cmである。上面に小規模な土壙や溝がある。

第3層：にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト層で、層厚は3～10cmである。

第4層：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒砂層で、最大層厚70cmである。図7の21～30の陶磁器が出土し、17世紀末頃と推定される。上面にSK401・402がある。

第5層：黄褐色(10YR5/6)細粒～中粒砂層などからなり、層厚は75cmである。細かいラミナが見え、本層以下は自然堆積層である。上面には17世紀末頃と推定されるSK501をはじめ、多くの土壙や溝があった。

第6層：黒褐色(10YR3/2)シルト質中粒砂層で、層厚は13cmである。植物による擾乱が著しい。古代以前の須恵器・土師器の小片が混じる。また、第5層上面遺構の出土であるが、図6の1のよう

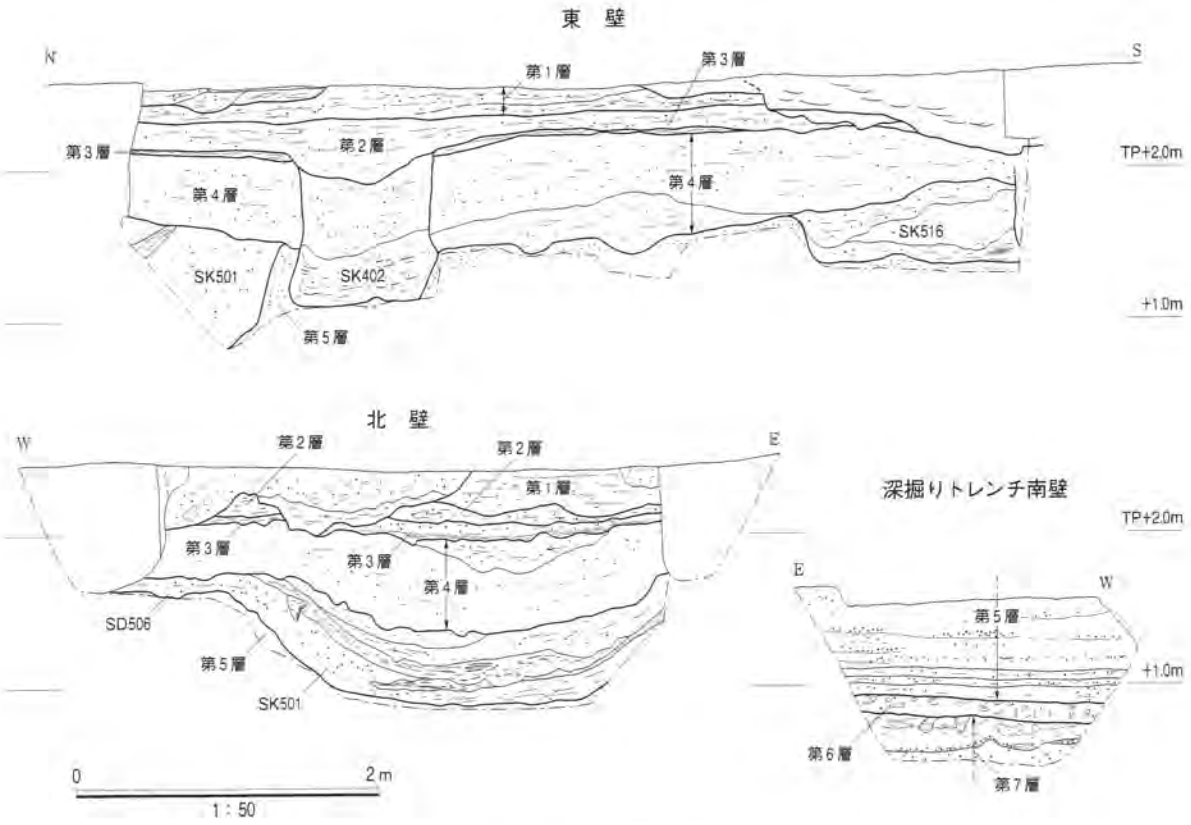


図4　地層断面図

な弥生時代中期の広口壺の口縁部があった。

第７層：灰黄色(10YR5/2)中粒～粗粒砂層で、層厚は30cm以上である。

ⅱ)遺構と遺物(図５～７)

a．第５層上面の遺構と遺物

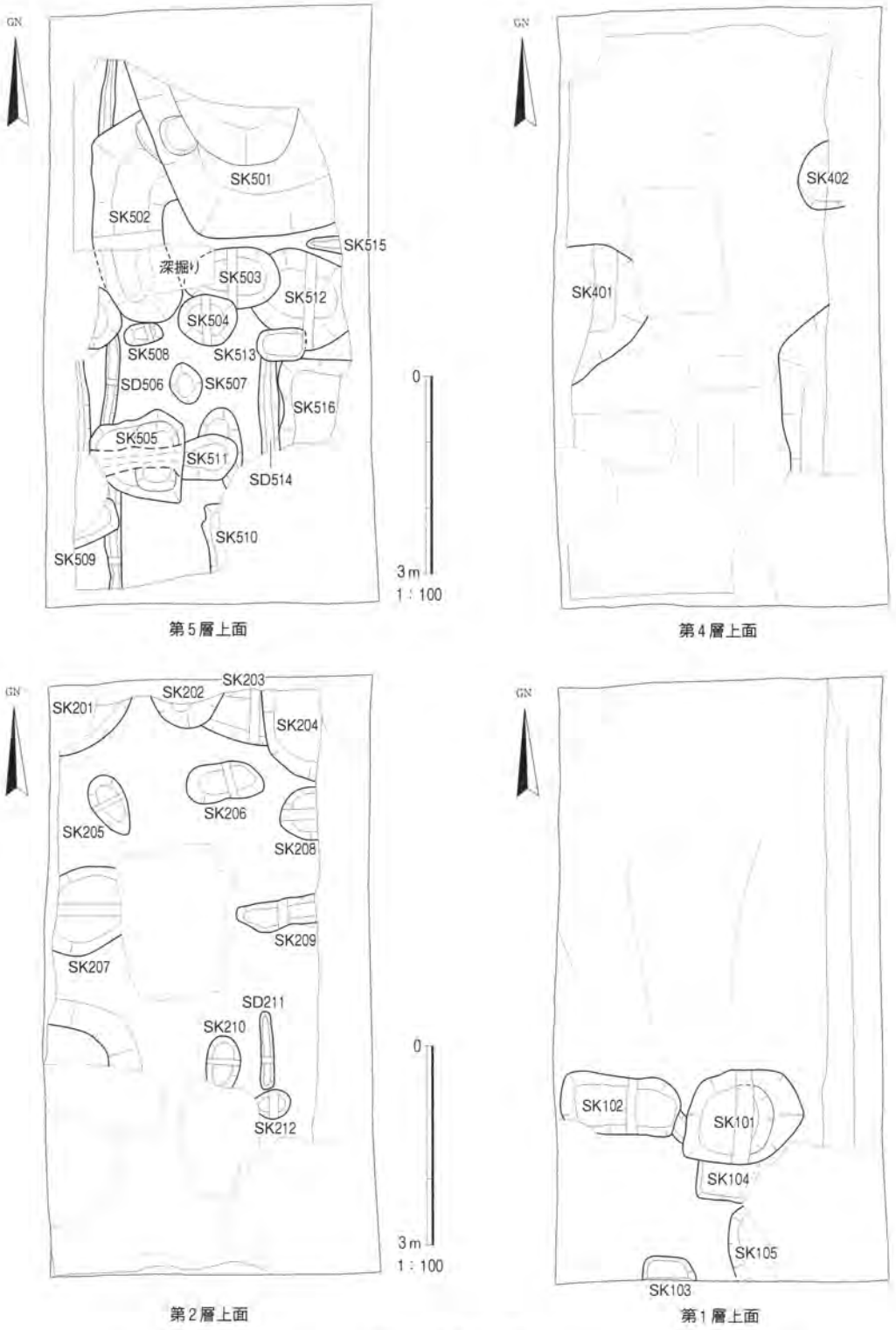


図５　遺構平面図

北側のSK501は東西3m以上、南北2.7m以上、深さ0.75mで、調査区外へ広がっている。埋土は、上より暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂層、黒褐色(2.5Y3/1)中粒砂質シルト層、灰黄褐色(10YR4/2)シルト質中粒砂層などからなる。間に薄い水成層を挟むところがあり、中ほどは炭を多く含んでいる。SK501からは大量の陶磁器などが出土し、屋敷地裏手にある大型のゴミ穴である。図6の2～20はSK501の出土で、土師器皿2～6、「泉州麻生」印の焼塩壺7、瓦燈の身8がある。9～11は肥前陶器で、片口鉢11がある。12～15は肥前磁器染付である。16・17は土師器焙烙で、17には胴部にタタキメがある。16は他と比べて唯一新しく、建築工事のパイル等による混入の可能性がある。18は土師器火消壺の蓋である。19は備前焼瓶で、肩に刻印がある。20はベトナム産長胴壺で、本調査地では他に少なくとも3～4個体の類似の壺破片がある。これらの陶磁器からSK501は17世紀末頃と推定される。

SK502はSK501に切られている細長い土壙で、深さ0.6mある。SK503・505・512・516は大きめの土壙で、深さは0.2～0.4m程度である。SK511は東西方向の溝状の遺構で、他は円形から楕円形の小規模な土壙である。SD506は8m以上続き、表から裏まで続く排水溝の可能性が高い。最大幅0.25m、深さ0.20m以内である。東側にあるSD514も同種の溝の可能性がある。

b．第4層出土遺物と第4層上面の遺構

まず、第4層出土遺物に図7の21～30がある。26は中国産青花皿、21～25・27・28は肥前磁器で、21が白磁、22～25・27が染付、28が青磁である。皿28は三足で、口縁部は輪花状に凹凸を付けたところがある。口紅が施され、内面に片切・線彫による芭蕉文がある。29・30は土師器焙烙で、30は把手を付ける孔を有する耳部が大きく張り出している。体部には、ヨコナデで消される前の掻上げ痕が微かに残っている。

第4層上面にはSK401・402がある。SK401は南北2.10m、深さ1.00mある。SK402は東壁際にあり、南北1.00m、深さ1.00mの東西に長いと推定される土壙である。両者とも壁が直である。埋土に炭等を多く含み、ゴミ穴と推定される。

c．第2層上面の遺構

本層上面には、上下層と比べて小さい土壙や溝がある。SK203・205～210・212は、深さ0.2m以内の浅いものである。調査区の南西は高くなっていた。

d．第1層上面の遺構と遺物

SK101・102・105はゴミ穴と推定される土壙である。SK101は東西1.80m、南北1.40m、0.35m、SK102は東西1.85m、南北0.90m、深さ0.50mである。他は平面形が不明で、SK103が深さ0.30m、SK104が同0.40m、SK105が同0.50mである。

第1層上面遺構の出土遺物は、特徴的なもののみを掲載した。図7の31～33がSK102出土、34がSK104出土である。31は瀬戸美濃焼壺の落し蓋で、橋状の把手が付く。32は筒状で透かしのある産地不明の陶器である。鉄絵で雷文を描き施釉されている。34は李朝の白磁碗である。施釉陶器碗33は、国産でなく朝鮮半島産の可能性もある。高台部から底部の四方を削り取り、底面には粗いケズリ痕が残る。胎土が通常の肥前陶器に比べ、相当に粗い。

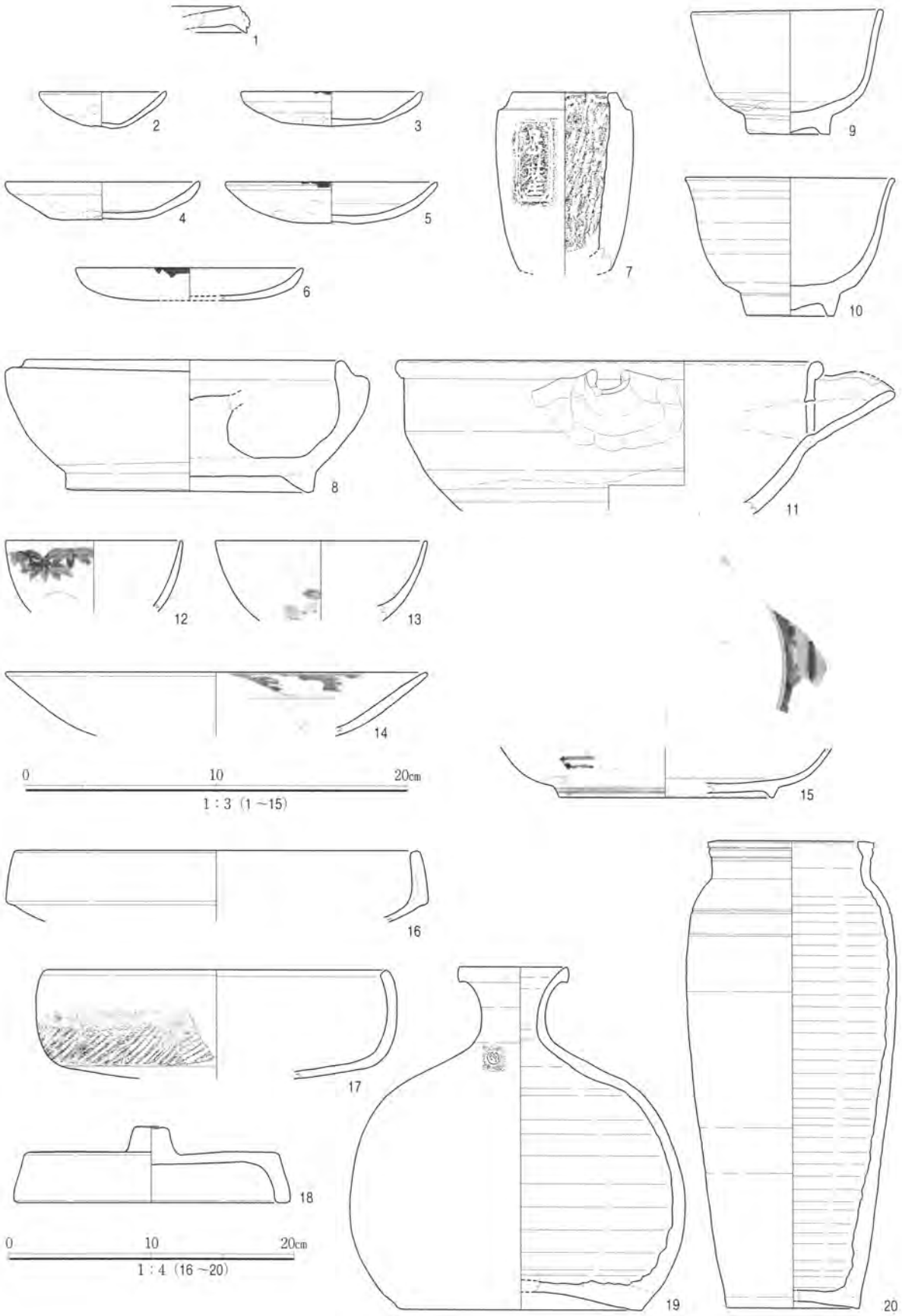
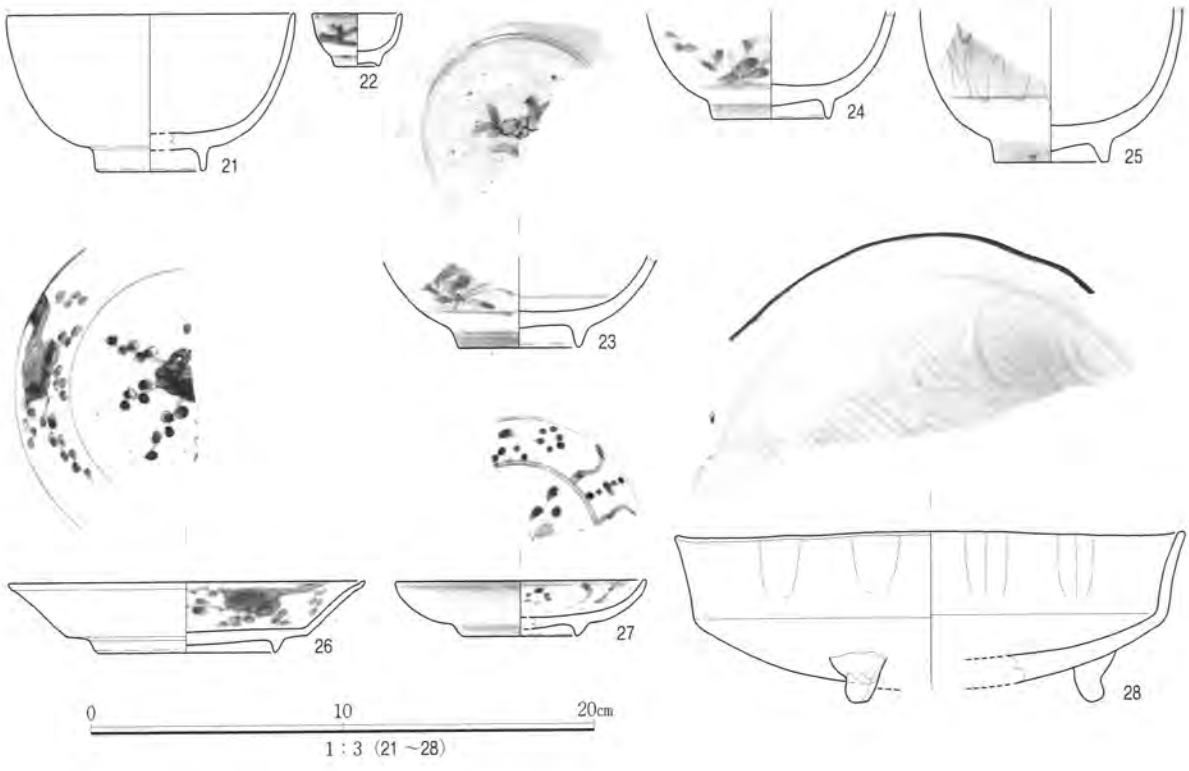
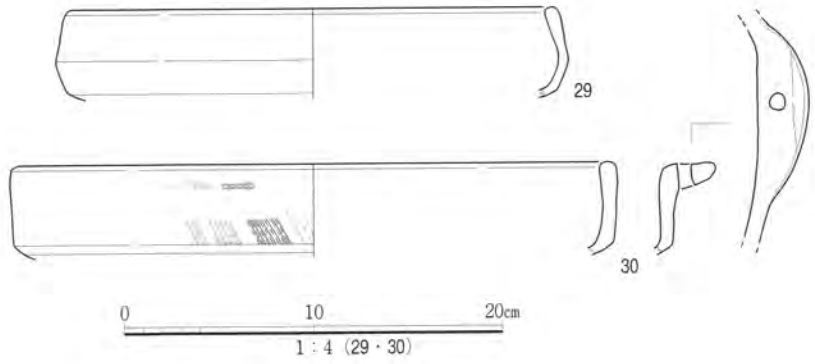


図６　出土遺物実測図（１）
SD506（１）、SK501（２～20）





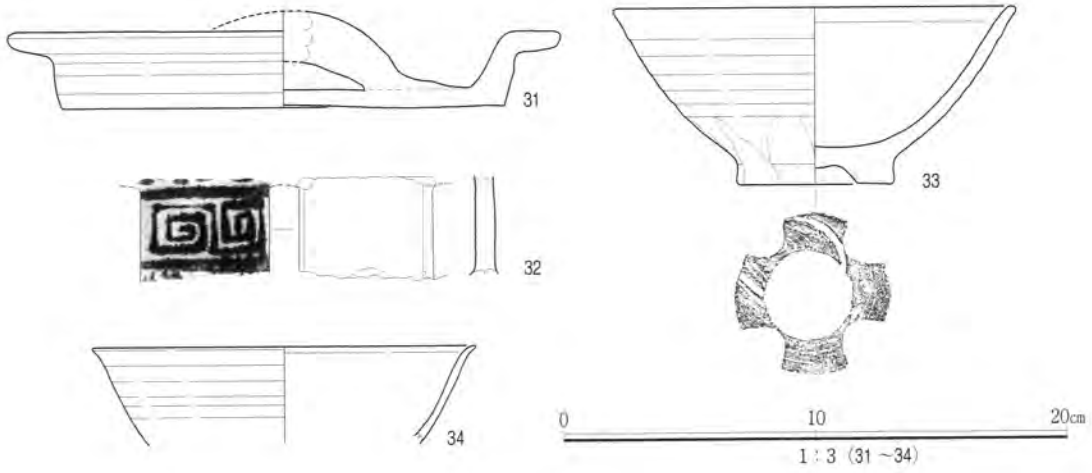


図7　出土遺物実測図（2）

第4層(21～30)、SK102(31～33)、SK104(34)

3)まとめ

上記の成果をまとめると以下の通りである。

・17世紀末頃には屋敷地の裏手には大きなゴミ穴があり、ゴミ穴は第4層上面・第1層上面ではより小さくなる。

・もっとも古い遺構は17世紀後葉で、豊臣期以前の遺構は調査区では確認できない。

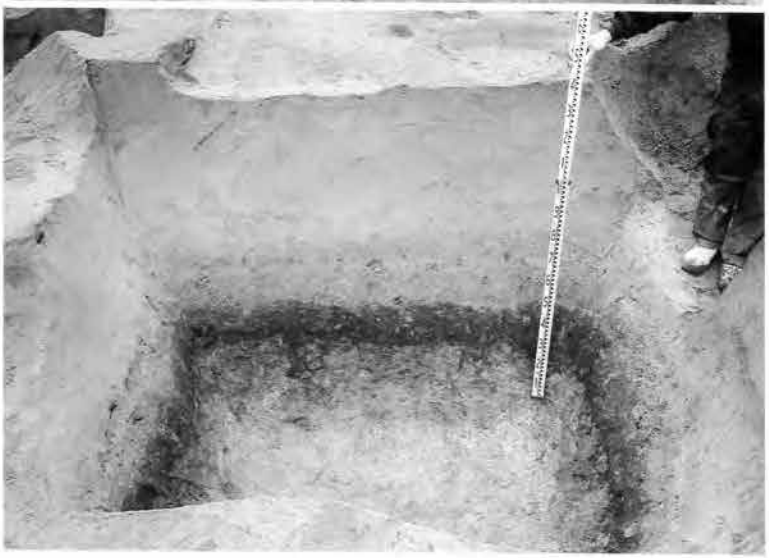
・ベトナム産陶器の出土数は一般的な傾向でない可能性があり、生業の手がかりになるかもしれない。

以上が今回の知見であるが、屋敷地の裏手は表に比べて開発が遅れる傾向があり、これをもって当地が豊臣期に開発されていなかったとは、周辺の調査数からして断言できない。船場城下町の推定範囲外の西や南で豊臣期の遺構が見つかっており、逆に調査地周辺では当該期の遺構が希薄な傾向がある。元の地盤の高低や交通路などが、豊臣期城下町の計画に関係している可能性がある。GISによる自然環境情報を積極的に活用したり、城下町縁辺では特に表側を調査するなど、より効率的な戦略が必要である。

第５層上面全景
（北から）

第５層上面全景
（南から）

トレンチ南壁
（第５層以下）



中央区道修町三丁目における建設工事に伴う
大坂城下町跡発掘調査(OJ11－5)報告書

調 査 個 所　大阪市中央区道修町３丁目２－１ほか３筆
調 査 面 積　24㎡
調 査 期 間　平成24年３月19日～３月28日
調 査 主 体　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、清水和明

1)調査に至る経緯と経過

本調査地は大坂城下町跡の西北部にあり、道修町通と井池筋が交差する地点の北西に当たる。一帯は近世初頭以前までは西へ向かって開く谷で[趙哲済2005]、付近における遺跡の変遷は、谷の形成と埋没の過程および内部へ都市化が進む過程を示しているものといえよう。

古く弥生時代後期末～古墳時代初頭頃の遺物は、本調査地から南に位置する150mのOS88－82次調査地やOJ92－24次調査地の標高0m付近などでわずかながら見つかっているが、本調査地の北一帯を西流していたかつての大川の河成層ないしその上面の遺構中に含まれるものである[大阪市文化財協会2004]。古墳時代末～古代では、大川左岸に河成砂礫層が堆積して高麗橋通付近を中心に東西に延びる砂州を形成した結果、内陸側の水の出口として道修町通・伏見町通一帯に流路が生まれ、細長い入り江状の地形に発達したことが想定されている[大阪市文化財協会2004]。先述のOS88－82次調査地のほか、本調査地の南130m程のOJ92－22次調査地などで見つかっている奈良～平安時代の遺構・遺物は、この入り江の南岸に人が入っていることを示している。入り江の陸地化が進む中世には東180mのOJ94－16次調査地で14～15世紀の土壙や溝、北150mのOJ94－15次調査地で15～16世紀の土壙があるが、より東側の堺筋付近では水田が見つかっている。豊臣期に入ると台地側のOJ94－16次調査地では整地によって屋敷地が造成され礎石建物や土壙が見られるほか、OS88－82次調査地の冬ノ陣焼土層、OJ92－22次調査地の井戸・土壙など前代に比して都市化が進む様相が明らかである。冬ノ陣以降、徳川期に入っての一帯の復興は早く、徳川初～前期の遺構や遺物がOJ97－1次調査地[大阪市文化財協会1999]、OJ92－22次調査地、OJ04－1次調査地[大阪市文化財協会2005]など各調査地で確認されている。

このように本調査地では地形の変遷と都市化の進行が密接に係っており、今回の調査に当たっては

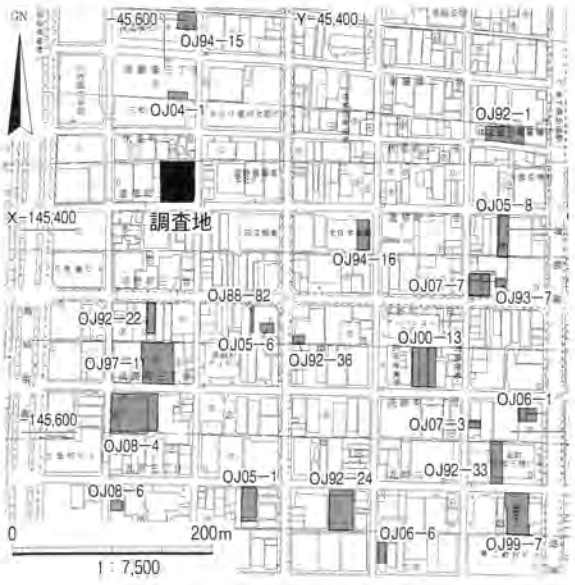


図1　調査地位置図

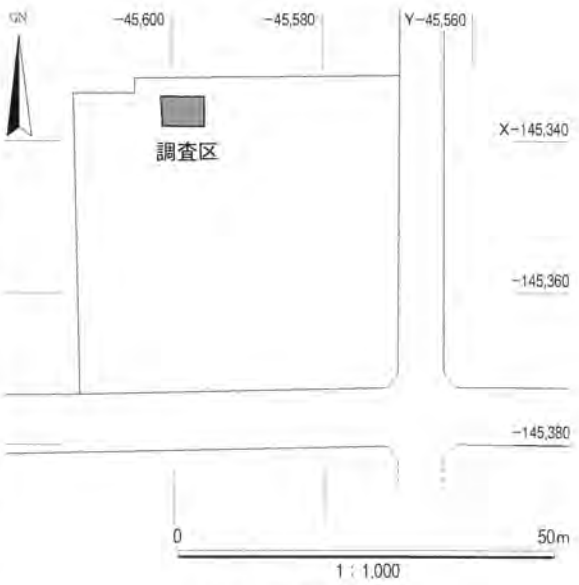


図2　調査区配置図

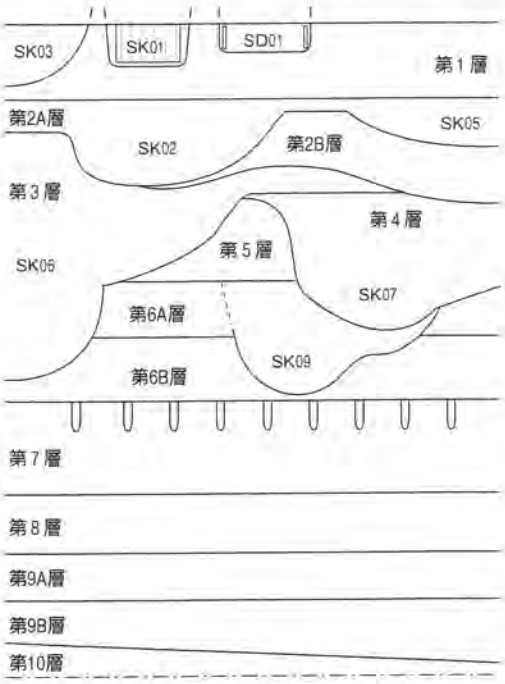


図3　地層とおもな遺構の関係

特に谷の底部に近くかつ御堂筋に近い付近の調査例が多くないことから、できるだけ幅広い地層と遺構の年代に係る基本情報を得ることを第1の目的とし、また付近では徳川期の早い段階で一帯の開発が進行するため、当地における状況を明らかにすることを第2の目的とした。

調査地では平成23年8月4日および平成24年2月29日に大阪市教育委員会によって試掘調査が行われた。前者は調査地の東北部で行われ、現地表下270cmまでは攪乱によって遺物包含層は確認されていない。後者は敷地西北部で行われ、現地表下210～270cm程度で徳川期の整地層と、その下位に17世紀代の遺物を包含する黒褐色粘土層(次項の第1層)が見つかった。

なお、調査区より南側は以前にあった建造物の地下室が全体に広がり、遺物包含層はすでに失われているようである。

本調査は平成24年3月19日から敷地の西北部に当たる24㎡を調査した。事業者により現地表下270cmまで掘削されており、調査区は第1層が露出した状態であった。建設工事のとの干渉を避けるため、調査面積は当初予定の50㎡から減少した。以下の地層を人力で掘り下げ、遺構・遺物の検出と記録を行った。2m程度深くなった後述の第8層以下は、調査区が狭いため中央に深掘りトレンチを設定し、おもに遺物採取と断面観察による調査を行い(図6)、3月28日に現地における全作業を終了した。以下、本報告で示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、TP－○mと表記した。方位は、図1・2では現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、ほかは磁北を基準にした。なお、調査で出土した加工痕のある脊椎動物遺存体の同定と分析について奈良文化財研究所客員研究員丸山真史氏ならびに大阪歴史博物館学芸員池田研氏に教示を得た。なお、本稿における「徳川前期」の時期区分は[森毅2004]に拠る。

2)調査の結果

i)層序(図3～5)

一帯の現地形はTP+2.1mでほぼ平坦な地形である。

調査区で確認された地層は古代～徳川期に相当し、以下に、各地層の岩層と堆積状況を述べる。

第1層：灰色(5Y4/1)シルト質中粒～細粒砂で層厚20cm程度の整地層である。17世紀後葉の肥前磁器をはじめとする遺物が出土した。本層の上面でSK01やSD01など上位から掘り込まれた遺構を確認した。

第2層：A・Bの2層に細分される。第2A層は黄灰色(2.5Y4/1)シルト質中粒～細粒砂の整地層で

層厚は10～20cm程度である。本層内でSK02やSK05など17世紀前～後葉の遺物が出土した遺構を検出した。第2B層はオリーブ黒色(10Y3/1)シルトを主体とする整地層で、層厚は最大20cm程度だが調査区東部ではSK02のため存在しない。

第３層：灰色(10Y4/1)シルトの整地層で炭を含んでいる。本層はSK06埋土に当たり、調査区東部

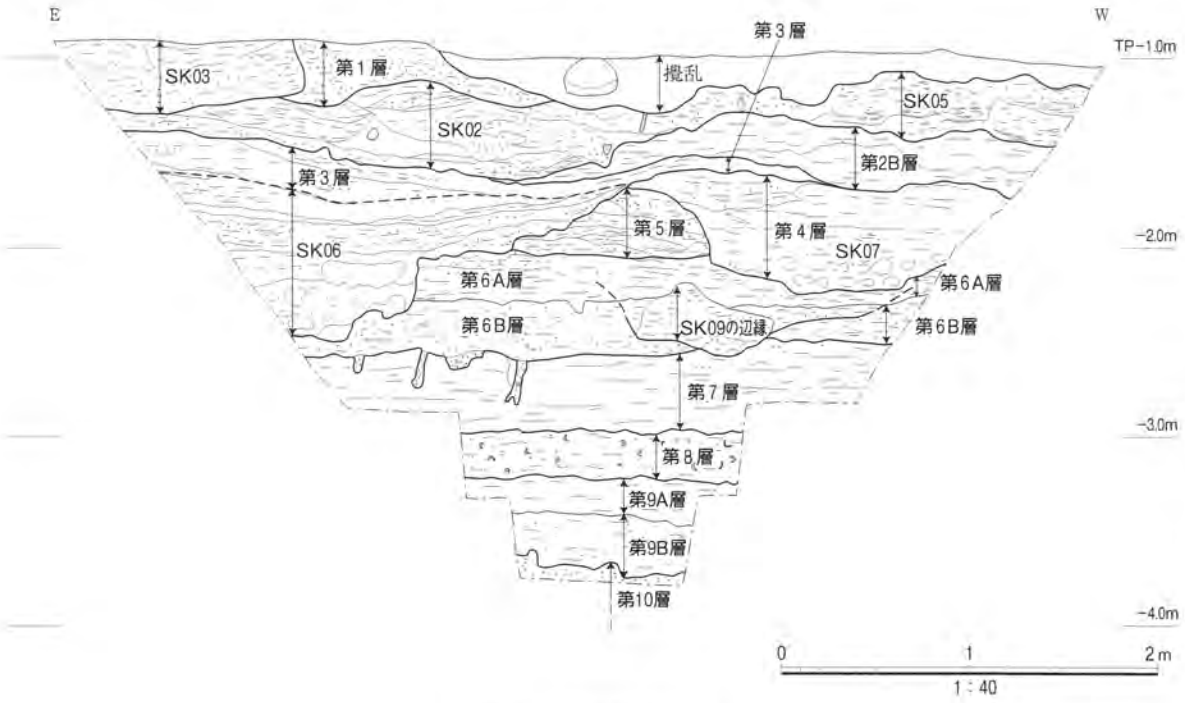


図４　南壁地層断面図

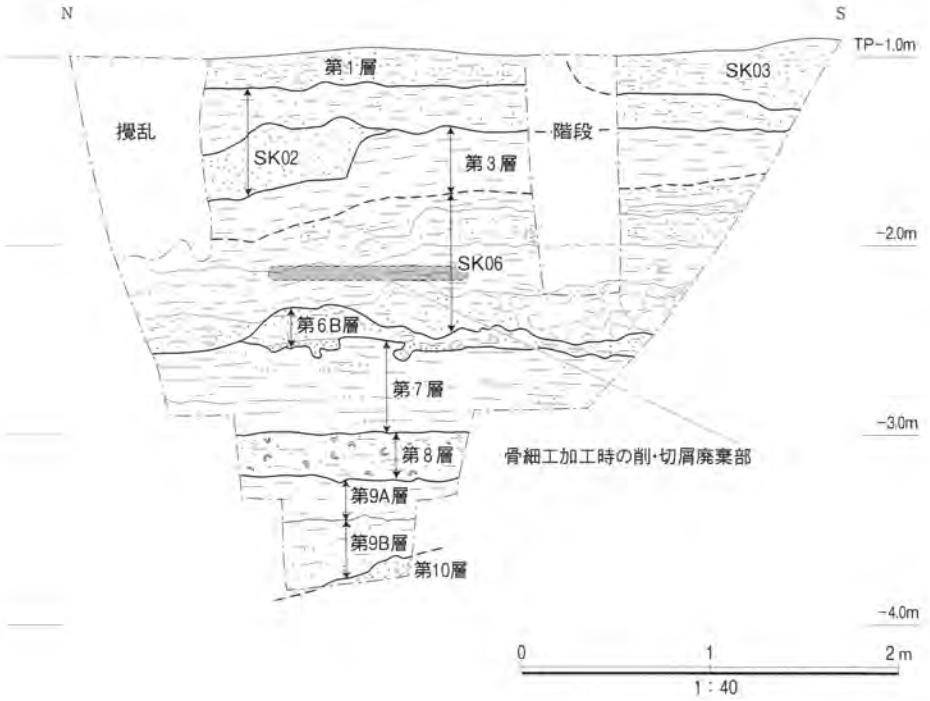


図５　東壁地層断面図

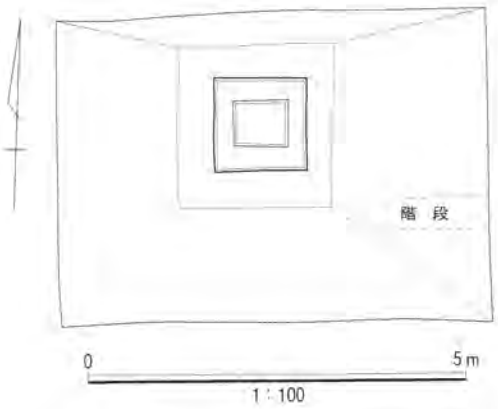


図6　調査区深掘トレンチ位置図

にのみ分布する。最大層厚は120cmである。豊臣後期のほか、17世紀前葉の遺物が出土している。

第4層：オリーブ黒色(5GY2/1)シルトの整地層で調査区西部にのみ分布する。最大層厚は約70cmである。SK07・08は本層内の遺構である。豊臣後期のほか17世紀前葉の遺物が出土している。

第5層：黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂質シルト～灰オリーブ色(7.5Y5/2)細粒砂が互層をなすように堆積した整地層で、最大層厚は40cm程度ある。調査区の中央付近にあり、本層の東・西側で遺構が掘削されたとみられることから、敷地の境に当たる場所の可能性がある。

第6層：A・Bの2層に細分される。第6A層は黄灰色(2.5Y5/1)極細粒砂質シルトの整地層で層厚は30cm程度である。SK09は本層上面の遺構である。第6B層は黄灰色(2.5Y4/1)シルト質細粒～中粒砂の整地層で、最大層厚は40cmである。下位の第7層上面には動物の踏込みとみられる凹みがあり、それを埋めていた細粒～中粒砂を母材とする砂が第6B層に含まれていると考えられる。ごく少量であるが11世紀代の遺物が出土している。

第7層：灰色(5Y4/1)細粒砂混り粘土質シルトの湿地性堆積層である。上述のとおり、上面で動物の足跡とみられる凹みがあり、本層上面が一時期地表面であったと考えられる。わずかに時期不詳の遺物が出土しているが、下位の第8層から奈良時代の遺物が出土するため、それよりも新しい時期のものであろう。

第8層：灰色(7.5Y4/1)中粒砂質シルトの湿地性堆積層で、貝殻片を含んでいる。層厚は30cm弱である。貝は腐食しており採取不可能であった。大型の鉄釘のほか奈良時代の遺物が出土している。

第9層：A・Bの2層に細分される。第9A層は灰色(7.5Y5/1)シルトで層厚は20cm、第9B層は灰色(7.5Y4/1)中粒砂質シルトで、これらは湿地性の堆積層である。出土遺物は無い。

第10層：灰色(5Y5/1)粗粒～極粗粒砂で、層厚は20cm以上であるが、基底は確認していない。調査区の東西壁面では、いずれも北へ向かって急激に低くなっており、かつての大川右岸付近の河成堆積物と考えることができるが、ラミナは観察できなかった。

ii)遺構と遺物

a．中世以前の遺構・遺物(図7・11)

本調査地では第6層以前の地層が中世以前に相当する。出土遺物からは第8層が奈良時代で、それ以下の地層から遺構・遺物は検出されていない。

第8層出土遺物には須恵器杯B1、鉄釘2のほか、細片のため図化していないが土師器高杯・甕、須恵器甕などがある。鉄釘2は尖端が欠損しているが長さ25.0cm、頭部幅2.9cmの大型品である。これらは奈良時代の遺物である。

第7層上面では、先述のとおり動物の足跡とみられる凹みを多数検出した。図4の断面にあるよう

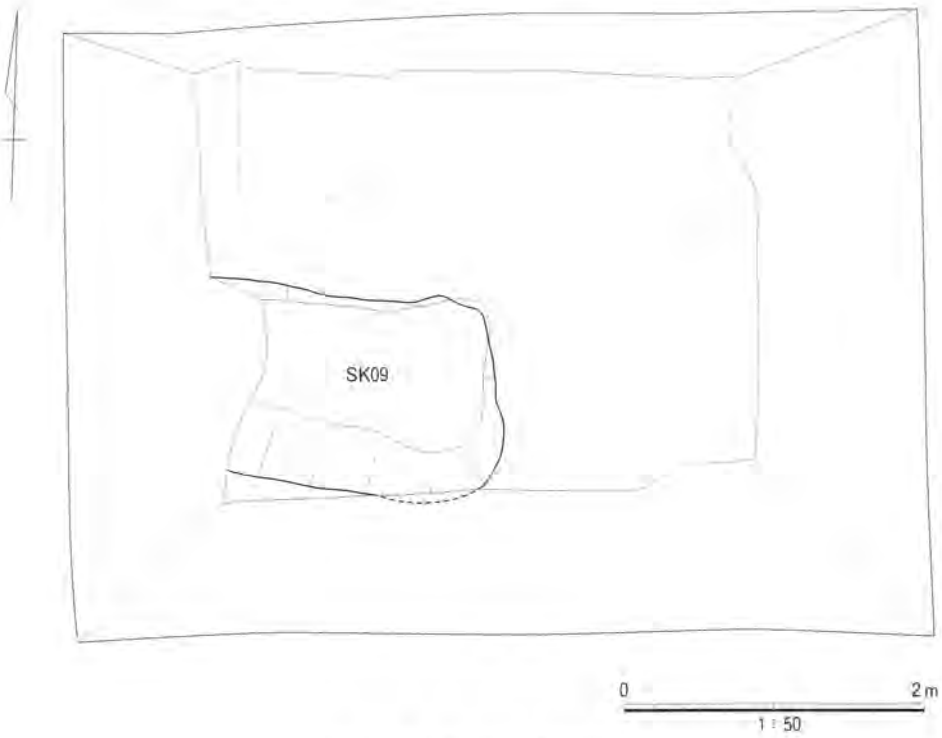


図7　第6層上面遺構平面図

に、幅5cm、深さ20cm以上で、底が二股に分かれているものがあり、シカなどの偶蹄類が古代の低湿地帯に入り込んでいたと思われる。

第6層上面ではSK09を検出した。平面の調査で上位のSK07と一連で掘削したため、地層断面で第6A層上面から掘り込まれたことを確認した。幅は1.3mで、調査区西外へ続くため、全長は不明である。埋土は、基底にシルト偽礫を多く含む灰色(7.5Y4/1)細粒砂がたまり、加工時形成層とみられるほか、上位に厚さ数cm程度の黒色(5Y2/1)シルトの水漬き層を挟んでシルト偽礫を多量に含むオリーブ黒色(5Y3/1)シルトで埋められている。深さ0.4m弱である。中世後半期の遺構の可能性がある。

ほか、第6層内から土師器皿3が出土したが平安時代に属するものであろう。

b．近世の遺構と遺物(図8～11)

第5層は調査区の中央付近で、ほぼ南北方向に堆積している。南壁の地層断面からは、本層が上位のSK06とSK07・08によって東西を掘削され、断面で三角形になっているようすがわかる。遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、第6層までの地層の堆積状況と明らかに異なり、整地によって土地利用を促進する意図が窺えるため、豊臣期以降の時期と考えられる。

第4層内で検出した遺構にSK07·08がある。SK07は長さ2.4m、幅1.5m、深さ0.3mで、埋土はオリーブ黒色シルトが主体である。出土した遺物には土師器小皿4・肥前陶器碗5があるほか、徳川期初期の遺物が出土した。

SK08は北側が調査区外に続くため全長は不明だが、東西幅は1.1m、深さ0.8mである。基底には灰オリーブ色中粒～粗粒砂と黒褐色シルトの互層が堆積し、機能時に水がたまっていたようであるが、その上位は砂質シルトの偽礫を含む地層で埋められている。そのほか、第4層から出土した遺物に瓦質の有溝土錘6がある。

写真１　木簡

第３層内で検出された遺構にはSK06がある。SK06は大型の土壙で、ほぼ南北に向いた西側の立ち上がりを確認したのみで、他は調査区外に続くため全長・全幅とも不明である。調査区内で確認された深さは約0.9mで、部分的に凹凸があり、南側の凹みはオリーブ黒色シルトの偽礫を多量に含むシルト層で埋まっているが、北側は水漬きの黒色シルト質極細粒砂が堆積しているなど、底は部分的に掘り返された箇所があるとみられるものの、平面的な区分は困難であった。埋土の上半は水漬きのオリーブ黒色極細粒砂質シルトで埋まり、植物遺体が多量に含まれている。出土遺物には土師器皿８、瀬戸美濃焼志野皿12、肥前陶器皿７、碗９、内野山系碗10のほか、肥前磁器染付筒型碗11などがあり、おもに豊臣後期～徳川初期の遺物が出土しているが、肥前磁器がわずかに含まれている。埋土は一括して掘削しているため、これらの出土位置は不明である。このほか、SK06で特筆すべきは、骨細工製品の製造過程でうまれるウシ・ウマ骨の削屑・切屑が大量に廃棄されていたことである。埋土全体から出土しているが、特に細部の加工で生じた約１cm以下の屑片が集中して廃棄された箇所が認められた(図５・８)。こうした状況から、本土壙は骨細工職人のゴミ穴であったと考えられる。その廃棄物の検討から製品種類とその製作工程を検証する

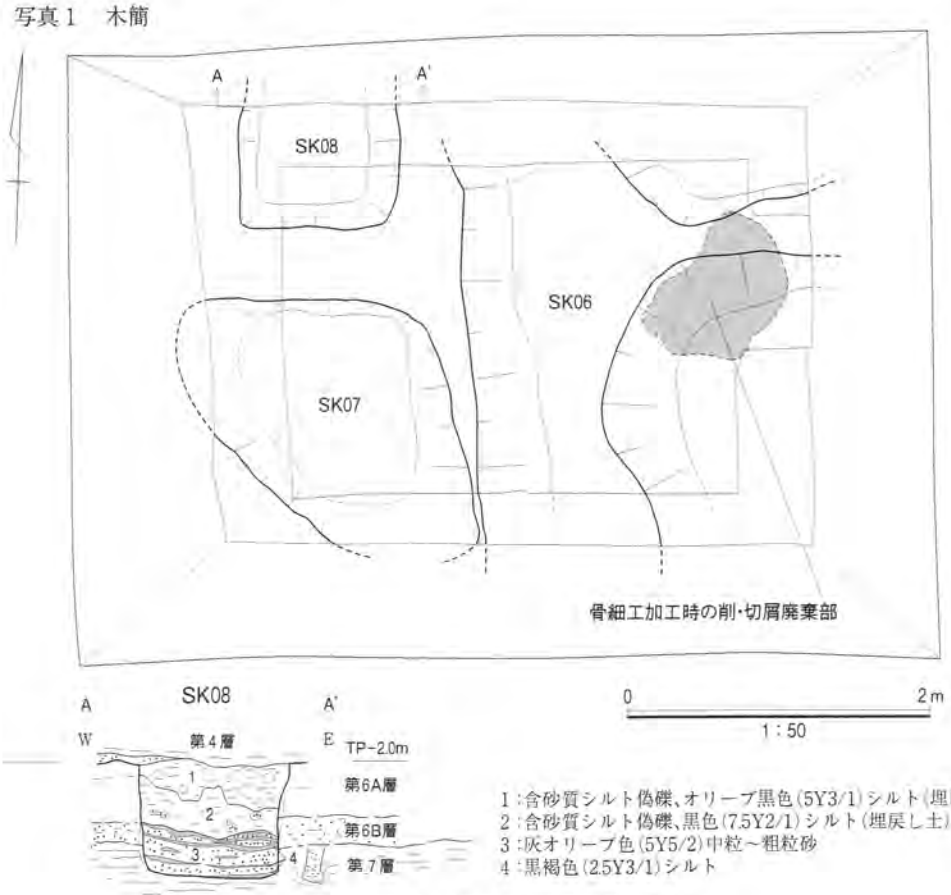


図８　第３・４層内遺構平面図

ことが可能であり、この点については次項で報告する。

第２層内の遺構には調査区東側のSK02、西側のSK05がある。SK02は、下位のSK06とほぼ同じ位置にあり、調査区の中央付近に南北に延びる立ち上がりを検出したものの、他は調査区外に続くため、全体の規模は不明である。基底は北東側が深くなっており、その部分に灰オリーブ色中粒砂で埋まっている。本土壙からは17世紀前～中葉を中心とする徳川前期の遺物が出土している。肥前陶器では皿23、溝縁皿16・17 、碗20、内野山系碗18、小杯19、肥前磁器では染付碗21があり、土師器焙烙A類24・焼塩壺26、丹波焼擂鉢25、信楽焼擂鉢27、中国産青花碗22などがある。SK02からは、SK06と同様に骨細工の製造過程を示す遺物が出土している。

SK05は深さ0.2m程度の浅い土壙で、長さ・幅ともに0.8m程に復元される。埋土は灰色シルト質細粒砂で鉋による削屑などの木片が大量に含まれている。また、木簡32が１点出土した(写真１)。長さ33.5cm、幅6.7cmの長方形で、四辺は丁寧に面取りされている。墨書は数行にわたり、表面側の全面に確認できるが、左端行の上部に「より」の合字が認められるほか、判読が困難である。

そのほか、調査区側溝の第２層以下から出土した遺物に、瀬戸美濃焼碗14、肥前陶器溝縁皿13、中

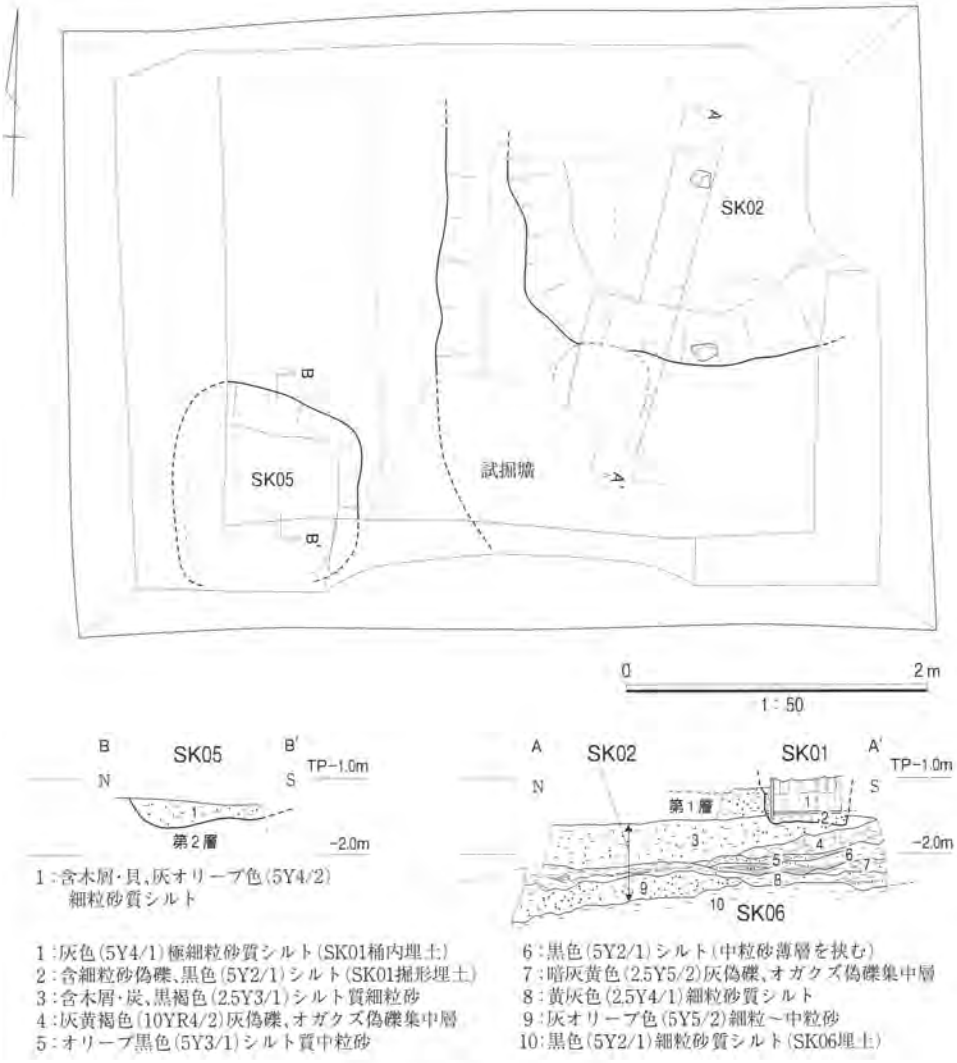
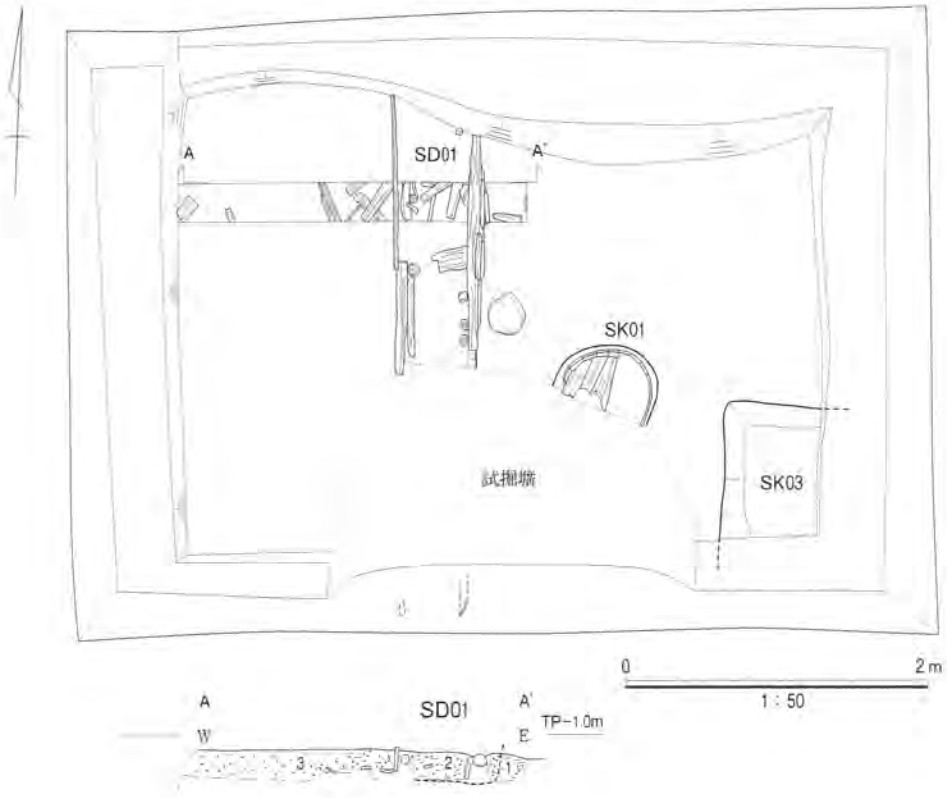


図９　第２層内遺構平面図

国産青花鉢15などがある。

第１層からは肥前陶器内野山系碗28や肥前磁器白磁碗29など17世紀後葉の遺物が出土する。その上面で検出したSK01・03・SD01は本来はより上位から掘り込まれた遺構である。SK01は埋桶で便所として利用されたものであろう。肥前磁器染付小杯30が出土している。SK03は調査区南東隅で検出したため全体の規模は不明である。木製の人形頭31が出土した。SD01は調査区の中央付近でほぼ南北に続く幅約40cmの板組溝である。高さ15cm程度の側板を杭で固定している。底に板は敷かない。南部は調査区壁面で確認されるため、長さ3.5m以上が続いていることになる。SD01は、下位の第２～４層内から掘削された遺構群を概ね東西に区分する位置に当たることから、豊臣期以降、徳川期に至るまで、この場所が敷地の境となっていた可能性が考えられる。骨細工に関連する資料のほとんどが東側のSK02･06から出土し、ほかは第２層以下の側溝、混入とみられるSK03などからであることも、敷地の利用状況に違いがあったことと関連しよう。

第４層から第２層にかけての地層や遺構から出土する遺物は、豊臣後期～徳川初期の遺物を中心に、肥前磁器が含まれるもので、大きな時間差はない。後述する骨細工製作に係る資料にも共通する技術が認められ、比較的短期間で形成されたものとみられる。上記のSD01とそれに先行する遺構の東西での掘り分けの状況から見ても、調査区が敷地奥の境界付近にあり、低湿な環境の中で廃棄場に利用されていた状況が窺える。



1：灰色(5Y4/1)シルト質細粒砂
2：オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質中粒～細粒砂
(基底に細粒砂の薄層)
3：オリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂質シルト

図10　第１層上面遺構平面図

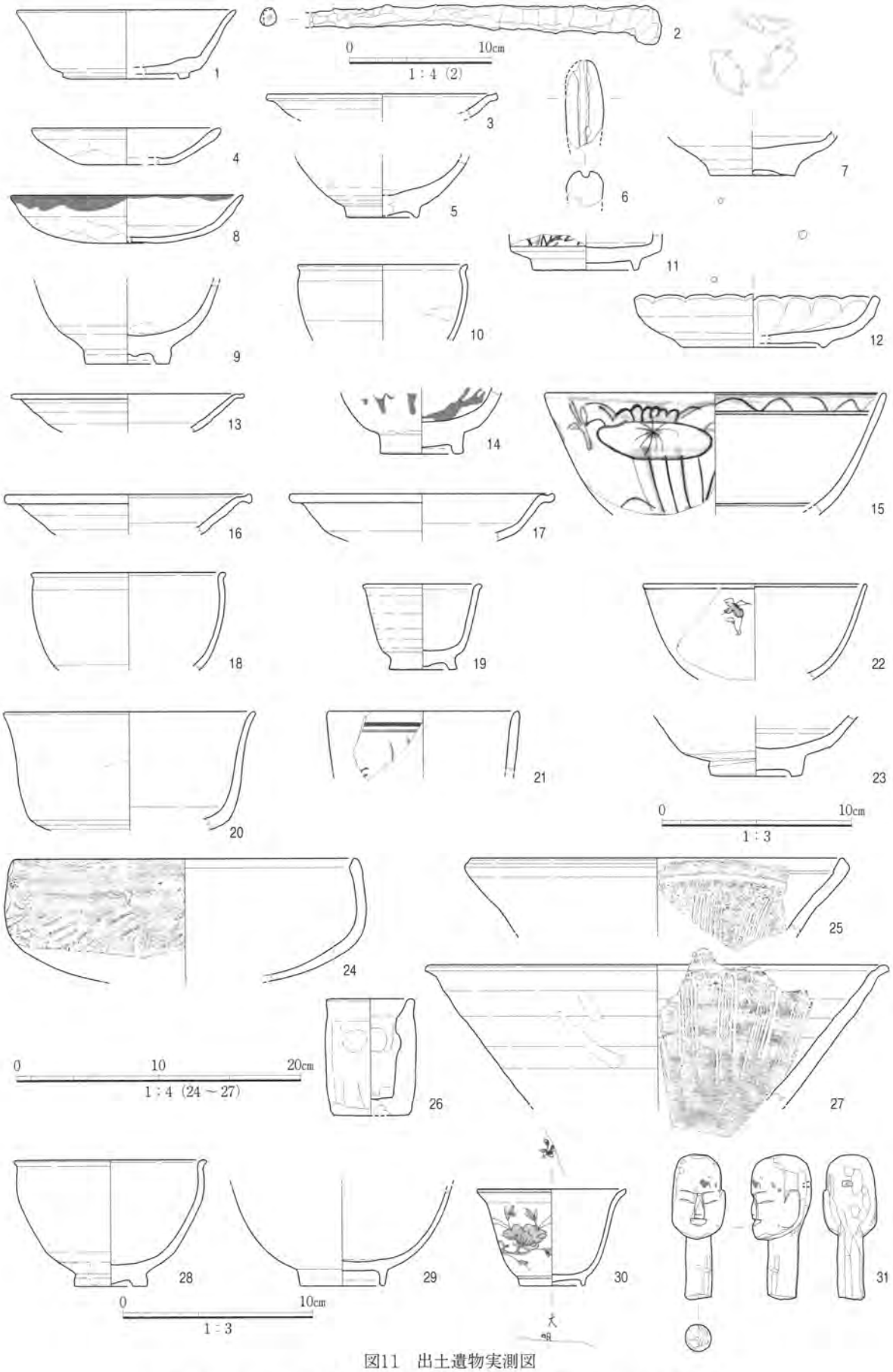


図11　出土遺物実測図

第８層(１・２)、第６層(３)、SK07(４・５)、第4A層(６)、SK06(７～12)、
第２層以下(13～15)、SK02(16～27)、第１層(28・29)、SK01(30)、SK03(31)

c．骨細工関連の遺物(図12・12)

先述のとおり、SK02とSK06からは17世紀前～中葉頃の陶磁器とともに大量の骨細工関連資料が出土した。特にSK06の埋土中部では、作業で生じた骨屑を一括で廃棄したとみられる部分があり、そのすべてを採集し、篩によって微細遺物の捕集に努めた結果、膨大な量のさまざまな削屑・切屑を得ることができた。全てを合わせるとコンテナ５箱程度に達する。その詳細な分析と検証は製作における各工程、使用工具と使用法などの復元にとって大きく貢献するものとなろう。現在はその途中であり、そのため本報告では、SK06から出土した資料に含まれる製品および未製品の検討から、現段階で想定される製作工程について述べることとし、資料全体にわたる動物種や骨部位の同定、数量などについては別稿を期す。

製品と各加工段階(図12)

大量の骨細工に関連する資料が出土したが、製品として確認できたものは今のところ雙六駒といわれるもの１種類のみである。45・46は直径21㎜、厚さ３㎜の円盤形で、表裏面の中央に九曜文を、周囲に二重圏線を施文している。表面・側面は丁寧に磨き、九曜文は鼠歯錐のような三叉刃の工具で、圏線はコンパスとみられる工具(便宜上、以下コンパスとする)で陰刻している。46は被熱のため片面

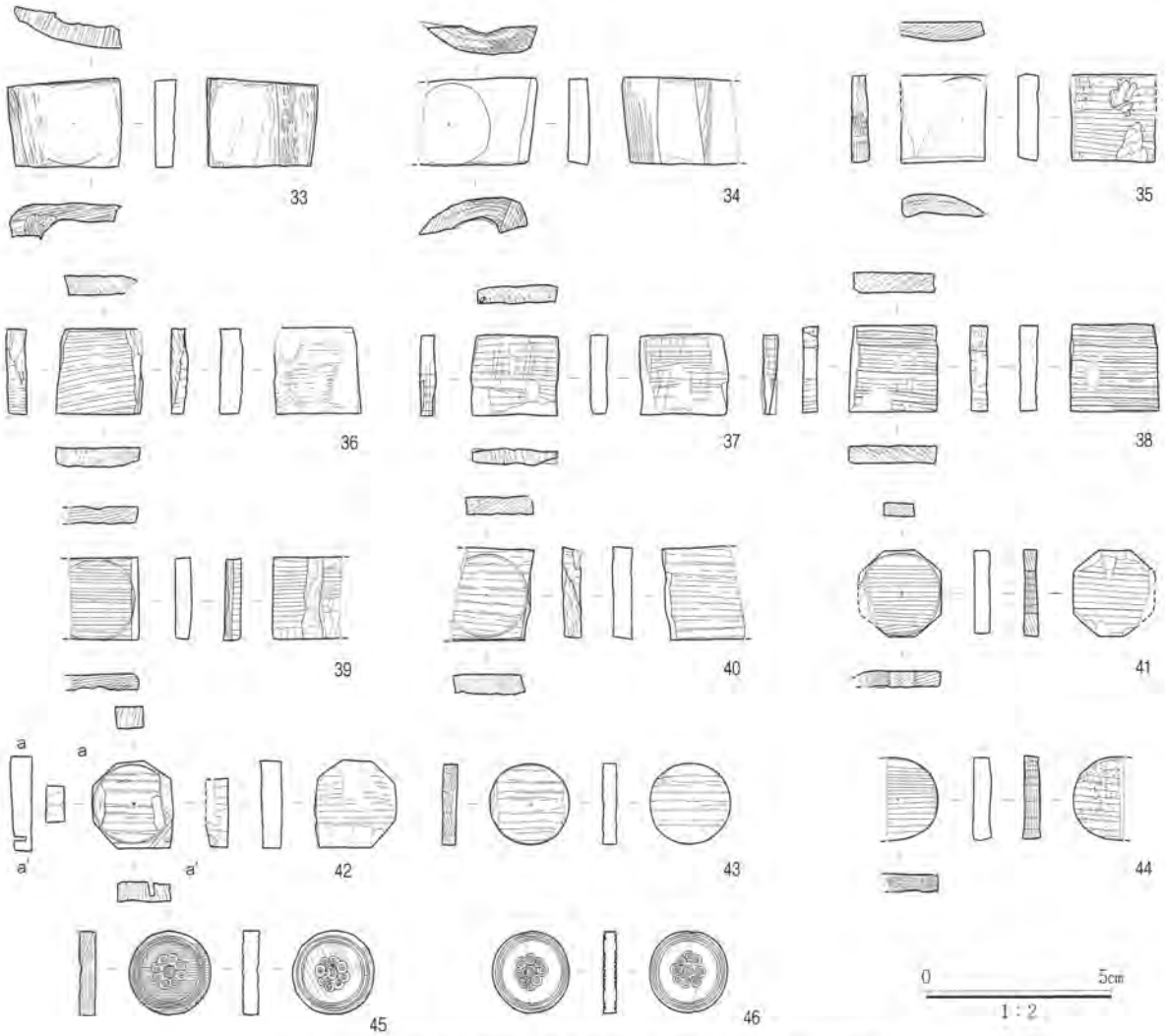


図12　SK06出土の骨細工関連資料(１)雙六駒の粗材と未製品

が白色化しているが、45・46とも彩色した痕跡はない。

SK06の骨屑を一括で廃棄したとみられる部分からは、駒を製作するための素材と製作途中の各段階で瑕疵のため廃棄されたものが数多く見つかった。以下に工程の順を追って記述する。

33・34はそれぞれが駒1枚の粗材である。表裏とも骨本来の面が残っているが、上下は鋸によって骨幹長に対し垂直方向に分割された面で、左右は割り裂かれた面となっている。表面にはコンパス痕があるが、浅く全周しないうえ針位置は粗材の中心からずれている。鋸で分割する前に、粗材の上下長が円の直径に等しくなるように骨幹部に割付けしたものであろう(後述の53・54などを参照)。そのほかの加工痕がないため、33・34は駒を作るために分割された素材のままの状態であると考えられる。35・36は骨の内面側を削って平坦にし、かつ、側縁も削ることで方形板に近づける意図が認められる。35では表面に33・34と同じ粗材以前の割付けによるコンパス痕が見られる。裏面は粗材の上下方向に対して垂直となる平行な細かい段状の傷がつき、一部はそこから微細なフィッシャーが発生していることから、上下面に直交する一方向に刃を動かして削ることで、粗材の裏面にある骨内面の凹凸を除去する作業によるものであろう。両側縁についても同じ加工を施し面を作っている。36も同様の裏面および両側縁の処理を行っている。37・38は表面側も同じ方向に削って平坦にし、方形板にする加工を完了させている。39・40は方形板に再びコンパスで駒の外形を割付けしたものである。先のコンパス痕に比して深く、方形板に収まるよう全周が明瞭につけられている。41・42は方形板の四隅を鋸で切り、八角形にすることで円形に近づけるものである。42は右下角を最後に切り落とす途中で表面側の剥落が起こって廃棄されたものである。41では図の下端面に、板の厚さに直交する極細い直線傷がある。少量だが、図化しなかった粗材にも同様の傷のある資料があり、何らかの作業を示すものと考えられる。43・44は側面を砥石ないしヤスリなどで研磨し、おおむね平面を円形に調整した段階である。さらに表面・側面をより細かく丁寧に磨き、施文すれば45・46に仕上げられる。

骨幹の分割から粗材の縦割り(図13・14、写真2・3)

上記のように、現在確認できた製品は雙六駒のみであり、その粗材を得る工程を示す資料を報告する。材料に用いられた大量の長管骨の多くはウシの脛骨および中手骨、中足骨と思われるが、同様に加工されたウマの中手骨遠位端57(写真2)が1点含まれるため、ウマを原材とするものがどの程度含まれるかは詳細な同定作業が必要である。

図13・14の加工骨には全てコンパス痕があるため、先述した雙六駒の製作工程で粗材を得る作業に係るものと判断した。

図13は全てウシの脛骨骨幹部で、48・51が左足、ほかは右足である。51・52は骨幹中央付近で、ほかは近位端に近いが、骨端部は鋸で除去されている。骨端部の除去は骨髄の取出しのためと思われ、47・48・50のように、断面が三角形に近い脛骨の体後側にある一方の頂角から、対向する一辺へ概ね垂直方向に切断している例もあるが、多くは多方向から鋸刃を入れた痕が観察される。

47は骨幹の近位端側半部である。遠位端側の小口面は体前側から鋸で切

1:2
写真2　ウマ骨

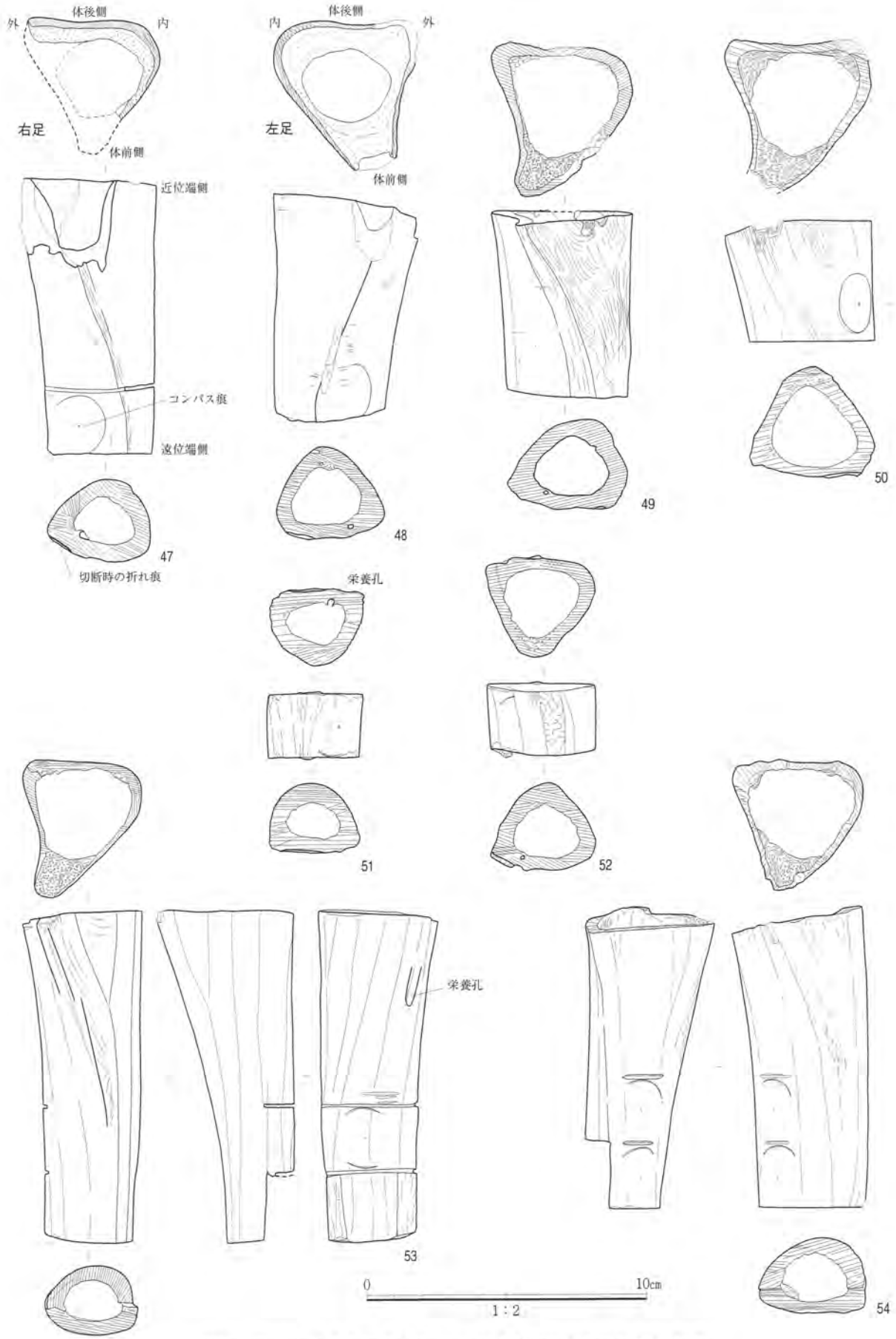


図13　SK06出土の骨細工関連資料（2）各種の分割された骨幹（脛骨）

断されたもので、途中、刃先の角度を若干変えながらも体後外側に切断時の折れ痕が残る。小口面に接して体前外側には浅いコンパス痕があり、その近位端側には体前側から体後側へ鋸による切込みが入っているが、切断されてはいない。48～50は47とよく似た加工状況で、いずれも骨幹の近位端側の部材であり、体前側から鋸を入れてコンパス痕の幅に合わせて骨幹を輪切りにしていった結果、最終的に残ったものと考えられる。小口面に接して残ったコンパス痕を切断しなかったのは、近位端に近くなるため骨内面の海綿骨が取り込まれることを嫌ったため、骨が薄くなり粗材に不適当であるため、体後側を利用する場合は栄養孔が粗材に取り込まれることを嫌ったためなど、いくつかの理由が考えられる。

51・52は元の骨幹から輪切りにされたもので、体前側の一方の面に短い弧で浅く割付けしたコンパス痕が確認される。51・52の骨幹長は、当然のことながら割付けたコンパス痕の直径21～22㎜に概ね一致する。鋸による上下の切断面は、どちらも体前側から刃を入れており、48～50の作業状況とよく一致している。このような輪切りにした骨幹部から粗材を縦割りしたと考えられるものが58(写真3)である。58は右足脛骨の体前外側に短弧のコンパス痕が認められ(写真最下段)、その直径が粗材の高さとして切断されている。ただし、小口に見られる鋸の切断痕は体外側から内側へ向かっており、51・52とは異なっている。粗材として縦割りされたのは体前内側で、近位端側の小口に鉈または鑿などの鋭い刃先を当て、敲打することで一気に割り裂いたものとみられる。47の場合は、あと1箇分の輪切りをする途中で廃棄されたものと考えられる。

一方、53・54は粗材の単位で輪切りをせず、骨幹から粗材を縦割りする側面を決め、コンパス痕による割付けを施した後、粗材の厚みを越える深さまで鋸の刃を入れ、小口面から連続して粗材を剥離したものである。

53は骨幹の近位端側半部である。遠位端側の小口面は体内側から外側へ鋸で切断した痕がある。体後側にコンパス痕が1箇あり、その上下に合わせて鋸で深さ0.7ないし1.1cmの切込みを入れた後に遠位端側の小口面から鉈または鑿の刃先で縦割りしている。縦割りされたものが粗材となる。その後に廃棄されているが、本来はもう1枚粗材を縦割りする予定であったのだろう。骨幹を切断した時点の切断方向と粗材を縦割りするために入れた切込みの方向が異なるため、これらは異なる工程の作業であったと考えられる。54も53とよく似た加工状況であるが、コンパス痕による割付けは体前外側に2箇所連続している。割付けの際に鋸のアサリ幅を加味していた状況が明瞭である。やはり輪切りをせずに小口から粗材を2枚連続で縦割りすることを意図したと考えられるが、1枚した段階で廃棄されたものとみられる。

59は骨幹の遠位端側である(写真3)。遠位端側の小口面は写真左側から鋸で切断されており、骨端の切断による面であろう。反対側の小口面は粗材と同

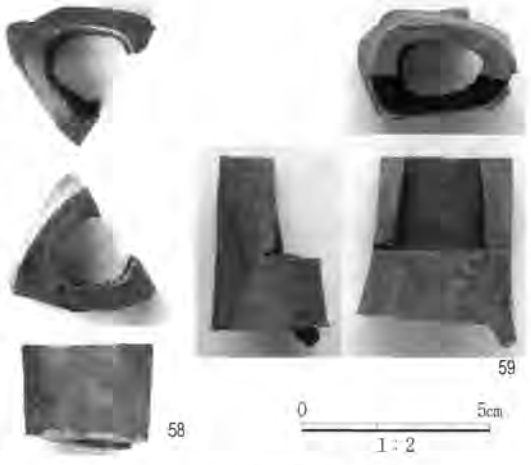


写真3　輪切りにされた骨幹部

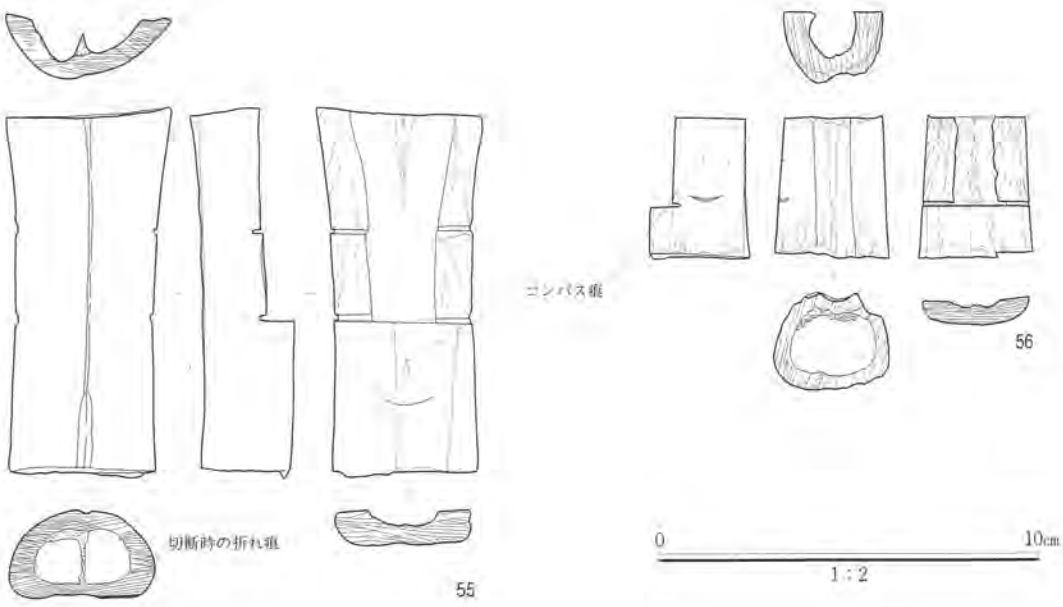


図14　SK06出土の骨細工関連資料(3)各種の分割された骨幹(中手・中足骨)

方向から切断されている。骨幹を輪切りにして分割しながら、最後の骨幹は粗材の上下長に合わせて切込みを入れた後、小口面から縦割りしたものであろう。

図14は脛骨以外の長管骨を素材としたもので、56はウシの中足骨、55は同じく中手骨である。55は骨幹の体前側から鋸で分割した後、骨幹の体後側の平坦面で2枚の粗材を連続して縦割りしたものである。粗材の縦割り痕の下側に浅い短弧のコンパス痕があり、当初は3枚目の縦割りを意図していたようであるが、1枚目の長さを取りすぎたためか、3枚目は断念している。56は骨幹中央に近い部位とみられるが、背側縦溝が明瞭で中足骨と判断した。図下側の小口面は体内・外側の両側から鋸刃を入れて中央付近で折れによる段が生じている。一方、上側の小口ではそれと並行する方向であるものの、どの方向から鋸刃を入れたか判然としない。コンパス痕による割付けは図左側にあり、対して粗材は体前側の比較的平坦な面を縦割りして得ている。

3)骨細工の製作技術の検討

前項では、本調査地で出土した骨細工に関連する資料を報告した。その結果、これらの資料は雙六駒とその製作に係る各工程の資料であると考えられた。図化しなかった資料を含め、全体の類型化と数量については別稿を期すが、その多くが長管骨から方形板状の粗材を生産し、雙六駒を製作する一連の過程で生じたものと予想される。そこで、以上の観察結果から、粗材の生産とそれを素材とした雙六駒の製作工程について次のように想定し、今後の予察としたい。

骨幹の分割と粗材の生産

図13に掲載した各資料をもとに、脛骨を素材とした骨幹の分割と粗材の生産を図15のように想定した。出土資料を脛骨の全体形と比較するため[松井章2006]の左足の体前・体後側の図を使用する。

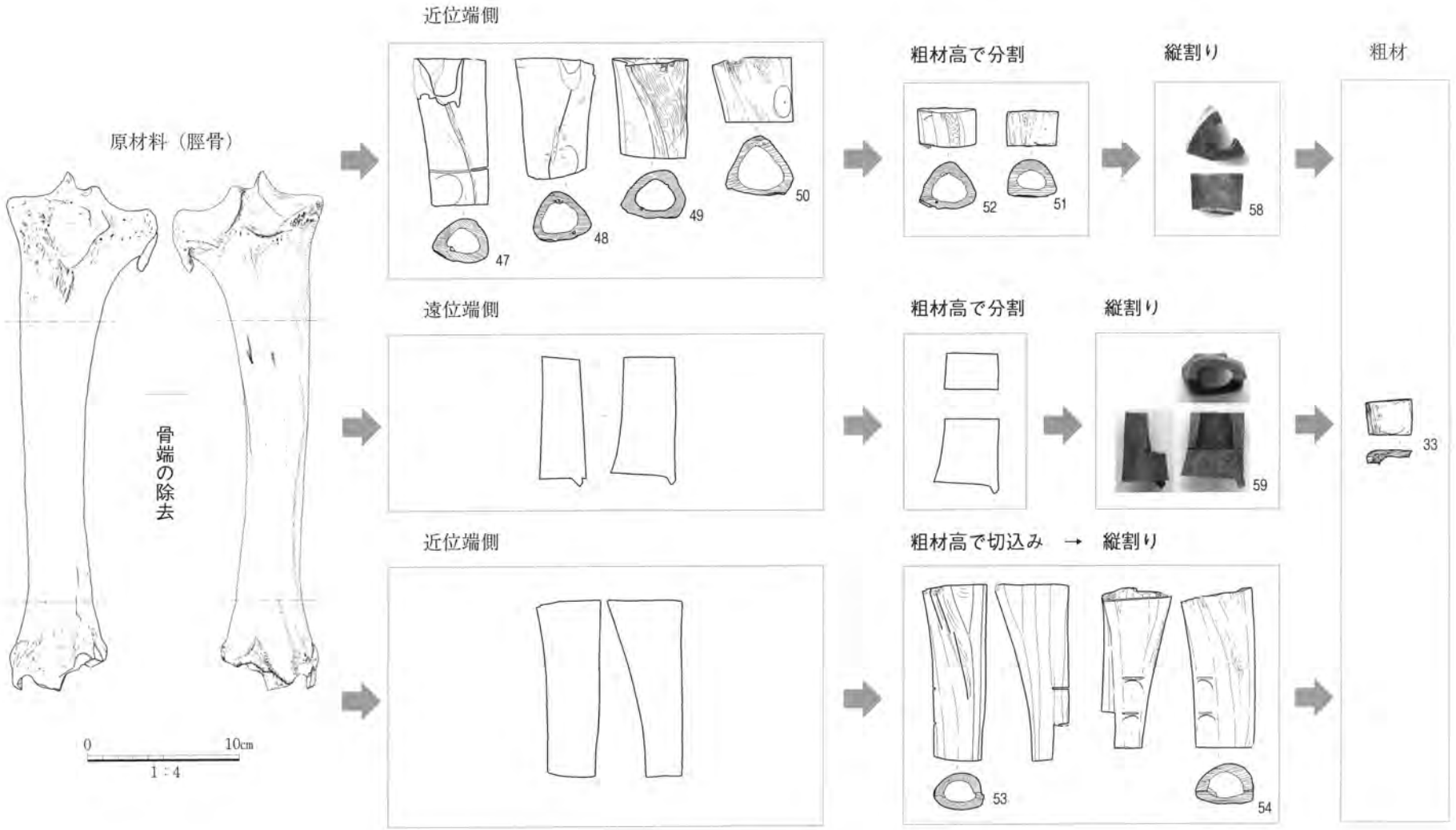


図15　骨幹の分割と粗材の生産（脛骨）

脛骨の骨端を除去した後の骨幹の処理を示すものに、47～50のような近位端側が残存する資料と59のように遠位端側が残存する資料がある。そこで一つの考えとして、1本の骨幹を大きく2分して、その切断側からもとの骨端部方向へ向かって順次分割を進めたと想定することもできよう。近位端側の資料には47のように比較的長く残存したものから50のように短いものがある。脛骨長の個体差や骨端の切断位置のずれを検証しないと一概にいえないが、50に残されたコンパス痕から、すでに2個分の分割が行われたとすると図15に示した元の骨幹部長の約半分に一致し、作業を想定する際の参考となる。また、このようにあらかじめ骨幹を2分割してから粗材用に再分割すると、作業上はしやすいかもしれないが、その分中途半端な長さが残り、粗材を効率的に生産することと矛盾が生じることも検討する必要があろう。以上の作業の結果分割されたものが51・52で、小口面から縦割りすることで粗材を得ることができる。59は骨幹の端部であり、半端な長さが残るため分割せず、切り込みを入れただけで縦割りしたものと考えられる。

一方、53・54は元の骨幹を多少の長短を生じながら大きく分割し、その後は輪切りをせずに粗材の長さにあわせて切込みを入れ、順次縦割りしていったものである。上記とは異なる技法と考えられ、職人の違いなどの理由が考えられるが、明らかでない。

雙六駒の製作

図12に掲載した各資料をもとに、雙六駒の製作工程を6段階に想定した(図16)。

①段階(粗材の裏面と側縁の整形)図12－35・36

骨内面の凹凸や海綿骨を除去するため、鉋などで平坦に削る作業。刃先によって生じた微細な段差は概ね粗材の上下に対して直交し、ぶれがほとんどないため、粗材を台上に固定して鉋で削るような作業が想定される。近世骨細工においてこのような作業の研究を行ったものに[久保和士1998]がある。これと一連で側縁も同方向に削っているが、こちらは安定した平坦面にならない例が見られ、粗材を手持ちで削っているのであろうか。

②段階(表面の整形)図12－37・38

①段階と同じ方向で粗材の表面を平坦に整形する作業。この時点で粗材はほぼ正方形の板に仕上げられる。

③段階(駒の外形設定)図12－39・40

駒の外形をコンパスで割付ける作業。分割材の割付けに使用されたものと同じコンパスによるものとみられるが、全周を明瞭に刻んでいる。

④段階(隅切り整形)図12－41・42

四隅を鋸で切落し、八角形に整形する作業。その結果、8側面には(A)骨幹を分割した時点の鋸による分割面、(B)①段階で鉋などで削られた整形面、(C)本段階で隅切りされた面の3時期が存在する。

⑤段階(円形に調整)図12－43・44

砥石ないし細かいヤスリなどで、側面を磨き、全体を円形に仕上げる作業。

⑥段階(施文)図12－45・46

施文する段階での磨きは非常に丁寧に仕上げられている。中央に九曜文、周囲に二重圏線を施文する。九曜文のうち外周８個は三叉の鼠歯錐で施文されたように見えるが、中央は陰刻された中心星の外に２重の沈線が刻まれ、別の工具が使用されているとみられる。二重圏線はコンパスを使用しているとみられる。

これらが盤雙六に用いられたものであれば、黒白に分かれて使用されるため、何らかの彩色が行われた可能性があるが、失敗品として廃棄されたためか、確認できない。

このように施文された雙六駒の類例として、OJ92－24次調査地の第4b層出土例(337)や出土層準不明例(338)などがある。第4b層は17世紀後半～末の遺物が出土しており、本調査地例からやや後出するものの、近い時期である。337・338は直径が2.5cmとやや大型であるが、大きな差異は角材を使い中央の穴を別の材で埋めている点である。ほか、同調査地では文様のない円盤状の角製品(298・344)が出土し、雙六駒の未製品かと思われる。

以上、特に脛骨近位端側の骨幹を素材とした粗材の生産方法と、粗材から雙六駒へ製品化する工程について検討を加えた。粗材の生産方法にはそのほか脛骨遠位体側および中手骨・中足骨など他の長管骨についての検討がさらに必要である。

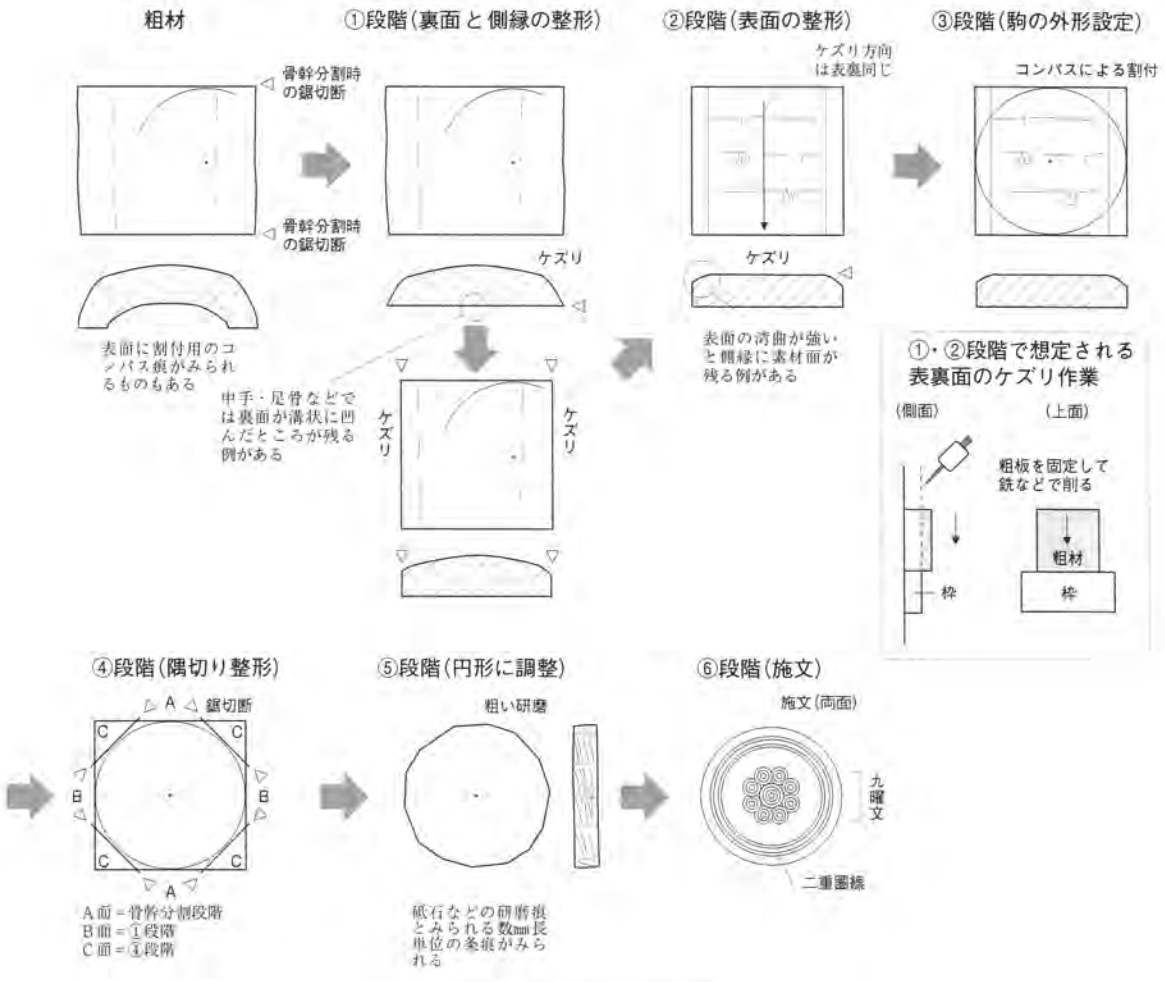


図16　雙六駒の製作工程

4)まとめ

本調査地での成果は次のとおりである。

①古代以前の当地は河成堆積物とみられる砂層で埋没しているが、古代以降には湿地性堆積物へ変化し、若干の遺物も出土するようになる。

②中世には土壙が掘削されるなど、人間活動がより活発になる。当該期に形成された地層は作土の可能性があるが断定できなかった。

③豊臣期に形成された地層を確認することはできなかったが、徳川初～前期の遺構に豊臣後期の遺物が含まれ、付近に開発が進んだ可能性はある。ただし冬ノ陣の焼土層は形成されず、調査地が屋敷地などに利用されたことを裏付ける資料はない。

④徳川初～前期には大型の廃棄土壙が形成され、周辺で得られた成果と一致する。東西に分かれて遺構が掘削される傾向があるが、17世紀後葉以降の南北に延びる板組溝が、その境界付近に位置することから敷地境に当っていた可能性がある。

⑤徳川期の廃棄土壙には木材の鉋屑などが充満したもの(SK05)、骨細工の未製品や削・切屑が一括で投棄されたもの(SK06)など手工業に係るものがあり、付近に関連する職人が存在していたことが想定される。

⑥特に骨細工では、雙六駒の素材骨から製品に至るまで、各工程を復元できる良好な資料を得た。近世骨細工の原料流通や生産技術の研究に貴重な資料である。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1999、「第X章第3節　OJ97－1次調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1997年度－』、pp.92－98

大阪市文化財協会2004、『大坂城下町跡発掘調査報告』II

大阪市文化財協会2005、「積水ハウス株式会社による建設工事に伴う大坂城下町(OJ04－1)報告書」

久保和士1998、「住友銅吹所跡出土の動物遺体」:『住友銅吹所跡発掘調査報告』、pp.352－353

趙　哲済2005、「船場・道修町、その土地の成り立ちに迫る」:『道修町文化講演会』道修町資料保存会編、

松井　章2006、「牛馬骨格図譜」:『動物考古学の手引き』pp.50－64

森　毅　2004、「城下町大坂における唐津焼の様相」:『古唐津』出光美術館、pp. 187－195

調査区西壁深掘部地層断面
（東から）

調査区西壁地層断面
（東から）

第７層上面の踏み込み痕
（南から）

第６層上面遺構完掘状況
（東から）

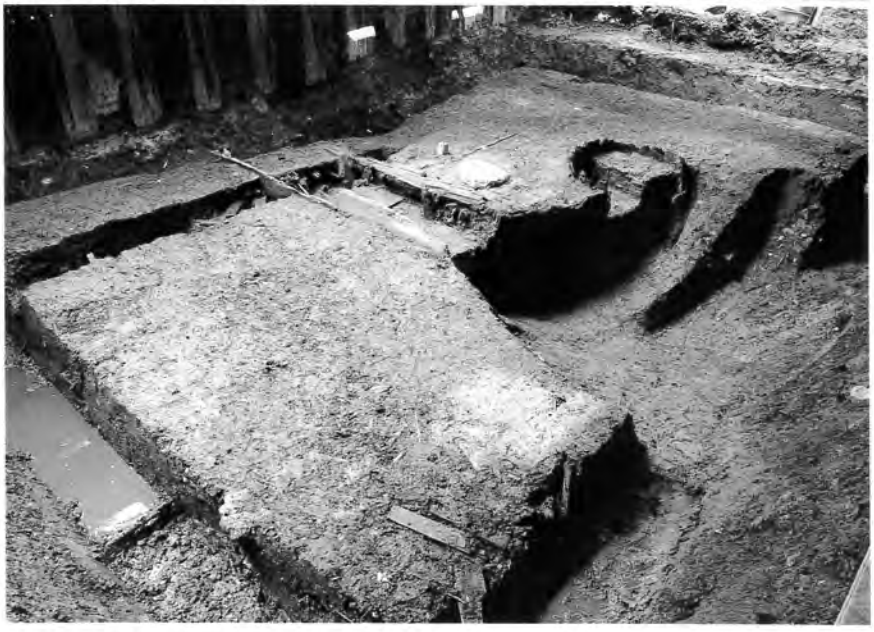
SK06内の骨細工の作業屑
出土状況（東から）

SK02埋土堆積状況
（西から）

SK05掘削状況
（西から）

SD01検出状況
（南西から）

第２層上面検出状況
（南西から）



中央区玉造一丁目24－19における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS11－１)報告書

調 査 個 所　大阪市中央区玉造１丁目24－19
調 査 面 積　64㎡
調 査 期 間　平成23年４月19日～４月27日
調 査 主 体　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、趙 哲済、小田木富慈美

1）調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地の東斜面、玉造稲荷神社の南東に位置し、豊臣期には大坂城惣構内の東南部に当っていた。また、古代難波京域の東縁の南北線上に載っている[積山洋編2010]。

周辺地域では多数の調査が行われており、豊臣期や徳川期の遺構・遺物が見つかっているほか、森の宮遺跡に関係すると思われる弥生時代の遺構・遺物も見つかっている[大阪市文化財協会2002]。

平成23年1月27日に当該地で大阪市教育委員会による試掘調査が実施され、地表下2.5m以深で豊臣期～徳川期と考えられる遺構面が検出された。そこで、遺構の遺存状況や地層の堆積状況を検討し、当該地域の変遷を復元する基礎資料を得ることを目的として、本調査を実施することになった。

調査地は事業者によって上端10m四方を深さ約2m(試掘時の2.5m)まで重機掘削された後、4月19日から下端8m四方の中に6m四方の調査区を設定して、人力による掘下げ作業に入った。遺構検出、検出状況の写真撮影、遺構の掘下げ、掘下げ後の遺構写真撮影、調査区の平面図・断面図の作成、深所の確認掘りなどを順次行い、4月27日にはGPS測位を行って発掘調査を終了した。

本書で用いた方位は座標北を基準としている。また、水準値は東京湾平均海面値(T.P.値)であり、TP+○mと略記する。

2）調査の結果

i）層序

調査地の標高はTP+6.2m前後であり、現代盛土層の下位を9層に区分した。

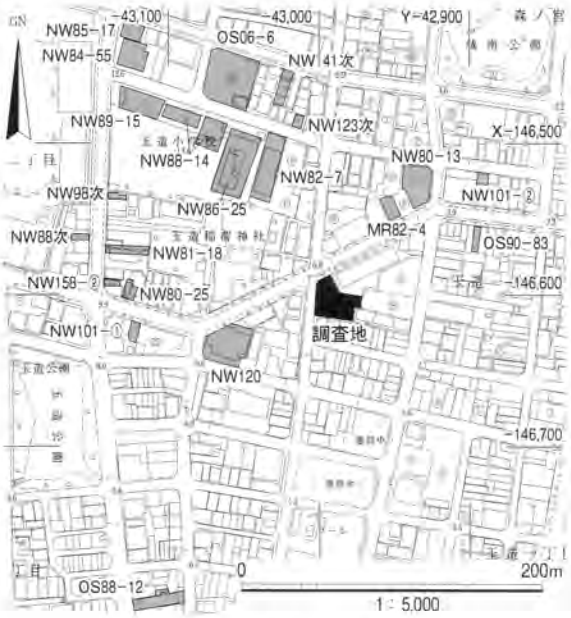


図1　調査地位置図

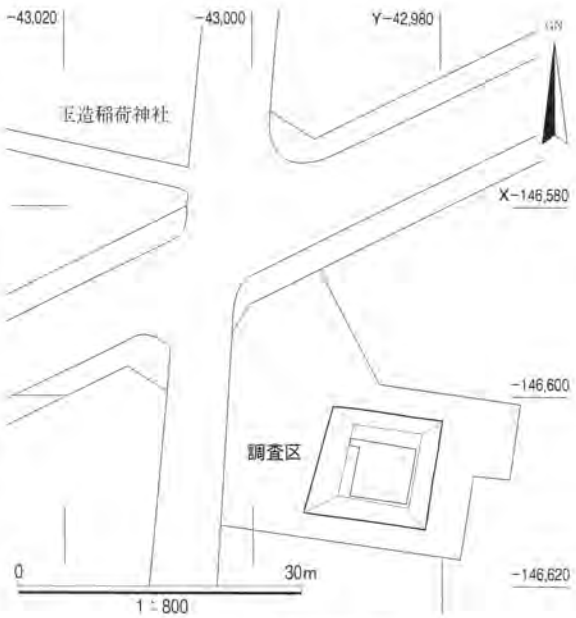


図2　調査区位置図

第１層は炭・焼土を含む灰黄褐～黒褐色砂質シルトからなる整地層および攪乱堆積物である。層厚は厚いところで10cm程度である。太平洋戦争後間もないころの造成である。

第２層は1945年６月15日の第４回大阪空襲に係る人為層であり、空襲の被災面で２分した。上部の第2a層は炭・焼土からなり、漆喰、瓦などを含む空襲直後の復旧による整地層である。層厚は10cm内外である。

下部の第2b層は黄灰～暗黄灰色中礫混りシルト質砂および砂質泥偽礫からなる盛土層である。層厚は30～50cmで、下位の溝上では厚く100cmある。土砂は北から南へ搬入されているが、版築状の丁寧な積み上げはしていない。第2b層上面が空襲の被災面で、近代の礎石立ち長屋建物とその西側に面する小路の一角を検出した。また、第2b層からは瀬戸美濃焼磁器・肥前磁器・瀬戸美濃焼陶器・肥前陶器・関西系陶器・珉平焼・丹波焼・備前焼・堺擂鉢・瓦質土器・土師器のほか、瓦・土人形・滑石製紡錘車が出土した。最新の遺物の年代は19世紀前～中葉である。15は滑石製紡錘車である。直径3.9cm、孔径0.9cmを測る。古墳時代のもので遊離資料である。

第３層は細礫混り細粒砂質シルトからなる畠作土層で、上部と下部に２分できる。上部の第3a層は畠の機能時耕耘層で、層厚は20～30cmであった。上面では畝と畝間、およびこれらを壊して掘られた溝を検出した。下部の第3b層は畠の初期加工時の耕起層で、層厚は５～15cmであった。下面で耕作初期のものとみられる畝間を検出した。第３層からは中国製青花・肥前磁器・関西系陶器・備前焼・軟質施釉陶器のほか、土師器・須恵器・瓦・泥面子・石製品・金属製品が出土した。これらの遺物の年代は18世紀末～19世紀初頭を中心とする。

第４層は暗灰黄色砂質泥の偽礫による整地層であり、炭を含んでいた。厚さ数cmごとに層状の搬入土が積まれ、全層厚は25cm前後であった。上面で井戸や土壙、小規模の地すべり跡を検出した。第４層からは中国製白磁・瀬戸美濃焼・肥前陶器・土師器・瓦・鉱滓が出土した。４は中国製白磁皿の底部で、高台内にはカンナ削り痕が認められる。高台には砂が付着する。５は瀬戸美濃焼天目碗の底部である。６は肥前陶器皿で、体部が屈曲し口縁端部を内側へつまむ。内面には胎土目跡が残る。以上の遺物の年代は16世紀末～17世紀前葉で、肥前陶器６が最も新しく位置付けられよう。

第５層～第９層は下層確認壙で観察した完新統である。第７層以下に考古遺物は未確認である。

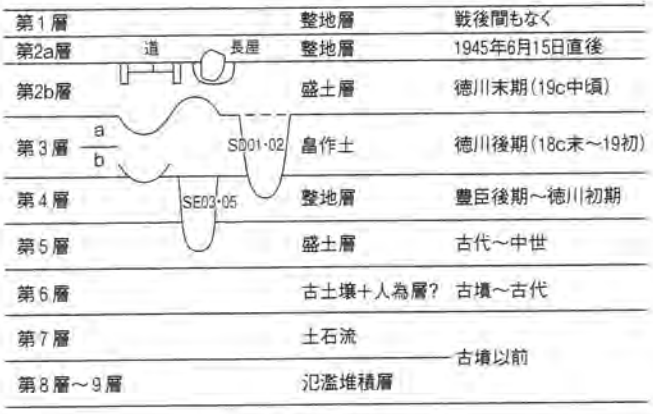


図３　地層と遺構の関係図

第５層は黄褐色・浅黄色・灰黄褐色・褐色・オリーブ褐色などを呈する粗粒砂・シルト質砂・砂質シルト・およびこれらの偽礫からなる盛土層であり、層厚は70～80cmであった。上半部には粗粒砂薄層が撓む幅10cm、深さ２～３cmの小規模の荷重痕が認められた。土師器・須恵器・円筒埴輪などが出土した。７は須恵器☒の口縁部と思われる。長い頸部を持ち、口縁部が大きく開く形態のものであろう。

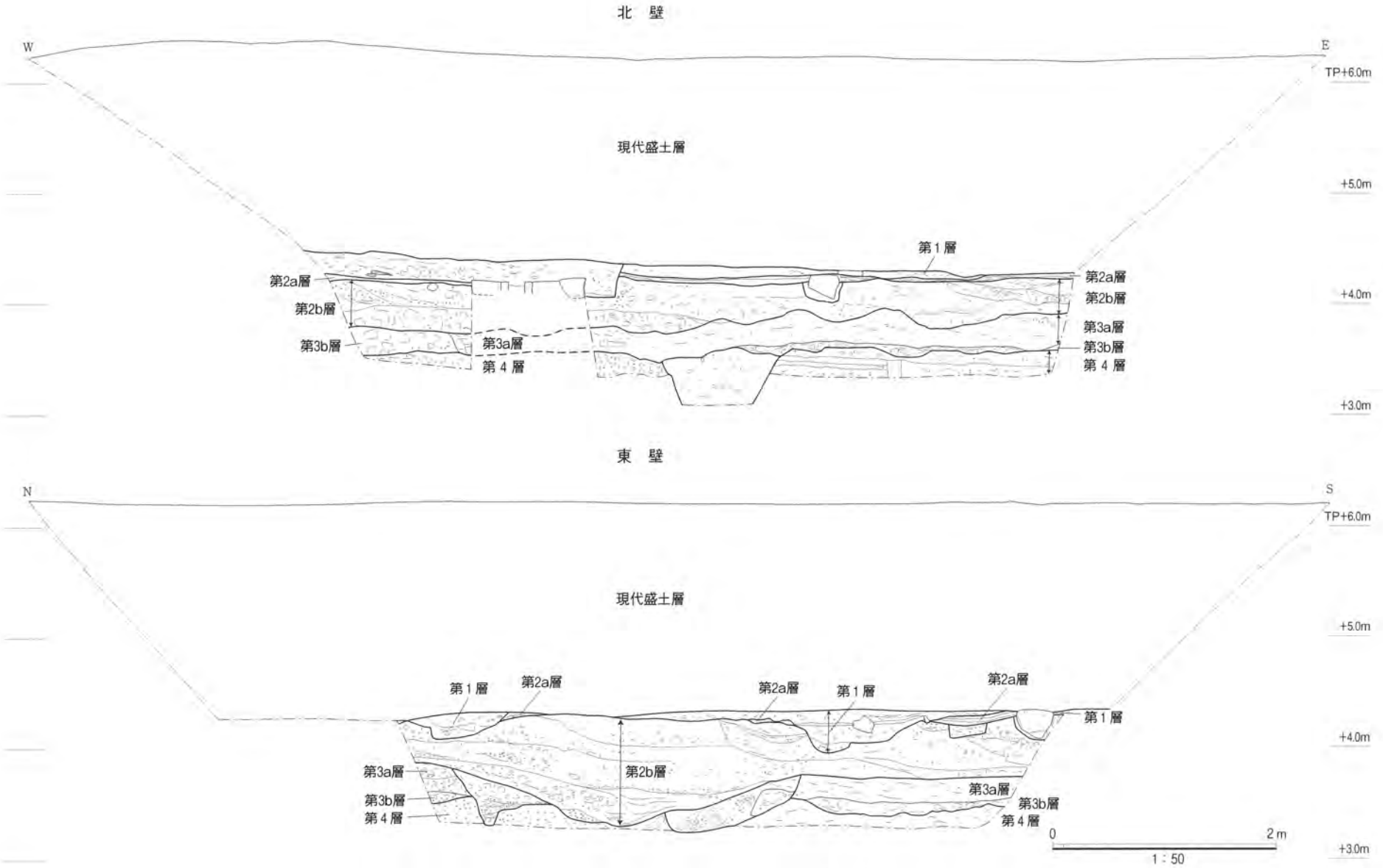


図4　北壁・東壁地層断面図

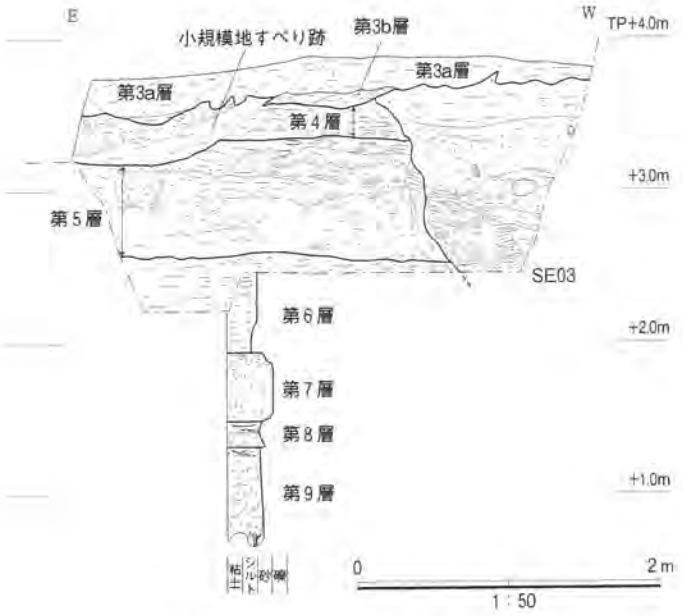


図5　深掘りトレンチ南壁地層断面図

8は須恵器甕の口縁部である。以上は古墳時代後期、飛鳥～奈良時代のものであろう。

第6層は締りが良く、分級が悪い暗灰色細礫混り粗粒～細粒砂質シルト層であり、炭や風化礫を含んでいた。全般に堆積構造が認められない塊状であったが、下部20cm程度は上部に比べて幾分暗く細かい黒褐色砂質シルト層であった。層厚は50～60cmであった。上面は緩くうねっている。岩相からみて、古土壌やその再堆積層であり、およびそれらに人為が加わった可能性がある。本層からは古墳時代から古代にかけての土師器・須恵器のほか、後期難波宮期とみられる平瓦、古墳時代後期の円筒埴輪・形象埴輪が出土した。9・10はそれぞれ土師器杯の口縁部と底部である。いずれも磨滅のため暗文の有無は不明である。11は須恵器杯蓋で、宝珠形のつまみを有するものであろう。12・13は高台を有する須恵器杯である。12の高台は断面が長方形に近いが、13のそれは外方へ屈曲する。以上の土器は7世紀末～8世紀前葉のものであろう。14は古墳時代の形象埴輪で、人物形埴輪の腕ないしは動物形埴輪の一部と考えられる。外面はハケ調整を施す。

第7層は基質支持の分級の悪い砂礫層で、層厚は45cmである。礫は大～中礫の亜円礫が主体であり、基質は少量のシルトが混じる細礫質粗粒～中粒砂である。岩相から土石流や斜面崩壊物と考えられる。

第8層は暗灰色シルト質粗粒砂層で、層厚は17cmであった。氾濫堆積層である。

第9層は暗緑灰色を呈し、下部が粗粒～中粒中礫質シルト質細粒砂で、上方細粒化してシルト質極細粒砂になり、上部で植物片のラミナを挟む氾濫原堆積層である。層厚は60cm以上あり、下限は確認していない。

ii）遺構と遺物

a．徳川初期頃の遺構

井戸SE03・05、土壙などの遺構や小規模地すべり跡は、第4層上面で検出した。

SE03はSE05の埋立て後に掘られている。SE03は直径2.5m前後の素掘り井戸であり、深さは1.5m以上で底は確かめられていない。下半は暗灰色砂質シルトの偽礫で埋まり、上半は砂質シルトで埋まっている。肥前磁器・肥前陶器・丹波焼・備前焼・須恵器・土師器・弥生土器のほか、瓦・一石五輪塔の頂部が出土した。1は肥前陶器皿で、高台は糸切りしている。内面には砂目跡が見られる。2は丹波焼擂鉢で、4条を1単位とする摺目が認められる。以上は17世紀中葉のものであろう。3は鳥衾瓦である。瓦当文様は珠文と三巴文とみられる。

SE05は直径1.0mで、深さは1.5m以上で底は確かめられていない。泥偽礫を含む砂質シルトで埋まっ

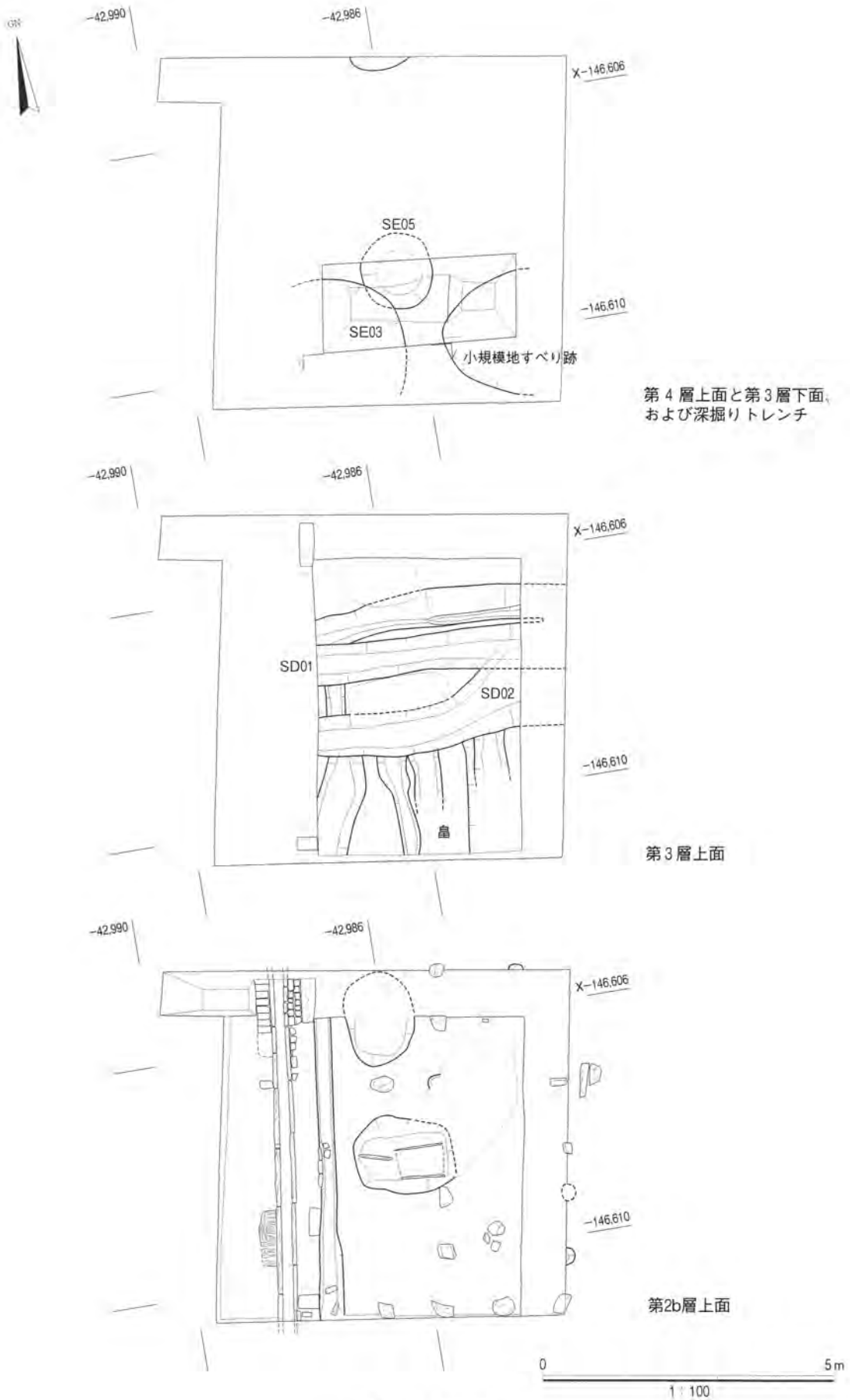

GN
-42,990
-42,986
X-146,606
SE05
SE03
小規模地すべり跡
-146,610
第4層上面と第3層下面、
および深掘りトレンチ
-42,990
-42,986
X-146,606
SD01
SD02
畠
-146,610
第3層上面
-42,990
-42,986
X-146,606
-146,610
第2b層上面
0
5m
1：100

図6　遺構平面図

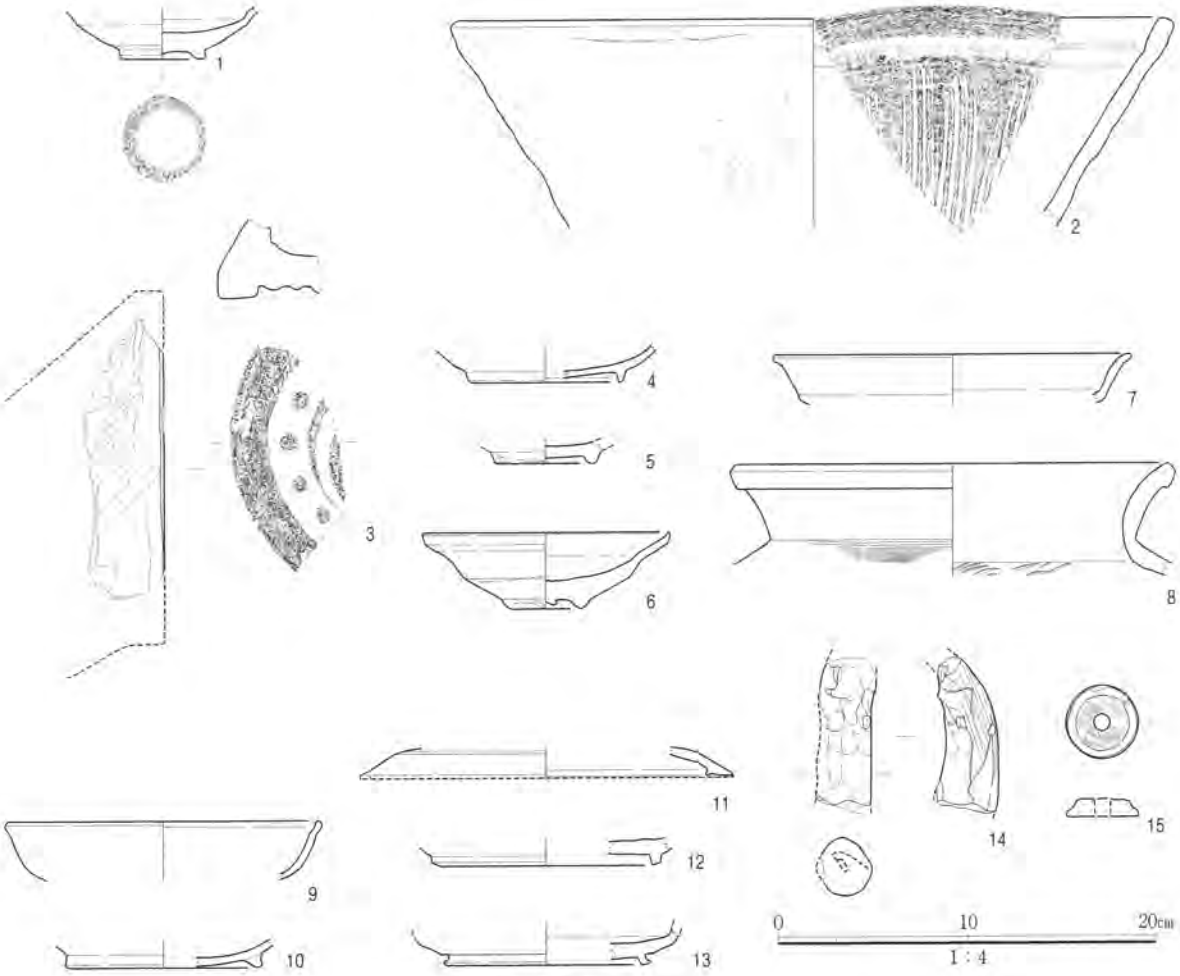


図7　出土遺物実測図
SE03(1～3)、第2層(15)、第4層(4～6)、第5層(7・8)、第6層(9～14)

ている。土師器片が見つかっている。

小規模地すべり跡は東に開いた馬蹄形の凹地であり、滑り面は第4層の底で顕著である。第3層堆積後にも動いた可能性があり、滑り面と凹地は第3層の中と上面でも捉えることができる。

b．徳川中期頃の遺構

畠とこれを掘り込む溝SD01・02を第3層上面で検出した。

畠の保存状況はよくないが、南北方向の5条の畝と畝間からなる。畝の間隔は0.7～1.2m、畝幅は0.1～0.4m、畝間の深さは0.1～0.2mで、規格が整った畠とは言えない。また、第3b層で埋まる畠の耕作時初期の畝間のひとつは、幅0.9m、深さ0.1m程度であった。土師器片が見つかっている。

SD01・02は西から東に流れた溝であり、SD01がSD02より新しい。SD01は西端で幅が0.7m、東端では1.1m以上になり、北に拡がる傾向がある。深さは最大0.7mほどある。中国製磁器・瀬戸美濃焼磁器・瀬戸美濃焼陶器・関西系陶器・丹波焼・堺擂鉢・軟質施釉陶器・土師器・瓦・火打石など19世紀第2四半期～中葉の遺物が出土した。

SD02は01の北側にあり、幅1.2m、深さ0.4mである。溝底に2条の細溝がある。埋土はシルト混り泥偽礫質砂であり、中位に泥層を挟んでいる。肥前磁器・肥前陶器・関西系陶器・丹波焼・軟質施釉陶器・

土師器・瓦など、18世紀末～19世紀初頭の遺物が出土した

c．近代の遺構

第2b層上面で、近代の礎石立ち長屋建物とその西側に面する小路の一角を検出した。長屋建物は西に玄関があり、東西４間、南北４間の家屋が南北に２軒連なっている。西には内幅0.2mの切石組の雨落ち水路を挟んで、幅1.3m以上の小路がある。これらの生活面は1945年６月15日の第４回大阪空襲により被災し、焼けている。

3）まとめ

この調査では、徳川期の遺構面を２面、近代の遺構面を１面検出したとともに、難波宮造営期を含む古墳時代～古代に形成された古土壌とみられる遺物包含層を確認した。難波京の東縁や大坂城惣構の東南隅付近にある当該地周辺の、今後の調査が期待される。

文献

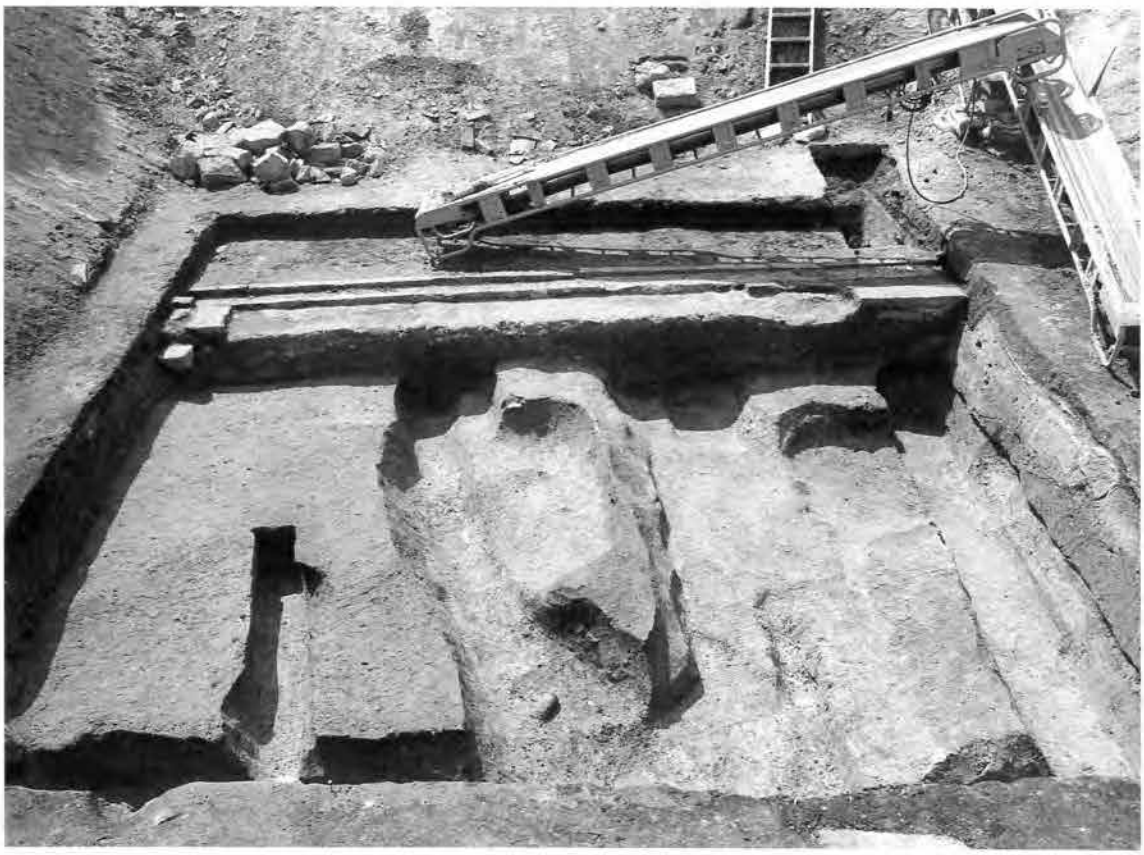
大阪市文化財協会2002、『大坂城跡Ⅵ』、260ps.

積山洋編2010、『東アジアにおける難波宮と古代難波の国際的性格に関する総合研究』、308ps.

調査地近景(西から)

地層断面(西から)

地層断面
(深掘りトレンチ；
南から)



第３層上面の溝と畠（東から）

第２層上面の長屋（右）と小路（左）（南から）

中央区東高麗橋における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS11－２)報告書

調 査 個 所　大阪市中央区東高麗橋30－5
調 査 面 積　39㎡
調 査 期 間　平成23年5月25日～6月1日
調 査 主 体　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、黒田慶一

1)調査に至る経緯と経過

調査地は東横堀川に架かる高麗橋の南東約100mで、豊臣氏大坂城惣構の西北部に当る(図1)。調査地の東隣接地で実施したOS07－8次調査地では、弥生時代中・後期の遺構や平安時代の柱穴、それに鎌倉時代の井戸や落込みが検出され[大阪市文化財協会2007]、北で実施したOS05－5次調査地では江戸時代の17世紀第2四半期の銅の精錬炉が見つかっている[大阪市文化財協会2006]。南に目を転じると、南東30mのOS08－10次調査地では、豊臣前期の塀を伴う堀や溝が重複して検出され、1598(慶長3)年の大坂町中屋敷替えの惣構工事の際に、それらは埋められたり壊されたりしたことが確認されている[大阪市文化財協会2008]。

大阪市教育委員会の試掘調査で地表面下1.3mにおいて、中世から近世にかけての遺物包含層と遺構面を確認したことから、本調査を行うこととなった。工事側が地表面下1.3mまで掘削完了した状態で、調査に着手することとした。2011年5月25日より調査を開始し、南北8.5m×東西4.5mの調査区(図2)を設定して、人力によって遺構検出・掘下げ・写真撮影・図面作成などの作業を行い、6月1日に現場作業を完了し撤収した。

なお、図中の方位は、図1・2が座標北である以外は磁北を基準にし、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、図中ではTP+○mと省略した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

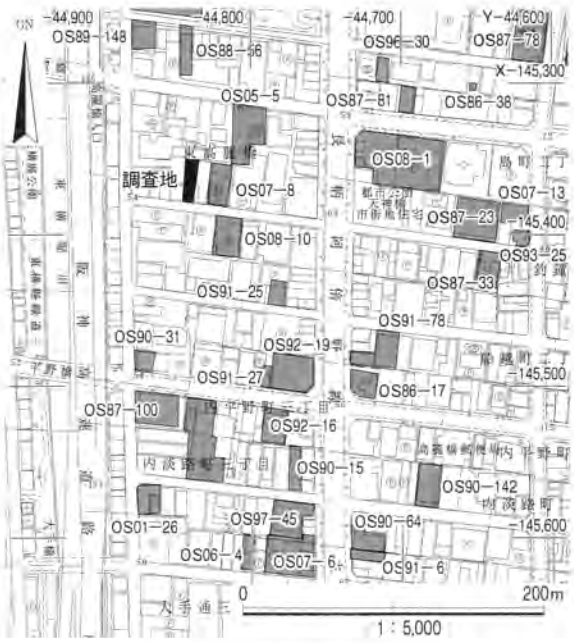


図1　調査地位置図

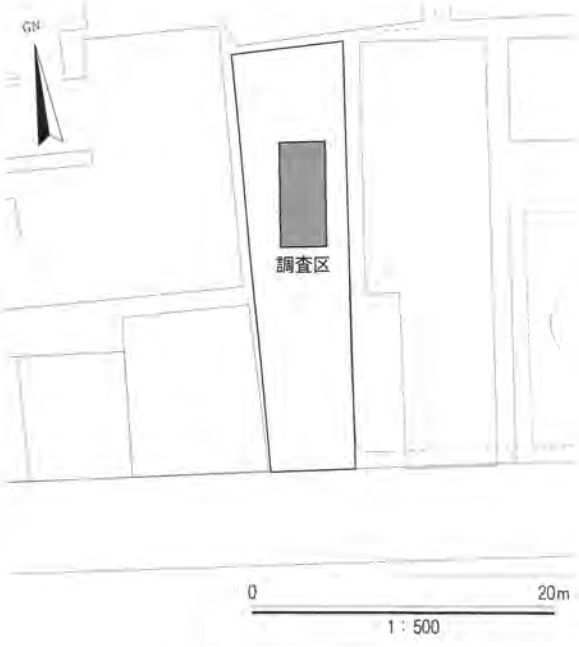


図2　調査区位置図

調査は地表面下1.3mまで、機械的に水平にカットした状態で着手した。第１層上面は厳密な意味での層理面ではない。

第０層：西部で第１層上に遺存していた江戸時代の整地層で、黒色(2.5Y2/1)シルト質粗粒砂層である。

第１層：層厚20～50cmの明黄褐色(2.5Y7/6)中粒砂や黄褐色(2.5Y5/3)シルトなどからなる17世紀第２四半期の整地層である。

第２層：北部にのみ分布する層厚５～15cmの灰オリーブ色(5Y5/3)シルト質粗粒砂層で、西部はSK202の埋土の再堆積である。

第３層：層厚20～40cmの上部がオリーブ黄色(5Y6/3)粗粒砂、下部が暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒砂からなる17世紀第１四半期の整地層で、瀬戸美濃焼陶器大皿35が出土した。

第４層：層厚10～30cmの焼土・炭を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粗粒砂の整地層である。

第５層：西部のみに分布する層厚５cmの暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粗粒砂の整地層である。

第６層：層厚５～20cmの灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粗粒砂の焼土層で、備前焼甕34が出土した。大坂夏ノ陣(1615年)の焼土層である。

第７層：層厚10～25cmのにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粗粒砂の薄い整地層の互層からなる。上面に火災痕跡がある。唐草文軒平瓦33が出土した。

第８層：東北部にのみに分布する層厚５～15cmのにぶい黄色(2.5Y6/4)中粒砂の豊臣期の整地層で、瀬戸美濃焼陶器折縁ソギ皿26、三巴文軒丸瓦28・31、唐草文軒平瓦29・30・32が見つかった。

第９層：東部にのみに分布する層厚15～20cmの黄褐色(2.5Y5/4)シルト質粗粒砂などの薄い整地層の互層からなる。軟質施釉陶器碗27が出土した。

第10層：層厚５～20cmの黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂の豊臣期の整地層で、唐草文軒平瓦25を検出した。

第11層：層厚10～70cmの暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂偽礫を含むにぶい黄色(2.5Y6/4)細礫質粗粒砂層からなる、北から南に投下された豊臣期の人為的盛土層で、第12層上面に築かれたSX501直上の本層から弥生土器23が出土した。

第12層：層厚５cmの有機物を多く含むにぶい黄褐色(10YR5/4)シルトの自然堆積層である。

第13層：層厚10～15cmのオリーブ褐色(2.5Y4/2)シルト質粗粒砂の室町時代の自然堆積層で、瓦質羽釜24が出土した。

第14層：層厚10cmのにぶい黄褐色(10YR5/4)粗粒砂の自然堆積層である。

第15層：層厚20cm以上の黄褐色(2.5Y5/3)シルト質粗粒砂の自然堆積層である。

ⅱ)遺構と遺物

ａ．豊臣期(１)［第12層上面］の遺構と遺物(図４・５・７)

SX501　高さ0.6mの土塁状の高まりで、暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂で築造され、瀬戸美濃焼陶器丸皿１が出土した。豊臣前期の遺構の可能性が高い。また天端直上から第11層に覆われて弥生土器23が出土した。SX501を埋没させるように第11層が北部から投入・整地され、その後第10層の整地土でほぼTP+3.1mの高さで平坦化されている。

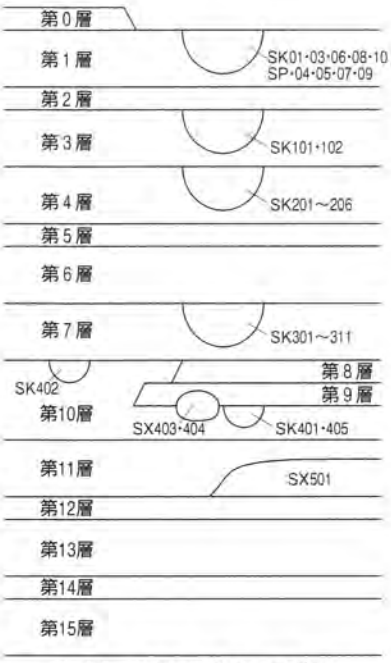
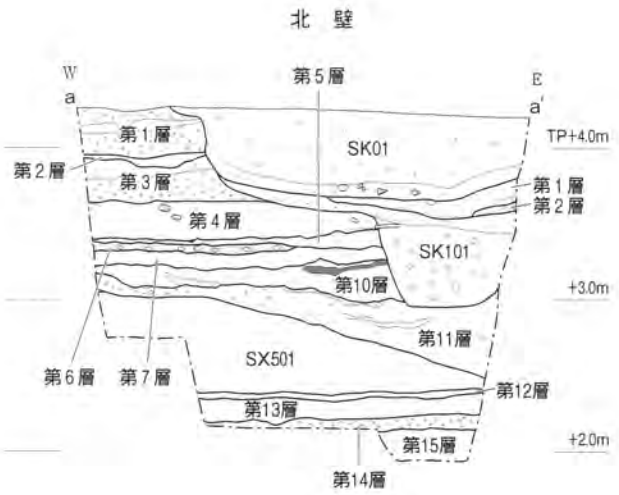
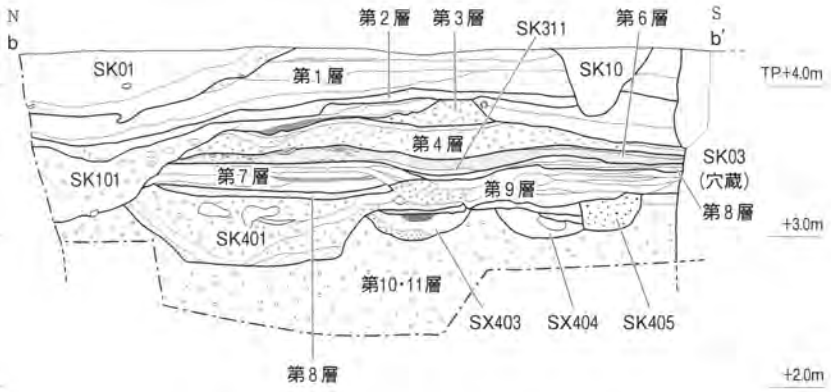


図3　地層と遺構の関係図





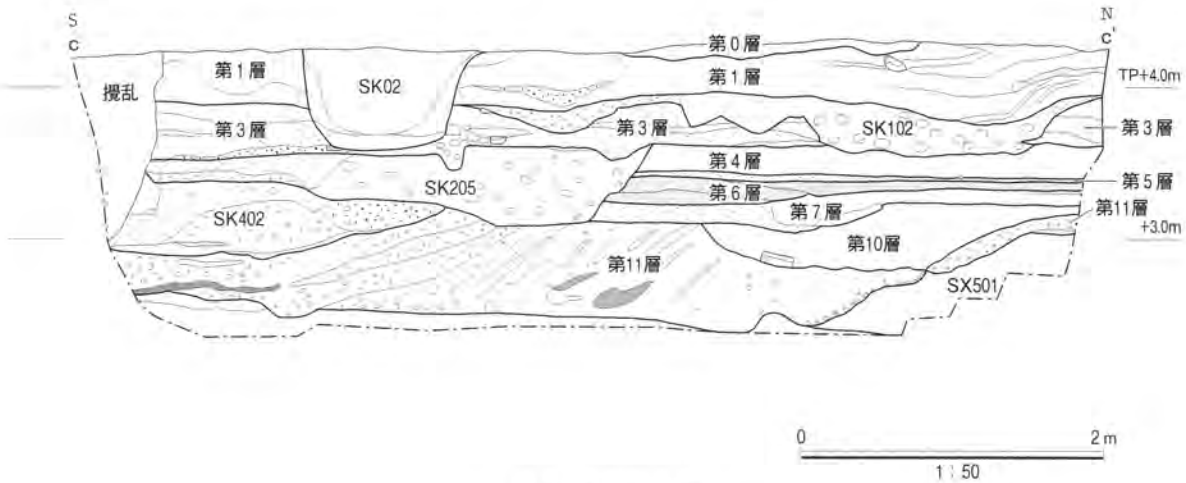


図4　地層断面図

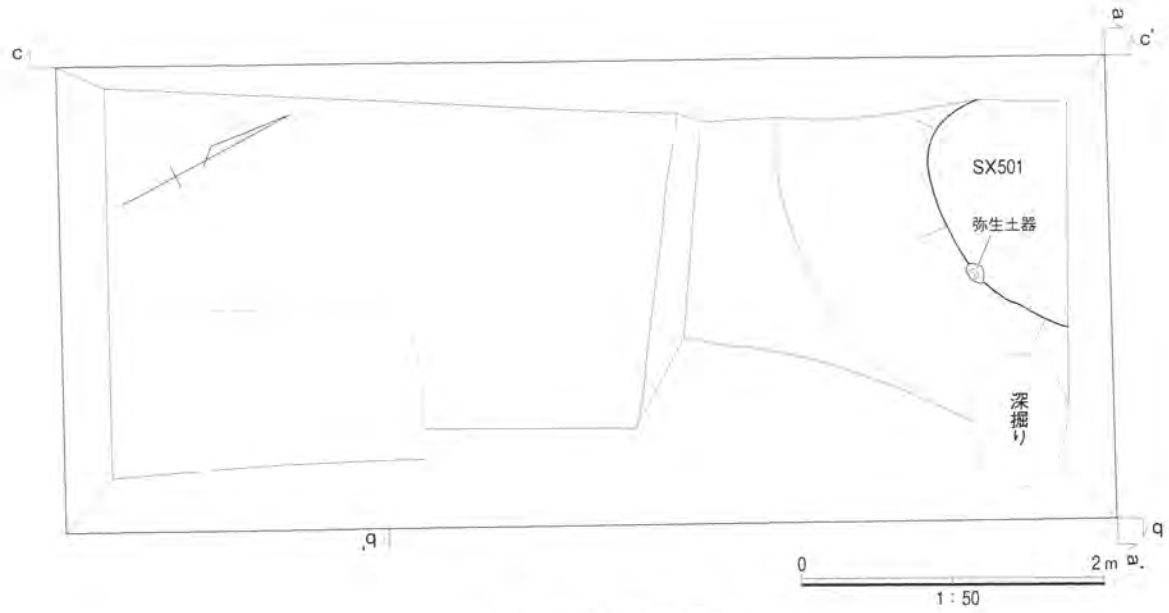


図5　第12層上面平面図

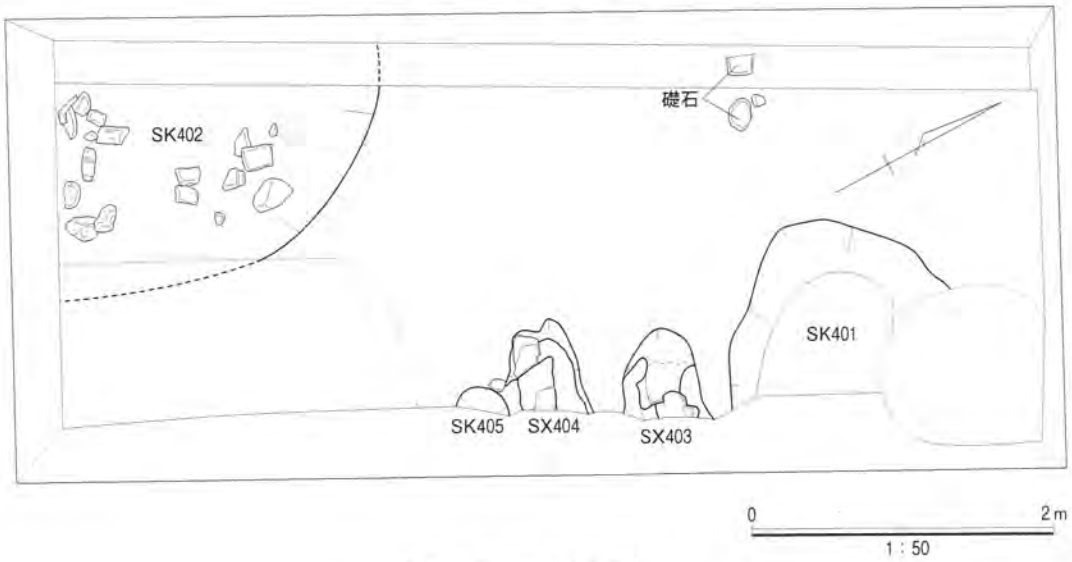


図6　第10層上面平面図

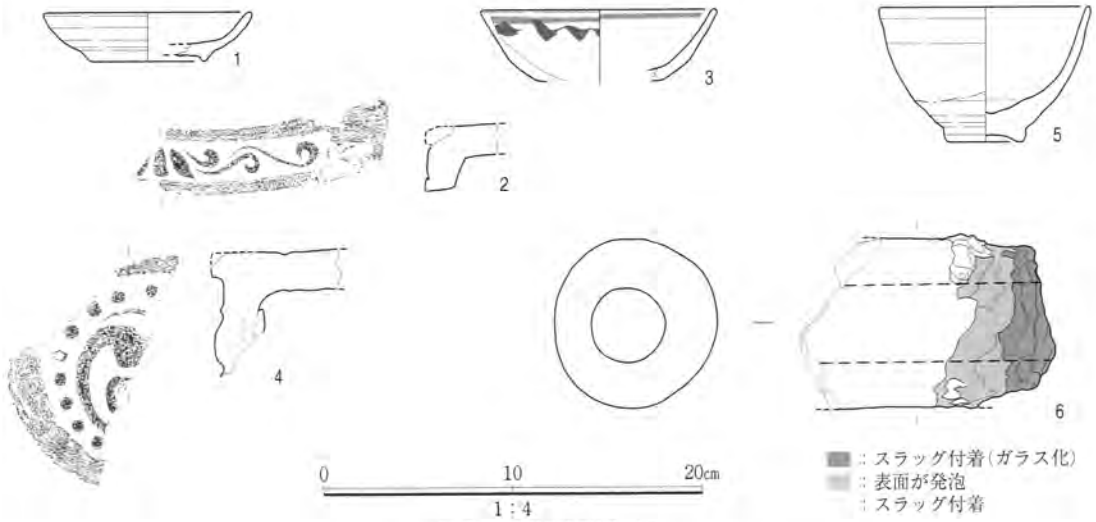


図7　遺物実測図(1)

SX501(1)、SK401(2)、SK310(3)、SK204(4)、SK101(5・6)

b．豊臣期（2）［第10層上面］の遺構と遺物（図4・6・7）

SK401　長さ1.5m以上、幅1.3m以上、深さ0.3mの土壙で、暗灰黄色（2.5Y4/2）粗粒砂質シルトの焼土偽礫を多く含む黄褐色（2.5Y5/3）粗粒砂で埋まる。SX403と重なり、SX403より新しい。唐草文軒平瓦2が出土した。

SK402　長さ2.7m以上、幅1.7m以上、深さ0.5mの、上部は焼土を含む黄褐色（2.5Y5/3）シルト質粗粒砂、下部はにぶい黄褐色（10YR5/4）細礫質粗粒砂で埋没する土壙で、丸・平瓦片が多く出土した。

SK405　直径0.3m、深さ0.2mの土壙で、灰黄褐色（10YR4/2）粗粒砂で埋没する。SX404と重なり、SX404より新しい。

SX403　幅0.7m、深さ0.2mの溝を掘り、厚さ0.1mの粘土を貼ったカマドで、床上面に幅0.2m、深さ0.05mの溝を設けている。溝には炭が充満し、カマドの天井部が崩落して残存していた。焚口は東側の調査区外にある。

SX404　幅0.7m、深さ0.2mの溝を掘り、厚さ0.15mの粘土を貼って炉床としたカマドで、床上面に幅0.2m、深さ0.05mの溝があり、炭が充満していた。カマドの天井部は崩落していた。焚口は東側の調査区外にある。

このほか西壁際で礎石2個を検出した。

c．豊臣期（3）［第7層上面］の遺構と遺物（図4・7・8）

大坂夏ノ陣で被災した遺構群である。

SK301　長径0.6m、短径0.4m、深さ0.15mの楕円形を呈する土壙で、黄褐色（2.5Y5/3）粗粒砂質シルトの焼土で埋まる。

SK302　長径0.25m、短径0.15m、深さ0.05mの楕円形の土壙で、暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト質粗粒砂の焼土で埋まる。

SK303　長さ0.6m、幅0.2～0.3m、深さ0.05mの不定形の土壙で、暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト質粗粒砂の焼土で埋まる。

SK304　長径0.5m、短径0.3m、深さ0.2mの楕円形の土壙で、暗灰黄色（2.5Y4/2）粗粒砂質シルトの焼土で埋まる。

SK305　直径0.3m、深さ0.1mの円形の土壙で、暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト質粗粒砂の焼土で埋まる。

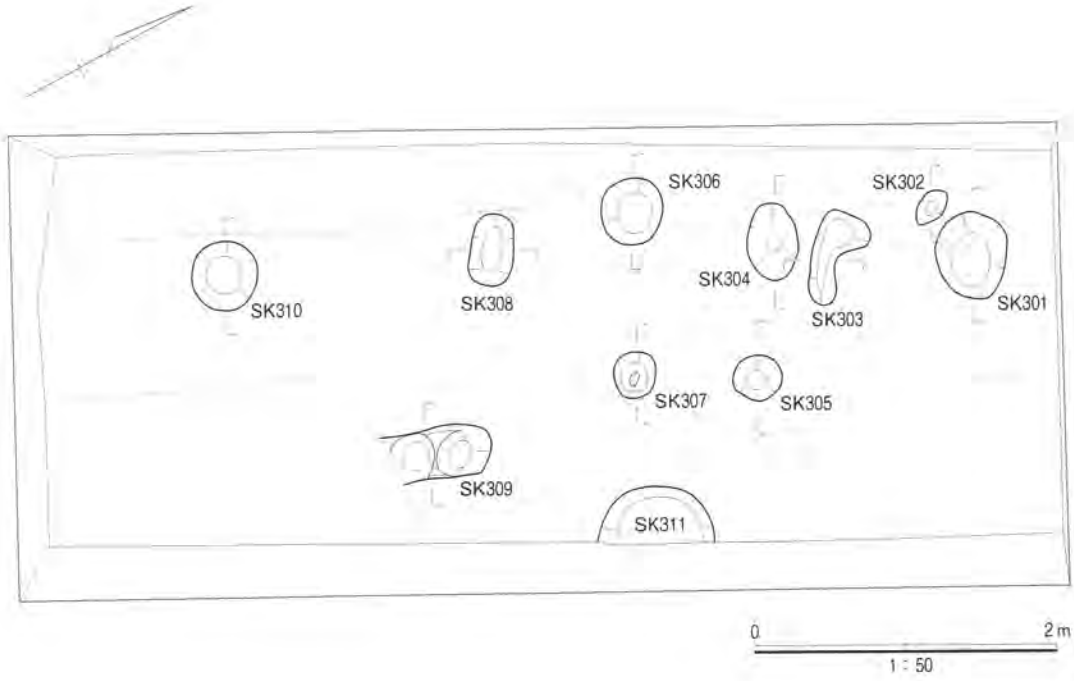
SK306　直径0.5m、深さ0.2mの円形の土壙で、オリーブ褐色（2.5Y4/3）粗粒砂質シルトで埋まる。

SK307　直径0.3m、深さ0.25mの円形の掘形をもつ柱穴で、柱痕跡は直径0.1mを測り、柱痕跡は明黄褐色（2.5Y6/6）中粒砂、掘形埋土は暗灰黄色（2.5Y5/2）粗粒砂質シルトである。

SK308　長径0.5m、短径0.3m、深さ0.1mの楕円形を呈する土壙で、暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト質粗粒砂の焼土で埋まる。

SK309　長さ0.7m以上、幅0.3m、深さ0.4mの溝状の土壙で、底部が複数の直径0.3mほどのピット状の凹みからなる。にぶい黄褐色（10YR4/3）粗粒砂質シルトなどで埋まる。

SK310　直径0.4m、深さ0.15mの円形の土壙で、上部は黄褐色（2.5Y5/4）中粒砂、下部はにぶい黄褐色（10YR4/3）粗粒砂質シルトの焼土で埋まる。中国産青花碗3が見つかった。



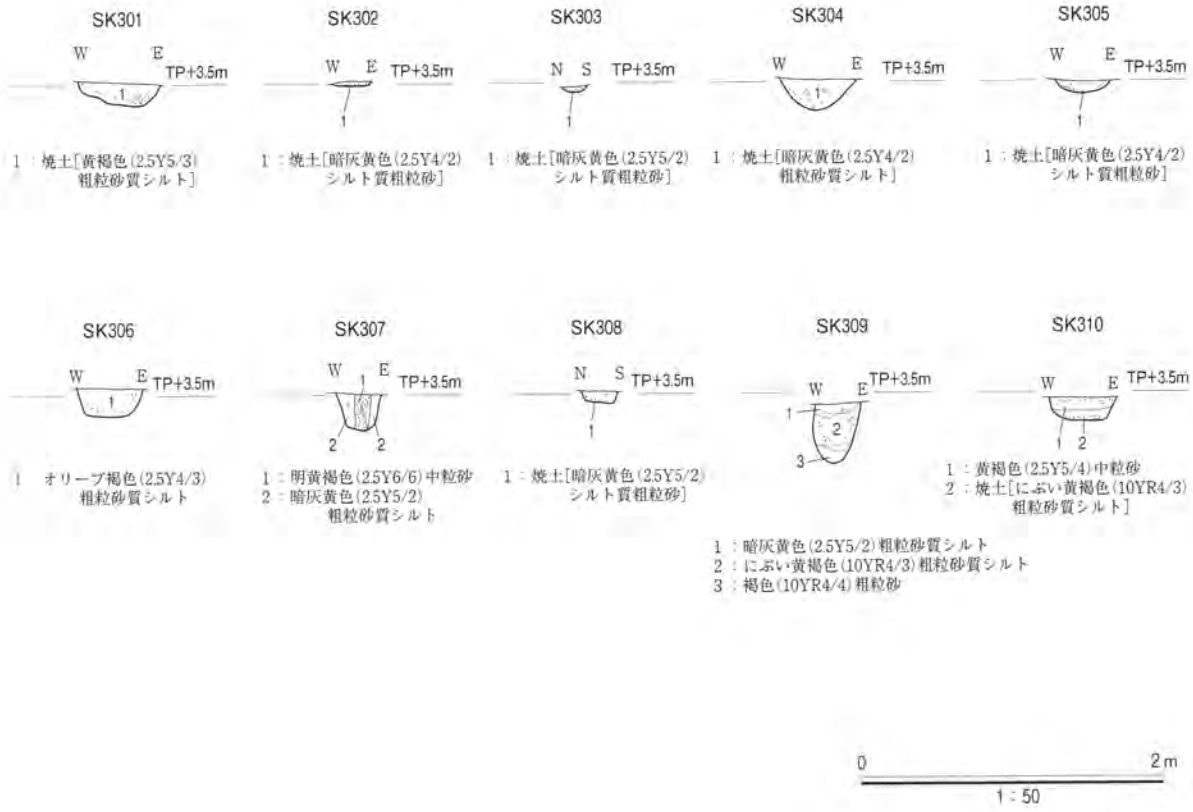
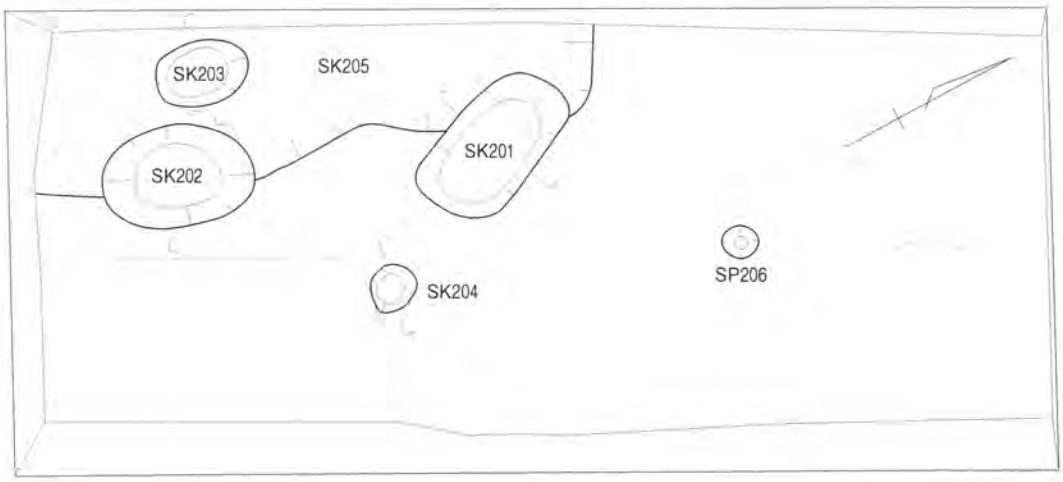


図8　第7層上面平面図と遺構断面図



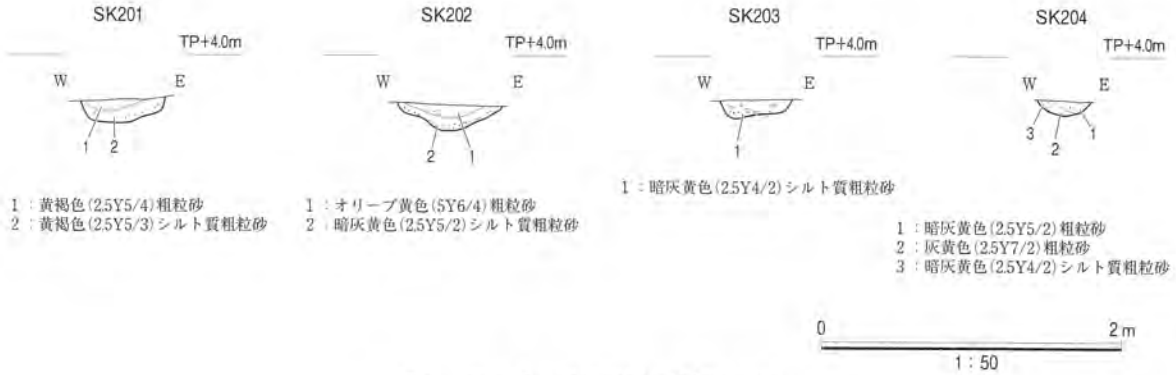


図9　第4層上面平面図と遺構断面図

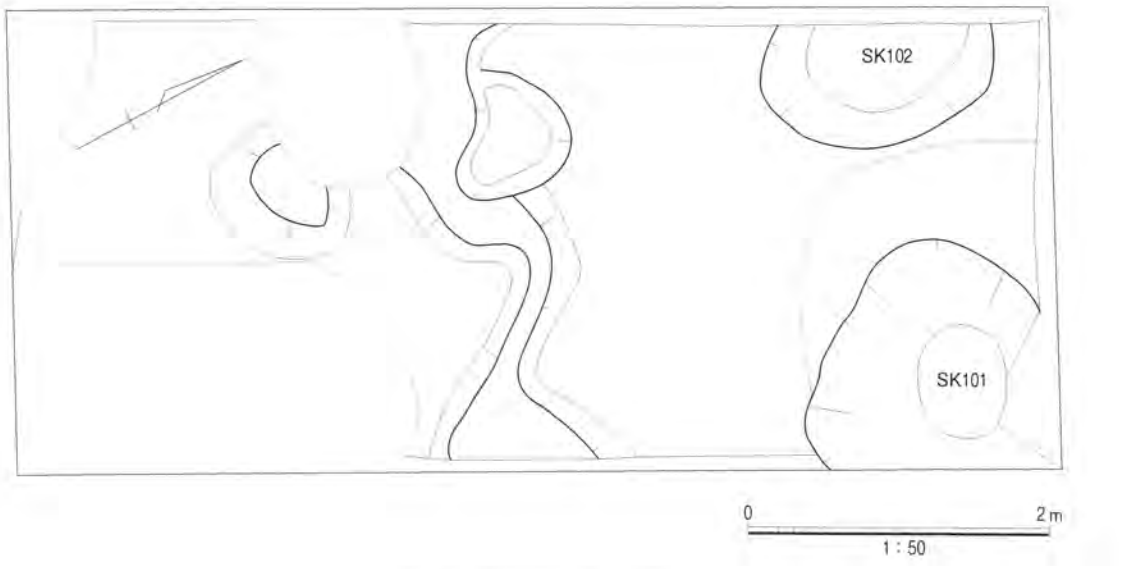


図10　第3層上面平面図

SK311　直径0.8m、深さ0.2mの円形の土壙で、にぶい黄色(2.5Y6/3)粗粒砂質シルトで埋まる。

d．江戸時代(1)［第4層上面］の遺構と遺物(図4・7・9)

SK201　長さ1.0m、幅0.6m、深さ0.15mの長方形の土壙で、黄褐色(2.5Y5/3)シルト質粗粒砂などで埋まる。

SK202　長径1.0m、短径0.7m、深さ0.2mの楕円形の土壙で、暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粗粒砂などで埋まる。

SK203　長径0.6m、短径0.4m、深さ0.1mの楕円形の土壙で、暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒砂で埋まる。

SK204　直径0.3m、深さ0.1mの円形の土壙で、灰黄色(2.5Y7/2)粗粒砂などで埋まる。三巴文軒丸瓦4が出土した。

SK205　SK201～203に切られる長さ3.6m以上、幅1.1m以上、深さ0.5mの不定形の土壙で、褐灰色(10YR4/1)粗粒砂質シルト偽礫で埋まる。

SP206　直径0.25m、深さ0.1mの小穴で、暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粗粒砂で埋まる。

e．江戸時代(2)［第3層上面］の遺構と遺物(図4・7・10)

SK101　直径1.6m、深さ0.5mの廃棄土壙で、炭・鉄滓・鞴羽口を多量に含む黒色(10YR2/1)粗粒砂で埋まる。肥前陶器碗5や鞴羽口6が見つかった。17世紀第1四半期の土壙である。

SK102　直径1.5m、深さ0.3mの廃棄土壙で、炭・鉄滓・鞴羽口を多量に含む灰色(5Y5/1)シルト質粗粒砂で埋まる。

f．江戸時代(3)［第1層上面］の遺構と遺物(図4・11・12)

SK01　長さ2.3m以上、幅1.7m以上、深さ0.7mのゴミ穴で、下部は有機物を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂質シルト、上部はにぶい黄色(2.5Y6/4)粗粒砂を埋土とし、中国産青花皿9、軟質施釉陶器碗10、肥前陶器皿12、土師器皿13～17、焼塩壺20・21が出土した。14・15は糸切底である。17世紀第2四半期のものである。

SK02　長さ1.4m以上、幅1.4m、深さ0.7mの土壙で、黄灰色(2.5Y5/1)シルト質粗粒砂を埋土とする。肥前磁器碗7・8、土師器皿18・19、宝珠の中心飾をもつ唐草文軒平瓦22が出土した。17世紀第2四半期の土壙である。

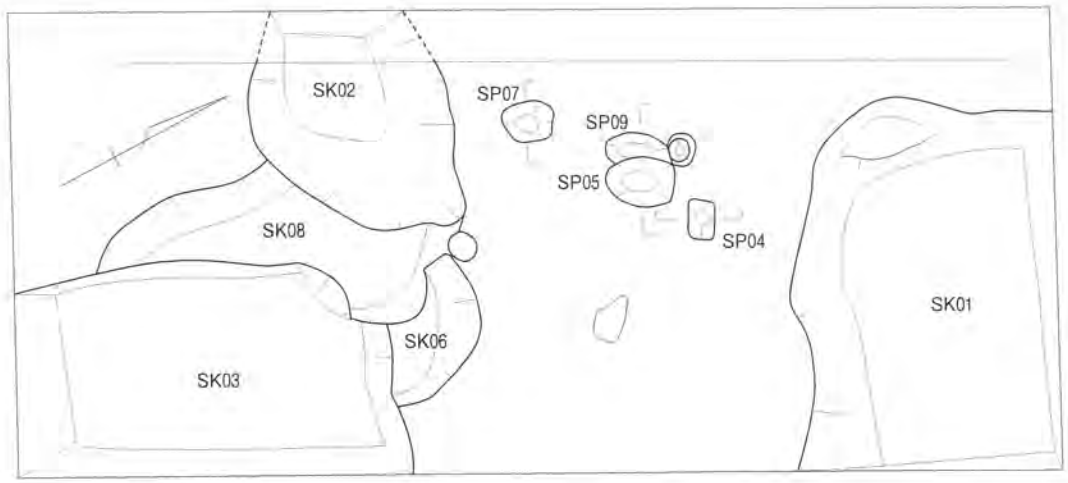
SK03　長さ2.6m以上、幅1.4m以上、深さ1.9m以上の素掘りの穴蔵で、漆喰の巨塊を多く含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂質シルトを埋土とする。19世紀以降のものである。

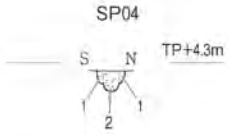
SK06　直径1.0m、深さ0.3mの土壙で、黄褐色(2.5Y5/3)シルト質粗粒砂を埋土とし、肥前陶器皿11が出土した。17世紀第2四半期の土壙である。SK08に切られる。

SK08　長さ2.5m以上、幅1.3m以上、深さ0.2mの暗黄褐色(2.5Y5/2)シルト質粗粒砂を埋土とする。

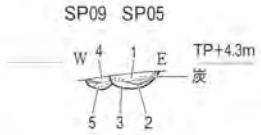
SK10　東壁で確認した直径0.7m、深さ0.45mのスリ鉢状の土壙で、にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト質粗粒砂を埋土とする。

SP04　長さ0.25m、幅0.15m、深さ0.15mの小穴で、オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質粗粒砂などを埋土とする。

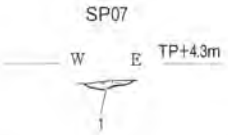




1：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質粗粒砂
2：黄褐色(2.5Y5/4)シルト質粗粒砂



1：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒砂
2：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粗粒砂
3：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粗粒砂
4：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粗粒砂
5：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質粗粒砂



1：明黄褐色(2.5Y6/6)シルト質粗粒砂

図11　第1層上面平面図と遺構断面図

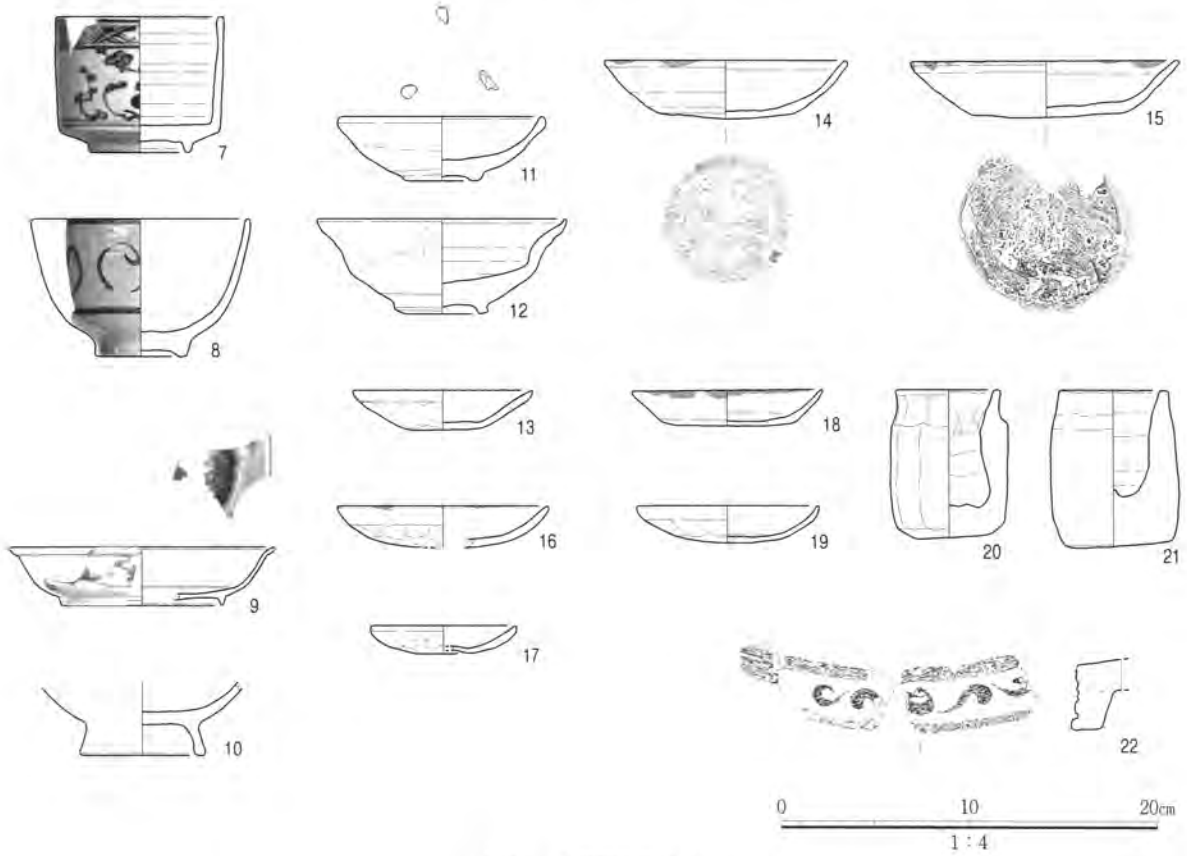


図12　遺物実測図(2)

SK01(9・10・12~17・20・21)、SK02(7・8・18・19・22)、SK06(11)

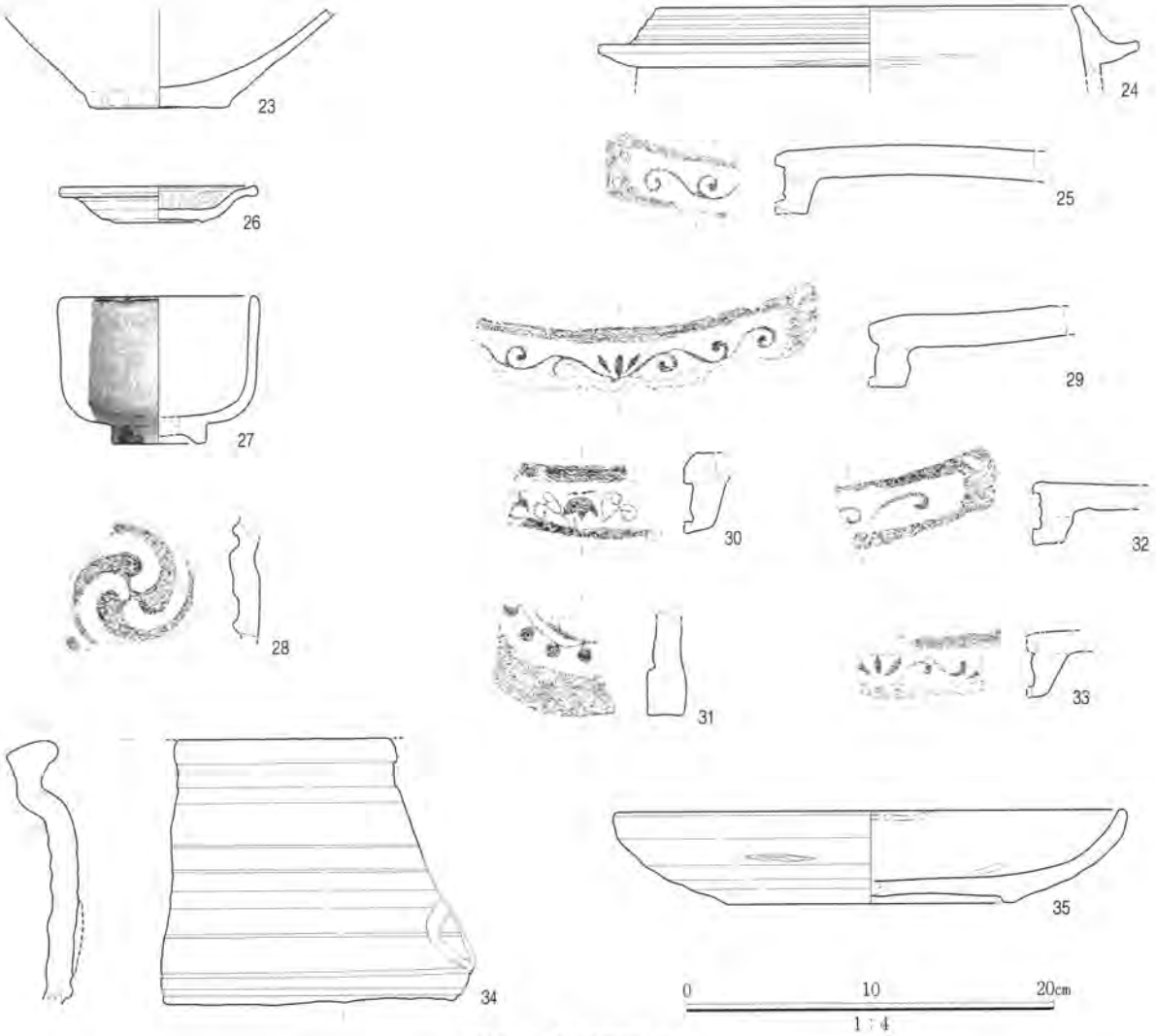


図13　遺物実測図(３)

第13層(24)、第11層(23)、第10層(25)、第９層(27)、第８層(26・28～32)、第７層(33)、第６層(34)、第３層(35)

SP05　長径0.5m、短径0.3m、深さ0.1mの楕円形の小穴で、暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒砂などで埋まる。SP09と重なり、SP09より新しい。

SP07　直径0.4m、深さ0.1mの不整形の小穴で、明黄褐色(2.5Y6/6)シルト質粗粒砂を埋土とする。

SP09　長径0.4m、短径0.2m、深さ0.1mの楕円形の小穴で、オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粗粒砂などで埋まる。

iii)各層出土の遺物(図13)

第13層出土の口径23.5cmの頸部が有段の瓦質羽釜24は、口縁端部が直立して端部を拡張する。15世紀後半に位置付けられる。

第11層出土の弥生土器23は、鉢の底部と見られる。

第10層出土の唐草文軒平瓦25は、第８層出土の29と同笵瓦であることから、中心飾三葉の唐草３転である。

第９層出土の軟質施釉陶器27は、外面全面に灰白色(2.5Y8/2)の釉をかけて、緑彩で文様を描く。内面は大半剥離するが、黒色釉と見られる。

第８層出土の瀬戸美濃焼陶器菊皿26は、底部外面に輪トチンの痕を残す。三巴文軒丸瓦28・31は、28が巴頭の先端を凸線で繋ぎ、31は珠文内に圏線をもち、巴尾が圏線に接する文様で、唐草文軒平瓦29～32は、29が前述した中心飾三葉で唐草３転、30が新発見の桐文の左右に上下に唐草を２つずつ配し、左にも桐葉らしいものが見える特異な文様で、32が唐草２転で、既往の調査から中心飾三葉であることが知られている[大阪市文化財協会1992の3900番]。

第７層出土の唐草文軒平瓦33は、中心飾三葉で唐草３転である。

第６層出土の備前焼甕34は、胴部に円形浮文をもつ。焼成は甘く、淡赤橙色(2.5YR7/4)を呈する。

第３層出土は瀬戸美濃焼陶器大皿35は、内外面に黒褐色(7.5YR2/2)を呈する褐釉を施し、見込みに胎土目が見られる。

iv)豊臣期の遺構について

第12層上面で豊臣前期の土塁状高まりSX501を検出した。その直上から出土した弥生土器23は、東のOS07－８次調査地で検出した集落の遺物の可能性がある。第13層は瓦質羽釜から室町時代に形成されたと考えられるから、当地ではSX501の構築が豊臣期の幕開けを告げたのかもしれない。OS07－８次調査地の豊臣期の遺構はTP＋2.4mを地盤とする畠の畝で、豊臣期を通じて畠地として活用されていたと考えられているから、SX501は畠地の水害を予防する堤の可能性もある。

第10・11層の規模の大きい盛土と整地を経て、TP＋3.1mまで嵩上げし、礎石建物やカマドをもつ屋敷地となり、その後薄い整地層に見られるような地盤の度重なる修復を経て、第７層上面は大坂夏ノ陣で被災する。第８層から多数の軒瓦が出土したことから、第10層上面には瓦葺き建物があったと考えられる。南のOS08－10次調査地では豊臣前期に、TP＋2.6mとTP＋2.9mを地盤として２度に亙って塀を伴う堀と溝が造られているが、これらとの前後関係は不明である。

3)まとめ

豊臣前期の土塁状高まりSX501を埋めて、瓦葺き建物をもつ屋敷地にしたことがわかった。周辺地の動向からこの地盤嵩上げは、1594(文禄３)年の惣構堀掘削もしくは、1598(慶長３)年の大坂町中屋敷替えに伴う惣構の修築によるものと考えられる。夏ノ陣で被災した後、元和・寛永年間の大坂再建時には鉄製品の製造・加工場所となり、その後、屋敷地に変化したと推測される。北方のOS05－５次調査地では、17世紀第２四半期の銅の精錬炉が検出されているから、当地周辺はその頃金属製造の工房が集まっていた可能性がある。

この地域の豊臣氏大坂城および徳川期の城下町への変遷の解明は、今後の周辺地の調査成果にかかっているといえる。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1992、『難波宮址の研究』第九

大阪市文化財協会2006、『東高麗橋における建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS05－５)報告書』

2007、『日本エスリード株式会社による建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS07－８)報告書』

2008、『株式会社プレサンスコーポレーションによる建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS08－10)報告書』

第12層上面
（東から）

第10層上面カマド遺構
（西から）

第10層上面
（北から）

第７層上面(北から)

第４層上面(南から)

SK01と下層のSK101(南西から)

天王寺区空堀町における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS11－３)報告書

調 査 個 所　大阪市天王寺区空堀町２－５・２－14
調 査 面 積　102㎡
調 査 期 間　平成23年６月６日～６月15日
調 査 主 体　財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、高橋 工

1)調査に至る経緯と経過

本調査地は大阪市天王寺区の東北部にあり、大阪市域を南北に延びる上町台地の東縁辺部に位置する(図1)。清水谷は台地東縁を深く刻んで東に開く谷で、惣構の南面堀(ほぼ現在の空堀通)はこの地形を利用したものと考えられるが、調査地はこの谷の南側に当る。調査地の南側は約50mを隔てて旧陸軍墓地が設けられた真田山となり、清水谷に平行して丘陵が西から東へ延びて沖積平野へと没している。周辺は豊臣氏大坂城の東南隅部付近に当り、現在の空堀通が惣構堀の名残である。調査地から東北東250mの地点に当るOS89－146次調査では惣構玉造口の城門(いわゆる「黒門」)の一部とされる遺構が検出されている。また、西50mのOS88－118次調査では、北西方向へ延びる埋没谷が発見されている[大阪市文化財協会2002]。

当地においては、建築工事に先立って大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、現地表下0.8mで古墳時代～中世とみられる遺物包含層が発見され、本調査が行われることとなった。調査は、まず、6m×13m (78㎡)のトレンチを設定し、江戸時代の作土である第2層までを重機を用いて除去した。この段階で、地山層上面に埋没谷が存在することが判明したので、掘削時の安全を確保するため、教育委員会と協議の上で北西方向に24㎡の調査区拡張を行った(図2)。地山層上面で検出した谷やその他の遺構は人力によって掘削した。本報告書の平面図は座標北(世界測地系)を基準に作成した。また水準値は東京湾平均海面値(T.P.値)であり、本文・挿図中ではTP＋○mと略記した。

2)調査の結果

i)層序と地形(図3・4)

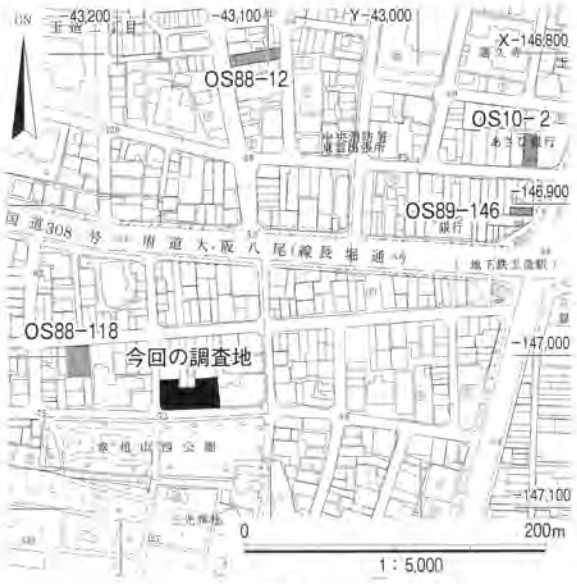


図1　調査地位置図

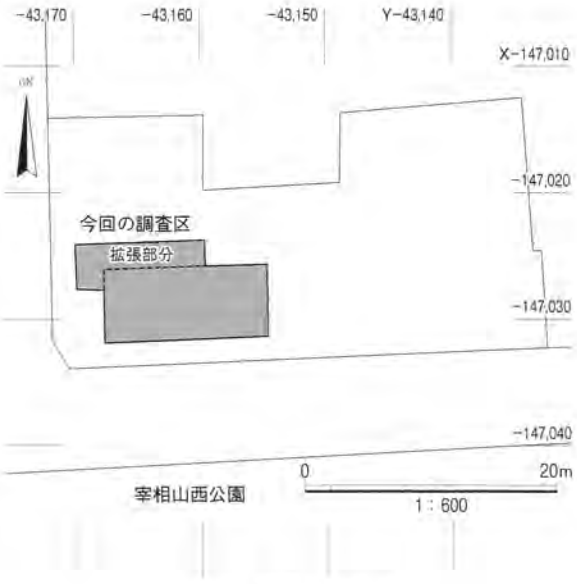


図2　調査区位置図

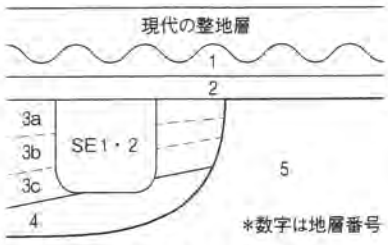


図3　地層と遺構の関係図

砕石やコンクリート殻を含む現代の整地層の下位に以下の5層準を確認した(図3)。地山層上面は調査区東側では標高TP+5.7mほどを測り、地形は平坦であるが、西半部は谷となってTP+3.9m以下まで落ち込んでいる。谷の底は検出できていない(図4)。

第1層：暗灰黄色細礫質細粒砂からなる作土層で、層厚は最大45cmであった。調査区西壁の地層断面では上面に畝がたてられた状況が観察され、畠作が行われたとみられる。近代～現代の遺物が出土した。

第2層：黄褐色細礫質細粒砂からなる作土層である。上面は第1層に削剥され、層厚は最大で25cmである。軟質施釉陶器灯明皿片が出土し、年代は江戸時代後期に属する。

第3層：下位層とともに谷を埋積する地層である。分層発掘はしていないが、断面観察によると第3a～3c層の3層に細分が可能で、第3a層は黒褐色粗粒～細粒砂、第3b層はにぶい黄褐色粘土質粗粒～細粒砂、第3c層はにぶい黄褐色粘土質中粒砂からなる。各層の下面は層界が明瞭で、それぞれ作土化されたものとみてよい。第3層(一括)からは古代の土師器・須恵器や13～14世紀の白磁碗1などが出土したが、肥前磁器の細片が含まれ、地層の年代は17世紀後半以降に降る。本層上面でSE1・2が検出された。

第4層：明黄褐色細粒砂～褐色粘土質シルトからなり、地山層の砕屑物が谷の中に再堆積した地層である。上方に細粒化し、最上部は暗色化していた。層厚は90cm以上であるが、下限は確認できていない。層中からは古墳時代～中世のものを含む土師器・須恵器片が出土し、いずれも少数で年代を特定するには逡巡を覚えるが、中世までには堆積が終わったとみてよかろう。

第5層：明褐色細礫質シルト～にぶい黄橙色細粒砂からなる地山層である。上方に細粒化していた。前述のように、本層上面で調査地の西部には埋没した谷がある。谷は南南西から北北東方向に延び、

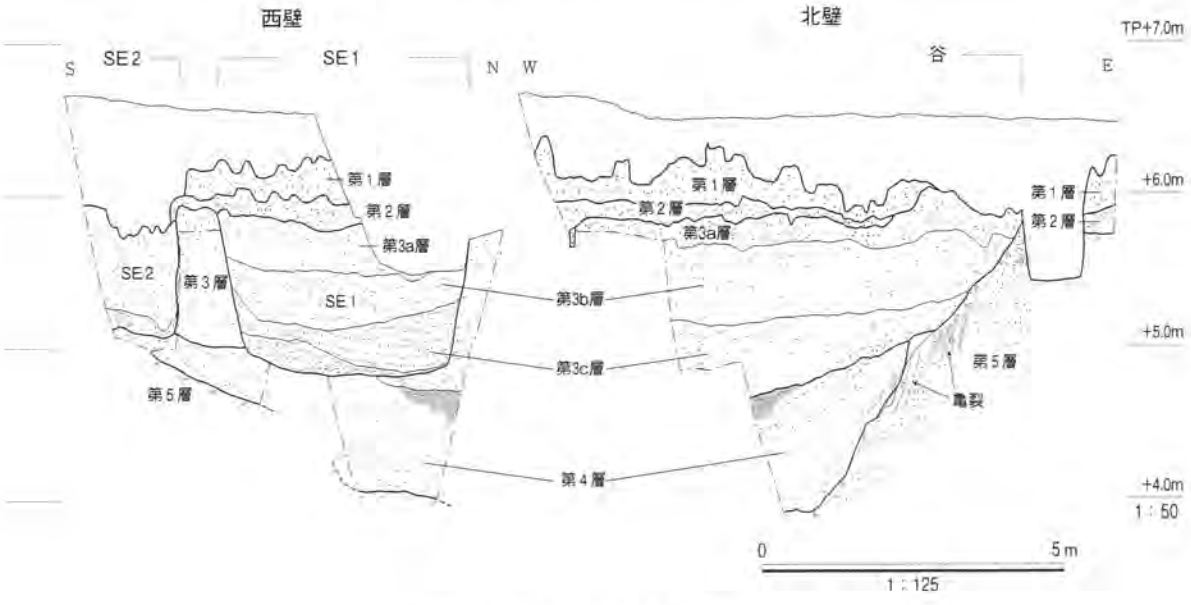
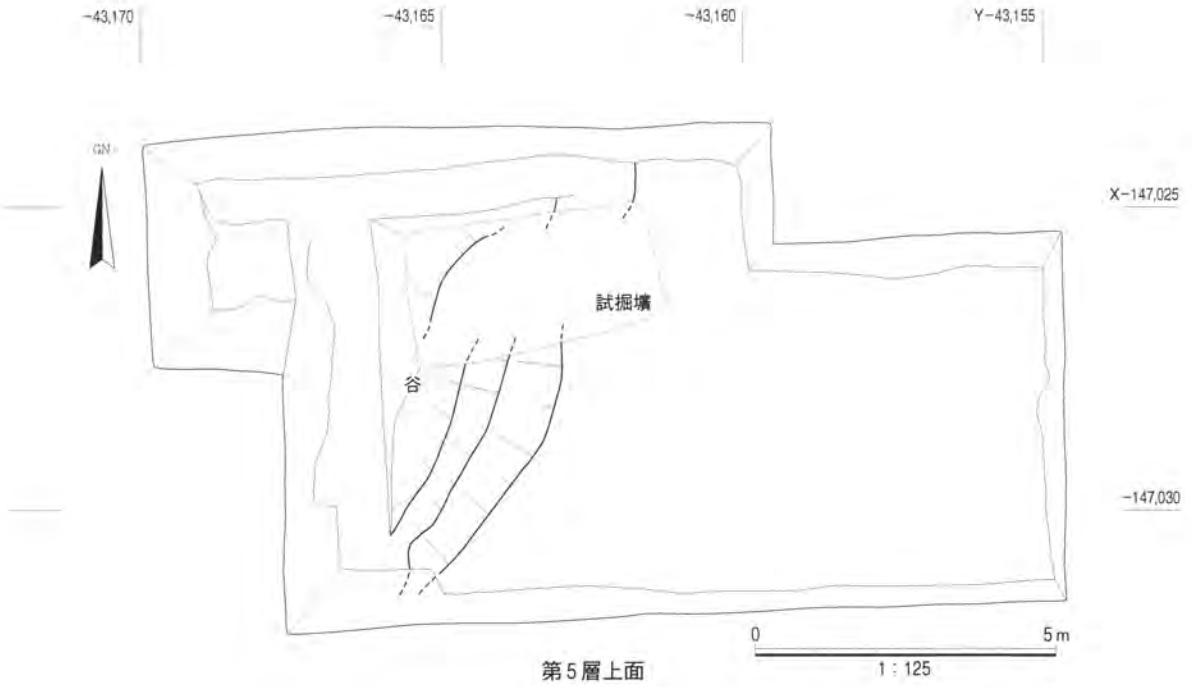
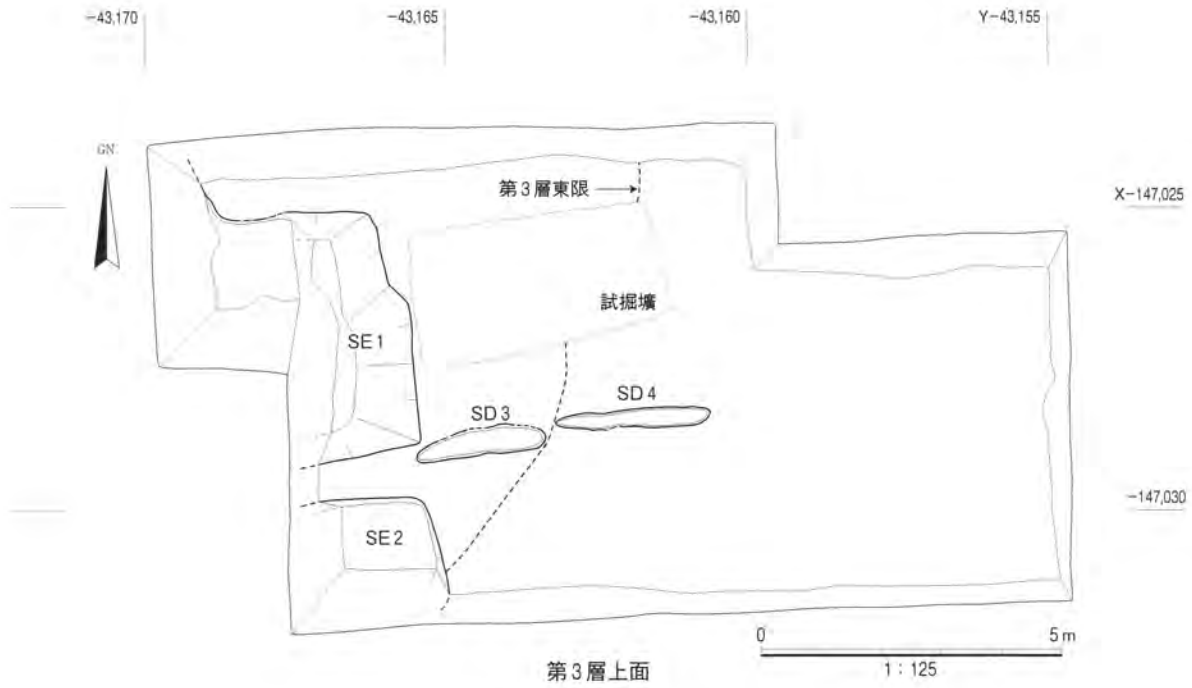


図4　西・北壁地層断面図



第5層上面



第3層上面

図5　遺構平面図

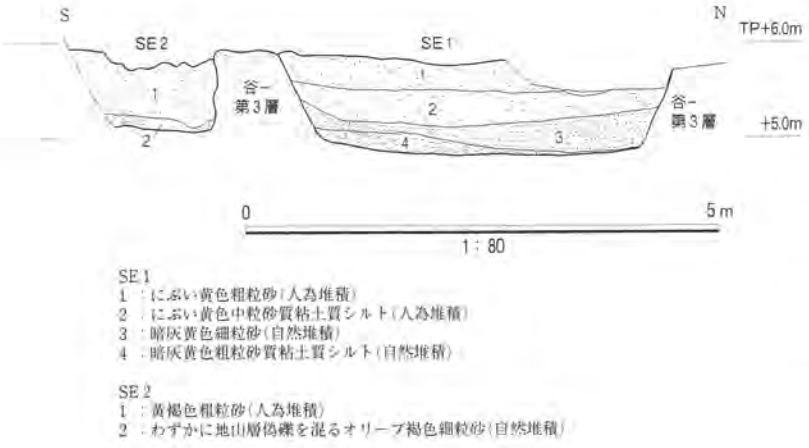


図6　SE1・2断面図

調査区内ではその東の肩を捕捉した。幅は6.9m以上、深さは最も深い部分で1.8mである。肩の傾斜は急峻で、谷の延びの方向と平行に地滑りを起こしかけた際の亀裂が見られた。上述した第3・4層の堆積状況からみて、中世までは地山層砕屑物が自然堆積し、近世にはおそらく客土をした後にそれを耕転することを繰り返して谷が平坦化されたものとみられる。

ii)遺構と遺物(図5～7)

a．近世の遺構(第3層上面)

調査区の西部、第3層上面でSE1・2を検出した。

SE1　西壁際で検出され、調査区外に続く。東西3.6m以上、南北4.6m以上、深さ0.95mである。埋土の下層は泥質の堆積物の上に細粒砂がラミナを成して堆積しており、水の流入と滞水があったことが窺えた(図6の3・4)。上層は人為的に埋められていた(同1・2)。農業用の用水を蓄えた水溜めであろう。土師器・須恵器片のほかに、肥前磁器碗2、中国産青磁碗3、漳州窯産色絵皿4など、古代から近世まで幅広い時期の遺物が出土したが、2から考えて18世紀初頭頃の年代が与えられる。

SE2　SE1の南で検出され、調査区外に続く。東西2m以上、南北1.6m以上、深さ0.8mである。埋土の状況はSE1とほぼ同様で、下部は自然堆積で、上部は人為的に埋められていた。遺物は出土

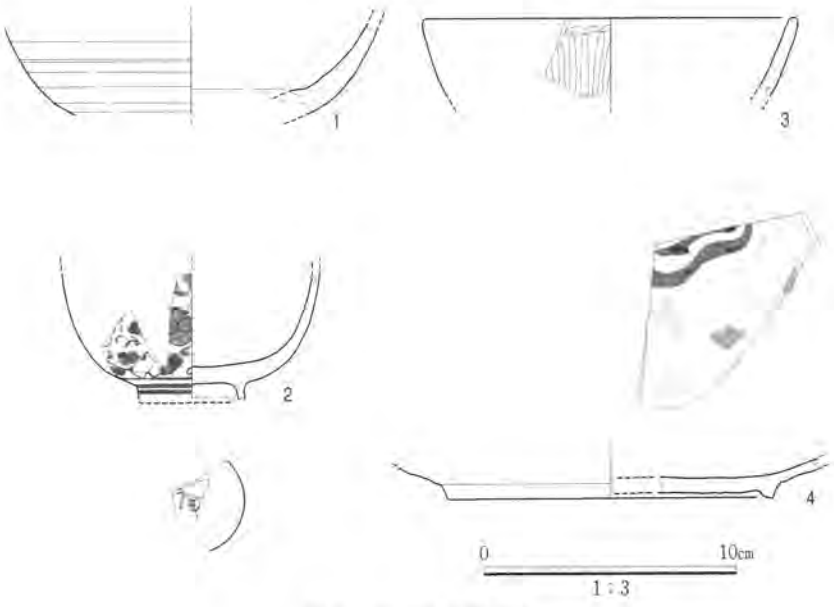


図7　出土遺物実測図
第3層(1)、SE1(2～4)

しなかったが、SE1と同時期で同様な機能をもつものであろう。

SD3・4　SE1の東方で検出された溝である。幅0.3m前後、深さは0.1mほどである。いずれもSE1と同様に粗粒砂で埋め戻されていた。本来は一連の溝で、SE1に雨水などを導いたものであろう。

b．近代の遺構(第3層上面)

建物跡　調査区の東部、試掘壙を取り囲む位置で掘立柱建物跡を検出した(写真図版上)。東西約5.8m(3間)、南北約3.8m（2間)で、個々の柱穴は直径0.3m、深さ0.3mほどのものであった。

3)調査成果をめぐる若干の考察

i)谷と難波京について

本調査でほぼ南北方向に延びる谷を発見した。埋没谷は西50mのOS88－118次調査でも発見されているが、地勢からみて、これらは清水谷に流れ込む支谷と捉えることができる(図8)。本調査検出の谷内部は中世までは自然堆積が進み、近世になって耕作地化されながら平坦化していた。OS88－118次調査検出の谷も、古代・中世・近世の埋土があって、古代・中世は自然堆積、近世に人為的に埋められて平坦になっている。OS88－118次調査では飛鳥・奈良時代の遺物が多く出土しており、周辺で居住や土地利用が行われたことを示しているが、谷そのものに対する開発は行われていなかったとみてよい。

難波宮が置かれた飛鳥・奈良時代において、上述の状況から調査地周辺は京域内にあったと考えてもおかしくはない。また、[積山洋2010]によれば、前・後期難波京の条坊復元において本調査地はまさにその東京極に当り、さらに詳しく見れば、京極ラインは谷の上にほぼ重なる。しかし、前・後期

図8　清水谷・難波京東京極と調査地

図9　寛延2(1749)年の絵図

難波京の時期に谷は深く残されており、さらに南側の丘陵の存在を考慮すれば、こうした起伏の激しい地形上に直線的な道路の敷設や塀などの区画施設が設けられたとは考えにくい。さらに、東京極復元の根拠となっている宰相山遺跡・細工谷遺跡の遺構も、京極ライン上で正南北の方位を採っているものはなく、東京極ラインの設定自体にも疑問が抱かれるのである。

ii)江戸時代の景観

SE1・2とした江戸時代後期の水溜めを2基発見した。遺構は谷の上に重なって掘られているが、これは、もともと谷であった場所で湧き出す地下水を得やすい地点を選んで水溜めを掘った結果であろう。雨水を導入するような溝もあり、こうした水溜めは飲み水用というよりは農業用の灌水を得るためのものであろう。

17～19世紀以降の大坂を描いた絵図によれば、調査地周辺は一貫して町屋として描かれることはない(図9)。SE1・2や第1・2層が作土層であることは、少なくとも江戸時代後期から近代までは調査地周辺が農業用地として利用されていたことを示しているとみられるのである。

4)まとめ

・清水谷の支谷とみられる谷を発見した。谷は中世までは自然堆積によって埋まり、近世に耕作地となって平坦化した。難波京の時期には谷が残っており、このことから当地に東京極を求める説に疑問を呈した。

・江戸時代後期の農業用とみられる水溜め遺構2基を発見した。周辺は近代にいたるまで農業用地として利用されたと考えた。

・近代の建物跡を発見した。調査地周辺で市街地化が始まるのはこの段階であろう。

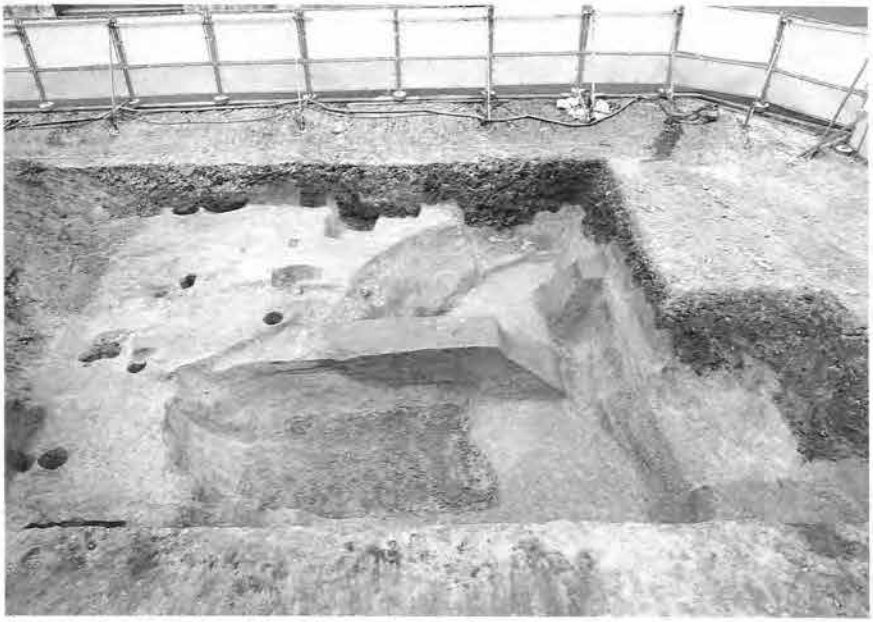
引用・参考文献

大阪市文化財協会2002、『大坂城跡』VI

積山洋2010、「複都制下の難波京」:『東アジアにおける古代難波の国際的性格に関する総合研究』平成18～21年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書、財団法人大阪市文化財協会、pp.79－96

近世～近代の遺構と
谷検出状況
（北から）

谷掘削状況
（北から）



谷掘削状況
（南西から）

中央区釣鐘町における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS11－４)報告書

調 査 個 所　大阪市中央区釣鐘町１丁目36
調 査 面 積　100㎡
調 査 期 間　平成23年７月25日～８月４日
調 査 主 体　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄

1)調査に至る経緯と経過

調査地は、難波堀江と推定される大川から南へ約300mで、谷町筋のすぐ西に当る(図1)。西隣の中央高校グラウンドを中心に、大川を望む周囲より高い地域が拡がっており、調査地北西の中央高校敷地(OS90－50次調査)では奈良時代後半～平安時代初めの7棟の正方位の掘立柱建物と井戸・溝などが検出されている。これらの遺構は、「攝」「厨」と記した墨書土器などから摂津職との関連が考えられてきた。また豊臣氏大坂城期では、大川に近い調査地周辺は早い段階に城下町として開発されたと推定されている。

発掘調査は、建築工事用の土留・切梁の設置後、事前の大阪市教育委員会の試掘結果に基づいた指導により工事側で地山上面まで掘り下げた後、南北19.8m、東西5～4.5mを調査範囲として着手した(図2)。本報告では、GPS測量を行って得た世界測地系座標を使用し、方位は座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3)

第1層：黄褐色(10YR5/8)細粒砂質シルト層で、上町台地のいわゆる地山層である。

遺構は現地表より約1.5mの深さにある第1層上面で検出し、前後関係は図3のとおりである。第1層より上の地層についてはわからない。

ii)遺構と遺物

a．古代(図4・6)

図1　調査地位置図

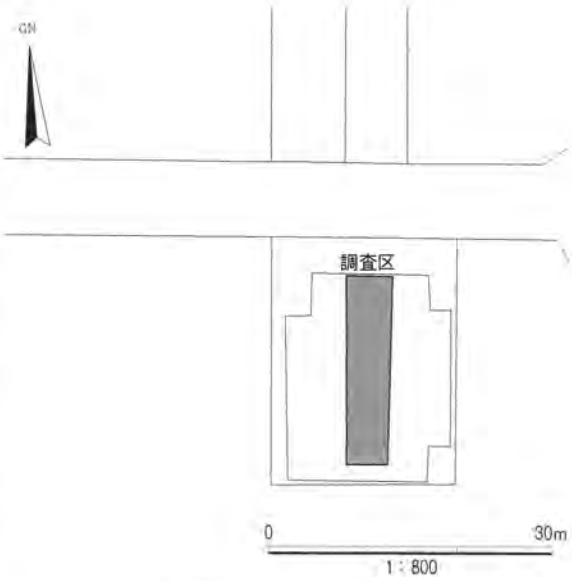


図2　調査区位置図

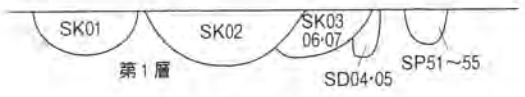


図3　地層と遺構の関係図

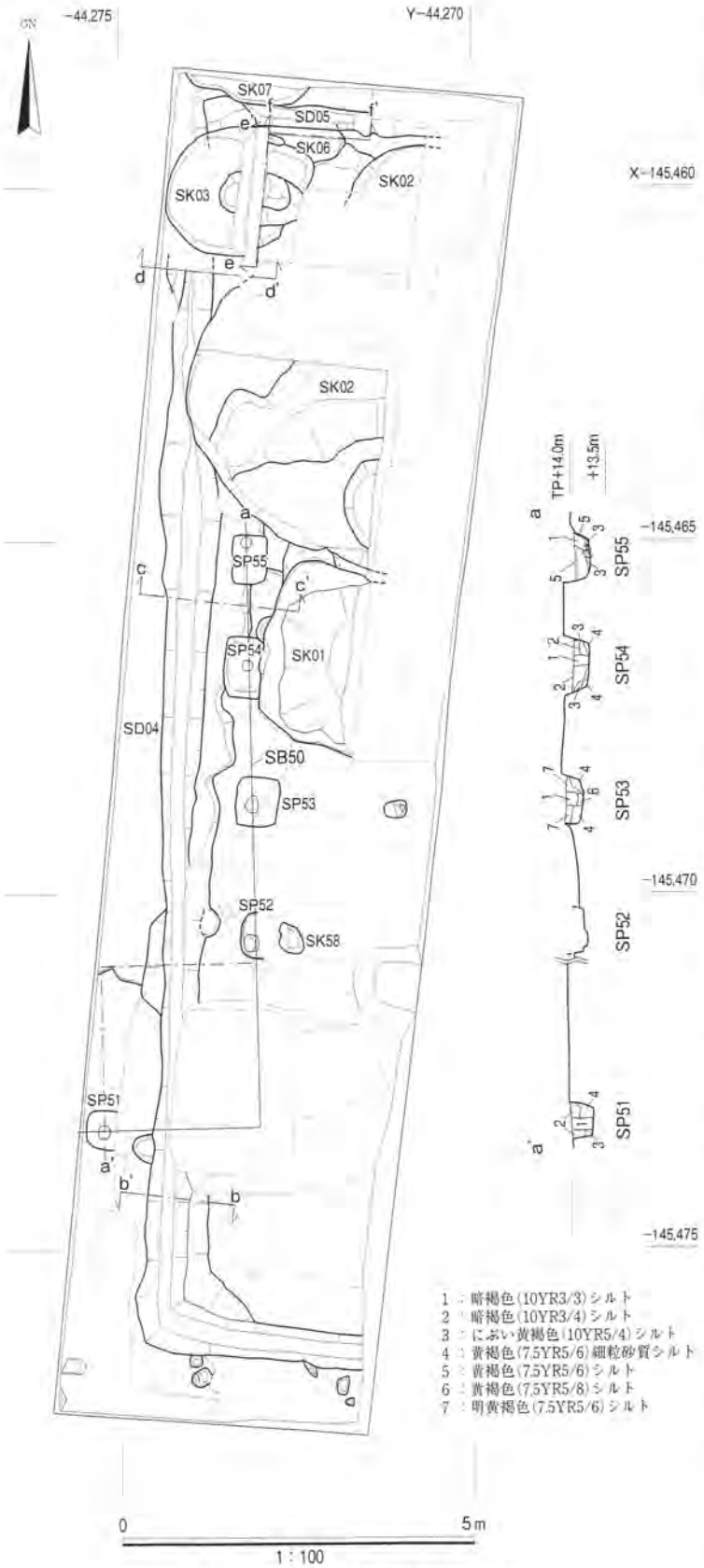


図4　遺構平面図およびSB50断面図

掘立柱建物SB50は桁行8.25m（4間）以上の南北棟と推定され、北で西に1°振る。梁行は2間の可能性が高く、柱間は2.15mである。桁行は北より柱間1.65m·1.97m·1.95m(·2.68m)である。掘形は長方形で、長さ0.85～0.55m、幅0.60～0.50m、深さ0.75～0.65mである。柱痕跡の直径は、北よりSP55(17cm)·SP54(13cm)·SP53(18cm)·SP51(22cm)であった。SP55のみは柱の下に石が据えられていた。SP54からは須恵器杯蓋1、土師器把手2·3、砥石4が出土した。2はミニチュア土器で、4は砂岩である。1よりSB50は7世紀前半以降と推定されるが、これ以上時期は絞れない。正方位になることは北西の奈良時代後半～平安時代初めの建物群と同じで、南側隣接地OS96－16次調査のSB01·02と出土遺物の時期は類似する。

b．豊臣期(図4～6)

豊臣期の遺構にSD04がある。SD04はL字形に延びており、南北15.7m以上、東西5.3m以上である。北はSK03より北へ続く可能性が高い。また接点がよくわからないが、調査区北端の東西溝SD05はSD04に繋がる可能性がある。SD04は幅0.90～0.50m、深さ0.70～0.40mで、北端部を除いて壁は急傾斜で底は平坦である。SD04は北から南へ深くな

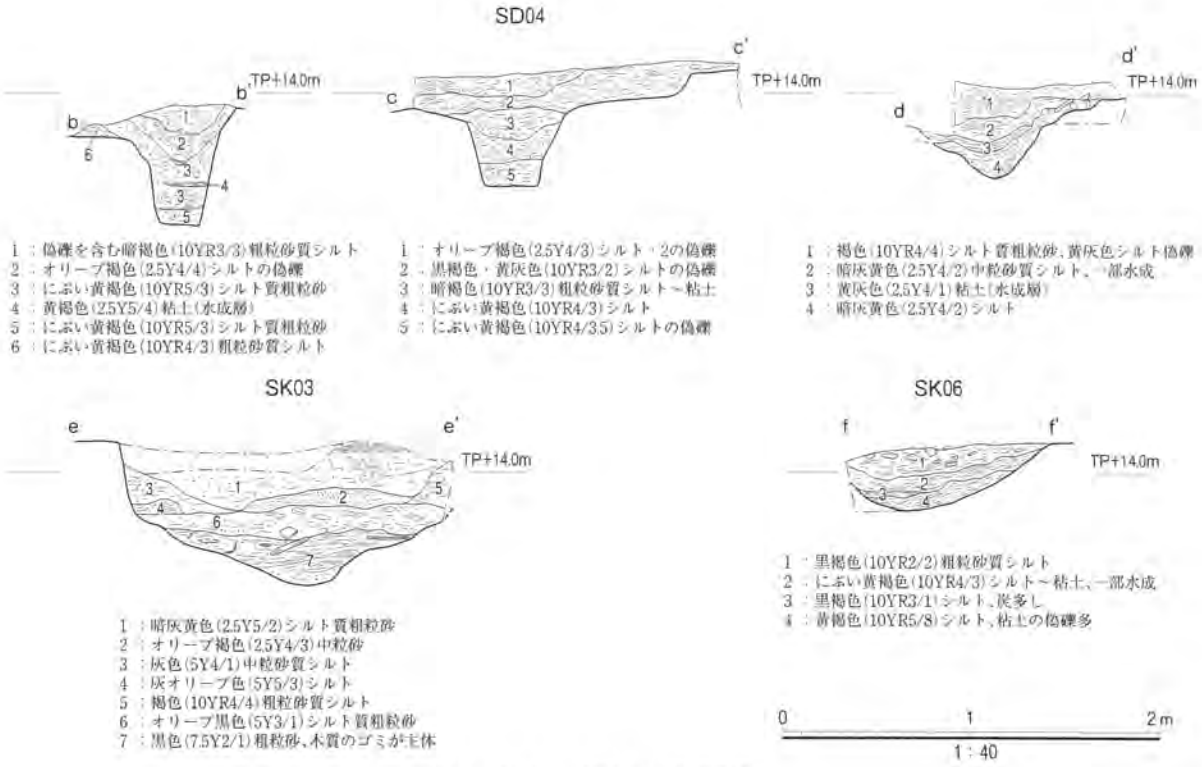


図5　SD04・SK03・06断面図

り、埋土の大部分は人為的な埋め土だが、一部に水成層を挟む。北→南→東へ排水したのであろう。SD04からは図6の5～14が出土し、5を除くとすべて上層の遺物である。5は備前焼擂鉢、6～8は土師器で、皿6・壺7・土釜8がある。9は瓦質土器の火入などの大型品の脚である。10は瀬戸美濃焼志野、11は備前焼瓶で、12·13は肥前陶器と推定される瓶である。11·12は強い火を受けて釉が泡立っている。14は産地がよくわからない。以上の出土遺物よりSD04は豊臣後期と推定される。溝の延長の谷町筋辺りには南西へ続く「釣鐘谷」があり、そちらへ排水した可能性がある。

SD05は北端部にある長さ2.5m以上の東西溝で、幅0.3m以上、深さ0.25mである。出土遺物からは時期はよくわからない。

c．徳川期(図4・5・7)

徳川期の遺構にSK01～03・06がある。SK06は長さ1.1m以上、深さ0.35mである。土師器皿15と肥前陶器皿16が出土し、SK06は17世紀後半と推定される。16の内面は蛇の目に釉剥されている。

北西隅にあるSK03は円形のゴミ穴で、東西2m以上、南北1.85m、深さ0.75mである。陶磁器17～24とともに箸·漆椀·下駄·木簡25などの木製品が出土した。17は土師器焙烙、18·19は肥前磁器碗、20は同壺で、20は六角形になる。21·22は肥前陶器皿で、23は軟質施釉陶器の秉燭、24は同人形である。木簡25は上端に孔があり、下端まで遺存している。「進上　子籠鮭　壱尺」と書かれている。「子籠鮭(こごもりざけ)」とは、塩引きの鮭の腹の中にその卵を塩漬けにしてこめたもの(三省堂大辞林)とされ、仙台伊達家の正月料理の献立にあるという。木簡は、進物に付けられていたのであろう。17などからSK03の時期は18世紀初め頃と推定される。

SK02は南北6m強、深さ0.90mの円形の大きな土壙である。土師器焙烙28·29、肥前磁器碗26·

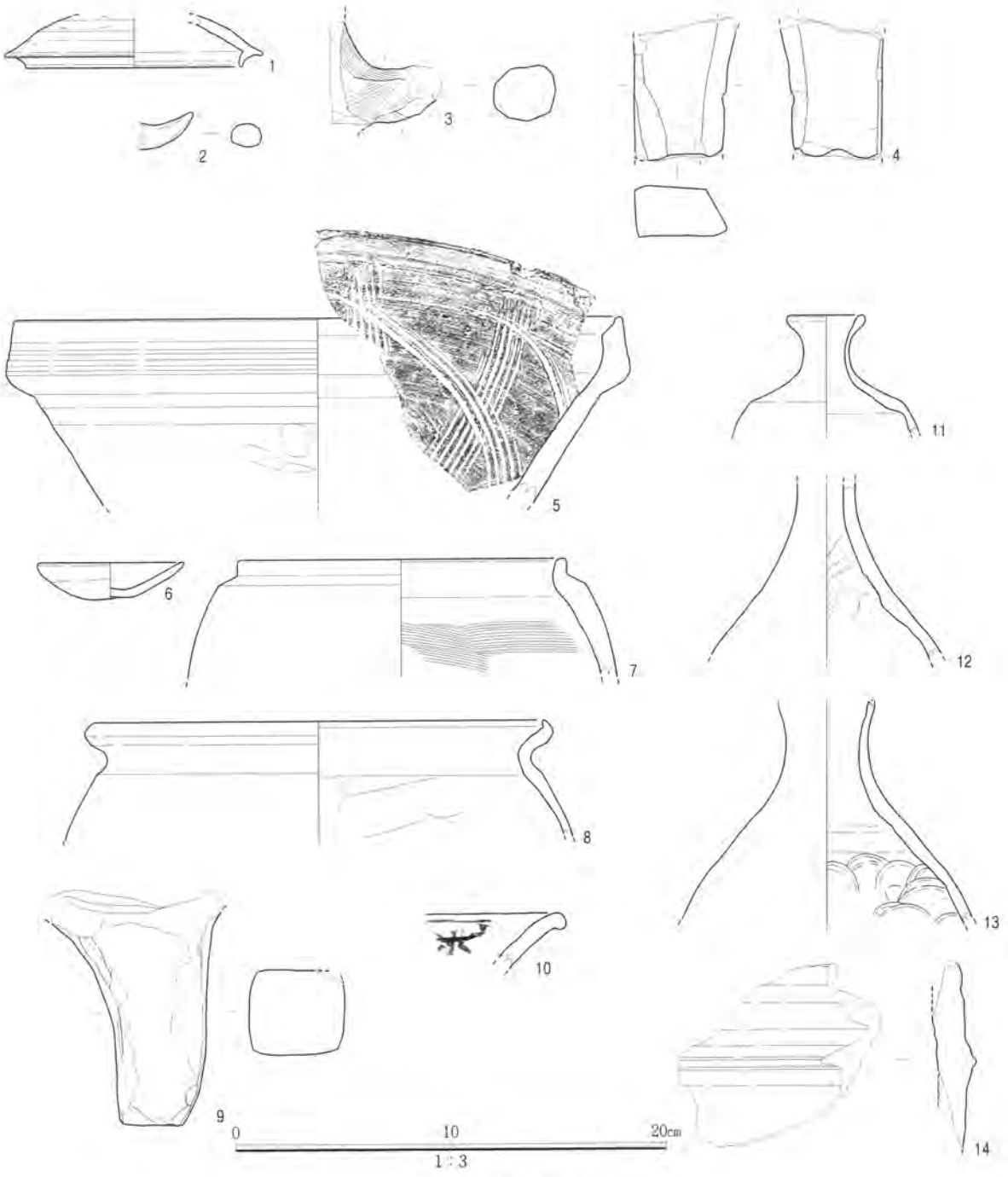


図６　出土遺物実測図

SP54(１～４)、SD04(５～14)

同鉢30、同皿27・31、肥前陶器皿32が出土した、31は六角形の白磁皿で、口縁部に褐色釉を施す。出土遺物からSK02の時期は18世紀中頃と推定される。

SK03は南北2.50m、深さ0.80mで、火災後の片付けのための土壙である。桟瓦を含む焼けた大量の瓦が廃棄されていた。SK03の時期は、肥前磁器碗33などから18世紀後半と推定される。

３)まとめ

本調査のおもな成果は次の３点である。

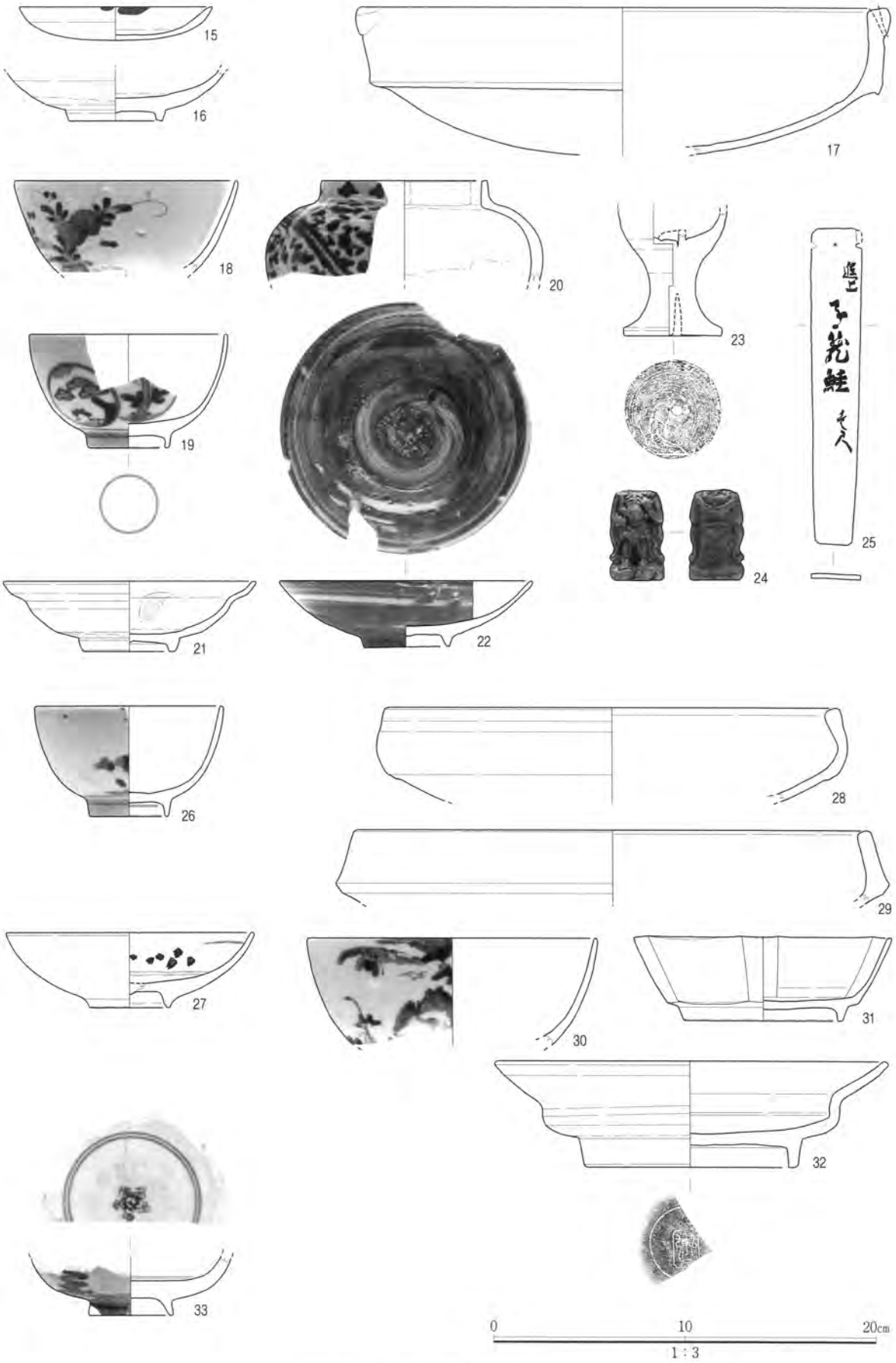
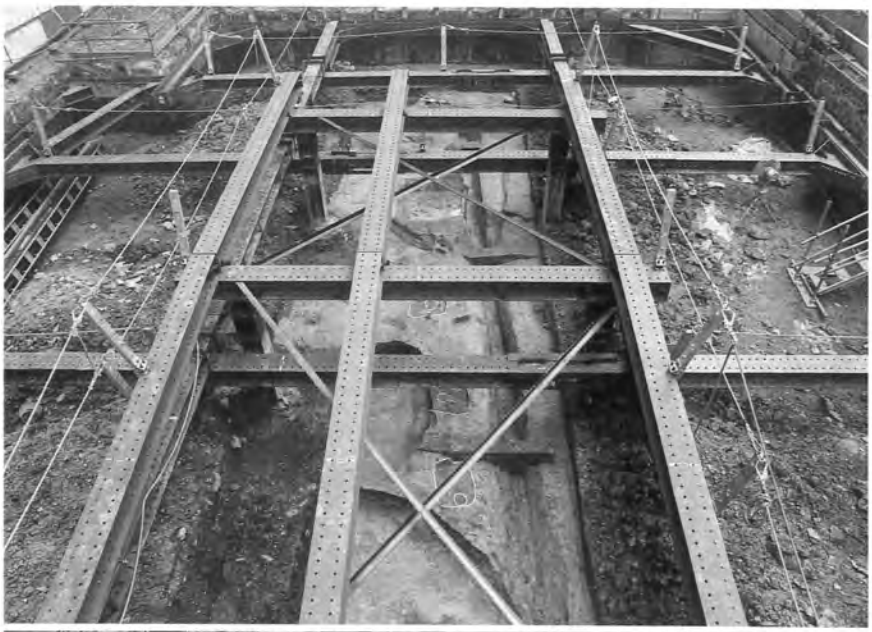


図7　出土遺物実測図

SK06(15・16)、SK03(17～25)、SK02(26～32)、SK02(33)

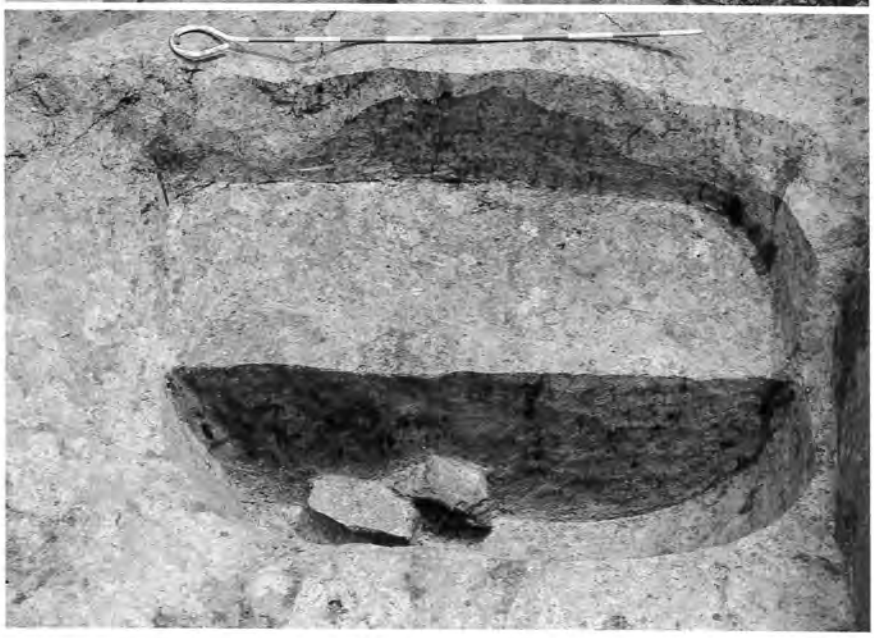
まず掘立柱建物SB50は、古代の重要施設があった可能性が高い周辺地域の建物群の構成を考える資料となる。次に、豊臣期のSD04は、周辺の資料と合わせて豊臣期の屋敷地の区分や排水網を推定する手懸りになり得る。また「子籠鮭」と記した木簡は、少なくとも18世紀初め以前に仙台周辺の食材が大坂に来ていることを示し、当時の食文化の広がりに対する資料となる。

調査地全景
（北から）



SB50（北から）

SP55（西から）



SD04(南から)

調査区北端部
SD05、SK03・06
(北東から)

SK03断面(東から)

中央区内久宝寺町三丁目における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS11－７)報告書

調 査 個 所　大阪市中央区内久宝寺町３丁目20・21
調 査 面 積　54㎡
調 査 期 間　平成23年８月17日～８月24日
調 査 主 体　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、市川 創

1）調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣氏大坂城の惣構の西南部に当り、谷町筋から西へ約150m、長堀通から北へ約280mの位置にある（図1）。江戸時代の絵図を見ると、1657年（明暦3）年刊行の『新板大坂之図』には「いしやけんぎ」、1691（元禄4）年に刊行された『新撰増補 大坂大絵図』には「古林温故」と記され、少なくとも17世紀後半には医者であった古林家の宅地が置かれており、その後は町屋に転じたようである。

調査地周辺の地形は起伏に富み、調査区東側をピークとして、東・西・北側は斜面となっている。当地周辺における既往の主要成果を概観しておくと、南方約250mに位置するOS06－1次調査で川西宏幸編年Ⅳ期に属するほぼ完形の円筒埴輪が出土していることをはじめ[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]、周辺では埴輪が点々と出土し、破壊された古墳群が存在したと推定されている[寺井誠2007]。また南西約170mのOS05－7次調査地では、飛鳥～奈良時代の土壙が検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006]。南方約190mのOS99－59次調査では、豊臣前期の町割の方位を示すとされるN2°W方向の柵を検出しており[大阪市文化財協会2002]、また、北西120mのOS02－8次調査では、豊臣期の達磨窯9基を検出している[大阪市文化財協会2003a]。このように、当地周辺では古墳時代・古代・豊臣期を中心として、重要な成果が得られている。

今回の調査地では、事前に大阪市教育委員会によって敷地内の試掘調査が行われた。その結果、現地表下0.7m以深で中世～徳川期の遺構面を確認したため、発掘調査を実施することになった（図2）。なお、調査地の現状に照らし、事業者との事前協議によって調査範囲の形状を変更し、これに伴って調査面積が56㎡から54㎡に減じた。

調査は8月17日より開始し、重機によって後述する第1層まで掘削を行った。その後、第2層以下

図1　調査地位置図

図2　調査区配置図

の掘削はすべて人力によって行い、遺構検出・掘下げ・記録などの作業を適宜行い、調査を進めた。現場での作業については、８月24日に機材類の撤収を含むすべての工程を完了した。

以下、本報告書で使用した方位は、座標北を基準にした。また、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、TP±○mと表記する。

2)調査の結果

ｉ)層序(図３・４)

現地表から地表下280cmまでの地層について、第０～３層に区分した。

第０層：アスファルト舗装や砕石からなる、現代の盛土層である。層厚は20cmほどである。

第１層:徳川期の盛土層である。オリーブ褐色のシルト質砂からなる。層厚は最大で40cmであった。

第２層：徳川期の盛土層である。黄褐色の中粒～粗粒砂からなり、若干のシルトを含む。層厚は18cmであった。本層からは18世紀代の陶磁器類が出土している。また、本層上面では後述する18世紀以降の井戸・土壙などを検出した。

第３層：段丘構成層である。最上部は橙色のシルト質粘土、TP＋11.1～11.9m以下は黄橙色を呈

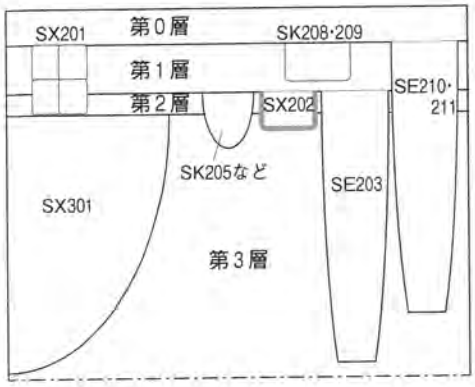


図３　層序と遺構の関係図

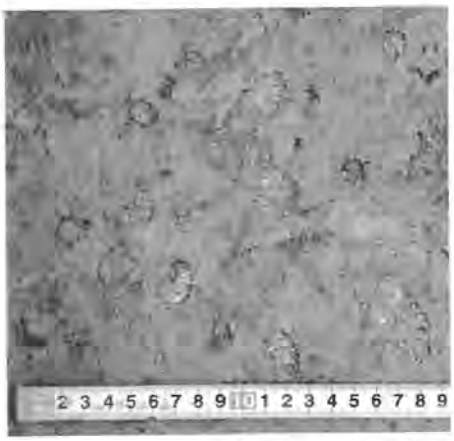


写真１　第３層上面のサンドパイプ

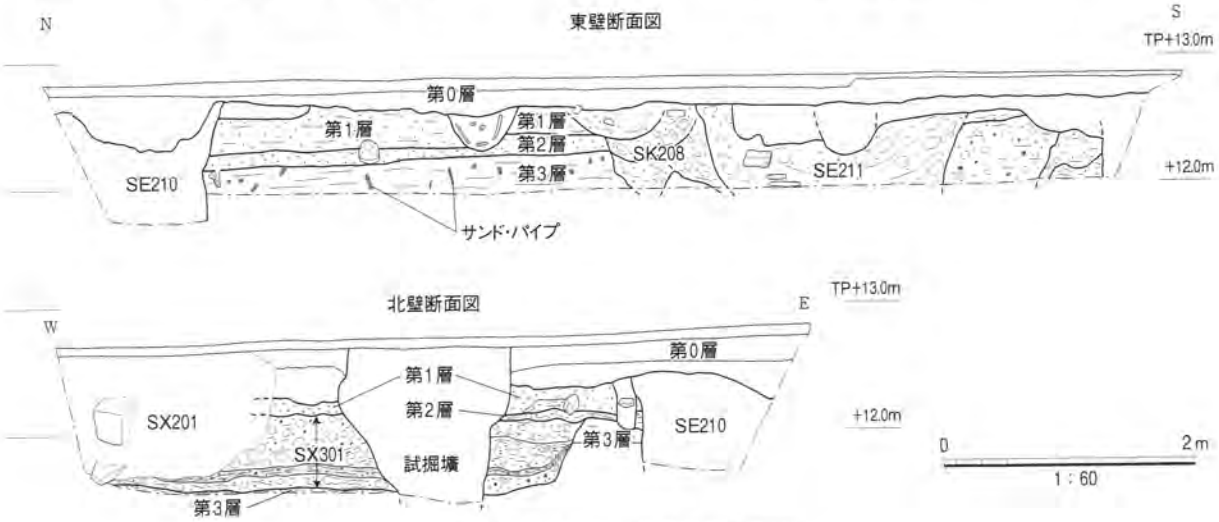


図４　調査区北壁・東壁地層断面図

するシルト質砂、以深は暗青灰色を呈する粘土からなる。層厚は120cmである。また、本層上面では直径２～３cmで主として垂直方向に延びるサンド・パイプが観察できた(写真１)。本層上面ではSX301を検出している。

ii)遺構と遺物

a．17世紀の遺構と遺物

第３層の上面において、調査区の西北部で大規模な土壙状のSX301を検出した(図５)。SX301の規模は東西3.6m以上、南北3.6m以上で、検出面からの深さは0.6mであった。当初は谷頭などの自然地形である可能性を考えたが、肩部に加工痕が観察できたこと、また遺構内の地層がほぼ水平に堆積しあまり大きな拡がりが想定できないことから、人工的な遺構であると考える。埋土は、最下部に第３層およびシルト質砂の偽礫があり、加工時形成層と考える。その上には、機能時の堆積物と考えられ

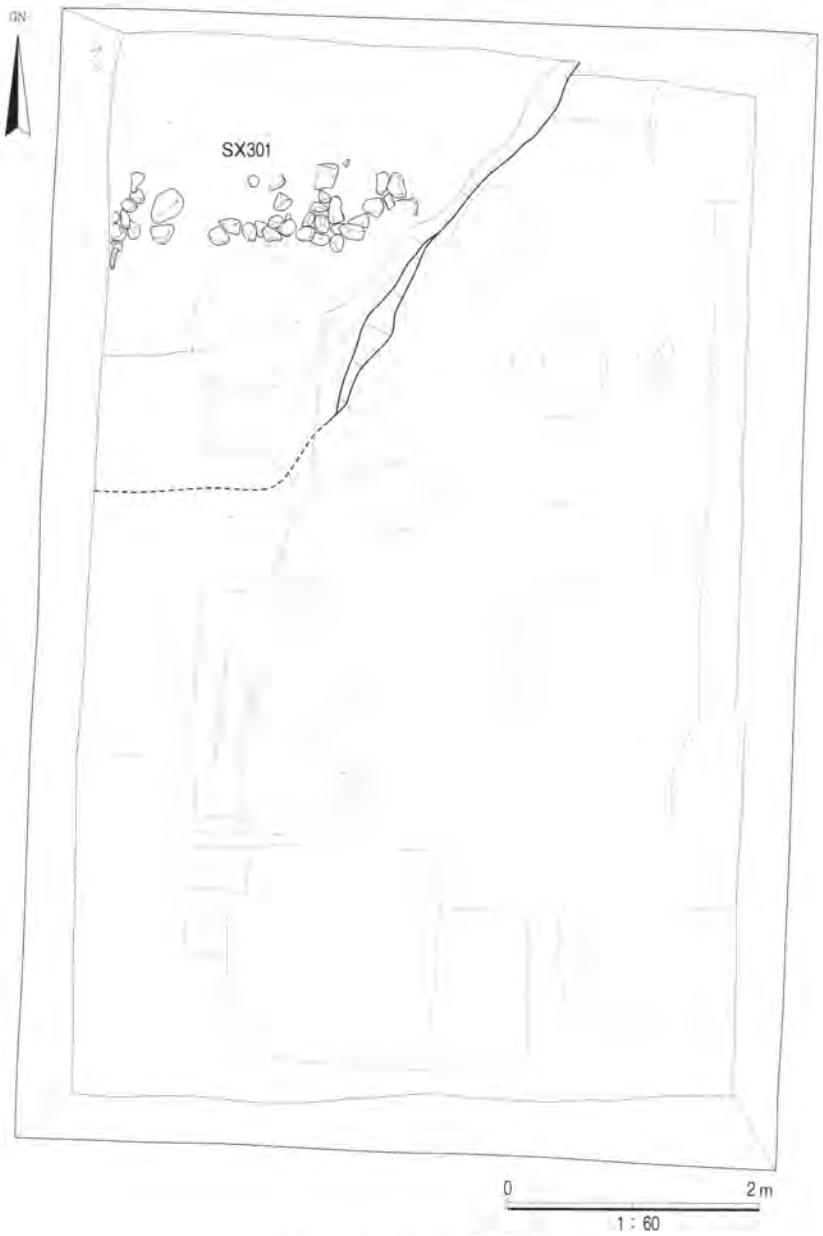
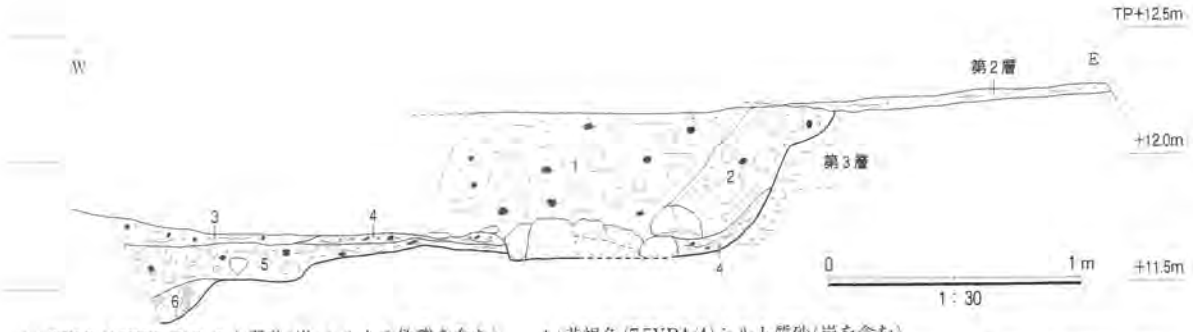


図５　17世紀の遺構平面図



1：黄褐色(10YR5/6)シルト質砂(炭、シルトの偽礫を含む)
2：褐色(7.5YR4/6)シルト質中粒～粗粒砂(炭を含む)
3：褐色(10YR4/6)シルト質砂(炭を含む)
4：黄褐色(7.5YR4/4)シルト質砂(炭を含む)
5：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質砂(炭およびシルト・第3層の偽礫を含む)
6：灰色(5Y6/1)第3層の偽礫・シルト質砂の偽礫

図6　SX301断面図

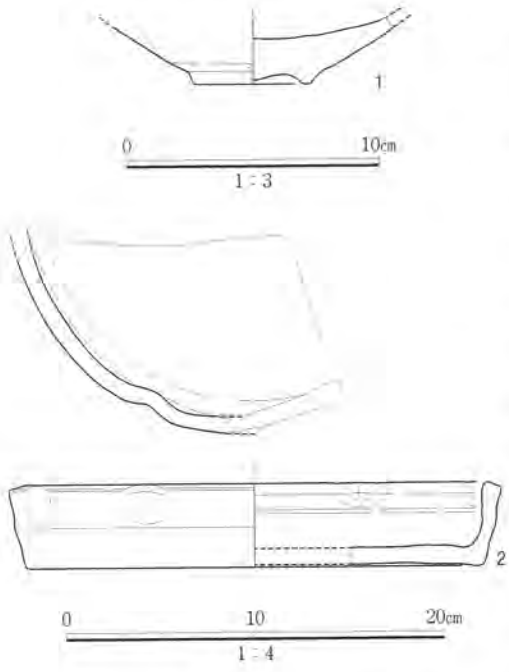


図7　SX301出土遺物実測図

る炭を含んだシルト質砂が堆積していた(図6)。その後、炭を含むシルト質中粒～粗粒砂、炭及びシルトの偽礫を含むシルト質砂によって埋め立てられ、東部ではその上部を第2層が覆っていた。また、底面近くには長径0.1～0.3mの亜角礫が東西に並んでいた。

当遺構の埋土には土師器や東播系を含む須恵器など中世以前の遺物も含まれるが、最下部から17世紀代のものとみられる肥前磁器が出土しており、また18世紀の盛土である第2層が当遺構を覆っていることから、当遺構は17世紀に機能し、18世紀には埋め立てられたものと考える。当遺構から出土した遺物のうち、肥前陶器皿1、丹波焼輪花鉢2を図化した(図7)。1は底部を兜巾状に削り出す。2は直径28cmと大型である。ロクロによって円形に整形したのち、輪花を押し出している。内面には自然釉が付着している。

b．18世紀以降の遺構と遺物

第2層の上面において、石垣SX201、井戸SE203・210・211、土壙SK204～209、SX202など、18世紀以降の遺構群を検出した。以下では、このうち特徴的な遺構について記述する。

SX201　調査区の西端で検出した。南北に延びる石垣であり、全長は8.5m以上ある。第3層を溝状に掘り込んだ中にコンクリートを基礎として流し込み、その上に2段以上の石材を設置する(図9)。石垣の目地にもコンクリートが充填されていた。石垣は東西とも面を持ち、現代盛土(第0層)が行われるまで敷地境として機能したものである。なお、コンクリートが使用されていることから、少なくとも明治期に降る遺構である。

SE203　調査区の西北部で検出した。直径約1.3mを測る不整形な円形の井戸であり、検出面からの深さは2.3m以上ある。下半は重機によって掘り下げたため詳細に埋土を観察することができなかったが、上半は褐色を呈し炭を含むシルト質砂で埋め立てられていた(図9)。当遺構からは堺擂鉢・瀬

戸美濃焼陶器・肥前陶器・肥前磁器・関西系陶器・金属製品・貝類・動物遺体・土製品が出土した。このうち、図10には肥前磁器3・4、堺擂鉢5を図示した。染付碗3は外面の3箇所に桐文のコンニャク印判を施し、底部内面は蛇ノ目釉剥ぎされる。染付皿4も内面底部を蛇ノ目釉剥ぎとするが、3・4ともにアルミナは塗布されていない。5は擂目が底部中央で交差する。注口部には「上長」銘が刻印されるが、1度失敗したため重ねて施されている。このうち5は18世紀前半のものであるが、3・4は18世紀中頃～後半に位置づけられ、当遺構が18世紀後半以降に埋め立てられたことがわかる。

SE210　調査区の東北隅で検出した井戸であり、本来は第1層上面の遺構である。直径約1.0m、検出面からの深さは1.0m以上あった。

SE211　調査区の東壁で検出した井戸である。SK208によって一部を破壊されていた。直径約1.6m、

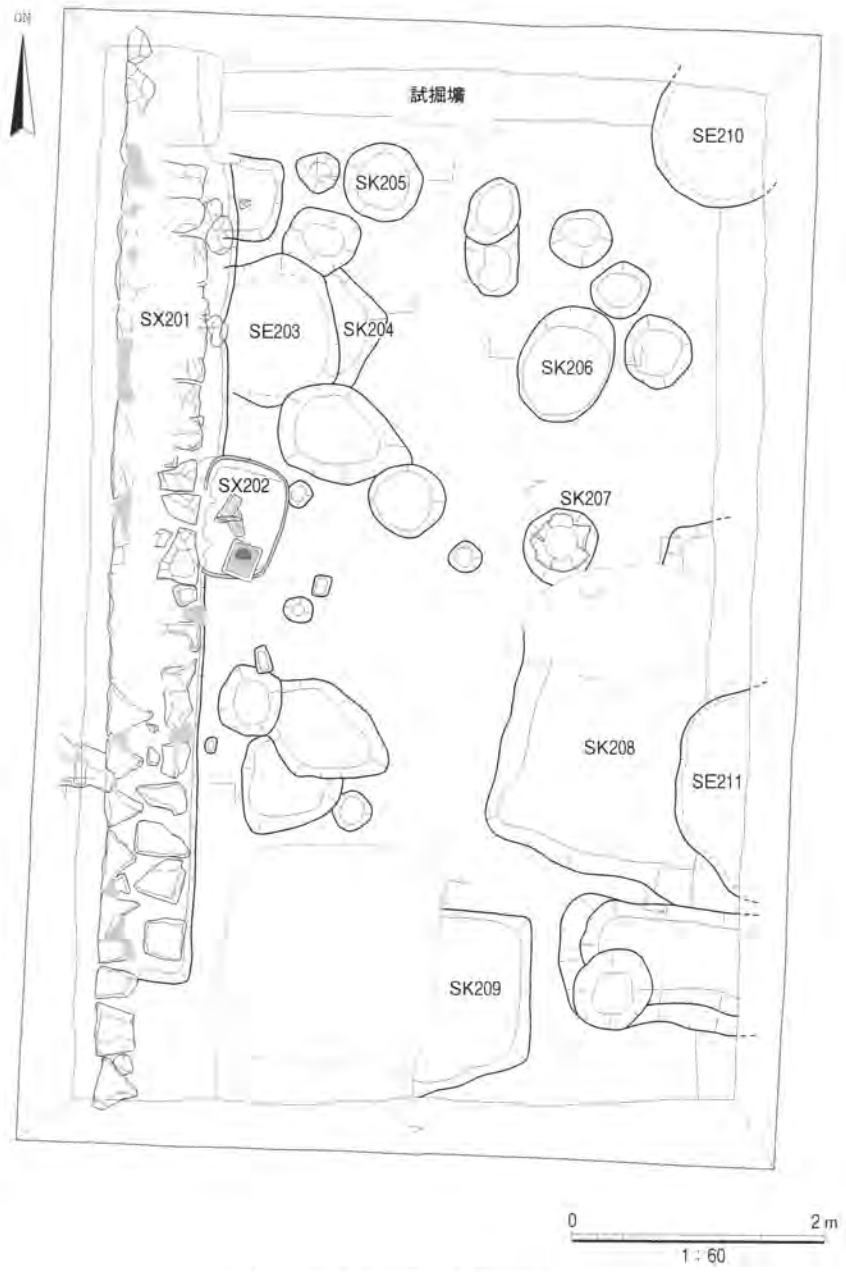


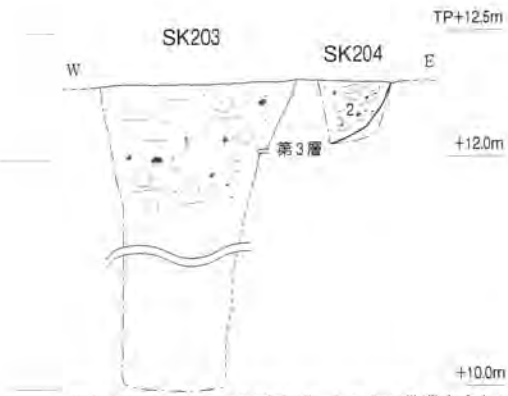
図8　18世紀以降の遺構平面図

検出面からの深さは0.7m以上あった。

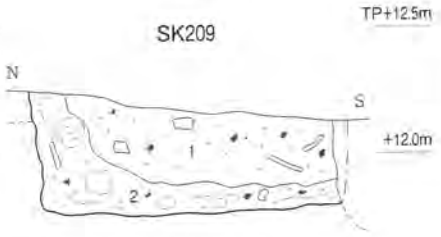
SK205　調査区の北部で検出した、円形を呈する土壙である。直径0.6mを測り、検出面からの深さは0.2mであった。当遺構からは土師質土器・丹波焼・肥前陶器・肥前磁器・貝類が出土し、このうち土師器6・7、肥前陶器8・9を図示した(図10)。手づくねの皿6は口縁の端部にススが付着し、

1：黒褐色(2.5Y3/2)シルト質砂礫
2：黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト(第3層の偽礫を含む)

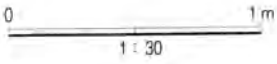
1：オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質シルト(炭、第3層の偽礫を含む)
2：黒褐色(7.5YR3/2)砂質シルト(漆喰・炭・焼土を含む)
3：にぶい黄色(2.5Y6/3)中粒砂～小礫
4：黄褐色(2.5Y5/4)第3層の偽礫・シルト質砂の偽礫



1：褐色(10YR4/4)シルト質砂(炭、シルトの偽礫を含む)
2：褐色(10YR4/6)シルト質砂(炭を含む)



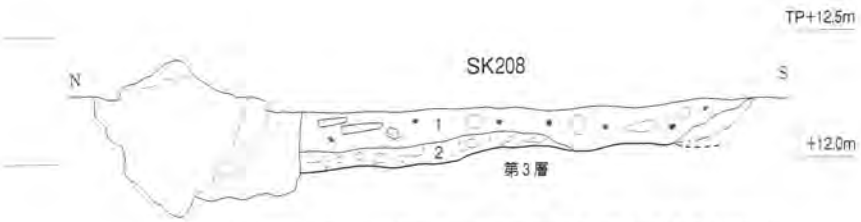
1：にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒～極粗粒砂
(焼土・焼瓦・炭を多く含む)
2：褐色(10YR4/4)シルト質中粒～粗粒砂
(第3層の偽礫・漆喰を含む)



1：暗褐色(7.5YR3/3)
シルト質中粒～極粗粒砂

1：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒～粗粒砂
(焼土・炭・漆喰、第3層の偽礫を含む)

1：褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂(焼土を含む)
2：黄褐色(2.5Y5/3)粗粒～極粗粒砂
3：オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質砂
(第3層の偽礫を含む)



1：黒褐色(10YR3/2)シルト質粗粒～極粗粒砂(焼瓦・焼土・炭を多く含む)
2：褐色(10YR4/6)シルト質中粒～極粗粒砂(第3層の偽礫を含む)

図9　徳川～明治期の遺構断面図

灯明皿として使用されたものである。壺形の7は内面全体、および外面の上部にススが付着する。8は京焼風の平碗であり、内面には楼閣山水を描く。底部外面には銘を有するが判読できなかった。三島手鉢9は口縁端部が強く屈曲している。これらは18世紀前半～中頃の資料である。

SK206　調査区の東部で検出した。長軸1.0m、短軸0.6mの楕円形を呈する土壙である。検出面からの深さは0.1mであった。当遺構からは刷毛目の肥前陶器碗が出土した。

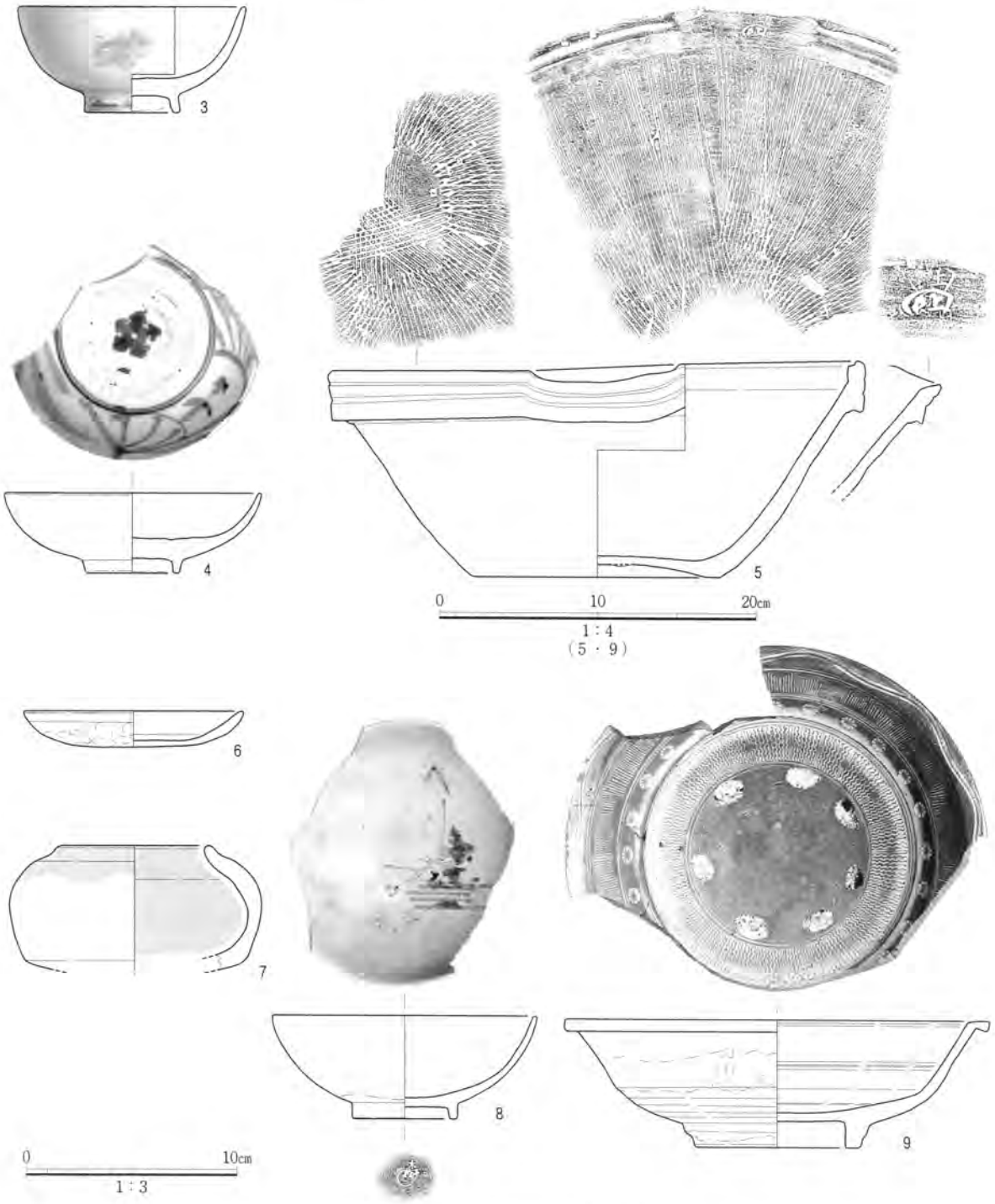


図10　SE203・SK205出土遺物実測図
SE203（3～5）、SK205（6～9）

写真２　SX202検出状況(北東から)

SK207　調査区の東部で検出した、円形を呈する土壙である。直径0.6mを測り、検出面からの深さは0.1mであった。土壙の底には丹波焼甕の底部が据えられ、漆喰で固定されていた(図９)。

SK208　調査区の東部で検出した。南北2.0m、東西2.0m以上を測る土壙である。調査区東壁の観察から、本来は第１層上面に属する遺構である。当遺構の下部には第３層の偽礫を含むシルト質中粒～極粗粒砂が堆積し、加工時形成層と考えられる。その上位には焼瓦・焼土・炭を多量に含むシルト質粗粒～極粗粒砂が堆積していた(図９)。堆積状況から、火災で生じた廃材を廃棄するために掘削された土壙である。

SK209　調査区の南部で検出した。南北1.4m、東西0.7m以上を測る土壙である。埋土の状況はSK208と同様であり、当遺構も火災で生じた廃材の廃棄土壙である。

SX202　調査区の東部で検出した性格不明の遺構である。平面形は長辺1.0m、短辺0.7mの長方形を呈し、西側はSX201によって破壊されていた。遺構はまず土壙状に掘削したのち、底部に中粒砂～中礫を固く敷きつめ、その後、側面及び底部に厚さ３～４cmの漆喰を貼っていた。漆喰の上面には板が置かれていた(写真２)。埋土は大きく２分でき、下部は漆喰･炭･焼土を含む砂質シルト、上部は炭･第３層の偽礫を含むシルト質砂であった(図９)。また、土壙の上部で漆喰を充填した瓦質土器16を検出している。壁･床面が漆喰貼りであること、出土遺物に16やスラグの付着する土製品21があること、埋土に炭が多く含まれることなどから、遺構の機能の推定を試みたが明らかにできなかった。

当遺構からは、土師器･瓦質土器･丹波焼･備前焼･常滑焼･瀬戸美濃焼陶器･関西系陶器･肥前陶器･肥前磁器・瓦・金属製品・石製品・土製品・ガラス・貝類が出土した。このうち、土師器10・17、瀬戸美濃焼陶器11･12、関西系陶器13、肥前磁器14･15、瓦質土器16、土製品18～21を図11に図示した。口径6.6cmと小型の皿10は口縁部にススが付着し、灯明皿として使用されたものである。摘みを有する小型の蓋11は、外面に緑釉と鉄絵で文様を描く。焙烙17は型作りで、底部外面には雲母・ススが顕著に付着している。12は内外面とも刷毛目の碗である。碗13は碁笥底であり、鉄釉と灰釉を掛け分ける。底部内面には３箇所目跡が残るが、目跡上に花文状の上絵を施し、これを目立たなくしている。外面には草花文を描き、赤色で押印をしているが、銘は判読できない。碗14は腰の張った形態で、内面の口縁端部を釉剥ぎしているため蓋を伴うものとわかる。外面には氷裂文と花文を描く。碗15は、意匠化された「寿」を外面に染付している。方形で鉢形を呈する瓦質土器16は、底部を焼成後に穿孔し、内部には漆喰が充填されている。

土製品18～20のうち、18は花と唐草文をあしらった独楽であり、19は鳥形、20は蓮座に座る仏像を象ったものである。19・20はともに型合わせで、20の底面には直径1.6cmの穴が空けられる。21は用途不明の土製品である。外面は被熱により表面がガラス化・発泡し、スラグが付着している。一方で内面には植物の繊維痕が観察できるが、スラグは付着していない。共通した特徴をもった資料として、

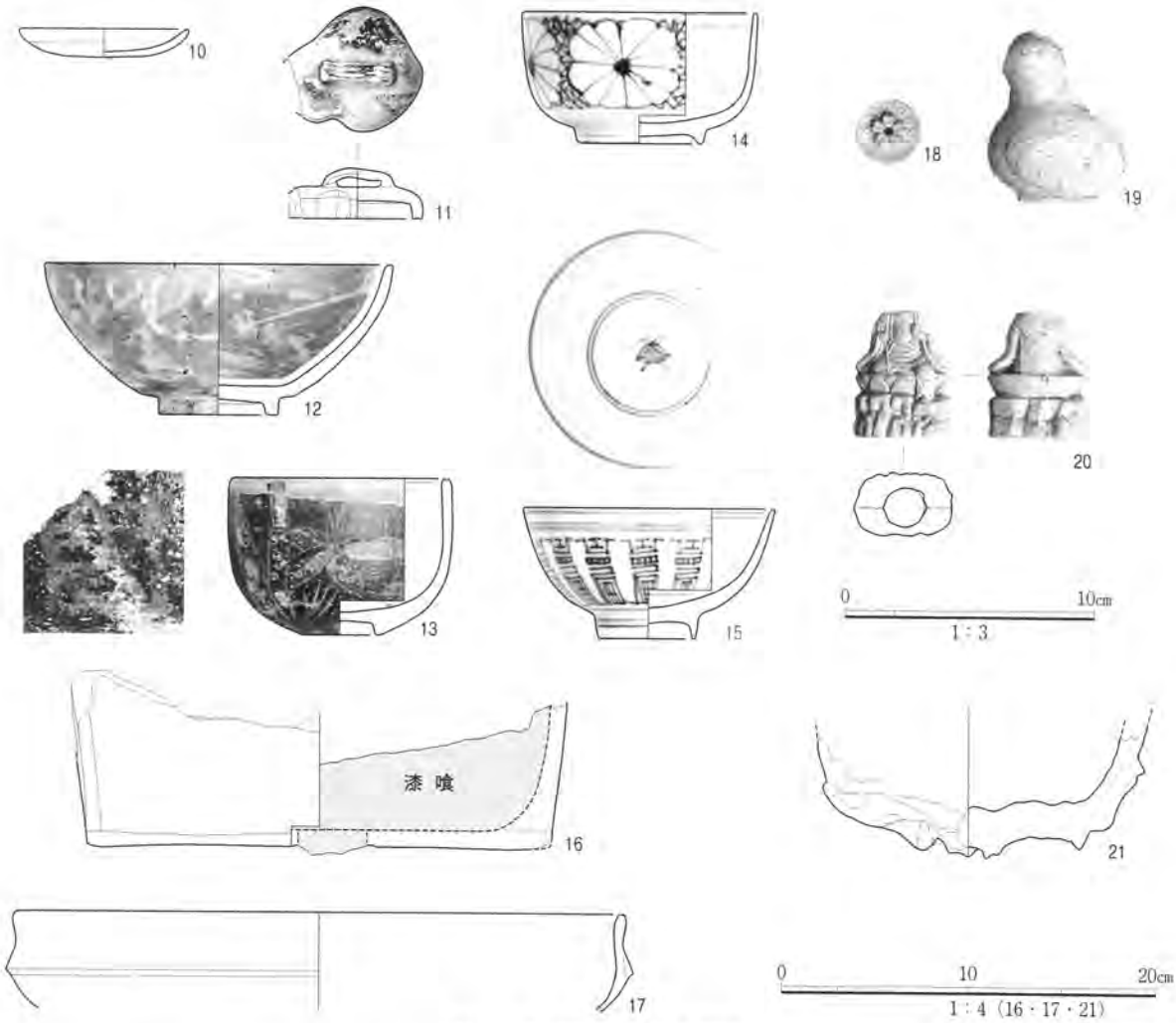


図11　SX202出土遺物実測図

豊臣期の遺物ではあるが、大坂城跡（OS89－148次）出土品に類例がある［大阪市文化財協会2003b］。以上、SX202出土資料には18世紀代に遡るものも含まれるが、おおむね19世紀前半に属する。

3）まとめ

今回の調査では、徳川期の遺構を検出することができた。絵図との対比から、17世紀代には医者であった古林家が占地していたと推測でき、SX301はその宅地に伴う遺構であった可能性がある。また、今回の調査では豊臣期以前に遡る遺構は検出できなかったが、当地が傾斜地に立地するため、開発が遅れた可能性も考えうる。周辺での今後の調査成果を考えあわせながら、当地における各時代の開発の様相を評価する必要があるだろう。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「大坂城跡発掘調査（OS05－7）報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2005)』、pp.119－124

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「大坂城跡発掘調査（OS06－1）報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地

発掘調査報告書(2006)』、pp.97－104
大阪市文化財協会2002、「OS99－59次調査」『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1999・2000年度－』、pp.84－89
大阪市文化財協会2003a、「OS02－８次調査」『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－2001・2002年度－』、pp.49－74
2003b、「OS88－56次および89－148次調査」:『大坂城跡』Ⅶ、pp.98－104
寺井誠2007、「孝徳朝難波遷都に伴う古墳の破壊」『大阪歴史博物館研究紀要』第６号、pp.49－62

調査区北壁地層断面(南東から)

調査区東壁地層断面(北西から)

17世紀の遺構
（北から）

SX301
（北西から）

18世紀以降の遺構
（北から）

・調 査 個 所　大阪市中央区大阪城大阪城公園内山里丸
・調 査 面 積　434㎡
・調 査 期 間　平成23年10月24日～平成24年３月28日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
・調査担当者　次長　南秀雄、市川創、谷﨑仁美、白川靖祐

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は特別史跡大坂城跡の山里丸に位置する(図１)。山里丸は天守閣の北側に接して設けられた一段低い曲輪であり、1624(寛永元)年～1626(同３)年に実施された大坂城再建第２期工事の本丸普請に伴って築造され、徳川期には大坂城を警備する加番小屋が置かれた(図２)。『大坂城普請丁場割之図』によれば、山里丸の丁場の担当は松平筑前守(加賀前田利常)である。

これまで大坂城の山里丸では、石垣の保存修理作業の一環で、平成17・20～22年度に発掘調査が行われている(図１)。今回も徳川氏大坂城の状況を明らかにし、雁木の修復を含めた今後の史跡整備

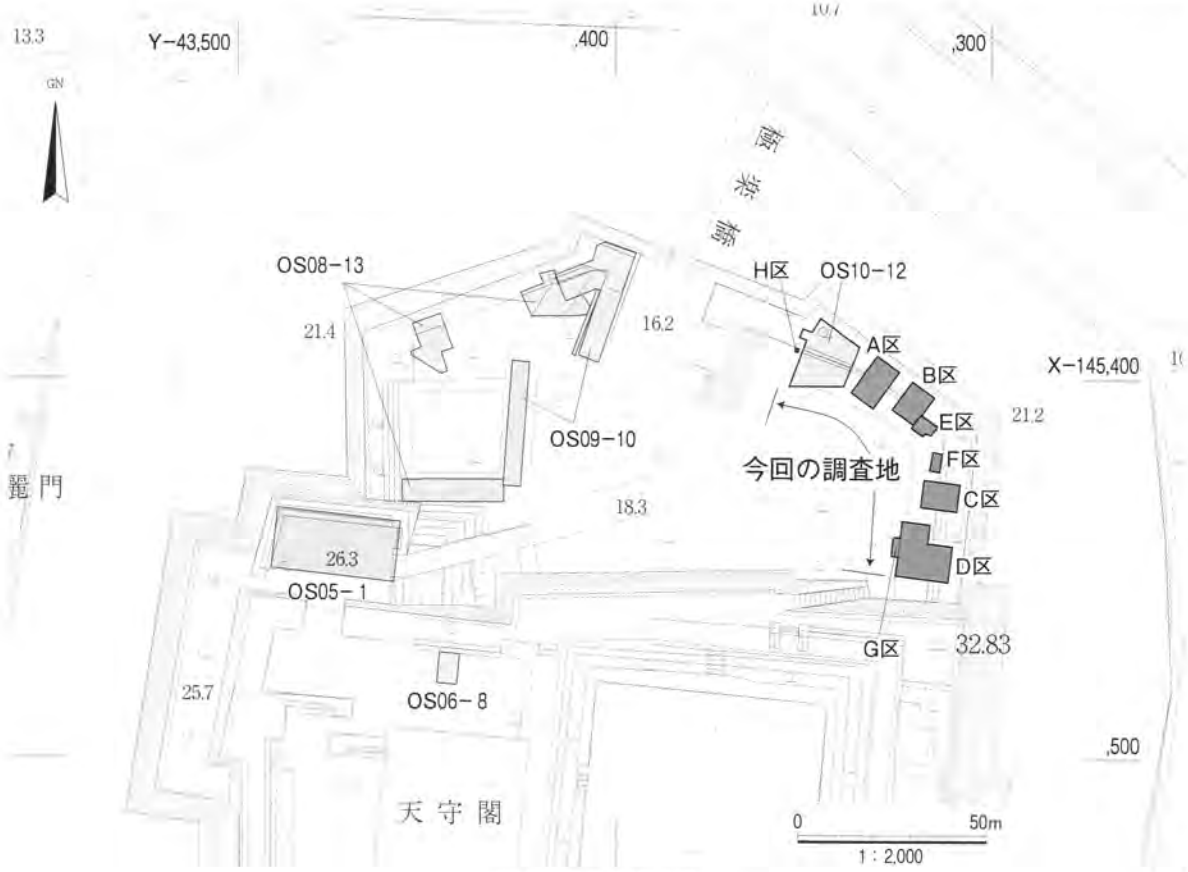


図１　調査地位置図

に際しての資料を得ることを目的に調査を実施した。

調査に際してはまず、山里丸東半の北縁・東縁部にA～D区の4箇所の調査区を設定した。その後、調査の進捗状況を受け、特別史跡大坂城跡石垣修復検討会議および大阪市教育委員会からの指示により、E～H区を新たに設定した。各調査区の調査目的、面積、および主要な成果について、表1にまとめたので参照されたい。また以下の報告文では、多聞櫓跡を上段、雁木部はそのまま雁木部、雁木より下の平坦部を下段と呼ぶ。

発掘調査は、平成23年10月24日から開始した。調査方法は、下段は現地表面から約60cmまでを重機により除去し、それ以下を人力によって掘削した。上段についてはすべて人力で掘削を行った。下段の徳川期の遺構面、雁木および上段の礎石などの検出状況を空中写真測量によって記録した。また、必要に応じて断割り、深掘りなどを実施した。調査途中の平成23年12月24日には現地説明会を行い、

表1　各調査区の概要

調査区名	面積(㎡)	調査目的	調査概要
A区	86	雁木部分を中心とする徳川期大坂城の構造確認	・第二次世界大戦時の爆撃で遺構は大きく破壊されていたが、雁木の根石を確認。 ・断割りにより、雁木の設置工程を確認。
B区	66		・第二次世界大戦時の爆撃で遺構は大きく破壊されていたが、雁木の根石を確認。
C区	69		・上段部：戊辰戦争時に焼失した多聞櫓の礎石などを確認。 ・雁木部：2時期の裏込め石を確認し、徳川期に雁木の修築があったことが判明。 ・下段：徳川期の土壙を検出したほか、深掘りでは豊臣期の金箔瓦が多く出土。
D区	172		・上段部：戊辰戦争時に焼失した多聞櫓の礎石などを確認。 ・雁木部：雁木の内部に石垣状の遺構を検出。排水路設置に伴って雁木部の補強を目的としたものか。 ・下段部：徳川期の礎石などを検出したほか、集水枡および排水路を検出。深掘りでは豊臣期の金箔瓦が多く出土。
E区	19	菱櫓の構造確認	・菱櫓部の石垣の形状が、少なくとも幕末には現状のものであったことを確認。
F区	13		
G区	8	集水枡の接続する水路の確認	・集水枡に接続する暗渠を確認。
H区	1	雁木耳石の状況確認	・雁木および耳石の根石を検出。
合計	434		

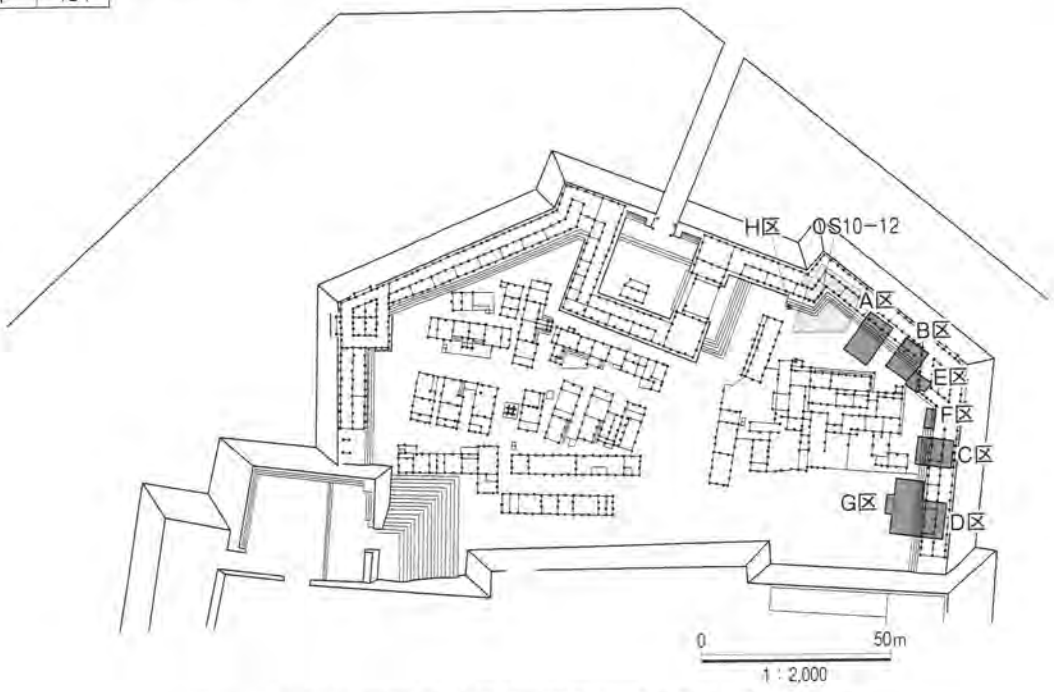


図2　幕末頃の大坂城山里丸建物配置図（[松岡利朗1988]をトレース）

約1,300名の参加者を得た。平成23年12月27日には遺跡調査を終え、遺構面に保護砂を敷き詰めたのちに埋戻し作業を行った。年末・年始の休暇を挟み、平成24年１月12日には撤収作業を含む発掘調査作業を完了した。

また、基準点は専門業者がスタティック測量で測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋○mと記した。

そのほか、本事業に係る調査の一環として、今年度は発掘調査と別に、山里丸における電気探査、航空機からの写真撮影、外部のカメラマンに委託しての出土遺物撮影を実施している。

〈調査の結果〉

１．層序

D区の堆積状況を基準として、現地表面下4.0mまでの地層を第１～６層に区分した(図３～６)。

第１層：現代の盛土層で、各区の下段に分布した。層厚は最大で30cmであった。

第２層：第二次世界大戦後の盛土層で、大戦時の爆撃によると思われる破壊と、その後の修復を受けたA・B・E区に分布した。層厚は最大で105cmであった。

第３層:近代の盛土層で、層厚は最大で100cmである。各調査区の下段に分布した。第３層上面では、1945年の大阪大空襲の際のものとみられる焼土や煉瓦・コンクリート・瓦片を多く含む土壙や、土管、コンクリート基礎を検出したほか、大戦時の爆撃によるものと思われる大規模な炸裂壙を検出した。

第４層：1868(明治元)年の戊辰戦争後の戦災処理に伴うとみられる焼土整理層である。明赤褐色の中粒～極粗粒砂からなり、二次的に被熱した瓦および焼土を多量に含む。層厚は最大で30cmである。C・D区の上段に分布したほか、D区SK220の埋土上半部やG区SD402の埋土として存在した。本層からは、瓦・焼土のほか、各産地の陶磁器類や鉄釘などが出土した。なお、陶磁器類には瀬戸美濃焼磁器が含まれていた。

第５層：徳川期の雁木設置に伴う裏込め層で、第5a・5d層に２分した。第5a層は黄灰色の細粒～中粒砂からなり、中～大礫を多く含む。これらの礫は超角礫～角礫のものが多く、石材加工に伴って生じた割石などが含まれているとみられる。層厚は40cmほどである。本層はC・D区雁木部において第5b層よりも上位に存在し、雁木石は本層上に設置されていた。本層からは多量の瓦類のほか、肥前陶

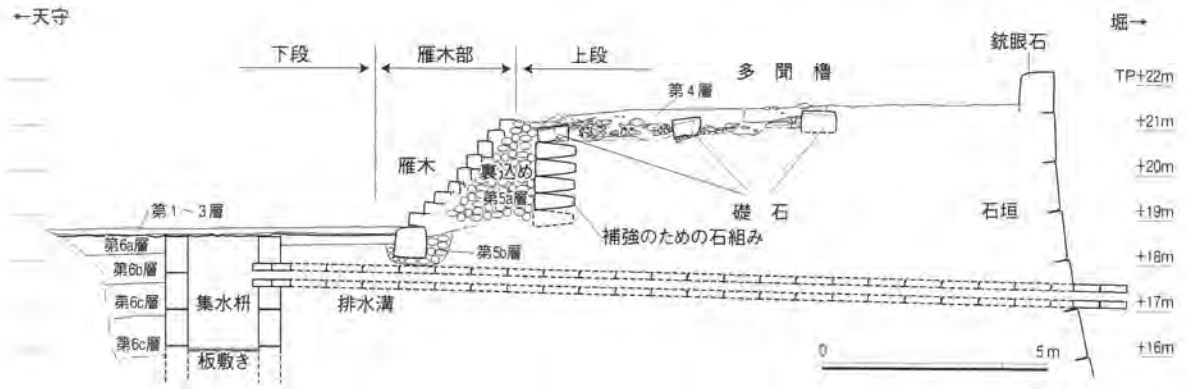


図３　地層と遺構の関係図

器・肥前磁器・軟質施釉陶器などが出土している。時期を特定できる遺物は少ないが、肥前陶器の刷毛目碗(図16－13)などにより、本層の時期は18世紀以降である。本層が存在することにより、18世紀以降に雁木石の補修があったことがわかり、構造上、その際には上段に存在した多聞櫓も補修が行われたことが想定できる。

第5b層は暗褐色のシルト質細粒砂からなり、中～大礫を非常に多く含む。これらの礫は亜円礫～円礫のものが多く、第5a層に含まれるものよりも円磨度が高い。層厚は80cm以上ある。本層はA～D区の雁木部に分布しており、このうちA・B区では後述する第6c層を布掘り状に掘り込み、その中に本層を充填し雁木の根石を設置する状況が確認できた(図4・5)。本層からは瓦が出土した。遺物から地層の年代を決定することはできないが、検出状況からみて、徳川氏による大坂城再築に伴う裏込め層と考えられる。

第6層：徳川期の盛土層で、第6a～6d層に区分した。第6a層は黒褐色のシルト質細粒～中粒砂からなり、層厚は40cmであった。出土遺物から地層の時期は19世紀前半とみられ、D区のみに分布した。D区の集水枡SK220は、本層上面で検出したものである。

第6b層は18世紀以降の盛土層で、暗褐色のシルト質砂からなり、炭・礫を含む。層厚は最大で50cmで、各区の下段に分布した。本層からは肥前磁器や瓦などが出土している。また本層上面では、C

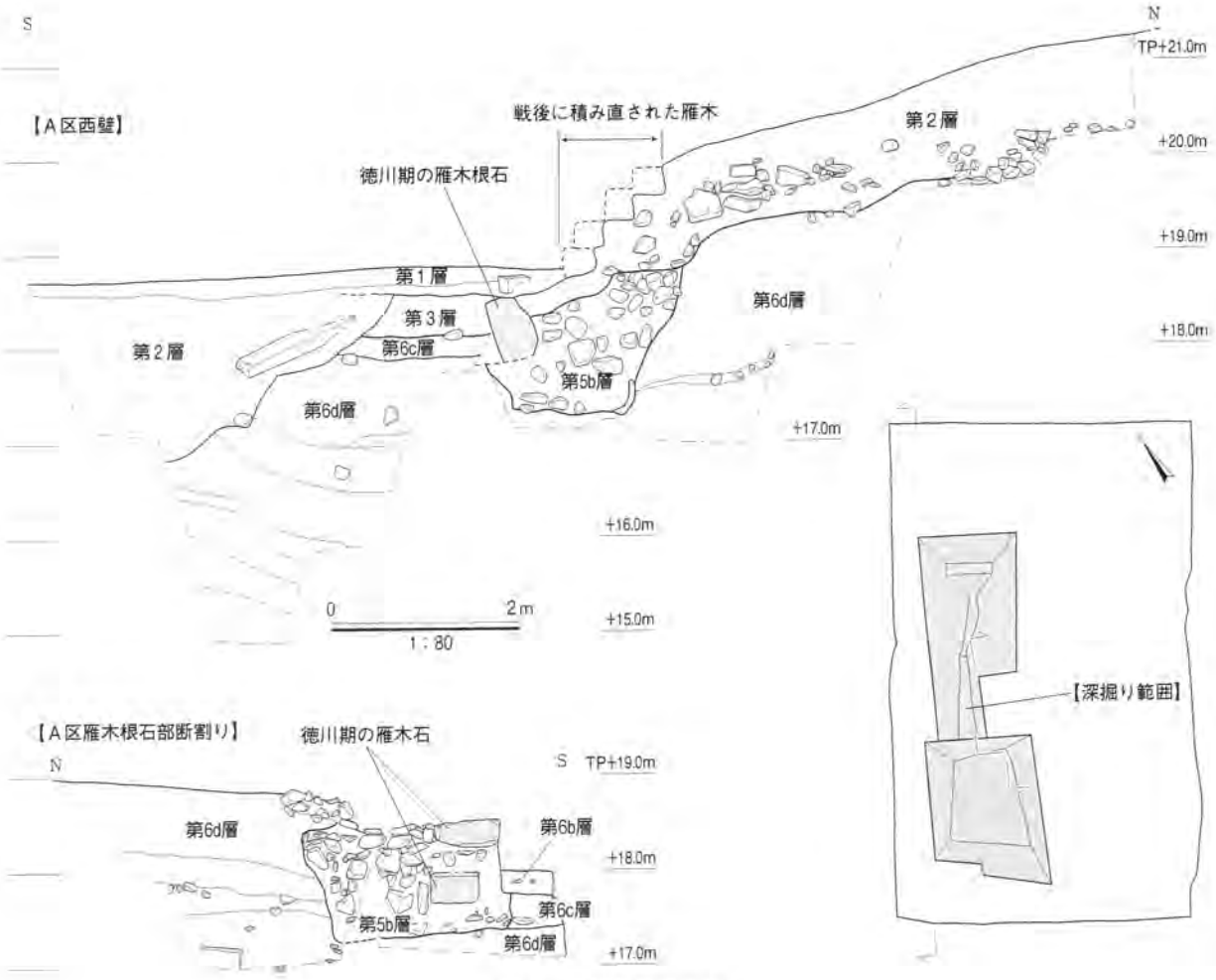


図4　A区地層断面図

区SK231、D区SK221・233・SD232などの遺構を検出している。

第6c層は17世紀の整地層で、本層上面が徳川氏による大坂城再築当初の遺構面とみられる。にぶい黄褐色のシルト質砂からなり、炭・礫を含んでいた。層厚は最大で25cmである。A～G区の下段に分布した。本層上面ではA区SK274などの遺構を検出している。

第6d層は徳川氏による大坂城再築時の盛土層である。主としてにぶい黄褐色を呈するシルト質砂からなり、段丘構成層や湿地性堆積物に由来すると思われる偽礫を含んでいた。また下部では、焼土を比較的多く含んでいた。A区の下段で現地表面から400cmまでの地層を確認したほか、各区の深掘り

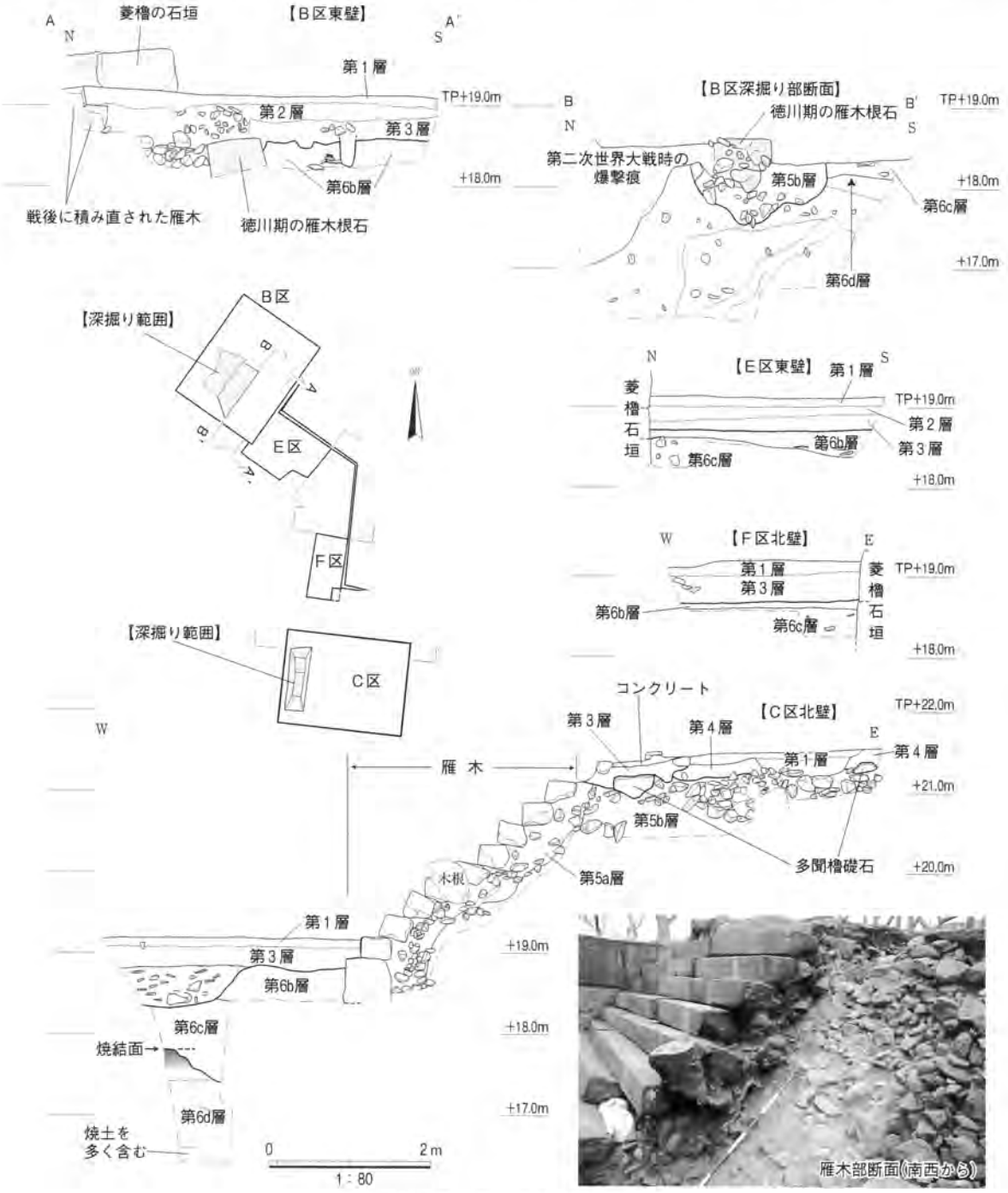


図5　B・C・E・F区地層断面面図

部で確認を行ったが、下位の遺構面には到達しなかった。いっぽう、C区では本層上面が被熱しており、またD区では本層上面に焼土が層状に二次堆積するなど、山里丸東端部では本層上面が遺構面となる可能性が高い。またD区では、盛土工事に係わると思われる杭の痕跡を確認したほか、金箔瓦が集中して出土する部分があった(図6)。本層からは土師器・須恵器・瓦質土器・備前焼・瀬戸美濃焼陶器・瓦などが出土しているほか、1点のみかつ細片であるが、C区で肥前磁器が出土している。

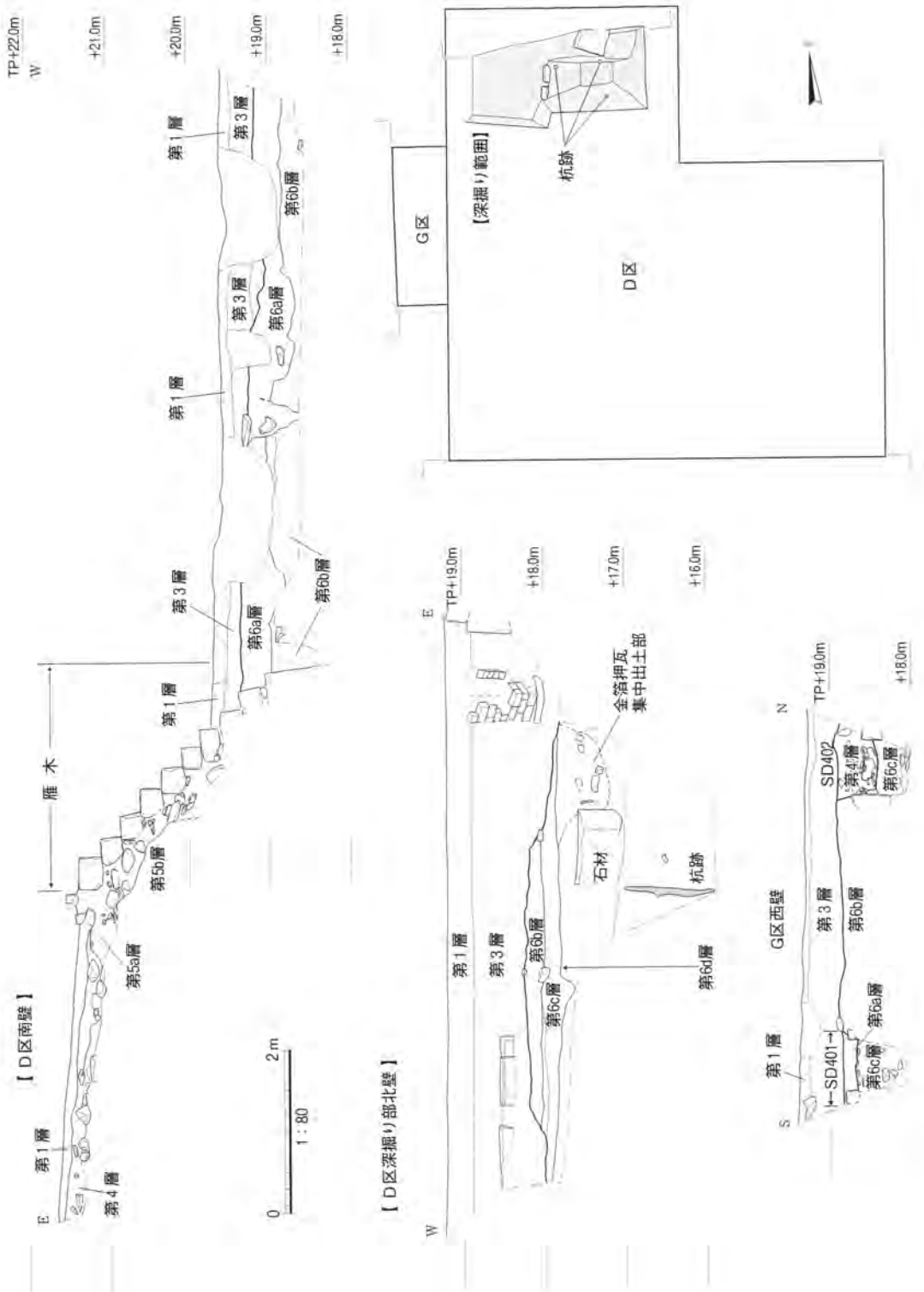


図6　D・G区地層断面図

2．遺構

ⅰ）A区の遺構（図７）

上段　第１・２層が深くまで及んでおり、徳川期の多聞櫓に係わる構造はまったく残存していなかった。

雁木部　雁木部でも第１・２層が深くまで及んでおり、徳川期の雁木はその大部分が失われていた。しかしながら、根石７基（6.0m分）および裏込め（第5b層）を確認することができた。高さが比較的低い根石には、下にさらにもう１石を置き補強する状況が認められた（図７立面図）。また層序で述べたとおり、根石は第6d層を布掘り状に掘り込んだ中に設置され、根石の周囲は第5b層によって充填されていた（図４）。根石の上面は多くのものが雁木石が乗る堀側が一段低く加工されていたが（図７－①）、堀側を高くするもの（同②）も認められた。

下段　第6b層・第6c層の上面で、それぞれ土壙群を検出した。第6b層上面の土壙群からは18世紀～幕末、第6c層上面の土壙群からは17世紀の遺物が出土している。このうちSK274は第6c層上面で検出した遺構である。南北2.8m、東西1.6m以上の規模があり、遺構の東部は調査区外へと続く。検出面からの深さは0.6mであった。当遺構からは土師器や肥前磁器が出土している（図16）。

ⅱ）B区の遺構（図８）

上段　第二次世界大戦時の爆弾の炸裂壙によって遺構が激しく破壊されており、徳川期の多聞櫓に係わる構造はまったく残存していなかった。その破壊の範囲は、雁木部・下段にも及んでいる。

雁木部　徳川期の雁木はその大部分が失われていたが、調査区東端で根石３基を検出することができた。このうち西端の１基は、ほかの２基と直線上に並ばず、爆撃によって元位置から移動した可能性が高い。

下段　西半は上述の大土壙によって遺構が失われていた。東半では、第6b層上面において土壙３基を検出した。

ⅲ）C区の遺構（図９）

上段　多聞櫓を構成する礎石９基を検出した。このうち１基（図９－①）は近代以降に設置された石列に組み込まれていたが、石材の大きさや礎石の配置から考えて、元位置から大きく動かされずに再利用されたものと考えた。また、礎石には被熱痕が観察できるものがあった。

雁木部　徳川期の雁木が良好に残存していた。層序で述べた通り、裏込めには第5a・5b層の２時期があり、18世紀以降に雁木の積直しが行われたことがわかる。第5a層に伴う雁木は根石を含め10段である。

下段　第5a層の上面で土壙群を検出した。このうちSK213は壁面を漆喰貼りとするもので、長径1.3m、短径1.0mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.2mであった。瓦質土器・関西系陶器・肥前磁器のほか、用途不明の土師器（図16－14）などが出土している。

ⅳ）D・G区の遺構（図10・11、写真１～３）

上段　多聞櫓を構成する礎石７基を検出した（図10）。礎石の配置から考えて、後述する**石垣状遺構**は礎石としての役割も担っていたものと考えられる。礎石には被熱痕が確認できるものがあったほか、

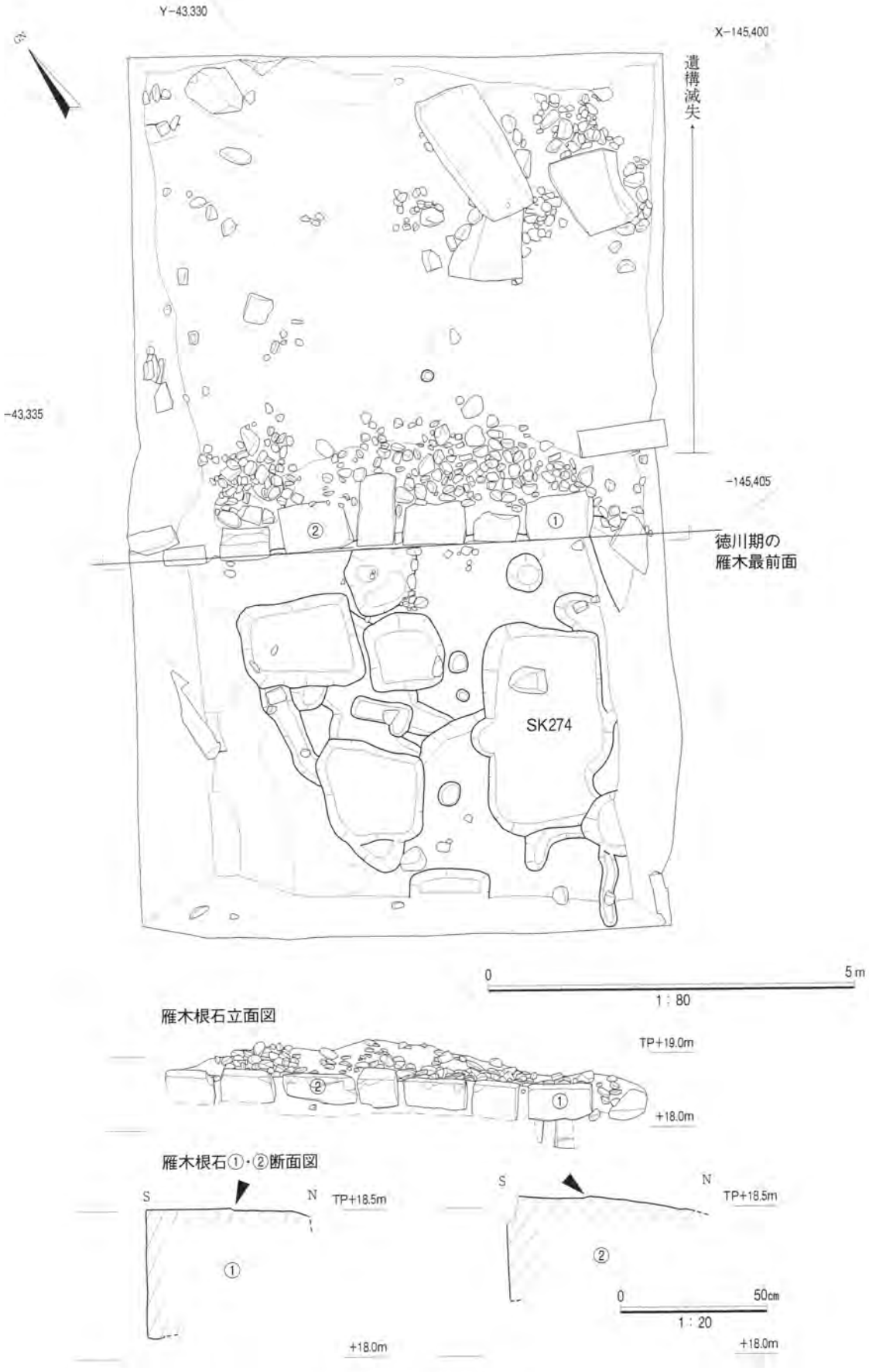

Y−43,330
X−145,400
遺構滅失
−43,335
−145,405
徳川期の
雁木最前面
②
①
SK274
0
5m
1：80
雁木根石立面図
TP+19.0m
②
①
+18.0m
雁木根石①・②断面図
S
N
TP+18.5m
①
+18.0m
S
N
TP+18.5m
②
0
50cm
1：20
+18.0m

図7　A区遺構実測図

礎石間の裏込めは線上に窪む部分があった。大手門多聞櫓の構造を参照すると[大阪市1969]、木製土台の痕跡である可能性が高い。

雁木部　徳川期の雁木が良好に残存していた。**石垣状遺構**前面の裏込めはすべて第5a層であり、全体的にC区よりも使用される礫のサイズが大きく、また下部ほど大形の割石を使用していた。雁木は根石を含み10段である。なお、雁木および裏込め(第5a層)を除去した段階で**石垣状遺構**を検出したが、SK220と密接に係わる構造であるため、これと併せて後述することとする。

下段　第6a層上面では集水枡SK220およびこれに接続する排水路SD222を、第6b層上面ではSK220に接続する水路SD401・402のほか、SK221・233を検出した(図10・11)。

SK220　壁面を花崗岩で構築した集水枡である。平面形は南北に長い長方形を呈し、内法は南北3.9m、東西3.0mである。また検出面からの深さは2.7m以上ある。壁面の花崗岩の大きさは不定だが、一辺が1.0mを越えるものもあり、比較的大形の板石を使用している。上から2段目の石材には東西の対応する位置に切込みが3対設けられており(図11)、木材などを渡して蓋を架けるための構造であると思われる。埋土は上半が中粒～粗粒砂を含む焼瓦・焼土層、下半が細粒～中粒砂が挟在する砂質シ

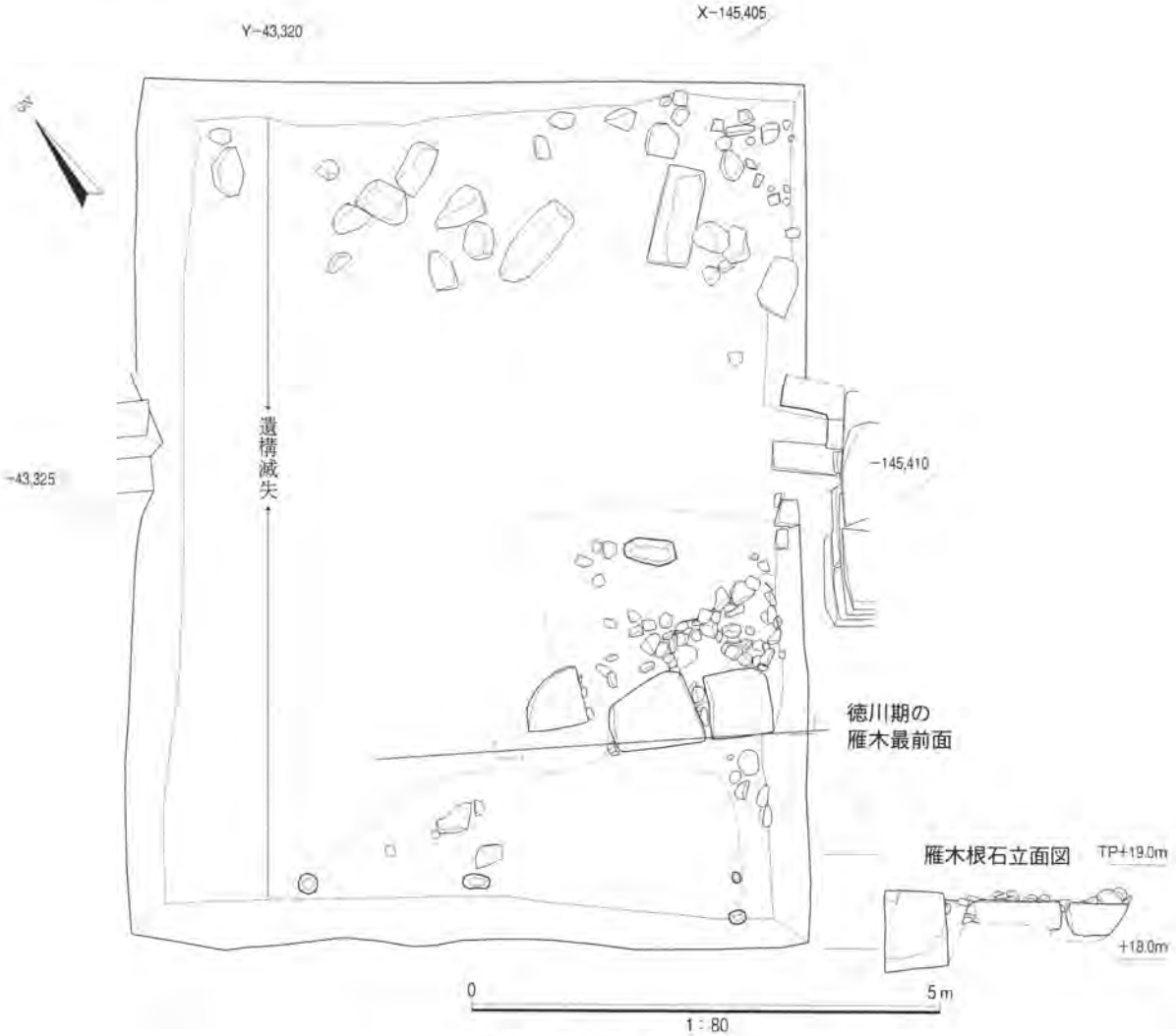


図8　B区遺構実測図

ルトで(図11、写真１－①・②)、このうち下半は自然堆積層であり、かつ当遺構の機能時堆積層である。上半の焼瓦・焼土層からはほかに幕末期の陶磁器類や鉄釘のほか、わずかに煉瓦が出土している。戊辰戦争時に生じた廃材を、明治時代になって当遺構に投棄したものであろう。下半の自然堆積層からは、肥前磁器・瀬戸美濃産磁器・関西系磁器・土師器など19世紀前半を中心とする磁器の遺物が出土している(図15)。この自然堆積層を除去した段階で、平面的に敷き詰められた板の痕跡を検出した。板は幅約21cmで鎹状の鉄製品で連結されており(写真１－③)、また側面には下方から打たれた鉄釘が

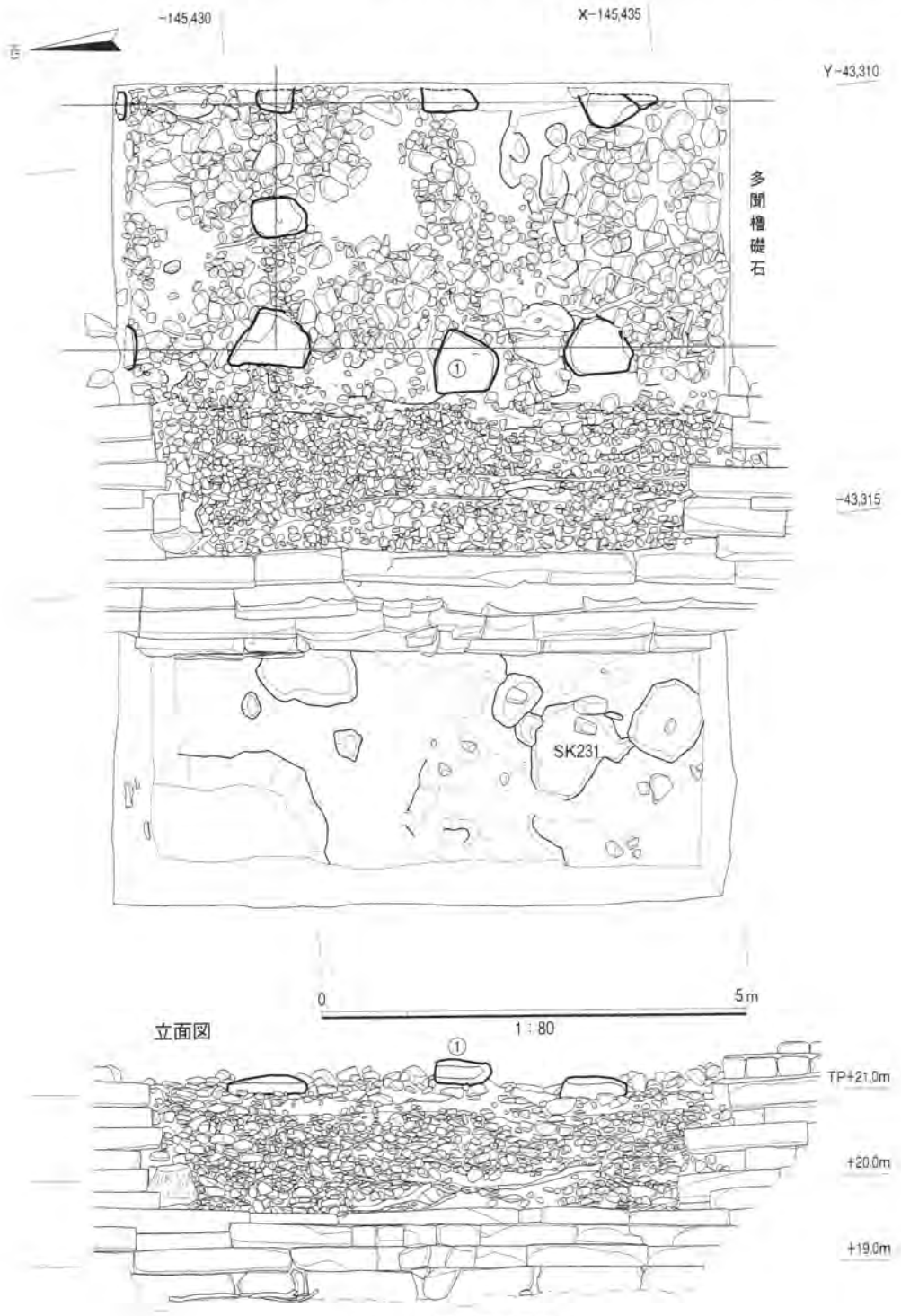
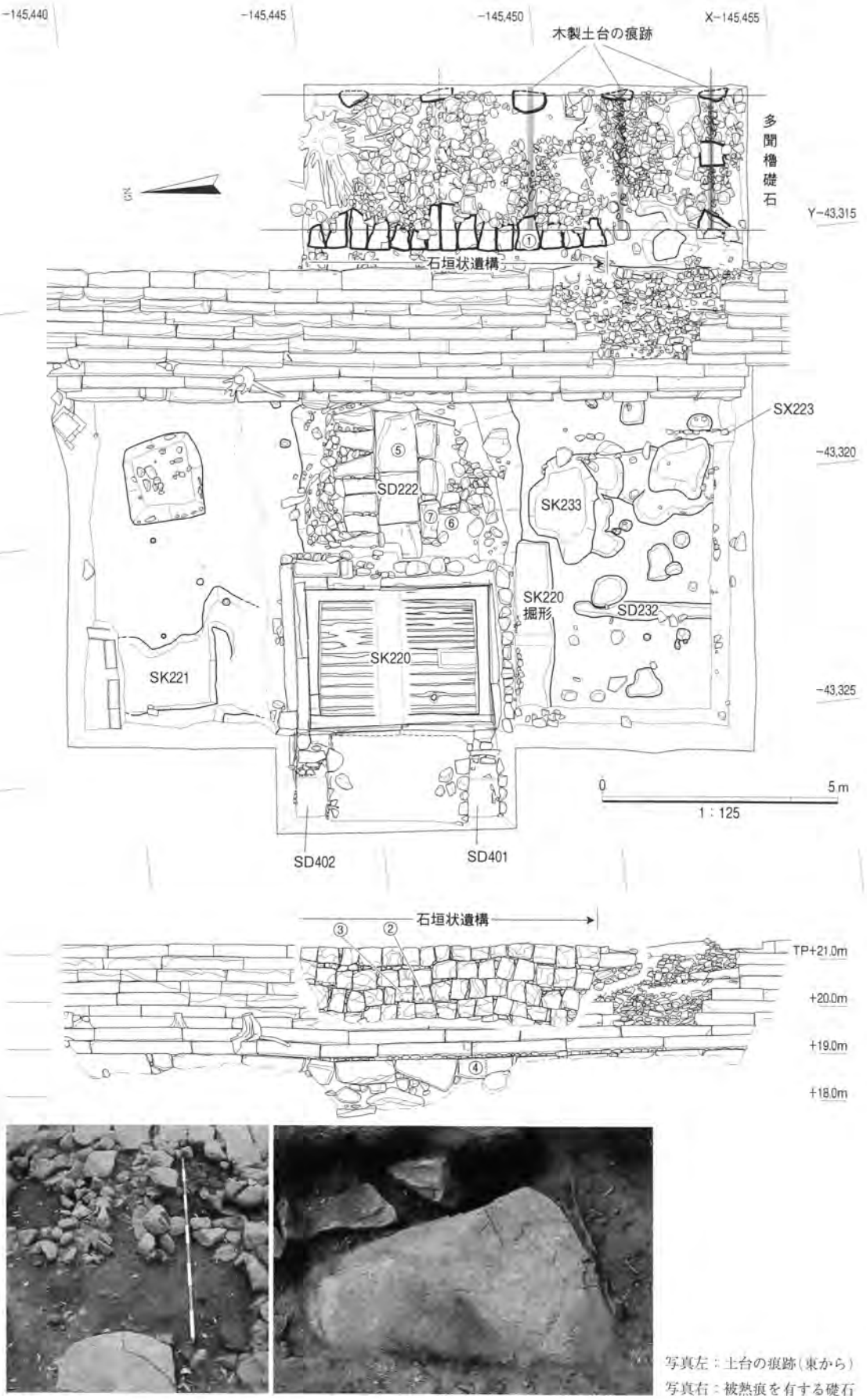


図９　Ｃ区遺構実測図



写真左：土台の痕跡（東から）
写真右：被熱痕を有する礎石

図10　D区遺構実測図および各部写真（図中の丸付き数字は写真３と対応）

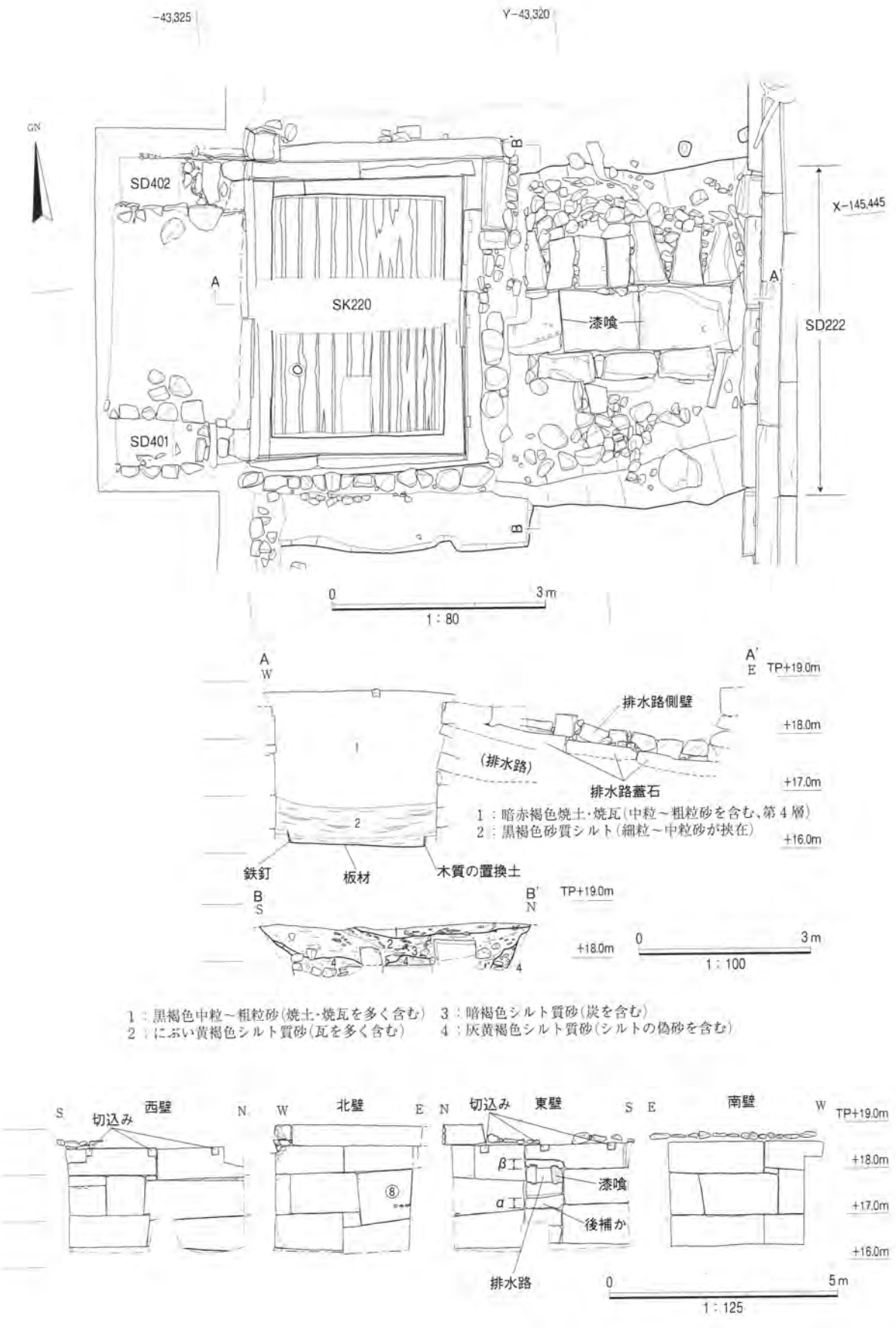


図11　集水枡SK220実測図(図中の丸付き数字は写真3と対応)

残存し(同④)、かつ木質の置換土が観察できたので、底面は木質による槽状の構造となっていたことがわかる。しかしながら側壁はこの底板よりも下に続いており、遺構構築当初の床面がさらに下位に存在する可能性が高い。

SD222　SK220に接続する石組みの排水路である。長さは4.0m以上あって東西に延び、東端は雁木の下へと続く。排水路は東へと降っており、その延長線上の石垣には開口部があることから、SK220内に溜まった上澄み水を内堀へと排水するための構造であることがわかる。水路の内法の幅は0.3m、掘形の幅は6.0mであった。また水路は側壁および天井石で保護されていた。このうち側壁は水路の北側のものが長軸を南北に向けるのに対し、南側のものは長軸を東西に向ける。掘形の埋土は4分でき、このうち上部(図11－1～3層)は側壁の上部を埋めており、18世紀末～19世紀初頭に位置づけられる肥前磁器広東碗(図15－2)のほか、19世紀前半に降る瀬戸美濃焼磁器が出土している。いっぽう図11－4層は側壁の2段目および天井石を埋め、拳～人頭大の礫を多く含んでいた。時期を判別できる遺物は出土していない。

石垣状遺構　SD222延長上の雁木部で、雁木および裏込め(第5a層)を除去した段階で検出した。長さは6.3m以上あり、北側は調査区外へと続く。小口の一辺は0.3～0.4m、長さは0.5～1.0m程度の石材を使用しており、ほぼ垂直に4段(1.6m)以上を積み上げていた。検出当初は雁木に先行する石垣である可能性を考えたが、①範囲が限られており、かつ他の石垣などに接続しないこと、②大坂城でみられる一般的な石垣とは異なって切込接布積みされていること、③京橋口枡形の肥後石では補強のた

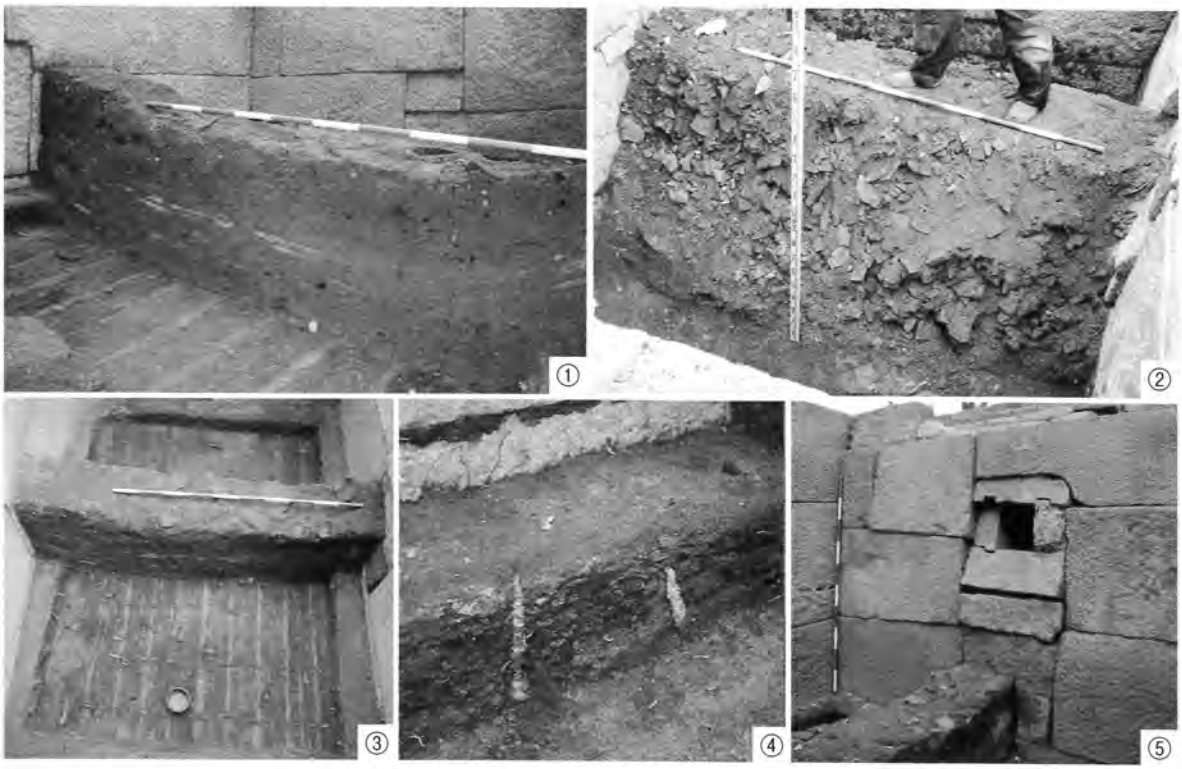


写真1　集水枡各部写真

①：集水枡断面下半(南東から)、②集水枡断面上半(南東から)、③集水枡底面の板材(南から)、
④：集水枡底部の鉄釘検出状況、⑤：排水路の接続状況(南西から)

めの構造として背面に石垣状の構造を有していること[渡辺 武1983]などから、当遺構についても排水路設置に伴う構造的な弱さを補うために設置されたと考える。

SD401・402　G区で検出した。ともに東西に延びる溝で、側壁を石組みとし、SK220に接続する。SD401は長さ1.9m、幅0.6mで、検出面からの深さは0.1mである。遺構は第6a層で埋められていた(図

写真2　石垣上遺構の検出状況(左、西から)と、積直しが行われた可能性がある部分(右)

※右側写真の白線より上は、積み直された可能性がある。

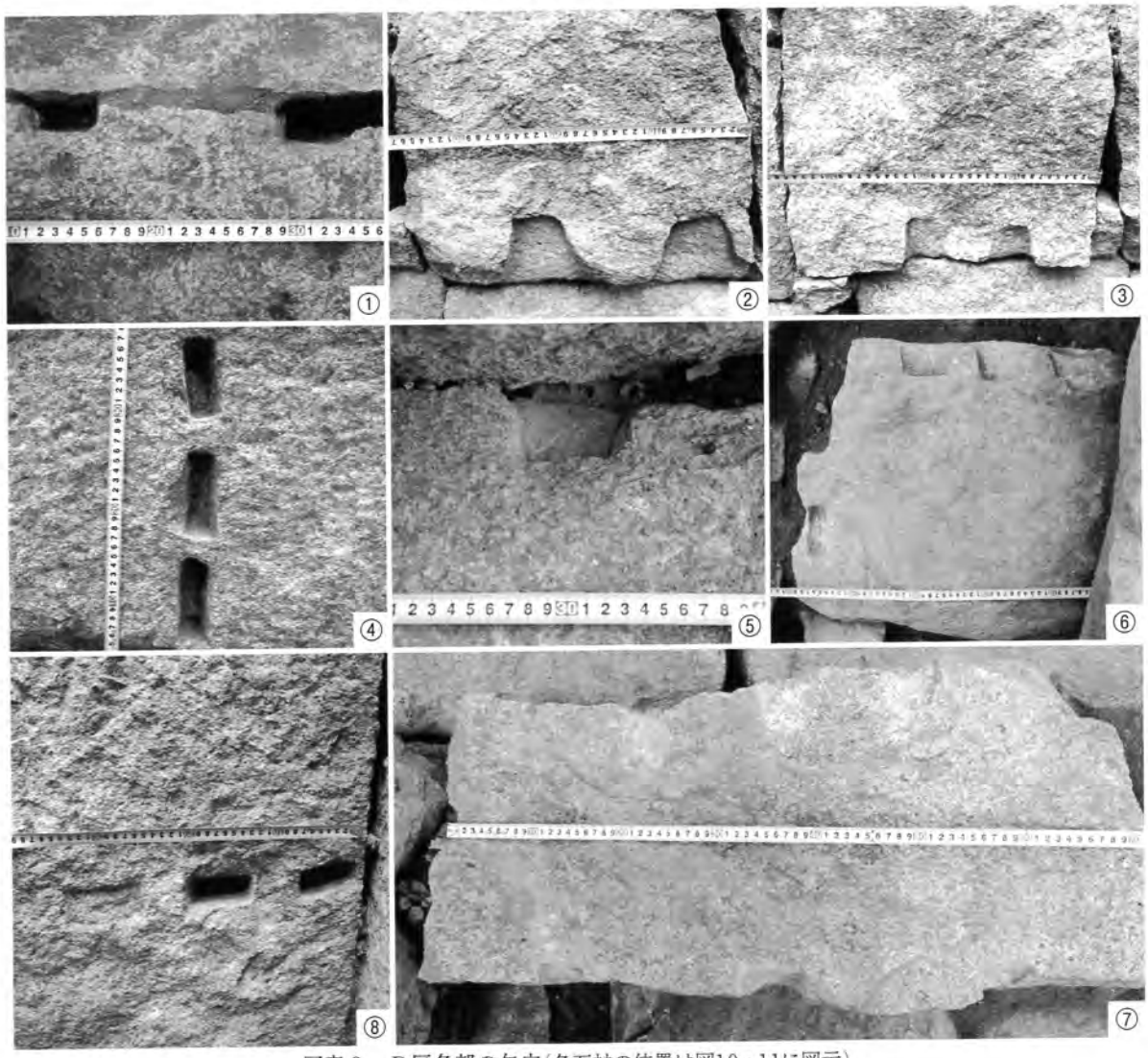


写真3　D区各部の矢穴(各石材の位置は図10・11に図示)

①：石垣状遺構上半部、②・③：石垣状遺構下半部、④：雁木根石、⑤：SD222蓋石、⑥：SD222側壁下段、⑦：SD222側壁上段、⑧：SK220側壁

6)。側壁が石組みである一方で、遺構の底は特段の加工が行われておらず、機能時の堆積層も認められなかった。

SD402は長さ1.9m、幅0.6m、検出面からの深さは0.5mである。遺構は第4層で埋っていた(図6)。構造はSD401と同様で、側壁は石組みであるが底面の加工はなく、機能時堆積層はみられなかった。

SK220および関連遺構の時期　まずSK220は、第4層で埋まることからその廃絶時期が戊申戦争後であることは確実視できる。また寛政期の大坂城絵図のSK220に対応する位置に「沙留」との記載がみられることから(図12)、少なくとも18世紀末の段階でこの位置に集水枡が設けられていたことがわかる。問題は遺構の設置時期がどこまで遡るかであるが、SD222が内堀を構成する石垣の下を通り、かつ石垣に積み直された痕跡が認められないことから、SD222、そしてこれと一体の構造であるSK220が徳川氏による再築時に設置された蓋然性は高い。しかしながら、先にみたようにSK222の掘形からは18世紀末以降の遺物が出土しており、また矢穴についても、SD222の南側側壁に使用された石材(写真3－⑦)のように新相(Cタイプ)を呈するものがある(註1)。ただ、北側の側壁および蓋石(写真3－⑤·⑥)では古相(Aタイプ)の矢穴が認められることから、当初の設置は徳川氏による再築時に遡り、その後に補修・改修を受けた可能性が高いといえる。

こうした補修・改修の痕跡は、SD222以外にも認められる。まずSK222では、先にみた絵図との対応から第6b層の段階ではすでに設置されていたと見られるが、掘形は第6a層で埋っており、盛土と同時に改修が行われたことがわかる。また今回の調査では板敷きよりも下位は掘削していないが、側壁が続くことから、本来の床面はより低かった可能性が高い。また排水路が取り付く部分は、この部分のみが壁面から突出し(写真1－⑤)、かつ石材の不足を漆喰で補っていた(図11－東壁立面図)。このことと、取付き部上下の加工が他の部分と比べ明らかに粗いこと、また取付き部を下支えする石材が他のものと比べ薄く貧弱であること、かつこの下支えの石材の高さ(図11東壁立面図－α)と取付き部上部の高さ(同β)が一致することから、石材を削り、下支えの石を後補することによって、排水路取付き部の角度を調整したものとみられる。

石垣状遺構は第5a層を除去した状態で検出し、再築当初の裏込めである第5b層との関係は不明である。矢穴の形態からみると、上半部ではCタイプ(写真3－①)、下半部ではAタイプ(同②·③)であり、またこれと相関して間詰め石の使用方法などにも差異が認められることから、上半部は積み直された可能性が高い(写真2)。なお、下半部の矢穴がAタイプであることから、当遺構の構築が再築時に遡る可能性も十分に考えうる。

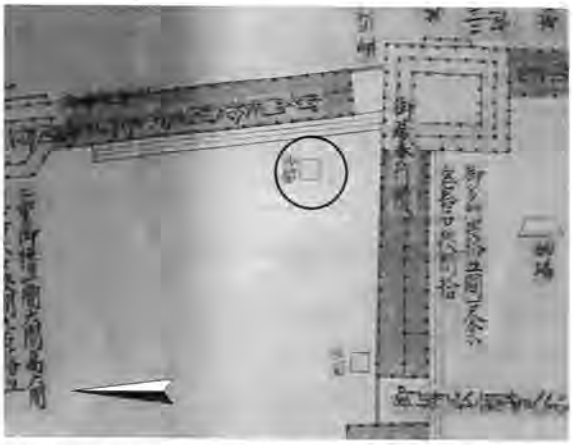


図12　寛政期の大坂城絵図(部分)に描かれた「沙留」
(大阪城天守閣所蔵)

SD401·402のうち、SD401はSK220の最終機能時である第6a層の段階では既に埋っている。またSD402は第4層で埋っていることから、SK220と同時に廃絶したことがわかる。ただ、位置や構

造からみてSD401・402の両遺構はSK220への導水路として設置されたものとみられるが、流水の痕跡はなく、積極的にその役割を果たしたとは考えられない。

v)E・F区の遺構(図13)

現状で存在する石垣は第6b層で埋められており(図5)、少なくとも18世紀頃には菱櫓部の石垣は現状と同じ形状であったことがわかる。明確な礎石等も検出できなかったため、図2に示した幕末頃の状況とは合致しない。

vi)H区の遺構(図14)

雁木の隅部根石には、幅1.5mで厚さ1.1m以上の巨石が用いられている。この巨石は雁木よりも西側に突出し、耳石の裾としても機能している。耳石は基本的に辺が一直線になるよう成形されており、この原則に沿わない2石は後補である可能性があろう。また、耳石上部の石垣には石材のアタリ痕があり、現状の耳石全体が下にずり落ちたものである可能性もある。

3. 遺物

i)陶磁器・土器類

SK220・SD222出土遺物(図15) SK220出土遺物のうち、埋土下部の自然堆積層から出土した19世紀前半の陶磁器・土器類を図示した。1は関西系陶器の碗で、口縁部を変形させる。内面には昆虫文を描き、体部下部の外面には銘「仁清」を捺す。3は瀬戸美濃焼磁器の碗である。4は関西系と思われる磁器の鉢で、内面・外面ともに花文を描く。高台は線描きの櫛歯文を巡らせる。5は瀬戸美濃焼磁器の線香立てである。6は非ロクロ成形で板造りの焼塩壺である。蓋受けは退化している。土師器の火鉢7は完形で、口縁部内面にはススが付着している。SD222出土遺物では、肥前磁器の染付広東碗2を図示した。18世紀末～19世紀初頭に位置づけられる資料である。

そのほかの遺構出土遺物(図16) A区のSK274からは、土師器皿8、手づくねの焼塩壺9、肥前磁器の染付皿10を図示した。このうち9は外面に花押と思われる意匠を墨書している。10は17世紀中ごろに位置づけられる資料であろう。

D区のSK233から出土した回転台成形の土師器皿11は、底部外面に墨書で「中」と記している。このほか、D区の第6b層上面で検出した遺構からは、18世紀中～後葉を中心とするまとまった資料12・15～17が得られている。このうちSD232から出土した12は、外面に銅緑釉を掛ける皿である。SK221からは15・16が出土している。15は青磁染付の蓋で上面には二重方格枠内に渦「福」、内面には手描きの五弁花を描く。また、口縁部内面には四方襷文を巡らせる。16は染付の筒形碗で、外面には草花文、底部内面には五弁花をコンニャク印判で施す。SK233出土の17は、青磁染付の朝顔碗である。口縁部内面には四方襷文を巡らせ、底部内面にはコンニャク印判で五弁花を施す。

雁木の積み直しに伴う裏込め(第5a層)から出土した肥前陶器の刷毛目碗13は、高台部の形態などからみて18世紀の資料であろう。C区SK231から出土した14は土師器質の用途不明品である。中央部を穿孔し、また片面に2つの穴を開ける。側面には線条の鋭い切込みがあり、全周している。

ii)瓦類

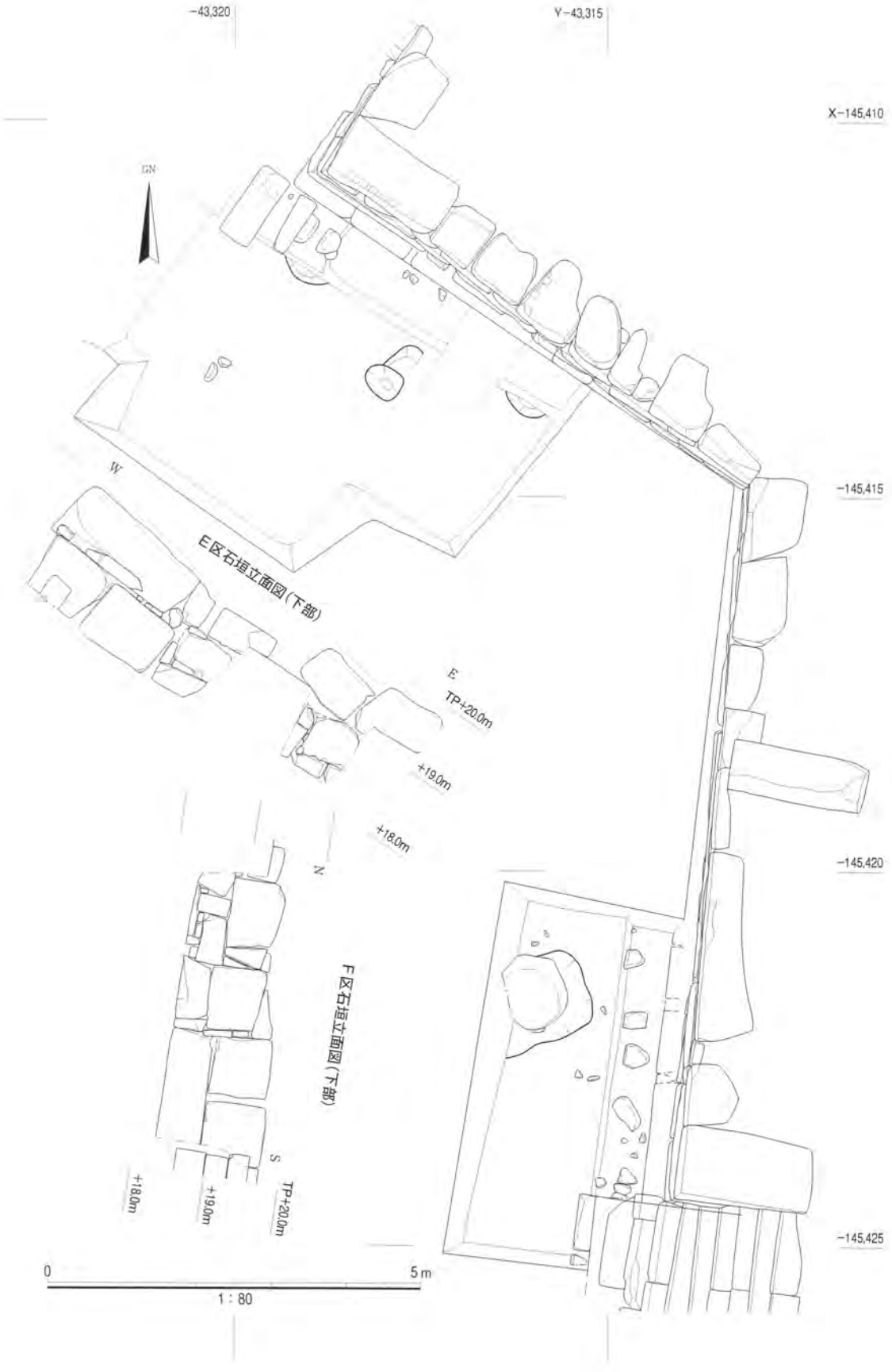


図13　E・F区遺構実測図

第6b層出土資料　金箔押瓦24～27・38のほか、鬼板40を図示した(図17・19)。金箔瓦は一定量出土しており、型式的にみていずれも豊臣期のものである。

24・25は巴文軒丸瓦である。24は、内区の外に珠文が巡る。外縁・珠文に金箔が残る。25は、巴文は左巻きで、外縁・巴文に金箔が残る。巴文の尾部と尾部の間に大きな笵傷が見られる。26は、中心飾に宝珠文を置き、１本の茎から支葉が枝分かれしている特徴的な唐草文を配する軒平瓦である。外縁と内区文様に金箔が残る。27は、珠文と唐草文を配する軒平瓦で中心飾は不明である。外縁と内区文様に金箔が残る。顎部貼り付けによる段顎で、外縁上側になる平瓦部との接合面が剥離したものである。38は軒丸瓦のように見えるが、飾瓦である。外縁のさらに外側に面があり、表面は全面に金箔が残る。裏面は未調整で、剥離面に見える。粘土板から剥がれ落ちた文様部分と思われる。これらの金箔押瓦に見られる漆は黒もしくは茶褐色に変色しており、生漆と考えられる。瓦当に離砂の付着は

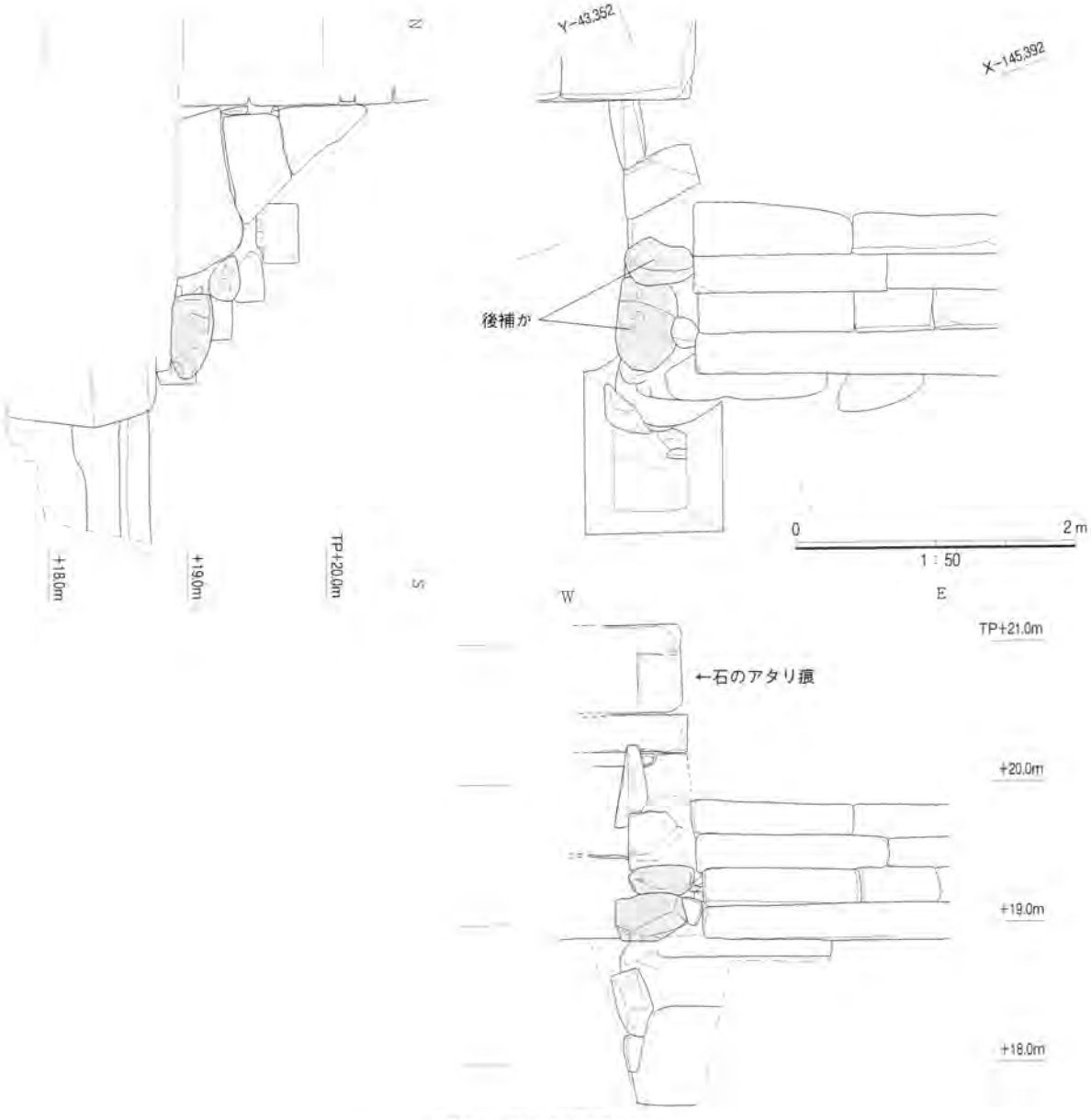


図14　H区遺構実測図

見られなかった。40は桃の鬼板瓦である。表・断面ともに明赤褐色を呈し、二次的に火を受けているようである。

第5a層出土資料　18～23・37・41が出土した。なお、以下で挙げる橘文、それに伴う唐草・子葉文の分類は[大阪市文化財協会2009]に拠る。18は、左巻きの三つ巴文と16個の珠文を配する軒丸瓦である。19は、中心飾に三葉文を置き、２回反転する唐草文を配する軒平瓦である。外縁右側に枝のような刻印が見られるが、笵傷の可能性もある。20は、中心飾に五葉三点文を置き、２回反転する唐草文を配する軒平瓦である。21は、中央の葉が珠文で表現されている三葉一点文を中心飾に置く軒平瓦である。萼の先端が太くなりＬ字形に屈曲し、両端に唐草文を配する。20・21は顎部貼り付けで、平瓦部先端は外縁上側から一部内区に至る。22は、三葉一点文を中心飾に置き、萼の先端がＹ字になる軒平瓦である。両端に唐草文を配する。23は、中心飾にⅢb類の橘文を置く軒平瓦で、唐草・子葉文はβⅲ類である。表面暗灰色、断面灰白色を呈する燻し瓦で、瓦当に離砂の付着は見られない。37は、棟込めの菊丸瓦である。41は飾瓦であるが、屋根のどこに用いられたものかは不明である。表・断面ともに黄灰色で、焼成は甘い。ヘラ状工具で波状文を描き、下方に獣の脚を表現していると思われる粘土塊を貼り付けている。抉り状の部分に沿って貼り付けられた粘土紐は、獣の手を表現しているものと思われる。

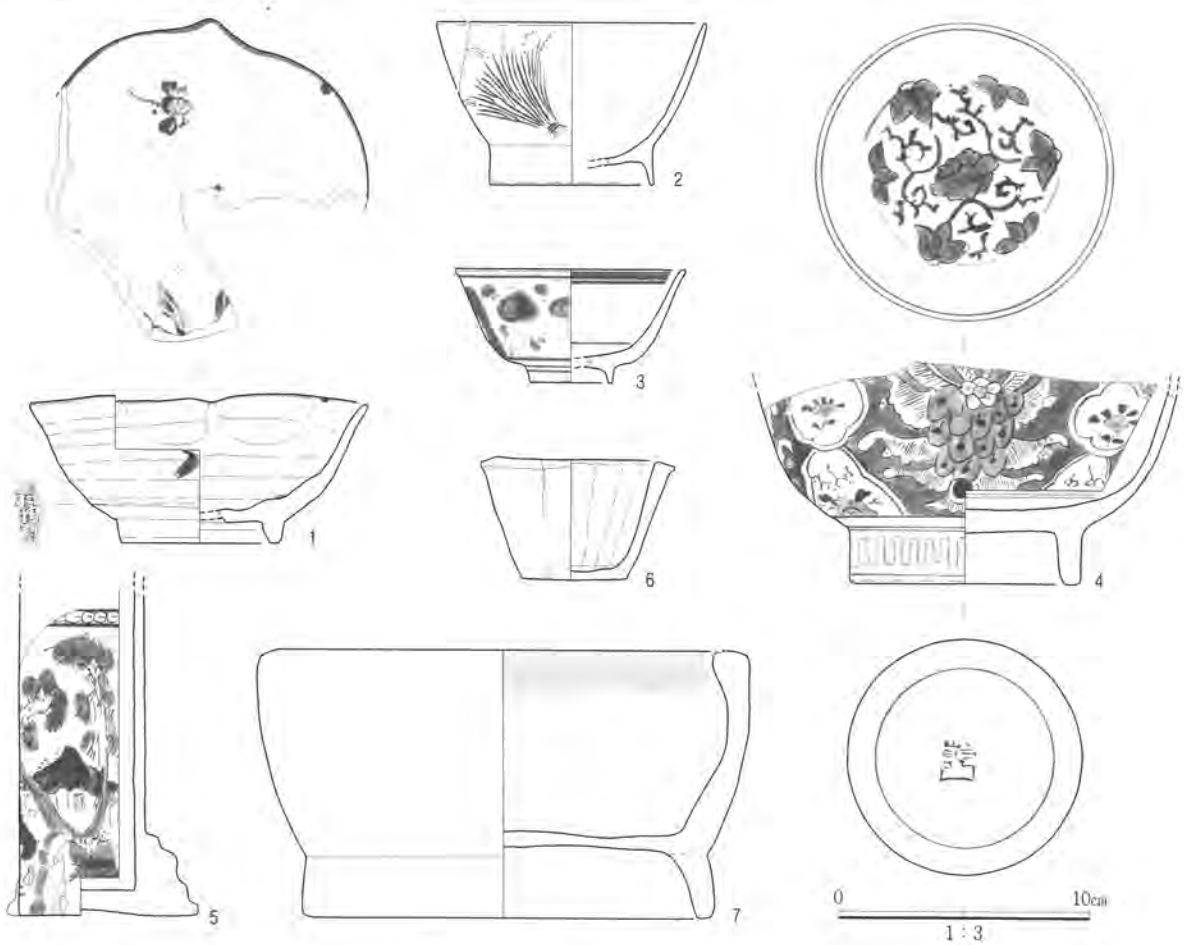


図15　陶磁器・土器類実測図(１)
SK220下層(１・３～7)、SD222(２)

18～23・37は、いずれも表面暗灰色、断面灰白色を呈する燻瓦で、二次的に火を受けた痕跡は見られない。軒平瓦のうち、型式的にみて19･20は豊臣後期ないし徳川初期、21～23は徳川期の瓦である。

第4層出土資料　28は、左巻きの三つ巴文と16個の珠文を配する軒丸瓦である。外縁の頂部からやや左下の所に「○にタ」、「○に堺」の刻印が見られる。凹面は一部布目が残り、内叩き、横方向のケズリ痕が見られる。29は小型の軒平瓦である。中心飾に蕚の表現が無い三葉一点文を置き、文様は繊細･扁平である。30は、中心飾に上下逆さの三葉一点文を置く軒平瓦である。両端の唐草・子葉文は橘文に伴うものと同様で、βⅲ類である。三葉文・橘文折衷型と言えようか。31は、中心飾に古式の橘文を置く軒平瓦で、二葉の中央が凹む。蕚・唐草・子葉の巻きや流れの表現が繊細で、特に子葉の分岐の表現は写実に近い。32は、中心飾に橘文Ⅰａ類を置く軒平瓦で、唐草･子葉文はβⅱ類である。33は、中心飾に立体的な橘文を置く軒平瓦で、唐草・子葉文はβⅱ類である。外縁に右側上部に「○に太」の

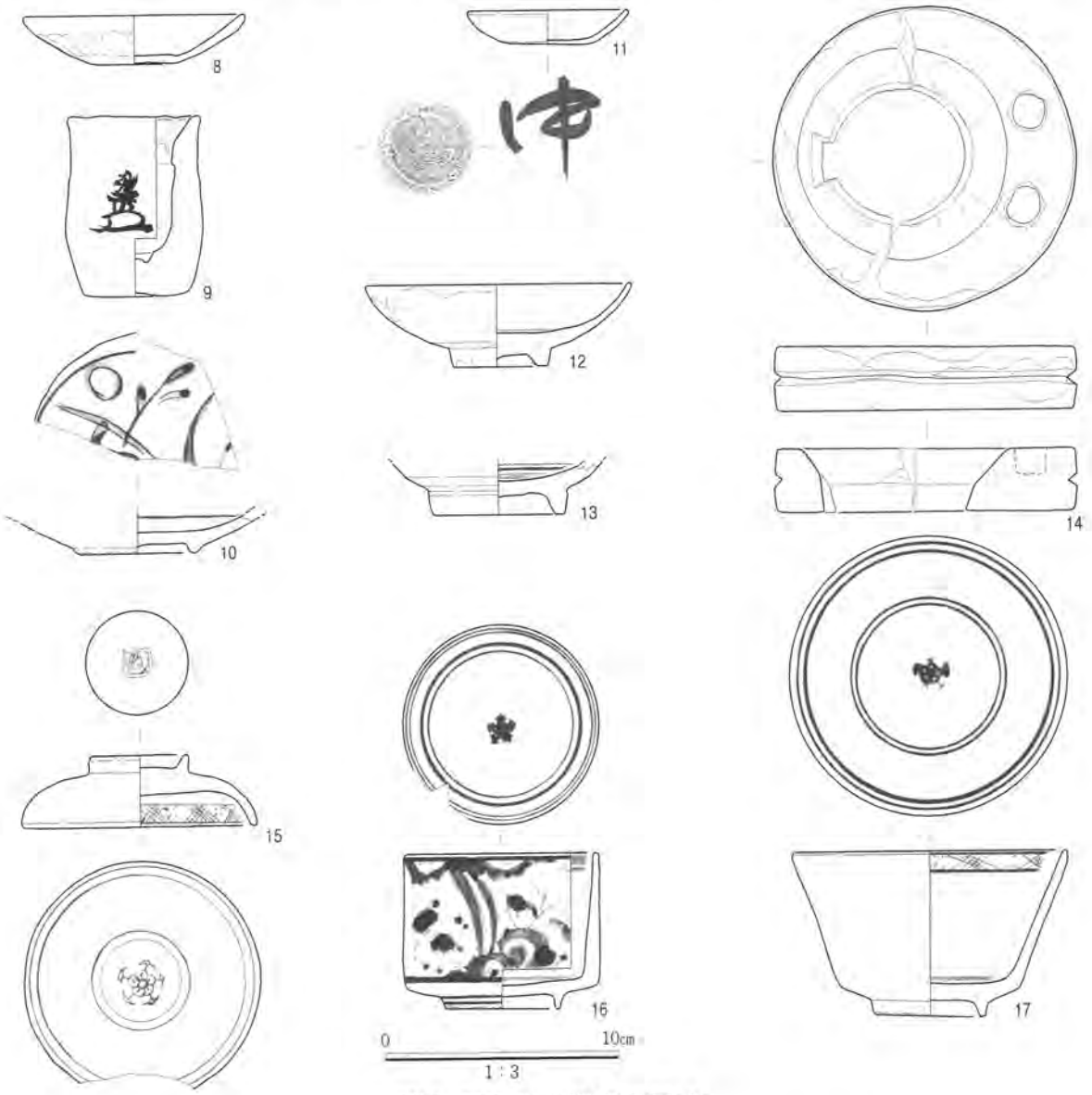


図16　陶磁器・土器類実測図(２)
A区SK274(８～10)、D区SK233(11)、D区SD232(12)、D区第5a層(13)、
C区SK231(14)、D区SK221(15・16)、D区SK233(17)

刻印が見られる。平瓦凸面端部にカキヤブリをして顎部を貼り付けている。34～36は平瓦である。34は、凸面側端部に竹管文が乱雑に刻印されている。35は、凸面にヘラ状工具で植物が描かれている。36は、凸面に「二十」という数字が朱線で書かれている。39は鯱瓦で、基底部からエラの部分までの破片である。少なくとも、サイズ・形態の違う２種類の鯱の破片が見つかっている。この他、三つ葉葵を象った鬼瓦が多数出土している。葉脈の表現や文様のサイズにより細分が可能である。三つ葉葵文の鬼瓦

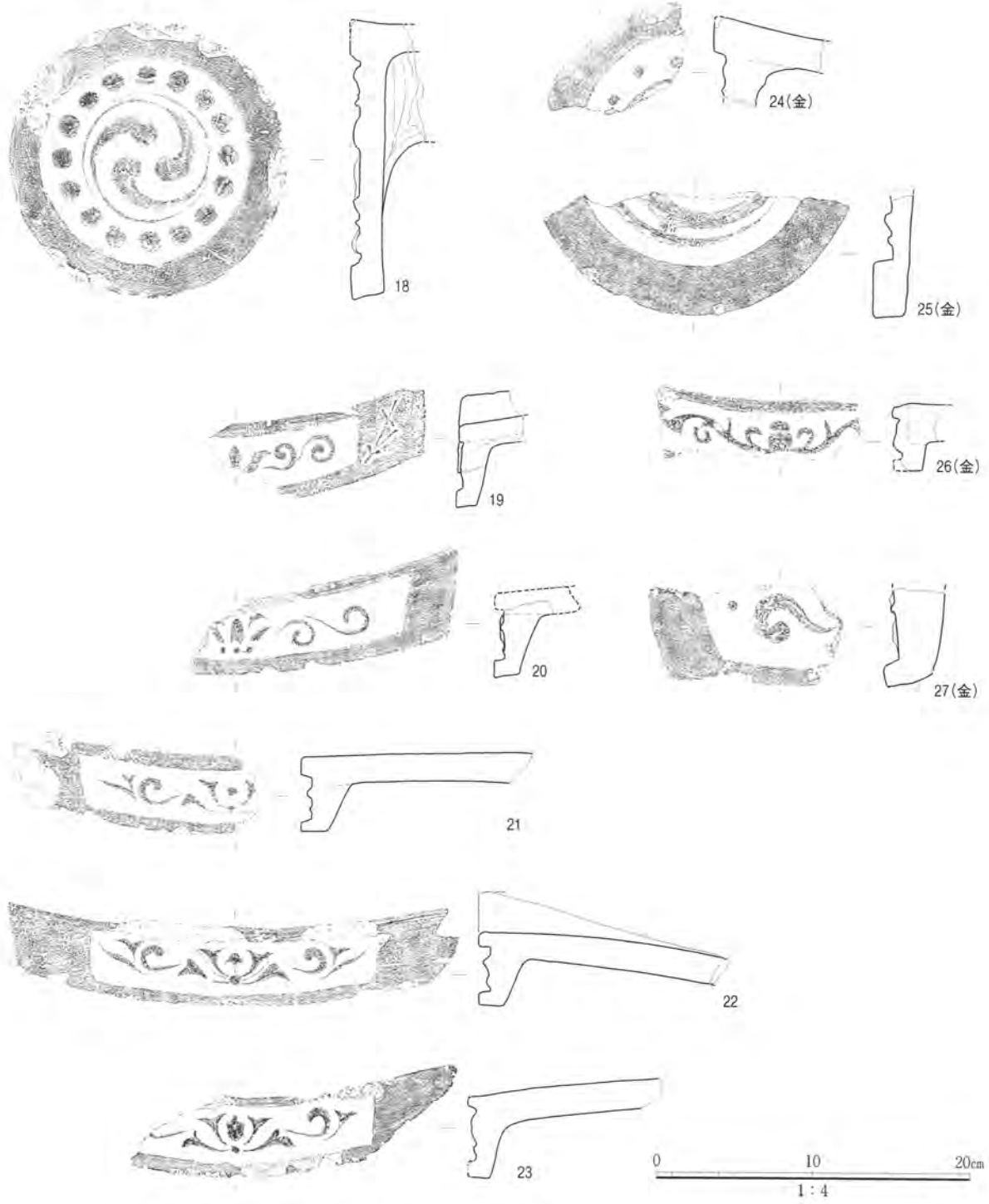


図17　瓦類実測図(１)
D区第5a層(18～23)、D区第6b層(24～27)

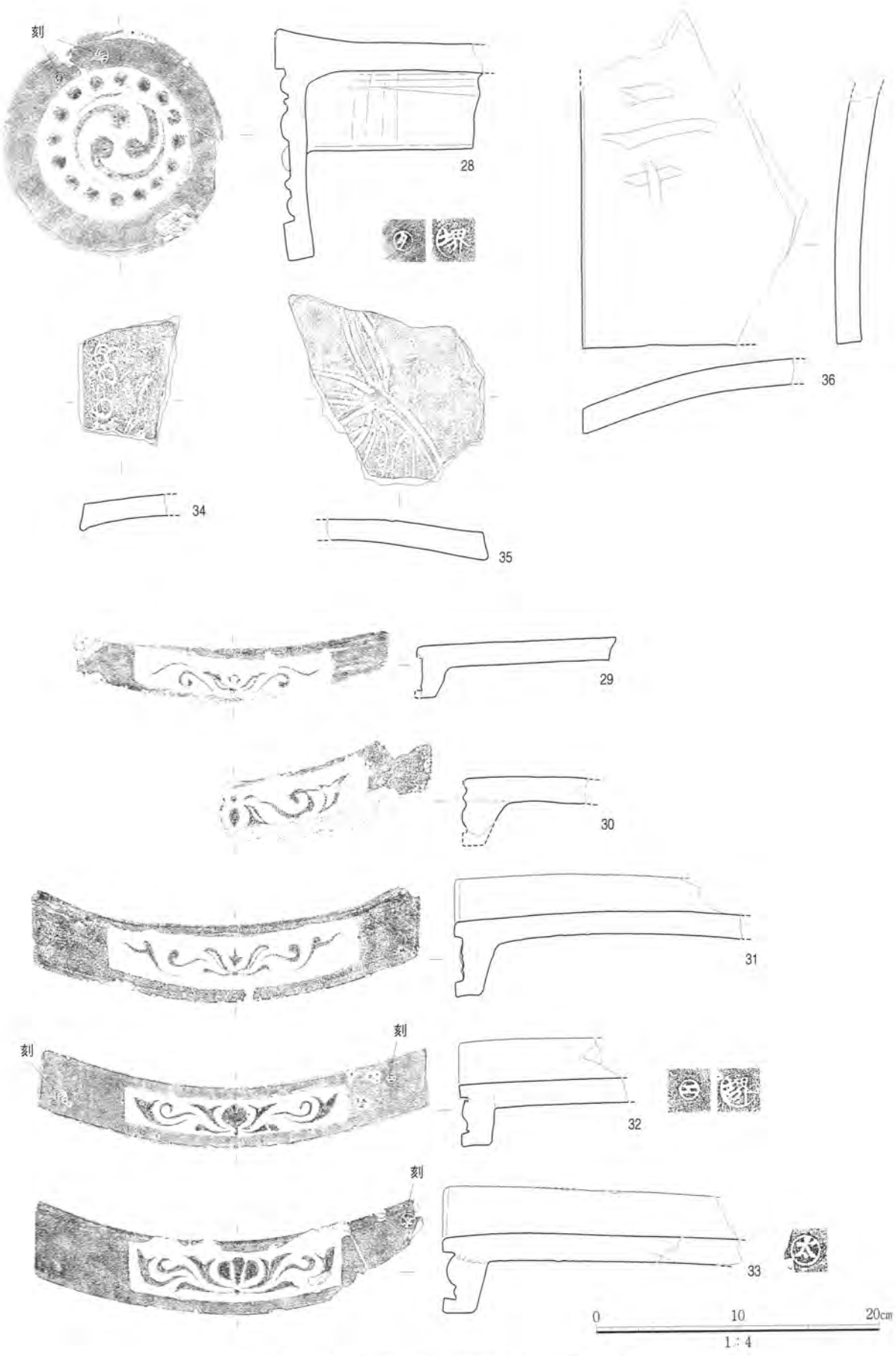


図18　瓦類実測図（２）（刻印の拓影は縮尺１：２）

D区SK220上層(28・29・31～33・36)、D区第４層(30)、C区第４層(34)、D区SK221(35)

は山里出枡形での調査(OS05－１次)でも出土している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006]。

35以外はすべて二次的に火を受けており、表・断面ともに明赤褐色を呈している。29～32・36は平瓦凹凸面に離砂の付着が見られる。いずれも徳川期に属するものである。

iii)そのほか

Ａ区の第２層から出土した扉金具42、Ｄ区の第5a層から出土した一石五輪塔43を図示している(図20)。42は緑色を呈し、青銅製と思われる。釘隠しなどとして使用されたものであろう。43は空輪・風輪部分のみ残存し、梵字などの刻印は確認できない。

〈まとめ〉

今回の調査では、以下の成果が得られた。

・山里丸東半の北辺に設定したＡ・Ｂ区では、第二次大戦時にほとんどの遺構が失われたが、江戸

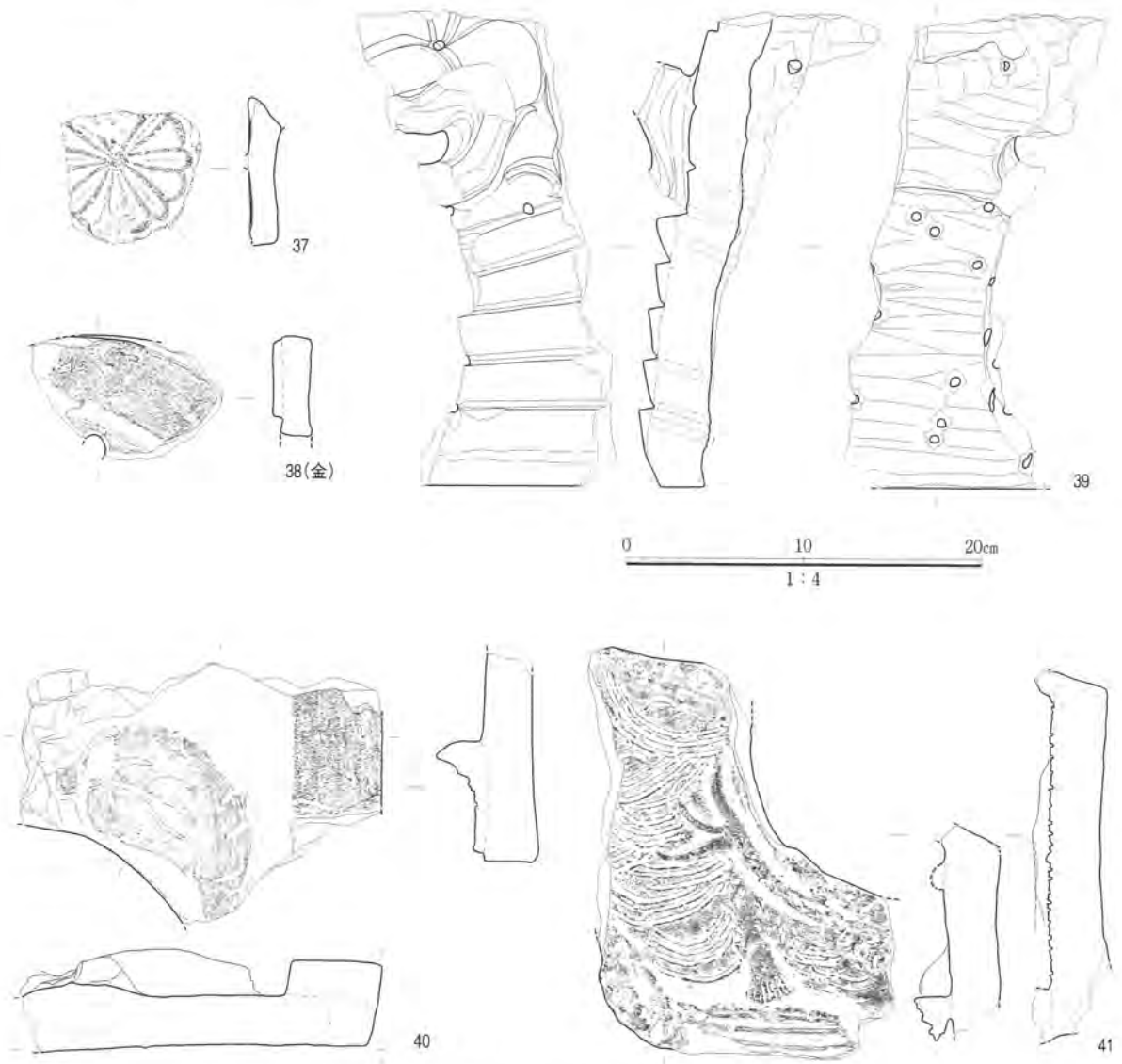


図19　瓦類実測図(３)(刻印の拓影は縮尺１：２)
Ｄ区第5a層(37・38・41)、Ｄ区第４層(39)、Ａ区第6b層(40)

時代の雁木の位置を復元することができた。また、根石の設置方法を知ることができた。

・菱櫓部に設定したE・F区では、現状の石垣が少なくとも18世紀頃に遡ることが明らかとなった。

・山里丸東半の東辺に設定したC・D・G区では、遺構の残存状況が良好であり、多聞櫓の礎石などを検出した。とくに重要な成果は、集水枡SK220、およびこれに伴う導水路SD401・402、排水路SD222、補強のための**石垣状遺構**など関連する遺構群を検出できたことである。これによって、これまで知られていなかった大坂城の水の管理に係わる具体的な構造を明らかにすることができた。なお類似した遺構として、山里出枡形で行われたOS05－1次では会所およびこれに接続する暗渠を検出しているほか[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006]、山里丸西部で行われたOS08－13次では暗渠を検出している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]。またD区の深掘り部では、金箔押し瓦を含む豊臣期の瓦が一定量得られたことも重要である。

・山里丸北辺の雁木の収め方を知るために設定したH区では、雁木・耳石の裾を兼ねた巨大な根石が使用されていることが明らかになった。

なお、今回の調査に際しては、特別史跡大坂城跡石垣修復検討会議の方々のほか、石川県金沢城調査研究所の北垣聰一郎氏、芦屋市教育委員会の森岡秀人氏に発掘調査現場でご教示を賜りました。記して感謝いたします。

(註)

1)矢穴の理解については[森岡秀人・藤川祐作2008・2011]に拠った。また、矢穴については芦屋市教育委員会の森岡秀人氏にご教示を賜りました。記して感謝いたします。

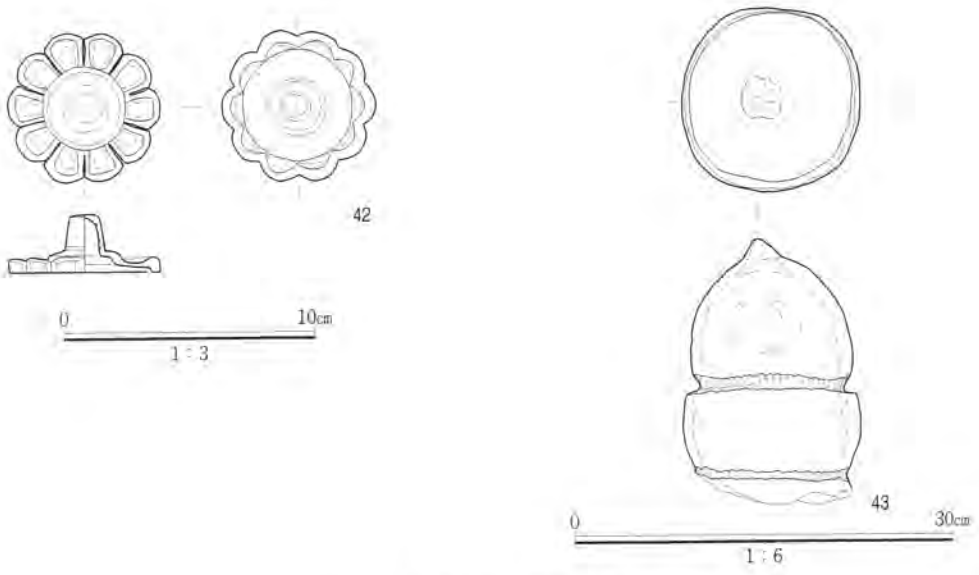


図20　扉金具・五輪塔実測図
A区第2層(42)、D区第5a層(43)

引用文献

大阪市1969、『重要文化財大阪城　大手門・同南方塀・同北方塀・多聞櫓北方塀・多聞櫓・金明水井戸屋形・桜門・同左右塀　工事報告書』

大阪市文化財協会2009、「瓦塼類」:『瓦屋町遺跡発掘調査報告』、pp.14－26

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会

2006、「大坂城跡発掘調査(OS05－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』(2005)、pp.79－99

2010、「平成20年度特別史跡大坂城跡整備事業に伴う大坂城跡発掘調査(OS08－13)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』(2008)、pp.249－256

森岡秀人・藤川祐作2008、「矢穴の型式学」:『古代学研究』第180号　古代学協会、pp.405－418

2011、「矢穴調査報告」:『額安寺宝篋印塔修理報告書』(大和郡山市文化財調査報告書 第18集)大和郡山市教育委員会、pp.55－70

渡辺 武1983、『図説　再建大阪城』大阪都市協会

D区上段地層断面
（北西から）

D区深掘り地層断面
（南東から）

A区深掘り地層断面
（南西から）

A区全景
（南から）

A区雁木根石
（南西から）

B区全景
（北西から）

C区全景
（北西から）

C区上段検出状況
（北から）

C区深掘り部地層断面
（南から）

D区全景
（北西から）

D・G区全景（西から）

D区上段検出状況
（北から）

D区雁木と石垣状遺構
（南西から）

SD222内部
（西から）

E区検出状況
（南西から）

F区検出状況
（北西から）

H区検出状況
（南から）

中央区東高麗橋における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS11－14)報告書

調 査 個 所　大阪市中央区東高麗橋45－1
調 査 面 積　108㎡
調 査 期 間　平成23年11月4日～11月16日
調 査 主 体　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、黒田慶一

1）調査に至る経緯と経過

調査地は東横堀川に架かる高麗橋の南東90m、平野町橋の北東90mで、豊臣氏大坂城惣構の西北部に位置する（図１）。調査地の北方100mのOS89－148次調査では、大坂夏ノ陣（1615年）で焼け落ちた塀列建物を含む３棟の礎石建物が検出され、その北のOS87－40次調査などの大型礎石建物検出地を含めて、大名級の武家屋敷地と推定されている［大阪市文化財協会2003］。また当地は、松平忠明が著したとされる『当代記』の関ヶ原の合戦（1600年）前夜の惣構堀にかかる橋名を網羅した記事中に、該当する橋は無く、高麗橋と平野町橋間には豊臣期から現在に至るまで、わざと橋は架けられなかったようで、当地は特殊な地域に属する可能性がある。近年、北10mのOS11－２次調査で、惣構築造直前の土堤や豊臣前・後期の遺構［大阪文化財研究所2011］が、北東20mのOS07－８次調査で、弥生時代中・後期の遺構や平安時代の柱穴、それに鎌倉時代の井戸や落込み［大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009］が、北東40mのOS05－５次調査地では、江戸時代の17世紀第２四半期の精錬炉が見つかっている［大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006］。東30mのOS08－10次調査地では、豊臣前期の塀を伴う堀や溝が重複して検出され、1598（慶長３）年の大坂町中屋敷替えの惣構工事の際に、それらは埋められたり壊されたりしたことが確認され［大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010］、各時代の重要遺構の存在する地域と考えられるようになった。

当該地において大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表面下1.5mで豊臣期の遺物包含層と遺構面を確認したことから、本調査を行うこととなった。工事側が地表面下1.5mまでの機械掘削を完了した段階で、調査に着手することとした。2011年11月４日より調査を開始し、南北18m×東西６mの調査区（図２）を設定して、まず夏ノ陣の罹災面を調査した後、人力と機械を併用して1598年の

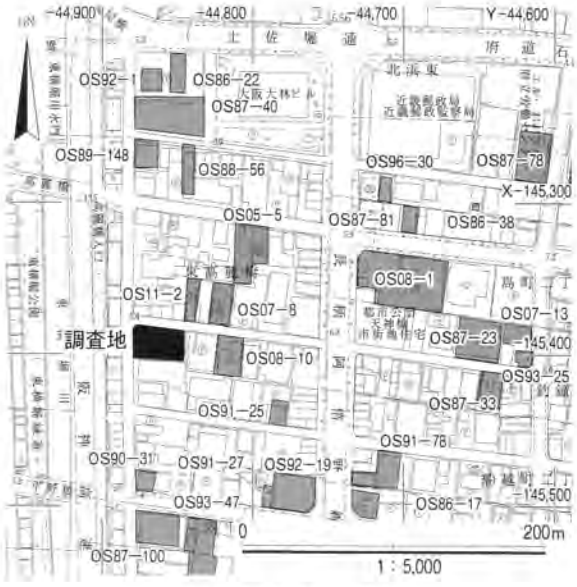


図１　調査地位置図

図２　調査区位置図

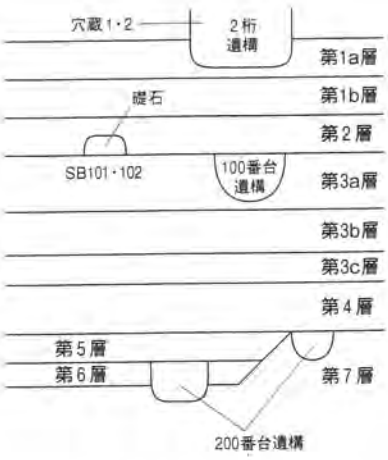


図3　地層と遺構の関係図

惣構盛土を掘削・除去して、安全で可能な限り、その下層を調査することとなった。その際、西部の土置き場の一部も調査した。また上層の夏ノ陣被災の屋敷地の様子を窺うため、調査の最終工程で、東壁の法面をほぼ垂直に落として礎石建物の続きを調査した。11月16日に現場作業を全て完了し撤収した。

なお、基準点はmagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は、世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋〇mと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

調査は地表面下1.5mまで、機械で水平にカットした状態で着

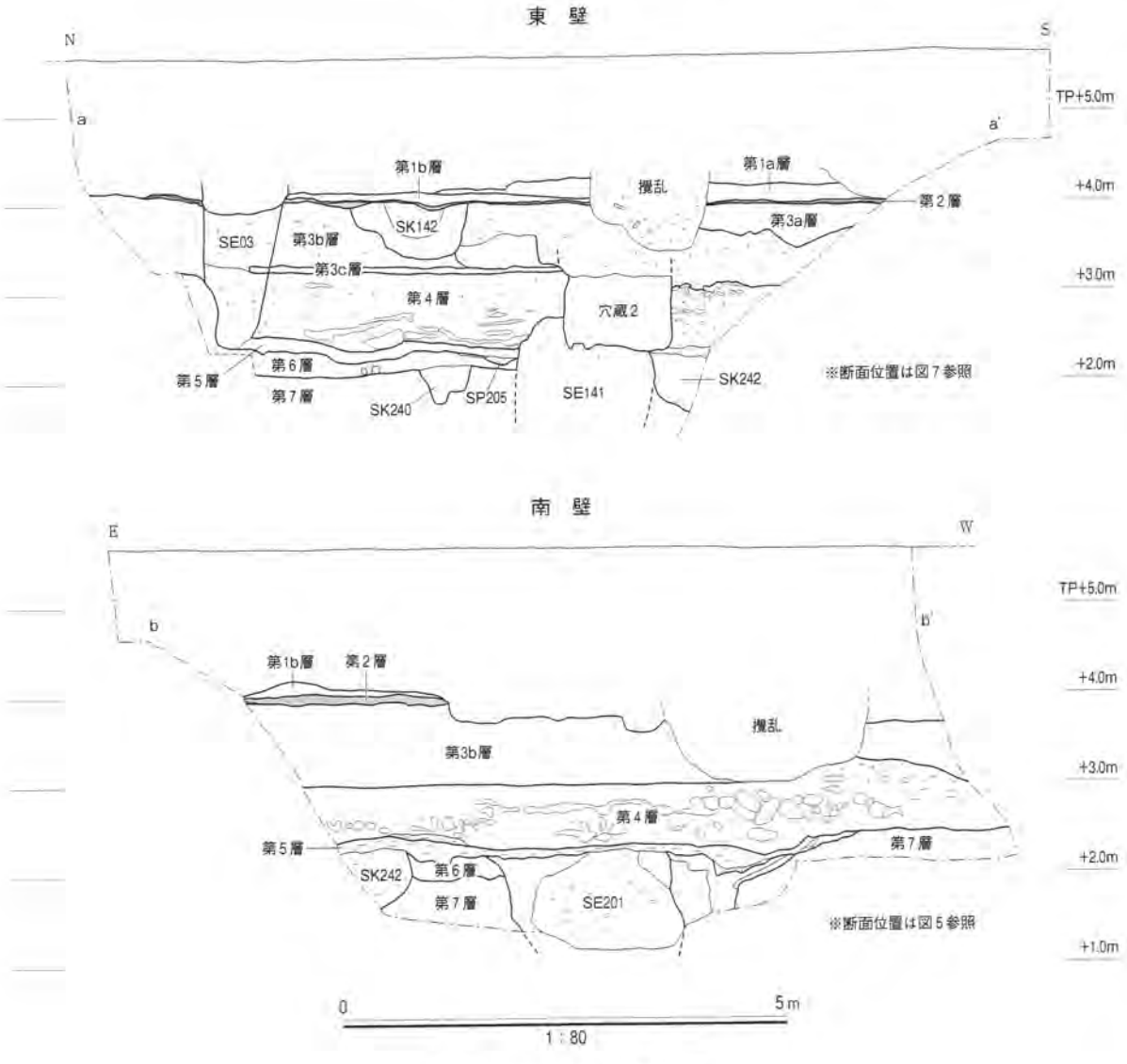


図4　東壁・南壁地層断面図

手した。第1a・b層は夏ノ陣焼土層(第２層)上の整地層の一部である。

第1a層：浅黄色(2.5Y7/4)細礫質粗粒砂からなる整地層である。

第1b層：層厚５～10cmで、焼土を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒砂の整地層である。

第２層：層厚５～10cmの褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルトからなる大坂夏ノ陣(1615年)の焼土層で、瀬戸美濃焼志野皿16、土師器皿20・21、肥前陶器碗24・皿25・26、軒瓦30・31・34～36、鬼瓦38などが出土した。

第3a層：南部に分布する層厚30～40cmのにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粗粒砂の整地層である。

第3b層：層厚70～90cmのにぶい黄色(2.5Y6/4)細礫質粗粒砂からなる整地層で、幅90cm、厚さ40cmのにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂の偽礫を含む。

第3c層：東壁に見られる層厚５cmのオリーブ黄色(2.5Y6/4)細粒砂層で、水平に分布している。

第４層：層厚70～90cmで、にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト偽礫を多く含む淡黄色(2.5Y8/4)粗粒砂質細礫の盛土層である。大坂町中屋敷替え(1598年)に伴うものである。

第５層：層厚５～20cmのオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルトの盛土層で、中国同安窯産の青磁碗13や肥前陶器皿などを含む。

第６層：層厚５～20cmのにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒砂で、瓦器・須恵器・土師器を含む。

第７層：層厚50cm以上の明黄褐色(10YR6/6)中粒砂の地山層である。

ⅱ)遺構と遺物

a．第６・７層上面の遺構(鎌倉時代～豊臣前期、図４～６・９)

第７層上面は西から東へ低く傾斜している。第６・７層のどちらの上面に属するか、一部の遺構を除いて厳密に分離できなかったので、一括して記述する。

SB201　桁行３間以上(4.2m以上)、梁行２間(3.1m)の北に対して西に１度振る、南北棟の掘立柱建物である。SP206・213・229・230・238・239で構成されると考えられるが、SP213が他に比して20cm以上深く掘り込まれており、芯々間もやや狭いことから、柱筋からはずれるがSP212が桁柱になる可能性がある。SP206から朝鮮白磁皿14が出土したが、他の柱穴からは須恵器・土師器・瓦器片のみの出土である。豊臣前期の建物である。

SE201　直径2.0m、深さ1.1m以上の井戸で、SK220より新しい。中国産青花皿、瀬戸美濃焼天目碗などが出土した。豊臣前期の井戸である。

SD202　長さ3.0m以上、幅0.7m、深さ0.4mの溝状の遺構で、黄褐色(10YR5/6)シルト質中粒砂などを埋土とする。土師器皿６～９、瓦質土器羽釜10のほか、銅銭・須恵器・土師器・瓦器片が出土した。14世紀中葉の溝である。柱穴SP207・208よりも古い。SP207からは備前焼大甕のほか、東播系須恵器・土師器・瓦器片が出土している。

SD232　長さ1.8m以上、幅0.3m、深さ0.3mのにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質中粒砂を埋土とする溝で、中国産青花大皿・備前焼などが出土した。豊臣前期の溝で、SK240より古い。

SK220　直径1.5m、深さ0.6mの褐色(10YR4/4)シルト質中粒砂を埋土とする土壙である。

SK221　長さ0.7m、幅0.3m、深さ0.3mの黄褐色(10YR5/6)シルト質中粒砂を埋土とする楕円形

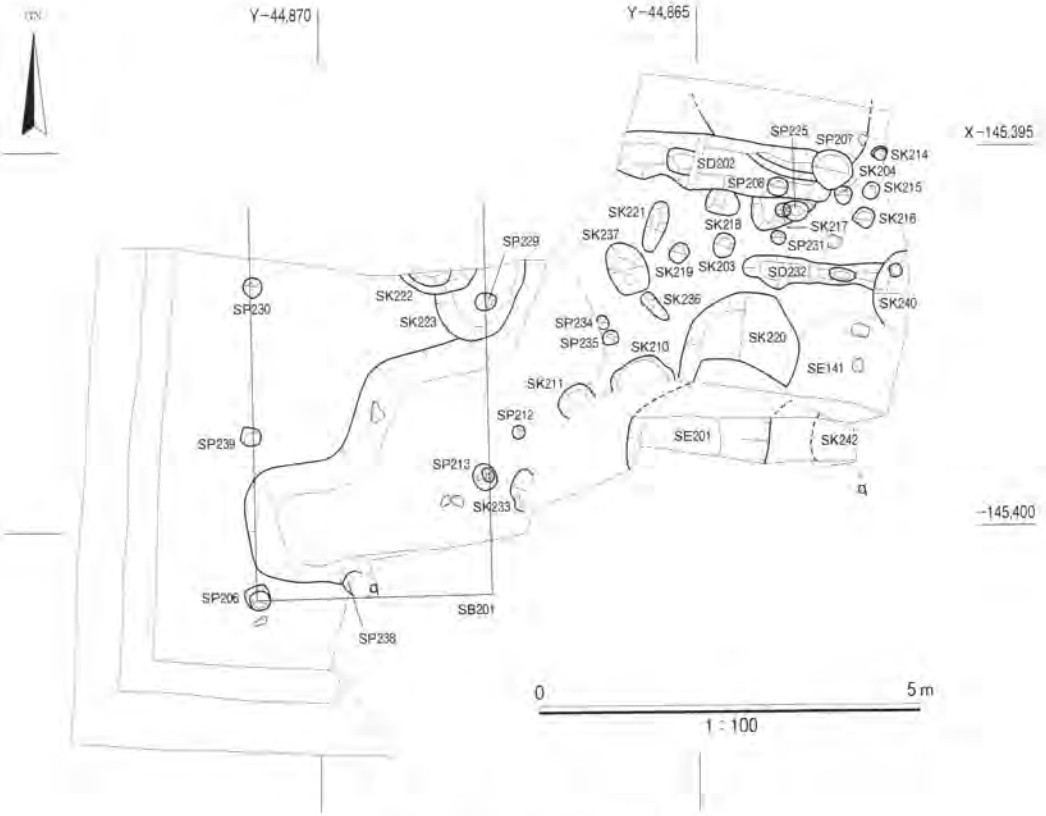


図5　第6・7層上面遺構

の土壙で、瓦器皿4が出土した。12世紀末～13世紀前半の土壙と考えられる。

SK222　直径1.0m、深さ0.3mの暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂を埋土とする土壙で、布目痕を残す平瓦と土師器片が出土した。

SK223　長さ1.3m以上、幅1.0m、深さ0.3mの暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂を埋土とする土壙で、弥生時代後期後半のタタキメのある甕体部片1が出土した。

SK240　直径0.6m、深さ0.4mのにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒砂を埋土とする土壙である。

SK242　調査区東南隅の土壙で、上層から掘り込まれたSE141に切られている。直径0.8m以上、深さ0.6mで、褐色(10YR4/6)シルト質粗粒砂を埋土とする。

SP225　直径0.3m、深さ0.2mの小穴で、暗褐色(10YR3/3)シルト質中粒砂を埋土とし、コースタ形土師器皿3のほか、瓦器椀・焼壁片が出土した。13世紀前半の小穴と考えられる。

このほかSK203・204・210・211・214～219・224・231～233・236・237の土壙や、SP205(図4)・SP234～237の小穴が検出された。

b. 第3a層上面の遺構(豊臣後期、図4・7～10)

SB101　南北5.2m以上、東西5.2m以上の夏ノ陣で被災した礎石建物で、北で東に3度振る。東側の柱筋はSB102の東桁柱筋と同一である。残存していた礎石のほか、礎石跡と思われる小穴SP113・128などからなり、南北で柱間隔は1.5m、東西は1.8mを測る。下層の遺構としてSK110・118、SD114がある。

SB102　南北5.4m、東西4.0mの礎石建物で、北で東に3度振る。柱間隔は芯々で、梁行が2.0m、

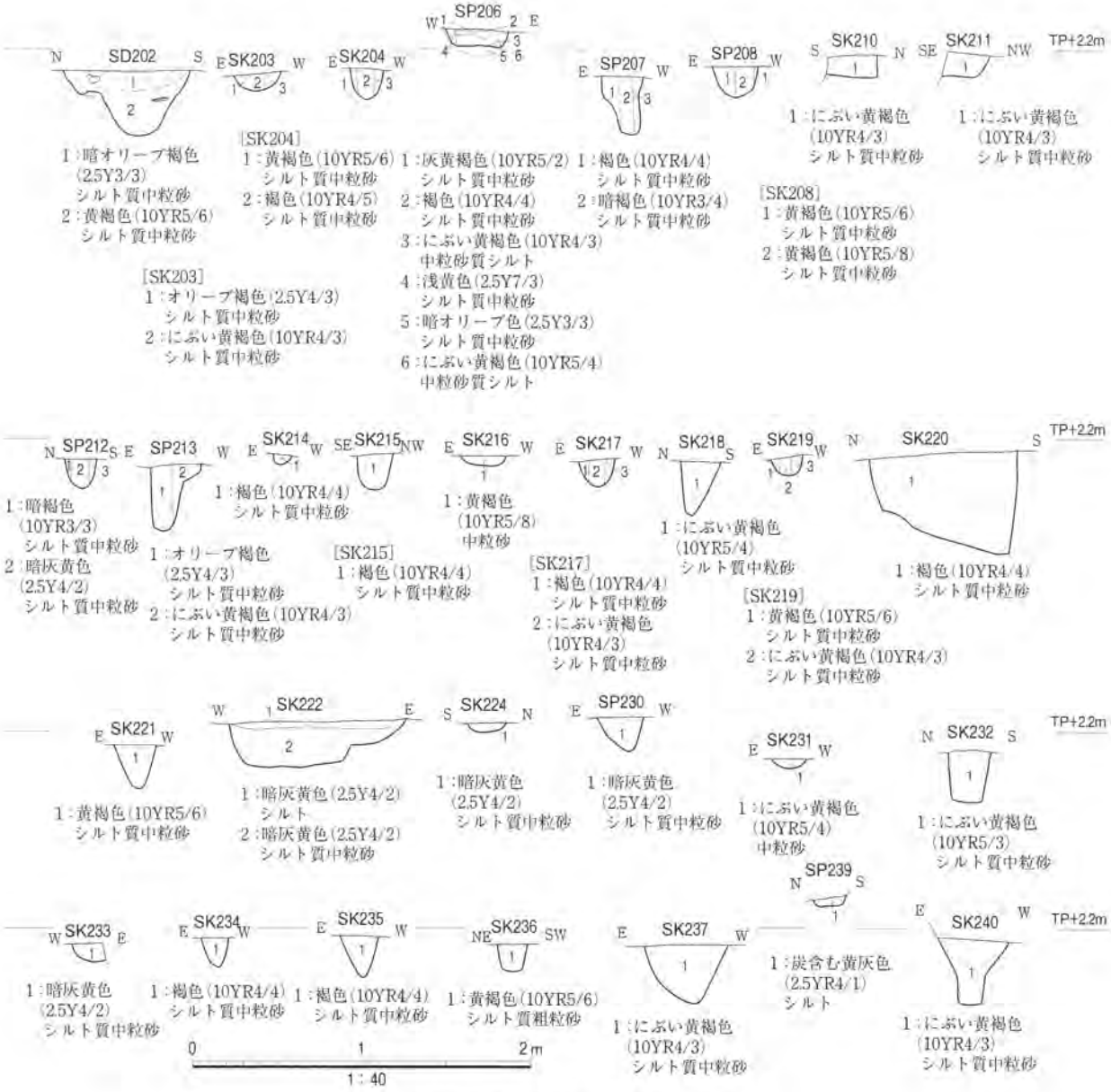


図6　第6・7層上面遺構断面図

桁行が1.8mである。南梁行の礎石下から土師器皿19が出土した。

SB103　SB102の東桁柱筋から東へ1.0mのところに、南北礎石列がある。3.6m分のみ確認した。

SE141　東壁と第6・7層上面で確認した直径1.6mの井戸で、穴蔵2に切られ、東壁の第4層の中途から埋土を確認した。第4層上面掘り込みの可能性が残る。コビキB痕の残る丸瓦や内面をハケメ調整する土師質土器の鉢が出土した。

SD116　長さ4.2m以上、幅0.4m、深さ0.2mの南北溝で、SB102の排水用施設と思われる。中国産色絵大皿23や丹波焼擂鉢などが出土した。西に接する南北1.0m以上、東西1.6mの石敷遺構もSB102の排水用施設と考えられる。

SK101　長径0.8m、短径0.4m、深さ0.1mの炭を埋土とする土壙で、土錘18のほか、土錘7個体、銅銭、肥前陶器皿、土師器皿が出土している。

SK110　長さ1.8m、幅1.0m、深さ1.6mの直方体に掘り込まれたゴミ穴で、下部は粘土偽礫を含むにぶい黄褐色(2.5YR5/3)粗粒砂、上部は浅黄色(2.5Y7/4)シルト質粗粒砂などで埋められている。青花皿22、唐草文軒平瓦33が出土した。

SK118　直径1.6m、深さ0.6mの土壙で、巨～中礫を含むにぶい黄色(2.5Y6/4)シルト質粗粒砂などで埋められている。左巻き三巴文軒丸瓦32、唐草文軒平瓦37が見つかった。埋没後上面に幅0.5m、深さ0.1mの馬蹄形の溝SD114が掘られる。

SK142　東壁で確認した直径1.4m、深さ0.6mの土壙で、下部は黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂質シルト、上部はにぶい黄色(2.5Y6/4)シルト質粗粒砂で埋まる。

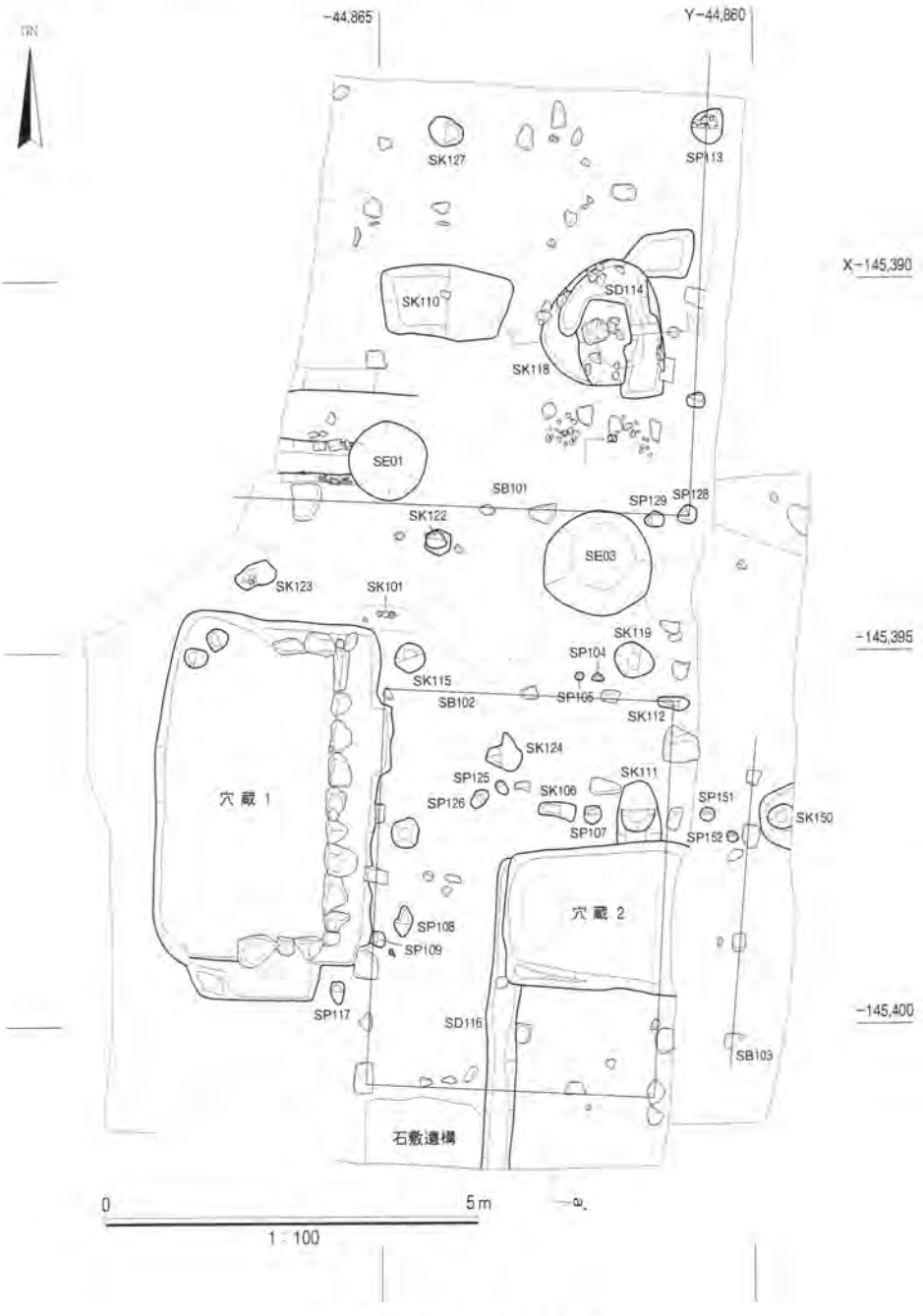


図7　第3a層上面遺構

このほかSK106・111～113・115・119・122～124・127・150の土壙や、SP104・105・107～109・117・125・126・129・151・152の小穴がある。

c. 第1a層上面の遺構(図4・7・10)

穴蔵1　南北6.2m、東西3.0m、残存する深さ0.6mの長方形の穴を掘り、内部に石積みで南北3.8m、東西1.7mの空間を設けた穴蔵である。焼土で埋められていた。左巻き三巴文軒丸瓦39のほか、肥前青磁香炉40が数十個体出土し、妙智焼け(1724年)で被災したと考えられる。

穴蔵2　南北2.0m、東西2.5m、残存する深さ2.0mの長方形の穴を掘り、素掘りのまま使用した穴蔵である。埋土はにぶい黄色(2.5Y6/4)細礫質粗粒砂である。

SE01　直径1.0mの井戸である。

SE03　直径1.4mの井戸で、掘形裏込め土はシルト偽礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂で、井戸側内は明黄褐色(2.5Y6/6)中粒砂で埋めている。

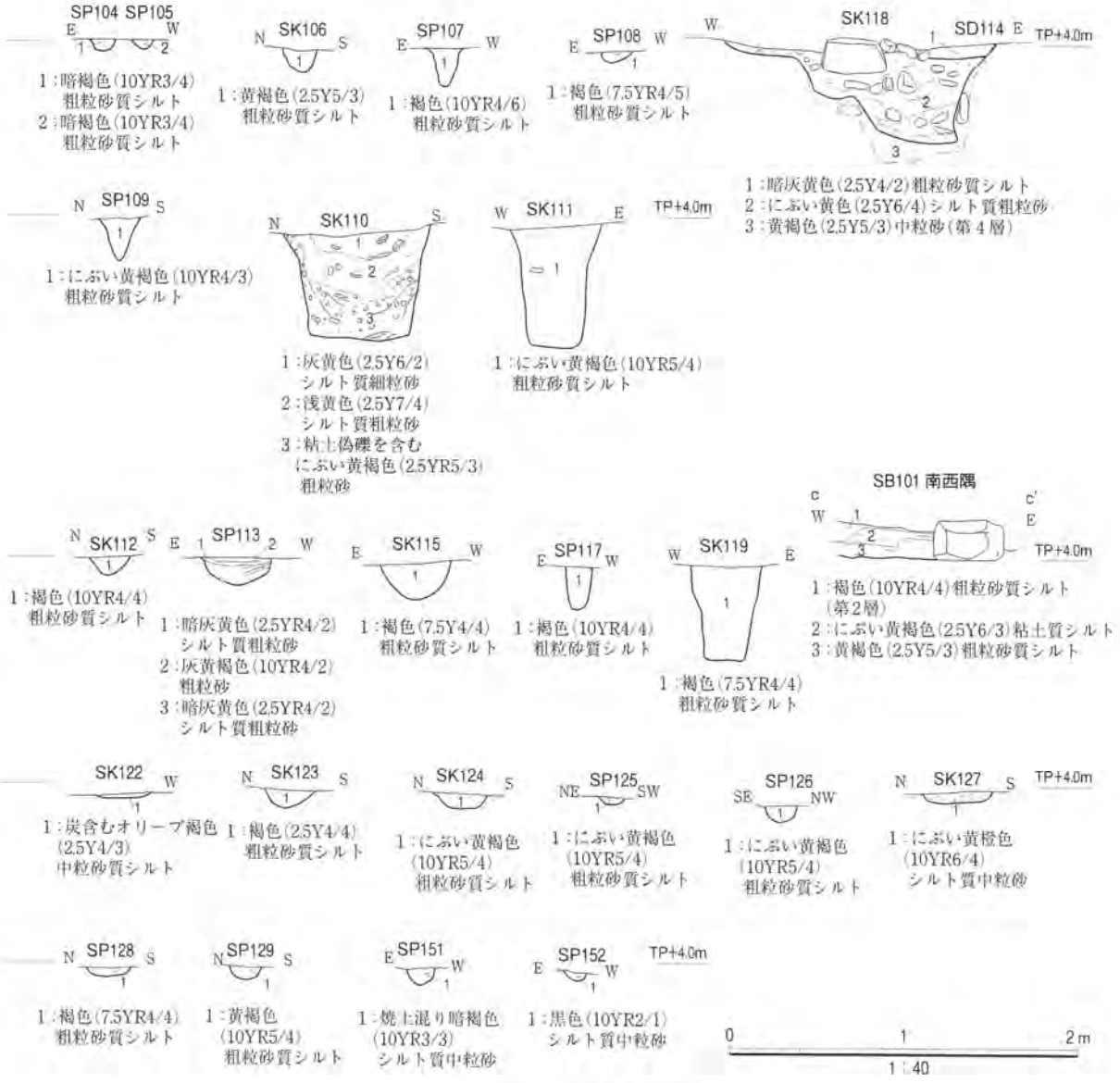


図8　第3a層上面遺構断面図

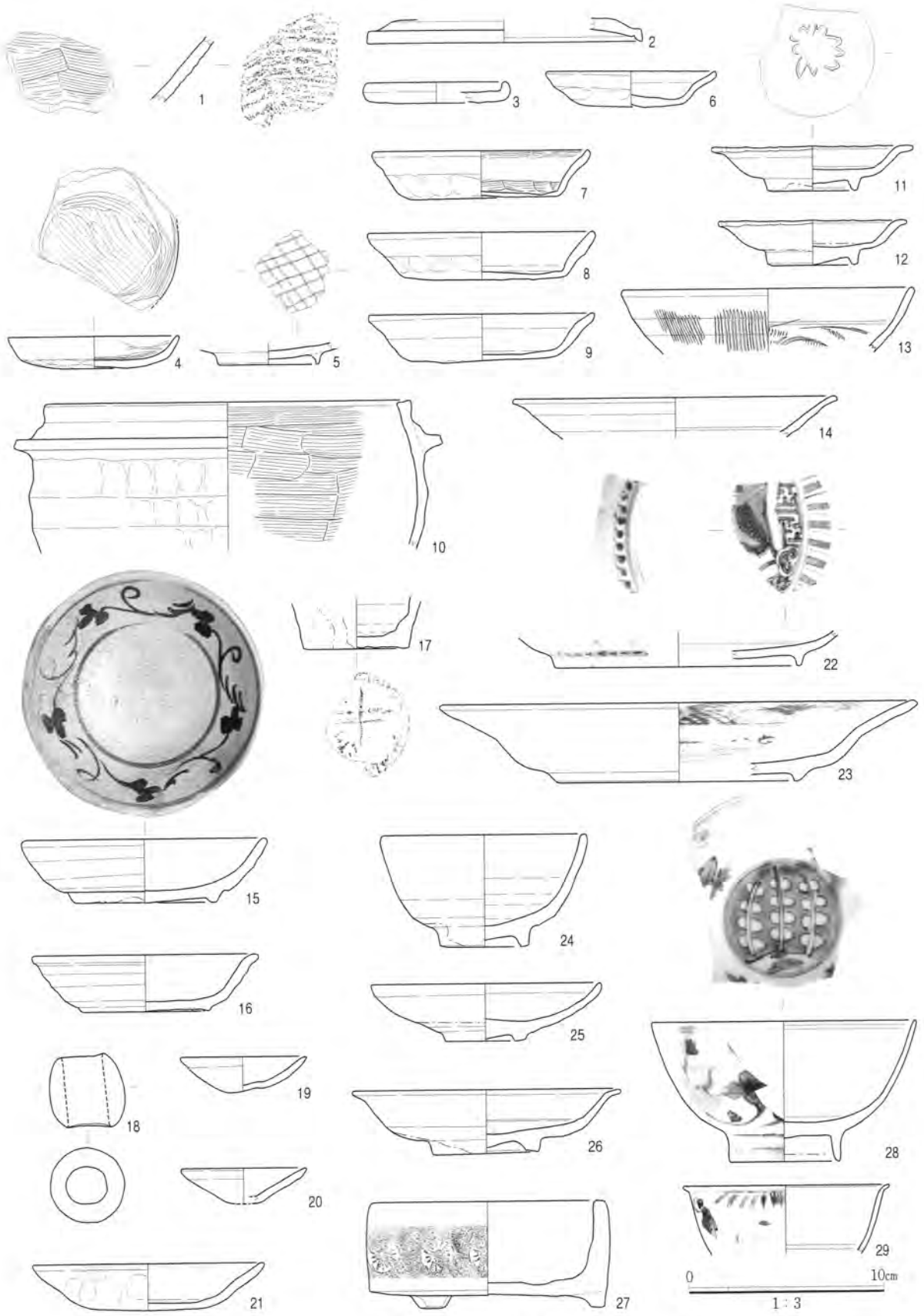


図９　出土遺物（１）

SK223（１）、SP225（３）、SK221（４）、SD202（６～10）、SP206（14）、SK102（15）、SK112（17）、SK101（18）、
SB102礎石下（19）、SK110（22）、SD116（23）、
第５～６層（２・12）、第５層（13）、第２～４層（11）、第２層（５・16・20・21・24～29）

iii)各層出土の遺物(図9・10)

第5～6層の遺物として、須恵器杯蓋2と中国産青白磁稜花皿12がある。前者は8世紀、後者は13世紀後半と考えられる。いずれも遊離資料である。

第5層の遺物として、同安窯産青磁碗13がある。12世紀後半と見られる遊離資料である。

第2～4層の遺物として、中国産青白磁稜花皿11がある。見込みに花文を陰刻する。13世紀後半と考えられる。

第2層の遺物として、瓦器椀5、瀬戸美濃焼志野皿16、土師器皿20・21、肥前陶器碗24・皿25・26、瓦質火入れ27、青花碗28・29、左巻き三巴文軒丸瓦30・31、唐草文軒平瓦34～36、鬼瓦38がある。27は三脚で体部外面に印花文を押捺する。34～36の瓦当はいずれも芋接ぎで成形されている。38は裏

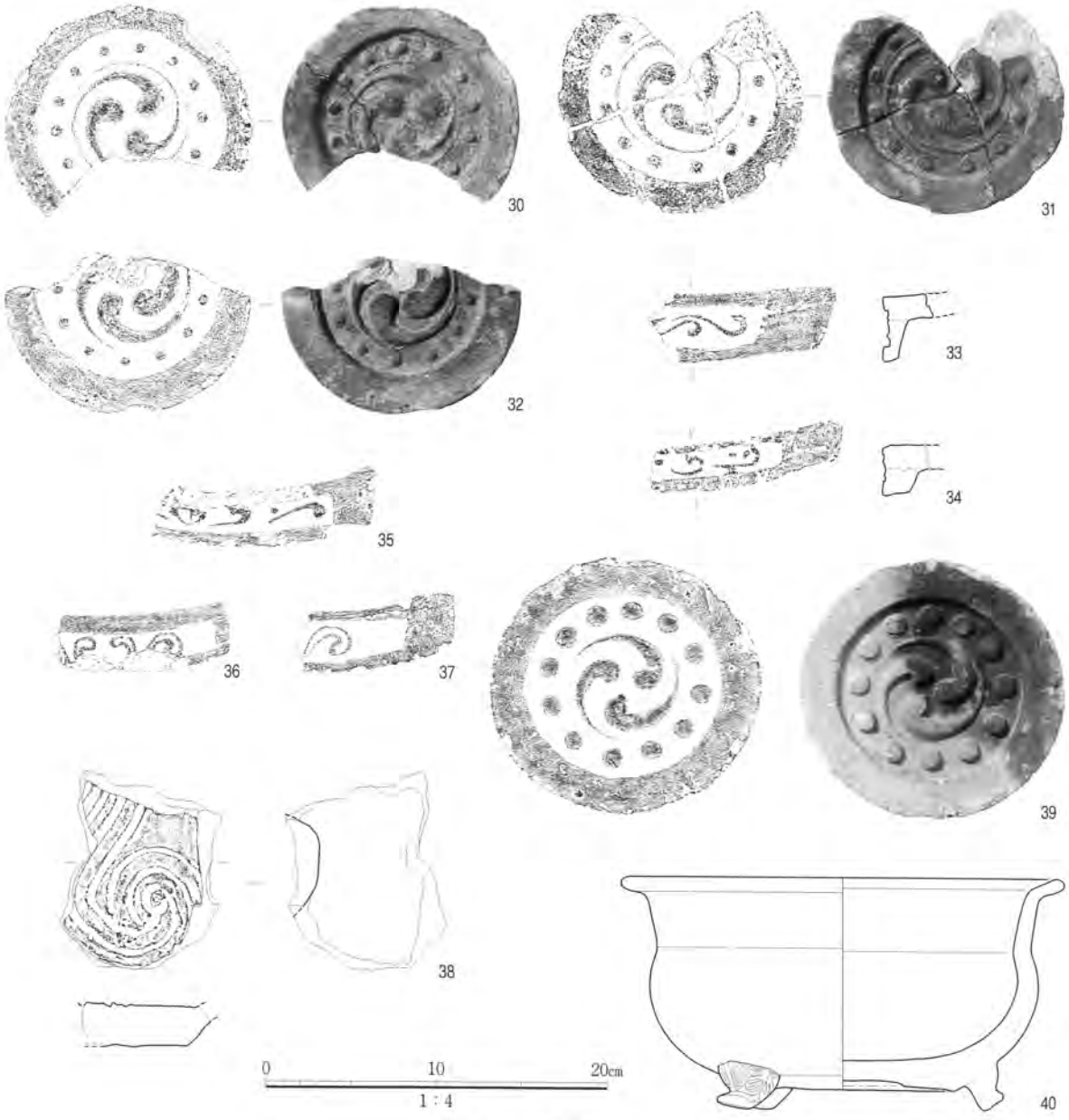


図10　出土遺物(2)

SK118(32・37)、SK110(33)、穴蔵1(39・40)、第2層(30・31・34～36・38)

面に把手成形のための円形の剥り取りがあり、表面の櫛描き文は鬼の鬚を表すと思われる。

iv)小結

第6・7層上面で、鎌倉時代～豊臣前期の遺構・遺物を検出することができた。SB201はほぼ正方位を示すことがわかった。大坂本願寺時代の溝や鎌倉時代の小穴、遺物として弥生土器や奈良時代の須恵器を検出した。

第3a層上面で、夏ノ陣で被災する礎石建物3棟とそれ以前に埋没するゴミ穴や土壙が見つかった。礎石建物は北で東に3度振り、北方のOS87－40次調査などで検出した大型礎石建物が北で東に5度前後振るのに近似するが、礎石が小振りで雑舎的な印象を与える。屋敷地の裏に近い日常的生活空間の感が強い。SK101から土錘が出土したことから漁撈関係者も考慮に入れるべきかも知れないが、中世城館内から土錘が出土する事例が多いこと[中井均2001]から、漁撈関係者以外の使用も視野に入れるべきであろう(註1)。

3)まとめ

大坂夏ノ陣で被災する礎石建物を検出すると同時に、1598年以前の400年に亙る生活の場を明らかにすることができた。上層の礎石建物は"ハレの場"というよりも、屋敷地裏側の生活の場の感が強い。現在は東西道に面した敷地だが、高麗橋と平野町橋のちょうど中間に位置することから、当地の旧地割については、今後の周辺地の調査成果から考えていかねばならない。

註

1)前掲書で中井氏は、中世山城で土錘が出土する事例が多い理由として、「戦いのなかにも平和な日々の生活のあったことを忘れてはならない。そうした兵士たちが山麓の河川で日々の糧として漁撈活動をおこなっていたのであり、その痕跡として土錘が出土するのである。」と結論付けている。大坂城跡の当地は大和川・淀川の合流点にも近く、また大阪湾岸へも至近の地である。屋敷地に居住する侍が自らの日々の糧の一部を、漁撈に求めたとしても不思議ではない。

引用文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「大坂城跡発掘調査(OS05－5)報告書」『大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2005)』、pp.105－112

2009、「大坂城跡発掘調査(OS07－8)報告書」『大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)』、pp.103－114

2010、「大坂城跡発掘調査(OS08－10)報告書」『大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.219－226

大阪市文化財協会2003、『大坂城跡』Ⅶ

大阪文化財研究所2011、『中央区東高麗橋における建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS11－2)報告書』

中井均2001、「中世城館遺跡から出土する土錘について－その集成を中心に－」:『久保和士君追悼考古論文集』(刊行会代表　村上恭通)、pp.155－176

第６・７層上面遺構
（東から）

第６・７層上面遺構
（北西から）

第６・７層上面遺構
（北から）

第3a層上面遺構
（北から）

第3a層上面遺構
（北から）

礎石建物SB103
（南西から）

中央区東高麗橋27番における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS11－15)報告書

調査個所	大阪市中央区東高麗橋27番
調査面積	40㎡
調査期間	平成23年11月17日～平成23年11月25日
調査主体	公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、小倉徹也

1)調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣氏大坂城跡惣構の西北部に位置し、東横堀川に架かる高麗橋の南東170mほどの地点にあり、近隣では多くの調査が行われている(図1)。西隣のOS08－10次調査地では、豊臣期の大きな溝状遺構と塀が検出され、防御機能をもった、大きな屋敷の区画施設の可能性があり、城下町の中でも特殊な役割と景観を有した地域である可能性が指摘されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]。道路を挟んで北側のOS07－８次調査地では、弥生時代中期以降、平安時代、鎌倉時代、豊臣期から徳川初期にかけての各時代の遺構が検出されており[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2007]、この北のOS05－５次調査地では、17世紀第２四半期の精錬炉が発見されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]。

当該地においては、大阪市教育委員会によって2011年10月２日に試掘調査が実施され、現地表下1.3m以下に近世の遺物包含層や遺構面が検出された。この結果を受け、建設工事に先立って発掘調査を行うことになった。

調査着手前に、事業者側によって現地表下約1.75mまで、現代盛土層から近世盛土層までの重機掘削が行われ、その後、敷地内の南寄りに５m×８mの調査区を設定して、2011年11月17日から調査を開始した(図２)。遺構や遺物の検出に努めながら人力で慎重に掘り下げ、平面図や断面図の作成、写真撮影などの記録作業を行ったのち、11月25日に現地における作業を完了した。

以下、本文および挿図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)、方位は現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にし

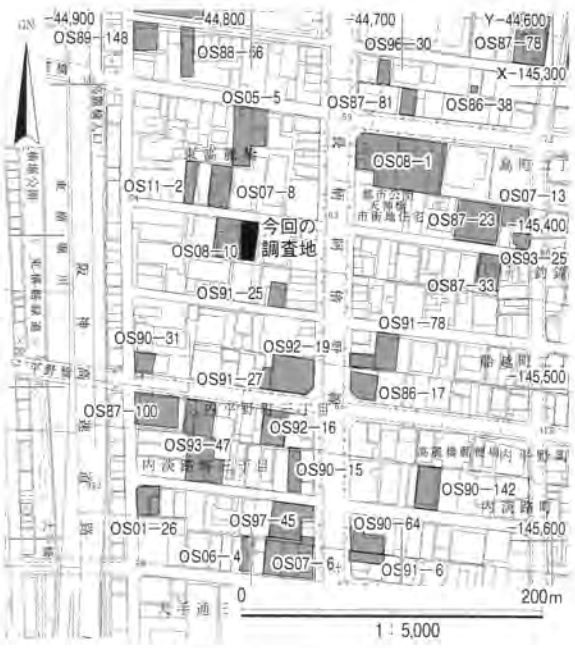


図１　調査地位置図

図２　調査区配置図

た。なお、遺物の記載は当同研究所学芸員 渡邉晴香が、貝類の同定は大阪歴史博物館学芸員 池田研が行った。

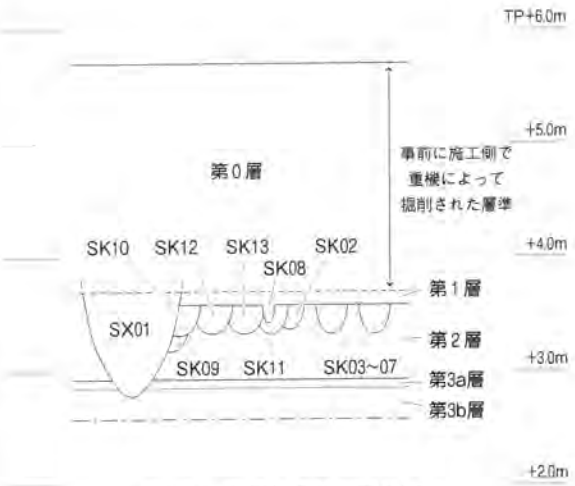


図3　地層と遺構の関係図

2)調査の結果

i)層序

現地表下3.1m(TP+2.6m)までの地層を観察した。その結果に基づいて本調査地の層序を組み立てた。以下に各層の岩相や特徴を記し、地層と遺構の関係図を図3、層序表を表1、南壁地層断面図を図4に示す。

第0層　事業者側によって掘削された現代から江戸時代にかけての盛土や攪乱で、層厚は170~200cmである。

第1層　オリーブ褐色の中粒~細粒砂からなる整地層で、炭・焼土・貝殻・シルトの偽礫を含む。調査区全域に分布していた。層厚は40~100cm、上面でSK01・14を検出した。

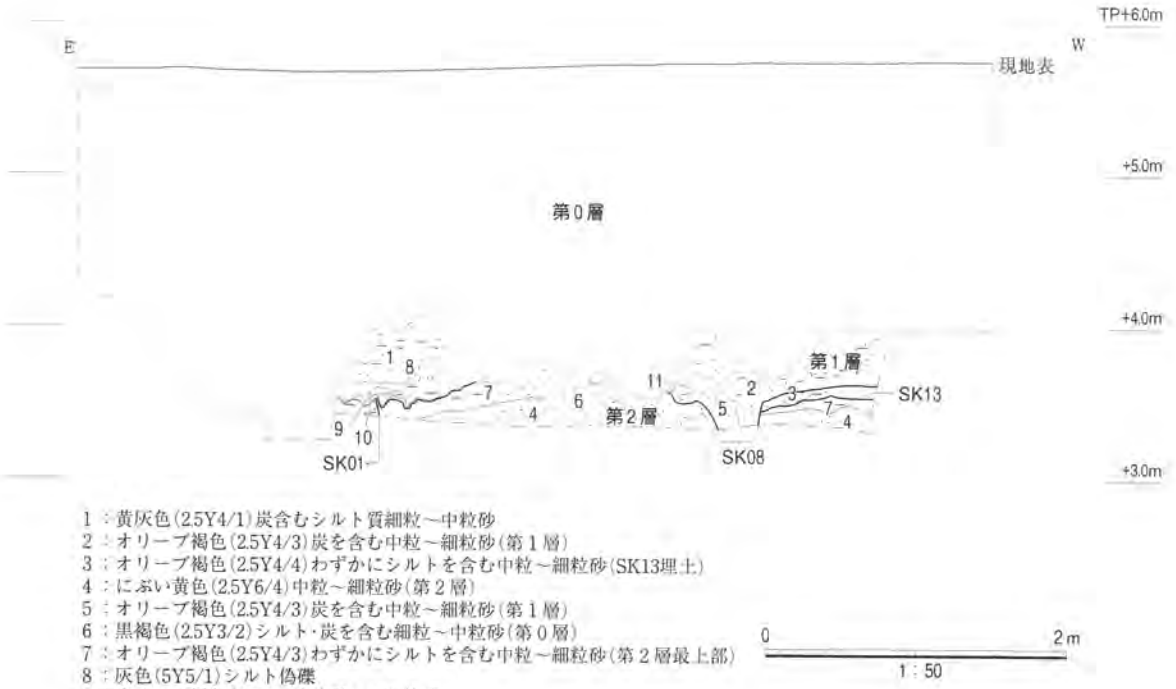
第2層　黄褐色の中粒~粗粒砂からなる盛土層で、シルトの偽礫をわずかに含む。最上部はにぶい黄色の中粒~粗粒砂からなる整地層で、シルトの偽礫を含む。下底付近および層内に灰色ないし黄灰色のシルト質細粒砂の薄層(層厚:10cm以下)を挟む。層厚は約130cmで、調査地全域に分布する。ラミナが認められることから含水状態での盛土とみられたが、埋め戻した方向を明らかにすることはできなかった。上面でSK02~13を検出した。

第3層　盛土層で、第3a層と第3b層に区分した。第3a層は灰色の粗粒砂~中礫からなり、第3b層は灰色の細粒~粗粒砂からなる。本層は深い遺構や攪乱でのみ確認した。第3a層と第3b層を合わせた層厚は60cm以上であった。

表1　層序表

OS11-15層序			岩相		土色	層厚(cm)	遺構	おもな遺物	時代
沖積層(難波累層)	最上部	第0層	(施工側が掘削した層準)		—	170~200			現代~江戸
							←SK01・14		
		第1層	含炭・焼土・貝殻・シルト偽礫 オリーブ褐色 中粒~細粒砂 (部分的にではあるが、調査区全域に分布する)	【整地層】	2.5Y4/3	40~100		肥前磁器 肥前陶器	
							←SK02~13		
		第2層	黄褐色 中粒~粗粒砂 (シルト偽礫わずかに含む) ・最上部:にぶい黄色 中粒~粗粒砂 (シルト偽礫含む)(=整地層) ・下底・層内:灰色(5Y4/1)ないし黄灰色(2.5Y4/1) シルト質細粒砂の薄層(d:10cm以下)を挟む (調査地全域に分布/ラミナが認められることから含水状態での盛土であるが、埋め戻した方向は不明)	【整地層】 【盛土層】	2.5Y5/6 (最上部: 2.5Y6/4)	ca.130			江戸初期
		第3層 a	灰色 粗粒砂~中礫	【盛土層】	5Y5/1	60≦			
		第3層 b	灰色 粗粒砂~中礫 (遺構や攪乱の下底付近で確認)	【盛土層】	5Y5/1				

←上面検出遺構



1：黄灰色(2.5Y4/1)炭含むシルト質細粒～中粒砂
2：オリーブ褐色(2.5Y4/3)炭を含む中粒～細粒砂(第1層)
3：オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかにシルトを含む中粒～細粒砂(SK13埋土)
4：にぶい黄色(2.5Y6/4)中粒～細粒砂(第2層)
5：オリーブ褐色(2.5Y4/3)炭を含む中粒～細粒砂(第1層)
6：黒褐色(2.5Y3/2)シルト・炭を含む細粒～中粒砂(第0層)
7：オリーブ褐色(2.5Y4/3)わずかにシルトを含む中粒～細粒砂(第2層最上部)
8：灰色(5Y5/1)シルト偽礫
9：オリーブ褐色(2.5Y4/6)砂質シルト偽礫
10：暗褐色(10YR3/3)酸化マンガンが沈着
11：黒褐色(10YR3/2)砂質シルト偽礫

図4　南壁地層断面図

ii)遺構と遺物

確認した遺構はいずれも徳川初期、17世紀第1四半期～17世紀前半で、第2層上面および第1層上面で検出した。

第2層上面遺構と遺物

調査区中央部でSK02、北部でSK03～07、南部でSK08～13の計12基の土壙を検出した。これら土壙の埋土はいずれも黒褐色(2.5Y3/2)のシルト質中粒～粗粒砂で、炭や貝殻片、シルトの偽礫を共通して含んでいた。なお、以下の埋土の記述は、その他の特徴がある場合に限り記すことにする。

SK02　南北長0.80m、深さ0.45m、西側は側溝トレンチの掘削によって失われており、残存した東西長は1.25mであった。埋土には上記の特徴以外に第2層の偽礫を含み、下底付近には加工時形成層が認められた。SK11に切られていた。

SK03　南北長1.25m、東西長0.85m、深さ0.30mであった。

SK04　南北長0.45m、残存した東西長0.85m、深さ0.45mであった。

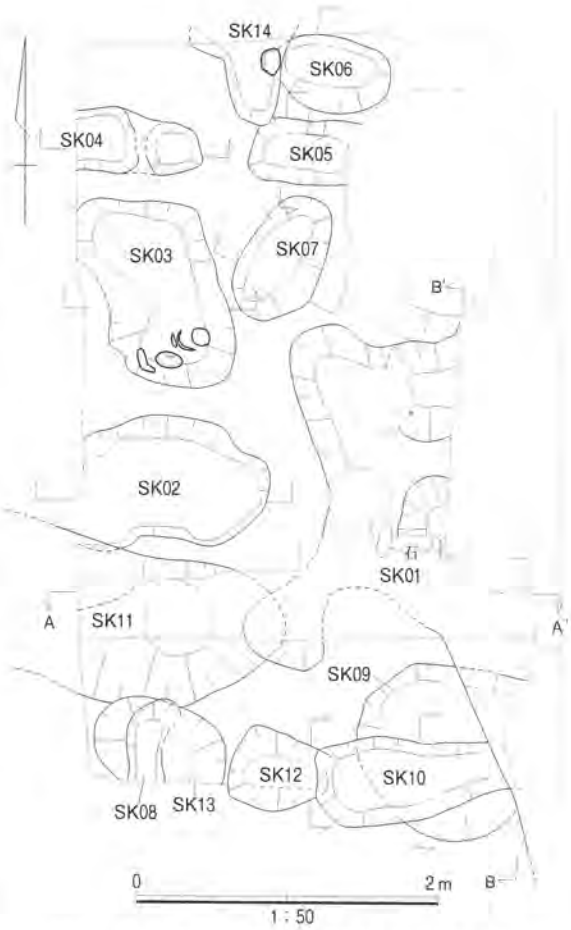


図5　第2層および第1層上面検出遺構平面図

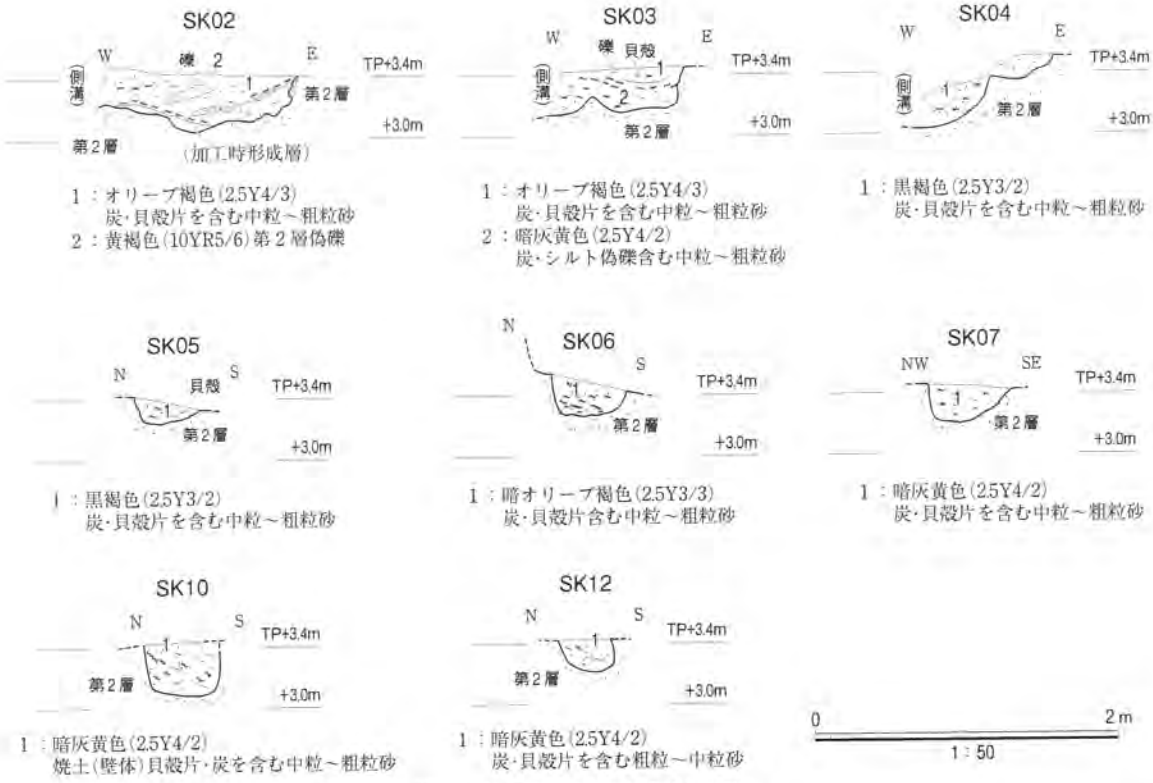
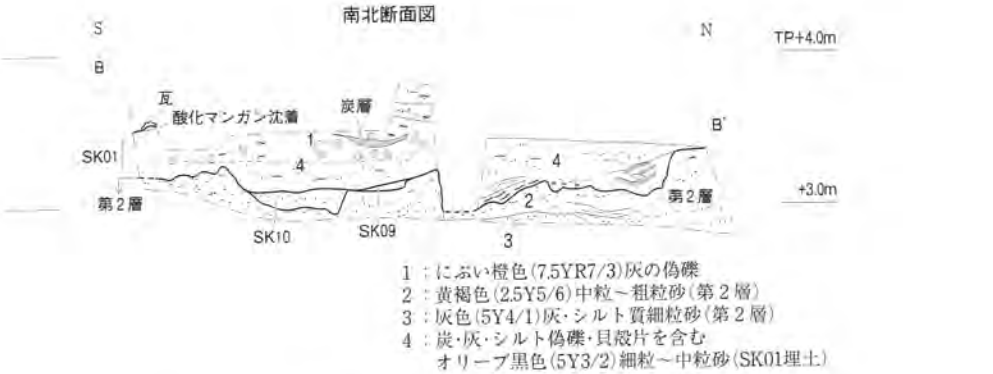


図6　第2層上面検出遺構断面図



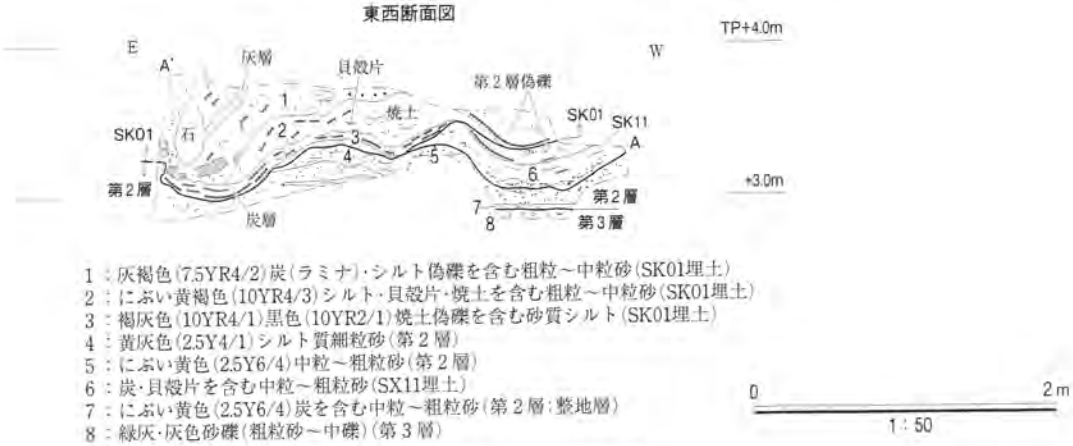


図7　SK01断面図

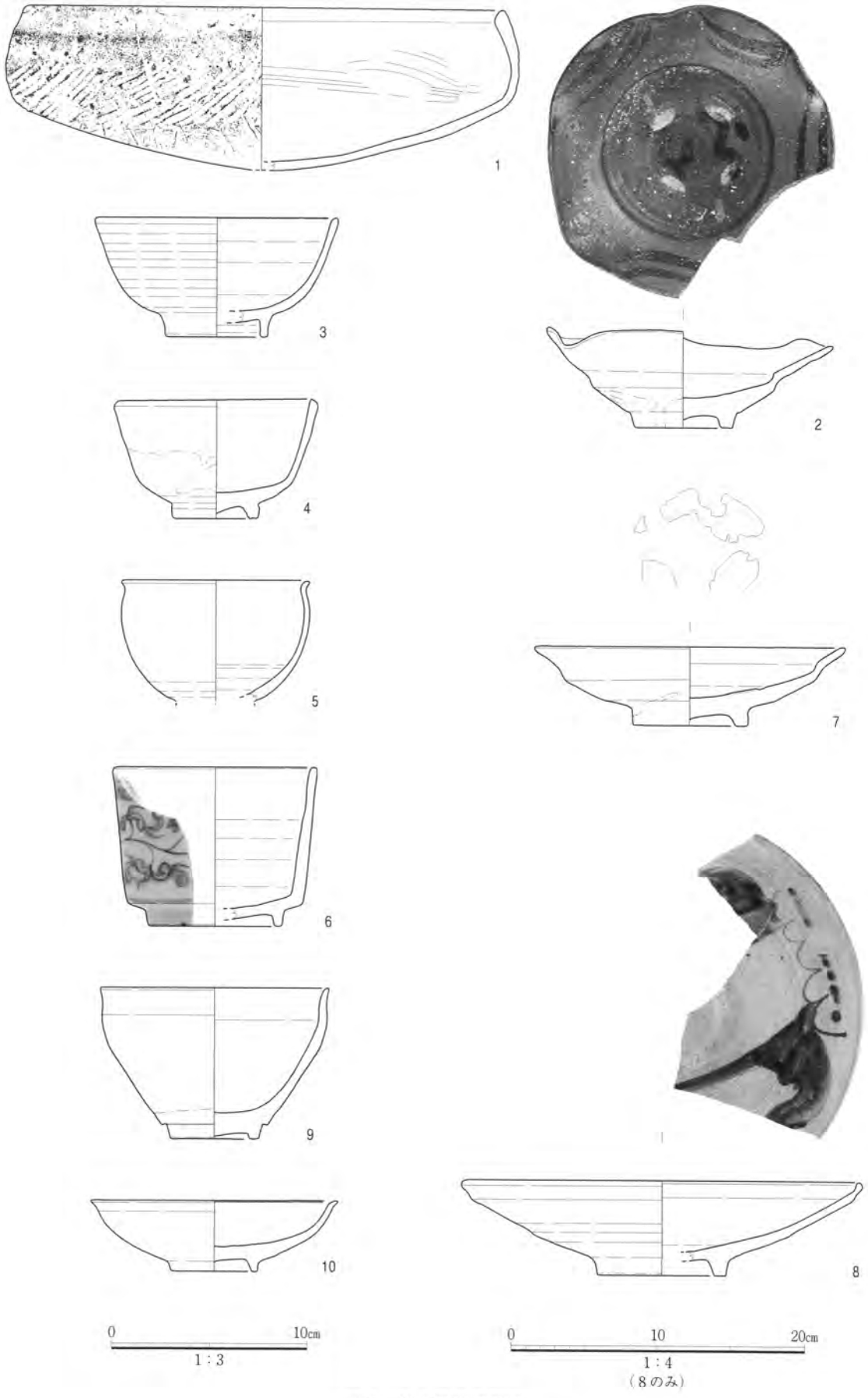


図8　出土遺物実測図

SK01(9・10)、SK07(2)、SK10(1)、第1層(3～8)

SK05　南北長0.45m、残存した東西長0.65m、深さ0.20mであった。

SK06　残存した長径0.75m、短径0.50m、深さ0.25mであった。

SK07　長径0.90m、短径0.45m、深さ0.25mであった。2は肥前陶器皿である。

SK08　残存した長さ0.55m、幅0.25m、深さ0.20mであった。本遺構の埋土は上位の第1層であった。SK13を切っていた。

SK09　長径1.20m、深さ0.25mであった。SK10に切られていた。

SK10　残存した長さ1.25m、幅0.60m、深さ0.25mであった。埋土に炭や貝殻片、シルトの偽礫の他、壁体とみられる焼けた土塊を含んでいた。SK09およびSK12を切っていた。1は焙烙である。なお、本遺構からはキセルが多く出土した。

SK11　南北長1.00m、残存した東西長1.35m、深さ0.40mであった。SK02を切り、SK08・13に切られていた。

SK12　残存した東西長0.55m、南北長0.60m、深さ0.20mであった。SK13を切り、SK10に切られていた。

SK13　東西長0.90m、残存した南北長0.55m、深さ0.30mであった。SK08とSK12に切られ、SK11を切っていた。

第1層上面遺構と遺物

調査区南東部でSK01を、北部でSK14を検出した。

SK01　調査区南部で検出した土壙で、東西長2m以上、南北長3m以上、深さ0.8mであった。埋土は粗粒～中粒砂からなり、炭や灰、貝殻片、焼土が含まれていた。上部付近では層厚約5cmの灰層、最下部付近では最大層厚10cmの炭層が認められた。9は瀬戸美濃焼天目碗、10は肥前磁器皿である。

SK14　検出した東西長0.55m、南北長0.60m、深さ0.15mであった。SK05・06を切っていた。

第1層出土遺物

3は軟質施釉陶器碗、4・5は肥前陶器碗、6は肥前磁器碗、7・8は肥前陶器皿である。これらの遺物から、第1層は17世紀前半の整地である。

表2　出土貝類の一覧表

地層・遺構名	時期	サルボウ	アカガイ	ハイガイ	タイラギ	イタヤガイ(2)	イタボガキ	マガキ	ハマグリ	カガミガイ	トリガイ	ヤマトシジミ	アワビ類	ササエ(1)	ツメタガイ	アカニシ	バイ	テングニシ
SK02		1	1			1			42				1	殻1蓋1			1	
SK03		2	1						8	1	●		●	殻2(棘2)蓋1		1	1	
SK05									1					殻2				
SK06									1									
SK07			8			1			8					殻1蓋1				
SK08			1											殻1				
SK09									●					殻1				
SK10									9					殻2				
SK12														●				
SK13														殻1蓋1				
SK01			●						2				●	殻3蓋1				
第1層		15	2	5	●?	2(杓子1)	1		97	1	3	1	5	殻25(棘12)蓋13	8	●	6	2
側溝・撹乱他	−	4	1	1		●		21	25	1	1		1	殻12(棘1)蓋2	1	●	1	

註　1)●は殻頂・殻口部が出土しておらず個体数は不明であるが、破片から存在が確認されたもの
2)いずれも右殻で、第1層の1点は杓子、他は加工の有無不明。
3)(棘)は有棘型の個体数。

出土貝類の同定結果

本調査では貝類の出土が目立った。そこで貝類の同定を行った結果、ハマグリやサザエを中心に、349個体の貝類が出土した。今後の参考としておく。詳細は表2を参照されたい。

3）まとめ

今回の調査では豊臣期の遺構を見つけることはできなかったが、徳川初期の遺構・遺物を確認することができた。第2層上面ではSK02～13の12基の土壙が高密度で分布していた。また、第1層上面のSK01では炭層ばかりでなく灰層も認められた。冒頭で述べたように北のOS05－5次調査地では17世紀第2四半期の精錬炉が見つかっており、SK01も本調査地近辺に鋳造など火を扱う工房などが存在したことを示す遺構である可能性も考えられる。

今後の周辺調査によって、さらに本地域の城下町での位置づけが明らかになることを期待したい。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「大坂城跡発掘調査（OS05－5）報告書」『大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2005)』、pp.105－112

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、「大坂城跡発掘調査（OS07－8）報告書」『大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)』、pp.103－114

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「大坂城跡発掘調査（OS08－10）報告書」『大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.219－226

調査地遠景
（北から）

南壁地層断面

第２層上面検出状況
（北西から）

SK03
（南西から）

SK01検出状況
（北東から）

SK01断面
（北東から）

中央区東高麗橋33における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS11－17)報告書

調 査 個 所　大阪市中央区東高麗橋33
調 査 面 積　78㎡
調 査 期 間　平成23年12月16日～12月29日
調 査 主 体　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、黒田慶一

1）調査に至る経緯と経過

調査地は東横堀川に架かる高麗橋から東へ80m、高麗橋通りに南接し、豊臣氏大坂城惣構の西北部に当たる（図１）。調査地の東隣で実施したOS05－５次調査地では江戸時代の17世紀第２四半期の精錬炉が見つかっている［大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006］。また南隣のOS07－８次調査地では、弥生時代中・後期の遺構や平安時代の柱穴、それに鎌倉時代の井戸や落込みが検出され［大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009］、南西方向のOS11－２次調査地では、豊臣前期に土塁を構築し、周囲を盛土で地盤嵩上げし、瓦葺き建物をもつ屋敷地にしたことがわかっている［大阪文化財研究所2011］。

大阪市教育委員会の試掘調査で地表面下1.3mにおいて、近世の遺物包含層と遺構面が確認されたことから、本調査を行うこととなった。本体工事側が地表面下1.3mまで掘削完了した状態で、調査に着手することとした。2011年12月16日より調査を開始し、南北13.0m×東西6.0mの調査区（図２）を設定して、人力によって遺構検出・掘下げ・写真撮影・図面作成などの作業を行い、12月29日に現場作業を完了し撤収した。

なお、基準点はmagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値（東京湾平均海面値）でTP＋○mと記した。

2）調査の結果

ｉ）層序（図３・４）

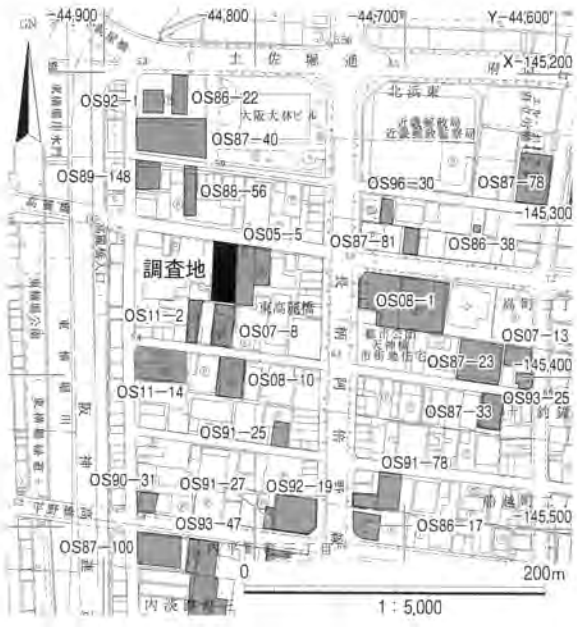


図１　調査地位置図

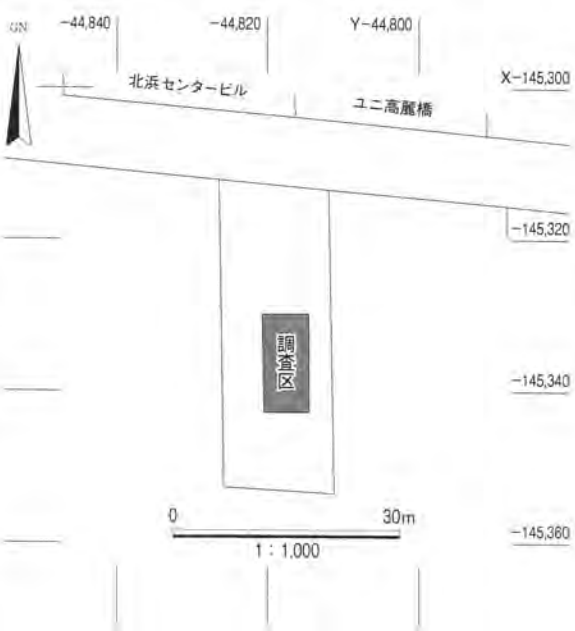


図２　調査区位置図

図3　地層と遺構の関係図

現地表高はTP＋6.0mだが、調査は地表面下1.3mまで、機械的に水平にカットした状態で着手した。第1a層上面は厳密な意味での層理面ではない。

第0層：現代攪乱層である。

第1a層：層厚40～50cmのにぶい黄褐色(10YR7/4)シルト質中粒砂の盛土層である。連珠文軒平瓦16、軒丸瓦26が出土した。

第1b層：層厚10～50cmの明黄褐色(10YR6/6)シルト質粗粒砂の盛土層である。

第2層：層厚80～100cmの上部が灰白色(2.5Y8/1)中粒砂層、下部が灰白色(2.5Y8/2)中粒砂層の盛土層である。三葉唐草文軒平瓦17が見つかった。

第3層：層厚10～60cmの炭・焼土を含むにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質粗粒砂からなる盛土層だが、北西部は黄褐色(2.5Y5/4)シルト質粗粒砂層や浅黄色(2.5Y7/4)粘土質シルトなどの薄層の互層からなり、徐々に堆積していったと思われる。

第4層：層厚10cmの焼土・炭層で、SK204の埋土でもある。大坂夏ノ陣の焼土の可能性がある。

第5層：層厚30～40cmの灰黄色(2.5Y6/2)中粒砂の盛土層である。肥前陶器絵付け皿10が出土した。

第6層：層厚30cmのにぶい黄褐色(10YR5/3)粘土質粗粒砂の盛土層である。

第7層：層厚50cmのにぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂の自然堆積層である。土師器甕1が出土した。

第8層：層厚30cm以上のにぶい黄色(10YR4/3)中粒砂の自然堆積層である。

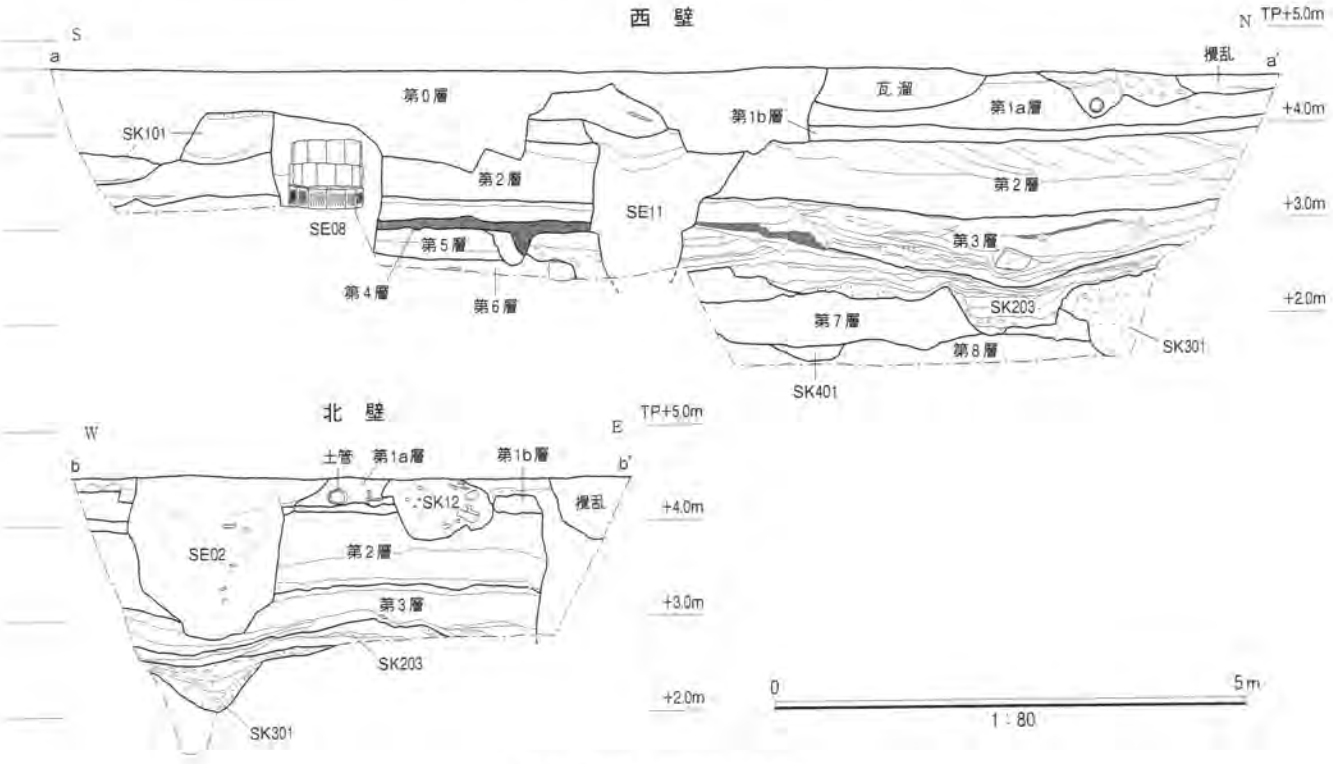


図4　西壁・北壁地層断面図

ii)遺構と遺物

a．第8層上面の遺構(古代、図4)

SK401　西壁で確認した上端直径0.8m、下端直径0.3m、深さ0.2mのにぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂を埋土とする土壙である。

b．第7層上面の遺構(中世、図4)

SK301　西壁と北壁で確認した上端直径0.9m以上、下端直径0.4m以上、深さ1.0mの黄褐色(2.5Y5/4)中礫混りシルト質粗粒砂を埋土とする土壙である。

c．第5層上面の遺構と遺物(豊臣後期、図4・5・8・9)

SK201　直径2.7m以上、深さ1.6mの土壙で、オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂と植物遺体の集積した黒色(2.5Y2/1)シルトの薄層が互層になって堆積、埋没している。朝顔形埴輪4、肥前陶器、備前焼などが出土した。

SK202　南北1.5m、東西1.1m、深さ0.4mの不整長方形の土壙で、オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂などで埋まっている。瀬戸美濃焼丸皿5や土師器擂鉢8が出土した。

SK203　南北5.0m以上、東西2.0m以上、深さ0.5mの緩傾斜の擂鉢状土壙の底に、直径1.4m、深さ0.4mの凹地がある。凹地の底は灰オリーブ色(5Y5/2)粘土偽礫で埋まるが、その上部は土壙全体が、暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒砂やオリーブ褐色(2.5Y4/4)粘土の薄層の互層で埋没する。円筒埴輪3、肥前陶器皿12が見つかった。

SK204　南北0.5m、東西0.6m、深さ0.3mの長方形の土壙で、壁面と底面が焼け、炭と焼土で埋まる

d．第1b・2層上面の遺構と遺物(17世紀中葉、図4・6・9・10)

SE111　直径1.8m、深さ1.5m以上の井戸で、黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂質シルトを埋土とし、肥前磁器、瀬戸美濃焼が出土した。

石列109　西面する石列で、幅0.5m、長さ2.7m分検出した。基壇の化粧石積みと思

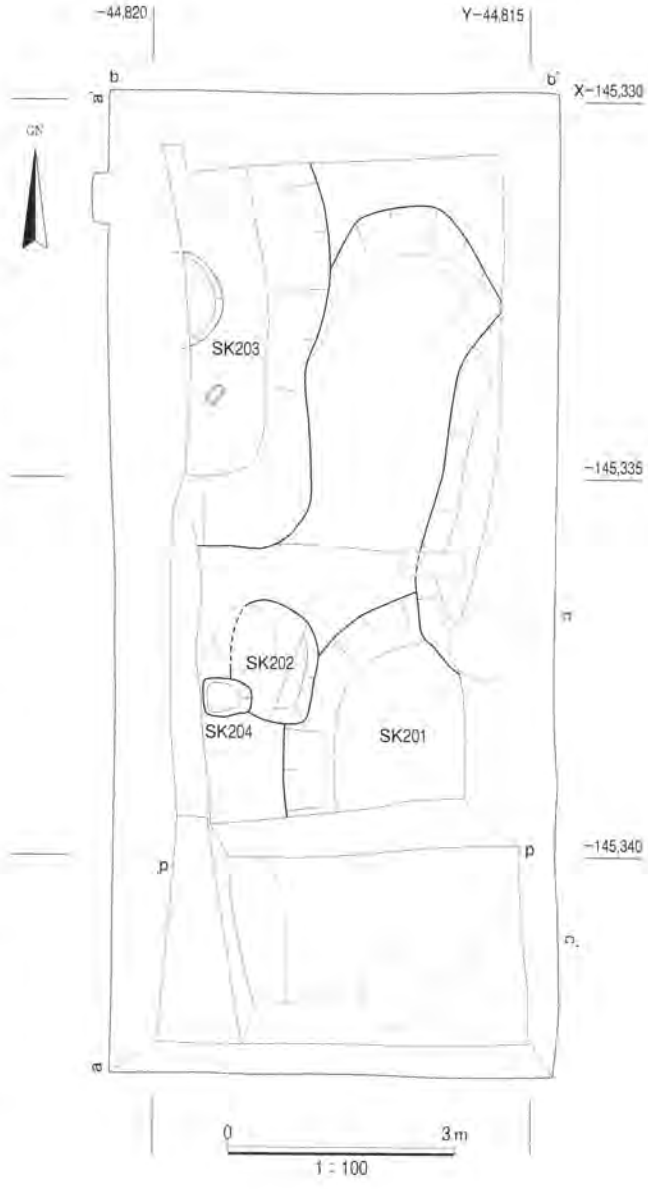


図5　第5層上面平面図

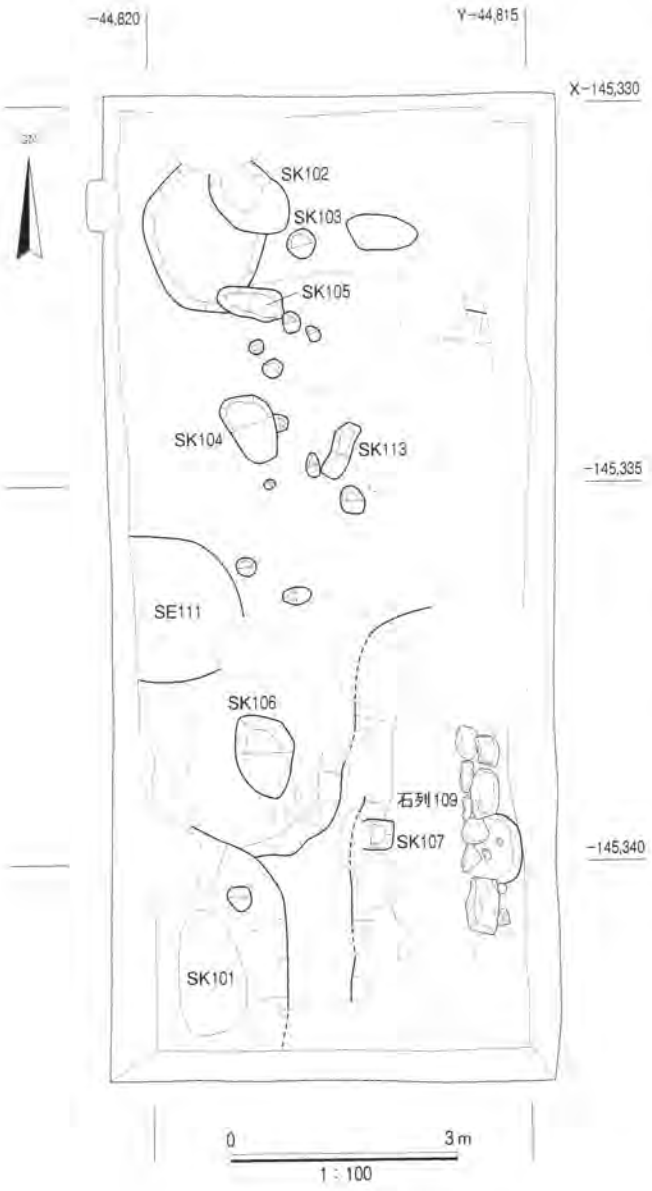


図6　第1b・2層上面平面図

われ、2段分確認した。第1b層上に築かれ、石列は薄い炭層で覆われていた。

SK101　南北3.0m以上、東西1.7m以上、深さ0.7mの土壙で、底部に有機物を含む黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトが0.1mほど堆積した後、黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂質シルトで埋没している。中国産青花小杯20、産地不明青磁21、肥前陶器碗22・23、土師器皿24、焙烙25が出土した。ゴミ穴と見られる。21は畳付けに砂が付着する。

SK102　長さ1.3m、幅0.8m、深さ0.2mの平面楕円形、断面擂鉢状の土壙で、炭を含む褐色(10YR4/6)～暗灰黄色(2.5Y4/2)のシルト質粗粒砂で埋まる。

SK103　直径0.4m、深さ0.1mの円形の土壙で、褐色(10YR4/4)中粒砂で埋まる。

SK104　長さ1.0m、幅0.6m、深さ0.2mの平面不整長方形、断面箱形の土壙で、炭を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒砂で埋まる。

SK105　長さ0.9m、幅0.4m、深さ0.1mの土壙で、黄褐色(2.5Y5/4)シルト質粗粒砂で埋まる。

SK106　長さ1.1m、幅0.8m、深さ0.3mの平面不整楕円形、断面舟形の土壙で、炭・焼土を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒砂で埋まる。

SK107　一辺0.5m、深さ0.3mの瓦溜で、三葉唐草文軒平瓦18、左巻き三巴文軒丸瓦28が出土した。

SK113　長さ0.8m、幅0.3m、深さ0.1mの箱形の土壙で、黄褐色(2.5Y5/4)シルト質粗粒砂を埋土とする。

このほか中央北寄りに直径0.2～0.3m、深さ0.1mの小穴が10基ある。

e．第1a層上面の遺構と遺物(17世紀後半以降、図4・7・9～11、写真1)

SB01　北で東に5度振る礎石建物で、東西4.0m分検出した。柱芯々間は1.0mを測る。

SD20　SB01の柱筋から南0.5mに溝芯をもつ土管を用いた暗渠で、溝の掘形は上幅0.6m、深さ0.4mで、土管19を使用していた。玉縁部が東側になるように設置していた。

SE02　直径1.6m、深さ1.7mの井戸で、焼土や焼瓦で埋まる。

写真1　SD20内土管列(東から)

SE08　井戸瓦を用いた井戸で、掘形の直径1.2m、井戸側の直径0.8m、深さ1.5m以上を測る。

SE11　北東隅で検出した直径1.4mの井戸で、井戸側内は焼土で埋まる。

SK03　長さ1.6m、幅1.0m以上の箱形に掘られた瓦溜で、焼土で埋まる。橘文軒平瓦34～36が出土した。19世紀の火事場整理のための瓦溜である。

SK04　直径1.0m、深さ0.5mの円形の土壙で、焼土で埋まる。左巻き三巴文軒丸瓦

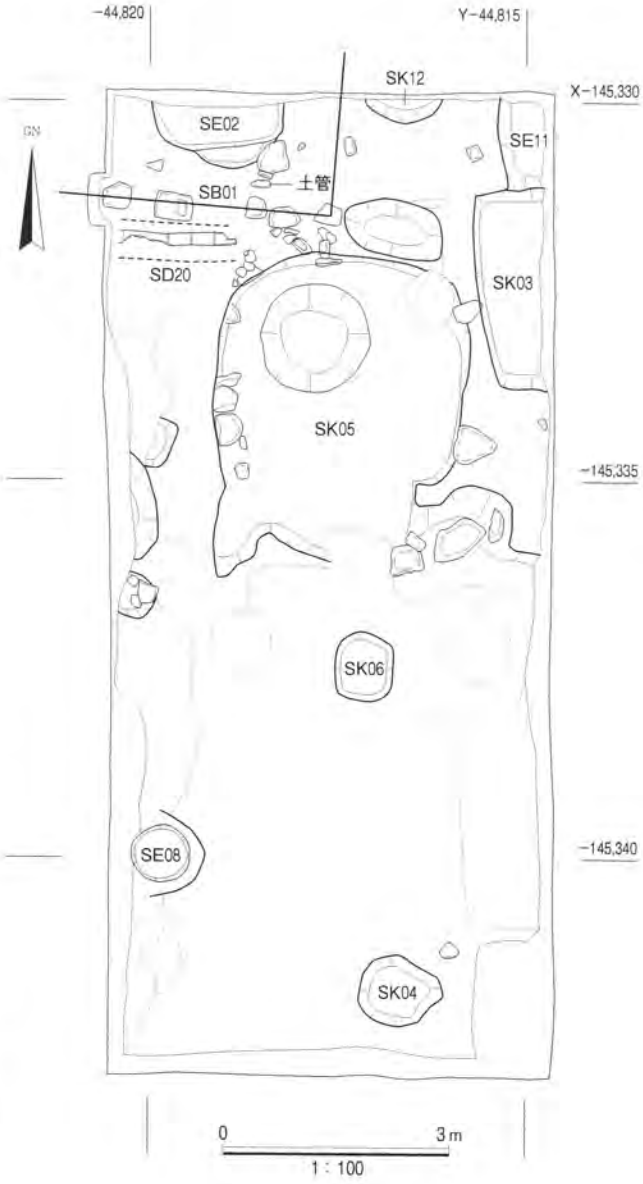


図7　第1a層上面平面図

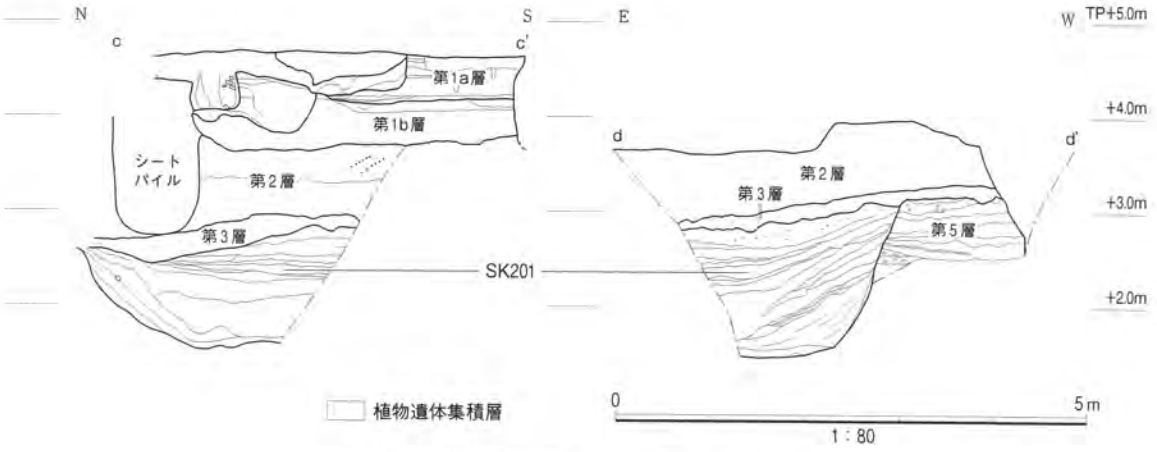


図8　SK201断面図(断面位置は図5を参照)

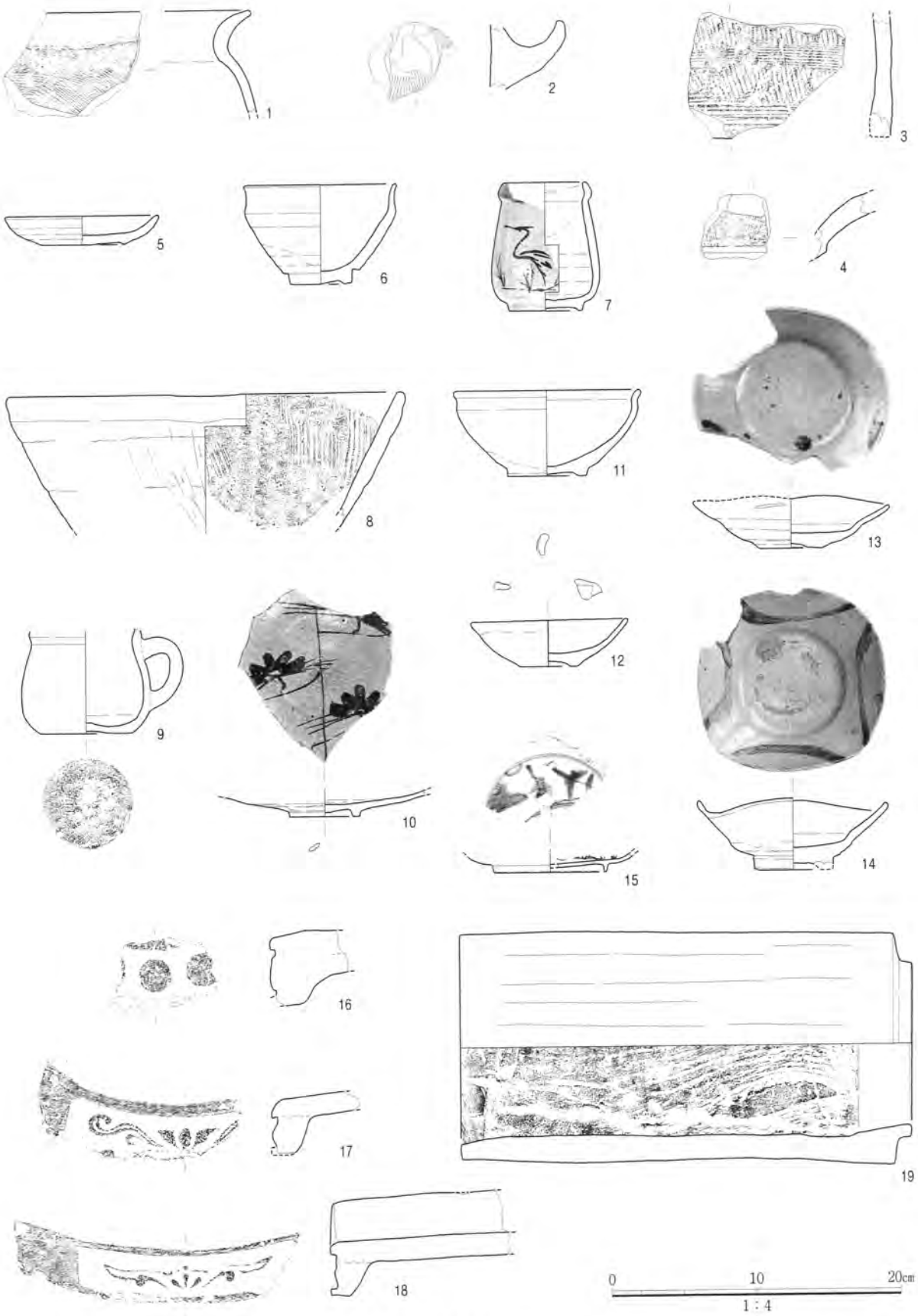


図9　出土遺物(1)

SK201(4)、SK202(5・8)、SK203(3・12)、SK104(14)、SK107(18)、SD20(19)、第7層(1)、第5層(10)、第3～5層(2・6・7・11・13・15)、第2～4層(9)、第2層(17)、第1a層(16)

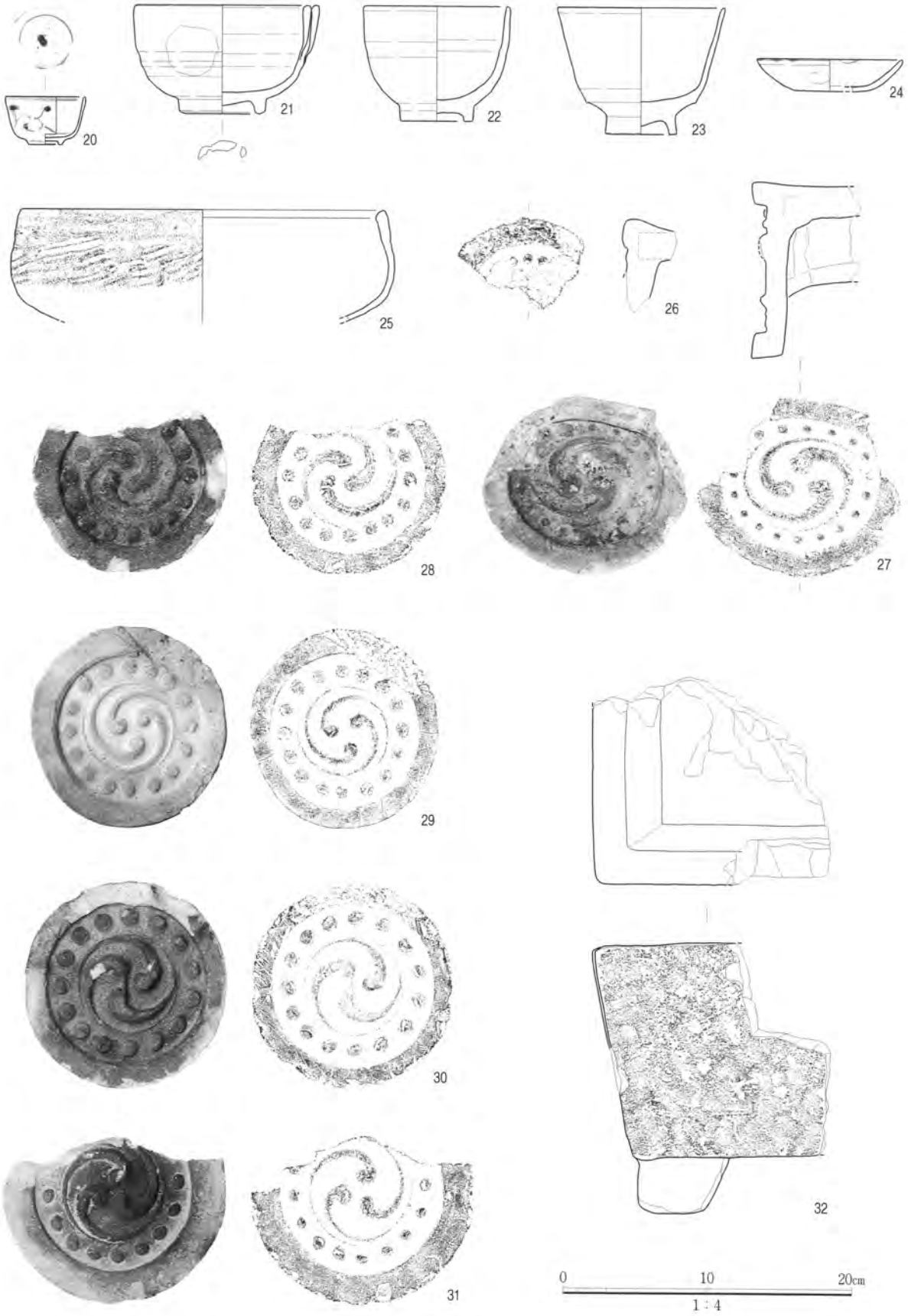


図10　出土遺物（2）

SK101(20～25)、SK107(28)、SK04(29・32)、第1a層(26)、第1a～2層(27)、第0層(30・31)

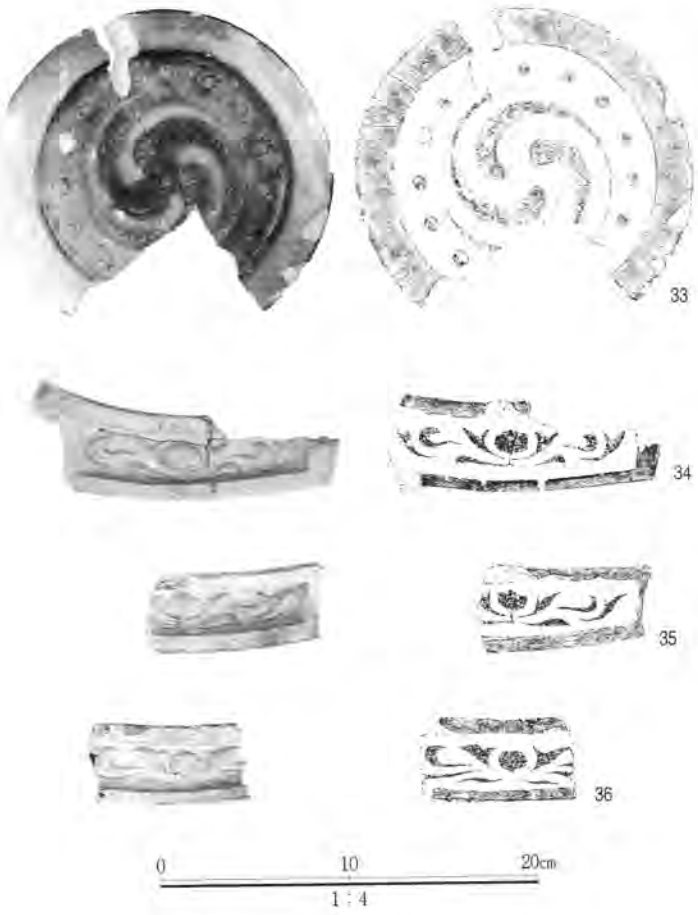


図11　出土遺物(3)
SK03(34~36)、SK04(33)

29、右巻き三巴文軒丸瓦33、緑色凝灰岩製の脚付櫃32が出土した。

SK05　南北4.0m、東西3.3m、残存深0.4mの楕円形の掘形の内縁に、化粧石列を並べた穴蔵である。

SK12　北壁際で見つかった直径1.6m、深さ1.0mの土壙で焼土・焼瓦で埋まる。

iii)各層出土遺物

第0層　左巻き三巴文軒丸瓦30・31が出土した。30は巴頭を繋ぐ笵傷をもつ。

第1a層　連珠文軒平瓦16、軒丸瓦26が見つかった。16は非常に大きな珠文と段顎をもつ。26は珠文を残すのみだが三巴文になると思われる。

第1a～2層　右巻き三巴文軒丸瓦27が出土した。笵詰めした瓦当を押圧して楕円形に変形させて、丸瓦を取り付けたようである。

第2層　三葉唐草文軒平瓦17が見つかった。豊臣期にも同文瓦はある。

第2～4層　備前焼把手付き瓶が出土した。底部に「三」の窯印をもつ。

第3～5層　土師器把手2、瀬戸美濃焼天目碗6・筒形香炉7、肥前陶器碗11・皿13、中国産青花皿15が見つかった。2は6～7世紀、6は16世紀後葉、7・11・13・15は17世紀中葉である。

第5層　肥前陶器皿10が出土した。

第7層　土師器甕1が見つかった。体部内外面にハケメ調整を施す。7世紀に位置付けられる。

iv)小結

第2層上面、もしくはその上層から掘り込まれたSK101は、17世紀中葉の肥前陶器や土師器皿を含み、確実に徳川期のものである。したがって第4層が大坂夏ノ陣の焼土である可能性があり、第2・3層は元和年間以降の盛土層である。

この地で慶長3(1598)年の大坂町中屋敷替えに伴う盛土層が見られないのは、第5層上面でTP+3.0mと高く、南西のOS11－2次調査地の慶長3年盛土嵩上げ後の地表高TP+3.1mにほとんど匹敵する高度であったからであろう。

豊臣後期には高麗橋東詰という要衝の地に位置しながらも、SK201・203といった開口した凹地が存在した。これは現在の高麗橋通り南辺から17mも南に入った、屋敷地の裏であったためかも知れな

いが、軍事上重要な地点であるから注意される。南隣のOS07－８次調査地は豊臣期に畠地であったが、屋敷地内の菜園であった可能性も残る。

徳川期の盛土後に、土管の排水施設(SD20)をもつ礎石建物(SB01)が建てられたことも注意される。

3)まとめ

慶長３年の大坂町中屋敷替えに伴う盛土層は当調査区では見られなかった。当地の旧地盤が高かったことに因ると思われる。また豊臣後期の当調査区は、大きな開口した凹地をもつ空地であったと推定される。

東隣の調査地では、元和年間の大坂再建時に金属の加工場となり、17世紀中葉には屋敷地に変化したと考えられる。大坂藩主の松平忠明は豊臣期の惣構を解放して市街地にしたことはよく知られているが、排水施設も兼ね備えた礎石建物の居住者が、町人なのか武士なのかも今後追究しなければならない問題である。

大坂城下の変遷の解明は、今後の周辺地の調査にかかっているといえる。

引用文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「大坂城跡発掘調査(OS05－5)報告書」『大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2005)』、pp.105－112

2009、「大坂城跡発掘調査(OS07－8)報告書」『大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)』、pp.103－114

大阪市文化財協会2003、『大坂城跡』Ⅶ

大阪文化財研究所2011、『中央区東高麗橋における建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS11－２)報告書』

第５層上面(北から)

SK201(西から)

SK203断面(東から)

第1a・b層上面(北から)

石列109(東から)

第1a層上面SB01
(西から)

中央区東高麗橋30－7における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS11－21)報告書

調 査 個 所　大阪市中央区東高麗橋30－７
調 査 面 積　50㎡
調 査 期 間　平成24年３月９日～３月19日
調 査 主 体　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、黒田慶一

1）調査に至る経緯と経過

調査地は東横堀川に架かる高麗橋から東南へ75mの豊臣氏大坂城惣構の西北部に当る（図１）。調査地の東隣で実施したOS07－８次調査地では、弥生時代中・後期の遺構や平安時代の柱穴、それに鎌倉時代の井戸や落込みが検出され[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009]、西隣のOS11－２次調査地では、豊臣前期の大坂町中屋敷替え令（1598年）で土塁を構築し、周囲を盛土で地盤を嵩上げし、瓦葺き建物を建てて屋敷地にしたことがわかっている[大阪文化財研究所2011]。

大阪市教育委員会の試掘調査で地表面下2.6mにおいて、近世の遺物包含層と遺構面を確認したことから、本調査を行うこととなった。工事側が地表面下2.6mまで掘削完了した状態で、調査に着手することとした。2012年３月９日より調査を開始し、南北10.0m×東西5.0mの調査区（図２）を設定した。しかし第２層以下を掘り下げるにあたり、排土の置き場がなかったことから、調査区を南北に２分割し、まず北半を地山（第10層）上面まで調査し、それを埋め戻した後、南半を調査することとした。調査は人力によって遺構検出・掘下げ・写真撮影・図面作成などの作業を行い、３月19日に現場作業を完了し撤収した。

なお、基準点はmagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値（東京湾平均海面値）でTP＋○mと記した。また、本稿における「徳川前期」の時期区分は[森毅2004]に拠る。

2）調査の結果

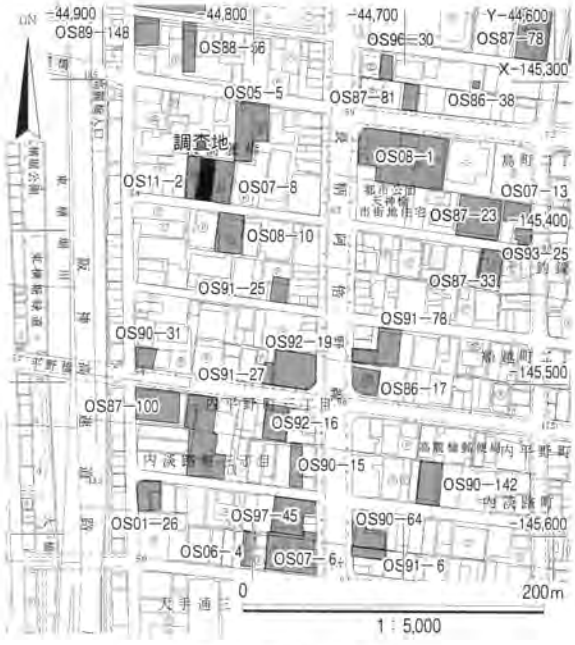


図１　調査地位置図

図２　調査区位置図

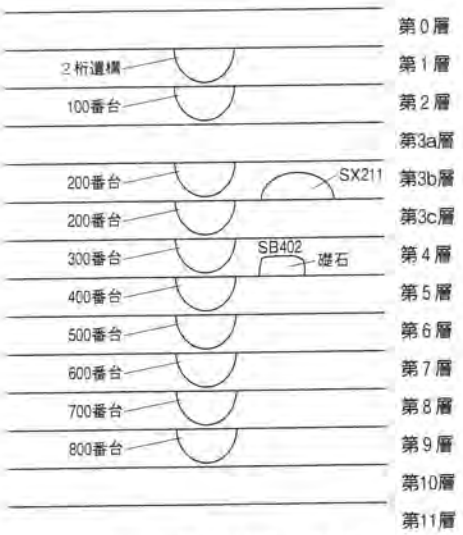


図3　地層と遺構の関係図

ⅰ)層序(図3・4)

調査地は更地になっていたのを、調査区の範囲のみ地表面下2.6mまで、機械的に水平にカットした状態で着手した。第1層上面は厳密な意味での層理面ではない。また西壁で第1層より上の地層が残っていたので図4に提示した。そこでは層厚70cmにも及ぶ18世紀代の焼土による整地層が確認された。

第0層：第1層上の地層で、17世紀後葉以降の整地層と現代攪乱層からなる。鬼瓦の顎部20が出土した。

第1層：北部に分布する層厚20～30cmの明黄褐色(10YR6/8)中粒砂の整地層である。上野・高取焼の沓茶碗19や景定元寶36が見つかった。17世紀後葉である。

第2層：層厚5～50cmのにぶい黄色(2.5Y6/4)中粒砂の17世紀後葉の整地層である。

第3a層：上部が層厚4～10cmの焼土層がのる、灰オリーブ色(5Y5/3)シルトの整地層で、肥前陶器皿13・16、青花大皿15、瀬戸美濃焼志野皿17・天目碗18が出土した。17世紀中葉である。

第3b層:層厚10～80cmの灰オリーブ色(5Y5/3)粗粒砂質シルトの整地層である。17世紀中葉である。

第3c層:層厚10～30cmのオリーブ黄色(5Y6/3)中粒砂質シルトの整地層である。17世紀中葉である。

第4層：層厚10～30cmの主として黒褐色(7.5YR3/2)中粒砂質シルトの焼土と黄褐色(2.5Y5/6)シルトからなる整地層で、上面精査中に巴文軒丸瓦7、中国産磁器色絵碗8、青花碗9・10、肥前陶器向付12、土師器土釜14、層中から中国産白磁香炉蓋5、土師器皿6、刀鐔38が見つかった。大坂夏ノ陣(1615年)後の整地層で、17世紀前葉に位置する。

第5層：層厚10～30cmのにぶい黄色(2.5Y6/4)粗粒砂質シルトの整地層である。巴文軒丸瓦4、肥前陶器皿11が出土した。17世紀初頭である。

第6層：層厚10～30cmの炭を含む灰黄褐色(10YR5/2)細粒砂の整地層である。聖宋元寶35が出土した。17世紀初頭である。

第7層：暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂質シルトの薄層や偽礫を含む層厚30～70cmのオリーブ黄色(5Y6/3)中礫質細粒砂の北から南に投入された盛土層である。1598～99年の工事に伴うものである。

第8層：層厚10～20cmの暗褐色(10YR3/3)細礫質粗粒砂層で、中国産青磁輪花皿2、瀬戸美濃焼天目碗3が出土した。このほかに初期の肥前陶器が見つかっているので、豊臣前期の地層である。

第9層：層厚20～40cmの暗褐色(10YR3/4)中粒砂の整地層で弥生土器壺1のほか、瓦器椀、瓦質土器、青磁などが見つかった。中世以前の遺物包含層である。

第10層：層厚60cmの褐色(7.5YR4/4)細礫質粗粒砂の自然堆積層である。

第11層：層厚30cm以上のにぶい黄褐色(10YR5/3)粗粒砂質細礫の自然堆積層である。

ⅱ)遺構と遺物

中世：第9層上面の遺構(図5)

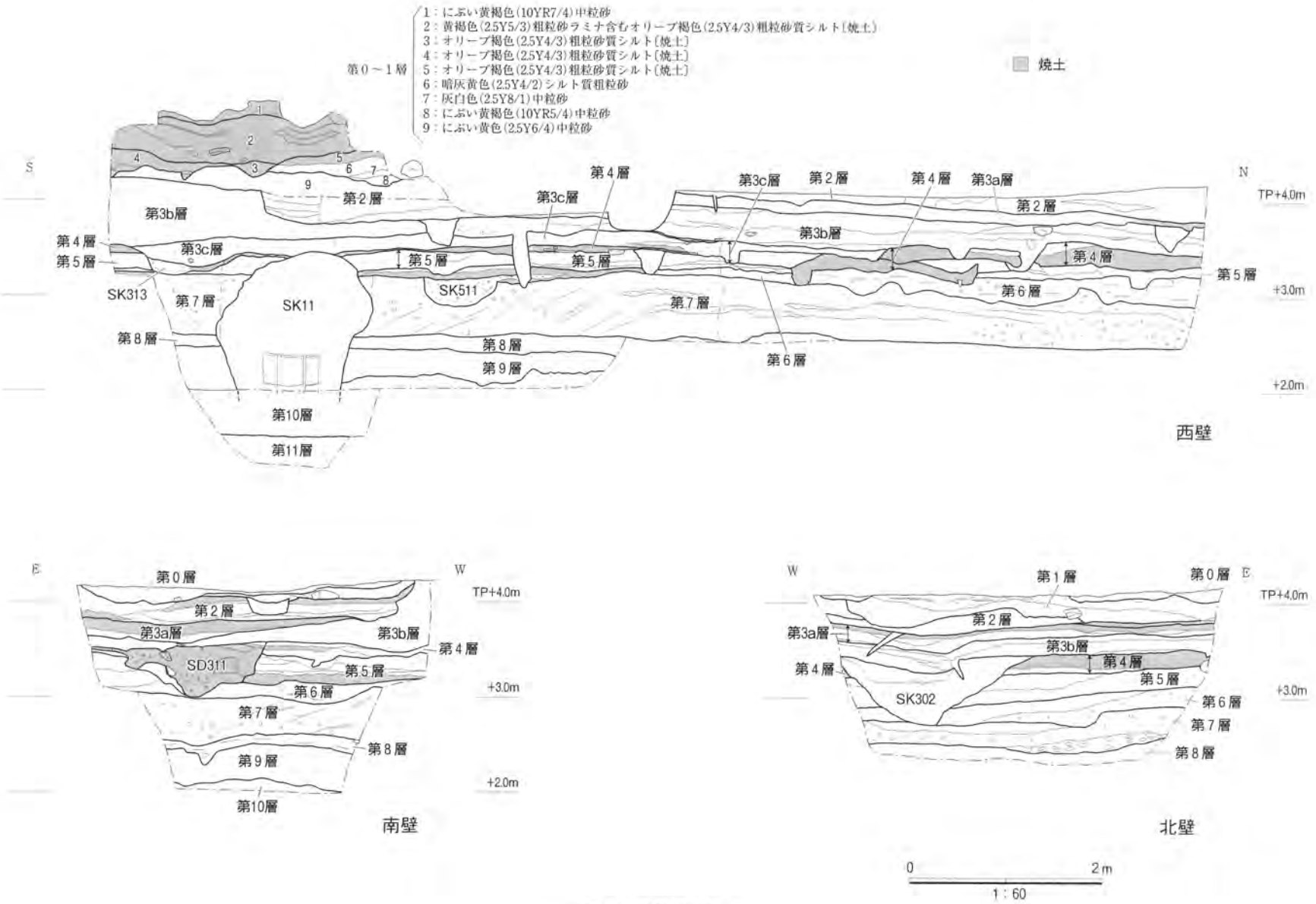

1：にぶい黄褐色(10YR7/4)中粒砂
2：黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂ラミナ含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂質シルト〔焼土〕
3：オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂質シルト〔焼土〕
4：オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂質シルト〔焼土〕
5：オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂質シルト〔焼土〕
6：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒砂
7：灰白色(2.5Y8/1)中粒砂
8：にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂
9：にぶい黄色(2.5Y6/4)中粒砂
第0～1層
焼土
S
N
TP+4.0m
+3.0m
+2.0m
第2層
第3b層
第4層
第5層
第3c層
第3a層
第6層
第7層
第8層
第9層
第10層
第11層
SK313
SK11
SK511
西壁
E
W
第0層
SD311
南壁
第1層
SK302
北壁
0
2m
1：60

図4　地層断面図

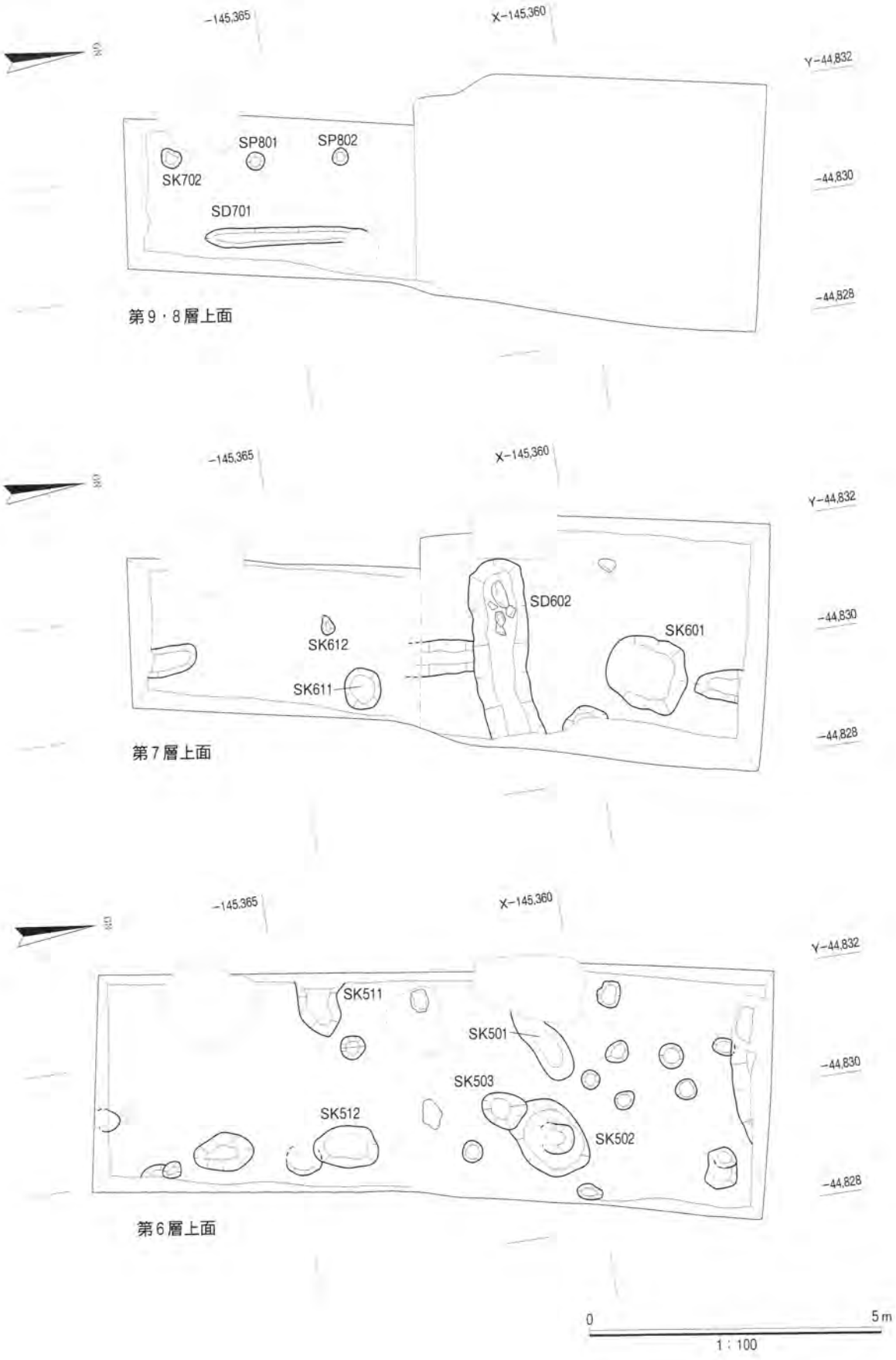

X-145,365
X-145,360
Y-44,832
-44,830
-44,828
SP801
SP802
SK702
SD701
第9・8層上面
SD602
SK601
SK612
SK611
第7層上面
SK511
SK501
SK503
SK512
SK502
第6層上面
0
5m
1:100

図5　遺構平面図(1)

SP801　直径0.35m、深さ0.15mの小穴で、埋土は暗褐色(10YR3/3)粗粒砂である。

SP802　直径0.25m、深さ0.10mの小穴で、埋土は暗褐色(10YR3/3)粗粒砂である。

豊臣前期：第８層上面の遺構(図５)

SD701　長さ2.8m、幅0.3m、深さ0.1mの溝で、暗オリーブ褐色(2.5YR3/2)粗～細粒砂で埋没している。土師器皿の小片が出土した。

SK702　直径0.30m、深さ0.05mの小土壙で、黒褐色(10YR2/3)粗粒砂で埋まっている。

豊臣後期：第７層上面の遺構(図５・９)

SD602　長さ3.0m以上、幅0.9m、深さ0.3mの溝で、土師器、焙烙21、産地不明片口擂鉢22、鋳型23・24が出土した。第７層であるオリーブ黄色(5Y6/3)中礫質細粒砂で埋没する。21は外面を格子目タタキで成形後、口縁部をヨコナデ調整、内面はハケ調整である。22は原体８本の櫛で擂目を入れる。23はやや湾曲して浅い段をもつ製品を作った鋳型で、24は円筒形の製品を作った鋳型と考えられる。

SK601　一辺1.2～1.4m、深さ0.1mの不整方形の土壙で、オリーブ黄色(5Y6/3)中礫質細粒砂で埋没する。

SK611　直径0.6m、深さ0.3mの円形の土壙で、オリーブ黄色(5Y6/3)中礫質細粒砂で埋まる。肥前陶器小杯25が見つかった。

SK612　直径0.20m、深さ0.05mの不整円形の土壙で、暗褐色(10YR3/4)細粒砂で埋まる。

豊臣後期：第６層上面の遺構(図５・９)

SK501　長径1.5m以上、短径0.5m、深さ0.4mの長楕円形の土壙で、上部1/5は灰黄褐色(10YR5/2)細粒砂、下部の4/5は黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトで埋まる。肥前陶器向付26、土師器皿27・28が出土した。26外面には竹と雁が鉄絵で描かれ、27・28はいずれも口縁部に煤が付着することから、灯明皿として利用されたと考えられる。28の底外面には粗い布目痕跡が見られる。

SK502　長径1.5m、短径1.1m、深さ0.2mの楕円形の土壙で、黄褐色(2.5Y6/3)シルト質粗粒砂などで埋まる。

SK503　SK502よりも新しい、直径0.7m、深さ0.2mの不整円形の土壙で、にぶい黄褐色(210YR4/3)粗粒砂質細粒砂で埋まる。

SK511　長さ1.0m以上、幅0.7m、深さ0.3mの土壙で、暗灰黄色(2.5Y4/2)細礫質粗粒砂で埋まる。

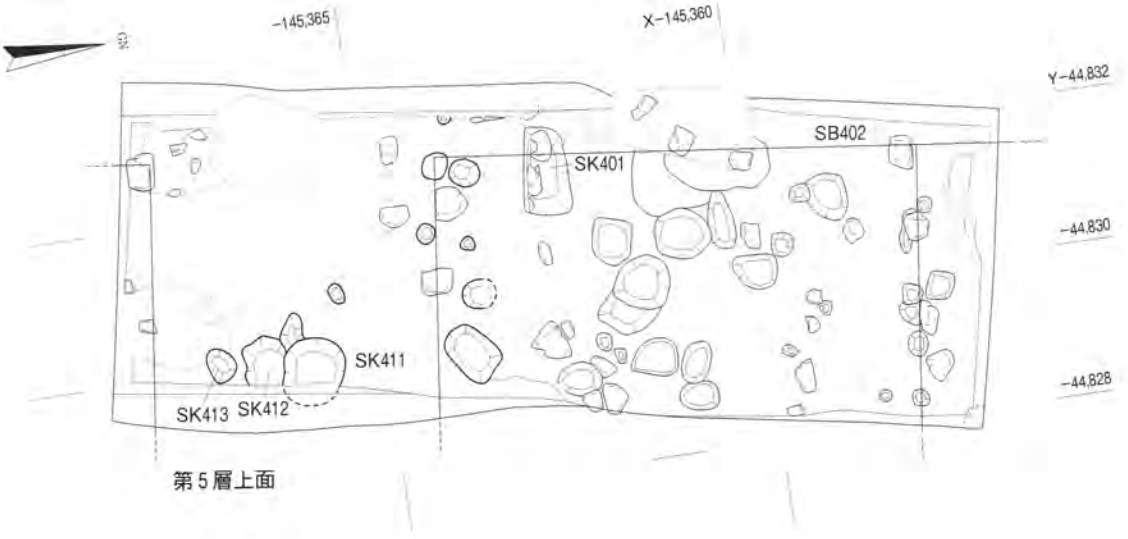
SK512　長径1.1m、短径0.7m、深さ0.3mの楕円形の土壙で、白色粘土偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂で埋まる。

豊臣後期：第５層上面の遺構(図６・９、写真１)

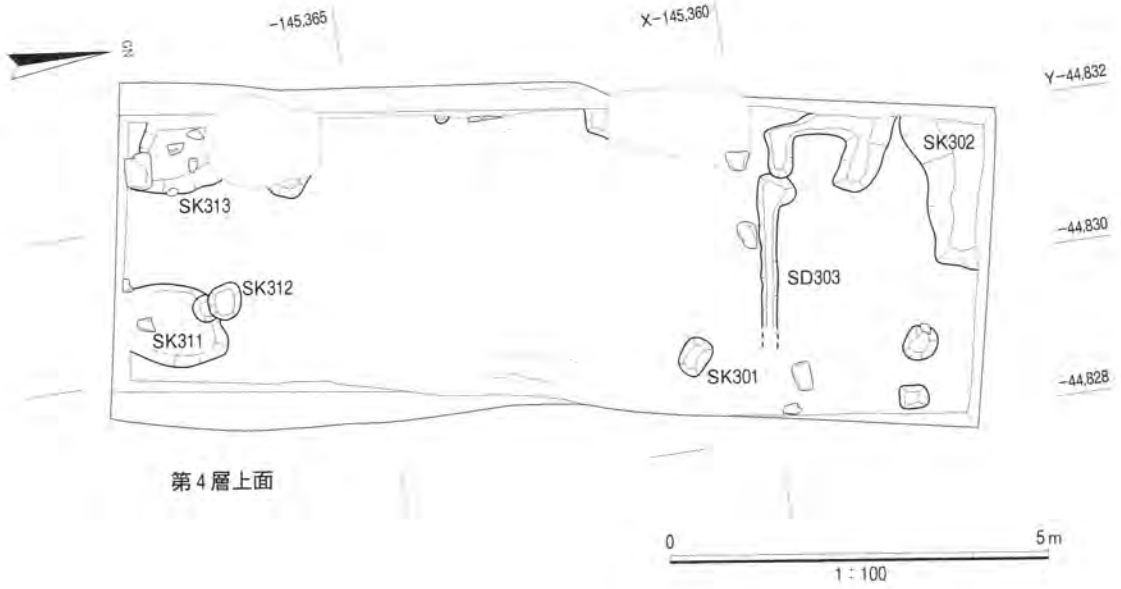
SB402　棟筋を南北にとる礎石建物で、梁側は1.5m等間で3.0m以上、桁側は3.0m等間で6.0m以上と考えられる。調査区北壁際で芯々間1.0mで礎石が並ぶのは、間仕切りのためと思われる。調査区南西隅の礎石はSB402の西柱列の延長上にあることから、軒を揃えてもう１棟南に建物があった可能性がある。

SK401　長さ1.2m、幅0.6m、深さ0.5mの土壙で、第４層の焼土で埋まる。

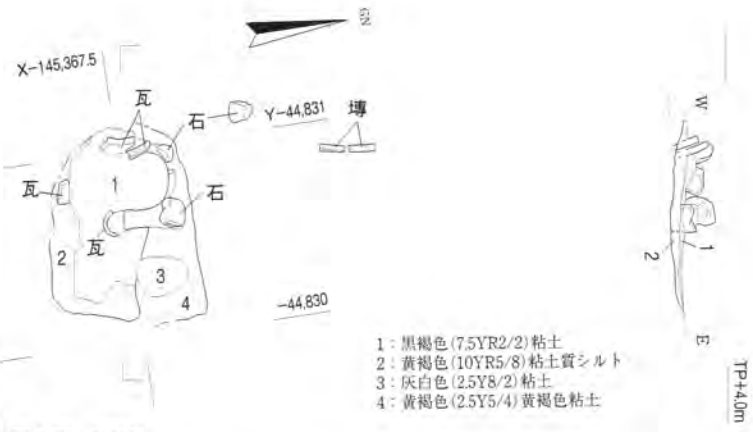
SK411　長径0.9m、短径0.8m、深さ0.2mの土壙で、黄褐色(2.5Y5/6)シルトで埋まる。銅銭 元□



第5層上面



第4層上面



第3c層上面 SX221

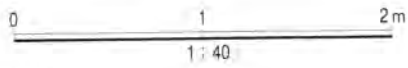


図6　遺構平面図(2)

通寶37が出土した。

SK412　直径0.7m、深さ0.2mの不整円形の土壙で、黄褐色(2.5Y5/6)シルトで埋没する。中国産青花大皿29が出土した。

SK413　直径0.5m、深さ0.2mの不整円形の土壙で、黄褐色(2.5Y5/6)シルトで埋まる。

徳川初期：第４層上面の遺構(図６)

SD303　長さ2.3m以上、幅0.2m、深さ0.1mの東西溝で、オリーブ黄色(5Y6/3)中粒砂質シルトを埋土とする。

SK302　南北1.2m以上、東西2.1m以上、深さ0.7mの土壙で、明黄褐色(10YR3/4)シルト質粗粒砂を埋土とする。

SK311　長径1.5m以上、短径1.1m、深さ0.5mの土壙で、焼土と炭を含む暗褐色(2.5Y5/3)シルト質粗粒砂を埋土とする。

SK312　直径0.4m、深さ0.1mの土壙で、浅黄色(2.5Y7/4)シルト質粗粒砂を埋土とする。

SK313　南北1.0m以上、東西1.0m、深さ0.2mの土壙で、灰オリーブ色(5Y5/2)中粒砂を埋土とする。

徳川前期：第3c層上面の遺構(図６)

SX221　北側に焚き口をもつ竈で、本体周囲に石と瓦片が用いられている。中央の丸瓦は煙出しと考えられる。北0.8mに塼が２枚南北に立てられている。

徳川前期：第3b層上面の遺構(図７・９、写真１)

SK201　直径0.3m、深さ0.1mの土壙で、灰オリーブ色(5Y5/3)シルトを埋土とする。調査区北半に同規模の小穴が分布する。

SK211　直径0.4m、深さ0.2mの土壙で、黄褐色(2.5Y5/4)シルト質粗粒砂を埋土とする。

SK212　長さ0.6m、幅0.4m、深さ0.2mの土壙で、暗褐色(10YR5/4)シルト質粗粒砂で埋まる。

SK213　南北1.0m、東西0.8m以上、深さ0.1mの土壙で、褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂を埋土とする。複線で唐草を表現する唐草文軒平瓦30と銅銭 皇宋通寶34が出土した。34は初鋳が1039年である。

SK214　長さ1.0m、幅0.6m、深さ0.1mの不整方形の土壙で、暗褐色(10YR3/4)シルト質粗粒砂などで埋まる。

SK215　長径1.0m、短径0.7m、深さ0.3mの楕円形の土壙で、灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粗粒砂などで埋まる。

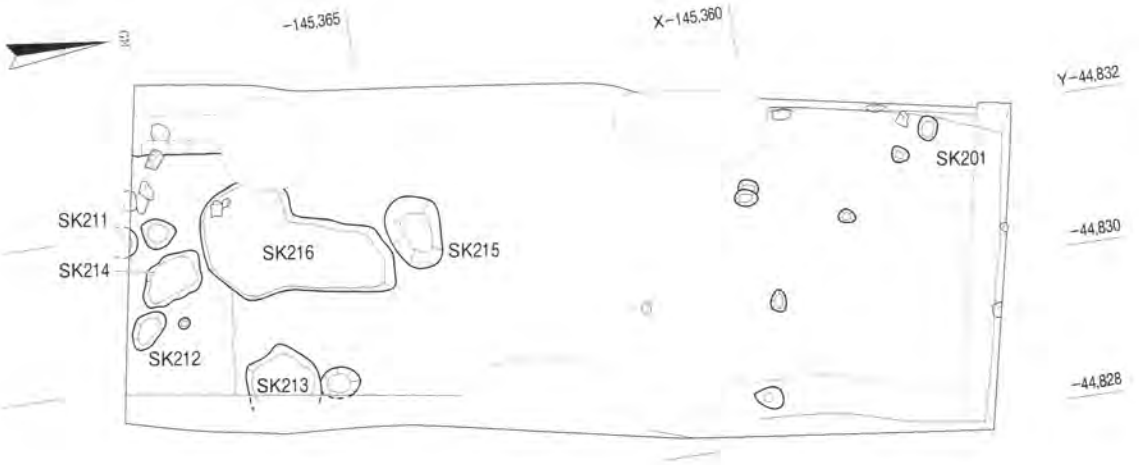
SK216　南北2.6m、東西0.9～1.6m、深さ0.2mの不定形の土壙で、炭を含む灰オリーブ色(5Y5/3)シルトを埋土とする。中国産青花碗31、肥前陶器向付32、瓦質土器火鉢33が出土した。31は内面に型押しによって、圏線を巡らせた花文が陽刻されている。32は鉄絵で草花や木・猫を描く。

徳川前期：第２層上面の遺構(図７)

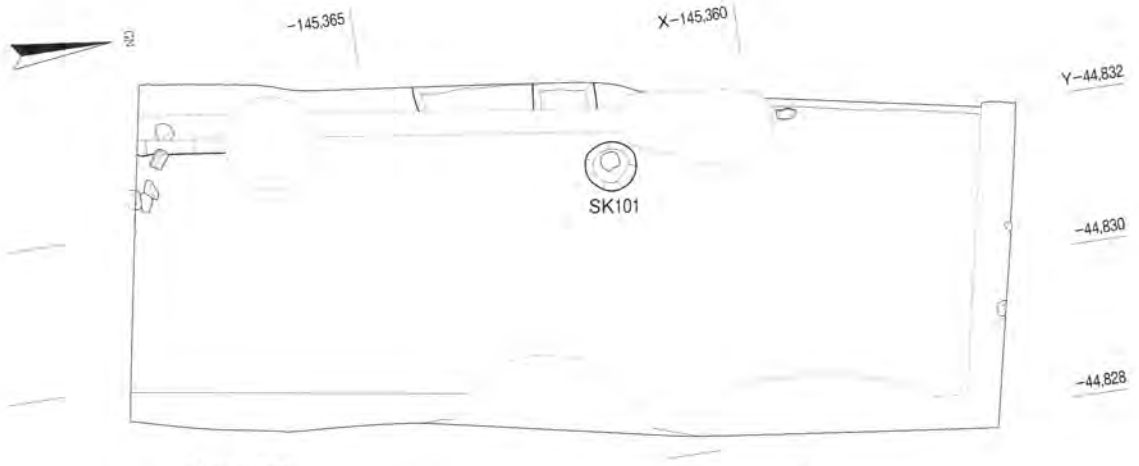
SK101　直径0.7m、深さ0.2mの円形土壙で、黄褐色(2.5Y5/6)粘土質シルトを埋土とするが、中央上面に直径0.2m、深さ0.1mのレンズ状の炭の堆積がある。

徳川前～後期：第１層上面の遺構(図７)

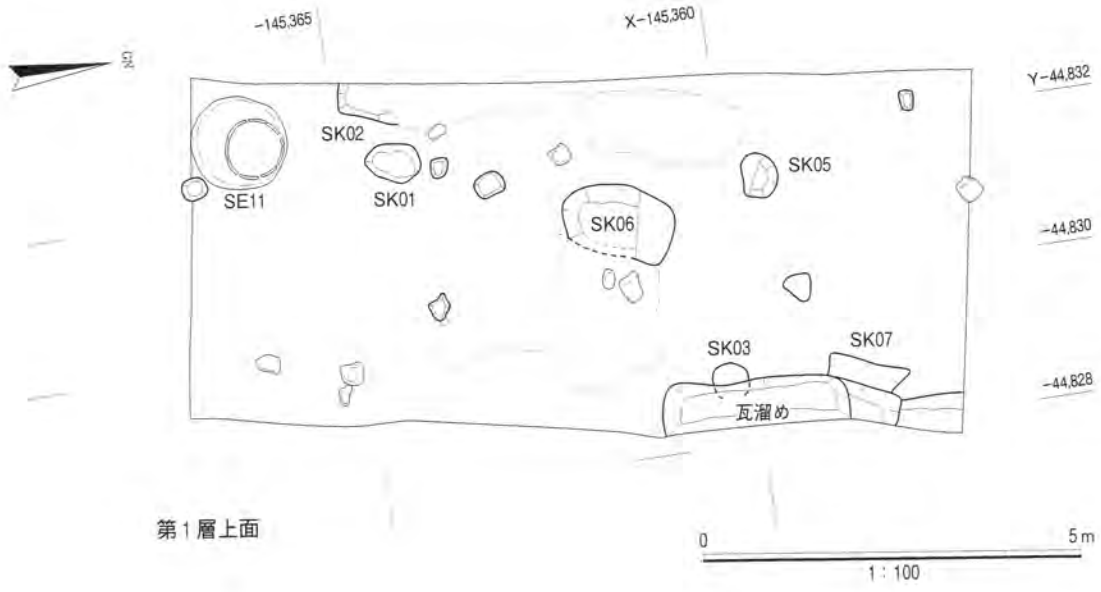
SE11　直径1.3mの掘形に直径0.8mの井戸瓦を用いて井戸側をつくる。焼土で埋まる。



第3b層上面



第2層上面



第1層上面

図7　遺構平面図(3)

瓦溜め　南北2.5m、東西0.6m以上、深さ0.3mで、焼土を埋土とする。

SK01　長径0.7m、短径0.5m、深さ0.2mの土壙で、暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粗粒砂を埋土とする。

SK02　南北0.8m以上、東西0.5m以上、深さ0.2mの方形土壙で、オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂質シルトを埋土とする。

SK03　直径0.5m、深さ0.3mの円形土壙で、瓦溜めより古い。暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粗粒砂で埋まる。

SK05　直径0.5m、深さ0.1mの不整円形の土壙で、オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂質シルトを埋土とする。

SD06　長径1.5m、短径1.0m、深さ0.2mの不整楕円形の土壙で、炭を含むオリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂質シルトなどで埋まる。

SD07　長さ1.0m、幅0.3m以上、深さ0.2mの方形土壙で、炭を含むにぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂質シルトなどで埋まる。

iii)各層出土の遺物(図9、写真1)

第9層出土の弥生土器広口壺1は中期のもので、垂下した口縁端部にキザミ目を入れる。

第8層出土の中国産青磁輪花皿2は高台内に、「洪武年造」の年款と圏線を描く。瀬戸美濃焼天目碗3は大窯第3段階前半に当る。

第6層出土の銅銭 聖宋元寶は、初鋳が1101年である。

第5層出土の左巻き三巴文軒丸瓦4は、細い巴胴から長い尾を伸ばし、復元珠文数は10個である。肥前陶器11は端反り皿である。

第4層出土の中国産白磁香炉蓋5は、口縁部内面を釉ハギする。土師器皿6は指オサエで成形し、内面と口縁部外面をナデ調整する。刀鐔38は木瓜形で、猪の目を4つ配し、刀身を通す茎櫃孔と1つの楕円形の小柄櫃孔が開けられている。

第4層上面精査中出土の左巻き三巴文軒丸瓦7は、細い巴胴から長い尾を伸ばすが、他の巴胴には接しない。復元珠文数は10個で、4と同笵である可能性はある。中国産磁器色絵碗8は上絵付けで岩山と木々を描き、青花皿9は高台内に粗い砂が付着する。青花碗10は端反り碗で、外面の染付は太極の周囲に卦を配している。肥前陶器向付12は多角形に成形し、見込みに鉄絵で蜻蛉3匹を描く。土師器土釜14は大和型である。

第3a層出土の肥前陶器皿13は底部内面に鉄絵で草花文を描き、肥前陶器皿16は丸皿で、底部内面に胎土目痕が3個残存している。中国産青花大皿15は芙蓉手で、高台に粗い砂が密に付着している。17は瀬戸美濃焼志野小皿で、瀬戸美濃焼天目碗18は大窯第3段階後半である。

第1層出土の上野・高取焼沓茶碗19は、灰釉を塗った上に口縁部に赤く発色する釉と鉄釉を滴らせ、鉄絵で長短のある縦線を描く。口縁端部が打ち欠いたように剥離していることから、灰落しとして利用された可能性が考えられる。銅銭 景定元寶36は初鋳1260年である。

第0層出土の鬼瓦20は下顎部分で、ヘラ描き沈線で歯間を表現し、歯5個が残存する。櫛でS字を

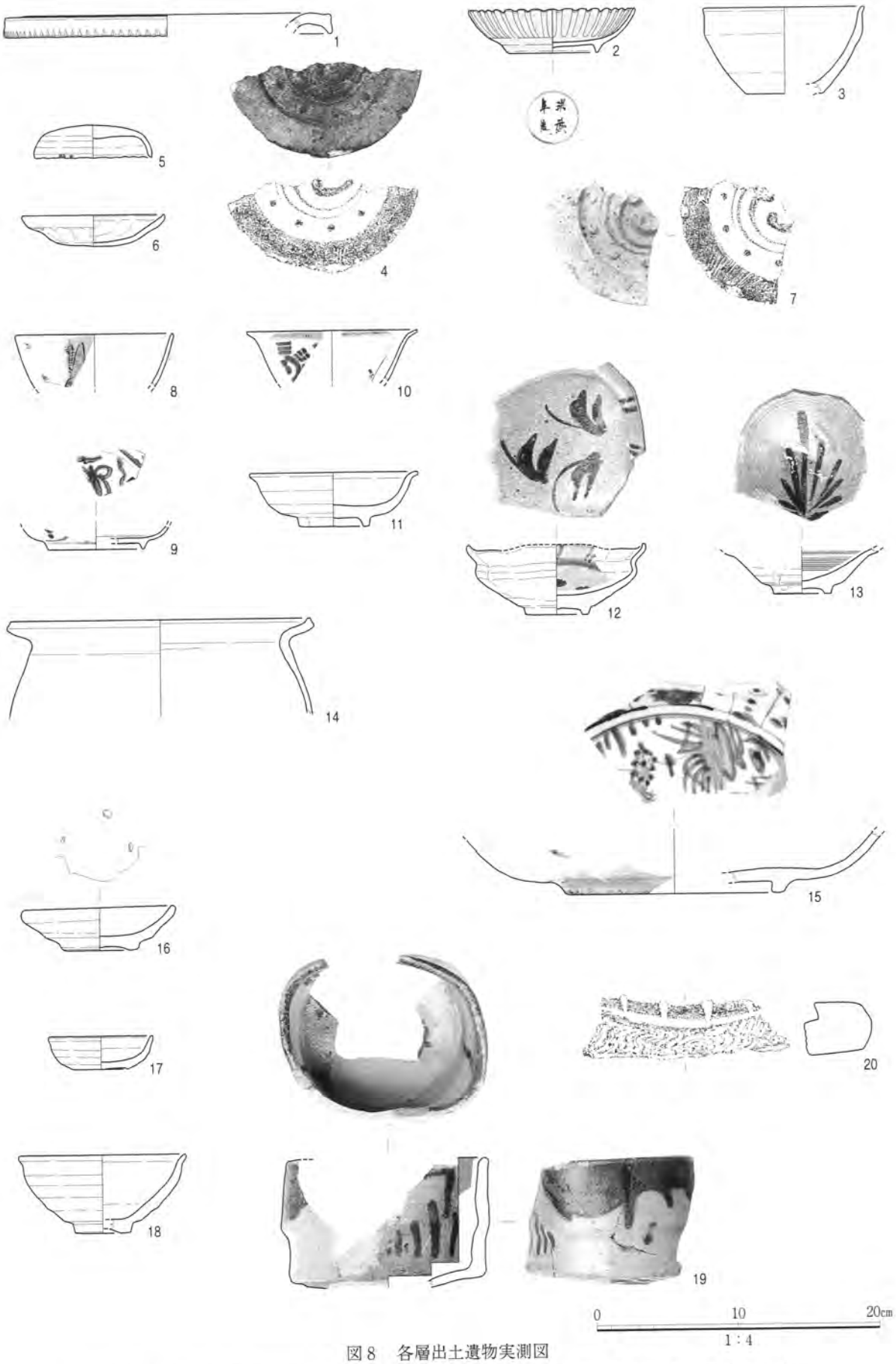


図８　各層出土遺物実測図

第９層(１)、第８層(２・３)、第５層(４・11)、第４層(５・６)、第４層上面(７～10、12・14)、第3a層(13・15～18)、第１層(19)、第０層(20)

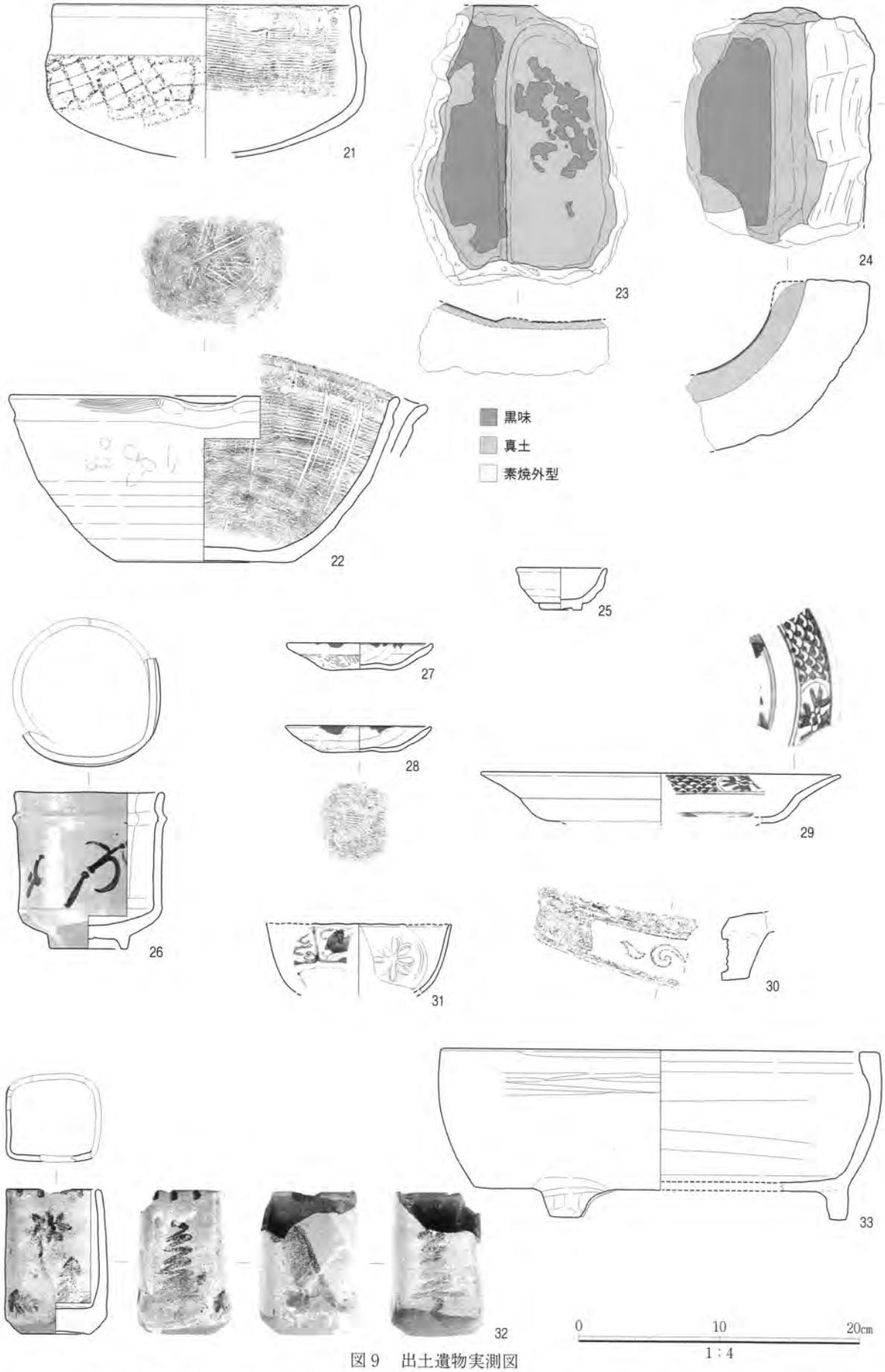


図９　出土遺物実測図

SD602(21～24)、SK611(25)、SK501(26～28)、SK412(29)、SK213(30)、SK216(31～33)

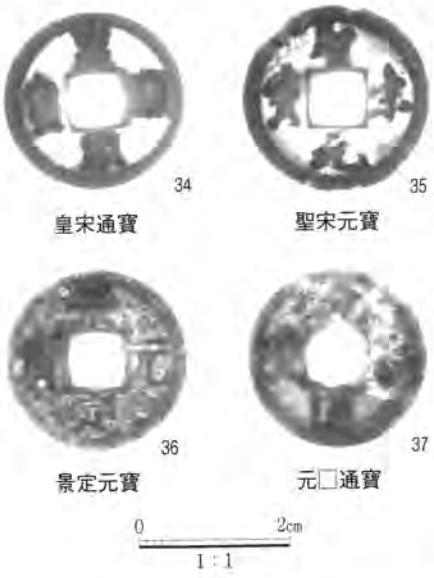


写真１　銅銭・刀鐔Ｘ線写真
SK411(37)、SK213(34)、
第６層(35)、第４層(38)、第１層(36)

描き鬚を表現している。

iv)小結

西隣のOS11－２次の調査区とは５mの至近にあることから、同調査結果を補強する成果を得た。すなわち第７層は1598年の大坂町中屋敷替え令に伴う盛土層である。その上層の第５・６層の整地後、建てられた礎石建物SB402が夏ノ陣で被災する。第６層は焼土を含むが、OS11－２次調査区の東端で竈遺構が検出されているので、炊事に伴う焼土・炭と考えられる。

その後、第４層上面の遺構をはじめ、17世紀前葉から後葉にかけて、整地しては建物を建てる行為が繰り返されたとみられる。

３)まとめ

OS11－２次調査検出の土塁を構築した後、盛土により地盤嵩上げする造成工事は、当地でも確認できた。夏ノ陣で被災する礎石建物を建てる以前の遺構を、第７層・第６層上面で検出できた。第７層上面の鋳型を廃棄した溝から、礎石建物が建つ以前は、当地周辺で鋳造を行っていた可能性がある。その後、17世紀中葉には屋敷地に変化したと考えられる。

今後の周辺地の調査でより広い範囲の変遷を明らかにしていきたい。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、「大坂城跡発掘調査(OS07－８)報告書」：『大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)』、pp.103－114

大阪市文化財協会2003、『大坂城跡』Ⅶ

大阪文化財研究所2011、『中央区東高麗橋における建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS11－２)報告書』

森毅2004、「城下町大坂における唐津焼の様相」：『古唐津』出光美術館、pp.187－195

第10層上面と地層観察用
の深掘りピット
（南半・東から）

第７層上面
（南半・東から）

第５層上面
（南半・東から）

第５層上面
（北半・北から）

第3b 層上面
（南半・東から）

第２層上面
（北半・北から）

中央区島之内二丁目における建設工事に伴う
島之内２丁目所在遺跡発掘調査(SI11－１)報告書

調査個所	大阪市中央区島之内2丁目6－1他9筆
調査面積	西区：25㎡　東区：30㎡
調査期間	平成24年1月6日～1月12日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、高橋 工

1)調査に至る経緯と経過

本調査地は、大阪市域を南北に延びる上町台地の西に広がる西大阪平野に立地する。大阪市中央区の南部にあって、堺筋の東に接し、南200mには道頓堀川が流れている(図1)。道頓堀川は、慶長19(1614)年に安井道頓らによって開削され、沿岸に当る島之内は道頓堀(川の南側)とともに花街として栄えた。「ミナミ」は最初は島之内のことを指したというので、島之内は現在の繁華街である「ミナミ」発祥の地ともいえよう。近隣において発掘調査はほとんど行われたことはないが、北西約300mの東心斎橋1丁目所在遺跡の調査(HB01－1次)では、TP+0.6~0.7mで難波砂堆を形成する海成砂層が検出され、その上位で17世紀中頃~後半の遺物包含層と土壙などが発見されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003]。

当地においては、建築工事に先立って大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、現地表下約2mで江戸時代とみられる遺物包含層が発見され、本調査が行われることとなった。調査区は敷地の東西に各1個所の調査区を頭書の面積で設定し(図2)、近世後半~近代の客土層である第1・2層までを事業主側が重機を用いて除去した状態から調査を開始した。それ以下の地層や遺構については人力によって検出・掘削して遺物の捕集に努め、適宜に写真撮影・実測を行って記録を作成した。また、本報告書で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。また水準値は東京湾平均海面値(T.P.値)であり、本文・挿図中ではTP±0mと略記した。本稿における「徳川前期」の時期区分は[森毅2004]に拠る。

図1　調査地位置図

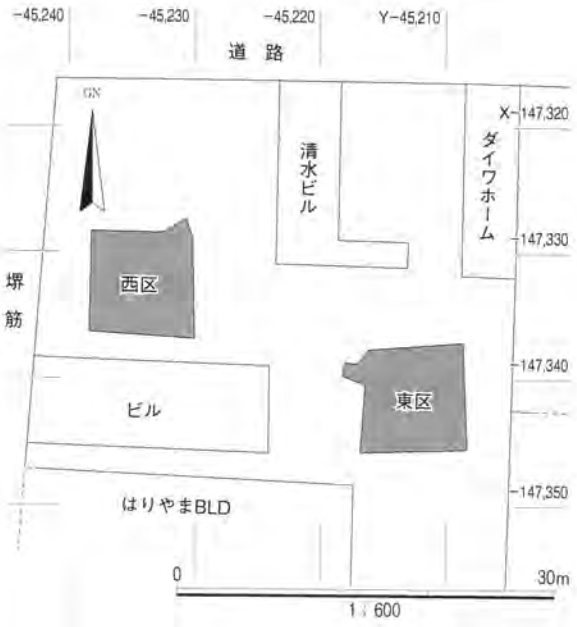


図2　調査区配置図

図3　地層と遺構の関係図

2)調査の結果

i)層序(図3～5)

調査地の地表面標高はTP+3.8~3.9mと平坦である。表層(第0層)を形成するのは旧建物の解体工事に伴う砕石で、その層厚は40~70cmであった。表層の下位で、TP-0.1mまでの間で以下の5層を確認した。

第1層：オリーブ褐色シルト偽礫質細粒～中粒砂からなる整地層で、西・東区ともに分布していた。西区では上面を削剥されて層厚は薄いが、東区での層厚は30~40cmを測る。肥前磁器染付段重などを含み、19世紀以降に属する。

第2層：にぶい黄橙色シルト～細粒砂からなる整地層で、東区にのみ分布していた。層厚は20~30cmで、肥前磁器や堺焼擂鉢など18世紀中頃までの遺物を含む。

第3層：暗褐色炭混り細粒砂からなる客土層で、東区にのみ分布していた。層厚は60~70cmで、17世紀後半から18世紀初頭までの遺物が多量に出土した。炭化物・廃棄物が混じる人為的な堆積層とみられ、大きなゴミ穴の埋土に相当するのかもしれない。本層出土の遺物(図7)については後述する。

第4層：にぶい黄橙色砂からなる海浜砂で、本調査地の地山層である。西区西壁際の深掘りトレンチでTP-0.1mまで掘り下げ、トレンチ底で堅くしまった橙色粗粒砂層(第5層)の上面に達した。層厚は270cmで、遺物は出土しなかった。

ii)西区の遺構と遺物(図4・6・7)

a、徳川初期

西区では地山(第4)層がTP+2.2mと高い位置で検出され、第2・3層が分布していなかった。第4層の上面で遺構を検出したが、本来、第2・3層上面より掘り込まれた遺構も同一面で検出されたので、以下、遺物の年代によって徳川初期、徳川前期以降に分けて記述する。

SK05　調査区の西北部で検出した土壙で、東西1.5m以上、南北1.4m、深さは0.5mで、SX11を切っていた。にぶい黄褐色細粒砂で埋められており、土師器・瀬戸美濃焼・肥前陶器・中国産青花や骨、スラグ、鉄釘などが出土した。ゴミ穴として掘られたものであろうか。図6の1は中国産青花碗である。2は瀬戸美濃焼ソギ皿で、灰釉をかける。6・7は瀬戸美濃焼天目碗である。3～5は肥前陶器皿で、4・5は底部内面に胎土目跡を残し、5の口縁部は端反りになる。8は備前焼瓶、9は土師器大和型羽釜である。これらの遺物から、本遺構の年代は徳川初期(17世紀前半)とみられる。

SX11　調査区の北側で東西に長く検出された落込みで、東西4.6m以上、南北2.2m以上、深さ0.5mであった。黄褐色砂で埋められており、土師器・瀬戸美濃焼・肥前陶器・中国産青花や骨、貝殻などが出土した。これもゴミ穴として掘られたか、砂の採取を目的とした土採り穴などがゴミ捨て用に転用されたのかもしれない。図6の11は中国産青花の底部である。12は瀬戸美濃焼皿、13は肥前陶器皿、14は肥前陶器碗である。13は内面に鉄絵で草花を描く。これらの遺物から、本遺構の年代は徳川初期(17世紀前半)とみられる。

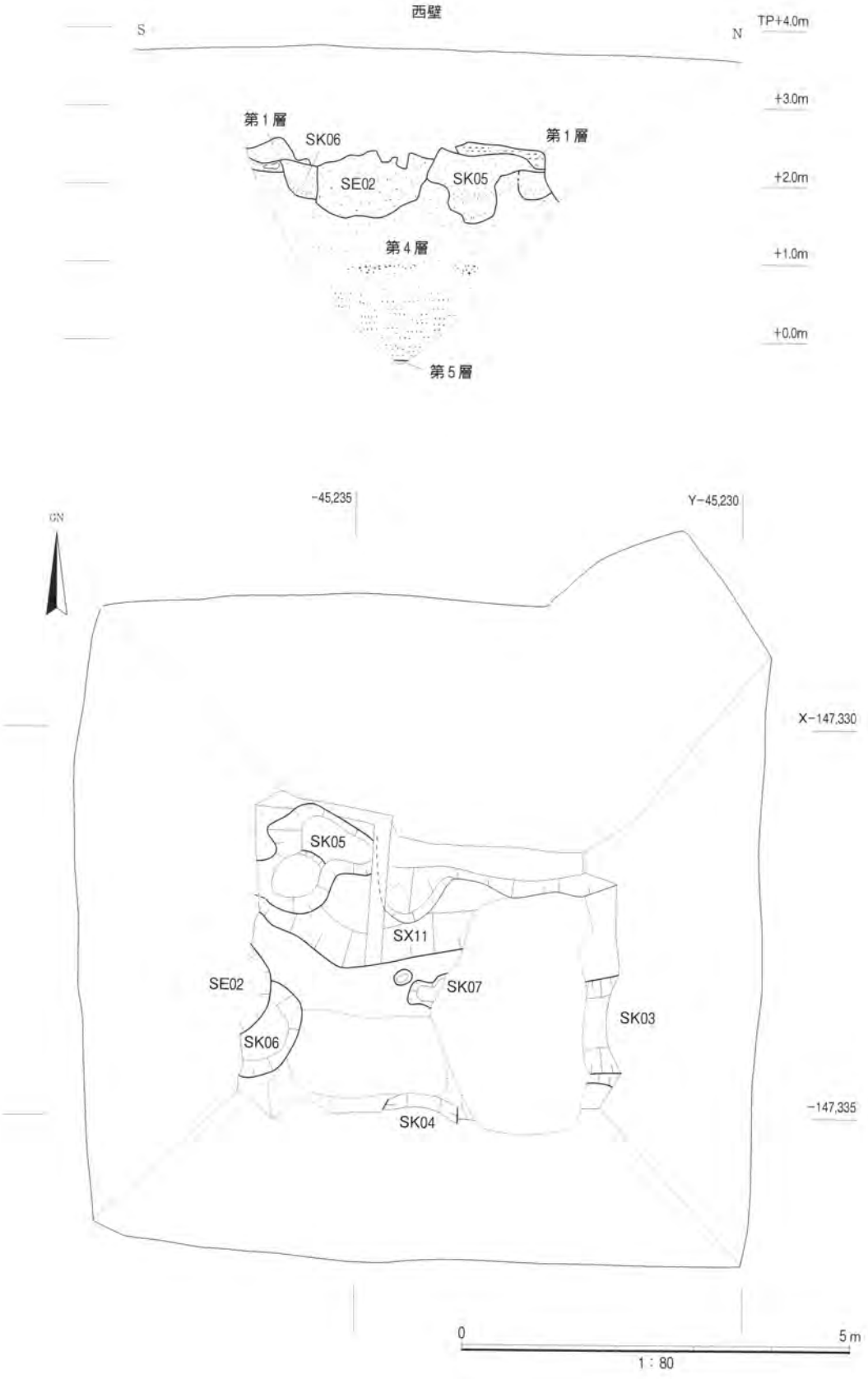

西壁
S
N
TP+4.0m
+3.0m
+2.0m
+1.0m
+0.0m
第1層
SK06
SE02
SK05
第1層
第4層
第5層
GN
-45,235
Y-45,230
X-147,330
-147,335
SK05
SX11
SE02
SK07
SK03
SK06
SK04
0
5m
1：80

図4　西区の地層と遺構

b. 徳川前期以降

SK07　調査区の中央で検出された土壙で、東西0.5m以上、南北0.5m以上、深さ0.3mである。暗黄褐色中粒砂で埋められており、土師器・肥前陶器・中国産青花皿10などとともに肥前磁器染付碗が出土した。17世紀後半の遺構である。

SK06　調査区西側で検出された土壙で、平面形は直径1.3mほどの円形で、深さは0.3mであった。黄褐色砂で埋められており、土師器・瀬戸美濃焼・肥前磁器などが出土した。18世紀後半の遺構である。調査区南側のSK04も埋土などが類似しており、出土遺物からみて同時期のものである。

SE02　調査区西側で検出した平面形が円形の井戸で、直径は0.7m以上、深さは0.5m以上で、明黄褐色粗粒砂で埋められていた。堺焼擂鉢などが出土しており、19世紀の遺構である。

SK03　調査区東側で検出された土壙で、攪乱によって大部分が破壊されているが、南北1.3m、深さ0.2mである。暗灰色細粒砂で埋められていた。19世紀の遺構である。

iii)東区の遺構と遺物(図5～7)

a. 徳川前期以降

第4層の上面でSK12・13、SX14・15を、第3層の上面でSX01を検出した。

SK12　調査区の北西部で検出した平面形が楕円形の土壙で、径は0.9m以上、深さは0.3mで、暗灰色砂質粘土で埋められていた。土師器・肥前磁器・中国産青花などが出土した。17世紀末～18世紀初頭頃の遺構である。図6の20は肥前磁器染付碗、21は土人形のえびす、22は同女性立像である。SK13も類似した遺構であるが、こちらからは遺物は出土しなかった。

SX14　調査区の北東部で検出された平面形がL字形の落込みで、東西2.2m以上、南北2.0m以上、深さは0.3mでオリーブ褐色中粒砂で埋められていた。破損した土師器・肥前磁器などが出土し、ゴミ穴として掘られたものであろう。17世紀後半の遺構である。

SX15　調査区の南側で検出された平面形が不整形な落込みで、東西3.1m以上、南北1.0m以上、深さは0.4mであった。オリーブ色中粒砂や褐色シルト偽礫などで埋められており、多量の破損した土師器・肥前磁器や骨・鉄釘などが出土した。この遺構もゴミ穴であろう。17世紀末頃の遺構である。図6の18は土師器大皿で内面を刷毛状工具で調整している。19は土師器焼塩壺である。

SX01　調査区北部で検出した石垣の残欠である。石積みのほとんどは抜き取られていたが、石を据える際の掘形を長方形の土壙状に検出した。その東西長は3.5m以上、南北幅は0.9m以上、深さは0.2mであった。掘形の西部は直線的に終わっており、東部には最大2石を積んだ石垣の残欠が東西に2石並んで遺存していた。石積みは北側(調査区の外側)の面が揃えられており、そちらに下がる段を形成していたものとみられた。その場合、第2層は石垣内部の盛土ということになろう。石積みの南にも数石が見られたが、出土状況は乱雑で、裏込めに埋められたものとみられた。土師器・肥前磁器・堺焼擂鉢などが出土した。18世紀後半の遺構である。図6の15・16は肥前磁器青磁染付碗で、いずれも口縁部内面に四方襷を描く。17は肥前磁器染付蓋で、上面に八卦文を描く。

b. 第3層出土の遺物

第3層からは焼物が多量に出土したが、ほとんどすべてのものが破損しており、不用品として投棄

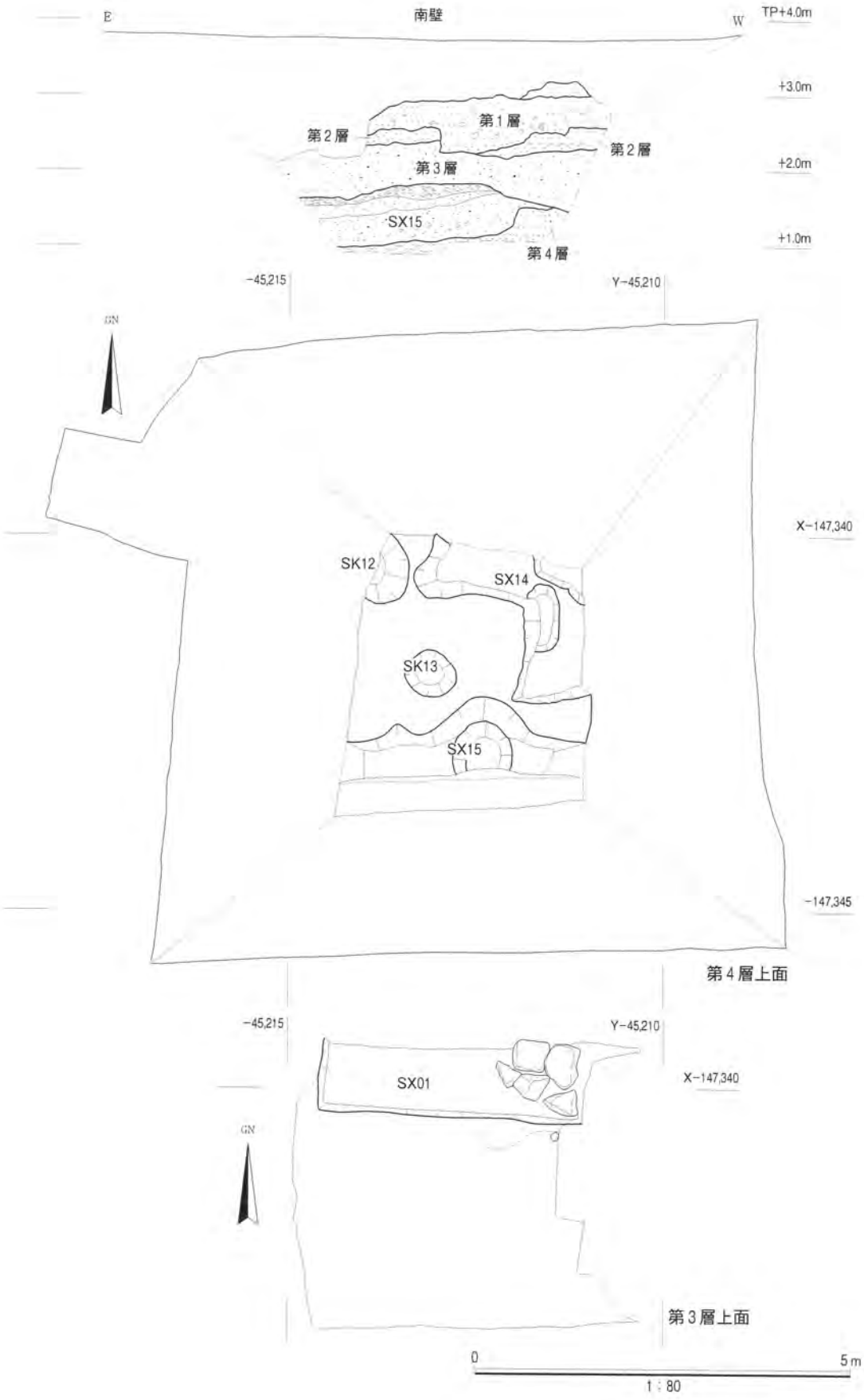

E
南壁
W
TP+4.0m
+3.0m
+2.0m
+1.0m
第1層
第2層
第2層
第3層
SX15
第4層
-45,215
Y-45,210
GN
X-147,340
SK12
SX14
SK13
SX15
-147,345
第4層上面
-45,215
Y-45,210
SX01
X-147,340
GN
第3層上面
0
5m
1：80

図5　東区の地層と遺構

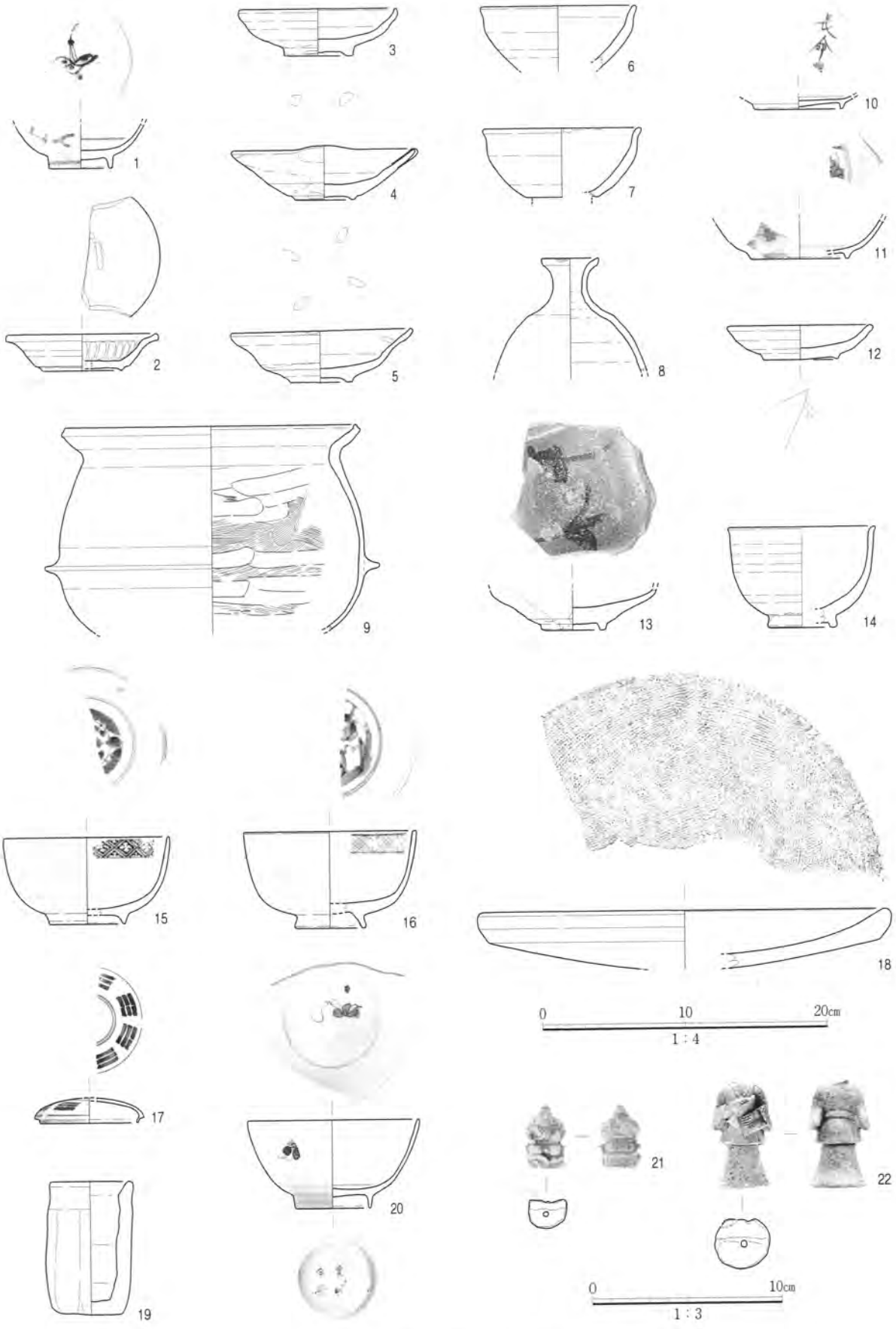


図6　遺構出土遺物実測図

SK05(1～9)、SK07(10)、SX11(11～14)、SX01(15～17)、SX15(18・19)、SK12(20～22)

されたものと考えられる。図7に主なものを掲載した。

23～28は肥前磁器で、23は白磁碗、24は青磁香炉、25～27は染付碗、28は染付鉢である。29・30は肥前陶器京焼風碗で、底部内面に山水文を描き、29は底部外面に刻印を施している。31は備前焼擂鉢で内面に1㎝当り5条の摺り目を櫛状工具で施している。32は瓦質土器の火鉢で、平面長方形の本体の底部四隅にL字形の脚部が付く。本体外面には動物・花などを象った文様を浮彫にしている。こ

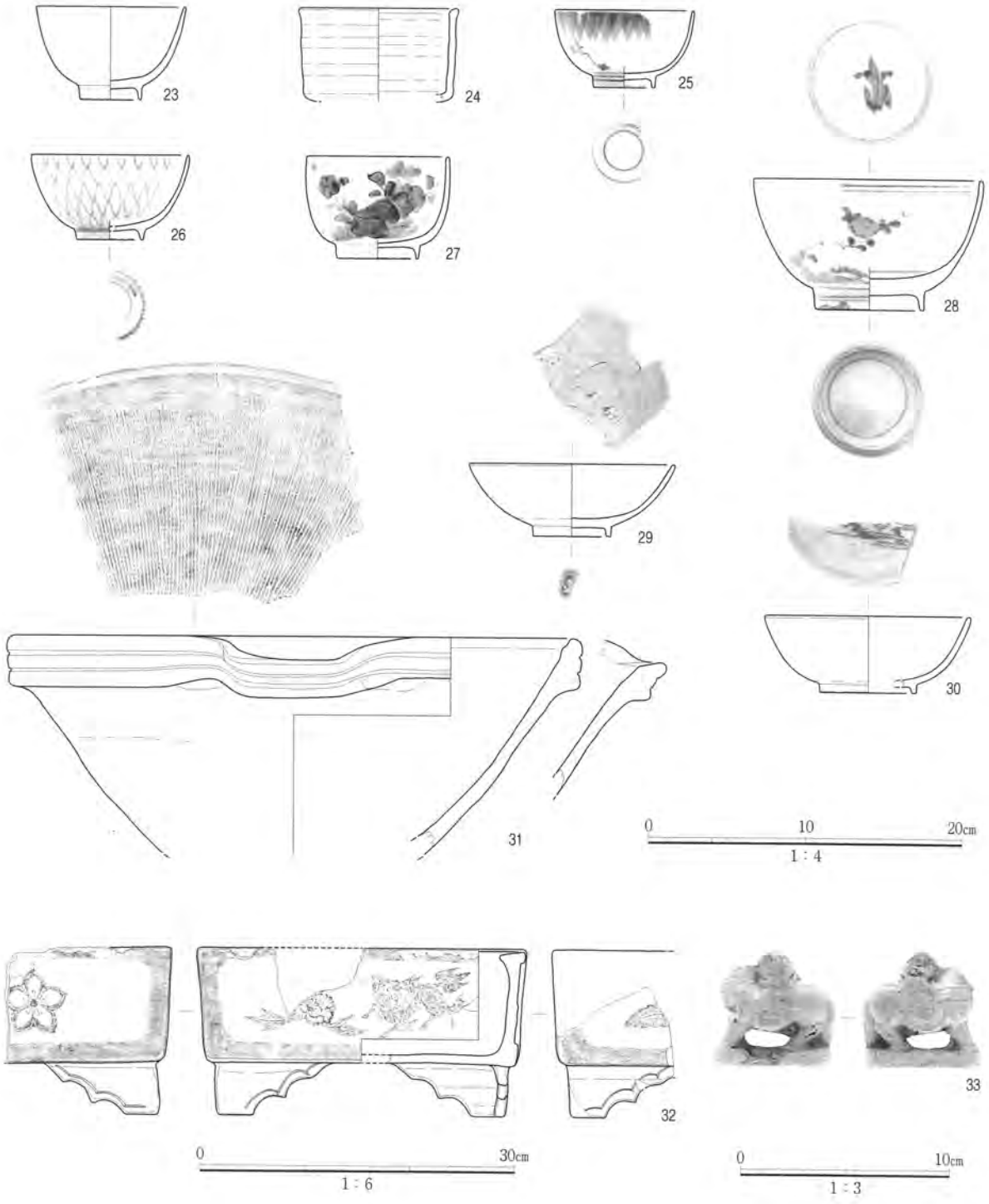


図7　第3層出土遺物実測図

れらの遺物は17世紀後半～18世紀初頭に属するものである。

3）まとめ

今回の調査では、徳川初期（17世紀前半）から同後期（19世紀）にかけての遺構・遺物が豊富に発見された。中でも徳川初期の遺構は、島之内周辺が開発された時期を考えると、最も早い段階の所産である可能性が高い。以後、島之内は花街として栄えたとされ、発掘によって出土した、17世紀後半～19世紀の多量な遺物はこうした時期の残滓とみることができる。もっとも、今回検出の遺構は多くがゴミ捨て穴とみられ、町屋建物との関係、堺筋など街路との関係は不明である。これらの解決は今後の調査成果を期したい。

また、地山層である海成砂層（第４層）がTP＋2.2m（地表下1.2m）と浅く検出されたことも注目される。東心斎橋１丁目所在遺跡調査地との比高は1.5mにも及び、島之内周辺が陸化する地形変化の過程と関係する可能性もあり、こちらも今後にデータが蓄積されることが期待される。

引用文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003、「東心斎橋1丁目所在遺跡発掘調査（HB01－１）報告書」『平成13年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.31－36

森毅2004、「城下町大坂における唐津焼の様相」：『古唐津』出光美術館、pp.187－195

西区地層堆積状況
（北西から）

西区第４層上面
遺構完掘状況
（東から）

西区海成砂層
堆積状況
（北から）

東区第４層上面
遺構完掘状況
（北から）

東区第４層上面遺構と
地層堆積状況
（北東から）

東区第３層上面
遺構検出状況
（北から）

中央区上汐一丁目における建設工事に伴う
上本町遺跡発掘調査(UH11－７)報告書

調 査 個 所	大阪市中央区上汐１丁目２－13
調 査 面 積	35㎡
調 査 期 間	平成23年９月９日～９月13日
調 査 主 体	財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、大庭重信

1)調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地の稜線近くに位置し、古代においては難波宮内に位置し、近世には豊臣期の大坂城南端となる惣構堀に近接している。

調査地周辺ではこれまで多くの調査が行われており(図1)、古代から近世にかけての遺構が検出されている。特に、UH11－8次調査では飛鳥時代の北東－南西方向の大溝が、NW137次・UH10－1次調査地では奈良時代の正方位を向く掘立柱建物や溝が、UH11－8次調査では鎌倉時代の正東西方向の大溝が検出されており[大阪市文化財協会1981、大阪文化財研究所2010・2011]、当地域では正方位の地割が奈良時代に成立し、これが鎌倉時代まで踏襲されていた可能性が高い。この点は、難波京の成立とその後にかかわる問題として、調査の重要な課題の一つである。

事前に大阪市教育委員会文化財保護課によって試掘調査が行われ、その結果、現地表下70cm以深に中・近世の遺物包含層および遺構が確認され、調査を実施することとなった。事業者が近代以降の地層を重機で掘削したのち、9月9日より調査に着手した。調査区は南北3m、東西11mであり(図2)、この範囲内を人力により掘削し、遺構の検出および記録作業を行った。調査の終盤には、遺構の範囲と地層を確認するために北側を部分的に拡張した。9月13日には全ての記録作業を終え、機材の撤収を行って現場作業を完了した。

本報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いてTP+○mと表記した。

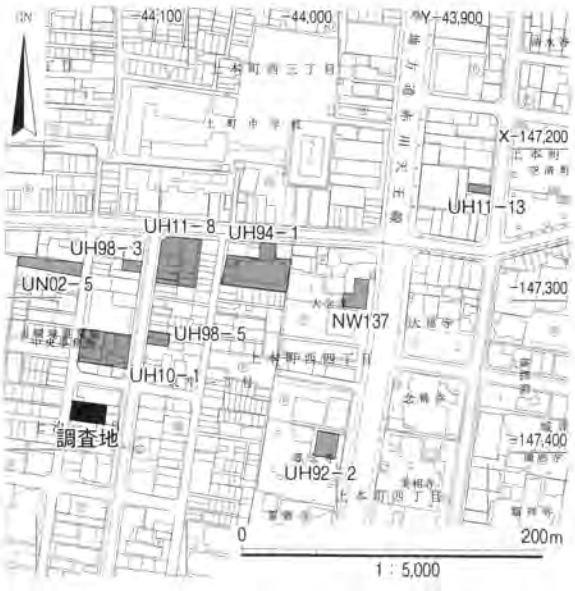


図1　調査地位置図

図2　調査区位置図

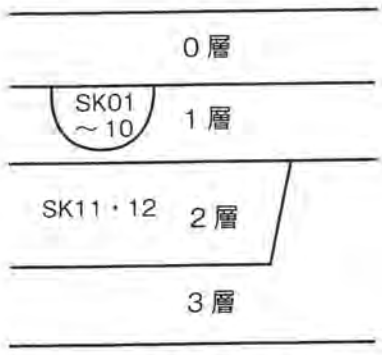


図3　地層と遺構の関係図

2)調査の結果

i)層序

第0～3層に区分した(図3・4)。

第0層：近代の整地層で、上半は事業者側が除去し、調査区内では層厚が最大20cm残存していた。

第1層：灰黄褐色礫混りシルト質細粒～中粒砂からなる整地層で、18世紀代の土師器・陶磁器を含む。層厚は10～20cmある。本層上面で18～19世紀の土壙を検出した。

第2層：調査区全域におよぶ土採穴とみられる大型土壙SK11の埋土で、砂質シルトから粘土偽礫を多く含む灰黄褐色シルト質中粒～粗粒砂からなる。層厚は50cmあり、古代の須恵器のほか、徳川期の肥前磁器片を含む。

第3層：明黄褐色粘土からなる地山層で、下半はシルト質中粒～粗粒砂であった。上面の標高は、最も高い箇所でTP+20.7mであった。

ii)遺構と遺物

調査区の南1/3の範囲は近代以降の攪乱によって大きく削平されており、以北の第1層上面と第3層上面でそれぞれ遺構検出作業を行った(図4)。

第3層上面で第2層を埋土とする、調査区の全域におよぶ大型の土壙SK11を検出した。試掘調査ではこの土壙の北辺が検出されており、規模は南北4.5m以上、東西8.5m以上となる。底は若干凹凸があるが、ほとんど平坦である。遺構の輪郭と地山が高いと予想された以北の地層を確認するために、調査区の北側に拡張区を設けた。その結果、SK11の北側0.1mで第3層を大きく掘り込む南北2.0m以上のSK12を検出した。埋土はSK11と共通し、SK11・12間にわずかに遺存していた第3層の観察から、これらの大型土壙がともに第3層上半の粘土層までを掘削していた。このことから、SK11・12の性格は地山の粘土の採取を目的とした土採穴であったと考えられる。また、両者が隣接し、かつ規模が大きいことから、調査区を含む周囲の広い範囲に土採穴が分布していたことが予想される。

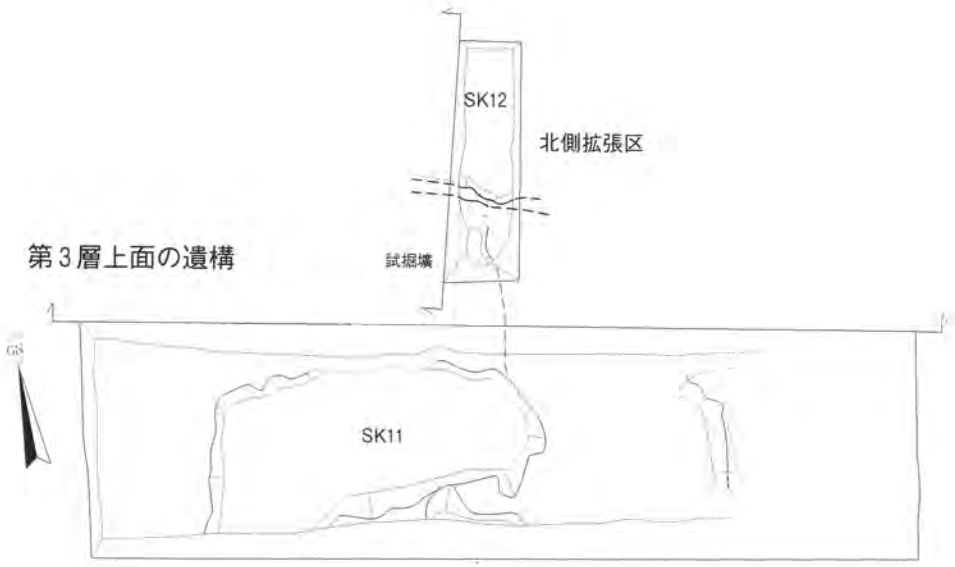
SK11の埋土から肥前磁器片が出土し、上位の第1層から18世紀代の遺物が出土することから、遺構の時期は17世紀後半～18世紀代と考えられる。

第1層上面ではSK01～10を検出した。平面が一辺1m未満の方形もしくは楕円形の土壙である。深さは40～50cmのものが主体で、平面形が不整形なSK07・08は深さが15cm前後と浅い。埋土の特徴からいずれも廃棄土壙と判断され、土師器・陶磁器や瓦などが出土した。SK03～07からは18世紀代の土師器・肥前磁器・肥前陶器・関西系陶器などが出土し、SK09からは19世紀に下る関西系陶器の破片が出土している。このことから、調査範囲は18世紀を中心とした時期に継起的にゴミ捨て場として利用される敷地の裏庭などの空間であったことが予想される。

3)まとめ

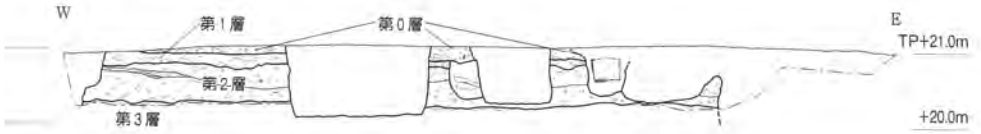
今回の調査では、17世紀後半～18世紀代と考えられる大規模な土採によって地山が大きく削平され

第1層上面の遺構



第3層上面の遺構

調査区北壁断面



北側拡張区西壁断面

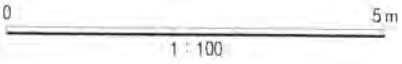


図4　調査区平・断面実測図

ており、古代・中世の生活面および遺構は遺存していなかった。その後、調査範囲は18世紀以降、継起的にゴミ捨て場として利用されたようであり、敷地の裏庭などの空間であったことが予想される。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1981、「第137次発掘調査概報」:『難波宮跡研究調査年報』1975~1976.6、p.118-123
大阪文化財研究所2010、「中央区上汐一丁目における上本町遺跡発掘調査(UH10-1)完了報告
2011、「中央区東平一丁目における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH11-8)報告書

北壁地層断面
（南東から）

地山上面全景
（西から）

北側拡張区
（北東から）

西区千代崎三丁目における建設工事に伴う
千代崎蔵屋敷跡発掘調査(CY11－１)報告書

調 査 個 所　大阪市西区千代崎３丁目
調 査 面 積　900㎡
調 査 期 間　平成23年９月１日～平成23年10月26日
調 査 主 体　公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、平田洋司、小倉徹也

1）調査に至る経緯と経過

調査地は木津川河口付近に位置し、大阪ドーム（京セラドーム大阪）の東側に所在する。現在の大阪ガス株式会社が明治38年に建設した岩崎町工場の跡地に当る。この付近は寛永年間には新田が開墾されたと記録に残っている[西区史刊行委員会1979]。18世紀半ば以降の絵図（改正懐宝大阪図）には「キシウ（紀州）」「トサ（土佐）」と書かれた敷地が見られ、調査地付近が江戸時代後半以降、木津川に面して蔵屋敷が置かれた地点であったと推測されていた。平成16年度に実施されたCY04－２次調査において、蔵屋敷の一部と考えられる石垣や陶磁器などの多量の遺物が初めて確認された[大阪市文化財協会2004]。

当該地で大阪市教育委員会が行った試掘調査では、現地表下2.2m以下に近世の遺物包含層が検出された。この結果を受け、建設工事に先立って発掘調査を行うことになった。

調査着手前に、事業者側によって現地表下2.2mまで、近・現代の盛土層までの重機掘削が行われ、その後、敷地内の南寄りに調査区を設定して、2011年９月１日から調査を開始した（図２）。重機掘削の途中から多量の湧水が発生し、法面の崩落が断続的に発生したため、安全な法面の確保のために調査区を狭めて調査を継続した。その結果、18世紀前葉以降に耕作地になったことが明らかになった。また、江戸時代末から明治時代前半にかけての畠が確認され、畠を作るに際して塩害を防ぐための地盤改良とみられる痕跡を検出した。遺構や遺物の検出に努めながら人力で慎重に掘り下げ、平面図や断面図の作成、写真撮影などの記録作業を行ったのち、10月26日に現地における作業を完了した。

基準点はmagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値（東京湾平均海面値）でTP＋○mと記した。なお、遺物の記載は当同研究

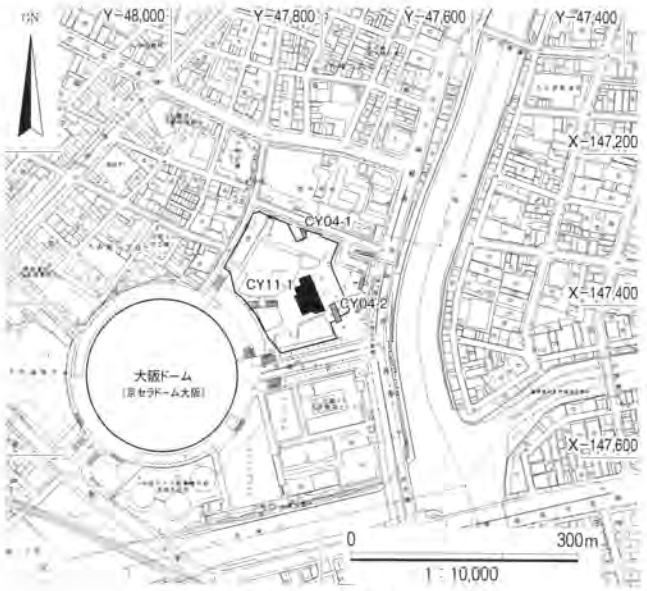


図１　調査地位置図

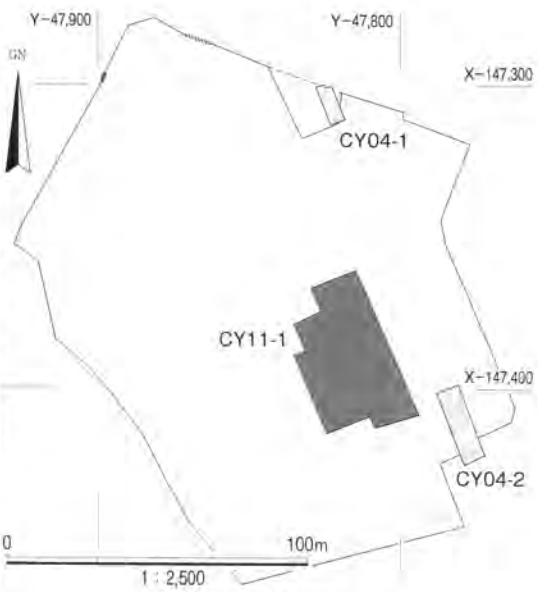


図２　調査区配置図

所学芸員 渡邉晴香が、貝類の同定は大阪歴史博物館学芸員 池田研が行った。

2)調査の結果

i)層序

現地表下5.3m(TP−3.3m)までの地層を観察した。その結果に基づいて本調査地の層序を組み立てた。以下に各層の岩相や特徴を記し、地層と遺構の関係図を図3、層序表を表1、西壁地層断面図を図4に示す。

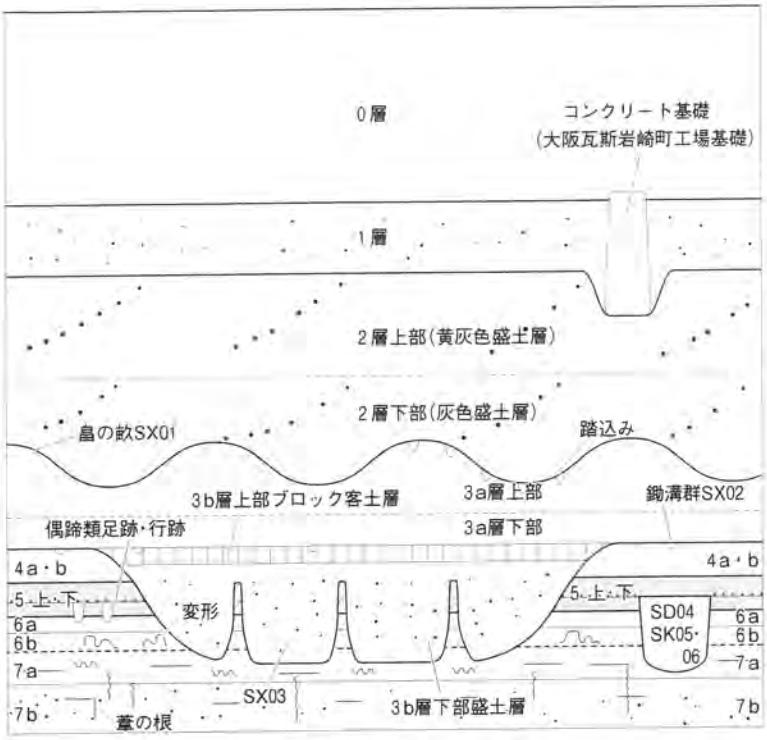


図3 地層と遺構の関係図

第0層 現代の盛土層および攪乱で、層厚は80〜210cmである。

第1層 黄灰色ないし黄褐色の中礫〜細粒砂からなる近代の整地層である。層厚は約100cmで、南東端のみに分布する。最下部は焼土や炭層、熱を受けて変形したビール瓶などが多量に含まれていた。

表1 層序表

CY11−1層序			岩相		土色	層厚(cm)	自然現象ほか	遺構	おもな遺物	時代
沖積層(難波累層)	上部層	第0層	現代盛土層および攪乱層			80〜210				現代
		第1層	近代整地層 (黄灰・黄褐色 中礫〜細粒砂 南東端のみ分布)	【整地層】	−	ca.100		←大阪瓦斯岩崎町工場跡コンクリート建物基礎(松杭)		近代
		第2層	上部:近代盛土層 (黄灰色盛土) (黄灰色 砂層・調査地東部に分布 ラミナが認められることから含水状態での盛土で、層理から北方向から埋め戻している)	【盛土層】		ca.130				明治前半
			下部:近代盛土層 (灰色盛土) (灰色 砂層 調査地全域に分布 ラミナが認められることから含水状態での盛土で、層理から北西方向から埋め戻している)				貝殻多産		煉瓦・シュロ	
		第3層 a i	黒灰色 シルト質中粒〜粗粒砂 (炭含む、層内に灰色粗粒砂の薄層挟在)	【畠作土層】		11〜35		←畠SX01、踏込み	突き錐	幕末〜
		第3層 a ii	灰色 細粒〜中粒砂質シルト (北部にのみ分布)	【作土層】				↓鋤溝群SX02・耕作に伴う		
		第3層 b	上部:灰・暗灰褐色 細粒砂質シルト (下位からの浸水防ぐため16−18cm角ブロック敷き詰める、段SX03内に分布)	【客土層】		15〜20				19C初〜18C後半
			下部:灰色 中粒〜粗粒砂 (シルト偽礫含む ラミナが認められることから含水状態で盛土)	【盛土層】		ca.30		←SX03		
		第4層 a i	灰色・やや暗灰色 細粒砂質シルト (厚さ1cmほどの細粒砂層を2層狭在する、炭含む)	【作土層】		ca.7				18C前半
		第4層 a ii	灰色・やや暗灰色 細粒砂質シルト〜シルト質細粒砂 (炭含む)	【作土層】		4〜7				
		第4層 b	灰色 細粒砂質シルト (下底に中粒〜極粗粒砂分布)	【客土層】		≦3		←溝SD04、土壙SK05・06		
		第5層	上部:黒褐色 細粒砂質シルト〜シルト質細粒砂 (中礫〜細礫を下底付近に含む、炭多含)	【作土層】		ca.10		←偶蹄類足跡(行跡)		18C前半〜
			下部:黒褐色 細粒砂質シルト〜シルト質細粒砂 (炭多含)	【作土層】						
		第6層 a	暗灰色 細粒砂質シルト (細礫〜中礫をごくわずかに含む)	【作土層】		ca.4				
		第6層 b	灰・暗灰色 シルト (変形する) (母材は第7a層)			6〜8				
		第7層 a	淡褐灰色 シルト	【湿地の堆積層】		≧10	草の根			
		第7層 b	淡褐灰色 極細粒〜細粒砂	【湿地の堆積層】		≦20	巣穴			

←上面検出遺構 ↓下面検出遺構 △層内検出遺構

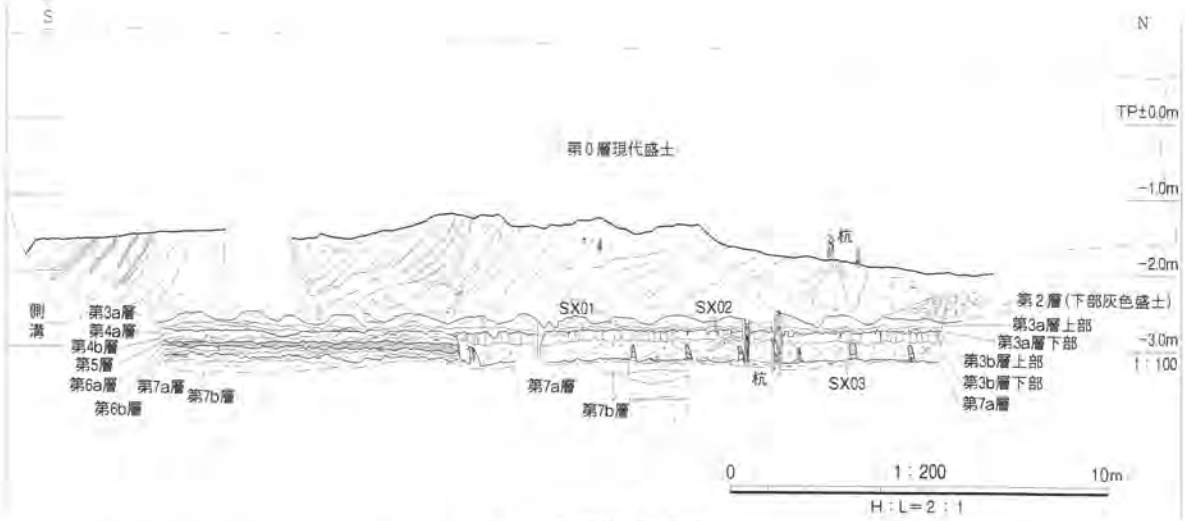


図4　西壁地層断面図

第２層　明治時代前半の盛土層で、上部は東部に分布する黄灰色砂層、下部は調査地全域に分布する灰色の砂層である。観察されたラミナの方向から上部は北方向より、下部は北西方向より埋め戻されたことが分かった。また、貝殻を多量に含んでいた。

第３層　第3a層と第3b層に区分し、第3a層は第3ai層と第3aii層とにさらに細分した。第3ai層は黒灰色のシルト質中粒～粗粒砂からなる畠の作土層で、層内には灰色粗粒砂の薄層を挟在していた。上面で畠の畝SX01と踏込みを検出した。第3aii層は灰色の細粒～中粒砂質シルトからなる作土層で、北部にのみ分布する。下面で鋤溝群SX02を検出した。第3b層は後述する南北の段の内側に分布し、上部は灰色ないし暗灰褐色の細粒砂質シルトを主体とする客土層である。下部は灰色の中粒～粗粒砂からなる盛土層で、シルトの偽礫を含む。ラミナが認められ、含水状態で盛土されていた。第3b層上部の客土層については、後述のように調査地が木津川河口部の海岸地帯に位置し、塩水の浸入のために作物などが塩害を受ける地帯に当たるため、上位の畠への下位からの塩水の侵入を防ぐ目的で切り出した角型のブロックを敷き詰めて行った地盤改良の跡と考えられた。なお、ブロックには下位の第6a層～第７層の層準の土が用いられていた。後述するように第3a層は幕末まで遺物を含み、第3b層は18世紀後半～19世紀初め頃の遺物を含む。層厚は第3a層が14～35cm、、層厚は第3b層が45～50cmである。

第４層　第4a層と第4b層に区分し、第4a層は第4ai層と第4aii層とにさらに細分した。第4ai層は灰色ないしやや暗灰色の細粒砂質シルトからなる作土層で、炭を含む。層厚１cmほどの細粒砂層を２層準挟在する。層厚は約７cm程度である。第4aii層は灰色ないしやや暗灰色の細粒砂質シルト～シルト質細粒砂からなる作土層で、炭を含む。層厚は４～７cmである。第4b層は灰色の細粒砂質シルトからなる客土層で、下底に中粒～極粗粒砂が堆積する。層厚は３cm以下である。第４層中には18世紀前半までの遺物を含んでおり、第4a層上面で前述のように地盤改良を行った遺構SX03を検出した。

第５層　上部は黒褐色の細粒砂質シルト～シルト質細粒砂からなる作土層で、中礫～細礫を下底付近に含み、炭を多く含む。下部は黒褐色の細粒砂質シルト～シルト質細粒砂からなる作土層で、炭を多く含む。第５層は下位の第６層と同様に18世紀前葉までの遺物を含み、上・下部を合わせた層厚は約10cmである。上部上面で溝SD04、土壙SK05･06を、下部上面で偶蹄類の足跡を検出した。偶蹄類

の足跡には西北西－東南東方向の行跡も確認できた。

第６層　第6a層と第6b層に区分した。第6a層は暗灰色の細粒砂質シルトからなる作土層で、細礫～中礫をごくわずかに含む。層厚は約４cmである。第6b層は灰色ないし暗灰色のシルトからなる。第6a層の耕起による変形が下位の第7a層に及んだ部分に当る。第６層は18世紀前葉までの遺物を含み、層厚は６～８cmである。

第７層　湿地の堆積層で、第7a層と第7b層に区分した。第7a層は淡褐灰色のシルトからなり、層厚は10cm以下で、葦の根が目立った。第7b層は淡褐灰色の極細粒～細粒砂からなり、層厚は20cm以上あり、巣穴が観察された。

ⅱ)遺構と遺物

確認した遺構は江戸時代から明治時代前半までのものである。第５層下部上面および上部上面、第4a層上面、第3ai層上面および第3aii層下面のそれぞれで検出した。

ａ)江戸時代の遺構と遺物

第５層下部上面および上部上面の遺構

調査区北部において、下部上面および上部上面で検出した。下部上面では偶蹄類の足跡を検出した。また、その行跡も認められた。上部上面では溝SD04、土壙SK05･06を検出した(図５～７)。

SD04　SK05を切る東西方向の溝で、幅0.6~0.8m、深さ0.1~0.3m、下底面は西から東へ傾斜していた。埋土は上半部がオリーブ黒色～灰色の細粒砂質シルトで、炭を含んでいた。また、ラミナが

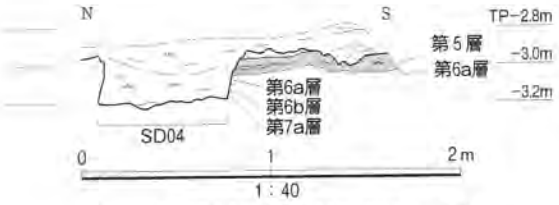


図５　第５層上部上面検出遺構平面図

図６　第５層下部上面検出状況図

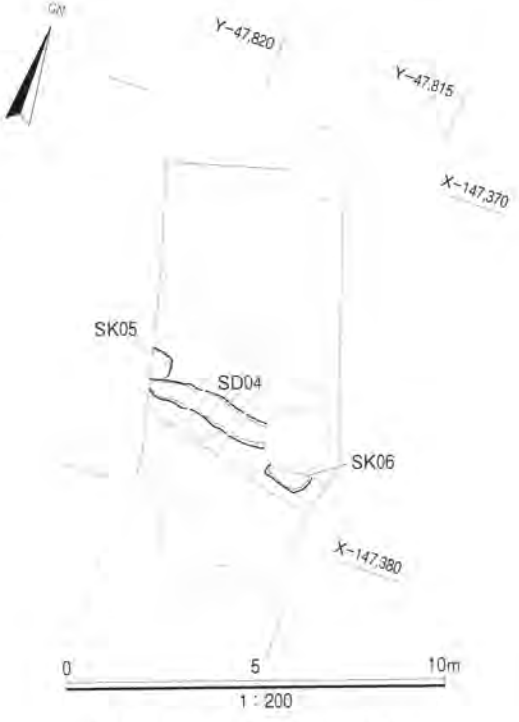


図７　第５層上部上面遺構平面図

観察された。

SK05　南北長0.7m、深さ0.2m、検出した東西長は0.4mである。埋土は褐灰色の細粒砂質シルトで、炭を含んでいた。

SK06　東西長1.1m、深さ0.3m、検出した南北長は0.6mである。埋土はSK06と同様に褐灰色の細粒砂質シルトで、炭を含んでいた。攪乱のためSD04との関係は不明であるが、埋土の岩相からSK05と同時期のものと推測された。

第4a層上面の遺構と遺物

調査地北部と南部で西北西－東南東方向(N80° W)に肩をもつSX03を検出した(図８)。

SX03　幅約17.0m、深さ0.35～0.50m、埋土は下部が第3bii層、上部が第3bi層である。下部には層理が観察され、肩部にほぼ直行する北北東方向から埋め戻されていた。上部は前述のように付近の第6a層～第７層から15～20cmほどの角型のブロックを切り出して隙間なく丁寧に敷き詰めた客土層である(写真１)。調査地は木津川に近接しており、現在でも潮の香りのする地域で、また、調査地内で行われたボーリング調査によると地下水位は現地表下1.5mと非常に高い。当時も塩害を受けたと考えられ、作物を栽培するには工夫が必要であったことは想像に難くない。地下からの塩害対策に、このようなブロックを敷き詰めて客土を行ったと考えられる。

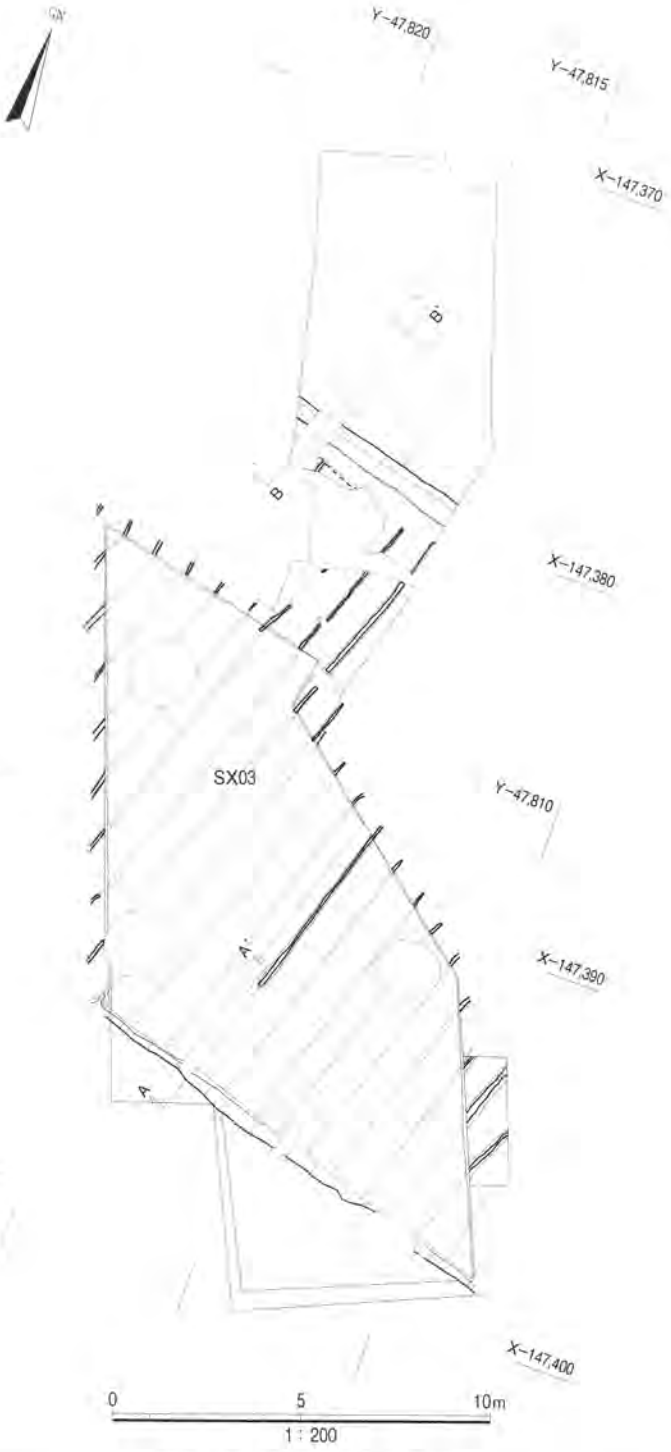


図８　第4a層上面遺構平面図

SX03内には障壁状に畦が部分的に残っていた。幅は0.20m以下、高さは0.10～0.22m、畦と畦の間隔はおよそ1.0m前後であった。畦が残っていたことから下部層(第3bii層)の埋戻し時、上部層(第3bi層)の客土時に丁寧な作業が行われたと推測される。また、畦の上端部を平らにカットし、上記の角型ブロックを載せている部分も少なからず認められ、畦をブロックを支える支柱の代わりに使用して

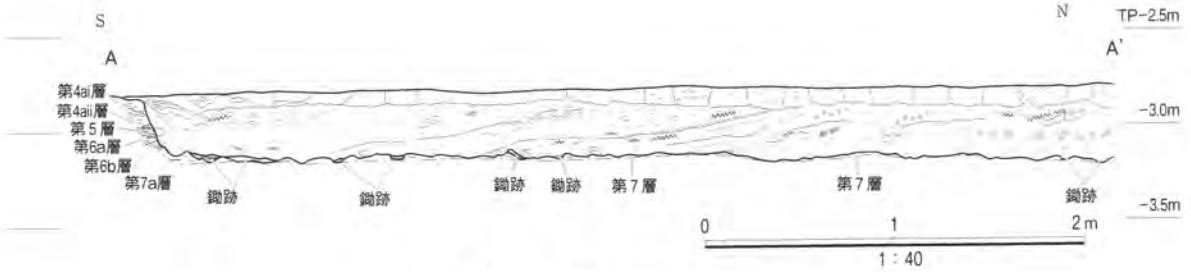


図9　SX03断面図(南部)

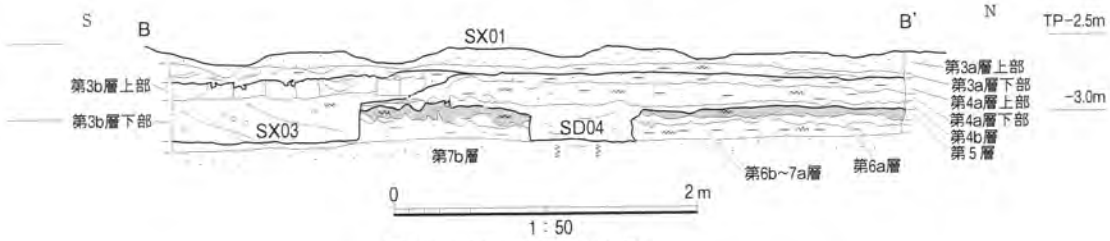


図10　SX03断面図(北部)

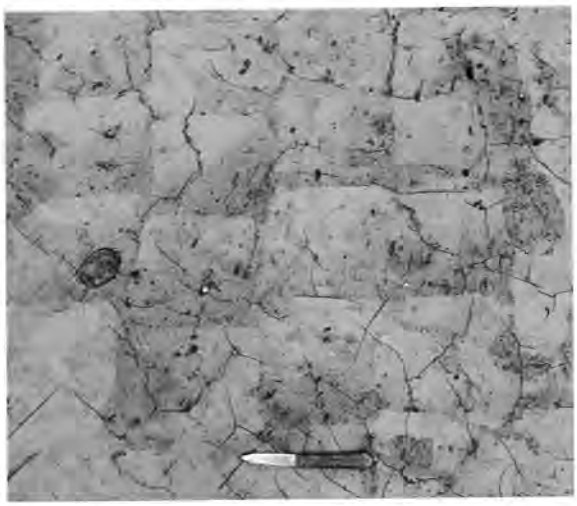


写真1　ブロック客土　(ナイフ長：17.5cm)

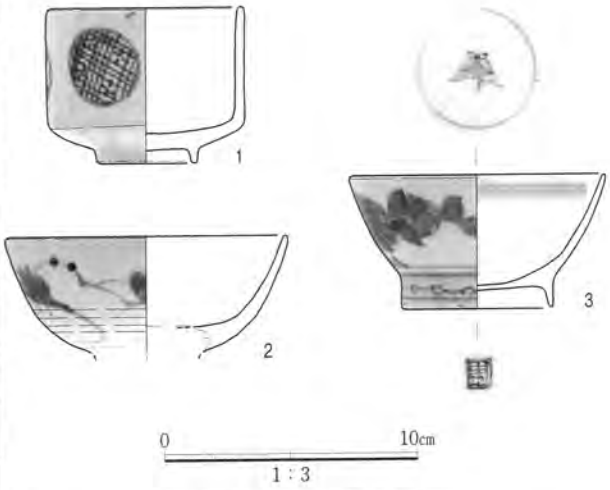


図11　SX03出土遺物実測図

いたことが窺われた。SX03からは18世紀末～19世紀初頭に属する肥前磁器碗1～3が出土している(図11)。

b)江戸時代末～明治時代前半の遺構と遺物

第3ai層上面および第3aii層下面の遺構

第3ai層上面では、調査区全域で畠の畝SX01を27条検出した。畝の方向はSX03の肩部の方向と同様に東北東－西南西方向(N80° W)であった。畝幅は0.20～0.74m、高さは0.03～0.15mで、畝間隔はおよそ1mであった。畝上には畝と斜交する偶蹄類の足跡が認められた。足跡内は第2層で埋まっており、足跡が畝を斜交することと上位の第2層で埋まっていたことから、畠の廃絶後から第2層の盛土がなされるまで堆積間隙があったものと推測された。

第3aii層下面では、畝の方向に平行する10条の鋤溝群SX02が認められた。幅は0.1m以下、深さ0.05m以下であった。なお、偶蹄類等の足跡は確認できなかった。

図12　第3ai層上面遺構平面図

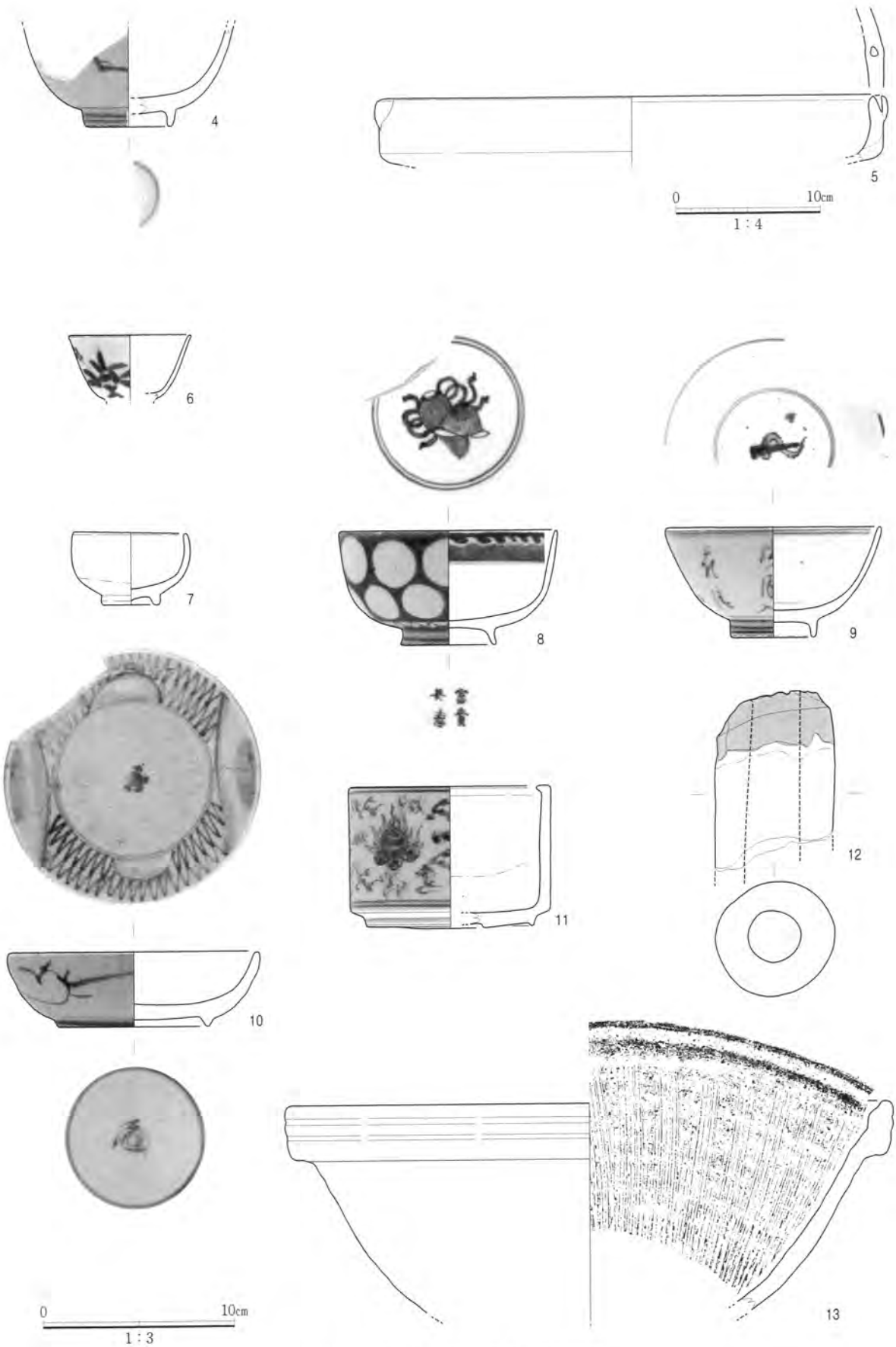


図13　第６・4b・3b層出土遺物実測図
第６層（４・５）、第4b層（６）、第3b層（７～13）

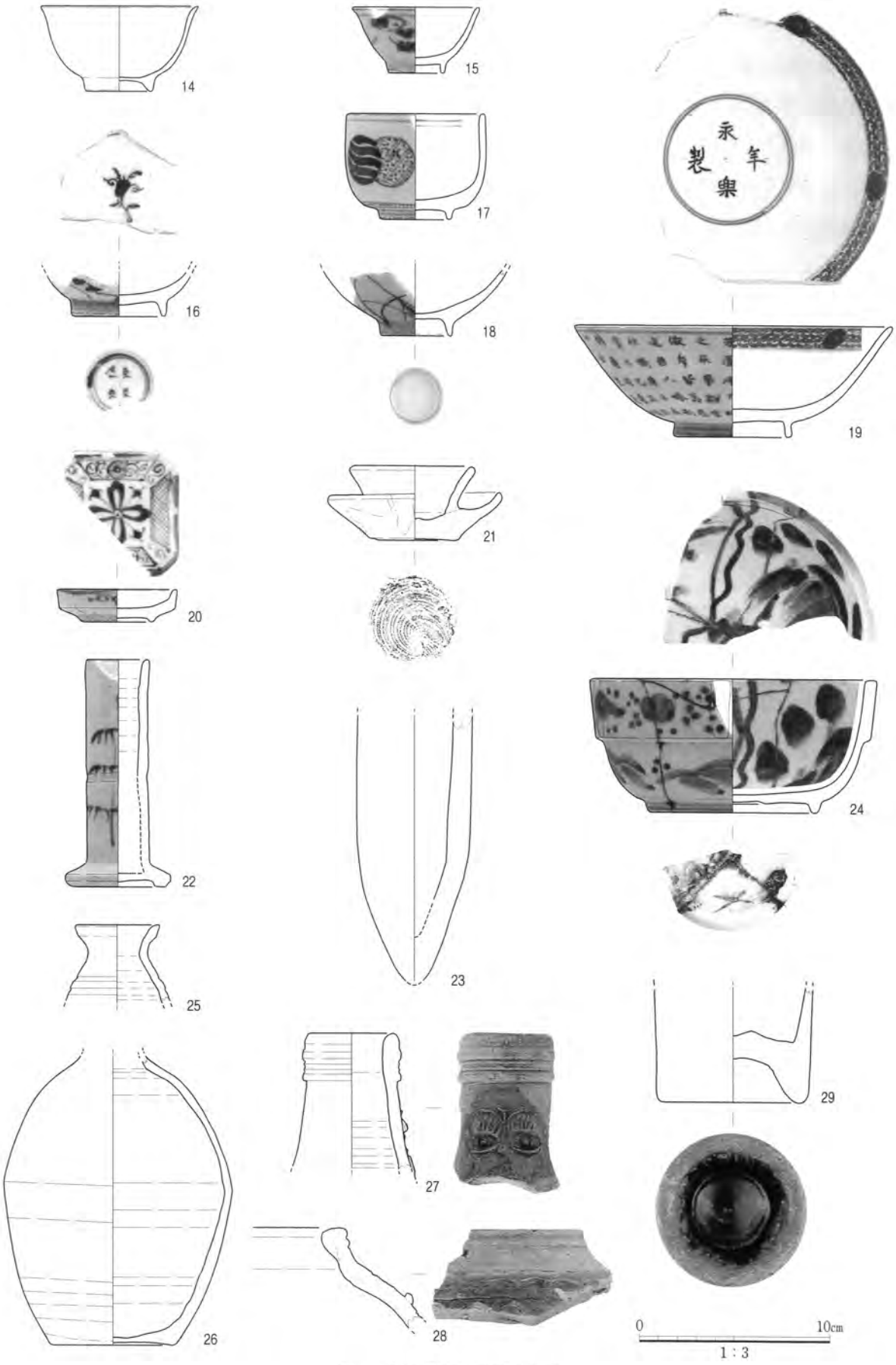


図14　第２層出土遺物実測図

各層の出土遺物

第６層・第4b層・第3b層から出土した遺物については図13に、第２層から出土した遺物については図14に実測図を示した。

第６層では、高台径が小さく、高台内に圏線が巡る肥前磁器碗４や土師器焙烙(D類) ５のほか、15世紀代に属する中国青磁碗や17世紀前半の肥前陶器瓶などが出土している。これらの遺物から第６層は18世紀前葉までの作土層である。また、図には示していないが第５層からも第６層とほぼ同時期の遺物が出土している。第4b層からは、肥前磁器小杯６のほか18世紀前半までに属する遺物が出土している。第3b層からは瀬戸美濃陶器小杯７、八の字高台の肥前磁器碗８、肥前磁器小広東碗９、肥前磁器皿10、肥前磁器火入11、羽口12、備前焼擂鉢13のほか、丹波焼徳利、関西系土瓶・土鍋などが出土している。瀬戸美濃磁器や端反碗が出土していない。これらの遺物から第3b層は19世紀初頭までの盛土である。

第２層からは中国産白磁小杯14、中国産磁器小杯15、中国産磁器碗16、肥前磁器碗17、瀬戸美濃焼磁器碗18、肥前磁器鉢19・24、瀬戸美濃焼磁器手塩皿20、大谷焼の可能性がある受付灯明皿21、肥前磁器線香立22、備前焼花生23、壺屋焼徳利25、大谷焼徳利26、ドイツ産陶器徳利27、ベトナム産陶器壺28、「R Cooper & Co　Portobello」と底に名が入った黒色半透明のガラス製ワイン瓶29が出土している。29を使用したワイン製造は1874年～1900年であることが分かっている。型紙摺りの肥前磁器鉢19や絵付けに酸化クロムや正円子が用いられている瀬戸美濃焼磁器碗18が出土することと合わせて、第２層は明治時代前半の盛土である。また、図には示していないが、第3a層は瀬戸美濃磁器碗、関西系陶器土瓶などが出土しており、幕末までに属するとみられる。

第０層の最下部付近からは、前述のように焼土や炭層に混じって陶製のコンロ(写真２)や王冠が付いたまま熱によって変形した大日本麦酒株式會社製造と名の入ったビール瓶(写真３)が出土している。第二次世界大戦の大阪空襲時のものと考えられる。

出土貝類の同定結果

本調査では第２層下部中で貝類の分布が広い範囲に認められたことから、２個所で土サンプル(サ

写真２　陶製コンロ

写真３　ビール瓶

ンプル①・②)を採取し、水洗選別を行った。回収した貝類は3,662個体、15種以上に及ぶ(表2・3)。なお、同定作業には現生標本と図鑑[吉良哲明1954・紀平肇他2003]を利用しており、西宮市貝類館の高田良二氏より貴重なご助言を賜った。また、個体数に関して腹足綱は殻口数を、二枚貝綱は左右殻数の多数の方を原則として採用している。

貝種構成についてはチリメンカワニナ(48.3%)とマシジミ(48.1%)を中心に、オオタニシ・マメタニシ・ビワメラニア・マツカサガイ・ササノハガイ・オトコタテボシ・イシガイなどの淡水性種が99.6%と大半を占めており、こうした傾向は両サンプルで共通している。このうち、マシジミとしたものは側歯角が広く、低い殻頂をもち、輪脈が明瞭であるという特徴を示すもので、当地域では江戸時代以降に出現する[池田研2004]。後述するようにこのマシジミが自然死したものであるとすると、当地で食料残滓として出土するマシジミの産地を検討する上で、重要な資料となりうる。また、ササノハガイ・オトコタテボシや、イボカワニナとみられるビワメラニアは現在、琵琶湖固有種となっているもので、そのほかチリメンカワニナとしたものにはカワニナが少量含まれている可能性がある。当地域における食料残滓の貝類の構成については、シジミ類やカワニナなど淡水・

表2　出土貝類種名一覧

腹足綱 Gastropoda
アワビ属？ *Haliotis* sp. Indet.
イシマキガイ *Clithon retropictus* (v. Martens)
バイ？ *Babyronia japonica* (Reeve)
オオタニシ *Cipangopaludina japonica* (v. Martens)
マメタニシ *Parafossarulus manchouricus japonicas* (Pilsbry)
チリメンカワニナ *Semisulcospira reiniana* (Brot)
ビワメラニア亜属 *Semisulcospira* (*Biwamelania*) sp. indet.
二枚貝綱 Bivalvia
アカガイ *Anadara* (*Scapharca*) *broughtonii* (Schrenck)
フネガイ科 Arcidae gen. et sp. indet.
イタボガキ *Ostrea denselamellosa* Lischke
マガキ *Crassostrea gigas* (Thunberg)
ハマグリ *Meretrix lusoria* (Roeding)
ヤマトシジミ *Corbicula japonica* Prime
マシジミ *Corbicula* (*corbiculina*) *leana* Prime
マツカサガイ *Inversidens japanensis* (Lea)
ササノハガイ *Lanceolaria oxyrhyncha* (v. Martens)
オトコタテボシ *Inversidens reiniana* (Kobelt)
イシガイ *Unio douglasiae nipponensis* (v. Martens)
イシガイ科 Unionidae gen. et sp. indet.

表3　出土貝類の一覧表

地層・遺構名	アカガイ	フネガイ科	イタボガキ	マガキ	ハマグリ	ヤマトシジミ	マシジミ	マツカサガイ	ササノハガイ	イシガイ	オトコタテボシ	イシガイ科	チリメンカワニナ	ビワメラニア	オオタニシ	マメタニシ	アワビ類	イシマキガイ	バイ
第2層ｻﾝﾌﾟﾙ①		1				1	481(合31)	3	1	2		6	562	19				3	
第2層ｻﾝﾌﾟﾙ②	1	●	1	1	5	1	1280(合214)	4		7	6	6	1205	54	8	3	●?		1?

註　1)　(合)は左右殻が合わさった状態で出土した個体数。
2)　●は殻頂・殻口部が出土しておらず個体数は不明であるが、破片から存在が確認されたもの
3)　チリメンカワニナにはごく少量のカワニナが含まれるとみられる。
4)　ビワメラニアはイボカワニナを主体とするとみられる。

汽水性種の比率が18世紀以降に上昇することが知られており[池田研2010]、上述した淡水性種も多くが食用となりうるものである。しかしながら、その出土状況を見る限り密集部の存在など人為的に投棄されたような痕跡が無いこと、マシジミの１割以上が左右殻の合わさったまま出土していること、マシジミやチリメンカワニナなどに幼貝が一定量含まれていることなどから、本資料の淡水性種に関しては食料残滓ではなく、自然に死亡したものである可能性が高い。

一方、イシマキガイやヤマトシジミなどの汽水性種についても、淡水性種と同様に自然死したものが潮の干満により河口部から運ばれた可能性があるが、アカガイ・マガキ・イタボガキ・ハマグリなどの鹹水性種については、食料残滓が投棄されたものである可能性が高いと考えられる。

3）まとめ

今回の調査では江戸時代中頃以降の遺構と遺物を確認することができた。最下位には湿地の堆積層が分布し、その上位、調査地において耕作を開始したのは18世紀前葉以降になってからということが明らかになった。記録では寛永年間(1624～1643年)とされており[西区史刊行委員会1979]、100年ほどの隔たりがある。今後、調査個所が増えるに従ってその原因が明らかになるものと期待される。

江戸時代末から明治時代前半にかけての畠を検出したが、この畠を作るに際して、塩害を防ぐための地盤改良が施されたとみられる遺構(SX03)は、当時の人々の緻密で丁寧な作業を想い起させた。農業技術の歴史を知る上でも貴重な発見であったと言える。

最後に、今回の調査では蔵屋敷の実態に迫ることができなかった、今後の周辺調査によって明らかになることを期待したい。

引用・参考文献

池田研2004、「大坂城下町跡出土貝類の分析」：大阪市文化財協会編『大坂城下町跡』Ⅱ、pp.452－467

池田研2010、「堂島蔵屋敷跡Ｂ地点(DJ08－2次)調査出土の貝類について」：大阪市文化財協会編『堂島蔵屋敷跡』Ⅲ、pp.78－86

大阪市文化財協会2004、『西大阪延伸建設工事(第２工区)に伴う千代崎３丁目所在遺跡発掘調査業務(CY04－１・２)報告書』

紀平肇・松田征也・内山りゅう2003、『日本産淡水貝類図鑑　①琵琶湖・淀川産の淡水貝類』

吉良哲明1954、『原色日本貝類図鑑』保育社

西区史刊行委員会1979、『西区史』第二巻

調査地遠景
（北から）

南壁地層断面

第２層上面検出状況
（北西から）

SK03
（南西から）

SK01検出状況
（北東から）

SK01断面
（東西アゼ：北東から）

西区江戸堀三丁目における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(ED10－１)報告書

調査個所	大阪市西区江戸堀3丁目1ほか
調査面積	100㎡
調査期間	平成23年4月1日～4月13日
調査主体	財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、市川 創、京嶋 覚、趙 哲済、黒田慶一

1)調査に至る経緯と経過

調査地は土佐堀川の南約130m、あみだ池筋の西約80mに位置する(図1)。徳川期には、北方の中之島一帯と同様に各藩の蔵屋敷が多数設けられたことが、絵図や文献史料から知られる。また、地名に残る「江戸堀」は、1617(元和3)年に開削された堀川であるが、戦後の市街地再建に伴い1955(昭和30)年に埋め立てられた[平凡社地方資料センター1986]。図1には、1888年刊行の『大阪実測図』に基づき、江戸堀川の位置を復元している。

本地点において大阪市教育委員会が事前に実施した試掘調査の結果、徳川期以前の地層および遺物が検出されたため、本調査を実施することとなった。調査区は敷地の北側に設定し(図2)、事業者が現地表下約1.1mまで重機による掘削を行った後、平成23年4月1日より調査を開始した。調査は安全な法面を確保しつつ、最深部で現地表下約3.5mまで掘削して遺構の検出および記録を行った。4月13日には器材類の撤収を含め現地におけるすべての作業を完了した。

以下、本報告書で使用した方位は、座標北を基準にした。また、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、TP±○mと表記する。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

重機により掘削した現地表下約1.1m以深の地層を、2層に区分した。

第1層:人為的な埋立て層であり、層厚は190cm以上ある。上部から第1a～1c層の3層に細分した。このうち第1a層は、灰色を呈するシルトの偽礫と、黄褐色を呈する中粒～粗粒砂の偽礫の互層からなる。層厚は50cmあった。第1a層を60cmほど掘削した段階で、江戸堀川南岸の護岸施設を検出した。

図1　調査地位置図

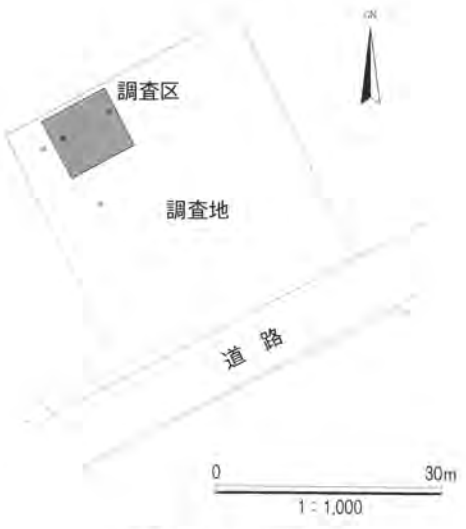


図2　調査区位置図

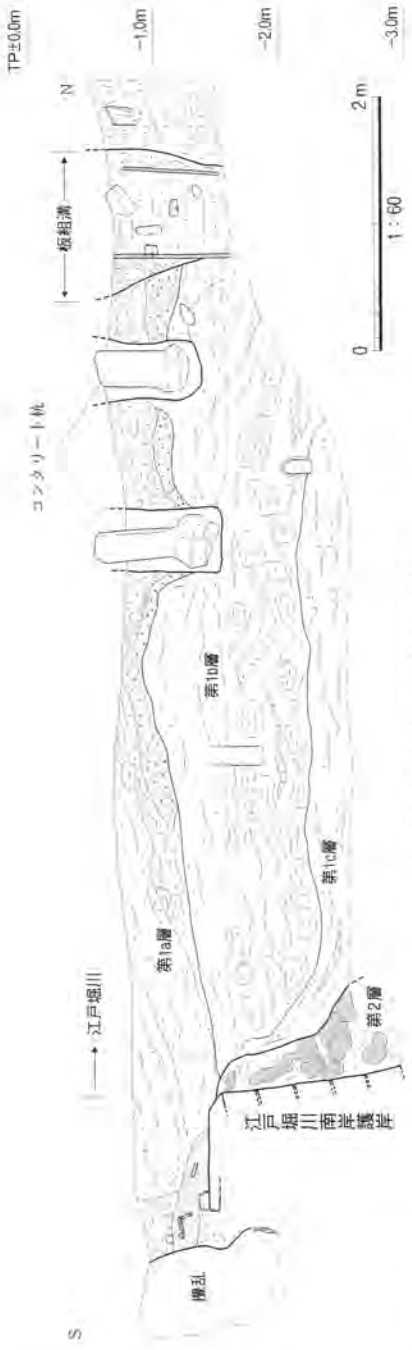


図3　調査区西壁地層断面図

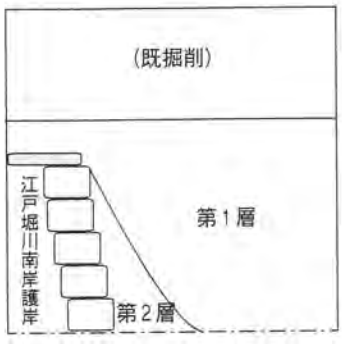


図4　層序と遺構の関係図

また調査区の北端では、本層上面において東西に延びる板組みの溝を検出した。第1b層は灰色を呈する砂質シルトからなり、下半ではシルトの偽礫を多く含む。層厚は100cmであった。第1c層は、黒色を呈するシルト質中粒～粗粒砂からなる。層厚は30cm以上ある。第１層から出土した遺物には、図７に示した古い時期の資料も少量含まれたが、大半は碍子など第２次世界大戦後に降るものである。このことから、本層は1955年の江戸堀川埋立て時の地層である。

第２層：砂質シルトからなり、黒色を呈する粘土質シルトの偽礫を多く含む。層厚は140cm以上ある。本層からは、ほぼ昭和期の遺物のみが出土した。埋立て直前まで機能していた、江戸堀川の機能時堆積層である。

ⅱ)遺構と遺物(図５・６)

掘削の過程で調査区の大半が江戸堀川内に当ることが判明したため、遺構検出は第１層を可能な限り掘削した状態で行った(図５)。

調査区の北側2/3ほどを占める江戸堀川中では、コンクリート基礎や杭列など、埋立て直前の構造を検出した。調査区の南側では、北東－南西に延びる江戸堀川の南岸護岸施設を検出した(図６)。護岸施設は花崗岩の切石によって構成されており、５段分を検出した。護岸の長さは9.3m以上、高さは1.5m以上ある。また切石は長辺40cm、短辺30cmほどのものが使用されていた。護岸施設の上面はコンクリートによって覆われており、切石間の目地にもコンクリートが詰められていた。また、江戸堀川に面した２箇所には土管製の排水口が設けられていた。そのほか、護岸施設の裏込めからは近代の遺物が出土している。

これらのことから、今回検出した護岸施設は近代に入って改修、あるいは造営されたものであることがわかる。江戸堀川は1617(元和３)年に開削されたのち、1764(明和元)年に改修を受け護岸施設が設けられたことが知られるが[平凡社地方資料センター1986]、今回検出した施設が江戸時代のものを改修したものなのか、あるいは近代に至って造り換えられたものなのかは、今回の調査深度では追及することができなかった。

出土遺物は、図7に図示した。第1層からは第二次世界大戦後に降る資料が出土したが、古式土師器の底部1、平安時代の黒色土器B類椀2なども少量含まれていた。埋立てのための採土地に含まれていたものであろう。第1層を切る板組溝からは、ヨーロッパ陶器3が出土している。皿の底部であり、文様は「ウィロウ」である。生産年代は19世紀前半であろう。第2層出土遺物では、コーヒーカップ受皿4および皿5を図示した。このうち5は、内面の3方に花文を描く。外底面には「Noritake」・「MADE IN JAPAN」とプリントされている。社印のデザインおよび「OCCUPIED JAPAN」銘でないことから、サンフランシスコ講和条約発効後の1952－1953年に製作されたノリタケ社の製品であろう[ノリタケカンパニーリミテド2007]。5は少なくとも5枚が二次的な被熱により融着している。いずれも同形・

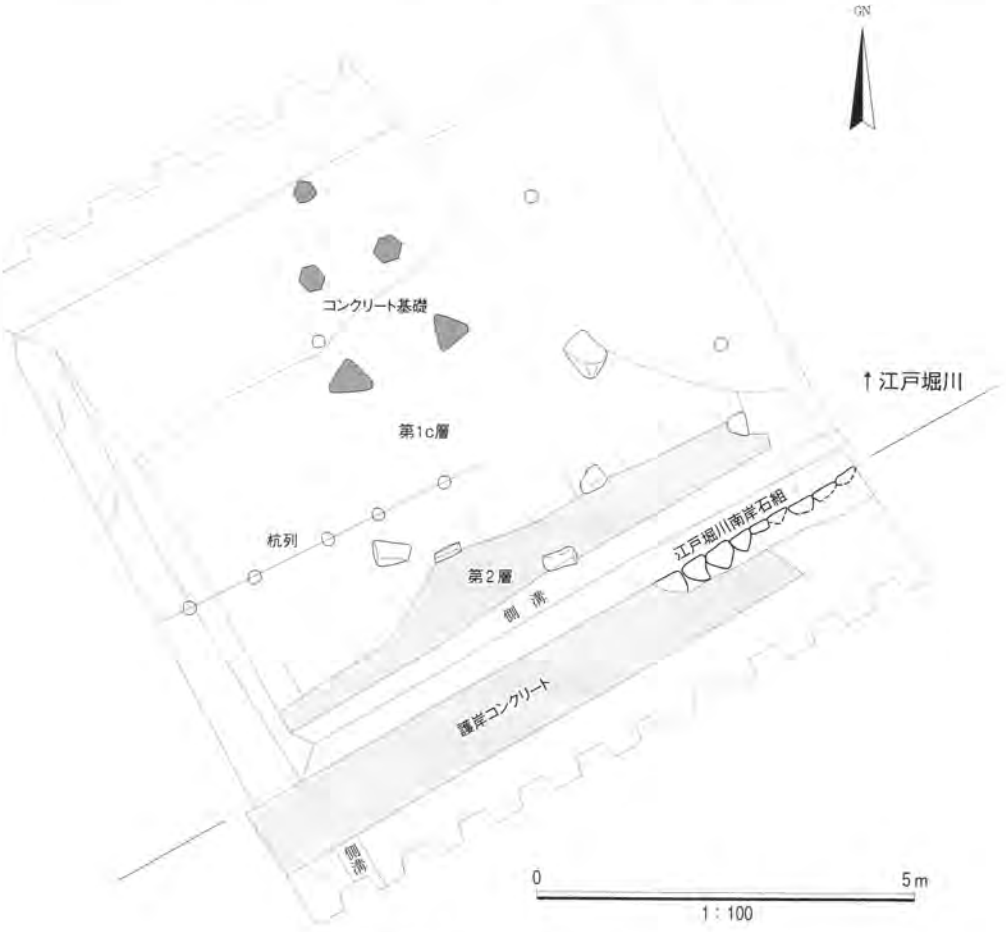


図5　第4層層中の遺構平面図

図6　江戸堀川南岸護岸立面図

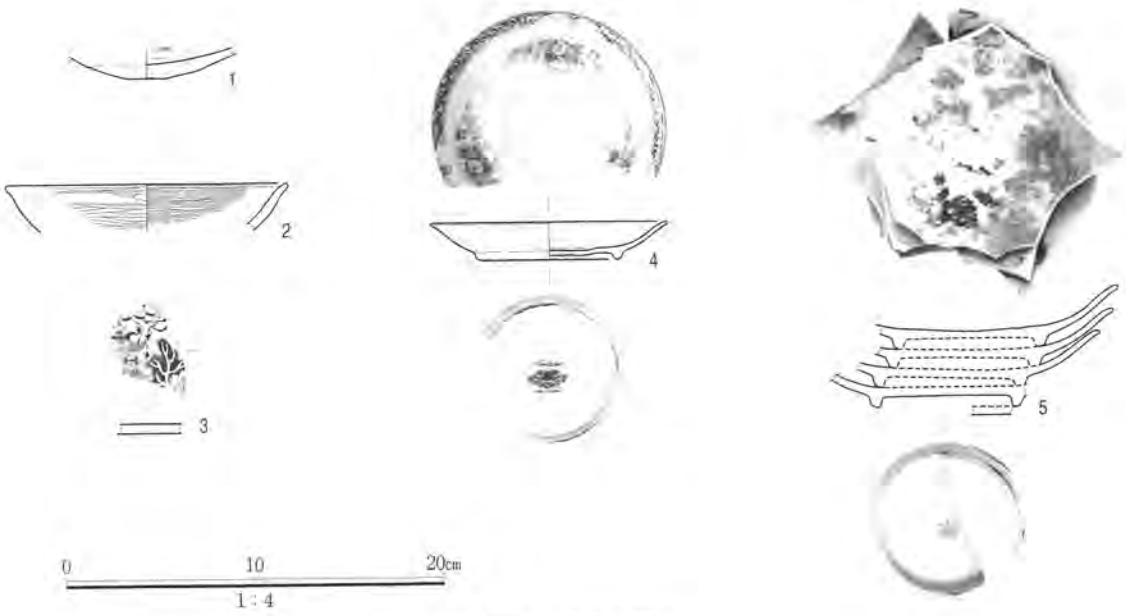


図7　出土遺物実測図

第1層(1・2)、第2層(4・5)、板組溝(3)

同文の皿であり、底面には「岐1086」のクロム印がある。岐阜県において第二次世界大戦下の1941～1945年に生産された、いわゆる統制陶器である[桃井勝1997]。したがって、本資料が二次的に被熱した要因は第二次世界大戦中の大阪大空襲であった可能性がある。

3)まとめ

今回の調査では、当初期待された蔵屋敷に係わる遺構は検出できなかった。しかしながら、徳川期から近代にかけて大阪の物流を担った江戸堀川の護岸施設を検出できたことは、当地の歴史を考える上で貴重な成果ということができる。

蔵屋敷については、近年中之島および福島地域で発掘調査に基づく知見が蓄積されている。蔵屋敷、ひいては徳川期大坂の都市としてのあり方を考える上で、今後とも土佐堀川・江戸堀川一帯における発掘調査の進展が期待される。

[引用文献]

平凡社地方資料センター1986、『大阪府の地名』(日本歴史地名体系第28巻)、平凡社、p.507

ノリタケカンパニーリミテド(監修)2007、『ノリタケデザイン100年の歴史』、朝日新聞社

桃井 勝1997、「工場記号番号－昭和23年岐阜県陶磁器工業協同組合員工場記号番号－」:多治見市文化財保護センター編『多治見市文化財保護センター研究紀要』第3号　多治見市教育委員会、pp.40－79

調査区全景
（北東から）

調査区西壁断面
（東から）

江戸堀川南岸護岸施設
（北東から）

西区江戸堀三丁目における建設工事(北工区)に伴う
埋蔵文化財発掘調査(ED11－１)報告書

調査個所	大阪市西区江戸堀３丁目１ほか
調査面積	100㎡
調査期間	平成23年６月29日～７月14日
調査主体	財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、黒田慶一

1)調査に至る経緯と経過

調査地は土佐堀川の南100m、あみだ池筋の西約80mに位置する(図1)。ED10－1次調査区から北西へ12mの地点を調査した(図2・写真1)。ED10－1次調査区では江戸堀川の南岸が検出された。江戸堀川は大坂夏ノ陣(1615年)後、大坂藩主松平忠明の市街地整理事業の一環として、土佐堀川に並行するように掘られた川で、1617(元和3)年に開削され、開削時の延長は約1.3km、上流の幅23m、下流の幅32m［幸田成友1942］といわれる。また、江戸時代には沿岸一帯は諸藩の蔵屋敷が多く、舟運にもよく利用されたが、1955(昭和30)年に埋め立てられた。

大阪市教育委員会が平成23年3月4日に試掘調査を行ったところ、現地表下約1.1m以下で、江戸時代の蔵屋敷跡などに関連する遺構面を検出したことから、本調査を実施することとなった。調査区は敷地の北西角そばに上端で東西7m、南北20mの範囲で設定した。本調査区で江戸堀川の北岸が検出されるものと考えられた。6月29日より調査を開始し、最深部で現地表下約3.0mまで掘削して、遺構の検出および記録を行った。期間中にGPS測量により世界測地系の基準点測量を行った。7月14日に器材類を撤収し、現地におけるすべての作業を完了した。

なお、本報告書で使用した方位は、座標北を基準にし、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、図・文中ではTP＋○mと記している。

2)調査の結果

i)層序(図3～5)

第0層：層厚70～200cmの現代整地層と攪乱層である。

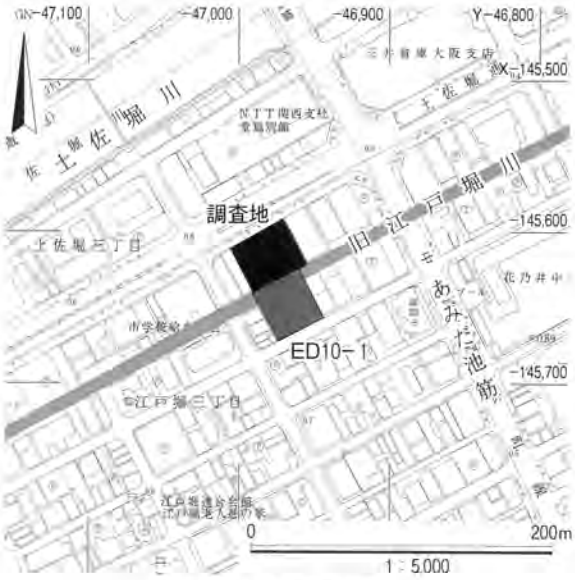


図1　調査地位置図

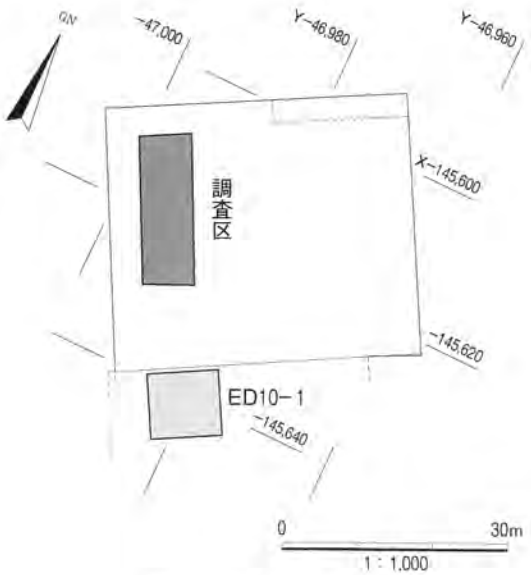


図2　調査区位置図

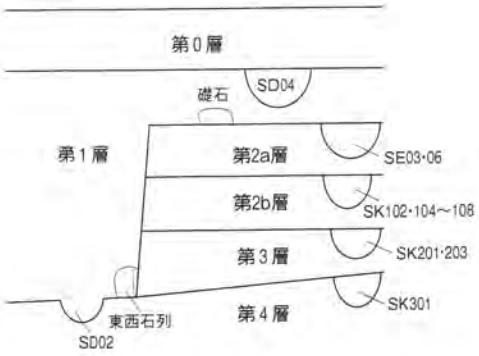


図3　地層と遺構の関係図

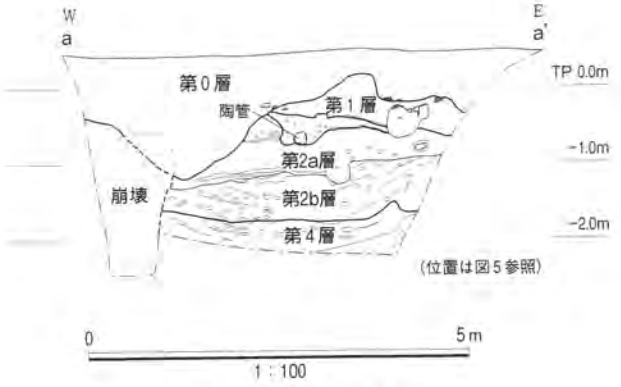


図4　北壁地層断面図

第1層：層厚50～120cmの明黄褐色(10YR6/6)中粒砂質シルト～中粒砂よりなる人為的な盛土層である。18世紀末～19世紀初頭の遺物を含む。

第2a層：層厚20～70cmのにぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂質シルトの盛土層である。

第2b層：層厚50～70cmの黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂質シルトの盛土層で、17世紀後半の中国産青花碗、肥前磁器碗・鉢、瀬戸美濃焼香炉を含む。

第3層：層厚20cmのオリーブ黒色(10Y3/2)中粒砂質シルトの盛土層で、17世紀後半の肥前磁器碗・皿、瓦質土器移動式カマド・菊丸瓦を含む。

第4層：層厚60cm以上の黄褐色(10YR5/6)～暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)中粒砂の濫氾堆積層である。

ii)遺構と遺物

各盛土は北から南に投下され、遺構面は北から南へ低くなり、現場での出水・排水の問題もあって、異なる遺構面を同時に調査することを余儀なくされた。遺構名によって検出面を区別する。第4層上面遺構に300番台を、第3層上面遺構に200番台を、第2b層上面遺構に100番台を、第2a・1層上面遺構に2桁数字を付した。

写真1　調査区より南を見る

17世紀初頭の遺構(第4層上面：図5・6)

SK301　直径2.6m、深さ0.4mの浅いスリ鉢状の土壙で、下部は炭を多く含む褐色(2.5Y4/6)シルト、上部は黄褐色(2.5Y5/6)シルトで、水漬き状態で堆積した。土師器皿1と肥前陶器碗2が出土した。

17世紀後半の遺構(第3層上面：図5～7)

SK201　長さ1.1m以上、幅1.1m、深さ0.3mで、暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルトを埋土とする。

SK203　長さ1.7m、幅1.5m以上、深さ0.3mで、灰色(7.5Y4/1)中粒砂質シルトを埋土とする土器溜

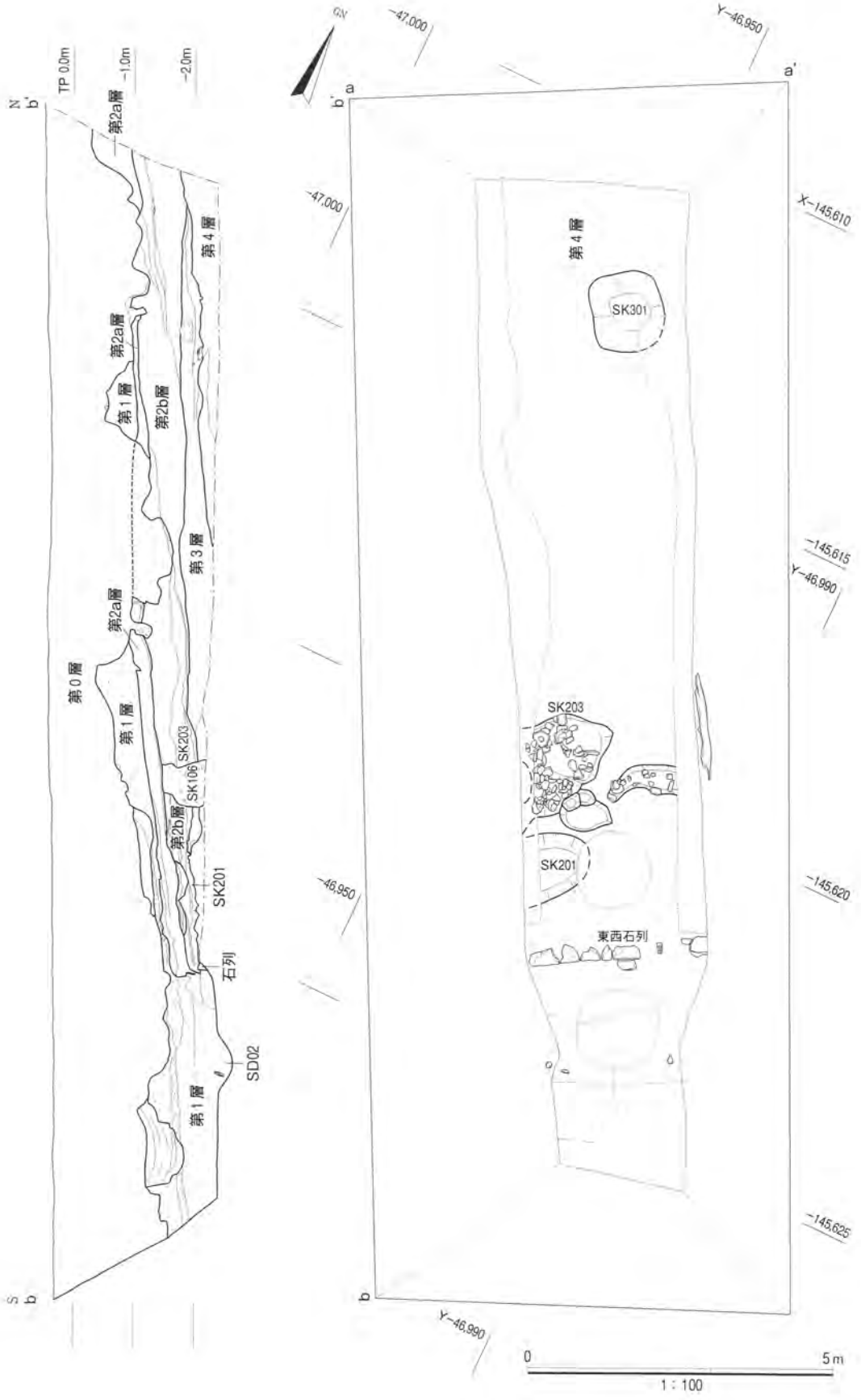


図5　西壁地層断面図と第4層・第3層上面平面図

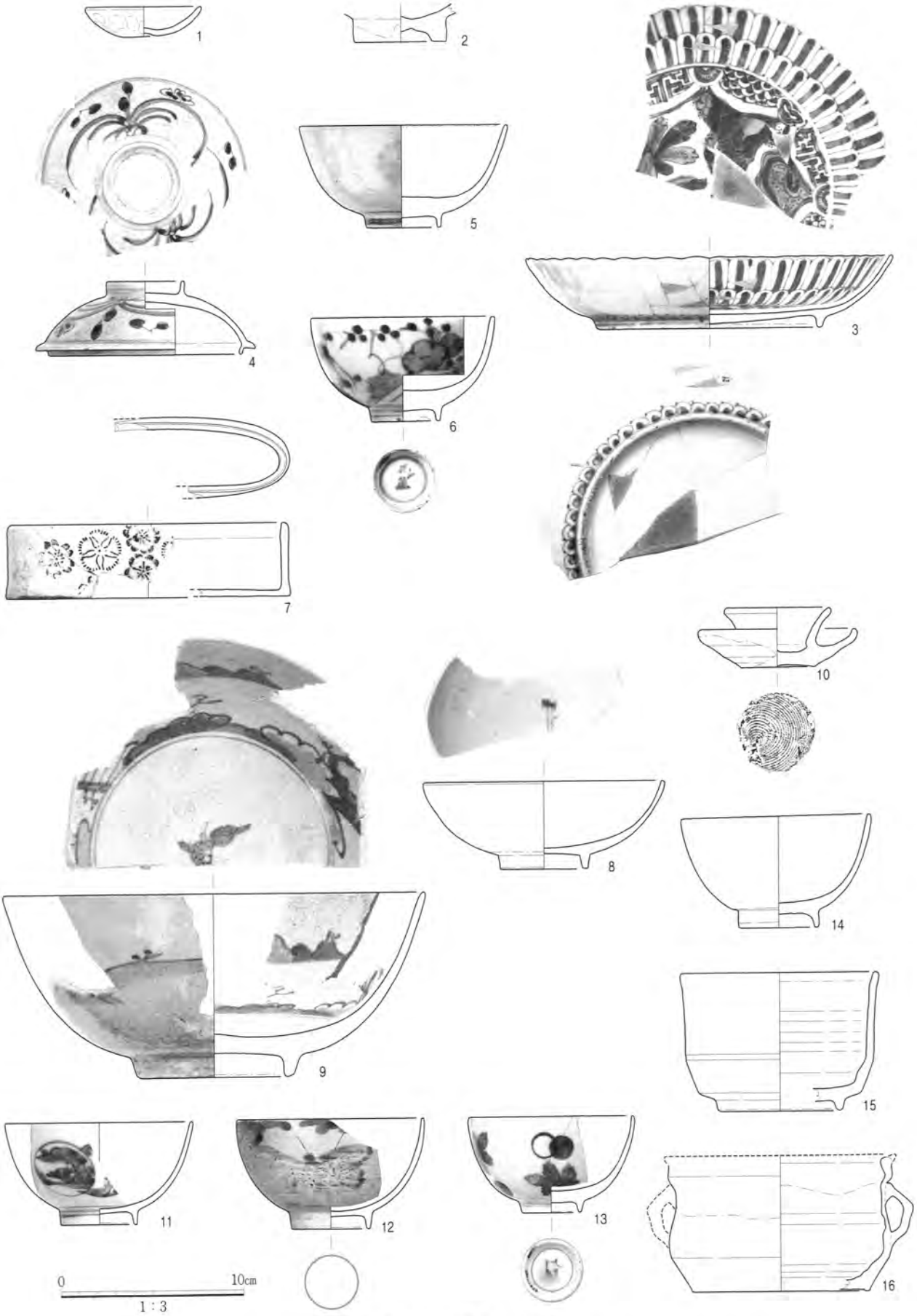


図6　遺構出土遺物実測図

SK301(1・2)、SK203(3～10)、SK102(11)、SK105(12)、SK107(13)、SK108(14～16)

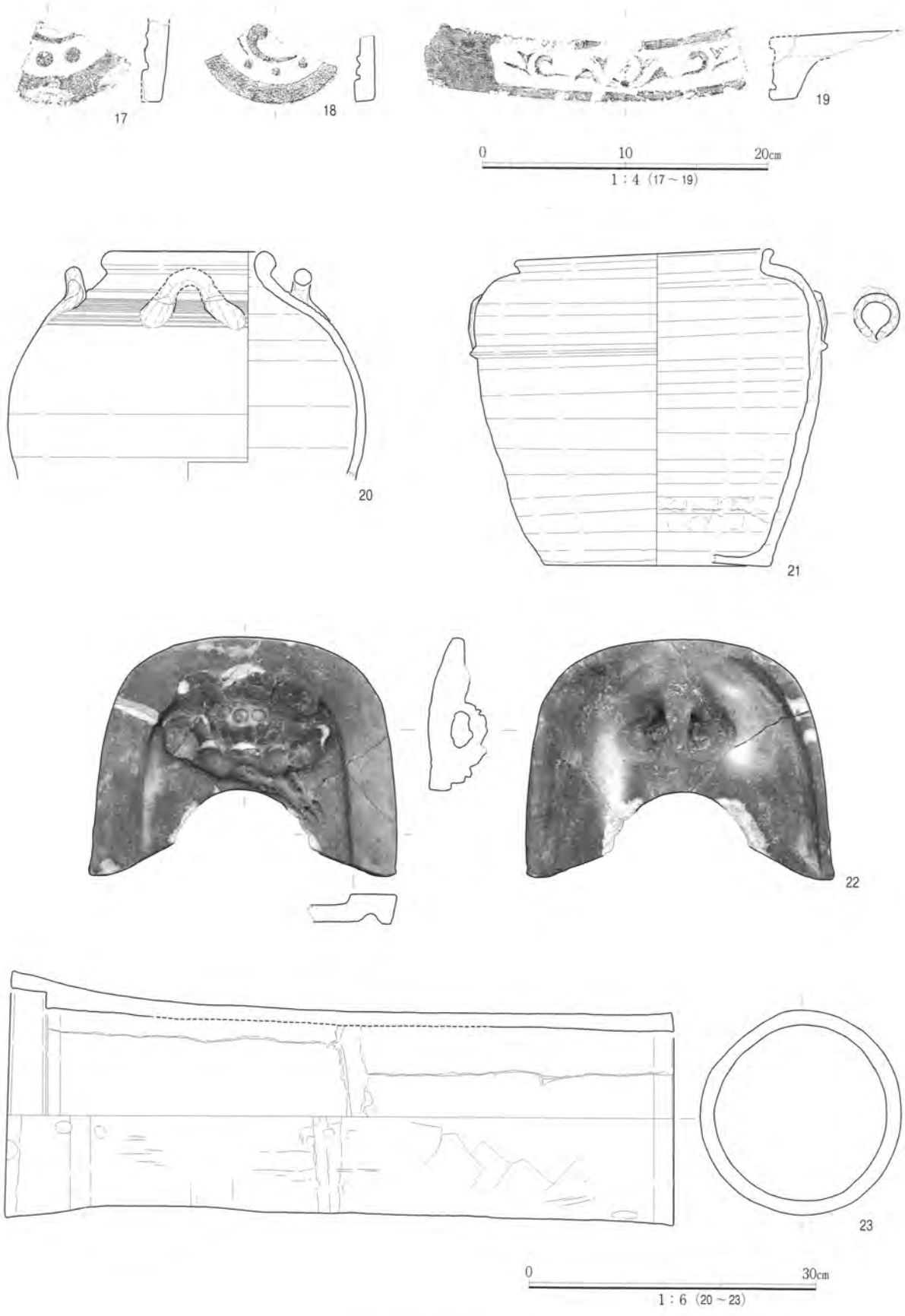


図7　遺構出土遺物実測図
SK203(17～22)、SD04(23)

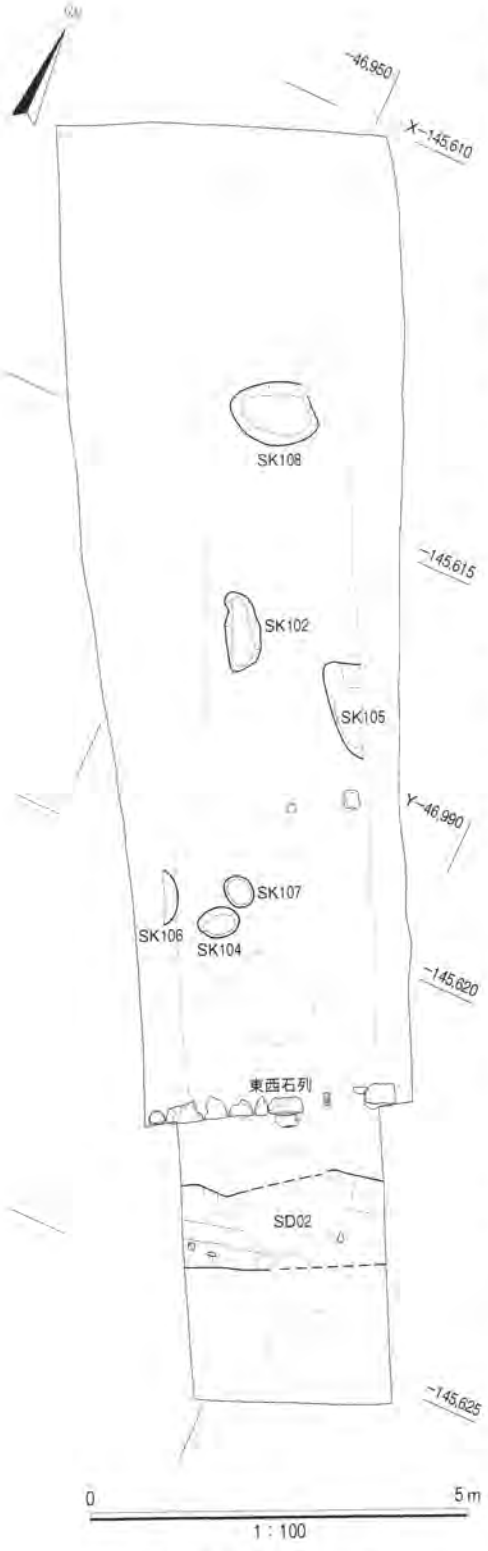


図8　第2b層上面平面図

めである。青花輪花皿3、肥前磁器染付蓋4・碗5・6・鉢9、瀬戸美濃焼陶器鬢水入7・灯明皿10、肥前陶器京焼風平碗8、三巴文軒丸瓦17・18、橘文軒平瓦19、タイ産陶器四耳壺20、備前焼甕21、蓮華文鬼瓦22が出土した。10は底部に糸切り痕があり、17は復元径12.0cm、復元珠文数12個、18は復元径11.0cm、復元珠文数12個の小型である。20は焼締められて赤褐色(10R4/3)～暗赤褐色(10R3/2)を呈し、21は粘土紐による耳状の円形の浮文をもつ。22は蓮華を横から見た姿をモチーフとし、肩部裏面は母屋の粘土を剝り取っている。

17世紀後半の遺構(第2b層上面：図6・8)

東西石列　1段(根石、高さ20cm)しか残存していないが、第2a層以下がここで途切れ、段をなして落ちていることから見て、元は高さ60cmの護岸石垣で、第1層の盛土による江戸堀護岸石垣改修の時、上部の石垣は撤去されたと考えられる。

SK102　長さ1.0m、幅0.5m、深さ0.1mの土壙で、黄褐色(10YR5/6)中粒砂質シルトを埋土とする。肥前磁器染付碗11が出土した。

SK103　直径0.40m、深さ0.15mの不整円形の土壙で、有機物を含む灰色(10YR5/6)シルトを埋土とする。

SK105　長さ1.2m、幅1.0m、深さ0.2mの土壙で、上部は灰オリーブ色(7.5Y4/2)中粒砂質シルト偽礫を、下部はオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質中粒砂偽礫を埋土とする。肥前磁器染付碗12が出土した。

SK106　西壁で検出された直径0.8m、深さ0.7m以上の土壙で、漆喰を多く含む褐色(10YR4/4)砂礫で埋まる。

SK107　長径0.5m、短径0.4m、深さ0.3mの土壙で、瓦片を含む灰オリーブ色(2.5GY4/1)シルトを埋土とする。肥前磁器染付碗13が出土した。

SK108　長さ1.2m、幅0.9m、深さ0.3mの土壙で、黄褐色(10YR5/6)中粒砂質シルトを埋土とする。肥前白磁碗14、肥前青磁蓋物15、丹波焼鉢16が出土した。

18世紀末の遺構(第2a層上面：図8・9)

SE03　直径1.3m、深さ1.3mの円形井戸で、出土遺物からみて18世紀末に、にぶい黄褐色(10YR4/3)

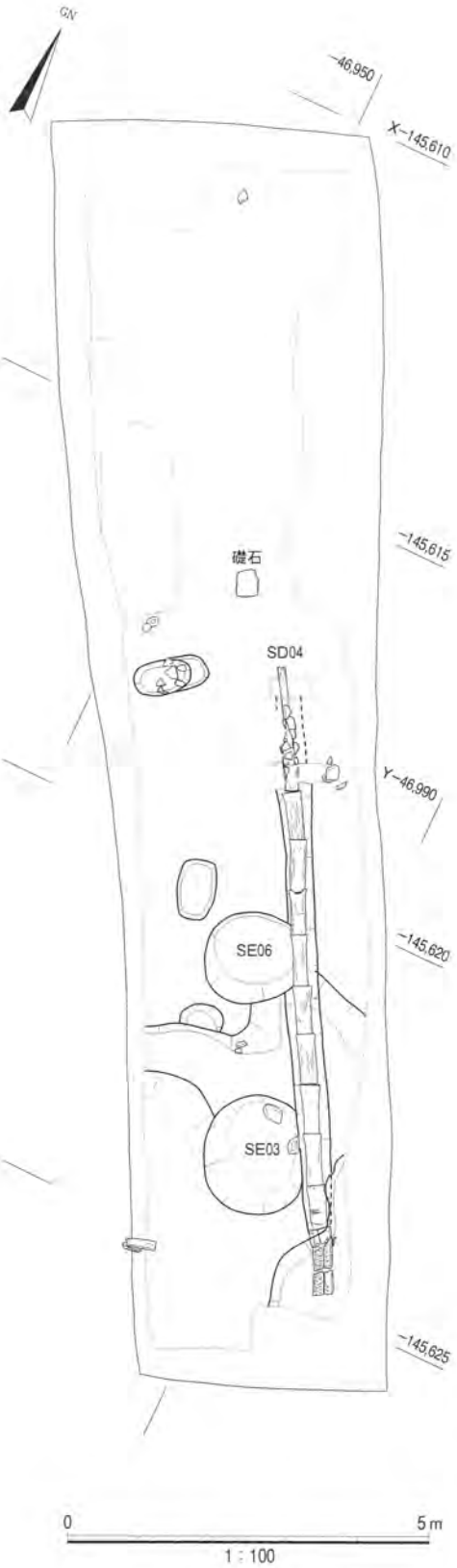
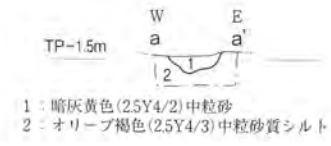


図9　第2a層上面平面図



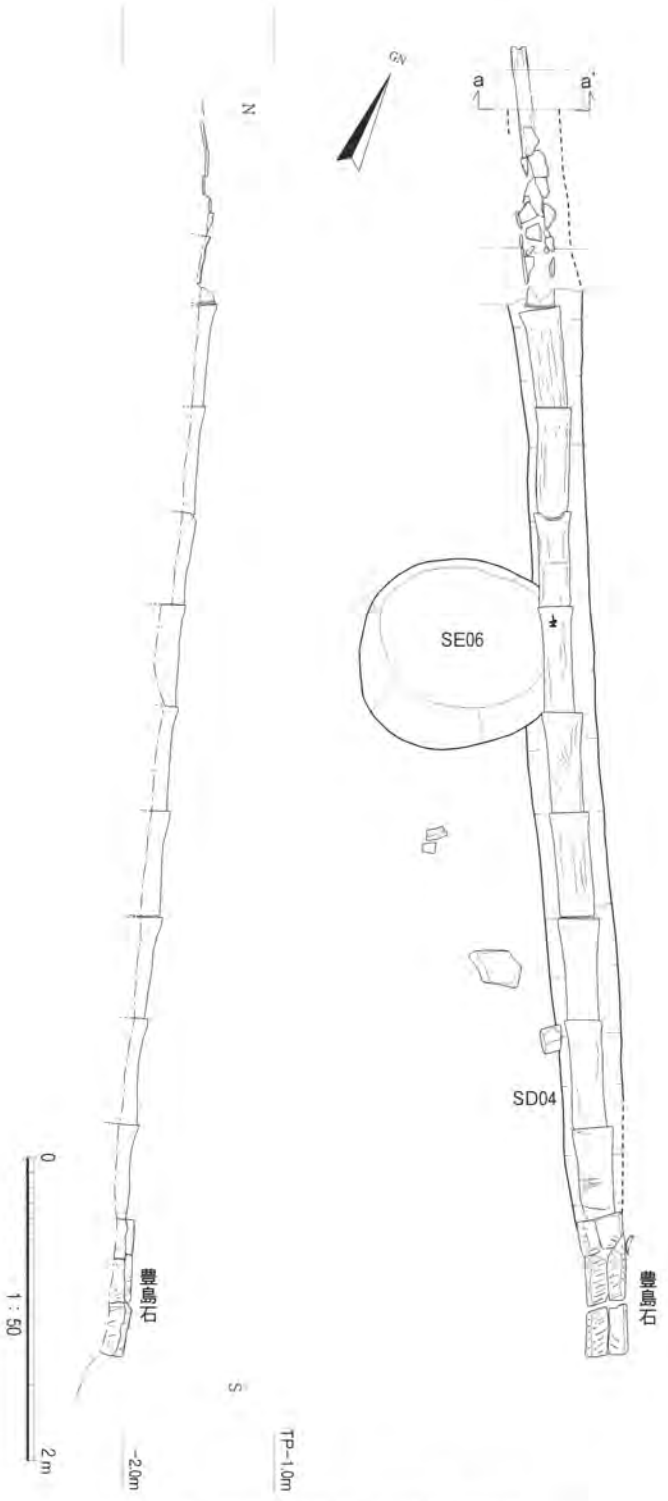


図10　SD04平面図・立面図・断面図

シルト偽礫を含む褐色(10YR4/4)中粒砂で人為的に埋められる。

SE06　直径1.3m、深さ1.4mの円形井戸で、出土遺物からみて18世紀末に、オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質中粒砂で人為的に埋められる。

19世紀初頭の遺構(第1層上面：図7・9)

SD04　陶管を用いた暗渠で、第1層の盛土施工と同時に行われたようで、本層上面で一部掘形を検出したが、北壁では陶管を埋めた後に第1層が施工されている。陶管の南端には長さ90cmの豊島石製(註1)の凵字形の加工石の上に蓋石をのせた暗渠が連結されていた。陶管の傾斜角は5度である。陶管23はソケット形[大阪府文化財調査研究センター2002]で、内面が赤褐色(10YR4/4)、外面が暗赤褐色(10R3/3)を呈する焼締め陶器で、備前焼に似る。長さ約35cmの粘土円筒を2つ接合し、器壁にはハケメ調整が見られる。陶管と豊島石製の暗渠内からは19世紀以降の遺物が出土した。

SD02　幅1.2m、深さ0.3mの東西溝で、第1層の黄褐色(10YR5/6)中粒砂で埋まる。

iii)各層出土遺物

第3層出土遺物(図11)

肥前磁器染付碗24～26・染付輪花皿27、瓦質土器移動式カマド28、12葉二重菊文菊丸瓦29が出土した。28は外面をミガキ調整し、内面に3本櫛でカキヤブリをいれている。29は復元径が7.4cmである。これらは17世紀後半のものである。

第2b層出土遺物(図12)

肥前陶器碗30、中国産青花端反碗31、肥前磁器染付鉢32・染付皿33・染付端反碗34、瀬戸美濃焼陶器香炉35、左巻き三巴文鳥衾36が出土した。36は直径13.6cm、珠文数9個である。17世紀後半のものである。

第1層出土遺物(図12)

関西系陶器筒形碗37が出土し、18世紀末～19世紀初頭のものである。

iv)江戸堀川改修の時期

今回の調査で古い順に、第3層(17世紀後半)、第2b層(17世紀後半)、第2a層(17世紀後半～18世紀)、第1層(19世紀初頭)の4回の盛土を確認した。第1層は1955年に埋められる旧江戸堀川の北岸裏込めである。残念ながら江戸堀川が開削された1617年に該当しそうな遺構はSK301のみで、護岸施設などは検出できなかった。また1764(明和元)年に江戸堀川は改修を受けた[平凡社地方資料センター1986]といわれるが、それと限定できる盛土も不明である。大坂三郷は土地を嵩上げすることによって、水害に強い町造りを行ってきたが、第2a·2b·3層がいつの嵩上げに伴うものであるかを考えてみたい。

第2a・2b・3層はもちろん江戸堀川の浚渫による排土を用いた可能性はあるが、17世紀後半に当地に多量の客土をもたらす事業として、河村瑞賢による安治川掘削がある。瑞賢は1684(貞享元)年正月に大坂で工事に著手し、まず淀川(大川)が海に注ぐのに邪魔になる九条島に1条の新川を開くこととした。九条島に淀川の河水が当ることにより水勢が弱まり、上流での土砂堆積の要因になっていたからである。同年2月には九条島で工を起し、20日ばかりで新川の安治川を完成させた。また翌年12月、

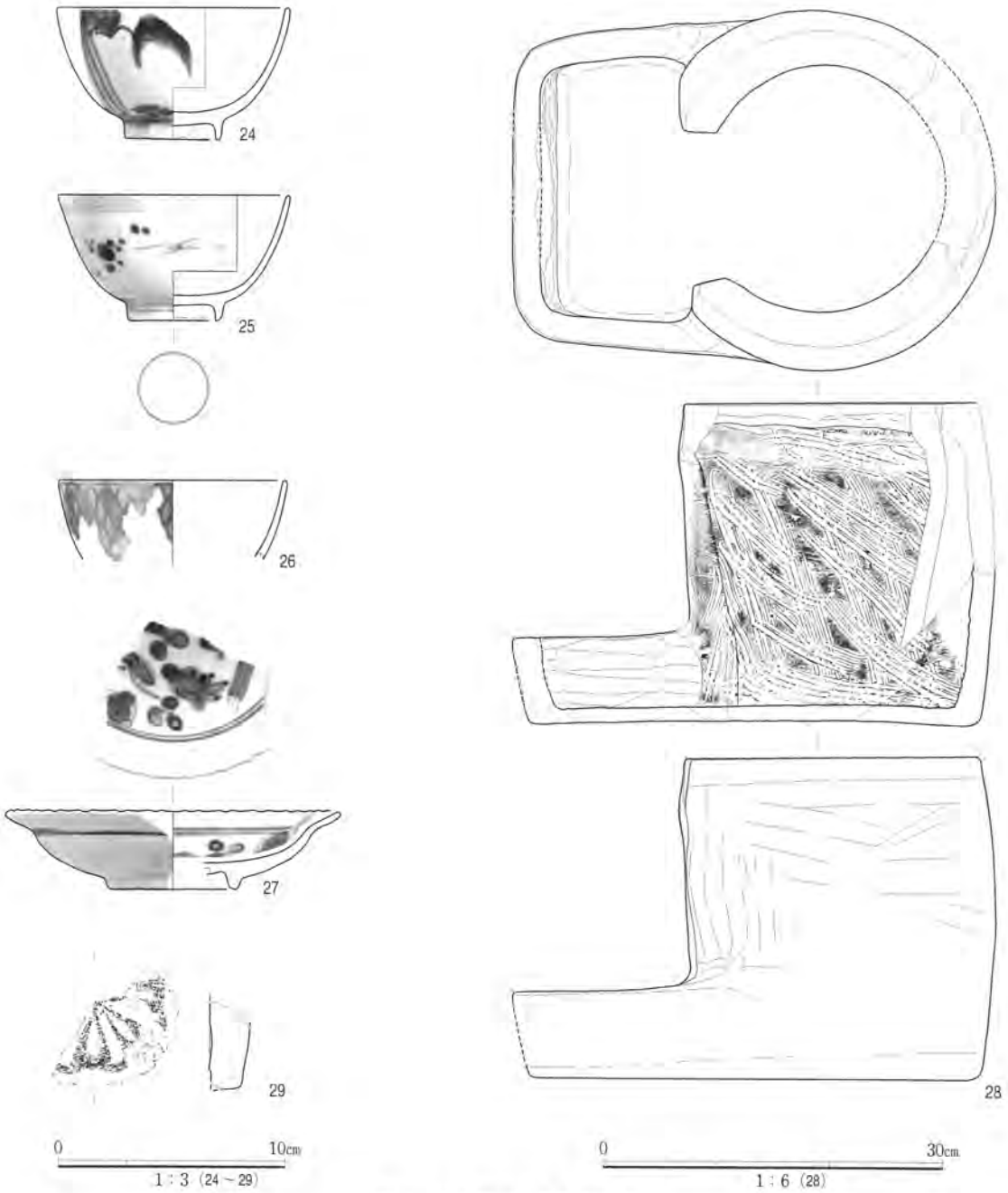


図11　第３層出土遺物実測図

堂島川の流れは土砂のため河床が丘陵の如くになっていたのを開鑿して、元通り水が流れるようにした[古田良一1964]。17世紀後半の複数回にわたる嵩上げは、大量の客土を必要とするから、第2a・2b・３層は土の獲得地として、瑞賢の事業も一つの可能性があろう。

３）まとめ

今回の調査で1955年に埋め立てられる江戸堀川の北岸や、1617年に開削された旧江戸堀川の護岸施設は検出されなかった。前者は第１層がその裏込めとなっているのは確実だが、一般に江戸堀川改修といわれている1764年とは異なる時期のものである。第１層施工の時、江戸堀川に排水する暗渠SD04が敷設された。今回の調査で全国の大名蔵屋敷が集まった江戸堀川周辺の土木工事の一端を垣

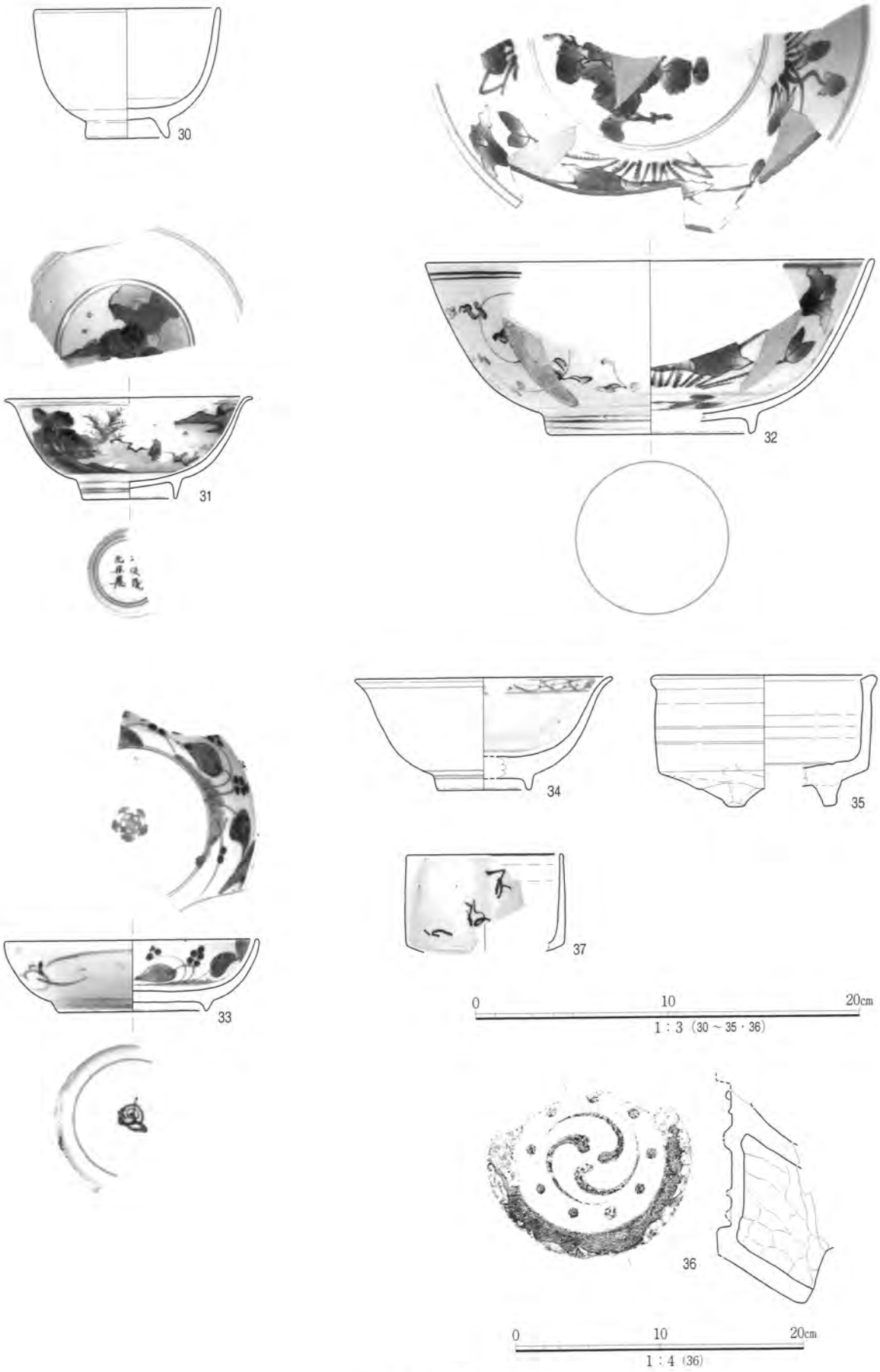


図12　各層出土遺物実測図
第2b層(30～36)、第1層(37)

間見ることができた。周辺の調査が進めば、近世大坂三郷の成り立ちがより深く判明するものと思う。

註1　香川県土庄町豊島に産出する火山礫凝灰岩。岡山県津山市教育委員会の行田裕美氏の鑑定を受けた。

引用・参考文献

大阪府文化財調査研究センター2002、『津田城遺跡－一般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

幸田成友1942、『江戸と大阪　増補版』、冨山房

古田良一1964、『河村瑞賢』、吉川弘文館、人物叢書。

平凡社地方資料センター1986、『大阪府の地名』(日本歴史地名体系第28巻)、平凡社、p.507

第2b・3層上面
（南東から）

SK203と遺物出土状況
（西から）

西壁地層断面

第1・2a・2b層上面
（南東から）

SD04 検出状況
（南西から）

SD04 陶管排出口の
豊島石の暗渠下部
（西から）

天王寺区烏ヶ辻一丁目における建設工事に伴う
堂ヶ芝廃寺発掘調査(DS11－１)報告書

調 査 個 所　大阪市天王寺区烏ヶ辻１丁目12－１ほか４筆
調 査 面 積　150㎡
調 査 期 間　平成23年８月１日～８月11日
調 査 主 体　財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、高橋 工

1）調査に至る経緯と経過

本調査地は大阪市天王寺区の東部にあり、大阪市域を南北に延びる上町台地の東縁辺部に当る（図1）。堂ヶ芝廃寺は、細工谷から南南西の四天王寺に向って入り込む真法院谷によって、上町台地から切り離されたように見える国分台地[大阪市文化財研究所2012]の北端部に位置し、百済王氏の百済寺跡に比定される遺跡である。古くから白鳳～平安期の瓦が出土し、方形柱座を彫り込んだ巨大な塔心礎があったと伝えられる[石田茂作1936・藤澤一夫1941]。10件の調査が行われてきたものの、直接に寺院に関係する遺構は発見されていない（表1）。しかし、現豊川閣観音寺周辺では古代瓦が濃厚に出土する傾向が追認されており、依然、この周辺が百済寺の有力候補地ではある。

当地においては、建築工事に先立って大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、現地表下0.5mで中世とみられる遺構面と遺物包含層が発見され、本調査が行われることとなった。調査区は150㎡のトレンチを敷地東側に設定し（図2）、近代の客土層である第1層までを重機を用いて除去した。それ以下の地層や遺構については人力によって検出・掘削して遺物の捕集に努め、適宜に写真撮影・実測を行って記録を作成した。また、基準点はmagellan社製Pro Mark 3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高は東京湾平均海面値（T.P.値）であり、本文・挿図中ではTP＋○mと略記した。

2）調査の結果

ⅰ）地形と層序（図3・4）

旧地形は近世以降に大きく改変されたとみられるが、地山層上面での標高を参考に復元すると、調

図1　調査地位置図（方眼は難波京の想定条坊ライン）

図2　調査区位置図

表1　堂ヶ芝廃寺における主要な発掘調査

遺跡名	次数	所在地	面積(㎡)	特記事項
難波宮跡	NW80-21	天王寺区堂ヶ芝	330	近世の石垣、古代の柱穴？
難波宮跡	NW82-14	天王寺区堂ヶ芝	30	堂ヶ芝廃寺関連遺構なし
堂ヶ芝廃寺	DS87-3	天王寺区堂ヶ芝1	78	多量の古瓦 寺院遺構みつからず
堂ヶ芝廃寺	DS88-1	天王寺区堂ヶ芝1	168	飛鳥～奈良・瓦器多量 但し伴う遺構なし
堂ヶ芝廃寺	DS89-1	天王寺区堂ヶ芝	290	堂ケ芝廃寺にかかわる瓦出土
堂ヶ芝廃寺	DS01-1	天王寺区堂ヶ芝2	250	細工谷遺跡との間を横切る深い谷の落ち際を確認
堂ヶ芝廃寺	DS04-1	天王寺区堂ケ芝1	40	重圏文軒平瓦、重弁、単弁、複弁の各蓮華文軒丸瓦
堂ヶ芝廃寺	DS07-1	天王寺区堂ケ芝2	39	GL-0.1mで地山。削平激しく遺構・遺物なし
堂ケ芝廃寺	DS09-1	天王寺区堂ケ芝1	150	近代の土採り穴多数　寺院関連遺構はみつからず　6世紀に遡る須恵器・奈良時代の瓦出土
堂ケ芝廃寺	DS09-3	天王寺区堂ヶ芝1	72	中世の溝・柱穴、近世の柱穴・土壙・溝　寺院関連遺構は認められなかったが、古代の瓦が出土
堂ケ芝廃寺	今回の調査	天王寺区烏ヶ辻1	150	GL-0.1mで地山。中世東西方向の溝

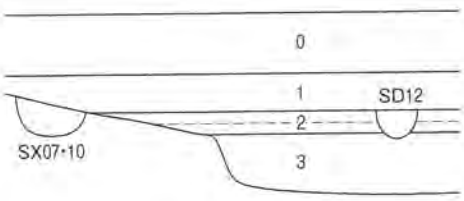


図3　地層と遺構の関係図

査区北西側がTP+10.1mほどで最も高く、南半部で南東側に向って急激に下がる。南東隅部ではTP+9.0m前後である。現地形でも調査地から南東方向に下がる谷が認識できるが、この谷の谷頭が本調査地にかかっているものとみられる。国分台地東縁部に刻まれた谷のひとつであろう。

砕石やコンクリート殻を含む層厚約50cmの現代表土の下位に以下の4層準を確認した。

第1層：地山偽礫混り黄褐色砂質シルトからなる近代の客土層で、南部の地山層が下がる部分に分布し、層厚は最大で40cmであった。近代の遺物のほかに円筒埴輪片が出土した。

第2層：近世後半の作土層で、南部の地山層が下がる部分に分布する。2層に分かれ、上部はにぶい黄色中粒～粗粒砂からなる作土層で層厚は10cmであった。上面で灌漑水路とみられる溝(SD12)が検出された。下部は暗灰黄色細粒砂からなり、層厚は7cmで、上部の作土層に対する床土である。上部の作土層から関西系陶器の破片が出土し、その形態からみて18世紀後半の地層である。

第3層：にぶい黄色地山偽礫や黄褐色粗粒砂などからなる客土層で、南部の地山層が下がる部分に分布する。層厚は南東方向に向って増し、最大で30cmを測り、上面はTP+9.3mで平坦である。第2層の耕地を造成するために谷を埋めた際の埋立て土と考えられる。遺物は出土しなかったが、この想定が正しければ18世紀後半に近い年代が与えられよう。

第4層：硬く締まった浅い黄色粗粒砂からなる地山層である。上下方向のサンドパイプが観察された。岩相から判断して上面は大きく削剥されているものとみられる。本層上面でSE01・SD11・SP08・SX07・SX10など、中世～近代の遺構が検出された。

ii)遺構と遺物(図4～6)

a．中世の遺構

SD11　北壁際で検出された東西方向の溝で、幅1m以上、深さ0.3mで、長さ7.5m分を検出したが調査区外に続く。方位はW10°Nである。埋土は泥質な堆積物が流入して埋まっていた。14～15世紀のものとみられる瓦質土器羽釜のほか、土師器・須恵器・瓦器の細片や古代の平瓦1、中世の平瓦2

図4　遺構平面図・地層断面図

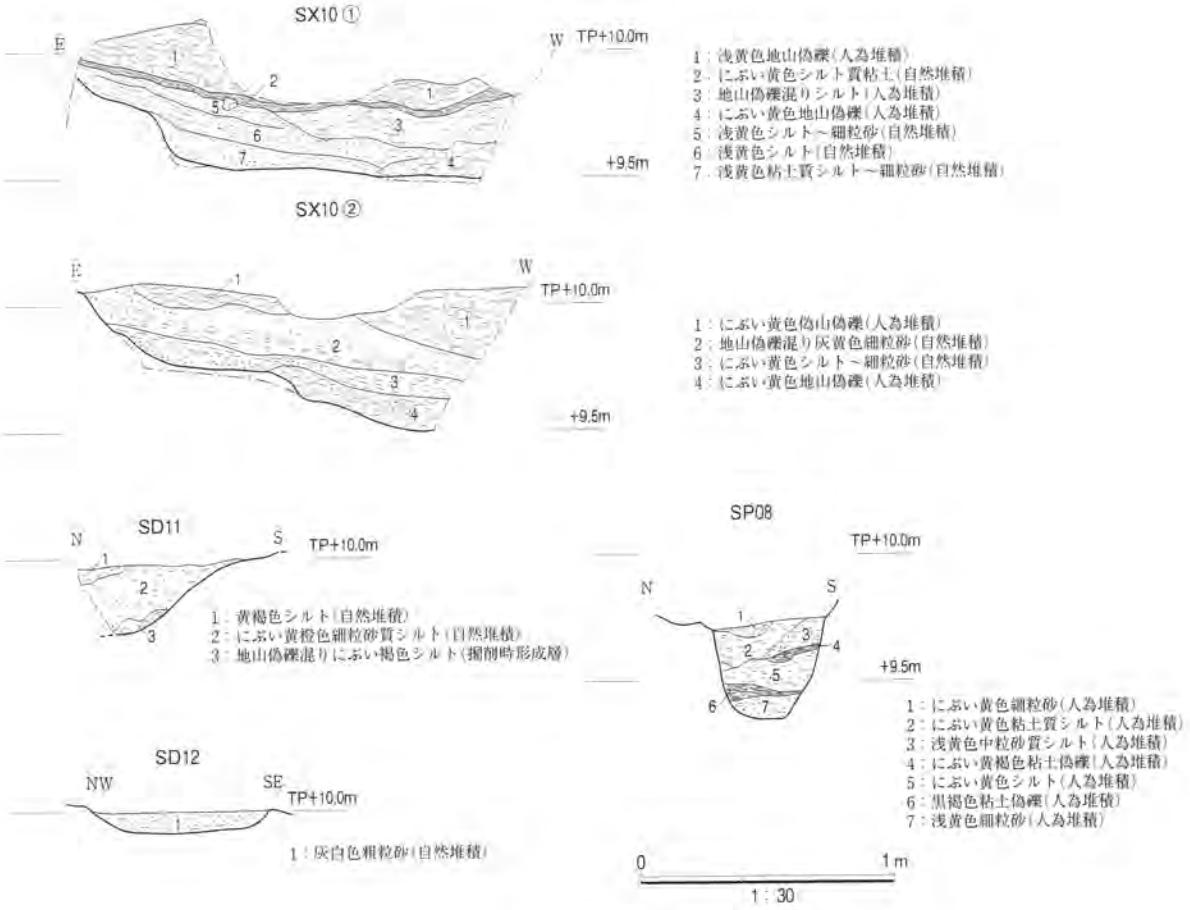


図5　遺構断面図

が出土した。

本遺構は、正東西からの振れがやや大きいものの、一辺約265mとされる難波京復元条坊の1/2にほぼ等しい位置にある(図1中の破線)。

SP08　東北部で検出されたピットで、SD11を切る。平面形は直径0.5mの円形で、深さは0.4mであった。砂やシルトで埋められており、その過程で炭や焼土が投入されていた(図中の4・6)。土器類は出土しなかったが、埋土の岩相から中世の遺構と考えた。

b．近世の遺構

SX07　中央部で検出された不整形な土壙状の遺構である。長軸方向で約4.0m、短軸方向で4.5m、深さ0.3mである。埋土は地山偽礫や黄灰色極細粒砂などで埋められていた。関西系陶器や肥前磁器白磁、土人形5(鳥居)などが出土し、19世紀の遺構である。古代の平瓦4も出土している。SX03・04・06も小型ではあるが、同様な埋土をもつことから同じ時期の遺構とみてよいであろう。

SX10　西部で検出された方形の土壙状の遺構で、東へ向って溝が取り付く。東西2m以上、南北7m以上、深さ0.6mを測る。埋土の上部は地山偽礫などを投入して人為的に埋められており(図中①の1・3、同②の1)、下部はシルト～砂が流入して堆積しており(図中①の5～7、②の2・3)、水の出入りがあったことが窺えた。溝は幅0.7mで、深さは本体部分より0.1mほど深くなっていた。本体部分に貯水し、東方へ水を流すための溜池状の施設と考えられる。ただし、堰に当るような施設

の跡はみられなかった。遺物は肥前磁器など細片などが出土し、18世紀以降の時期に属する。混入品ではあるが、古代の布目のある平瓦3も出土している。

SD12　第2層の作土層上面で検出され、幅0.7m、深さ0.1mで、地形の傾斜に平行する方向に延びる。埋土にはラミナが見られ、粗粒砂が流水によって自然堆積していた。第2層上面の耕地に灌水するための溝とみられ、SX10との年代差がないとすれば、SX10で蓄えられ、東へ落とされた用水を耕地へ拡げていく機能が考えられる。

c．近代の遺構

SE01　北側で検出された素掘りの井戸で、東西約2m、南北約3mで、深さは1.3mまで掘削したが基底は検出していない。砂や泥が流入し、壁面が崩落した際の偽礫が混入しながら堆積していた。ガラス瓶が出土し、明治期の遺構である。

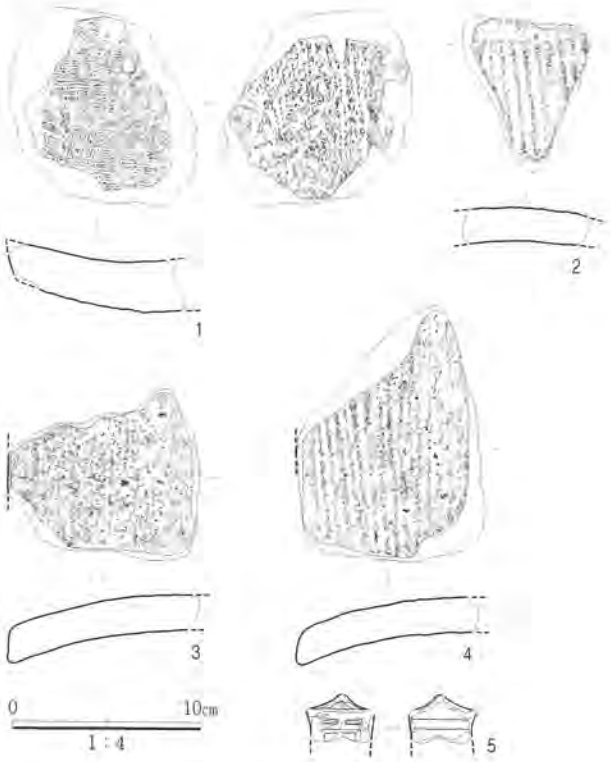


図6　出土遺物実測図
SD11(1・2)、SX10(3)、SX07(4・5)

3)まとめ

i)旧地形について

本調査地では南東方向へ続くとみられる谷の一部を検出した。現在では顕著でないが、明治年間の『大阪実測図』などでも、国分台地の東縁にいくつかの谷が存在することが読み取れ、今回検出した谷もそのうちのひとつであると考えられる。埋立てなど、谷に対する働きかけは古代～近世の土地開発と密接に係ることは想像に難くなく、今後も、このような谷の把握とその内容の調査は重要視していかなければならない。

ii)中世の溝

SD11は正東西からややずれるものの、その位置は、難波京の推定条坊で一坊の1/2の位置に近い。同様な位置で発見された遺構として、NS94－1次調査の古代に遡るかとされる東西溝がある[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996]。一方、SD11は中世後半に降り、年代的にも齟齬がある。しかし、近年では難波京条坊の名残とされ、明治の地図に見える方格地割が古代に遡らないとする説もある[高橋工2011]。この種の遺構は、今後、難波京を復元する作業を進める上で重要な役割を果たすと考えられ、検出件数の増加が期待される。

iii)江戸時代の農業に関する遺構

SX10は貯水施設、SD12は用水路とみられ、厳密に同時期か否かは不明であるが、第2層の耕地に

伴うものである可能性が高い。耕地は谷を埋めて造成され、造成から灌水まで農地経営システムの一端が明らかになったとしてよい。江戸時代の絵図で、調査地周辺は一貫して町屋として描写されることはなく、そうしたようすは『大阪実測図』の段階まで変化がない。今回検出した遺構から想定される農地としての土地利用が、近世から近代に至るまで連綿と続いたものとみてよいであろう。

引用文献

石田茂作1936、「堂ヶ芝廃寺」:『飛鳥時代寺院址の研究』財団法人聖徳太子奉賛会、pp.542－549

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996、「岩井邸建築に伴う発掘調査(NS94－10)」:『平成6年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.57－63

大阪文化財研究所2012、『難波京朱雀大路跡発掘調査報告』

高橋工2011、「四天王寺東方の埋没地形と難波京条坊」:『上本町遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.23－26

藤澤一夫1941、「摂河泉出土古瓦の研究―編年的様式分類の一試企―」:『仏教考古学論叢』第3輯、pp.237－307

第4層上面遺構完掘状況
（北から）

SX10など遺構完掘状況
（南西から）

SD11完掘状況
（南東から）

天王寺区勝山二丁目における建設工事に伴う
上本町遺跡発掘調査(UH11－４)報告書

調 査 個 所　大阪市天王寺区勝山２丁目162
調 査 面 積　21㎡
調 査 期 間　平成23年７月27日～７月29日
調 査 主 体　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、京嶋 覚

1)調査の経過

調査地は現在の四天王寺東門の東約200mの地点であり、東門から東に延びる推定条坊道路に面する位置にある。周辺ではST96－4次、US05－1次調査などが行われており、特にST96－4次調査では木製壺鐙や墨書土器が出土した奈良時代の井戸や古代の道路側溝の可能性のある南北溝、中世の礎石建物や石垣など古代・中世の多くの遺構・遺物が発見されている[大阪市文化財協会1999・2006]。

事前の試掘調査では現地表から0.9m下で、地山層と思われる黄白色中粒砂層が確認され、周辺の調査成果から古代・中世の遺構が存在する可能性が高いため、敷地南側に東西３m、南北７mの調査区を設定し、発掘調査を行うことになった。

７月27日に重機による表土掘削を行い、現地表から約１m下で地山層と思われる地層を確認し、そこで検出された遺構の人力掘削を開始した。28日に遺構掘削および記録作業を行い完了した。29日に埋戻し作業および重機・機材の撤収作業を行って現場作業を完了した。

以下にその結果を報告する。なお、図中の方位は座標北を基準にし、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、図中ではTPと省略した。

2)調査の結果

i)層序(図３・４)

第１層：コンクリートガラや戦災による焼土層などが含まれる近現代の整地層ないし攪乱壙の埋土である。厚さは40～60㎝である。

図１　調査地位置図

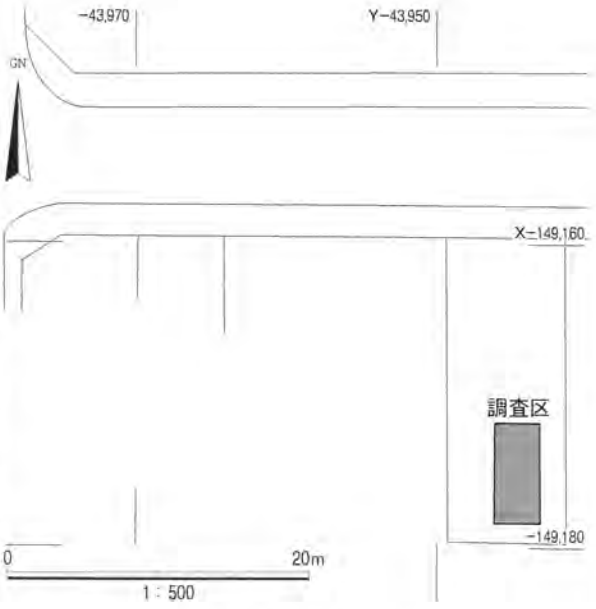


図２　調査区位置図

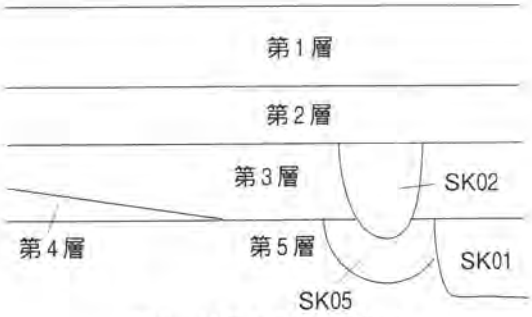


図3　地層と遺構の関係図

第2層：黄灰色(2.5Y4/1)シルト質細粒～中粒砂層の作土層で、層厚は25cmである。

第3層：暗灰黄色または黄褐色(2.5Y5/2.5)細粒～中粒砂質シルト層の作土層で、層厚は30～40cmである。

第4層：暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒～中粒砂層で、北端部のみで検出された。層厚は5～10cmで、SK01埋土の上部に類似する。

第5層：にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト質細粒～中粒砂層の地山層である。SK01・05などの遺構が上面で検出されたが、調査区の大半は幕末頃の作土である第3層直下で本層が検出されるため、本来の掘込み面は第5層上面と第4層上面があるものと思われる。

ii)遺構と遺物(図5・6)

調査区南部の東壁際の第5層上面でSK05を検出した。直径約3mと推定され、その約1/2を調査区内で検出した。深さは0.8mで、底は平らである。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルトで細礫を含む。最下部は粗粒砂が多く、特に南半に瓦を中心にして遺物が多い。

遺物には土師器小皿1・付庇系の移動式竈4、須恵器鉢5、黒色土器A類椀2・3のほか、単弁八葉に復元できる軒丸瓦6、凹面に布目、凸面に縄目叩きが残る大型の平瓦7をはじめとする丸・平瓦片が多く出土した。黒色土器椀3の底部外面の高台内に「中」の一部と推定される墨書文字が見られる。

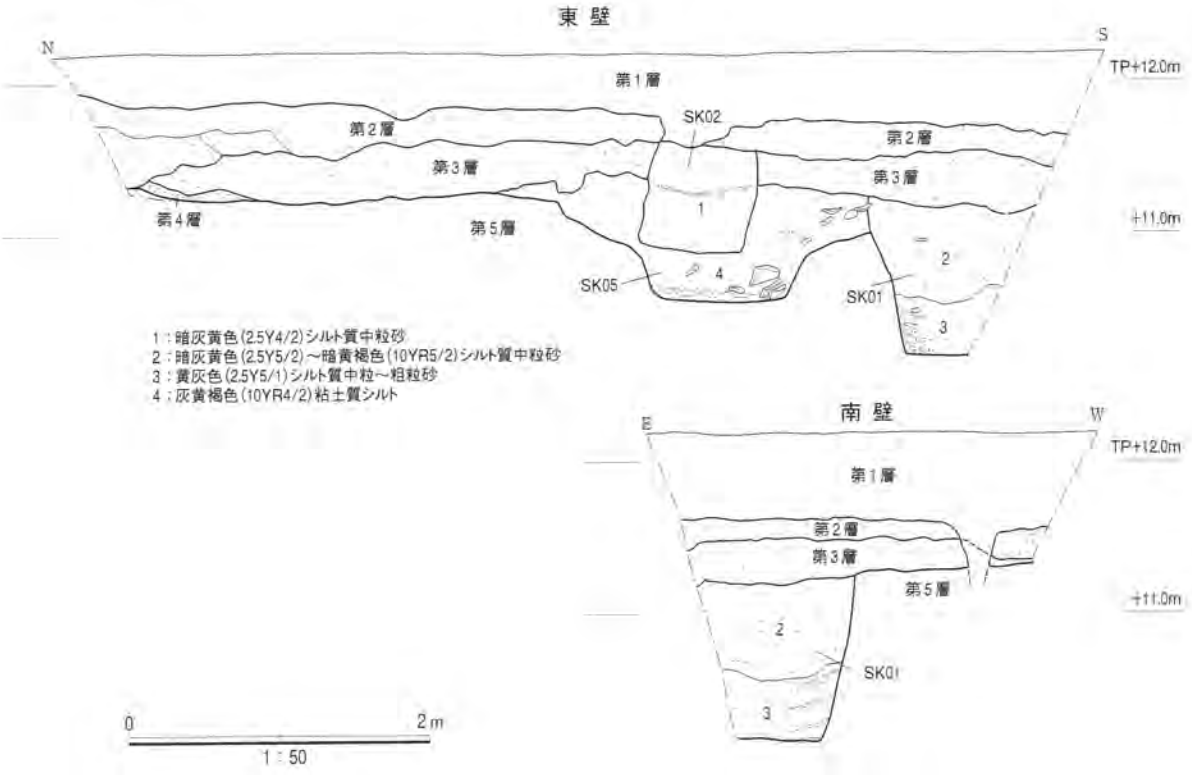


図4　断面実測図

黒色土器椀はいずれも高台径が大きく、「て」の字口縁の土師器小皿があることから平安時代Ⅲ期[佐藤隆1992]に相当する。11世紀代の土壙であろう。

SK01は調査区東南隅の第5層上位の第3層基底面からSK05を壊して掘られた土壙である。南北1.2m以上、東西1.7m以上で、深さは1.1mである。垂直に近く掘られており、底面は平らである。西端の底から0.4mの高さに踏み台状の削り込みがある。形状からみて穴蔵の可能性がある。

埋土は上部が暗灰黄色(2.5Y5/2)または暗黄褐色(10YR5/2)シルト質中粒砂、下部は黄灰色(2.5Y5/1)シルト質中粒～粗粒砂である。肥前染付磁器碗、堺擂鉢、丹波焼甕、土師器擂鉢・小皿、軟質施釉小皿、唐草文軒平瓦など18世紀後半以降の遺物を含む。

SK02は第3層上面からSK05を壊して掘られた土壙である。南北0.9m、東西0.3m以上の方形の土壙で、深さは0.7mである。埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂である。肥前染付磁器、関西系陶器のほか幕末から近代にかけての遺物が少量出土した。

これ以外にも小土壙が検出されたがいずれも出土遺物が少なく、時期は不明である。

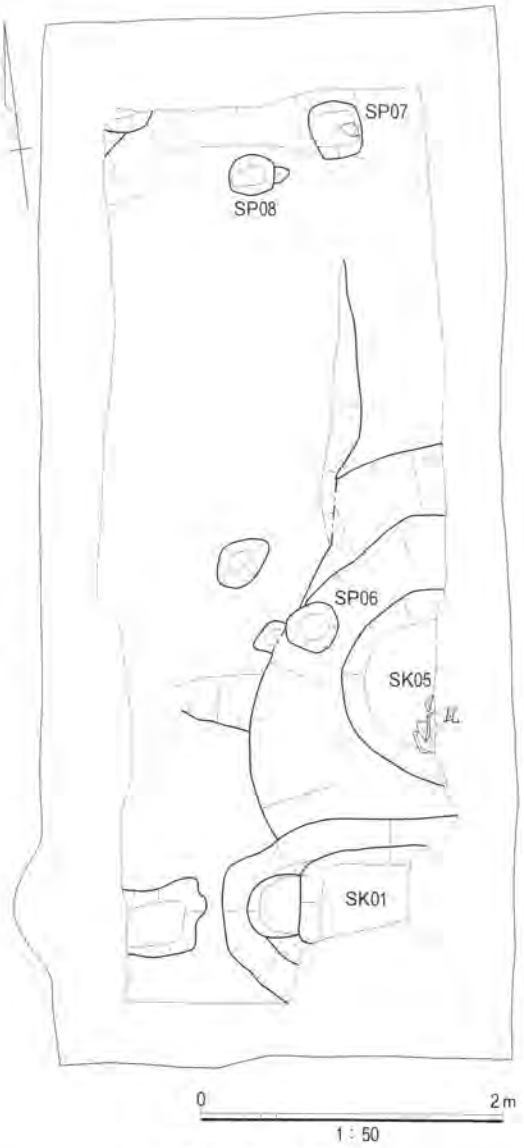


図5　平面実測図

3)まとめ

今回の調査地は、四天王寺東門から東に延びる条坊道路に面した地点にあたり、難波京関連の遺構・遺物の発見が期待される地点であった。SK05は検出した遺構のうちで最も古い平安時代後期の土壙であり、単弁の軒丸瓦や須恵器・竈など古代の遺物も含まれていた。調査地は古代から中世にかけては四天王寺の寺域内であった可能性があり、SK05も関連する遺構とみることができる。

しかし、調査地の地山層は、西北部で確認された高さからみて30cm以上削平されていると推定され、古代～中世の表土層も存在していなかった。したがって、本来存在した可能性が高い柱穴や溝などの建物に関連する古代の遺構は、今回の調査範囲内では削平されていたと思われる。

この周辺の調査事例はまだ多いとは言えず、重要な発見が期待される地域であるため、さらに徹底した調査が必要であろう。

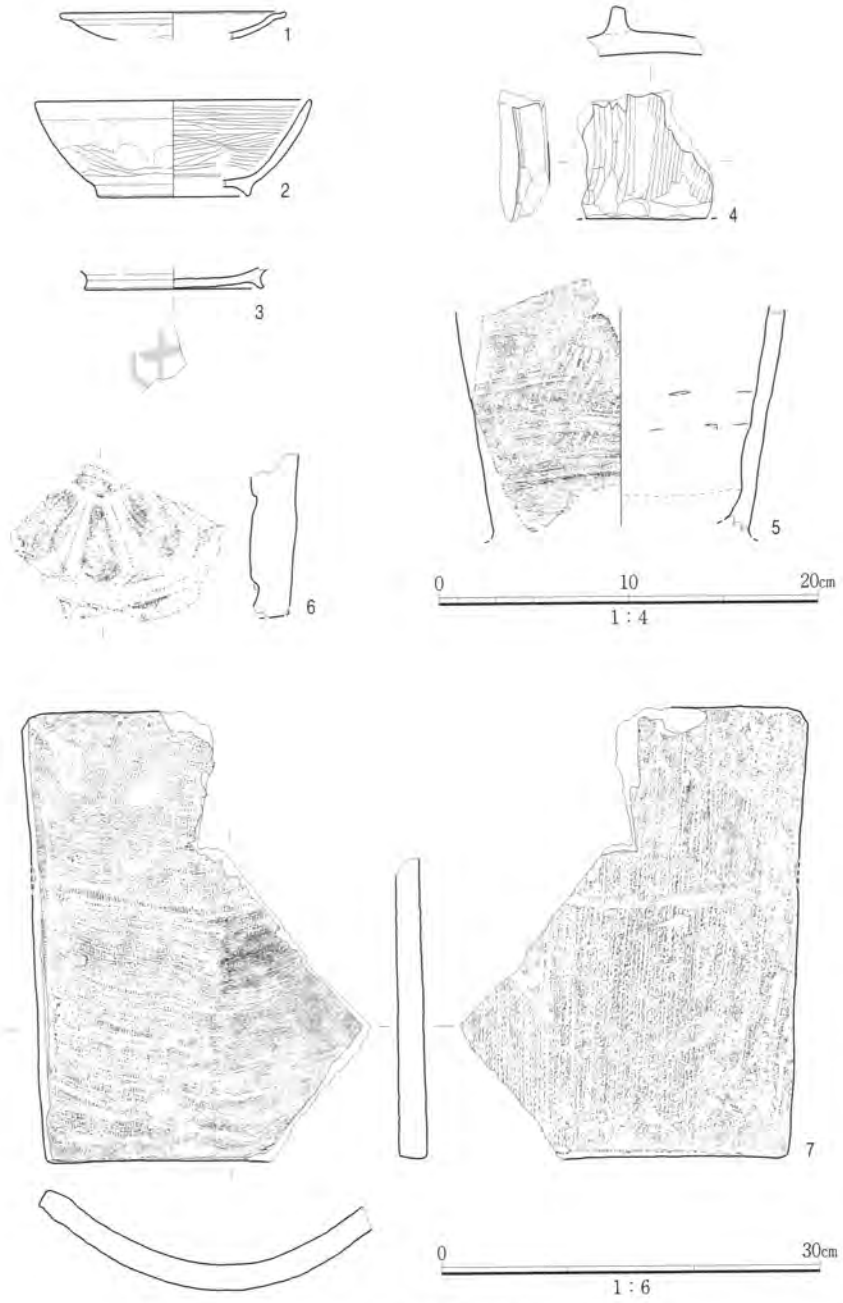


図6　SK05出土遺物実測図

引用文献

大阪市文化財協会1999、「ST96－4次調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1996年度－』

2006、「上本町南遺跡発掘調査(US05－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財発掘調査報告書(2005)』

佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」:『長原遺跡発掘調査報告Ⅴ』、pp.102－114

第５層上面検出状況
（北から）

完掘後全景
（北から）

SK05（西から）

天王寺区上本町六丁目における建設工事に伴う
上本町遺跡発掘調査(UH11－15)報告書

調査個所	大阪市天王寺区上本町６丁目304－３の一部ほか４筆
調査面積	36㎡
調査期間	平成23年11月21日～11月25日
調査主体	財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、清水 和明

1）調査の経緯と経過

上本町遺跡は北側の難波宮跡・大坂城跡と南側の四天王寺旧境内遺跡に挟まれ、上町台地の中央付近の広い範囲を占めている。近年の発掘調査からは特に古代難波京の開発に関する成果があり[大阪文化財研究所2010a]、あらためて本遺跡の重要性が注目されている。調査地は上本町遺跡の中央付近に当るが、上町台地脊梁部からはやや東側へ降り、一帯は東へ向かってごく緩やかに傾斜している。

既往の周辺調査では、調査地の南側50mのUH08－11次調査地で江戸時代末期の土採り穴や廃棄土壙が[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010a]、西側150m付近のUH10－３次調査地で18世紀代の土採り穴や19世紀代の町屋跡を検出している[大阪文化財研究所2010b]ほか、東側150m付近のUH08－４次調査地では18世紀後半の土採り穴や19世紀前～中葉に降る導水･貯水施設などが見つかっている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010b]。これらの調査では、古代に遡る遺構は確認されていないものの、少量ながら古代～中世の遺物が出土している。そのため、かつては付近に当該時期の遺構が存在していたが、近世の土採りや町屋などの開発によって遺構と包含層は削平されたと推測される。

本調査地では、2011年９月６日に大阪市教育委員会の試掘調査が行われ、調査地の東部で近世の遺構が検出されたことから本調査を行うこととなった。

調査は11月21日に開始した。現地表から深さ1.3m付近の地山層まで掘削する予定で、敷地内で残土置き場を確保しつつ東西５m、南北7.2mの調査区を設定した。近現代の攪乱および整地層（後述の第１層）を重機によって掘削したのち、第２層以下で人力により遺構・遺物を検出した。遺構の写真撮影・実測図作成を適宜行って11月25日に調査区を埋め戻し、現地における全ての作業を完了した。

図１　調査地位置図

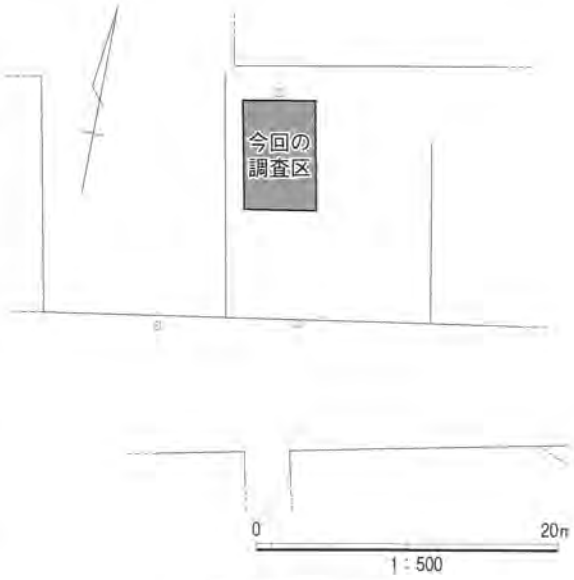


図２　調査区位置図

以下にその結果を報告する。なお、図中の方位は図１のみ調査地で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づく。ほか図２・３の方位は磁北を基準にした。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、図中ではTP+○mと省略した。

２)調査の結果

調査地の現地表はTP+18.5m付近で、敷地内はほぼ平坦である。調査区の南壁を基にして層序を記述する。

ⅰ)層序(図３・４)

第１層：近現代の整地層および攪乱内の地層である。層厚は70～80cm程度である。

第２層：黄褐色(2.5Y5/3) ～灰色(5Y4/1)中粒砂層で細礫を含んでいる。層厚は約20cmで、19世紀中頃以降の遺物を含み、近代の作土とみられる。

第３層：にぶい黄色(2.5Y6/4)粗粒～極粗粒砂層で、地山である第４層の偽礫を多く含んでいる。層厚は約20cmで、調査区の全面に拡がる。19世紀初頭以前の遺物を含む近世末頃の規模の大きな土採り遺構の埋土と考えられる。

第４層：灰白色(2.5Y8/2)細粒砂層で、段丘構成層に相当する地山層である。

ⅱ)遺構と遺物(図３～５、図版上～下)

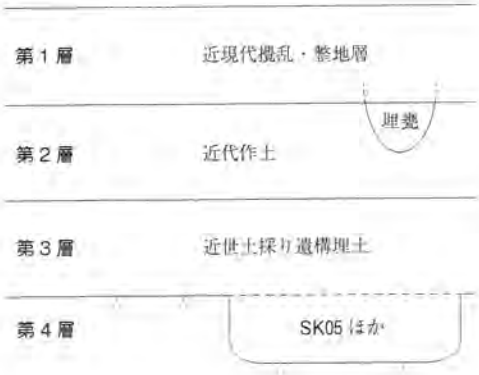
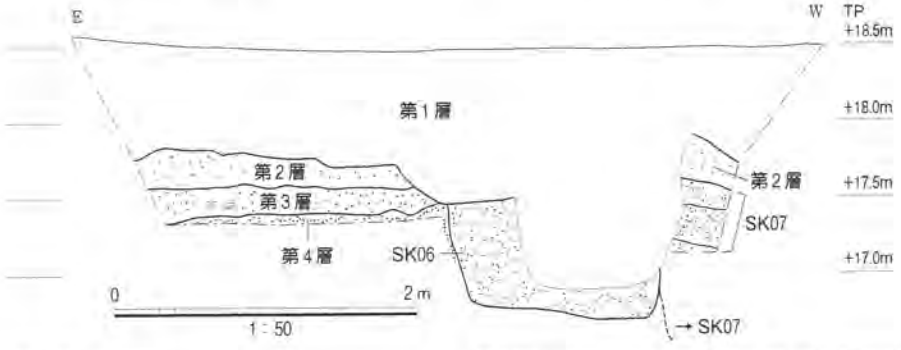


図３　地層と遺構の関係図

近世後半～末頃の遺構

第４層上面で検出した遺構群で、18世紀代から19世紀初頭ごろまでの遺物を含む(図４・５、図版上・中)。

各遺構の埋土は第３層とよく似ており、第４層の偽礫を多量に含む埋戻し土である。これらも土採り穴であり、時期も大きな違いがないため、一連の土採り作業の中で部分的に深くなった箇所と考えられる。以下、おもなものを記述



第１層：近現代の整地層および攪乱
第２層：含細礫、黄褐色(2.5Y5/3)～灰色(5Y4/1)中粒砂層
第３層：含第4層偽礫、にぶい黄色(2.5Y6/4)粗粒～極粗粒砂層
第４層：灰白色(2.5Y8/2)細粒砂層(段丘構成層)
SK06：含第４層偽礫、浅黄色(2.5Y7/3)細粒～中粒砂
SK07：含第４層偽礫、淡黄色(5Y8/3)細粒砂

図４　南壁地層断面図

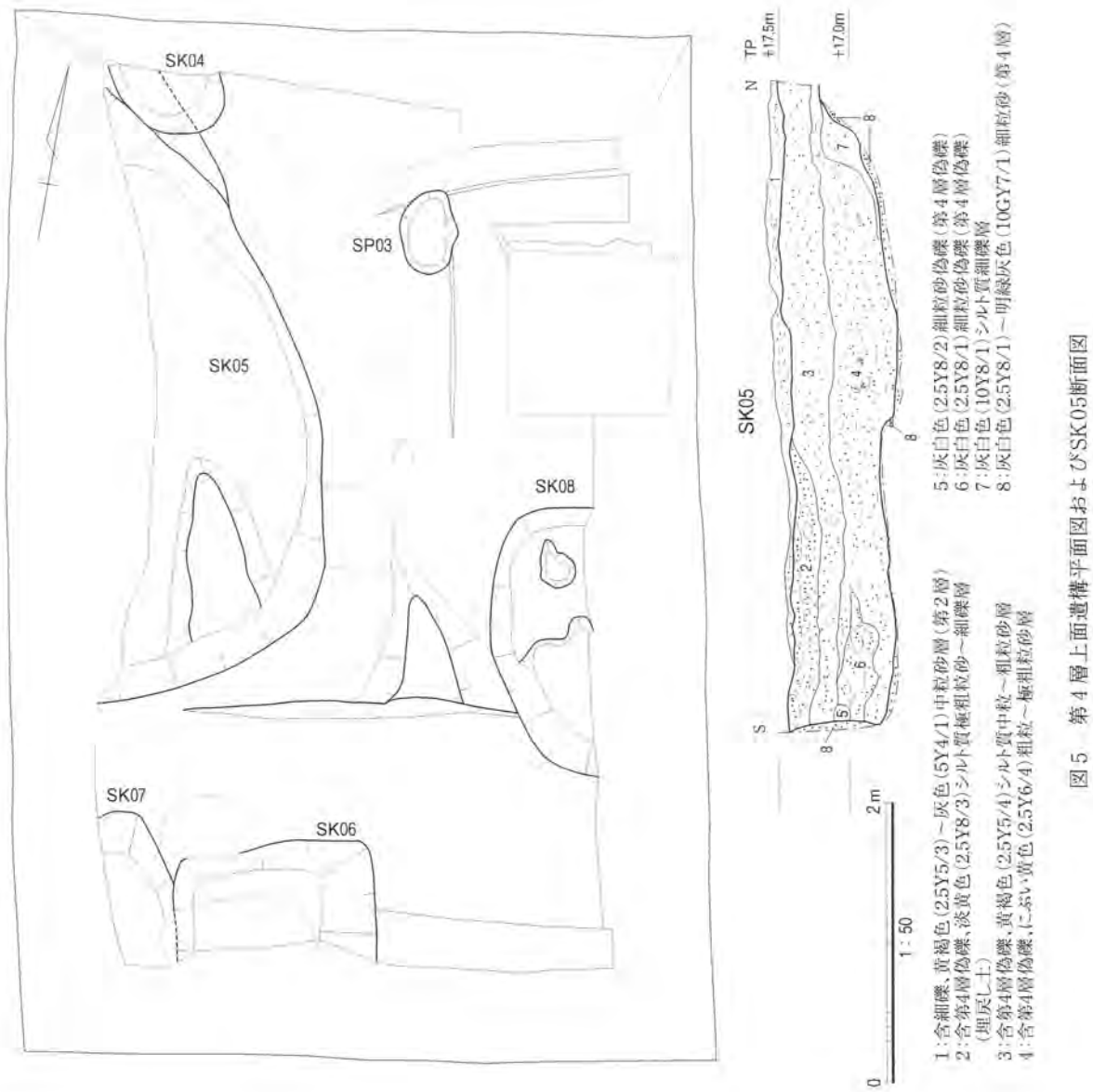


図5　第4層上面遺構平面図およびSK05断面図

する。

SK05は確認した長さ4.6m、深さ0.8mで、調査区西壁外に続いているため全体の規模は不明である。埋土は上部が黄褐色(2.5Y5/4)シルト質中粒～粗粒砂、下部がにぶい黄色(2.5Y6/4)粗粒～極粗粒砂を主体とし、第4層の偽礫を多量に含んでいる。古代の土師器・須恵器のほか、18世紀代とみられる肥前磁器染付碗・皿が出土しているが、いずれも細片で図化し得ないものである。

SK06は確認した長さ1.4m、深さ0.9mでの土壙で、調査区南壁外へ拡がっている。埋土は浅黄色(2.5Y7/3)細粒～中粒砂に第4層の偽礫が充満している。出土遺物はない。

SK07は調査区の西南隅で検出され、正確な規模は不明である。淡黄色(5Y8/3)細粒砂を主体とし、第4層の偽礫を多量に含んでいる。出土遺物はない。

SK08は長さ1.9m深さ0.15mの土壙で、調査区東壁外へ続いている。灯明皿に使用された軟質施釉陶器の細片が出土しているが図化し得ない。

以上の遺構の外であるが、SK05とSK08の間では第３層基底で南北方向に延びる稜をなす短い高まりや、その南側は最大約0.1m低い段をなしていることなどから、第３層自体が大きな土採り遺構の埋土であり、これらの高まりや段は土採り作業の単位に当るものと考えられる。

近代の遺構

第２層の上面で明治時代後半以降の埋甕を４基以上認めた(図版下)。本来の掘込み面は第１層内にある。丹波焼の可能性のある甕などを用いた便所であり、当地が住宅地と化して以降に埋設されたものである。

３)まとめ

今回の調査では近世末頃の土採り穴を検出した。古代～中世に遡る遺構は確認されなかったが、古代の土師器・須恵器の破片が出土していることは、周辺に同時期の遺構がかつて存在していたことを示すものと思われる。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010a、「上本町遺跡発掘調査(UH08－11)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.379－387

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010b、「上本町遺跡発掘調査(UH08－4)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.343－356

大阪文化財研究所2010a、『上本町遺跡発掘調査報告』Ⅰ

大阪文化財研究所2010b、『天王寺区上汐三丁目における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH10－3)報告書』

完掘状況全景（南から）

第４層上面遺構検出状況
（南から）

第２層上面遺構検出状況
（南から）

浪速区敷津東二丁目における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(SX11－１)報告書

調 査 個 所　大阪市浪速区敷津東２丁目８－１
調 査 面 積　240㎡
調 査 期 間　平成23年７月21日～８月１日
調 査 主 体　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、大庭重信

1)調査に至る経緯と経過

敷津遺跡は大阪湾沿いに発達した砂堆上にあり、海上交通や商業活動の拠点として栄えてきた歴史を有する。中世には「蛤売」をはじめとして広く商業活動に従事した今宮商人の本拠地があり、また近世には1809(文化6)年に難波一帯の市立ちを幕府から許され、天下の台所の一角を担ってきた。調査地西隣の大阪木津卸売市場敷地内では、2006～2009年度に3件の調査が行われ、中世の畠跡や魚貝類などの自然遺物が検出され[大阪市文化財協会2010など]、さらに西側のSX08－1次調査では、古代の遺構が確認されている[大阪市文化財協会2009]。

当該地で大阪市教育委員会が試掘調査を行った結果、現地表下1.0～1.6m以下の深さで中世の遺物を包含する地層が確認されたことから、発掘調査を実施することとなった。調査範囲は、敷地内北西側のA区(東西30m、南北4m)、同南東側のB区(南北24m、東西5m)の2箇所であり、事業者側が現地表下1.0～1.6mまでの地層を機械掘削したのち、7月21日から調査に着手した。以下、人力掘削により遺構・遺物の検出と必要な記録作業を行い、8月1日に現地におけるすべての作業を完了した。

なお、本報告で用いる水準地はT.P値(東京湾平均海面値)で、本文・添図ではTP+○mと記す。方位は図1・2が世界測地系の座標北を、図4・5は磁北を基準にしている。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

現地表面(TP+2.7～3.1m)以下を第0～3層に区分した。第1・2層はB区南半で遺存しており、B区北半およびA区では大半が削平されていた。

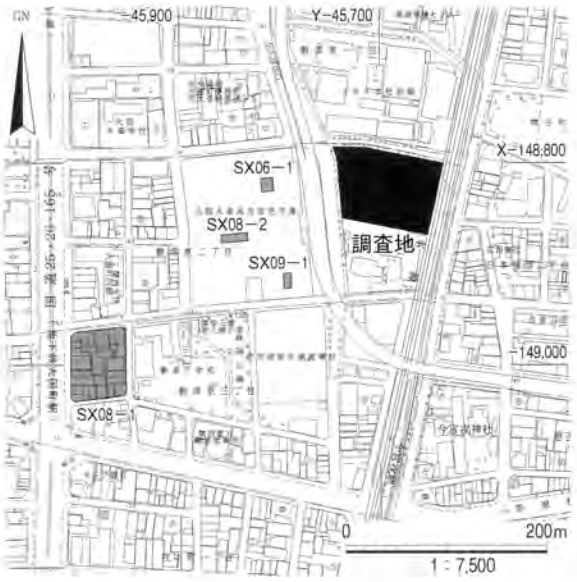


図1　調査地位置図

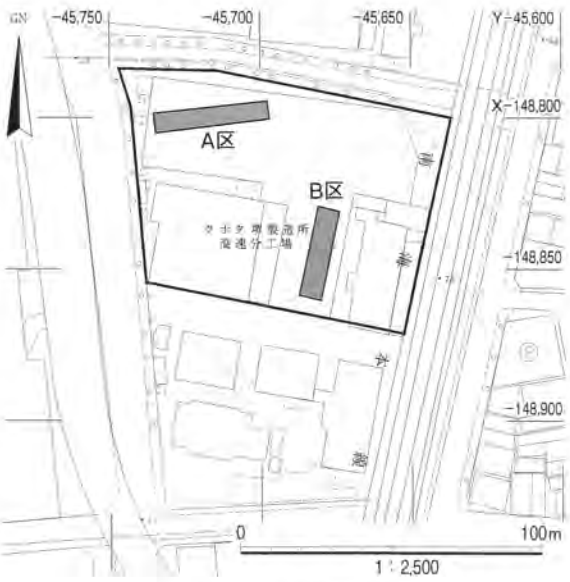


図2　調査区位置図

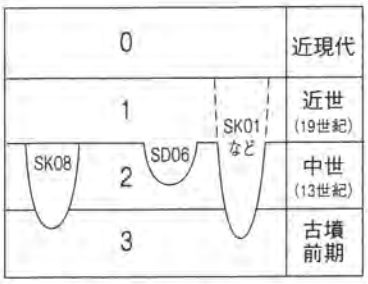


図3　地層と遺構の関係

第0層：近・現代の整地層および攪乱埋土である。

第1層：黒褐色礫混りシルト質中粒砂からなる作土層で、層厚は20cmあった。19世紀前半代の土器・陶磁器を含む。B区の本層下面では耕作に伴う溝や鋤痕を検出し、A区でもほぼ同時期の遺構を確認した。

第2層：黄褐色細粒～粗粒砂からなり、下位層の上部が擾乱を受けた部分である。層厚は15cmあり、土師器・瓦器の小片が出土した。本層上面で中世の土壙を確認した。

第3層：にぶい黄橙色細粒砂～礫からなる難波砂碓を構成する水成層である。層厚はA・B区とも1.3m以上あり、TP+0.2mまで確認した。B区のTP+1.0m付近で磨滅した布留式土器高杯が出土した。

ii)遺構と遺物

A区(図4)

SK01～03、SX04、SE05を検出した。SK03を第1層下面で確認した以外は、遺構の上半が近・現代に大きく削平され、第3層上面で検出したものである。

SK01　A区東端で検出した大型の土壙で、南半は調査区外に及ぶ。深さ1.5m以上あり、下半に東西2.2mの方形木枠を設置していた。木枠を含む下半を暗灰黄色礫混りシルト質細粒砂層で埋めており、上半の凹みに近代の陶磁器類とともに大量の貝が投棄されていた。埋土下半からは19世紀半ばの瀬戸美濃焼磁器を含む肥前陶器・関西系陶器などが出土し、この頃に遺構が廃絶した可能性がある。また、埋土上半から出土した陶磁器類は、型紙摺りの瀬戸美濃焼磁器を多く含み、銅版転写のものが含まれないことから、明治後半の1900年頃までの時期と考えられる。

上半の凹みから出土した貝類は、その量から日常生活で生じた食糧残渣物とは考え難く、市場での加工・製造などの過程で廃棄された可能性が高い。一部をサンプルとして採取した結果(カウント数3,106個体)、オオタニシ(72.4%)、マシジミを主体とするシジミ類(8.1%)、オトコタテボシほかのイシガイ科(2.5%)など淡水性種が主体を占めていた(註)。このほか、ヤコウガイが1点出土しており、これは貝ボタンの原貝として沖縄や南貝から持ち込まれたものと考えられる。また、貝製品として、バイの殻口部の直上を水平に切断し、切断面を研磨したバイゴマが大量に出土した(サンプル中56点)。

写真1　SK01出土バイゴマ

これだけの量のバイゴマがまとまって確認された例はなく[池田研2011]、バイゴマの製造所あるいはこれを使用する遊興施設が付近にあったものと考えられる。うち4点には、詰物が残されており、中を粘土などの非金属の材質を用い、最上部を蠟で仕上げているようである(写真1)。

SK01の埋土上半からは、ほかにも市場での活動を窺わせる動物遺体や魚骨・骨製品・粘板岩の板石などが多数出土している。粘板岩の板石は小

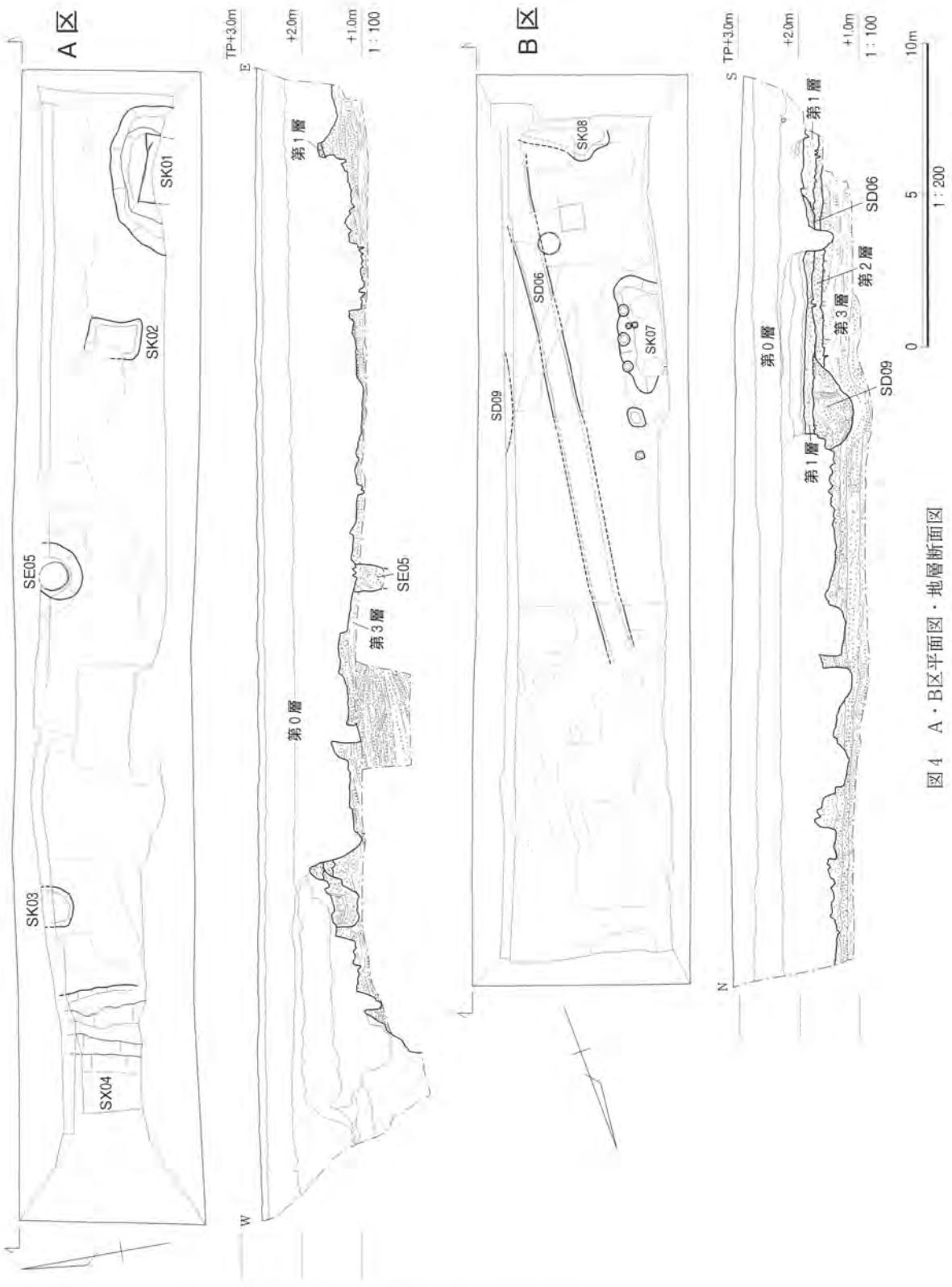


図4　A・B区平面図・地層断面図

刀用の砥石と考えられ、海産物などの解体に用いられたものであろう。

SK02　A区東部で検出した南北1.7m×東西1.2mの方形土壙で、深さは0.2m遺存していたのみである。遺物は出土しなかったが、近世の遺構の可能性がある。

SK03　A区西部で検出した東西1.3mの土壙で、内部を漆喰で固めていた。19世紀代の肥前陶器・

肥前磁器・丹波焼が出土した。

SX04　A区西端で検出した大規模な落込みで、TP－0.1mまで掘下げたが底は確認できなかった。近代の遺物を含む地層で埋められており、遺構の形成は近世に遡る可能性もある。

SE05　A区中央で検出した直径1.8mの井戸で、井戸瓦を用いていた。19世紀代とみられる軟質施釉陶器皿の破片が出土した。

B区(図４)

第１層下面でSD06・SK07、第２層上面でSK08・SD09を検出した。

SD06　B区東半で検出した正方位を向く南北溝で、幅0.9m、深さ0.1mある。埋土は第１層と共通する暗オリーブ褐色粗粒砂～礫混りシルト質中粒砂層で、炭粒を含む。溝の東西両側の第１層下面では、これと並行する鋤痕がみられた。耕作に関わる溝であろう。19世紀半ばの瀬戸美濃焼磁器や関西系陶器の小片が出土した。

SK07　B区西部で検出した土壙で、深さ0.1mと浅い。東辺に沿って南北方向の柱列が確認されたことから、これに伴うものの可能性がある。19世紀代の肥前磁器・肥前陶器が出土した。

SK08　B区南端で検出した大型の土壙で、大半は調査区外に及んでおり、深さは0.5mまで確認した。埋土の上半に貝の集積が見られた。貝はハマグリ12点、シオフキ15点のほか、カガミガイの破片がある(註)。このほか、ウシの上腕骨、土師器・瓦器・瓦の小片が出土した。土器類は図化できるものがないが、瓦器の破片の特徴から、13世紀代のものと考えられる。

SD09　B区中央東壁で確認した深さ0.6mの遺構で、調査区内には及んでおらず、また水成の砂礫層で埋まっていることから、南北方向の溝の一部であった可能性がある。遺物は出土しなかった。

３)まとめ

今回の調査では、13世紀代とみられる土壙、19世紀代の井戸・土壙や耕作に係わる溝などを検出した。前者は過去の調査でも指摘されている中世今宮商人の活動を示すものであろう。また、付近は19世紀になって本格的に開発が進行したと考えられ、近代ではあるが魚貝類を主体とした流通活動の一端を示す情報を得ることができた。また、これらの遺構のベースとなる砂層からは古墳時代前期の土器が出土しており、古墳時代以降には付近が陸化していたと考えられる。

註)

本調査で出土した貝類の同定は、大阪歴史博物館学芸員池田研によるものである。

引用・参考文献

池田研2011、「大坂城下町とその周辺から出土したバイゴマ(独楽)について」：大阪歴史博物館編『大阪歴史博物館研究紀要』第９号、pp.１－17

大阪市文化財協会2009、『株式会社明来による建設工事に伴う敷津遺跡発掘調査(SX08－１)報告書』

大阪市文化財協会2010、『大阪木津市場株式会社による建設工事に伴う敷津遺跡発掘調査(SX09－１)報告書』

A区全景
（東から）

B区全景
（南から）

A区SK01
（北東から）

西淀川区姫里三丁目における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(HI11－１)報告書

調 査 個 所　大阪市西淀川区姫里３丁目
調 査 面 積　210㎡
調 査 期 間　平成23年５月16日～６月３日
調 査 主 体　財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、松本百合子

1)調査に至る経緯と経過

調査地は淀川河口部付近のデルタ地帯に立地し、かつての中津川と大野川に挟まれた場所に当たる(図1)。古代には「難波八十島」と呼ばれるほど多くの島や洲が形成された砂堆地帯で、今も御幣島・竹島・姫島(旧稗嶋)・歌島など、島を示す地名が多く残されている。調査地の周辺には北側に御幣島遺跡、西側に大和田城跡伝承地や大和田街道、姫嶋神社など、古代から中・近世に至る様々な時代の遺跡が知られている。

今回の調査地は、大阪市教育委員会が平成23年3月4日に試掘調査を行い、現地表下1.25mで中世・近世の遺物包含層を検出した。そこで、地層の年代や遺構・遺物の分布状況を明らかにし、この地域の歴史的変遷を復元する基礎資料を得ることを目的に本調査を実施した。

調査区は敷地南部に長さ30m、幅7m、210㎡の範囲で設定した(図2)。事業者側による既存建物の基礎撤去の後、5月16日から重機掘削を開始した。まず、重機によって地表下0.9mまでの現代の攪乱および整地層を除去し、近代の作土層以下を人力により平面的に掘り下げ、地表下1.5mまでの遺構・遺物の検出に努めた。また、以深の自然堆積層については湧水が著しいため全面の掘下げを断念し、層中に明瞭な遺構が存在しないことを確認したのち、2箇所で深掘りを行った。地表下2.6mまでの地層を確認し、現地における調査および記録は6月3日に終了した。

なお、調査および本報告で使用した水準値は東京湾平均海面値であり、本文・挿図中ではTP－○mと表記する。方位は座標北を基準としている。

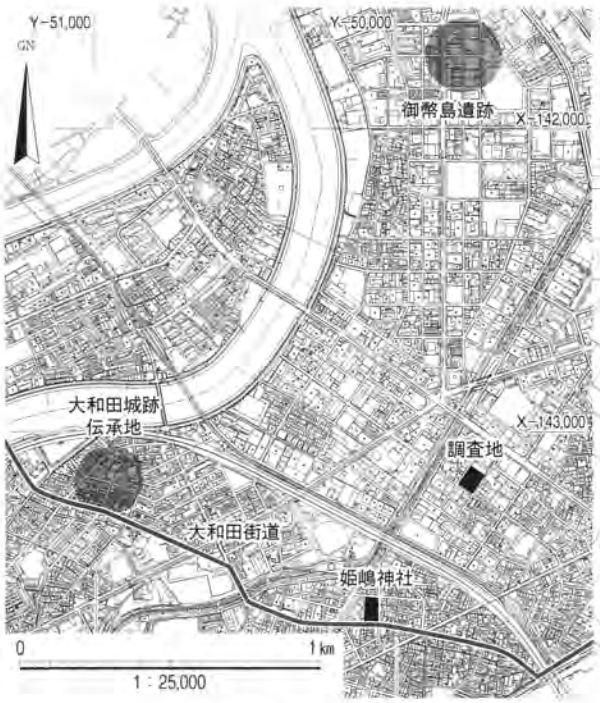


図1　調査地位置図

図2　調査区配置図

2）調査の結果

ｉ）層序（図3・4、図版）

調査地の現地表の標高はTP－1.3m付近にある。調査ではTP－4.1mまでの地層を確認し、第１～７層に細分した。以下、その概略を示す（図３）。

第１層：現代の攪乱および盛土層である。層厚は90～120cmである。

第２層：にぶい黄色（2.5Y6/3）中粒砂からなる近代整地層である。層厚は最大で40cmである。本層上面で旧工場建物の松杭基礎を７基検出した。

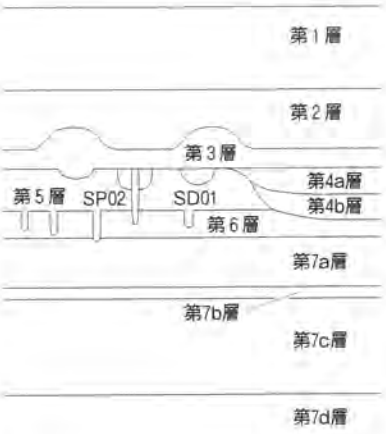


図３　地層と遺構の関係図

第３層：オリーブ黒色（5Y3/1）中粒砂質シルトからなる近代作土である。調査区の全面に分布し、層厚は３～25cmある。上面で畠の畝を、下面でSP01と鋤溝を検出した。19世紀後半頃の瀬戸美濃焼磁器碗・関西系陶器土瓶を含む。

第４層：調査区の東部に分布する作土層である。4a・4b層に分けられる。第4a層はオリーブ黒色（7.5Y3/1）中粒砂質シルトで、層厚は10～15cmである。18世紀頃の肥前磁器碗・波佐見系磁器皿・肥前陶器細片を含む。第4b層は中粒砂を含むオリーブ黒色（5Y3/1）粘土質シルトで、層厚は５～10cmである。18世紀頃の肥前青磁碗・肥前陶器印花鉢・瀬戸美濃焼灰釉陶器碗・土師器細片を含む。

第５層：灰オリーブ色（7.5Y4.2）細粒～中粒砂質シルトからなる盛土層で、調査区の西部に分布する。層厚は20～30cmである。肥前磁器の細片を含む。

第６層：中粒砂を含むオリーブ黒色（5Y3/1.5）粘土質シルトで、調査区の全面に分布する。層厚は5～10cmである。上面で巣穴状の生痕化石を検出した。14世紀頃の瓦器碗や土師器細片を含む。

第７層：調査区全面に分布する河川成層で、深掘りトレンチ内で7a～7d層に分けられる。第7a層は灰色（5Y4/1）中～粗粒砂で、層厚は40～50cmである。第7b層は中粒砂を含むオリーブ黒色（5Y3/1）粘土～シルトで、層厚は最大で５cmである。第7c層は灰色（5Y4/1）中～粗粒砂で、層厚は約70cmである。第7d層はオリーブ黒色（5Y2/2）中粒砂質粘土で、層厚は10cm以上である。未分解の単子葉植物遺体を多く含む。

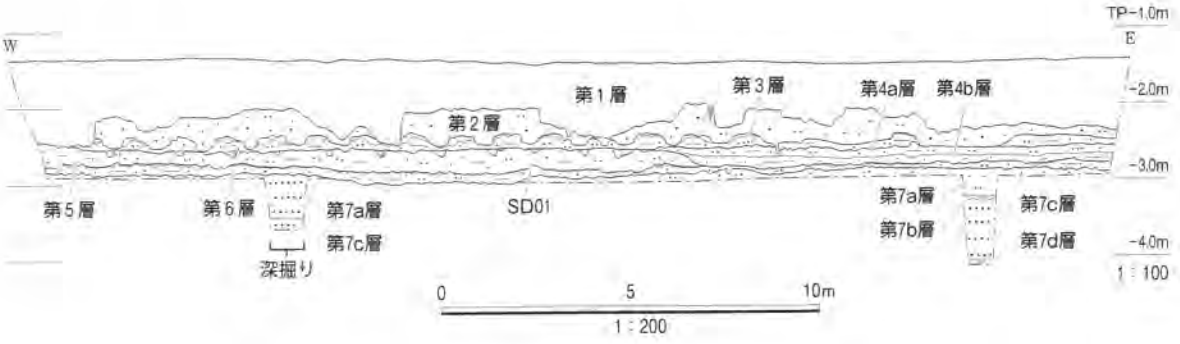


図４　北壁断面図

ii)遺構と遺物(図5～8、図版)

a.第6層上面の生痕化石

調査区全面で巣穴とみられる生痕化石を検出した。直径3～5cm、深さ10～40cm、1㎡あたり約100個が分布し、内部は黄色(2.5Y7/8)シルトで埋まる。第6層には瓦器・土師器が含まれることから、中世に形成されたものと考えられる。

b.第4a層上面の遺構(図6)

水田：調査区東部で第4a・4b層を作土とする水田を検出した。調査区の西部は砂質シルト(第5層)を盛り上げる。水田の西縁辺は東西方向に延び、一辺約5cmの角杭が1.2m間隔で打設されている。作土には18世紀頃の肥前磁器・肥前陶器を含むことから、江戸時代中期以降の水田と考えられる。

鋤溝：水田より高い調査区西部で耕作に伴う溝を検出した。幅は20～30cm、深さ10～15cmで、東西方向に延びる。SD01から土師器ミニチュア羽釜1が出土した(図5)。

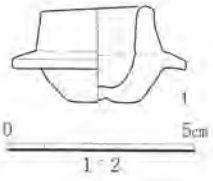


図5　出土遺物

SP02：調査区中央部で杭跡を検出した。掘形の直径約30cm、深さ10cmで、埋土は第5層の偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルトと黄色(2.5Y7/8)粗粒砂である。痕跡は掘形の底より約30cm突出し、先端が尖っている。

c.第3層上面・下面の遺構(図6・7)

畠：調査区全面で第3層を作土とする畠を検出した。畝の高さは15～25cmで南北方向に延び、西部に密に分布する。東部には畝の幅や間隔が広い部分があり、耕地を画する場所に当たると考えられる。本層下面では南北方向の鋤溝群を検出した。幅は10～20cm、深さ5～10cmである。作土中に瀬戸美濃焼磁器碗・関西系陶器碗の細片を含むことから明治時代以降の畠と考えられる。

3)まとめ

今回の調査の結果、江戸時代中期以降の水田と耕作溝、および明治時代以降の畠を検出した。第6層には中世の遺物が少量含まれていたが、生痕化石が分布するのみで人間が関与した遺構は認められなかった。よって、当地は江戸時代中期以降に耕作地として開発されたことがわかる。これは、周辺の新田開発の歴史とも合致する。

調査地の約1km西方には中世末期の平城とされる大和田城跡伝承地や、南方約0.5kmには応神天皇にまつわる伝承をもつ姫嶋神社が所在する。今回これらと直接係わる資料は検出できなかったが、現在の集落に近い場所では古代・中世にさかのぼる遺構・遺物が遺存している可能性は高い。今後もこうした発掘調査による成果を蓄積しながら、当地の土地開発の歴史を明らかにしてゆく必要がある。

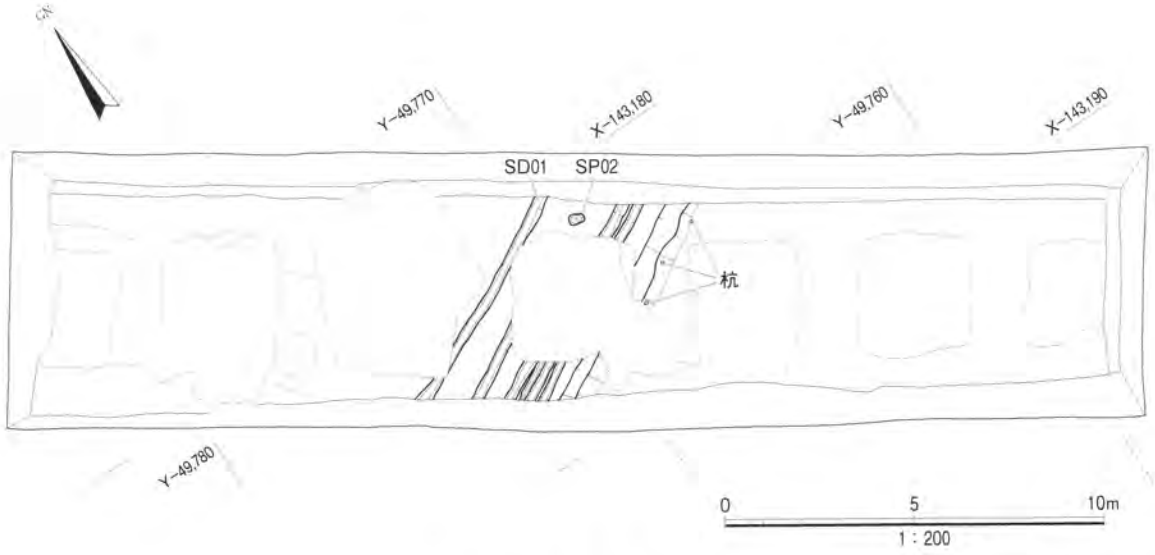


図6　第4a層上面の遺構

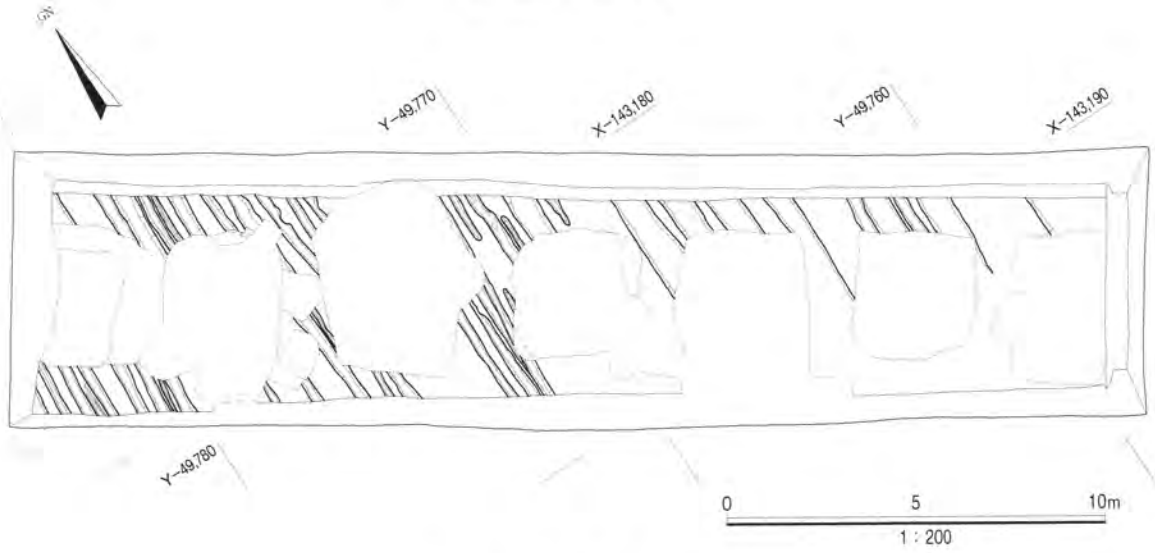


図7　第3層下面の遺構

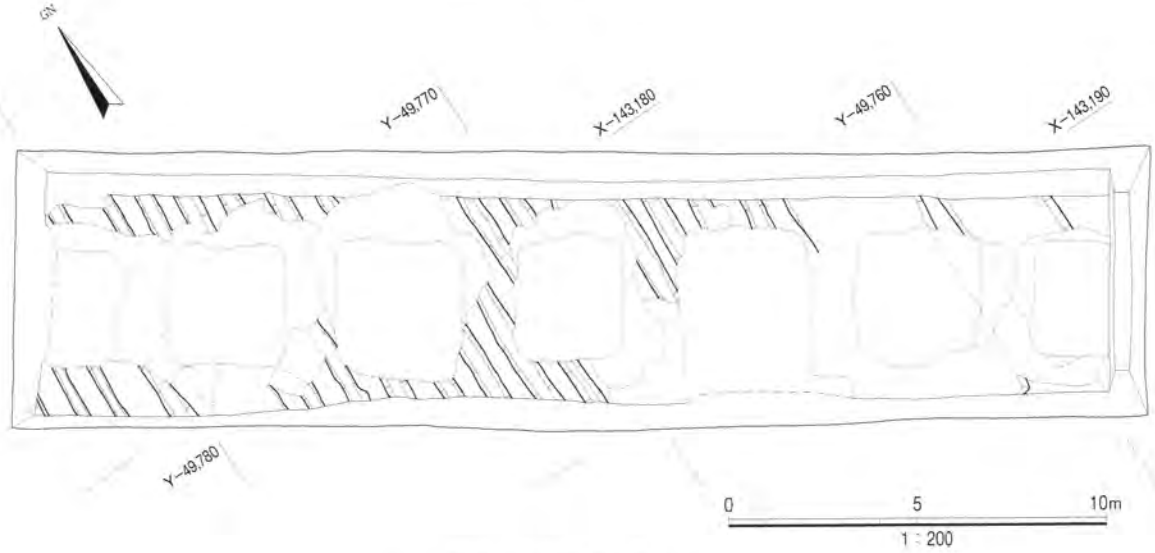
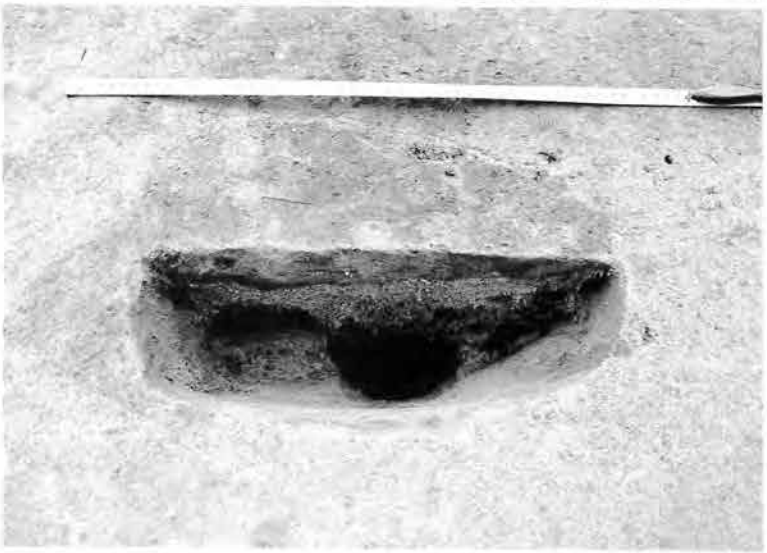


図8　第3層上面の遺構

地層断面(東から)

第3層上面検出遺構
(南東から)

SP01(南西から)



第５層上面検出遺構
（西から）

深掘り（北から）

第６層上面の生痕化石

淀川区加島四丁目における建設工事に伴う
富光寺境内遺跡発掘調査(HK11－１)報告書

調 査 個 所　大阪市淀川区加島４丁目1336－１ほか
調 査 面 積　140㎡
調 査 期 間　平成23年10月12日～10月31日
調 査 主 体　財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、佐藤 隆

1)調査に至る経緯と経過

本調査地は神崎川の左岸、飛鳥時代創建の伝承をもつ富光寺の東方約130mに位置する。周辺には、1936(昭和11)年に発見された弥生時代の遺跡である加島遺跡や、中世の集落遺跡である加島1丁目所在遺跡がある[大阪文化財研究所2011]。加島の地は平安京と西国とをつなぐ水陸交通の拠点であり、「賀島庄」という荘園が置かれて人々が盛んに行き来していたようすが平安～鎌倉時代の文献資料に見られる。また、江戸時代には寛永通宝を鋳造する鋳銭所が本調査地の東端から香具波志神社にかけての地点に設けられた。

本遺跡で行った調査は1995年度のHK95－1次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1997]以来であり、この調査では13～14世紀の土器・陶磁器が出土する地層の上面で溝が検出されている。こうした地層には古墳時代の土器も含まれており、付近に同時代の遺跡が存在した可能性もある。

本調査に先立って行われた大阪市教育委員会による試掘調査では、現地表下約0.4m以下で調査の対象となる遺構面が確認された。その結果をうけて、事業者との協議が行われ、本発掘調査が実施されることとなった。

調査は平成23年10月12日に、南北20m、東西7mの140㎡の調査区を設定して開始した。まず、現地表下約0.5mの後述する第1a層上面まで重機で掘り下げたのち、精査して人力による掘削と記録の作成を行った。その後、重機と人力を併用して第1b層の上面まで掘り下げた。以下はすべて人力によって掘下げを行い、その間、並行して適宜、写真撮影や実測といった記録作業を行った。10月26日には事業者の工場内の方々を対象にその時点での調査成果の説明会を実施し、約40名の参加者があった。10月29日に埋戻しを終え、10月31日には機材などを搬出して現地における作業を完了した。

図1　今回の調査地

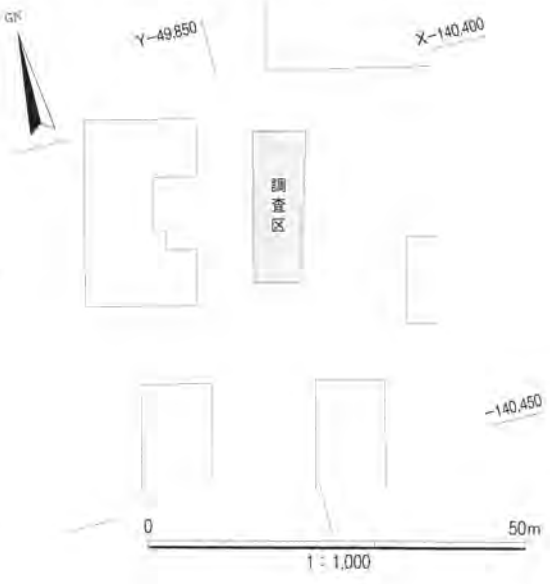


図2　調査区の配置図

基準点はmagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋○mと記した。

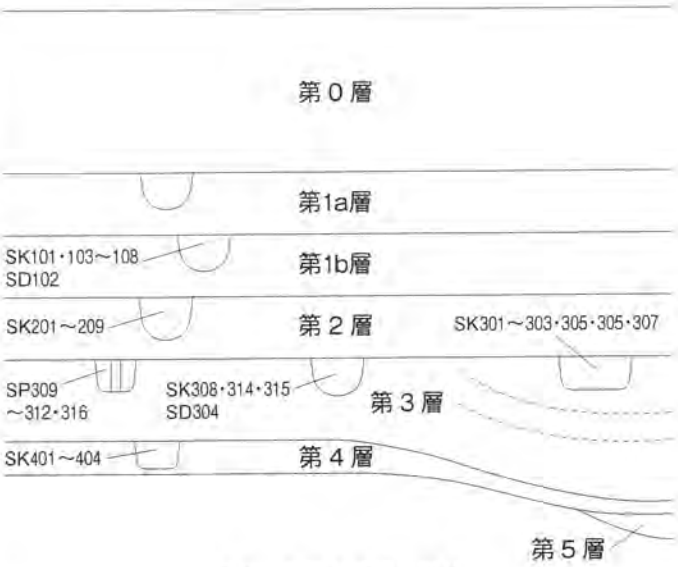


図３　地層と遺構の関係

2)調査の結果

i)層序

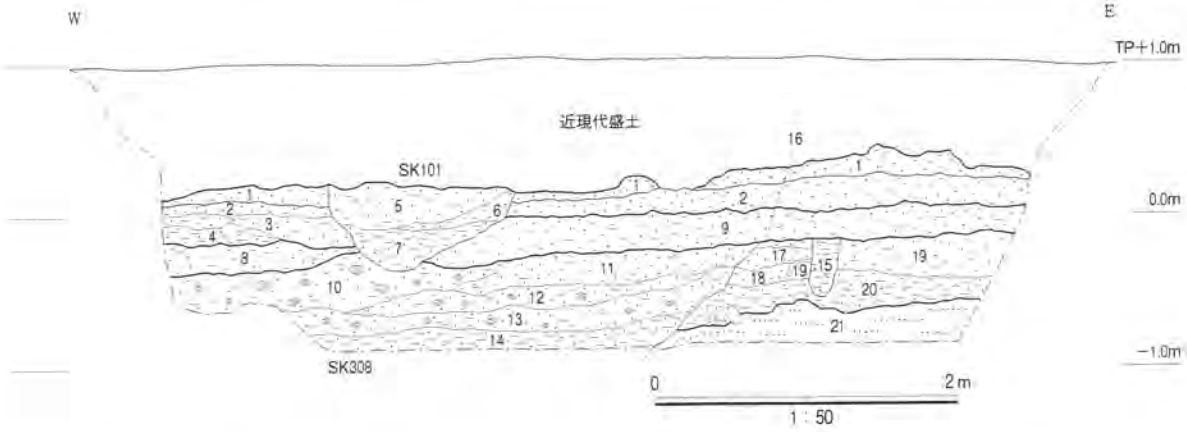
調査地の層序は以下のとおりである(図３～５)。

第０層　近現代の盛土層である。

第１層　第1a層と第1b層の２層に細分される。第1a層は褐色の極細粒～細粒砂からなる江戸時代の作土層である。層厚は最大50cmである。上面で土壙を検出した。第1b層は黄褐色シルト質極細粒～細粒砂からなる江戸時代の作土層である。層厚は10～20cmである。上面で土壙や溝を検出した。

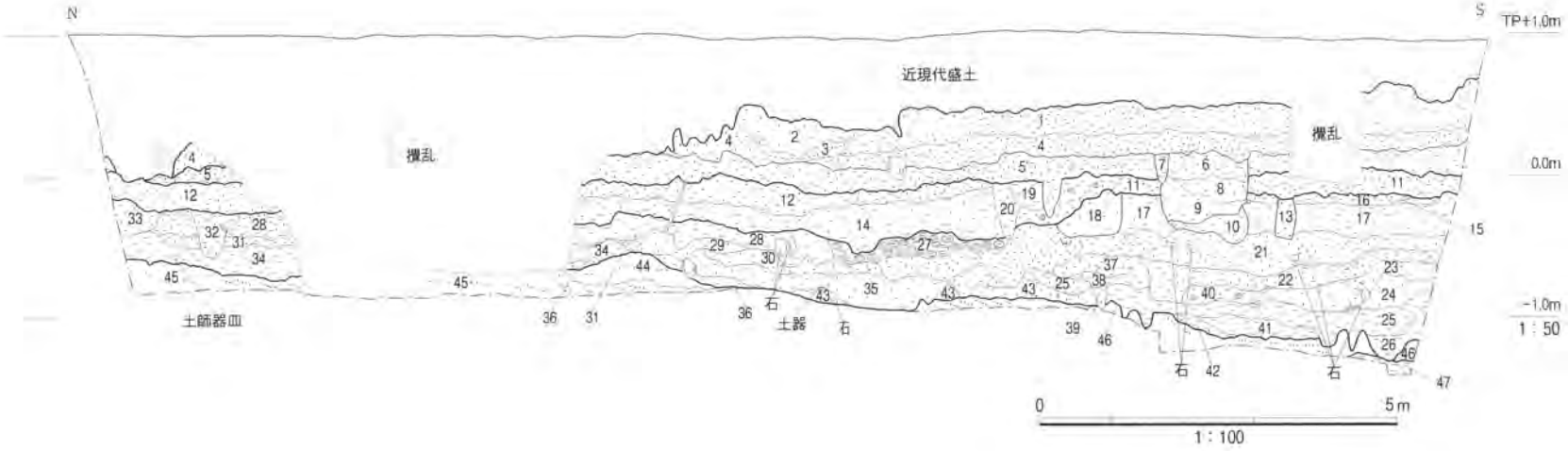
第２層　シルトの偽礫を含む黒褐色砂質シルトや暗灰黄色～暗オリーブ褐色細粒砂～シルト質極細粒砂からなる整地層である。層厚は20～40cmである。上面で土壙を検出した。13～16世紀の土器・陶磁器が出土した。

第３層　灰黄褐色～黒褐色砂質シルトやシルトの偽礫および炭を含む黒褐色～オリーブ褐色シルト



1：黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂(作土　第1a層)
2：オリーブ褐色(2.5Y4/3)極細粒～細粒砂(作土　第1b層)
3：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細粒～細粒砂(第1b層)
4：オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト(第1b層)
5：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質細粒砂(SK101)
6：シルト偽礫含む褐色(10YR4/4)細粒砂(SK101)
7：オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト(SK101)
8：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極細粒～細粒砂(第２層)
9：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極細粒～細粒砂(第２層)
10：シルト偽礫含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)
　シルト質極細粒砂(SK308)
11：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質極細粒砂(SK308)
12：シルト偽礫含む灰黄褐色(10YR4/2)
　シルト質極細粒～細粒砂(SK308)
13：シルト偽礫含む暗灰黄色(2.5Y4/2)
　シルト質極細粒砂(SK308)
14：暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト(SK308)
15：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質シルト(SP309掘形)
16：オリーブ褐色(2.5Y4/3)極細粒砂(第３層)
17：褐色(10YR4/4)極細粒砂(第３層)
18：にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂(第３層)
19：炭・焼土含むにぶい黄褐色(10YR4/3)
　シルト質極細粒砂(第３層)
20：有機物含むオリーブ黒色(5Y3/2)
　～暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト(第３層)
21：オリーブ褐色(2.5Y4/3)
　極細粒～細粒砂(水成　第４層)

図４　北壁地層断面図



1：褐色(10YR4/4)細粒砂(作土　第1a層)
2：にぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒～細粒砂
3：にぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂(水成)
4：褐色(10YR4/4)極細粒～細粒砂(作土　第1a層)
5：黄褐色(2.5Y5/3)シルト質極細粒～細粒砂(作土　第1b層)
6：黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂(SK108)
7：暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト
8：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質極細粒～細粒砂(SK108)
9：にぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂(SK108)
10：にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質細粒砂(SK305)
11：シルト偽礫含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルト(第2層)
12：オリーブ褐色(2.5Y4/3)極細粒～細粒砂(第2層)
13：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質細粒砂(柱穴掘形)
14：暗灰黄色(2.5Y4/2)～暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)
シルト質極細粒～細粒砂(第2層)
15：にぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂(水成　第3層)
16：灰黄褐色(10YR4/2)シルト質極細粒砂(第3層)
17：灰黄褐色(10YR4/2)～黒褐色(2.5Y3/2)砂質シルト(第3層)
18：オリーブ褐色(2.5Y4/4)～にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂(SK302)
19：にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト
20：褐色(10YR4/4)シルト質極細粒～細粒砂
21：シルト偽礫・炭含む黒褐色(2.5Y3/2)～オリーブ褐色(2.5Y4/3)
シルト質極細粒砂(第3層)
22：オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト(第3層)
23：炭含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質極細粒～細粒砂(第3層)
24：暗オリーブ色(5Y4/3)シルト質極細粒砂(第3層)
25：暗オリーブ色(5Y4/3)砂質シルト(第3層)
26：灰オリーブ色(5Y4/2)砂質シルト(第3層)
27：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルトの偽礫(第3層)
28：暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルト(第3層)
29：黄褐色(2.5Y5/3)シルト質極細粒砂(第3層)
30：炭含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質極細粒砂(第3層)
31：褐色(10YR4/4)細粒砂(第3層)
32：黒褐色(2.5Y3/2)砂質シルト(柱穴掘形)
33：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質極細粒～細粒砂(第3層)
34：有機物含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルト(第3層)
35：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細粒～細粒砂(第3層)
36：黄褐色(2.5Y5/3)極細粒砂(第3層)
37：炭含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質極細粒砂(第3層)
38：有機物含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極細粒～細粒砂(第3層)
39：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極細粒砂(第3層)
40：シルト偽礫含む暗オリーブ色(5Y4/3)シルト質細粒砂(第3層)
41：炭含む灰色(5Y4/1)シルト(第3層)
42：灰オリーブ色(7.5Y5/2)砂質シルト(第3層)
43：暗オリーブ色(5Y4/3)～オリーブ褐色(2.5Y4/4)
細粒砂～シルト質極細粒砂(第3層)
44：灰オリーブ色(5Y4/2)極細粒～細粒砂(水成　第4層)
45：にぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒～細粒砂(水成　第4層)
46：オリーブ褐色(2.5Y4/6)～灰オリーブ色(5Y5/2)
細粒～中粒砂(水成　第4層)
47：灰オリーブ色(5Y5/2)シルト(水成　第5層)

図5　東壁地層断面図

質極細粒砂、暗灰黄色シルト質極細粒～細粒砂などからなる整地層である。層厚は30～100cmである。北半部の上面では柱穴やSK314・315などの13世紀代の土壙を検出したが、もとの地形が高い北半部でそうした遺構が形成される間も、低い南半部では盛土が続けられていたようで、13世紀末～14世紀初頭の土器が上部から出土している。

第４層　オリーブ褐色～灰オリーブ色の極細粒～細粒砂や細粒～中粒砂からなる河川堆積層である。ラミナは北から南へ傾斜する。少量であるが、13世紀前半の土器が出土した。

第５層　灰オリーブ色のシルトからなる湿地の堆積層である。南端部のみで確認した。確認したのはわずかであったが、北から南へ層厚が増しており、このことから調査区外の南側には湿地が拡がっていたと考えられる。

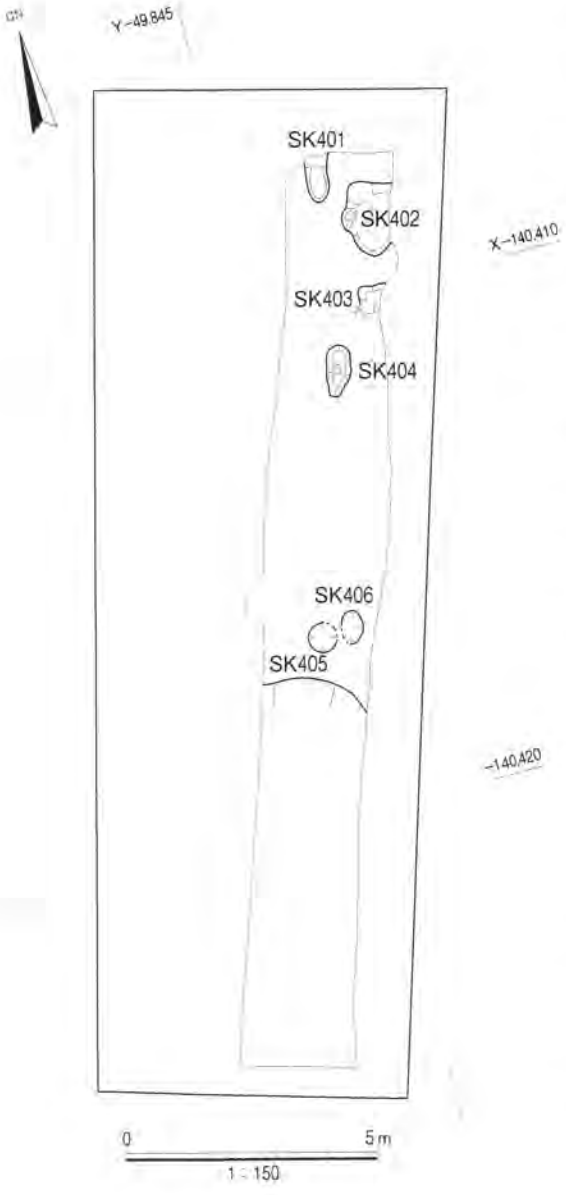


図６　第４層上面遺構平面図

ii)遺構と遺物

13～14世紀の遺構と遺物

第４層上面において、調査区の北～中央部で土壙SK401～406を検出した(図６・８)。13世紀前半の土器が出土した。

第３層上面においては、調査区の全域で土壙SK301～303・305・307・308・314・315・317、柱穴SP309～312・316、溝SD304を検出した(図７)。柱穴SP309・312・316は組み合って掘立柱建物が復元できる可能性がある。このうち南部で検出したSK301～303・305・307は、第３層の盛土が終わったのちに掘り込まれている。以下、遺物が多く出土したSK314・315について述べる。

SK314は南北3.3m、東西2.4m以上、深さ0.5mである(図７・８)。埋土は黒褐色～オリーブ褐色シルト質極細粒～細粒砂である。

多量の出土遺物から、土師器小皿１・２・皿３、瓦器椀４・皿５・三足釜６・７・鍋10、須恵器こね鉢11・甕12、中国産青磁碗９・皿８を図示した(図９)。土師器小皿１・２は底部から体部が内湾しながら立ち上がる。皿３は体部が外上方へ直線的に伸びる。瓦器椀４は和泉型で、外面はヘラミガキがなく、内面はやや疎らであるが、まだ暗文の状態ではない。底部内面の暗文は平行線状である。高台は低く形骸化している。

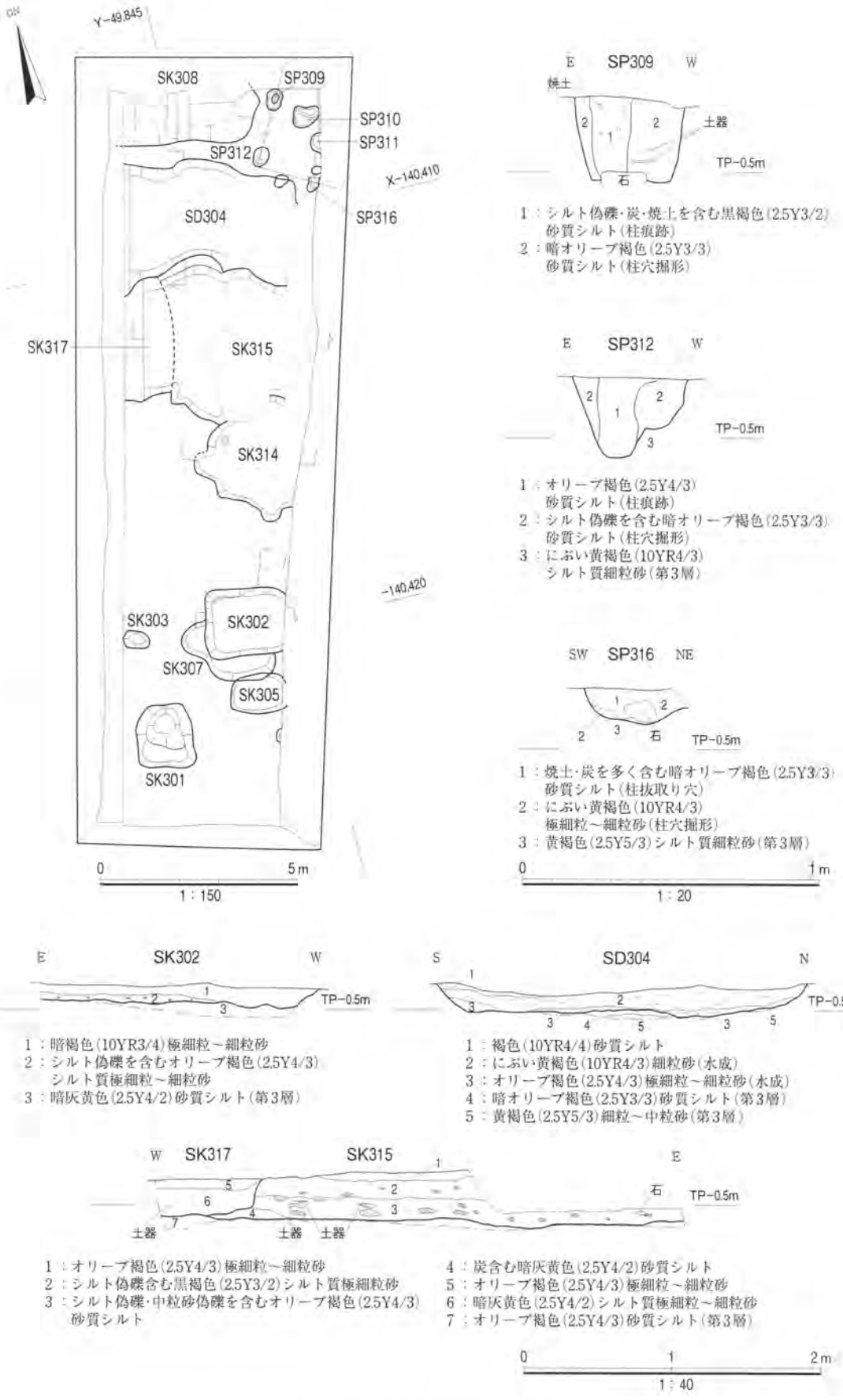


図7　第3層上面遺構平面・断面図

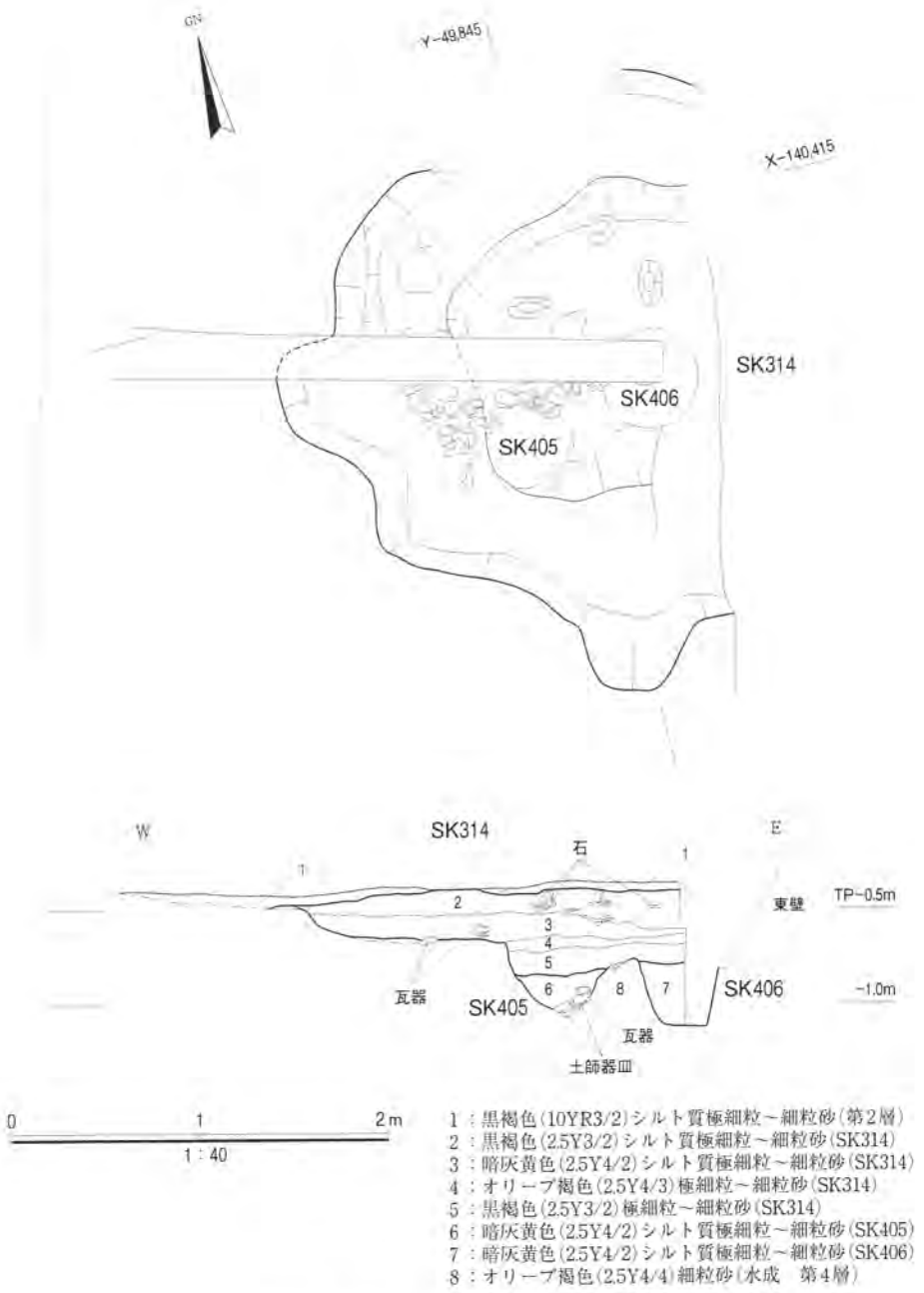


図8　SK314・405・406平面・断面図

皿5はヘラミガキ・暗文とも見られない。三足釜は6・7のほかにも破片は多く出土しているが、口縁部から脚部まで接合できたものはない。鍋10は火を受けて燻し処理がとれている部分がある。須恵器こね鉢11は1箇所に片口をもつ。口縁部の縁帯外面のみ色が変わっており、重ね焼きの痕跡である。底部外面にはわずかに糸切痕が見える。甕12の体部外面は平行タタキで整形されている。中国産青磁碗9は鎬蓮弁文碗である。体部と高台は接合しないが、図上で復元した。皿8の底部内面にはヘラおよび櫛状の施文具で花文が描かれている。

これらの資料は土師器および瓦器の型式から13世紀中頃の年代が与えられる[京都市埋蔵文化財研究所2003・中世土器研究会編1995]。

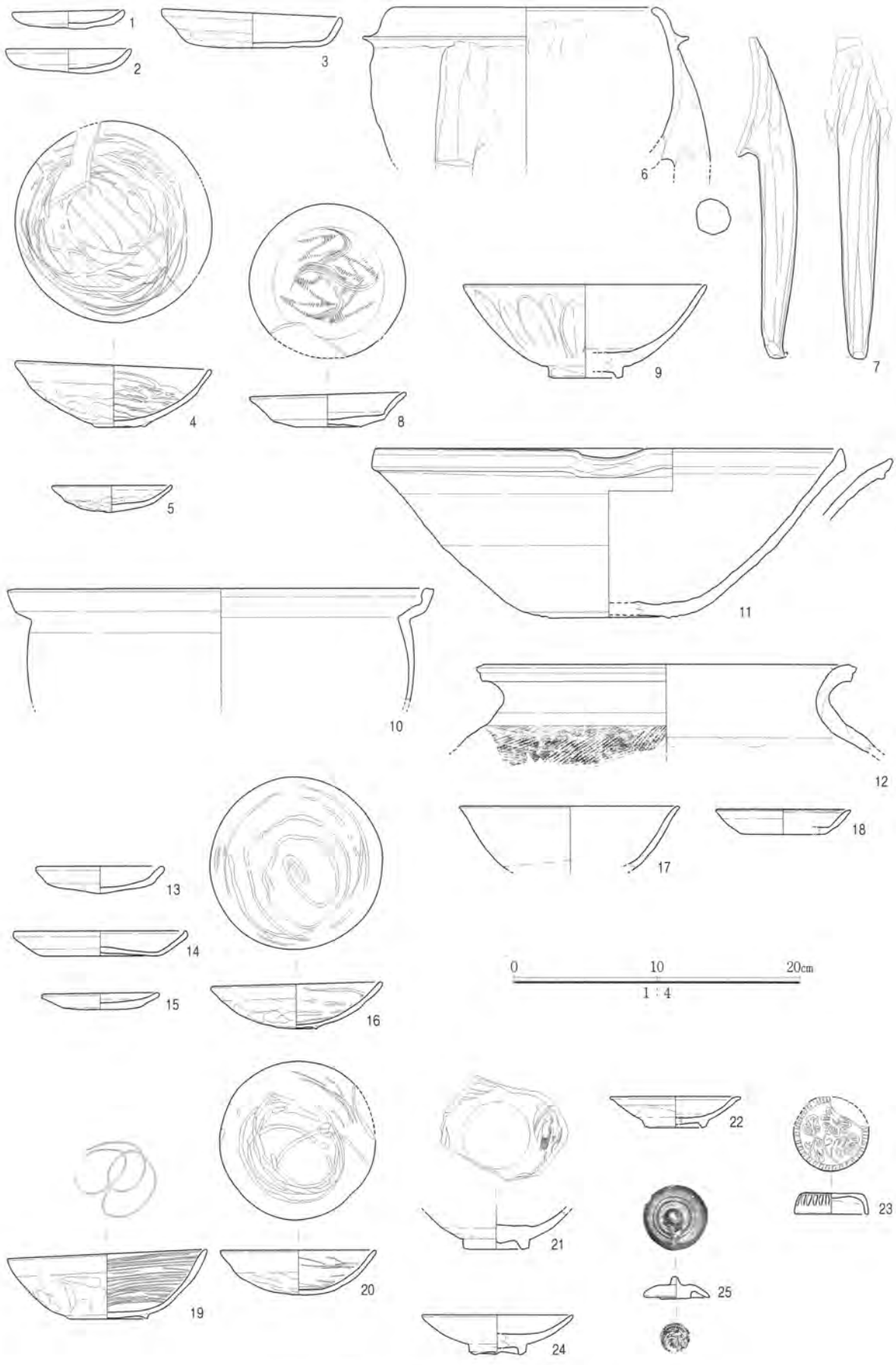


図9　SK314・315ほか出土遺物

SD314(1～12)、SK315(13～18)、第3層(19～23)、第2層(24・25)

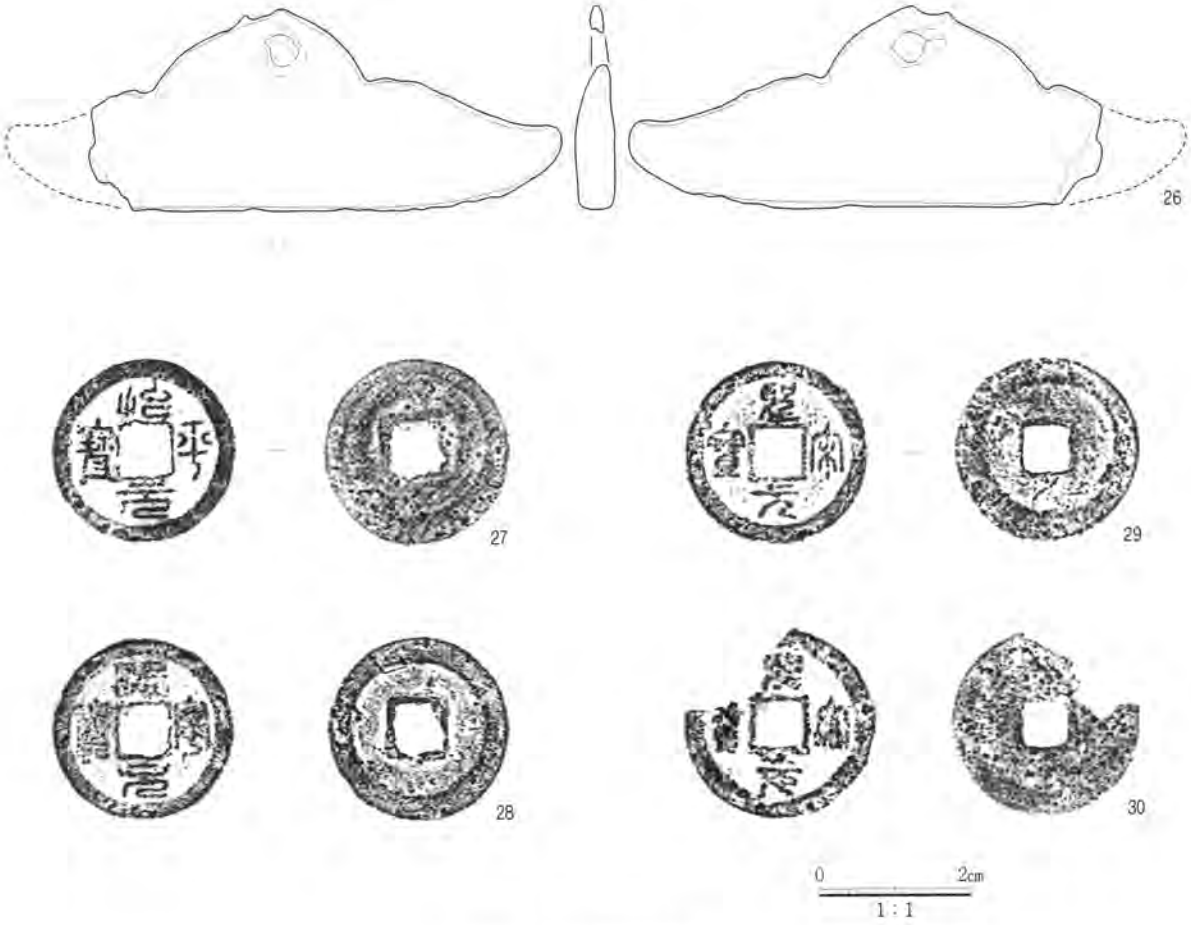


図10　第３層出土遺物

SK315は南北4.2m、東西3.2m以上、深さ0.3mである。埋土はオリーブ褐色～黒褐色の極細粒～細粒砂やシルト・中粒砂の偽礫を含む砂質シルトである。SK317に切られているが上面では識別できず断面で確認した(図７)。SK314ほどではないが、やはりかなりの量の遺物が出土している。土師器小皿13・皿14、瓦器椀16・皿15、中国産白磁碗17・皿18を図示した(図９)。土師器小皿13・皿14は体部が外上方へ直線的に伸びる。瓦器椀16は和泉型で、外面はヘラミガキがなく、内面は渦巻き状の疎らな暗文が底部内面から体部にかけて施されている。高台は低く形骸化している。皿15はSK314の皿５よりも口縁部径・器高とも縮小している。中国産白磁皿18は口縁部の釉が掻き取られている。横田賢次郎・森田勉氏の分類による皿Ⅸ類[横田・森田1978]である。

これらの資料は土師器および瓦器の型式から13世紀中頃～後半の年代が与えられる[京都市埋蔵文化財研究所2003・中世土器研究会編1995]

上記のほか、第３層から出土した多量の遺物から、瓦器椀19・20、中国産青磁碗21・白磁皿22・青白磁合子蓋23、火打金26、銅銭27～30を図示した(図９・10、図版)。瓦器椀19は楠葉型で、体部内面に密なヘラミガキを施す。底部内面の暗文は螺旋状である。13世紀初頭～前半のものである。瓦器椀20は和泉型で、内面に渦巻き状の疎らな暗文が底部内面から体部にかけて施されている。高台は失われており、13世紀末～14世紀初頭のものである。中国産青磁碗21は体部内面にヘラおよび櫛状の施

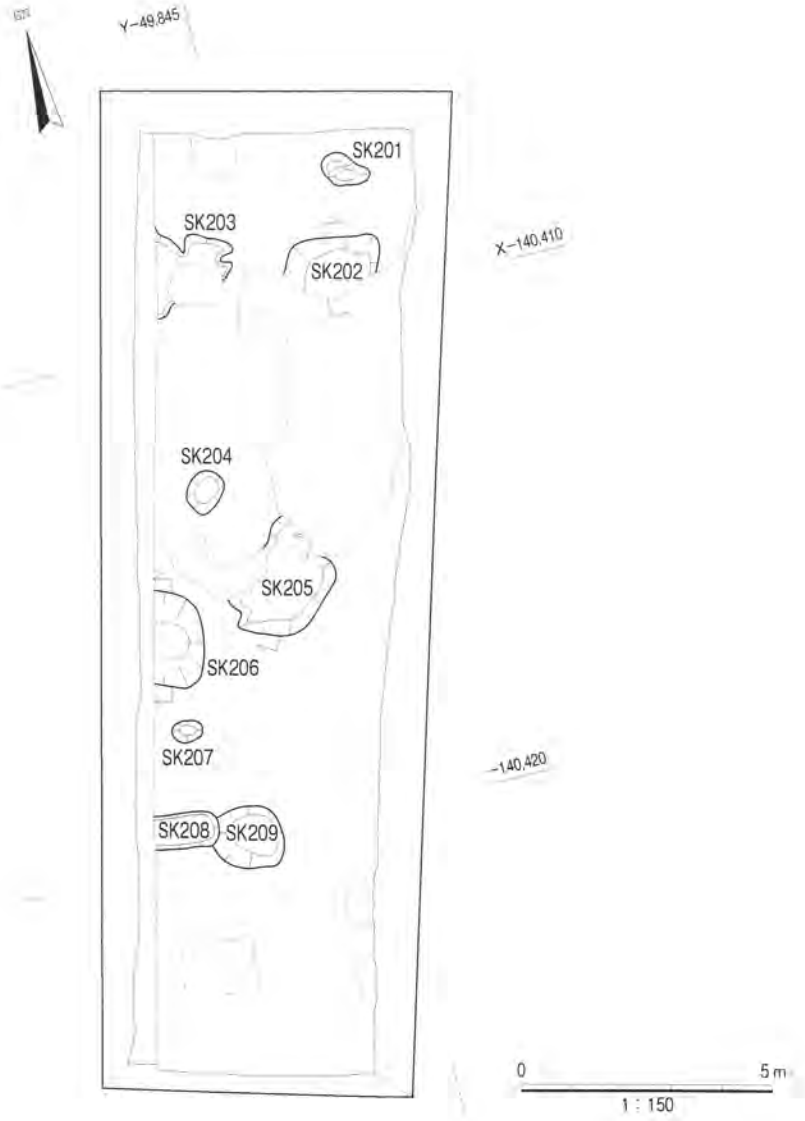


図11　第2層上面遺構平面・断面図

文具で花文が描かれている。白磁皿22は横田・森田分類の皿Ⅲ類である。底部内面は蛇の目釉剝ぎである。火打金26は平面形が山形で、その頂部に紐通しの孔が1箇所ある。中世に遡るものとしては、大阪市内で初出の資料である。銅銭のうち、27は治平元宝で、初鋳年は1064年である。28は文字部分の銹のために明確ではないが、熙寧元宝とみられる。初鋳年は1068年である。29は聖宋元宝で、初鋳年は1101年である。30は文字部分の銹のために明確ではないが、同じく聖宋元宝であろう。

15世紀前後の遺構と遺物

第2層上面において、土壙SK201～209を検出した。土師器・瓦器・常滑焼・中国産青磁の細片が出土しているが、詳細な年代はわからない。

基盤層である第2層から土器・陶磁器が多量に出土しており、13～14世紀の土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・常滑焼・備前焼・中国産青磁・白磁・石鍋片などが多いが、少し年代の降るものも見られる。中国産白磁皿24と瀬戸美濃焼合子蓋25を図示した(図9)。白磁皿24は陶器質の焼成で高台に刳込みがあり、森田勉氏の分類による白磁D類である[森田1982]。合子蓋25は外面に鉄釉を掛ける。これらの年代は15～16世紀である。また、細片であったが、土師器皿には16世紀に降るものが含まれており、24・25の年代観と矛盾しない。

17世紀後半以降の遺構と遺物

第1b層上面において、土壙SK101・103～108・溝SD102を検出した(図12)。出土した遺物は少なく、かつほとんどが下位層から混入した15世紀以前のものであったが、SK106にわずかに肥前磁器の細片が含まれていたことから、ほかの遺構も17世紀後半以降のものと考える。

また、重機掘削後の第1a層上面で最初の遺構検出を行っている。明確な遺構は少なかったが、北壁沿いの土壙から江戸時代の丸・平瓦がまとまって出土した。桟瓦を含まないことから、江戸時代中期までにおさまる可能性があるが、詳細な時期は不明である。このほか、中央部の東西に長い土壙から江戸時代後期の陶磁器が出土している。

3)遺構と遺物の検討

上記の成果から、今回の調査地に存在する遺跡について、中世における地形の変遷を中心に検討しておく。

東壁地層断面(図5)に示したように、もともと北が高く南へ低くなる地形が第3層の盛土によって平坦に近い地形へと変化していく過程を明らかにすることができた。調査地の北には神崎川(古代の三国川)が流れており、こうした調査区の地形は、北側が三国川によって形成された自然堤防の一部であり、南側がその後背湿地に至る部分であると考えられる。

地形の高かった北側では、第4層上面においてすでに土壙が認められ、第3層上面では掘立柱建物として復元できる可能性がある柱穴SP309・312・316以外にも柱穴を検出した。調査区外の北側にかけて居住域が拡がっていたと想定される。第3層の盛土は居住域を南側へ拡げていく目的で行われたのであろう。それが始まった年代は、第3層の土器の年代から13世紀前半と考えられる。

調査区中央部のSK314・315などの土壙は、第3層の盛土が行われ始めたのちに、居住域の外れに

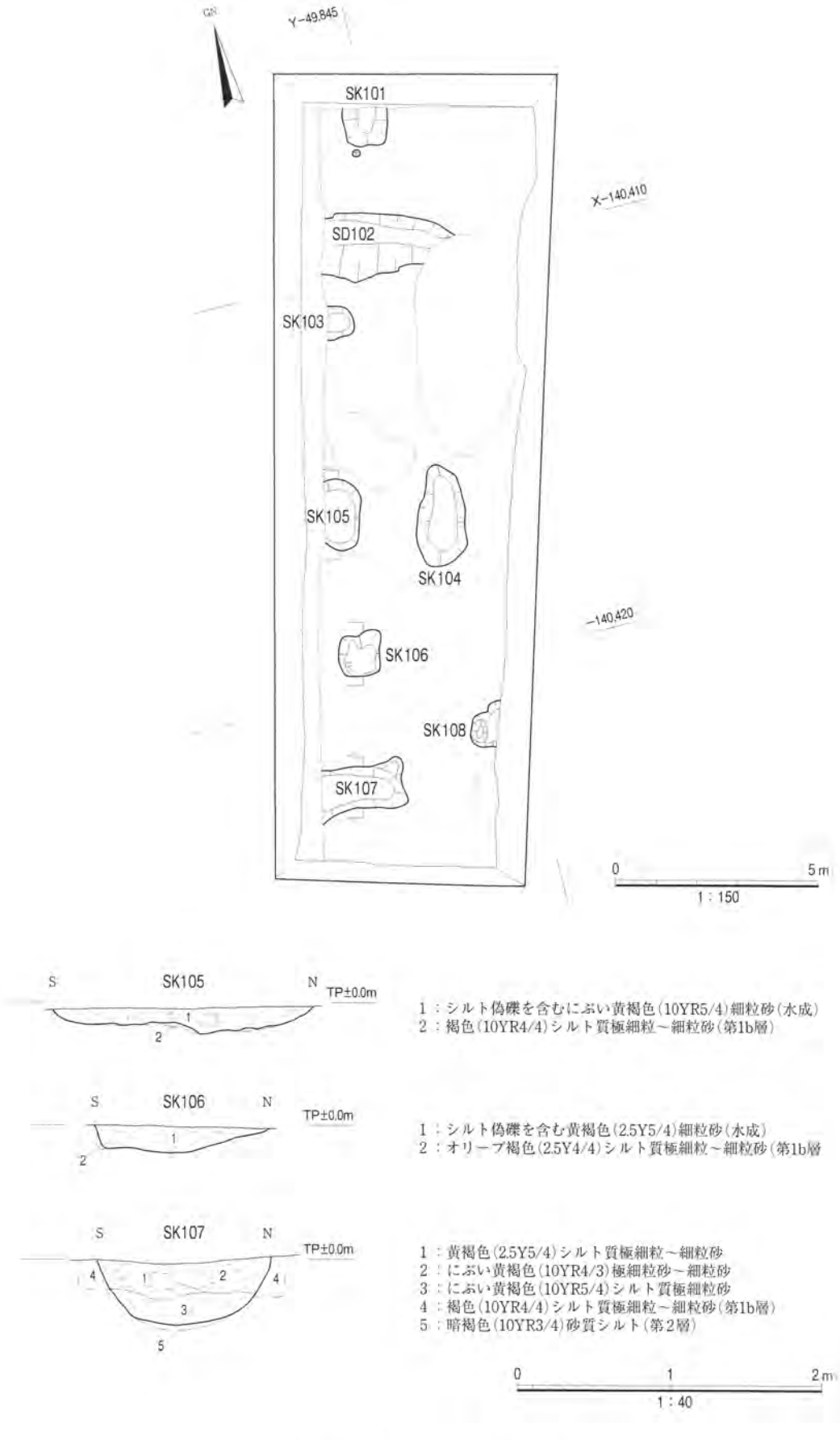


図12　第1b層上面遺構平面・断面図

形成されたゴミ穴である。こうした営みが行われていた間も、南部では盛土が続いており、第３層上面がある程度平坦になるのは13世紀末～14世紀初頭の頃である。

第３層やSK314・315などの遺構からは多量の遺物が出土した。中国産磁器も豊富で、宋銭も含まれている。瓦器も和泉型の碗に加えて楠葉型の碗も見られる。こうした遺物の特徴から、調査区から北にかけて拡がっていた居住区は一般的な農村というものではなく、川に近い立地から水上交通の拠点となっており、中国産磁器を入手できるような階層の人々が活動していたところと考えられる。文献資料に見られる「賀島庄」に係わる可能性を指摘しておきたい。

４）まとめ

今回の調査では、北から南に落ち込む地形を確認し、それが鎌倉時代の13世紀に始まる盛土によってほぼ平坦となったのち、江戸時代には耕作地として利用されるといった調査地の変遷を明らかにすることができた。見つかった遺構・遺物は文献資料に見られる「賀島庄」に係わる可能性があり、今後の調査成果によって遺跡の解明はさらに進むと考えられる。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1997、「佐々木氏による建設工事に伴う発掘調査（HK95－１）略報」：『平成７年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.５－15

大阪文化財研究所2011、『加島１丁目所在遺跡発掘調査報告』

京都市埋蔵文化財研究所2003、『平安京左京四条二坊十四町』

中世土器研究会編1995、『概説 中世の土器・陶磁器』

平凡社地方資料センター編1986、『大阪府の地名』日本歴史地名大系第28巻、平凡社

森田勉1982、「14～16世紀の白磁の分類と編年」：『貿易陶磁研究』№２、日本貿易陶磁研究会　pp.１－26

横田賢次郎・森田勉1978、「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」：『九州歴史資料館研究論集』４、pp.１－26

北壁および東壁北端部
地層断面
（南西から）

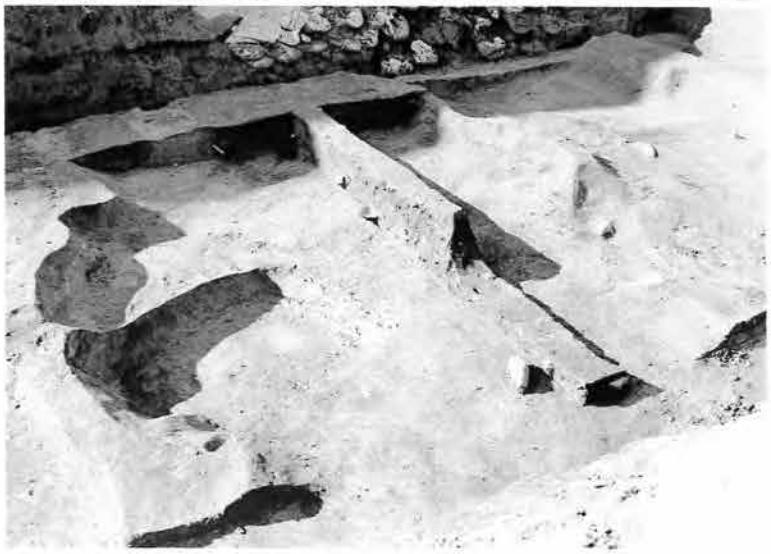
東壁地層断面
（南西から）

第４層上面遺構
（北から）

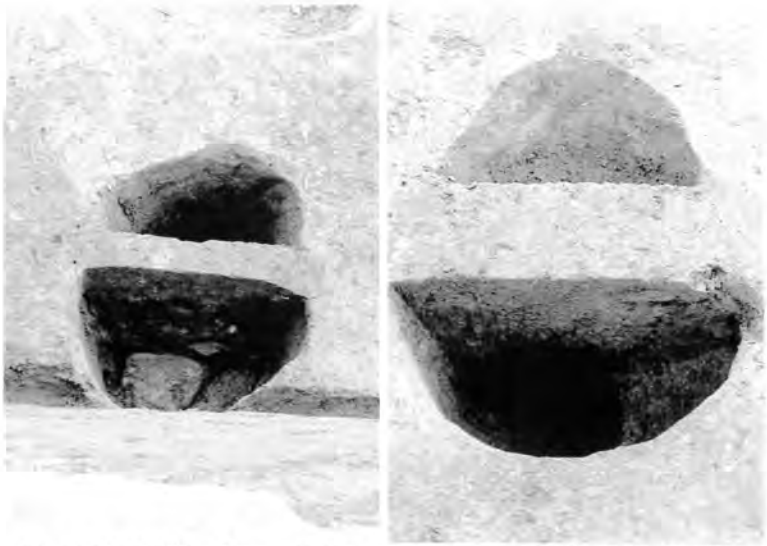
第３層上面遺構
（北から）

SK314
（南東から）

SK315
（南東から）



左：SP309(北から)
右：SP312(北から)



第２層上面遺構
（北から）

第３層出土銭貨

28

27

29

30

生野区巽北三丁目における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(TA11－1)報告書

調査個所	大阪市生野区巽北3丁目128－5・129－15・129－16・145
調査面積	112㎡
調査期間	平成23年7月19日～7月26日
調査主体	財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長　南 秀雄、趙 哲済

1)調査に至る経緯と経過

調査地は東大阪市との市境に近い河内平野南部に位置する。一帯は東の長瀬川と西の平野川に挟まれた氾濫平野であり、両河川の分流路跡が調査地の東西を南から北へ断続的に延びている(図1・2)。東約800mの東大阪市岸田堂北町にある長楽寺跡は、長瀬川の分流路跡である沖積リッジ上にある遺跡である。この沖積リッジには、弥生時代の遺跡として著名な宮ノ下遺跡も立地しており、仮に岸田堂－宮ノ下分流路跡と呼ぶ。長楽寺は推古天皇の創建と伝えられ、明治25年に神戸に移築されているが、本尊十一面観音は聖徳太子作とも春日作ともいわれることから、岸田堂－宮ノ下分流路跡は弥生時代には形成され始め、その成立は古墳時代以前に遡る可能性がある。南東約1.1kmにある東大阪市渋川町にある西郷遺跡は、岸田堂－宮ノ下分流路に近い東側氾濫原にあり、約20年前の試掘調査で、古墳時代や中世の遺物が採取されている。一方、南東約800mの生野区巽東3丁目のTA07－1次調査地は、平野川の分流路跡である沖積リッジにほど近い氾濫原にあり、奈良時代後半～平安時代初頭

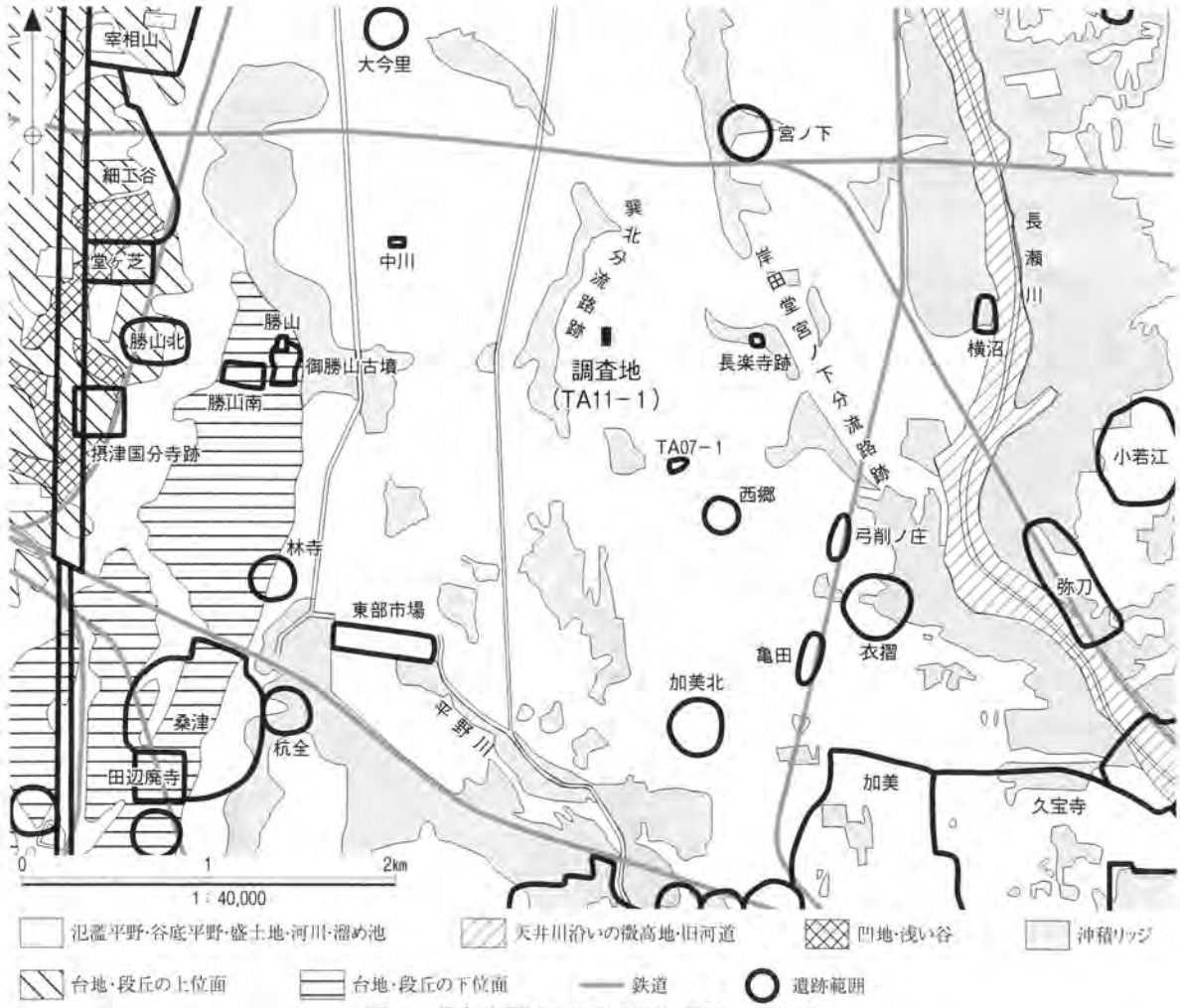


図1　調査地周辺の地形分類と遺跡の分布図

[建設省国土地理院1983]をもとに作成し、大阪府地図情報システム
(https://www11.cals.pref.osaka.jp/ajaxspatial/ajax/)により遺跡を加筆

に属する溝や土壙などの遺構が検出されている。近隣に居住域が存在したことが推定されている[大阪市文化財協会2007]。居住域に適した土地のひとつが平野川からの分流路跡であり、この沖積リッジを本調査地の地名から巽北分流路跡と仮称する。

調査地の近隣では、これまで本格的な発掘調査は実施されておらず、遺跡の包蔵状況は明らかではなかったが、5月28日、大阪市教育委員会が実施した試掘調査によって、現地表下1.6m以下のところに、古代から近世までの集落の造成に係ると考えられる人為的な客土が確認された。これにより、本調査が実施されることになった。

調査区は調査地南部に東西14m・南北8mで設定した(図3)。調査初日は雨天のため重機・資材などの搬入のみ行い、翌日は台風6号接近のため作業を中止し、翌7月21日よりの開始となった。重機により地表下1.6mまでの現代盛土、攪乱を掘削し、以下、人力により地表下約3.2mまで掘下げて遺構・遺物の検出に努めた。途中、3層準で古代～弥生時代末の遺構面を検出した。なお、調査区東縁から約3m西の位置にH鋼が並列打設されていたため、H鋼列より東は作業し辛く、重機掘削と断面観察のためのトレンチ掘削のみに留めた。検出状況の写真撮影、遺構の掘下げ、掘下げ後の遺構写真撮影、調査区の平面図・断面図の作成を順次行い、7月26日に現場作業を終了した。現場作業終了後は、室内で図面・写真の整理を行うとともに、遺物の洗浄・復元、実測を行い、パーソナルコンピュータを使用して作図・編集を行った。なお、出土遺物の記述は、当研究所の小田木富慈美が行った。

本書で用いた方位は座標北を基準としている。また、水準値は東京湾平均海面値(T.P.値)であり、TP±○mと略記する。

図2　調査地位置図

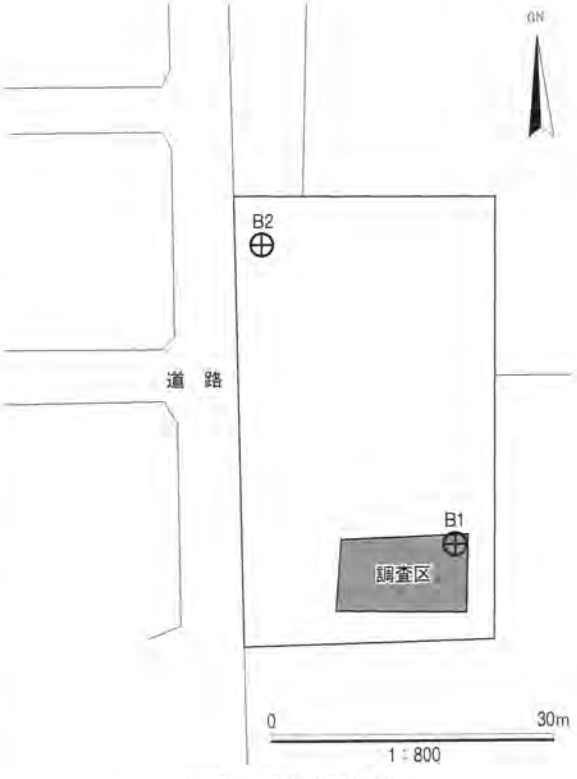


図3　調査区配置図
B1・B2はボーリング調査位置

2）調査の結果

i）層序

調査地の標高はTP＋2.6～2.7mであり、現代盛土層より下位を10層に区分した(図4・5)。

第0層は現代盛土層および攪乱埋土で、盛土層の層厚は1.2～1.4mであった。

第1層は近・現代の作土層である。黄灰色(2.5Y4/1)わずかに細礫混り砂質泥からなる。層厚は15～20cmであった。上面の標高はTP+1.2～1.4mで、南西側が低い。

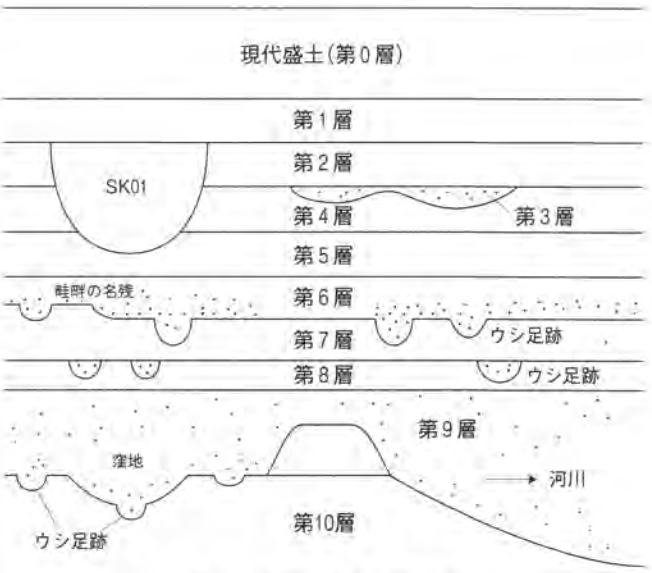


図4　地層と遺構の関係図

第2層は近世の作土層である。灰色(5Y5/1)細礫混り砂質泥からなる。本層の上面で土壙SK01を検出した。

第3層は氾濫堆積層である。褐色(10YR4/6)ややシルト質粗粒砂からなり、調査区の南半部にある下位層の浅い溝か窪みを埋積して分布した。層厚は溝か窪みの深さを超えることはなく、最大8cmであった。古流向は計測できていないが、分布範囲からみて、調査区の南方から供給された可能性がある。

第4層は中世の作土層である。暗灰黄色(2.5Y5/2)泥からなる。層厚は15～20cmであった。

第5層は中世の作土層である。黄灰色(2.5Y5/1)泥からなる。層厚は15～20cmであった。

第6層は古代末頃の氾濫堆積層が撹拌を受けた層である。オリーブ褐色(2.5Y4/6)粗粒～中粒砂で上方細粒化してシルト質細粒砂となるが、堆積後の踏込みや耕起によるとみられる擾乱により、全般に堆積構造が乱れており、西壁では特に顕著に撹拌されていた。層厚は20cm前後であった。下面で耕作痕跡らしい小溝(SD02)を検出した。

第7層は奈良～平安時代の作土層である。黄灰色(2.5Y5/1)中粒砂質泥～粘土からなり、砂は下半部に多い。層厚は約20cmであった。上面で粗粒～中粒砂で埋まる大型偶蹄類の足跡を検出したが、上位層の撹拌時に着けられた可能性もある。

第8層は飛鳥～奈良時代の作土層とみられるが、耕起による撹拌は顕著ではなく、下位層と明瞭な境界を形成するほどではない。調査区東半部では灰オリーブ色(5Y5/2)中粒砂主体のシルト質砂からなり、西半部ではシルト質細粒砂～砂質シルトになる。層厚は約15cmである。上面で粗粒砂で埋まる大型偶蹄類の足跡を検出した。

第9層は古墳初期、飛鳥時代頃の氾濫堆積層である。灰色(7.5Y6/1)粗粒砂主体の細礫～中粒砂が幅170cm・深さ25cm～幅50cm・深さ10cmのトラフ型斜交ラミナを作って複雑に重なっている。調査した地層の中では最も激しい氾濫であり、洪水時や暴風時の堆積とみられる。古流向は西向きが優勢である。層厚は西半部で60cm前後、東半部ではそれよりも厚く、下限は不明である。調査区東側で実施されたボーリング調査の柱状図によれば、層厚165cmの淡灰色砂層が本層に当る(図8)。

第10層は弥生時代末～飛鳥時代の後背湿地の氾濫堆積層である。灰色(7.5Y4/1)砂質泥からなる。

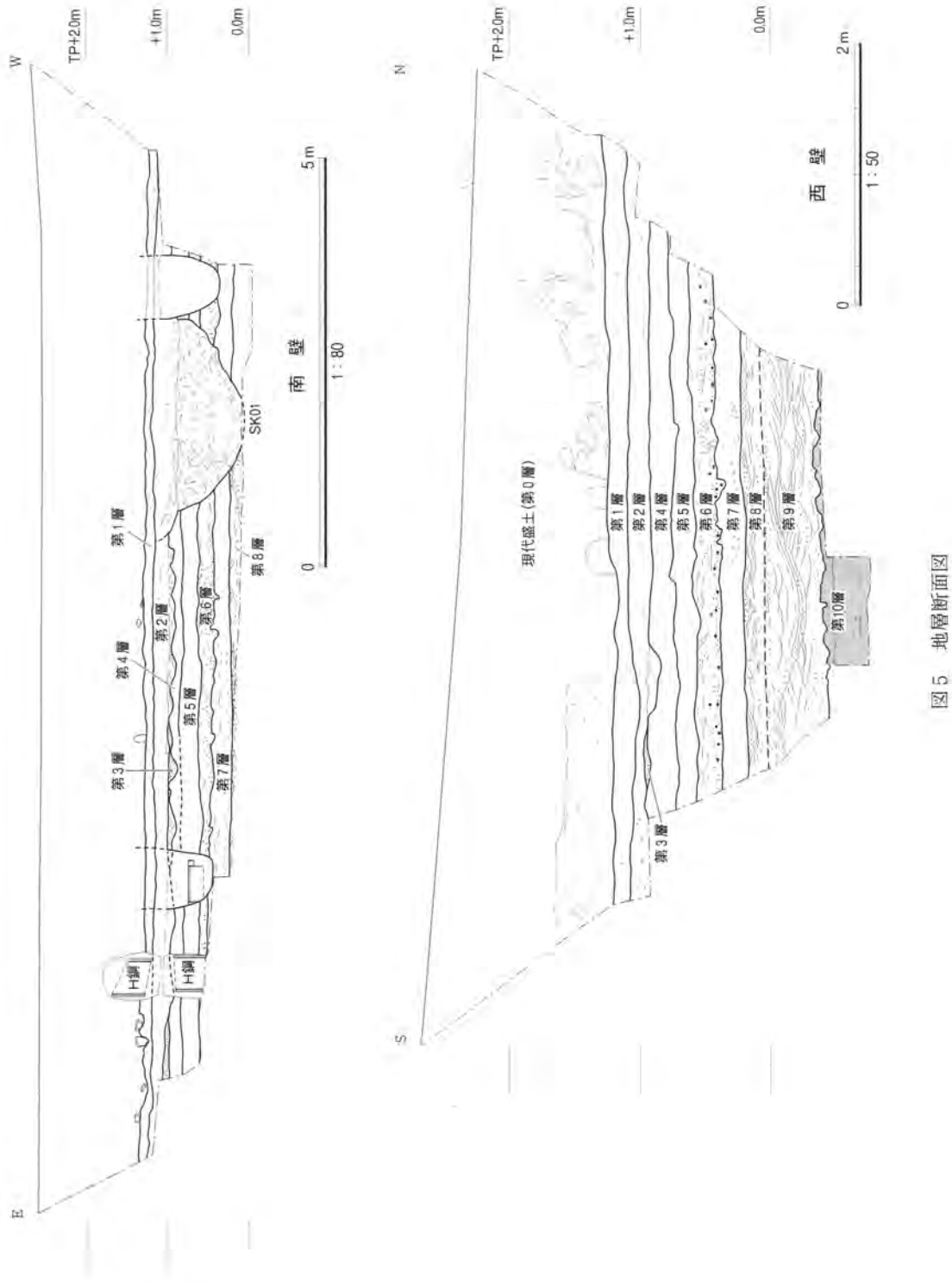


図5　地層断面図

層厚は35cm以上あり、上面に土手があり、上位層の砂で埋まる偶蹄類の足跡により上部10cmは擾乱を受けている。上面の標高は調査区西側でTP－0.4m、東側はボーリング資料からTP－1.4m前後と推定される(図3・8)。

ii)遺構と遺物

a．飛鳥時代頃(図6～8)

第10層上面の土手は、高さ0.2m、上端幅0.4m、下端幅0.9mの規模で、南北に長く2.4m以上あり、

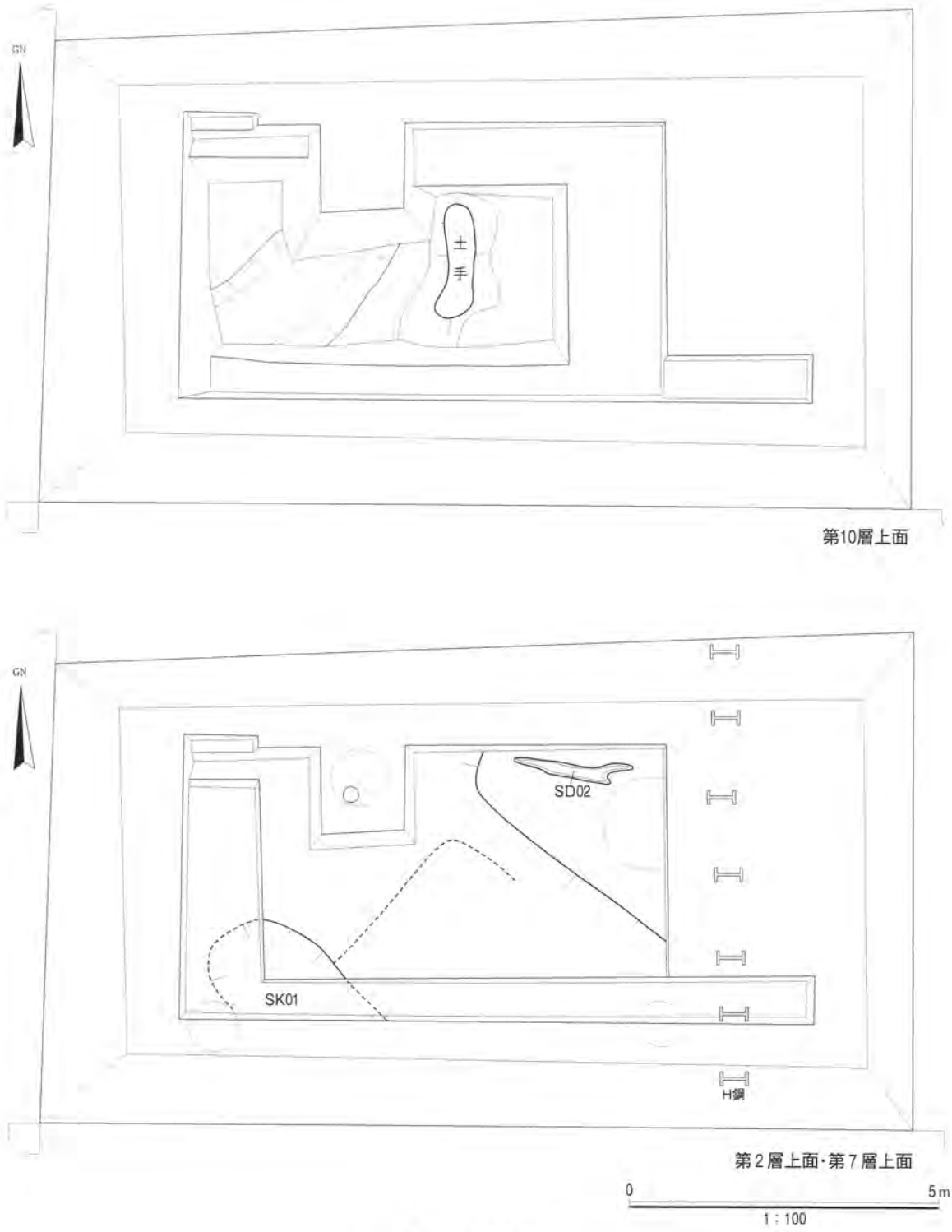


図6　遺構平面図

その両端で低くなる(図6)。第10層堆積物を盛土している。図示はしていないが、盛土の中からは、直径20cm余りの丸太を刳り抜いた木製品が出土している。土手の西側には幅1.8m、深さ0.1～0.2cmの浅い溝状の窪地が土手とは斜に延びている。窪地の内外には、多数の大型偶蹄類の足跡が着いていた。足跡は足印長・足印幅が11cm・10cm、11cm・9cm、9cm・8cmなど大型のもので、ウシの足跡と推定される。深さは3～4cm程度であり、支持層(当時の地面)が相当軟弱であったことが推定される。

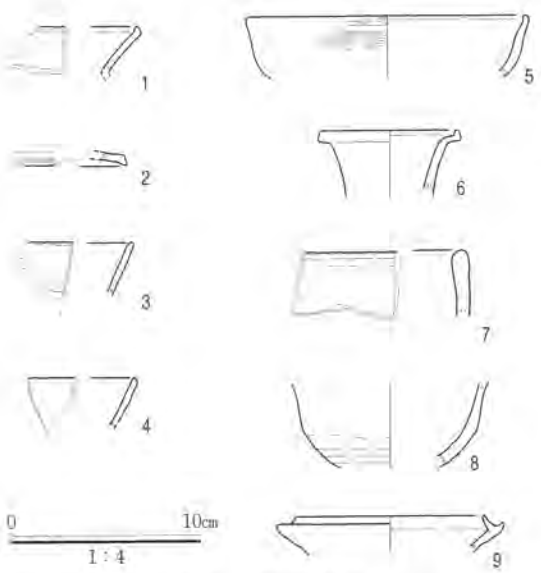


図7　遺物実測図
第9層(1)、第7層(2～4)、第6層(5・6)、
第4～5層(7)、第2層(8・9)

土手の東側はボーリング資料に基づけば西側より1mほど低くなる。第10層を覆う第9層が東から西に流れていること、西方約300mに巽北分流路跡の沖積リッジがあること、を考慮すれば、東側低所を河川が流れていた蓋然性は高い。規模は小さいが、水田の畦畔ではなく土手と考えられる所以である(図6)。この土手は西側地域、巽北分流路跡に立地したと推定される集落を河川の氾濫から護るために施工された土木施設の一部と考えられる。

第10層を覆う第9層から出土した1は庄内式土器甕の口縁部である。端部は上方へ軽くつまんでいる。弥生時代後期末の土器である。なお、ウシの足跡の埋没年代は飛鳥時代と推定されるが、少なからず出土した庄内式土器の年代を考慮すると、10層上面の存続期間は弥生時代後期末までは遡ると考えられる。

第8層上面で多数の偶蹄類の足跡を検出した。足跡は足印長・足印幅が12cm・11cm、11cm・9cm、10cm・9cm、10cm・8cmなど大型のもので、ウシの足跡と推定される。畦畔は見つかっていないが、第8層が多少なりとも攪拌されているので、作土の上面でウシが歩き回ったと考えられる。

第8層を覆う第7層から出土した2・3は須恵器である。2は杯蓋の口縁部で、端部は断面三角形に近い。3は杯の口縁部である。4は黒色土器椀の口縁部である。外面の上半部のみ黒色を呈する。以上は2・3が8世紀、4は10世紀頃のものであろう。

b．奈良から平安時代

第7層上面には、調査区北東側に北西－南東方向とこれに直交する北東―南西方向で限られる区画があり、南西側よりもわずかに高い。また、南西側にも肌理の異なる区画がある。第7層が作土層であることから、これらの区画は、第6層耕耘時に削られた水田畦畔の名残と考えられる。また、上面には水田面と偶蹄類の足跡を多数検出した。跡は足印長・足印幅が14cm・11cm、11cm・11cm、10cm・10cmなど大型のもので、ウシの足跡と推定される。

第6層下面のSD02は幅0.2m、深さ0.1m足らずの溝で、長さ1.9mを検出した。埋土は第6層堆積物と同質のシルト質砂である。西北西－東南東方向に延び、第7層上面の区画とは若干斜交するが、東側で2股に分岐するようすからは、第6層耕耘時の犂溝が重なった耕作痕跡であろうと思われる。

第6層から出土した5は土師器杯である。口縁端部を内側へ肥厚させる。磨滅のため暗文の有無は不明である。6は須恵器壺の口縁部である。端部は外反したのち上方へつまんでいる。以上は8世紀頃のもので、第7層から遊離した資料であろう。

なお、第7層を覆う第6層から上位は、氾濫堆積層である第3層を除いて基本的に作土層であり、当該地域は現代まで長く田園地帯であったと考えられる。

c．中世

第４～５層から出土した7は土師器鉢の口縁部と思われる。口径は25～26cm程度に復元される。外面は灰黄色、内面は灰色を呈する。10～11世紀のものであろう。

d．近代

SK01は第２層上面の北西－南東に延びる土壙である。幅1.8m、長さ2.5m以上、深さ1.2mの規模であり、下部0.9mは多量の泥偽礫と基質の暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質泥が埋め、上部0.3mは偽礫の少ないやや砂質の泥である。偽礫は第４・５層堆積物に由来するものが多い。農閑期に掘られたのであろうか。

第２層から出土した8は肥前陶器碗の体部で、灰釉を施す。17世紀後半のものであろう。9は須恵器杯身で、口径は9.9cmを測る。TK209型式に属し、７世紀前葉のものであろう。下位層からの遊離資料である。

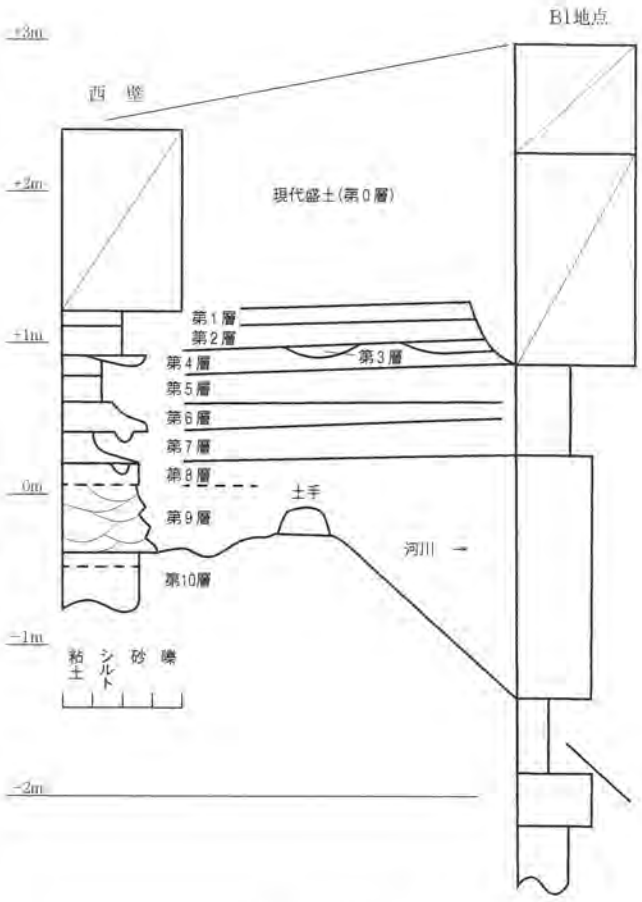


図８　柱状図対比

3)まとめ

当該地域はこれまで遺跡の包蔵状況は明らかでなかったが、この調査で弥生時代末～近代にかけての遺跡であることが明らかとなった。平面調査で検出した遺構面は古墳時代から古代の３面であり、生産遺構が２面、土木遺構が１面である。また河川が調査区の東側を流れていたと推定され、西側にある平野川の分流路跡である巽北分流路に集落が立地した可能性がある。これらは今後の調査で明らかになるであろう。

文献

大阪市文化財協会2007、「巽東３丁目における埋蔵文化財発掘調査(TA07－１)報告書」

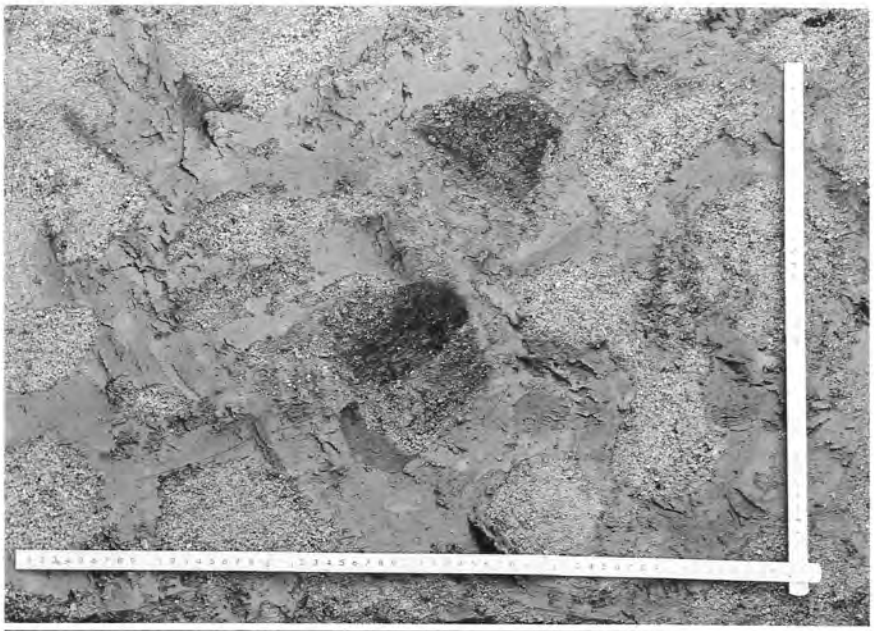
建設省国土地理院1983、『土地条件調査報告書(大阪地区)』

調査区全景
（第７層上面：西から）

飛鳥時代頃の土手
（第10層上面：南東から）

土手断面
（同上：南から）

砂(第９層)で埋まる
偶蹄類の足跡
(第10層上面)



飛鳥時代頃の偶蹄類の足跡
(第８層上面：南から)

奈良～平安時代の水田面
と地層断面(第７層上面：
北西から)

城東区関目六丁目における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(SE11－１)報告書

調 査 個 所　大阪市城東区関目6丁目38
調 査 面 積　126㎡
調 査 期 間　平成23年9月8日～9月15日
調 査 主 体　財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南秀雄、田中清美

1)調査に至る経緯と経過

調査地は弥生時代中期および古墳時代中期の集落遺跡として知られる森小路遺跡の西南に位置している。本調査に先立って行われた大阪市教育委員会の試掘調査で、中世の遺物を含む地層が確認されたため、本調査を実施することになった。

調査は市教委から指定された範囲内の近現代の盛土(第0層)および近現代の作土層(第1層)を重機で除去した後、第2層から人力掘削を行った。第3層は中世の遺物包含層であったので、遺物の採集をしながら慎重に掘り下げて基底面で最初の遺構検出をした。本層の下面では第2層の作土層から踏み込まれた偶蹄類の足跡群が見られたほか、調査区の西部で土壙と溝を検出した。引き続き遺構ならび地層の調査を行い、実測図や写真で記録した。9月13日から調査区の東北で深掘りを行って層序の検討を行った。9月15日に調査区を埋め戻し、調査器材を搬出してすべての調査を完了した。

また、基準点はmagellan社製ProMark3により測位し、図1・2・5の方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・図中ではTP+○mと記した。

2)調査の結果

i)層序

本調査では近現代の層厚約1mの盛土(第0層)下を、第1～6層に区分した(図3・4)。

第1層:黒褐色(2.5Y3/2)極細粒砂質シルトからなる近現代の作土層で、層厚は10～20cmある。本層上面の標高はTP+0.8mで、ほぼ平坦な面をなしている。

第2層:オリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルトからなるグライ化が進んだ作土層で、植物の根痕が多

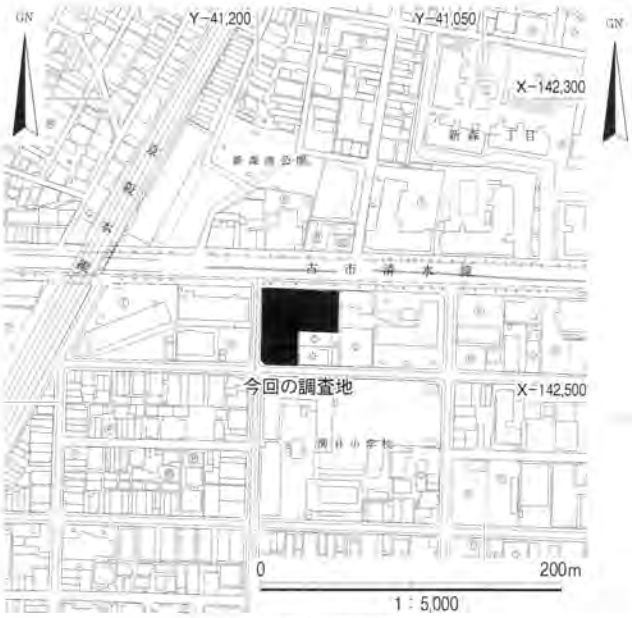


図1　今回の調査地

図2　調査区の配置図

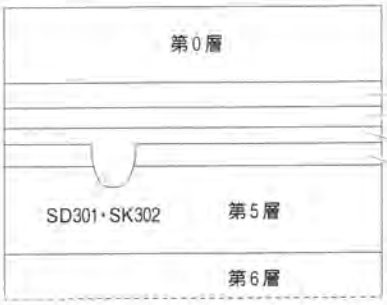


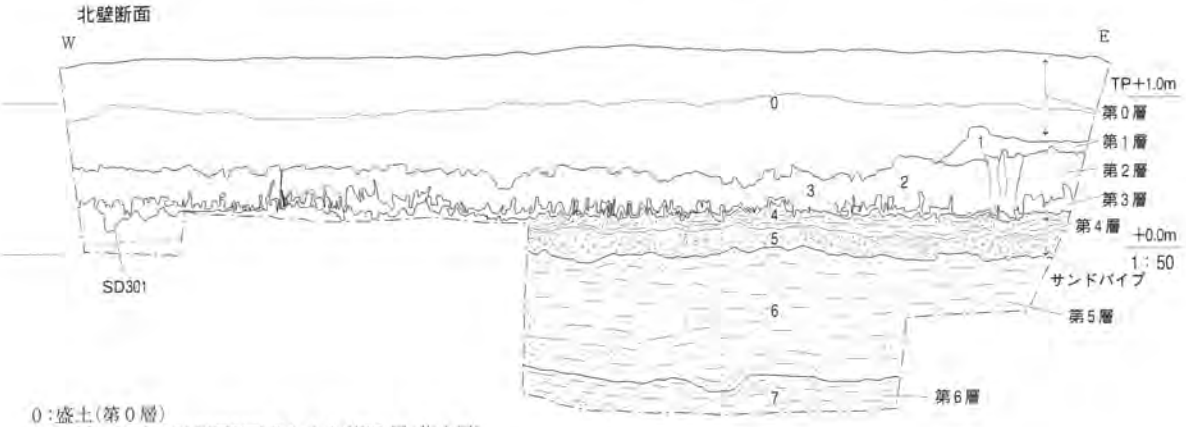
図3　地層と遺構の関係図

く見られる。本層の層厚は50～70cmあり、15世紀後葉の瓦質土器羽釜(図7－2)、18～19世紀の肥前磁器や瓦の細片を含む。

第3層：黒色(7.5Y2/1)極細粒砂質シルト～シルトからなる暗色帯で、層厚は10～20cmあるが、上位層からの踏込で変形した部分が多い。上面の標高はTP+0.3m前後あり、東から西に向かってわずかに傾斜している。

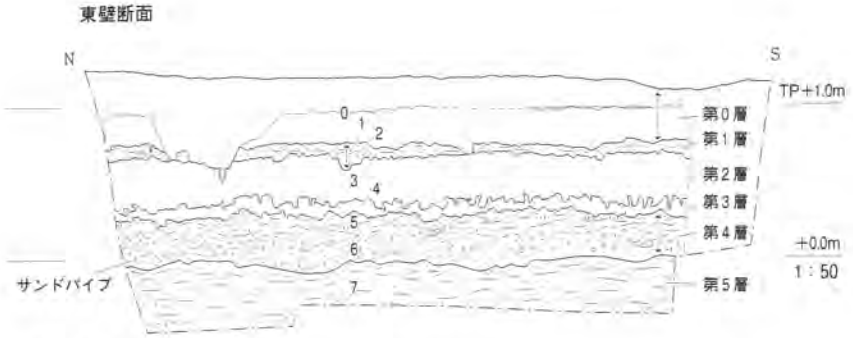
第4層：本層は黒褐色(2.5Y3/2)シルト質細粒砂～細粒砂および灰オリーブ色(5Y4/2)細粒砂からなる水成層で、層厚は30cm前後ある。上部層に植物遺体を多く含む。下部層にはサンドパイプが見られた。本層上面で第3層内の遺構であるSD301およびSK302を検出した。

第5層：灰色(7.5Y4/1)シルト質細粒砂からなる水成層で、層厚は80cm前後ある。



0：盛土(第0層)
1：黒褐色(2.5Y3/2)極細粒砂質シルト(第1層：作土層)
2：オリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルト(第2層：作土層：植物の根の跡が多く見られる)
3：オリーブ黒色(5Y3.5/1)極細粒砂質シルト～シルト(第3層：暗色帯)
4：オリーブ黒色(5Y3/2)シルト質細粒砂～細粒砂(第4層：水成層)
5：灰色(5Y4/1)細粒砂混りシルト質細粒砂(第4層：水成層：植物の遺体を多く含む)
6：灰色(7.5Y4/1)シルト質細粒砂(第5層：水成層)
7：オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質極細粒砂(第6層：水成層：植物の遺体を多く含む)

0　5m
1：100



0：盛土(第0層)
1：オリーブ黒色(5Y3/2)極細粒砂質シルト(第1層：作土層)
2：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘土質シルト(溝)
3：オリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルト(第2層：作土層：植物の根の跡が多く見られる)
4：黒色(7.5Y2/1)極細粒砂質シルト～シルト(第3層：暗色帯)
5：黒褐色(2.5Y3/2)シルト質細粒砂～細粒砂(第4層：水成層：植物の遺体を多く含む)
6：灰オリーブ色(5Y4/2)細粒砂(第4層：水成層)
7：灰色(7.5Y4/1)シルト質細粒砂(第5層：水成層)

0　5m
1：100

図4　北・東壁地層断面図

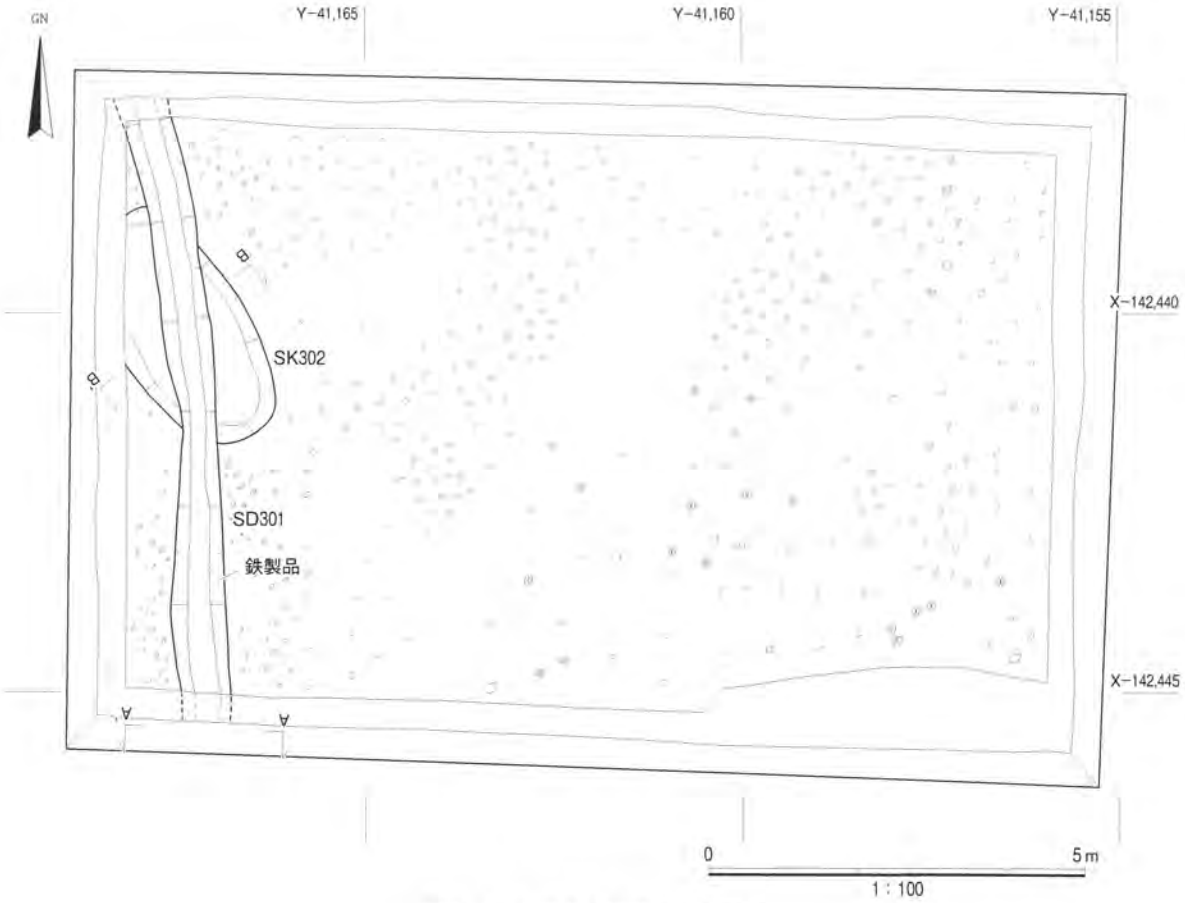
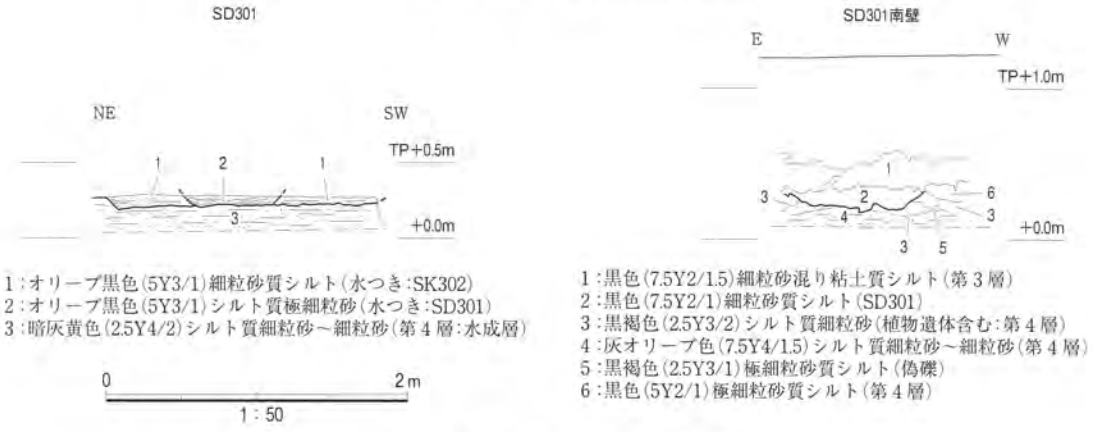


図5　第4層上面検出遺構配置図



1：オリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂質シルト(水つき:SK302)
2：オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質極細粒砂(水つき:SD301)
3：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂～細粒砂(第4層:水成層)

1：黒色(7.5Y2/1.5)細粒砂混り粘土質シルト(第3層)
2：黒色(7.5Y2/1)細粒砂質シルト(SD301)
3：黒褐色(2.5Y3/2)シルト質細粒砂(植物遺体含む:第4層)
4：灰オリーブ色(7.5Y4/1.5)シルト質細粒砂～細粒砂(第4層)
5：黒褐色(2.5Y3/1)極細粒砂質シルト(偽礫)
6：黒色(5Y2/1)極細粒砂質シルト(第4層)

図6　SD301・SK302断面図

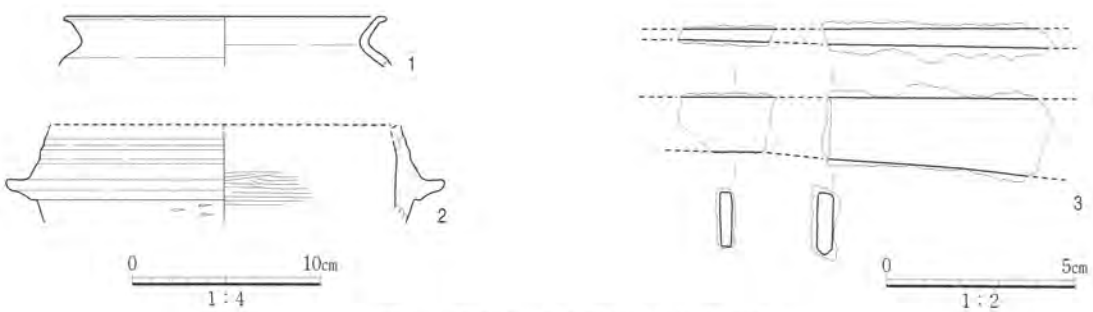


図7　SD301・第3層出土遺物実測図
(1・3：SD301、2：第2層)

第６層：オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質極細粒砂からなる水成層で、層厚は30cm以上ある。

ii)遺構と遺物

本調査では第４層の上面でSD301およびSK302を検出したが、ともに上位層からの踏込の影響を受けており、残りは良くなかった(図５)。

SD301　調査区の西南部に位置する南北方向の溝で、幅0.3～0.5m、深さ0.2m前後ある(図５)。溝内には水つきのオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質極細粒砂～黒色(7.5Y2/1)細粒砂質シルトが堆積しており、土師器１や鉄製品３が出土した(図６・７)。

１は口縁部が丸い頸部から短く開く土師器甕で、口縁端部を水平におさめている。色調は灰黄褐色を呈し、胎土中に微細な長石・石英・雲母粒を含む。平安時代後葉～末に属するものであろう。３は器体の両端を欠損した用途不明の鉄製品で、片方が細くなっている。背は平坦に整えられているが、反対側に刃を付けた形跡は見られない。

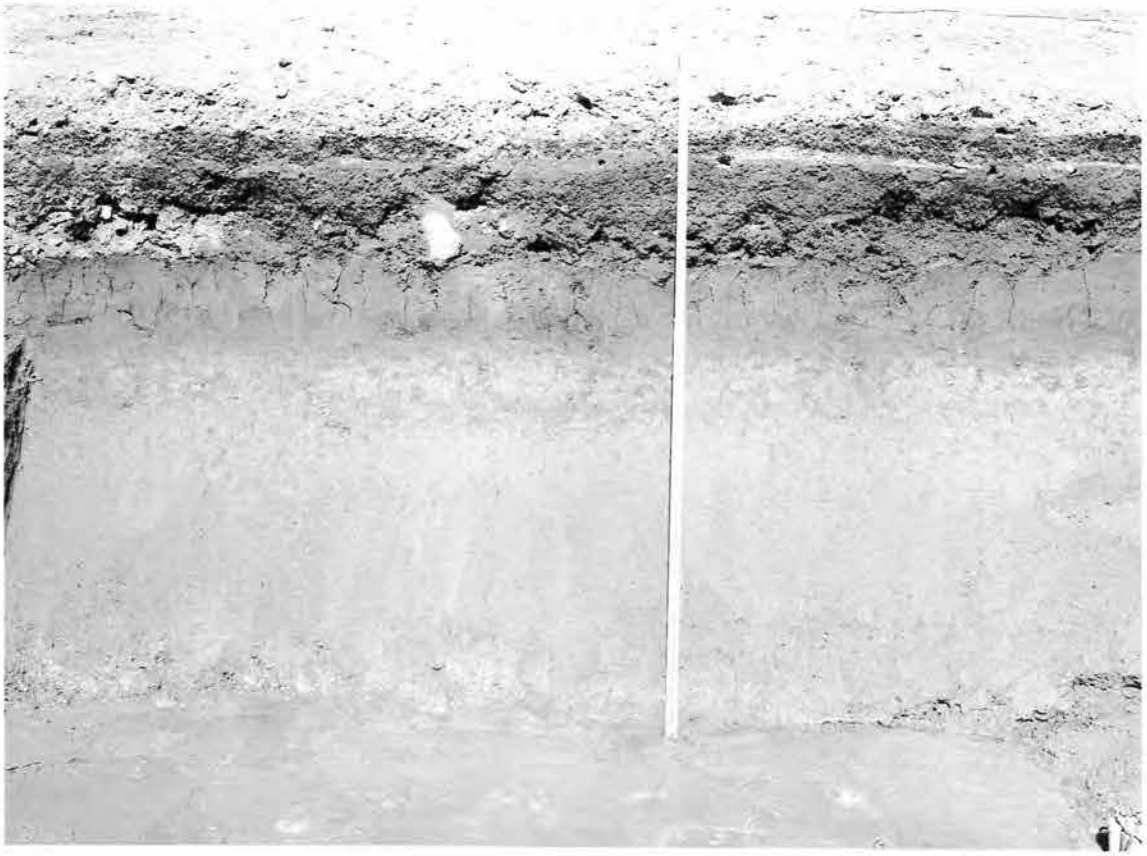
SK302　調査区の西北部に位置する0.8m、南北約1.7mで、平面形が小判形の土壙である。埋土は水つきのオリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂質シルトである。中央をSD301に掘り込まれていた。遺物は出土しなかった。

３)まとめ

今回の調査では、平安時代後葉～末の遺物を含むSD301およびこれと切り合い関係にあるSK302を検出した。これらの遺構は検出面が同じで、埋土も酷似することから時期差はさほどないものと考えられる。遺構の周りには生活に係わる遺構は見られないが、偶蹄類などの足跡群があった。これらの多くは第２層の耕作に係わる牛馬の足跡であったが、一部はイノシシの可能性のあるものもあった。

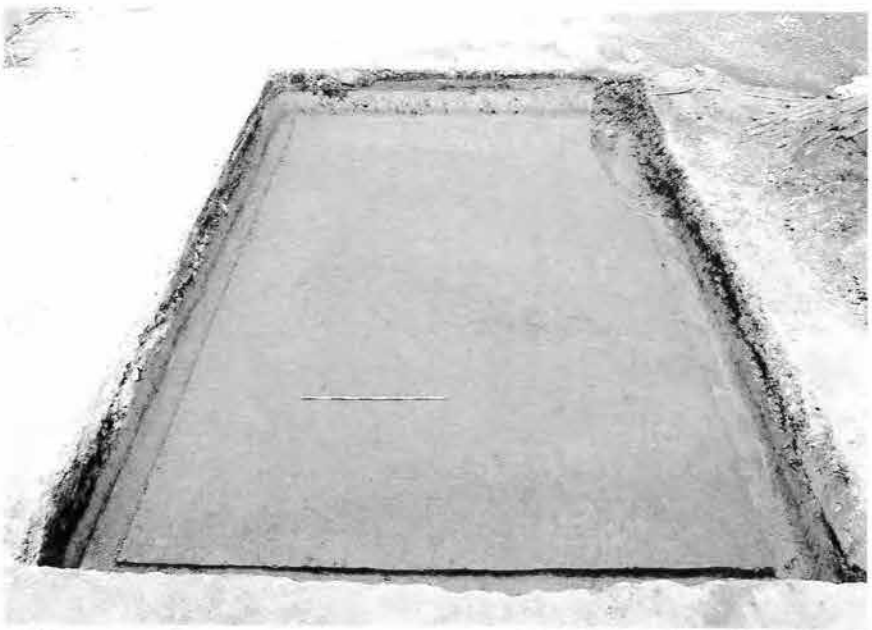
調査地は古代には離水した環境にあり、その後は生産域になっていた可能性が高い。その具体的な状況については今後の調査資料の蓄積をまって検討したい。

東壁地層断面(西から)

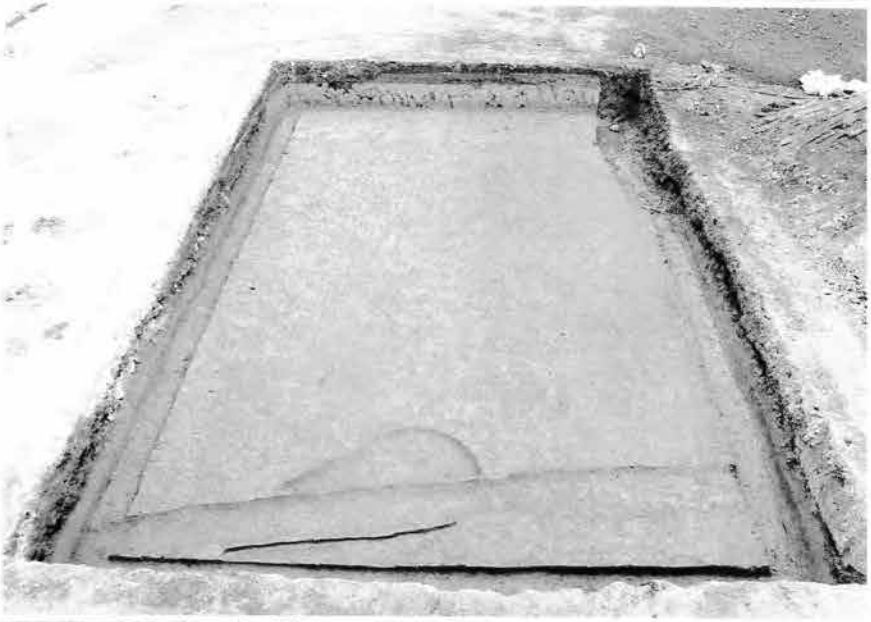


北壁地層断面(南から)

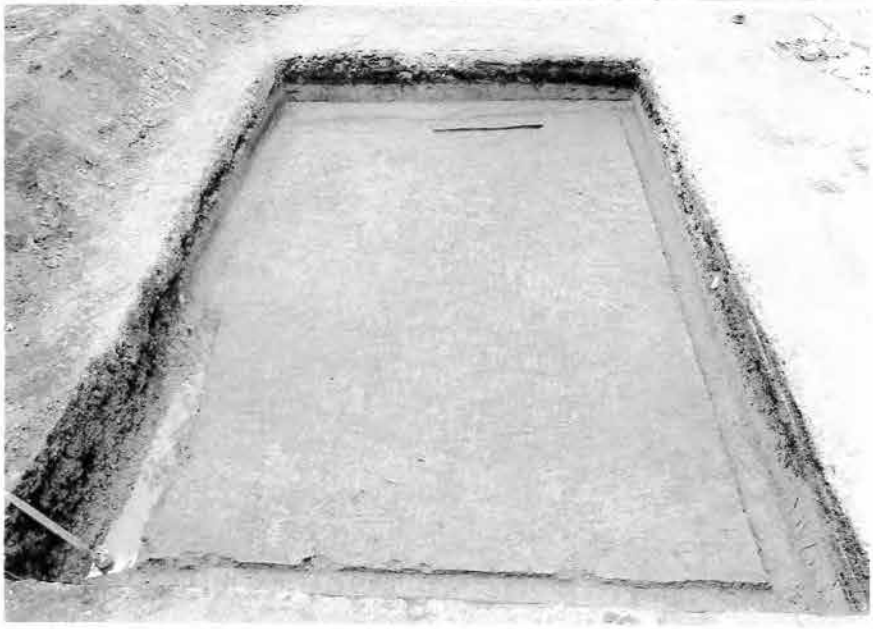
第４層上面の
遺構検出状況
（西から）



第４層上面の遺構全景
（西から）



第４層上面の遺構全景
（東から）



阿倍野区阿倍野筋二丁目における建設工事に伴う
阿倍野筋北遺跡発掘調査(AS11－１)報告書

調 査 個 所　大阪市阿倍野区阿倍野筋２丁目30－２
調 査 面 積　60㎡
調 査 期 間　平成23年５月16日～５月19日
調 査 主 体　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄

1)調査に至る経緯と経過

調査地は、7世紀後半創建と推定される阿倍寺跡の推定外郭から西へ約100mに位置する(図1)。阿倍寺跡については、第二次世界大戦前に松長大明神境内から塔の心礎が見つかり、北には金堂跡と推定される方形の土壇があった。近年、松長大明神の北隣を発掘し(AB09－1次)、古代に遡る軒丸・軒平瓦のほか多量の丸・平瓦片が出土した。北側では(AB98－6次)、寺域の北端を画する防御用とみられる14～16世紀前半の大溝が発掘されており、阿倍寺は中世後期まで何らかの命脈を保っていた可能性が考えられている。

調査地から北約100mのAS06－3次調査では、北で東へ45～50度振る豊臣後期から近代の溝が重なって見つかり、現在も残る再開発前の道路の方向と似ていることから、中世末以降の地割に関係すると考えられる。

阿倍野筋の西側では(AS07－1次)、西南西方向へ開く谷内の川から15世紀の卒塔婆が多量に出土して注目を集めた。また、阪神高速道路松原線を南に越えた阿倍野筋南遺跡では、弥生時代末～古墳時代前期を中心とする集落が発見されており、その時期の可能性のある遺構が、調査地から南西約100mのAS10－3次調査地にもある。

調査地周辺では上記のような各時代の遺跡が見つかっており、大阪市教育委員会が行った試掘調査で中世以前の遺物包含層が確認されたことから、本調査を行うことになった。調査したのは敷地ほぼ中央の南北15m、東西4mの範囲である(図2)。

本報告では方位は座標北を基準とし、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋○mと記した。

図1　調査地位置図

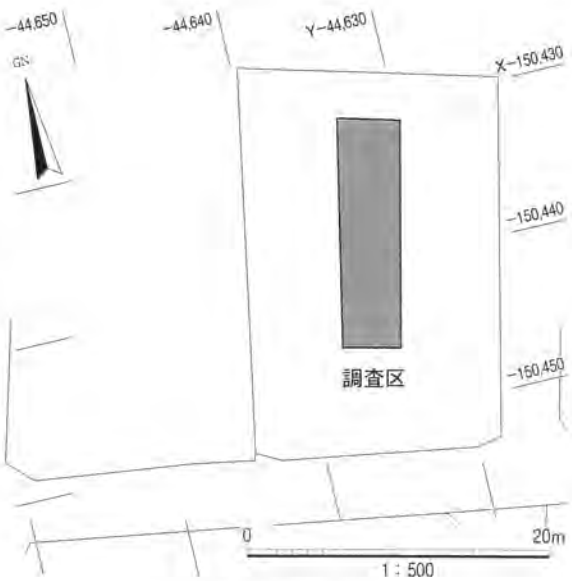


図2　調査区位置図

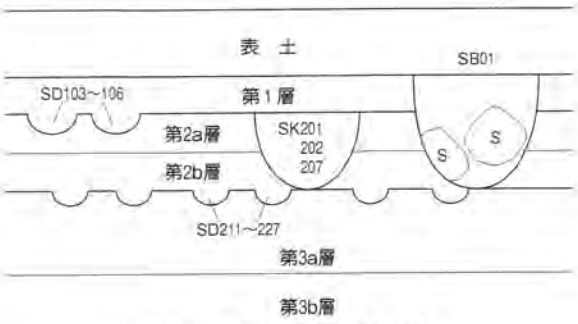


図3　地層と遺構の関係図

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

第1層：褐色(10YR4/4)中粒砂層で、最大層厚12cmである。調査区の南半に分布する。本層下面でSD103~106を検出した。江戸時代後半以降の畠の作土である。

第2a層：にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂質シルト層で、最大層厚10cmである。2b層に比べて砂質である。本層上面でSK201・202・207を検出した。

第2b層：褐色(10YR4/4)中粒砂質シルト層で、層厚は8~20cmである。本層下面でSD211~227を検出した。

第2層からは土師器皿1、瓦質土器釜2が出土し、第2a層からは土師器皿3、瓦質土器の鍋4が出土した。第2層は中世の作土層で、時期は判然としないが、14~15世紀まで下るのであろう。

第3a層：黄褐色(10YR5/6)シルト~粘土層で、層厚は15~30cmである。当地のいわゆる地山で、第3a層の存在から後世の削平をさほど受けていないと推測される。

第3b層：明褐色(7.5YR5/8)シルト層で、層厚は30cm以上である。

ii)遺構と遺物(図5)

a．中世の遺構

第2b層下面で平行する鋤溝SD211~227を検出した。幅0.10~0.20m、深さ0.01~0.04mで、方向は東で南へ14~15度振っている。幅が広く見えるSD217・218・226は、いくつかの溝が重なっていると考えられる。

b．近世以降の遺構

第2a層上面で検出したSK201・202・207がある。いずれもごく少量の出土遺物しかないが、SK201・202は確実に江戸時代で、SK207は中世に遡る可能性もある。SK201は長さ0.95m以上、幅0.65m、深さ0.20mで、埋土はにぶい黄褐色(10YR5/4)シルト~粘土の偽礫などである。SK202は長さ0.90m、幅0.85m、深さ0.22mで、埋土は砂礫を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト~粘土の偽礫などである。SK207は0.65~0.75mの円形で、深さ0.10mである。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質細粒砂である。

SD103~106は第1層下面の平行する溝で、多数の小さな凹みがある。これらは農具による掘削痕で、溝は第1層を作土とする畠の耕作に関係すると考えられる。幅0.35~0.55mで、深さは凹みでも0.03~0.10mである。方向は東で南へ37~38度振っており、中世の鋤溝と異なっている。方向は北側

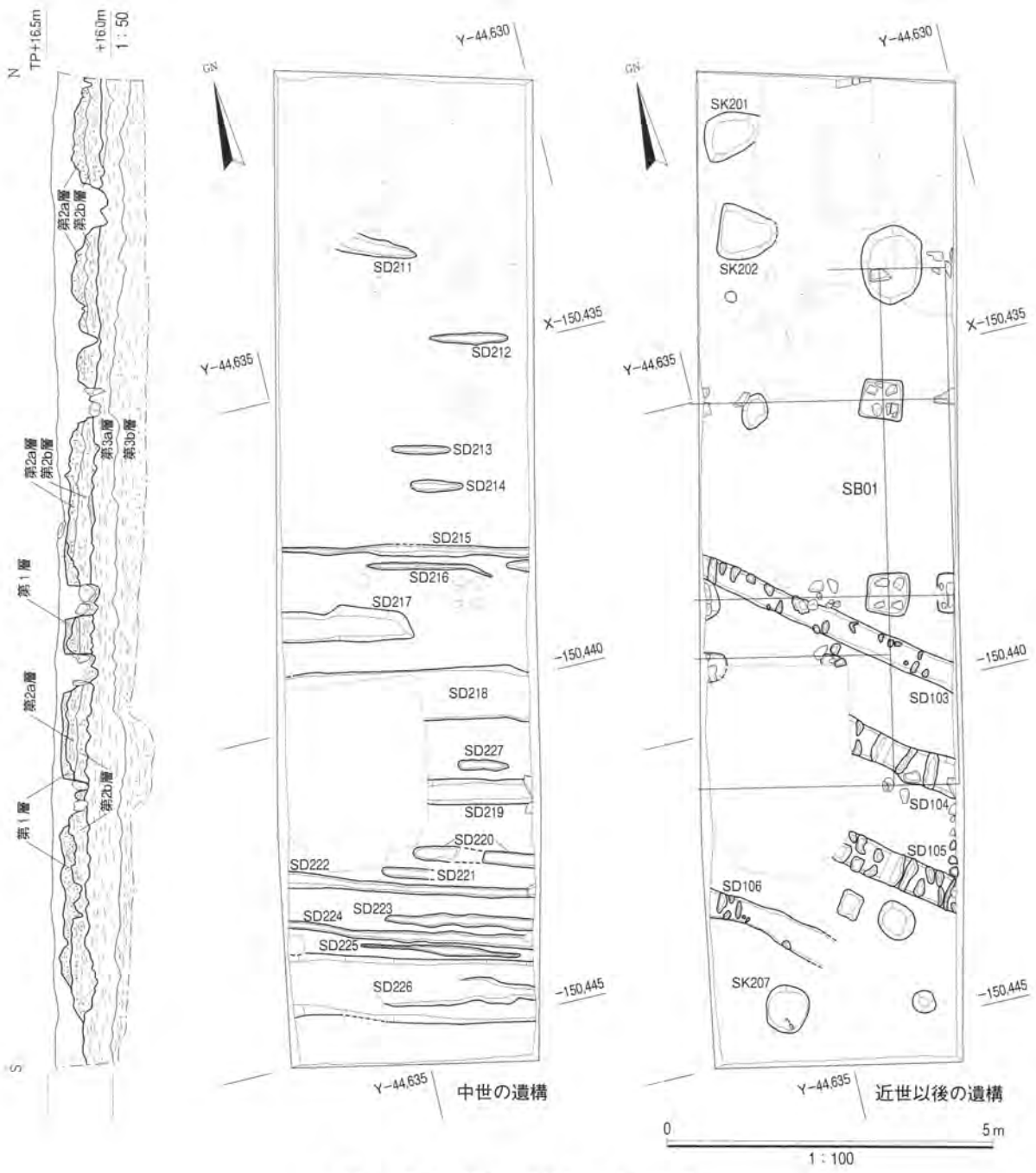


図４　西壁地層断面図および遺構平面図

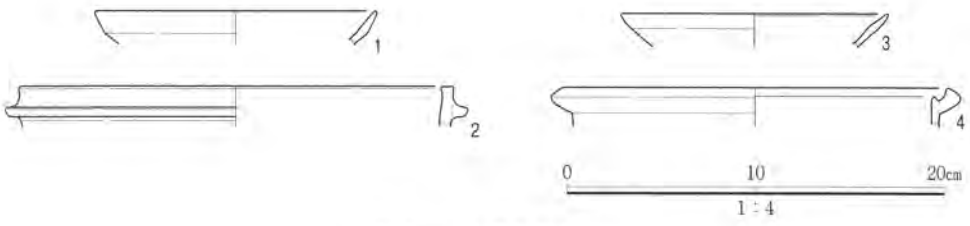


図５　出土遺物実測図
第２層（１・２）、第2a層（３・４）

のAS06－３次調査の豊臣後期から近代の溝と近い。

SB01は、穴を掘って間知石などを入れて基礎とした建物である。明治時代以降と推定される。

３）まとめ

調査地点は中世から近世の間、耕作地となっていた。耕作痕の方向から、中世と近世の間で周辺の地割の方向が変わった可能性がある。また、阿倍寺跡に関係する瓦等の遺物は見られず、寺域の推定西ラインと齟齬はない。

地山や中世の地層の残存状況は良好で、周辺に中世以前の遺構があれば十分に残っていると推定される。

中世(第２層下面)の遺構
(南から)

近世(第２層上面・第１層下面)の遺構
(南から)

阿倍野区文の里一丁目における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(FM11－１)報告書

調 査 個 所　大阪市阿倍野区文の里1丁目18・19
調 査 面 積　100㎡
調 査 期 間　平成23年12月12日～12月17日
調 査 主 体　財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、趙 哲済

1)調査の経緯と経過

調査地は古代の古道とされる難波大道跡の隣地に当り、周辺には松崎町遺跡・桑津遺跡といった弥生時代～近世の集落遺跡が分布している地域である。

平成23年８月23日、当該地で大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下0.4m以下の深さで中世～近世の遺物包含層および遺構面を検出した。そこで、遺構面の年代や遺構遺物の分布状況、当該期における開発やその後の土地利用状況など、この地域の歴史的変遷を復元する基礎資料を得ることを目的にして、本調査を実施することになった。

調査では、重機により現代盛土と旧作土層(後述の第１層)を掘削した後、人力で掘り下げ、遺構と遺物の検出に努めた。併せて平面図・断面図、写真撮影による記録保存を行った。当初、重機掘削は深さ0.4m程度まで、人力による遺構の精査は深さ１m程度までと設計されていたが、調査時までに表層部が若干削られていて現代整地層が0.1～0.3mと薄く、また、規模の大きな遺構もなかったので、人力による精査は深さ0.4mまでで済んだことにより、調査は予定より短期間で終了した。

本報告書で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。また、水準は東京湾平均海面値を用いてTP+○mと記している。

2)調査結果

ⅰ)層序

本調査地の現地表は、TP+8.1～8.2mであり、地盤高よりTP+7.5mまでの地層を第１～５層に区

図１　調査地位置図

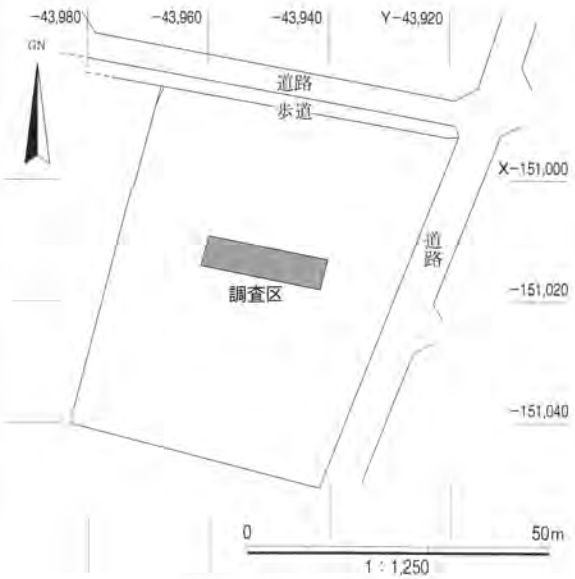


図２　調査区配置図

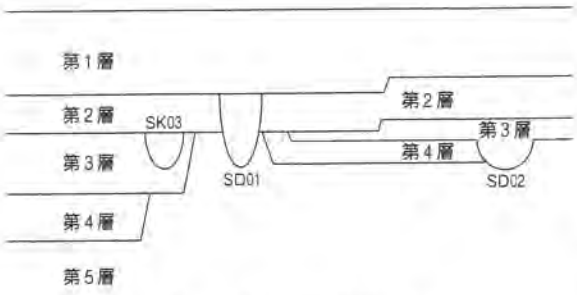


図3　地層と遺構の関係図

分した。

第1層は現代盛土層・整地層、攪乱埋土であり、層厚は0.1～0.2mであった。

第2層はオリーブ褐色(2.5Y4/3)でわずかに砂質シルトからなる旧水田の作土層である。層厚は10cm前後で、全域に分布した。上面で溝SD01を検出した。

第3層は浅黄色(2.5Y7/3)の中粒砂質シルトからなる近世～近代初めの水田の作土層である。層厚は10cm前後で、東部の段の下側と西部に分布した。下面で南北方向の犂溝とSD02を検出した。本層からはいづれも小片であるが、肥前磁器・瀬戸美濃焼磁器・関西系陶器、火打石、金属片などの近世～近代初頭の遺物のほか、弥生時代の石鏃、土師器・須恵器・瓦器・古瀬戸・古代瓦などの弥生時代～中世の遊離遺物も出土した。

第4層は明黄褐色(10YR6/8)泥からなる水田の作土層である。層厚は10cm前後で、東部の段の下側と東部に分布した。下面の犂溝は明瞭で南北方向であった。瓦器・瓦質土器・古瀬戸などの中世遺物のほか、土師器、須恵器などの古代に遡る遊離遺物も出土した。

第5層は灰黄色(2.5Y7/2)粘土質シルトからなる段丘構成層である。層厚は40cm以上で下限は未確認である。裂痕が著しい。

ii)遺構と遺物

a．遺構

東部の第5層上面で検出した段は南北性であり、上町台地の東緩斜面に調和して、西が高く東が最大で0.2m低い。この段は水田の区画とみられ、第3～2層でも2m前後ずつ西に移動しながらも踏襲されている。

SD02は第3層下面の南北溝である。幅0.3m、深さ0.1m未満である。層準は異なるが、後述するSD01とは約10m、ちょうど方形の一畝(せ：アール)の一辺分が隔たっており、畔に沿う溝と考えられる。

SK03は断面で確認した第3層上面の土壙である。東西幅は0.5m以上で0.8m未満、南北幅の最小は0.4mのトレンチ幅より狭く、調査区の南に続いている。遺構の形状に調和したラミナをもつ明黄褐色(2.5Y7/6)のシルトが埋めている。

SD01は第2層上面の南北溝である。幅0.5m強、深さ0.3mであり、上述したように、畔に沿う溝と考えられる。第3層とよく似た砂質シルトが埋めている。軟質施釉陶器の柿皿や遊離資料である土師器片が出土した。

b．包含層出土遺物

1は第4層から出土した中国産白磁の碗である。内面には沈線を1条巡らす。2は第4層から出土した古瀬戸で、深皿と思われる。3は第3・4層から出土した東播系須恵器の鉢である。口縁端部は内傾する。以上は13～14世紀頃のものであろう。4は第3層から出土したサヌカイト製の凸基式石鏃

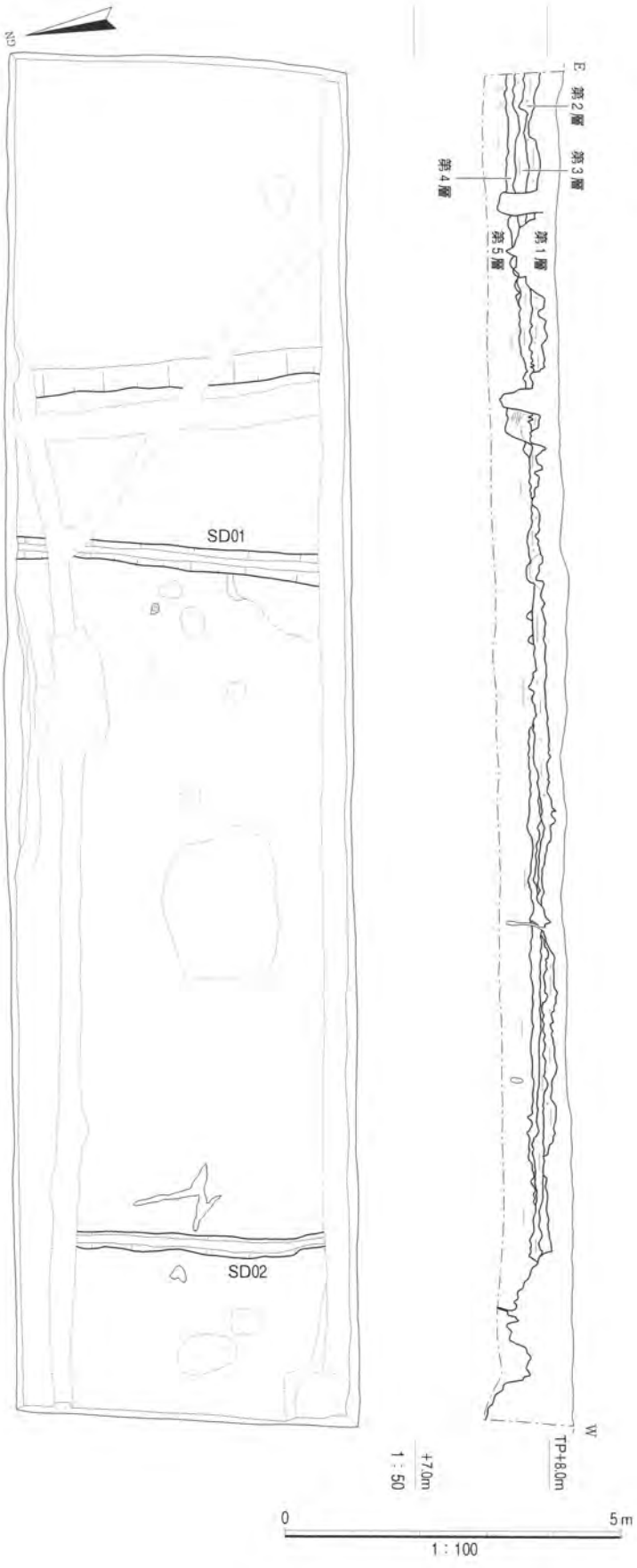


図4　遺構平面図・地層断面図

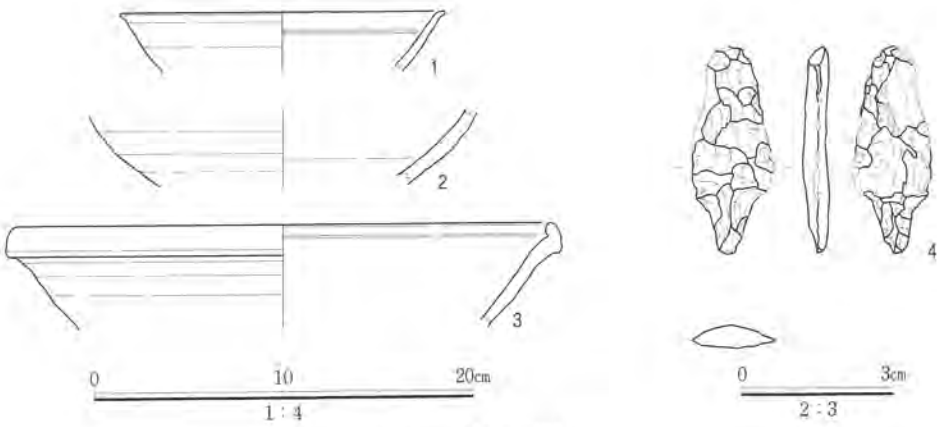


図5　遺物実測図

第4層(1・2)、第3・4層(3)、第4層(4)

である。弥生時代中期のものであろう。

3)まとめ

本調査では、中世以降の水田跡を検出した。SD01·02は畦際に掘られた溝と推定され、田筆の位置は、中世から近代へ、台地の高い西の方へ徐々に移動していることがわかった。

また、作土層の中から古代の遺物が少なからず出土した。遺構こそ見つからなかったが、古代の難波大道推定域に近い当該地付近が、かなり開けていたことが予想される。

調査地全景
（西から）

調査地全景
（東から）

地層断面（北東から）

阿倍野区播磨町三丁目における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(HC11－1)報告書

調 査 個 所　大阪市阿倍野区播磨町３丁目６
調 査 面 積　60㎡
調 査 期 間　平成24年３月21日～３月27日
調 査 主 体　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、高橋 工

1)調査に至る経緯と経過

阿倍野区播磨町所在遺跡は上町台地の中部にあって、北には北畠公園遺跡・王子町所在遺跡、西には帝塚山東遺跡などがある(図1)。この地域の調査はさほど進んでおらず、不明な点が多いが、調査地の北1200mの北畠公園遺跡では弥生時代後期の溝などの遺構が[大阪文化財研究所2011]、北900mの王子町所在遺跡では中世の作土層が、北西700mの帝塚山東遺跡では埋没した古墳時代後半期の帆立貝形前方後円墳が発見され、万代古墳と命名されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]。台地西縁に沿っては帝塚山古墳を含む「住吉古墳群」が展開したとする説もある[上田宏範1988]。上町台地上は古代においても、高燥な居住に適した環境下にあったはずで、今まで知られていない遺跡が埋没している可能性は高い。

当該地においては、建築工事に先立って大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下1.2mで縄文時代早期の土器片を含む土壙が確認されたため、本調査が行われることとなった。

調査は、試掘調査が行われた敷地の東南部にトレンチを設定して行った(図2)。掘削方法は、表土である第0層については機械掘削、それ以下の地層・遺構については人力で掘下げを行った。また、基準点はmagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

図1　調査地位置図

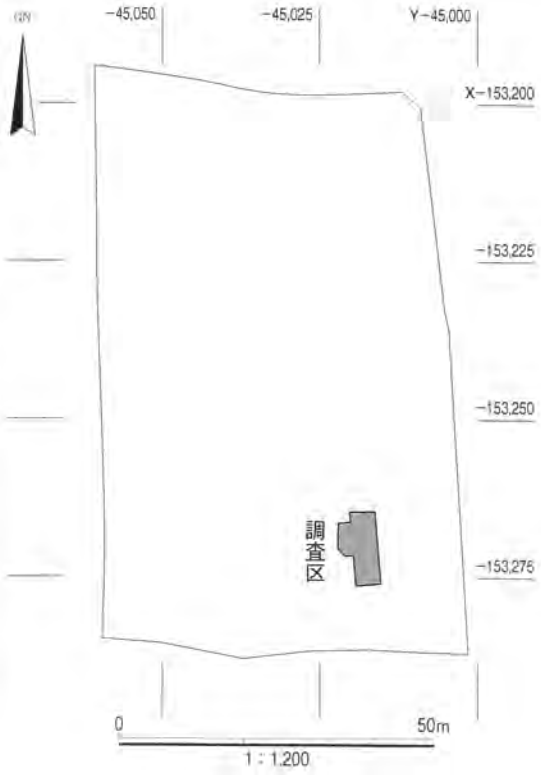


図2　調査区配置図

2)調査の結果

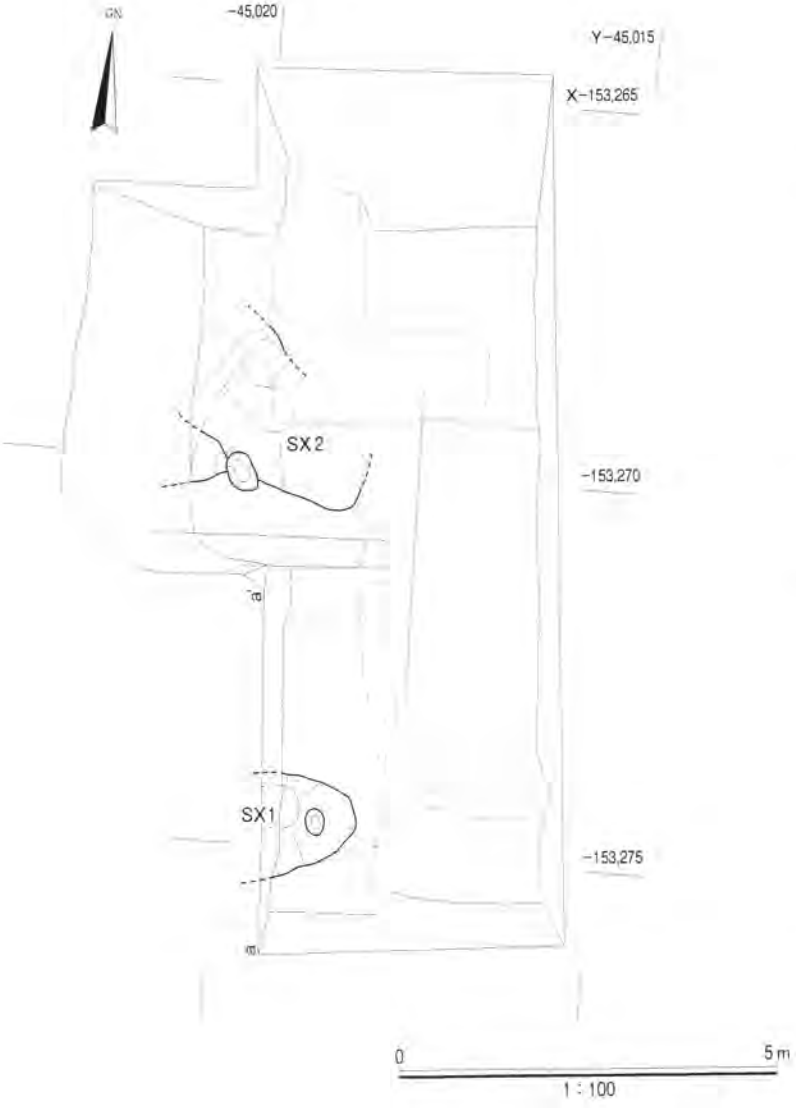
i)層序(図3・4)

調査地の現地形は平坦で、砕石やコンクリート殻を多量に含む表土(第0－1層)と地山層偽礫からなる現代の客土層(第0－2層)の下位に以下の3層を確認した。なお、調査区内は現代の土木工事による攪乱が激しく、以下の層序が遺存していたのは西南部のみであった。第0－1層からは試掘時に中世の東播系須恵器鉢の破片4が出土している。

第1層：黒褐色細礫質中粒砂からなる現代の作土層である。層厚は約10cmであった。

第2層：褐色粘土質シルトからなる地山層の土壌層位で層厚は約10cmであった。下面は漸移的で、土壌層位のB層に当る。同A層は上位層の耕作によって耕起されたものとみられる。本層の上面で倒木痕SX1・2が検出された。

第3層：黄褐色シルト～粘土質シルトからなる地山層である。上方に細粒化していた。遺存する部分で、本層上面の最高標高値はTP+8.95mであった。



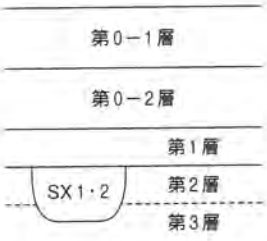


図3　地層と遺構の関係

図4　層序と遺構

ⅱ)遺構と遺物(図5)

調査区南西部の第2層上面で2基の倒木痕とみられる遺構(SX1・2)を検出した。

SX1　東西1.0m以上、南北1.3m以上、深さ0.3mの落込みである。埋土は黒色シルト～粘土質シルトで、地山層の偽礫が混じっていた。倒木によってできた木の根の穴に周囲から泥が流入したものとみられた。

SX2　東西3.3m以上、南北2.1m以上、深さ0.2mの平面形が不定形な落込みである。埋土は地山層の偽礫と黒色シルトで、SX1と同様に木の根の穴に泥が流入し、木の根に抱かれた地山層が偽礫として残ったものとみられた(写真図版下)。試掘時に縄文土器1・2が出土したのは本遺構の黒色シルトからで、本調査時にも3が出土した。

縄文土器1～3は外面に千鳥に配した小型楕円文をネガティブに刻む押型文土器で(図5、写真1)、縄文時代早期に位置づけられる。これらの土器は、帰属する地層を遊離したものでその地層は削剥されたとみられるが、本来、調査地周辺にはこの時代の遺物包含層が存在したものみてよい。

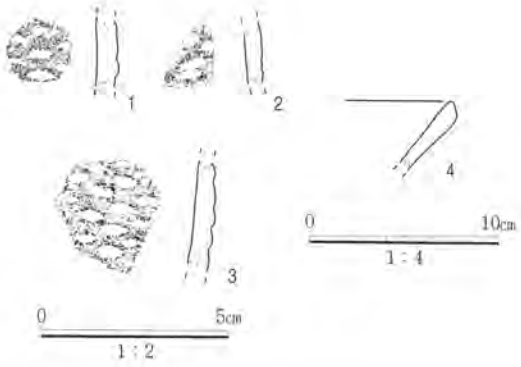


図5　出土遺物実測図
SX2(1～3)、第0－1層(4)

写真1　出土遺物

3)まとめ

本調査では、遊離資料ではあるが縄文時代早期の押型文土器を発見した。縄文時代早期の土器は長原遺跡(NG99－41次)の調査でも発見されており[大阪市文化財協会2002]、縄文土器の編年上、大阪市内では最古の例である。この土器が本来帰属する地層は周辺に遺存する可能性が高く、当時の環境を復元することは大阪の成り立ちを知る意味で重要であり、今後、調査の事例が増えることが期待される。

引用・参考文献

上田宏範1988、「大阪市の古墳」:『新修大阪市史』第1巻、大阪市史編纂委員会、pp.351－424

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005、「帝塚山東遺跡発掘調査(TE04－2)報告書」:『平成16年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp59－71

大阪市文化財協会2002、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅴ

大阪文化財研究所2011、『北畠公園遺跡発掘調査報告』

層序（東から）

SX 1・2（東から）

SX 2 断面（東から）

阿倍野区松崎町三丁目188－１・５における建設工事に伴う
松崎町遺跡発掘調査(MZ11－１)報告書

調 査 個 所　大阪市阿倍野区松崎町3丁目188－1・188－5
調 査 面 積　99㎡
調 査 期 間　平成23年11月28日～12月12日
調 査 主 体　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、谷崎仁美、白川靖祐

1)調査に至る経緯と経過

調査地は、古代から近世の集落遺跡である松崎町遺跡の域内に当る。7世紀後半の創建と考えられる阿倍寺跡の北東で行われたMZ04－1次調査では、中世の遺物包含層や中世以前の土壙などが見つかり、西側の庚申街道の成立に係わる知見を得た[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]。また、周辺には阿倍野筋北・南遺跡や桑津遺跡などが存在し、複数の時代の遺構が確認されている(図1)。

大阪市教育委員会が行った試掘調査で、現地表面下1.1m以下のところで江戸時代の遺物包含層や遺構面が検出されたため、調査を実施することとなった。調査区は東西11m、南北9mとした(図2)。また、西壁際に東西0.8m・南北2.0mの拡張区を設定した。現代盛土層と後述する第0層である近・現代の作土層とを重機で除去し、以下を人力による掘削で調査を進めた。層序ごとに遺構検出・掘削・記録などの作業を適宜行い、同年12月12日に埋戻しを含む現地におけるすべての作業を完了した。また、本報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mとした。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

調査地は、上町台地の東緩斜面に位置し、調査地周辺の道路は東へ下がる斜面をなしている(写真)。しかし、調査地は北側の道路面より1.0～1.5m程高く造成されており、現状でそのような地形を見ることはできない。現代盛土層は、約1.0～1.2mの厚みで堆積していた。

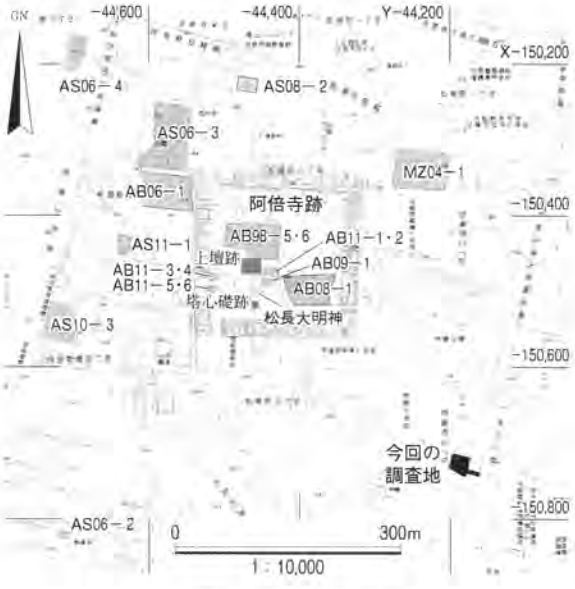


図1　調査地位置図

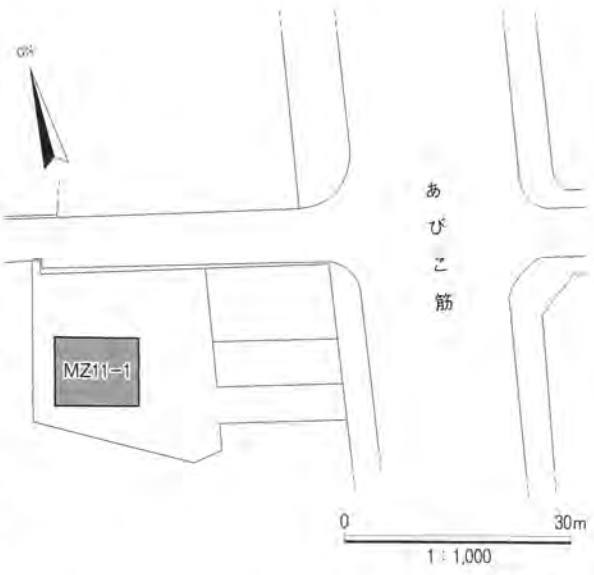


図2　調査区位置図

第０層：近・現代の作土層である。層厚は８㎝である。上部には黄灰色(2.5Y4/1)の粘土質シルトの薄層が見られ、一帯が浸水するような時期があったようである。現代の削平により平面では壁際でしか検出できず、調査対象から外した。

第１層：近世・近代の作土層である。層厚は10～20㎝である。にぶい黄褐色(10YR5/3)の中粒～極細砂層で、第２層由来の径10～20㎝のシルト質細粒砂偽礫が混じる。上面で土壙や井戸を検出した。下面では北西－南東方向の堀溝跡を検出した。土師質土器・肥前磁器・瀬戸美濃焼磁器・関西系陶器・瓦のほか、須恵器・瓦器・瓦質土器が出土した。19世紀代と考えられる。

第２層：近世の作土層である。層厚は20～35㎝である。中礫を含むにぶい黄褐色(10YR5/4)の極細粒～細粒砂層で、やや固くしまる。土師器・肥前陶器・肥前磁器・瀬戸美濃磁器・関西系陶器・萩焼・瓦のほか、須恵器・瓦器・瓦質土器が出土した。18世紀後半～19世紀前半の年代が与えられる。

第３層：近世の盛土層である。層厚は10～35㎝である。にぶい黄色(2.5Y6/4)の中礫～極粗粒砂を含む中粒～極細粒砂層である。層内に水漬きのシルト混り細粒～極細粒砂の薄層が挟在する。上面は土採りで削られている。土師器・肥前陶器・肥前磁器のほか、焼締陶器(丹波)・瓦質土器・布目瓦が出土した。18世紀後半の年代が与えられる。

第４層：近世の作土層である。層厚は５～18㎝である。明黄褐色(10YR6/6)～にぶい黄橙色(10YR7/3)の細粒～中粒砂層である。層内に水漬きのシルト質極細砂層が挟在する。下面で北東－南西方向の鍬による耕作痕跡を検出した。土師器・肥前陶器・肥前磁器が出土した。17世紀後半の年代が与えられる。

第５層：近世の作土層である。層厚は30～50㎝である。にぶい黄橙色(10YR6/3)の中粒～極細粒砂層である。上面で南北方向の耕作溝を、層内で同じく南北方向の流路を検出した。土師器・肥前陶器・肥前磁器・瓦のほか、瓦器・瓦質土器・須恵器が出土した。第４層と時期差はあまりないと考えられるが、出土遺物でははっきりしない。17世紀代としておく。

第６層：中世の盛土層である。層厚は10～65㎝である。黄褐色(2.5Y5/4)～褐灰色(10YR6/1)のシルト質中粒～極細粒砂層で、層内で鉄分が帯状に沈着する部分が多数見られた。土師器・瓦器・瓦

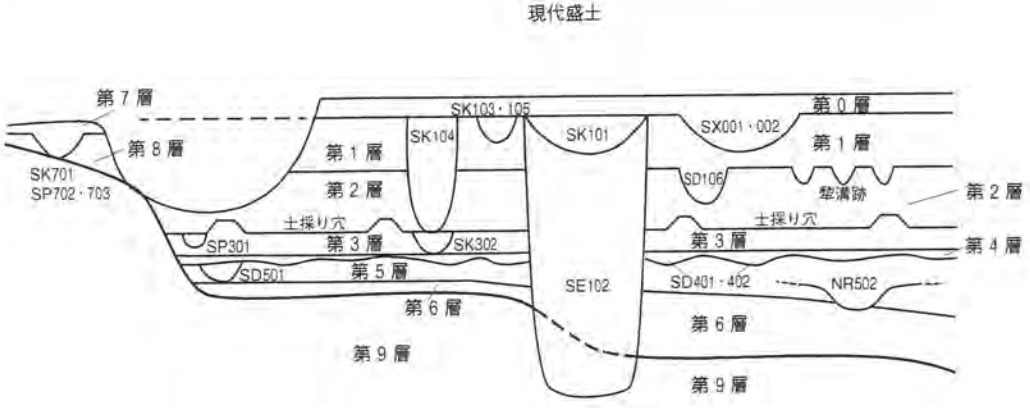


図３　地層と遺構の関係図

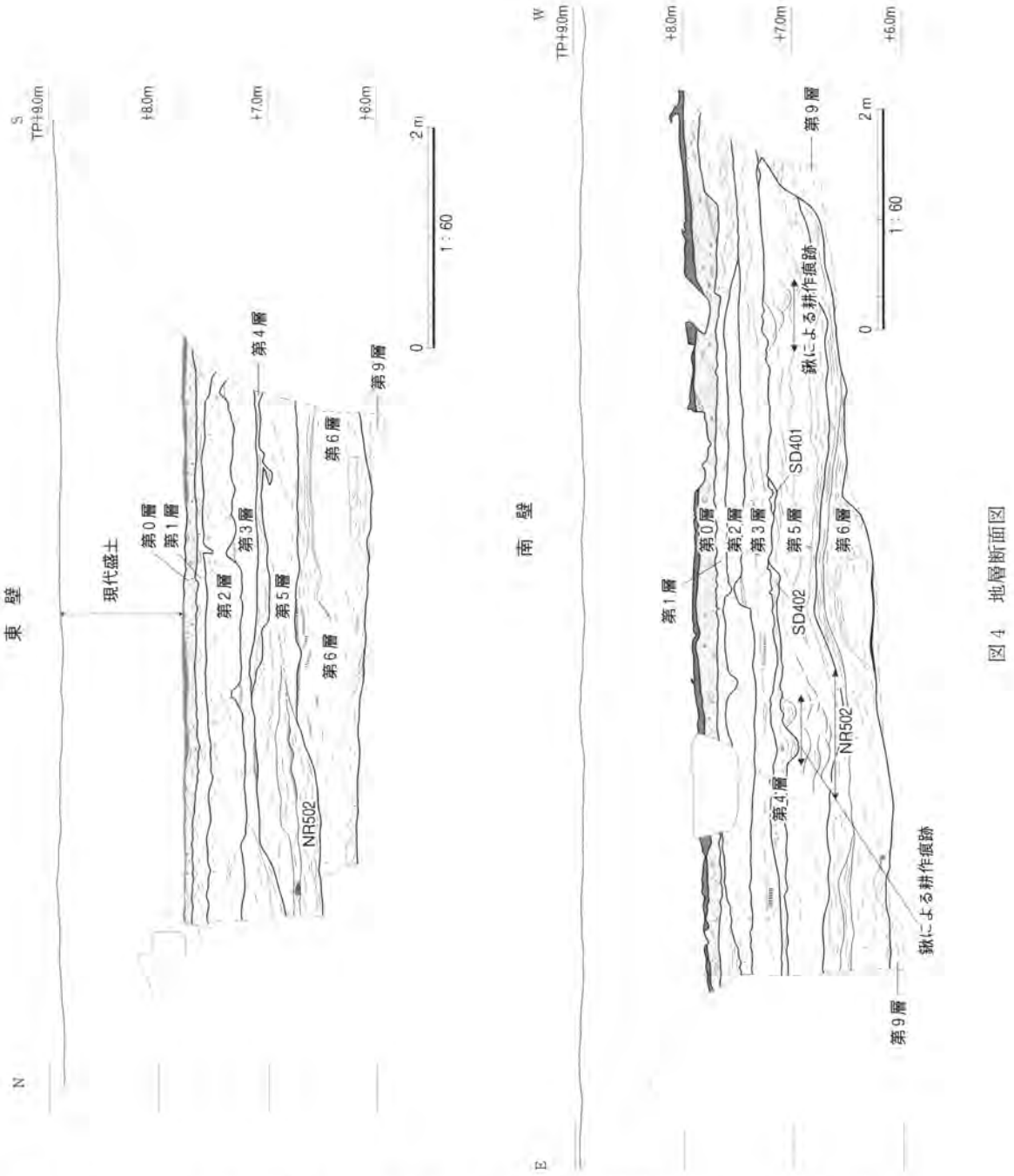


図4　地層断面図

質土器・焼締陶器(備前)・須恵器が出土した。14世紀後半～15世紀の年代が与えられる。

第7層：弥生時代の盛土層である。層厚は7～25cmである。西拡張区で確認した。にぶい黄褐色(10YR5/4)のシルト質細粒砂層で、下面で小穴や土壙を検出した。弥生時代中期末～後期初頭の土器が出土した。

第8層:弥生時代以前の盛土層である。層厚は20cmである。西拡張区で確認した。黄褐色(10YR5/6)の第9層由来の極細粒砂質シルト偽礫を含む粗粒～中粒砂層である。出土遺物はなかった。

第9層：明黄褐色(10YR6/6～2.5Y7/6)のシルト質細粒～極細粒砂層で、段丘構成層である。西拡張区では、第8層との境に鉄分が沈着しており、表土面での滞水の名残であると考えられる。よって西拡張区以西の高所では、第9層上面を大きく削平するような土地の改変が行われていない可能性が

高く、古代の遺構が良好に残存することが予想される。一方、拡張区以外では、第９層は階段状に削平されていた。

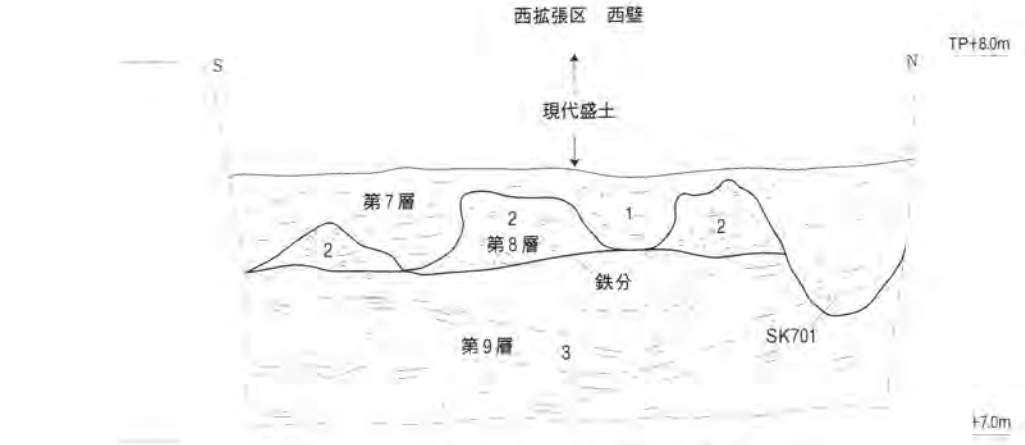
ii)遺構と遺物

a．弥生時代の遺構(図５)

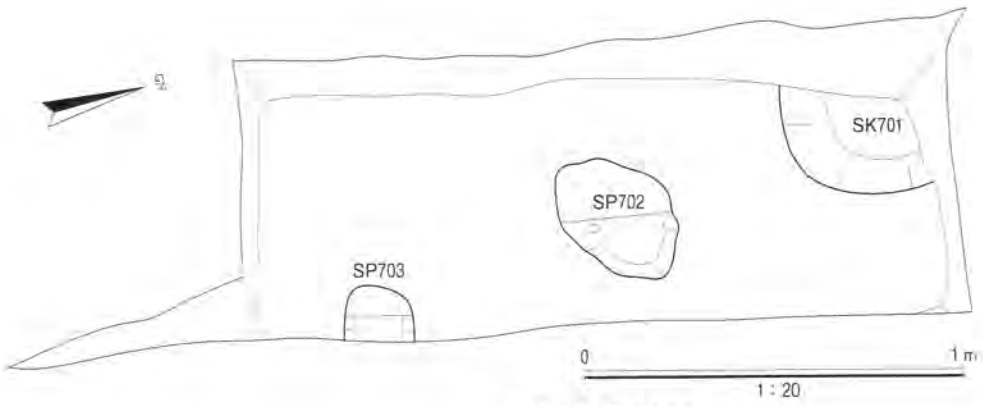
西拡張区では、現代の削平が深くまで及んでいたため、現代盛土を除去するとすぐに第７層となった。第７層を除去して第８層上面で土壙と小穴を検出した。SK701は、調査区外にわたるため形状不明であるが、南北長0.35m以上、深さ0.35mの土壙で、段丘構成層を掘り込んでいた。土器の極細片が出土した。SP702は、径0.30m、深さ0.12mの円形の小穴である。出土遺物はなかった。SP703は、検出面で径0.20m、深さ0.12mの小穴で、出土遺物はなかった。これらは南北に一列に並んでおり、何らかの構築物の痕跡である可能性がある。これらの遺構の下限年代は、第７層から出土した高杯(図13－１・２)の年代(弥生時代中期末～後期初頭)が相当する。

b．室町時代の整地(図６)

調査地が上町台地の東斜面に位置することは先述したが、第９層を階段状に削平して、盛土(第６層)



1：にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質細粒砂(第７層)
2：黄褐色(10YR5/6)中粒砂を主体とする粗粒～極細粒砂層(第８層)
3：明黄褐色(10YR6/8)シルト混り細粒～極細粒砂層(第９層)



西拡張区(第７層下面)

図５　西拡張区平面・地層断面図

していることが分かった。第６層の遺物の包含状況から、整地前に近辺で人々の生活が営まれていた可能性がある。整地後も人々の活動があったかもしれないが、第６層上面で遺構は見つからなかった。

c. 江戸時代の遺構

ア. 17世紀の遺構(図７・８)

第５層上面では、壁面で、多数の鍬による耕作痕跡があることを確認したが、平面での検出は行われなかった。小河川NR502は、幅1.0～1.4m、検出した長さ4.8m、深さ0.20～0.25mで、北東側でやや深くなる。粗粒砂混りの中粒～極細粒砂で埋没するが、北東側では底に極細粒砂質シルトが25cmの厚みで堆積しており、層内に極粗粒砂混りの中粒～極細粒砂のラミナが狭在する。NR502は大雨などにより一時的に形成されたものと考えられる。耕作溝SD501は、ちょうど地形の傾斜変換点に位置しており、耕作地を区画する溝の可能性がある。幅0.35～0.40m、検出した長さ4.5m、深さ0.10mで、第９層由来のシルト質中粒砂の偽礫を含む細粒～中粒砂で埋没していた(図12)。

第４層下面で、多数の鍬による耕作痕跡が重複しているようすが見られた。SD401は、幅0.10～0.20m、検出した長さ4.3m、深さ0.12m、SD402は、幅0.10～0.30m、検出した長さ3.5m、深さ0.13mの南北溝である。SD501は、第４層下面の耕作痕跡よりも早くに埋没するが、これらの方向はほぼ揃っており、SD501やSD401・402などが併存した時期があったと考えられる。出土遺物からも、第５層と第４層に大きな時期差は無いと考えられる。したがって、17世紀後半代を中心に、この地では東下りの地形に平行する形で耕作が営まれていたことが分かる。

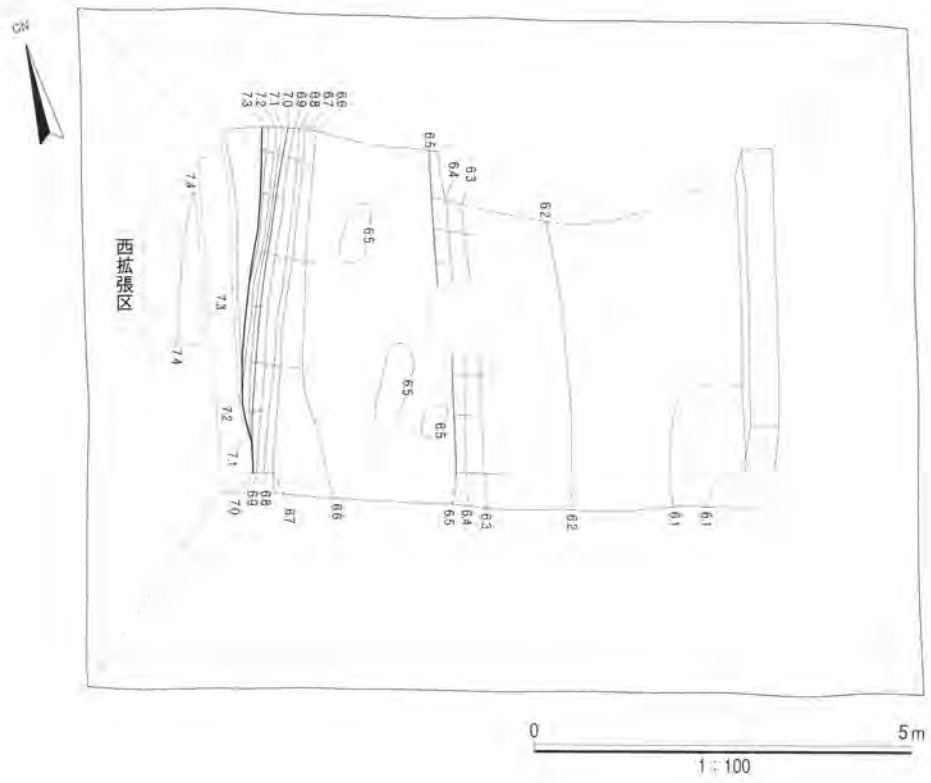


図６　第９層上面平面図

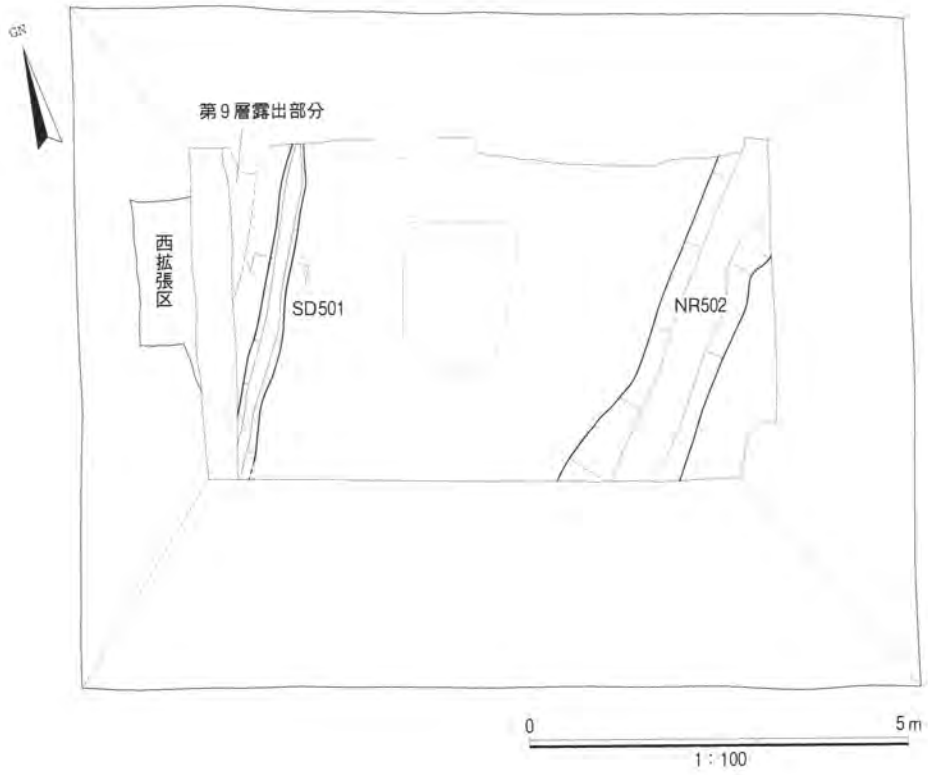


図7　第5層上面平面図(NR502は第5層層内で検出)

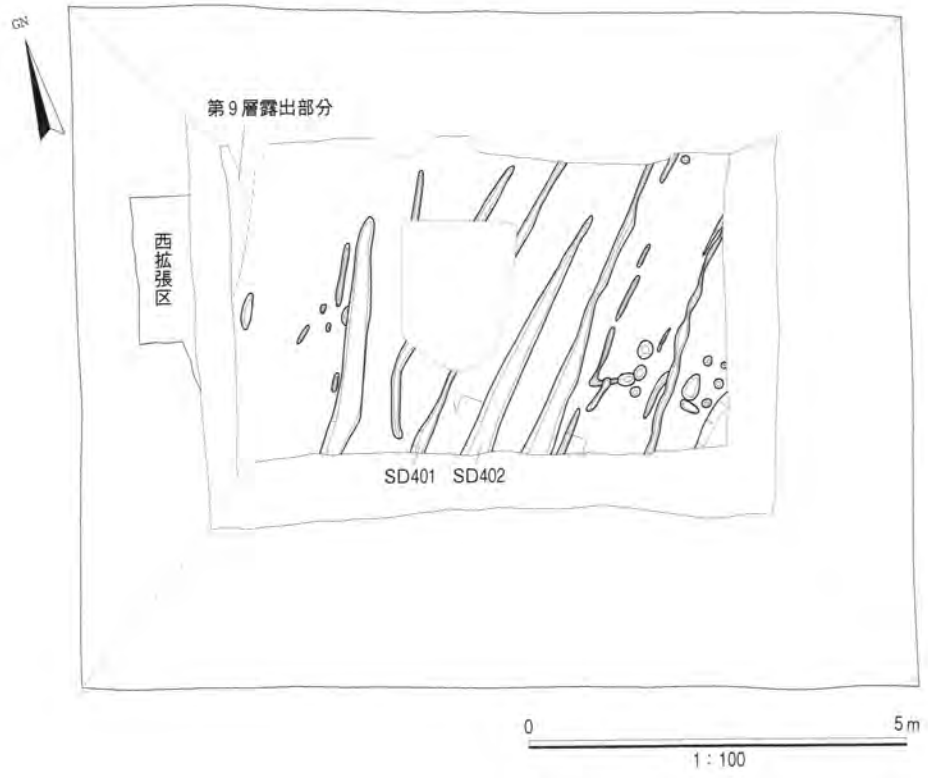


図8　第4層下面平面図

イ．18世紀後半～19世紀前半の遺構(図９・10)

第３層上面は土採りによって溝状に削平されており、土採り穴の肩部が北西－南東方向の畔状に残っていた。畔状の高まりの幅は0.25m、高さ0.12mで、山形である。断面でみると上部の厚さ15cmの部分が暗色化しており、その部分を主に採土したことが分かる。土採り穴は第２層で埋没していた。また、上面で小穴SP301と土壙SK302を検出した。SK302は検出面での径0.80m、深さ0.40mの性格不明土壙で、暗色化した中粒～細粒砂偽礫と第９層由来の細粒～中粒砂偽礫を含む細粒～中粒砂で人為的に埋められており、第４層を掘り込んでいた(図12)。

第２層上面では多数の犂溝跡を検出した。土採り穴と同様の北西－南東方向の溝で、検出面で１条の幅は0.10m、深さ0.03～0.05mである。これらは、第１層で埋没していた。

第３層が盛土されて土採りで削平され、第２層上面で耕作が営まれるまでの年代は、出土遺物から18世紀後半～19世紀前半と考えられる。この時期、土採りの方向も耕作痕跡も東下りの地形に直交する北西－南東方向を向いており、17世紀代とは異なる。

d．19世紀以降の遺構(図11)

第１層下面で性格不明の土壙SK106、上面で性格不明の土壙SK101・103～105、円形の井戸SE102、多数の小穴を検出した。

SK106は、長軸1.40m、短軸0.35m、深さ0.16mの楕円形の土壙で、第１層相当の炭化物を含む中粒～細粒砂で埋没する。SK103は幅0.37m、深さ0.20mの不整形土壙で、第９層由来のシルト質細粒砂偽礫を含む中粒～細粒砂で埋没し、炭化物の包含量が特に多かった。SK104は、第２層とSK302の埋土を掘り込んでおり、幅0.90m、深さ0.30mの不整形土壙である。第９層や第２層由来の細粒砂偽礫を含む中粒～細粒砂で埋没する。SK105は、東半がコンクリート基礎で破壊されていたが、検出面での幅0.60m、深さ0.20mの不整形土壙で、第９層や第２層由来の細粒砂偽礫を含む細粒～中粒砂で埋没する(図12)。

SE102は、直径0.85m、深さ1.20m以上で、第９層を掘り込んでいる。湧水のため完掘できなかったが、水成層が堆積しており、井戸側用の瓦や陶磁器類が出土した。一度掘り返されており、それが埋没してからSK101が掘られていた。SK101は径1.35m、深さ0.15mの円形の土壙で、炭化物を含む極細粒～中粒砂で埋没する(図12)。

また、第０層下面のSX001・002を検出した。いずれも性格不明の不整形土壙である。

e．各層の遺物(図13)

１・２は、第７層から出土した弥生土器高杯の脚部である。１は柱状部で、外面には細かな縦方向のヘラミガキを施した後、多条のヘラ描沈線文を２帯巡らす。２は筒状の柱状部から明瞭に屈曲して開いた裾部である。

３は、第６層から出土した。備前焼の擂鉢である。摺り目は８条１単位で、口縁端部まで及ぶ。口縁部は断面三角形で、下端部に重ね焼きの痕跡が残る。備前Ⅳ期後半(14世紀後半～15世紀)[伊藤晃1995]のものと思われる。

５・６はSD401・402から出土した。５は、肥前磁器染付碗の口縁部分である。外面は草花文で、

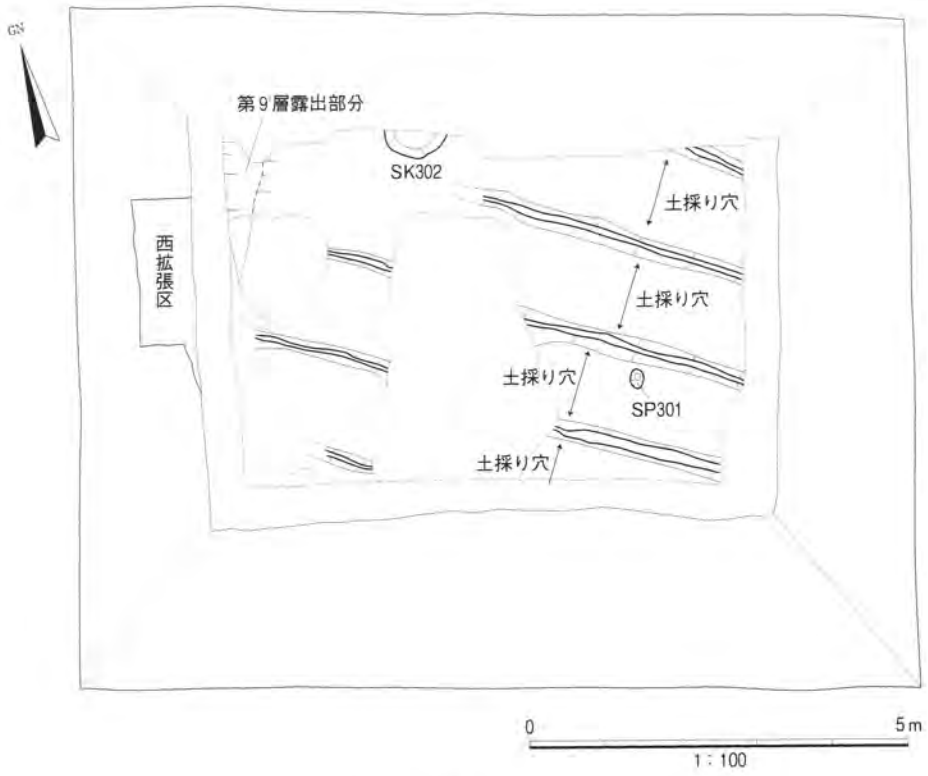


図9　第3層上面平面図

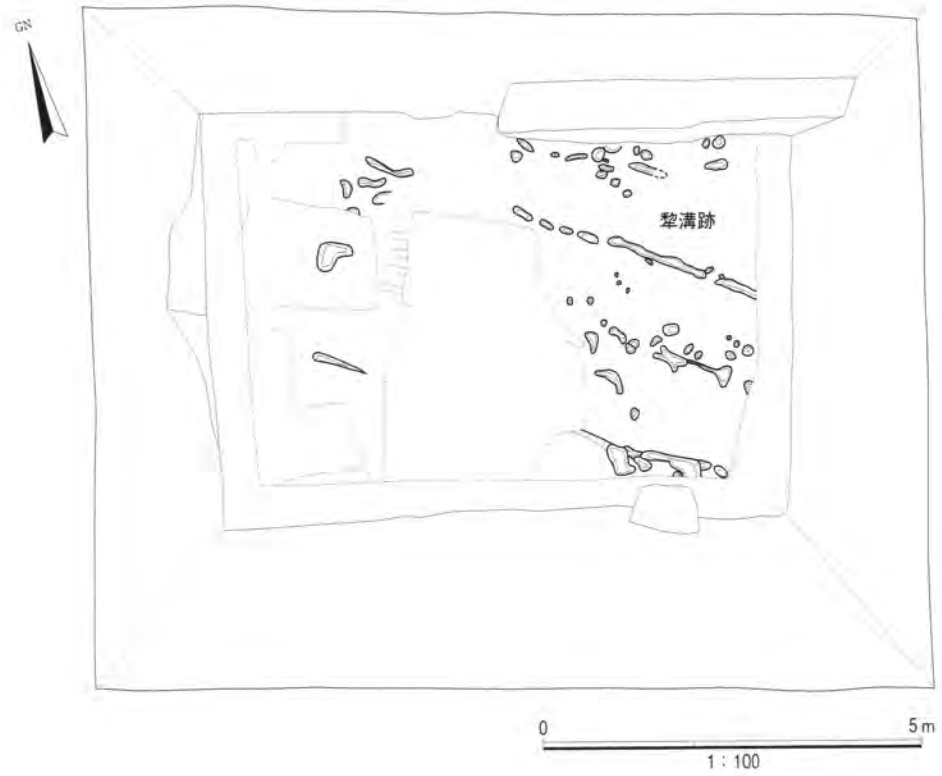


図10　第2層上面平面図(埜溝跡は第1層下面遺構)

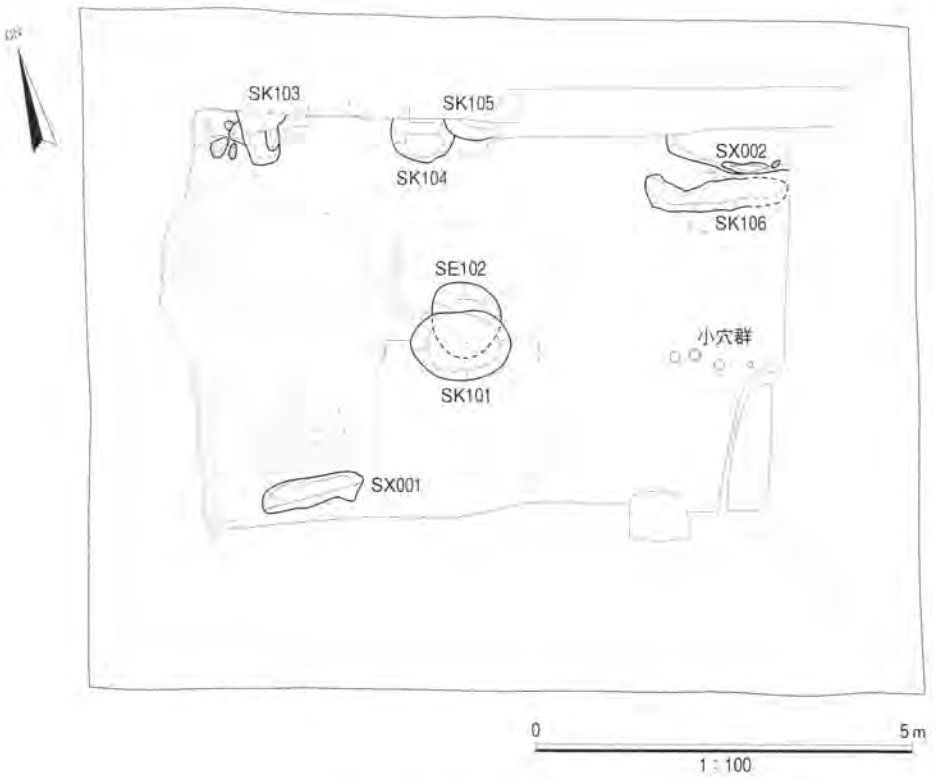


図11　第1層上面平面図

被熱している。17世紀代と考えられる。6は、肥前陶器碗の底部である。内外面に内野山窯系特有の緑色の釉を施している。17世紀後半代と考えられる。

第3層からは、18世紀後半の肥前磁器の筒形碗や19世紀前半の端反碗が出土したが、いずれも極細片で図化するに堪えなかった。4は、第3層上面で出土した丹波焼の擂鉢である。摺り目は櫛描の5条1単位で、口縁部内面に軽い凹線が入る。長谷川分類のⅡA2類[長谷川真2004]に相当し、16世紀末～17世紀前半の年代が与えられる。

7・8・10は、第2層から出土した。7は、須恵器の杯身の底部である。内外面ともに回転ナデで仕上げられ、扁平な貼付け高台は、屈曲部のやや内側に付く。8世紀頃のものと思われる。8は、和泉型瓦器椀の底部である。内面に斜格子状のヘラミガキを密に施す。高台は断面台形でしっかりとしている。Ⅰ－3～Ⅱ－1期に相当し[森島康雄1995]、11世紀末～12世紀前葉のものと考えられる。10は、芥子面子の丁銀である。土製品では他にも、土人形の天神や天神の面型、箱庭道具の橋が出土した。これらは、19世紀前半頃の年代が与えられる。

第1層からは、明治時代以降に下ると思われる瀬戸美濃焼磁器の染付碗が出土しているが、極細片で図化するに堪えなかった。9はSE102から出土した。肥前磁器の染付丸形碗である。外面に二重網目文、内面に一重網目文を施す。18世紀中頃～後半にかけての年代が与えられる。11はSK103から出土した。京焼風の肥前陶器の平碗の底部である。内外面に透明釉を施釉し、見込みに楼閣山水文を施す。底部中央に「柴」と刻銘されている。18世紀代と考えられる。

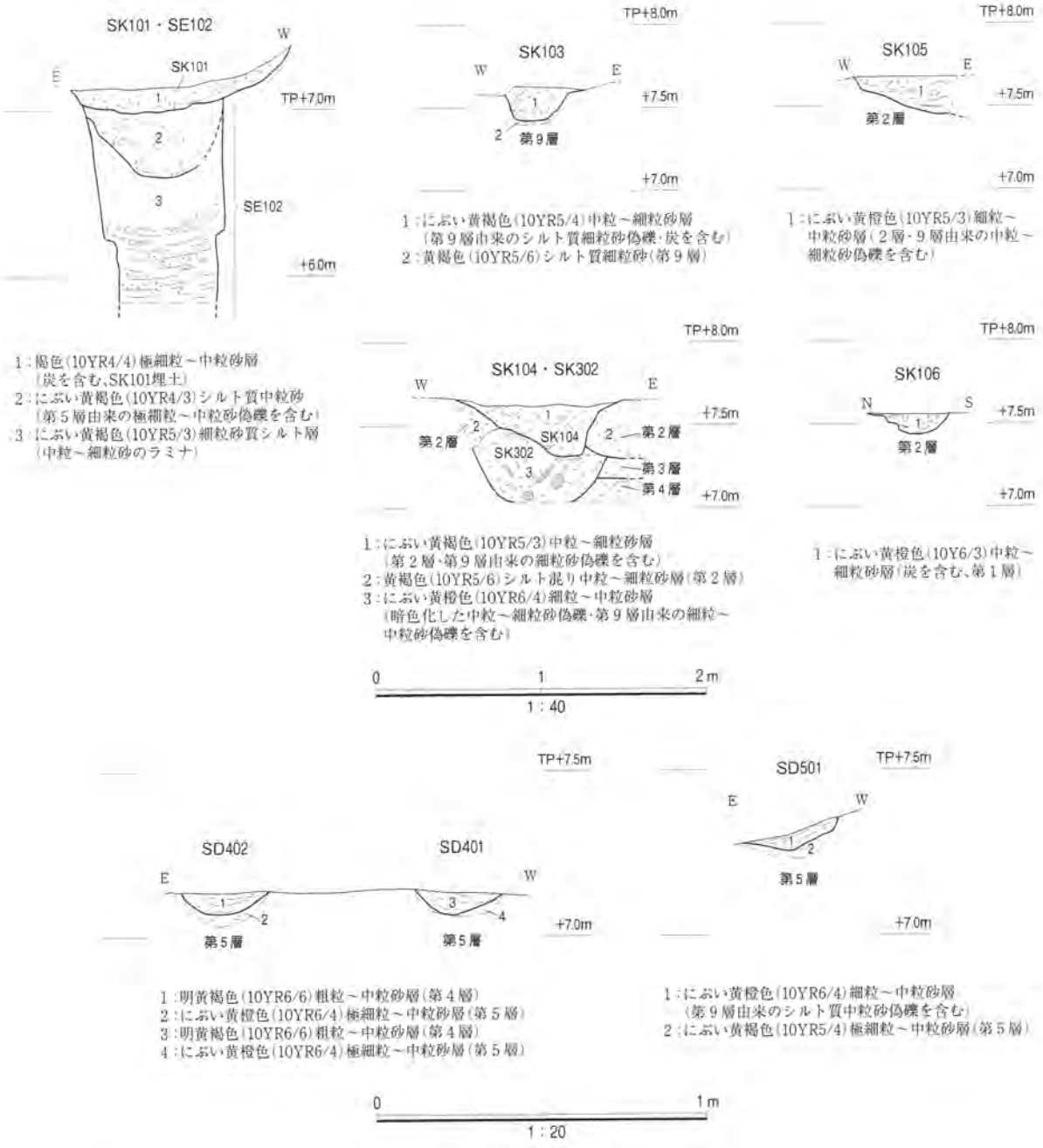


図12　各遺構断面図

3)まとめ

今回の調査では、各時代の土地利用の変遷が明らかになった。

調査区以西の高所では、改変をあまり受けていないことが分かり、弥生時代の遺構と遺物が見つかった。調査地周辺では、昔ながらの長屋造りの民家が多く見られ、古代の遺構が良好に残っていることが期待できる。一方、以東では、室町時代に土地が大きく改変され、それ以降、近代まで耕作が営まれ、土採りも行われていたことが分かった。

今回の調査で、古代から近世までの集落遺跡である松崎町遺跡の一端が明らかとなった。今後の調査の積み重ねにより、今日もJR天王寺駅界隈の繁華街や文化地区として賑わう松崎町界隈の歴史が明らかになっていくだろう。

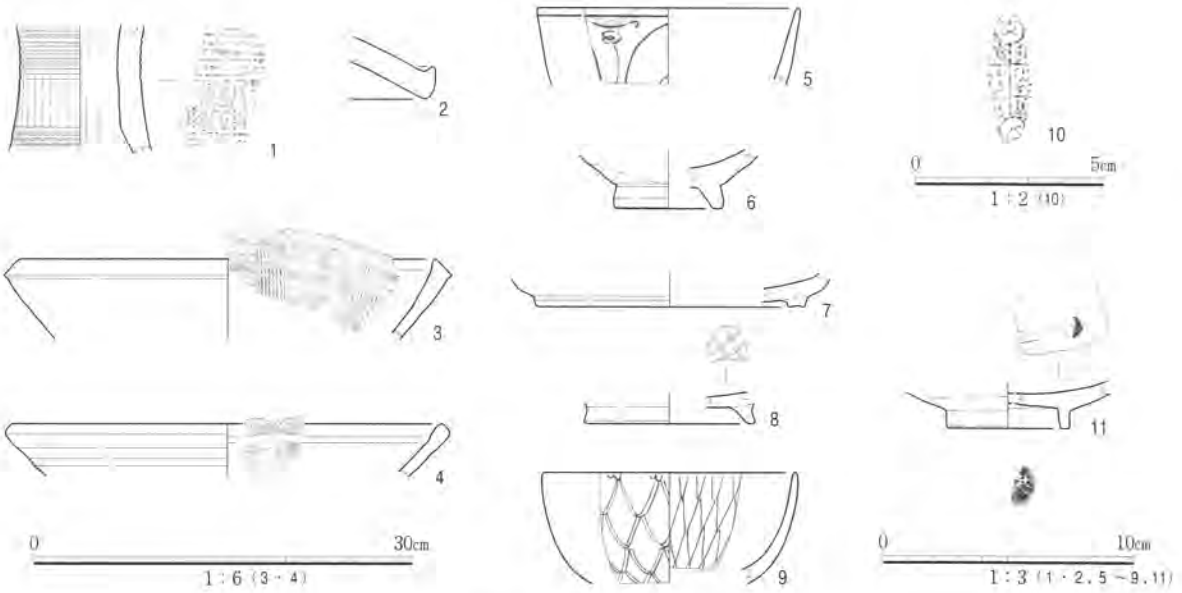


図13　出土遺物実測図

第７層（１・２）、第６層（３）、SD401・402（５・６）、第３層（４）、第２層（７・８・10）、SK103(11)、SE102(９)

引用・参考文献

伊藤晃1995、「備前」：中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』真陽社、pp.412－424

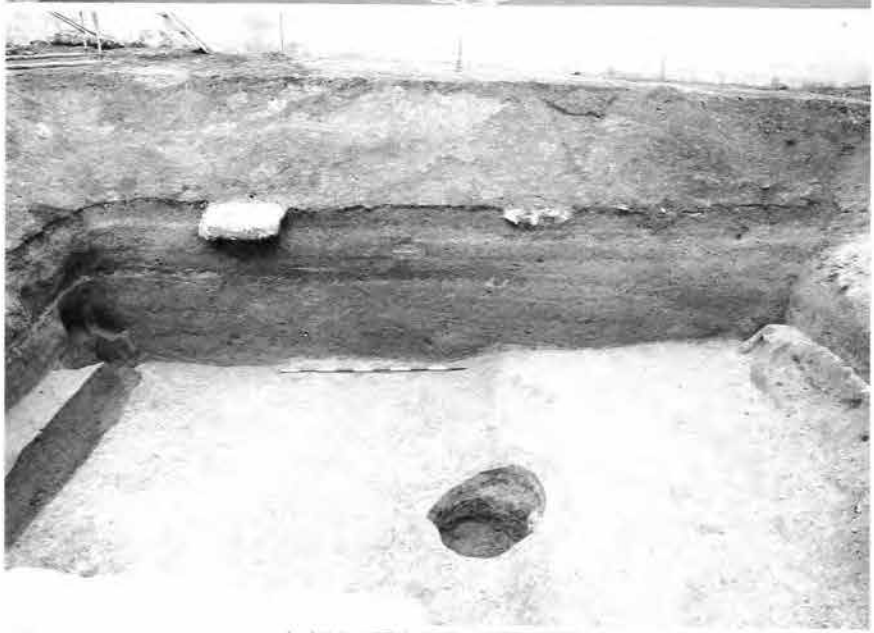
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005、「松崎町２丁目所在遺跡発掘調査（MZ04－１）報告書」：『平成16年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.47－52

長谷川真2004、「丹波系擂鉢について」：『中近世土器の基礎研究ⅩⅧ』日本中世土器研究会、pp.251－268

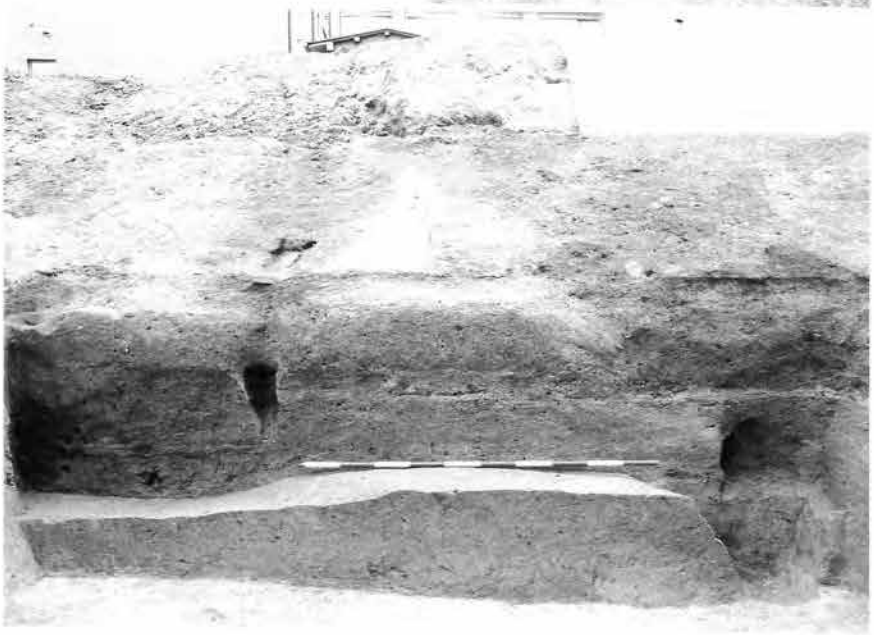
森島康雄1995、「瓦器椀」：『概説中世の土器・陶磁器』、中世土器研究会編、真陽社、pp.315－337

調査地周辺の地形
（左フェンスが調査地、
南東から）

南壁地層断面
（北東から）



東壁地層断面
（北西から）



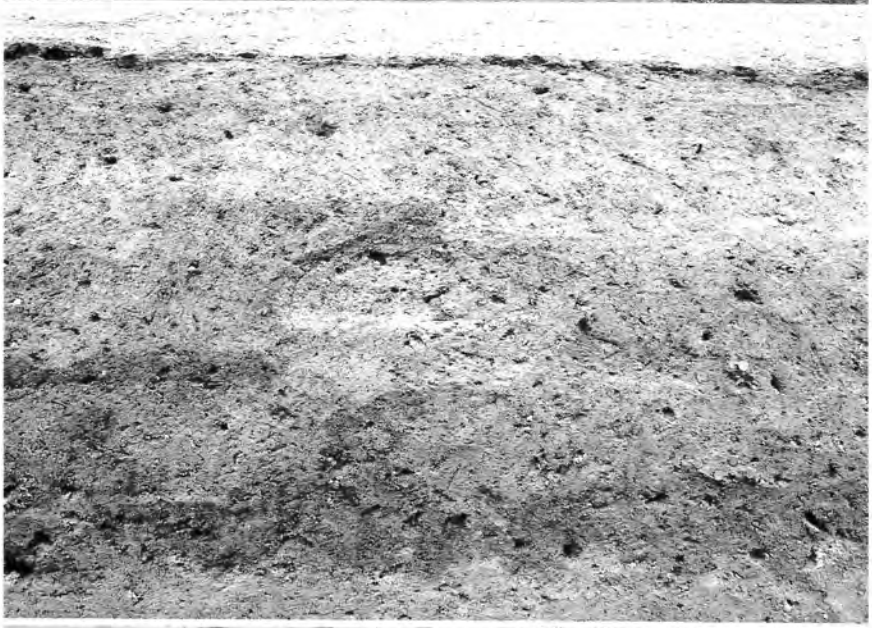
第９層上面完掘状況
（南東から）

第７層下面土壙・小穴
（西拡張区、東から）

第４層下面鍬による
耕作痕跡
（北西奥は第５層上面
SD501、南東から）

第３層上面土採り穴の
完掘状況
（南東から）

土採り穴の肩部の断面
（南東から）



第２層上面犂溝跡
（南東から）

阿倍野区天王寺町北三丁目における
建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(TG11－１)報告書

調 査 個 所　大阪市阿倍野区天王寺町北３丁目55－６・55－７
調 査 面 積　245㎡
調 査 期 間　平成23年６月14日～６月24日
調 査 主 体　財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、黒田慶一

1)調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地の東斜面に位置し、現地表の標高は約6mである。当地は旧天王寺村に属し、同じ北3丁目で行ったTG09－1次調査地(図1)では古墳時代～古代の遺物が出土している。また東南東800mの生野区林寺遺跡(HY00－1次)では、飛鳥～奈良時代で3回の建て直しが見られる掘立柱建物群と、それとは方位を異にする奈良時代末の南北溝が検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002]。

大阪市教育委員会が本年4月28日に試掘調査を行ったところ、地表下1.8m以下に古代～中世の遺物を含む地層が確認されたことから、本調査を行うことになった。

調査は敷地の中央やや北寄りに、東西7m、南北35mの調査区を設定し(図2)、6月14日から開始した。ただし、排土の置き場所が限られていることから、北区(南北長15.5m)・南区(南北長19.5m)に分けて調査することとなった。現代盛土層(厚さ0.8～1.9m)を機械掘削で除去し、それ以下は人力掘削で行い、遺構・遺物の検出に努め、写真や実測図などの記録を取った。6月22日に発掘調査を終え、以後埋戻しと整地を行い、24日に全ての作業を完了した。

なお、本報告書の図中の方位は、図1は座標北を、それ以外は磁北を基準にし、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、図・文中ではTP+○mと記している。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

第0層：鉄筋コンクリート建物解体工事後の整地土と、それ以前の現代盛土層からなる。層厚は厚

図1　調査地位置図

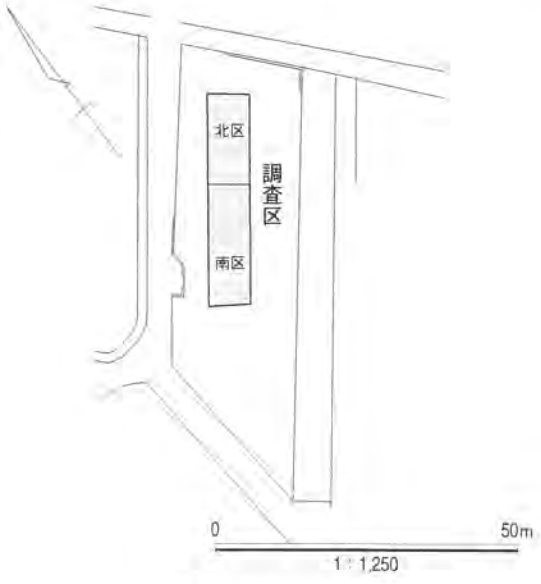


図2　調査区位置図

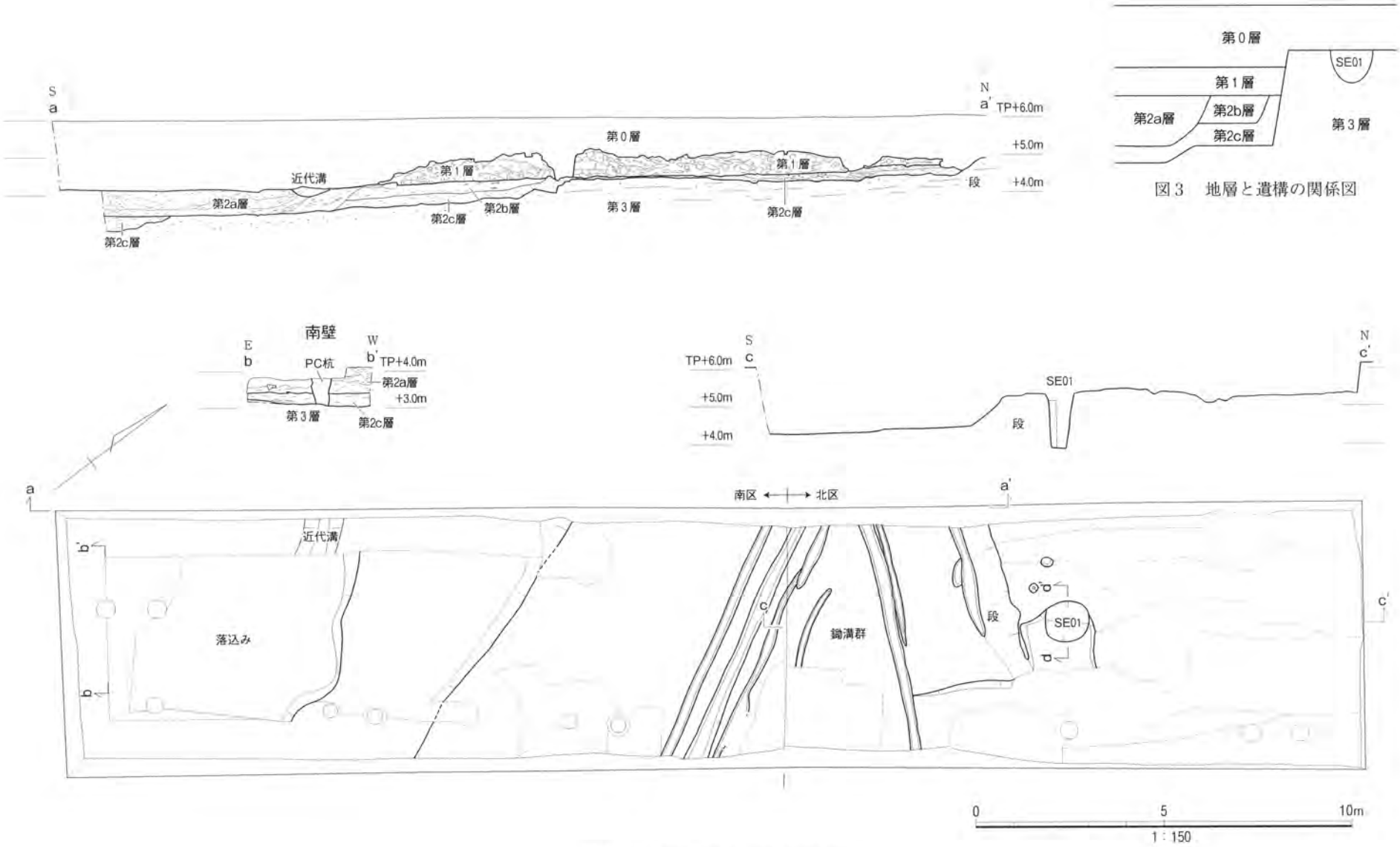
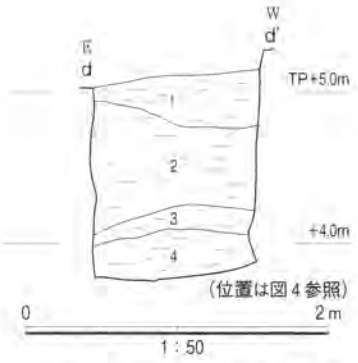


図3　地層と遺構の関係図

図4　平面図と西壁・南壁地層断面図



1：にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト質粗粒砂
2：にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト質粗粒砂
3：明黄褐色(2.5Y6/6)シルト質粗粒砂
4：黄灰色(2.5Y5/1)シルト質粗粒砂

図5　SE01断面図

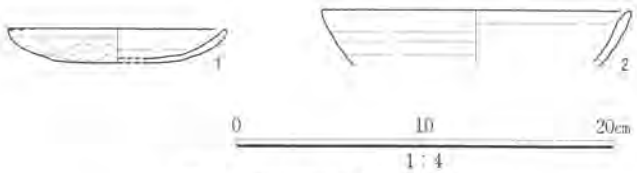


図6　SE01出土遺物実測図

いところで190cmに達する。

第1層：地山(第3層)は北から南へ深さ0.4mの落込みを呈するが、その段の南に分布する層厚80cmの近代盛土層で、オリーブ黄色(5Y6/3)粘土偽礫を含む浅黄色(2.5Y7/4)粗粒砂からなる。

第2a層：第2b・2c層を削る落込みに堆積した地層で、下部は水漬きのオリーブ黒色(5Y3/1)シルトで、上部は人為的埋土である中礫を含む明黄褐色(2.5Y6/6)粘土質粗粒砂である。層厚は70cmで、近代の遺物を含む。

第2b層：北から南へはしる深さ0.2mの浅い落込み内に堆積した黄褐色(2.5Y5/3)シルト質中粒砂で、層厚30cmである。

第2c層：層厚5～30cmの中粒砂質シルトで、段の南に分布するが、調査区中央の平坦地では作土として使われた。19世紀の関西系陶器を含む。

第3層：上部は黄灰色(2.5Y6/1)粘土質粗粒砂、下部はオリーブ黄色(5Y6/4)中粒砂の地山層である。当地では上町台地は北東－南西方向に傾斜している。

ii)遺構と遺物

a．第3層上面の遺構〔12世紀〕(図4～6)

SE01　直径1.1m、深さ1.5mの素掘りの井戸で、人為的埋土であるシルト質粗粒砂で埋没する。瓦器片や12世紀の土師器皿1と灰釉系陶器椀2が出土した。

b．第2c層下面の遺構〔19世紀〕(図4)

鋤溝群　調査区中央で検出した幅0.10～0.20m、深さ0.05mの鋤溝群で、東西方向にはしる段の際は、段に平行に、その他は磁北に対して西に30度振る方向をとる。19世紀の遺構である。

3)まとめ

平安時代後期頃の井戸を検出し、上町台地が当地では、東から西に緩やかに落ちていくことが確認できた。既調査が少ない当地ではあるが、南東200mのTG09－1次で古墳時代～古代の遺物が出土し、東南東800mのHY00－1次で飛鳥～奈良時代の掘立柱建物や溝、それに古代～中世の遺物包含層を検出している。今後の調査で、当地周辺の古代～中世の状況が一層明白になるものと思われる。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002、「天理教大阪分教会建設工事に伴う林寺遺跡発掘調査(HY00－1)報告書」:『平成12年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.73－77

北区全景(南から)

南区全景(南から)

SE01(北から)

住吉区苅田四丁目における建設工事に伴う
苅田４丁目所在遺跡発掘調査(KL11－１)報告書

調 査 個 所　大阪市住吉区苅田４丁目25－２
調 査 面 積　75㎡
調 査 期 間　平成23年５月６日～５月９日
調 査 主 体　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、黒田慶一

1）調査に至る経緯と経過

大阪市住吉区の苅田４丁目所在遺跡は、2001年に発見された中世～近世の遺跡で、上町台地の東側縁辺部に立地する（図１）。当遺跡は室町時代の鋳造関連の遺構・遺物が出土することで著名で、14～15世紀を中心とする区画溝や井戸、粘土採掘壙とともに、鋳型片・炉壁片・鞴羽口などが多量に見つかっており［大阪市文化財協会2004・2008、大阪文化財研究所2011］、「苅田鋳物師」に関係する遺跡と考えられている。

中世の苅田は現在の住吉区南部から堺市の北部に拡がる五箇庄と呼ばれる荘園に属し、1471（文明３）年の年号をもつ『大徳寺文書』に、当荘園に「金屋」が見られることから、苅田を含む五箇庄の地に金属を加工する集団が存在していたことが知られる。また、地下官人真継家に伝来した『真継家文書』中の「河内鋳物師座法」には「かつた村」の名が見られ［名古屋大学文学部国史研究室1982］、「かつた」は「苅田」の従来の呼称であることから、苅田が鋳造に関係していたことは確実である。

大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表面下1.0m以下の深さで中世の遺物包含層と遺構面が確認されたことから、本調査を行うこととなった。2011年５月６日より調査を開始し、敷地内に東西15m、南北５mの調査区を設定し、地表面下1.0m程度まで重機で掘削し、以下は人力によって遺構検出・掘下げ・記録などの作業を行い、調査終了後は埋め戻し、５月９日に現場作業を完了し撤収した。

なお、図中の方位は、図１が座標北である以外は磁北を基準にし、水準値はT.P.値（東京湾平均海面値）で、図中ではTP＋○mと略記した。

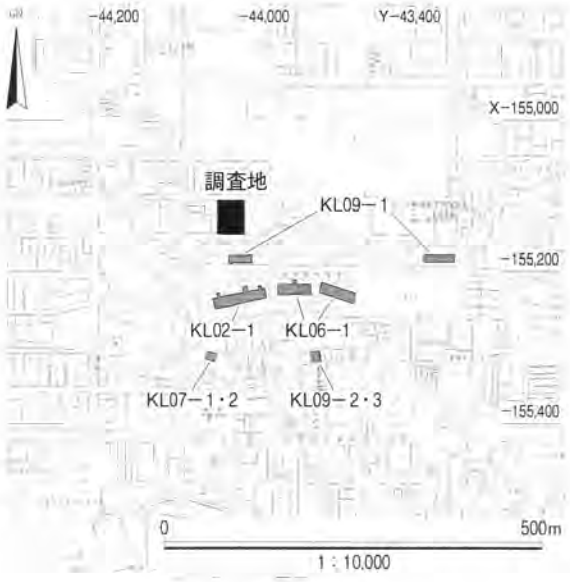


図１　調査地位置図

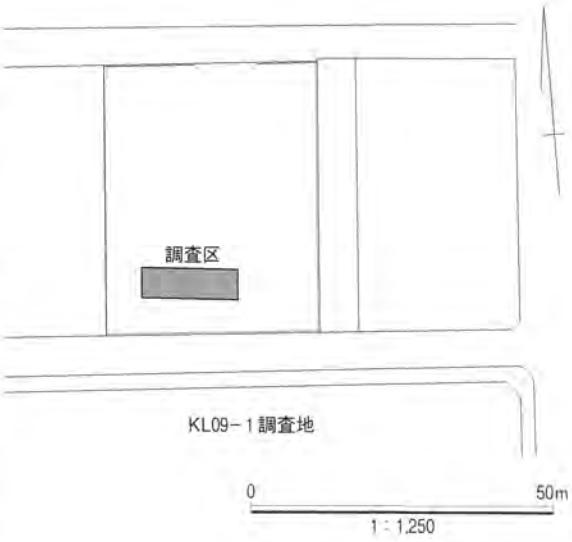


図２　調査区位置図

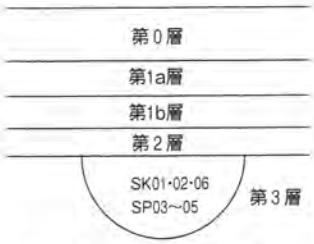


図3　地層と遺構の関係図

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

第0層：層厚80～180cmの旧建物解体後の整地層で、コンクリート片と粘土偽礫よりなる。

第1a層：層厚10～30cmの褐灰色(10YR4/1)粘土質シルトの現代作土層である。

第1b層：層厚5cmの灰黄褐色(10YR4/2)粗粒砂質シルトの作土層である。

第2層：調査区の東南部にのみ分布する層厚5cmのにぶい黄褐色(10YR3/4)粘土の作土層である。

第3層：明黄褐色(10YR6/8)粘土の地山層である。全ての遺構を本層上面で検出した。

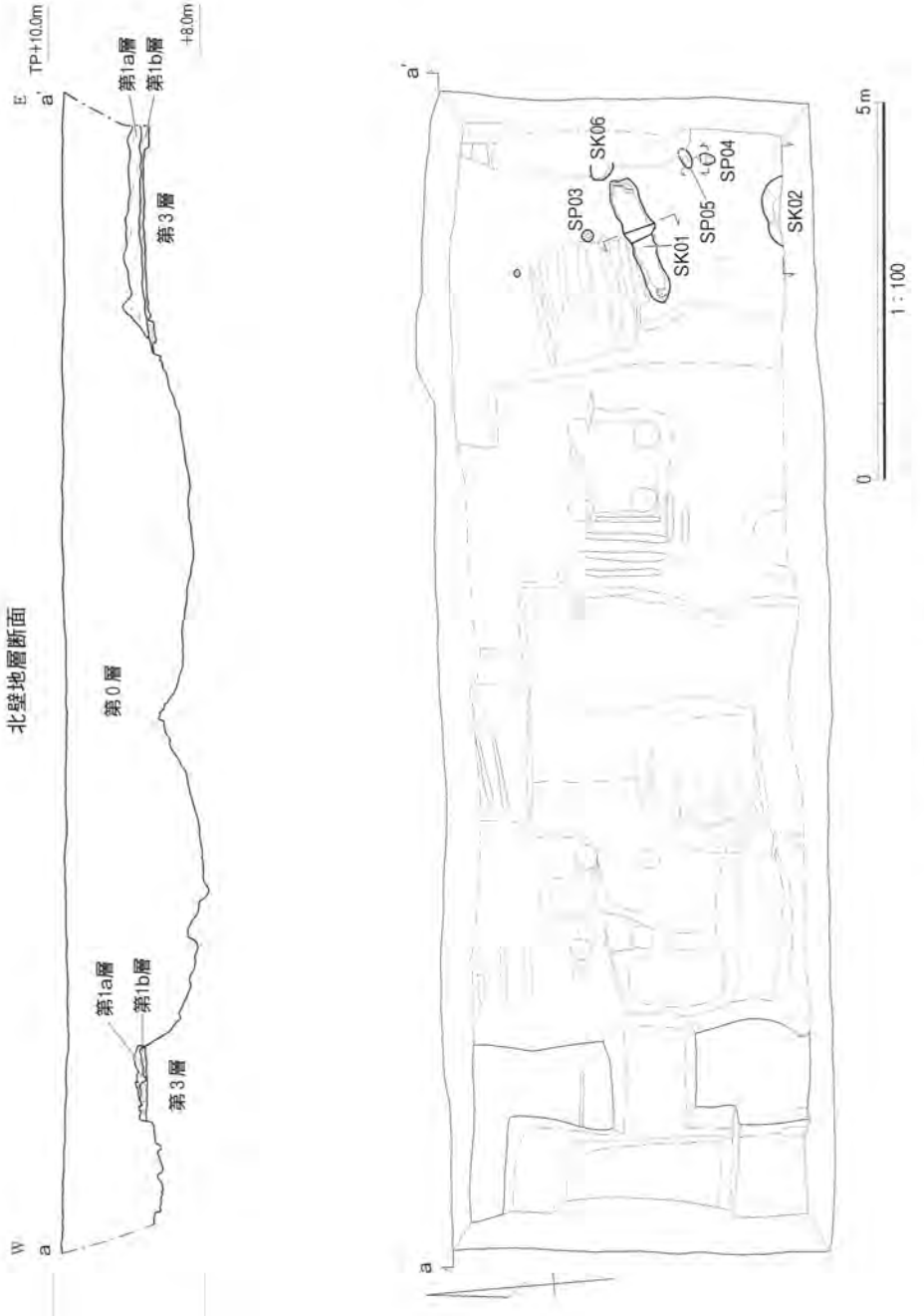


図4　北壁地層断面と第3層上面平面図

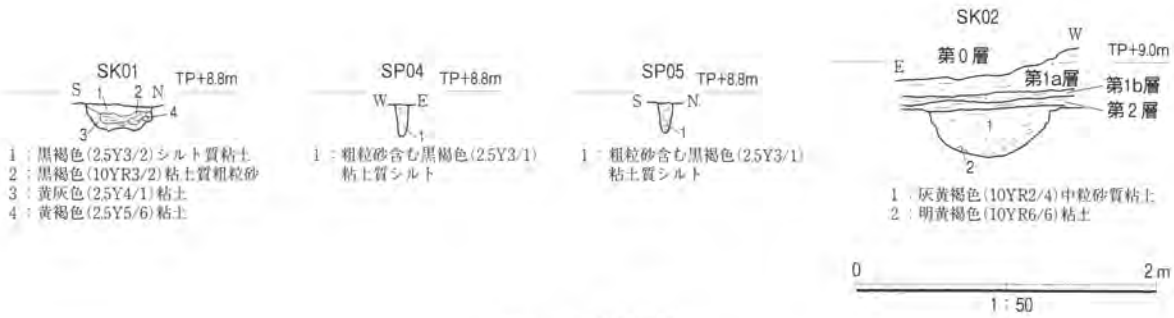


図5　遺構断面図

ii)遺構と遺物

第3層上面の遺構(図4～6)

SK01　長さ1.8m、幅0.4m、深さ0.2mの溝状の土壙で、土師器皿1や鋳型2のほか、瓦器椀や鉄滓が出土した。粘土偽礫を埋土とし、土壙壁面に被熱の痕跡はない。土師器皿1から15世紀前半の年代が与えられる。

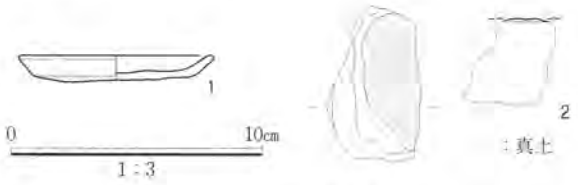


図9　SK01出土遺物実測図

SK02　直径0.9m、深さ0.3mの土壙で灰黄褐色(10YR2/4)中粒砂質粘土を埋土とする。土師器、鋳型、被熱し表面がガラス化した土塊が出土した。

SK06　直径0.3m、深さ0.2mの土壙で、黒褐色(2.5Y3/2)シルト質粘土を埋土とする。

SP03～05　直径0.1m、深さ0.25mの杭跡とみられるピットで、SP03から土師器が、SP05から鉄滓が出土した。いずれも黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトを埋土とする。

iii)検出遺構と周辺の中世遺構との関係(図7)

過去の調査成果から考えた苅田鋳物師の集落復元案が図7である。今回検出のSK01をはじめとする鋳造関係遺物が出土した遺構は、KL06－1次調査成果から推定した集落端から北西に100mほど離れている。KL06－1次調査地は鋳造関係の遺構・遺物が濃密に分布し、従来、このあたりが鋳造工房の中核に近い場所と推定されてきた。ここでは鋳造関連遺構のほか、井戸や土壙なども密集し、新旧2時期にわたる溝や堀が掘られ、区画されていることから、鋳物師の集落とされた。しかし一方、KL09－1次の東区で中世の溝SD3001が検出され、その埋土や周辺の遺構・地層から鋳造滓や中国産磁器を含む陶磁器・土器が出土し、SD3001はKL06－1次の堀とほぼ同じ方位をもつことから、この溝も他の鋳造工房の区画を示す可能性があると思われる。

今回検出のSK01は国土座標に対して、東で北に10数度振ることから、KL06－1次の堀やSD3001とほぼ同じ方位を

写真　調査風景(西から)

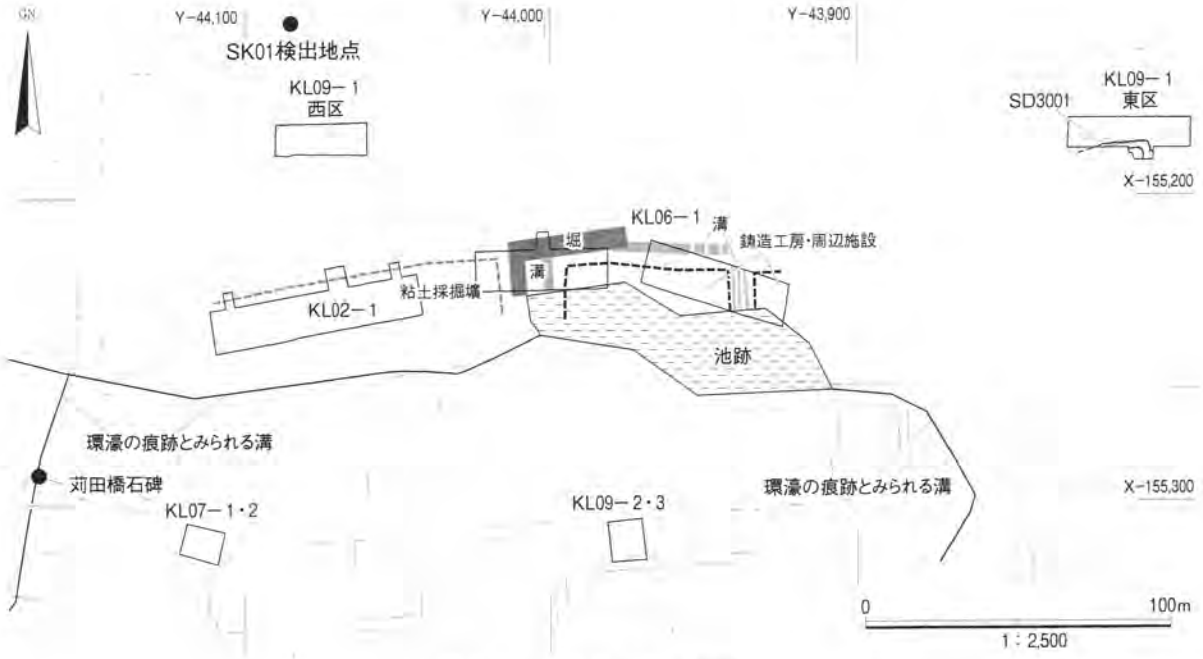


図7　SK01と周辺の中世遺構

とるともいえる。したがってKL06－1次の堀などに見られる地割の方向は、北部にも拡がり、鋳造関連施設も北へ拡がる可能性が出てきた。

3）まとめ

今回の調査で15世紀前半ころの鋳造関係遺物を含む遺構を検出できた。特に、KL06－1次の集落を区画する堀の北西角から北西に100mも離れた地点での遺構検出であったことから、苅田4丁目所在遺跡の鋳造遺構が、従来いわれているよりも北に拡がる可能性が高くなった。これまでの調査成果に加えて、鋳造工房を営んだ中世の苅田村に関する知見を得たことは重要である。苅田鋳物師の集落の全容を明らかにすることは、この地域の歴史的変遷を理解するうえで重要であり、今後の周辺の調査に期待したい。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2004、『苅田4丁目所在遺跡発掘調査報告』

2008、『苅田4丁目所在遺跡発掘調査報告』Ⅱ

大阪文化財研究所2011、『苅田4丁目所在遺跡発掘調査報告』Ⅲ

名古屋大学文学部国史研究室1982、『中世鋳物師史料』法政大学出版局

第３層上面(西から)

SK01(東から)

北壁地層断面とSK01(南から)

住吉区帝塚山東二丁目における建設工事に伴う
帝塚山東遺跡発掘調査(TZ11－１)報告書

調 査 個 所　大阪市住吉区帝塚山東２丁目１－１・１－２・１－10・
１－12・２－３
調 査 面 積　264㎡
調 査 期 間　平成23年５月16日～５月25日
調 査 主 体　財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、高橋 工

1)調査に至る経緯と経過

本調査地は大阪市南部の住吉区にあり、大阪市域を南北に延びる上町台地の基部でその西縁付近に位置する。上町台地の西縁部は大阪湾の波蝕崖のため急傾斜の坂を形成しており、東縁部は河内平野に向かって緩やかな斜面となっている。本遺跡が立地する一帯は標高がTP+12～14mで、東と南に向かって低くなり、本調査地の南側には万代池がある(図1)。万代池は平安時代末期の『千載和歌集』にみえる「長居の浦(長居池)」であるともされ[三善貞司1986]、上町台地上の開析谷を塞き止めた溜池である。また、本調査地の西に接する道路は、大阪の「渡辺津」から住吉大社・堺を経て紀州熊野へ至る熊野街道を踏襲したもので、沿道は平安時代後期から鎌倉時代にかけて熊野詣の流行によって賑わったとされている。

帝塚山東遺跡は、前方後円墳の帝塚山古墳の東約500mにあたり、南には荘厳浄土寺境内遺跡がある。周辺における既往の調査は多くはないが、本調査地の北約100mで行われたTE04－1・2次調査では、全長30mで周溝を巡らせた、5世紀末～6世紀初頭の帆立貝形前方後円墳が発見されて万代古墳と命名された[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]。一方、北西約250mで行われたTZ09－1次調査地は地籍図の検討から復元された「大帝塚古墳」に隣接するが、古墳に係る遺構・遺物は発見されず、近世の粘土採掘壙群が発見された[大阪市文化財協会2010]。一帯は、地籍図の検討から削平された古墳群が散在する、「住吉古墳群」があったとされる地域である[上田宏範1988]。本調査地でもそうした発見がなされる可能性があり、大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下1.2mで中世と考えられる包含層が確認され、古墳の有無を確認する必要があったため、本調査が行われることとなった。調査は、まず古墳の有無を確認するべく幅5m、長さ50mのトレンチを設定して地山層上面

図1　調査地位置図

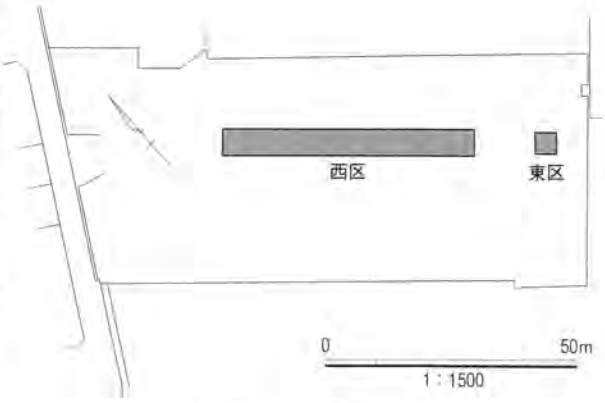


図2　調査区位置図

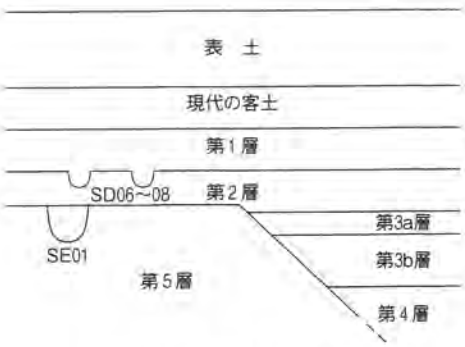


図3　地層と遺構の関係図

の精査を行った(西区：図2)。その過程で、東に下がる谷の兆候を認めたため、東に4m四方の地層確認トレンチを追加して埋没地形の把握に努めた(東区)。掘削方法は、表土および近代の地層については機械掘削、それ以下の地層・遺構については人力掘削によった。

本報告書の平面図は、図1については座標北を、それ以外は磁北を基準とした。水準値は東京湾平均海面値であり、本文・挿図中ではTP+○mと表記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

砕石やコンクリート殻を多量に含む表土と地山層(第5層)偽礫からなる現代の客土層の下位に以下の5層準を確認した。地山層上面の地形は西がTP+12.3mと高く、東にはTP+10.5m以下に下がる谷がある。そうした関係で、西区の西側2/3では堆積層は削剝されて表土直下で地山層が検出され、東側1/3から東区にかけては第1～4層が遺存していた(図4)。

第1層：にぶい黄褐色細礫質細粒砂からなる作土層である。層厚は約15～30cmで、東方で層厚を増していた。19世紀代の関西系陶器1・泥面子2が出土し、現代の客土層に覆われることから、江戸時代後期から現代に至るまで耕作されたものとみられる。本層下面ではSD06～08が検出された。

第2層：地山層偽礫や灰黄色中粒砂質シルトからなる盛土層で、層厚は最大30cmを測り、東方に向かって層厚を増していた。下位の第3層とともに谷を埋積する堆積層で、その最上部を構成する。管状土錘3が出土したが、年代を特定できる遺物は出土しなかった。ただし、下位のSE01からは18世紀の遺物が出土しており、それよりは新しい年代が与えられる。西区東部の本層を除去後の第5層(地山層)上面でSE01・SK02などの遺構が検出された。

第3層：谷を埋積する堆積層で第3a層と第3b層に細分された。第3a層は黄灰色極細粒砂質シルトからなる作土層で層厚は約15cmである。第3b層は黄灰色砂質シルトからなる盛土層で層厚は約65cmであった。肥前磁器4が出土しており、17世紀前半に谷の埋立てが行われたとみられる。その目的は上位層が作土層であることが示すように農地の開発であろう。

第4層：黄褐色細粒砂質シルトからなる自然堆積層で、層厚は最大で約20cmを測る。谷の中央方向(東方)に層厚を増しており、谷底には達していないものとみられる。須恵器片が出土し、古代以前の堆積層である可能性がある。

第5層：明褐色細礫質シルトからなる地山層である。上方に細粒化していた。前述のように、調査地の東部には埋没した谷があるため、東区東方で本層上面の標高はTP+10.5m以下に下がっている。万代池が谷の痕跡であるとすれば、本調査地で検出された谷は本体の谷につながる支谷である可能性がある。そして、第3層の段階(17世紀)で耕作地の造成を目的に埋立てがなされ、第2層の段階で平坦に近い状態にまで埋められたものとみてよい。

ii)遺構と遺物(図5～7)

a．近世の遺構(第5層上面)

西区の東部で井戸・土壙などを検出した。東端部は緩やかな斜面をなして第5層上面が下降しており、谷の肩部分を捉えたものとみられる。この部分の埋土は第2層である。

SE01　南壁際で検出され、約半分は調査区外である。直径は2.2mの円形で、深さ0.8mまで掘削したが、崩壊の恐れがあったため、それ以下の掘削は行わなかった。埋土はシルトや細粒砂からなり、東方から人為的に埋め戻されていた。壁面の一部は下方が崩落してオーバーハングしていた。周辺では居住に係わる遺構は発見されていないので、野井戸であろうか。出土した刷毛目の肥前陶器碗5は18世紀のものである。青磁碗6は14～15世紀のものとみられ、混入品ではあるが周辺にこの時期の遺跡が展開していたことを示唆している。

SK02　東西0.85m、南北0.50mの隅丸方形の土壙で、深さは0.25mを測る。シルトや細粒砂で人為的に埋められていた。遺物は出土していない。農作物の貯蔵穴の可能性がある。

SK04　調査区の東南隅で検出された土壙で、深さは0.65mである。細粒砂で埋められていた。これもSK02と同様な遺構であろう。

そのほか、深さ0.05m程度の不整形な落込みで、第2層で埋められたSX05や、SX03などの小穴が数基発見された。

b．近世の遺構(第1層下面)

SD06～08　西区東部の第1層下面で

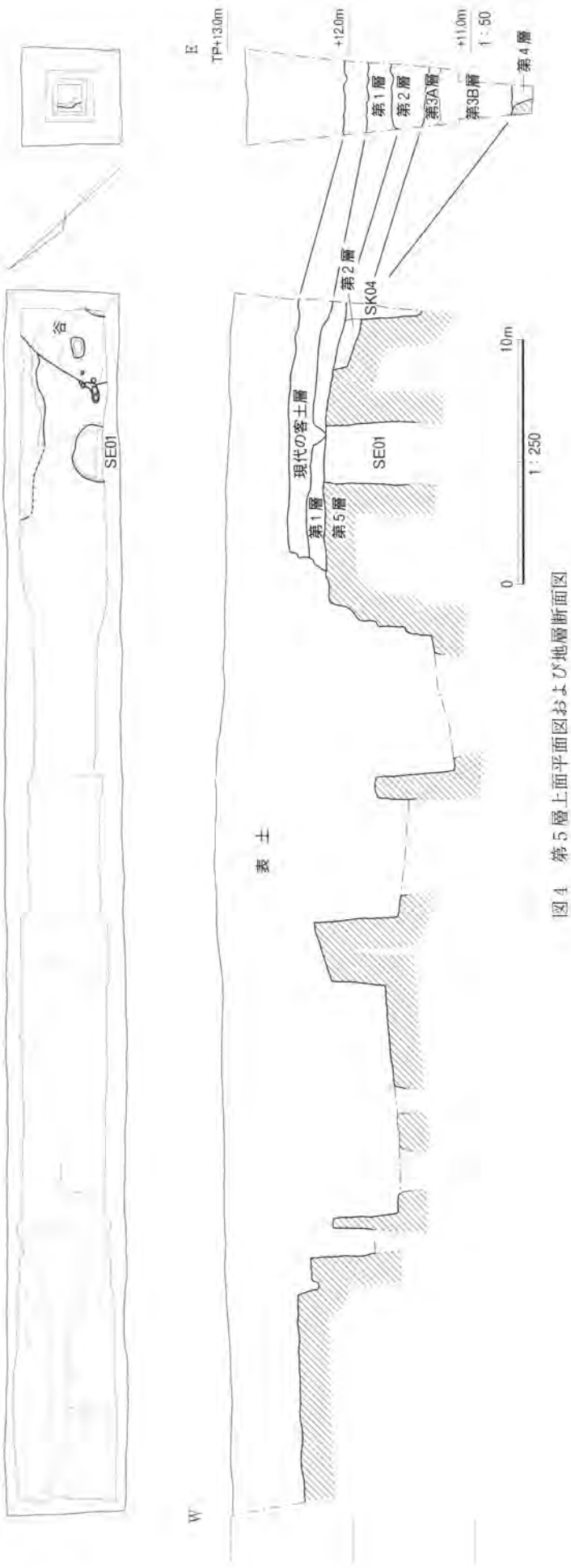


図4　第5層上面平面図および地層断面図

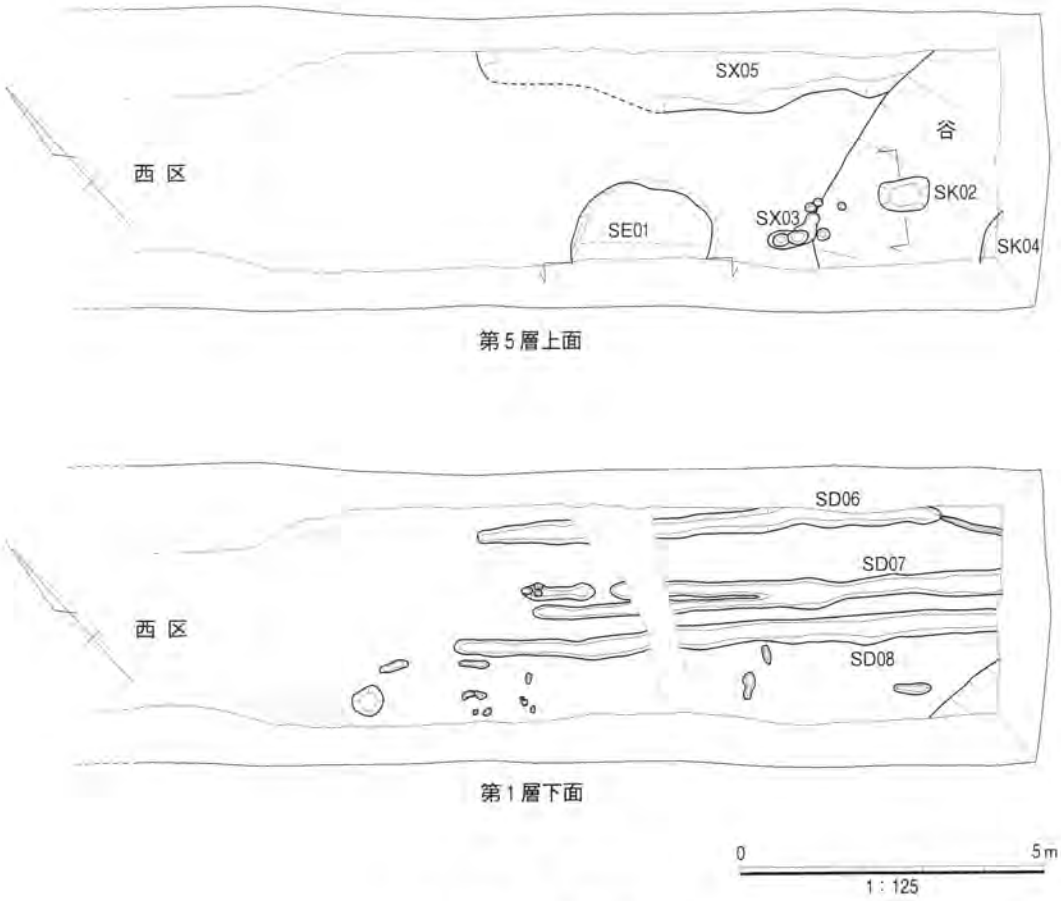


図5　検出遺構平面図

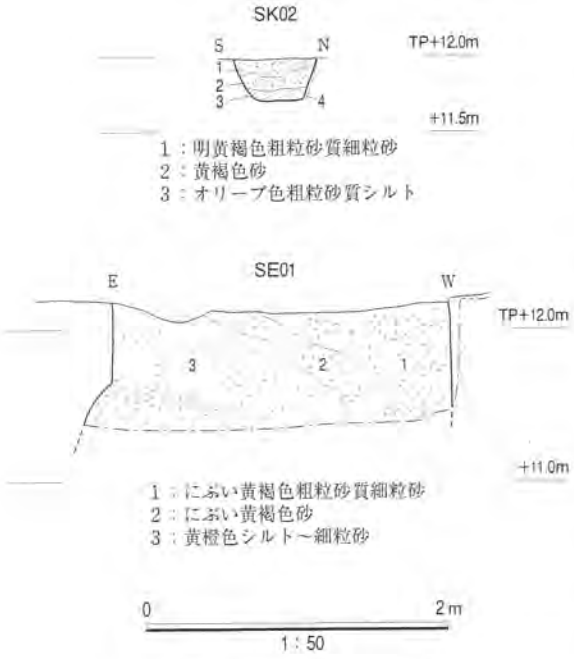


図6　SK02・SE01断面図

検出された溝で、幅は0.4m前後、深さは0.1mであった。第1層を耕作した際の鋤溝である。

3）まとめ

・期待された古墳は発見されなかった。地籍図による復元が妥当でないことはTZ09－1次調査の成果から明らかである。しかし、TE04－1次調査の成果から、埋没古墳が存在することは確かであり、今後ともこうした埋没古墳を探索する努力は継続しなければならない。

・調査地東方へ続く埋没谷を発見し、その埋没過程と土地利用の在り方を把握することができた。すなわち、おそらく古代には自然に土砂（第4層）が流入して積極的な土地利用は行われず、江戸時代前期（17世紀）に農地開発を目的として埋立て（第3b層）が行われた。以後、江戸中・後期を通

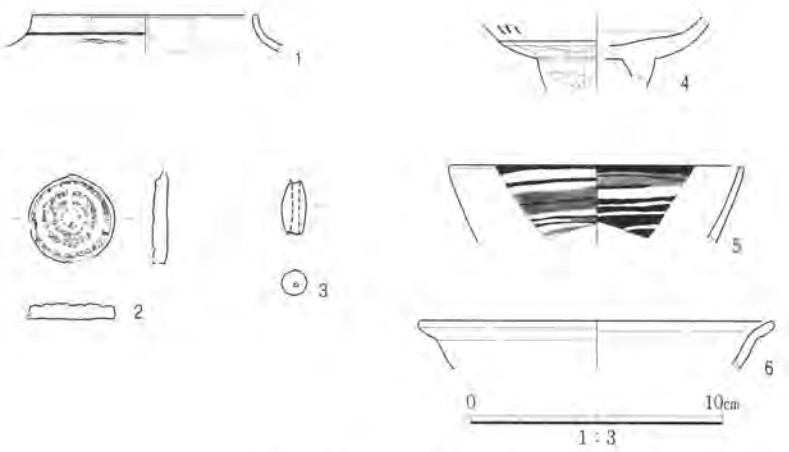


図7　出土遺物実測図
第1層(1・2)、第2層(3)、第3層(4)、SE01(5・6)

じて現代にいたるまで耕作地として利用されたとみてよい(第3a・1層)。17世紀の土地利用の開始は、全国的な風潮である新田開発と関係する可能性があるのではなかろうか。

引用・参考文献

三善貞司1986、「万代池」:『大阪史蹟辞典』、清文堂出版、p.572

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005、「帝塚山東遺跡発掘調査(TE04－2)報告書」:『平成16年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.59－71

大阪市文化財協会2010、『住吉区帝塚山中三丁目における建設工事に伴う帝塚山古墳群発掘調査(TZ09－1報告書)』

上田宏範1988、「大阪市の古墳」:『新修大阪市史』第1巻、大阪市史編纂委員会、pp.351－424

東区南壁地層断面

西区東方
第５層上面遺構
（北西から）

西区第５層上面全景
（東から）

住吉区杉本町三丁目における建設工事に伴う
山之内遺跡発掘調査(YM11－１)報告書

調 査 個 所　大阪市住吉区杉本町３丁目１－１
調 査 面 積　50㎡
調 査 期 間　平成23年７月11日～７月19日
調 査 主 体　財団法人大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南秀雄、田中清美

1)調査に至る経緯と経過

調査地は、旧石器時代から江戸時代に至る複合遺跡として知られる山之内遺跡の北部に位置しており、当地の北東側には中世～近世初期に至る鋳物師関連の遺構や遺物が検出されたYM87－38・90－27・91－8・92－8・08－3次調査地がある(図1)[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]。これらは当地域の鋳物師集団が、東方にある苅田4丁目所在遺跡の鋳物師集団とも関係が深く、また、工房の規模も比較的大きかったことを示唆している[村元健一2004]。

当地で大阪市教育委員会が行った試掘調査でも現地表下約0.5mで中・近世の遺物を含む地層が確認されたため、本調査を実施することになった。

調査個所は大阪市教育委員会と原因者間で行われた協議に基づき現地表下0.5mまで予め重機で掘削してあった。しかし、現代の攪乱や整地層が残存していたため、第2層の上面まで重機を併用しながら人力で掘削した。引き続き第2層以下、第4層の上面まで遺物の採集および遺構検出をしながら人力で掘削し、第4層の上面で平面的な調査を実施した。第4層の上面では古代以前と推定された土壙、近世の耕作に伴う段状の遺構、近現代の廃棄土壙、戦後に施設された旧国鉄阪和貨物線の敷地境などを検出し、それぞれ写真や実測図として記録した。7月19日には調査機材を撤収し、現地におけるす

図1　今回の調査地

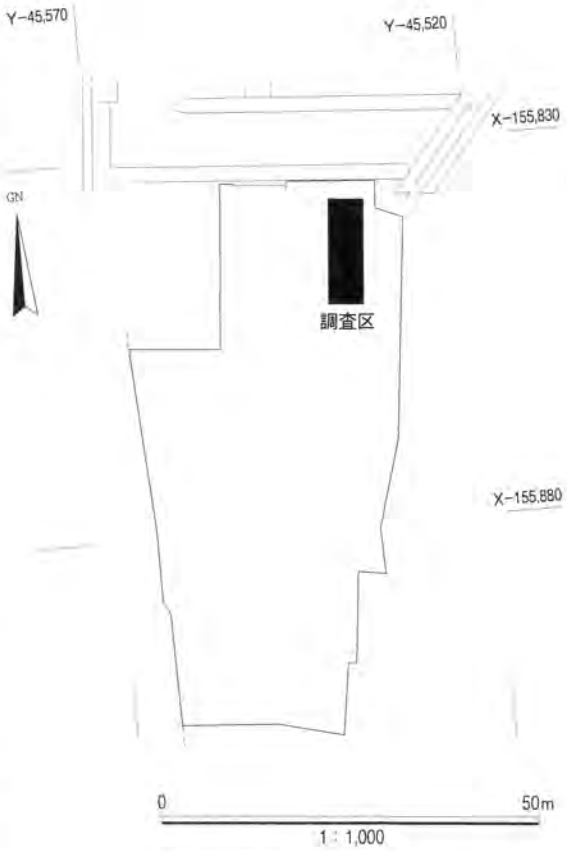


図2　調査区の配置図

べての調査を終えた。

図1・2・5・6の方位は座標北を基準としている。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・図中ではTP+○mとした。なお、SK301の土壌分析は小倉徹也による。

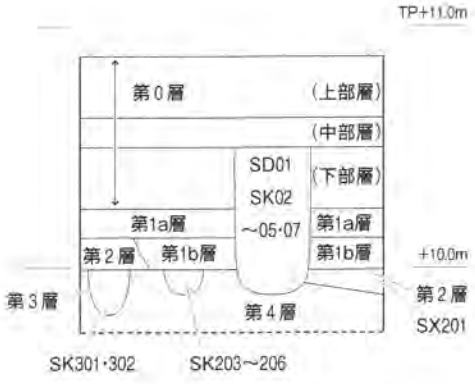


図3　地層と遺構の関係図

2)調査の結果

i)層序

本調査では第0層下で、第1～4層の各層が確認された(図3・4)。

第0層：本層は上・中・下部層と大きく三分される盛土層で、上部層はオリーブ黒色シルト質粗粒砂・細礫、中部層は灰オリーブ色細礫質粗粒砂、下部層は第3層のオリーブ黒色シルトおよび第4層の偽礫からなる。このうち、中・下部層は旧国鉄阪和貨物線の道床を形成する整地層で、調査区の東北～西南方向に延びるSD01は布掘り内に枕木を立て並べた鉄道用地の境界である。以下、調査区の基本層序について述べる(図3・4)

第1層は第1a・b層に二分される層厚25cm前後の作土層で、第1a層は暗オリーブ灰色細粒砂質シルト、第1b層はオリーブ黒色細粒砂質シルトからなる。近現代の陶磁器・瓦・レンガ・ガラスの細片を含む。

第2層は暗オリーブ色細粒砂質シルトからなる層厚10cm前後の作土層である。調査区の東南部に位置する近世の耕作に伴う段状の遺構SX201を形成する。中世の瓦器・土師器および中世～近世初期とみられる炉壁片・鉄滓の細片が出土した。

第3層は黒褐～黒色シルト層からなる暗色帯である。本調査ではSK301·302の埋土および第0層(下部層)の偽礫として確認されたのみである。当地域の古代以前の地層に対比される。

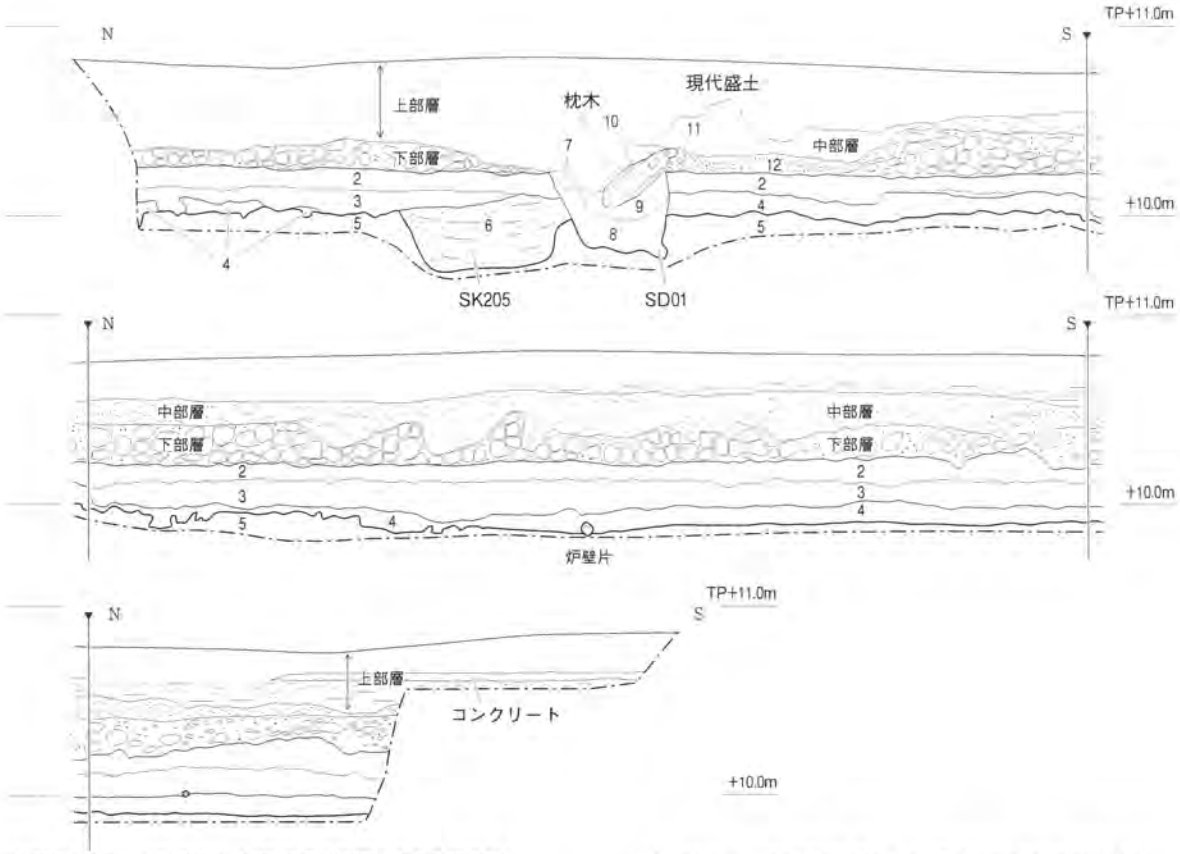
第4層：緑灰色粘土質シルトおよび黄色細粒砂混り粘土質シルト層で、当地域の地山層である。本層上面の標高はT.P.+10m前後ある。本層の上面では大小の土壙を検出したが、古代以前の地層に対比された第3層準の遺構はSK301・302のみであり、それ以外は埋土に1950年代の陶磁器・碍子・ガラス瓶を含むSD01・SK02～05・07・SP06および埋土が第2層準のSX201・SK203～206であった。

ii)遺構と遺物

上述したように、第4層上面で検出した遺構はSK301·302を除き大半が近現代に属するものであった(図5)。ここでは古代以前の暗色帯に相当する第3層準の遺構について報告する。

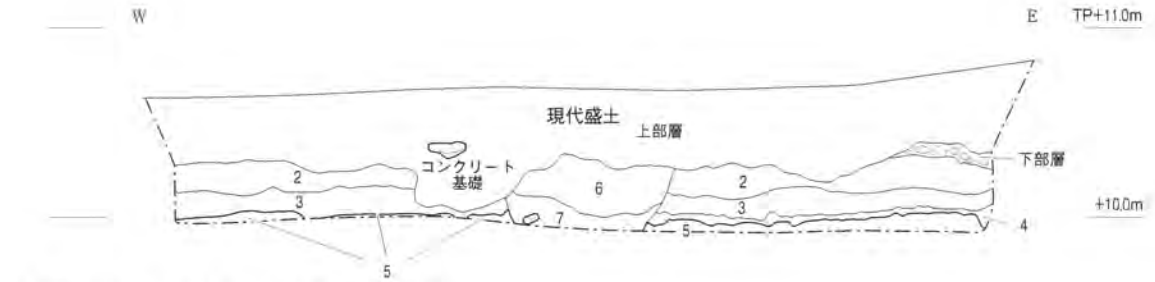
SK301　調査区の西北部に位置する土壙であるが、東南部を現代の廃棄土壙SK02に掘り込まれており、平面形態や規模については明らかでない(図5・6)。土壙は検出面からの深さが約0.25mあり、埋土は下から第3層の偽礫および炭化物を含む褐灰色シルト・炭化物が混じる黒褐色シルトであった。ともに遺物は出土しなかった。

SK302　調査区の南部に位置する東西1.3m、南北0.3～0.6m、深さ0.2～0.3mの平面形が不整形な



上部層：オリーブ黒色シルト（暗色帯の偽礫からなる第０層）
中部層：灰オリーブ黒色シルト細礫質粗粒砂（第０層）
下部層：オリーブ黒色シルトおよび
　緑灰色粘土質シルトの偽礫（第０層）
2：暗オリーブ灰～オリーブ黒色細粒砂質シルト（作土層：第1a層）
3：オリーブ黒～黄灰色細礫混り細粒砂質シルト（作土層：第1b層）
4：暗オリーブ色細粒砂質シルト
　～灰色粘土質シルト（炭化物を含む：第２層）
5：緑灰色粘土質シルト（第４層）
6：灰オリーブ色細粒砂質シルト（炭化物を含む：SK205埋土）
7：灰オリーブ色シルト（SD01埋土）
8：灰色細粒砂質シルト～シルト（SD01埋土）
9：灰色細粒砂質シルト（SD01埋土）
10：灰オリーブ色粘土質シルト（第４層地山偽礫：SD01埋土）
11：灰オリーブ色細礫混り細粒砂質シルト（下部層）
12：オリーブ黒色細礫～中粒砂（炭化物を含む：SD02埋土）

0　1　2m
1：40



上部層：オリーブ黒色シルト質粗粒砂-細礫（第０層）
下部層：オリーブ黒色シルト質粗粒砂～細礫（第０層）
2：暗オリーブ灰色細粒砂質シルト（作土層：第1a層）
3：オリーブ黒色細粒砂質シルト（作土層：第２層の偽礫を多く含む：第1b層
4：暗オリーブ色粘土質シルト（第２層：上位層の踏込みの影響を受けている）
5：緑灰色粘土質シルト（第４層）
6：オリーブ黒色細礫質シルト（暗色帯偽礫を多く含む：SK07埋土）
7：緑灰色粘土質シルト（SK07埋土）

0　1　2m
1：40

図４　東・北壁地層断面図

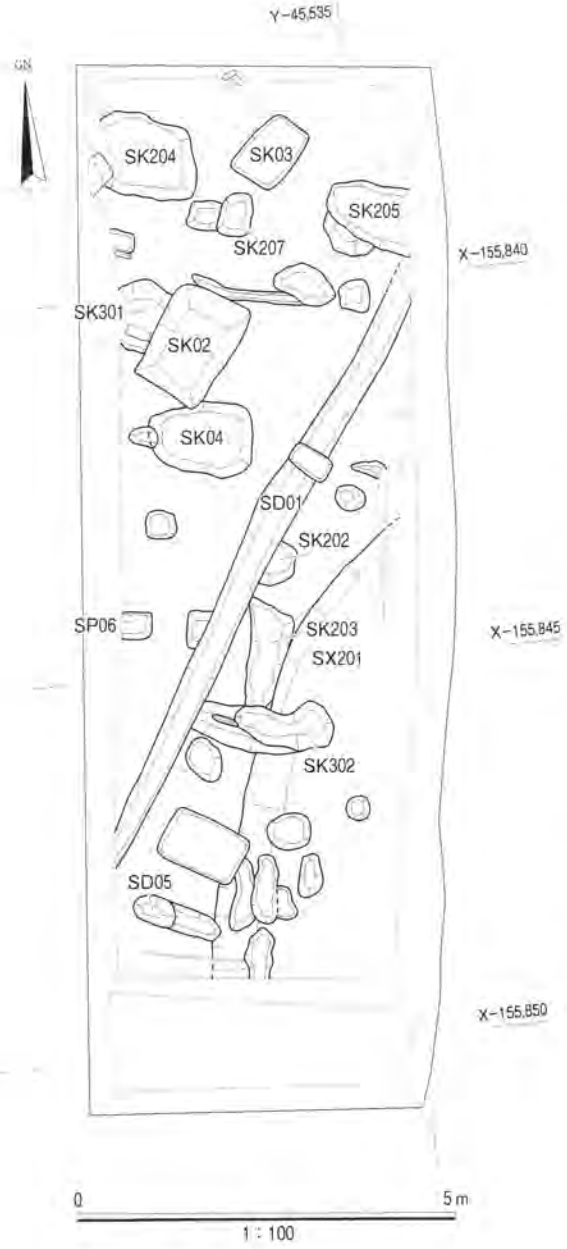


図5　第4層上面の遺構配置図

土壙である。土壙内には黒ボク様の黒色シルトが堆積していた。埋土の実体顕微鏡による鉱物観察を行った結果、火山ガラス(扁平型(Hb)および中間型(Ca・Cb))［吉川周作1976］や角閃石を多く含むこと(火山ガラス>角閃石≧単斜輝石)が判明した。火山ガラスは平安神宮火山灰(AT)や横大路火山灰層(アカホヤ火山灰)起源、角閃石は阪手火山灰層もしくは鬼虎川火山灰層起源の可能性がある。土壙から遺物は出土しなかったが、形状や埋土の状況、土壌分析などを考慮すると縄文時代前期以降の倒木痕の可能性が高い。

3)まとめ

今回の調査では古代以前の可能性のある土壙SK301、縄文時代前期以降とみられる倒木痕SK302を検出した。第2層から出土した中世～近世初期にかけての土器類および炉壁片や鉄滓の細片は、調査個所も山之内遺跡の東北地区でこれまでに明らかにされているような中世から近世初期の鋳物師関係の遺跡と何らかの関わりがあることを示唆している。今後、調査地の周辺部における発掘調査が進展すれば鋳物師関係の遺跡のみならず、それ以前の遺跡の実態が明らかになるものと思われる。

参考文献

村元健一2004、「苅田の鋳物師と山之内遺跡の鋳造関連遺構」:大阪市文化財協会編『苅田4丁目所在遺跡発掘調査報告』、pp.54－58

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「山之内遺跡発掘調査(YM08－3)報告書」:『平成20年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.77－83

吉川周作1976、「大阪層群の火山灰について」:『地質学雑誌』8、pp.497－515

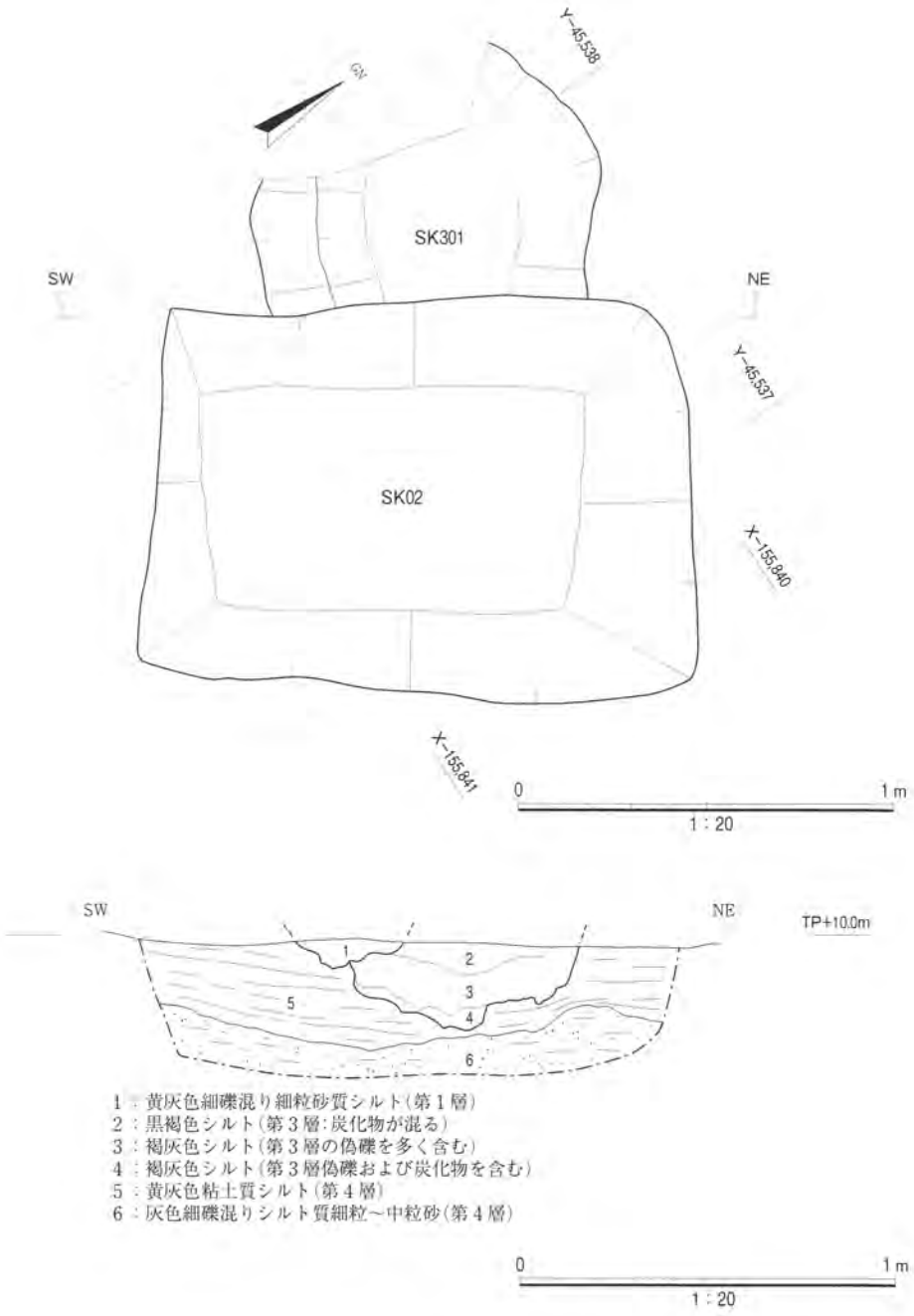
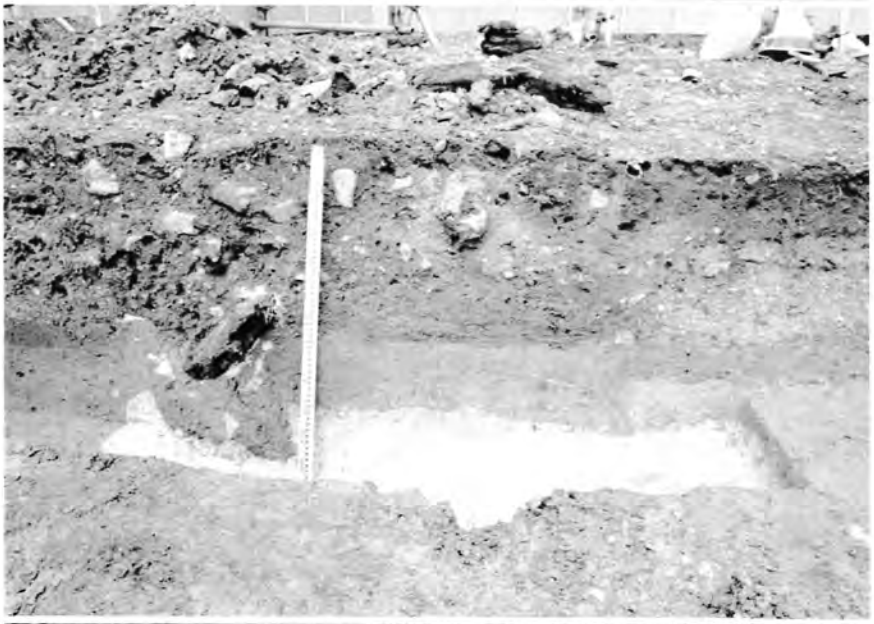


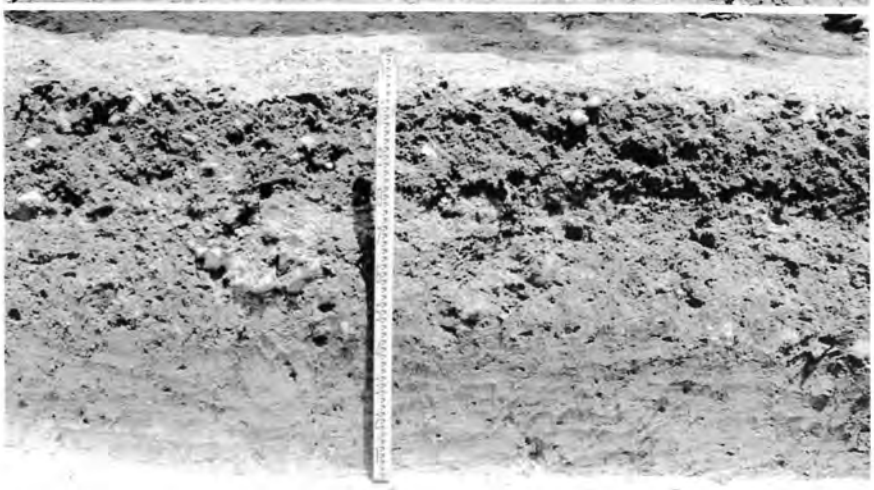
図6　SK301平面・断面実測図

東壁北部の地層断面
（西から）

東壁中央部の地層断面
（西から）



東壁南部の地層断面
（西から）



第４層上面の
遺構検出状況
（南から）

第４層上面検出の遺構全景（南から）

東住吉区南田辺一丁目における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(MQ11－１)報告書

調 査 個 所　大阪市東住吉区南田辺1丁目3
調 査 面 積　132㎡
調 査 期 間　平成23年9月20日～9月30日
調 査 主 体　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、谷崎仁美、市川 創

1)調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地の東緩傾斜面に位置する(図1・2)。周辺には、東側に古墳時代以降の遺構が見つかっている田辺4丁目所在遺跡や、西側に古墳時代の建物跡や中世の耕作遺構が見つかっている山坂遺跡が所在する。また、山坂遺跡と調査地との間には、難波宮朱雀大路から南へ続く古代の道路跡とされる難波大道が通ると推定されている。調査地から北西約200mのND90－10·94－15次調査では、6世紀の掘立柱建物や溝が検出され、西に約170mのND10－1次調査では、7世紀後半～8世紀の遺物を伴う幅3m以上の南北溝が検出され、当該時期の集落が近くにあることが予測されるとともに、6世紀のものと推定される柱穴も見つかっている。さらに、南西約130mのND11－3·4次調査では、10世紀末～11世紀前半と7～8世紀の2時期の柱穴のほか、中世の土壙を検出している[大阪文化財研究所2011]。

今回の調査地では、大阪市教育委員会が行った試掘調査で、古代から中世にかけての遺構面が検出されたため、調査を実施することとなった。調査は平成23年9月20日より開始した。近現代の盛土層である後述の第0層と近世の作土である第1層を重機により除去し、それより下位を人力による掘削で調査を進めた。層序ごとに遺構検出・掘削・記録などの作業を適宜行い、同年9月30日に埋戻しを含む現地におけるすべての作業を完了した。なお、重機掘削の過程において、撤去不可能な旧建物基礎を検出し、協議の結果、この基礎の範囲については調査対象から除外した。

また、基準点はmagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋○mと記した。

図1　調査地位置図

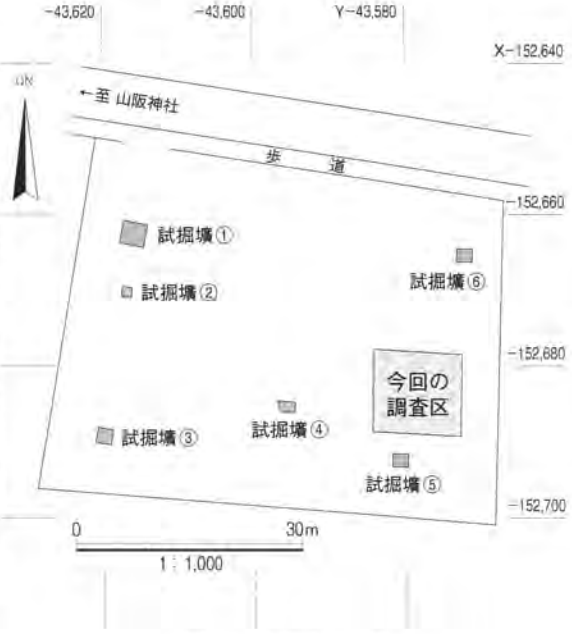


図2　調査区配置図

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

今回の調査地は、南から北に向かって低くなる地形であり(図5)、後述の第2層以下で南北で異なる地層の堆積が見られた。

第0層：近現代の盛土などで、層厚は60～70cmである。レンガで構築された建物の基礎部分が残存していた。

第1層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)の細粒～極細粒砂層で、シルト質極細粒砂偽礫を含む。層厚は約16cmである。調査区北部で本層の上部に黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂層が薄く堆積する。下面で東西方向の鋤溝群を検出した。重機で掘削したため詳細は不明であるが、近世の作土と考えられる。

第2層：近世の作土層である。上下に二分でき、調査区全体に第2a層が、北部にのみ第2b層が堆積する。第2a層は、暗灰黄色(2.5Y4/2)～灰黄色(2.5Y6/2)のシルト質細粒砂層で、層厚は調査区南部で約15cm、北部で約20cmである。古代の須恵器・瓦質土器・肥前磁器・瀬戸美濃焼磁器などを含む。第2b層は、暗灰黄色(2.5Y4/2)の中・細礫混りシルト質中粒砂層で、層厚は約20cmである。出土遺物からみて第2a層と第2b層との間に明確な時期差はみられない。

第3層：中～近世の作土層で、調査区南部に第3a層が、北部に第3b層が堆積する。層厚は約15cmである。第3a層は、黄褐色(2.5Y5/6)のシルト質中粒～細粒砂層で、上面で東西溝SD01を検出した。瓦質土器を多数含むが、肥前磁器も出土しており、地層の時期は近世に降る。第3b層は、明黄褐色(2.5Y6/8)の中・細礫混り細粒～極細粒砂層である。遺物がきわめて少なく、詳細な年代は不明である。土師器・須恵器・瓦器・瓦片を含む。このうち、須恵器には古代にものが含まれる。

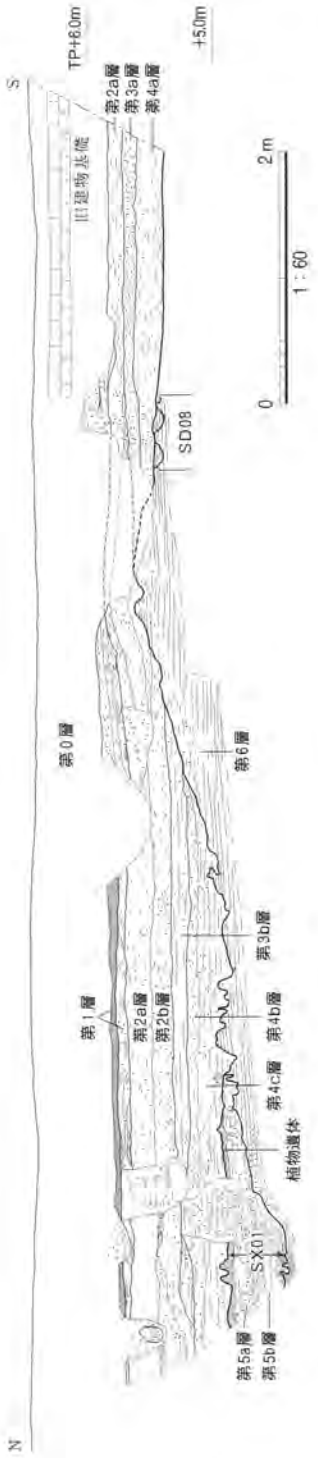


図4　東壁地層断面図

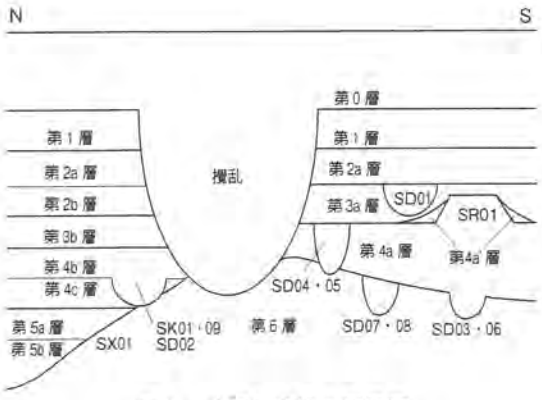


図3　地層と遺構の関係図

第４層：中世の作土層で、第4a～c層に分かれる。第4a層は、灰黄色(2.5Y6/2)のシルト質極細粒～細粒砂層で、層厚は約20cmである。上面で畦畔SR01、溝状遺構SD04・SD05を検出したほか、下面では、溝状遺構SD03・SD06を検出した。遺物がきわめて少なく、詳細な年代は不明である。土師器・須恵器・瓦器を含む。このうち、須恵器には古代のものが含まれる。第4b層は、灰黄色(2.5Y6/2)のシルト質細粒砂層で、層厚は13cmである。上面で溝状遺構SD02や土壙SK01・SK09を検出した。下面では、偶蹄類などの足跡を検出した。また第６層を検出する過程で、東側の畔状に高まる部分でサヌカイト製のナイフ形石器が出土した。第4c層は、暗灰色(2.5Y5/2)の中粒砂混りシルト質粘土層で、層厚は約30cmである。遺物は第4b・4c層一括で取り上げた。土師器・須恵器・瓦質土器三足羽釜の脚を含み、13～15世紀の年代が与えられる。

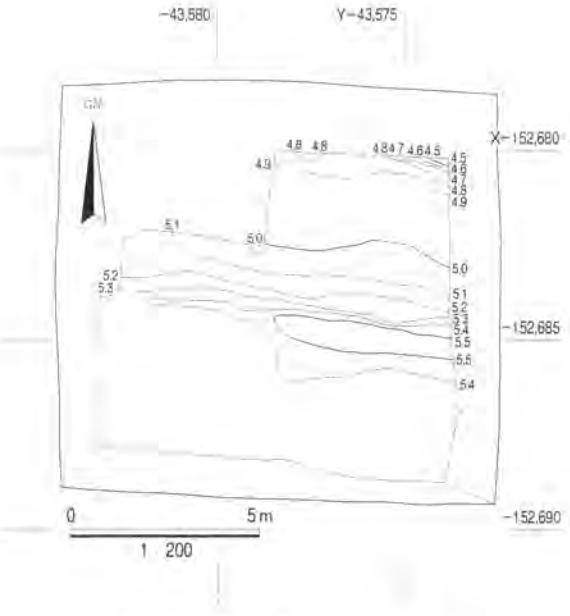


図５　調査区地形図(第６層上面)
数値は標高(TP+○m)

第５層：SX01の埋土で、上下に二分できる。第5a層は、黄灰もしくは暗灰黄色(2.5Y4/1.5)の極細粒砂質粘土層で、水成層である。上部に植物遺体の堆積が見られ、中粒～細粒砂層が狭在する。遺物はきわめて少なく、古代の須恵器をわずかに含む。第5b層は、黄灰色(2.5Y4/1)の粘土層でシルト質粘土偽礫を含む。遺物は出土していない。

第６層：暗灰黄(2.5Y5/2)～灰黄色(2.5Y6/2)の粘土層で、段丘構成層である。上部は極細粒砂質シルトである。上面でSX01や、瓦器を含む溝状遺構SD07、そしてSD08を検出した。

ⅱ)遺構と遺物(図６～10)

ａ．中世前期の遺構

第６層上面では、北半でSX01、南半で溝状遺構SD07・SD08を検出した(図６)。中世前期までの遺構群であると考えられる。

SX01は北への落込みで、深さは0.80m以上ある。SX01を埋める第５層は、第5b層は人為的な埋土である可能性があるが、第5a層は泥水が一定期間溜まったことによる自然堆積層である。SX01は、調査地周辺で中世の耕作遺構を検出していることから、農業用の溜め池とも考えられるし、周辺が起伏に富んだ地形であることから[国土地理院1983]、谷頭とも考えられる。

SD07は長さ2.90m以上、幅0.50m、深さ0.05mある東西溝で、細粒砂質シルトで埋没していた。瓦器の小片がわずかに出土した。

SD08は長さ4.70m以上、幅0.70～1.40m、深さ0.03mの不整形な東西溝である。SD07・SD08ともに遺構の性格はわからなかった。

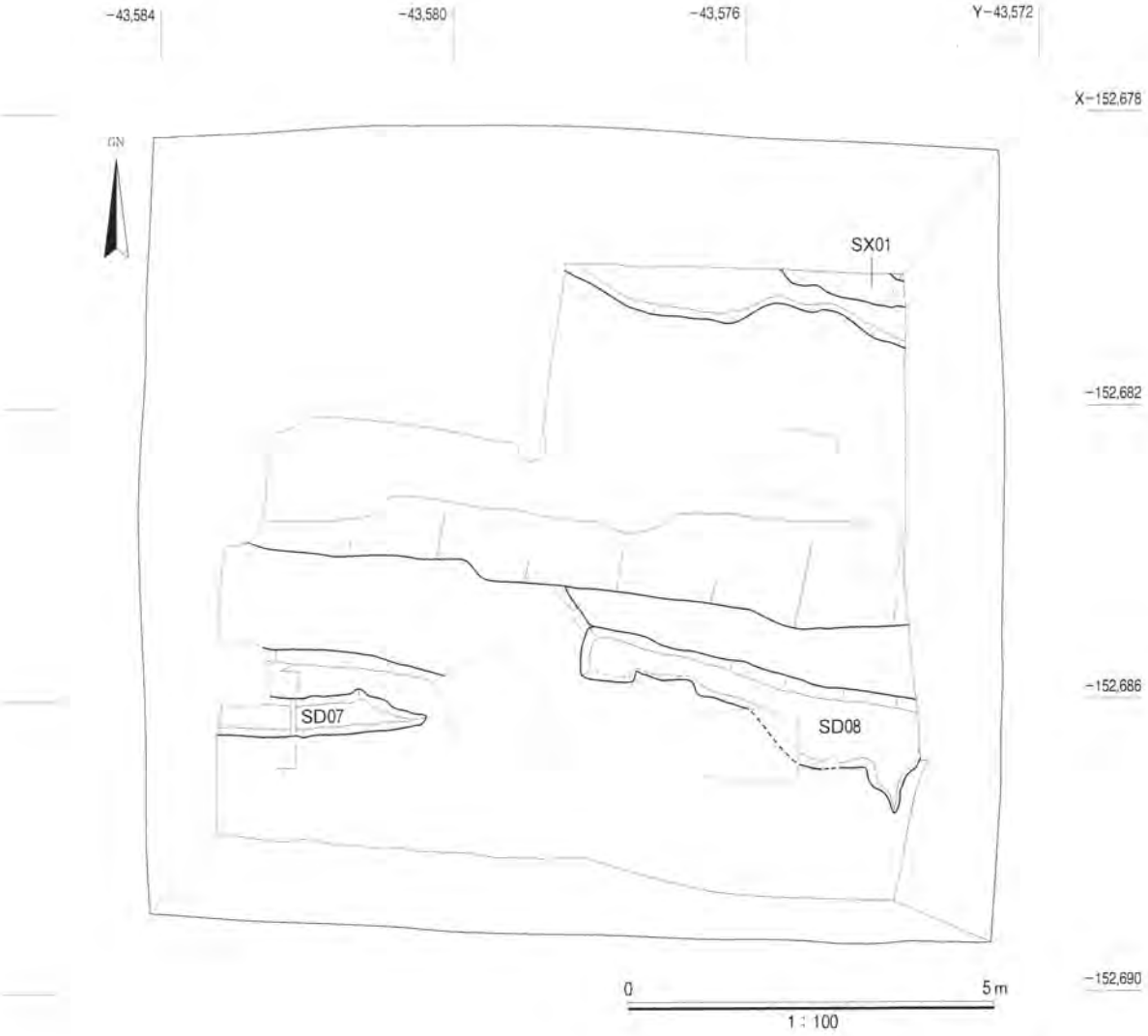


図6　中世前期の遺構平面図

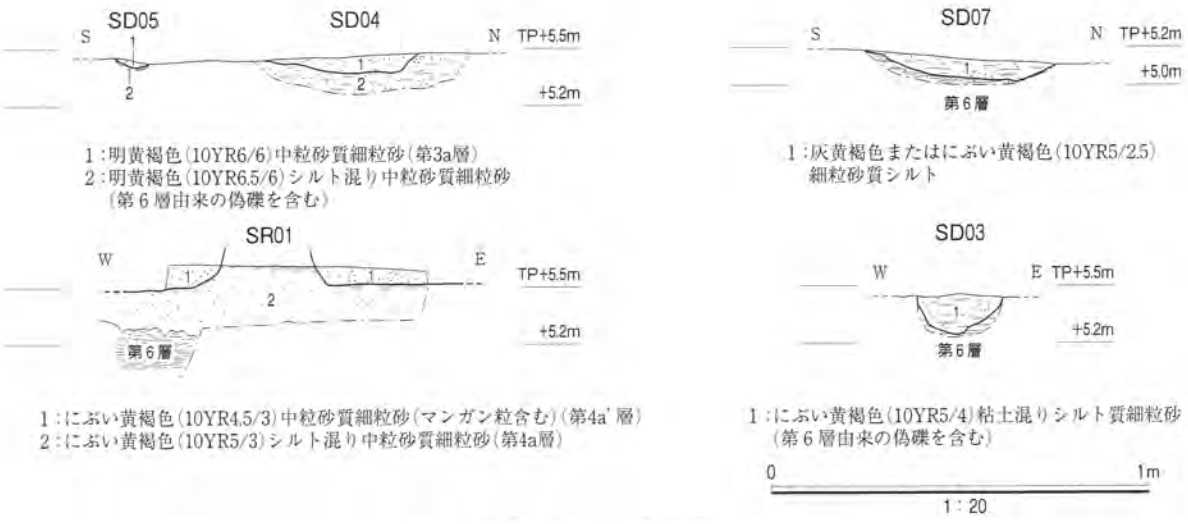


図7　検出遺構断面図

b．中世後期の遺構

第4a層上面では、南半の西側で畦畔SR01、溝状遺構SD04･SD05、南端で杭痕列を検出した(図８)。このうち杭痕は2.00m等間で東西方向に並んでおり、土留めの施設の可能性がある。

SR01は、南北長4.00m以上、東西長5.00m以上、幅0.50m、高さ0.05mの畦畔である。第4a層を削って構築されており、SR01の直上は機能時のマンガン粒を多く含む中粒砂質細粒砂(第4a'層)が堆積していた。しかし、第4a'層はSR01周囲にしか見られなかった。

SD04とSD05は、SR01と同方向に延び、SD04は長さ2.70m、幅0.55m、深さ0.10m、SD05は長さ1.30m、幅0.10m、深さ0.04mあった。いずれも、下部は段丘構成層由来の偽礫を含むシルト混り中粒砂質細粒砂層、上部は第3a層で埋没していた。

第4a層下面では、溝状遺構SD03･SD06を検出した。SD03は、長さ1.00m、幅0.23m、深さ0.10mの南北溝で、SD06は長さ1.50m、幅0.35m、深さ0.03～0.04mの東西溝である。いずれも段丘構成層

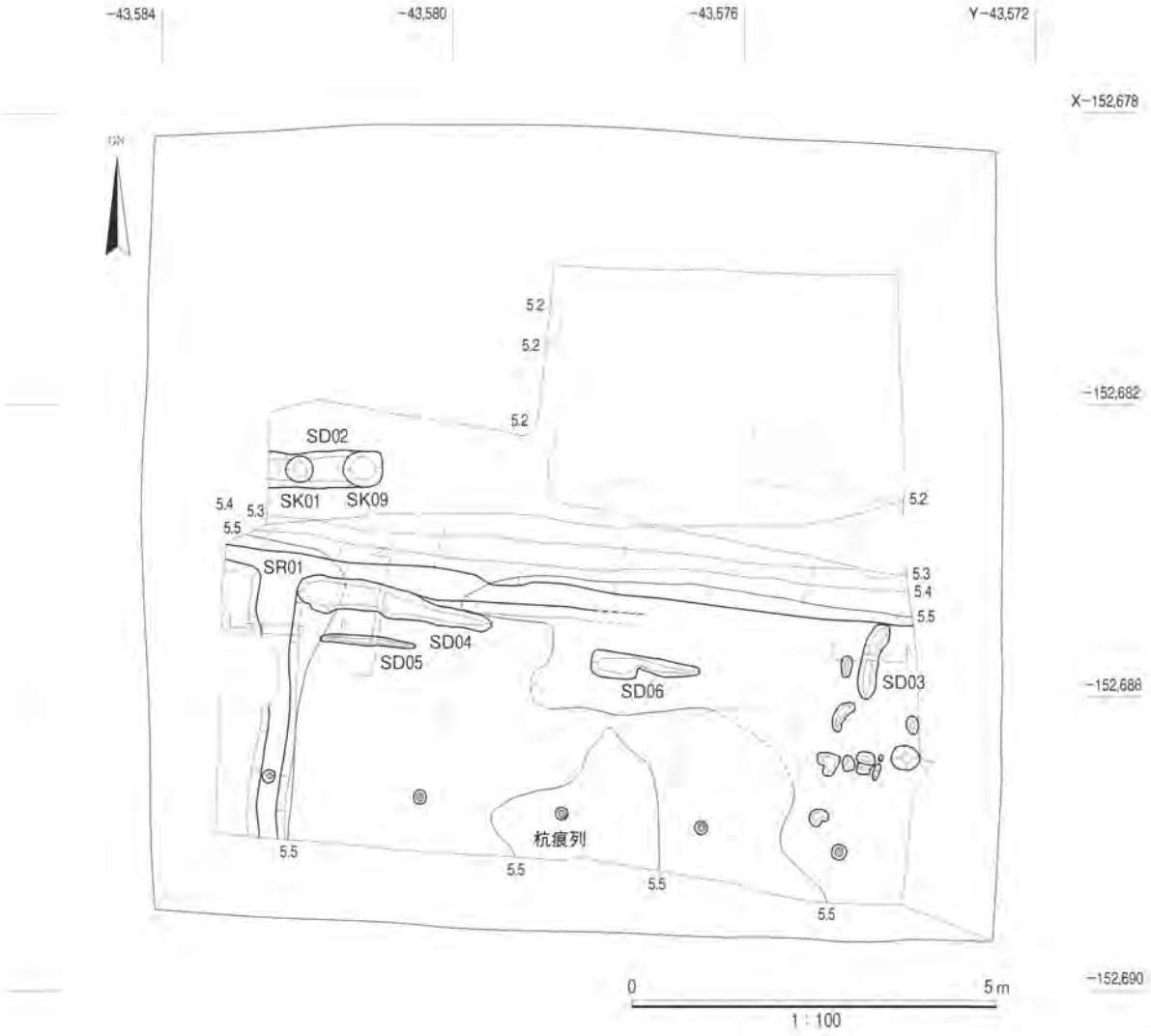


図８　中世後期の遺構平面図(数値は標高TP+○m)

由来の偽礫を含む第4a層で埋没していた。耕作に係わる遺構であろう。

第4b層下面では、SK01・SK09・SD02を検出した。SK01は直径0.36m、深さ0.06mの土壙である。SK09は直径0.50m、深さ0.10mの土壙である。SD02は長さ1.60m以上、幅0.50m、深さ0.06mの東西溝である。SK01・SK09はSD02を破壊していた。これらは耕作に係わる遺構であろう。

遺構から時期のわかる遺物は出土していないが、層内出土遺物から、これら第４層の遺構は中世後期に属するものである。

ｃ．中世後期～近世の遺構

第3a層上面で、SD01やSP01・SP02を検出した(図９)。SD01は長さ8.90m以上、幅0.30m、深さ0.06mの東西溝で、暗灰色の中粒砂質細粒砂で埋没していた。耕作に係わる溝と考えられる。SP01は直径0.15m、深さ0.02m、SP02は直径0.20m、深さ0.01mあった。

第２層上面では、２～３本の杭がセットになる杭列が東西方向に２列並んでいた(図９)。これは南

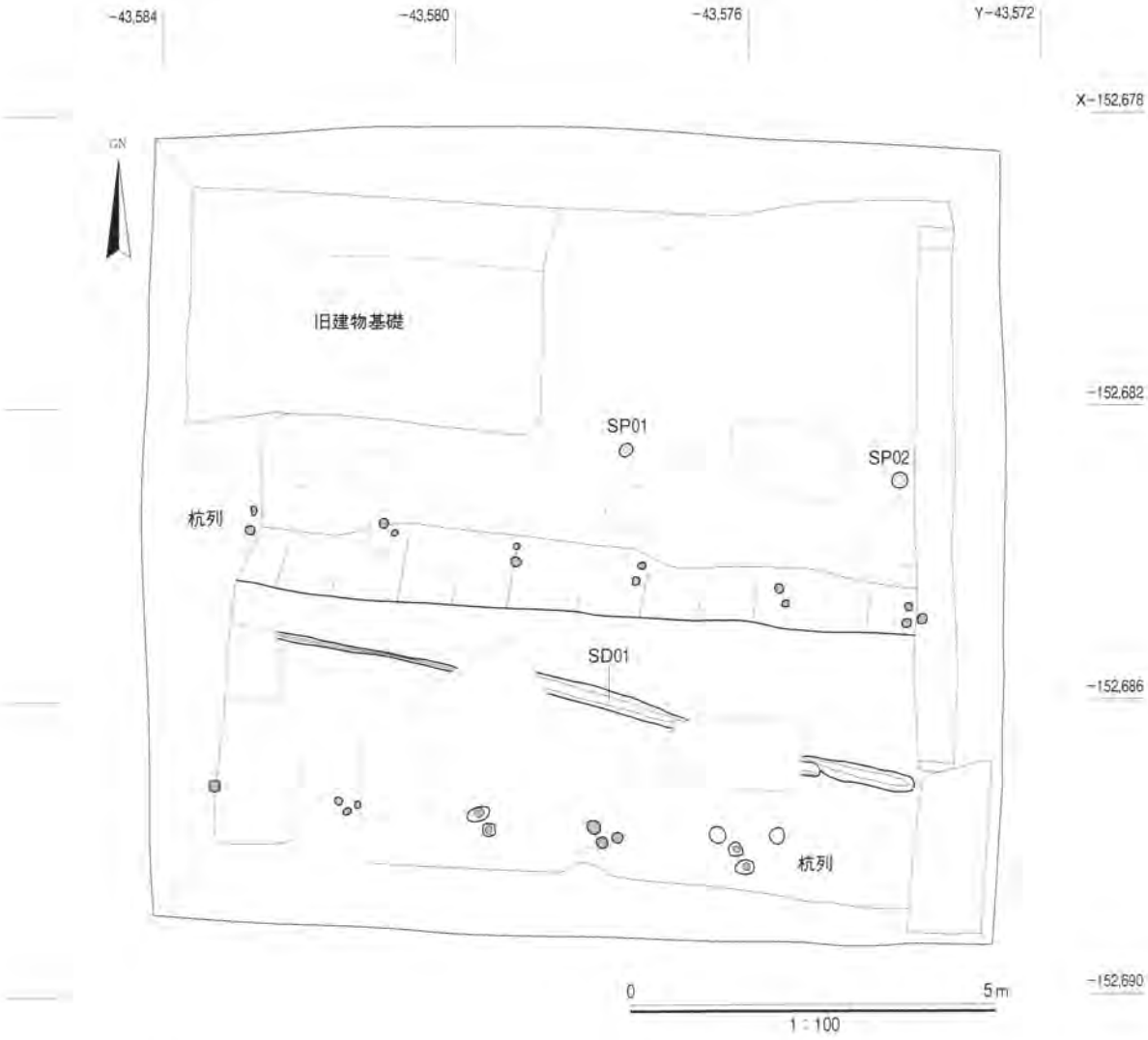


図９　中世後期～近世の遺構平面図

から北へ土が流れないように土留めの柵を設けていた跡であると考えられる。第２層の下面では、南半において、東西方向の鋤溝群を検出した。

これら第３・２層の遺構は、中世後期から近世に属するものである。

ｄ．各層出土遺物

出土遺物は、遺構に伴うものは極めて少なく、ほとんどが地層内からの出土である(図10)。

第4b・4c層からは、瓦質土器三足羽釜の脚１が出土した。年代の詳細は不明であるが、13～15世紀代であると考えられる。

第3a層からは、瓦質土器羽釜２・３、甕４、土師器の小型皿５、火鉢６が出土した。２は京都系で、おそらく三足がつくものと思われる。４は頸部が短く、口縁端部が肥厚して折り返されないもので、内面に若干細かいハケメが残る。15世紀のものと考えられる。５は、胎土の色調が橙色で内面は黒褐色を呈する。口縁部は強くヨコナデし、底部にはユビオサエが残る。荘厳浄土寺境内遺跡発掘調査のうちSE301・302・304出土資料に類例があり[大阪市文化財協会2004]、これとの比較から13世紀後半～14世紀初頭のものと考えられる。

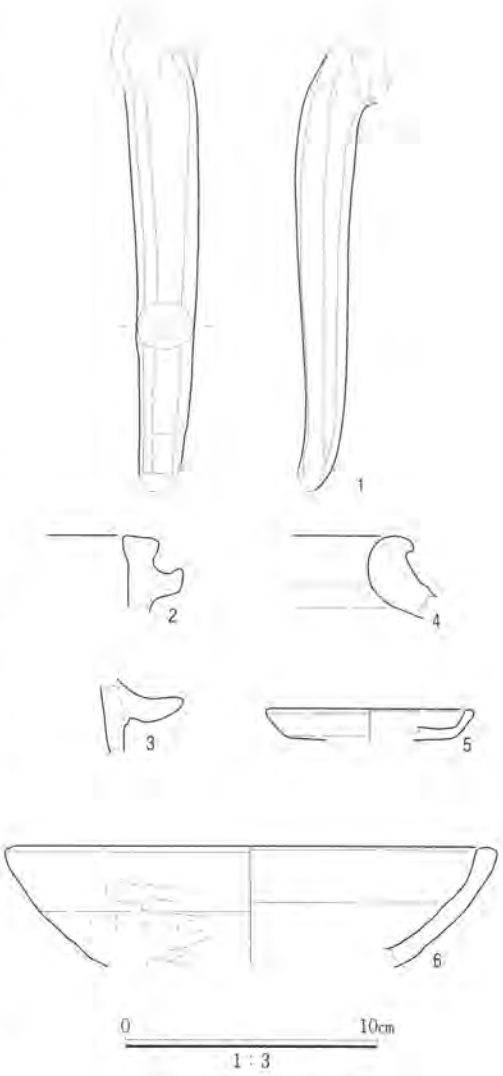


図10　出土遺物実測図
第4b・4c層(１)、第3a層(２～６)

３)まとめ

今回の調査では中世前期から近世にかけての耕作に係わる遺構を検出した。

本調査地では、周辺で見つかっているような古墳時代までさかのぼる遺構は検出されなかったが、古代の須恵器が多数出土したため、古代から土地利用されていた可能性はある。耕地開発により地層が削られ、古代の痕跡が残らなかったものと考えられる。また、本調査地から最も近い調査地であるND11－３・４次調査では、10世紀末～11世紀前半と７世紀～８世紀の２時期の建物が検出されたが、それらと同時期の遺構も見つからなかった。

本調査地で、南北で高低差のある地形を利用して耕地開発が行われたのは、第4b･4c層の遺物から、少なくとも13世紀以降であると考えられる。その後、近代に宅地化されるまで、本調査地が耕作地として利用されてきた過程を知ることができた。

今回、西側の山坂遺跡や難波大道跡、東側の田辺４丁目遺跡などと直接関連するような遺構を発見することはできなかったが、調査地周辺の土地利用の変遷を考えるうえで重要な成果を得られた。今回の知見を踏まえて、今後さらなる調査の積み重ねにより、調査地周辺のより具体的な歴史的変遷が

明らかになるだろう。

引用文献

伊野近富1995、「土師皿」：中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社、pp.225～244

大阪市文化財協会2004、『荘厳浄土寺境内遺跡発掘調査報告』

大阪文化財研究所2011、『東住吉区南田辺１丁目における建設工事に伴う難波大道跡発掘調査(ND11－３)報告書』

建設省国土地理院1983、『土地条件調査報告書(大阪平野)』

調査区東壁地層断面
（北西から）

第４層下面偶蹄類の足跡（西から）

第６層上面の遺構
（北東から）

第４層上面の遺構
（北西から）

SR01
（南東から）

東住吉区照ヶ丘矢田四丁目における建設工事に伴う
中臣須牟地神社境内遺跡発掘調査(NT11－１)報告書

調 査 個 所　大阪市東住吉区照ヶ丘矢田４丁目34－１
調 査 面 積　25㎡
調 査 期 間　平成23年11月14日～11月17日
調 査 主 体　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、京嶋 覚

1)調査の経過

調査地は式内社中臣須牟地神社境内の北に隣接した敷地である。周辺には北側には照ヶ丘矢田遺跡があり、TR97－１次調査では弥生時代後期の土器棺墓が発見されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999]。また、東南には「灰塚」と呼ばれる土壇が残る住道寺跡があり、土壇北および東側で行われたSJ07－１次調査[大阪文化財研究所2008]では瓦を多く出土する中世～近世の溝が検出され、SJ91－１次試掘調査で出土した五輪塔文のスタンプのある平瓦[黒田慶一1993]とともに中世寺院の存在を示唆する成果があり、SJ10－１次調査[大阪文化財研究所2010]では古墳時代中期の遺構も新たに確認されている。

事前の大阪市教育委員会による試掘調査では現地表から0.5m下で、中世の遺物包含層と遺構面が確認されたため、敷地の西南部に一辺長５mの調査区を設定し、現地表下２mまで発掘調査を行うことになった。

11月14日に重機による表土掘削を行い、現地表から約0.5m下で、試掘時で確認された遺構面と思われる第５層上面を確認した後、それ以下の各地層を人力掘削して調査を進めていった。17日に遺構掘削および記録作業をすべて完了し、同日中には埋戻し作業および機材の撤収作業を行って現場作業を完了した。

以下にその結果を報告する。なお、基準点はmagellan社製ProMark3により測位し、図中の方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋○mと記した。

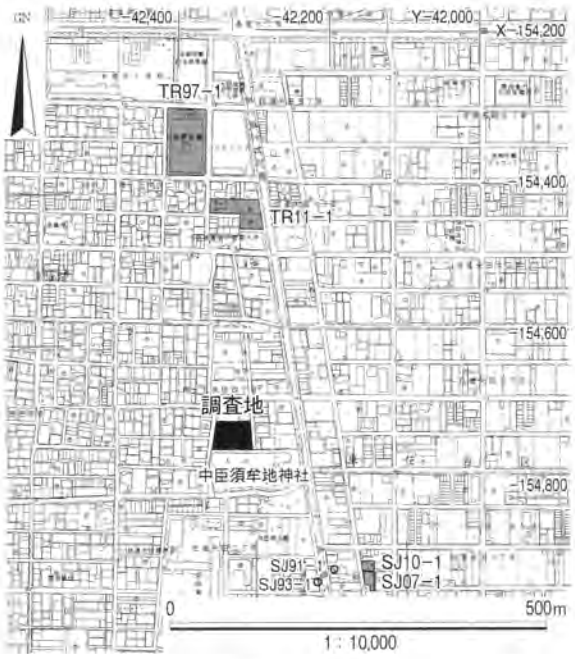


図１　調査地位置図

図２　調査区位置図

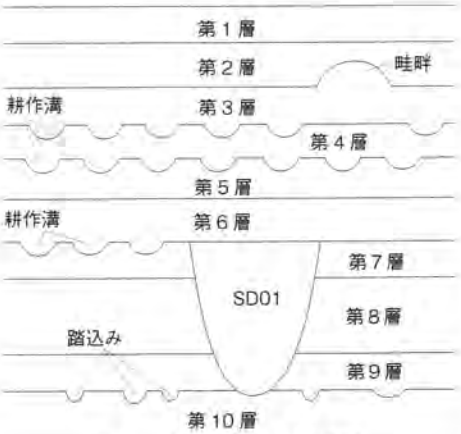


図３　地層と遺構の関係図

２）調査の結果

ｉ）層序（図３・４）

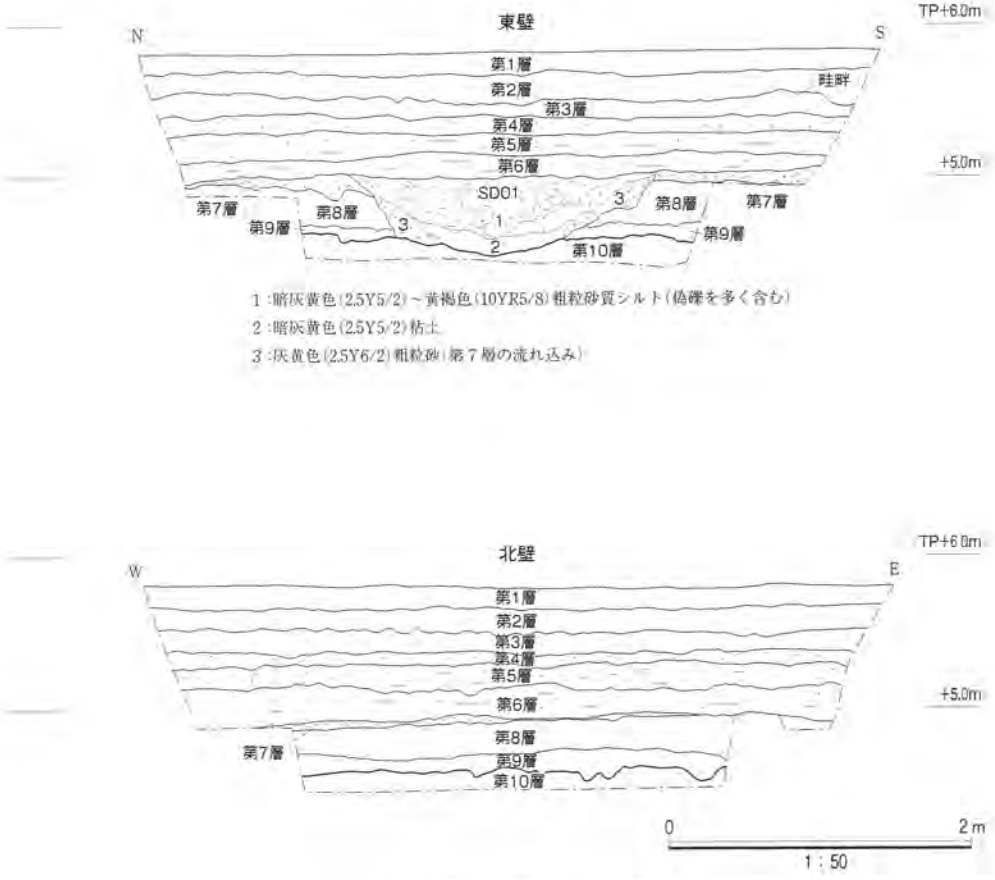
第１層：暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）細粒～中粒砂質シルト層で現代の作土である。厚さは10cmである。

第２層：黄褐色またはオリーブ褐色（2.5Y4.5/4）シルト質中粒～粗粒砂層で、現代の整地層である。層厚は最大で20cmである。

第３層：黒褐色または暗オリーブ褐色（2.5Y3/2.5）粘土質シルト層の作土である。層厚は最大で15cmである。下面で幅10～20cmの東西方向の耕作溝が多数検出された。また、調査区南壁付近の本層上面には幅40～50cmの東西方向の畦畔があったことが断面から確認され、この畦畔から南壁までの本層上面が若干低くなっていた。

第４層：にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質中粒～粗粒砂層で、酸化マンガンの斑文が見られる作土である。層厚は10cmである。下面で東西方向の耕作溝が多数検出された。

第５層：暗灰黄色またはオリーブ褐色（2.5Y4/2.5）細粒～中粒砂質シルト層で、マンガンの斑文が見られる作土である。層厚は15cmである。



1：暗灰黄色（2.5Y5/2）～黄褐色（10YR5/8）粗粒砂質シルト（偽礫を多く含む）
2：暗灰黄色（2.5Y5/2）粘土
3：灰黄色（2.5Y6/2）粗粒砂（第７層の流れ込み）

図４　東壁・北壁地層断面図

第６層：黄褐色またはオリーブ褐色(2.5Y4.5/3)粘土質シルト層の作土である。鉄酸化物の斑文が見られる。層厚は15cmである。調査区北部の下面で東西方向の耕作溝がかすかに確認できた。

第７層：暗灰黄色または黄褐色(2.5Y5/2.5)粗粒砂～細礫の水成層である。層厚は最大で10cmである。調査区東北部が最も薄く、西南方向に厚くなる。上面でSD01を検出した。

第８層：明黄褐色(10YR7/6)シルト質粘土～粘土層の作土である。層厚は25cmである。古代と思われる土師器杯・皿類の細片が少量出土した。

第９層：灰黄褐色(10YR6/2)粘土層の作土である。層厚は最大で10cmである。下面で踏込みが確認された。

第10層：にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土の地山層である。上面からの乾痕が顕著である。

ⅱ)遺構と遺物(図５・６)

第６層の作土層を掘削し、第７層の水成層の上面でSD01を検出した。

SD01は幅1.9m、深さ0.5mの東西溝である。調査区のほぼ中央部で長さ3.6m分が検出された。埋土は底部に暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土が最大10cmの厚さで堆積しており、それより上位は暗灰黄色(2.5Y5/2)または黄褐色(10YR5/8)粗粒砂質シルトで、第７～９層の偽礫を多く含む。両肩から斜面

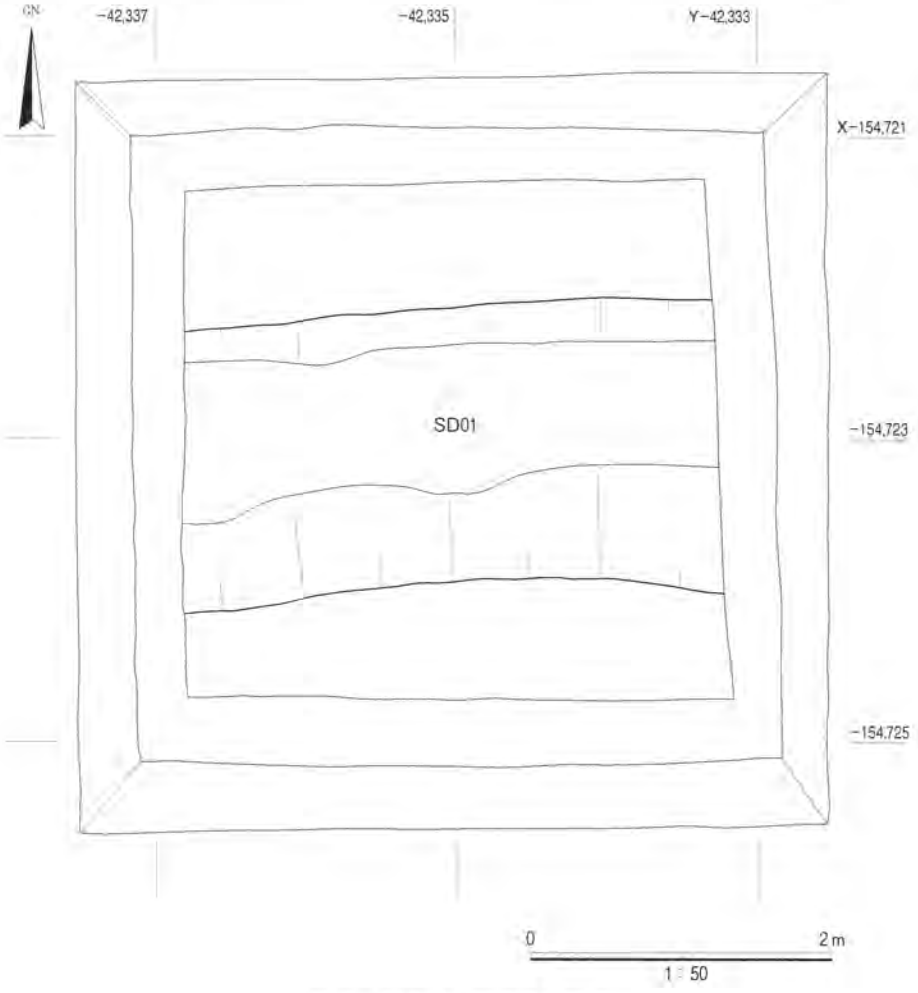


図５　第７層上面遺構平面図

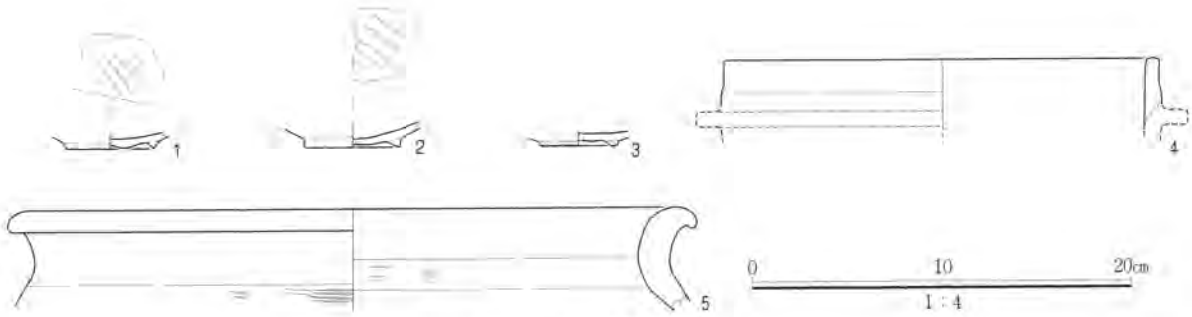


図６　出土遺物実測図
第６層（１・２）、SD01（３～５）

にかけて第７層の流込みが見られる。

この溝は正東西方向をとっており、条里に規制された配置と考えられるが、明治時代の地図などから推定される坪境には合致しない。

出土遺物には土師器羽釜４・甕、瓦器椀３、瓦質土器甕５が出土した。４は口縁部が短く直立する摂津E型[菅原正明1982]と思われる土師器羽釜で、３は高台が低い台形をなす12世紀後半～13世紀の瓦器椀である[森島康雄1995]。しかし、５の瓦質土器甕が含まれることから、溝は12世紀後半～14世紀に埋まったと考えられる。

また、直上の第６層からは土師器鉢、12世紀中～後葉の瓦器椀１・２、瓦質土器羽釜口縁部、平瓦片などのSD01と同時期の遺物が出土しており、第５層からは、龍泉窯系の青磁や白磁の細片が出土しているものの、土師器焙烙、青花細片などが含まれており、第４層下面の耕作溝に帰属すると推定される遺物も含まれていた。

３）まとめ

今回の調査では、室町時代には埋没していた正東西方向の溝を検出した。出土遺物から鎌倉時代に機能していた可能性があり、この地域の条里地割の成立を考える上で一つの資料を提供しえたといえよう。古代の洪水層による氾濫によって形成されたとみられる第７層の堆積で土地は荒廃し、新たに開発されたのは平安時代以降になってからと思われ、延久４(1072)年太政官牒に記される石清水八幡宮の寺領であった「矢田庄」との関連も検討すべき課題であろう。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999、「城南学園における建設工事に伴う確認調査(TR97－1)」：『平成９年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告』、pp.69－74

2008、「住道寺跡発掘調査(SJ07－１)報告書」：『平成19年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告』、pp.139－148

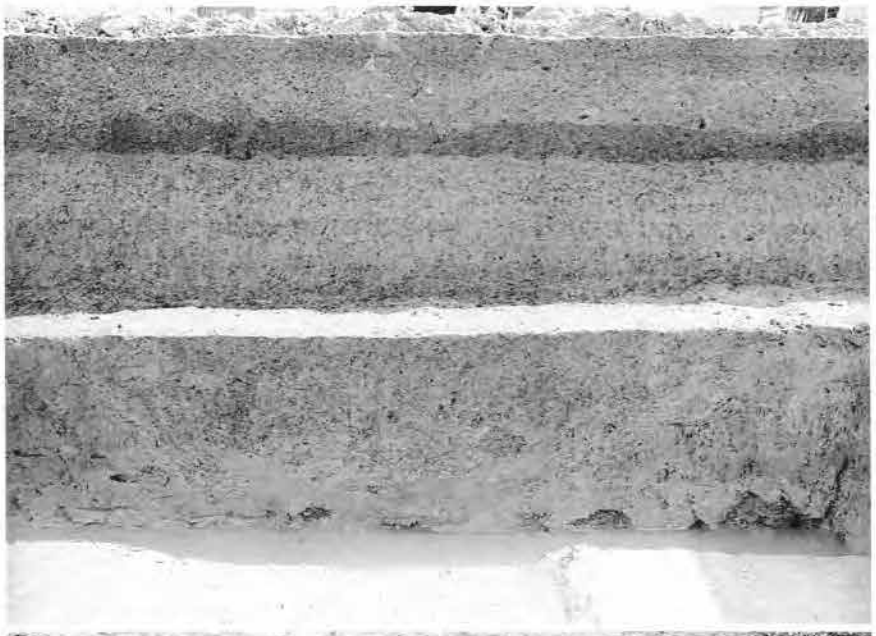
大阪文化財研究所2010、『東住吉区住道矢田八丁目における建設工事に伴う住道寺跡発掘調査(SJ10－１)報告書』

黒田慶一1993、「住道出土の平瓦の五輪塔文」：大阪市文化財協会編『葦火』45号、p.8

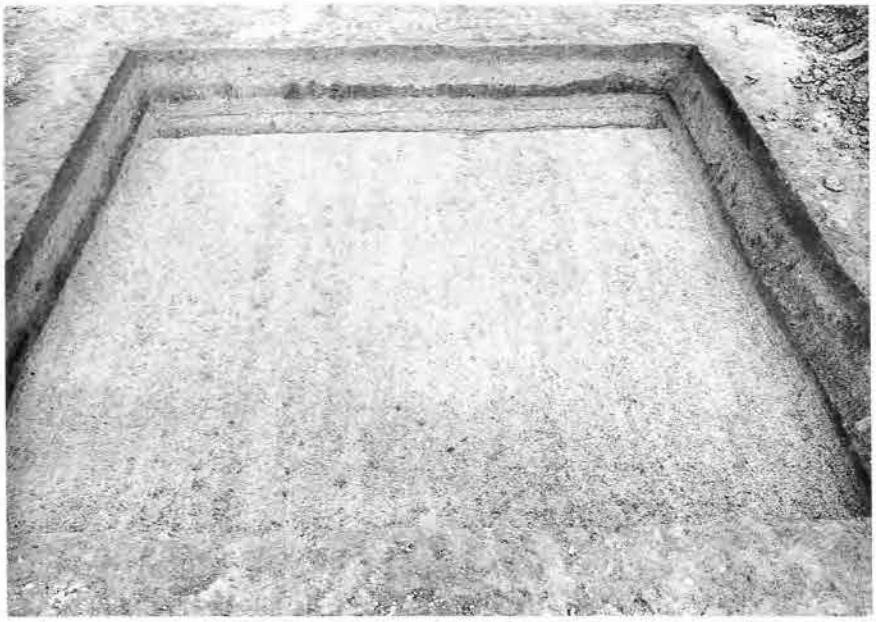
菅原正明1982、「畿内における土釜の製作と流通」：『文化財論叢』、pp.725－758

森島康雄1995、「瓦器椀」：中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』、真陽社pp.315－337

東壁断面



第５層上面検出状況
（西から）



第７層上面 SD01
（西から）

東住吉区照ヶ丘矢田二丁目における建設工事に伴う
照ヶ丘矢田遺跡発掘調査(TR11－１)報告書

調 査 個 所　大阪市東住吉区照ヶ丘2丁目1－1・2・8・9
調 査 面 積　411㎡
調 査 期 間　平成23年6月30日～7月27日：西区
　　平成23年8月11日～9月8日：東区
調 査 主 体　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、高橋工・岡村勝行

1)調査に至る経緯と経過

本調査地は大阪市東住吉区の南部にあって、大阪市域を南北に延びる上町台地とその東で河内台地から北へ突出した瓜破台地の間の沖積平野に位置する(図1)。西の上町台地上には、南住吉・山之内遺跡があり、東の瓜破台地上には瓜破遺跡が展開する。調査地近隣で西には矢田部・矢田2丁目所在遺跡が、南には中臣須牟地神社境内遺跡・住道寺跡がある。最近の調査では、中臣須牟地神社境内遺跡で正東西方向に掘られた中世の溝が発見されている[大阪文化財研究所2012]。また、住道寺跡では以前より中世の瓦が多量に出土することが知られているが、2007年度の調査では、古代寺院須牟地寺の後身ともされる阿弥陀寺に係わる可能性がある遺構が発見されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]。本遺跡は1997年に発見され、最初のTR97－1次調査では、本調査地の約100m北西の学校用地で、古代～中世の遺物と弥生時代後期後半の土器棺墓が発見されて注目を集めた[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999]。

当該地において建築工事が計画され、大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、中世の遺物を含む地層が発見されたため、これ以下の地層を対象に本調査が行われることとなった。発掘調査は、現有建造物の解体工事と並行して行ったため、東・西区に分けて行うこととした(図2)。まず、西区に着手、終了した後、約2週間の中断をはさんで東区の調査を行った。西区は残土置き場を確保するために、2分割して調査を行った。各区の調査期間は頭書の通りである。掘削作業は、近世の地層までを重機を用いて行い、中世以前の地層については人力によって、遺物・遺構の検出に注意しながら進めた。調査面積は、当初計画では東・西区各210㎡であったが、西区で既存物の制約から9㎡を減

図1　調査地位置図

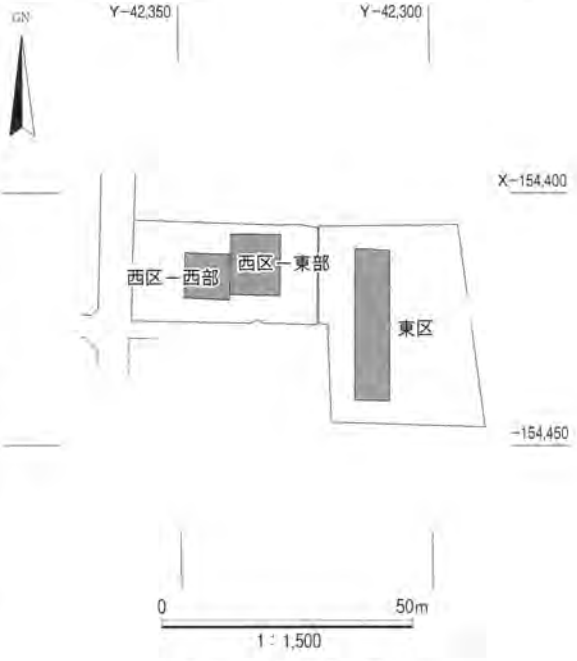


図2　調査区位置図

じたため、頭書の面積となった。また、基準点はmagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋○mと記した。

2)調査の結果

ⅰ)層序(図3・4)

現地表以下で14層を確認した。

第1層：現地表をなし、西区では淡褐色粗粒砂からなるテニスコート整地層、東区では瓦礫を含む灰色粗粒砂からなる整地層であった。

第2層：近世～現代の作土層で、西区ではオリーブ褐色砂～シルトからなり、東区では暗灰黄色砂質シルトからなる。層厚は20cmであった。

第3層：近世の作土層で、西区にのみ分布し、東区では遺構の埋土として遺存していた。にぶい黄橙色砂からなり、層厚は15cmであった。肥前磁器片を含み、近世の地層である。

第4層：中世の河成堆積層で、上部(第4a層)・下部(第4b層)に分かれた。

第4a層は東・西区に分布し、西区では褐色砂、東区ではオリーブ褐色砂からなり、トラフ型斜交葉理が発達していた。層厚は、西区では40～65cm、東区では40cmと西区で厚く、本層を堆積させた水流の中心は西区側にあったものと考えられる。土師器･瓦器･瓦質土器片を含み中世後半の地層である。本層の上面では、西区で溝や落込みが、東区では井戸や溝などおもに近世の遺構が検出された。

第4b層は東区に分布し、灰色砂質シルトからなる。層厚は30cmで、上面では、SX415が検出された。

第5層：中世の古土壌で、暗オリーブ灰色粘土質シルトからなり、明確に耕作の痕跡は確認できなかったが人為的な擾乱をうけており、作土である可能性がある。東・西区に分布し、層厚は5～15cmであった。本層下面で、西区ではSD507が、東区ではSD517が検出された。土師器・須恵器・瓦器

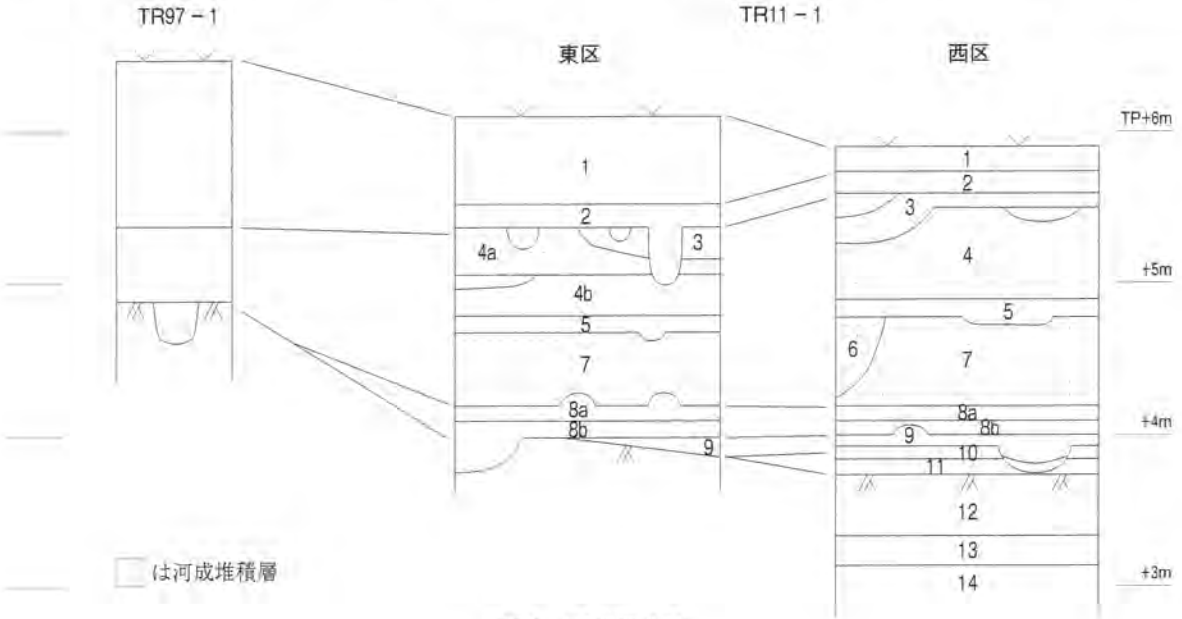


図3　層序模式図

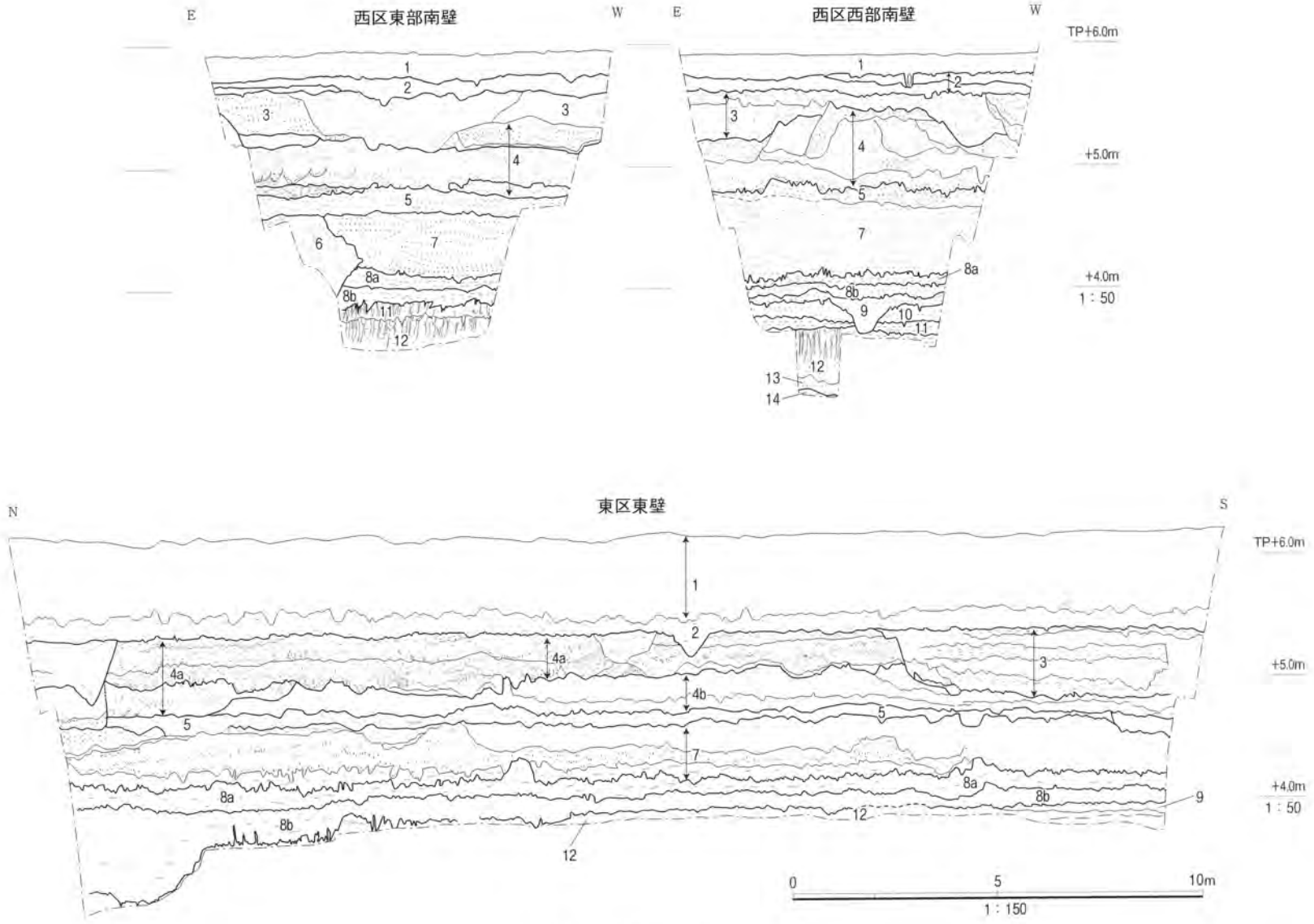

西区東部南壁
E
W
西区西部南壁
E
W
TP+6.0m
+5.0m
+4.0m
1：50
東区東壁
N
S
TP+6.0m
+5.0m
+4.0m
1：50
0
5
10m
1：150

図4　地層断面図

を含み、13世紀後半頃の年代が与えられる。

第６層：中世の河成堆積層で、西区の第７層上面で検出された自然河川NR708の埋土である。黄褐色細礫～砂からなる。確認できた最大の層厚は100cmである。

第７層：中世の自然堆積層で、東・西区に分布する。西区ではオリーブ灰色粘土～シルトからなり、上方に細粒化する。層厚は最大80cmで東方に向って薄くなっていた。東区では緑灰色粘土質シルト～灰オリーブ色粗粒砂からなり、層厚は50cmであった。土師器・須恵器・瓦器片を含み、12世紀の年代が与えられる。

第８層：古代の水田作土層で、東・西区に分布し、上部(第8a層)と下部(第8b層)に分かれた。いずれも土師器・黒色土器片を含み、10～11世紀の年代が与えられる。

第8a層は暗灰色シルト質粘土からなり、層厚は10cmであった。東区では、上面で水田畦畔SR825～827が検出された。

第8b層は灰色粘土からなり、層厚は10cmであった。下面は凹凸が激しく、層界は明瞭であった。東区北端部では、本層下面で落込みSX1232が検出された。

第９層：古代の水田作土層で、オリーブ黒色細粒砂混り粘土質シルトからなり、西区の西半部にのみ分布していた。上面で水田畦畔SR909が検出された。土師器・須恵器片を含み、８世紀の年代が与えられる。

第10層：オリーブ黒色シルト質粘土からなる自然堆積層で、西区西半部にのみ分布していた。層厚は10cmで、出土遺物はなく、詳細な時期は不明であった。上面で溝SD1010が検出された。

第11層：灰色粘土～シルトからなる古土壌で、東・西区に分布する。西区の東半部では草木根による擾乱が顕著にみられた。層厚は10cmで、出土遺物はなく、詳細な時期は不明であった。

第12層：明緑灰色シルト質粘土からなる地山構成層である。層厚は40cmで、西区では草木根による擾乱が顕著にみられた。

第13層：明緑灰色砂質シルトからなる地山構成層である。層厚は10cmで、西区西半部の深掘り部でのみ確認した。

第14層：緑灰色細礫～粗粒砂からなる地山構成層である。西区西半部の深掘り部でのみ確認した。

ii)遺構と遺物

a．古代の遺構と遺物　その１(第10層上面：図５)

西区西半部の第10層上面でSD1010を検出した。SD1010は幅1.0～1.5mで、深さは0.15m、ほぼ正南北に延びる。埋土は２層に分かれ、上層はオリーブ黒色粘土質シルト(第９層)で、下層は褐灰色シルトで泥が自然堆積したものとみられた。土師器土釜・皿の細片が出土し、古代の水田開発に係る遺構とみられる。

b．古代の遺構と遺物　その２(第９層上面：図６)

西区西半部の第９層上面で、水田畦畔SR909を検出した。SR909は幅1.2m、高さ0.1mで、正南北からやや西に振って延びる。第９層は８世紀の地層であるので奈良時代の水田遺構ということになる。

c．古代の遺構と遺物　その３(第12層上面：図７)

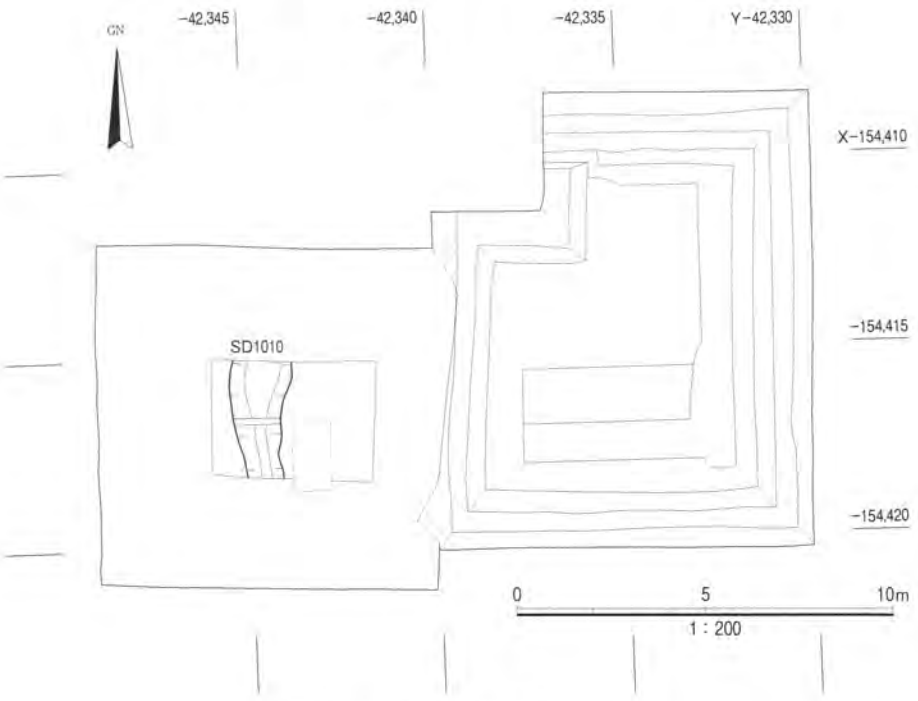


図５　西区第10層上面遺構平面図

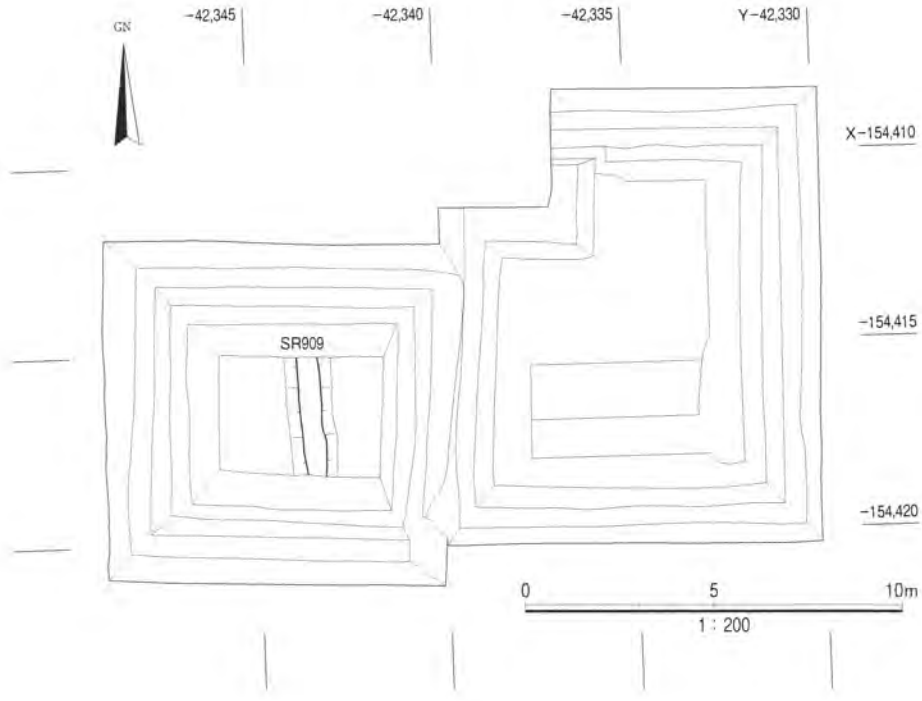


図６　西区第９層上面遺構平面図

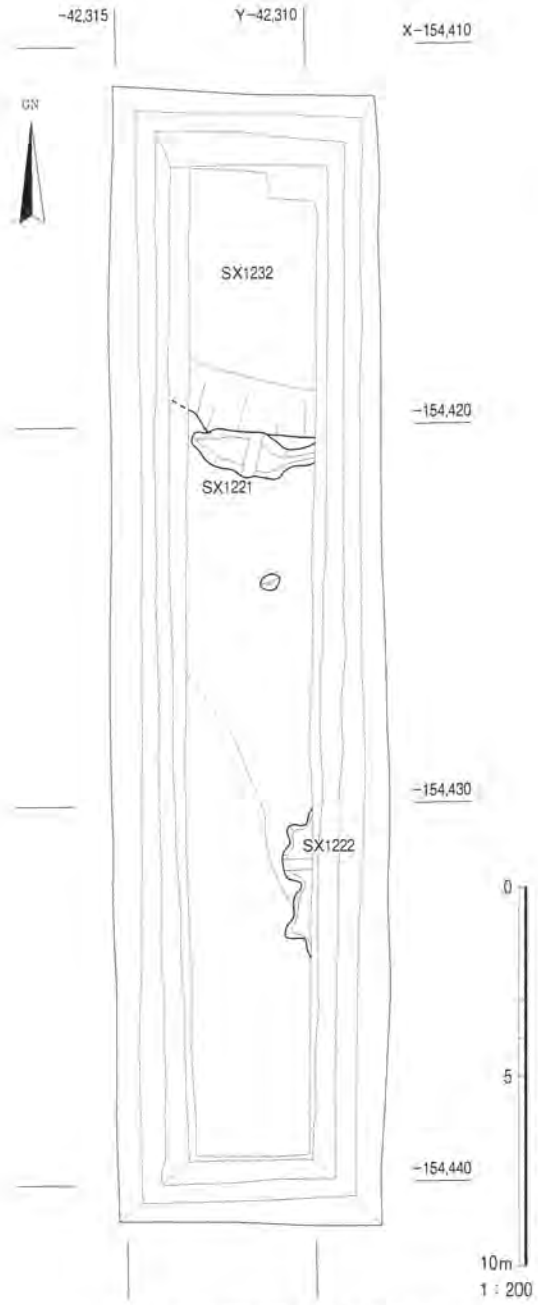


図7　東区第12層上面遺構平面図

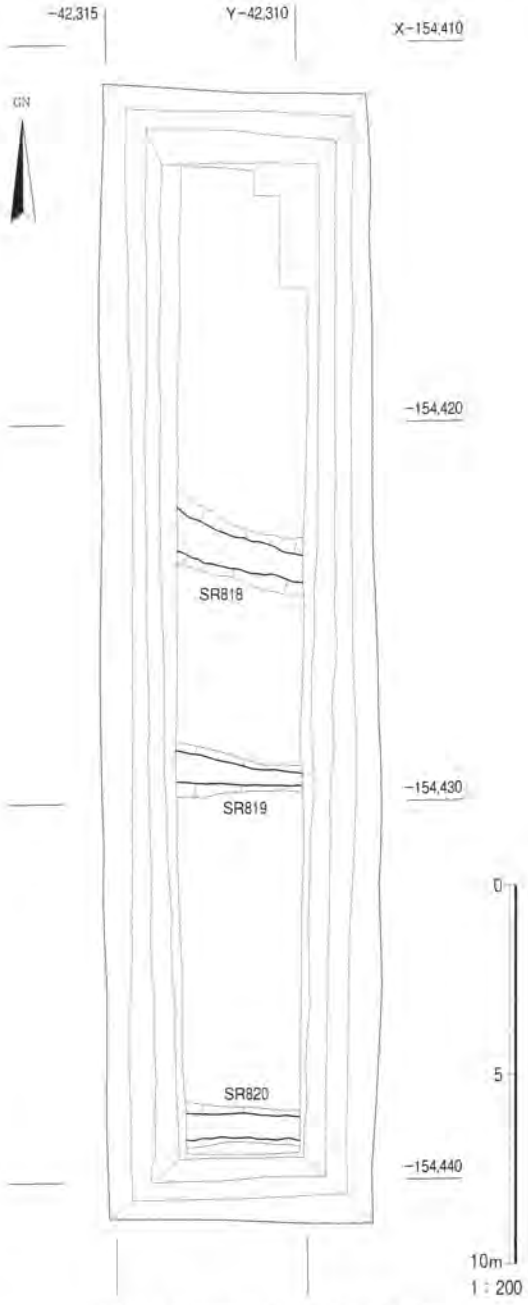


図8　東区第8a層上面遺構平面図

東区の第12層(地山層)上面で落込みSX1221・1222・1232を検出した。SX1221・1222はいずれも不整形な落込みで、深さは0.05m以内である。埋土は第8b層の灰色粘土で、同層の下面遺構と捉えられる。SX1222からは土師器・須恵器の細片が出土した。これらの遺構の年代は第8b層の年代を援用して10～11世紀の平安時代に求めることができる。

SX1232は調査区北端部で検出された落込みで、南北7m以上、深さは0.4mである。遺物は出土しなかった。埋土は灰色シルト～粘土で、第8b層に類似していたが、壁面からの湧水が激しく、地層断面で詳細な検討はできなかった。したがって、上記遺構2者と同様に第8b層下面遺構なのかどうかは不明である。

d. 古代の遺構と遺物　その4(第8a層上面：図8)

東区の第8a層上面で水田畦畔SR818～820を検出した。SR818は幅1.3mで高さ0.15m、SR819は幅0.5～1.3mで高さ0.05m、SR820は幅1.2mで高さ0.05mであった。3条ともに東西方向へ延びるが、SR819・820はほぼ正方位を示す。第8a層は10～11世紀の作土層であり、平安時代の水田に伴う畦畔である。

e. 中世の遺構と遺物　その1（第7層上面：図9）

西区東半部の第7層上面で自然流路NR708を検出した。NR708は幅3m以上、深さ1m以上で、西区の東部を南南東から北北西方向へ流れる。東区にはかからず、東の肩は東・西区の間に求められる。瓦器片を含み、13世紀前半頃の年代が与えられる。

f. 中世の遺構と遺物　その2（第5層下面：図10・11）

第5層下面では、西区西半部でSD507、東区でSD517を検出した。SD507は幅約2m、深さは0.05mほどであった。SD517は幅0.7m、深さは0.1mであった。いずれも埋土は暗オリーブ灰色粘土質シルト（第5層）で、同層の年代を援用して13世紀後半の遺構である。

g. 中世の遺構と遺物　その3（第4b層上面：図12）

東区北端の第4b層上面では落込みSX415が検出された。SX415は南北5.5m以上、深さ0.3mで、埋土は緑灰色砂であった。土師器・須恵器・瓦器片が出土し、13～14世紀頃の遺構とみられる。

h. 近世の遺構と遺物　（第4a・3層上面：図13・14）

第4a層上面では、西区でSD301・302・305・306、浅い落込みSX303・304・308、段SX330が、東区ではSD311・312・316、井戸SE313・315、落込みSX314・317が検出された。

SD301は幅約3m、深さは0.2mで南北方向に延びる。SD302・305・306・311・312は幅0.3～1.2m、深さ0.2～0.5mほどで東西方向に延びる。SD306とSD311は一連の遺構の可能性がある。SD316は南北方向に延びる。これらの遺構は第3層を掘り込んだり、近世の遺物が出土しており、第2層相当の遺構とみるべきで、近世に降るものである。畠などの耕作に係るものであろう。

SE315は板材を縦方向に組み合わせて井戸側としており、土師器・瓦器片などが出土したが、第3層を埋土とする落込みSX317を掘り込んでおり、これも近世以降に降るものである。SE313はSE315と同じ理由で近世の遺構と判断できる。

SX303・304・308は深さ0.1mほどの浅い落込みで、詳細な時期が判明する遺物は出土しなかった。SX317は南北7m以上、深さ0.6mの落込みである。埋土はオリーブ灰色砂を主とし、第3層に比定できる。SX303は第3層下面の段で、第3層の耕作に係るものである。これらも近世の遺構である。

i. 各層出土遺物および遺構出土の遊離遺物（図15）

須恵器短頸壺2・杯蓋3は第9層から出土し、同層の年代を代表する。3は難波Ⅴ中ないし新段階に属し、8世紀後葉のものである。須恵器杯蓋4・土師器杯5・鉢8は側溝出土の遺物で第8a層以下の層準に属するが、後述のように第8層には黒色土器など平安時代の遺物が混じるので、第9層の遺物である可能性が高い。難波Ⅴ中ないし新段階に属し、8世紀後葉のものである。土師器椀7は第8a層から出土した。10～11世紀のものとみられる。第8a層からは黒色土器の破片も出土しており、同層は平安時代に属する。

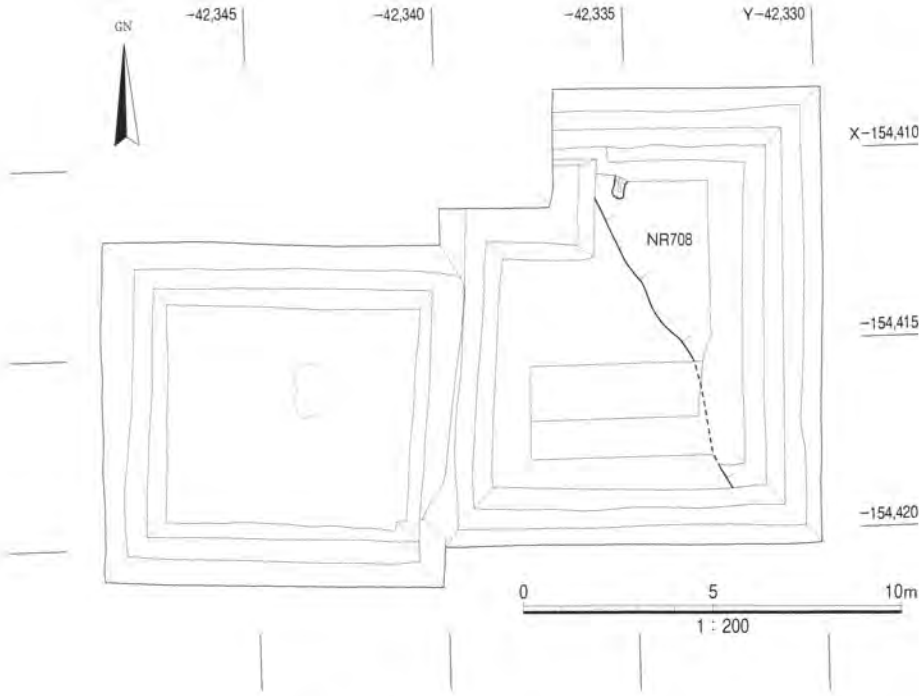


図９　西区第７層上面遺構平面図

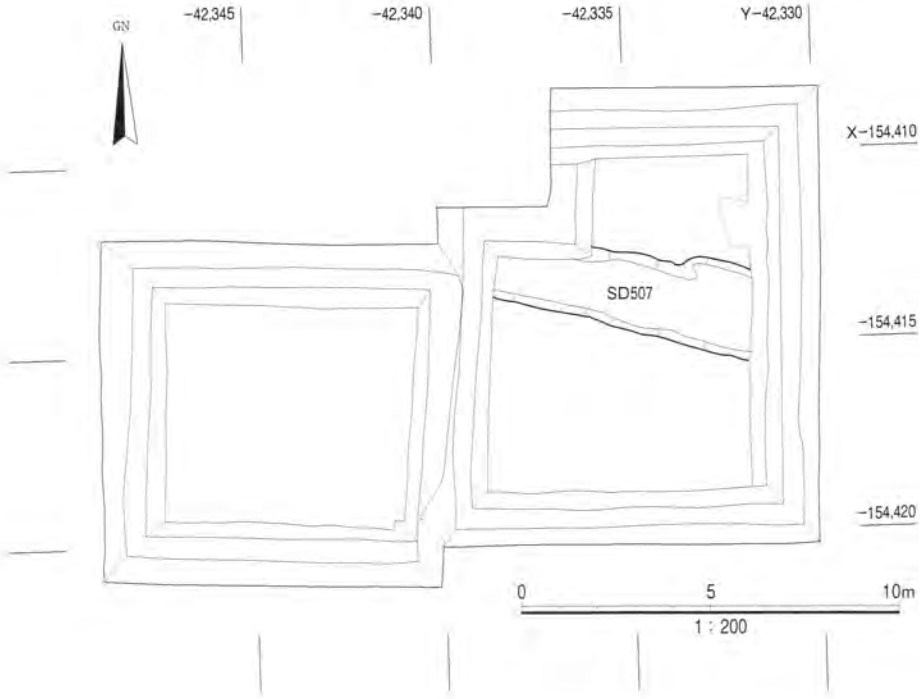


図10　西区第５層下面遺構平面図

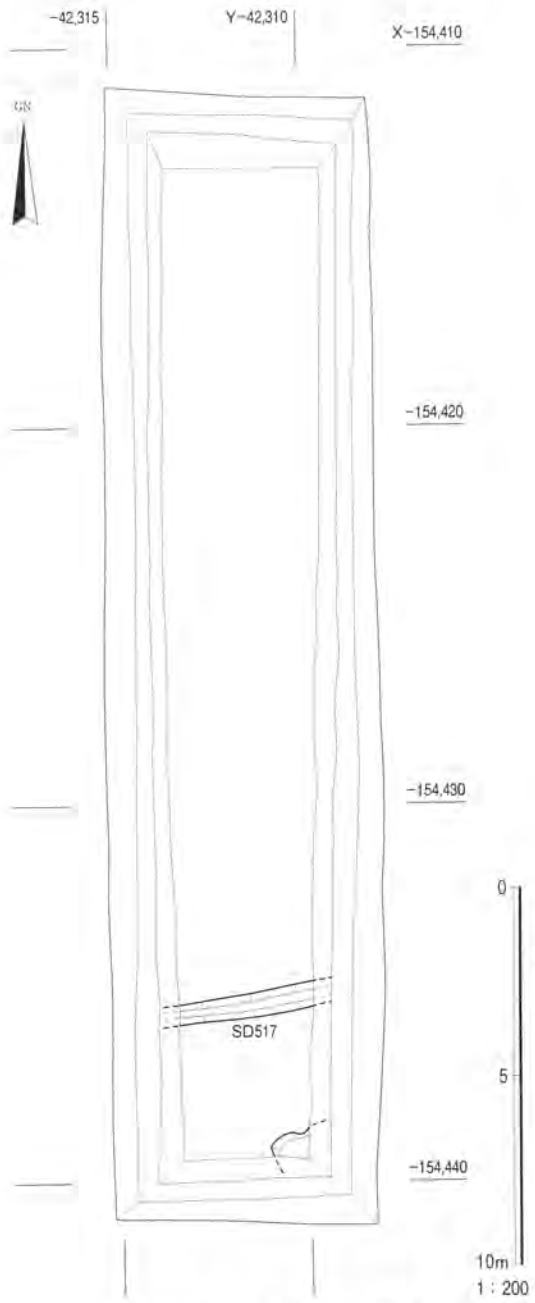


図11　東区第５層下面遺構平面図

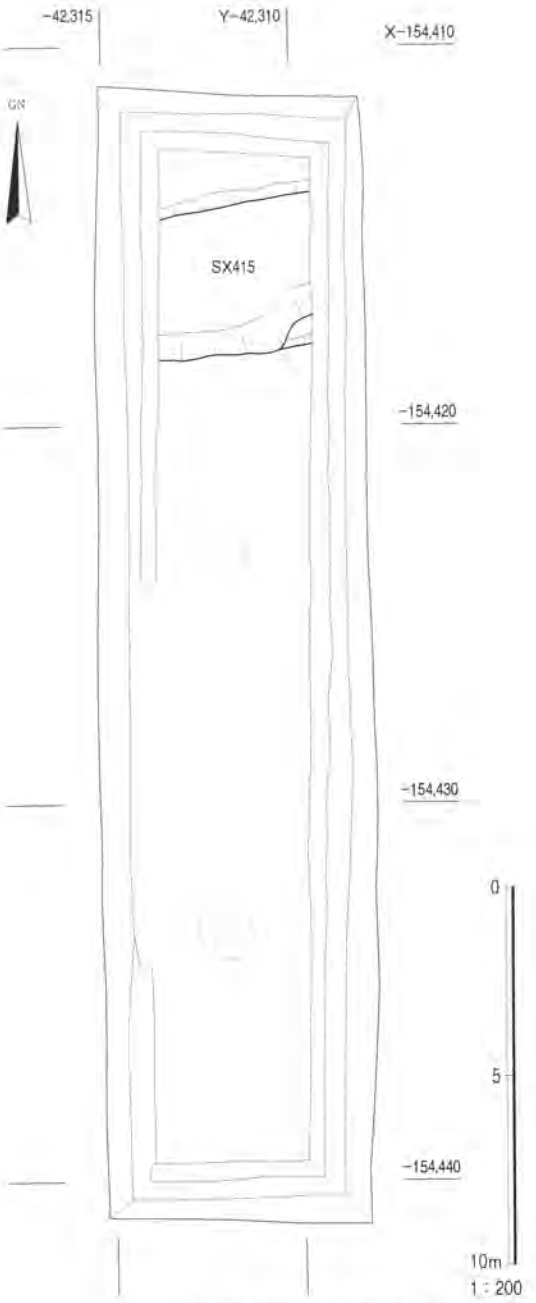


図12　東区第4b層上面遺構平面図

土師器皿６は第７層から出土し、12世紀頃のものとみられる。第７層の年代を代表する。

９～29は第５層から出土した。土師器皿９～12は13世紀頃のものである。13～15は中国産白磁で、13は皿、14・15は椀である。16～23・25～28は瓦器で、16は皿、それ以外は椀である。24は黒色土器Ａ類椀、29は東播系須恵器鉢である。瓦器椀には高台が退化し、外面のミガキが疎らのものが含まれるので、第５層の年代は13世紀後半に求められる。

１はSE313から出土した須恵器杯身で、TK23型式に属する。５世紀後半のもので、近世の井戸に混入したものである。30～32は石器遺物で、これらも本来の帰属層準を遊離したものである。30は石槍の先端部で、基部を欠損する。縄文時代の遺物である。31・32はナイフ形石器で、後期旧石器時代の遺物である。

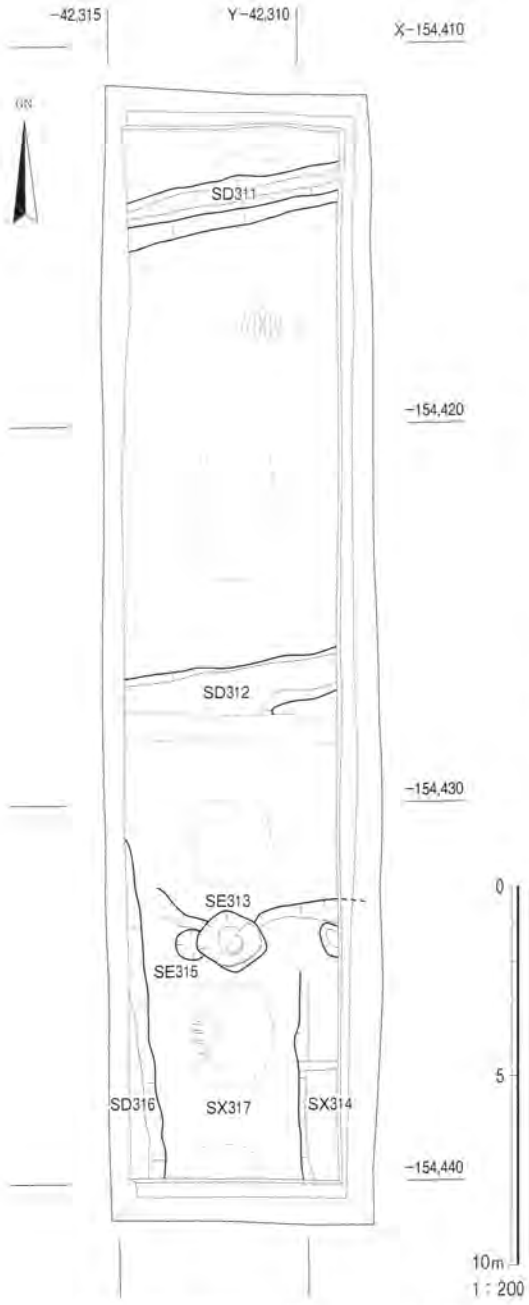


図13　東区第4a・3層上面遺構平面図

3)まとめ

以下、時代ごとに発掘成果から復元されるこの地点の歴史を通観する。

・旧石器・縄文時代は遊離資料であるが、ナイフ形石器・石槍が出土した。東方の瓜破台地では旧石器時代の石器製作址が発見されているが、同様な遺構が調査地周辺にも存在する可能性があり、今後、注意を要する。

・弥生・古墳時代は、遊離資料として古墳時代中期(5世紀)の須恵器を得たにとどまった。しかし、TR97－1次調査では弥生時代後期後半の土器棺墓が発見されており、その母集団の居住域や農業生産域は近隣に存在するはずである。

・奈良・平安時代は、水田跡を検出した(第9層)。当地における積極的な土地利用、つまり農地としての土地開発の始まりを8世紀に求めることができた。この時期には、狭山池東樋筋の流域で土地開発が盛んになったのと同時期であり、河内台地の広範囲な開発との関係が注目される。水田は平安時代中期頃までは維持されたとみられた(第8a・8b層)。

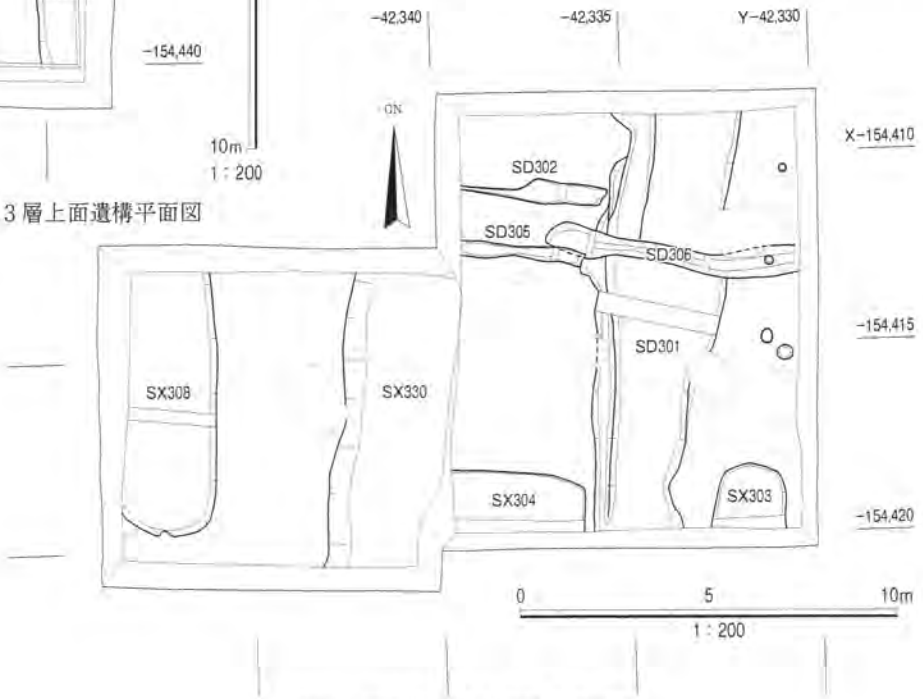


図14　西区第4a層上面遺構平面図

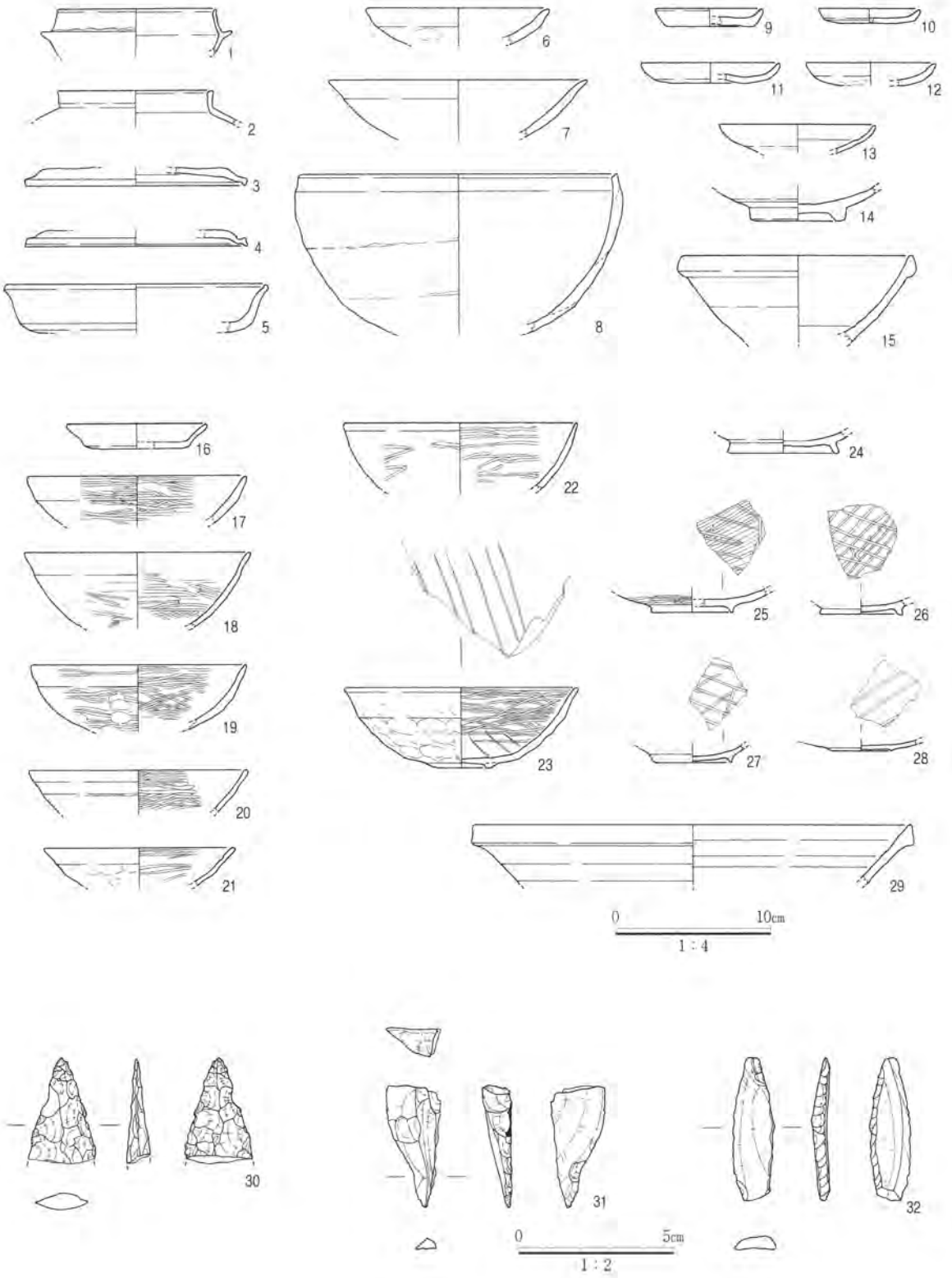


図15　出土遺物実測図

SE313(1)、第9層(2・3・31)、第8a層以下(4・5・8)、第7層(6)、第8a層(7・30)、第5層(9～29)、SE315(32)

・平安時代後期には河成堆積層が分厚く堆積し、小河川が南北に流れる時期もあった(第７・６層)。水田は埋没し、再び人間が活動可能な地盤が形成され、耕作も行われるようになったのは鎌倉時代(13世紀後半)になってからであった(第５層)。

・しかし、中世後半には、河成層(第４層)が堆積して耕作地は埋没した。その後、江戸時代には耕作地は復旧され(第３層)、現代に至ったものと考えられる。

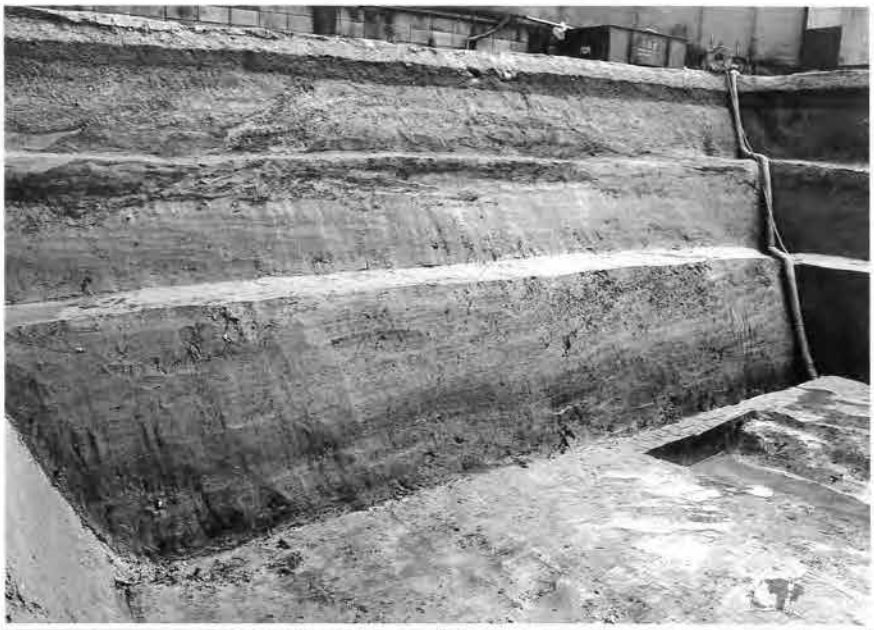
引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999、「城南学園による建設工事に伴う確認調査(TR97－１)」:『平成９年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp69－74

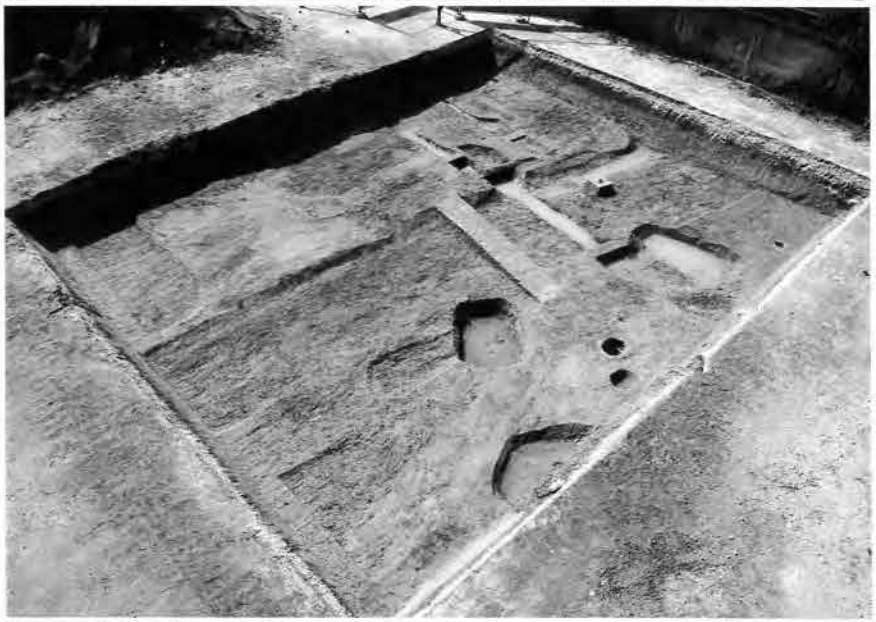
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「住道廃寺跡発掘調査(SJ07－１)報告書」:『平成19年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp139－147

大阪文化財研究所2012、『東住吉区照ヶ丘矢田四丁目における建設工事に伴う中臣須牟地神社境内遺跡発掘調査(NT11－１)報告書』

西区西半南壁地層断面
（北東から）



西区第4a層上面
SD301など
（南東から）

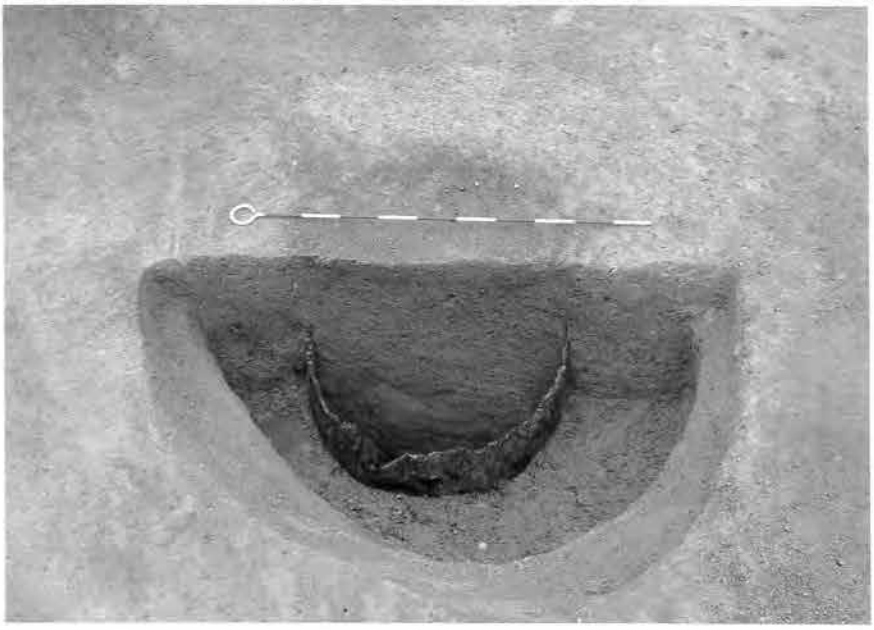


西区第10層上面
SD1010
（北から）

東区第8a層上面水田
（南東から）

東区第8a層上面
SR820
（東から）

東区第4a層上面
SE313
（南東から）



東住吉区公園南矢田一丁目における建設工事に伴う
矢田部遺跡発掘調査(YB11－１)報告書

調 査 個 所　大阪市東住吉区公園南矢田１丁目７－１
調 査 面 積　22㎡
調 査 期 間　平成23年４月18日～４月20日
調 査 主 体　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、市川 創

1)調査に至る経緯と経過

調査地は長居公園の南に位置する(図1)。調査地の西方は上町台地東辺の緩やかな斜面に当り、東方には西除川によって形成された沖積地に当る。当地周辺では、西方約90mの位置で行った矢田部遺跡(MN86－41次)の調査において、平安時代前期の掘立柱建物、庄内期～古墳時代の土器などを検出している[大阪市文化財協会1987]。また、調査地の東方約600mの位置で行った矢田2丁目所在遺跡の調査(YT97－1・98－1次)では古墳～飛鳥時代の遺構・遺物を検出しており[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2000]、東方250mに位置する矢田部遺跡B地点(YB10－1次)の調査では、平安時代の溝や自然流路などを検出している。そのほか、北方の酒君塚古墳の調査(SA01－2次)では、削平された古墳の封土を徳川期に修築したことが明らかになるとともに、その下層では庄内期の土器も出土している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003]。このように当地一帯では庄内期以降の遺構・遺物を検出しており、いまだ必ずしも考古学的な情報が多くない西除川の流域開発、また上町台地東斜面の土地利用の変遷を明らかにする上で、重要な地域である。

本地点において大阪市教育委員会が事前に実施した試掘調査の結果、地表下0.4m以下で古墳～江戸時代の遺構の存在が予測されたため、本調査を実施することとなった。調査区は敷地の中央部に設定し(図2)、平成23年4月18日より調査を開始した。まず現地表下0.4mまで重機による掘削を行った後、人力による掘削および遺構検出などを行った。その過程で、調査区の南部において遺構が検出されたため、遺構の拡がりを確認することを目的として南半を7㎡拡張した。調査の過程では図面および写

図1　調査地位置図

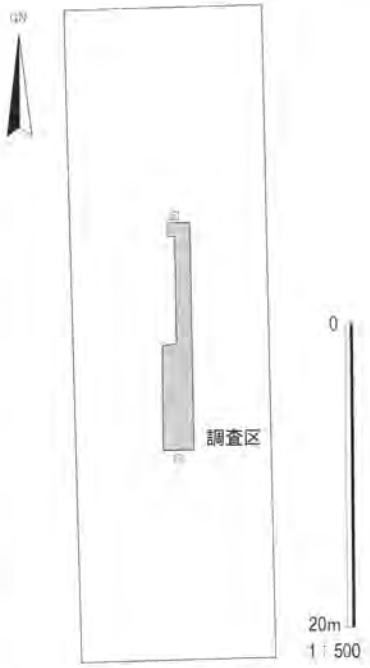


図2　調査区配置図

図3　層序と遺構の関係図

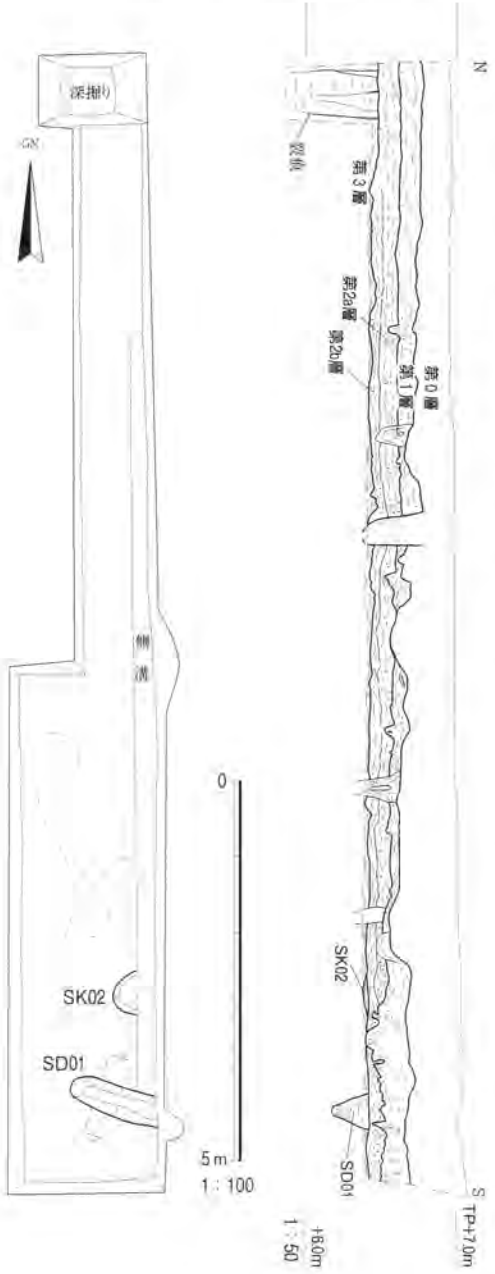


図4　調査区東壁地層断面図および
第3層上面平面図

真による記録を適宜行い、4月20日には調査区の埋戻しや機材類の撤収を含め、現地におけるすべての作業を完了した。

以下、本報告書で使用した方位は、座標北を基準にした。また、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、TP±○mと表記する。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

現代盛土層以下、現地表下110cmまでの地層を3層に区分した。以下では各地層の特徴について記述する。

第0層:現代盛土層である。厚さは最大で36cmである。

第1層:オリーブ褐色を呈する中粒砂質シルトからなり、細礫および第3層の偽礫を含む近~現代の作土である。上面には土壙・杭などが観察でき、下部には酸化鉄の斑紋が顕著にみられた。レンガ片などが出土している。

第2層:層厚は20cmあった。調査区の南半では2分することができ、上部を第2a層、下部を第2b層とした。このうち第2a層は褐色を呈するシルト層であり、細礫をわずかに含む。下面には酸化鉄が沈着していた。また、層厚は10cmであった。第2b層はにぶい黄褐色を呈する細粒砂質シルト層であり、層厚は10cmであった。岩相の特徴から、第2a・2b層ともに水田作土であろう。本層からは土師器・須恵器・瓦器の細片が出土しており、地層の時期は中~近世である。

第3層:明黄褐色を呈する粘土質シルト層からなる段丘構成層であり、層厚は60cm以上あった。本層上面において、SD01およびSK02を確認した。また、調査区北端で地層の堆積状況を確認するために行った深掘りでは、本層上面から延びる裂痕を確認した。裂痕内の堆積物は灰色を呈する粗粒砂~細礫であり、第1・2層とは異なるものであった。

ii)遺構と遺物(図4~6)

第3層上面において、溝状の遺構SD01および土壙SK02を検出した。

このうちSD01は、調査区の南端で検出した。北西－南東方向に延び、長さは1.1m以上、幅0.40m、検出面からの深さは0.35mであった。埋土は上部が褐色を呈する細粒砂質シルト、下部は黒褐色を呈するシルトであり、第３層の偽礫を含んでいた(図５)。SK02は、SD01の北側で検出した。直径は0.65mで遺構の東半は調査区外であり、検出面からの深さは0.10mであった。

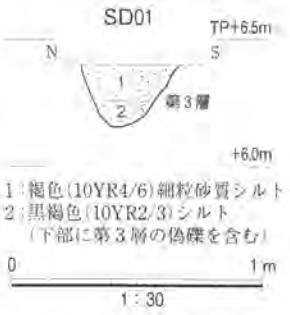


図５　SD01断面図

SD01・SK02とも遺物は出土しなかったが、中～近世の地層である第２層の下位に当ることから、該期以前の遺構である。

遺物では、瓦質土器の擂鉢１および瓦器椀の底部２を図化した(図６)。中世後期に属する１は第１層から出土しており、本来の層準からは遊離している。２は第２層から出土した。表面の摩耗が著しいが、高台の形状から13世紀頃のものと思われる。地層の時期の一端を示す。

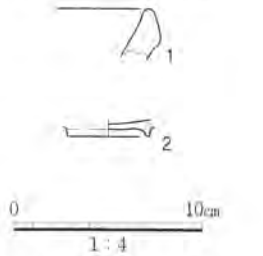


図６　出土遺物実測図
第１層(１)、第２層(２)

３)まとめ

今回の調査では、中～近世の水田作土のほか、それ以前に遡る遺構２基を検出することができた。周辺地域における人間活動の変遷はいまだ不明な部分が多く、こうした知見を１つ１つ積み上げていくことで、より豊かな地域史を描けるようになることが期待できる。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2000、「浪速短期大学による建設工事に伴う確認調査(YT98－１)」:『平成10年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.93－99

2003、「酒君塚古墳発掘調査(SA01－２)報告書」:『平成13年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.113－118

大阪市文化財協会1987、『府営矢田部住宅第２期建替工事に伴う矢田部遺跡発掘調査(MN86－41)略報』

調査区全景
（南から）

調査区東壁地層断面
（西から）

SD01
（北西から）

東住吉区矢田二丁目における建設工事に伴う
矢田２丁目所在遺跡発掘調査(YT11－２)報告書

調 査 個 所　大阪市東住吉区矢田２丁目16
調 査 面 積　100㎡
調 査 期 間　平成23年７月28日～８月4日
調 査 主 体　財団法人大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南秀雄、田中清美、清水和明

1)調査に至る経緯と経過

調査地は、矢田2丁目所在遺跡内に位置しており、敷地の南東側には古墳時代中期および飛鳥時代の遺構・遺物が検出されたYT97－1次調査地(図1)がある[大阪市文化財協会1999]。

当地で大阪市教育委員会が行った試掘調査でも現地表面下0.5m以下において、中世以前の遺物を含む地層や遺構の一部が確認されたため、本調査を実施することになった。

調査は当初8m×10mの範囲を対象にして現代整地層以下、試掘調査で遺構が確認された第5層の上面までの各層を重機で掘削することから着手した。しかし、当地域の地山層である第5層が比較的浅い位置から確認されたほか、旧建物の解体撤去時の攪乱が随所に見られたため、遺構の拡がりが予想された調査個所の西南部を必要最小限拡張した(図2)。8月1日以降は土採り穴群を検出し、それぞれ写真や実測図として記録した。8月4日には調査区の埋め戻しおよび調査機材を撤収し、現地におけるすべての調査を終えた。

図1・2・5の方位は座標北を基準にしている。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・図中ではTP+○mとした。

2)調査の結果

i)層序

本調査では第0層下で、第1～5層の各層が確認された(図3・4)。

図1　今回の調査地

図2　調査区の配置図

図3　地層と遺構の関係図

第0層：本層はにぶい黄色(2.5Y6/4)細・中礫質シルトからなる現代の整地層で、層厚は30cm前後ある。

第1層：暗灰黄色(2.5Y4/2)細礫混り細粒砂質シルトからなる近現代の作土層で、層厚は10cm前後ある。本層上面の標高はTP+6m前後あり、ほぼ水平な面をなす。

第2層：にぶい黄褐色(10YR4/3)細礫混り細粒砂質シルトからなる作土層で、中世の土器類および近世の陶磁器の細片を含む。本層の層厚は5～15cmあり、おもに調査区の東南部に分布していた。

第3層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂質シルト～暗灰黄色(2.5Y5/2)細礫混り細粒砂質シルトで、層厚は10cm前後ある。第5層の上面で検出した土採り穴群の埋土は本層準に相当する。古墳時代中期～室町時代の土器類のほか、江戸時代初期の土師器を含む。本層は調査区のほぼ全域で確認されたが、層厚は南から北に向かって薄くなる。

第4層：黒褐色(10YR3/1)シルト～粘土質シルトで、本調査ではSK405の埋土として、また、ごく浅い窪みで確認されたのみである。古代以前の当地域の暗色帯であろう。

第5層：黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂混り粘土質シルト～細・中礫質細粒砂からなる当地域の地山層である。本層上面の標高はTP+5.7m前後あり、ほぼ平坦な面をなす。本層の下位には層厚50cm前後の中礫が堆積していた。

ii)遺構と遺物

本調査では上述したように第5層の上面で、埋土が第3・4層準の遺構を検出したが、その多くは土採り穴であった(図5・6)。

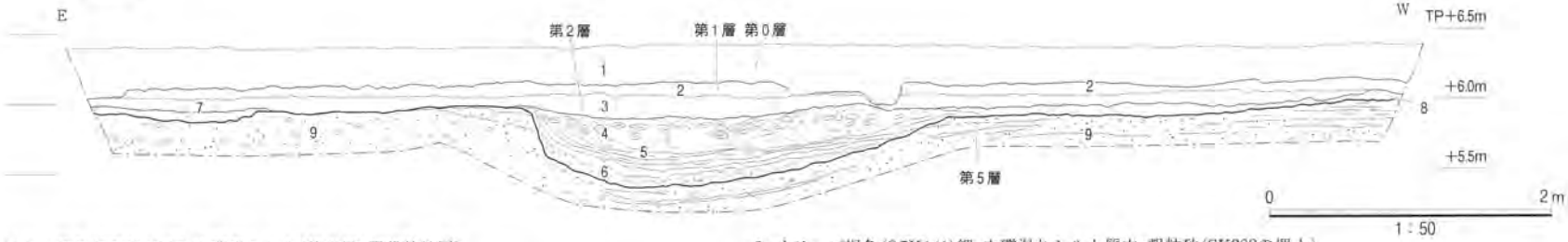
a.古代以前の遺構

SK405　調査区の西南部に位置する東西1.8m以上の土壙で、南北0.8m以上、深さは検出面から約0.1mある。遺構の大半をSK304で攪乱されており、平面形や本来の規模については明らかでない(図5)。埋土は黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトで、遺物は特に出土しなかった。平面形からみて竪穴建物の可能性もあるが、遺構の残りが悪く決しがたい。なお、SK405と切り合い関係にあるSD406の埋土もSK405の埋土に酷似することから双方の時期差はさほどないようである。

b.近世初期の遺構

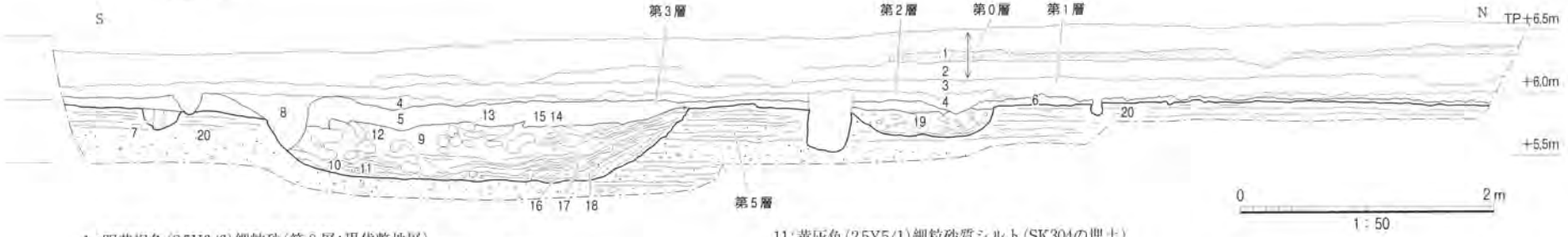
SK301　調査区の中央部に位置する東西3.6m、南北約5m、深さ約0.6mで、平面形が隅丸方形を呈する大きな土壙である。土壙内には下から加工時に形成された暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質細礫～極細粒砂、水つきの黄灰色(2.5Y5/1)細礫混り極細粒砂質シルト、人為的な埋土である褐灰色(10YR4/6)～黄灰色(2.5Y5/1)細礫混り中粒砂質シルト、第4・5層の偽礫を含む黄灰色(2.5Y5/1)細礫混り粗～極細粒砂質シルトが見られた。埋土の上部から古墳時代中期～室町時代の土器類や室町時代の瓦の細片が出土した(図7－1～7)。

南壁断面



1：にぶい黄色(2.5Y6/4)細・中礫質シルト(第0層：現代整地層)
2：暗灰黄色(2.5Y4/2)細礫混り細粒砂質シルト(第1層：作土層)
3：にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂混り細粒砂質シルト(第2層)
4：暗灰黄色(2.5Y4/2)細・中礫混り細粒砂質シルト(第4層の偽礫を多く含む：SK302の埋土)
5：暗灰黄色(2.5Y5/2)極細粒砂質シルト(水つき：SK302の埋土)
6：オリーブ褐色(2.5Y4/4)細・中礫混りシルト質中・粗粒砂(SK302の埋土)
7：オリーブ褐色(2.5Y4/3)細礫質シルト～細粒砂質シルト(SK309の埋土)
8：オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂質シルト～シルト(第3層)
9：黄褐色(2.5Y5/4)細・中礫質細粒砂(第5層：地山)

西壁断面



1：明黄褐色(2.5Y6/6)細粒砂(第0層：現代整地層)
2：黄褐色(2.5Y5/4)細礫混りシルト質細粒砂(第0層：現代整地層)
3：黄灰色(2.5Y4/6)細礫混りシルト質細粒砂～細粒砂質シルト(第1層：作土層)
4：暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルト(第2層)
5：灰色(5Y6/1)細礫混り細粒砂質シルト(第4層の偽礫を多く含む)
6：褐色(10RY4/4)細礫混りシルト質細粒砂(第3層)
7：黄灰色(2.5Y6/2)細粒砂質シルト(SP308の埋土)
8：暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルト(小穴の埋土)
9：黄灰色(2.5Y6/2)細礫混り細粒砂質シルト(第4層の偽礫を多く含む：SK304の埋土)
10：黄灰色(2.5Y5/1)シルト質細粒砂(FeO^2を多く含む：SK304の埋土)
11：黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂質シルト(SK304の埋土)
12：灰黄色(2.5Y6/2)細粒砂質シルト(偽礫)
13：にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土質シルト(偽礫)
14：暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルト(SK304の埋土)
15：灰黄色(2.5Y7/2)シルト質中～粗粒砂(SK304の埋土)
16：灰色(5Y5/1)シルト(水つき：SK304の埋土)
17：黄灰色(2.5Y5/1)シルト質細粒砂(SK304の埋土)
18：灰色(5Y6/1)細礫混りシルト質細粒砂(SK304の埋土)
19：にぶい黄色(2.5Y6/3)細礫混り細粒砂質シルト(第4層・第5層の偽礫を多く含む：SK316の埋土)
20：にぶい黄褐色(10RY5/4)細粒砂混り粘土質シルト(第5層)

図4　南・西壁地層断面図

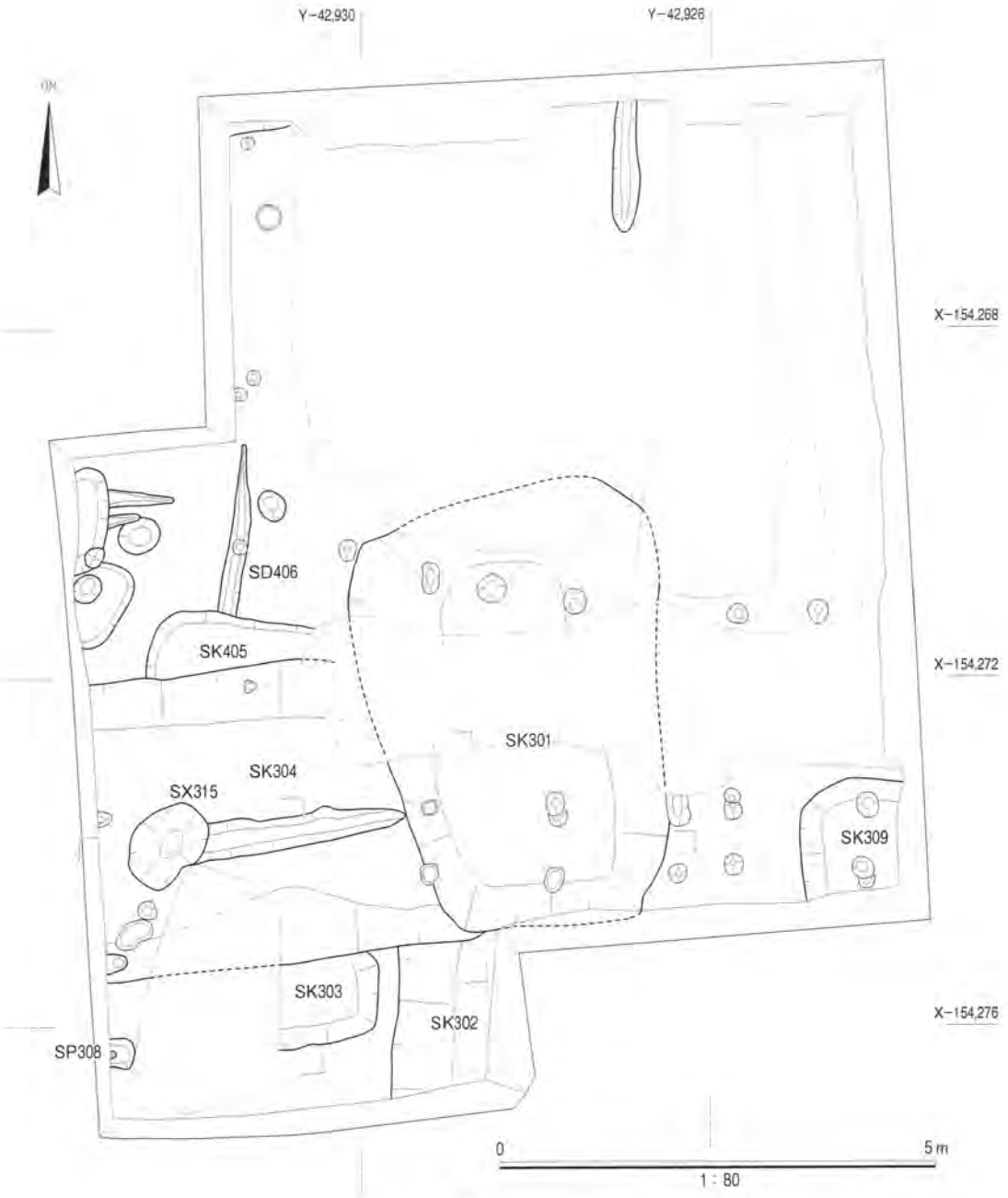


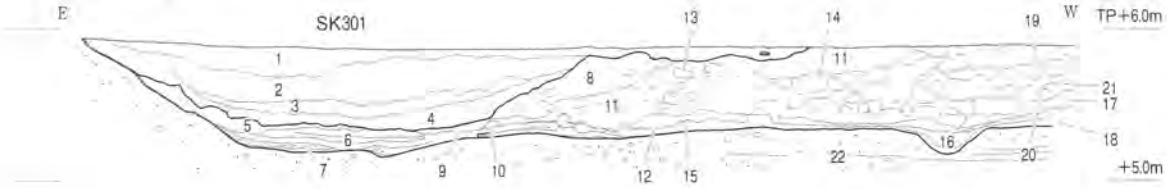
図５　第５層上面検出遺構配置図

１は口縁部と天井部の境界の稜が断面三角形を呈する須恵器杯蓋である。平坦な天井部の2/3以上をヘラケズリ調整している。２は口径約13.5cmの大型の須恵器杯身で、立ち上りはわずかに内傾しており、口縁端部は丸い。３は口径約11cmの須恵器杯蓋で、口縁部はわずかに開き、端部を丸くおさめる。天井部の約1/3をヘラケズリ調整している。４は須恵器椀の削り出し高台である。５は口径約18cmで、須恵器甕の口縁部である。色調はにぶい褐色を呈し、胎土中に１㎜前後の長石粒を含む。６・７は平瓦の細片で、ともに凸面はナデで整えているが離れ砂が残る。凹面には布目圧痕がある。

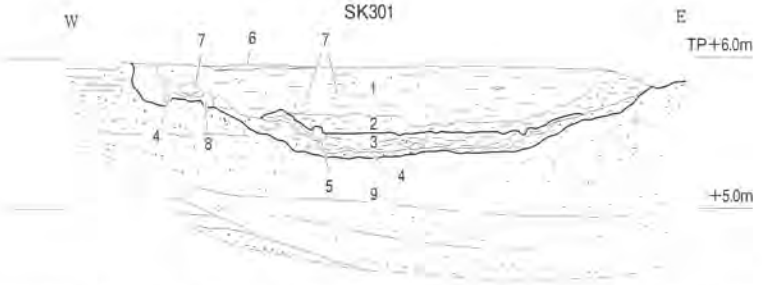
以上の遺物のうち、須恵器は１が５世紀中葉（TK208型式）、２は６世紀中葉（TK10型式）、３は７世紀中葉(TK217型式)に属するもので、須恵器５および瓦６・７は13世紀代に属するものであろう。

遺構の性格は規模や埋土のようすからみて、第５層中の粘土を採集した土採り穴と考えられる。な

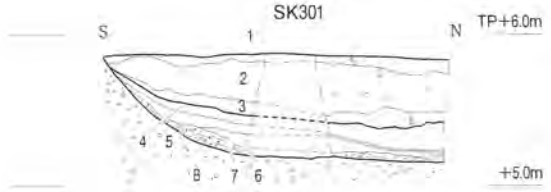
東西アゼ



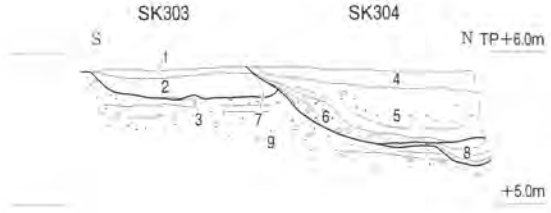
1：灰黄褐色(10YR5/2)細～中礫混り極細粒砂質シルト
2：暗灰黄色(2.5Y5/2)細～中礫混り極細粒砂質シルト
3：黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂混り粘土質シルト(FeO_3を多く含む)
4：暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒～粗粒砂質シルト
5：黄灰色(2.5Y5/1)シルト質粗粒砂～細礫
6：黄灰色(2.5Y4/1)極細粒砂質シルト(水成層)
7：灰黄色(2.5Y6/2)シルト
8：暗灰黄色(2.5Y5/2)細礫混り細粒砂質シルト(第4層の偽礫含む)
9：黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂質シルト
10：灰黄色(2.5Y6/2)細礫質シルト(偽礫)
11：黄灰色(2.5Y5/1)細礫質シルト～細粒砂質シルト
12：にぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂質シルト(FeO_3を多く含む)
13：にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土質シルト(偽礫)
14：灰黄色(2.5Y6/2)細礫質シルト(偽礫)
15：黄灰色(2.5Y5/1)中礫
16：黄灰色(2.5Y5/1)極細粒砂質シルト(水成層)
17：褐灰色(10YR5/1)細礫混り細粒砂質シルト
18：灰黄色(2.5Y6/2)シルト(暗色化している)
19：にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土質シルト(偽礫)
20：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト(偽礫)
21：浅黄色(2.5Y7/2)粘土質シルト(偽礫)
22：第5層



1：暗灰黄色(2.5Y5/2)細～中礫混り極細粒砂質シルト
2：黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂混り粘土質シルト(FeO_3を多く含む)
3：黄灰色(2.5Y5/1)細礫～極粗粒砂質シルト
(機能時堆積層：水つき)
4：暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒～粗粒砂質シルト
5：褐色(10YR4/6)細礫～極細粒砂
6：灰黄褐色(10YR5/2)細～中礫混り極細粒砂質シルト
7：褐色(10YR4/4)シルト(偽礫)
8：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト(偽礫)
9：第5層



1：灰黄褐色(10YR5/2)細～中礫混り極細粒砂質シルト
2：暗灰黄色(2.5Y5/2)細～中礫混り極細粒砂質シルト
3：黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂混り粘土質シルト(FeO_3を多く含む)
4：黄灰色(2.5Y5/1)細礫～極細粒砂質シルト(機能時堆積層：水つき)
5：黄灰色(2.5Y5/1)極細粒砂質シルト
6：暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂～粗粒砂質シルト
7：黄灰色(2.5Y5/1)シルト質粗粒砂～細礫
8：第5層



1：黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルト
2：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト
3：にぶい黄色(2.5Y6/4)細礫質細粒砂
4：灰黄色(2.5Y6/2)細礫混り細粒砂質シルト
5：暗灰黄色(2.5Y5/2)中・細礫混り細粒砂質シルト
(第4・5層の偽礫を多く含む)
6：灰黄色(2.5Y6/2)細・中礫混りシルト質細粒砂
7：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト
8：黄灰色(2.5Y5/1)シルト
9：第5層

0　2m
1：50

図6　遺構断面図

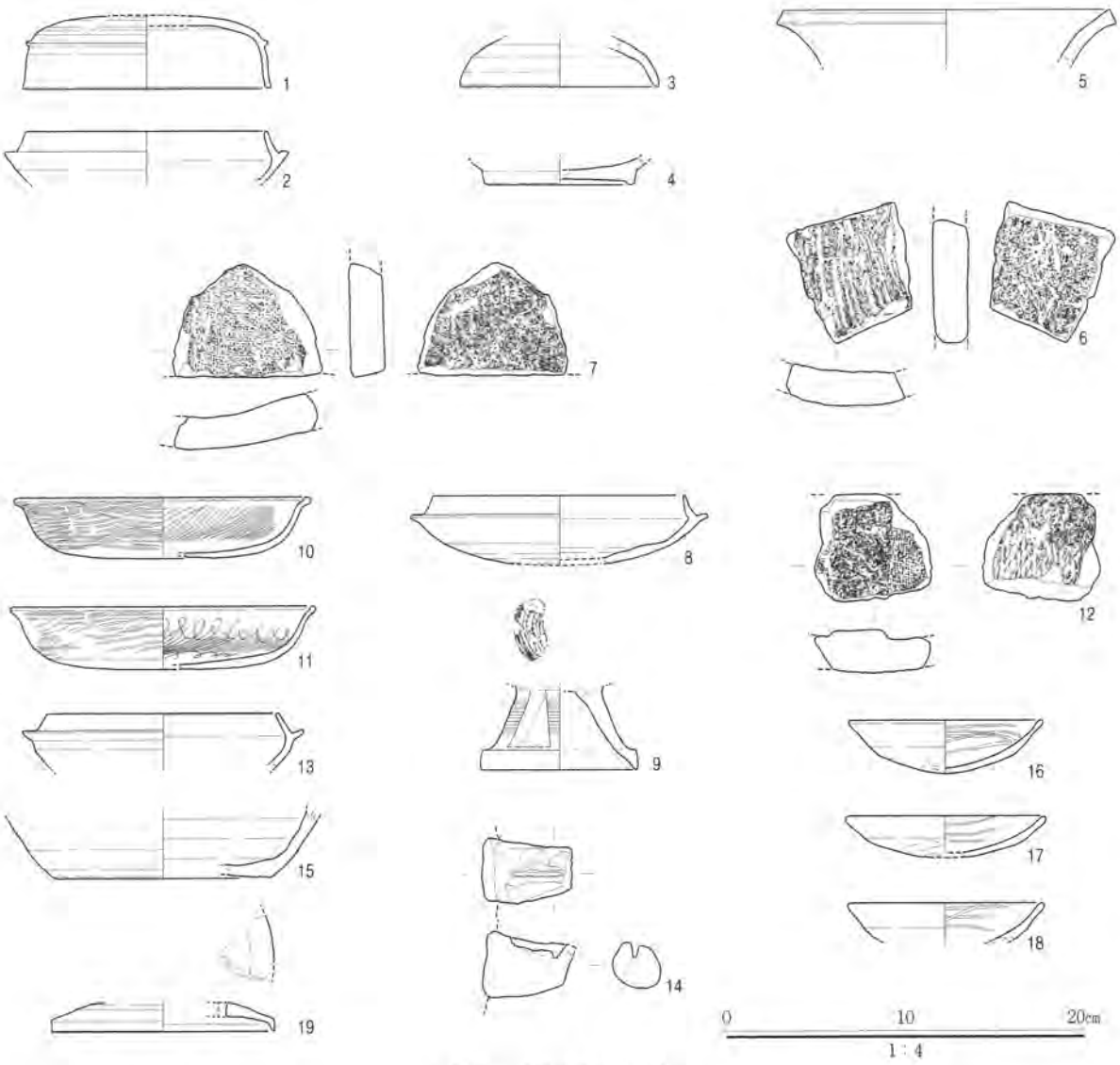


図7　出土遺物実測図

SK301(1～7)、SK302(8～12)、SK303(13)、SK304(14～18)、SP308(19)

お、土採り穴は採土が終わり、しばらく放置されたあと、不用な砂・礫や砂質土で埋めたことが断面の観察から判明した。

SK302　調査区西南部の拡張区に位置する土採り穴であるが、遺構の北側をSK301に掘り込まれているほか、大半が調査範囲外にあるため、形状や規模は明らかでない。埋土は下から埋め土のオリーブ褐色(2.5Y4/3)細礫混りシルト～細粒砂質シルト、水つきの暗灰黄色(2.5Y5/2)極細粒砂質シルト、埋め土の4層の偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)細礫混り細粒砂質シルトで、古墳時代中期～室町時代の土器類を含む(図7)。

8は口径約14cmの須恵器杯身である。立ち上りは内傾し、口縁端部は細い。底部外面の約2/3を時計回りにヘラケズリ調整している。9は高杯の脚部で、粗いカキメ調整のあと、三方に三角形スカシ孔を穿つ。10・11は口径約16cmの土師器杯Aで、口縁部は短く開き、端部を丸くおさめる。ともに器体の内外面をヘラミガキ調整している。11の体部内面には横方向の螺旋状の暗文がある。底部の調整は10がナデ、11は横方向のヘラケズリである。12は平瓦の細片で、凹面に布目圧痕、凸面は縄目タ

タキで整形している。以上の遺物のうち、8は6世紀中葉(TK10型式)、9は5世紀末(TK47型式)、10・11は8世紀前～中葉、12も8～9世紀代に属するものであろう。

SK303　調査区の西南部、SK304の南に位置する東西1.2m以上、南北0.9m、深さ約0.8mの土壙である。埋土は下から第4層の偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト、黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルトで、古墳時代後期～室町時代の土器類を含む(図7)。13は口径約13cmの須恵器杯身で、立ち上りはやや内傾しており、口縁端部は丸い。6世紀中葉(TK10型式)に属するものであろう。

SK304　調査区の西南部に位置する東西4.7m以上、南北3.5m、深さ0.7m前後、平面形が隅丸長方形を呈する大きな土壙であり、遺構の東端部をSK301に掘り込まれている。埋土は下から加工時形成層とみられる黄灰色(2.5Y5/1)シルト質粗粒砂～細礫・暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂～粗粒砂質シルト、機能時堆積層(水つき)の黄灰色(2.5Y5/1)極細粒砂質シルト・黄灰色(2.5Y5/1)細礫～極細粒砂質シルト、埋め土の黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂混り粘土質シルト・第4および第5層の偽礫を多く含む暗灰黄色(2.5Y5/2)細～中礫混り極細粒砂質シルト・灰黄褐色(10YR5/2)細～中礫混り極細粒砂質シルトである。土壙の内底面には長径約1mのやや不整形な浅い穴SX315があり、これに東側から水を引き込むようにした幅0.2～0.4m、深さ0.17～0.20mの溝があった。溝および水溜め内には水つきの黄灰色(2.5Y5/1)極細粒砂質シルト・灰黄色(2.5Y6/2)シルト・褐灰色(10YR5/1)細礫混り細粒砂質シルトが堆積していた。

遺物は埋め土内から古墳時代中期～室町時代の土器類(図7－14～18)や16世紀初頭の土師器皿の細片が出土した。

14は上面にヘラで切込みを入れた韓式系土器の甑あるいは鍋の把手であろう。15は裏面をヘラケズリ調整した須恵器壺の底部片である。16～18は口径約11cm、器高約3cmの瓦器椀で、内面には横方向の粗い暗文を施し、16・17の底部は粗いユビオサエで整えている。以上遺物のうち、瓦器椀は13世紀末～14世紀初頭に属するものである。

SK309　調査区の東南部に位置する東西1.2m以上、南北1.4m以上、深さ0.1m前後の浅い土壙である。土壙内はオリーブ褐色(2.5Y4/3)中礫混り細礫質シルト～細粒砂質シルトで埋めていた。土壙の深さが比較的浅いことや中粒～粗粒砂質細～中礫層内で掘削が止まっていたことを考慮すると、本遺構は土採りを中断した穴の可能性がある。

以上の土採り穴の時期であるが、いずれも埋土に15世紀代の瓦質土器や土師器、瓦の細片を含むこと、一部の土壙から16世紀初頭の土師器が出土したことから江戸時代初期以降と考えられる。

SP308　調査個所の南西部に位置する一辺が約0.4mの柱穴で、中央に径約0.1mの柱痕跡がある。埋土は第4層の偽礫を含む黄灰色(2.5Y6/2)細粒砂質シルトで、須恵器の細片が出土した(図7－19)。

19は口径12.4cmで、口縁部は天井部から垂下する。天井部には径約5mmの孔を穿つ。8～9世紀初頭の杯蓋であろう。

3）まとめ

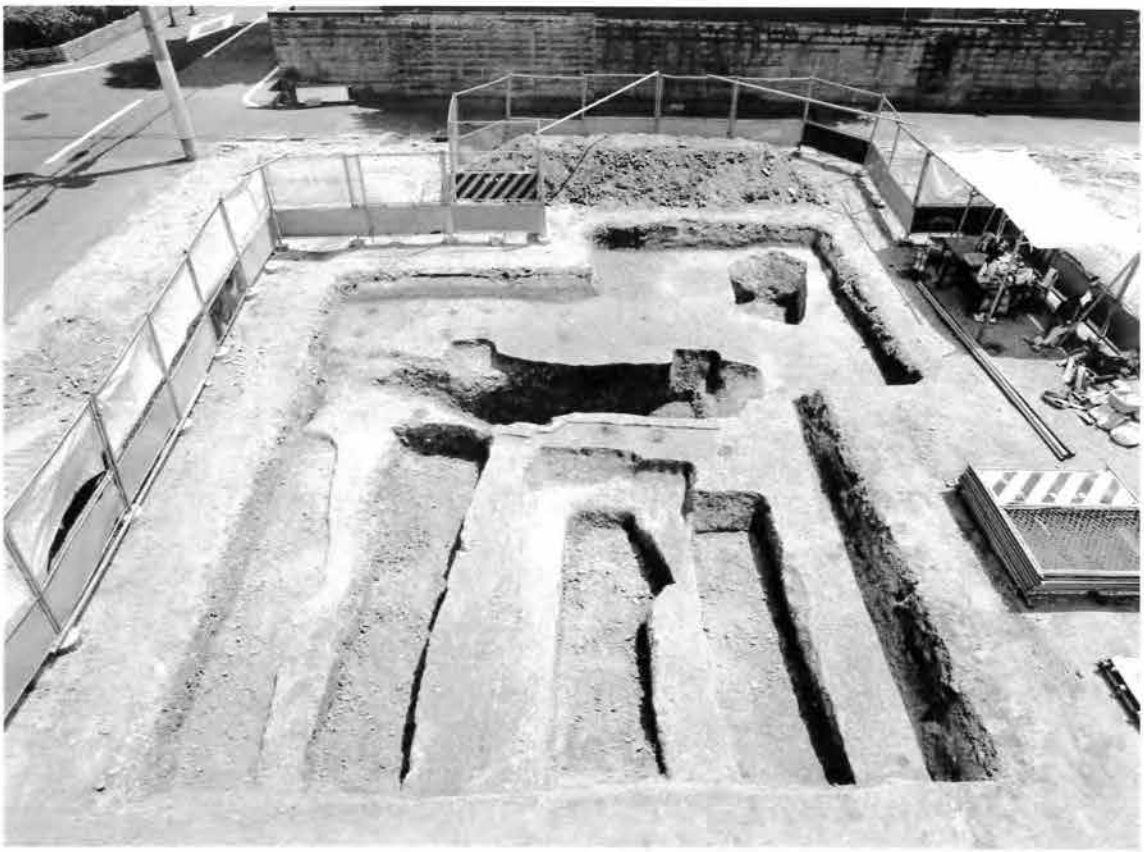
今回の調査では古代以前の可能性のある土壙SK405、江戸時代と推定された土採り穴群を検出した。また、遊離遺物ではあるが、古墳時代中期から室町時代にかけての土器類が出土した。古墳時代の遺物の中には5世紀前葉の初期須恵器や韓式系土器とみられるものもあった。本調査地の南西に位置するYT97－1次調査地でも古墳時代中期の竪穴建物をはじめ、初期須恵器や土師器が確認されていることから、調査地域に古墳時代中期の集落跡が存在することはまず間違いないであろう。なお、奈良時代～平安時代初期および室町時代の土器類や瓦片も出土遺物の総量に占める割合は多かったが、これらも調査地域が早くから開けていたことを示唆している。

一方、江戸時代の土採り穴群であるが、調査地西方の長居東2丁目所在遺跡では江戸時代から明治時代にかけて粘土が採土され、住吉地域にあった製陶所に運ばれて土管やレンガ、衛生陶器の胎土として使われたことが明らかになっている[大阪市文化財協会2005]。今回の調査によって、長居東2丁目所在遺跡から矢田2丁目所在遺跡にかけての地域は江戸時代以後の粘土の採土地であった可能性が高くなったが、その詳細については今後の調査を通じて明らかにして行きたい。

参考文献

大阪市文化財協会1999、『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告―1997年度―』、pp49－52

大阪市文化財協会2005、『長居東2丁目所在遺跡発掘調査報告』

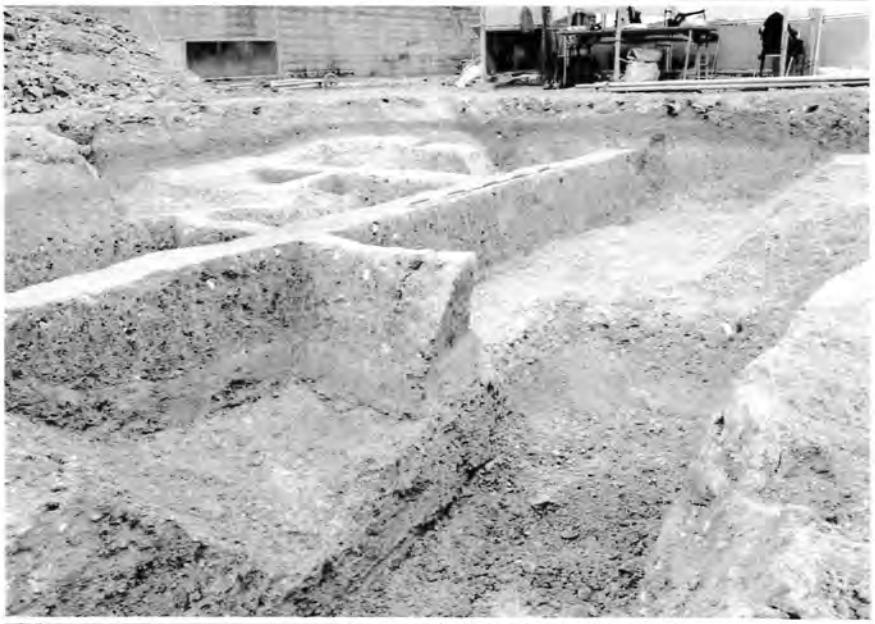


第５層上面遺構検出状況（北から）

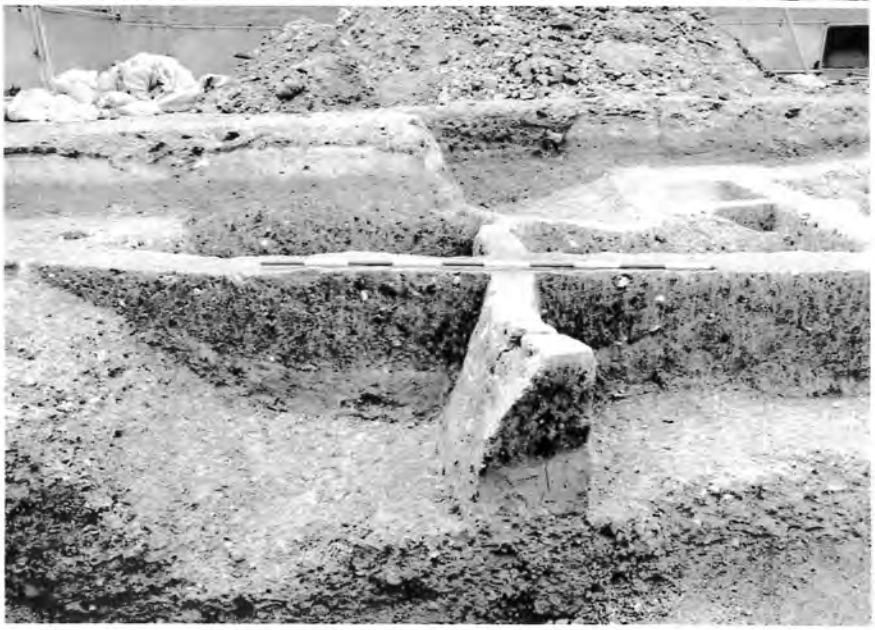
第５層上面遺構検出状況（南西から）

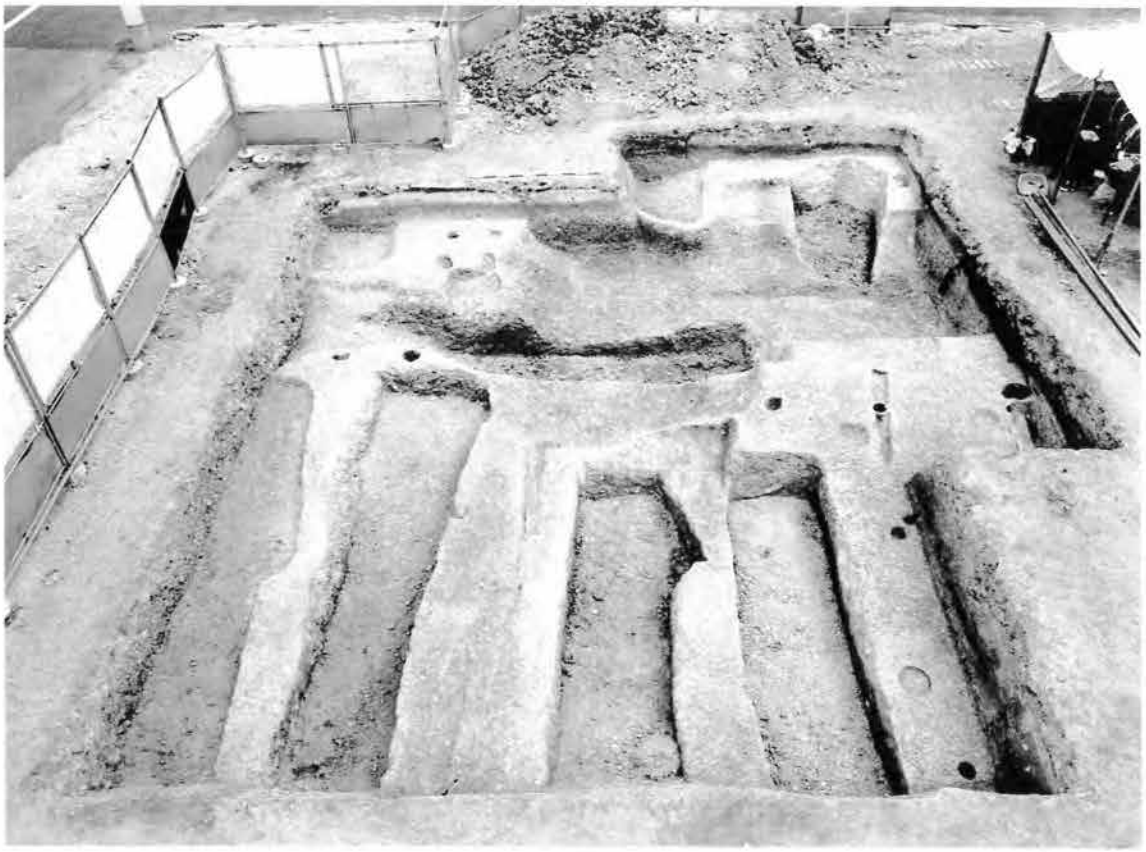
SK301東西断面
（南から）

SK301・304
東西・南北断面
（北東から）



SK301・304
東西断面
（北から）





第５層上面遺構全景(北から)

第５層上面遺構全景(南西から)

平野区平野宮町一丁目における建設工事に伴う
平野環濠都市遺跡発掘調査(HN11－1)報告書

調 査 個 所　大阪市平野区平野宮町１丁目100－１・95－２
調 査 面 積　40㎡
調 査 期 間　平成23年６月10日～６月15日
調 査 主 体　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　次長　南 秀雄、京嶋 覚、市川 創

1)調査の経過

調査地は平野環濠都市遺跡の西北部にあり、環濠北辺の外側に位置する。旧奈良街道に相当する現在の国道25号線を越えた北側の敷地内で、西100mに大念仏寺が、東北200mに杭全神社がある。事前の大阪市教育委員会による試掘調査では、現地表から約1m下で中世に遡る可能性のある地層が確認されたため、調査を行うことになった。

調査は、6月10日に敷地内の西側に東西10m、南北4mの調査範囲を設定し、近代以降の盛土や整地土を重機で掘削した後、それ以下の地層を人力で掘り進めた。調査区の東側では現地表下1m以下で出水が激しく、それ以下の水成層は部分的な深掘りで確認することとした。

14日に記録作業を終えた後、埋戻しを行い、15日に最終的な撤収作業を行って現場作業を完了した。

以下にその結果を報告する。なお、図1の方位は座標北を基準にし、それ以外は磁北である。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、図中ではTP+○mと省略した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4・6)

第1層:近現代の整地層ないし攪乱壙の埋土で、厚さは30~50cmである。

第2層:西端では暗灰黄色(2.5Y4/2)~オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘土質シルトと中粒砂が互層になる整地層で、層厚は20cmである。東側2/3はオリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土質シルト~中粒砂質シルトの整地層である。

第3層:褐色(10YR4/4)ないしオリーブ褐色(2.5Y4/4)粘土質シルト~中粒砂質シルトの整地層で

図1　調査地位置図

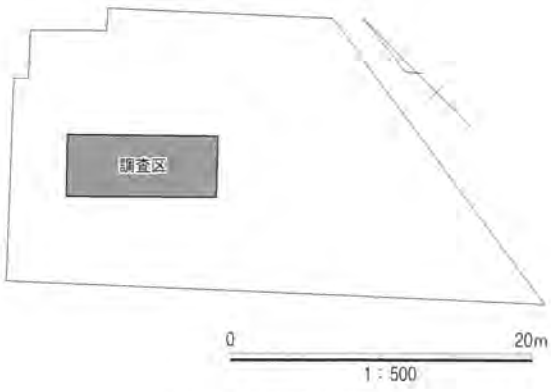


図2　調査区位置図

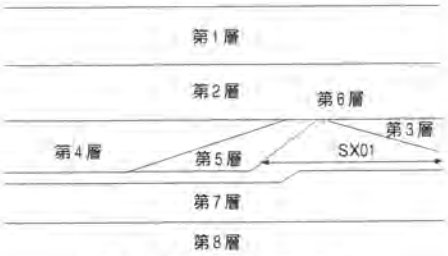


図3　地層と遺構の関係図

ある。層厚は20cmである。

第4層：上半が暗灰黄色(10Y5/2)シルト、下半がオリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土質シルトの作土層で、調査区の東側2/3に存在する。層厚は40cmである。関西系陶器土瓶3・蓋2や瓦質土器焜炉のほかガラス片も含む近代の地層である。

第5層：黒色(2.5Y2/1)を呈する炭などを高温で燃焼した滓が主体で、粗粒砂～細礫を含む。西端で検出された第6層の高まりの東斜面に、第6層を若干削って廃棄された状態で厚く堆積している。層厚は最大で40cmである。近代の陶磁器片や瓦が出土した。

第6層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)ないし暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質細粒砂～細粒砂質シルトの作土層である。層厚は10～30cmで、西端部に特に厚く堆積しており、段状遺構を形成している。中央部では第4層の耕作により遺存していない。関西系陶器片が出土しているため最終的には幕末頃まで下るであろう。

第7層：黄灰色(2.5Y5/1)細粒～中粒砂質シルトの作土層で、層厚30～40cmである。調査区全域に存在し、西端はより厚く、上面が高くなっている。土師器・瓦質土器・瓦片などの細片が少量出土したのみだが、下位層との関係から室町時代まで遡る作土と考えられる。

第8層：にぶい黄色(2.5Y6/4)細粒～粗粒砂の水成層である。ラミナは西に低く傾斜する傾向があり、東からの水流による堆積と推定される。平安時代前期の黒色土器A類椀1(図6)や須恵器甕のほか中世に下る土師器羽釜の小片が少量出土しているため、中世の平野川の洪水に際して堆積した地層と考えられる。

ii)遺構と遺物(図5～7)

SX01は調査区西端の第6層上面で検出された段状遺構である。幅約2mの範囲が0.2～0.3m高くなっており、下位の第7層上面も0.1mほど高くなっていた可能性がある。

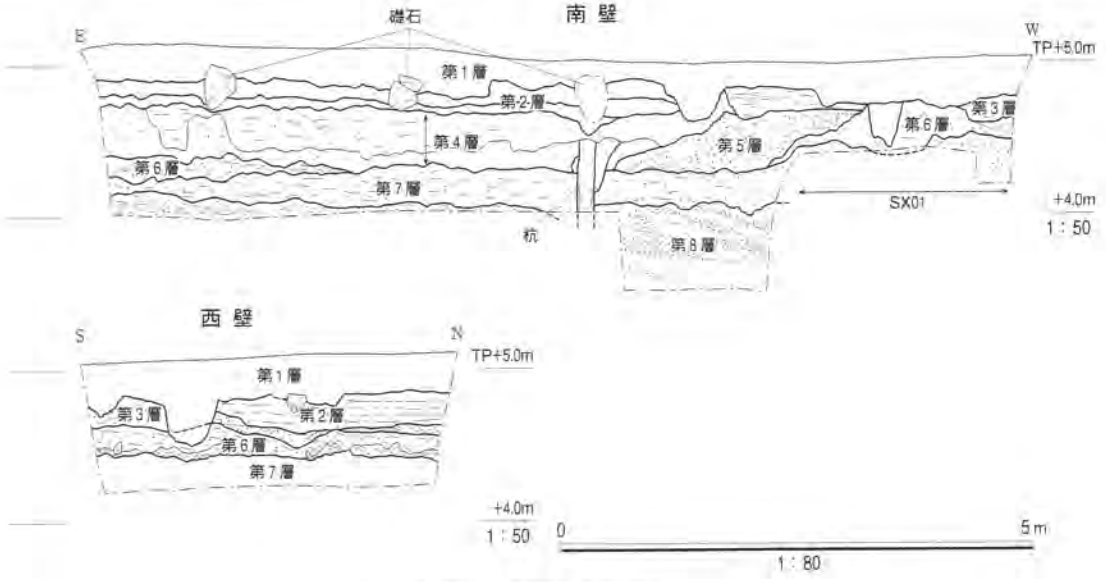


図4　地層断面実測図

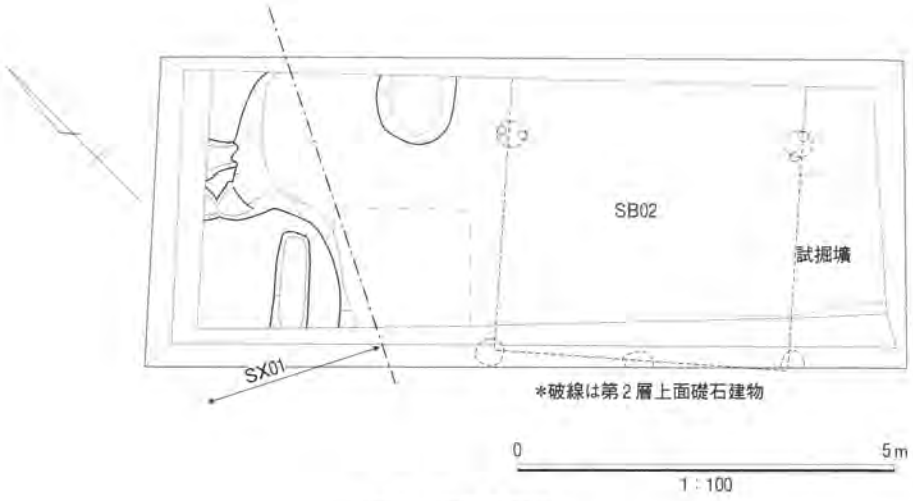


図5　平面実測図

第8層の水成堆積層からは内外面にヘラミガキが施され底径が大きい9世紀代の黒色土器A類椀1のほか中世に下る土師器羽釜の口縁部片が出土した。第7層はその直上に堆積しており、室町時代まで遡る作土層であり、この段階ですでに高まりをなしていた。上位の第6層も近世の作土と考えられるため、近世までは農地の境界になっていたと推定される。第4層の関西系陶器土瓶2・3などが出土する近代作土の段階では段はほとんど残っておらず、その後は整地が繰り返されている。

SB02は第2層の整地後に建てられた礎石建物である。調査区東部に礎石下に打設された2・3本からなる松杭群が約4m間隔で2箇所確認され、南壁で杭跡と礎石が約2m間隔で並んでいるのが確認された。規模は不明だが、街道と同じ方位を示す近代以降の建物である。明治19(1887)年の陸軍仮製地図には調査地付近に建物は表記されておらず、それ以降のものであろう[清水靖夫編1995]。

以上の遺構から、先の仮製地図や宝暦4(1754)年、13(1763)年の絵図には奈良街道から北に延びて加美正覚寺村に至る道路が描かれており(図7)、今回確認された段状遺構をなした高まりは、街道から北に分岐した道路の一部である可能性も考えられる。この土地境界を示す段状遺構は礎石建物が建てられた頃には消失している。

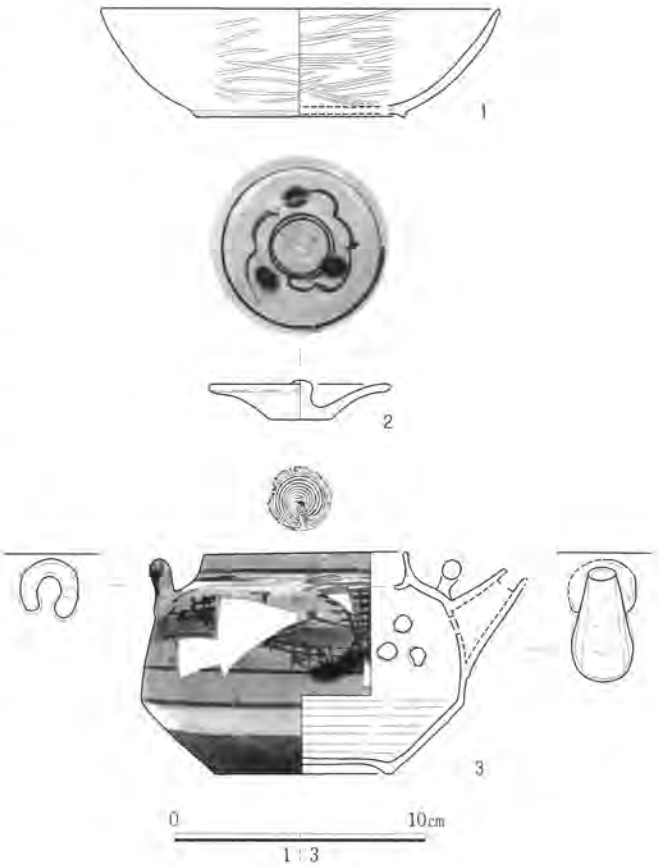


図6　出土遺物実測図
第8層(1)、第4層(2・3)

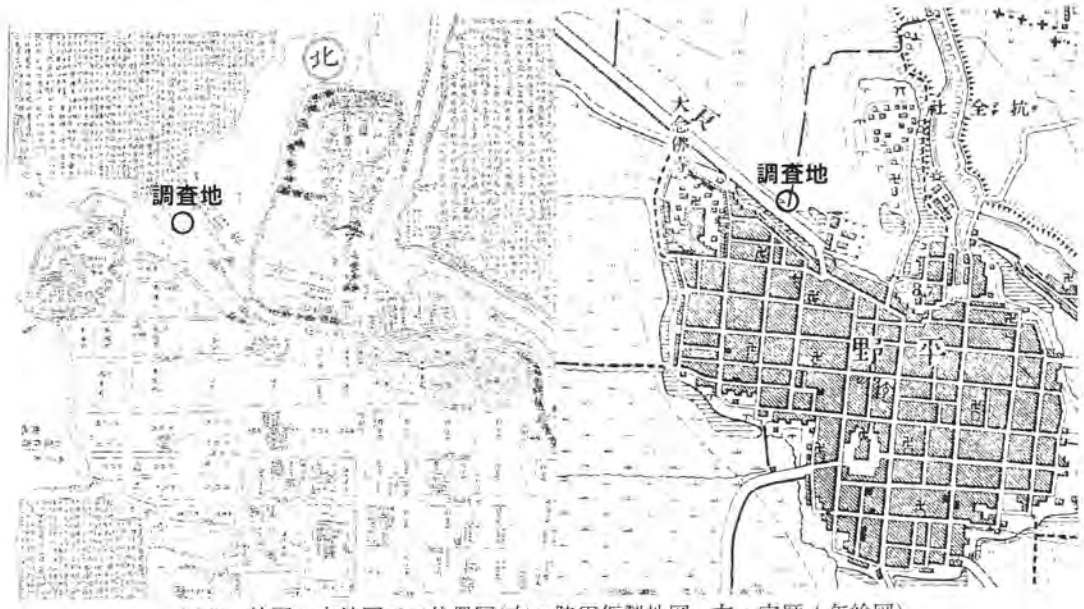


図7　絵図・古地図での位置図(右：陸軍仮製地図、左：宝暦4年絵図)

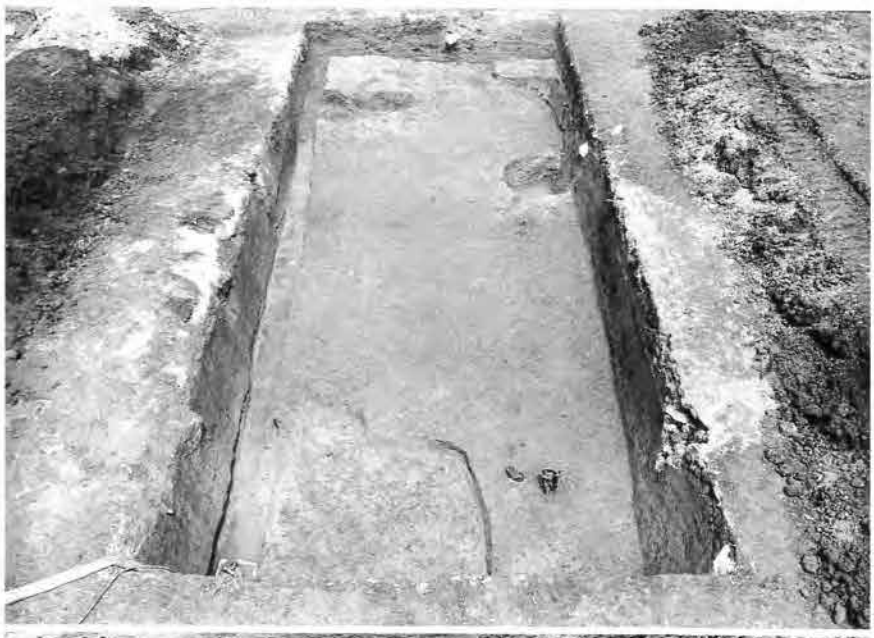
3)まとめ

今回の調査では、調査地が環濠の外側にあたり、長く農地であったと推定されるため、大きな成果は得られなかったが、室町時代まで遡る段状遺構を検出し、これが旧奈良街道から北に延びる道路遺構である可能性を提示することができた。さらに下位には中世平野川の流路も存在していると思われ、今後はより深く調査を行い、中世以前の平野環濠都市の成立過程を明らかにしていく必要があろう。

引用・参考文献

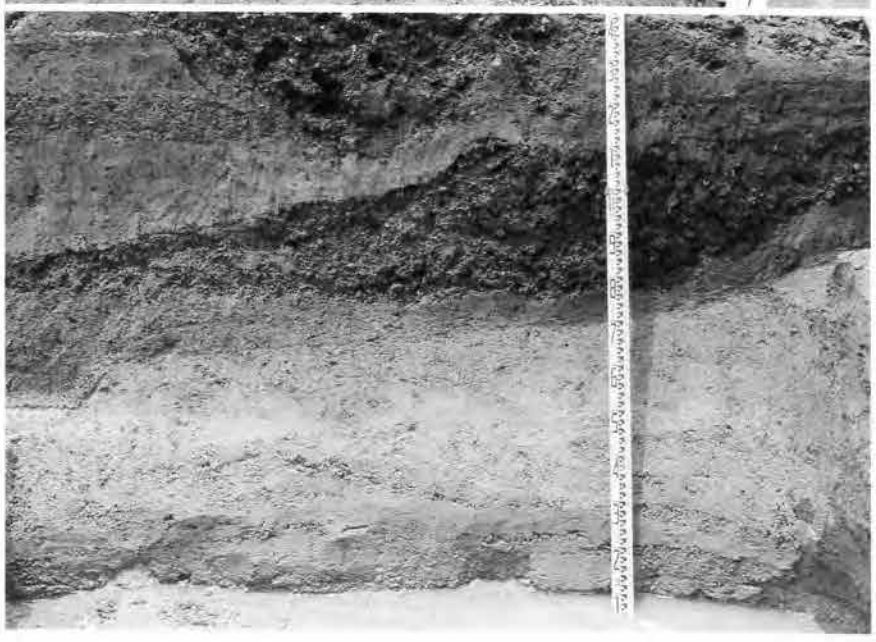
清水靖夫1995、『大阪都市地図』 柏書房

第６層上面全景
（東から）



第６層上面SX01
（北から）

南壁断面
（北から）



大阪市内埋蔵文化財包蔵地
発掘調査報告書（２０１１）

発行日　平成25年3月29日

発　行　大阪市教育委員会
(公財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所

編　集　大阪市教育委員会文化財保護担当
（大阪市北区中之島1-3-20）

印　刷　株式会社フォーラムK